博文館編輯局校訂

校訂

近世說美少年錄　全

東京　博文館藏版


高守漁舟
載客而歸
あやめ
ひろえ
耕渓

目次



三



二


胎
遂生彼虎
児


笠屋夏
美哉瀬十郎
避雨遇歌妓
蛇孼有縁
池燈屋鮒九郎




喪家狂犬網裏
惡魚以毒征毒
天刑剉鋤
十々鬼夜行太
日高景市
野干玉黑三


福富田大夫次
辛蹈旡四郎
寧成


中納言
兼頭卿
温柔長者風
不好言人悪
福富娘
阿鍵
耕渓


處女億禄
峯張九四蔵
中原通世
愚山人


暗鬼生於疑心
君勿見脹為妊
三好木工頭
職善
直嶋皆人
頼紀
升漢写


風さへくみとりぬ
たやし根をみん
武備まさるゝの
盲文人
低抗駝鳥太
狸毛吹五郎


麟子鳳孫両少年
金花玉葉才尤美
□□
峯張宗六郎
中原通能
茂林四郎
大江成勝



乾児四惣
同
賢妻乙藝


盂林禪刹
青松靜
二世傳燈
月照㥉□□
木玄道徳
もくげん
どうとく
侠客六市
けうかく
ろくいち

近世説美少年録

解題

「向ふ通るは清十郎ぢやないか、笠がよう似た管笠が」とある、唄の意を緯となし、毛利と陶との興敗を經となして、この近世説美少年録は成れるなり、さればこの後篇を玉石童子訓といへるも、磨ける璞に光を添へて、善玉の榮ゆる毛利の吉瑞を説き、陶は固より惡玉の、その質瓦に齊しければ、荒野の小石の、世に埋もれて、名も無く朽ちしを説けるに似たり、たゞこの二つの觀念を以て見るも、馬琴が晩年想熟して、彼の所謂勸善懲惡主義も、漸く融化し、圓熟して、諷刺露骨ならざるに至りしを知るべく、これを八犬傳に比する時は、地圖の上より云ふも、局面の窮屈ならざるを知るに足らむ、かてゝは文章滑脱して、櫟亭が所謂「自由自在の筆なるかな」と、賞揚せしも當れり、盡せり、

かゝる稀代の妙文すら、馬琴は「俗にいふブッケ書にして、一トたびも創稿を、易え


病坊奥手
二尾復四郎弘澄

近世說美少年錄第一輯序

將帥無常任。初出世也。乘風雲之會。而得其主。則佐順以討逆。功成而名爵丕顯。子孫承嗣。而爲一方屏翰者。爲不尠矣。昔者周防有大内氏焉。其先出於百濟國王東明八世孫。王餘璋第三子琳聖。　天朝　推古天皇即位一十九年。琳聖避唐兵之亂投化。而處于周防州佐波郡多多良濱。因賜姓多多良公。王子七世孫。多多良公正恒稱大内氏。又數世。而至　朱雀朝。有大内藤根者。藤根十世孫備盛。壽永役從東軍。而有功焉。因任大内介。當時與千葉三浦富樫倶。謂之元功四介。人以爲榮。備盛玄孫周防權介重弘。補於六波羅評定衆。重弘孫弘世。法名道階。自元弘建武擾亂。從事足利氏。依功爲周長石三州守。弘世生義弘。義弘武略過父祖矣。明德役。與山名氏清戰。獲其首。

給はずと傳へ聞きたり、爾らばいにしへにも類なかるべく、後の世にはなは有[illegible]高座からんと、評判せられしを、惜ひかな、玉に疵ある比喩の如く、老後に明を喪ふてよりは、夜光の珠も、善惡の玉なしにした手品師の、哀れ目盲の手暗がり、人して口授を筆記させしに、文章はいたく劣つたり。それのみか、其稿完からざれば、卞和の玉ともならずして、久しく坊間に埋みたりしを、今度曉花君の筆をもて、大團圓を結びたり、これよりして玉はますく〱光明を放つべく、遍照十方、馬琴宗めでたしく〱。

維時明治三十一年三月節句於博文館　乙羽生識

然者何也。位高德寡。帷簿不脩。親愛佞人。是以禍發自蕭墻之內。不亦宜乎。乃者書賈千翁軒。揣刻又徵予著編。予意在前條。即便編次興隆二世事蹟。及美惡少年列傳以塞責。皆是寓言。以勸懲。意匠類似唐山小說。寓言小說。君子不取也。譬之春華驪目。觀華銷日。寔無益也。然可醫鬱遺悶焉。是書亦有然。君子以此破獨坐睡魔。蒙昧以此爲迷津一筏。則勝於不見之歟。本輯方成。書賈又求序。搦管之際。思出于此。遂是爲序。

文政十一年暢月之吉

曲亭蟫史撰

相國道義公嘉之賜豐前及紀伊和泉。與舊封三州倂管領六州。威名自是盛也。應永六年。義弘以佐界反。將襲華洛。軍敗見誅。其子持世遁去。隱于周防山口。相國則削豐紀泉三州。與之於有功者。且使義弘弟盛見繼其家。持世亦會赦。事得散。數年之後。盛見請持世爲嗣。相國可之。持世生教弘。教弘生政弘。政弘生義興。義興輔佐將軍慧林公。還於京師。其忠且有功。如五霸一般。由茲除三位補管領。時爲周長豐筑藝石及山城七州守。在京八年。財用不足。辭而歸周防。又數年而薨。義興生義隆。義隆暗弱。不思民之憂苦。豪奢無節。以富貴自負。於是爲其臣陶晴賢所弑。國竟亡矣。予一日繙軍記。讀而至義隆滅亡條下。未嘗掩卷不浩嘆也。蓋義隆雖暗弱。然非有桀紂之惡。且封疆之廣。豈無一箇比干耶。而其身殂于斧鉞。七州瓦解。所以

近世説美少年録第一輯総目録

起ニ永正六年一盡ニ大永二年一
年序大約係レ于二十四年一

第一輯総目録完

校訂

近世說美少年錄第一輯卷之一

東都　曲亭主人編次

第一回　諫を拒て管領古廟に陣す　屯を驚して水火驕將を懲す

聞道。往昔。惠林院足利義植卿。初名義尹將軍重任たりし時。周防長門豐前筑前。安藝石見。山城七箇國の守護なりける。大内左京權太夫多々良義興は。興復の功あるをもて。先代には例もなかりし。管領職に補せられて。その身京師に在りしかば。執權政務一家に歸して。威勢高く時めきたり。時に永正六年。己巳の春の頃。南朝の大將なりし。菊池武政が嫡男。肥後守武朝が殘黨に菊池肥後太郎武俊と喚るゝもの。先亡の餘類を鳩めて。肥後國阿蘇郡。阿蘇山の古城に盾籠り。近鄕隣郡を亂妨して。をさ〳〵猛威を振ふよし。鎭西の守護大伴親春。太宰少貳等が進らせし。急脚遞の使者。既に京師に到著して。具に注進したりける。是により室町殿には。前管領高國。新管領義興。畠山尾張入道卜山。近江判官高賴等の諸老臣を。おん前に召聚合て。群議を凝し給ひけり。時に畠山尾張入道卜山。進出て稟すやう。菊池は元弘建武年間。入

近屬院本雜劇に載て。美少年と稱するものは。梅稚。愛護。粂之助。吉三などいふ類に過ぎず。多は皆是眉目の美にして。眞の美少年にはあらず。夫美は醜の對。惡は善の偶なり。然れば世に美少年あるときは。又惡少年なきことを得ず。且その美たるや。眉目の美あり。又稟性の美なるあり。惡にも亦相貌の醜惡あり。心術の醜惡あり。かゝれば容貌は美麗といふとも。その性毒惡なるものは。惡少年といはまくのみ。又容止は醜しとも。その性の美たらんものは。美少年とこれをいはん。况性と容止と。共に善美なるものは。是眞の美少年ならずや。よりてこの書のはじめには。貌は美にして性の美ならぬ。少年等が傳を作りつ。後に性と容止と。美なる少年傳をもて旨とす。是則善美あるときは。醜惡なきことを得ざるの義にして。書名に所云美少年は。末松鷲津日高等の。三少年の事に似て。その事にしもあらずかし。作者の用心數輯を累て。漸々にして見はるべきを。いまだ其所まで至らぬ程に。看官思ひ惑んかとて。聊こゝに自注を贅して。このことわりを書つくるになん。

れしものかな。去歳の冬小夜深て。御所に盗賊の入りしとき。宿直の近臣多からねば。我君おん手をおろさせ給ひて。賊徒を斫伏給ふ程に。九ケ所まで疵を負せ給へど。幸ひにして恙なく。日ならず平愈まし〳〵たり。件の賊等は遺なく。當坐に伏誅してければ。本人定かならざれども。今更思へば武俊が。刺客なりしも知るべからず。渠を討手の大將はその。任に勝たるものを。擇ませ給はん事をのみ。願しくこそ候へ。といふに衆皆諾ひて。某等が思ふよしも。その外は候はず。と應て御氣色を伺へば。義植頻りに頷き給ひて。然らば討手の大將を。甲乙と擇むに及ばず。當管領左京兆義興は。中國七州の大諸侯。勇にして且武略あり。大功空しからざるよしは。世もって人の知る所。逆徒追討の總大將は。京兆ならで。誰かはある。今は政務に暇なき身の。いとゞ大義に思ふべけれど。はやく周防に立かへりて。近國の味方を驅催し。一擧に孤城を攻落して。武俊が首を獲んと。更に踵を旋らすべからず。偏に賴む。と他事もなき。仰に義興推辭に由なく。畏りをぞ稟しける。有斯而次の日義興は。將軍のおん旗と。軍兵催促の御教書を給はりて。猛に歸國の准備を整へ。隊兵三千餘騎を將て。京師を出て草枕。旅路に幾日在明の。月毛の駒も西天に。ゆくてを只管急ぎしかば。その如月の下澣。周防州吉敷郡。山口の城にかへり來つ。御教書をもて筑紫なる。御方の武士を催促せしかば。西國の大小名。大伴備前守親春。太宰新小貳教頼。原田。山鹿。宇佐千手。宗像酒殿。立石等。各〻隊兵

道寂阿。宮方にて。後醍醐天皇のおん爲に。戰歿をしたりしより。武光武政に至るまで。南朝に隨從して。一トたびもその志を移さず。鎭西數箇國を横領して。犄角の勢ひを張りたれども。南北兩朝おん和睦ありしより。渠が弓箭は衰へたり。然ればこの時に方りて。先將軍鹿苑院義滿公。菊池武政を征伐の爲。みづから數萬の精兵を將て。九州に御下向あり。武政諸方に出逆へて。霎時は防戰ふものから。處々の支城を攻落されて。降參するもの多かりければ。終に弓折れ勢究り。せん術のなき隨に。旗を卷き兜を脫ぎ。阿容々々と御陣に參りて。陳謝の辭を盡せしかば。即便寬仁の御沙汰をもて。和順の義を御許容あり。肥後半國を賜りて。旋て凱陣ましまし〱けり。然りけれども武政は。なほ野心を改めず。一味の武士も彼此なる。城々に籠居つ。動すればおん下知に。從ざると多かりき。有右程に武政は。老病に犯されて。終に身まかりたりし後。その子武朝も陣歿して。子孫民間に落魄り。その家終に絕たるよしは。人みな是を知ざるものなし。粤に年紀を僂れば。彼武俊は。武政が孫。武朝が子なるべし。父祖の武勇を繼んとて。纔に古城に寓るといふとも。いかばかりの事のあるべき。とは思へども彼地の武士に。舊交を懷ふもの。走集りて多勢にならば。由々敷大事に候はずや。小火滅ずンば。燄々を奈何。兩葉にして斷ざれば。斧を用るの患あり。はやく討手の軍將をもて。誅伐せしめ給はん事。勿論に候べし。といひつゝ傍を見かえれば。義興莞爾とうち笑て。現微妙くもいは

候ひしに。初武光阿蘇山に。城郭を執立んとて。屢縄張をしたれども。彼山の麓には。阿蘇の神の祟あり。山には硫黄燃出て。常に烟の絶ざると。信濃の淺間嶽。日向の霧嶋山と相似たり。この故に武光が。欲せし城は硫黄の爲に。幾回となく燒崩されて。成就するとなかりしかば。いといたう困じ果て。誰にもあれ彼城の。縄張をよくとり定めて。落成せしむるものあらば。賞祿は乞に依るべしと。遺る隅なく徇たりける。有斯程に同國。山鹿郡木山村に。浮木と喚るる媼ありけり。故郷は安藝の廣嶋にて。最はやくより宮嶋なる。辨才天を信ずると。大かたに過たれども。過世惡くて良人に後れ。獨子さへに先たてゝ。よるべなき身となりしかば。些の由縁を心當に。件の邨に流れ來つ。日毎に木山川に下立て。人の被舊せし衣を洗ふを。生活にしてけるに。有一日彼川の上にていと大きなる一箇の卵。の草叢蔭にありけるを。心ともなく見出して。拾ひて宿所にもてかへり。苧桶に綿を布などしつ。その內に斂養ふて。既に日ごろを歴る隨に。件の卵は自然と破れて。一箇の赤子の生れにけり。あるべき事とも覺ねば。且駭き且憐み。とかくして字育む程に。纔に半年許にして。その子の大きうなりし事。七八歲の童子に優たり。こゝをもて隣村近鄉。堺を隔し田舍まで。傳聞あやしみて。日々に觀るもの堵の如し。原是卵の中よりして。生出たる子でありければ。玉五郎とぞ名つけたる。俚語に。卵を名づけて。玉子ともいへばなるべし。遙に唐山の故事を思ふに。帝嚳の少妃簡狄

を引率して。日ならず來會してければ。義輿が七州の。士卒と共に五萬餘騎。肥後國に推寄て。阿蘇山近くなりにたり。是より先に義輿は。兩箇の間諜者をもて。敵の分野を撈らせしにその者軈てかへり來つ。扨も阿蘇山の古城には。籠れる賊徒一千ン餘。二千には過ぎ候はず。しかはあれども武俊は。些も怕るゝ氣色なく。敵推寄なば一ト箭射んとて。鏃を磨く防戰の準備に暇なく候。と報るを義輿うち聞て。原來思ひしにも似ざりけり。武俊武勇の癖者なりとも。纔に烏合の兵もて。京軍數萬の精兵と。雌雄を爭んと欲するは。彼精衛が海を塡め。螳螂が斧をもて。車に逆ふに異ならず。賊に勢の附ぬ間に。大軍山の三方より攻登りて踏潰さん。さばれ長途の疲勞もあるべし。今宵は是首に人馬を憩へて。曉るを齊一俟んとて。身方の諸陣に徇示しつ。阿蘇沼の畔なる。靈蛇の神社を搔帚して。本陣にぞしたりける。不題。安藝州高安郡。治比の鄕の人氏に。備中介大江弘元といふ武士ありけり。遠くその祖を原れば。鎌倉の將軍賴朝卿の時。政所の別當なりし。前陸奥守大江廣元の四男。安藝介秀元十一代の裔孫なり。寔に名たゝる世家なれども。纔に一千貫の鄕士にて。大内氏の隊に屬たれば。這回義輿の催促に從ひて。主從この陣中にあり。弘元文武の才長く。且嚴嶋なる辨才天を。年來の信者なりければ。今義輿が阿蘇沼の。靈蛇の神社を本陣に。せよと下知するを聞て諫るやう。當社は菊池武光が時。初てこの地に建立して。嚴嶋の神を合祭りしより。靈驗筑紫に隱れなかりき。某曾故老の物語に聞

因やうやく殫て。餘命安樂なるのみならず。死しては神佛に擬せられて。永く祀らるゝ。德あるべし。けふまでも尙しらでやをはする。おん身はむかし壽永の比。鎭西にその名聞えし。尾形三郎惟義が。庶流の末孫なり。尾形は大蛇の子孫といふ。皸大太の因みを引て。おん身がわれを字育しも。又辨天を信ずるも。因緣なきにあらずかし。親子の契りも是までなり。今より長く別るべし。わが本形を顯すとも。必な怕れ給ひそ。わが行遠る後に跟て。囊の灰を揮布給はい。おのづからに繩張成ん。おん身の爲にこの城郭を。成就せしむる事はさらなり。阿蘇の社頭に神泉なければ。この山と楢木野の。間に廣き沼を做りて。彼神にこれを進らせ。われその邊に栖んと欲す。いで〳〵といひかけて。身を翻すと見る間に。八尋あまりの白蛇と變りて。山の平坦嶮岨に從ひ。伸つ屈みつ跋たりける。豫て期したる事なれば。浮木は戰く胸を鎭めて。敎誨のごとく跡に跟て。携たりける囊の灰を。彼此と散し布くに。大蛇の涎沫の黏り著けん。灰は地上に凝たる似く。後々までも耗ざりけり。旣にして城郭の。繩張早に成しかば。白蛇は浮木を見かへりて。別を告る面色しつゝ。忽然として雲を起し。麓の方に飛去て。野中の古井に入ると見えしが。その井の四下幾十町か。大地陷り沼となりて。その深さを測るべからず。形樣琵琶に似たればとて。里人琵琶の沼と唱へ。又阿蘇沼とも喚做したり。然程に菊池武光は。浮木が再度の訴によりて。靈蛇の奇特を感悟しつ。そが繩張に從ひて。阿蘇山に

は。春玄鳥の卵を呑て。契を生りといふめれど。それにも倍ていと怪し。と村學究の呟きしを。浮木は物とも思はずして。なほ慈む情を感ずる。玉五郎は浮木にいふやう。過世わりてやかくまでに。養育の恩いと高きに。何をもて報ふべき。傳聞にき菊池殿は。阿蘇山の城成就せず。よく彼山に繩張をして。落成せしむるものあらば。賞祿は請ふによるべし。と徇られたるに侍らずや。われこの事をよくすべし。おん身居多の賞財を獲て。一期を優に送り給へ。まづこの由を訴へてよ。やよとく〳〵と急すぞ。浮木の媼は今さらに。心もとなく思へども。要あるべし。と思ひかへして。菊池が城に赴きつ。云云と訴るに。武光も亦疑ふて。益なからん。と思ふものから。媼が月ごろ養ふたる。その子玉五郎の怪談を。傳聞たる事しもあれば。且試みに請ふに任して。功成らば形の如く。賞祿を取せんと。いひしらするに。浮木は歡び宿所に退りて。玉五郎に首尾を報しかば。然らば灰を嚢に裝て。それを携て共侶に。阿蘇山に赴くべし。急せ給へ。と扶掖て。郡を隔し路の程を。只一日に走り著きしを。高峰さへなほ易らげに。浮木を脊負ふて攀陟るに。疾きこと馬も如ざるべし。有之而巔に近つく隨に玉五郎は。この山に立つ。煙を佶と瞻仰て。霎時咒文を唱る程に。恠むべし昔より。一ト日も絶ぬ山の猛火は。立地に滅失せて。煙も立ずなりにけり。登時玉五郎は。浮木の媼を見かへりて。おん身は慈善の人なれども。前世の惡報にて。所夫を喪ひ子を先たて丶。孤獨の老女となりにたり。さばれ業

ち掉りて。大江殿は先祖より。和漢の故實を諳じたる。文武の達者といはるゝに。似げなきことを聞くものかな。菊池が大蛇を崇しは。愚民を惑はす奸計なりけん。よしやその事ありとても。毒蛇は虫の類なり。これを靈あるものといふとも。神とし祭るは淫祠ならずや。淫祠は民に害あるをもて。賢官循吏は必毀てり。然るを某その議に及ばで。本陣にしたる事。彼早蠅鳴邪神の。僥幸といはまくのみ。正なきことを喋々しく。人をな惑し給ひそ。と辭尖鋭く窘めて、從ふべくもあらざれば。弘元はふたゝび諫めず。その身の陣所に退きても。鬱々として樂しからねば。ひとりつら〱思ふやう。大内氏は七个國を。領するすら分に過ぎたる。果報也とは思はずや。例もなき管領に。なり升りしより權威を負みて。諫を拒み横紙を。破らるゝこそうたてけれ。這回の軍に功ありとも。久後はいかゞあるべき。とは知らずして催促に從ひぬることそ悔しけれ。とひとりごちても今さらに。その甲斐とてはなかりけり。有右而。日は暮れ雨降そゝぎて。夜は丑三とおぼしき比。疾風颯とおとし來て。阿蘇沼に集る水鳥の。群立騒ぐ汀渚の陣に。雜兵等が燒捨たる篝火はみな滅果たり。寄手の軍兵この物音に。驚覺て罵散動き。原來夜討の入るにやあらん。出よ禦げと。呼りつゝ。騎馬武者は繋る馬に。鞭を揚て焦燥もあり。士卒は箭を索ね弓を爭ひ。或は鎗長刀を逆さまに挾み。僉後れじ。と陣門を。走り出て四下を見るに。敵にはあらで漫々たる。阿蘇沼の水逆立て。岸に溢れ陸を浸す。沼水

城を造るに。麓の神の祟もなく。山の煙さへ絶にければ。思ひの隨に成就せり。武光既に懇み足りて。浮木の媼には。二十町の良田と。沙金千兩を取らせしに。浮木は只その金を受て。田圃は辭ひてこれを受ず。金をば郡長に預措て。貧者にこれを施し。或は里の路を造り。橋を作りなどする程に。三稔に及びてその金の。餘少くなりし比。浮木は病苦を覺ずして。睡るがごとく身まかりけり。登時郡長は。里人等と相計つゝ。遠く浮木が亡骸を。阿蘇沼のほとりに葬り。件の遺れる財をもて。神に齋き禿倉を建て。浮木の辨天と稱へたり。是よりして武光は。戰ふ每に必利あり。肥前肥後。日向大隅。薩摩の盡處まで討從へて。威を西海に振ふと。靈蛇の擁護なるべしとて。阿蘇沼の畔に。靈蛇の社を建立して。嚴嶋の辨才天を合し祭り。浮木の禿倉を末社にしたり。その子武政が時までも。年每の祭禮懈るとなく。その奇麗壯觀は阿蘇の神社に優るとも。劣るべしとは見えざりしに。武政が兒孫に至りて。神を敬ふ心なく。神社は頽破に及べども。修復を加るとなければにや。彼家遂に衰へて。零落したるその比より。件の山は燃出て。煙の立とはじめの如し。かゝる先蹤も候に。靈蛇の神社を御陣になされて。雜兵の亂妨すら。制し給はぬはいかにぞや。御祈願までに及ばずとも。御陣を他所に移さして。敬神の義を表し給へ。然らずは神の憎みに迫る。御後悔もや候はん。と故事を述理を盡して。潛やかに諭したる。諫言は耳に逆ひ。良藥は口に苦しといふ。譬に漏れず義興は。頭を左右にう

山深く攻登りて。鬨を咄と颯りつゝ。早雄の壯武士等。いと淺間なる敗城の。前門より後門より。塀を踰城戸を破て。先陣斉一攻入りたる。その甲斐はあらずして。何の程に落亡けん。敵一人ゞもあらざりけり。是は甚麼。とばかりに。疑惑ふて立佇折から。武俊等が落るとき。こゝらの地中に機關り措けん。忽地山も裂るが如く。足下に發る地雷火に。撃仆され身を燔れて。吐嗟と騒ぐ大叫喚。さらでも山に硫黄の氣あれば。四方八面猛火となりて。城の櫓に燃移る。燄を避る遑なければ。城戸より内に攻入りたる。士卒はこゝに四五百名。一箇も脱るゝものなくて。灰燼となりて亡にけり。總大將義興は。城を距ると七八町。程よき山路に馬を立て。士卒を勵し進る折から。件の縡の爲體に。驚くと大かたならず。崩れ立たる諸軍勢に。嵩を突れて推屈されし。おもはず麓に退きて。太息吻てゐたりける。されば又彼地雷火は。山の硫黄に移りけん。峯上頻りに鳴動して。菊池が城は一宇も殘らず。石垣さへに燒碎けて。煙は年を歷るまでも。立升りつゝ絕ざりけり。この日陣中の衆評に。賊にはあれど武俊は。寡をもて衆に敵しがたき。始終を揣て落亡たる。空城に地雷火を。遺し置たるは智なるかな。現鋒をまじへずして。夥の敵を殺せしは。唐山の常言に。彼死せる孔明が。活る仲達を走せし。といへるにも優す計略なり。然はあらずや。と潛めきて。われを忘るゝ雜兵の。善惡なき言を洩聞くにも義興いとゞ面なさを。扨あるべきにあらざれば。麓の阿蘇谷に屯しつ。心の鬱悶を慰んとて。

猛に突衝して。人馬の足を拂ひたる。勢ひ當るべうもあらざれば。諸陣齊一避易して。矢庭に溺死するもの。いくばくなることをしらず。辛じて脱るゝものも。弓箭を流し。器械を失ひ。岡をたづねて登らんとするに。如法暗夜の事にしあれば。東西だにも辨へず。主は溺るれども。家隷はこれを拯ふに由なく。父と兄は流されても。とり留んとする子弟もあらず。瞬間に水災の。常にもあらずなりしかば。有し阿蘇沼は其處ともわかたず。吉田楢木野の是方より。阿蘇山の麓まで。はや大湖になりにけり。有恁けれども摠大將義興はさらなり。大伴太宰。その餘の諸將も。辛く水厄を免れて。走退くと一里許。小高き處に聚ふ程に。天は朗々と明にけり。多くは是幕を失ひ。甲冑を脱捨て。今さら辨を缺のみならず。兵粮さへに出水に取られて。大將も士卒も。饑に臨まぬものゝなければ。義興郎近郷に。下知して多く糧を送らせ。又阿蘇宮の大宮司に。兵粮を催促して。稍口腹を養ふ物から。倘かゝる弊に乘て。敵逆寄せばいかゞはせん。抑彼沼の水大く溢れて。かう大水に及びしは。靈蛇の祟なるべき歟。然らずは螺脱にはあらじといふ。山崩にもやあるべからん。攻べき城へまだ寄もせで。御方を夥喪はれし。世の胡慮にならんのみ。左にも右にもこの軍。果敢々々しき事はあらじとて。呟くもの多かりける。かゝる騒ぎに一兩日。みな徒に過したる。第三日の夜艾に。水は遺りなく落竭して。故の陸地になりしかば。義興誘や寄せんとて。先陣後陣と部を定め。名におふ高峰の麓路より。阿蘇

南北朝と別れ給ひしより。一統の今に至るまで。なほ干戈はおさまらず。兵革年々に彌增て。當社數萬貫の神田も。凡夫の爲に横領せられて。神社は頽破に及べども。修復すべき便著もあらず。澆季の世にはあなれども。神威は今も衰へ給はで。登山のものに賞罰あり。奇異なる事のなきにあらねば。君が刄に衂らずして。武俊を追走し。城さへ燒し給ひしは。神慮に稱せ給ふもの歟。その功なしといふべからず。さのみな思ひ屈し給ひそ。と慰られて義興は。いと憑しき心地しつ。阿蘇の社に參詣して。白銀幾枚か獻り。大宮司に別れを告て。軈て本陣に立かへり。死亡たる兵の。その員數を檢するに。水に溺れしもの一千餘騎。火に燔れしも尠きにあらねど。皆是士卒のみにして。一陣に將たるものは。死ざるを得たりしに。只彼弘元主從の。一箇も遺るものなければ。今の世に稀なるべき。博識者と聞えしに。彼折終に脱れがたき。命運にこそありけめとて。人僉これを惜みけり。

第二回　窮厄を脱れて弘元漁家に宿る　理亂を辨じて它六俊士を資く

再說。備中介弘元は。當夜沼上の陣にあり。この故に出水の爲に。いちはやく推流されて。せん術のなかりしを。かゝる時にもこゝろ利て。臂近く浮揚りし。盾を搔よせ胸に當て。且くは泅ぎしかども。水勢の湊なきに。身さへ心も勞疲果て。流れゆくと幾町なるをしら

身近き兵のみを將て。大宮司の宿所に赴きけり。當下阿蘇の大宮司は。出迎へ席を儲て。茶を薦め菓子を羞め。軍旅の疲勞を問慰る。歎待等閑ならざれば。義興感謝に堪ずして。這回武俊追討の。大將を奉りしに。勞して功なき事の顚末。思はざりける火水の爲に。多く士卒を喪ひたる。爲体を說示して。彼沼水の涌出て。里を浸せし例やある。空城の地中より。猛火忽然と發りしは。武俊が豫て巧し。地雷火の所爲なるべし。啻彼水の出沒のみ。こゝろ得がたく候といふに。大宮司頭を傾け。わが家は遠祖より。當社に仕奉りて。位高く職重く。不肖の某に至るまで。舊記を相傳したれども。沼水の涌出て。人馬を害ひしなどいふ事は。傳へも聞候はず。上古には阿蘇山の。麓はすべて湖水にて。山は湖中にあり。爾るを我阿蘇の神。往古國造たりし時。西なる山を穿通して。水を落し湖を乾し。遂に田圃になし給ひき。と世々の口碑に傳へたり。有斯ば件の沼の四下は。むかしの湖水の迹なれば。出水なしとはいひがたし。又阿蘇山の古城より。火の燃出しは。地雷火ならで。おのづからなる硫黃火の。燒拔たる歟。しるべからず。本山の燃ると。往古より一所にあらず。近處は法性崎と。北と中の岬稜のみ。間なく煙は升るなり。不入斧斤の神山なれども。菊池氏の精忠を。神も憐み給ひけん。武光が時に至りて。山の煙の絕しかば。城郭をすら執立たり。かくて子孫の衰微に及びて。又硫黃火の燃出て。煙絕せぬのみならず。這回城さへ燒れしは。神所行なる歟。測かたかり。近世

堰留られて。不思議に露命を繫ぎつゝ。今又和主の資を得たり。是再生の恩にこそ。抑こゝらは川歟。里歟。何と喚做す處ぞや。と問復されて漁者は。手前かみつゝ又見かへりて。原來如右候ひし歟。彼處は濕地なるをもて。秋の雨には水も出れど。只一霄の春雨に。諸陣難義におひしとは。まとしからぬ珍事なり。勿論こゝらの川々も。昨夜の雨に水の增て。見給ふごとく低き處は。陸もひとつになりたれども。かゝる事はをり〳〵あり。怪むものも候はず。今すこし漕下さば。川脈は定かにしられて。おん疑ひの釋ぬべし。扨このわたりは阿蘇沼へ。路の程近くもあらぬ。高森川で候なり。この川下は本山川。そが末は海へ入りぬ。さればこの川脈は。阿蘇。合志。菊池。山鹿。玉名。飽田の六郡を。彼此と流通て。菊池。山鹿の境まで。兩岐に分れたり。そはともかくもあれ。思ひがけなき水難にて。饑も渡勞もし給ひけめ。俺們が宿所は遠くもあらず。この川添なる白屋の。雨さへ月の漏るのみなれば。管待まゐらする物はなけれど。一兩日休らひて。寛やかに還らせ給へ。その間には阿蘇の水も。落着して舊の沼になりなん。急ぐは要なき事にこそ。とよに憑しく慰めたる。人の誠に弘元は。歎びを述ての意に任して。頻りに感じて已ざりける。かくて又漁者は。艪櫂をかけて漕ぐ程に。定かに川脈顯れて。十町ばかり川下は。只その水の濁れるのみ。常にかはらずと見る隨に。既にして漁者は。宿所のほとりに船を繫ぎて。扶けて弘元を岸に登し。網を携へ觸を肩にして。先に

ず。命根今や絶なん。と思ふものから年來信ずる。辨才天を念ずる程に。年ふりたる樹の大枝に。おもはず流れ掛りにければ。携著さ息を吻て。猶も木梢に攀登り。覺束なくも曉るを俟に。その明がたより雨歇て。水は大かた落たりける。浩處に一箇の漢子。柿染の袴の衣に。腰蓑を著たるが。平駄船にうち乘て。艪を推立て。漕つゝ來にけり。船中には四手の網あり。昨夜の水を物とも思はで。漁獵に出たるなるべし。弘元これを見てしより。海月の骨にあふ心持して。やよや舟人。われを救へ。われを救へ。と叫ぶになん。彼人遥にうち向上て。こは甚麼。かばかりの。水を怕れて樹に緣るとかは。昨夕の水は陸も川も。ひとつにはなりたれども。ここらは人身長の屆べかりしを。今朝は大かた落たれば。歩行よりも行ばゆきてん。いで〳〵といひながら。そが儘船を漕よすれば。弘元は遽しく。木梢より携降て。後ざまに乘移るを。漁者は見かへりて。おん身は肚甲鋼手臑楯の。打扮いかめしう見え玉へば。乃者風聲に聞えたる。阿蘇の寄手の刀禰們ならん。彼處は水の高かりし歟。山より里へ流され給ふは。こゝろ得がたき事にこそ。と詰れば弘元領きて。寔に推量せらるゝ如く。吾は管領麾下の武士。備中介大江ムと喚るゝものなり。いまだ阿蘇山へは寄せずして。きのふは官軍五萬餘騎。阿蘇沼の邊にあり。爾るに思ひかけなくも。昨夜の水に陣所を喪ひ。小勢なれどもわが一隊の。主從凡三十餘名。一箇も漏るゝものあらで。齊一水に溺れしを。幸ひにして吾身ひとつ。彼樹枝に

しさも。客を愛する手料理に。飯盛る椀と羹椀の。剝て揃はぬ五器々々と。拭ひ栄せし脚附の。折敷の縁は離れても。繕ひのなき白杉の。洗濯箸も時にあふ。春の菘漬は君が為に。野にこそ摘ねあはせ物の。数に向へとり添て。いざとて軈てもて出て。恭しく安排つ。夫婦右より左より。とく食給へ。と薦るを。弘元饑て辭するに及ばず。歓びを述箸を掲て。思ひの随にたうべしかば。快然として愉く。遂に睡眠を催しけり。登時あるじは忙しく。女房を呼立て。綾女よ。大爺の臥簟を備て。些休はせまゐらせよ。きのふ通宵樹の杈に。足踏掛てをはせしかば。疲労給ふは理りなり。やよとく／＼といそがすを。弘元急に推禁めて。こは甚麼。日は尚高きに。今より臥簟に入られんや。と推辭をあるじは聞あへず。こゝも旅宿でをはするに。誰に憚りのあるべしやは。よきさ程に覺してん。納戸はこゝより陝けれど。南面で温暖なり。枉て且く睡らせ給へ。としば／＼いふに辭ひかねし。弘元は引るゝ儘に。やうやく納戸に趣きつ。霎時寝に就くと思へば。われにもあらで熟睡しつ。その日も既に暮果て。子二刻の左側ひとり覺けり。枕邊に措れたる。燈火の光幽にて。あるじ夫婦は寝まりにけん。寂寞として音もせず。噫鈍ましやわれながら。暮るゝもしらでよく寐たり。浄手せばや。と身を起して。晝見し随を心當に。竹椽に搔摸出れば。背門のかたに馬嘶て。人影相譚聲の。遠くもあらず聞えにけり。弘元耳を敧て。肚裏に思ふやう。田家はなべて小荷駄あれども。こゝは川添の孤屋に

立つゝ案内をすれば。妻にやをらん出迎へて。只今かへり給ひし歟。いかに獲ものは多かりしや。と問へば頭をうち掉て。否。昨夜の水に落さるゝ。鯉鮒なりとももものせんとて。曉かけて出たるに。させる獲ものはあらずして。思ひもかけぬ阿蘇沼わたりの。沼暴波に流され給ひし。大爺を伴ひまゐらせたり。這回菊池を討手の大將。管領ざまに隷せ給ひし。大宮人にをはするを。等閑にな思ひ奉りそ。魚籃中には些の雜魚あり。船より揚て。とく炙ね。物欲しうをはするぞ。といふに女房こゝろ得て。水際へ走りて。船なる魚籃を。もて來て庖湢に撲地と措く。立働きも精悍しく。弘元にうち對ひて。時ならざりし水難に。あはせ給ひし危さも。命めでたくましませば。緣しに觸て歡び侍り。見れば衣裳もまだ乾かず。春寒は殊更に。堪がたきものに侍れば。さこそ便なくおぼすらめ。柴折燒て進らせん。地炕の緣へよらせ給へ。痛ましさよ。と他事もなく。夫婦等き管待態に。弘元いよ〳〵感謝に堪ず。額に霎時手を加て。危窮の折に邂逅せられし。あるじのみかは和女郎まで。かく正首にものいはるれば。初對面なる心地はせず。都會の人は勢利に走りて。交遊の間すら。憂ひを共にするものは。今の世に得がたきを。田舍人の心直かる。十室の邑にも忠信あり。心裡恥しく思ふのみ。といふにあるじは微笑て。否。空賞なし給ひそ。危きを見て是を救ふは。人の性の善なる所以。誰もかくこそあるべきに。といふ間に女房は。ひとり庖湢に退きて。雜魚に鹽ふる炙網の。目面を抓む勤は

るべし。疑ひ給ふとかは。といふを弘元聞あへず。いかでかは疑ふべき。一河の流も他生の縁。きのふ危窮を拯れて。居亭儲の管待は。身を終るまで忘るべからず。後に報ひを受んとての。所爲にはあらじと思へども。再會の爲なれば。姓名を聞まほし。けふも天よく晴たれば。水も大かた落たらんに。舊の陣所へ立かへりて。管領の安否を問ふべく。わが從卒等の存亡も。心に係りて不便なり。彼等が往方も索ぬべし。といふにあるじは沈吟じて。現縁あれば千里も合璧。縁なければ肝膽胡越。不測の値偶に候へば。有繋に名殘惜けれども。かくてをはすべきおん身にもあらず。爾りともなほ早かり。亭午の比までかたらせ給へ。不慮にお宿は仕れども。既に賢察し給ふごとく賞祿などは望しからず。素より匹夫で候へば。名告るべき名はなけれども。世人名づけて在下を。子自素它六と喚做しつ。妻は名を綾女といへり。子共も夥候ひしを。彼此へ巣立して。今は宿所に候はず。これらの事も後々に。みづから曉得り給ふよしあらん。漫に人にな告給ひそ。と囁き示せば弘元は。思はず貌を更めて。いはるゝ趣こゝろ得たり。思ふに和主は生れながらの。漁者ではあるべからず。賢にして時に遇ねば。一葉舟に塵を避て。簑笠に光を包むものか。嘉吉應仁の擾亂より以來。室町殿の武威行れず。諸侯おのおの割居して。強きは必弱を征し。上下交利をのみ取れる。その權多くは下に移りて。家臣はその主君を弑し。子はその親を害へども。人見て不忠不孝とせず。三綱滅びて。順逆に

て。漁獵して世を渡れば。素より馬を養ふべくもあらず。加旃小夜深て。背門備に人の聚合しは。怪しむべきことにあらん。こゝのあるじは盗賊の。頭領にはあらざる歟。さる人柄には見えねども。貌をもつて人の心の。善悪は定め難かり。用心するに優ものあらじ。と深念をしつゝ臥簟にかへりて。はやく暁よ。と東雲を。俟ば春の夜も長く覺て。烏と倶に起出れば。あるじの妻はいつの間にか。起て早飯を炊ぎてをり。弘元を見かへりて。こはいとはやく侍るかし。おん口漱せ給へとて。小盥皿碗に湯を汲みたると。小皿に鹽と養歯を添て。竹縁にもて來る程に。あるじも出て安否を問けり。とかくする程に女房は。弘元に茶を薦め。早飯を羞めたる。あるじ態の懇切なる。きのふにもなほ優たり。弘元は食了て。窓下に退けば。あるじの漢子は身邊邇く。侍りて江湖上の雜談に。姑く時を移すほどに。弘元は又あるじに對ひて。きのふは太く疲勞にけん。日の暮るゝをも知らずして。半日一夜熟睡せしは。われながら鈍ましかりき。かういへば何とやらん。疑ふに似たれども。こゝは川添の孤屋にて。鄰家ありとは見えざるに。昨夜眞夜中比にやあらん。背門に馬の嘶て。人の相譚聲したり。といへばあるじは微笑て。現然るともありつらん。背門には艪械と魚網を藏る。敗小屋の候を。前夜人に貸たれば。人馬の聲はそのものならん。といふに弘元は頷きながら。こゝろ得がたき面色なるを。あるじはさてこそ。と又含笑て。只今具に告まうさずとも。遠からずしておのづから。曉得せ給ふとあ

ば。怪むものもあらずかし。されば。繻葛倒に罹り。冠履地を易るに至りし。縁故を原るに。最も恐きとながら。等持院尊氏卿。さしも後醍醐天皇の。寵恩を讐もて復し。南北朝両天子の。御位爭ひにとり成して。逆に取て逆に守り給ひし。餘殃眼前に報ひ来て。直義直冬。師直等の逆亂に。父子兄弟攻戰ひ。家臣は主君を禁錮たり。是よりして清氏直常。氏清義弘等謀反して。君臣下剋上の戰ひ絶ず。鎌倉管領。諸國の領主も。亦かくの如くにして。終に嘉吉應仁の大亂こゝに極りぬ。便是汝に出て。汝に返るものなるを。前轍覆れども。後車の誡を知ずして。これを恨むは愚にこそ。然は思ひ給はずや。と辭せわしく論ずれば。弘元頻りに嘆息して。和主は寔に頓着なり。彼酈食其魯仲連と。いふとも加るとなかるべし。可惜しき才をもて。釣網に老朽んより。良主を擇て仕よかし。然らば汲引をなすべきに。といへば素它六頭を掉て。在下仕官に望なし。縱その望ありとても。仇の爲に逼られて。夫婦が命運既に盡たり。後日を思ふに遑なし。といふに弘元驚きて。そは安からぬ事なりけり。和主の仇は何ものぞ。われも一臂の力を勠して。救厄の恩に答ふべし。隱ず告よ。いかにぞや。と問れて素它六嗟嘆に勝ず。そは辱きとながら。大爺はさらなり。幾百人の。助劍を得たりとも。免れ果べきわが命にあらず。是則命數なれば。又奈何ともすべからず。これらのよしも遠からず。思ひ合し給ふとあらん。在下夫婦は仇の爲に。命果敢なくなりぬとも。冤魂は生を易て。必

暗く。五常絶なんとして。骨肉仇となる。偶志操あるものは。官低くして言行れず。果は群小に憎れて。不測の罪に陥るもの多かり。和主この義を何とか思ふ。教給へ」と。他事もなく。問れて素它六膝推進め。言腐亂しく候へども。嘉吉應仁の大亂は。男色龍陽より禍萌して。君驕り臣奢る。贔屓の制度に成れるなり。その故をいかにとなれば。普廣院義教將軍のおん時に。不覺に赤松貞村が。男色に惑せ給ひて。贔屓の濫賞ありしかば。そが族滿祐父子。ふかく怨み奉りて。遂に義教公を弑し奉りき。しかるを慈照院義政公も亦懲ずまに。赤松彦五郎則尚が。美少年なるをもて。恩寵の御沙汰ましく〳〵き。おん父義教公の讐なりける。滿祐が甥なるをも。うち忘れさせ給ひけん。當時好らぬ風聞あり。山名宗全これらの事を。只管恨憤りて。彦五郎則尚に。詰腹を切らせたる。禍の胎あり。福も基あり。彼男色に濫賞ありしが。亦應仁の亂根なるを。只今出川殿東山殿の弟義視卿を疎せ給ひし。御家督の變改より。勝元宗全兩驕臣の。確執威勢爭ひに。起るとのみいふべからず。豈衛嬖漢董の。禍を做のみならんや。むかし北條義時が。童扈從に殺されしも。これ男色の嫉妬に起れり。近世戰國となりしより。大將も士卒も。戰場をもて家とすなれば。男色を愛て妻妾に。易て陣中の徒然を慰る。この故に。美童龍陽のもの。歯を染紅粉を施して。女子に彷彿たるも多かり。こゝをもて。その年二十四五までも。額髪を剃らずして。なほ少年の面色すなる。なべて今の世の風俗なれ

賊は主從五十餘名。山寨に籠れるを。わが身只一箇にて。捷を取ると難からずや。といへば素宅六莞爾と笑て。その義は御心安かるべし。今よりこゝを立出て。彼山に赴き給はゞ。中途にしてゆくりなき。夥の援助を得給はん。疑ふときは遂に功なし。いで〳〵といひながら。身を起して戸棚より。地圖一枚をとり出して。これを弘元に示していふやう。この圖によらば彼山なる。賊の巢穴は具にしられん。是觀せ。彼巢穴は。北のかたに脫穴あり。只一方より攻撃ば。捕逃すともあるべきなを。從兵を二隊に分て。前後より攻入らば。嚢の物を取るより易く。そが一箇をも漏すべからず。よくし給へ。と說示して。件の地圖を贈るになん。弘元はなほ心もとなく。思ひながらも受收め。この事教諭に違はずば。かさね〳〵し恩義なり。然るを報んよしもなき。夫婦の命は旦夕に。逼ると聞くこそ哀しけれ。といふを素宅六推禁めて。そは益もなき愁歎なり。這回大爺の資となりしも。在下が自力にあらず。この年來信じ給ふ。神の冥助で候へば。來世は仇となるとても。必な怪み給ひそ。今はしも是までなり。とく出給へ。と薦めたる。聲聞えけん女房綾女は。庖湢のかたより出て來つ。何ともわかぬ草葉の。陰乾にしたりしを。弘元に贈りていふやう。もし中途にて饑給はゞ。この草葉を舐せ給へ。しからんには五六日。物をたうべ給はずとも。氣力いよ〳〵健ならん。と示せば弘元受とりて。遺る方なき恵には。只感涙の外はあらず。さらばとばかり告別。はや緣頰よりをり立て。刀を

仇を復すべし。人は終焉の一念にて。生を引くといふ佛理の輪回も。善人には善もて報ひ。惡事には惡もて報ふ。これも亦自然の理なり。かゝれば在下が後身は。甚麼なるものになるべからん。是も亦料り難かり。もし誹に說ときは。天機を漏すの怕れあり。みづから悟り給へかし。といふに弘元慰めかねて。頭を低て默然たり。且くして素它六は。又弘元にうち對ひて。大爺は中州の舊家にして。且側隱の心敦く。よろづに信ましませば。祈らでも神の擁護あるべし。況て信心淺からねば。今こそあれ後に至りて。必與るものあらん。就て報まうすべき。一條あり。這國阿蘇山の城攻は。一个の功もなかるべし。管領この義を竊に羞て。怒を移すとあらば。その禍違うへに。被るべしとはしらねども。未然の禍を避んには。その功なきを補ふべし。就て當國山本郡。飯田山の洞中に。川角頓太連盈といふ山賊あり。はじめ菊池武俊が。阿蘇山の古城に籠りしとき。鄰郡の野武者等を。招鳩ると聞えしかば。連盈則手下の賊徒。五十餘名を從へて。第一番に馳加り。その隊に屬んと願ふにより。武俊則渠を留めて。一方を守らせしに。忽地に心變りて。城中の軍要金。幾百兩をか竊取て。手下の小賊共侶に。彼城を逐電して。飯田山に立かへり。今も件の山中にあり。大爺はこゝより彼山へ。潜やかに推寄て。川角頓太を搦捕り。これを管領に進らせ給はゞ。その功なきを補ふの功あり。疑はずして從ひ給へ。といと懇切に薦れども。弘元答へず沈吟じて。そは歡ぶべきすぢながら。

つく〴〵と。聞つゝ忽地意中に悟て。原來昨夜背門のかたに。人馬の聲の聞えしは。汝等なるを今知りぬ。われも彼漁者。素它六に拯れて。彼處に在りし絆の趣。首をいへば如此々々なり。尾は箇樣々々なり。と遺もなく說示すを。衆皆聞つゝ呆るゝまでに。なほ疑ひは釋ざりけり。登時弘元屑うち頷て。さるにても彼素它六は。素是いかなる術ありて。わが主從の危難を知りて。はやく船もて救ひけん。これ將因緣ある事歟。且治亂得失の理りを論じたる。才學言下に顯れて。耳新しく覺しに。藥草をもて主從に。贈りて路次の割籠に換たる。その計ひ意外に出て。凡夫のよくすべき事ならず。附るに渠は嘗の爲に命旦夕に逼りぬ。といひしを思へば異類にして。河伯水虎などにやあらん。然らずは狐狸の種類歟。左にも右にもいと怪し。呼奇なるかな。と歎賞して。後方遙に見かへれば。今まで有ける川の方の。白屋は迹もなく。春の川風にうち靡く。岸の柳のいたづらに。人を招くに似たりけり。從卒等はこの光景に。駭嘆じて舌を吐き。いよ〳〵奇異の思ひをなしたる。そが中に弘元は。とさまかうさま惟るに。この條の一奇異は。よしや變化の所爲なりとも。わが敬信空しからで。嚴嶋なる辨才天の。擁護利益と覺るに。今さら何をか疑ふべき。はやく飯田山に赴きて。川角頓太連盈を。搦捕るこそ緊要なれ。その故は箇樣々々。と素它六が贈りたる。地圖を披きて指示せば。衆皆有理と齊一悟りて。歡び勇みて從ひけり。如之而備中介弘元は。件の馬にうち跨り。三十餘名の從者を

腰に草鞋の。紐を締て出てゆけば。名殘をしや。とばかりに。見送る夫婦は柴戸の。ほとりに霎時竚在たり。却說備中介弘元は。素它六が宿所を出て。ゆくといまだ幾ならず。と見れば路傍に。わが隊の軍兵三十餘名。一人も恙なく。馬を牽き兵器を橫佩て。左右二側についゐたれば。こは甚麼。と驚きて。且歡び且怪み。縡の趣を諮れば。衆皆齊一答るやう。在下等は彼夜さり。沼水の爲に推流されて。君の先途におひ奉らず浮つ沈みつせし折に。誰とはしらず一箇の漢子。快船を漕もて來て。在下等はさらなり。おん馬までも助け乘して。そが宿所に漕かへし。扨潜やかに示すやう。和殿等且くこゝにあらば。主に再會するの歡びあらん。音なせそ。と誡めて。背門なる小屋に容措きつ。生枯なる草葉を。三十餘枚取もて來て。和殿等しば〳〵これを舐らば。五六日は饑ざるべし。馬にも舐らせよといひけり。いと怪くは思ひしかども。敎の如くものせしかば。忽地心持淸やかにて。今に至るまで饑を覺ず。晝は疲勞て睡りし甲斐に。昨夜は通宵いもねられず。翌は御主君におひ奉る。ともやあらん。と憑しくて心勇のせらるゝまゝに。うち相譚て候ひし。扨又けふはさきの程。あるじの女房が走來て。和殿等こゝを竊に出て。相距ること二町許。辰巳のかたなる巷にをらば。御主君に再會しつべし。とく〳〵せよといはるゝに。歡しくて霎時もあらず。敎に任しこゝにをりて。俟奉れば果して違はず。恙なきおん顏を。見奉るこそ嬉しけれ。と異口同音に報知するを。弘元は

心なく。北のかたなる脱穴より。逃去らんとて掙擇するを。待設たる弘元の勇卒等。洞口に立塞り。一箇も漏さず斫仆せば。駭忙て引かへし。南のかたより逃んとせしは。前なる寄手に斫伏られて。脱るゝものは稀なりけり。畢竟弘元小賊等を討捕て。後話甚麼ぞや。そは次の卷に解分るを聴ねかし。

近世説美少年録第一輯卷之一終

將て。飯田山に赴くに。彼藥草の奇特なりけん。人馬共に饑るとなく。氣力日ごろに十倍して。長途なれども疲勞を覺ず。阿蘇の城攻の期に後れじ。と思へば些も休らはで。その宵も終夜急ぎしかば。幾日もあらで既にはや。件の麓に著にけり。這山高峯ならねども。樹木森林として晝も暗く。鳥路熊徑の外に路もなければ。弘元は復地圖を披きて。嶮岨方位を分別し。心利たる一箇の奴隷を。樵夫の貌に打扮して。潜やかに山に登し。賊の巣穴を窺するに。半日可にしてかへり來つ。扨弘元に報るやう。件の川角連盈は。五十餘名の小賊と共に山中なる洞の中に在り。その洞はいと廣やかにて。石を疊たる門戸あり。その餘の爲体は如此々々と。仔細に注進してければ。弘元斜ならず歡びて。三十餘人を二隊にわかち。計策を囁示して。前後より推寄するに。弘元は從兵十餘名を將て。洞の後門のかたに赴き。前後より取籠て。一箇も漏さじとぞ計ひける。表話不題。川角頓太連盈は。曩に菊池武俊が。軍要金を竊取て。走りて舊巣に還りしより。日々に手下の賊を聚へて。酒うち飲てありけるに。この日思ひがけもなく。一隊の軍兵推寄せ來て。賊首連盈とく出よ。京都の管領大内殿。武俊誅伐の台命をもて。汝等をも亦誅せん爲に。馬をこの山の麓に寄せ給ひ。數萬の官軍稻麻のごとく。四方八面をとり詰たる。天羅を漏さんや。とく／＼出て縛の繩を受よ。と喚りて。鬨を咄と揚たりける。その聲山谷に響きて夥しく。勢以大軍に異ならねば。山賊等は僉胸を潰して。戰んとする

く。只筑紫なる嶋人の。近代私に傳へたる。舶來新渡の火器なれば。誰か驚き怕れざるべき。寄手はこれに避易して。左右へ發と退たりける。透を得たり。と連盈は。阜螽のごとく。脱穴より。跳出足に信して。逃去んとする程に。弘元はやくこれを見て。渠は必連盈ならん。と思へば聲をふり立て。川角等と呼被るを。連盈遙に見かへりて。引提たる鳥銃に。鐵丸を籠んと拿直す。程もあらせず弘元が。丁と撃たる銃鋧の。覘ひ違はず連盈は。右の腕を打傷られて。憂哩と落す鳥銃の。石に當りつ溪川の。深き底にぞ沈みける。既にして弘元は。賊の神器を打落せしかば。驀直に走寄するを。連盈はなほよせじとて。左手に引拔く銕鋧の。矢聲をかけて撃返すを。弘元騒がず身を外して。刀の柄に受留め。走蒐れば。連盈は。刀を拔て砍んとするを。拔しもやらず引組たり。さばれ連盈も覺ある。猛者なりければ。なほ怯まで。上になり下になり。且くは相撲ひしに。腕に深疵を負たりければ。終には膝に組布れしを。反かへさんとて搶撥程に。寄手の兵五六名。打累りて動かせず。押へて索を被にけり。是時その手の小賊等の。撃れたるもの三十餘名。生拘十名に餘りしかば。辛くして脱れしもの。兩三名に過ざりけり。されば寄手の雜兵も。疵負ふたるものなきにあらねど。彼鳥銃にて撃れしものだに。幸ひにして死に至らず。却說弘元は。洞の前門を攻さしたる。隊兵をもこゝに聚合て。功あるを譽め。疲勞れたるを勞ひ。且被傷者等を勦るに。藥の准備もあらざれば。はやくも心つくよしあり

近世説美少年録第一輯巻之二

東都　曲亭主人編次

第三回　賊巣を突て弘元連盈を捕ふ
蛇穴を焼て義興禍胎を遺す

紹前齣復説。備中介弘元は。川角頓太連盈が。洞の前後を捕籠て。脱出んとせし山賊等を或は斫伏せ。或は生拘る。その隊の勇卒三十餘名。奮撃突戦術を摧けば。いづれに間はなかりけり。有之程に連盈は。透を闞ひ殺脱んとて。憑切たる手下の山賊。十名あまりを前後に立して。這脱路より出んとす。弘元これを佶と見て。彼免すなと。下知したる。烈しき聲と共侶に。遮留る寄手の兵。競蒐るを物ともせで。先に立たる五六賊。手に〳〵刃を拔晃めかして。霎時は挑戰ふものから。賊徒は既に狩塲の野猪の。箭面にあふ心地して。只管路を殺開んと。思ふ足並取次にて大痍を負ぬものもなく。斫立られ追籠られて。ふたゝび故の脱穴へ。入らんとするを。寄手の兵。透間もなく跟入て。轟留んとぞ進みたる。件の洞の中よりして。川角頓太連盈が。撃出す鳥銃に。先に進みし一兩人。矢庭に撃れて仆れけり。是時に鳥銃は。尙世間にあるとな

の腕に。深疵を負たるをかうへに。最も緊く綁られて。さながら毬を聯たるごとく。段々として縊入たる。苦痛にや堪ざりけん。昨夜通霄嘯きしが。この日途にて死にけり。只これのみにあらずして。深疵を負たる生虜の。死するもの五六名に及びしかば。こは皆棄て見かへらず。連盈をのみ頸を捕して。雜兵に齎しつ。生殘りたる賊を牽して。其夜は麓より程遠からぬ。道場に宿を投め。爰にて京軍の安否を問ふに。總大將大内殿は。既に諸軍勢を牽て。阿蘇の古城へ寄せ給ひしといふ。風聞定かなりければ。弘元頻りに焦燥て。われ思はずも連盈等を。追捕の事に日を過しつ。這回菊池征伐の。期に後れなば遺恨ならん。翌は未明に立出て。夜を日に繼でいそがんとて。その曉に宿を出て。馬の足搔を早めけり。扨も昨夜弘元等が。旅宿は貧院なりければ。三十餘名の主從を。欵待すべき糧なかりしに。この時までも彼草菓の。効能はじめに變らねば。弘元も隊兵等も。これを舐り食に換て。その夜優に睡りしかば。氣力は些も衰へず。裕といひ。恰といひ。素它六夫婦が賜ものなれば。僉その恩義を感じつゝ。只管路をぞ急ぎける。案下某生復說。大内左京權大夫義興は。その日大宮司の宿所より。阿蘇谷の陣にかへり來て。大伴親春。太宰敎頼等と譚ずるやう。武俊はやく山の城を落亡て。當國に賊徒なし。者ば華洛へかへり參りて。絆の趣を言上せん各々も某と。共侶に上洛して。這回の保徵たるべきもの歟。原田以下の人々は。當國の守護なれば。身の暇をとらせんとて。即原田山鹿。宇

て。きのふ素它六夫婦が贈りたる。草葉を推揉て。その瘡口に布させしに。僉立地に疼痛去て。幾程もなく愈にけり。左右する程に。この日も既に暮にければ。雜兵等は。樹枝を伐とりつ。通宵火を焚て。生虜を守りて曉るを俟に。春の宵なれば。短くて。東の山夾のしらむ比。弘元猛に下知するやら。彼鳥銃とかいふものは。世に珍しく覺るに。底を撈りて取揚よとて。水煉を得たる雜兵を。溪川に下立して。半日ばかり漁獵せしに。その川は湍の早ければ。推流されてや失にけん。とり得ずして已にけり。現物の流行せる。時至らねば世に出ず。鳥銃はこれよりして。三十一个の春秋を歷て。天文八年の比よりぞ。なべての軍器になりにける。閒話休題。この日又弘元は。隊兵等と共侶に。連盈が住做したる。洞中に入て見るに。なほ三四百兩の金銀あり。この餘。調度衣衾の類。酒器骰子などに至るまで。物みなあらずといふとなし。登時弘元は。隊兵等を見かへりて。今この洞を毀ずは。後に又山賊の。巢穴となるとなからずやは。かゝれば山の木を伐て。燒崩さんと思ふなり。さばれ金銀は國の至寶。土石と倶に棄べきにあらず。這財帛をのみ取出して。如此々々にせよ。と指示せば。隊兵等はこゝろを得て。形のごとく相計ひつ。夥しく樹を伐て。前後の洞門を燒崩すに。石もて疊し門戶なれども。その石悉燒碎けて。前後の口を埋めしかば。復入るべうもあらざりけり。これらの事に時移りて。日景斜になりしかば。弘元は隊兵等に生虜を牽しつゝ。麓に下らんとする程に。連盈は右

徒弟を從へて。義興の陣に赴んとす。この日大内義興は。身近き士卒百名ばかり將て。親春款賴等と共侶に。沼上を徘徊して。遂に辨天の社頭に來つ。こゝに牀几を立させて。事を談じてありければ。鱗角院は便宜を得て。即大内家の近臣に。由を報名簿を遞與して。云云と陳しかば。軈て披露に及びけり。是により義興は。鱗角院を召近づけて。社頭に在て對面す。主客の勢ひ異なりし。鱗角院はおそる〳〵。歸陣の祝ぎを述けるを。義興聞つゝ冷笑ひて。某嚮にもこの所に。軍兵を屯せしに。院主は絕て。出も迎へず。武俊はやく落亡たれば。軈て退陣のけふに及びて。出て來つるは遲からずや。當社は菊池武光が時。建立のよしその聞えあり。院主は武俊最屓の人歟。今も舊緣を思ふをもて。その旗色を見ん爲に。遲參したるものなるべし。然にこそあらめ。いかにぞや。と詰問れて鱗角院はやうやくに。頭を擡げ。總大將上に在すを。貧道いかでかさまで正なき。意匠を仕らん。御諚では候へども。當社は初菊池氏の。建立せしよりいくばくの。歲月を歷て候に。子孫はその祖の心に似ず。信仰疎なるのみならで。年來の兵亂に。社壇は太く荒果しを。修復すべきよすがもなければ。嚮には勸緣せん爲に。貧道師弟他鄕にあり。こゝをもて見參に。入り候はで候ひしを。御下向のよし聞えしかば。きのふ歸院仕りぬ。これらの趣賢察有て。宥免を願ふのみ。南無阿彌陀佛と。念ずれば。義興頭をうち掉て。理りめかしていひ釋るゝを。實事なりとは思はねども。そはともあれかくもあれ。當社は菊池が

佐千手。酒殿立石等。諸隊の主將を。本陣に招き聚へて件の由を說示し。各位は是よりして。采邑にかへり給へ。勿論時々穿鑿て。武俊が在所を知らば。速に推寄て討果さん事肝要なり。この義もこゝろ得給へかし。といふに衆皆一議に及ばず。諾承しつゝ退さて。その明旦阿蘇谷なる。陣拂して。已が知る。居城々々へ還りけり。然ば大內等の三將も。歸洛に大軍は要なしとて。隊兵過半は。本國に返し遣し。僅に四五千の人馬を將て。且阿蘇沼まで退きける。不題。阿蘇沼辨才天の別當を。鱗角院法橋と喚做たるが。嚮に義興が大軍を將て。沼上に陣せしとき。當社は菊池武光が。建立たる事かくれもなきに。這回武俊が事の起りしより。出家なれども舊緣の。祟を怕れて出も迎へず。姑く山林に引籠て。事の容を闚ひしに。武俊ははやく落亡て。阿蘇山の城を破却せられ。總大將義興は。さらに又大伴太宰の兩將と共に。阿蘇沼の邊まで退き來るよし。その聞えありしかば。鱗角院思ふやう。嚮には緣坐の憚あれば。姑く影を藏せしかども。武俊既に落亡たれば。寄手は刃に衂らずして。當國はやく治りたり。かくて又大內殿は。當社近く陣し給ふを。知りつゝ迎接の義に及ばずは。更に後日に咎めに遭ん歟。これも亦影護かり。縱はじめは菊池氏に。建立せられし神社なりとも。われ武俊が謀反の議には。一毫も與からず。わが身出家の事なるに。さばかりの舊緣ありとて。首を召るゝとはあらじを。何日までかかくて在るべき。出迎るに優すとなけんと。尋思をしつゝ宿院に立かへり。兩個の

蛇にもあれ。鬼にもせよ。逆徒の討手を奉りし。義興が軍兵を。害せしはこれ邪神なり。いかで毒蛇を退治して。士卒の魂を祭らんと。豫てより思ひしかば。阿蘇谷よりこの處へ。來ぬる途にて焔硝硫黄の。火藥を多く買取せ。且このわたりなる樹を伐して。薪も夥く準備せり。聞くに件の毒蛇の穴は。この社頭にありといへり。東のかたに年ふりて。虚になりたる榎見ゆ。そこらに件の穴はあるべし。僉立遶りて索ねよ。と辭せわしく下知するを麟角院推禁て。いと慌たる聲を戰し。おん憤りはさることながら。白蛇の神は靈驗ありて。祈るものに利益多し。素是雌雄の白蛇にて。大約夏四月より。秋九月の比までは。穴を去て沼の底にあり。又冬十月より。春三月の比までは。沼を出て穴の中にあり。雌雄かはる〳〵に穴より出て。沼水を飲給ふを。見たるものも候へども。怕れて近くはよらずといへり。儻其方に向て尿なんど。不淨の所行をなすものあれば。立地に祟を受て。病煩はずといふとなし。穴は禿倉を相距ること。凡五六十間にして。いと大きなる榎あり。只今にも觀せ。幹は十人して抱くとも。なほ餘りある巨樹なるが。その虚の中にこそ。春冬は栖せ給ふなれ。かゝる靈蛇をいかにして。輙く退治せられんや。非如管領のおん威德もて。燒亡し給ふとも。後の祟をいかゞはせん。思ひ止り給へかしと。辭を盡して諫るを。義興聽かで聲を苛立。復しても諄々と。毒蛇を神とし敬ふは。愚民を惑す賣僧の奸計。武弁の人の欺れんや。この議を禁るものあらば。穴の燒草になさんのみ。毒蛇の祟

祈願所ならば。逆徒を守護の神なると。問ずとも定かなり。這回武俊追討の。序次をもつて毀棄ん。この義をこゝろ得られよ。といふに鱗角院驚きて。こは物體なき事をのみ。承り候もの かな。よしや菊池が建立でも。祭る所は安藝州。嚴嶋の神と一體なり。菊池氏の滅亡は。當社の見放給ひにけんを。初を追ふて今さらに。神社を毀せ給はんとは。いと憚に候へども感心しがたきおん下知ならん歟。古例をおもひ候に。筑紫の廣嗣。東の將門。逆惡謀反の骨張なりしも。死後には神に齋れて。その神社は今もあり。況當社はその類にあらず。むかしは菊池が建立たりとも。今は菊池に拘らず。只寛容のおん沙汰を。願ぎ奉るのみにこそ。と思ひ入てぞ口說たる。現その言の理りなるを。側聞する親春は。太宰少貳に目を注して。齊一義興を諫るやう。菊池に由ある神社なれば。破却せんと宣ふを。傾けまうすにあらねども。別當の陳するよしも。亦捨がたき所あり。鬼神は敬して遠ざくべし。凡夫に等く征伐を。加ん事は物體なし。賢慮を旋らし給へかし。と迭代に寛解るにぞ。義興僅に頷きて。いはるゝ趣その意を得たり。某なりとて權威に誇りて。神を神ともせざるにあらず。鱗角院が遲參のよしを。いと疑しく思ふをもて。そを試ん爲にのみ。言のこゝに及べるなり。爾らば本社はこの儘に。立措く事を許すとも。免しかたきは當社なる。彼毒蛇の事なりかし。嚮に某諸將と共に。この處に陣せし折その夜沼水猛に漲れて。人馬を夥く損傷れしは。件の神の崇ならんと。人喋々しく僉いへり。大

らん。と覺て。人僉魂を落し。胸を潰さずといふものなきに。薪盡んとするときは。義興下知して。初より。なほ夥しく燒草を。虚内へ投入れさせて。些も間斷あるとなければ。甚なる靈蛇神龍なりとも。免れ果べうは見えざりけり。如是而燔と燒く程に。この事已牌に刻りて。申の比に及びしかば。さしも稀なる大櫃に。火氣の至らぬ隈もなければ。終に幹まで燒摧けて。灰燼となりて。倒るゝ折から。倏忽大地震動して。轟然たる物響。譬ば百千の雷電の。一度に墜て霹靂く如く。穴の中より兩道の。白氣忽然と煙を衝て。立升ると見る程に。兩箇の白蛇隱隱と。煙の中に顯れたる。その長各々廿仞あまり。眞白き絹を引るが如く。飜翻として東へ靡き。西へ流れて閃きたり。浩處に沼上より。最美しき山雞と。逞しげなる雄野雉と。翥き高く翔出て。件の白蛇を追んとす。登時白蛇の身中より。薄黑色なる兩箇の蛇走り出遮留て件の鳥と戰ふ程に。なほ又夥の小蛇共。空中に顯れて。その鬪戰を援けしかば。山雞野雉はうち負て。既に危く見えたる折。又沼上より。いと大きなる雎鳩と一隻の錦雞翺翔て。山雞野雉に力を戮し彼薄皂き兩箇の蛇と。夥の小蛇を追散し。突落々て。俱に白蛇を擊んとす然ども白蛇は怕るゝ色なく。頭を擡舌を吐きて。四箇の鳥を吞んとしつゝ。且く挑戰ふ程に又西の方よりして。形狀鷲より巨大かるべき。一隻の孔雀翔り來て。山雞等を又相資けて。はや四方より捕籠て。觜もて突くと見る隨に。兩箇の白蛇は四段となりて。地上遙に墜んとす。時に疾風

がおそろしとて。わが軍令を用ひずや。奈何々々。と敦圉たる。面色凄じかりければ。鱗角院は怕惑ひて。ふたゝび口を開き得ず。大伴太宰の兩將も。權に怕れ威に憚りて。寔に然なり。と答るのみ。又いふよしもなきものから。士卒はすべて鬼胎を抱きて。かくても霎時立難しを。義興頻に焦燥て。者共なそて猶豫せる。毒蛇が沼にある折ならば。輙く退治しがたからんを。今なは春の季なれば穴に居らんと疑ひなし。とく〳〵せずや。と牀几を放ちて櫝の邊に赴くにぞ。親春も教頼も。夥の士卒共侶に。後方に跟て倶しゆけば。鱗角院も徒弟を將て。おなじ所に聚合たり。當下大内義興は。仰ぎて件の櫝を見るに。幾歳月を經たりけん。枝は四方に茂あひて。瓢形の日景を遮り。幹は幾間にか廣り拉て。朽て虛になりたる內には。席拾枚ばかり敷つべし。東西にさし出たる大枝に注連を引渡したる。下には褊小なる雞栖を建たり。義興見つゝ冷笑ひて者共はやく〳〵燒草を。虛の內に積容れて。燒殺さずや。疾々と。猛く烈しき主命に。雜兵等はかねてより。准備の薪焔硝硫黄を。扛擔ひ來つ樹の虛へ。いくらともなく投入れて。火を移しつゝ燒立れば。義興等は十反ばかり。西のかたに退きて。瞬もせず目戍りたり。然程に。猛火煽々として幹を焦し。烈燄漸々に立升りて。大枝細條を燒落す。勢ひいふべうもあらざるに。虛の內。幹外に積累ねたる薪には。硫黄焔硝をまじへたれば。熚爗たる音凄じく。煙は虛空に布滿て。有頂天にも屆くべく。燬は四下の壤を焦して。その炁。坤軸までも通るべか

就中弘元は。思ひあはするよしあれども。心に秘て言に出さず。事果て後社頭に入て。義興に見參す。爾るに義興は。嚮に當社を陣所にせしとき。不幸にして弘元が。諫言暗に的中しつ。その宵沼暴の巣あり。軍兵夥喪ひしを。意中に羞て弘元を憐まず。そが主從のかへらずなりしを。物怪の幸ひなり。と思ひたりしに。誰か料ん弘元は。隊兵三十餘名を將て。皆恙なくかへり來にければ。義興これを歡ばず。竊に憎み思ひしを。色には出さで弘元を。左右近く招きよせて。左見右見つゝうち含笑み。和殿は曩に沼暴の宵。隊兵と共に漂沒したれば。世になき人と思ひしに。日比經てから恙なく。かへり來ぬるは以こそあらめと。問れて弘元さん候。かの夜在下も漂流して。垂死としたる折。漁舟に助乘せられ。そが宿所に伴れて。其處に一宵せしに。不意隊兵等が。索來つるに環會にき。爾るに當國飯田山に。川角頓太連盈といふ山賊あり。手下の小賊。五十餘名を從へて。彼山の洞を小寨にしたり。抑件の連盈は。近曾菊池武俊が。招きに應じて。阿蘇山の城に籠りしに。忽地に心變りて。武俊が軍要金。四五百兩を竊取り手下の賊と共侶に。逃て飯田山に歸りきといふ由を。定かに告るもの候ひき。是により在下は。連盈等を搦捕ん爲。隊兵を得て彼山に推寄せつゝ。此如々々に計ひて。遂に連盈を搦捕り。その餘の奴原は。或は砍伏せ。將は生拘り。洞の石門を燒毀て。その巣穴を帚ひ候ひき。爾るに連盈は。初負たる深痍に堪ず。次の日山を下るとき。途にて息絶候を。首領なれば馘り

吹暴れて。砂を起す天色の。朧々となる隨に。白蛇はさらなり。五隻の鳥も何處ゆきけんかき消す如く。影だに見えずなりにけり。是なん後に大内家に。大奸雄の逆臣いで來て。黨を樹。主を惑しつ。その家をしも倒すに至る。この時義勇の少年あり。又毒惡なる少年ありて。怨を結び相剋し。その良善の徒は。百折千磨の艱苦を稟て。必死の厄に及ぶといへども。又兩雄の俠客ありて。善に與し惡を夷げ。世の英雄と相會して。奸を鋤き逆を滅し。彼七州を討治めたる。是その前兆なりとは。神ならぬ身の誰か知るべき。只この奇異なる光景を。目前に見し衆人の。驚き怪ざるものなく。後の祟を測りかね。今も安危を定めかねて。大伴太宰の兩將すら只管駭嘆したるのみ。辭を出すものなければ。悍く勇る義興も。惘然として醉るが如く。呆果たる可なり。折衷本齣遞說。備中介弘元は。日者山賊連盈が。首級を齎し。生虜を牽したる。隊兵三十餘名を將て。阿蘇谷の陣に赴きしに。摠大將義興は。大伴太宰の兩將と共侶に。けふ朝未明に陣帚して。阿蘇沼の邊まで。退きたるよし聞えしかば。迹を慕ひ路を急ぎて。今又こゝに走著ぬ。さるにより義興が。靈蛇の祟を焔く思ひて。蛇穴を燒くといふ縡の趣を。彼隊の士卒に傳聞て。且驚き且陥み。いかで義興を諫んと。思へば陣門に入らずして。直に阿蘇沼辨才天の。雜栖前まで來つるとき。靈蛇の寃魂煙火の中より。虛空遙に飛揚して。五隻の鳥と戰ひぬ。その縡の爲體を。圖らず目擊してければ。主從齊一驚き嘆じて。怪まずといふものなし。

を憩へ給へ。と亦他事もなく應たる。心の中に思ふやう。初われ弘元が。博士態たる諫言の。快らでありけるに。その言果して當りしかば。是よりわれを侮るべし。いかにせまし。と思ひしに似ず。弘元不測の功を立て。菊池が餘類の山賊の首級をこゝに齎せしは。わが爲に忠ありといはまし。然るをなほ媢しとして。執念深く祟らば人にわらじと。思ひかへしつうち解て。應荅叮嚀なりければ。親春も教頼も。又大内が老黨近習も。弘元を勞ふて。齊一譽て已ざりけり。却說大內義興は。雜兵等に火を滅させ。灰を掻掃して。親春教頼弘元等と共侶に。蛇穴のほとりに赴きてつら〳〵と。是を見るに。白蛇は火攻の苦みにや堪ざりけん。穴より半身を出しつゝ。遺る隅なく燒亡たる。その白骨兩骸あり。頭骨の大きなると。粉挽臼にも勝りつべし。この餘小蛇の骨多かり。されば この爲体に。觀るもの毛骨竦立までに。駭嘆せずといふとなし。そが中に義興は。つく〴〵と見てうち微笑み。人々何とか思ひ給ふぞ。靈蛇といひしは虛名なり。寔に靈ある物ならば。雲を起し雨を降して。火の害を避くべきに。燒れて骨のみ留めしは。その靈なきを知るべきのみ。嚮に立昇る煙の中に。怪しきものゝ顯れしは。皆觀る者の惑ひにこそ。譬ば杞人の目を患て。日華を見たるに同じかるべし。疑心暗鬼を生ずといふ。世の常言は以あるかな。必こゝろにかけ給ふな。人に聞して笑れなば。武士たるものゝ恥ならずや。わが家隷等もしかこゝろ得て。雜兵等に口を啗せなどいと誇貌に窘れば。衆皆齊一額を

て。即首級を斬したり。且生拘りし小賊等も。五六名死したりしを。これらは棄て首を捕らず。かくてその宵の旅宿にて、管領は諸軍を率て。阿蘇山へ寄せ給ひしといふ。風聲仄に聞えしかば。夜を日に繼て路を急ぎ。軈て彼山の麓なる。阿蘇谷に走著しに。菊池ははやく落亡たれば。管領は屯を釋て。大伴太宰の兩將と共に。この處まで退き給ひぬるよし。彼處の里人等に傳聞て。心いよ〳〵慌しく。時を移さずおん迹を。慕ひて只今參著せり。在下主徒脱れがたき命を保るのみならで。武俊に舊縁ありし。山賊を討滅せしは。是將軍家のおん餘光。且管領の御威福に因れるのみ。遲參の趣かくのごとし。と言詳に報しかば。義興歡び斜ならず。うち含笑つつ額を撫て。這回某辱も。武俊討手の總大將を。奉りたる甲斐もなく。賊徒ははやく落亡て。一トたびも刄をまじえず。賸不慮の水火によりて。夥の士卒を喪ふたれば。歸洛の日將軍家に。まうし釋ん辭はあらず。これらの事の心にかゝりて。いかにせましと思ひ不樂しに。御邊圖らず武俊が。餘類を一擧に討滅せしは。某さへに面を起す。是莫大の勳績なり。こゝは社頭の事にしあれば。本陣に立かへりて。首級實撿に及ぶべし。先度某この地にて。士卒を多く喪ひしは。この社頭に年を歷る。毒蛇の所爲であるべしといふ。人の口には戸も建られず。もしその毒蛇を殺さずば。何をもて死亡たる。士卒の魂を慰むべき。と思ひにければ如此々々に。計りて蛇穴を燒崩して。件の怨を復したり。某も是よりして。本陣にかへるべし。長途の疲勞

なりとも。この金銀を受奉るは。臣たるものゝ志にあらず。この義は許させ給へとて。幾遍も只固く辭ひて。受べうもあらざれば。義興いよ〳〵賞嘆して。御邊は實に廉直人なり。凡世に武士たるもの。誰もかくこそあるべけれ。この義も披露に及ぶべし。然らば件の金銀は。水火の爲に死したる士卒の。妻子等に分與へんとて。一議やうやく果しかば。弘元陣後に退きて。ひとり熟思ふやう。曩にわが主從の必死を救ひて。山賊を。討と護し素它六夫婦は。この阿蘇沼邊に年ふりし。雌雄の白蛇の化したるならん。その所以を甚麼と推すに。彼漁者の姓名は。即子自素它六なり。そが妻の名を綾女といひにき。素它の素は是白なり。它は是蛇字の片傍なり。子より六目に當れるは。これ巳にして。巳も亦蛇なり。且蛇の異名をあやめといへり。然ば永承年間。殿上の根合に。良暹法師が。筑摩江の。底のふかさをよそながら。引るあやめの。ねにぞしらるゝ。とよみけるを。あやめとは童女なるが。常に蛇腸をこそいふなれ。と右府の難じ給ひしとかや。給といひ恰といひ。素它六夫婦は白蛇なりしを。今やうやくに思ひ得たり。彼等が命數竭たれば。仇の爲に逼られて。その死期近きにありといひしは。大內殿に燒殺さるるを。豫て知ればならん。かゝる靈蛇も前世の。業報によることとありて。左にも右にも脫れがたけん。穴をも去らず猛火を受て。灰燼となりて亡し事。かへす〳〵も不便なり。かの折升る煙の中に。兩箇の白蛇の見えたるは。そが寃魂にてあらんかし。然るにても彼白蛇に。戰

つきて。承りぬ。と應けり。既に事果興竭たる。義興は社頭を出て。夥の士卒を前後に立し。手綱搔繰る三歳駒の。足搔しづかに陣所にかへれば。親春致頼は途より別れて。その隊の陣へ退きけり。當下鱗角院法橋は。義興の後に跟て。送りて陣門のほとりに赴き。禮を舒て宿院に退る程に。弘元も亦義興が陣所に到て。連盈が首と生虜を實撿に備へ。且分捕の金銀を。そがまゝ披露に及びしかば。義興則。生虜の小賊等は。京師まで牽べかゝらずとて。士卒に下知して頭顱を刎させ。皆陣前に梟させつ。惟連盈が首級をのみ。京師へ上せんとてその准備あり。かく掟果しより。この地に所要なくなりたる。義興はその夜さり。弘元を招きていふやう。某は翌の朝。親春致頼等を相伴て。急ぎて歸洛に赴くべし。御邊は殊さら大功あり。共侶にと思へども。いかにせん。武後既に落亡て。いまだその往方をしらず。渠當國に躱居らば。後の患をなさんものなり。御邊は姑くこの地に遺りて。這奴が在所を穿鑿し給へ。當國には原田の徒。しかるべき武士なきにあらねど。かゝる事に熟たるものは。御邊の外にありとしも覺ず。某這回凱陣の日に御邊の功は遺もなく。將軍家に聞えあげて。恩賞は後日の御沙汰に及ばん。且當座の牽出物には。賊の巣穴を燒毀ちしとき。分捕の金銀を。すべて御邊の所得にし給へ。こゝろ得てよ。と懇切に。私恩を被けて說示せども。弘元はその金を受ず。謹で答るやう。仰承り候ひぬ。しかはあれども。年來の。兵亂に民疲勞て。上の財用乏しき折に。よしや九牛の一毛

石塔婆さへ建て。叮嚀に弔ひけり。これらの意を人はしらねど。弘元は後の菑害を思ふゆゑに。飯田山なる賊巣を焼毀て。その金を受ず。又義興は。士卒の敗亡を羞て怒を移し。阿蘇沼なる蛇穴を焼て。漫に後の患を思はず。行ふ所は相似たれども。用心各異なり。と識者は評論したりける。

第四回　御廟野に興房阿夏に遭ふ　鴨河原に兩情春夢を結ぶ

却說大内義興は。大伴親春。太宰敎頼等を伴ふて。その夏四月の下澣に。異なく凱陣してければ。室町殿へ出仕して。菊池武俊が沒落の事の趣。幷に安藝州の人氏。備中介弘元が。自己の才覺をもて。武俊が餘類なりける。川角連盈といふもの。肥後の飯田山なる寨に仕けるを。推寄て討滅せし。その緯の爲體を聞えあげて。且親春敎頼を。將軍家義植卿の見參にぞ入れにける。この日義興親春敎頼等。各土産の貢献あり。登時將軍は。みづから緣由を聞食て。義興等を勞ひ給ひ。武俊ははやゝく落亡て。九州無異に治りしは。皆是管領の武略によれり。和泉紀伊の二ケ國は。鹿苑院殿義滿將軍のおん時。當管領の曾祖なりける。大内義弘に。御加恩の地なりしを。義弘不軌の行ひありて。一旦滅亡の折。彼二个國を召放されにき。よりて這回の勸賞として。和泉州堺の城に。如干の城地を添て。賜ふべきよしを仰あり。九州無異になりぬといへども。

捷たる五隻の鳥は。これ何等の因縁ぞ。天機は測りがたけれども。靈蛇を殺せし管領の。久後はいと心もとなし。縦その身に報はずとも。子孫の爲によき祥あらじ。思ひ難きは是のみならで。素它六夫婦が贈りたる。彼草薬も亦奇なり。こは外朝劉宋の。武帝が賤しかりしとき。蛇穴に入て獲たりといふ。劉寄奴草の類なる歟。件の草はわが主從の。饑に充たる物なるに。きのふ途にて皆失ひて。今はもてるもの一人もなし。只彼隱田山の地圖のみ。幸ひにしてこゝにあり。とひとりごち取出して。うち披きつゝ再見るに。初の地圖は耗失せて。四言四句の漢語になりたり。こは什麼いかに。と怪みながら。睛を定めてよく視れば。今生相識。來世做仇。木兎參處。是興亡秋。とあり。とさまかうさま思へども。その句は讀易うして。その意は究めて悟り難かり。要あるべしと。思ひしかば。ふかく篋底に秘て。遂に又人に知らさず。是よりの後年を歴て。その子晉就の成長りしとき。白蛇の事を囁示して。件の隱語を見せしとぞ。然程に。大内義興は。その次の日に。大伴親春と。太宰敎頼を相伴て。三將の軍兵四千餘騎。既に歸洛に赴きしを。弘元はなほ阿蘇郡に留りて。武俊が往方を索るに。些の便宜も得ざりけり。凡この逗留の間。麟角院と相譚ひて。白蛇の骨をその處に瘞め。灰をよせ塚を築きて。標識に弱樹の櫝を植けり。よりて土人これを名づけて。蛇塚と喚做したり。弘元はかくても飽ず。是年の秋。安藝の采邑にかへりし比。素它六夫婦を追薦の爲に。法師を聚合て。經を讀し。

言賢房卿は。大内家と疎からぬ。由緒をはしましければ。瀬十郎は勤仕の暇ある毎に。必この二位の君達を訪奉りて。歌を學び。又雅樂音律の技をしも。問聞奉るに。兼顯卿も。賢房卿も。この時は尙生上達部にて。年齢も共に弱かり。應仁の兵亂以來。公家武家倶に衰微して。朝の烟細からぬ。貴人は稀なるに。日野西萬里小路のみ。大内家の資けによりて。乏しからずをはすれば。その方ざまの人としいへば。召入れて對面し給はぬはなし。況瀬十郎興房は。彼家の老權なる。陶政房が愛子なれば。大かたならず款待して。僻敵にしたまふにぞ。瀬十郎はいと辱しと思ひつゝ。晤譚に小夜を深すと屢なりき。有如之程に。陶瀬十郎興房は。一日十禪寺村の邊に。私の所要ありて。赴きしかへるさ。夏の日の癖なれば。御廟野の邊にて。猛に夕立の雨ふりそゝぐに。雨具をもたせざりければ。只一箇なりし從者に。傘を借りて來よとて粟田口なる。相識許走らしつ。われはこゝにて俟んずとて。路の傍に荒頽きたる。圓通堂の檐を仰上て。遽しく走り入るに。われより先にこの處に。笠やどりするもののありけり。と見れば。年紀は十八九にやとおぼしき。一箇の女子の。人待貌に立りける。顏は暮春の櫻花の如く。雨に霑れ。風に惱る風情あり。姿は仲秋の新月に似て。雲を恨み。霽るゝを遲しと思ふめり。西施が心を患るときも。太眞が濁に堪ざりしも。かくや有けん。と見ゆる可なるに。羅衣なから花やかにて。頭上の飾まで。瑇瑁白銀のいろ〳〵なる。流行を肎とせざるはなし。瀬十郎はわれ

武後が往方定かならねば。親春教頼は。はやく采地に立かへりて。非常の備怠るべからず。又連盈が首級は。例に任して。河原に梟て惡を懲し。遠近人に示すべし。就て賊徒を討亡せし備中介弘元は。なほ肥後にありといへば。彼地へ感状を賜なん。この義もこゝろ得候へ。と深く掟給ひしかば。義興これを奉りて。形のごとくに行ひつ。親春と教頼は。京師の逗留いく日もあらず。各その隊の兵を將て。皆本國にぞ還りける。是よりして義興が。權威をさ／＼日ごろに倍して。在京の武士はさらなり。公卿殿上人までも。或は凱陣の壽きを述。或は加增を賀するもの。幾百人といふ事を知らず。門前日々に市のごとく。絡繹として絶ざりけり。不題。大内義興の近習の士に。陶瀬十郎興房といふものありけり。そが素生を原るに。大内家第一の老黨と聞えたる。陶遠江守政房が子なり。その身遊倅なりければ。周防の山口にありけるを。この春主の義興が。菊池武後征伐の爲。山口の城にかへりしとき。召出して。その軍陣に從しめ。そが儘京師へ將て上りて。身邊近く使ひけり。扨も這瀬十郎は。今茲廿一になりぬ。女子にして見まく欲しき。相貌いと美しく。心ざま亦風流を好みて。詩を賦し歌をよむに疎鹵ならず。且雜樂艶曲の技をすら。愛歡すといふとなければ。いとはやくより多藝の聞えあり。さばれ周防に在りし程こそ。人も譽めわれも亦。こゝろ得顔なりけるに。今茲皇城の地を踏初て。京師の手ぶりを見てしより。心裏恥しき事多かり。日野西中納言兼顯卿及、萬里小路中納

かゞはせん。應仁以來京師すら。荒たる儘の處多かり。況てこゝらは人家の。稀なる夜行をいかにして。女子一人でかへられんや。寔に便なき事にこそ。といふに女子は嗟嘆して。こゝらは熟たる路ながら。宣ふ如く雨は歇とも。暮れては獨歸りかたかり。然ればとて這十字堂に。立曉すべくも侍らずかし。かういはゞ狎々しくて。いと無禮なりとおぼさん歟。おん從者のかへり來ば。おん傘の端に添して。宿所へ送り給はらば。鄙語にいふ六道の。衢で佛に遭るに似たる。わらはが爲に慈悲善根。こよなき功德ならんかし。妾は名を夏と喚れて。宿所は三條大橋のあなたに侍り。借屋住ひの無造作なる。留守するもの丶侍らねど。母屋は名たゝる酒樓にて。いと熱閙しき商賈なるに。背門の地尻がわが宿なれば。さる用心にも及ばず侍り。いと不樂しくは侍れども。東道儲は母屋より。執運してまゐらせん。けしうあらずは立よりて。憩せ給へ。と他事もなく。いふは津に舟ながら。虚とは乘らぬ瀨十郎は。應かねつゝ沈吟して。そは歎しきすぢながら。彼瓜田に履。李下に冠。人の疑難の影護さに。弱き婦人と一傘。さす方ありとも送られんや。といふをば聽かずうち笑みて。そは宣はするとなれども。人視多かる白晝ならば。影護き事もあらんを。小歇は今になつの雨。夕こえ行かば途にて暮ん。枉て救はせ給ひね。とかき口說つゝ果しなき。折から瀨十郎が從者は。粟田口にて借得たる。簑笠を身に著て。雨衣木履傘を引提て頻りに走り來つ。這十字堂を忘れてや。行過んとする程に。瀨十

にもあらぬ。胸のみ頻りにうち騒れて。問よるべくもあらざりしを。女子も亦瀬十郎が。傳まからぬ男子風流に。はやくもこゝろありげなる。秋波に見てうち微笑み。やよ殿。是方へ入らせ給へ。其處は濕吹の被るべし。けふは朝よりよく晴たるも。虚憑めにて侍りきと狎々しげにものいひし。聲は宛鶯の。初音に似たり。春ならで。春の心の動き初し。瀬十郎も又見かへりて。嘻おぼつかな。おん身も亦。こゝに霽間をまつにやあらん。從者を倶し給はずやと問つゝ身邊に立よれば。女子も有繋に耻しの。森の木葉歟もみおすする。顏を背向て。さればとよ。妾は大津に所要ありて。きのふ彼處に赴きし。かへるさに侍るかし。伴なる男の侍りしかど。渠は衣裳何くれの。物とり集めて後より行ん。といはれしにうち任して。獨いそぎし甲斐もなき。臂笠雨に路去りあへず。往還稀なる十字堂に。立も鎖さん日の惜くて。心細さは限りもなかりき。かゝる時とて憑しく。言問るゝも他生の縁。一樹の蔭の笠宿り。おん身の御坐す程は。心つよく侍るめり。何處の殿にてましますぞ。おん從者は侍らずや。と問かへされて瀬十郎は。よに笑しげにうち頷き。吾儕は二條の邊なる。某甲殿の家臣なり。從者なきにあらねども。傘を借せん爲に。粟田口まで走らしたるが。いまだ借得て歸來ず。おん身も京の人にやあらん。ちかき比東なる。太田持資入道が。いそがずは。濡ざらましを旅人の。迹より晴るゝ野路のむら雨。とよみたる如く。且く俟ば霽ぬべき。雨にはあれど程もなく。暮かゝる日をい

はれどこゝも亦。おなじ菩薩の利益にこそ。有がたきまで尊や。と霎時本尊を伏拜めば。瀬十郎もこれを見て。彼太山に貨わり。貨に心なかりしもの。これを得る。と老氏はいへり。こは細小なる物なれども。時に取ては千里の駿足。圖らざりける大士の冥助歟。寔に奇なり妙なりけり。とく出給へ。といひかけて。先に立つゝ傘を。披く轆轤の出納牙。かたき郎にあひ形の。草鞋を其處に脱棄て。足駄穿つゝ立出る。阿夏が迹へ折介は。立替りつゝ取揚る。裏附草履うち合し。主の牛履共侶に。二雙抓みの作態を。見かへる阿夏は手を抗て。憚さまや。とばかりに。夕暮近き野路の雨。おもふ郎と相合傘の。人視罕なる横頻吹。濡ぬ先こそ今はしも。厭ひはせじな百稔の。露の命よ君が爲に。照る日の岡も數ならぬ。雨は今宵の媒妁と。思へば娛し傘の柄の。手に手をやをらどり部山。吉田黒谷横に見て。辿る凸凹高足駄。路の泥土も苦にならで。後の歎きはしら川橋に。倘秋風は吹ざりし。阿夏瀬十郎が惡因縁。むすび初たる賀茂河の。水溢さじと思ふ事。胸にたゝえてまだいはぬ。維摩の悟道墮落して。渡る三條大橋の。袂涼しく暮果て。稍その宿所に著にけり。登時阿夏は遽しく。懷紙の間より。鎰とり出し門の戸闔て。走り入りつゝ火を鑽て。はや行燈に移す程に。瀬十郎は門邊より。告別して去んとするを。阿夏はやよ。と呼被て。袂に携掖留め。思ひかけなきおん庇陰にて。足も汚さず濡もせで。かへり著ぬる歡びを。得述ずしてこの儘に。果敢なく還しまつらんや。家路を急ぎ給ふとも。

郞ヤヤと呼返して。やよや折介。侯不樂たり。見よ。この婦人はわれより先に。こゝに雲間をまつ雨の。甚惜に歇まで。暮るゝに近かり。三條わたりの宿所まで。相傘を借んといはる。斯と知らば傘を。彼處で二柄借せんに。今にしてはその甲斐なし。といふに折介はと見かう見て。そは痛ましき事になん。些は細雨になりたれば。おん傘の片端を。貸給ふとも共侶に。濡させ給ふ事はあらじを。ともかくもして誘給へ。といひつゝ袱に包たる。雨衣をとり出すを。瀨十郞推禁めて。現汝がいふごとく。既に細雨になりたるに。雨衣被てはいよ〳〵暑かり。そはその儘に包みて持ね。よしや濡るとも麻衣の。袂涼しくならんのみ。喃阿夏とのとやらん。今さら捨ては去がたき。便路なれば送るべし。さばれ足駄をいかゞはせん。われは跣足でゆかんのみ。折介それをまゐらせよと。いひつゝ袴の稜とり揚るを。阿夏は急に推禁めて。そは物体なき事に侍り。傘の庇を假初ながら。送り給はるそがうへに。おん身の足駄をいかにして。妾が穿ていなれんや。思ひもかけぬ事にこそ。と推辭つ軈て遽しく。裳褰げて副帶を。締易んとする程に。折介は獨笑して。女中且く等給へ。あの片隅の小暗き處に。女子の足駄一雙あり。這御佛に詣し者の。置遺れし歟。脫捨し歟。そはともかくもあれ。蠟塗足駄の已時なるに。玄かも革緒で阽氣なし。いざ〳〵。と眞實たちて。取出しつゝ推直すを。阿夏は見つゝ含咲て。こは思ひかけざりき。物怪の幸で侍るかし。この年來清水寺の。觀世音を信じ侍れば。地方か

つ。四下を見るに這矮樓は。席薦六疊を布設たる。東のかたに置床あり。次の間はそが半にて。夜物を斂る料にか。棚架なるべし。二枚の。蒸襖を建たるが。柱には櫻の花笠。牡丹の扇笠爾三箇と。近属より世間に弄ぶ。三弦胡弓なンどを掛たり。かゝれば這女あるじは。絃管をもて世を渡る。歌伎ならずは儛姫ならん。とやうやくに猜するのみ。まだ詳なる事を知らず。却說阿夏は酒肴を。しば〳〵矮樓に運び登しつ。思へば奇しきおん緣しにて。今より親しくならせ給はん。見參のはじめに侍れば。いと恥しき欵待に。御足を駐めまゐらせし。妾がこゝろは告ずとも。大抵猜し給ひけめ。春花より芳しからん。君が御名こそ聞まほしけれ。いざ〳〵。といひかけて。盃を薦れば。瀨十郎は推辭に由なく。寔に不測の値偶に依り。某のみか從者まで。酒食の饗應にあへる事。過世あやしき歡びなり。今は何をか隱むべき。吾儕は大內殿の近臣にて。陶瀨十郎興房と喚るゝものなり。四月の比より在番すなれば。京師の手ぶりに疎かるを。傍痛く思はれん。女あるじであなるとも。獨居ではなからんに。家內に人しもをらぬ。夜飮に耽るは大膽不敵。罪得がましき事にこそ。といふを阿夏はうち笑ひて。噫ものかたき殿もぞある。妹伕の緣しは出雲にて。神の結せ給ふといへば。迭に胸をうち明て。正木のかつら末ながく。通せ給はん事をのみ。祈るより外はなきものを。うち解給へ。とばかりに。後は口隱る裡羞の。土器ならぬ朱盃に。蒔繪の鶴も雌雄となる。千歲といへど客あるじの。年齡は若の浦

暮果てまだ程は侍らず。枉て且く憩せ給へ。とわりなく留めて放さねば。瀬十郎は又さらに。心よはくて揮も拂はず。そは時宜ならぬ事にこそ。と言にはいへど阿容々々。と引れて上座に坐を占れば。折介も笠を脱て。框に尻をかけており。有右而阿夏は背門に立て。掌をうち鳴らせば。母屋より應と答て。一箇の小廝の走り來ぬるを。そが儘耳を捩よせて。如此々々と囁くにぞ。小廝はこゝろ得果て退りつ。時を移さず酒肴を。廣蓋とか唱たる。塗折敷に處陜まで。種々載てもて來るを。障子のほとりに措したる。阿夏は折介を見かへりて。おん身にも薄酒一椀。まゐらせんと思へども。見給ふごとく人手なければ。母屋へゆきて思ひの隨に。たうべたまはゞ幸ひならん。といふを瀬十郎推禁めて。いかでかはその義に及ん。うち捨て措給へ。といふ間に母屋の小廝は。庇間よりうち遶りて。折介がほとりに來つ。いざ案内を仕らん。是方へ來ませ。と誘引ふを。折介はなほ立難て。そは忝き事ながら。殆迷惑仕りぬ。やようち置し給ひね。と陽辭して手を捺むを。小廝はなほも推立して。そが儘母屋へ伴ひけり。當下阿夏は莞やかに。瀬十郎にうち對ひて。こゝは特さら端近かり。矮樓へ登らせ給ひね。といひつゝ軈て燭臺に。火を移し携て。先に立つゝ案内をすれば。瀬十郎は愁に。去にいなれぬいな船の。否にはあらで。思ふ事胸に支る刀を把て。登る階子は戀の山。浮名取川最上川。濡にぞ濡て阿武隈川に。迷ひ初けん道ならぬ。その陸奥の名蹟の。京師にもある心地して。やをら頭を廻し

に掛たる袴を。はや取卸して足踏入るゝ。背後に阿夏が腰板の。紐ふり分て推當るを。手はやく結ぶ二世の縁。憑むや妹と瀬十郎は。懐にしたりける。鼻紙嚢を掻撈りて。方位二枚とり出し。こは聊なる物ながら。酒食の料に。といひかけて。紙に捻りて取らするを。阿夏は受ず推返して。優なる身に侍らねども。財帛に愛て客を惹く。宿遊女には侍らぬものを。さる賜ものはこゝろにず。願ふはそれをおん從者に。取して口を鉗め給はゞ。後々までも障はあらじ。といふに瀬十郎は強かねて。且羞て頷くのみ。然らばその意に任せんとて。刀引提て遽しく。下屋に到る箱階子の。手摺も高き足音に。踏覺さるゝ折介は。稍身を起し見かへりて。慌忙き徐と直す。足駄は雨後の明開。天は晴てもうち濕る。笠屋阿夏が別路の。名殘はをしや鴨河原。情郎はゆく水と。とゞめかねつゝ目送りけり。扨も這笠屋夏は。親の名を續たるなりけり。これが母なりし笠屋夏は。女歌舞伎の大柏にて。大頭といふはなまりなりさて年來四條河原にあり。常に歌舞伎を興行して。生活にしたりしに。應仁の内亂に。洛中も洛外も。兵燹の爲に餘波なく。郊原荒土となりしかば。世渡りの便著なくなりて。初には似るべうもあらず。とかくする程に母の夏は。長き病著に臥たりしより。朝開の烟も病人と。共侶にいよゝ細りつ。今の阿夏が。年二八ばかりなりし秋の比。遂にむなしくなりにけり。是よりしてそが女兒は。母の名を承續て。笠屋夏と喚れたり。歌舞艶曲も容止も。その親に優りしかども。常歌舞伎の句欄絶てより。再

や。蘆の葉濡れて滿潮の。さしつさゝれつ餘念なき。酒は禮に始りて。亂に終る。と莊周が。いひけんも現宜なるかな。男女席を同うせる。飲酒は則色の媒。心猿狂ひ意馬走る。瀨十郎はわれからに。よるとはなしに苧環の。三輪のすさびは酒の過。醉にも堪ず轉寢の。果敢なき夢を結びけり。この時從者折介は。飽までに飲食して。阿夏が宿所にかへり來つ。泥のごとくに醉たれば。框に尻を掛たる隨に。反仰倒れ熟睡して。蚊に刺るゝも知ざりけり。夏の夜なれば短くて。枕に響く明六の。鐘に瀨十郎は驚覺て。後悔すると大かたならず。そのふは主君に願ひまうさで。私に出たるに。昨夕かへらずなりしかば。幸にして咎なくとも。先輩の甲乙が。思はん程も影護し。いかにすべきと搔撫る。額を頻りに病すれば。阿夏もさすがに。慰かねて。あふは別のはじめぞ。と唄ふ曲子は聞ながら。逢ねばすまぬ色の慾。御宿の首尾は今さらに。あし分船の譯立て。繕ふ術は侍らずや。と問ば瀨十郎沈吟じて。武家は門戶の限りあり。凡私要に出るもの。夜を犯して還るときは。咎にあはずといふとなし。さばれ縡に便點を得たり。箇樣々々の所以ありて。吾儕ばかりは日野西殿と。萬里小路殿を訪ひ奉るに。本日夜深てかへるとも。次の日に至るとも。主君の許させ給ふをもて。朋輩も亦この義を咎めず。かゝれば昨夕も日野西殿へ。參りきといはんのみ。斯誘詐るに優とあらじ。といふに阿夏は胸押撫て。さては歡しき事になん。首尾整へて遠からず。使り聞して給ひね。といふ間に瀨十郎は。廚の吊緒

偶介は悔もせず。故郷より推上されし。五才なりける女兒と丶もに。阿夏が宿所に寓りてをり。阿夏は素より好しからぬ。郎なれども受たる恩あり。出ていねともいひかねて。遂それなりに夫婦になりぬ。木偶介は今さらに。賣買せんにも本錢なければ。阿夏が酒讌の席へ召れて。彼此へ赴くをりそが俳優の衣裳を携。三絃箱を肩にして。送迎をしつるのみ。これ將親子三人の。衣食に事足るべくもあらねば。阿夏は暇ある毎に。木偶介が携子なる。女兒に舞踏を誨などして。その名を小夏と喚做たり。然程に木偶介は。米薪の竭んとするとき。阿夏を招く花主なければ。已ことを得ず小夏を將て。四條河原に立消し。小夏に舞をまはさして。その身は沒箸笛を吹き。細要目鼓を鳴らし。纔に錢を得てかへりて。親子の口を餬ふ日もありけり。有之程に隔昨日は。大津なる良賈の家に。賀の酒宴ありとて。音曲の爲に阿夏を招きしかば。阿夏は女兒を伴ひて。木偶介に衣裳三線箱なんどを背負しつ。その家に赴きしに。その終夜の酒もりに疲勞れて。きのふの亭午まで彼處にをり。辭し去らんとせし比に。小夏は腹の痛むとて。厠かよひに時の移れば。阿夏は木偶介を遣し置て。小夏が痊り果るをまちて。將てかへり給へとて。ひとり家路へ急ぎしに。御廟野の邊にて。夕立雨に笠やどりして。圖らず陶瀬十郎に邂逅しつ。木偶介も小夏も。その宵はかへらじと思ひしかば。わりなく瀬十郎を宿所に留めて。事の其處に及べるなりけり。色は思念の外とはいへど。阿夏は素より艶曲歌舞もて。生活とな

興すべくもあらねば。或は俳優。或は糸竹の技をもて。富る家の酒宴に招れ。吹鼓舞奏つゝ。壽を述興を添るを。活業にするなりけり。爾るに。母の夏が世にありし時。伊勢なる安野津の商賈に。末松屋木偶介と喚るゝもの。年毎に京上りして。貿易を宗とする程に。今の阿夏に眷想して。これが爲に錢鈔を費すと。いくそばくそなるを知らず。さばれ阿夏は木偶介が。男態田舍備て。面の色如赭く。眼圓に。脣厚く。鼻は左右の頰まで開きて。田樂能の獅子頭に。相似たるを忌嫌ひて。風なき門の垂柳。靡くべうもあらざりしを。木偶介はなほ懲ずまに。櫻が下の蘿蔓。綾に纏縁思ひをよせて。舊里へ立もかへらず。有如之程に阿夏が母親は。病著に臥たるより。衣食住の三が一つも。資るものゝあるとなければ。況藥劑の價などは。かき集めても藻塩草。足らぬ世帶に困じたりしに。木偶介よろづを賄ひて。藥種も價直貴きを厭はず。晝夜となく存問て。資となると大かたならねば。阿夏は恩義の枷を被られ。親の爲に。疎しき。郞と枕を並べにけり。この時にこそ木偶介は。年來の本意を遂て。いよゝ活業は手につかず。阿夏が母の身まかりては。送葬の事。七々の法筵雜費も。總て木偶介が嚢中より抓出せば。物とゝのはずといふとなし。限なき情慾の爲に。限ある貨を喪ふ。これらの所以に本錢はさらなり。舊里にも京師にも。遺るはその身と借財のみ。伊勢の津なる家も庫も。古借の債に沾取られ。妻子の離別せし時に。幼稚き女兒を括着られ。從僕東西に去て。親戚義絕に及びしを。木

かわる。そは次の巻に説分るを聴ねかし。

近世説美少年録第一輯巻之二終

す手弱女なれば。操を扇の松に倣ふ。貞實節義に疎しとて。咎るに足るものならねど。陶瀬十郎は陪臣にこそあれ。采邑幾萬貫か領したる陶遠江守致房が子なるに。路の柳橋の花に。甚なれば心迷ひて。人の譏を思はざりけん。過世あやしき惡縁なり。閒話休題。却說瀬十郎興房は。その日管領邸にかへりても。阿夏が事のみ心にかゝりて。遺れんとするに忘られず。渠は絃管をもて世を渡る。歌妓ならんとは猜せしかども。家の内に人なかりしも。こゝろ得がたきとになん。ふたゝび行て問ばや。と思ふものから左に右に。勤仕に暇なかりしかば。五六日を過す程に。有一日相番の甲乙と。江湖上の話說の序に。瀬十郎はそれとはなしに。三條大橋の西町に。如此々々なる美女ありと聞にき。渠はいかなるものやらん。と外がましく諮るに。その人々含笑て。そは笠屋夏が事なるべし。素是渠が母親は。女歌舞伎の大柏なりき。今の夏もその技に。堪能の聞えあり。箇様々々の義によりて。末松木偶介といふ。醜郎と夫婦になりたり。又小夏とか喚れて。年五六可なる小女兒あり。そは木偶介が携子なり。夏が事は世に隱れもなきを。今まで知らぬは疎鹵にこそ。渠はやごとなき方さまにも。召るゝとありと聞ね。況市人の富るものは。渠を飲酒の敵手にして。艶曲を聽歌舞を觀るを。最上の樂とするなれり。但我殿ざまのみ。管領の重職にをはしませすなれば。俺們だにも世に憚りて。渠等を得て招かぬなれ。と正首に說示しけり。畢竟瀬十郎。阿夏が素生を詳に知りて。又甚麼なる話說

へるとを得ず。阿夏がさぞな俟やわびん。と思ひつゝ又その夜を明すに。小夏が病着稍差りて。はやく宿所へかへらんといふ。起出て見れば天は明たり。早飯果て木偶介は。あるじ夫婦奴婢等にも。歡びを述別を告げて。きのふ阿夏が遺し置たる。衣裳三絃箱なンどを。袱に包み背に負ふて。小夏を先に立しつゝ。急ぐとすれど小兒を倶したる。ゆくて三里の路果敢とらず。巳もはや半過る比。親子宿所にかへり來て。綷如此々々と阿夏に報るに。阿夏は竊に瀬十郎が。事のみ思へばよくも得聞かで樹に竹を接ぐ應答を。木偶介は訝りながら。情由を知らねば詰りも問はず。昨夜かへらで俟せしを。恨みにけり。と思ひけり。これより後は幾日も〱。阿夏が生活暇ありて。疎きはさらなり親しきも。招く花主のなかりしかば。木偶介は又小夏を將て。四條河原に赴きつ。吹鼓し儛踏らして。僅にその日を送る程に。夏は過て秋もはや。八月中浣になりにけり。棚に物措く商賈だにも。大かたは暇ある。杪枯比の事にしあれば。河原に入歩留らず。物觀る人の稀になりては。木偶介小夏は錢を得取らで。むなしく歸る日の多かれば。舞の衣裳を典などしつゝ。薪炊の代となすものから。阿夏はそれを憂とせで。只瀬十郎が事のみ。牡鹿の角の束の間も。忘らればこそ物おもふ。天を瞻めて送る日の。門の柱に身を倚せて。立盡せども來ぬ人を。松吹く風の便りすら。只一遍も聞えねば。果は怨みてうち歎く。わが身ひとつの秋ながら。なほ捨がたき扇あり。此は是いぬる比瀬十郎が腰にしたるを。別るゝとき

近世說美少年錄第一輯卷之三

東都　曲亭主人編次

第五回　綠巽亭に蛇孽胎に憑る　千本畛に兇徒命を喪ふ

再說陶瀨十郎與房は。朋輩の話說にて。阿夏が素生云云と。聞傳て肚裡に思ふやう。わが推量に違はずして。渠は名たゝる歌妓なりき。遮莫財をもて。側室妾に娶るとも。かたくもわらぬ事ながら。とばかりならで良人あり。子さへあるものならんにハ。處々とゆく處にあらず。然りとも知らずいかよひ路の。數累りて禍を。惹出すとなからずやは。他の馬には乘るべからず。人の妻には親むべからず。只情を割き慾を制めて。離隔るに優とわらじ。と深念をしつゝ爾後は。天飛ぶ雁の翅に寄する。毫の便りもせざりけり。表話休題末松木偶介は。日大津に居遺りて。ひとり小夏を看とりしに。小夏が病着早に愈ねば。その家のあるじ夫婦もうち驚きて內藥を與へ。昨夕の臥房に臥さしめて。奴婢をかはる〳〵に隷措けり。とかくする程に夕立の。雨さへ大く降そゝぐ。その日も果敢なく暮しかば。木偶介は三條なる。宿所へか

の細かるを。鰤九郎はよく知りて。米を贈り薪を遣し。月毎の店賃も。取らぬを取れり。と親には告て。いと憑しくものせしかば。俗にいふ棄る神あれば。又補けざる神なし月の。夜の衾も喪はで。親子爐による冬構。きのふと送りけふとくらす。阿夏はさしも戀慕ひぬる。瀬十郎が事はしも。忘れたるにあらねども。物ましさと鰤九郎に。引るゝ袖を拂難て。靡けばこゝにあれ初のごとく。うちも歎かずなりにけり。案下某生再說。陶瀬十郎は。君父の爲に身を愼みて阿夏に音耗をせざりしより。寒暑はやくも代謝りて。十月の上浣になりぬ。かゝりし程に。一日日野西兼顯卿より。消息を贈り給はりしを。受戴きて披見るに。嵯峨なる予が山莊の丹楓八入に染て。その色既に濃に過たり。霎雨にあはゞ掲散るべし。いかで翌足下と共に。百首題をよまんと欲す。未後より彼處に來會せよ。上客は萬里小路賢房卿以下。兩三友に過ず。この義京兆に請まうさば。障りあるべくもあらずかし。怠慢遲滯なからんとを。惟祈る。と書せ給へり。瀬十郎歡びて。乃者勤仕に暇なくて。久く彼卿を訪ひ奉らず。心苦しく思ふ折。かゝる佳會に招せ給へば。いかでかは猶豫せんやとて。霎時宿所におん使を。俟して主の義興に。よしを告げ免許を得て。報翰をまゐらせけり。却說陶瀬十郎は。次の日嵯峨なる兼顯卿の。山莊に赴きしに。あるじの君は先たちて。こゝに來まして俟給ひしかば。軈て召入れて對面しつゝ。別後の情を述給ふ程に。賢房卿も訪來給ひて。おなじ圓居に入り給ふ。この餘兩三箇の殿上人

に遺れしなり。且その扇に一首の歌あり。いと徒然なりし折の。筆すさびにやとおぼしくて。夕立のはれ間〱に苔むして。かはかぬ檐にかよふ秋風。興房とぞしるしたる。草書の美しさ。人柄見えていと愛たし。阿夏は歌をよまねども。左さま右さま思惟るに。ゆくりなくも彼人に。あひ初し日は夕立の。避雨の折なるに。歌のこゝろも自然に稱へり。加旃下の句に。乾かぬ簷にかよふとあれば。只一回の緣しならんや。後にあふ瀬はあるなるべし。とは思へども心にかゝるは。あきかぜの四言なり。されば古歌にも。夏果る扇と秋のしら露と。いづれか先におきふしの床。となん。野上の斑女がよみたるを。謠曲にも載られたれば。靜心なきわが身すら。聞得て今の歌を思ふに。郎のこゝろに秋風の。はやくも立といふ兆歟。それかあらぬ歟。とばかりに。安からぬ胸は有也無也の。關ならなくにうちあけて。憂をやるせはなきものから。紀念の扇は身をしも放さず。人なき折にはとり出し。うち披き膝に措て。見つゝ吟じつ又さらに。果しなげきを慰めけり。不題。木偶介が擬屋のあるじは。京に名たゝる庖丁戸にて。家號を池澄。名を龜六と喚れたる。そが獨兒の鯽九郎は。今茲二十五歳になりぬ。色黑く肥脂滿たれば。よき男にはあらねども。色好みの癖なれば。早晩阿夏にこゝろ惑ひて。思ひをよせ情を運ぶを。阿夏は臈䐗く思へども。有繫に母屋の息子なれば。強顔くは答を得せず唯成る如く成らぬが如く。逼るを外して月ころを過せしに。秋よりしては去歲に似ぬ。阿夏が生活間わりて。朝の煙

任して。共に酔を盡すべし。この義はいかゞ。と問給へば。賢房卿も瀬十郎も。素より望む所なれば。誰か亦異議すべき。しかるべしとぞ答ける。有此而酒醼はじまりて。盃しば〳〵巡る程に。兼顯卿又宣ふやう。酒ありといふとも佳肴なきは。東道するものゝ罪なり。某既にこの罪を得たり。さばれ佳殽なしといふとも。佳人ありて酌を秉り。且歌曲もて興を添なば。罪ゆるさるゝこともやあらん。誰かある。折こそよけれ。彼もの召べ。といそがし給へば。近習の侍こころを得て。承りつ。と應けり。且くして。いと艶妖なる一個の女子の。風俗浮世めきたるが。件の近習の後に跟て。外面より來る程に。更に阿容たる氣色もなく。明るゝ隨に緣頰に。うち登り額をつきて。上つがたさまいよゝますく〳〵。おん恙なくましまする事。いと歡しうこそ。といふ。姿辭も愛敬づきたる。さこそと思へど問も遲く。うちも傾がで在りけるを。兼顯卿見かへりて。喃賢房卿。渠は名たゝる白拍子にて。槐門貴介の公子にも。招れてまゐりし折。某もその席上にて。聊相識ることを得たれば。君にも知られたるならん。目今も賠請たるごとく。酒ありて佳肴なき。罪を贖ふ料までに。召よせて候なり。おんゆるしを蒙りて。近く侍らすべうもや。と眞實だちて問給へば。賢房卿はつく〳〵と。見つゝ莞然とうち笑て。寔に渠は或かたにて。某も相識れり。妙音にして妙手なる。何ものかよく渠に優べき。おん管待の叮嚀なる。佳肴よしといふべからず。然るを添るにかくのごとき。佳人をもてなし給ふと。意外に出たる幸

は。障るとありとて。來給はずなりたれども。辭敵は客あるじ。這三人にて足れりとて。兼顯卿は先に立て。假山のほとりなる。綠巽亭に誘引給ふ。この別莊は應仁の。兵燹を脱れたる。現塵外の良園なり。宗と栽られたる丹楓葉の。曲濱に落浮るは。龍田の川も外ならず。むかし京極黃門定家卿の。小倉山なる山莊も。かくありけんと思ふ可に。牝戀ひ後れし狹牡鹿の。鳴聲遠く聞えけり。亭は四間と三間を。二房に分ちて方爐あり。坐右には料紙硯と。些の調度を置れしのみ。あるじの儉素も亦愛たし。有右而賓主の坐定りて。晤譚の間々に。瀨十郎は彼此と。頭を回らしつゝ。樹々の梢を瞻仰るに。眞紅なるあり薄紅あり。黃なるあり黃黑なるあり。そが中に。青葱として綠なるは。常葉樹のまじれるなり。彼甘谷に濕すといふ。蜀錦を被たるにあらずば。便是。蓬萊五色の雲かと疑ふ。秋色の目に美しく。秋情こゝに閑なり。然程に。給仕配饍の童扈從等。割籠土器をもてまゐりて。席上に安排べたり。登時兼顯卿は含笑ながら。賢房卿にうち對ひて。けふの圓坐は多く得がたし瀨十郎も聞候へ。豫ては百首の題をわかちて。歌をよまんと思ひしかども。昔定家卿の。小倉の山莊に押れたる。色紙も皆是古歌にして。自巳の歌は一首のみ。然るを淺才薄學なる。吾儕が分際で。幾百首よめばとて。人に聞する歌は得がたし。かゝれば只清談して。盃を巡らすこそ。眞の保養といふべけれ。席上尊卑をわかつとなく。官を語らず。米錢を談ぜず。或は歷世名人の得失。或は江湖風流の事。舊說新聞才に

おん留守なるもの共より。おん宅書をもて稟來しにき。いかゞ相計候はんや。と報るに兼顯卿眉を顰めて。そは忽にしがたき事なり。直に殿下に參上して。おん承に及ふべし。とせわしく聞え給ひしを。賢房卿うち聞て。某もいぬる比殿下の問せ給ひし事あり。稍考索を得たれども。まだ報まうさでうち過にき。かゝれば亦某も。共侶にまゐるべし。月に叢雲花に風。可惜佳會を得果さぬも。盈しめずして虧くの義なり。然はあらずや。と潜めきて。相譚給へば。うち頷きて。和君はけふとて殿下より。召せ給ふにあらねども。某と莫逆の。友たるよしを豫てより。殿下のしらせ給ふをもて。語次に噂あらば。後に便なき事もやあらん。かゝれば強ての處に。留り給へともいひかたし。同伴の義は貴意に任せん。先はや准備をし給へ。と應て又瀬十郎にうち對ひて。猛に障りのいで來しよしは。目今聞れたる如し。日は暮れ燭を秉るに至らば。豫ては足下をそゝのかして。細腰鼓を播すべく。夏が本寧の舞を觀ばや。と思ひしをいかがはせん。といひつゝ外面をうち仰ぎて。短景既に傾き盡して。下晡になりたれども。轎子を飛して彼處に赴き。又轎子を飛して歸路を急がば。遲くとも甲夜の程。初更前後には歸來つべし。かくて又夜と共に。遊び曉さば樂しかりなん。夏共侶に候ねかし。と正首に示し給ふを。瀬十郎は聞わへず。仰では候へども。是處と彼處は近くもあらず。殿下に見參し給ふて。御長談に及はせ給はゞ。ふたゝびこゝに來まさん。と思召すとも更闌て。そらだのめにこそなるべ

ひなり。やよや女子。進めよかし。と招せ給ふに辭ひかねたる。白拍手は又額つきて。爾らばゆるさせ給ひね。と僅に膝を進めつゝ。瀨十郎が。背のかたに。坐るを見かへる瀨十郎と。思はずも面をわはして。迭に欻。と驚くまでに。心慌て。陶ぬし歟。阿夏なる歟。とはかりに。背向になりて口隱る。顏のもみぢは庭面なる。樹々よりも色增りけり。今この男女の爲体に。情由ありけり。と猜し給ふに。兼顯卿も賢房卿も。呵々とうち笑ひ給ひて。瀨十郎は四月の比より。在京すなればそこらの事に。疎かるべしと思へるに。はやくも夏を知りたるな。由斷のならぬ漢にてそ。と調戲給へば瀨十郎も。阿夏も俱に困じ果てこの席上に穴あらば。入らまくほしと思ひけり。當下兼顯卿は莞やかに。瀨十郎さのみ羞るとかは。嚮にも旣にいひけらし。この席上は尊卑の禮なし。浮世に遠き山莊なれば。歌僊艶曲を聽まく欲する。俺們にやは憚りあるべき。さばれけふまで初心なる。面色したる罰盃は。脫るゝ道のなからんに。二ツも三ツも傾けて。夏にさしね。と浮給へば。賢房卿も笑坪に入て。宣ふ趣寔に爾なり。此彼共に介意せで。やようち解て酒を喫むべし。やよ〳〵。と薦め給ふを。瀨十郎は辭するによしなく。盃を受二度傾けて。軈て阿夏にさしにけり。是より席上亂酌して。その興闌なりければ。主客歡びを盡す折から。近習の侍緣頰のほとりに來て。兼顯卿に稟すやう。今日關白殿下公補房より御館へおん使を進せられて。猛に御對面を欲し給へば。早の御來臨を俟せ給ふとなり。この義

來ず。四下に人のなくなりし。阿夏はやをら背より。郎の袂を掖動かして。畸瀬十郎ぬし。薄情にも程こそあらめ。雲にも山を見な月の。野路の御堂に笠やどり。利生は千手の汲引にて。其處に初てあひ合傘の。濡れて嬉しき夜の雨。辛崎ならで三條に。渡せる橋は長かれど。短夜明て起別れ。後のあふ瀬を身ひとつに。まつとしいへどかへり來ぬ。君ゆゑにこそわが胸の。左に右く須磨のうらやさん。理なき願ひを掛向は。恐惶き神にも佛にも。祈禱してこの頃は。病を生平なる身の痩り。おん身の目にはまだ見えずや。宿所は豫て知りながら。音耗がたき管領の。御館といへば憚の。關に嘘音は立ざりし。八聲の鷄をひとり聞く。寤寐不樂しくうれはしく。幾夜曉してゆくりなく。ふたゝび相見るのみならで。首尾さへ夜間の人影なき。こゝで怨をいはずもあらば。何日か岩間の遣水。今まで忘れ給ふとも。あふての後も顰顏きは。心つよし。と聲立て。泣つ口說つ堪かねて。胸前拿て引よする。白く手弱き拳のうへに。たばしる雨は涙なり。瀬十郎は理り。と思ひながらもやうやくに。引放ちつゝ嗟嘆に堪ず。衣領搔合して。やゝ阿夏。人木石にあらざれば。われとてもいぬる夜の。假寐の夢を忘れんや。一日も胸に絶ずもあるを。故意音耗をせざりしは。おん身には木偶介とかいふ。良人あり子もあり。とわれ人傳に聞けばなり。よしや浮たる技をもて。浮世を渡る手弱女なりとも。ぬしあるを猶密にあはゞ。舅父にも世人にも。何をもてこの身の越度を。いひとくよしのあるべきや。死すと

けれ。願ふは亦某等も。身の暇を給はりなん。今宵に限るとかは。と固辭むな兼顯卿推返して。それは遠慮に過たるとなり。この頃は夜の長かるに。彼處で時を移すとも。かへり來ん事易かるべし。足下は天明てかへるとも。京兆に乞まうして。わが方に來にたれば。させる咎のあるべくもあらず。夏も如右こゝろ得て。從者あらば俟するも要なし。それらは返して翌の朝。迎へに來よといふこそよけれ。枉てこの議に從ひてよ。と辭せわしく諭し給へば。賢房卿も共侶に。あるじの君のかくまでに。宣はするをいかゞはせん。不樂しかるとも霎時の程なり。夏とゝもにまちねかし。急ぐとかは。と期を推して。留め給へば瀬十郎は。ふたゝび固辭によしなくて。御意に從ひまつらん。と應てそが儘留りけり。然程に。兼顯賢房の兩卿は。猛に從者を促して。急ぎて關白家へまゐり給へば。給事に侍し青侍等は。各主の作に立て。こゝには僅に一兩箇の。男童を遺されたり。この餘は年來耳房に住る。園吏夫婦あるのみ。忽地人影すくなくなりて。日は垂暮とする程に。阿夏が衣裳を携て。倶して來たる木偶介は。園吏の宿所にをり。緣由を傳聞て。さては阿夏は翌ならでは。得かへさせ給ふまじけれ。獨宿所に留守さしたる。小夏が事の心にかゝれば。翌の朝出なほして。迎に來め。といひ措て。はや三條にぞ還りける。とかくする程に。冬の日はやく沒果しかば。童屬從等は彼此と。坐席に燈燭を點しなどしつ。且くこゝに在りしかぞ。寂寥々しさに堪ざりけん。園吏の宿所に退りて。爾後は出て

は夕立の。雨の霽間のありぬども。涙の雨は小歇なく。乾かぬ袖の苔蒸すまでに。かよふ心を得ぞ汲まぬ。おん身ははやくあき風と。なり果てかう強面くは。樂しくもあらぬ世の間に。存命て何にせん。よるべは絶し柴舟の。こがれ〱て死んより。今面りに身を勞きて。赤心を見せまゐらせん。南無阿彌陀佛。と唱へも果ず。傍にありし瀬十郎の。刀を手はやく引よせて。拔放さんとする程に。吐嗟。と騷ぐ瀬十郎は。抱き禁めて。やよ阿夏。短慮なるとし給ふな。彼木偶介は寓居人にて。おん身が眞の良人ならずは。わが罪輕くなるに似たれど。われは武弁の家に生れて。周防には二親あり。京師には主君をはしますなるに。この身の謹愼疎ならば。忠孝兩ながらその方缺て。戯けきものといはれんのみ。有斯者あふ日の罕なりとも。迭にこゝろ變らずは。久後たのもしく有ぬべし。されば古歌にも。年毎にあふとはすれど牽牛織女の。ぬる夜の數ぞすくなかりける今宵は下界の天乃河。又來る秋を契らんのみ。疎むとな思ひ給ひそ。と慰められて姥捨の。月の夜許呂と表裡なる。阿夏は怨稍解けて。然る御こゝろであらんには。よしやあふ夜の稀なりとも。おなじ京師の月と花。北山の雪。河原の避暑。暑し寒しの折々に。そよとの風の音信を。田面の雁の翅にも。便聞して給ひね。と繰返したる苧環の。より漲易き舜午花も。一ト盛なる諸蔓。迷ひぞ色の花なりける。却說這男女二人は。會話に時移りて。人定ははや過たれども。兼顯卿も賢房卿も。再こゝに來給はず。彼男童等は退りし儘に。

も汚名を雪めがたき。愆しつ。と心つきては。ふたゝびあひ見んことを欲せず。われからわが身を戒めて。遠離りしは今さらに。情をしらぬに似たれども。おん身の爲さへ思ふ實情。只一宵の縁しなりき。と思ひ諦めなば恨みもあらじ。聞わき給へ。やよ喃。と背捻りて寛解れども。阿夏は聞かず頭を掉りて。理りめかして云云と。いひわきをのみし給へども。男をみなの情の爲には。身をし忘れて共侶に。命を捨たる者多かり。況寔ふ木偶介は。良人にして良人に侍らず。寔をあかせば小夏といふ。女兒とゝもにわが宿の。寓居人で侍るかし。さればこそ月比日ごろ。妾が細き糸竹の。技もて養ひ侍りにき。そは舊恩に報へるなり。有如之者おん身と情由あるよしを。彼人はやく知らば知れ。妾は何とも思ひ侍らず。然るをいはんや。まうさんや。おん身のうへに一毫も。事あるべうはあらずかし。これらのよしをよくも得しらぬ。人語をのみ眞に信て。妾を疎み給ひしは。いと淺はかに侍るめり。とてもかくても過世より。結びし縁しなればこそ。果敢なく別れし後朝に。遺れ扇はおん身の手迹。おん身の歌を像見ぞ。と見つつ愛つゝ深雪ふる。こしに放さぬ冬の日の。今宵あふぎの歌占は。現憑しきものになん。僞りならぬ證には。これ見て疑ひ散してよ。と披きて示すは興房と。正しく識せし自筆の咏歌。舊のしら地にして欲しき。筆の科ぞ。と夕立の。はれ間〳〵に苔むして。かはかぬ褡にかよふ秋風。現さる事もありけるよ。とふたゝび驚く瀬十郎を。なほ恨しげにうち向上て。わが初し日

障るを。怪しと思ひて又よく見るに。いと大きなる蛇の。阿夏が腰を卷締て。頭を擡げ舌を吐きて。胸下を舐りてをり。瀬十郎はこの光景に。暫時も得堪ず吐嗟とばかり。一聲叫び苦む隨に。仰反倒れて息絶けり。阿夏は今瀬十郎が。叫びし聲と倒るゝ音に。駭覺て身を起しつゝ見れば瀬十郎は轉輾びたる。面色さながら土のごとく。拳を握り齒を切りて氣息は既に絶たる似し。こは淺ましや。とばかりに。慌迷ひつ抱き起して。呼活ると幾聲となく。果は枕邊に措遣れたる。茶碗の冷茶を吹被るに。瀬十郎は云と噫きて。漸くわれにかへりつゝ。頭を回らし四下を見て。阿夏は恙なかりし歟。と問ふに阿夏は背を捺りて。晴瀬十郎ぬし。心を慥にし給ひね。妾に恙あるべしやは。おん身は魘れ給ひし歟。所以こそあらめいかにぞや。と問かへされて瀬十郎は。ふたゝび息を吻とつきて。されば也よ聞給へ。嚮にわれはひとり覺て。淨手せんとて厠に發しに。紙窻の隔子上に。白き小蛇のをるを見たり。わが性蛇を嫌ふをもて。走りてこゝにかへり來つるに。二八可なる美少年の。おん身と添臥したるあり。怪しと思ひて猶よく見るに。彼美少年は消失せて。おん身は熟く睡りたり。こはわが心の惑ひにこそ。と思ひ捨つゝ衾を褰て。共に睡らんとする程に。いと大きなる蛇の。その色は白かりし歟。青かりけん歟。よくも見ねど。おん身の腰を卷締て。ありともしらず搔抓みにき。われは幼稚きころよりして。性として蛇を嫌へば。曩に肥後なる阿蘇沼にて。主君の蛇穴を燒給ひし日も。猛に病痾に假托て。

其處に假寐やしたりけん。園吏はその職ならねば。この亭上に出て來て。瀨十郎阿夏等を。諾慰るともなくて。深ゆく夜間の膚寒ければ。阿夏は瀨十郎を誘ひ立て。次房に退くに。こゝにはいと大きなる華氈。三四枚措れたり。推ひらきてこれを見るに。その柔さと羅紗にも優たり。是を今宵の衾にとて。軈て布寢の假枕。かさねて夢を結ぶなるべし。現男女閑室に相會て。遂に惑ひなからん事。柳下惠ならざるもの。いとなしがたき所行なれば。瀨十郎は月來の。謹愼忽地空となりて。雲起り雨降そゝぐ。楚臺の快樂に餘念なく。後の患を省るに遑もあらず。されば世の常言にいふ。焦材には移り易き。火と木の相生相歡びて。恰も是漆のごとく。膠にも似たるべし。既にして瀨十郎は。寢るともしらず熟睡しつ。丑三の比ひとり覺て。起て厠に赴きたるに。紙窗の隔子の間に。晃々として光る物あり。紙燭を抗てつら／＼見るに。眞白き小蛇にぞありける。瀨十郎は幼稚きころより。その性蛇を嫌ふをもて。こはいかに。と驚怖れて。走りて臥簟にかへり來つ。と見ればいと美しき少年の。齡は二八可なるが。阿夏と枕を並べて臥たり。あるべき事とも覺ねば。復うち驚訝りながら。睛を定めて再見るに。少年は搔滅す如く。忽地耗てなかりけり。怪しき事いふべうもあらぬを。こはわが心の惑ひにこそ。と思ひ捨て阿夏を見るに。異なる事もあらずして。快げに熟睡をしたり。軈て衾を推襃て。側によりて臥さんとするに。何にかあらんさら／＼と。太くざらめく物ありて。心ともなく手に

御館の門戸開かずは。立わびしくぞあらんずらん。いひ遺せし事なほ多かり。さのみな急ぎ給ひそ。と惜む餘波は。われもかもおなじ思ひに躊躇ひし。瀬十郎は八聲の鷄の。鳴くに驚き復身を起して。告別しつ庭面より。樹の間遶りてあさもよし。木戸あるかたに出てゆくを。阿夏はなほも緣頬に。立曉すまで目送りけり。表話不題。兼顯卿は。賢房卿と共侶に。只管轎子を急がして。關白殿下へまゐり給ふに。途にして日は暮たり。扨まゐり給ゐしかば。殿下御對面ましまして。御示談數刻に及びしうへに。翌は夙めて參内すべき。公務を仰合されければ。更に又別莊へ。赴き給ふ事克はず。是により賢房卿も。われひとり彼處にゆくとも。要なしと辭し別れて。宿所に歸り給ひけり。然ればこの義に時移りて。兼顯卿は子二刻の左側。やうやく歸館し給ふ物から。箇是彼に事の多くて。よしを瀬十郎等に告遣り給ふに遑あらず。天は明なんとする頃に。一箇の近習に奴隷を倶さして。嵯峨なる別莊へ遣し給ひ。瀬十郎に云云と。縡の趣を報知よ。夏には形の如く纏物を。取らして還すべし。と分付給へば。近習の侍こゝろ得果て。急ぎて嵯峨に赴く程に。路にして天は明けり。有此前件の侍は。別莊に走りゆきて。瀬十郎を訪るに。綠巽亭には阿夏ひとりをり。瀬十郎は昨夕甲夜の間に。退りにき。と聞えしかば。只阿夏によしを告て。纏物を取らしつ。直に管領の邸に到りて。瀬十郎に對面して。主命を述傳へ。再別莊に立よりて。盃盤割籠をとり斂め。昨夕こゝに遺されたる。童扈從等を相伴

おん伴に立ざりき。然るを今宵この臥簞にて。大蛇を抓みし事にしあれば。悔しくも昏絶して。爾後の事をしらず。辛くして呼吸通て。見ればおん身は恙もなく。又彼大蛇もあらずなりぬ。夢か現歟。怪しとも。あやしき事でありけるよ。と報るを阿夏は聞あへず。そはおん身の性として。いたくも蛇を怕れ給へば。さもなき物を疑ふて。虚驚きをし給ひけん。みづから思ひ給へかし。今は小春の初旬に侍れば。蛇蝎はみな蟄居して。人に見らるゝ事ははべらず。況臥房に大蛇あらんや。妾は霎時熟睡して。おん身の淨手に起給ひしすら。知らで在りしをいかにして。何物歟身に纏繞るべき。よしもなき事宣ふな。と慰められて瀨十郎は。さもありけんと思へども。騒ぎし胸はなほおち着かで。默然たる程に。淸涼寺の鐘にやあらん。鏗々として近く響く。數僂れば五更なり。登時瀨十郎がいふやう。吾推量に違ふとなく。兼顯卿は關白殿下へ。參り給ひて。夜の深たれば。こゝに來給ふべくもあらで。御舘にかへらせ給ひしならん。爾りともわれとおん身と。こゝに在りて夜を明しなば。傍難遂に脱れがたくて。はやく浮名の立とあらん。今は曉るに程もなし。われは急ぎて御舘へかへらん。おん身はこゝに迎の人を。俟て翌の朝かへり給へ。倘人問はゞ瀨十郎は。中夜の間にかへりき。と答て疑ひを避んこそ。是緊要の便宜なれ。こゝろ得給へ。と咡き示して。身裝しつ遽しく。出る袂を掖留る。阿夏は霎時と推居て。宣ふよしは聞えて侍れど。かへり給ふはなほ速かり。彼處にゆき著給ふとも。

は。一向も得讀がたし。願ふは和解して給ひね。といへば賣卜翁頭を掉て否。今讀て聞すると
も。目今知らるゝとにはあらず。とく〳〵持てゆきねかし。と強面く答へてとりあはねば。木偶介は疑ひながら。宿所にかへりて云云と。阿夏に報て賣卜翁の。書與へたる讖語を見するに。阿夏もいかでか讀得べき。頭を傾け沈吟じて。當るも八卦。當らぬも。八卦と世話にいふものを。今とて知れぬ事ならば。人に問ふともその甲斐なからん。こはこの儘におくこそよけれ。と答て嬰兒の。護身嚢に斂めけり。然程に阿夏が子は。五十日百日と日を歴る隨に。全身やうやく美しく。肌膚潔白にして珠玉の如し。容止さへ母に肖たれば。亦いふべうもあらざりけり。木偶介は愚昏にも。わが胤ならずと思はねば。慈愛むと限りもあらず。おなじくは女の子にして。産ざるとよと呟きて。その子を珠之介と名つけにけり。却說阿夏は瀨十郎許。安產の事如此々々と竊に人をもて報知し。生れし赤子はおん身に肖て。目上に黑子あり。おん身の黑子と一對なれば。親子なる事疑ひなし。悅せ給へかし。と筆にいはして誇りにけれど。瀨十郎は疑ふて。實事なりとは思はねども。そが爲に錢鈔を贈り。衣裳を遺しなどせしを。木偶介はなほ曉得らで只是阿夏を贔屓の財主の。賜ものなりとて歡びけり。然程に。光陰箭のごとく梭のごとく。燕來たり鴈かへる。三稔の春秋を歴にければ。珠之介はよくあるきて。ものいひ習ふ愛々しさは。雛人形にも優したりとて。親はさらなり他人も。愛せざるものなかりけり。

て。西の舘にぞ還りける。是より先に笠屋阿夏は。その詰朝木偶介が。迎に來つるを俟つけて。三條の宿所にかへりしより。更に又瀬十郎を。思ふ事初に倍して。しのび〳〵に玉梓の。使をもて安否を問せ。東西など贈る事もありしを。瀬十郎は固く禁めて。これよりの後月毎に。薪炊の價を資しかば。阿夏は生活に暇ありても。衣裳を喪ふ迄に至らず。左も右もして浮世を渡るに。月雪花の折を得て。瀬十郎が出て來るを。俟わびしとのみ思ひけり。爾るに阿夏は綠巽亭にて。瀬十郎と再會せし。その比より有身りて。姙娠十三个月に及びたる。明年の冬。十月の初つかたに。男兒を産けるに。この夜は巽風吹暴れて。砂を飛し瓦を落す。眞夜中比の屋棟に。頻鳴く梟鴟の聲聞えたり。さればこの時に方りて。阿夏は產の紐を解けり。不祥大かたならざれども。母も子も恙なくて。日比歷る隨肥立にけり。さばれ木偶介は。阿夏が懷胎の人なみならで。十三个月に及びし事。心にかゝらざるにあらねば。一條反橋の邊なる。賣卜者は。百中の妙ありと聞て。有一日彼處に赴きて。その子の爲に本命終始の。吉凶を問けるに。賣卜翁はよしを聞て。蓍を拿り封を布て。霎時考てひとり點頭。硯を引よせ筆を染て。子而非子。非親是親。一窮一達。因果輪々。と書寫して。これを木偶介に授けていふやう。天機は明に漏すべからず。よくこの四句を記憶せば。後に思ひ合する事あらん。秘よ人にな知らしそ。といふに木偶介こゝろを得ず。頭を掻きつゝ左見右見て。いと恥しき言ながら。僕は文盲なれ

顯れしを。四隣の市人さてこそと猜して。商量しつゝ親子の爲に。幾遍となく勸解しかば。龜六やうやくうけ引て。鰤九郎を召返しにけり。然程に鰤九郎は。親の勘當を免されて。京師に歸著きしより。且くは身を愼みて。漫行もせでありしが。吭下過て熱を忘るゝといふ。世の常言に漏るゝとなく。遂に又舊病起りて相識る破落戸等と交る程に。阿夏は四稔前つ比より。陶瀬十郎と情由ある事を。よく知れるものありて。鰤九郎を狠せんとて。渠が産たる珠之介は。瀬十郎が子なる事。誰とて知らぬものなしなど。向火燒て說示せば。鰤九郎は大く怒りて。原來いぬる比阿夏奴が。寐かへりを打て強面かりしは。さる間夫ありし所以なりけり。先その陶奴を結果て。爾後阿夏を殺すべし。と思ひ決めつ瀬十郎を。狙撃んと欲すれども。いまだその面を認らず。このゆゑに管領家の。雜色奴隸に縁を討めて。酒を飲し東西を贈り。遂にそのともがらと。交る事を得たりしかば。外ながら陶瀬十郎を。認るとさへ得たりけり。是により瀬十郎が。微行をしたる日に。途にて撃ばやと尋思をするに。さしも敵手は武士なるに。微行の折なりとも。一兩箇の從者はありけん。然るをわが身ひとつにて。いかにして捷を攬るべき。友垣結びし甲乙は。皆是微力の博徒なれば。かゝる時の援にはたのもしからず。烏部野にをる乞兒等には。心悍く力ありて。武藝相撲に長たるものゝ。落魂たるもありと聞ぬ。いかで彼等に。錢を抓せ。慾より誘引て相譚はゞ。幾人も得易かるべし。縱彼等は一兩箇。返撃になるとても。

かくは阿夏は子に覊されて。思ひの隨に生活に。出ることを得ざりしかども。瀬十郎が資あれば。然とて饑も凍もせず。既にして珠之介は。稍懷を離れしかば。又生活に出ること初にかはりずなりにけり。不題末松木偶介が母屋のあるじ。池澄屋龜六が獨子なりし鰤九郎は。曩に阿夏に眷想して。錢鈔多く費せしに。阿夏はその年の十月。陶瀬十郎と尋會せしより。根柢に優る杪材なければ。敢又鰤九郎を見かへらず。いとも强面くものせしかば。鰤九郎は瀬十郎と。情由あるをまだ知らねども。阿夏が手管にかけられて。空費を遣ひたる。果は冬野の枯尾花。靡くともなくなりぬるを。只管怨憤れども。木偶介といふ良人あるものにしあれば。當面に。いひ罵らんは有繫にて。いかにせましと思ふ程に。鰤九郎が放蕩なる。只この一事のみならで。賭錢を好みて洛外なる。破落戸を友としつ。或は花街かよひして。親の貨財を竊出せし。その事の發覺れたる。折から筋歹き借財の。債彼此より起り來て。親の難義に及びしかば龜六驚き且怒りて。鰤九郎を追出し。遂に京師の住ひを免さず。この故に鰤九郎は。阿夏に恨みを舒るによしなく。和泉の佐界に赴きて。或ときは小料理の技をもて。人の爲に傭れ。又或ときは。燗酒烹魚の夜販などをしつゝ。辛くその日を送る程に。既にして四稔を歷たり。その時又京師には。鰤九郎が父池澄屋龜六は齡六十にあまりしかば。烹炙の技もおもふに任せず。身さへ心の衰へて。惡棍ながら親子の恩愛。折に觸ては鰤九郎を。なつかしく思ふ氣色の。言の葉末に

る。鰤九郎は樹蔭に添ふて。陶が迹より跟て來つ。乞兒等は道中に。横はり列臥して。竊にゆくてを遮りしを。瀬十郎は心いそしき。夕間暮の事にしあれば。臥たる乞丐をよくも見ず。礑と跌きけしとんで。先なる鄙太を蹂躙れば。鄙太は忽地苦と叫ぶを。暗號に衆皆身を起して。瀬十郎主従を。遮り留め抓蒐りて。諸聲高く眼を瞋らし。這阿侍はまだ日も暮れぬに。逢手に目子を著てや措たる。過世歹くてこのざまに。なり果たる俺們でも。親にも踏せぬ五尺の軀を。蹂躙られて堪るものかハ。見よこの鄙太は肋骨を。踏折られにけん腰さへ立ず。夥計の寃家逃るとて。何處へか逃すべき。覺期をせよ。と鬪諍の掛罠。憎しと思へど瀬十郎は。柳に流して些も騒がず。乞丐等にうち對ひて。いはるゝよしは無理ならねど。前路定かに見えざりし。黄昏時にかへさを急げば。こゝらに臥せる人ありしを。思はざりける愆なり。さばれ又爾等も。この道中に横臥しは。人に踏して物にせん。と計較たる歟。然はあらざめれど。みづから傷を求るに似たり。爾りとも避ずして。踏掛たるハわが疎忽。大人氣もなく爭んや。佐三次錢を取らせよ。といふに若黨佐三次は。いと朽をしく思へども。俗にいふ乞兒に棒撃と。思ひかへしつ折介と。目を注しつゝ應をしつゝ。携たりける袱包を。立ながら解ひらきて。錢一ト緡を出しけり。畢竟乞兒等錢を受て。瀬十郎を放つや否や。

原是乞丐の事なれば。わが所爲なりとは知るものなからん。是に優たる心術はあらじ。と心ひとつに思ひ定めて。有一日鳥部野に赴きつ。こゝに多かる乞兒の中に。筋骨の逞しげなる。面魂の一ト癖あらんと見ゆるを。三四人ン樹蔭に招きて。絆の機密を諭示し。懷にしたりける圓金四枚をとり出して。四箇の乞兒に取らせけり。抑這乞兒等は。霜避蕪六。兎唇卒八。瀬の猪彌介。犬蒲團鄙太郎なンど喚れたる。剛慾無慙の癖者なれば。一議に及ばず承引て。惡事を謀し合せけり。既にして鮒九郎は。四箇の躬方を得たれども。陶瀬十郎が微行を。何日と定かに知るよしなければ。又管領家の奴隷に因みて。件のよしを捜聞ふに。瀬十郎は。はやくより天滿宮を信じまつれば。曩に京師に來つる比より。必月の二十五日に。北野の神社へ詣る事。雨の日風の朝といふとも。懈るとなし。と聞えしかば。そは究竟と歡びて。又乞丐等に報知し。無鐵では克じと。潛やかに。兵器五口准備しつ。乞丐等にその四口を授けて。千本條路に埋伏して。陶が北野よりかへるさを。撃果さんとて相譚ふに。乞丐等も亦歡びて。その日を遲しと俟たりける。然程に。陶瀬十郎興房は。身に仇あるを知らずして。本月二十五日にも。北野へ詣んと。欲するにその日は勤仕に暇なくて。時もはや後れしかども。然とて已べきにあらざれば。事果てより遽しく。從者佐三次折介等を將て。北野の神社へ詣つゝ。霎時神前に默禱して。下向も路を急ぐとすれど。千本畛を過るとき。はや黃昏になりにけり。折からこゝに埋伏した

近世說美少年錄第一輯卷之四

東都　曲亭主人編次

第六回　密使茶店に貴翰を傳ふ　美婦子を携て情人を送る

登時若黨佐三次は。錢一ト緡をとり出し。乞丐等にうち對ひて。やをれ野臥們。汝等が大膽なる。這道中に列臥して。人に踏して物にする。鈍き伎倆は憎けれども。神詣のかへさでをはせば。施行こゝろで取らせ給ふ。かゝる檀那は得がたからん。口隋ずに受戴きて。とく退ずや。と窘て。遞與すを受取る霜避菰六。冷笑ひつゝ見かへりて。鄙太よ。踏れて肋三枚。折かれて扱膏藥代は。鐚百文ンでをはします。慳貪無慈悲。吝嗇なる。かゝる檀那は寔に得がたし。堪忍する歟。いかにぞや。と問へば鄙太は頭を掉て。菰公むごきことをないひそ。世に捨られたる俺們でも。肋三枚蹈折られたる。膏藥代が鐚百ならば。無慙や肋一枚が。三十二文と知られたり。野猪の胴殼黒鮪の麁骨でも。爾いふ時價が何處にある。返してくれよ。聽ぬぞよ。きかぬ〳〵。と臥ながら。叫くを然こそ。と猪彌介卒八。鹹聲を苛立て。噫菰六が心弱さよ。物吝みせぬ檀

近世說美少年錄第一輯卷之三 終

に隷添ふて。齊一急ぐ夕間暮の。由斷を謀る四箇の乞兒は。菰の下に隱したる。巨刀手々に引き拔て。聲をもかけず後より。竊歩しつゝ追携て。あびせ被たる刄の電光。不意を撃れし佐三次折介。背の深痍に霎時も得堪ず。苦と叫びて仆れたる。程もあらせず乞兒等は。瀬十郎をとり籠て。競ひ掛るを物ともせず。こゝろ得たりと。身を淪して。左右に近づく猪彌介と。鄙太が刀をうち落して。怯むを透さず項上抓んで。撞と投伏せ聲ふり立て。汝等乞丐に似げもなく。刄を隱し挐たるは。剪徑せんとの爲なる歟。然らずは人に賴れし歟。と問せも敢ず菰六卒八。青年奴よくも推したり。左ても右ても活ては還さぬ。この世からなる引導に。意趣の本末說示さん。本はといへば色の仇。笠屋阿夏に兩箇の密夫。一箇は和郎がわが物貌に。子さへ產して今一人ゝの。財主に空箭を喫したる。遺恨をこゝで霽さんとて。憑れて扨晝間から。埋伏せしをしらざるや。今の浮世は倒で。素人に施す乞兒の手のうち。受ても見よや。と調謔にほざきて。兩人齊一擊んとす。戰世の習俗にて。市人莊客乞兒等まで。只殺伐を旨として。士一揆なんど喚れたる。兵法武藝を看做ふて。悍からざりしものなければ。瀬十郎は又さらに。問答の遑もなく。刀を晃りと拔合して。踏込々々戰ふ程に。猪彌介鄙太も身を起し來て。落たる刄を攫取りはやく。亦背後より擊んとしつゝ。歩許わかぬ甲夜闇に。側臥したる兩箇の傷者に。思はず撲地と跌きたる。響に佐三次折介は。忽地に呼吸通て。刄を杖に立あがりつゝ。主を援けて

那におへば。寐てゐても貰ふ錢百で。人の骨肉を買れんや。然るを受取るとやはなる。乞兒實利に竭たる歟。適夥計の汚面奴が。さでは濟ぬぞ。濟さぬぞ。と麪桶鼓くも相槌の。調子外れの高强請。菰六騒がず。噫咻や。われ倩と按ずるに。鐚百ばかりと口にはいへど。一文檀那百人〻に。貰ねば都合らぬ。這一緡は優德衆の。金百兩にも當れるものを。受とらで何とせん。菰夥計では齡役なる。己に女才のあるべき歟。鄙太よ。これで堪忍せよ。僉共侶に和解すや。といひつゝも目を注すれば。氣色に曉得る李六猪彌介。否とはいはぬ陽笑して。誠にこれはいはれたり。緋を分たる哥々の差配で。肋骨より氣が折れたらん。鄙太も看際て往生せよ。といふに領く犬蒲團。新前なりし去々歳まで。一菰にも寢かされし。兄弟品の寬解ならば。恩愛平等。血をわけし。虱こそあれ恨みはなし。いかでよろしく宜く。と圓く治る麪桶のまくら擡げて蠢くを。見つゝ笑つゝ菰六は。佐三次にうち對ひて。目今闘せ給ふが如し。敵手が町人百姓ならば。かばかり脆く折れまじきに。お腰に怕れて形のごとく。衆皆納得仕りぬ。とく〳〵とはらせ給へかし。といふを見かへる瀨十郎。爾らば汝等いひぶんなき歟。と問も果ぬに四箇の乞兒等。いかでかいひぶん候べき。嚮には腹の立しき隨に。まうし過して今さら後悔。宥させ給へ。と逡巡して。そが儘ひらく玉鉾の。路の障りも凍解に。釋て溫とき夕南風。頭痛病せし折介も。したり貌なる佐三次も。疾視囘しつ。いへばえに。いはねど共に意氣揚々と。主の後方

り。倶したる兩箇の從者あり。一箇は死して一箇も亦。大疵に生死定かならず。彼惡根に賴れたる。四箇の乞丐等は討留たるが。いまだ死ざるものもあらん。誘共侶に。と先に立て。舊處にかへり來つ。なほ片息なる菰六を。項掻抓み掖揚起して。縡の機密を責問ふに。菰六苦痛に堪ずして。鰤九郎に賴れたる。伎倆を遺なく首伏す。瀬十郎うち聞て。爾らば惡事の本人は。三條西町のほとりなる。池澄屋龜六とかいふものゝ。孩兒鰤九郎にこそあンなれ。渠奴ははやくも逃亡たれど。既に深疵を負せしかば。追捕んと輙かるべし。わが從者佐三次は。幸ひにしてなほ死なず。渠はこの儘遺し置てん。里老達速に。醫療を加へ給はるべし。又この乞丐等は死せるも生るも。護りて沙汰をまちねかし。われは君所に立かへりて。これらのよしを聞えあぐべし。里人の中兩三箇。われと倶に管領家へ。まゐりてよしを訟まうさば。撿屍の使を給はらん。夜の深ぬ間にとく〳〵。といふに里人等はこの議に任して。表立たるもの兩三人。瀬十郎に附添ふて。管領邸に赴きつ。遺れる里人は佐三次が。爲に醫師を招きなどして。療養に術を盡しけり。然程に。管領大内義興主は。陶瀬十郎興房と。千本の里人等が。その夜猛の訴によりて。言の虛實を問質さしめ。則家臣朱野丹三に。夥兵を隷て、千本の畛へ遣し。猶且夥共を部して。惡事の本人鰤九郎を。搦捕るべし。と命せらる。却說朱野丹三は。時を移さず宿所を出て。千本へ赴く程に。彼處よりは十町あまりこなたなる路傍に。鮮血に塗れて臥したる

猪彌介と。鄙太を撃んと殺結ぶ。いづれに隙なき奮擊突戰。入紊れたる七口の。鍔音高く丁々發打と。互に鎬を削りたる。勝負の間に佐三次は、又卒八と戰ふて。やうやくに斫伏せしが。その身も深痍に瞑眩きて。再撲と倒れたり。そが間に折介は。鄙太が肩尖斫下げて。仆るゝ處を乘し懸て。十々滅を刺んとする程に。鄙太は伏しつゝ刄を揚て。折介が乳の下を。刀尖ふかく愚煞と刺す。刺れながらも折介は。鄙太が胸前刺串きて。此彼共に魂消る。聲を末期の一句にて。臥梟りて死でけり。然程に瀬十郎は。はや猪彌介に大痍を負して。傍々く處を疊かけて。細頸丁と擊落し。返す刀に菰六が。向脛拂て薙倒す。背後に闘ふ鮒九郎。聲をも被ず徹と斫る。刄を外す瀬十郎は。修煉の大刀風撓ず去らず。又鮒九郎と戰ふたる。一上一下虛々實々。然しも烈しき拳の冴に。鮒九郎は右の腕。小鬢の髮際彼此と。既に深痍を負しかば。難捷じとや思ひけん。透を闘ひ引脱して。足に任して逃走るを。瀬十郎は脱さじとて。反たる刄を拭ひもあへず。喘々追ふ程に。ゆくといまだ幾ならず。近邊の里人等。手に〳〵棒を挾み。蕉火を振照して。群々と走り來つ。瀬十郎を抑留めて。縡の始末を諮問ふ。聲囂々と罵騷ぎて。頻に捫擇してければ。瀬十郎は逃たる奴こそ。われを狙擊んとしたる。本人ならんと思ふものから。勢ひ恁地なれば。遂に亦追ふべうもあらず。引提し刄を拭ひ斂て。里人等に這條の。縡の趣如此々々と。首より尾まで。詳に報知してつ。われは管領家の御内人。陶瀬十郎と喚るゝものな

らず。そを鰤九郎が云云と。まうすよしこそこゝろ得ね。といふに丹三頷きて。爾らば夏はいかにぞや。と問れて阿夏は阿容たる色なく。問せ給へるとには侍れども。そは濡衣を被せんとはかりし。人の虚言で侍るかし。おもふに四稔前の比。鰤九郎が妾をとらへて。しうねくも口説しを。そが度毎に窘めて。情らしうも物せざりき。かゝりし程に鰤九郎は。身のもちざまの歹ければ。親亀六に勘當せられて。京師にをらずなり侍り。然るをやうやく免されて。喚かへされて幾日もあらぬに。何を證に云云と。事を好みし闇撃は。物狂ひにやあらずらん。思ひがけなき禍鬼の。いたくも暴れて侍るかな。願ふは察し給へかし。と應て傍に牽居られたる。鰤九郎を見かへるに。證據なければ悪棍も。そを非とは爭ひかねて。頭を低て跪居たり。登時丹三聲高やかに。やをれ鰤九郎聞たる歟。譬ば夏に不誼ありとても。汝が妻にあらざるに。非法の働き言語同斷。況や不誼の證據なし。さればこそわれ木偶介は。瀬十郎を知らずといへり。思ふに汝が情慾を。得遂ざりけん遺恨によりて。咎なきものを誣たるならん。われ亀六を召よして。年來汝が放蕩無頼の趣さへに定かに知れり。今飽までに毆懲ずば。いかにして實を吐くべき。とく〳〵彼奴を毆ずや。と烈しき指揮に雑兵等は。承りつ。と立かゝりて。鰤九郎を推伏せて。笞を揚て。背の皮肉の。破るゝ迄に毆しかば。弱り果つゝさていふやう。在下は四稔前より。阿夏に舊き怨あり。乃者人の噂によりて。渠が心の變りしは。瀬十郎殿と情由ある故

ものあり。引起さして責問ふに。是則別人ならず。鰤九郞なりければ。そが儘索を被さして。千本へ牽もて來つ。こゝに遺れる里人等を。召聚へてよしを問ふに。嚮に瀨十郞等が聞えあげたる。趣と違ふとなし。爾るに乞兒菰六は。深痍なれば得堪ずして。その曉かたに息絕たり。陶が若黨佐三次も。露命危く見えたりしを。丹三則里人に。下知して。徒に投棄しめ。折介が屍と共に。瀨十郞が宿所へ遣し。遂に鰤九郞を牽し。里人を將て。管領邸にかへり來つ。次の日鰤九郞を鞫問するに。則陳じまうすやう。在下はこの年來。陶瀨十郞に恨みあり。且そのよしを申しわけん。末松木偶介といふ河原人は。笠屋夏が良人にて。在下が親。龜六が借屋にをり、爾るに御內人陶瀨十郞は。件の夏と密通して。產したる子は三歲になれり。この事誰とてしらぬはなきを。木偶介は管領家のおん威福に憚りて。阿容々々として儆となきは。いと朽をしく腹立しき。在下借屋の好をもて。渠が爲に妻敵を擊ちて得させんと欲せしかども。身ひとつにて。力及ばず。よりて四箇の乞丐等を。賴みて助劍をさせたれども。反擊に擊果されて。在下さへに深痍を負にき。この外に情由は候はず。といふに丹三冷笑ひて。借屋の好ありとても。そが良人すら意趣を述ぬに。人も憑ぬ妻敵三昧。寔に烏滸の癖者なり。と叱懲しつ。木偶介と。そが妻夏を召よして。鰤九郞が陳じたる。綷の趣云云と。詳に說示して。この事汝等覺やある。と問へば木偶介頭を擡て。おそれながら申上ん。陶瀨十郞とかいふ者は。在下いまだこれを知

は幸ひに。罪鯽九郎ひとりに歸して。阿夏が事の祟はなけれど。身に覺ある愆に。まうし解くべきよしもなく。大くおそれて言承しつ。猛に旅の准備をしつゝ。次の日京師をたち出るに。從者なども格を省きて。兩三人に過ざりけり。かゝれば浪速の浦邊より。水行を周防へ急んとて。その日巳の比及に。深草の里を過る程に。京家の侍とおぼしきが。僅に一箇の從者を將て。茶店に尻を掛てをり。今瀬十郎が過るを見て。遽しく從者に。こゝろ得さしつ。途に出して。瀬十郎を留めさせ。竊に對面せまくほしきに。霎時立よらせ給へとぞいはせける。瀬十郎は訝しく。思ひながらも引るゝ隨に。軈て茶店に近つきて。と見れば件の侍は。是則別人ならず。日野西中納言兼顯卿の近習の青侍に。辛蹈兇四郎寧成と喚れたる。年來相識るどちなれば。思ひかけず。とばかりに。且歡び且耻て。床几の傍に立よりつゝ。迭に寒暖を述盡なきを。祝し祝さるゝだも面ぶせなる。瀬十郎は聲を密めて。某事は口づから。いひがたき越度によりて。月ごろ垂籠て候ひしが。這回周防へ追返さる。から慌しき旅なれば。猛の首途にて餘日もなく。四稔以來懇命を。承りし方ざまに。おん辭別の暇もあらず。心くるしく候ひしに。圖らずもこの處にて。貴兄と對面しつると。月來の本意に稱へり。兼顯卿はいよ〳〵ます〳〵。恙なくておはします歟。貴兄は又何等の所以に。こゝらを徘徊し給ふやらん。稻荷へ詣給ひし歟。と問へば兇四郎も亦聲を低めて。某がけふこゝに來たるは。主君の使を奉りて。貴公にあはん爲の

ぞ。と報たる者のありしかば。思ふ恨の累りて。やる方もなきまゝに。先彼人を闇撃にして。後に阿夏を殺さん。と計較しは現疎忽の愆。この義に相違候はずと。やうやく首伏したりけり。丹三聞て爾らんには陶瀬十郎が事はさらなり。夏にも亦罪はなし。人の噂を眞事として。管領家の御内人を。撃んとしたる大膽不敵。その罪尤輕からず。木偶介夏等千本なる。里人も僉この意を得よといふ。嚴に聞えしらして。身の暇をとらせつゝ。鰤九郎をのみ獄舍に繫ぎて。この日の廳は果にけり。有右而朱野丹三は。鰤九郎が首伏の。事の顛末云云と。主君義興に聞えあげて。その讞斷を請ひしかば。義興勃然と大く怒りて。然るときは鰤九郎は。些も借なき罪戾なり。速に梟首して。都下の惡俗を懲すべし。と敎圍たけく下知せらる。これにより丹三は。次の日鰤九郎が首を刎て。軈て河原に梟にけり。然程に。陶瀬十郎は。嚮に千本の里人等と共侶に。鰤九郎が惡事のよしを。聞えあげしその夜より。させる咎めはなけれども。藻にすむ虫のわれからと。よに憚りの關を置て。宿所に籠り居る程に。若黨篠野佐三次は。刀瘡終に愈ずして。黃泉の客となりにけり。有右而五十日ばかり歷る程に。この年肆月の初旬なるべし。有一日朱野丹三は。主君の使を奉りて。瀨十郎が宿所に詣來て。君命を傳るやう。陶瀨十郎興房事。當家第一の老黨たる。政房が子でありながら。行狀よからざる風聞あり。よりて山口へ返し遣さる。歸著の後も御沙汰あるまで。佗と愼みをるべし。と嚴に命せらる。瀨十郎

所のおん執成を。頼み奉るのみにこそ。といひつゝもはや立まくするを。光四郎霎時と推禁めて。させる儲にあらねども。君命に依りて遙々と。齎したる偏提あり。一盞薦めて袂を分たん。然しも日ながき卯月の旅に。いそぐとかは」と慰めて。従者に携來たせし。偏提をひらきて薦めしかば。瀬十郎は感謝に堪ず。これ彼共に下戸ならねば。さしつおさえつ盃の。數累るも覺ぬまでに。晤譚に時を移したる。瀬十郎は淨手に立て。天井を遶りつゝ。奥まりたる緣頰に到て。遽しく出で來る程に。忽地背後に人ありて。こや喃々。と呼留るを。誰なるらん。と見かへれば。思ひかけなき笠屋阿夏が。珠之介を携て。來つゝこゝにて俟たるなり。登時阿夏は遽しく。瀬十郎を掖留め。涙さしぐみ聲ひそまして。喃瀬十郎ぬし。鯽九郎が大膽なる。かの闇撃のもつれより。おん身のうへのとやあらん。かくやあらんと思ひわびて。安き心のなかりしに。幸ひにして祟りもなく。歡ぶ甲斐もなつ木立。はゞかり多きふたりが中の。末も得遂ず栲繩の。ながき別れになりにき。といひかけてよゝと泣沈めば。瀬十郎も嗟嘆して。かくまで慕ふそなたの誠心。そを惜しとていふにはあらねど。親しうせしは若氣の愆。過世に結びし惡緣なりとも。思ひしきらば斷らざらんや。公廳沙汰は脱れても。世の風聲をいかゞはせん。主君の御氣色宜しからで。猛に周防へ還させ給ふも。そなたと情由のありといふ。風聲あるによりてなり。爾るを今亦こゝに來て。別を惜み泣口說かば。わが身の罪を増するのみ。そは情に

みなり。寡君幷に賢房卿の。おん消息も齎したるに。こゝはあまりに端近かり。誘こなたへ。と母屋に入りて。障子の陰に坐を占れば。瀬十郎も推辭によしなく。たがはとりに對ひてをり。登時先四郎がいふやう。この春貴公の災難は。寡君も賢房卿も。かの折に傳聞せ給ひて。おん駭き大かたならず。其後も左に右に。胸安からずをはしませども。籠居のよし聞えしかば。左京兆に憚りて。故意安否を諮給はず。既に斯日ごろ經て。貴公は周防の山口へ。遐され給ふ起行の事。風聲はやく聞えしかば。中途に出て如此々々と。竊に予が意を傳へよとある。君命を奉りて。こゝに俟と久しかりき。そは只寡君のみならで。萬里小路賢房卿も。おん使を立給はんとて。仰合されたりけれども。多人數にては人視に立ん。こなたへよせさせ給ひね。と寡君これを禁め給ひて。彼卿のおん消息をも。某に齎し給へり。廼こゝに。と輸匣より。二通の書簡をとり出して。遞與すを瀬十郎は受戴きて。ひとつ／＼に披き見るに。兼顯卿も賢房卿も。共に名殘を惜ませ給ふ。愛顧は筆に顯れたる。そが中に。兼顯卿の消息に。今より四稔前つ比綠巽亭に空待させしは。もみぢ見ならでものいふ花を。手折れといはぬばかりなりし。わが慾こそ悔しけれ。今さら恨みられやせん。鈍ましかりき。と書せ給ふを。見れば顏且赧うなりしを。さらぬさまにてさや／＼と。手はやく卷て懷にうち斂め。今にはじめぬ兩卿のおん情こそ辱けれ。前路を急ぐ旅なれば。おん答書を奉る遑もあらず。不敬を允させ給はんや。只是貴

と呼かけて。携るを轆て引よせて。膝に載たる瀬十郎。歎けばこそあれ目に脆き。涙献。露の一滴。辭はなくして脇挿の。刀に附たる小刀子を。遽しく拔とりて。珠之介が右の手の甲を。わが左の手の甲に。推並べつゝ小刀子もて。一寸許。壓割に。斫れば欵となく珠之介。これ彼共に手の甲に。出てひとつになる鮮血を。瀬十郎は佶と見て。寔や親子の兆徴には。鮮血分れず因るといふ。古實をこゝに試し見て。疑ひは稍解たれども。わが兒といはれぬわが兒の久後名告あふ日のありもせば。只叔侄といはんのみ。さばれ年長面遺れして。それともわかずならん時。再會の符契には。這手の疵に優ものなし。金銀。珠玉。得かたき貨を。像見となすとも喪ひ易かり。いで〳〵。といひかけて。墨斗の墨を指に染て。珠之介が手の疵と。わが手の疵に揩入れば。駐。一字の假黒子。はや鮮明に見えてけり。有右而后瀬十郎は。腰著の財嚢より。圓金十兩とり出してこれを阿夏に遞與していふやう。こは思ふにも似ず細小なれども。珠之介を養育の。爲に取らする寸志なり。さらば。とはかり遽しく。立まくするを掖留る。阿夏は涕をうちかみて。絆をわけたるおん教諭に。久後憑しき再會の。符契はこれ子の東西を。稍辨ん比にこそ。說示さんと思ひ侍れ。遭はゞ左いはん右いはん。と思ひし事も今さらに。胸に支てわれながら。近まさりしてくちなしの花より脆き。別に侍り。長き旅宿は旦夕の。食物にもこゝろをつけて。恙もあらず彼地より。音耗聞して給ひね。と携る袂を振拂へば。綻けらし腋著の。

似て情にあらず。かゝれば人視に被らぬ間に。背門より出てゆき給へ。それこそわが身の爲なりかし。然るにてもそなたは亦。いかにしてけふわがこゝに。立よるとを早くも知りて。こゝらに在て俟たるやらん。汲引をしたる人もやある。と問ふに阿夏は涙を斂めて。おん身がけふの首途を。昨宵灰に聞しかば。いかで遭んと思ひつゝ。稲荷詣に假托て。今朝とく宿所を出しかど。稚兒を携たる。女の歩の果敢どらで。纔にこの里まで來つる折。認られもしつ認りて侍る。西ざま兼顯卿の御内人。辛踏ぬしのこの茶店に。憩せ給ふにゆき遭侍り。竊によしを諦ねしに。おん身をこゝに俟とある。言葉の露を汲見ては。今さら隱すに隱されず。妾もおん身に遭んとて。こゝまで來つるよしを告しに。辛踏ぬしの宣ふやう。爾りともわれ共侶に。そなたを彼人に遭せなば。そをわが手掖したるに似て。人の批評を脱れかたけん。そなたは奥に退きて。便宜もあらば遭ねかし。われは知らざるおもゝちして。外にこそ見め。といはれたる。人の情の憑しさに。俟かひは將ありながら。さまで強面く宣はずとも。山海千里を隔ては。又あふ事はかた糸の。より添ふも今を限りなる。そは諦めて侍れども。珠之介はおん身の胤。這眉上の黒子さへ。一對なるは親子の徴。この兒の顔とおん身の容止。似ずや肖ざるや見給へ。といひつゝ鼻紙に附たりし。懐中鏡をとり出して。照して見せつ。推向けて。珠よ。そなたの爹々公ぞや。抱れ給へ。と搔遣れば。尙いわけなき珠之介も。爭ひかたき血脈の恩愛。爹々さま嬭。

たりける哀傷悲泣は。亦いふべうもあらざりけり。現鱓九郎が短慮淺計。恨むまじき人を怨みて。可惜命を隕せし事は。自業自得といひながら。初を推せば借屋なる。阿夏より事起りたれ。されはこそあれ世の風聞にも。彼陶生と情由ありしを。鱓九郎が妬く思ひて。罪を釀しつ身を殺して。獨沒になりにき。と人皆いへば虛說ならじ。恨みしの淫婦や。形なのわが身や。といはねど胸に燃る火の。やるせなければ折に觸て。木偶介を追立はや。と思ふ心のつきしより。僦賃なども常に變りて。債ると苛刻く。阿夏と面を對しても。睨詰て辭を被けず。胡越の思ひをなすものから。木偶介が愚昏なる。事情をよくもしらねど。人の噂を洩聞しより。瀬十郎が事の趣。今さら半信半疑して。それ歟と思ひ合する事の。なきにしもあらざるに。彼美男子は故もやありけん。周防の山口へかへりき。と告たる人のあるにより。そこらは後安くなれども。睡屋のあるじ龜六が。乃者猛に氣色立て。疎々しきも愉からず。況や口の辭なかりける。人の噂の耳に障れば。京師に住も果がたかり。鎌倉は京に劣らぬ。繁華の都會なりしかど。彼地も亦兵火に荒て。且兩管領山內家と。扇谷殿と睦しからず。剩伊豆相摸なる北條殿と。戰ひ年々に絕ずもあれば。今は昔の鎌倉に。似るべうもあらざめれど。然とても生活の。便著なしといふべからず。彼地に移り住むならば。又佳事のなからずやは。と思ひ起しつ云々と。阿夏に告て相譚ひしを。阿夏は聞て思ふやう。よしや京師に住果るとも。なつかしとのみ思ふ瀨

糸の紊れのくるしさを。思ひ捨てぞ瀬十郎は。外面に立出て。こは幸踏ぬし。心ともなき。中座の失敬。ゆるし給ひね。既に時刻の移りにき。おん盃を納給へ。といふに充四郎こゝろ得て。現いつまでも名殘は竭じ。されば古語にも。送君千里。須一別といへり。強るは要なき事なるべし。と應て偏提をとり斂め。猛に從者を呼立して。茶價を茶博士に取らせなどしたる。その間に瀬十郎は。わが從者を呼聚して。充四郎に別を告。嚮にもまうせしとながら。兩卿の御懇命は。身を終るまで忘るべからず。なほ西歸の日に卑札をもて。おん請を申上ん。向暑是より幾もあらじ。貴兄も彌紈袴の爲に。自愛し給へ。と述了て。刀を引提て立あがるを。充四郎も亦幾條の。口誼を舒て目送る程に。阿夏は隔亮を寸と開て。出も得やらず外ながら。送る歎きは深草に。涙歟。露の珠之介が。手を掖立てぞ立在たる。これを一期の別とは。知るやしらずやしら雲と。流るゝ水の定めなき。人さまぐの江湖上に。一世の夫婦ありといへども。なべて百年の情人なし。倘人情をもてこれを見ば。女貌郎才憐むべし。亦公道をもて論ずれば。非德亂行。人にして。人にも似ずといはまくのみ。噫噫。

第七回　二賊剪徑して父女を屠る　一妻羞を忍て兩讐に從ふ

再說。鰤九郎が親なりける。三條西町の庖丁酒賈。池澄屋龜六は。憎しといへど獨子に。後れ

叫ぶ女房女兒と。共に魂銷る木偶介は。齒牙も合ず戰慄れて。腰うち脱し手を抗て。噫是山の豪君達。やよ。俺們は京師にて。世渡る楫が廻らねば。世帯果せし倉卒廻國。路費といふては候はず。懐貯限り進せん。衣裳は免し給ひぬ。と賠つゝ腰を掻撈りて。稍とり出す連繦錢を。兩箇の賊は見かへりもせで。眼を瞪らす聲高やかに。一文野郎が諄々と。慳ぬ事を誰かは聽ん。覺期をせよ。と諸聲に。罵も終らず踶倒して。起んと蠢く項を踏へて。手ばやく剝る衣物と。腰に纒ひし財嚢も漏さず。奪ふを見るに堪かねし。阿夏小夏は吐嗟と叫びて。携蔡んとしたれども。睨唪てよせ附ぬを。猶養繰りて號哭ぐ。小夏が頭上攫抓む。一箇の山賊鬨聲悍く。這女の子奴が懲ずまに。妨すなど。數圍て。宙に引揚げ手玉に弄て。矢聲を被て投遣せば。憐むべし是這小夏は。底邇なる深谷の中に。身を翻し陷りて。骸も得見えずなりにけり。既にして木偶介は。今眼前に女兒小夏を。投棄れし怨に堪ねは。身さへ命も惜ばこそ。わが子の寃讎と呼りて。立あがり摑かゝりて。一箇の賊の睾丸を。拉んとしてけるを。轉蓬すな。と又蹴倒して。匙しも立ず殴と蹴る。刄の冴に木偶介は。嗟と一ト聲叫びもあへず。肩尖より乳の下まで。弾竹割の身は赤裸。遺るは糯褌の。紐より短きこの世の別路。命薄くなりにけり。阿夏は女兒と良人の枉死に。その身も生たる心地せず。今さら逃とも脱さじ。と思へばいとゞ弱り果て。共に[illegible]を。抱締め眼を閉て。年來信ずる觀世音の。冥助を禱る一生懸命。念

十郎ありしに。逢るゝといふにもあらず。世間舅姑の囂しきに。他郷に移らば人改りて。なかなかに後やすかるべし。と尋思をしつゝ。一議に及ばず。妾もしかぞ思ひ侍るに。とく〳〵準備し給へ。といふに木偶介歡びて。家材雜具は遺もなく。沽却して盤纏とし。行裝を整へたるその日借屋を龜六に返して。四隣合壁に別を告。今玆九才になりける小夏と。三才になりける珠之介を。負ひもしつあるかせもして。夫婦父子すべて四人。この年捌月の下浣に。東を投て起行けり。東海道はこの春より。處々に戰ひ絶ず。新關も亦多かり。と豫て聞えし事なれば。岐岨路こそよかめれとて。この日は七八里の路を迪りて。守山の驛に宿りを投め。ゆき〳〵て第三日の未の比に。磨鍼嶺を越んとす。然でも折々行艱む。女兒小夏が手を挽扶けて。珠之介を背負ふたる。夫婦が辛苦はいふべうもあらず。急ぐとすれど果敢とらぬ。山路は人の往還稀なる。下晡になる隨に。茅萱小篠原に聚く虫の聲も。高峯に近づく程こそあれ。一叢繁き樹立の間より。顯れ出たる兩箇の癖者。身長五尺七八寸。一箇は六尺にも及ぶべし。莚頭巾に胴金作の。巨刀腰に嚴めしき。そが打扮は問でもしるき。彼張樊が儔ならずは。關の太郎が子孫ならんと思ふも僻目にあらざりける。當下兩箇の癖者は。先後に立塞りて。谺に響く聲をふり立。やをれ行客騒ぎなせそ。多寡の知れたる盤纏身皮。骨折甲斐のあらじと思へど杪枯比の酒價には。さのみ捨べき東西にもあらず。とく脱ずや。と左右方齊一刀を晃りと。引拔けば。吐嗟と

ず。又徒に親も子も。殺されて何の益かあらん。わが身はとまれかくもあれ。偶舉けし男兒の珠之介だに恙もなくは。年長成人る後に。怨を復すよすがもあらん。歌舞伎にもすなる常盤前は。子の爲仇に從ひし。例もあるをいかでわれ。さばかりの思慮なからずやは。這身ひとつを兩箇の男に。任するは宿遊女にも。等しかるべき恥なれども。時の要には鼻も劓。わが身は只今この山路にて。殺されにきと思ひなば。何かは厭ふとのあるべき。吁爾なりと。肚裡に尋思をしつゝ淚を斂めて。彼方此方の兩箇の賊を。うち向上又見かへりて。喃刀禰達。宣ふ趣聞わきたり。あの谷底へ投一投に。喪れしは繼子にて。その穉兒は血をわけし。わが身勝手にあらねども。地を走る獸天飛ぶ鳥も。子ゆゑに迷はぬものあらんや。今よりしてその穉兒を。養ふて給はらば。なでふ御こゝろに背くべき。命を助け給ひねと。いふに歡ぶ兩箇の山賊。はや珠之介を扛卸して。泣な〳〵。と頭を捺り。背撫つゝ遽しく。阿夏に遞與して。圓なる。目を細やかにうち含笑み。適怜悧き女房かな。路傍の芒背門の柳。靡きて損のなきものなれば。今よりして俺們を。慰めて給はらば。この子は俺們兩箇の兒なり。親なるものを疎にせんや。しかはあれども機を緩さして。脫走らんと謀るにあらずや。虚とは肌を寛しがたかり。向に霏哩と當て知れり。そなたの腰にも十兩あまり且その金を預けよかし。といひつゝ軈て左右より。はや引出す長財囊は。珠之介の爲にとて。瀨十郎ぬしの貺はせし。置土產なる金なれば。わが

誦に他事もなかりけり。登時兩箇の山賊は。木偶介が亡體を。又谷底へ蹴落して。刃を鞘に袖埃。等しく拂ふて徐々と。阿夏が身邊に立よりて。右ひだりより。やよ女。汝は殺さず。怕れなせそ。花もていはゞ八重櫻。月に譬へば十六夜の。色も香もある女房盛りを。惜るすら惜きにいかにして。むごくやはものすべき。とく〳〵あゆめよ。と手を拿るを。見かへりもせず振拂ひて。噫猙々し。殺さば殺せ。生さぬ中でも小夏は女兒。良人も共に命を隕せし。その仇人に伴れんや。といはせもあへず兩人齊一。足踏鳴らし冷笑ひて。顏に似げなく強情張て。適じといへば活しもせず。殺しもやらで憂目を見せん。這餓鬼奴を。と右手なる賊が。跳りかゝりつ。珠之介を。矢庭に挑拿る鷲抓み。喃哀しや。と聲立て。携る阿夏を。さはさせじとて。左手の賊が擒禁て。小腕攬て動かせず。當下右に立たる賊は。駭怕れて泣入るばかりに。手足を悶掻く珠之介を。目上高くさし揚て。やよ是女これを見よ。俺們兩箇の御こゝろに。從はじといへば詞も語も用ゐず。今この餓鬼を谷底へ。小女良とおなじ土にせん。はやく思案を切替て。俺們さまの御こゝろに。從はゞ親も子も。魚肉で美飯の年中安樂。否歟。應歟。と右左より。邪慳で口説く小兒を質種。回報ひとつが存亡の。界と思へば口隱る。母の歎きと子の叫び。冥土の呵責磨鍼の。名にし負けん。劍の山。紅蓮の涙焦熱の。湯とふるまでにわく〳〵しもなき。阿夏は轟く胸を鎭めて。淚の間に思ふやう。今怨を遂て爭ふとても。兩箇の讐を撃にもあら

せ。早飯を炊きなどして。叮嚀に管待ける。抑この山賊の。一箇は十々鬼夜行太と喚れ。一箇は野干玉黒三と喚れて。初は肥後の飯田山なる。川角頓太連盈が手下なりき。爾るに連盈は。いぬる永正六年の春の比。備中介弘元に擒捕れて。支黨もなごりなく。討滅されたりしとき。この夜行太と黒三のみ。辛く討手の鋒頭を殺脱て。遠く近江路に落留り。坂田郡佛生山の奥深く。巣穴を占て。三稔以來こゝにをり。然ば這地方は。磨鍼。中山。善谷。佛生と。連山波濤の如く聳立て。樵夫も到りがたき嶮岨多かり。住人とてはなき山の。鳥路熊徑嵯峨として。音つるゝものは松ふく風。伴ふものは白雲の。外には慰むよすがもあらず。如右而夜行太黒三は。をり〳〵街頭に出て。行客を剪徑しつ。又あるときは里閭に入て。民居を掠奪しつゝ浮る雲の富を欲して。跖が榮華を羨みたる。殘忍無慙の癖者なれば。住る深山は人家遠く。出沒定かならざれば。これを知るものなかりけり。既にして夜行太等は阿夏が儔多からぬ。美女なるをきてふかく歡び。まづその素生を諮るに。勢ひ恁地なれば。阿夏は隱すことを得ず。京師の歌妓なりけるよしを。明々地に報しかば。二箇の賊は商量して。次の日何の里にてか。筑紫琴三弦なンどを竊み來つ。この兩種を阿夏に授けて。鼓せもし歌ひもして。時なく酒の敵手とす。只この遊興のみならで。黒三が宿所にをらぬ日は。阿夏を夜行太が妻にしつ。又夜行太がをらぬときは。黒三が妻にもす。譬ば是兩箇の犬の孤牝を愛るに相似たり。淺ましきといふべうもあら

夫にすら深く隱して。もて來しものを情なや。といふにいはれず阿容々々と。取られて惜しげに見かへるのみ。爭せん術はなかりけり。却說兩箇の山賊は。木偶介が行李と。衣裳を取て肩にうち被。阿夏親子をいそがし立て。何處ともなく伴ふ程に。幾もあらで日は暮けり。この地は總て山又山の。羊腸たる細道を。辿るもくるし蔦葛。松柏枝をまじへて。樹下闇く。嵓石道に横はりて。蹊路苔に滑なり。仰きて蒼天を瞻れば。閃々たる星の光に。夜風の秋候に深かり。俯て山河を渡るとき。湝々たる水の音に。壺折る裳且濡んとす。本邦の大江山。唐土の白猿傳。鬼魅妖怪に捉られたる。良家の婦女子もかくありけん。と思ふ阿夏はゆき難みて。岩根に身を倚せ。樹幹に携などして。動もすれば後るゝを。一箇の賊は。手を牽り。腰を推て扶掖き。又一箇の賊は。珠之介を扛抱きて。聲をかけ氣を奬し。左右に慰めつゝ行めり。有如之程に時移りて。天いはや明なんとする頃に。這兩賊が巣穴に來にけり。登時阿夏は彼此と。頭を回してこの家の光景を見るに。素朴の柱萱の檐。月の漏てふ宿にもあらず。素是何人か住捨けん。道場めきたる菴室なりけり。庖湢は筧をもて水を引き。坐席は庭を旨として。天然の風景あり。家具調度いへばさらなり。夜物まで綺羅を竭せしは。何地の豪家の所藏なりけん。大約その爲體。彼金山が洞歟と思へば。亦支黨あるを見ず。膽吹の鬼の宿ならずは。袴垂保輔が。隱宅にも似たるなるべし。然程に件の二賊は。阿夏珠之介を勦りて。奥まりたる處に休は

近世說美少年錄第一輯卷之五

東都　曲亭主人編次

第八回　神僧歌を咏じて解脫を示す　阿夏計を定めて舊怨を霽む

十々鬼夜行太。野干玉黑三等の兩賊は佛生山なる隱宅に。阿夏を伴ひ來つる頃より。或は一日。或は兩三日。迭代に掙了に出て。獲物なければ歸らざりしが。有一日黑三は。藥種多く竊み來つ。そを又市にもてゆきて。沽却んとて擇分たる。そが中に砒霜あり。こは極めたる毒石にて。人はさらなり鳥獸も。服するときは免れがたし。さばれ病の症によりて。用るともありとか聞にき。しかりとてかゝる物を。市にもてゆきて售んとせば。忽地に疑れて。わがうへになるともやあらん。なれども棄べき物にはあらず。是はこの儘秘置んとて。幾重ともなく紙に包みて。索もて地坑の邊なる。梁に吊せしを。阿夏は見つゝ。慾深き人の心のいかにぞや。かゝる物すら捨難し。いと淺ましと思ひけり。是よりの後這兩賊等は。京鎌倉いへばさらなり。北越奥羽の盡處までも。赴くとのある折は。或は半年。十四五个月も。歸ざることなきにあ

ねぞ。有繋にわが兒のいと惜しければ。阿夏はこれすら推辭によしなし。逃去らんと欲すれども夜行太と黒三と。迭代に宿所にをれば。思ふのみにて便りを得ず。よしや些の透ありとても。山深くして道遠かり。何方を人家ある處ぞと。豫てしらねば慭に。走り出路に迷ふて。程もなく追詰られ。引戻さるゝとしもあらば。わがうへのみ歟珠之介が。命も保ちかたかるべし。畜生にだも劣る山賊の。しかも良人の寃讐なる。二人の爲に身を瀆されて。調戲ものとなれる事。抑甚麼なる惡業ぞや好しからぬ夫でも。ぬしありながら岐道かけて。瀬十郎ぬしと淺からず。契りし罪の報ひ來て。活る地獄に墮にけん世に薄命なる女子はあれども。わが身にますものあるべしや。と過來しかたを胸にのみ。思ひぞくらす秋の山に。牝戀ふ鹿も恨しく。籬笆にからむ薯蕷蔓。子に羈されて捨かねし。身のなる果をあはれ世に。訪ふ人絶てなかりけり。畢竟阿夏が這窮阨の。後の話說いかにぞや。そは次の卷に。解分るを聽ねかし

近世說美少年錄第一輯卷之四　終

の至らぬにや。とばかりにして利生もあらず。はや七稔を經にければ。珠之介は既にして。九才になりにける。その性の愚魯には。見えずもあれど母親は。渠が素生もわがうへも。明々地には告ざりしを。珠之介は稍訝りて。抑われには甚麼なる故にて。兩箇の爹々公のあるやらん。と折々母に問けるを。阿夏は羞たる面色にて。そは今定かに告ずとも。後におのづから知るよしあらん。と答て他事に紛らしつ。諦て岩間の苔清水。深く隱みてありければ。珠之介はこゝろ得がたく。思ひながら問も果さず。兩箇の賊が身の護りとて。壁に掛たる弓と箭を。携つゝ山をあさりて。兎を射つ。鳥をも射るに。度をかさね月日を累て。漸々に自得して。日毎に獲もののあるをもて這獵弓に遊耽りて。宿所にあると稀なりけり。有如此程に。この年の秋比。夜行太は遠く出て。美濃路より。信濃上野を徘徊し。兩三月の程にして。十月の比かへり來つ。這回の貨買には。白くて逞しけなる馬一疋と。金銀衣裳種々あり。こを黑三に見せ。阿夏に見せて。只管技に誇りたる。そが中に。いと美しき五色の玉を。眞紅の緒に串きたるあり。阿夏はこれを手に拿て。左さま右さまよく見るに。その玉毎に或は山水。或は人物。宮殿花鳥の。鏤れるごとく透徹りて。鮮明に見えしかば。頻りに愛て放ちも遣らず。夜行太を見かへりて。こは珍しき物に侍り。釵兒の餝にせまほし。いかで妾に賜へかし。といふを夜行太聞あへず。噫よき事をいはるゝよ。捨賣にするとても。百金にはなるべきものを。何でふ釵兒の

らず。かゝる首途の折からは。遺れるものゝ東道して。酒醼して遊びにけり。前路の貢賞多からん。兆祝のこゝろなるべし。然ば夜行太も黑三も。珠之介を愛るにあらねど。阿夏が心を攬ん爲に。一日這山中にて。獼猴一隻を捕へ來つ。廳下に繫措て。稚きものを慰めしが。兩三年を歷る隨に。その獼猴のよく狎しかば。放豢にぞしたりける。現禽獸と群居して。浮世に疎き山住ひは。春來たれどもなほ年の。新しきを知るよすがもあらず。かはらぬものは開花と。樹間隱れに鳴く鳥の。聲より外に音づるゝ。友なき宿の夏衣。織るとはなしに脫更て。袂涼しき朝な夕な。炊の桶に汲む水も。羨しさはけふもかも。流れ〳〵て人間に。出やしぬらん本の露。末の露歟。玉ぞ散る。軍茶花の上風秋深て。鶉の床の草莚。霜冰る夜の冬構。日毎の深雪降埋み。九折なる玉鉾の。路は絕ても近くなる。鄰もあらず母と子が。憂歲月をふる鄉の。空なつかしく思ふおもひかねて。立出て見れば舊の菴主の。護持佛なにやありつらん。背門を距こと一町あまり。枯殘りたる叢陰に。石の馬頭觀世音立せ給へり。阿夏は京師に在りしときより。這御佛を信じまつれば。花を折水を手向て。しのび〳〵に念ずらく。南無救世圓通大菩薩。願ふは親子が厄を釋て。はやく京師へ歸させ給へ。わが身はとまれかくもあれ。珠之介が幼稚きより。好らぬ所行を見習ふて。偸竊の子になり果なば。いよ〳〵悲しく朽惜からん。念々感應觀音力。無量の利益を施して。救せ給へ。と默禱じたる。深信懈らざりけれども。いまだ時運

る。觀音薩埵に詣んとて。遽しく菅門より出て。はや佛前に近つく隨に。と見れば飄々然たる一箇の行僧眉秀眼淸しく。檜笠を仰ざまに戴きたる。面色凡相ならざるが。鼠色なる栲の衣に。麻の腰法衣を被て。網代の笈の細小なるを負偹しつ。白栲の甲被脚絆して。杖を衝こなたに向て。觀世音の御前に立り。思ひかけなき事なれば。阿夏は驚き怪みながら。恭しく進み對ひて。聖は什麼何處より。こゝらへ到らせ給ひしやらん。妾は罪障深かる所以にや。寃家の爲に伴れて。この山に入りしより。はや七稔になりぬれど。こゝに來たれる人を見ざりき。然るを今ゆくりなく。聖に見えまゐらするは。年來信する這御佛の導せ給ひし歟。有がたきまで尊く侍り。妾は一箇の男兒ありて。今茲九才になり侍り。願ふは聖のおん慈悲もて。俺們母子を救ひとりて。竊に故鄕へ送らせ給はゞ。そは再生の御恩に侍らん。救せ給へ。とかき口說くを。法師は聞つゝつくづくと。見つゝ屢嗟嘆して。そは痛しき事なりかし。われはいとはやくより。大約皇國に在とある。佛を拜奉らんといふ。大願を發せしかば。深山幽谷。人の至らぬ。海岸嵓の陜まで。佛像ましますところには。索て到らずといふとなし。然れば這功德によりけん。人を相してその人の。過去未來まで知るとを得たり。そなたは京師にありし時。初は客にて入夫に。なりたるものゝありしならん。爾るを浮たる心より。他し男にあひ初て。岐道かけたるのみならず。衣食の爲に又一箇の。男に靡き。そを振り棄て。又彼他し風流士と。相馴れしより

餝にやはせん。然ればとてかゝる物は。京鎌倉にあらざれば買ふものも亦なかるべし。この後かの地にもてゆくまで。姑くそなたに預け措くべし。等閑になし給ひそ。といへば阿夏は微笑て。世の常言に預りぬしは。半分とかいふなれば。両三箇は返し侍らじ。然らずばこれを與りても。妾に要なきものなれば。うち摧けても知らず侍り。その折叱り給ふな。とうち戯れてそが儘に。袖に裹みてもて立けり。登時黒三は。庭の樹下に繋ぎたる。彼白馬を見かへりて。哥々よ。這回の賣買は。近年罕なる造化よかりき。金銀衣裳で物足れば。あの馬は售らずして。この隠宅の非常に備ん。よしや近郷なる城主に聞えて。討手の兵よせ來るとも。騎馬なるときは。身ひとつにて。敵十八ンにも當るべし。といふに夜行太頷きて。その用心も然ることながら。俺們こゝに十稔あまりの。光陰を送れども。知るもの絶てあらざれば。討手の備は。遠慮に過たり。そはともあれかくもあれ。馬あるときは物を負して。麓に到るに便りよし。賣らずに繋ぎ措くべけれ。といふに黒三は身を起して。背門の空房に牽入るゝ。件の馬を繋立て。愛たきものに思ひけり。却說次の日黒三は。夜行太が旅かへりの壽きと。その身は渠に立代る。首途の祝ひを兼て。一ト宵酒もり遊んとて。朝未明より宿所を出て。麓のあなたなる里に赴き。酒一ト罇を沽もて來たれども。いまだ殽の足らずとて。ふたゝび里へ赴きつ。夜行太は長途の疲勞に。復寐の枕籍する。納戸に鼾睡の聲したり。阿夏は今這間を得たるに。けふはいまだ拜ざりけ

之介が久後なり。渠が命運いかにやあらん。その吉凶をしらまほし。襁褓の中にありし比。賣卜翁に判斷を。書示されし事のありしを。讀も得解かで今までも。心にかゝり侍るかし。よしや兎毛の頭に置く。露ばかりなりとても。示させ給へと。請問へば。法師は頭をうち掉て。そは益もなき事にてこそ。親子の厄の解るをしらば。意外の幸ひなるべきに。子の久後をも示せといはる。嫌を舐りて糟に及ぼす。慾には限りなきものかな。いかでか天機を漏すべき。さらばとばかり袖うち拂ひて。復立去んとする程に。阿夏はやよや。と又擁留て。ふたたび問ふを聞しもあへず。法師は大く焦燥て。其處退ずやと。杖振擧て。阿夏が拳を礑と毆つ。毆れて吐嗟と叫びたる。聲に阿夏は駭覺て。四下を見れば其處にはあらで。身はなほ地炕の邊にをり。寢るとも思はで目睡けん。是假寐の夢なりければ。覺ての後もなほ轟く。胸を推撫。心を鎮めて。紙窓を仰瞻るに。日影はいまだ晡時なり。つくづくと見し夢を思ふに。敎化せられし行僧は。年來信じ奉る。觀音𦬇にこそをはすらめ。倘是薩埵の示現ならば。親子の厄の解んと。近きにありと示させ給へば。終には驗なからずやは。然るにてもその機に臨みて。志を行ふとの。あるべし。と宣はせしは。抑甚なる事にやあらん。と思ひかねつゝ思ひを凝らす。折から梁を渡る鼠の。三ッ鼬。ふたつ鼬喰あふて。迭に吱々と鳴ながら。堪ずやありけん地炕の邊へ。忽地擲と墜しかば。阿夏は吐嗟と駭きながら。見れば鼠にはあらずして。煤けし紙に包みし物の。吊

子を産たれども。天の允さぬ悪縁なれば。四稔の月日は夢とし過て。彼風流士に遠離り。遂に京師の住ひすら。こゝろに任せずなりしかば。他郷に赴く道中にて。山賊に奪去られ。朧良人は殺され。繼女さへ喪れて。その身は實子を救ん爲に。仇たる二賊に從ふて。押妻になりしより。人のかよはぬ這深山に。七稔といふ光陰を。送りしは是則。汝に出て汝に返る。悪報なるを曉得らずや。そなたの如き淫婦の。筑摩の祭祀にあふとあらば。戴く鍋はいくばくならん。みづからこれを思へかし。さばれその罪障は。只婬慾のうへのみにして。させる悪心あるにあらねば。自今われらを賴ずとも。その厄解けて。志を。行ふの時近きにあらん。然ればその折はからずも。鄉導するものありて。浮世に出るよしありとても。いまだ故鄉にかへりかたけん。これも亦命なり運なり。そなたの良人の殺されしも。色に迷ひて家を忘れ。妻子にいくその歎きをかけて。離別しても後悔せず。人の債も贖はで。父祖相傳の家産を果せし。悪報なればいかゞはせん。そが女兒の喪れしも。親の因果の子に報ふ。餘殃と悟らば怨もあらじ。好も歹きもその身に返して。己を責て人を怨まず。よく行狀を愼むものは。一日も煩惱あるとなし。されば歌にも。あしきには染りやすきを擽る墨の。われから枉るこゝろ習ひに。こゝろ得たる歟。と説示して。立別れんとする程に。阿夏は羞たる頭を擡て。遽しく掖留め。縡をわきゝたるおん諭しに。身の罪障を今ぞしる。無明の醉の醒侍れども。なほ心もとなさは。わが兒珠

まで大く濁りし酒を。薦んとせば疑れて。禍この身に及ぶのみかは。珠之介さへ殺されなん。然ればとてこの酒を棄なば。その替りにせん酒はあらず。こは懲なる事をしたり。と悔しく思へど今更に。又せん術のあらざれば。いよ〳〵胸は安からぬ。獨頭を病しつゝ。親子の存亡こゝにあらん。と思へば一生涯の智嚢を縮ひて。ふたゝび一計を。心に思ひ起しにけり。吁われながら謀りにき。と思ひつゝ外をうち仰げば。下晡になりにたり。登時奥のかたに假寐したる。夜行太は欠伸して。起て地炕の邊に來つ。阿夏よ。黒三はまだ還らずや。珠之介はけふも亦。殺生に出たる歟。この頃の日の短きをも。童ごゝろにはさもありなん。黒三が些ばかりの。肴を求かねたるは。無働なる漢にこそ。といへば阿夏は見かへりて。さまで劬勞にし給ふな。おん身は年來野干玉ぬしを。一腹より生れたる。弟の如く思ひ給ふは。いと淺はかに侍らずや。といふを夜行太聞咎めて。こゝろ得ぬことをいふものかな。我と彼とは西國の。竊難を共に脱れて。等しく當國に落留り。この山住ひをなせし頃より。莫逆にして苦樂を倶にす。然れば實の胞兄弟にも。をさ〳〵劣らぬ心もて。迭に些も疑はず。わがこの宿所に在るときは。そなたをわが妻としつ。渠がこゝにあるときは。渠に與へて耦配の。女房にすらなす中なるに。渠又何等の不足ありて。吾を疎に思ふべき。さりとも渠が心變りし。證もやある。いかにぞや。と問へば阿夏は冷笑ひて。如右思ひ給ひなば。いはでもあるべき事ながら。妾はおん身

緒断離れて梁の。上よりかくは墜たるなり。かゝれば鼠が緒を噬絶りし歟。然らずは暴るゝ勢ひにて。緒のおのづから断離れしならん。こはいぬる歳黒三ぬしが。もて来てこゝの梁に。繋ぎて貯措たりし。毒石なるを今こゝに。思ひ出れば五六年。そが儘にしてぬしさへに。措忘れたらんこの物の。墜たるも亦奇なるかな。と思ひつゝ復尋思をしつゝ。独莞爾とうち笑て。肚裏に思ふやう。嚮に黒三ぬしが心観の。酒醂せんといはれしは。是究竟の折なりき。この毒石を酒に浸して。両箇の漢に薦めなば。磨鍼山にて殺されし。木偶介ぬしと小夏が為に。怨を復すのみならず。俺們親子は後やすく。這山を出て里に到らん。かくてぞ厄は解ぬべし。女子の所行には似げもなき。わが身ながらおそろしき。伎倆なりとてせで已まば。仇も得撃ず埋れ果て。恥を雪るときやはある。されば夢想の示現にも。親子の厄の解んとするとき。志を行ふよしの。ありといはれしはこの事ならん。もし躊躇て時を移さば。奥なる人の睡りも覚。外に出し人もかへり来てん。かくて又謀を。行んと欲するとも。終に得かたく悔しかるべし。嗚呼しかなり。と只管に。懸る心を鬼にしつ。竊に件の毒石の。紙うち開き火箸もて。一塊を打缺て。黒三が沽もて来ぬる。罇に入れ酒に浸して。その餘は手はやく紙に包みて。簀子の下へ隠せしが。只四下のみうち見られて。左に右に胸安からねば。件の酒を試に。おそる／＼茶碗に移して。見るにその色濁りたり。軈て茶碗共侶に。密と外面へ投棄て。更に亦尋思をするに。かく

らずして。吾を害せんと謀るにこそ。今にもわれかへり来は。矢庭に者頸撃落して。この憤怨を散さんずと。敦圉猛く罵りたる。心を纔に推鎮め。更に又阿夏に對ひて。現憑しきそなたの誠心。そを疑ふにあらねども。黒三が沽もて來たる。酒あらば見せ給へ。といふに阿夏はこゝろ得て。こゝに侍り。と三升樽を。腕撓げに引提つゝ。地坑の邊に撲地と措くを。夜行太やをら引よせて。茶碗を索て移し見るに。その酒果して濁りたり。こゝに至て十二分の。疑ひはありながら。嘗して見ばや。と思ふになん。彼此と見かへるに。年來豢れし老獼猴の。窻の夕日を貪りて。騰子の下にをりしかば。阿猨よ／＼。と呼立て。膝うち鳴らせば跳下りつ。あるじの身邊に來る獼猴に。件の酒を與れば。獼猴は茶碗を兩手に受て。そが儘に飲竭せども。飽ずやありけん茶碗を放さず。霑垂遺るを幾遍となく。指に染つゝ舐りしが。忽地に阿と叫びて。手を張り足を空にしつ。悶苦しむ七顛八倒。血を吐くと夥しく。九竅すべて朱に染て。霎時もあらず息絶けり。夜行太はこの光景に。いかでか阿夏を疑ふべき。只憤胸に盈て。黒三を恨るのみ。思はずも嘆息して。嗚呼危きかなこの酒を。知らずしてわれ喫ば。わが身も獼猴のごとくならんを。其首の底まで黒三が。伎倆を知るは吾妹子の。吾に誠のあればなり。賞すべし賞すべし。と屢讃て已ざりしを。いと鈍しと思ふ阿夏も。目前に見し大毒の。驗に疎々髪立までに。駭怕れ舌を振ふて。共侶に嗟嘆しつゝ。現爭れぬ毒酒の效驗。主に代りて命を隕せし。阿猨が

を眞の夫と。思へば火急の厄難を。告侍らんに聞給へと。いふに夜行太膝推進めて。その厄難とは何事ぞや。とせわしく問へば。四下を見かへり。乃者おん身を俟程に。三四日前に彼人の。竊に妾にいひけるやう。われそなたをもて吾身ひとりの。妻にせまく思へども。夜行太ありてはその事かなはず。且渠は先輩なれば。よろづを渠に問定めて。自由を得ざる事多かり。いかで彼奴を結果て。本意を遂んと思ふなり。就て一計あり。夜行太がかへるに及びて。屆家の壽きと倡へ。一宵酒醼を催すべし。その折酒に毒を加えて。飽まで渠に薦めなば。是刃に衂らずして。命を斷の捷徑なり。そなたはこの義をこゝろ得て。毒ある酒を渠にもり。われには餙やうにして。餙ぬ手術か緊要なり。凡貴も賤も。家に兩箇の良人なし。爾るに兩夫を耦配に。なすはそなたの恥ならずや。かゝればわが爲のみならで。そなたの爲にこの事を。竊に思ひ起したり。努氣色にな曉得られ給ひそ。よくし給へ。といはれたり。有右而おん身のかへらせ給ひて。いまだ幾日もあらざれば。この議を告るに暇なく。心くるしく侍りにき。さればこそあれ。野干玉ぬしは。今宵の酒醼の料にとて。今朝とく酒を沽もて來つ。いまだ肴の足らずとて。兩三遍里に出て。常にはあらぬ馳走態は。意中に物のあればなり。よく〳〵用心し給へ。と誠しやかに聶き示せば。夜行太驚き且怒りて。思ふにも似ぬ畜生奴が。吾は妬媢の心なく。一箇の婦人を耦配にして。者奴にも賞翫せしめしは。分に過たる幸ひなるに。なほ足ることを知

天網恢々疎にして漏さず。扨も十々鬼夜行太は。阿夏が巧る言の葉に。説惑され不覺に慾りて。大く黒三を恨みしより。撃つ撃れつ共倡に。互に命を隕せしは。是積惡の冥罰にて。かくありぬべき事ながら。膂力餘りあるものは。その智足らざる故にこそ。阿夏は輙く本意を遂て。やをら隔亮を推開て。出て兩箇の亡骸を。一間許てなたより。おそるおそる得と見て。呼吸絶たりと思ふにぞ。やうやく胸はおちゐても。まだ落着ぬ身の往方。定めかねつゝ面杖を。つく〳〵とうち按じたる。かゝる折から珠之介は。けふも終日彼此と。獵くらしつゝ。穫ものなく。只徒に手爽みし。弓と弦なる捷徑の。阻陰傳ひかへり來つ。黄昏ちかき門邊より。母御よ。只今かへりにき。と呼かけてはや椽頰に。うち登るとき夜行太と。黒三が血に塗れたる。亡骸を見て。こはいかに。と駭騷ぎて思はずも。拿たる弓を落せしを。又遽しくとり揚て。四下を睨て立たるが。小暗き方に恙もあらで。をる母親を見出して。母御は其處にをはせし歟。おん身に傷はなかりしや。と問つゝ側に立よりて。嫡母御。うたてや兩箇の爹々さまの。倶に刃に伏し給ひしは。故こそあらめ。いかにぞや。と屢問へばうち頷く。阿夏は形を更めて。やよ珠之介。平にゐよ。きのふまでもけふまでも。情由をそなたに告ざりければ。這人々を今もなほ。爹々公といへる鈍ましさよ。といはれて訝る珠之介。噫こゝろも得ぬ爹々さま達が。親にはあらで是何ぞや。と問へば阿夏は目をしばたゝきて。可愛や情由を知らざれば。その疑ひは理りなり。今

最期の痛ましさよ。これに就ても珠之介は。獵くらしつゝまだかへらずや。といふ間に夜行太は。寐刄磨する准備の巨刀。黒三遲し。と俟たりける。とは知らずして黒三は。一隻の兎を肩に被け。又一ト籃の鯉鮒を。引提てかへり來つ。門より聲をふり立て。哥々よ。肴も整ふたり。是見給へ。と誇貌に。はや縁頬にうち卸す。兎と籃を見かへりもせぬ。夜行太眼を瞋らして。黒三汝は女色に惑ふて。われを害せんと謀りしな。その術は喫はぬ。毒酒の返報。覺期をせよ。と罵も訖らず。巨刀晃りと引拔きて。左の肩尖丁と斫る。斫られて駭く黒三は。こは何事ぞ。とばかりに。言問ふ遑あらざれば。腰なる刀を拔合して。受流し〳〵。こゝを先途と戰ひけり。阿夏は既に計りしとの。思ひの隨になるものから。刃に怕るゝ有繫は女子。こは淺ましや陷なや。と陽制しつゝ身を措かねて。次の一ト室に逃籠り。瓶と閉たる蒸襖の。建附歹き間より。勝負いかに。と闚窺たり。然程に黒三は。已ことを得ず夜行太と。戰ふ大刀音いと烈しく。一上一下と術を竭せば。夜行太も亦痍を負ふて。此彼共に身の中より。流るゝ鮮血に些も怯まず。命限りの奮撃突戰。兩虎山谷に肉を爭ひ。毒龍深潭に珠を挑むも。かくやあらんと思ふばかりに。進て退くとのなければ。いよ〳〵負ふたる迭の深痍に。衰果つゝ相撃に。刺串さてこそ死でける。

第九回

駿馬流に臨て母子を全うす。
美玉介と做て孤客を留む

常歌舞伎の勾欄絶しかば。吾儕は舞と糸竹の。技もて細き朝夕の。煙を立てありける比。そなたの爹々公は神風の。伊勢の安濃なる商賈にて。末松屋木偶介となん喚れたる。吾儕を最員の客なりしが。遊興に身を蕩かして。債の爲に家を喪ひ。伊勢なる妻子親類に。疎果られ離別して。よるべなき身となり給ひつ。獨女を携て。吾儕の宿所にかゝり舟。はじめ客にてありし時。受たる恩義の淺くもあらねば。出て去ともいひ難て。聿そが儘に入贅の。携子は則そなたの姉品。小夏と喚れて年は尙。七ツばかりでありし比。そなたを擧侍りにき。有右之程に木偶介ぬしは。生活のうへ疎にて。年來吾儕に養れ。左も右もせでありけるに。吾儕も子もちになりしより。世渡る技もおもふに任せず。よからぬ人の怨さへ。うけて口舌の起りしより。いかで他鄕に移らんと。思ひ起せし良人の隨意。そなたと小夏を携て。鎌倉を投て赴く道中。磨鍼といふ山中にて。兩箇の山豪に撞見つ。木偶介ぬしは斫殺され。小夏は深き谷底へ。礫に打れて亡たりき。かくて兩箇の山豪は。吾儕を挑みて耦配の妻にならずハ穉兒を。屠らんといふ邪慳の難題。朽をしき事限りもなきを。この身ひとつであるならば。よしや八劊にせらるゝと も。良人と女兒の讐敵。しかも兩箇の山豪の。調戲ものとなるよしあらんや。こゝで節操を盡さずは。人の妻たる甲斐あらじ。と思ふものから靡じと。いひも難たる繁芒。ほだしとなるはそなたのうへのみ。恥を忍び身を捨て。そなたの命をとり留めなば。年長。人となる後に。怨

こそ告ん聞給へ。這夜行太と黑三は。そなたの爲には親の仇。義理ある姉の怨敵ぞかし。と諦す言葉の緒を。なほ分かねし珠之介。膝を進めて喃母御。この人々はわが爲に。親と姉との讐ならば。おん身はなどてこの年來。身をし任してあちこちの。隔もあらで連添給ひし。こゝろ得がたく侍るかし。と詰れば阿夏は恥らひて。さればとよその事なれ。年には倍て理に聴き。わが兒に報るも今さらに。恥かゞやかしき所行ながら。この身ひとつを兩箇の讐に。任せしは只そなたの可愛さ。投殺されんとせし折に。とりも留めし玉の緒は。三縈の秋より七稔の。長き月日を深山樹の。日蔭に育し艱難苦勞は。言一朝に盡されんや。はや日は暮るゝに且立て。門の戶をよく鎖し給へ。といひつゝその身も立あがりて。板厨を開てとり卸す。菅薦ならで三布七布。蒲團ふたつを彼此と。兩箇の死骸にうち被せて。又拿出す行燈の。置所すら血を避て。焠兒引裂く片袖に。鼻を掩ふて地炕なる。埋火に徐と措翳し。手はやゝ移す燈火の。光りは高く仰竈を。引忘れじ。と掛る手も。辛苦に瘦て細索に。戶走り輕き錢車。背門へも遶る珠之介は。前後の門の戶鎖固めて。舊の處に走り來つ。母に對ひて。やよ母御。いはれし縡の趣を。詳に聞まほし。とく〳〵示し給ひね。といふに阿夏はさもこそ。とそが儘傍に引つけて。こや珠之介よく聞給へ。吾儕は素より京師の歌妓。親の時まで世に知られたる。女歌舞伎の長にして。屋號を笠屋と呼れたり。爾るに京師も年あまた。兵亂に荒果しより。生活も亦衰へて。

なくて彼地にゐまさん。竊に諧て行給へ。血脈の叔父でをはせども。表向たる親族ならねば。竊に對面せられて後に。そなたの素生を報よかし。名告あふ日の徵には。といひつゝ右手を引よして。是見よ。そなたの手の甲に眞一文字の青筋あり。又叔父君の手の甲にも。よく相似たる青筋あり。只これのみにあらずして。眉上にある黑子さへ。自然と肖たるは叔侄の。明微では侍れども。黑子の似たるは外にもあらん。この手の甲の青筋こそ。類はあらぬ再會の。符契に侍れば疑はで。必愛顧給はなん。かへすがへすも忘るなよ。そなたの生れたりし比。賣卜翁が云云と。識して贈りし一期の命運。吉か凶歟。得も讀ず。言のこゝろは知らねども。臍帶産毛共侶に。護身囊の中にあり。今より手習學問を。心にかけて懋よかし。漢文を克讀習はゞ。賣卜翁の判斷も。定かに知るゝ時あらん。いひ措べきは是等の事のみ。名殘惜しや。とうち泣て。夜行太等が亡骸の。邊にありし血刀を。搔よせつ拿直して。吭に突立んとする程に。吐嗟と騷ぐ珠之介は。透さずその手をとり禁めて。こは母御何事ぞ。おん身が自殺し給はゞ。吾身ひとつでこの山を。何處へとて歟出らるべき。この餘もいふべき事多かり。且この刃を放ちてと、と辭せわしく諫れば。阿夏はよゝと又泣て。拙は死ぬにも死れずやとて。刀を捨て伏沈めば。珠之介も堪難し。淚をしばしば押拭ひて。怖母御。けふまで知らで過したる。已が素生も。おん身の苦心も。定かに知られて今さらに。歎きの中なる歡びなり。親の讐とは思ひもかけ

を復すとしもあらん。と深念をしつゝ。阿容々々と。兩箇の寃家に伴れて。この山中の隱宅に。晴ぬ月日を送りてぞ。はや七稔になりにたる。これらの情由をけふまでも。そなたにいまだ告ざりしは。稚心の淺はかなる。怒に乘して慫に。仇も得撃で禍を。惹起す事あらん歟。と阽みおもひし所以なりけり。爾るに罪障消滅の。時至りぬる祥なるべし。年來念じ奉る。觀世音菩の示現あり。その故は如此々々と。見し夢の事。毒酒の事。終には十十鬼夜行太を。謀りて黑三を疑せて。同士撃さして命を果させ。舊怨を復したる。緈の顚末箇様々々と。首より尾まで。説示しつゝ。又いふやう。初吾儕が計りしは。此彼刃を交るとき。一箇は必ず撃るべし。然らば一箇も痍を負ん。よしや恙のあらずとも。一人ン缺なば宿に居て。吾儕を戍るもの誰やはある。護る人なければ留守をしも。吾儕に任して稼了に出ん。その折そなたによしを告て。脱去んと思ひしに。鄙語にいふ按するより。産には易きけふの首尾。兩箇の寃家は自滅して。怨を越に雪めたり。そなたは京師に立かへりて。更に周防へ赴き給へ。今京師には親類なし。周防州山口なる。大内家の御内人に。陶瀨十郎興房と聲えしは。そなたの叔父でをはするなり。彼人京師に在番して。四稔許在りし比。そなたの生れたりければ。襁褓の中より愛慈みて。何くれとなく東西あまた。年々贈り賜りにき。然る程に瀨十郎ぬしは。慾る事ありて。そなたが三歳の夏肆月に。主君の氣色を蒙りて。周防へ還され給ひしかども。年尚わかき身にしあれば。恙

はも久後の。利益を禱り奉らん。さるにても自滅せし。あの人々は讐ながら。七稔そなたを輙れたる。庇䕃なしとはいひがたし。情は情仇は仇。切て兩箇の亡骸を。今霄埋て首途せん。そなたもこの義を資よかし。といふを珠之介は聞あへず。母御の了簡寔によし。就中那馬は。俺們親子の爲にとて。佛の賜ひしものにやあらん。とく觀音へまゐり給へ。秣の事はこゝろ得たり。といふに阿夏は歡びて。背門に立出行水しつゝ。月を燭に程近き。彼觀音へぞ詣ける。その間に珠之介は。馬に飽まで秣を飼ふて。母の歸るを俟程に。阿夏は久しく祈念を凝して。背門のかたより歸り來つ。又夜行太と黑三が。亡骸を瘞んといへば。珠之介含笑て。母御よ。さのみ急ぎ給ふな。期に至りてせんすべあり。吾儕は大く疲勞たり。霎時寢まりて後にこそ。と諍ひて納戸に退きて。板厨の蒲團とり卸し。臥すよりはやくすや〳〵と。鼻聲幽に聞えけり。阿夏はこれを見かへりて。慳懀しけれども有繫は童。賴甲斐なく睡りにき。さればとてわが手ひとつにて。瘞ん事はいと難かり。翌の准備を急んとて。脚袢杖笠これ彼と。行裝を整へて。有とある錢帛を。ひとつに集めて革財囊に。斂めて馬に負したる。この餘衣裳も二袱に。包みて馬の鞍下に。結び附なぞする程に。十日の月は沒果し。夜は深て山靜なり。左右而阿夏は臥房に入て。睡んとするに宿も寢られず。その曉がたに起出しが。飯はきのふの餘りあり。炊くに及ばず茶を沸らして。珠之介を呼覺し。親子等しく早飯を。たうべてこの日一日の。割籠の

ず。親と呼びたる悔しさよ。さばれおん身の智計逞しく。此彼共に自滅を取らして。怨を雪め給ひしは。身を潰されぬになほ優れり。かゝれば翌は山を出て。共に周防へ赴くべし。然るを愍りて死し給はゞ。おん身の操は立もせん。吾儕は誰をちから草に。路覺束なきこの山を。出て遙々周防なる。叔父公を諮る便著あらんや。命は物種なればこそ。七稔以來生延て。浮世に歸るけふにもあひにき。この義をおもひ給はずや。といふに阿夏は頭を擡て。適微妙くいはれたり。十にも滿たぬそなたの惺憶しさ。現陶ぬしの侄なりけり。然ば吾儕も存命て。そなたの旅宿の後見しつゝ。倶に山口へゆくべけれ。就て相譚ふと多かり。夕膳果して後にこそ。といふに頷く珠之介も。等しく庖湢に退きて。迭に箸をとり膳に。夜食ながらの親椀と。子皿のみなる掛向ひ。饑たる腹を繕ひけり。當下阿夏は沈吟じつゝ、珠之介を見かへりて。年來吾儕が察するに。こゝらは總て山多かり。山又山なる深山路の。彌が上に生茂りたる。茅萱藤蔓に前路をわかで。樵夫も入らぬ嶮岨に臨まば。必迷ふて一日には。人家ある地方に出がたからん。今倩と思惟るに。馬は舊來し路を忘れず。在ける里に還るものぞ。と京にて人に聞しことあり。幸ひなるかないぬる日に。彼人達が奪ふて來たりし。馬を深山の郷導にして。出なば里に到りもせん。然るときはそなたと吾儕が。足を休る乘下に。行李も盤纏も皆附ん。是に優たる便利はあらじ。霄より秣をよく飼ふて。翌の準備をし給へかし。吾儕は馬頭觀音大士へ。參りてな

ん。聞わきたる歟。と叮嚀に。宛人にものいふ如く。思ふ限りを説示せば。馬はその意を知りたりけん。聞るが如く思ふに似て。霎時頭を垂てをり。忽地に身振して。一聲高く嘶くにぞ。阿夏は見つゝ歡びて。原來いふよしの聞えしならん。尋常の旅路にて。乗る馬ならば鞍奴の。なくて協はぬ事なれども。這馬は俺們を。鄉導の爲なれば。珠之介先乗り給へ。吾儕も相鞍にうち騎て。誘初より足を休ん。とく〳〵。と急せば。珠之介は有理と應て。腰る短劒を背に遶し。鐙に諸手を被けながら。鞍高ければ乗りかたきを。阿夏がやをら後より。抱き揚れば甞乗りつ。阿夏も裳を壺折て。そが尻鞍にうち乗りけり。却說件の白馬は。阿夏親子をうち乗して。ゆくといまだいくばくならず。後方猛に物の音の。燁燁として恒ならぬを。阿夏はやく聞つけて。彼は奈。と見かへれば。はや黒煙天に滿て。今までありける隱宅より。火の燃發て燒るなり。これにぞいよ〳〵驚て。失ても惜かる宿ならねど。立出るとき忙しくて。爐の火を滅さで燒捨たる。そが上に物の落被りて。燃移りしにあらんずらん。といひつゝも又見かへるを。鈍やと笑ふ珠之介は。些も騒ぐ氣色なく。母御よ吾儕が分別あり。と嚮にいひしはあの火の事なり。柱礎堅固なる。宿所をそが儘住捨て。出てゆきなば今宵より。狐狸の棲とならん。爾らずは復山賊の。隱宅にせられんのみ。市に近くは活却して。金に易べき家なるを。這深山ではその事得ならず。爾りとて遺し措て。人の得となさんは媢かり。よりて吾儕が出ると

准備なぞしたる。阿夏は又彼亡骸を。擡出して瘞ん。といふを珠之介推禁めて。母御その義は心安かれ。吾儕疾より分別あり。益なき事に氣を揉んより。錢一文でも取遺しなば。一生涯の損なりかし。盤纏はいかにし給ひたる。と問るゝ阿夏は本意なげに。さればとよ金も錢も。革の財嚢に遺なく容て。衣裳と共に馬に附たり。衣はともあれかくもあれ。盤纏は分ちて吾儕とそなたの。腰に著べきものなれども。重やかなれば山路の程を。馬に負してゆくべけれ。心にかゝるは亡骸を。あの儘措かば狼の。腹を肥さんうたてさよ。そなたの分別心もとなし。さりとも思ふよしある歟。と問へば珠之介は空嘯きて。さまで苦勞にしたまふな。はや天は明たり出給へ。と促す聲と共侶に。森を離るゝ鳥の音に。阿夏は今さら猶豫も得ならず。草鞋穿締めをり立て。牽出す馬にうち對ひて。畜生なりとも喜怒哀樂の。七情はありつらんに。吾いふよしを聞わけよ。吾儕親子は七稔以來。不善人の隱宅に。わりなくも伴れて。憂歳月を送りしに。その窮厄の稍解て。故郷へ還る歡びあり。そなたもこゝに竊れ來て。きのふけふにはあなれども。さこそは舊の家主を。慕しく思ふらめ。然るを今さら捨てゆかば。いかにして豺狼の。害を脫るゝよしあらんや。よりてそなたも共侶に。舊里へ返すべし。就て吾儕はこゝを出て。里に至らん路を知らず。この鄕導を賴むのみ。俺們親子をうち乘して。はやく舊來し路に出よ。然るときはそなたの主を。索ねて其處へ返すべし。よしや故主の知れずとも。愛する者に責與

乞ん。疏飯の噎ぶを忍べども。有繫に猛獸の害怕なきにしもあらねば。久しうは得憩はで。馬牽よして又乗りつ。前面幽に見わたせば。聳然として雲を吐く。那山は是何處の高峯ぞ。颯々として風に調る琴曲は。是這山の松なりけり。嚶々と鳴く鳥の聲は。友を求めて窮谷より。喬木に遷るにやあらん。蔓延と懸る枯藤は。猿に引れて蟷網の。斷離たるにも似たりけり。目に見るもの耳に聞くもの。心寂しくも悲しさに。阿夏は只顧觀音薩埵の。御名を唱へつ背には。冷たき汗を流せども。珠之介は物とも思はず。馬上ながら睡りては。滾落んとせし事屡なり。冬の日なれば短くて。下晡になりたれども。いまだ人家ある處に到らず。と見れば前路に溪川あり。その廣凡五六間。流速く音凄じさは。水中に巖あり。碎けて左右へ落るなり。橋もやある。と伸上りて。四下を遙に見わたせども。橋はさらなり。船もなし。馬は川邊に駐りて。主共侶に眺めてをり。阿夏はこれに駭き患ひて。こはいかにせん珠之介。一ト日の山路を來し甲斐もなく。この速河に留られて。今宵をこゝに立曉さば。猛き獸の薔害あらん。然ばとて淺瀬を知らねば。騎入るべうもあらずかし。といふを珠之介は聞あへず。おもふに流の速くとも。馬の三頭を越すべくもあらず。一眅あまり乗戾して。一ト鞭拍なば輙く渡さん。おん身は吾儕と立替りて。前鞍に乗給へ、いで〳〵。といひつゝも。馬より閃りと降立て。舊來し方へ牽戾せば。阿夏はなほも馬上にあり。馬の項をうち敲きて。やよや白。聞ねかし。そなた今あの速河を。

き。彼此に火を投たれば。程しもあらず燒るなり。有如之者仇の亡骸も。共に燒れて灰にならん。大約人を葬るに。土葬もあり火葬もあり。又水葬もあるよしを。豫て彼人々の。夜話に聞たるを。はやくも思ひ出しかば。扨火葬にはしたるなり。石のみ多かる山路を穿て。土葬に骨を折んより。輙き所爲に侍らずや。といふに阿夏は又驚きて。原來そなたの所爲なりし歟。尙九才なる童の智には。怜悧さ過て成長らん。後こそ心もとなけれ。さても〳〵とばかりに。呟きつ嘆息して。又いふよしもなかりけり。然程に。馬は羊腸たる深山路を。足掻徐に乘せてゆく頃は初の冬なれば。谷の丹楓の濃薄さ。宛錦を掛たる如し。阿夏は遙に馬上より。うち眺め見かへりて。今より十稔前つ比。綠巽亭のもみぢ見に。思ひかけなく陶ぬしと。再あふたるその宵の首尾の。末は得遂ず西東。別々て散る花の。洛も外になりぬるを。けふ立かへる草枕。旅の宿りを何處ぞと。定めなき身の近江路に。あはで過して來し方を。思へば夢の世なりき。とかこち歎きをいへばえに。岩が根傳ひ岨傳ひ。危かるべき處では。馬乘放つ母も子も。辛して辿る路もあり。或は疎林枝をまじえて。馬上の頭髻を取らんとすれば。鞍に伏つゝゆく路あり。谷深くして峯高く。苔滑らかに石多かれば。戰々として馬蹄の。跌んとをみ。流遠く音のみ聞えて。水を掬ぶによしなき折は。渴して梅林をおもふ遑もあらず。旣にこの日の亭午比。馬を駐めて路傍なる。枯草を食しめて。親子は土坐て割籠を開くに。一碗の湯も誰にか

ぬ。貨とおもひ諦めよ。親子の命恙なければ。乞食をしてもゆかざらんや。物皆失ひたりけれども。小費の爲吾儕が腰に。著たる金は二分許。錢も四五百あるなれば。京師までの路費は足らん。さるにても那駛馬は。わがいふよしを聞とりてや。往方も知らぬ深山路の。鄉導をしてこゝまで來つ。その身は水に陷りても。吾儕とそなたを反越させしを。思へば奇しき事ならずや。倘那馬は觀音薩埵の。假に貌を顯して。助け給ひしにあらざる歟。爾らんには金銀衣裳を失ふたりとて惜むに足らず。只御佛の方便に。任しまつらば這艱難を。昔語にする日もあらん。誘ゆくべし。といそがせば。珠之介は舌うち鳴して。後になり先にたち。暮ぬ間にと走れども。いまだ里には辿りも著かず。日は沒て月さし昇り。天よく晴て風もなし。前路は大かた蕃山にて。處々に刈果し。山田あれば住む人も。あらんと思ふに歩も進みて。又ゆくと行程に。一叢繁き冬樹の邊に。燈火の光洩りて。閃々と見えしかば。親子は轍魚の江に臨み。孤猱の林にあへるがごとく。こゝろ歡び力づきて。頻に走りつ。走り著て。見れば果して白屋なり。轆て門の戸うち敲きて。行くらしたる同行二人に。宿貸給へ。と呼門けり。當下裡面より訛聲立て。今宵はこゝに緊要の。一議あれば村の衆の。此彼となく聚合れて。今商量の最中なり。右冗紛たる折なれば。お宿は愜ひ候はず。といとも強面く答るを。阿夏はなほも推返して。宣ふよしは然ることながら。吾等は路に迷ひしもの。知らぬ深山にわけ入て。賊に赶れつ。辛して。

ともかくもして渡さねば。人家あるかたに到りがたかり。然るときはそなたも亦。故主にやは遭るべき。勉よかし。といふ間に。珠之介は路傍に。出たる石を足代にして。ふたゝび母の尻鞍に。うち乗つ鞭を揚て。馬の尻を礑と拍つ。拍れて馬は驀直に。走り出しつ件の川を。只一反に越んとせしが。前面の岸まで届かずして。間は既に僅なる。水中に出たる石に。前足を折掛て。忽地突と伏す勢ひに。阿夏はさらなり珠之介も。共侶に反甍されて。鞍を離れて前面の岸に。筋斗を拍てぞ落たりける。しかはあれども母も子も。幸ひにして身を傷らず。齊一吐嗟と叫びつゝ。起あがりて見かへれば。憐むべし件の馬は。推流されて亡にけん。影もとゞめずなりにけり。登時阿夏は愁然と。涙さしぐみ嘆息して。俺們親子は辛して。この速川を渡したる。歡びに就て哀しきは。貧けし馬のこなたに至らで。推流されたる不便さよ。といへば珠之介も嗟嘆して。里に到りて彼奴を售らば。よき直には估とならんを。いまだ質にも得置ずして。流されたるは殘念なり。と呟きつゝ又驚として。悲しや。母御よいかにせん。嚮におん身が路用の金も。衣裳も總て那馬に。括著給ひしかば。馬共侶に推流されて。手提編笠になりにたり。といはれて心つく母も。困じ果たる面色は。水中にたつ石よりも。蒼くなるのみ術もなし。倘やと思へば珠之介と。倶に川邊に立在て。視る目の限り索れども。馬さへあらずなりぬればいかにして。革財嚢の。浮て水中に漂ぶべき。悔みて返るよしのなければ。只俺們に授ら

る女中の初旅。其首を見入て悪根が。剪徑せんとて跟たるならん。しかはあれども運つよく。命めでたく逃果せしは。切てもの事になん。やゝ喃爐邊へ寄給へ。山茶は鑵子に沸りたり。聊も介意せで。手づから汲て啜り給へ。といへば阿夏は珠之介を。見かへりながら進みよりて。あるじ夫婦にうち對ひて。おん事多かる團坐の中へ。今宵のお宿は一刻千金。こよなき情で侍るめり。就てこの地は近江の中歟。何と喚るゝ村やらん。願ふはおん身の姓名も。具に聞まく欲しけれ。といふにあるじは頷きて。問るゝ如くこのわたりは。美濃近江の封彊にて。嶺を越て東に到れば。美濃州池田郡。又信濃にも鄰りたる。こゝは近江の坂田郡。久禮畑莊。三池郡なり。員ならねども某は。名を宿六と喚れたる。村に數代の貧農にて。妻は名を阿可加といへり。おん身は京師の人ならば。這田舍備たる爲体を。傍痛く思はれん。旅宿は殊さら憂ものなるに。尚總角なる息子を倶に。前路遠かる女人の道中。うたてや剪徑に赶威されて。行李も路費も遺りなく。喪ひ給ひしよしなれば。心の中さへ推量られて。痛ましくこそ思ふなれ。大凡人の愛惜は富たる人でも異なるとなし。こはいはでものとながら。この地に福富大夫次と喚れ給ふ。いと優富なる長者あり。福富三池。落合の鄕。今畑入谷なンどいふ。合保十个村を差配し給ふ。大莊屋でをはするが。山田火田いへばさらなり。家には幾十名の奴婢を使ふて。織出す近江布を。京鎌倉へ賣遞與し。又山野には牧ありて。牛馬許多を豢殖して。年々に賣出し給へば。富

脱れてこゝまで來つるなり。簀子の下でも。柴薪屋でも。臥房は厭ひ侍らずかし。一宵留め給ひね。と珠之介共侶に。幾遍となく呼かけて。立去べうもあらざれば。裡面には老女の聲として。聞けば女子と童とおもほゆ。路に迷ひつ。山豪に。追れたる人々ならば。さてこそ難義にあらんずらめ。甲夜には臥房のあらずとも。露宿にはなほ優とあらん。飯もなけれど這冗紛で。炊きて進らする暇はなし。かくても好といはれなば。宿していなすも世は情。旅は伴侶兩箇の衆。いひつるよしを聞れしならん。愛々しからぬあるじ態を。得心で泊り給はゞ。誘且裡面に入り給へ。といひつゝ軈て門の戸を。開るを遅しと。阿夏等は。うち微笑つゝ會酌して。そは歡しき事になん。許し給へ。と遽しく。草鞋解捨珠之介と。倶に引れて母居なる。簀子に躋登りたる。這時地炕の邊には。家あるじを首として。本郁の故老五六名。甲乙團坐したりしが。齊一阿夏を見かへりて。女中よ息子共侶に。地炕の縁へうち寄て。足踏伸して温なり給へ。抑お身等は何處より。何地へ赴き給ふぞ。と問ふにお夏は膝を進めて。吾儕は京師のものに侍り。近屬良人の身まかりて。便著なければ鎌倉なる。由縁の人を心當に。獨子携て。這回が初旅。爾るに今朝しも路に迷ふて。得しらぬ山に入りしより。徒に日を消したる。折から一箇の山豪に。撞見つ痛く赶れて。行李も盤纏も皆うち捨て。脱れてやうやく這里へ。辿り著侍りにき。と實事しやかにいひ瞞るを。衆皆聞て嗟嘆しつ。そは痛ましき事なりかし。息子を携た

つ開果て。宿六夫婦に對ひていふやう。只今のおん物語に。思ひ合する事さへあるに。吾儕も五色の玉をもてり。件の主の徵め給ふと。異なることのなきものならば。進らせんとこそ思ふなれ。といふに歡ぶ宿六阿可加。その餘のものも勢ひ憑て。そは耳よりの喜悅なり。且その玉を見せ給へ。といへば阿夏は頭を掉て。吾儕が玉も江湖上に。絕て得がたきものなるに。輕々しくやは人に見せん。先そのぬしに對面して。いはるゝよしの吾儕が玉に。符節を合するごとくならば。そがうへにて左も右もせん。とくこのよしを傳へてよ。といふに衆皆頷きて。いはるれば現然もあるべし。おん身が玉にて辯理いはゞ。疑れたる俺們が。明證も其所に立べからん。宿六案内をし給へかし。といふをあるじは聞あへず。そは宣ふな。こゝろ得たり。時分過たる夕饌の。さぞ欲けくはあるけれど。飯櫃の底なる冷糧飯を。こゝでまゐらせたらんより。福宮殿へゆき給はゞ。美饌珍味で管待し給はん。和子も且く辛防して。彼處で夜食をたうべ給ひね。爾らんには夜の深ぬ間に誘給へ案内をせん。とかくに女子は女子同志。阿可加も共にゆくこそよけれ。衆叟達留守爲篏に。かへり來るまで俟給へ。可加よ。挑灯出せし歟。といはせも果ず。こな人は。晝より明き這月夜に。挑灯引提て何にせん。客人達も金剛を。といひつゝ簀子の下掻探りて。とり出す草履二双を。直すを阿夏は推退けて。こは憚りで侍るかし。珠よ。お禮な申さずや。といはれて戴く珠之介。玉より風の吹かはる。峰の颪それならで。落ればおなじ言

が上にも富榮て。足ざるものはなけれども。そが孫女の弄翫に。取らし給ひし五色の玉の。いぬる日に喪たりとて。索求めて今なほ休まず。件の玉は五顆あり。その色各々同じからで。玉の裡には人物宮殿。山水花鳥の種々なる。鏤れるが如く透徹りて。定かに見ゆるものになん。然れば幼稚き孫女の。愛驩びて霎時も放さず。眞紅の組緒に串さて。護身嚢と共侶に。腰に著させ給ひしに。盗れたる歟遺せし歟。往方も知らずなりにたり。この故に彼娘さまは。件の玉をいと惜みて。人の諭解も聽給はず。夜に日にむつかり給ふになん。大父大母の二柱は。愛孫女の事にはあり。左も右もして慰ん。と思ひ給へど彼玉は。世に又得がたき貨にて。百金をもて買んといふとも。輙くいで來るものにあらねば。いぬる日より部して。失たる玉を索求め。或はト筮加持祈禱。みな術を盡し給へども。けふまでもその便りを得ず。討めかね困じ果て。玉は黄金孫女（名なり）のが遺せしを。福富三池の郡人などが。拐取り慾に惑ひて。隱して出さぬ事にや。と疑るゝとか聞えたり。この故に今晩は。甲乙こゝにうち聚合て。僉議を凝らす最中にこそ。と辭せわしく說示すを。阿夏は聞つゝ思ふやう。無慙や。いぬる日十々鬼の叟が。竊もて來てそが儘に。吾儕に預けし五色の玉の。主を定かに今知れり。件の玉は。愆て。うち摧くともあらん歟。と思へばはやくその折に。膚神符の嚢の中に。斂て衣領に掛てをれば。幸ひにして喪はず。今これをもて主に還さば。求めずとも盤纒は獲易し。情は人の爲ならず。と尋思をしつ

答を俟んず。といふに阿可加は領きて。そはこゝろ得て侍るかし。且く俟せ給ひね。と阿夏親子に會釋をしつゝ。庖湢口にぞ進み入る。然程に阿夏等は。阿可加を俟に良ありて。それにはあらぬ兩三個の。老僕小厮等うちまじりて。玄關の側なる。戸を推開つゝ紙燭を抗て。宿六叟は其首にやゐ給ふ。旅の女中をこなたへ。といふに宿六誘々と。阿夏親子を急して。倶に老僕にうち對ひて。迭の口誼。言訖れば。老僕は阿夏珠之介を。引て客房に赴くにぞ。宿六も從ふて。阿夏等が次にをり。こゝには坐席の上下に。菊燈臺を置れしかば。明きこと晝に似たり。老僕は既に退きて。立代る小厮等が。茶をもて來つ。乾菓子もて來て。阿夏珠之介に薦めけり。茶碗は對の錦手にて。菓子皿も亦鄙俗たる物にはあらず。珠之介は饑に堪ねば。件の皿を引よして。いくらともなく抓み喫ふを。阿夏はしば〳〵尻目にかけて。意をもて禁れどもその甲斐なし。左右する程に。阿可加は奥より出て來つ。宿六にうち對ひて。件の一議を奥さまに。云云と報まうせしに。家公もはやく聞給ひて。歡び給ふこと大かたならず。今對面してその玉を。見まくほし。と宣ひきと。いふ間にあるじ太夫次は。うち咳きつゝ客房に出て上坐に推處り。宿六夫婦にうち對ひて。旅人を案内の實義を勞ひ。次に阿夏等にうち對ひて。こは初ての見參にこそ候へ。老拙は當所の莊役。福富大夫次と呼るゝもの。大かたは宿六夫婦の物かたりにて聞れしならん。女中は都人でをはするよし。尚總角なる子息を倶したる。旅宿の艱苦さぞあら

の葉も。みな身勝手の人こゝろ。然らば吉左右俟んず。と目送る衆人。出てゆく。あるじ夫婦も相槌の。槌で帚く庭。門口諠。阿夏親子は諜々しさに。應するのみ。鐘冴る。五更の比に立出て。富には人のよるの道。名も慕しき福富の。宿所を投て急ぎけり。

第十回　關帝廟に少年義を結ぶ　福富村に幼女別を惜む

却說阿夏珠之介は。宿六夫婦を先に立して。ゆくと凡十町許。福富村に來にければ。いと苛めしき衡門の。左右は幾十間なる。土塀を折遶らしたる大莊宅。前面に見えたり。登時阿可加は阿夏等に。目今伴ひまゐらする。福富ぬしは那首にこそ。といふ間にはや近つきつ。外面より又見るに。這土塀の那方には。杪高く古たる松杉の。幾株か叢立たる。這方に塹を穿繞して。橋には。長くて廣やかなる。石二枚を渡したり。引るゝ隨に母も子も。角門より進み入るに。母屋までははなは遙にて。一町にあまりつべし。建つゞけたる土庫は。月影に白壁光りて。字母號も定かに讀まる。山腹なる村落にも。かゝる豪家のありけるよ。と今さらに驚き思ふ。阿夏は珠之介を引著て。玄關の傍なる。竹垣の下まで來にけり。登時宿六は。阿可加を急に呼とゞめて。そなたははやく後堂へゆきて。辞云云と報まうしね。吾儕はこゝで客人達と。倶に回

草蝕鰍。いと美しきものゝありしを。心ともなく見出して。立よりつ取あげて。視れば則その玉なり。山家に赶れしとき。行李も盤纏も喪ふたるに。これを售なば些ばかりの。盤纏にならん。と思ひしかば。膚神符なる嚢の中に。斂めて今宵の宿りに著にき。有右而あるじの不問自語に。おん身の噂。玉の事。そを索ねわび給ふといふ。縁由さへ定かに聞て。妾が拾ひしその玉の。ぬしなるべし。と思ひしかども。食言多き人こゝろ。世には相似てその物に。あらざるも亦尠からぬ。を人傳にては返しかたかり。先やその主に對面して。いはるゝ趣違はずは。その折に返しまゐらせん。と思ひし事の空しからで。はや疑ひの釋け侍り。然りとて報ひを望むにあらず。舊へ返すは本意なるに。受納められんこそ。妾も歡び侍るなれ。といひ迷したる漫語口吠。とは知るよしもなき大夫次は。聞つゝいよ〳〵感じて已まず。現律義なる女中ぞかし。人の遺せし物と知りつゝ。突倒しても掻取るが。今の世には多かるに。旣に盤纏を喪ひながら。貪婪の心なかりしは。實に見あげし賢女なり。玉はこの儘受納して。かばかりの報はしつべし。宿六阿可加も親切に。女中の案內せられたる。歡びは翌いはん。所要あらば還り給へ。先はや玉を孫に見せて。婆々にも媳婦にも歡ばせん。女中は子息共侶に。翌も逗留し給へかし。といひつゝ掌うち鳴らして。婢妾們は何してをるぞ。はやく夕餼をまゐらせよ。風爐の準備はいかにぞや。且く許し給ひね。と阿夏親子を慰めて。宿六夫婦を勞ひたる。歡び氣色にあらはれて。

ん。扨老拙が最愛の。孫女の候が。今茲はやうやく七才にて。名をば黄金と喚做たる。渠が秘藏の五色の玉あり。いぬる日それを失ひて。いと惜むと限りもあらで。夜も日もうち泣くのみなれば。蟲もや生らん。病もやせん。と婆々共侶に胸を苦しめ。人を替。術をかえて。賺もしつ索ねもしたれど。玉の往方を知るによしなし。爾るに女中も五色の玉の。相似たるを所持し給ふよし。宿六の內義に聞にき。その玉果してわが孫女の。愛するものと似たらんには。價はいかばかりにても厭しからず。携給はゞ見まほしけれ。といふに阿夏は膝を進めて。その事は宿のあるじに。傳聞て侍るから。誘引れつゝ夜を犯して。見參に入り侍り。妾が玉はこれで侍り。と應て衣領に掛たりし。護身囊の紐解披きて。出して見する五顆の玉を。大夫次やをり手に受て。懷紙皮の間より。取出す眼鏡の紐を。左右の耳に紏被けて。引よする燭臺の。火光に翳して彼此と。見つゝ思はず膝うち鳴して。奇なる哉。呀妙なるかも。這玉は是黄金が玉と。組緒の色まで些も違はず。抑おん身は這玉を。何處より得給ひたる。藏弆久しき事にはあらじ。と詰れど阿夏は阿容たる色なく。疑ひ給ふは理りなり。その玉はわが親より。相傳のものにもあらず。又購取たるものにもあらず。けふ來る途にて拾ひしなり。先や具に告まつらん。昨夕の宿を今朝たちて。ゆくてに多き岐道に。迷ふて山路に日を銷し。剰山家に赶れたる。路次の危難に其處ともわかず。脫れてこなたへ來る程に。枯殘りたる芒花の下に。花か木實歟。

婦の阿鍵。孫女の。黄金も遺なく聚合てをり。登時大夫次は。上座に進み坐して。妻と媳婦とに阿夏親子を。引わはしつゝ云云と。いふに屯倉も媳阿鍵も。膝推向けて慇懃に。初對面の口誼を演。喪たる玉をゆくりなく。返されたりし歡びの。繁き言葉も一樹の蔭。他生の縁と縁頰の。障子を背に謙退る。阿夏は止宿の管待の。歡びを述などしたる。辭の間にこの席なる。人人を熟視るに。屯倉は齢五十許。瘦肉にして辭寡し。阿鍵は既に二十の上を。五ッ六ッにやなるべからん。容止は尋常なるに。そが女兒の黄金のみ。肌膚清らかにして玉のごとく。眉目容貌の母に優れる。卵の中なる春の唐鳥。尚二葉なる花もみぢの。後の色香を思ひやられて。人の子ながら愛々しさに。ものいひかけて慰れは。屯倉阿鍵も珠之介が泛々ならぬ縹致を譽めて。その身の側に招き近つけ。名を問ひ。又年才を問て。壺なる果子を取らすれば。黄金も亦珠之介を。愛歡べる面色にて。岩踏架の下に措れし。繪巻の箱をうち披きて。珠之介に見せしかば。珠之介ははやくも狎て。黄金と倶に燈燭の。下によりつゝ遊びけり。登時大夫次は。又阿夏にうち對ひて。寔に不思議の縁しにて。人のうへにも誠ある。おん身の志を感するのあまり。件の玉の來歴を。詳にいはん聞給へ。今よりは十稔になりぬ。永正六年の夏の比。老拙一日草野に出しに。蛇夥蟠りて。高く卷たる栲繩に。相似たるを見し事あり。是なん世にいふ蛇甑にて。甑の中には寶貨あり。倘これを得たらんものは。富榮ずといふとなし。と豫て聞たるよ

玉を抱けど罪もなき。老人氣質せわしくて。立て後堂にぞ退りける。當下宿六阿可加等は。阿夏が玉を返したる。歡びを述。別を告て。三池の宿所へ還る程に。奴婢等は膳をもて來つゝ。阿夏珠之介に夜食を薦め。中酒の盃抓殺。田舍に似げなく美味多かり。殊に饑たる珠之介は。鳧肉の羹。鹽鰤の炙ものゝ。露も餘さず。骨さへ舐りて。飯は數椀を累ねても。いまだ足らざる面色なるを。阿夏はさらなり。給侍の奴婢も。傍痛く思ひけり。扨夕饍の果しかば。一箇の婢妾が案內をしつゝ。阿夏親子を誘ひ立て。浴室に準備の風爐に浴れて。湯を増し垢を吹きなどしたる。管待いよ〳〵叮嚀なり。既に沐浴の果し比。あるじ大夫次は。又奧より立出て。阿夏等にいふやう。嚮に返し給はりたる。玉を黃金に取らせしに。今まで泣たる愁の眉は。忽地歡びの笑貌となりて。幾遍となくうち戴き。愛玩ほど〳〵餘念なく。且くも手を放さず。只是おん身の賜なれば。老妻媳婦もおん見に被りて。この歡びを述んと欲す。夜ははや亥中に近かるに。長途の疲勞もあるべきを心つきなき所行に似たれど。翌といはんは俟わびし。後堂にて薄茶を進らせん。子息共侶誘給へ。といふに阿夏は推辭難て。思ひかけなき今宵のおん宿。酒食も風爐も叮嚀なる。おん欵待に物足りて。旅路の憂苦を慰め侍りき。然るを又奧さま達のおん目を給はるよしなるを。いかでか辭ひ侍るべき。と回答をすれば大夫次は。含笑ながら領きて。誘ひ立て奧まりたる。褊室に伴ひけり。こゝは妻子の出居の室にて。大夫次が妻屯倉。媳

金は大く愛歡びて。餘の玩器は手にだも觸れず。只玉をのみ身に引つけしを。取らんとすればうち泣きたる。穉兒に勝よしのなければ。護身嚢と共侶に。年來腰に著さしたるに。喪びしときは泣く孫より。泣立られし老拙が。愛惜の心は彌まして。憂苦に得堪ずありけるに。玉はおん身に拾れて。はからず今宵返されし。歡びを亦何に譬ん。こは天緣といはまくのみ。思ふに玉は竊みしものゝ。穿鑿大かたならざるに。怕れて途に捨たる歟。然ずは祈禱の利益にて。その偸兒奴が遺せしならん。爾りともおん身の如き。寡慾の婦人にあらざりせば。誰かもて來て主に返さん。感ずるになほ餘りある。誠心こそいと有かたけれ。かくいへば何とやらん。身のうへ話に似たれども。老拙一箇の孩兒あり。廼媳婦の良人にて。福富大夫五と呼れたる。今玆は二十七歳になれり。今戰國の習俗にて。耕すものも鋒を舞し。商賈も太刀を帶たり。かゝればわが兒大夫五も。只武士をのみ羨て。生業を旨とせず。をさ〳〵武藝を嗜しかば。老拙緊しく意見を加えて。教訓數回に及びしかども。些も用る氣色なければ。一旦の怒に乘して。勘當して見かへらず。こは懲艾の爲なるを。子は思はずや媳阿鍵に。休書を遺し措て。往方も知せずなりしより。既に三稔を歷たりけり。母の愁嘆。阿鍵が悲泣。さこそと思へば老拙も。後悔せざるにあらねども。孩兒が所在の知れざれば。召返さんとするに由なし。然れども媳婦は貞女にて。老たる舅姑に。仕へて黄金を護育ん。と誓ふて再醮を肯はず。只大夫五がかへ

しもあれば。快らぬものにしあれども。慾の爲には些も厭はず。單衣の袖卷揚て。群蛇の中へ手をさし入れ。搔撈る程に果して物あり。心歡びとり出して。つら〳〵見れば件の玉なり。初は五顆連りて。早には放かたかりしを。そが儘宿所にもて還りて。妻に示しなどする程に。奇なるかな件の玉は。おのづからに離れしが。紐徹の穴いで來にけり。軈て眞紅の緒に串きて。人手にかけず秘藏しつ。是よりの後。吾家の。生業年々に幸ありて。耕作交易。牧馬の利まで。五倍十倍の贏餘あり。かくて三四年を逕る程に。媳の阿鍵は有身て。はや臨月の過れども。分娩すべき氣色なければ。其身はさらなり。老拙夫婦も。安き心は奈加新田なる。醫師に見せて藥を徵め。加持も祈禱もせざるにあらねども。十二个月に及ぶまで。いまだ產の紐を得解かず。有如之程に行僧を。一ト宵宿せし事ありき。殊勝の老僧なりければ。廼媳婦の事を告て。安產の祈禱を請ひしに。件の聖うち聞て。そはいと易き藥方あり。竊に蛇脫を。煎じて媳御に飮し給はゞ。安產疑ひなきものなり。祈念祈禱は効なしと。敎て次の日出てゆきにき。現然る事のありもやせん。と思ひにければとかくして。求得たりし蛇の衣を。阿鍵には告ずして。煎じてこれを飮せしに。その夜猛に產の氣つきて。安らに產しは女の子にて。則これなる黃金なり。母さへ子さへ健に。肥立て恙あるとなし。こは初孫の事にしあれば。婆々共侶にこの身の歡び。愛慈みつ。年も稍。二ッ三ッになりし比。寵愛のあまり件の玉を。とり出してもたせしに。黃

十一回に。解分るを俟て聴ねかし。

近世説美少年録第一輯卷之五 終

り來るを。いつ〳〵までも俟んといへり。抑わが兒大夫五が。農商牧馬の活業を。嫌ふて武士にならまくせしは。素よりその所以なきにあらず。老拙が大父の時まで。世々鎌倉なる管領家に由緒ありて。扇谷殿に仕へしを。多病によりて退隱し。この地は先祖の舊里なれば。故の農家になりたるなり。因て彼御内にも。又當國の守の家臣にも。ふるき親族のありけるを。或は路遠く。或は世を隔しにぞ。今は迭に疎濶になりぬ。又その家の絶たるもありけり。そが中に。この兩三年。わが家に寓居る。鷲津爪作。日高景市といふ。兩箇の總角あり。渠等が親は當國の守。佐佐木氏高頼朝臣の家臣にて。老拙が爲には母堂の。親類で候ひしが。倶に愆る事ありて。身の暇を給はりつ。浮流の中に時疫にて。うちも續きて身まかりにき。そが母も皆世を早くせし。孤兒曹なるをもて。彼も此も養ひとりて。去歳より手習讀書の爲。本郡なる黄檗山。傳燈寺へ遣すなり。子息に年も等しかるべき。總角等で候へば。遊戯敵によきものならん。さばれ渠等はいぎたなくて。はや寝まりたりとかいへば。翌對面し給へかし。老拙不才不能なるに。幸ひにして衣食住に。乏しくもあらぬ身なれども。患る所は孩兒が事のみ。察し給へといひかけて。思はず嘆息したりしを。側聞する妻屯倉と。媳の阿鍵は堪かねて。涙のやる瀬なかりけり。畢竟あるじ大夫次が。これらのよしを説出して。又甚麼なる話説かある。抑この回はなほ長やかにて。數樁を累るにあらざれば。輙く當局を果しがたかり。なほ輯を續ぎ巻を易て。第二輯

文政己丑年。小滿前二日。杜鵑初鳴朝。書于神田著作堂

曲亭老人

美少年錄第二輯總論螟蛉詞

博覽群書尋故典。旁搜野史錄新聞。講談盡合三朝掄褒貶咸遵律令文。按捺姦邪尊有道。讃揚忠孝削讒人。零裁錦繡篇篇好。碎剪氷霜字字眞。春夏秋冬排景致。風花雪月按時新。丁當擊玉敲金字。別透蟠龍繡鳳紋。壯似秋風吹戰壘。清如夜雨上松林。助添豪傑英雄氣。感激忠臣烈士心。美玉良金思巧匠。高山流水待知音。當場告稟知音者。忙裏偸閒試一聽。　自從神代鴻蒙判。生民一治還一亂。政子治世天地陂。等持累葉綱常變。兩倫烏兎往來忙。五行正閏循環換。忠良姦佞本無嘗。上帝分明有成算。

近世説美少年録第二輯總目録

十一回已上總目録見ニ第一輯首巻一

本編所レ録スル起ニ大永二年壬午ニ至ニ享祿元年戊子一歳月凡八箇年小説

第二輯總題目完

附ていふ。大約草紙物語の剳入畫を看て。その好歹をいふ者は。畫の巧拙をのみ論じて。本文の意に違ると。違ざるとを思はぬも多かり。縦その畫は巧なりとも。蛇足の為に畫れしは。只是作者の面目を、損ざるものあると稀なり。かゝる故に。予は畫を學ざりけれども。とし來著す物の本は。必手づから畫稿をものして。その趣を畫者に示して。もて畫せずといふものなし然けれども畫工の意をもて。そを潤色する處。動もすれば本文の意に。違ふ事なきにあらず。譬ば這書の前輯なる。摺針山の畫中にも。又その次なる卷の畫にも。いかにぞやかくはあらじ。と思ふ畫像のありけるを。よく觀る人は知りぬべし。纔一卷に三頁なりける。剳入畫すらかくの如し。況本文に至ては。誤脱を正し漏せるも多かり。總て印本は人に誂へて。書せ畫するものなるに。又板木師の刊遺し。鐫謬るも少からず。然るを書肆にいそがれて。校じも果ずさし出して。後に悔しく思ふのみ。おのが綴りし卷々は。心に熟し目になれて。讀といへども倦訓などは。わきて誤脱を看遺すとあり。さばれ燈下の戯墨なり。しうねく眷戀すべくもあらねど。しかすがに是も亦。書籍のかたちせしものなるを。みづからはやくかいやり捨て。苦心を空にせんはいと惜し。

麻環の。繰返しつゝ物思ふ。親の心を子は知らで。ある歟なき歟の藻鹽草。かきも口說かば益なし。と思はれやせん鈍ましや。といひつゝも目を押拭へば。阿鍵も涕をうちかみて。心つよきは丈夫の。性なりとても。小動の。いそぢを既に過ぎ給ふ。二親のうへ。儚さ。この子の事も思はずに。他處に光陰を送られんや。悔ぬまでも舊里の。宿の檐下に近つきて。人を憑みて賠話もせず。天ゆく雁の翼にも。けふまで信聞えぬは。今諸州に多しと聞く。新關守に留められて。心に任せ給はぬならん。然とて恙あるべきや。深くな思ひ屈し給ひぞ。と慰る身も安からぬ。胸の痞のやる瀨なく。膝下憚る繻子の衿。皂と苦勞の眞身衣。汚れめ見えぬ媳姑の。美し過てあはれなり。阿夏はこれをうち聞て。よろづに足らぬ事もなく。いと優なる方ざまも。盈れば虧る浮世の自然。御こゝろの中推量られて。いと痛しく思ひ侍り。爾りとも父母君と。妹伕の中さへ遠離て。いつまで外にをはすべき。況かくまで愛々しき。娘さまのましますを。心つよきも事にこそよらめ。一ト日も千秋をふる鄕の。空なつかしく慕しく。思召べき該ながら。そは奥さまの宣ふごとく。新關などに留められて。思ふにと似ずをはすめり。然んには遲かれ速かれ。還らせ給はぬ事やはある。別れても又あふといふ。樂みあるだに悲しきに。妾が良人は七稔前に。人に擊れて世を逝り侍りき。そが讐敵も自滅して。怨霽けくなりしかど。この身ひとつで孤兒を。養育し艱難辛勞を。推も量らせ給へかし。終には京師に住不樂て。鎌倉なる

近世説美少年録第二輯巻之一

東都　曲亭主人編次

第十一回　舊情西を慕ふて阿夏起行す　遠謀程を警めて福富嚨を分つ

復説。福富大夫次は。その宵阿夏珠之介等を歎待て。黄金が愛る五色の玉の。來歴を説示し。語次に。獨子なる。大夫五が往方もしらず。なりにしことさへいひ出て。思はず嘆息したりかば。妻の屯倉も媳阿鍵も。禁め難たる涙の間に。屯倉は聲を隠らして。喃阿夏どのとやらん。遠世ありてやうち解て。初對面より恥しくも。哀しき事さへ聞れ侍り。吾兒を誉るにあらねども。大夫五はこのとし來。酒も嗜まず。色も好まず。愆とてはなかりしを。相應しからぬ武夫の。技に耽りて活業に。懈りしより爹々の一輸。勸解も意見も聽給はで。追出したる今では後悔。況や吾儕が心の中を。然こそと猜し給へかし。西も東も戰ひの。絶ぬ浮世に立んとて。武家に仕へてわれからに。修羅の街に死を爭はゞ。擊れはせずや。疵は負ずや。鄙語にいふ生兵法は。現大疵の基なりき。と悔しく思はゞ懲もせん。疾かへれかし還らずや。とかへらぬ事を

るじに問れしとき。鎌倉なる由縁許。ゆかんといひしは當座の慢語。彼處に所要なき身なれど
も。京師とても憑しき。親類もなく友もあらず。いぬる夜の夢まくらに。立せ給ひし聖の示現
に。親子が厄の釋るとも。故郷へかへりかたからん。と宣はせしを今さら思へば。且くこゝに
留りて。春にもならば周防まで。よき伴侶のいで來もせん。是も亦測りかたかり。凡慮の暨ぬ
所には。只御佛の引接に。任し奉るに優とあらじと。尋思をしつゝ立働きて。あるじ夫婦の機
を執しかば。屯倉はさらなり阿鍵まで。旦暮坐邊に擦著て。仇敵にしたりける。然程に珠之介
は。這家の寄食兒なる。鷲津爪作。日高景市といふ兩箇の總角に。對面せしその朝より。相驩
ぶと大かたならず。然でも年來深山なる。孤屋に生育て。世にも人にも疎かりしに。かゝる豪
家の客となりて。視に觸るゝもの耳に聽くもの。珍かならずといふとなければ。日毎に遊戲
れて。よき友垣を締びにけり。と思ふものから山賊に。養れたる秘事は。後々までもいはざり
けり。とかくする程にはや。今茲も冬の中になりつ。この月は都も鄙も。人の親はその子の爲
に。著袴解紐とか唱へたる。社詣の祝壽あり。富たるはなほ有に儘して。驕るが人の習俗なれ
ば。大夫次屯倉は豫てより。黃金が解紐の準備にとて。京樣の衣裳綺羅を盡して。裡衣までも
流行を旨とす。そがうへに玉の釵兒。玳瑁の櫛いへばさらなり。京攝より購求めし。物整ず
といふとなし。如之而十五日になりしかば。黃金に裝飾らして。城隍廟に參らせ。かへさ

些の由縁を。心あてに赴き侍り。さばれ年來世の亂れにて。迭に音耗絶たれば。今もなほ恙なくて。彼處にある歟あふまでは。落着きがたき旅宿に侍り。西國には珠之介が。父がたの叔父侍れども。路遠ければ訪ふに由なし。かう憂しく形なき。この身に思ひ比べ給はゞ。なほ憑しく侍らずや。といひつゝ涙さしぐみたる。他の歎きに復袖濡らす。屯倉阿鍵は共侶に。歎息の外なかりけり。そが中に大夫次は。つく〴〵と聞果て。噫。女中は思ふに優て。薄命なる人なりき。その鎌倉なる由縁とやらんの。疎遠で過せしうへならば。遙々索ねて赴くとも。今なほ恙なからん歟。其處までは測りがたかり。且今玆は去歳よりも。寒氣は一入早かるに。遠からずして雪も降るべし。是彼もつて女中の長旅。前路を急がば後悔あらん。春までこゝに逗留して。やよ。寛やかに赴き給へ。なほ詳には翌相譚ん。要なき身上的話して。人を泣しつ泣さるもせしは。噫われながら愚痴なりき。息子は睡げに見えたるに。母御も勞れさぞあらんを。心くまなく夜を深しぬ。とく〳〵臥房へ入り給へ。といふに屯倉は後方なる。侍婢を見かへりて。東のかたなる褊室に。阿客の臥簟を儲てあらん。案内をせよ。と分付れば。阿夏は軈てあるじ夫婦と。阿鍵黄金に恭しく。歡びを述て。珠之介を。急し立て侍婢に。引れて臥房に赴きけり。

却說阿夏は思はずも。這福富の資を得て。こゝに逗留する程に。その次の日も。次の日も。屯倉阿鍵は懇に。阿夏母子を慰めて。放遣るべうもあらざれば。阿夏は心に思ふやう。嚮にゐ

應て。既に立んとする程に。阿夏はかくと志らねども。朝化粧して來にければ。大夫次屯倉は含笑ながら。坐邊へ招き近つけて。縡云云と說示し。倉卒とぞ思はれんが。おん身は必管絃の貯藝のをはするならん。翌は黃金が解紐の。壽きの爲客を聚合て。賀酒を酌んと欲す。願ふはその折一曲奏でゝ。酒宴の興を添給はゞ。田舍料理も光を增て。あるじのみかは。賓達も。こよなき幸ひならんかし。この義を賴み申すなり。彼三弦はなけれども。琴は大小二面あり。笛も鼓もあるなれば。好みに任して出し置ん。承引給へ。と他事もなく。三人齊一請求るを。阿夏は聞つゝ含笑て。寔に推量せられし如く。糸竹の技はしも。穉き時より習ひしかども。久しう捨て侍りしかば。心もとなき事ながら。賴せ給ふを默止がたかり。筑紫琴こそよかゝめれ。寢緒になりなば斷もやせん。そこらの准備をし給へかし。といふに得たりと皆歡びて。なほ又示し合せけり。却說次の日の晡時より。五个合保の村長等。優得の百姓牧士馬買。福富が親類の。男女も是彼來にければ。儲の席に聚合して。前段後段と美味を盡せし。饗饌の種々なるを。くだくだしさに具にいはず。男客にはあるじ大夫次。女客には屯倉阿鍵が。薦たる盃の。二度三度と巡る程に。冬の日はやくも暮果て。處陝まで點したる。燈燭の花も亦愛たし。登時あるじ大夫次は。席の眞中に膝を進めて。袴の襵を左右へひからせ。扇を笏に聲ふり立て。諸君遺なく聚合せ給ひて。黃金を祝き給へばこそ。斯鬧しき夜飲に及べり。いと辱く歡しさ

に里の家々を。うち巡らせし光景は。從者さへに華やかなるを。人衆目覺しく思ひけり。この折にこそ大夫次は。曩に五色の玉の爲に。遠近となく奔走したる。村人等が軒別に。餅一盒を贈りたる。そが中に宿六をのみ。酒宴の席末に招きよせて。手織布一反を。牽出物にぞしたりける。こは一事兩用にて。一ツにはいぬる比。阿夏を案内致したる。辛苦を勞ふべく。又一ツには這回黄金が。解紐の祝義ぞ。といひ知らするさへ誇顔なり。錢ある人の費を數ふて。かゝる事にも吝なれど。勢利に附き下風に立つが。なべて世の人の情なれば。隣の貨を數ふるまでに。羨みこそすれ譏るは稀にて。愛たしとのみ稱へたり。是より先に大夫次は。屯倉阿鍵等と相譚ふやう。前々なる酒宴には。隣村に瞽女ありて。筑紫琴をよくせしかば。招きよせて興を添しに。近曾彼瞽女身まかりて。さる技をするものはなし。黄金が爲には財を惜まず。かくまで物の整ひながら。翌の酒宴に管絃の。准備なきをいかがはせん。むかし平新皇將門が。相馬に內裡を造りし時。諸司百官を置れしに。暦日博士のなかりき。といふにも似たる心地ぞする。そなた手段はなからずや。とうち戯れて潜めき問へば。屯倉も喲々とうち笑ひて。阿鍵は何とをもふやらん。華洛人は貴き賤き。みな遊藝を旨とすなれば。近き比より弄ぶ。三弦とかいふものすら。彼處にはやく流行りき。といふは實事であらんかし。よりて思ふに阿夏女郎も。然る技には疎くもあらじ。故郷は京ぞ。と聞たるに。只今召て問ばや。といふに阿鍵は有理と

る昔の杵束。粉挽歌すら田舎兒の。機を執る調子おもしろく。琴に合しつ果は又。扇拍子に浮さるゝ。藝なし猿の客あるじ。素人同志の膝舞蹈。犬居牛飲狐拳。負腹立で献々と。數献累る亂酌酩酊。奴婢も散動て幾遍となく。腹を抱へて笑へども。鷄のみぞ啼く八聲の比に。酒醼やうやく果にけり。衆客齊一辭し去て。初て風の凪たるごとく。樂竭て哀來たる。尚巳時なる幾十疊の。席薦は酒に汚されて。膩蠟燭の。眞斷る時に落にけん。鹿兒斑毛に焦たるあり。況庖厨で取近らして。うち摧きたる椀碟小鉢は。盞も留めず芥塒へ。放下して見かへるものもなし。貨悖て入るときは。悖て出る自然の勢ひ。富る家にはかゝる事。世にも又多かるべし。閒話不題その次の日に。大夫次屯倉阿鍵等は。齊一阿夏を勞ふて。その音曲に捷れしを。譽ると大かたならず。そが中に屯倉がいふやう。おん身の爪音の妙なるを。あれ程までにあらんとは。かけても思はざりけるに。現梁の塵も墜べく。汀の鶴も檐に來にけん。聲といひ節といひ。如此藝者は京鎌倉にも。儔多かるべくもあらずかし。いかで黃金に敎てたべ。明年ば八才になり侍れば。切て小曲子の三四章も。習せたうは思ひしかども。こゝらには然る師匠なし。賴れ給へ。と他事もなき。辭に携る阿鍵さへ。共に勸めて已ざりし。人のこゝろに悖らし。と思ふ阿夏は微笑て。寔に不測のえにしにて。今茲をこゝにくれ竹の。子さへ親さへなすともなく。杖を駐めて侍るなる。御蔭を思へばおほけなし。然ばかりのおん報ひは。願ふてもせまほ

は。限りもあらず候へども。然とてさせる款待なし。聞も及ばせ給ひし歟。厲京より子を携て。この地を過る旅の婦人を。以ありて留置るが。糸竹の技に疎からず。と聞しのみにて某も。いまだ本事を知らねども。俊蔭の女兒にも。劣らじとこそ思ふなれ。一曲聽せ給はんや。といふに衆皆笑坪に入て。そは興あるべき事になん。かく叮嚀なるおん管待に。物足りて候に。又京女郎の調子を聽かば。錦の上に花を添る。意外の快樂なるべけれ。とく〳〵。と促して。膝折直して俟程に。阿夏は屯倉が取したる。新しき衣いくつか被て。奥のかたより出て來て。衆人にうち對て。壽を述安否を諮る。ものゝいひざま愛敬づきて。客を躪さぬ進止は。舞子の餘風顯れし。姿の花は後れても。初櫻より匂やかなる。吉野の高峰に立顯れて。五節の袂を翻しけん。天津少女の姉ならずは。三穗の浦曲に天降りて。彼羽衣を松に掛たる。玉女の果歟と驚きおもふ。村長豪農牧士等まで。猛に貌を更めても。訛たる聲音を笑れじとて。應答すら慇懃に。菩薩を拜む心地せり。當時阿夏は後方に措れし。筑紫琴を推直して。掻撥す指の運びは。細小川の瀬を渡る。蟹の歩みに彷彿たり。節奏緩急その度に稱ひし且祝言の組唄を。聲妙に歌ひ果て。酒盛の間々に。京師で流行し梛節を。爪音高く歌ふを聽ば。むかふとほるは熊野道者歟。笠に挿たる梛の葉と。繰返し又くり返す。されば席上生醉の。呂律廻らぬ管も卷れず。雜譚閉口。水滴と。共に流るゝ感涙を。噀揚つゝ譽にけり。阿夏は原是歌妓の。客に熟た

西國も亦彼此に。軍起りて路程。難義にあはゞいかゞはせん。左ても右ても七八稔。音耗絶たる陶ぬしを。今茲是春訪ずとも。妹伕の緣し竭ずもあらば。環會ふ日のなからずやは。いまだ時節の至らぬを。急ば還て禍あらん。加以ぬし達の。斯懇切に留め給ふを。推辭てこの春出てゆかば。情は仇となるまでに。艦纏も多く得がたかるべし。且一兩年こゝに居て。時を俟こそよかめれ。と詩思をしつゝ答るやう。宣ふごとく鎌倉は。今さら便宜の里に侍らず。且由緣ある人の。存亡も料りかたければ。有繫に心進ねども。ゆかまく欲しきは周防なる。山口に侍るなり。彼處には珠之介が。親にも優たる一箇の叔父あり。年來疎遠なりとても。鄙語にいふ親の泣會。なほ憑しく侍るべし。しかはあれども懇切に。留め給ふを心つよく。固辭ば恩を知らぬに似たり。娘さまの器用なる。一兩年の程にして。奥印可までまゐらせん。と豫て思へば朝夕に。こゝろを用ひ手を煩て。敎まゐらせたりけるに。末まで得遂ぬおん別れを。妾も本意なく思はざらんや。今茲は思ひ留りて。仰に從ひ侍るべし。然とても子を携て。よすが求るとなどは。願しからず侍るなり。なほ且く珠之介が。事をし賴み奉る。といふに歡ぶ屯倉より。大夫次は幾遍となく。うち頷きつゝ含笑て。おん身の了簡寔によし。しからばこの月初午より。息子を傳燈寺へかよはして。爪作景市等と倶に。手習讀書を學ばすべし。あの子は今茲十才ならずや。はや年比になる童を。遊してのみ置く事かは。吾儕に任し給ひね。といと正首

しけれ。吉日を擇み給へかし。といふに頷く媳姑。そは歡しき事に侍り。きのふ暦を見たりしに。翌は閑で下段もよし。糸竹の技はしも。寒稽古とかいふとあれば。翌より教え給ひてよ。まづはや黄金にこれらのよしを。聞え知らして歡せん。といひつゝ立もいそしげなる。孫に使れ子に甘さ。恩愛情致相似たる。大夫次さへにこの日より。なべて阿夏を師匠と稱へて。乾淨たる編室を。彼等母子の部屋とし定めて。欵待日ごろに彌倍たり。却說今茲は果敢なく暮て。春如月の初旬一日大夫次は屯倉と共に。阿夏珠之介を招きよせて。茶を薦め果子を薦め。世の風聲に傳へ聞たる。東國なる軍の勝負を。說示す語次に。大夫次がいふやう。師匠さま聞給へ。おん身は豫て春にもならば。鎌倉なる由緣許。諮て行んといはれしが。彼處は戰馬の蹄に荒て。今も軍は絕ずと聞ゆ。然るを遙々赴かば。憑む樹下に雨漏て。後悔其處に立かたからん。黃金はおん身の丹精にて。稍彈法を覺しに。切て二とせ三稔の程教を受なば物にもならん。吾身勝手をいふにあらねど。他處によすがを求んより。いつ〳〵までも茲にをはせよ。おん身の縹致の世に捷れたる。眷想するもの多かるべし。再醮の歎しからずは。緩やかに壻を擇て。身の落著を料りてん。この議に從ひ給ひね。といふに屯倉も共侶に。辭ひとしく口說けり。阿夏はこれをうち聞て。肚裏に思ふやう。吾儕は豫て周防なる。山口とやらんへ赴きて。瀨十郎ぬしに今一トたびあふて。珠之介を遞與ん。と思ふこゝろの急れしを。今又思へば東のみかは。

きて。住持の教を受ると。一トとせあまりになる隨に。初の程こそ愼みて。手習讀書に實を入れたれ。後にはやうやく怠りて。住持の教訓を物とも思はず。爪作景市をそゝのかし。動もすれば外に出て。山に遊び水に戯れ。己が隨に擧動ふを。住持に報るものゝあれども。皆是大檀那に由縁ある。總角等なるをもて。罵りも懲しもし給はず。沙彌喝食にもこの意を得さして。倣書の折には爪形して。その上を摹寫せしを。褒美の高點許多ものして。宿所へもたして歸し給へば。大夫次屯倉阿夏等まで。かゝるべしとはしらずして。その上達を感じて已ず。折々人にも説誇りて。件の倣書を見せしかば。譽ぬものなんなかりける。有如之程に珠之介は。一日爪作景市等と。傳燈寺の庭に遊びて。潜やかに譚ふやう。吾子等は何と思ふやらん。今戰國の世に生れて。手習學問。何にせん。願ふ所は弓馬兵法。奥義を遺なく極めなば。遂にその身の運に乘して。一國一城の主にもなるべし。昔源の牛孺丸は。鞍馬寺にありし時。夜な〳〵出て彼山なる。木石を敵手にして。自然に劍法を煆煉しつゝ。平家を滅したるにあらずや。世に志氣あるものは。身ひとつでだに右のごとし。今吾黨は總て三名。こゝらに遊戯れて。徒に日を送らんより。いでや武藝の試撃して。共に青雲の足代に。なさずは後に悔しからん。縱師匠はあらずとも。一心凝りて懈らずは。何でふ牛孺に劣るべき。この議は誰何。と聶けば。爪作景市歡びて。こは微妙くもいはれしもの哉。俺們は素武士の子なり。弓馬は家業の事ながら。不

に相譚しを。老たる人の癖なれば。よろづに心せわしくて。その日老僕を黄檗山傳燈寺へ遣して。珠之介を教育の。事の趣云云と。住持に憑みまうしけり。これにより大夫次は。珠之介が手習の。机硯の類より。實語經さへ購求めて。準備はやくも整ふ程に。初午の日になりしかば大夫次は珠之介を將て。みづから件の寺に赴き。則住持に對面して。束脩の沙金一兩を進らせつゝ。爪作景市等に等しく。教育の事をたのみまうすに。住持はいかでか異議すべき。大檀那の事にしあれば。快く承引て。貧道豫りたらんには。凡心の及ぶまで。教導き候はん。貴意休かれ。と應をしつゝ。茶を薦め菓子を羞めて。他事なく款待給ひけり。かゝる故に珠之介は。稻荷祭の大鼓も得打ず。この日を本意なく消せしかば。快らず思へども。さてあるべきにあらざれば。詰朝より爪作等と。共に傳燈寺へ赴きつ。住持の手本を賜りて。安積山浪速津の。歌より習ひ刱めたり。阿夏は是等の恩義を感じて。いよ〳〵實を入れて。黄金に琴を誨えたる。只この技のみならで。結髪化粧何くれとなく。黄金が事は他手に被ず。孀母のごとくものせしかば。これを歡ぶ大夫次屯倉。阿鍵も共に珠之介が。稽古のうへには物を惜まず。紙なれ筆なれ乞ふに任して。錢を取らして買せにければ。爪作と景市は。去歳の春より手習入りして。渠が爲には師兄なれども。勢ひ雲壌の差あるに似て。還て珠之介に筆を貰ひ。紙を貰ふを歡ぶのみ。日毎々々に連立て。傳燈寺へぞかよひける。然程に珠之介は。件の寺に赴

の雛駒いと多かり。こはわが翁大大吹の牧もあり。他領の牧も合家たり。いかで牧童等を誘へて。馬に乘習はゞおもしろからん。といへば珠之介頷きて。そは究竟の計較なり。鎗劒法は士卒の所爲のみ。弓馬にあらずは誰かよく。大將の任に當らん。とくその牧へゆきて見ん。といふを景市推禁めて。やよ不覺になり給ひそ。彼野は他領と合併たれば。俺們が自由にならず。縦吾翁の馬なりとも。人の騎ることを禁せられて。そを戍る牧童廐屋に地り。何でふ貸て乘らせんや。といふに爪作頭を傾け。然ばとて乘らずもあらば。何の日にか馬術をよくせん。我今一ツの計あり。彼牧の童等に。錢を取らせ酒を飲して。相譚はゞ這事成るべし。とばかりにして錢なければ。せん術もあらずといふを。珠之介聞あへず。そこらは吾儕に任し給へ。箇様々々にわが母を。よくこしらへなば錢を得つべし。この議は誰何。と囁き示せば。爪作景市手を打鳴らして。その計畧極めて妙なり。よくしね氣暁られ給ふな。と謀し合しつうち連立て。軈て宿所に還りたる。その宵珠之介は母にいふやう。けふ師の塾の仰あり。翌は大文字の復學をさせん。唐紙各十枚あまりと。大きなる筆を准備せよ。されば村にはあることなけん。價銀をもて來ば所化達に。買取らして得させせんず。努な忘れそ。と宣ひき。このよし家公へまうしてよ。と寔しやかに欺くを。阿夏は知らず頷きて。そは大造なる復學なり。そなた一箇の事のみならぬ。爪作等のも景市等のも。おなじ稽古の事なれば。今宵奥さまに願ふて得させん。いか

幸にして親を喪ひ。孤となりしより。農家に人となるべきを。いと朽をしく思ひしに。この企は本意に稱へり。然らば準備をすべけれとて。山の樹を伐り竹を斫て。鎗とし木刀を製作して。試撃を旨としつる事。只一日にあらねども。こゝは山蔭林の中にて。方丈へも所化寮へも。その間近からねば。住持はさらなり法師們も。かゝるべしとは思ひもかけず。素より遨遊を常にすなる。總角等の事なれば。机に倚るは稀なるを。怪むものもなかりけり。これよりして珠之介等は。誰教るにあらねども。日をかさね月を累て。試撃に懈るとなければ。やうやくに自得して。此彼迭に優劣あり。そが中に。鎗は爪作に及ぶものなく。撃劍は景市捷れり。珠之介は組撃にのみ。偶勝を攬るとあるのみ。その餘の技は渠等に及ばず。いと朽をしく思ひしを。氣色には顯さで。獨つら〱深念をするに。吾は深山の孤屋にて。養育せられたりければ。嶮岨の奔走自由なり。且年七ッ八ッの比より。半弓を手馴して。兎をも射つ鳥を射て。射藝を自得したれども。こゝらにはさる弓箭なし。大門のこなたなる。關羽の廟の内にこそ。ふりたる弓箭を掛たるは。人の奉納せしならん。折もあらばとり出して。わがこの本事を見せんず。と思ふものから便宜を得ざれば。爪作にも景市にも。いまだかくとは告ざりけり。表話不題爪作は。一日珠之介景市等と。試撃の折に相譚ふやう。俺們は這兩三年。武藝に心を委ねし甲斐に。大刀條は良自得したれど。馬上の術はいまだ知らず。この寺の南なる。山鶯野といふ地方には。牧

と鞍こゝろを。叮嚀に指南して。徐方を宗としたりしに。爪作景市珠之介等は。迭に好む技なれば。漸く日數を經る隨に。劣らず優さず騎走らして。日毎に遲速を爭ひけり。是より先に阿夏等は。その曛昏に珠之介等が。水もて濡せし幾冊の。草子を抱きて還りし時。渠等が復學の大文字を。見ばやと豫て思ひしかば。まづそのよしを諮るに。珠之介は些も騒がず。けをは終日墨を摺たり。翌日は書くべし見給へ。と應てその宵を過せしが翌日は何とか答へん。と思へば有繋に胸安からず。次の日竊に爪作等に。よしを告謀し合して。又た黃昏に歸へり來つるを。阿夏は遲しと俟つけて。復學はいかにと諮るを。三箇の總角辭齊一。さればとよその事なれ。俺們終日精竭して。夥ものせし一行書を。師の聖に見せまつりしに。長老怒り罵り給ひて。汝等が懈怠勝なる。這書ざまは何事ぞや。なほ半年も十个月も。習ふてふたたび書て見せよ。是を宿所にもて去して。福富殿に見られんは。汝等よりも吾恥なり。噫無益や。と敦圉て。皆引裂きて捨させ給ひき。俺們なりとて月比日ころ。懈りしことはなけれども。機嫌の歹き折にやありけん。面目もなきことにこそ。と辭ひとしく欺きて。倶に頭を搔てをり。阿夏は是を實語として。それ見よ。日屬いはざること歟。爪さまも景さまも。懲給ひなば友吟味して。をさ〳〵精を出し給へといふに。三人は阿唯々々。と答て軈て立ときに。面を見合し舌を吐て。庖湢のかたに退りしは。夕饌食ん爲なるべし。阿夏はその宵珠之介等が

ばかりの價をもて。その楮毫を買るゝやらん。と問へば珠之介さればとよ。一人別に銀三兩。と長老さまの仰られたり。この義もこゝろ得給へかし。といふに阿夏は眉を顰めて。いと多なりと思へども。住持の分付給ひし事を。多少は論じかたかるべし、と思ひかへしつ云云と。屯倉に告て九兩の銀を。乞得てその詰朝。三箇の總角等に遞與しにければ。珠之介はいふもさらなり。爪作も景市も。意中笑つゝ受戴きて。草紙と共に袱に。推包み掻抱きて。倶に宿所を立出しが。傳燈寺へはゆかずして。軈て山繭の牧に赴き。こゝにおる牧の童。五六名を皆召聚合て。汝達は豫より。認來にぞあらんずらん。俺們は福富なる。爪作景市珠之介なり。わが村には友もなし。よりて交を結ん爲に。聊折乾を齎したり。受納せられば幸ひならん。といひつゝ紙に裹みたる。二兩の銀を取せにければ。牧の童等僉歡びて。俺們何等の德ありて。稚子の友にせらるゝや。加以思ひかけなく。この一包を給はるを。辭しまうさんは無禮なるべし。所要あらば何事まれ。承らん仰よと。いと叮嚀に應をしつゝ。件の銀を收めしかば。爪作等も亦歡びて。俺們殊なる望はなし。牧の馬を貸し給へ。乘習んと思ふのみ。といふに件の牧童等は一議に及ばす承引て。そはいと易きことになん。近屬牧士が乘狎したる。よき馬の候に。いづれになりとも騎せ給へ。といひつゝ軈て兩三人。彼此へ走り去しが。程しもあらず牧の馬。三疋を牽もて來つ。鑣子を被け鑣を取て。三箇の總角等に乘らするに。初の程は鑣に附て。靮捌き

もせば。みづから先非を悔べきぞ。知るとも知らぬ面色して。諜々しくいふとなかれ。と竊に諭し給ひけり。寔に出家の情狀なるべし。されば這黃檗山傳燈寺は。本堂の西のかたに。關帝の廟宇あり。禪家に關羽を祀るよしは。昔後漢の普靜長老。玉泉山に在せし時。關羽の靈を濟度し給ひしより。唐の高宗の時。蘄州黃梅寺なる。五祖弘忍禪師の徒弟。六祖神秀禪師。抖擻行脚して。玉泉山に錫を駐め。遂に伽藍を建立して關雲長を祀り給へり。これよりして彼土はさらなり。本朝にも亦黃檗宗の寺院には。關羽の廟を建ると。件の故實と聞えたり。神秀禪師の一條は開傳燈錄より出たり閑話休題。一日爪作景市珠之介は。這傳燈寺なる。關羽の廟のほとりに出て。礫打して遊戲れしを。事果てもなほ去らで。廟の閾に尻うち掛たる。爪作後方を見かへりて。君子等はいまだ知らずや。抑這關羽といふ猛者は。漢土三國の時。蜀漢の名將なりき。初漢の世のいたく亂れたるを討治んとて。劉玄德張飛と共に三名。義を桃園に結びしとぞ。曩に師の長老のおん物語にて。その大畧を聞くことを得たり。今俺們も亦三名。年來志同うして。骨肉に異ならず。縱關羽に及ばずとも。なすとなくて老朽んや。誘然らば。今この像前にて。誓を立義を結びて。久後までも相忘れざる。異姓の兄弟とならまく欲す。この議に同意せられんや。といふに景市も珠之介も。ひとしく本像を見かへりて。關羽の事は我等も聞にき。惜かな當初。彼曹操に從はで。見る影もなき蜀を佐けて。只義勇にのみ誇りしかば。終に吳人に謀られて。綁

いひけるとの趣を。あるじ夫婦に聶報しに。大夫次屯倉はうち笑ひて。童こゝろの正直なる。現さるともありけんかし。師の長老の折檻は。灸灼するより利方よし。それに懲なば實を入れて。この後はよく習ふべし。紙筆はいかばかり。費すとも惜からず。と應て眷念せざりけり。然程に珠之介等は。只分釋の爲にのみ。日毎に傳燈寺へ赴けども。手習讀書はよくもせず。けふも亦早卒業。翌も亦早卒業。といひこしらへて寺にはをらず。走馬擊劍に身を運動せば。腰辨當とか倡へたる。割籠のみでは足らずとして。竊に謀りて得たりし銀の。あるに任して彼此なる。酒肆に立よりて酒食を貪り。その餘れるを山蠶の。牧へをり〳〵もてゆきて。彼童弟に取らせしかば。僉歡びつ樂みて。珠之介等に使れたり。これにより珠之介は。軍の進退を習んとて。草刈る童さへ喚鳩めて。牧の童倶を士卒に擬らへ。その身と爪作景市は。大將に擬へて。馬に騎り相はなれ。迭に陣を布儲て。木刀をもて挑み戰ひ。追つ追れつ日を消すを。興ある事に思ひけり。既にして珠之介等は。件の銀を酒食の爲に。遺なく用果せしかども。なほ飽とをしらざれば。筆墨草紙の料にとて。親をも老僕をも詐欺りて。飲食に費す錢の。寡きにあらねども。富たる家の癖なれば。そを疑ふて禁るものなし。只傳燈寺の法師等のみ。これを知りて云云と。長老に報まうせしかども。住持は慈善を旨として。人の惡をいふを歡び給はず。況や渠等は總角なり。そをもの〳〵しく福富へ。聞え知らせんは大人氣なし。年十五六になり

るといまだ習はず。そをいかにしてよくせんや。といふに珠之介莞爾と笑て。弓箭に疎きは大將の器とすべからず。然らば本事を見すべきぞ。その折爭ひ給ふな。といふ辭いまだ訖らず頭は如月の下浣なりければ。歸り後れて天飛ぶ雁の。こなたを投て來にけるを。珠之介佶と瞻て。今彼雁の多かる中にて。一隻落して得させんず。といふよりはやく弓に箭刺ふて。仰ざまに彎固め。遣も過さず嫖と發せば。覘差はで一隻の雁の。胸より背へ縫留られて。弦音と共侶に。地上に蓦と墜てけり。今この綷の爲體に。爪作も景市も。驚き感じ舌を倦きて。兩人齊一額をつき。俺們思ひ足らざれば。おん身の射藝に捷れしを。かゝるべしとは思ひもかけず。憖に長短を論せしことこそ悔しけれ。けふより兄とし下風に立て。志を盡すべし。といふを珠之介聞あへず。しかいはるゝは分に過たり。心もとなきことながら。約束なれば辭するに由なし。とく〳〵准備をし給へ。といふに兩人こゝろ得て。爪作は遽しく。身を起し走りゆきて。隕たる雁を引提來るに。旣にしてはや死したり。その間に景市は。廟內なる桑裝の大土器を。折敷と共に取出せば。爪作は箭を拔きて。雁の鮮血の竭るまで。土器に受させて。更に又件の折敷に。雁を載て贄としつ。倶に形を改て。關帝を伏拜み。鮮血を啜り義を結びて。珠之介を兄とし敬ひ次は爪作。次は景市。異姓の兄弟と唱へたる。歡び限りなかりける。登時珠之介は。弓箭を又故のごとく。廟內に掛斂めて。爪作等に聶くやう。雁をこゝらに

首を刎られたり。そはともかくもあれ。俺們三名義を結びて。善惡共に辭するよなく。苦樂を等しくなすとあらば。後々までも憑しからん。一味合體勿論なり。といふに爪作歡びて。然らば一ト月一ト日なりとも。先に生れしを兄とせんとて。且その年歲を諮るに。爪作と珠之介は。この時十二になりたるが爪作は秋生れ。珠之介は冬生れたりといふ。又景市は一歲後れて。今玆は十一なりければ。爪作則配判して。然らんにはわれは是第一位の兄なるべし。わが次は珠とのよ。その次は景公なり。といへば景市頭を掉て。何でう年歲の多少をもてせん。百歲の翁でも。愚なるものはいよ〳〵愚なり。先やこの像前にて。大刀撃の勝負をもて。兄とし敬ひ。弟と倡る。甲乙を定むべし。といふに珠之介頷きて。その議寔に爾るべし。さばれ鎗も太刀撃も。皆是士卒の所爲なれば。勝といふとも兄たる德なし。且この處は本堂へも。所化寮へも遠からねば。大刀音を聞咎められて。禍其處に起りやせん。見給へこの廟内に。奉納の弓箭あり。弓箭は是大將の兵具なり。さればこそわれ武士たるものを。世に弓とりといふにあらずや。いで〳〵といひかけて。はや廟内に進み入り。柱に携り攀登りて。掛たる弓箭を取卸して。出て左右に挾み。兄弟達よ聞給へ。今這前面に的を立て。誰にもあれよく射るものを。第一の兄とせん。然るときは。物音聞えず。これ彼以便宜の所行なり。この議に從ひ給ひね。といはれて爪作景市は。頭を搔きつゝ、苦笑ひして。そはよき事はよけれども。俺們はけふまでも。射

ゝろをそれとはなしに。珠之介に説示せしは。この春二月の比なるべし。扨大夫次と屯倉等に。縡云々と別を告て。身の暇を請ひしかば。あるじの夫婦黄金さへ。よしを聞別を惜て。一ト日一ト日と留る程に。春も三月になりにけり。かくてあるべきにあらざれば。阿夏はしば〳〵大夫次等に。立まゝほしきよしを告て。かくいへば何とやらん。情をしらぬに似たれども。珠之介が親類とては。周防の叔父より外に侍らず。さるをこの春雨三夕。夢に見たるが心にかゝりて。頻りにゆかまゝ欲くなりしは。道祖の神さへ誘引せ給ふ歟。一トたび彼地へ赴きて。叔父公に對面したらんには。時宜に依り立かへりて。ふたゝび御庇に預るとの。あらじとは定めがたかり。枉て放ち遣らせ給へ。なほ此うへのお情ならん。と辭を盡して已ざれば。大夫次屯倉阿鍵さへ今さらに禁めかねて。しからんには力及ばず。黄金はおん身の丹精にて。奥印可まで得たりしを。なほ教えよといふに由なし。首途の准備をし給へとて。やうやくに承引しかば。阿夏はふかく歡びて。珠之介にも如此々々と。告て起行を急ぎけり。既にして翌ははや。首途と定めたる。その日大夫次は。聊送行の首途を儲けて。阿夏と珠之介を。出居の一ト室に招きよせて。屯倉阿鍵黄金等と。倶に留別の盃を勸めつゝ。久後の事までも。譚ひて慰めける。話次に大夫次がいふやう。寔に不測の値偶により。苟且ながら滿四歳。外ならず交參ひしは。過世ありての事なるべし。况黄金は糸竹の。技をしも教られて。都の手ぶりを會得したるは。全くおん

措たらば。道人等に怪められん。然ばとて棄るは惜かり。門前なる酒肆を頼みて。餒さして飽までたうべずや。といふに爪作領きて。いはるゝ趣き歹きにあらねど。然ではけふの要に得立ず。この儘售るこそ捷徑なれ。吾儕に任し給ひね。と應て雁を掻抱きて。立出るとき大土器の血に染たるを人には見せじと。左手に取て見かへり〳〵。墓所のほとりの垣に結れし、竹叢の中にぞ棄にける。却説光陰荏苒して。阿夏母子は福富の。宿所に在ると四とせあまり。はや五稔になりしかば。珠之介は十三歳。あるじ大夫次の孫女。黄金は十一にぞなりにける。されば阿夏は正月のころより。心ひとつに思ふやう。わが身圖らずこの家に。逗留してより既にはや五とせの春を迎へたり。あるじ夫婦の親切なる。始終の爲になるよしありとも。久しきときは初に似ず。六日の菖蒲となるものは。なべての人のこゝろなり。瀬十郎ぬしに別れしより。はや十あまり一稔の。長き月日を歴たれども。尙壯りなる齢もて。恙あるべうもあらずかし。わが身はとまれかくもあれ。珠之介は彼ぬしの。正しき胤であるものを。一トたび周防へ赴きて。見せもせず見もせずは。親たり子たる甲斐もなし。これらの事は豫より。思はざるにあらざりしを。恩義の柵を被られて。留められつゝ心にも。あらで今茲になりにたり。よしや老少不定なる。彼地に異なるとありとも。身は野ざらしの草枕。旅に命の終るとも。かくまで思ひ決めしを。ゆかで止なばなき後までも。冥土の障りになりぬべし。三月の比に首途せん。と思ふて

までに思はれ奉る。おん慈愛の辱さよ。翌より別れ奉りて。海山萬里を隔るとも。一トたび結びし好あらば。なほいつまでもこのおん宿所に。侍る心地のすべかゝめれ。珠よ。虚々外視なせそ。今の仰を聞たる歟。歎しうは思はずや。といふに頷く珠之介は。現々然なり。とばかりに。物あらためて云云と。いふよし知らねば默したり。大夫次は莞やかに。吁めでた。阿夏女郎。即坐に應せられしは。いひ甲斐ありて滿足せり。やよ喃阿鍵盃を。といふに阿鍵はこゝろ得て。軈て黄金と珠之介に。兄妹品の盃を。酌酬さしつ共侶に。久後かけてぞ頼ける。且くして大夫次は。準備の金拾兩を。とり出し紙に載て。これを阿夏に贈りていふやう。こは最些少にあなれども。贐に進らする。この寡きにも謂あり。西も東も旅路には。護摩の灰とか喚做さるゝ。騙兒なども多かるべく。人を害して盤纏を奪ふ。山豪も亦なきにあらず。爾るをふかく思はずに。夥の金を腰にせば。是殃危を招くものなり。周防に到て便り惡くば。速に歸來ませ。こは復返の路費のみ。這拾金も母御一箇の。腰に纏はゞなほ危し。五兩は珠之介の腰に卷して。分ち置てこそよかゝめれ。その故を誰何とならば。萬一路に禍ありて。母御の金を奪るゝとも。五兩は無事に殘るべし。只これのみにあらずして。奸智に長たる騙兒といふとも。十五に足らぬ總角が。夥の金を腰にはせじ。と思ふてその懐を。視被ざらんは必定なり。これらの思案あるをもて。財嚢もふたつ進らする。この議に從ひ給ひね。と說諭しつゝ長やかなる。

身の資に依れり。渠が爲に師なり弟子なり。年を累ねし親みの。今さら歎きとなるまでに。別を惜む渠が心を。いはでも推量せられたらん。知らるゝ如く大夫五が。在處は今に知る由もなし。世になき人ぞと思ひ絶て。かへり來ぬるをなか〳〵に。心當にはせざれども。然ばとて世繼の事を。眷念せざるにあらずかし。黄金も今玆は十一になりぬ。なほ三四年俟つけて。招聟せんと思ふのみ。爪作も景市も。みな姻類の孤なれば。渠等をがな。と思へども。農家となすべき性にはあらず。見屆けかたきよしもあれば。なきには優すべく。あるには劣れり。おん身の息子は眉目美しく。女子にして見まく欲さ。優質なれば是も亦。農家には相應しからねど。年來黄金と中よしにて。童男童女の差別なく。遊敵でありければ。屯倉阿鍵と商量したり。いかで黄金が兄品にして。盃を取替させなば。後々までも憑しからん。といふに屯倉も共侶に。幼穉き時に妹と佚の。緣しをはやく結びても。迭に年長人と成て。外に優華のいで來るものゝ。末遂がたきは世に多かり。その類にはあらずして。兄公と偁へ妹と喚ば。人と成ての後々まで。障りあらじと思ふにこそ。といへば阿鍵も正首に。良人が妻を妹と喚べるは。即女弟に擬へたる。親みに出る故と歟聞にき。然らば夫婦を妹佚といふは。兄と妹の義ならんかし。これらのよしもあるなれば。同胞もなき黄金が爲に。後々までの背盾に。賴んとての所行に侍り。この意を得させ給へかし。と等しく諭す人の誠に。阿夏は貌を改めて。數にも足らぬ珠之介を。然

と定めしかば。老實なる一箇の小廝に。浪速の浦まで送れとて。それらの准備もしたりける。又爪作と景市は。久禮畑まで送らんとて。共侶に起出て。僉共侶に朝出立の。箸とるだにも心のみ。共いそぎしてよくもたうべず。黄金は未明に臥房を出て。大父大母の坐邊にをり。登時阿夏珠之介は。行裝を整へて。あるじ夫婦阿鍵母子。この餘年來親しかりける。奴婢等にも別を告て。烏の森を離るゝ比。草鞋よ笠よと遽しく。送人を從へて。立出る折戸口には。爪作も景市も。身裝して俟てをり。又緣類のほとりには。立盡したる大夫次屯倉。阿鍵黄金に奴婢居多。皆再會を契りつゝ。目送る人もゆくものも。共に名殘をしか棲む。有繋に春の山里を。花なき宿となす心地して。齊一嘆息したりける。畢竟阿夏珠之介等が。遠く周防へ赴きて。又甚麼なる話說かある。そは次の卷に解分るを聽ねかし。

近世說美少年錄第二輯卷之一　終

纒腰嚢を取すれば。阿夏は共に受戴きて。思ふに優たる御親切。いかにしてこのおん餞の。寡きに侍るべき。况旅路の用心まで。遺なく教諭させ給ふを。いかでか背き侍るべき。珠之介も歡びを。とくまうさずや。とこゝろを付て。件の金をふたつに分ちて。兩箇の財嚢に斂めつゝ一箇はそが儘珠之介の。膚に著纒して。遺る一箇の財嚢をのみ。その身の懷に挾めしを。大夫次うち見て。それでよし。息子も絆のこゝろを得て。懷披て人にな見せて。要譚は且言果たり。屯倉よ。爪作は何處にをる。景市をも召給へ。渠等は年來珠之介と。俗にいふ手習朋輩なり。遊敵でありければ。さこそ別れの惜からめ。圓居に加て物食せんず。といふに屯倉は掌鳴らして。婢妾們に云云と。こゝろ得さして爪作と。景市を召聚へけり。然程に爪作景市等は。珠之介が母と共に。遠く周防へ赴くよしを。聞にし日より別を惜みて。是首に立。彼首に聚合て。その事をのみ耳語きしを。今この圓坐に招れて。本意あるとに思へども。あるじ夫婦の目前にて。事改りし酒讌なれば。飲食ひすらこゝろに任せず。いふべき事もいひ難て。をり〳〵痿痺を捺るのみ。人の背を盾にして。珠之介と耳語きつ。目を注しても果しなき。長坐に殆倦じてをり。長閑き日影も此彼の。もの譚ひに時移りて。はや黄昏になりしかば。阿夏は屢盃を。辭して珠之介と共侶に。歡びを述退きて。翌の首途の物とり集る。用意に更闌し。その夜を果敢なく曉しけり。前路の事も豫より。大夫次が指揮して。陸は新關の障あらん。水行をこそ。

あるじと見えたる一個の老人。遽しく出迎へて。阿客さまがた酒をや召るゝ。飯を進らすべうもや。と問ふを阿夏は見かへりて。竹葉は勿論飯もたうべん。菜羹は何々ぞ。と問かへされて。さん候。炙鯖に泥鰌の濃汁。獨活の酢茹も候。といふに阿夏は頷きて。吾儕は泥鰌を好まねども。あらん限り肴を出しね。前路を急ぐ旅なれば。竹葉も飯も這人數に。合してはやく頼むぞや。といふにあるじは聲ふり立て。誰そ來よ。お客の急せ給ふに。竈焼ずや。と呼れば。妻にやあらん應と答て。奥のかたより出て來つ。且阿夏等に口誼を述て。竈に蒼柴折焼て。はや羹を烹かへす程に。あるじは手はやく酒を溫め。折敷に肴を安排て。且阿夏等が身邊にもて來つ。程しもあらず妻共侶に。五前の飯を盛ならべて。誘とて軈て羞めにけり。そが椀碟の垢染たる。鼠色なる高盛の。飯に折敷の猫脚は。相應しからず。とうち笑ふ。珠之介はいちはやく。蓋とる汁は半椀澄て。鏡に似たり。人顔のうつれば。替る旅なれや。鹽梅さへに田舎備たれど。僉餓たれば霎時も措ず。酒を喫み飯をたうべて。腹十分になりにけり。かくても爪作景市は。別を惜み立難て。珠之介と相譚をるを。阿夏は急に推禁めて。和子達はとく還り給へ。家翁の候わび給はんに。といふに爪作景市は。思はずも嘆息して。阿母公は周防へ赴きて。何日か又かへり來ますべき。日は長かるになほ一二里も。送らして給ひね。といふを阿夏は聞あへず。しかいはるゝは誠心見えて。歡しう侍れども。よしや何處で別るゝとも。遺憾さはおなじかりな

近世説美少年録第二輯巻之二

東都　曲亭主人編次

第十二回　憂苦訴難く泣て帰帆を俟つ　繁華親易く漫に遨遊を専とす

紹前斷復説。宿六阿可加は。初阿夏を福富の宿所へ汲引せしものなれば。彼等が訪來る折毎に。年來親しうものいはれたる。阿夏は這回の遺裹にとて。或は櫛笥硯筥。旅行には要のなき物を。件の夫婦に取せにければ。宿六阿可加は受歡びて。翌は夙めて送らんとて。用意をする程に。宿六はその曛昏より。猛に風邪に冒されて。次の日も臥てをり。この故に阿可加すら。阿夏母子の啓行を。看立るとも得ならねば。本意なしとのみ聞えたり。却説阿夏珠之介は。爪作景市等に送られて。うち相譚ひつゝゆく程に。久禮畑といふ郷まで來にけり。這人家盡處に最寂寥たる。酒と飯とを賣る家ありて。門に立てる腰障子に。云云と記したり。既に亭午になりしかば。聊先に進みたる。阿夏は從者共侶に。這鄽前に立在て。後れて來ぬる珠之介と。兩箇の總角等を招き近つけ。こゝにて袂を分たんとて。齊一裡面に進み入りて。牀几に尻をうち掛れば。

船を索るに。明後の比は周防に歸る。船ありといふに憑しくて。且く是處に逗留しつゝ。扨福富へ遣すべき。歡びの消息を書寫め。又陶瀨十郎に贈んと思ふ。些の土產を買とりなどして。をさ〳〵その日を俟程に。翌は夙めて船を出す。と聞えたる甲夜の間に。阿夏は客賃を亭主に取らして。水行の足を問定め。福富より隷られて。この所まで送來たる。従者を勞ひて。件の書簡を委ねにけり。春の夜なれば果敢なく明て。追風よしと罵騷ぐ。舟人等に急されし。阿夏は珠之介共侶に。いそしく三板にうち乘りて。そが弘舸に赴くを。従者は水際に看立て。箆子を遞與し船に移して。母子のうへを水主楫取等に。憑むとすれど陸と水。告別すら浦風に。吹かどはれてぞ別れける。然程に。阿夏珠之介等が乘たる船は。浪速を出て幾日もあらず。順風はいと罕なりけるに。濕氣さへうちも續きしかば。是首の港口。彼首の漁村と。歇船にのみ日來を歷つゝ。春過ぎて夏もはや。陸月の某の日に。辛くして周防なる。山口に著にけり。長き水行に頭病せし。母さへ子さへ歡しさに。再生たる心地しつ。船より出て程近き。湊の町に休ひて。鄉導の爲にとて。人を傭ひ箆子を負して大内家の城下なる。鴻峯に赴きつ。粟津屋祥八とか喚做したる。客店に宿を投めて僅に疲勞を慰めたる。阿夏はその宵逆旅主人祥八を招きよせて。此の國主の御内人に。陶瀨十郎といふ刀禰あらん。そが宿所は何處ぞや。と問へば祥八眉を顰めて。否。然る人は知り候はず。大かたはなきなるべし。といふに阿夏も亦訝りて。

ん。宿六叟の來ましなば。かへさも心やすからんを。十五に足らぬ總角達の。路次を思へば影護かり。よしや是首にて別るゝとも。再會の日のなきにはあらじ。吾儕を苦しめ給ふな。といふに珠之介も嗟嘆して。母御の遠慮。寔に以あり。爪公も景公も。豫ての盟約を忘れずば。今の別は惜むに足らず。迭に年長時を得ば。全聚るとなからずやは。とく〳〵還り給へかし。といはれて頷く爪作景市。やうやくその意に任しけり。有然而阿夏は晝餉の價を。あるじに問ふて錢を取らせ。誘とて齊一外に出て。やよ和子達よ。忘れずに。家公にも奥さま方にも。遺なく傳語を稟してたべ。さらば〳〵。と先に立つ。母に引るゝ珠之介。從者さへに口誦を舒て。西を投てぞゆく雲水の。世は喧き春の日も。秋の夕の心地せし。爪作と景市は。姑く其處に立在て。見えずなるまで目送りけり。然れば母子はその次の日に。京師邇く來にけるを。阿夏は心に思ふやう。舊里ながら彼處には。親類もなく友もあらず。名所古迹を見まくほしとて。花鳥に浮れあるく。旅にしあらば邁もせん。年歴にけれど京師には。見しれる人のなほあらんを。憖に立よらば。恥かゞやかしき所爲なるべし。と尋思をしつゝ。京へは入らで。直に浪速に趣きけり。しかはあれども暮春の旅の。前路は總て花盛にて。民の門傍も。野も山も。眺望に遑なきものから。心は其處にあらぬ田打つ。細輪の田井に蛙鳴く。曛昏毎に宿りを累て。はや三四日といふ程に。兼葭が角組む浪速津の。船長の宿に著しかば。緈云々とよしを告て。便宜の出

の如くならずとも。陶氏の人なからずやは。翌より日毎に外に出て。叔父公の宿所の知るゝまで。問ふをその身の務にせよ。親に孝行のみならで。捴ては儞の爲なりかし。やよ。等閑になものせそ。と教諭して送る日の。一ト宵も千夜と安からぬ。身の病著は痊らで。誰は留ねど籠の鳥。啼ぬは泣くに彌ませし。苦しさ際なかりけり。是よりの後珠之介は。日毎々々に街衢に出て。神社佛閣に遊びくらし。又あるときは田樂雜劇の觀場にさへ立入りて。餘念なき日の多かるに。童は友に狎るゝにはやく。是首の坊。彼首の市に。遊戯敵のいで來にければ。樂しき事に思ふのみ。果は漸々に懈りて。瀬十郎が事はしも。人には問ずなりにけり。さりとは思ひかけざりし。阿夏はいかで興房の。所在を知らんと思ふ心の。且くも已ときなければ。復粟津屋のあるじ祥八にも。そが家の奴婢等にも。陶瀬十郎といふぬしの。おん宿所はいまだ知れずや。守の御内に相識あらば。問質してよ。と時々に。賴みし甲斐も夏過て。その菊月の中澣より。阿夏が病著良瘥りて。起居自由になりしかば。翌はみづから外に出て。城がたの人に近づき。情郎の存や亡や。問決んず。と尋思をしつゝ。初て結髮したる日に。逆旅主人祥八が。阿夏の身邊に來ていふやう。曩に屢憑せ給ひし。陶瀬十郎ぬしの事。やうやくに便宜を詢めて。最も定かに聞得たり。そは當館の權臣にて御座せし。陶遠江守政房大人の嫡男なる。駿河守興房ぬしの事なるべし。件の刀禰は初名を。津守に喚れ給ひにき。今より十四五年前つ比。一ト

いかでかはさるとあらん。こゝの亭主は知らずといふとも。巷に出て人に問はゞ。ぬしの宿所のしれざらんや。疎鹵なりき。と肚裏に。思ふものから推かへして。身の程輕き武士ならば。人に知られぬ事しもあらめ。國主の御内で一二を爭ふ。御侍の子息と聞にき。よく〳〵問定めて給ひね。と頼めども猶こゝろ得ねば。生應して退りけり。却說阿夏はその次の日に。巷に出て彼此人に。戀しき人の宿所を問ふて。とせんかうせんと思ひつゝ。起出し朝より。心地猛に常ならず。立ば忽地瞑眩きて。歩の運びのわれにもあらねば。思ふにも似ず臥てをり。さりとて已べきとならねば。珠之介を喚近づけて。けふは夙めて儞の叔父公を。諮んとのみ思ひしに。猛に心地の病しくて。一歩も得運し巨かり。こは月來の舟行に搖れし。疲勞にこそあらんずらめ。いかで儞は吾儕に代りて。出て叔父公の宿所を索ねよ。陶瀨十郎興房ぬしと。そこらに多かる人每に。問はゞ定かに知るよしあらん。卓午は特さら暑かるに。やよ菅笠をもてゆきね。といふに頷く珠之介。いはるゝ趣こゝろ得侍り。藥たうべて俟給へ。さはとて軈て身を起す。童の足の逸はやく。菅の小笠を引提て。外面望て出にけり。夏の日消し俟わぶる。親の心を知らぬ子は。その曛昏にかへり來つ。母御よ。けふも暑かりしに。阡陌を隈なくうち廻りて。或は人の門に立より。路ゆく人をも呼留めて。云云と諮ねしかども。陶瀨十郎といふ者は。僉知らずとのみ答たり。と報るに阿夏は起直りて。そは不審しき事になん。今はその名を更られて。初

然る縁由は毫知らで。近江の盡處よりはる〴〵と。來し甲斐もなく飛禽の。鶍の嘴と齟齬ふ。人の往方の憾しさよ。豫て左界にをはするよしを。夢になりとも知るならば。遠き旅宿はせまじきに。幾宵荒磯に船よせて。目睡難し波枕。安からざりし胸にのみ。おもひは海と山口の。宿も空なる日來歷て。戀しき人にあは津屋と。なりも果なん祥なるべきを。神ならぬ身の初より。悟らざりしぞ悔しけれ。什麼いかにせん。とばかりに。袖もて目皮を拭へども。涙のやるせなかりしを。思ひかへして貌を更め。こはわれながら愚痴にも。とり紊して侍るかな。遇まくはしき陶ぬしの。往方知れずといふにはあらで。所在を定かに告られしは。歎きの中の歡びなり。翌はこの地を立去りて。左界へ赴き侍るべし。といふを祥八推禁めて。戀り給ふな。とばかりならで。報べき事のなほあるに。歎きを制めて聞給へ。といふに阿夏は膝を進めて。そは何事で侍るぞや。とせはしく問はれてされば とよ。今玆は京師も五畿內も。波風旦く靜りて。四民安堵の思ひをなすよし。こゝへも注進ありければ。當おん館聞食て。しかゝらんには左界は。交代の大將を遣して。陶興房を召返し。渠が年來の勤勞を。慰め得さすべきものなり。と仰出されたりけるは。いぬる月の事にして。件の交代の大將は。既にうち立給ひしとぞ。俺們は町人の。事にしあれば。然るおん制度を。知るべうもあらざりしを。皆是上の御內人に。正しく聞たる事なれば。違ふべくもあらずかし。爾るを戀りて又さらに。彼地へ赴き給ふとも。

大約在京四稔の程。通稔上の大内義興おん伴にて。京師に陟り給ひし折。障るとのあればにや。上の御氣色を蒙りて。御舘に稱を改られて。瀨十郎と唱しこぞ。爾るに彼ぬしは。愆る事やありけん。上の御氣色を蒙りて。御舘に猛にこの地へ追返され。垂籠てをはすると。大約百日ばかりにして。御免しを被りて。御舘に出仕し給ひけり。有之し程にそがおん父。遠州政房世を逝り給ひしかば。軈て家督を承嗣て。駿河守に任せられ。奥さまをさへ娶り給ひき。扨その次の年にやありけん。男兒生れ給ひしかば。房子丸と名つけ給ひつ。今茲は八才歟九才歟。十可にもやなり給はん。爾るに和泉州左界の城は。往る永正六年の春。當おん舘義興なり菊池武俊征伐の。忠賞として。前將軍義稙公より。賜りたる。加恩の地なれど。上には御在京年來を歷て。永正十五年秋八月二日管領職を辭し給ひ。遂に當國に歸城ありしより。阿波の三好等時を得て。動もすれば左界の城を。襲寥んと欲するよし。その聞えあるにより。こゝにも軍議を凝し給ひて。迺おん身の諮給へる。彼陶駿河守興房ぬしを。左界の城の大將になされ。軍兵三四千名を隷られて。彼地を遣されしかば。興房ぬしは妻をも子をも。皆悉く携て。左界に在城し給ふなり。こは永正十六年。巳卯の春の事なりければ。今ははや四稔になりぬ。然るをおん身は彼ぬしの。京にて喚れ給ひたる。通稱をのみ聞覺て。瀨十郎とたづね給ひしかば。人も我も知らざりき。等閑とな思ひ給ひぞ。と報るに胸は塞りて。こゝに望みを失ひし。阿夏は霎時應も得せず。困じ果たる額を撫て。沈吟じつゝ扨いふやう。

給ひしに。永正四年夏陸月に。政元ぬしは浴室にて。家臣に殺され給ひにけり。因て京師は靜ならず。と間諜者の報まうせしかば。當おん館義興卿。猛に大軍を催して。義植公を補佐しまゐらせ。軈て京師に攻陟りて。戰ひ捷利を獲給ひけり。然れば將軍義澄公は。近江の岳山へ落させ給ひて。三稔彼處に御座せしが。竟に世を逝り給ひにき。この時にこそ義植公は御本意を遂られて。ふたゝび將軍に拜任せられ。故のごとくに世を治めて。政事給ひけり。皆是當おん館。義興卿の大義大功。儔多かるべうもあらざれば。冠位三位に陟されて。管領になり給ひしなり。抑京鎌倉の管領は。將軍家の御親族。志波細川畠山上杉の人々ならでは。成され難き事なりしに。鎌倉の管領憲實ぬし。世を厭ひ入道して。當おん館に身を寓給ひ。長門州深川なる。大寧寺に御座しければ。この入道長棟菴主を。館の御養父と稱まうし。則執事職を受紹ぎて。管領になり給ひにき。さるにより。篠圈爵の幕の紋さへ。憲實主より讓られて。今なほこれを用ひ給ふ。是より在京年を歷て。當館のおん權威に。肩を比るものはなけれど。應仁の兵亂以來。公武等しく衰微して物足るべうもあらざれば。軍役の雜費。その餘の事まで。館の賄ひ給ひしかば。財用竟に續かずして。難義に及び給ふ事多かり。加旃御領國には。野心のものも往々いで來て。隙を闚ふと聞えたり。この故に當おん館は。いぬる永正十五年。秋八月初旬に。管領職を辭し給ひて。當所に還り給ひしなり。是より京師はふたゝび亂れて。畿內に

亦蒐錯ふて陶大人の。左界にをらずなり給ひし。比にしゆかば悔しからん。大人の還らせ給ふ日の。遅速は測りがたけれども。這秋をやは過さるべき。この議に从ひ給はずや。といと正首に說諭すを。阿夏は聞つゝ歡びて。そは憑しき事に侍り。世は塞翁が馬とやらん。今の歎きの今の間に。歡びになりぬるは。母子のうへを神佛の。捨させ給はぬものなるべし。倩ものを按ずるに。寔に宣ふ言の如く。待ば甘露の降る日もあるに。左界で遭んは不定なり。猶も姑く逗留して。厄會にこそなるべけれ。就て疎にも思はれんが。こゝろ得がたき事侍り。當おん舘と宣ふは。曩に京師に御座したる。管領さまのおん事ならん。お家に例なしと聞く。重き職を辭せ給ひて。この地にかへり給ひしは。以てそあらめ。いかにぞや。と問へば詳八微笑て。浮世に疎き近江路の。山里より來ましたる。女中と聞けばさる疑ひの。釋がたくこそ有つらめ。一五一十を說つらねなば。言長やかになるべけれども。けふは聊暇あり。詳に告ん聞給へ。近曾京都の將軍家。義植公とまうせしは。東山殿（義政）のおん弟。今出川殿（義視）のおん子なりしを。東山殿養ひ立て。將軍になし給ひにき。（時に十二歳）爾るに管領政元ぬしの逆意にて。伊豆の勝幢院政知卿（義政の弟）の御二男なりける。義澄公（初名は義通）をとり立て。將軍になし進らせ。前將軍義植公を。いとも稠しく推籠て。家臣物部某甲が。宿所へ預置きたりしを。辛くも脱出させ給ひて。この山口に渡御まし〱。舘を賴せ給ひしかば。義興卿は精悍しく。興復の軍議を凝して。姑く時を俟

なれば。威勢といひ所領といひ。多く得がたき舊家なり。さは鄙語にもいふとあり。立よらば巨樹の陰。長き物には卷れよとぞ。噫益もなき長物がたりに。思はず時を移したり。といひつゝ呵々とうち笑へば阿夏も倶にうち咲て。現詳なるおん物語に。とのこゝろも定かに知られて。日來の憂を慰め侍り。既に推量せらるゝ如く。陶ぬしには大かたならぬ。舊き縁しの侍るなる。彼人さまに對面せば。求めずとも資はあらん。然るときは定めの外に。些の報ひをせざらんや。といふに祥八。又うち笑ひて。吁めでた。吉左右を。今より倶に俟んのみ。といふ聲聞てや女房が。家公々々と呼子鳥。おぼつかなくも出て來つ。女客には仂なく。親しうものをいはせじ。と思ふに似たり。ともすれば。疼ぬ腹を搜らるゝ。祥八はやく見かへりて。應と答て遽しく。納戸の方に退りけり。然程に珠之介は。この日も城下の町に遊びて。黄昏にかへり來にければ。阿夏はそが儘呼近つけて。嚮にあるじに報られたる。縡の趣如此々々と。首尾りを說示し。かゝれば今より遠からず。叔父公に遭して。見せもせん。見もせんその日を俟給へといふに。珠之介も歡びて。そは吉事を聞給ひぬ。爾らば翌より港口に出て。叔父公の船の著くといふ。風聲を聞定めてん。優かに待てをはせといふ。應答ばかりは大人しく。姑く親を慰めけり。俟ば久しき秋の宿に。きのふとくらし。けふと明して。捌月も卅日になりし比。阿夏が懐にしたりける。五兩の金を用盡して。纔に二三分殘りたり。現その該もあらんかし。阿

戰ひ巳ときなく。三好の黨跋扈して。主を主ともせざりしかば。義植公は去歳大永元年の春。三月の下浣に京師を出て。淡路に沒落し給ひければ。世の人なべて彼公を。嶋の將軍とまうすとぞ。是より先に義植公は。故將軍義澄公のおん子なりける。義晴君を養嗣として。播磨に處らし給ひしかば。義晴公は去歳の陸月。猛に上洛し給ひて。その冬十二月廿五日に。將軍に任せられ。室町の御所に在ませども。おん年纔に十一なれば。將軍は只名のみにて。世間いよ〳〵穩ならずといふ。風聲此處へも聞えたり。若る亂世なりといへども。當おん舘の御武德にて。山陽道は異なる事なく。國豐にして民肥たれば。京師の亂れに住不樂たる。公卿上達部の搢紳家も。這山口に移住みて。當おん舘に身を寓給ひ。又近國なる坊賈工匠は。各々生活の便著を求めて。皆この處へ來集つゝ。市中に軒を相連ねて。屋の上に屋を加え。港口の來帆絶る日なければ。諸國の名物輻輳して。自由ならずといふとなし。然れば世の人この地を稱へて。西の都と喚做たり。かくまで愛たき福地にあなれば。錢ある人は珠を炊き。桂をもて薪になすとも。容易かるべき事ながら。物の價の廉からぬは。唯是繁華の沿習ぞかし。客店なッどもよろづに準じておん身母子の日毎の客賃も。銀六錢目給るを。貴しとな思ひ給ひそ。編室なりとも他客を雜へず。貸際にせし坐席料は。勘定外にて輸てあり。駿州さま陶興房を諮給ふは。由緣ありての事なるべきに。左にも右にもこしらへて。這地に杖を駐め給へ。彼大人は先祖より。代々御家老筋

ずに。みづからおもひ給へかし。叔父公の宿所を尋よとて。出されしより日毎々に。京師にも優す繁華の地を。旦るより暮るゝまで。走り巡るにいかにして。纔に五十や三十の。仂鈔もて湯も水も。幾回か得飲るべき。茶價晝食是彼に。一分兌せば日南の冰。忽地消て。又一分。二分や三分は夢より果敢なき。五兩の金の使ひ方。手簿にはまだ志ねども。その大かたは知れてあり。人集する所には。人拉も亦多かれば。叔父公の宿所を知りたる人の。ありもやせんと思ふばかりに。歌舞伎の木門に立よれば。田舎兒ぞと侮られて。思ひかけなくしたゝかに。錢を取られし折もあり。神社佛閣に參りては。叔父公の所在を知らし給へ。と念じて投る十二銅。賽錢初穗も纏りては。一二貫の事にはあらず。或は鼻緒を踏斷らして。草履を買し日も多く。足の爪を蹴放ちて。賣藥店に憩し日もあり。夕立の傘。渡舟。錢の沒る事のみなれば。果はおん身に叱られん。と思ひながらも早晩に。用盡して侍るかし。これ見て疑ひ給ふな。といひつゝ懷に手を入れて。解出したる空搭膊の。口さへ輕き布の目に。漏るとは見えし虛淚。なき事までも有貌に。並立つゝいひ釋くを。阿夏は聽かず。聲戰して。噫。口功者にいへばとて。そがいひ譯になるべき歟。寔に錢鈔の沒るとありとも。吾儕に隱して汝が隨意。使ふて絳の濟とやおもふ。いかにすべき。と敦圉て。權しの火箸拿るよりはやく。背を礑と打懲せば。走りも退かず泣沈みて。咄御よ。免し給はずや。路費を用盡しても。叔父公に對面し給はゞ。外にの

夏は原是歌妓にて。世帯未熟の癖なれば。錢を使ふに心を用ひず。只是のみにあらずして。母子の客賃を一日に。銀六匁と定めたれば。月に百八九十匁の沒匁あり。逗留既に二月餘り。七八十日になりしかば。今霄財嚢を揮ふても。債なきにはあらざめれど。嚢に福富村を。辭し去んとしたる比。大夫次が計ひて。贐の金十兩を。分ちて五兩は珠之介が。膚に纏したりければ。尚頼もしくて憂とも思はず。件の金の竭る比には。陶氏の船著ぬべし。しからんには資を得て。盤纏に物を缺べからず。と豫て深念をしたりけん。阿夏はその霄珠之介を。傍に招きて潜やかに。珠よ。爾は思はずや。旅宿久しくなりしかば。吾儕がもて來し五兩の金は。月來の客賃に竭たり。福富ぬしの計ひて。爾に持し給ひたる。金のみなるぞ。母におこしね。長々御苦勞々々。といひ被て手をさし出せば。珠之介はうち騷ぐ。胸を鎮めて。喃母御。搭膊は。今も腹に卷て。舊の儘にて侍れども金は使ふて些もなし。といふに阿夏は呆果て。腹立しさに涙ぐみ。噫大膽なる。彼金を。爾に用盡せとて。福富ぬしの賜んや。こゝに宿りを定めし比。とく受取ん。と思ひしかども。吾儕なりとて女流なり。世に憑しき合宿なければ。賊難はなほ測難かり。爾は日々に出あるきて。宿にをると稀なれども。福富殿の敎を守りて。所要あるまで爾の膚に。預置なばなか〳〵に。安かるべし。と愚痴にも。思慮りし悔しさよ。什麼彼金を何にかしたる。慝ず報よ。いかにぞや。甚麼ぞや。と怨ずれば。珠之介も目を楊赤めて。母御よ。さまで怒ら

るゝとも。おん身の随意相計てん。あるじはさらなり。家の内の。奴婢にも知らする事にはあらず。吾儕に任し給ひね。と潜めき答る少年の。良らぬ事には怜悧なる。したり顔には機も屆かでや。示し合する親心。臥箪の行燈掻起しても。子ゆゑの闇に片明り。丁子頭は陶ぬしの。歸帆の兆歟。と母と子が。心祝ひも夢の世や。寢よとの鐘の響く比。倶に枕に就きにけり。

第十三回

垂柳橋に客婦絃歌を賣る
侯鯖樓に洛人舊妓を認る

却説阿夏はその次の日に。櫛笄と好衣の。旅には要なき物をのみ。箧中より取出して。袱に推包み。誘とて珠之介に遞與けり。示合せしとなれば。珠之介は。こゝろ得て。竊に市にもてゆきしを。いかに相譚濟しけん。思ひの隨に沽却して。若干の銀を得たれば。そが仂銀をば推掠めて。皆飲食に使ひつゝ。親には價を詭りて。氣色にも顯さねば。阿夏はさりとも知らずして。爾後もしのび〳〵に。要用ならぬ物を售ると。四五回に暨びしかば。件の箧は空しうなりて。今ははや親も子も。身に著たる衣の外に。貯祿はあらずなりしかど。陶が資を心當に。唯その歸帆を俟程に。世の風聲を知まく欲して。日々に珠之介を港口へ遣し。又祥八にも問などしつゝ。なすともなく日を送れば。紙窗撲つ風の音。簀子の下なる虫の聲も。朝な夕なは膚寒き。秋も僅になるものから。左界の便り聞えねば。阿夏はいよ〳〵俟はびて。又祥八に問ばや。

み見てやはをはすべき。客賃の債も。その折に。償ふ事の易からんに。その日をまたれぬよしやゐる。親一トはしら子一人の。おん身に痛く憎れては。世に立甲斐のあらずかし。されば覺期を究めたり。南無阿彌陀佛。と唱へも果ず。側に措きし纒腰嚢を。みづから項へ卷被て。はや縊んとする程に。阿夏は吐嗟。と推禁めて。やよ珠之介短氣をすな。いふ事あり。とやうやくに。捥取る財嚢で。目を押拭ひ。目今儞にいはれし如く。物乏しきも霎時の程にて。叔父公に再會したらんには。母子のうへは安かるべし。よしや儞に喪れたる。五兩の金はその儘ありとも。叔父公の資を得るよしなくば。豈二个月とも支んや。其處に心はつきながら。子をのみ責てわが愆を。思はざりしは愚痴なりき。水行の程はともあれかくまれ。こゝへ宿りを定めし折。件の金を受取て。吾儕の腰に纒て措ば。かゝる口舌はなからんを。後々までも福富ぬしの。誨を固く守りしは。船に契して劒を索め。琴柱に膠するとかいふ。諺にも似て侍るなり。然りとても錢鈔なくては。一ト日も送り難かるに。叔父公に再會せん日まで。吾儕が衣裳髮の飾を。沽却して所要に充ん。さばれこれらの趣を。宿の夫婦に知られなば。そは懷を見透されて。憑し氣なくなりぬべし。儞この誼をこゝろ得て。翌明後の比潜やかに。市にもてゆきて售ねかし。これより外に手段はあらず。と聶き示すを珠之介は。聞つゝしばしば頷きて。嬉しや免し給ひしな。その賣物の事はしも。是首の町にも。彼首の市にも。認來なる人多ければ。售とも質に典

が人傳に。聞とりていふとなれば。實語なりとは思はねども。心にかゝり侍るかし。おん身はいまだ聞給はずやと。問れて領く辭八は。いと困じたる面色にて。現然るとのありけるなり。某が聞たるは。四五日前つ比なれども。はじめは虛實定かならず。然るをおん身に報知して。驚かさんは要なき所行ぞ。と思ひかへして候ひき。爾るにけふは所要ありて。上の御內人許まゐりしかば。語次に諮まうして。既にして實を得たり。抑當將軍義晴公。世を治給ふ初より。和泉は管領武藏守高國ぬしの領地になりぬ。これにより左界の城をも。豪奪せんと計られけるを。城の大將陶ぬしは。權威にも憚らず。心つよく答まうして。承引べくもあらざりければ。高國のぬしいよ〳〵怒りて。尼崎なる從父弟尹賢。播摩の浦上なんどと謀し合して。大軍をもて左界の城を。短兵急に攻たりける。しかはあれども陶ぬしは。些も騷ぐ氣色なく。且く防戰ふ程に。內應のものありて。忽地城に火を放たれば。遂に防禦の術竭て。はや落城と見えしかば。陶ぬしは憑切たる。士卒二三百名を從へて。後門より突て出。寄隊を東西に擊靡けて。一條の血路を殺開き。妻子を扶導きて。濱里のかたに走りつゝ。准備の快船十艘に。一個も漏さすうち乘せて。洋中遙に漕ぎ去折から。只是運の窮にありけん。猛に風濤吹暴れて。そが八九艘は覆りて。幾百個の士卒眷屬。大魚の腹に葬られ。亦一二艘は。風のまに〳〵往方もしらずなりしとぞ。然程にいぬる比。興房に代れとて。遣されたる大將は。彼地まで到著かで。途

と思ふものから事繁き。人を呼んはさすがにて。なほ躊躇て在りけるに。この日も港口へ遣したる。珠之介がかへり來て。忙しげなる聲高やかに。母御よ。大變の侍るなり。叔父公の戍り給ふと聞えし。左界の城はいぬる比。敵の爲に攻落されて。士卒はさらなり大將も。戰歿をしてければ。こゝより交代に赴きたる。大將は期にあはで。引返せしといふものあり。言の虛實は知らねども。よしをおん身に報んと思へば。飛が似くに還りにき。といふに阿夏は胸潰れて。立まくしたる腰うち拔して。姑くはものも得いはず。纔に心を推鎮めて。珠よ。儞は何とか思ふ。然る風聲のあらんには。幾遍となく憑みたる。祥八とのが今までも。知ざるとのあるべきや。知らばはやくも報給はんに。その義なければ虛說ならん。とは思へども心もとなし。儞はふたゝび外に出て。言の虛實を問定めよ。吾儕は亦彼人に。問ふて疑ひを霽すべし。とく〳〵ゆきね。と急せば。珠之介は寔に然なり。と應も果ず衝と立て。裳を褰げて精悍しく。港口を望て走りけり。折からあるじ祥八は。外面よりかへり來つ。この日何處へゆきたりけん。阿夏に貸たる褊室の。邊を過りて遽しく。納戸の方に赴くを。阿夏はヤヤと呼留て。おん事繁くをはさんが。問まうしたき事こそ侍れ。といふを否とはいひかねし。祥八はそが儘に。立よりて坐を占れば。阿夏は聲を低して。問まく欲きは他事ならず。日來しば〳〵憑まうせし。左界の人の事になん。けふしもわが兒が港口にて。ある人に聞にきとて。如此々々と告侍り。勿論童

うやゝ奥に退りけり。されば阿夏は今さらに。身の措處を定めかねて。涙の間にとさまかうさま。久後を思惟るに。走るものは必速く。死たる人はかへるとなし。陶ぬしの事はしも。生涯慕ふて歎くとも。その甲斐あるにあらざれば。思ひ絶なば絶もせん。只當然る身の難義は。既に盤纏の竭たれば。近江へは得還りかたかり。然りとて馴染もなきこの郷にて。何をして世を渡るべき。身ひとつであるならば。火燒水汲む奉公しても。扨ありなんを慈に。尙總角なる珠之介を。携ては羈となりて。そも今さらに倣しがたかり。又渠ばは商賈許。仕へて小厮になれといふとも。保人に立つ人も得がたく。爲人も亦心もとなし。彼福富の吝嗇なる。百金にもなりぬべき。五色の玉を返せしに。五稔といふ長き月日を。思ひの儘に役使ふて。孫に琴さへ敎させ。奥印可まで取らせながら。世に定式の謝義なゝどは。夢にだも見せもせで。別るゝ折に。十金の。贐をすら恩がましく。臆五金を珠之介が。腰に纏さしたりければ。役にも立ずなりにたり。那折玉の價ぞとて。切て百金贈られなば。かゝる時にも心つよくて。ともかくもすべかるを。遭て恨を逃んにも。山海千里を隔をる。旅にしあれば阿它言ながら。天飛ぶ雁の侶に後れ山の獼猴の林に離れし。憂にもませし親子の往方を。定め難るも彼人の。心穢きによりてなり。さはあらずや。と肚に問ひ。腹に答つ身の幸なさに。人を怨みの愚癡妄想。歸るよしなき。近江なる籠勝手の神ならで。僉私勝手は。浮世の人情。腹立しさと哀しさに。衣引被ぎ

にてよしを聞しかば。驚きながらかへり來つ。撃漏されし城兵も。漸々にこの地へ脫れ來て。具に注進してければ。上にもこの義を聞食て。惜ませ給ふと大かたならず。左界は敵地に夾れたる。最も危き孤城なれども。將軍義植は。京師に在ます程は。後やすしと思ひしに。世の形勢の俄頃に變りて。權威他人に推移りしも。昨今とはいひながら。其所に心のまだ屆かで。嚮には交代の大將を。遣したるもわが愆。況興房を喪ひしは。なほ愆を累ねしなり。と御後悔ありとなん。こはその筋なる方ざまの。物かたりで候へば。浮たる言に候はず。といと正首に說示せば。阿夏はよゝと泣沈み。淚の雨に憂みの虫の。枝に離れし心地して。わくかたもなく歎きしを。扨あるべきにあらざれば。やうやくに思ひかへして。渧うちかみて貌を更め。世に薄命なる女子の。昔も今もなきにあらねど。吾儕にますもの多からんや。舊里に住わびて。出にし比は夫を喪ひ。又いひがたき情由ありて。怨を隱して仇に隨ひ。果は近江の山里に。留められつゝ年を歷て。戀しき人をたづね來し。甲斐も汀渚の片便り。磯うつ波もかへり來ん。日を僂て俟けるに。討擊るゝは。武夫の。沿習なりとはいひながら。かゝるべしとは知ざりし。うたてやぬしは大洋の。底の小屑になりにき。と人傳に聞くけふよりは。誰に憑ん身のよすが。進退谷り侍りたり。あふても別れは悲しきに。あはで別れし本意なさを。さこそと思ひ給へかし。哀しきかな。と聲立て。ふたゝび撲地と泣沈めば。祥八も立かねて。なほ叮嚀に慰めつゝ。や

ず。初京師に在し程。糸竹の技はしも。人なみにせし事なれば。鄙語にいふ藝は身を。資るよすがになりもせん。翌より日毎に街衢に出て。多かる人の門々に。歌曲を賣て親子の口を。餬んとこそ思ひ侍れ。客傚の債のあるべけれども。御心ながく取りてたべ。願ふはけふより生質にして。留め給はゞ幸ひならん。とおもひ入つゝかき口説く。涙ぞいとゞ進みける。妻はさらなり祥八は。つくぐ\とうち聞て。慰めかねて頭を傾け。噫おん身親子の薄命なる。今聞く如くならんとは思ひかけねば。うち驚れて。痛ましさも彌増たり。おん身が男子ならんには。言品もあるべけれど。同行すら十五に足らぬ。弱息なるをいかゞはせん。三十のうへを多くは過じ。と見ゆる女房盛なれども。この地に相識なしと聞けば。一期の事は馴染をかさねて。後にこそいで來もせめ。陶大人に由縁ある。女中なりせば門謠の。その日くらしは朽をしく。心裏恥しくも思はれんを。人の落魄といひながら。然までに尋思し給ひし。心の中さへ推量れば。歎息の外候はず。然ばとて今までの如く。阿客にしては措がたきに。おん身は且おん身の隨意。拵丁給ふもよかるべし。弱息は晝も留置て。或は水汲み走使ひの。小要を達さするものならば。彼子の客賃は取らでもよし。といへば又女房も。共侶に嗟嘆して。家三代の客店なれども。かく衰れなる客人を。留めし事は聞も傳へず。縁あればこそ損をもせめ。今さら出てゆき給へ。といはれぬは前つ世の。約束にもやあらんずらん。近属上の御家中へ。給事にまゐらせたる。

て臥てをり。且くして珠之介が。ふたゝびかへり來にければ。阿夏はやをら頭を擡て。枕方近く侍らしつ。獨に祥八に聞得たる。左界の實說如此々々と。報知しつゝうち歎けば。珠之介も當惑の。手を叉きて嗟嘆に堪ず。倶に頭を病するのみ。素よりその性老實ならねば。總角なれはかゝる時。商量敵になすよしもなき。阿夏はさしもいふ甲斐なくて。心いよ〳〵安からず。その通霄寐られぬ隨に。獨熟思ふやう。盤纏はどらなり。携來つる。物みな喪ひたりければ。客貸の債をいかゞはせん。こゝに處るにも居りがたく。出てゆくにも去易からず。いと面ぶせなる所行ながら。あるじ夫婦に懐を。著して憑まば承引て。憐るゝとありもやせん。告ずハ人のこゝろも知れじ。と尋思をしつゝ次の日に。祥八夫婦がうち揃ふて。納戸にをるを窺ふて。そがほとりに趣きて。きのふ左界の實說を。報知されし歡びを。竊に述て。扨いふやう。陶ぬしはわが亡夫の。親族で侍れども。道遠ければ年あまた。音耗絶て侍りしを。この春猛に思ひ起して。こゝにたづねて來つるなり。彼人京師に在せし時。預まゐらせし金あれば。盤纏は多く携へず。十金許侍りしを。半分は路の用心に。わが兒の膚に纏措せしを。遊び耽りつ何の間にか。失ふたればせんすべあらず。只陶ぬしを心當に。行篋の物を售などしつゝ。けふまでは侍りしかども。彼人空しくなり給ひては。頼む樹下に雨漏りて。何處に立ん樂浪の。近江へも還りがたかり。然ればとて馴も習はぬ。薪水の技を做まくするとも。人の役には立べくも侍ら

手習讀書を務にせしのみ。三度の膳も人に齊眉させ。飽までたうべ暖に衣て。心にかゝる雲もなく。樂しかりける事多かりしに。不覺に懲りておん身の淺慮。生る歟。死せる歟。定かならぬ。周防の叔父公におはせんとて。水行艱苦の旅宿をかさねて。遙々來つる甲斐もなく。叔父公には得遭ずして。辛き目にあふ朝な夕な。かくては命も續がたかり。赤貝の口開たる似き。這箇を見給はずや。親子乞食になり果るが。おん身は本意歟。樂しき歟。と飽まで親を窘むれば。阿夏も得堪ず。聲ふり立て。又しても不孝もの。吉も凶も皆是時の。星縈であるものを。今さら不足をいふとかは。福富殿の賜りし。五兩の金をあの儘に。爾に使捨られずは。よしやこの地を夜逃にしても。近江へ還る路費はあらんを。巳が隨なる事しつくして。親に乞食をさしながら。庖働きすればとて。さばかりの事せざらんや。と罵りつ又罵らるゝ。親子角口伪なく。血で血を洗ふ煩惱の。瞋恚の焔に照されて。黑かりし恥も赤うなる。顏の楓葉かつ散るまでに。負じ魂人は僉。傍痛く思ひけり。しかはあれども親子の恩愛。阿夏は竟に諍ひ負ても。言と意は表裏にて。その兒を惜しと思はねば。脆くも折るゝ柞樹や。颰寒き詰旦も。亦生活に出にけり。不題。鶴峯の城を距ると。東のかた十町許に。柳町と喚做したるは。最熱鬧しき地方なり。こゝに一條の川ありて。渡せる梁を垂柳橋といへり。橋の盡處に年ふりたる。柳樹あるによりてなり。この地は夏を旨として。船よりも歩よりも。群つゝ人の遊ぶと。譬ば京師の

女兒が穉かりし時。手ふるしたる三絃あり。樫梓なればよき物ならねど。貸まゐらせん歟。いかにぞや。と問慰めて他事もなき。夫婦齊一情ある。言葉の露に又袖濡らす。阿夏はいかでか推辭むべき。且感じ且歡びて。珠之介がうへをのみ。只管憑む親心。誰もかくこそあるべけれ。と思ふも不樂し朝口の。獵箭取る身にあらねども。祥八夫婦は窮鳥の。懷に入る心地して。猶も姑く慰めけり。却說阿夏はその次の日より。彼三絃を借取て。笠深くしつおぼつかなくも。鶴峰なる城下を。其處ともわかず門謠に。今樣早歌說經の。節も章句も都備し。聲は淚に隱口の。はづかはしくも口をしき。浮世渡の憂業も。日を歷る隨に稍熟て。西の都の幾町々を。遺なく唄ひ遶れども。一聲價一錢の。手の內なれば藻鹽草。搔集めても一日に。錢一緡は得易からず。況雨の日雪の朝は。一椀の糧も空しかるべし。初京師を在りし比。物足らざりし折々に。木偶介が小夏を將て。四條河原に立くらしたる。事しもこゝに思ひ出て。彼子がこの世に在るならば。資になるよし多からんを。繼女兒には劣りたる。男兒ばかり母の爲に。ならぬものかな。と呟くのみ。人に告べき事ならねば。心で泣ぬ日は稀なる。母はさらなり。珠之介は。宿の庖湢に役使れて。習ぬ技に暇なく。はや初冬になりしかば。霜柱たつ朝にも。とく起されて水を汲み入れ。北風寒き夕には。氷を摧きて。浴桶を焚く。艱難いふべうもあらざれば。人をも怨み親をも恨みて。阿夏が宿にをる折には。身の憂事を數へ立て。吾儕が近江に在りし日は。

顔に翳の袖牆や。聲も涙も籠りけり。あるじはこれをうち聞て。さればこそ思ふに違はね。その身のみかは子を携て。よるべの舟の楫を絶し。旅宿の艱難然ぞあらん。標致といひ歌曲といひ。門謠には惜かるべき。妙音妙手は以あるかな。就て一條の商量あり。知るゝ如くわが家は。日毎に客の多かれども。冬はことさらに歌妓なし。そを又所望せらるゝ折。他町へ人を走らして。呼迎るも煩しく。火急の要には立かたかり。和女郎わが家を宿にして。客人の需に應じなば。霜枯なりとも門謠の。淨了には優とあるべし。彼粟津屋の祥八は。宮嶋講中なるをもて。俺等素より相識なり。這商量をよしとおもはゞ。宿にも絆のこゝろを得さして。出なほして又來給へ。疑ふにはわらねども。彼處の旅人に紛れなし。と一筆示しおこされなば。いよ〳〵後やすかるべし。といふに阿夏は歡びて。そは有かたきまで忝き。おん計ひに侍るかし。よしを祥八ぬしに告て。翌より御庇に立侍らん。妾は夏と呼れ侍り。まだおん目にはかゝらねども。奥さまにも願ひ侍り。宜く傳へ給ひね。と口誼を述て遽しく。粟津屋へかへり來て。祥八夫婦に如此々々と。侯鯖樓のあるじにいはれし。絆の趣を告しかば。祥八も女房も。共侶に歡びて。その議定にしかるべし。侯鯖樓は講夥計にて。心ざまも克知たり。人に慈善の性なれば。為になること多からん。手簡を遣すまでもあらず。翌ゆき給はゞ人を跟て。云云といはせんのみ。と他事なき答に首尾を歡ぶ。阿夏は猛に心いそしく。珠之介を呼立して。件のよしを說示し。祥

四條に似たり。然れば茶店もいと多にて。飲食を宗とすなる。商賈の家尠からねど。冬になりては生業を。轉じて寂寞たるのみなるに。垂柳橋の邊なる。侯鯖樓といふ酒樓のみ。年中客の絕ることなく。冬は賞雪の船を寄せ。春は觀梅の轎子を。這鄽前に卸させて。卽席の酒肉の爲に。囊中を盡しても。恨みとせざる風流士多かり。閒話休題。阿夏は件の侯鯖樓の。熱閙しきを稍知りて。日毎に來つゝ門に立て。小曲子を妙に歌ひにければ。醉ふて矮樓に散動める客の。懷帋に錢を包みて。投與るも稀にはありけり。如之而日來を經る程に。有一日這酒樓に。客の小絕し折とも知らで。門に阿夏が立けるを。あるじは竊に呼入れて。卒爾には思はれんが。儞は世に凋落て。さる生活をするにやあらん。この地の人とは見えざるに。他鄕より來て侶を喪ひ。せんすべなさの技にあらずや。何處を宿にし給ふぞ。と問れて阿夏は慝むによしなく。こは憑しくも問せ給ふ。おん情の程推量られて。いと歡しう侍るかし。妾は京師のものなりしを。身の幸なさに近江なる。山里に移住て。憂歲月を送りつゝ。其處にすら又住わびて。この地の所親を心當に。尙總角なる兒を携て。はるばる來ぬる甲斐もなく。その親族はこの地に侍らず。剩近會身まかりにき。と風の便りに聞えたり。とかくする程に盤纏竭て。いかにともせん術なければ。わが兒を宿に預措て。かく淺ましき生活しつゝ。一日一日と送りぬる。宿はこゝより西のかた。博勞町なる粟津屋と。問せ給はゞ隱れはあらじ。恥しさよ。といひかけて。

近世說美少年錄第二輯卷之三

東都　曲亭主人編次

第十四回　苦雨初て霽て殘花春に逢ふ
樂地空しからず赤繩更に繫ぐ

再說彼武士は。その友人と共侶に。醉ふて侯鯖樓を出てゆく時。獨猛に立歸て。主人を招きて囁く程に。一夥なる武士は俟に得堪ず。嗤ひ罵り傍偟て。扇拍子を拿ながら。河原に添ふてゆく隨に。間遙になりにけり。有如之程に是首には。密やかに相譚濟して。又遽しく立出つ。外面に蹤居たる。從者を見かへりて。誘とばかりに前路の人に。追著んとて走りたる。さばれ生醉本性案はで。腰に帶たる兩口の。刀に諸手をかけたるは。鞘脫らせじと思へばなるべし。旣にして侯鯖樓には。この日烹炙に暇ある折。主人は妻を身邊に招きて。嚮に彼客にいはれたる。綷如此々々と囁き示して。儞この議を何とか思ふ。善と思はゞ試に傳へて胸を問給へ。綷成るべくはその折に。われ媒妁して得さすべし。といふに女房含笑て。聞くが如きは歹くもあらぬ。商量で侍るめり。總ては彼子の爲なるに。善は急げといふとあれば。目今召て告侍らん。

八夫婦に渠がうへを。なほ云云と憑みけり。かゝりしかば。次の日に。阿夏は結髪化粧して。侯鯖樓に赴きつ。姑くこゝに寓居て。客の招を俟程に。あるじはさらなりそが妻も。情あるものなりければ。客に薦めて生活に。暇あらせじとおもへども。巽二は杪を拂て。雁陣長列り。青女は橋を粧ふて。鶺鴒氷を渉る。冬の日子の事なれば。果敢々々しき客なかりけり。とかくする程に今茲は暮て。春正月の中浣。有一日うち連立たる兩箇の武士。各々一箇の従者を將て。何處にゆきたるかへさなりけん。侯鯖樓に立よりて。晝飯をたうべ酒を喫むに。こゝには歌妓ありと聞て。軈て阿夏を呼登し。謌はせもしつ酌を執して。盃を飛し笑ひ樂む程に。春の日ながら尚短くて。下晡になりしかば。件の武士等は酒席の價を。あるじに取して遽しく。かへり去んとしたりける。そが中に一箇の武士。年才は三十あまりなるが。出んとしつゝ又立歸りて。霎時あるじに聶きけり。畢竟這武士。あるじに對ひて。いかなることを相譚ひけん。そは次の巻に。解分るを聽ねかし。

近世説美少年録第二輯巻之二　終

をうち任して。人の妻にならまく欲せば。われ娶らんと思ふなり。この義を相譲ひ給ひね。と繰返しつゝ正首に。憑れ給ひし事しもあるを。吾儕は如今聞侍り。おん身のこゝろいかにぞや。と問れて阿夏は沈吟じたる。肚裏に思ふやう。わが身千辛萬苦して。この地へ來つるは陶ぬしに。珠之介を委ん。と思ひし事のあればなり。爾るに情願畫餅となりて。あふよしは絶果たるに。又誰が爲に節操を守りて。一生涯を愆つべき。とばかりにしてけふまでも。こゝによるべのあらんとは。思はぬ人に思はるゝ。吾儕はとまれかくもあれ。珠之介が爲にしならば。推辭べき事ならねども。人の底意は測りかたかり。よく問質して後にこそ。と深念をしつゝ頭を擡て。思ひかけなき婚縁を。かくは執持給はする。そは耳よりの歡びなり。然とて宿所も告られず。名さへ氏さへ定かならずは。初見參の酒興に乘せし。浮たる言に侍らずや。といふに主人は膝推向けて。さればとよ。その事なれ。俺とても彼客人を。何處の誰と知らざれば。今わが妻の說示したる。一條のみにては。媒妁すべき事ならねども。且聞給へ後段あり。扨彼人のいはれしは。某渠をけふ初て。眷戀てかくまで賴むにあらず。渠には舊き緣しあり。相別れしより既にはや。十稔あまりになりしかば。心ともなく面忘れして。渠に知らでありけるに。阿夏といふ名に心つきて。熟視れば看る隨に。それなるべし。と思ふよしあり。渠いかにしてこの地に來て。又歌妓になりたるやらん。問ずは疑ひ解かたかり。と思ひにけれど席上には。大

おん身も共に聞給へ。そが捷徑で侍らずや。といはれて主人は幾遍となく。うち頷きて。寔に然なり。今宵と約束せられしを。今さらに猶豫しがたし。とくこの處へ召よせ給へ。やよとく〳〵。と急しけり。この時阿夏は天井なる。是方の柱に身を倚せて。飽まで客に浮られたる。酒の醉を醒してをり。齡は既に玉鉾の。みそぢあまりになりしかど。妖艷たる姿の花は。今もなほ衰はで。閏三月の遲櫻。若葉に恥ぬ風情あり。斯暇あるときだにも。役使はるゝ了鬟が。忙しげに走來て。やよ阿夏さま。御室さまの。召し給ふにとくゆき給へ。家公も納戸にをはするぞ。といふを阿夏は見かへりて。そはうち揃ふて何事やらん。と問せもあへず。さればとよ。何事やらん知らず侍れど。とく將て來よといはれたり。といふに阿夏は眉を顰めて。常にはあらぬ主人夫婦に。召るゝはこゝろ得がたし。愆しつとは覺ねども。叱らるゝにはあらずや。とおもふものから思ひ難て。軈て納戸へ赴きけり。登時あるじの女房は。良人を見かへり聲を潜めて。喃阿夏との。今呼せしは家公の分付。然りとても餘の義に侍らず。些商量の侍るなる。やよこなたへ。と他事もなく。側に招き近つけて。人のこゝろもまだ知らで。媒妁めきたる言ながら。曩におん身を呼登したる。兩箇の阿客は武家がたならん。そが中に年紀。三十あまりとおぼしきが。かへさに家公に囁きて。おん身の事の根穿り葉を欲り。問れにければ隱すによしなく。有つる儘に報給ひしに。彼人竊に嗟歎して。そは痛ましき事なりかし。渠もしその身

名は思ひ出がたし。いはれしとの違はずは。とく來て名告あひねかし。然らば左いはん右いふて。身の憂事をつげの櫛。鬢の後毛搔揚て。人まつ緣の夕化粧。鏡も刀自に借物と。うち向へども影暗さ。日は沒果て燈火の。こゝへ屆かぬ片こゝろ。かゝる爲にと貯の。坐席遺りの蠟燭も。流れ渡りの身にしわれど。よろづよき日と曆手の。茶碗を覆す糸底に。建て彩る靨燕脂の。篠色も香も知る人に。見せなんとての所爲なりけり。春の夜なれば短くて。はや樓上に客もなく。門の戶卸す初更の比。彼客ふたゝび來にければ。主人ははやくこゝろ得て。且丁鬟に案内をさして。矮樓に登し茶を薦め。又盃を勸めけり。こゝは奧まりたる褊室にて。只一ト基なる燭臺も。いと趣ある心地はすめれど。彼客のこゝろ酒におらねば。はやく主人の出て來よ。何といひけん阿夏が回答を。聞まくほしといへばえに。岩越す波は連歌の額の。畵を瞻仰て候程に。主人は手づから一ト碟の。炙雞蛋をもて登り來つ。これを彼客に羞めていふやう。おん約束では候へども。魚肉は既に用竭して。聊野菜の遺れると。これらの外は候はず。一チ度過させ給へかし。曩に竊に賴ませ給ひし。縡の趣を遺もなく。阿夏に傳へ候ひしに。身ひとつならで子を攜て。他鄕に流浪へ侍れるを。舊き緣しのあるよしにて。娶らんと宣ふは。轍の鮒の江に放され。枯たる苗の雨にあふ。幸ひで侍れども。おん戲れ歟と思ひ侍り。來まさばふたゝびおん目にかゝりて。妾がうへを告まゐらせ。郞の素生もおん誠心も。定かに知せ給ひ

く醉ふたる友人ありて。便宜を得ざれば默止たり。さるを猶疑ふて。渠云云といふ事あらば。これらのよしを傳へ給ひね。思ひ合する事あるべし。といはるゝに推辭がたくて。その義はこころ得候へども。阿夏には總角なる。男兒ありて博勞町なる。客店に今なほをり。客僦の債も多かるべし。この義はいかゞ。と問せも果ず。彼人莞爾とうち笑て。そは聊も數しからず。わがいふよしを承引かば。左にも右にもせん術あらん。よく誘へて給へかし。われは宿所へ立かへりて。今宵亦來て回答を聞ん。只管憑む。といはれたり。有如之者酒興に乘されし。浮たる言にはあるべからず。と思ふによりてわが妻に。よしを告商量して。言のこゝに及べるなり。只是儕の爲にもがな。と妻にもいはれ。われもおもへど。後々までの吉凶は。神ならぬ身の測りかたかり。みづから擇み給ひね。と妻共侶に眞實だちて。聶き示すをうち聞たる。阿夏は頭を傾けて。彼人妾に舊縁あり。といはれしは誰にかありけん。早には思ひ出ねども。そは又對面せん折に。問はゞ定かに侍るべし。然る頼しき人ならば。おん媒妁を願ひ侍り。といふに夫婦は歡びて。なほ彼人の噂をすれば。影さす窓の梅の花。春の横日の暖き。黄昏近くなりにけり。却説阿夏は退きて。とさまかうさま思へども。思ひ難たる彼人の。舊き縁しのありとしも。いはれしは什麼誰なりけん。初京師に在りし時。纔に一二度酒宴の席で。ものいはれたる客なる歟。近江の人か知らねども。今さら思へば何處でやらん。見たりし人の面影ながら。その

昔の房衣。端磨目だつ帶の眞。折隱せども恥しき。燭臺を徐と引退て。背を陰に上坐なる。客に對ひつ。うち微笑て。おん約束の違はせ給はで。今宵よくこそ來ましたれ。銚子を更てもてまゐりぬ。おん盃を抗給ひね。といはれて客も笑しげに。喃阿夏。嚮に主人に傳られたる。儞の。回報は詳に聞にき。認らぬ中ではなかりしを。われは持病の逆上によりて。去歳の春より秋までも。久く顏瘡を患しかば。主君に姑く暇を賜り。有馬の温泉に浴みしつ。辛くして愈たれども。まだ疥迹の耗ざれば。面かはりして忘られけん。かゝれば儞を薄情なりとて。恨ん由もなきものから。彼陶氏を送らしたる。人の情は深草なる。茶店の首尾まで忘れし歟。といはれて阿夏は驚きながら。客の面をつくづくと。うち目戍りつゝ且恥て。原來おん身は陶ぬしの。親しく參り給ひたる。日野西さまの御侍。辛蹈ぬしでをはする歟。と問へば莞爾とうち笑て。然なり。辛蹈无四郎なれ。これは〳〵。とばかりに。霎時辭も奈末與民の。甲斐ある今宵の再會に。疾や初の疑ひの。忽地解し迭の歡び。无四郎は猶聲を微めて。喃阿夏。僂れば十あまり。二稔になりぬべし。儞は良人に伴れ。兩箇の子共を携て。鎌倉へとて啓行にき。と人の時に聞たるに。この地へ來つるは陶氏に。再あはんと思ひしならん。彼木偶介はいかになりたる。繼子の小夏は恙なきや。故こそあらめ。いかにぞや。と問るゝ阿夏は淚ぐみて。かさね〴〵て薄命なる。この年來の艱難劬勞を。告まうさんも心にぞ。いとゞ面なく侍れども。花

なば。いかでか推辭侍らんや。と如此まうしてこそ候なれ。這意を得させ給へかし。と告るにさこそと。彼客は。膝の進むを覺ぬまでに。一ト言毎に應をしつゝ。感謝に堪ず聞果て。そは歡しき事になん斯速に辭整ふも。畢竟足下の有功なるに。心祝の盃せん。といひつゝさすを辭ひかねたる。主人はそが儘受戴きて。傍に向て丫鬟に。半分盛して喫む程に。肴しつべし等給へ。と制めて手はやく懷より。圓金一ト枚とり出して。鼻紙に載て取らせけり。物得て怒る人なければ。推辭ながらも是さへ受て。歡びを述壽きて。扨盃を返していふやう。彼一ト條は云云と。目今まうせし首尾なれば。阿夏をこゝへまゐらせん。在下とても涙脆さに。去歳の冬より呼とりて。さて擇了て見たれども。一升胡盧は一升なる。薄命人で候へば。おん愛顧を願ふのみ。といひつゝ傍を見かへりて。子等よ。おん銚子の冷つらん。溫め更てまゐらせずや。とくとく立ね。と急して。先へ立して步下の。紙屑拾ふゐるじ態。現生活に脱落なさ。口も八調手も八調に。又一挺の蠟燭の。眞さへ截て退りけり。春の宵の。夢とし覺て果敢なくも。立し浮名は一十稔。かはり果けん面影を。認られしより草枕。客宿に結ぶ妹と伕の。緣しも神の隨意ならば。花さかずとも浮萍の。浪のうね〳〵根を絕て。誘ふ水こそよるべの岸と。人はいへども嶋通鳥。うき瀨ながらの西東。さして往方はまだしら張の。かさ屋阿夏が細骨の。瘦さへ見えて撓げなる。片手に銚子携て。登る階子に左褄。拿るだもわびし太織の。今の晴衣は。

へ來つるなり。爾が京師に在りし時。相見たる日は多からで。兩三回に過ねども。その折にはや心地迷ひて。世に生れて男子たるもの。斯美しく風流たる。女子を娶るとあらば。彼十五城にも易つべし。いかでと思ひ染にしかども。折からわれは新參にて。殿仕ひなるそがうへに。京師に名たゝる歌妓の。良人すらありと聞えし花を。いかにして手折得べき。企及ぶべからず。と思ひ絶て在けるに。陶氏と情由ある事の。聞えたる比深草にて。圖らず爾に遭ひしかば。吾儕果さぬ戀草の。憂かりし事を身に摘て。人の別れの哀からんを。想像りつゝ汲引して。爾を陶氏に値せしは。老婆親切に假たれども。只一朝の情にあらず。有右而爾も良人と共に。他郷に移住にき。と又人傳に聞えしかば。いよ〳〵戀は絶果て。さて在りけれども妻をも娶らず。わが親は陸奥なる。陝布の郷の郷士にて。農業を旨とするなるに。われは京師の手ぶりを慕ふて。國學詠歌を好みしかば。親には熟くいひこしらへて。京師に陟り所縁に就て。兼顯卿に仕まつれど。戰世の敝にて。主君幽に在せば。身を立るよすがもあらず。舊里よりは年々に。とくかへり來よと聞えしを。なほ田舍には優よしあれば。ふり捨がたくて今茲に及べり。雖然わが親の。齢七十を越給ふに。何時までかかくて在るべき。一たび故郷へ立かへりて。親の心を休めんず。と思ふによりて去歳の冬。主君によしを聞えあげて。身の暇を請まうせしに。然あらば明春大内家へ。年始の使を勤て後に。舊里へかへれかし。この年來老實に。麿に仕へし

の洛に住わびて。立出し比足引の。山拶する暴悪雄の。そが禍事におふみ路にて。木偶介も。彼小夏さへ。命はかなくなり侍り。妾は不測に刄を免れて。倘仯き珠之介を。鞠も育し千辛萬苦は。言一朝に盡しかたかり。かくて爾後情ある。里人の家に身を寓せて。去歳まで其處に侍りにき。舊里ながら京師には。憑しき親類なし。おん身には知られたる。情由も侍れば陶ぬしに。あふて珠之介が久後をいかでと思へど路遙にて。盤纏なければ思ふに任せず、こなたの空を年夥。瞻めくらしつやうやくに。情願稱ふて來し甲斐もなく。ぬしはこの地に在さず。剩左界の戰ひ敗れて。波路に沈み給ひしと。風の便りに聞えし折は。やる方もなき歎きして。倶に死まく思ひしを。子に羈されて殘る世に。盤纏も物も客儆の爲に。用盡してせん術なきを。人の情に歇船。かゝる憂身は室津海の。底より深き宿世の罪障。哀れと思ひ給ひね。といひかけてよゝと泣沈めば。无四郎も亦嗟歎して。思ふに倍たる儞の薄命。そを慰るよしもなき。陶氏の陣歿は。われも京師で世の風聲に。傳へ聞てとく知れり。爾るに這回この地に來つるは。是私の所要にあらず。廼主君のおん使にて。大内殿へ年始の佳儀を。述させ給ふによりてなり。嚮に共侶にこゝへ來て。酒もり遊びし一人ゝは。萬里小路賢房卿より。これも亦大内家へ遣されたるおん使にて。某甲と呼るゝもの。旅亭は俺と一所にをれり。彼人は大く酔ふて。還ると聽て熟睡をしたるに。町宿なれば出居も易かり。然るにより伴をも倶せず。ふたゝびこゝ

あれば樓上にては。問も果さず。かへさに門より立戻りて。主人に問へば良人はあらず。珠之介とか呼れたる。獨子ありて他所にをり。阿夏が流浪の顛末は。箇樣々々と報られたり。こゝに至てわが疑ひの。半分は解けし春の雪。ながれ〳〵てゆく水と。人の往方の定めなく。東路にとのみ聞にしを。西の都に在明の。月にも優て思ひきや。十稔絶にし戀風の。復這浦に起んとは。わが身にはまだ妻もあらず。相譚よりて緣しを結ばゝ。舊里へ將てかへらんず。と思ひにければ些も擬議せず。軈て主人を媒妁にて。とく娶んといはせしは。豈一旦の浮氣ならんや。赤き心をその折に。はやく儞に知せん。と思ひし義のあればなり。陶氏のうへはしも。俺も一面の交りあれば。悼みおもはぬにあらねども。逝者は日に疎く。流るゝ水は去て返らず。儞年來彼人を。思ひし如く今よりして。吾儕を思ふ誠あらば。天にも地にも誓を立て。後の世までも夫婦にならん。從るゝ歟。甚麼ぞや。と問つ口說つ風流士が。風流女子に色深き。情を花のかへり咲。散らまくをしき相譚ひに。阿夏はいとゞ遣る瀨なさに。潸涙を稍拭ひ斂めて。賴しきかな幸踏ぬし。然までに思はれ侍らずとも。否とはいはぬ辭船の。最上の川も遠からぬ。その陸奥なる舊里へ。伴んとまで聞え給ふ。神をかけたる誓言に。十稔の憂苦を慰め侍り。然けれども伯勞町なる。客店には債あり。珠之介も彼處に侍るを。いかにかすべき。と問せもあへず。その義も心安かるべし。嚮に主人の云云と。告られしにより既にはや。この方寸に分

ものなれども。知る丶如く不如意にあなれば。取らすべきものもなし。この義明春別紙をもて。周防へ頼み遣さば。京兆義興を必賜ものあらん。急ぐは要なき事にこそ。といと叮嚀に剳め給へば。有がたきまで忝くて。御意に随ひ奉り。故郷へは云云と。君命を傳知らしつ。春立朝の霞をわきて。當國主に由緒をはします。萬里小路賢房卿のおん使と。共侶に京師を出て。いぬる日這地に著たるなり。かくて鶴峯なる城に到りて。主君のおん消息を呈しまゐらせ。城下の旅亭に退きて。且く逗留せし程に。ふたゝび城中に召入られて。國主の見參に入り奉り。則おん報翰を遞與されし折。内々の義をもつて。思召旨あるよしにて。某には折紙附たるおん刀と。時服一襲に。沙金五十兩をとり添て賜りたり。是併わが君の。おん計ひによるものなれば。時の面目この身に餘りし。歡びをまうして退りにき。かゝればこの地の所要は果たり。翌隔翌の比立去らばやとて。賢房卿萬里小路のおん使と。勾當なぞする程に。彼おん使のいへりしは。垂柳橋の邊にこそ。名たゝる酒樓ありと聞たれ。京師の裏に誘給へ。今より其處に赴きて。倶に醉を盡すべし。といはるゝにわれも亦。路の向寄に所要あれば。共侶に旅亭を出て。こゝに來て見れば。果して違はず。客歌妓さへありといへば。召登して絃歌を聽くに。その面影も聲ざまさへ。笠屋阿夏によく肖たり。それかあらぬ歟。とばかりに。進止にこゝろをつけしに。その名を夏と呼るれば。いよ／＼違ざりけり。と思ひながらも亂酒の最中。一夥なる人に憚

なる。日野西さまの御内人。辛踏ぬしと呼れ給ふ。素より由縁の侍りしを。おん顔瘡の迹耗ずして。面かはりさへし給へば。見るゝ、惑ひて侍りき。といふに又兇四郎も。猛に辭を更めて。只今阿夏が報たる如く。吾儕は兼題卿のおん使を奉りて。當國主へ參向したる。辛踏兇四郎寧成なり。主用も綷果たれば。阿夏母子を相伴ん。といふ歸京の商量決着したり。渠は素より脱れがたき。由縁のものにあなれども。相別れてより十稔あまり。迭に信絶たれば。その窮阨を拯ふに由なく。きのふまでも知らでありしに。幸ひにして資られたる。和殿の俠氣。感ずるにあまりあり。いかばかりなる報ひをなすとも。慊るべくもあらざるを。旅にしあれば愚意に任せず。陶氏在京たりし時。友垣縫びし事さへあれば。懷舊の長談に。思はず小夜を深したり。といふに主人も歡びて。原來京家のおん使なる。刀禰們にてましませし歟。然る方ざまとは知ずして。大く無禮を仕りぬ。彼子をこゝにて擇了せたりとも。本錢を得たる事にもあらぬに。誰にか謝義を受候べき。幸あるよすがを歡ぶのみ。可愛たし。と祝きて。復盃を勸れば。兇四郎殆實坪に入りて。阿夏と共に獻つ酬れつ。ふたゝび盃を巡らす程に。はや眞夜中になりしかば。兇四郎は別を告て。客舍にかへらんといひけるを。阿夏はさらなり。主人も禁めて。路次の程心もとなし。今宵はこゝに曉し給ひて。翌は未明にかへらせ給へ。といはるゝとも情かゝず。素より望む所なれども。有繫に早には從ひ難て。幾回となく立まくしつゝ。

別あり。われ幸ひに大內殿より。賜りたる金あれば。客儎の債を償ふべし。又珠之介は儞と共に。京師まで將て還りて爾后に亦せん術あらん。よしや今より吾兒として。舊里へ將てかへるとも。厭しからぬ事ながら。如右なしがたく思ふよしあり。わが親は理に強き。古代氣質の翁なれば。儞は這回主君より。賜りたる女房なり。といひ瞞めなば障はあらじ。さばれ總角なる子さへある。孀婦なりきと告まうさば。外聞も妙ならず。親も戯けきものとし怒りて。口舌これより起りやせん。然るときは儞の爲にも。珠之介の爲にも歹かり。因て且渠がうへは。主君に願ひ奉り。姑く京師に遺し措て。緩くわが家に召とるべし。腹料は是のみならで。這回儞を伴んに。賢房卿のおん使と。共侶には還りかたかり。吾儕は病に假托て。且彼人を急して。出し遣らんと思ふなり。この義も後やすかるべし。といふに阿夏は歡びて。緯遣もなきおん身の計ひ。京師は妾が舊里なるに。珠之介を那里に留めて。豫て知られ奉る。西の御家兼顯卿に聞えあげ。仕へまつらし給はらば。陸奥には憚の。關の門鎖を許され傳。將てゆきがたく侍るとも。妾が心は安かりなん。霜の撫子雪の松。右にも左にもおん愛顧もて。浮世の春に遇し給はゞ。親のみならで渠も亦。幸ひにこそ侍らめ。と憑む言葉の露の間も。最肅やかに相譚ふ折から。忽地階子の蹴む音して。主人はふたゝび陟り來つ。奈何那おん商量は。整ひて候歟。と問つゝ圓居に入る程に。阿夏は急に席を讓りて。鈍ましかりき親方さま。このおん客は京師

く腹痛みて。水瀉しば〱なりければ。通宵寐も睡られざりき。憶にきのふの宿醒にて輕症にあるべけれども。兩三日も保養せずは。長途の旅行心もとなし。然ばとて定めある。歸京の日期を等閑にして。御邊も後れ給はんは。縡の宜きにあらずかし。俺うへには眷念せで。とくとく歸路に赴き給へ。といふに件の使者眉を顰めて。そは心憂き事になん。藥を用ひ給ひし歟。城中へよしを告て。醫師をや招くべき。といふを旡四郎聞あへず。藥はこゝに貯あり。醫師を請ふに及ぶべからず。各々主君の爲にすなるに。御邊愁に拘づらひて。猶豫せらるゝとしもあらば。俺心安からず。願ふはやく〱歸京して。俺邸中の雜掌達へ。よしを傳達し給ひね。さらば咎を発るべし。それまでにも至らずして。速に本復せば。遠からず赶著て。倶に京師へ還りてん。この義をこゝろ得給ひてよ。といはるゝよしの理りなれば。沈吟しつゝ頷きて。倶に京師を出たるに。一膠の病臥をふり捨て。歸途を急ぐは心にす。朋友の義に背くに似たれど。私の旅ならぬ。主用なるをいかゞはせん。某醫師にあらねども。血色を看て猜するに。實に宿露の病にこそ。日ならず瘥り給ふべけれ。豫ては翌共偕に。立去るべしと契りしかども。御邊病臥の趣を。傳達のよしもあれば。けふ晝起にすべけれとて。猛に從者を急しつ。客裝を整て。旡四郎が從者と。その宅。旅亭のものどもに。看病藥師の事までも。叮嚀に心つけて。別れて歸洛に趣きけり。旣にして旡四郎は。後やすくなりたれども。人の思はん事のをし

やうやくその議に任しけり。この時了鬟は皆睡りて。呼べども人の來るものなければ。主人は手つから盃盤を。とり歛めて辭し去りつ。阿夏は臥簞を布舖け。无四郎が爲に枕を薦て。絕て久しき慾界の。快樂に曉る天を恨みけり。烏虖癡なる哉這狂漢。譬諭ゑても箴とす。彼花を偸むが爲に。その枝を折るものは。己が身の先枉るを思はず。然れば海人の股を劈くは。その珠を藏すが爲なり。瞽女の臁を顯すは。その蚤を拂ふが爲のみ。人見てこれを笑へども。その醜體を羞ざるは愚に近し。且舊たる陶器を愛るものは。その缺たるを瑕とせず。好みて敗衣を買ふものは。新しきをもて妙とせず。飽溫の飢寒を羨み。名利の多事を憂るは。皆惑ひのみ。是等すらいと怪しきに。世に迷惘の病あるものは。善惡の差別に闇く。驕暴の患あるものは。その身を忘れて。他の惡を聞まく欲す。人の嗜慾のさま〴〵なる。阿夏が恥なき。いふにしも足らねど。无四郎が事を好みて。世の捨物を拾へるは。彼迷惘の病あると。敗衣を好みて被拔と稱へ。且その直の廉かるを。堀出といふ類なるべし。

第十五回

青蚨厄を釋て子母故鄕に還る
黃門情を察して艶童西家に留る

却說辛踏无四郎は。黎明の比旅亭に還りて。竊に臥簞に入てをり。一夥なる使者はかくとも知らで。起て无四郎を呼覺すに。豫て計りし事なれば。无四郎答て。否。某は昨宵より。酷し

が客舩の舊借を。祥八に問ふて金を取らせ。別に准備の一封金は。二分歟。三分か謝義として。阿夏が爲に贈りしかども。祥八は薄氣味歹さに。敢又これを受ず。客舩も三分之一を輸て。手實を書て遞與しけり。爰はや遺なく果しかば。无四郎は祥八夫婦に。歡びを述。珠之介を携て伏鯖橋に赴きつ。昨今の首尾恁々と。阿夏に耻き相歡びて。主人には沙金三兩を。贈りて媒妁の謝物とす。返すを忌むといふよしあれば。主人は固辭とを得ず。庖丁に術を盡したる。酒宴を張て饗應けり。登時あるじの女房も。无四郎に對面しつ。阿夏にはわが衣の。新しきをもて贐とす。扨あるべきにあらざれば。无四郎は多く喫まで。盃を辭し別を告て。阿夏珠之介を將て旅亭に還りぬ。こゝも町宿なりければ。かゝる事すら後やすかり。一兩個の從者には。東西を取らせその意を得さして。忌憚ることなかりけり。既に一夥なる彼人に。二日路後れし甲斐ありて。かくまで本意を遂たれども。女子を伴ふ旅なれば。水行てそよかめれとて。その日便船を討るに。浪速へ歸る船ありければ。そは究竟と歡びて。次の日旅亭を立去て。僉共侶に湊に赴き。件の船にぞ乘にける。這回は日每に順風にて浪路に障りなかりしかば。はやく浪速津に著にけり。是より阿夏を客轎に乘し。珠之介を從して。翌日京に入る程に。五條わたりなる相識許。阿夏母子を留措て。西の君所へかへりまゐりつ。歸京のよしを聞えあげけり。賢房卿の使人は。陸路をかへり來にければ。无四郎には日數後れて。仲春の初旬。やうやく京

くて。この日は猶も臥てをり。扨次の日になりしかば。病著ははや瘥りたりとて。從者を將て博勞町なる。粟津屋に趣きつ。あるじ祥八に對面して。姓名を告り來意を告て。阿夏母子に由緣あれば。那窮阨を見るに忍びず。その故は箇樣々々と。侯鯖樓にてゆくりなく。阿夏にあひし縡の趣。渠等が客儀の舊借を。償んとて來つる事。且珠之介をも共侶に將て。京師に還らんと思ふ事情を。辯舌爽に演しかば。祥八聞つゝ歡びて。いかでか異議すべき。特に國主へまゐらせられし。京家の使人なるよしを。告られしより駭き怕れて。その欵待大かたならず。妻もろ共に口誼を舒て。珠之介にも恁々と。報て无四郎に遞與しけり。是より先に珠之介は。母の阿夏が消息して。件の事の趣を。箇樣々々と知せしは。既にきのふの事なりければ。放生會にあふ桶の魚の。讀經を聽る心地しつ。是よりして无四郎が。資を負み心侈りて。あるじ夫婦に使れず。動もすれば外に立て。彼人遲しと俟程に。果して无四郎が來にければ。呼るゝ隨に坐席に造りて。恭しく對面す。當下无四郎は。傍に招き近つけて。這回母親共侶に。京師へ伴んとて來つるよしを。懇切に說示しつゝ。額髮を押撫て。相別れしは十稔あまり。儞が三才の比なりければ。俺在とも知らざりけん。母御に再會せし折に。儞の事も詳に聞にき。日來の艱苦さぞあらん。今より吾儕が後見して。人の爲に門をば掃せじ。心つよく思ひね。といひ慰る愛々しさに。珠之介は恩義を感じて。そが儘傍に侍りたり。然程に无四郎は。阿夏

もの共に候ひしを。船中は親疎となく。乘合するも尠からねば。如右計ひて候。と實言虚談うち雜て。密やかに告まうすを。兼顯卿聞給ひて。そは不便なる事ぞかし。舊里にはなは親族あるや。その夏が子はいかにしたる。と問せ給へば。さン候。京師は渠が故郷なれども。親類もなく憑しき。友もあらずとまうすなり。又夏が子なる珠之介は。儔稀なる美童にて。年十三四にもやなり候はん。愚にも見えず候へば。某が代として。召使せ給ひなば。こよなき彼身の幸なれども。賤きものゝ子なるをもて。申上ゲ難候ひき。とおそるゝまうすにぞ。兼顯卿は領き給ひて。今戰國の世にしあれば。一藝あるもの。素姓によらず。發迹たるも多かれば。よしや夏が子なればとて。嫌ふべき事にもあらず。それのみならで彼少年は。襁褓の中に在りし比。陶興房が愛せしよしを。われ人傳に聞しとあり。曩に周防へ赴きしは。彼興房が庇に立ん。と思ひし事もありつらんに。その比左界の戰ひに。興房入水の聞えあれば。これ彼以不便なり。夏共侶に召よせよ。密やかに渠等を見て。汝がまうす如くならば。留置くともけしうはあらず。こゝろ得たる歟。と叮嚀に。示し給へば旡四郎は。歡び面に露れて。言受しつゝ退出けり。然ば幸踏旡四郎は。その日五條へ消息して。君命の趣を。阿夏珠之介等に告しかば。阿夏はさらなり珠之介も。歡ぶと大かたならず。倶に身のざまをとり繕ひて。次の日旡四郎が宿所に來にけり。阿夏は山口を辭し去るとき。侯鯖樓のあるじの妻が。餞にとて贈りたる。小袖を

著してければ。契りし事の空となりしを。いと悔しくぞ思ひける。又无四郎は那地にて。病著に臥したれども。歸京の日期に後れじとて。水行を歸まゐりしに。日毎に順風なりしかば。思ふに優て逸速く。歸洛仕りぬ。と聞えあげて。大内殿の報翰を呈し進せ。彼君より賜りたる。東西悠々と披露して。その歡びをまうせしかば。君邊の首尾よかりけり。その次の日に兼顯卿は。无四郎を召近つけて。周防の消息を問ひ給ふ。是等の言の便宜を得たる。无四郎は山口にて。思はず阿夏に再會したる。縡云云と告まうして。渠は君も知食たる。二代の名妓で候ひしに。大く薄命なる女子にこそ候へ。今より十稔あまりさきつ比。馴し華洛に住わびて。鎌倉へとて赴く道中。山豪に跟られて。良人と繦子は命を隕し。その身は珠之介と喚做したる。嬰兒を扛抱きて。辛くも脱れて近江なる。山里に身を寓つ。年來其處に候ひしに。なほ身の憂患に堪ざりけん。山口の繁華を傳聞て。去歳の春その子と倶に。周防に赴きたりけるに。由緣の人は世を去りて。盤纏さへ竭果しかば。進退其首に究りて。垂柳といふ橋の上より。身を投んとせし折に。某はからず邁あはして。見るに忍びず推留め。容子を問へば別人ならず。むかし相見し京師の歌妓。件の夏で候ひし。渠は陶興房にも。疎からざりしものにして。君にも知食たれば。いとゞ哀れの彌增て。意見を盡し死を禁め。その子珠之介共侶に。歸京の船にうち乘して。この地に相伴ひ候ひき。さばれおん使を奉りたるかへさなり。陸路ならば倶しがたき。

も申上たる如く。夏は京師に頼しき。親類も候はず。只陸奥には父がたの。舊族の候へば。彼處へゆかまくはしとまうしき。這回某身の暇を賜りて。故郷へ還る便路なれば。送り届んとこそ思ひ候へ。然けれども珠之介さへ。將てゆくとの轍からねば。おん給事を願ひしに。みの義御許容まし〱たれば。さこそ安心仕らめ。須彌より高き御恩にこそ。と阿夏に代りてまうせしを。兼顯卿ははやく猜して。心に思ひ給ふやう。原來寧成は戇にも。夏に惑ひてこの地に伴ひ。亦舊里へ往てゆきて。妻になすべく思ふならん。われ初より事情を。訝しく思ひたるに。今の餘に顯れたり。主の使に立ながら。女子を倶して來つるすら。大かたならぬ越度なるに。主にその子を委ね置て。身を振やすくせまく欲する。伎倆の程こそ鈍ましけれ。佶と罪すべきものなれども。今の世は貴賤となく。忠信廉直等なれば。理義を守るを古物と唱へて。笑ざるものあるとなし。況這寧成は。年來よくわれに仕へて。這回の外に愆なし。然により渠が隨意。暇を取らする今に至て。その罪を糺彈せば。誰か仁者の所行といふべき。曩に陶興房が。夏に浮名の立たるを。傍痛く思ひしに。今又かゝる事こそあれ。衆人醉ふて醒ざれば。粕を舐るにますとあらじ。と臆度怜しき長袖の。寛仁大度惻隱なる。心に秘て咎め給はず。知れどもしらぬ面色して。現寧成がまうす趣。夏が爲には便宜なるべし。むかし文屋康秀が。三河掾にて赴く折。小野小町が色衰て。ありけるを誘引て。倶してゆかんといひけるを。小町

袿にしたれども。珠之介は袴もなければ。无四郎が被替を借て。長やかなるを折返しつゝ。忙しく穿せなどす。粹既に整ふ程に。无四郎は君所にまゐりて。かくと聞えまうしゝかば。兼顯卿は閑室にて。渠等を召よせ給ひけり。その事の爲体。綠巽亭にて酒宴の折には。似るべうもあらずして。掛わたしたる彼此の。翠簾の錦はふりたれども。重席薦の上座に。彼卿をはしましたるが。最も尊大く見え給へば。阿夏珠之介は畏みて。額つきたる儘進み得ず。登時兼顯卿は。頻りに招き近つけて。一別以來年闌たる。夏は恙もあらざるよし。歡び思ふ所なり。爾れども幸なくて。良人を喪ひ落魄して。近屬他鄉にありけるよしも。寧戍が噂に聞にき。陶興房と疎からざりけん。事をしこゝに思ひ出て。懷舊の情禁めがたかり。見るに汝が產たる子は。現美しき少年なり。當家に隨身の願ひあるよし。そを允さじといふにはあらねど。知るゝ如麿に仕へて。いかばかりの事やはある。いまだ宿所もなきよしなれば。且くこゝに留措て。左も右もなさばなしてん。夏もよすがをまだ定めずや。思ふに優てなほ弱かり。今こそかくて在りもせめ。女子は總て素姓によらず。氏なくて玉のこし方を。昔語になす日もあらん。思ひな屈しそ。と慰め給ふ。御懇切なりければ。阿夏はいよ〳〵忝さに。只阿とばかり平伏て。果敢々々しくは答まうさず。折から阿夏等に案內をしつゝ。書壁の下に侍りし。无四郎急に進み出て。いと有かたき御懇命。某さへに面をおこす。渠等が幸ひてのうへや候べき。向に

に見參して。洪恩を謝し奉り。朋輩に別を告て。その明旦五條に趣き。厲日阿夏を預置たる。相識に東西を贈りて。渠を將て故鄕にかへる。絆の趣を告などす。阿夏はこの日の起行を。兼て无四郎の報たりければ。他事なく用意して。昨より俟てをり。且无四郎が世才に長たる。縱傭足でも。從者ありては費多かり。行麄は驛々なる駄馬に負して。ゆくこそよけれと。尋思をしつゝ。馬を牽して來にければ。誘とて倶にたち出けり。珠之介は那日より。西殿兼顯卿の邸をいふに留りて。近習の子舍に在けるが。霎時の暇を賜りて。藪の下まで送りけり。子に教ゆべき親ならねども。阿夏は別の悲しさに。おなじことのみ繰返しつゝ。只云云といふも果敢なし。現生れしより昨けふまで。片晌も離ずして。苦樂を倶にしたりける。母なり子なる珠之介も。桓山四鳥の懷ひあり。哀々たる淚の玉。戀憐たる別の觴。爭ひかたき骨肉の。情狀言外に見れて。慰むべくもあらざるを。无四郎諫奨して。遂に袂を分ちけり。何時をあふ瀨と揣られねば。ゆく親は笠に手をかけて。うち仰ぎつゝ屢見かへり。又遺れる子はなほ立在て。人は霞にうち紛れ。遠くなりゆく馬の鈴の。果は聞えずなるまでも。惘然として目送りけり。凡人の子たるもの。いまだ親に告ずして。娶るを非禮の禮といふ。かゝる野合に所を得たる男女の情慾果せるかな。現身を捨る溝壑はなし。只子を棄る藪の下あり。知るも知らぬも。逢坂の後人話柄になさんのみ。是よりして珠之介は。兼顯卿の第にをり。

は推辭ともなく。わびぬれば。身をうき草の根をたえて。さそふ水あらばいなんとぞ思ふ。とよみて。從ひにき。と物に見えたり。康秀と寧成と。文字は異なれ訓は似たり。夏は小町の後身歟。いと〳〵奇なり。と笑ひ給へば。旡四郎阿夏は堪ねばかりに。且怕れ且恥て。又いふよしもなかりけり。且くして兼顯卿は。又旡四郎に宣ふやう。豫ての約束なるにより。汝には身の暇を取らせん。はやく故鄕へ趣きて。親の心を慰めよ。珠之介はこゝに留めて。近習のものに預措ん。有者夏が心も安く。よすがを訪るに便よからん。寔に不測の再會ながら。又別れなば西東。都の花に鄙の月。相見ることは難かるべし。みづから愛して珠之介が。諸ゆく日を俟ねかし。今はしも是までなり。寧成局へ案内して。物はまゐらせよ。と宣へば。阿夏は頻りに感涙の進むを。袖に推禁め。珠之介共侶に。旡四郎が後に跟て。退き出るこゝろの中に。兼顯卿は世に稀なる。粹の又粹。粹中の。粹なる君ぞと感じける。

第十六回　三碗の清茶暗に元盛を動す
一箇の湯銚克く國友を悅しむ

辛踏旡四郎寧成は。君命の首尾思ふに優て。珠之介を留置れ。その身は豫て願ひのまに〳〵。致仕の暇を給はりければ。天に歡び地に喜びて。阿夏を五條にかへし遣し。緯の障りのなからん程に。はやく京師を辭し去るべしとて。客裝を急しつ。準備はやゝも整ひしかば。兼顯卿

主の高國に減らず。譬ば鎌倉管領の權臣なりし。長尾太田等を世に稱て。內管領といひしに相似て。植通は丹波なる。八上の郷に在城し。元盛と國友は。在京して主の執事たり。就中國友は。初少年なりし時。容止猗々しかりければ。高國これを寵愛して。衾を倶にせし夜多かり、侯にして今ははや。壯年になりたれども。その餘波とて寵衰へず。然によりこの年來。權を弄び威を振ひて。兄を兄ともせざりしかば。元盛憤懣りて。牆に鬩ぐの懷ひあり。さばれ華洛も戰馬に荒たる。人倫安危を定難て。鬼胎を抱く折なれば。恨を秘して言に出さず。聯歌を嗜みしかば。公卿上達部に親みて。資にせばや。と尋思をしつゝ。日野西殿へも疎からず。をり〳〵に詣まゐらせて。語譚に時を移す日も多かり。閒話休題。この日中納言兼顯卿は。元盛に對面して。うち譚ひ給ふ程に。珠之介は茶の給侍して。元盛に薦ると。兩三回に及びしかば。元盛しば〳〵見かへりて。卒爾には候へども。那少年は從來の。扈從達に候歟。その名を何と召るゝやらん。是までは見も熟ざりし。美童にこそ候へ。と含笑ながら問まうせば。兼顯卿頷きて。渠は末松氏にして。珠之介と喚れたり。譜第のものゝ子にはあらで。近屬まで侍りける。舊臣寧成といふものに。由緣あり。孤なりと聞えしかば。姑くその代として。こゝに召措き侍るのみ。その心ざま愚魯ならず。見らるゝ如き美童なれば。何處まれ薦め遣して。武弁の家臣になさばや。と思はざるにあらねども。いまだ便宜を得ざるなり。世に薄命なる者な

近習の弱輩に從ふて。日毎に諸禮を見習ふに。華洛の手ぶりは夢にだも。知らぬ田舍兒の事にしあれば、左に就ても右に就ても。不敏ならぬ節もなくて。只笑るゝのみなるを。いと朽をしく思ふになん。心を切てこれを習ふに。素より愚魯ならざれば。幾程もなく會得して。ものゝいひざま進止まで。優美になりにける。是により兼顯卿は。珠之介を召出して。身邊近く使ひ給ふに。よろづ主の機を攬て。命ぜざれども。その意を悟り。誨えざれどもその義を辨ふ。特に怜利き少年なれども。その性便佞利口にて。進止に表裏あり。且容貌の柔從にて。女子めきたる艶色なるも。そが眼中に殺氣を帶て。角睞睛なるも世に異なり。善惡邪正は今よりして。料知るべき事ならねども。この者成長したらんには。いかにしてわが爲に。なるべき。倘禍を惹出す。事しもあらば臍を噬とも。後悔其處に立がたからん。とく遠離るに優とあらじ。と心に疎み給へども、させる愆あるにもあらぬに。追出さんはさすがにて。思ひ煩ひ給ひけり。有如之程に。一日管領高國の權臣に。香西四郎左衛門尉元盛と喚るゝもの。要承るべき事ありとて。兼顯卿を訪まゐらせけり。這元盛が主なりける。武藏守高國は。民部少輔政春の嫡子なり。その家にては庶流なれども。近曾京都將軍家。廢立の義によりて。義植を廢して、義晴を立たるなり 管領に補せられしより。威勢肩を比るものなし。家臣多かるそが中に。件の香西元盛と。波多野備前守植通と。柳本彈正忠 國友は同胞なり。這兄弟三名は。丹波一國を分領して。權威をさく。

く媚て世才ふれば。元盛いよ／＼寵愛して。姑くも左右をはなさず。初に主の高國へ。進らせばやと思ひしとは。言に出さでありければ。珠之介すら知るよしあらで。主を不足に思ふとなく。歯を染紅粉を施して。身には綾羅を被飾るを。過世ありけりと歡びしも。漸々に心移りて。その意に慊ぬものあれば。ふしさまに執成て。罪なきを追退け。又よく阿諛ふものあれば。功なきも主に薦めて。祿を増る徒々ありけり。元盛陪臣なりといへども。丹波數郡の地を食みて。且管領の家宰なれば。下風に立んと願ふもの。必先珠之介に。東西を贈り好を締て。その頼成を願ぬはなし。只是一箇の少年に。從頭逆黨阿容々として。なべて頭を擡得ず。彌子瑕が衛君に愛せられ。鄧通が漢皇の。寵恩に誇りしと。和漢その揆これあるのみ。惑溺濫賞異ならねば。人目惡し思ひけり。とかくする程に三稔を歴て。大永五年の夏肆月。香西元盛が主まりける。管領武藏守高國は。四十二の厄たるにより。猛に祝髪入道して。松岳道永と號しけり。世に管領を罷め、この頃ひそやうさんとて。元盛右所へ出仕しつ。哩呼にかへり來にけるか。その面色常にかはりて。只顧歎息したりしを。珠之介詳りて。けふは御館の御剃髪にて。祝席を開れ。酒宴を賜ふと傳聞しに。かゝる變たさ折にしあるを。いかなる事の候ひて。うち悩せ給ふやらん。こゝろ得がたく候ど。問れて元盛貌を更め。さればとよ聞候へ。窃に御消息事果て。都部貢問の節會あり。汝はいまだ知ざるべし。阿波の三好市宗等は。當館高國などと同じする。前

りき。と微やかにぞ報給ふ。登時元盛思ふやう。那末松珠之介とやらんこそ。多く得がたき美童なれ。わが主君に薦まうして。その左右に侍らせなば。弟國友が權を奪ふ。こは究竟の方人ならん。とはやくも胸に計較たる。心ともなく膝を進めて。賢慮仰のごとくならば。在下預り奉りてともかくも。仕ゝらん。この義を允させ給はんや。と辭せわしく問まうせば。兼顯卿歡びて。足下もし麿になり代りて。渠を執立給はゞ。こよなき彼身の幸ひなり。さはとて軈て珠之介を。身邊近く呼よせて。件の縡の趣を。云云と説示し給ひて。汝今より身を委ねて。香西氏に從はゞ。こゝに在るには八入にまして。漸漸に福ひ多かるべし。勉よかし。と諭し給へば。珠之介は席を避て。あるじの卿と元盛に。身の歡びを述にけり。これ亦異議のあるべきならねば。兼顯卿はさもこそとて。元盛が乞ふに任しつ。翌は夙めて珠之介を。おくり遣すべけれとて。約束をし給へば。元盛ふかく歡びて。固く契りて退りけり。却説末松珠之介は。香西が宿所に赴きて。身邊近く使るゝに。亦よく主の機を攬りて。意に愜ずといふとなし。元盛はその初。渠を高國に薦揚て。柳本彈正が。權勢を折んと。腹稾をしたりしに。そが男色に心惑ひ。便佞利口に蕩されて。惜きものかなと思ふにぞ。愛する心ふかくなりて。放遣るべくもあらざれば。豫の密計空となりて。夜毎に臥房に侍らせつゝ。遂に龍陽にしたりけり。現戰國の風俗にて。男色雞姦の婬樂に。耽らぬものゝなき世なるに。珠之介が標致人に捷れて。且よ

立ひて。めしくまうしゝかば。館は彼奴に惑されて。遂にわが議を用ひ給はず。剰面目を喪ひて。立しほもなく退りたり。他人はともあれかくもあれ。弟の爲に辱られて。そを訴る所なき。懊惱胸に滿て。思はず歎息したるなり。慷慨事にあらずや。と喞言がましく囁くを。珠之介うち聞て。昔も同胞不和なりしは。頼朝義經を首として。幾人も候べし。なれども運は尊卑によらず。兄は弟に及ずして。從ふも往々これあり。君同胞は然るにもあらず。君は外事を掌り。舍弟彈正國友ぬしは。内事をものして寵臣たり。その職役に甲乙なければ。胞兄弟和睦し給ひて。内外をよく理め給はゞ。衆人いよ〳〵下風に立て。威勢三好に等しかるべし。此に御心つかずして。年來不和になり給ひしは。甚麼なる故に候ぞ。と問れて元盛駭嘆しつゝ。後方を見かへり聲を潛めて。適微妙くも問つるもの哉。國友が動すれば。われに無禮の言を出すは。寔に以あるとぞかし。抑遠山松と名けたる湯銚は。珠光が遺愛の名物にて。わが家に秘藏せり。そを國友が得まく欲して。乞ふと屢なりしかど。嫡家相傳たるにより。決して與へざりければ。渠この事を痛く恨みて。不快の色を見したり。是より今に至るまで。骨肉竟に睦しからず。こは國友が無理ならずや。と告るをつら〳〵うち聞たる。珠之介はものとも思はず。然ばかりの義に候はゞ。賢慮を惱し給ふとかは。速にその湯銚を。贈りておん和睦候へかし。烏滸がましくは思さんが。某彼處へ赴きて。和議を整候はん。といはせもあへず元盛は。呵々とうち

管領澄元主の。執事の老黨たるにより。當館を擊退て。主を京師へ還さんとて。いぬる永正十七年。庚辰の春正月。大軍を催して。遂に京師へ攻登り。一旦勝利を得たれども。この年暮春の比に至りて。三好はいたくうち負て。降參をしたりしを。その子三好孫四郎長則。芥川孫二郎長光等と共侶に。綁首をぞ刎られける。そが降參を許容しつゝも。この義に及び給ひたる。當館のおん計ひを。三好の黨ふかく怨みて。鏃を磨ぐと聞えたり。かゝる故にいぬる比。左界の城を敵に署られて。四國の通路不便になりぬ。件の希雲は不義の老禿。那鬪戰より前一年。永正十六年渠が爲には君宗にて。一隊の大將に執立たる。淡路守成春ぬしを。弑したりける天罰にて。滅亡はさる事ながら。希雲居士が嫡孫なる。薩摩守又筑前守元長は。理義に聰しき良將なれば。私の怨を思はず。當家と和睦のこゝろあり。われさきつ比間者をもて。これらのよしを知るゆゑに。館に薦め奉り。阿波へ使ひを遣して。元長を招き給へ。某この義を奉りて。彼地へ發向仕らん。元長なほも疑ふて。這回の和議を承引ずとも。左界の城は返すべし。然るときは御方に利あり。時は得がたく失ひ易し。その故は恁々と。縡詳に演しかば。館はしばしば頷き給ひて。既に許容の面色なりしを。年來不和なるわが弟。柳本國友のみ。この議を拒み說破りて。三好は御家僕に等しきを。今さらに腰を折めて。弱みを示す事やはある。然るを元盛が執成まうすは。敵に香餌を食されて。主を賣んと欲する歟。こゝろ得かたく候。と聲苛

斡なす事あらじと思はねども。わが弟は權に誇りて。人を見ると狗子のごとく。我意に募りて辯說を。よく信容るゝものにあらず。等閑にな思ひそ。と叮嚀に警て。次の日件の湯銚を。袱に包み筥に斂めて。珠之介にこれを齎し。心利たる從者を。多く隷てぞ遣しける。畢竟珠之介が。柳本へ使して。後の話說甚麽ぞや。そは次の卷に。解分るを聽ねかし。

近世說美少年錄第二輯卷之三終

笑ひてこそ愚なり。珠之介。天地は反覆することありとも。不義の弟に手を降て。さしも親より譲られし。得がたき寶を贈らんや。と敦圉猛くいひ懲すを。珠之介は又推返して。仰では候へども。世に最稀なる黒漆道具は。得がたきをもて人に誇れど。そは泰平の寶にて。錆たる鎗。任へる時にも。大く劣りて。戰國の。要に立べきものにあらず。はやく贈り遣して。胞兄弟和睦し給はゞ。阿波へ使節を命せられて。左界の城を得給ふべし。左界は都會の福地にて。道由松の湯銚よりも。その利萬々たるべきものなり。加旃三好の黨。恩義を感ずるとあらば。贈ものも多からんを。孤疑して便宜を失ひ給はゞ。御後悔もや候はん。賢慮を回し給はんとのみ。願しくこそ候へ。と阿容たる氣色もなく諫しかば。元盛有理と。初て曉得て。感ずると大かたならず。思ふに倍たる汝が意見。その議に從ふべけれども。年なほ二八の小猫子が。よく國充に說得んや。といふをば聞かず微笑て。某近江に在りし時。師の坊に從ひて。和漢の故事を粗聞たるに。むかし武内紀宿禰は。年十三なりし比。天子の密勅を奉りて。北陸道を巡歷りつ。民の邪正を問糺へて。治めて還りまゐりしとぞ。又唐山なる秦の甘羅は。年甫て九歲なりしに。呂不韋が爲に使して。大功を立し事あり。有如之ば年の多少によらず。才を擇みて任用すべし。といはれし師說も候へば。機に臨み變に應じて。御本意を遂せん事。胸中に覺あり。任て遣し給ひね。と頻りに請ふて已ざりければ。元盛やうやく頷きて。年に倍たる汝が才

八可なる。女子にして見まほしき。美少年にて候。といふに國友眉を顰めて。實に大事の使ならば。出頭の老黨もて。いはせらるべきとなるに。相應からぬ小孺子もて。いひおこさるゝはいよ〳〵訝し。然ればとて猶あはじといはゞ。憶しにけり。と思はれん。者共來よ。と呼立て近習二名を從へつ。童扈從に大刀を持して。出て珠之介に對面す。登時末松珠之介は。携來つる一ト包の。湯銚を傍に措て。國友を見て。手を膝に。かけたるのみにて額をもつかず。なほ自若として在りしかば。國友怒れる聲高やかに。汝は尉殿の使なる歟。京師も近屬事多くて。旰食。宵衣を被るまでに。公務をこの身の任とすなれば。使者にあふべき暇はなけれど。大事の一チ議なりといへば。枉て對面を許せしに。無禮の擧動奇怪なり。憶に汝は乳臭き。小孺子の分際で。主の使をよくせんや。こは必わが兄の。猛に病痾に犯されたる。亂心の沙汰なるべし。無益なりき。と敦圉て。はや身を起し席を跟立て。奥に入らんとする程に。珠之介は衝と寄て。袴の裾を引とゞめ。やよ刀禰暫時等せ給へ。在下。刀禰を侮りて。拜するとの遲きにあらず。今目前の利を思はずに。同胞睦み給はぬを。歎くのあまり禮に違ひて。不敬の罪を得たるのみ。在下不肖なりといへども。賤者は貴人を。敬ふ可の禮儀は知れり。爾るに刀禰は在下か。不敬を咎め給へども。子としては親を敬ひ。弟としては兄を敬ふ。その義を忘れ給ひし歟。同胞年來疎遠にして。その使だも憎み給ふを。人たる道といふべきや。といはれて國友

近世說美少年錄第二輯卷之四

東都 曲亭主人編次

第十七回 狡豎利を說て季孟を和ぐ 墨吏勢を負て役夫を屠る

話表。柳本彈正忠國友は。日每の出頭時めきて。暇なき身は。宿所へも。詣來ぬる人々の。名簿苞苴の多かるを。見もせん。よしをも聞んとて。たま〳〵家に在りける折。執達の若黨が。遽しく主の身邊に來て。香西殿のおん使。末松珠之介と名告れるもの。拜謁を請まつりぬ。いかゞ計ひまうさんや。と告るを國友見かへりて。わが兄ながら快らぬ。尉殿元盛の使ならば。對面して何にせん。且その來意を諮ねよ。といふに若黨てゝろ得て。客房のかたに赴きたる。程しもあらずふたゝび來て則御意の趣を。彼おん使に聞え知して。稟さるゝ導あらば。承らんといひしかど。些もうけ引氣色なく。否。一大事の議に侍れば。人傳には述がたし。とく〳〵見參を許し給ふが。御主君のおん爲なり。とまうすばかりに候。と報れば國友冷笑て。そは情剛き奴なりかし。面魂もさぞあらん。幾十歲許の男ぞ。と問へば若黨。さゝ候。年尚二

になりし事。今更慚愧に堪ざるなり。汝那首に赴きて。彈正に對面して。わが意を告て。這湯銚を贈れるよしを傳へよかし。かくても渠はうち解けずして。贈ものを受じといはゞ。直に館へ推參して。入道殿高國ぬしに愁訴せよ。然らば館の驚き給ひて。彈正を諭し給はん。主君諭解給ひなば。渠も諾ることを得ず。必和談は整はん。こは萬一の事ぞかし。さばれ重立たる老黨を。這使にとて遣さば。なか〳〵に言改りて。疑るゝこともあらん。よりて汝に命するなり。よくせよかし。と叮嚀なる。仰なれば辭するに由なく。膽太くも虎威を犯して。見參を請まつりき。賢相願ふは骨肉の。實情を信容て。おん和睦ましまし〳〵ね。然らば使を奉りたる。在下等が幸のみならず。なべて御方の歡びならん。さは思さずや。と爽に。舒る言葉の花紅葉。這由松の湯銚の。袱をはやく解披さつゝ。蓋拿る手さへなよやかなる。紐より脩き六尺袖に。包ひ溢るゝ愛敬は。武家の扈從の進退應對。柳條の袴の襞績よりも。折目正しく國友の。身邊へやをら措にけり。有如之程に國友は。初は思ひ侮りたる。珠之介に說諭されて。且羞且呆ると半晌許。肚裏に思ふやう。わが兄猛にうち解て。秘藏の名器を贈られし。胸中測り叵けれども。なほ疑ふて受收めずは。珠之介は御館へ參りて。入道殿に愁訴をせん歟。熟視るに這少年は。標致といひ才といひ。尋常のものにあらず。不慮に館のおん目にとまりて。召使るゝ事しもあらば。わが寵遇の害になるべし。只速に和睦して。這奴を還すに優とあらじ。と尋

驚きながら。且く佗と見かへりて。思ふに優たる汝が諫言。只一句にしてその意を得たり。と稱へてふたゝび坐を占れば。珠之介も退きて。故の處に侍りしを。國友近く招きよせて。目今汝が意見の趣。理りあるに似たれども。われ豈年來兄を疎みて。胡越のおもひをなすものならんや。われは總角なりし比より。館に昵近し奉りて。今なほ寵臣たるにより。わが兄これを娼しとして。うち解られねばおのづから。疎濶にもなりなられしなり。然るをけふ思ひかけなく。こゝへ使を立られたる。その故をまだ知らねども。目前の利をおもはず。と汝がいひしは要こそあらめ。具に告よ。いかにぞや。と問れて珠之介阿容たる色なく。その義は問せ給はずとも。必しも申しあぐべき。一大事にこそ候なれ。抑君御兄弟。迭に權を爭ふて。快からず見え給ふを。いと愚なる俺們すら。宜き事と思はねば。况心あらんもの。親きはこれを歎き。疎きは譏るも多かるべし。尉の殿は近き比。この義に御心つかせ給ひて。御後悔大かたならず。わが身弟と不和になりたる。事情を按するに。その初わが弟が。欲しといひける遠山松の。湯鑵を與ざりける。是等の所以のあればならん。兄弟は猶人の身に。手足あると是同じ。よしや稀なる名器なりとも。他人にこれを贈るにあらず。弟の所望に任しなば。猶わが家にあるに等し。譬ば右手に持たる物を。左手に易るに異ならず。倘わが弟に讐あらば。身をも祿をも見かへらで。立地にその寃家を。撃亡さんとすべかるに。かばかりの物を惜みて。兄弟不和

を返すべし。倘又粹の障わりて。左界の城を返さずとも。那地に到らば敵の强弱。そが兵士の多寡までも。知らで返らせ給はんや。既に敵地の案内を。よく知るときは攻るに易かり。渠が由斷を闘ふて。一擧に左界を攻擊ば。手に唾して城を拔くべし。左界は都會の福地なり。曩に喪ひ給ひしを。ふたゝびおん手に入るとあらば。こよなき利潤に候はずや。この義を上に高聞え執成給ひて。粹就ときは尉の殿の。獨功あるのみならず。刀禰も御感に預り給ひて。共にその利を受給はん。こゝに御こゝろつかずして。同胞合體ましまさざりしは。憚ながら千慮の一失。御同意あらば公私の大幸。この上や候べき。はやく賢慮を回して。熟く計らせ給ひね。と利をもて薦る奸佞の。萌はこゝに顯れたり。國友も亦貪りて。俺こと知らぬ性なれば。一ト言毎にその意を得て。感すると大かたならず。吁奇なるかな。少年に。罕なる計略。わが意に稱へり。翌は夙めて出仕して。件のよしを執達せん。尉殿も出仕して。御意を伺ひ給ひね。とわれいひにき。と傳へまうせよ。委曲は翌御館にて。この年來の怠慢を。賠話まうさんと思ふのみ。只是汝が奇才によりて。同胞和順合體の。這歡びあるのみならず。計るが如く那利を分たば。現愉快き事なるべし。且く留めて歡びの。盃をすべけれども。わが兄の俟給はんにとく立かへりてよしを傳へよ。是もてゆきね。といひかけて。童扈從に持したる。刀を牽手物に取らせしかば。珠之介は左右の手に。受戴きつゝ腰に帶び。額つき拜して恭しく。その歡

恩をしつゝ微笑て。あはれ微妙き使の口状。尉殿までに某を。愛させ給ふを知ずして。不悌の罪を得たりしすら。後悔こゝに立かたかるに。特に秘藏の遠山松を。賜ればとて受られんや。と固辭を珠之介推返して。刀禰今和睦し給ふとも。這湯銚を受給はずは。何を證據に仕らん。世に隔なき友の。千々の黄金も辭せざるを。斷金の交とて。愛たき例にいふものあり况原是一腹なる。兄弟にましませば。得がたき貨なりとても。受も授けもし給ふべけれ。然るを今さら固辭せ給ふは。なほも疑ひ給へる歟。と詰れば國友脱るゝ路なく。困じ果つゝ額を撫て。寔に汝は才子なり。爾らば這遠山松は。この儘預り措べきか。何を報ひに進らせん。と問かへされて額をつき。海なす御こゝろならざりせば。在下なンどが稟すよしを。信容て且問給はんや。果して愚意によらせ給はゞ。おん報ひには及ぶべからず。きのふ灰に傳聞にき。尉の殿の議し給ひたる。阿波の三好を招んとある。おん使の義を御同意ありて。那議に任し給ひなば。是目前の大利なり。在下が云云。と向にまうせし一條は。この事にこそ候へ。といふを國友聞あへず。そは亦汝がいふ事ながら。三好が御方に參りなば。その利なきにあらねども。渠もし御諚に從はずは。勞して功なきのみならで。敵に柔弱を示さんのみ。然でも利ある歟。いかにぞや。とせわしく問れて。いよ〳〵騒がず。その義も豫て尉の殿の。間者を彼地に遣し給ひて。定かに撈知し召れぬ。縦三好はなほ疑ふて。御諚に從ひまつらずとも。左界の城

を。叮嚀に述。疎遠を賠話て。阿波へ使節のおん願ひを。向には制めまうせしかども。熟思ふに三好の黨。菲如台命に應せずとも。敵の强弱地理までも。撿するときは御方に利あり。那地この義を館へいふ高國た聞えあげしに。御合點にて候なり。誘給へ共侶に。君邊に伺候せば。那地へ發遣の仰あるべし。時日を規定仕らん。といふに元盛歡びて。このふ使のかへりしより。和殿の心底共に知られて。雀躍に堪ざりき。さはとて軈て共侶に主の。身邊にまゐりしかば。道永禪門法名高國の席を正して。元盛を招き近つけ。前日汝が議しまうしたる。三好を招き降すの一條。よしやその事成がたくとも。敵地の容子は定かに知らん。かゝればはやく發向して。なほ計略を旋すべし。謀るが如く事成て。左界の城をとり復さば。即這回の賞として。元盛汝に賜んず。勉よかし。と仰れば。元盛滿面笑を含みて。君恩を謝しまうしけり。登時國友藤を遣めて。既に御諚に依るときは。一日もはやく元盛を。那地へ遣し給はんとを。願しくこそ候はめれ。時日を移さば世に知られ。敵に聞えて縡の障りに。なるべうもや候はん。然ばけふより三日を限りて。京師を出て攝津州なる。尼崎より乘船せば。日ならず阿波に到るべし。勿論隊兵の多かるときは。敵疑ひて騷動せん。然ばとて士卒なくは。路の程も亦危し。因て士卒は百名あまり。二百名に足らざるをよしとす。前より是等の用心も。あらまほしく候。と眞實たちてまうすにぞ。道永禪門頷きて。その議寔に爾るべし。元盛はこの意を得て。速に進發せよ。

びを遂にけり。一議やうやく果しかば。國友は遠山松の。湯銚を近習に持して。徐に奥に入る程に。珠之介は執達の。若黨に送られて。出る玄關の眞砂路に。衛ならねど發と立つ。從者を將て意氣揚々と。時も夏の天色に。卯花月毛折にあふ。馬の足掻を早めけり。嗚呼輭弱の一少年。主家の胞兄弟を相和解て。遂に莫逆ならしめしは。忠にして功あるに似たり。さはれその說く所。利に誘ふて義に疎かり。是奸佞の所行にして。智ありといふとも用ふべからず。譬ば緈の急に臨みて。門を毀ちて薪となし。井を塞ぎて臼となすもの。頓智即功あるが如し。一旦事の要をなすとも。豈長久の術ならんや。然ば邪利を貪る爲に。主從倶に不測の罪に。陷るとのなからずやは。と識者は竊に評しけり。閑話休題。この日香西四郎左衛門尉元盛は。柳本許遣したる。末松珠之介を候程に。日ははや西に傾く比。珠之介はかへり來て。那首の趣恁々と。國友と問答の。首尾遺もなく演說して。牽出物に得たりける。刀をとう出て見せしかば。元盛斜ならず歡びて。さしも執念深きわが弟の。速に和睦して。阿波へ使節の宿望さへ。一時に本意を遂んと。皆是汝が大功なり。吁わが家の諸葛孔明。丹波數郡の所領をもて。賞するともなほ足らず。來世の後の後までも。比翼の契りを忘るゝことなく。連理の誓に背んやとて。そが儘傍に果りして。撫つ捺りつ餘念なき。寵愛日來に彌增けり。却說香西元盛は。次の日出仕する程に。國友は先たちて。那首に兄を候てをり。さのふ遠山松の湯銚を。贈られたる歡び

て。疾て士卒に下知しけり。さばれ屬日件の城は。修復に工匠奔走して。しかるべき坐席なか
りしかば。よしを元盛に斷りて。二佛山中間寺といふ。城下の寺院を旅館としつ。三度の饗
饌美を盡して。香西主從を欵待しけり。元盛はこの地方より。速に船に乘て。阿波へ渡らん
と欲するに。卯花降し晴間なき。風雨の爲に抑留せられて。心ともなく日を彌るに。雨はやう
やう霽たれども。なほ順風を得ざりしかば。日々に港口へ催促しつゝ。採尻してぞ居たりける。
有知之程に珠之介は。旅泊の徒然を堪難けん。有一日兩三箇の從者を將て。その身は馬にう
ち乘りつ。寺より出て城下のかたへ。漫行をしたりける。浩處に前面より。竹木夥積登し
たる。車四五輛牽もて過りて。城へ入らんとするものあり。この處の路陝かりければ。馬より
先に遣違して。走りぬけんとする程に。轢る車の音高く。轟轟。と地を響して。迅雷に異
ならねば。珠之介が乘たる馬。忽地に駭き怕れて。屬强をしてければ。主は鞍にも堪かねて。
墜んとしつゝとり駐めたる。怒に堪ず聲ふり立て。こは奇怪なる白物等が。よしや車の走れば
とて。武士に對ひて避もせず。剩馬を駭せしは。これ狼藉にあらざらんや。者共彼奴を脫
すな。と貌に似げなき敦圉猛く。鞍坪敲きて下知すれば。兩三箇の從者等。承る。と應もあ
へず。走り蒐りて前なる車を。推留めつゝ搦捕す。當下車力の夫役等は。些も怯ず諸聲立て。
そは理不盡なり何をかする。武士にもあれ公家にもあれ。城主の御用で推ゆく車を。其方の馬

今よりこゝに吉左右を。俟のみなるぞ。と促して。御教書を遞與し給ひしかば。元盛面目身にあまりて。言承しつゝ退出けり。これを見これを傳聞く。諸士等は適名譽や。と羨むもあり或は又。阽むものも多かりけり。然程に元盛は。はやく逆旅の准備をしつゝ。珠之介をばその身に等しく。轎子にうち乘しつ。隊兵一百餘名を將て。黎明の比首途す。使節の命を稟しより。第三日とぞ聞えける。素より驕れるものなれば。その路すがら民を虐げ。非法の課役を負せしかば。苦しみ怨まずといふものなし。その宵は守口の宿りに著て。酒宴遊興に曉るを覺ず。是も亦珠之介を。寵愛深き惑ひより。渠が客舍の徒然を。慰んとての所爲なりけり。現錦綉を裀にしつゝ。歌舞艷曲の俗樂に。娥茄靡蔓の害あるを知らず。又粱肉に鼎を陳ねて。七難八珍の飲膳に。農夫辛苦の眦を思はず。慾多ければ貪れども足らず。驕れる故に鄙吝なり。冠すといふ猴ならずは。虎の威を借る狐に似たる。這元盛が狼貪鴟張を。知るも知ぬも惜みけり。かく行ひて邁く程に。その次の日に攝津州なる。尼崎にぞ着にける。この時尼崎の城將は。右馬介尹賢なり。抑件の尹賢は。高國入道道永の。實方の叔父なりける。中務丞春供の二男にて。彼身の爲には從父兄弟なり。親しき族なるをもて。道永これを一方の。旗頭にはしたるなり。然るにより尹賢は。這回香西元盛を。阿波へ使節の路次云云と。京より通達せられしを。こゝろ得がたく思ふものから。渠は管領の權臣にて。且國友が兄なれば。宜く管待すべけれと

介は。遽しく馬より降て主のほとりに跪き。目今かゝる事こそ候へ。その故は箇様々々と。城の夫役の車力等が。狼藉の緯の趣。彼よりしかけし事のごとく。身の非を飾り人を咎めて。言語巧に告しかば。元盛聞つゝ勃然と。眼を瞬り歯を切りて。そは安からぬ事なりき。縦ひ城かたの夫役なりとも。管領家のおん使を奉たる。元盛が従類を。打擲せしは言語同断。もし是をしも忍ぶべくは。武士たる甲斐もなしといはれん。いまだ遠くはゆくべからず。とく赶蒐に撃留よ。と聲も烈しく下知すれば。逸雄の士卒。齊一應て。或は弓箭。或は短鎗。各々武器を引提て。逸足踏で驅んとす。是により珠之介は。氣を直し力つきて。ふたゝび馬にうち跨り。先に進みて嚮來し路へ。驀直に乗返すを。案内に衆皆後れじとて。街衢を投てぞ走りける。再說。那夫役等は。珠之介主従を。思ひの隨に赶走らして。故所に立集合ひ。更に又車を推て。ゆくといまだ十町に及はず。中間寺の方よりして。客裝せし一隊の武士。その數凡二百あまり。此方を望て赶近つくを。夫役等齊一見かへりて。彼は正して那少年の。一箇隊なる武士ならん。原來頃日中間寺に。旅宿すと聞えたる。京家の人々なりけるぞや。捕籠られてはかなふべからず。はやく逃よと叫りて。車を棄て城のかたへ。走り躱れんとする程に。元盛の士卒等は。透もあらせず哄と喊て。遠きものは箭を射出し。近きは短鎗を晃めかして。矢庭に四五人。突伏けり。これにぞ夫役はいよいよ怕れて。西へ走り東へ脱れて。往方も

が騷げばとて。推留らるゝ事やはある。妨げすな。と罵りて。禁るを手々に搔遣り衝退け。各々車の前後に立て。牽もて去んとする程に。珠之介はいよ〳〵怒りて。馬を馳寄せ刀を拔て。右手に立たる一箇の夫役の。小鬢の外を丁と砍る。雖然淺痍なりけるに。車力の夫役は多人數にて。一輛每に四人あり。五輛合して二十許人の。夫役はなほも怯ずして。那斫たるぞ擊留めよ。と諸聲烈しく罵散動きて。車に積たる手來の材を。手に〳〵引拔きうち振りて。競ひ蒐れる勢ひに。當るべくもあらざりける。珠之介が從者等は。手ともいはず腰ともいはず。はや頻大に擊惱されて。不捷。放せ。とばかりに。迯吼しつゝ亂走す。この光景に珠之介も。駭怕れて物も得いはず。馬の鼻つら牽回らして。捨鞭拍てぞ迯たりける。元盛はかくとも知らず。是時港口に。準備の船より。順風になりぬ。纜を。解くべうもや候はん。乘れ候へ。と告來しければ。さはとて士卒を急しつ。珠之介を諳るに。物見ん爲歟馬に乘て。城下のかたへ出たるが。いまだ還らずと聞えしかば。爾らば途にてあふべきなり。衆皆出よと焦燥て。居多の士卒を前に立し。後に從へ旅舘を出て。ゆくといまだ幾ならず。と見れば前面より。馬を飛して來るものあり。是則別人ならず。珠之介主從が。那夫役等に赶擊れて。迯てこゝまで來つるなり。鬢の短髮の紊れたる。髻さへに振放されし。その爲体の慌しげなるに。況三箇の從者は。薄瘡淺痍を負ぬもなく。流るゝ鮮血を拭ひもやらで。後走にぞ走著ける。然程に珠之

うへに係るべし。然とてよしを訴て。譴斷を請まうすとも。元盛の弟なる。柳本國友は。入道殿の寵臣なれば。渠が爲に讒言せられて。還て不測の罪を得ん。抑元盛國友が。年來民を虐げて。驕恣なるを。入道殿はなほ曉得らで。國家の大事を任し給へば。下情通せず。怨るもの多かり。勢ひかくの如くなれば。怨を秘して謀るに不如。と深念をしつゝ夜となく日となく。思を潛め枕を摧きて。元盛を亡すべき。計策をぞ旋しける。

第十八回　讒を信して道永嬖臣に誓ふ　怨を秘して尹賢香西を陥る

話表。右馬介尹賢に仕へたる。矢野宗好といふものありけり。原是阿波の人氏にて。三好希雲が右筆なりしに。希雲は。高國に撃れし比。その身は尹賢に降參して。いと正首に仕へたり。初阿波に在りし時。執筆を宗としたるにより。大約三好の黨の。花押印章を寫し覺え。些も違るとなしとて。折々人に説誇りしを。尹賢は不圖思ひ出て。こは究竟と。獨悦び。軈て件の宗好を。閑室に招きよせて。東西多く取らせつゝ。元盛を亡して。怨を復さんと計れるよしを。遺もなく箝き示して。三好が元盛に答る書翰の。僞筆をぞ書せける。旣にして宗好は。主命默止がたかるに。思ひかけなき賜ものゝ。多かるを歡びて。一議に及ばずいはるゝ隨に。件の書翰を書寫め。左界の敵將。三好越後守勝時。幷に嫡子左衛門介勝長等。父子連署の花押す

しらずなりにけり。有如之かども元盛は。怒氣なほ盛なりければ。士卒に下知して件の車を。推並べ火を放さして。竹木共に燒棄けり。これに聊慰めて。今はしも是までなり。介殿尹賢をにまうすべき。恨なきにあらねども。はや纜を解くといふ。けふの順風は多く得がたし。この儘阿波へ渡海して。功成名遂てかへさにこそ。必思ひしらせんず。と飽までに罵りて。珠之介を慰め。士卒を從へ。港口を投て急ぎつゝ。准備の伴舟二艘には。士卒等を分乘らしつ。その身の船には珠之介と。近習のものを果らして。管絃を奏し酒うち喫て。稍熱腸を冷せしかば。笑ひ樂み酩酊して。寢るとも知らず珠之介が。膝を枕に臥たりける。案下某生再說。那時に。繫漏されたる夫役等は。辛く城中に逃入りて。即縡の趣を。愾々と訴けり。城主尹賢よしを聞て。家臣を城外に走らしつ。且元盛を索るに。那人々はその折に。港口へ赴き船に乘て。士卒も倶に漕出たれば。こゝには一人も遺るもの。候はずと人僉いひけり。よりて撃れたる夫役等が。亡骸を撿するに。地方の者のいふよしも。那訴に違ふとなく。元盛が權に誇りて。車を燒棄。城主を恨みて。罵りたる事までも。この時定かに聞えしかども。元盛をらずなりしかば。然とてもせん術あらず。家臣は城にかへり來て。有ける隨に報にけり。尹賢これをうち聞て。腸を斷可なる。慍怨に堪ざりしを。つく〳〵と思ひかへせば。元盛は管領の。普第恩顧の權臣にて。使節の命を禀たるを。今私の怨をもて。撃果しなばその咎め。亦わが

山海箭阻、隔靴搔癢也。因本月渡海事。企望稍久。某以戍左界。身不得預其席。遣愚息勝長。欲舒來會之驩。尺素不易盡言。聊以布親串。大永五年。戊辰夏四月日。越後守三好勝時。左衛門佐三好勝長等再拜。香西左衛門尉殿。とあり。筆談といひ花押と云。疑ふべくもあらざれば。道永禪門呆果て。しば〳〵これを讀復しつゝ。思はずも太息を吻て。豈料んや元盛が。かゝる逆謀あらんとは。敵の使はいかにぞや。と問れて尹賢。さん候。絆の證人たるをもて。こゝまで牽せ候。といへば道永頷きて。爾らば我等闕窺して。そのいふよしを聞くべきなり。庭上へ牽せ給へ。と指揮に尹賢こゝろ得て。遠侍に退きつ。士卒にかくと命じけん。舊の席に著程に。尹賢の士卒兩三名。那癖者を牽もて來て。緣頬近く推居たり。登時尹賢進寄り。癖者にうち對ひて。罪人知らずやこの處は。管領の御館なり。尼崎にて首伏の。趣を又云べし。管領聞せ給はんとて。翠簾の那畔になはするぞ。といひつゝも目を注すれば。癖者ははやこゝろ得て。かくなるからは幾遍も。問るゝ毎にいはざらんや。某下雜兵たるにより。具なる義は知らねども。いぬる比香西殿より。左界へ密書を贈られたれば。その回報をせんとある。主命を受て尼崎なる。旅館まで來にけれども。香西殿は既にはや。渡海の船に乘走らせし。と聞えにければ勞して功なく。歸去らんとしつる折。巡邏の兵士等に。怪められて生拘られ。呵責に堪ず首伏の。趣は前後違はず。命運こゝに竭たれば。今さら娑婆に愛惜せん

ら。些も違へず贋たりければ。尹賢望こゝに足りて。歡ぶこと大かたならず。却説この比。尼崎なる獄舍の中に。繋れたる偸兒あり。原是左界の人なれば。尹賢これをも用ひんとて。獄長にこゝろ得さしつ。その宵奥庭に牽居さして。尹賢竊に。這偸兒にいふやう。汝が罪過重ければ。首を刎べきものなれども。わが密計に從ひて。左界の三好勝時等が。間諜者と陽做へて。這回京師へ牽れなば。われ又竊に計ひて。汝を放遣るべきなり。その故は恁々なりとて。香西元盛を亡さんと。計較たりし意中の機密を。詳に聶示せば。件の偸兒歡び受て。命助り候はゞ。何事なれ。仕らん。左も右も計せ給へ。といふに尹賢も歡びて。いふべき事を誨さとしつ。這偸兒を怪しげなる。旅客に打扮して。更に又緊しく綁うつ。その詰朝士卒に牽して。みづから京師に走陟り。高國入道道永の。邸に到り對面して。請ふて左右の人を遠さけ。側に寄て聶くやう。抑も香西元盛は。莫大の御恩を仇にして。叛逆の企あり。渠が阿波へ赴くとて。船出せしその黄昏に。怪しげなる旅客を。雜兵等が搦捕しかば。いとも緊しく責問せしに。渠が懷に密書あり。三好越後守勝時等が。左界の城より密使をもて。元盛に答る書翰なり。これ覧せ。といひかけて。懷にしたりける。僞書をとう出て道永の。膝のほとりにおし寄すれば。道永禪門驚きながら。取揚て披き見るに。その書の略に。逆去歸順。便是勇士所庶幾。足下近内應本州討滅道永法師。將令聰明丸故管領源澄元之子為管領。來翰披閱。幸甚幸甚。

て。席を避つゝ罪を請ひしを。道永さま〴〵に慰めて。ふたゝび身邊に招近つけ。元盛野心ありとても。われは偏に疎意あらず。世に在る限り。等しく存命。死なば共侶にとのみ思ふなる。誠心を知らせん爲。寫め置たる物こそあれ。後々までも證据にして。心つよく思ひね。とかへす〴〵も慰めて。件の誓書を取らせしかば。國友は稍安堵て。謹て披き見るに。這回元盛が叛逆の事により。連坐の罪を負しなば。吾身は天雷に撃碎れて。死して冥府の呵責を禀ん。この事一毫も食言あらば。日本國中大小の。天神地祇。氏神八幡大𦬇。云云と書しるしたる。神文に血を沃ぎて。しかも七頁ありければ。國友ひとつ〴〵戴き拜して。感涙を押拭ひ。君かくまでに淺からず。微臣を思召るゝ洪恩。九の世を易るとも。報ひ奉るに足らざるべし。兄はさらなり九族を。罪なひ給ふ事ありとも。いかでか叛きまつらんや。いよゝ忠勤を抽て。國家の無異を揣りてん。尊慮をな惱し給ひそ。と言承をまうせしかば。道永禪門怡悦に勝ず。きのふ尹賢に約束したれば。加勢の士卒五百名を。尼崎へ遣すべし。この義を計ひ候へとて。世に隔なき主命に。國友いかでか異議すべき。承り退きて。猛に軍兵を鳩め。よしを傳へて。尼崎へぞ遣しける。有恁程に尹賢は。尼崎へ立かへりて。快船夥准備しつ。且兵士の部して。元盛主從歸帆せば。脫すべからず。と下知しける。旣にして京師より。加勢の士卒も來にければ。尹賢是等を後陣と定め。港口の方に隱し置て。元盛がかへり來るを。今か〳〵と俟たりけり。話

や。はやく首を刎給へ。覺悟極めて候。と歹怯もせぬ勇氣の辯舌。道永禪門竊聞して。尹賢を招よせ近づけ。今癖者がいふ所。那書と吻合せしうへは。元盛が逆謀疑ふべからず。とは思へども三好等が。反間ならんも測がたかり。よりて那癖者は。且く和殿に預措ん。はやく尼崎へ牽もてかへりて。元盛が歸帆を覘ひ。方便をもつて一箇も漏さず。皆生拘て注進し給へ。必憖りて殺すべからず。倘又元盛歸帆の日に。船を倍し敵を隱して。城を襲んとするとあらば。渠等を陸に陟するとなく。推捕籠てこれを擊つべし。加勢の軍兵四五百名。翌此方より遣さん。和殿ははやく立かへりて。そこらの准備肝要ならん。と潛やかに示されたる。尹賢は欣然と。命を承暇を請ひ。士卒に癖者を牽退して。その身も續きて退りけり。この日柳本彈正國友は。聊恙ありければ。終日宿所に臥てをり。かゝる故に尹賢の。密訴のよしを知らねども。道永はとさまかうさま。渠等が事を想像るに。元盛誅滅せられなば。國友も又われを恨みて。必他鄕へ立退くべし。縱逆臣を討滅して。京師は無爲に治るとも。相も狎れたる國友に。別れん事の哀しさよ。要こそあれ。と深念をしつゝ。手づから七頁の誓誌をものして。神文に血を沃ぎ。をさ〳〵渠が出仕を俟しに。その次の日に國友が。病著はやく瘥りて。已の左側に出仕せしかば。道永禪門歡びて。故意閑室に在りて對面しつ。さのふ尹賢の密訴の趣。緈悠々と說示して。三好勝時勝長等が。元盛におくりしといふ。密書を取出て見せしかば。國友驚き且怕れ

一いかでかそれを遮くべき。矢庭に追立駈立て。はや〳〵港口へ推戻せば。元盛はせん術もなく〳〵。珠之介に目を注して。倶に船にぞ乘りにける。況や百餘名の從者は。主より先に族〳〵と。僉倖舟にうち乘て。纜を解帆を揚て。初て息をつきにけり。元盛は豫より。計りし事の畫餅となりしを。且羞。且怕れて胸安からず。雖然弟國友の。資あれば執成して。主君の怒りを和解やせん。手を空うして還らんより。播磨の室へ船を歇て。そこらの土産を買集め。京師の裹にすべけれとて。遂に播磨に赴きて。室の津に逗留しつ。東西多く買取ければ。更に一艘の船を傭ふて。積登したるにより。初は三艘なりける船の。是より一艘殖たりけり。かゝる程に元盛は。珠之介と密談しつ。尼崎に到りても。又京師にかへりても。實には告ずして。人にいふべき事などを。從者に示し口を合して。今はかうと思ひしかば。尼崎を投て乘かへすに。この日順風なりければ。巳の比及に船ははや。港口に入らんとする程に。忽地暗號の烽火とおぼしく。一道の火氣天に冲りて。その聲耳邊に響く程こそあれ。居多の快船漕顯れて。一艘毎に三十餘名の。兵士弓箭短鎗を携へ。その勢無慮二三百人。元盛が四艘の船を八方より捕籠て。逆賊元盛とく出よ。汝は三好に內應して。敵を誘入れん爲。那地へ使節といひこしらへて。阿波に赴き密談したる。伎倆は既に發覺たり。この故に管領家の。おん下知によりて汝が歸帆を。俟と既に久しかりき。覺期をせよ。と異口同音に罵りつ漕よせて。はや撃捕んと競ひ蒐れば。元盛亦

表更題。香西四郎左衛門尉元盛は。渡海の船中異なることなく。阿波州に着岸して。那城に到んとする程に。三好筑前守元長。このよしを傳聞て。老黨を召集め。高國入道道永は。わが大父の寃家なり。況その家臣元盛は。民を寃げ驕を極る。烏滸の小人なるものを。招待の使と稱して。さし來されしこそ奇怪なれ。汝等士卒を將て。路路に推駐め。速に追返すべし。異議に及ばゞ一箇も漏さず。撃て棄よ。と下知せしかば。三好が老黨その意を得て。軍兵多く従へて。港口を望て走たりければ。元盛は升陸して。まだ一宿も歷ざりしに。三好が士卒に捕籠られて。一歩も進むことを得ず。その隊の大將三好孫六郎秀一。馬を乘居聲ふり立て。香西元盛等慥に聞け。汝が主なる道永法師は。嫡家を追退けて。管領職を横領し。又詐を行ふて。吾先君を害したり。こゝをもて元長主。阿波の御所の公達を。將軍になし奉り。故京兆澄元朝臣の。嫡男に御座す。聰明丸に管領職を。紹しまゐらせんとての。軍議に暇なき折から。使節と倡へて推參せしは。這地の容子を知まく欲する。反間者にぞあらんずらん。皆悉生拘て。頸を刎べき奴原なれども。汝等が如き斗筲の小人。幾百人撃捕とも。又何の益かあらん。そが儘に追返せとある。寛仁大度の下知によりて。三好秀一向ふたり。命惜くばとく〳〵立去れ。異議に及ばゞ目に物見せん。いかにぞや。と呼れば。その隊の士卒三四百名。鬨を揚箙を敲き。素破といはば射て仆さんとて。素彎をするも多かりければ。元盛大く駭怕れて。陳謝の辭を盡せども。秀

奸計行れて。元盛を亡し怨を復せし。意中の歡びいふべうもあらず。加勢の士卒を勞ひて。元盛が首級を實撿し。その餘重立たる首級共も。翌京師へ陟せんとて。士卒を纏め列を正して。馬上優に徐々と。城中へ還りたる。その夜尹賢は。矢野宗好をもて。獄舍の内に繋し置たる。那偸兒にいはするやう。這回の密計行れて。元盛滅亡したる事。汝が功を第一とす。是により金百兩を給はりて。前約のごとく放遣るべし。と仰らる。竊に逃去るべし。と正首に囁き傳へて。獄舍より扶出し。件の金を遞與せしかば。偸兒は歡び受て。恩を拜し別を告。遂に城中を潛び出て。ゆくと凡十町あまり。一ト叢繁き林のほとりを。過らんとする程に。忽地後方に弦音高く。一ト條の征矢蜚來たつて。偸兒を射倒しけり。灸所の深痍なりければ。叫びもあへず仰反て。血に塗れつゝ息絶たり。此は是尹賢の。豫て計りし事にして。件の偸兒を助け措かば。渠が口より密謀漏れて。身の禍になるとあらん。竊に殺して根を斷べし。と尋思をしつゝ宗好は。偸兒の武を撰て。林の中にてこれを射殺し。その頸を捕り。件の金をもとり復して。城中にかへり來つ。竊に尹賢に見せしかば。尹賢卽賞祿として。金をば宗好に取らせけり。是より先に尹賢は。腹心の士卒に下知して。這回の遺恨は元盛が。龍陽珠之介とかいふ奴より。事起りたるよしなれば。もし少年と見たらんには。一個も漏さず擊留よ。と竊に命じたるによ

復駭慌て。こは什麼いかに。とばかりに。おそる〳〵船窓より。半身を顯して。人々さのみ怒り給ふな。某素より野心なし。そは恨みあるものゝ。讒言にてぞあらめ。この身京師に赴きて。まうし解き候はん。やよ等給へ。と叫べども。討手の士卒等いかでか聽べき。愚なり元盛。汝が船は三艘なりしに。その數多くなりたるは。敵の兵士を隱し乘したる。その證据分明なり。ものないはせそ撃捕れと。諸聲高く罵りて。手に〳〵鈎竿を打かけて。乘移らん。と閧きたる。勢ひ制むべうもあらざれば。元盛主從已ことを得ず。且戰ひ且漕ひらかして。船を水際に寄せんとすれば。陸の方には大將尹賢。京師より差來されたる。加勢の士卒を從へて。手繁く射る箭に透間なければ。元盛主從度を失ひて。射られて水に淪むも多かり。かくは元盛水陸の。討手の爲に捕籠られて。免れがたしと思ふになん。ふたゝび船を漕返して。澳なる敵と戰ふに。後氣憑たる癖なれば。しいだしたる事もなく。一百餘名の從類は。遺り寡く撃捕られ。その身も數个所重瘡を負ふて。竟に首を捕られけり。その中に珠之介は。戰ひ危く見えたる折。上衣袴を脱棄て。手來の板子を掻抱き。舷より身を跳らして。海に入り潮に任して。浮つ沈みつ流れけり。然ども討手の兵士は。戰ひに暇なき折なれば。これを見るものあるとなく。香西が從類を。一箇も漏さじとのみ。競蒐りし勢ひもて。その船をさへ乘沈め。室の津より傭れ來たる。物積船も共侶に。打破られ水に沈みて。楫取水主等は撃れにけり。然ば右馬介尹賢は。一時の

隱慝を濫さじ、と底深く計りしは。是戰世の惡俗の、奸詐に長たる情狀なり。その本元を推さは。道永禪門理義に暗く。男色龍陽の惑ひより。柳本香西等の。佞人を親愛して。國の大事を任したる。贔負の沙汰の致す所。一ッ人ッ貪戾ならざりせば。一國亂を興さんや。この後三好長慶義長。陪臣にして主を制し。二世國命を執るに至る。是その縡の張本なり。案下某生再說。末松珠之介は。曩に討手の大勢に捕籠られて。主從危窮に及びし折。免れ果じ。と思ひしかば。板子を抱き入水して。潮に任して流るゝと。いくばく里なるを知らず。身は最大う疲勞つゝ。心地死ぬべく覺し比。磯打浪に搖揚られて。おもはず濱邊に寄たりければ。板子を棄て臂近なる。岩に手をかけ取留めしが。忽然と息絶て。爾后の事を知らず。助る人のなかりしかども。こゝに絶せぬ命根なりけん。おのづから甦生りて。四下を見るに日は暮たり。何國の荒磯なるを知らず。多く水を飲みたるにや。腹の中疝刺めきて。苦みに堪ざりければ。岩頭に腹を押當て。頭を低て推す程に。夥しく水を吐きしより。やうやくわれに復りしかども。爰問ん浦の苫屋もあらで。夜半の月のみ鮮明なり。單衣の潮垂れしを。搔よせて彼此と。絞るに力なきものから。五月の初旬なりければ。袂涼しく凌ぐに易かり。こゝは敵地歟。外嶋歟。地方の名をも諮ぬべく。一椀の飯をも乞めとて。月を燭に覺束なくも。人家を索て迦りけり。畢竟珠之介が。這海濱に流寓て。又甚麼なる話說かある。そは次の卷に。解分るを聽

り。事果てその屍を。これ彼と撿するに。童扈從とおぼしきもの。兩箇ばかりありけるを。知れるものに見せて問ふに。珠之介にはあらずといへり。然れども陸の戰ひならねば。脱れたるものありとも覺えず。多くは水中に砍沈め。みづから海に飛入て。死したるもありければ。珠之介も入水して。亡びたる事疑ひなし。と士卒等が皆いふにより。尹賢も然あらんとて。遂に索ず已にけり。却說。その詰朝尹賢は。加勢の士卒共侶に。京師に陟り道永に見參して。元盛伏誅のよしを演說し。豫ては擒にせよといふ。仰を受候へども。渠は三好が隊兵を。別船に隱し乘せて。初には倍す多勢なりしに。元盛主從必死を極めて。手強く防戰ひしかば。擊漏さじと思ひつゝ。已ことを得ず皆擊果して。首級を齎し候なり。又嚮に生拘りたる。三好勝時等が間諜者は。戰ひ果しその夜さり。獄舍を破りて逃亡せしを。雜兵等が赶蒐て。擊留にきとまうすにより。那奴が首級をも持しまゐれり。その餘の者は云云と。報て實撿に入れしかば。道永禪門詰るによしなく。その有功を賞するのみ。又柳本國友は。主の誓書に感服して。辱しと思ひしかば。事の虛實を召問はで。兄元盛を討れしを。聊も怨とせず。還て尹賢を勞ひければ。尹賢は思ふに優たる。縡十二分の首尾を得て。身の暇を賜りつ。尼崎へぞかへりける。扨も香西元盛は大く驕れる。佞人なれば。不測の罪に陷りて。從類と俱に亡びし事。寔にその所なり。さばれ又尹賢も。謟を行ふて。私の怨を復し。又密計を行せたる。愉兒を賺て殺して。その

近世說美少年錄第二輯卷之五

東都　曲亭主人編次

第十九回　茂林社に惡少捕らる　三石城に叔侄再會す

再說末松珠之介は。嚮に危窮に及びし折。脱れ難つゝ大洋へ。身を捨てこそ浮む瀬の。あれば荒磯に流れ寓て。死ざることを得たれども。人にも遇ず言問ん。浦の苫屋もなかりしかば。覺束なくも迪々て。ゆくこと幾十町なるを知らず。夜は最いたう深たる比。前路遙に燈火の。光隱々と見えて幽なり。原來那首に人は住むらめ。呼覺し宿りを投めて。一椀の飯をも乞ふべく。地方の名をも問ばや。と思へば疲勞れし足も進みて。迪り著つゝこれを見るに。人の家にはあらずして。茂林の中にいと舊りたる。社に點せし常夜燈の。樹の間を漏りて見えたるなり。そを守る人もあらざれば。進み近つき月光に。且その檐を瞻仰るに。辨才天と書したる。白字の匾額ありけるに。この社の造りざまも。皇國の神社佛閣に。異なることのなかりしかば。てゝも猶外嶋にてはなかりき。とやうやく猜して。建たる格子を。推ひらき進み入り。恭く合掌して。

ねかし。

近世說美少年錄第二輯卷之四 終

は。守る人もなく。里遠き。茂理の中なる古社を。臥所にして熟睡をせんや。抑汝は何處の人ぞ。とせわしく問るゝ。珠之介は。事の實を告難て。それはとばかり一句も出ず。黄葉を舐りし囈子に似て。只脣を動して睛を睜るのみなりければ。雜兵等は冷笑ひて。その身の出處を得いはぬは。問でもしるき敵がたの間諜者にあらんずらん。誘城中へ牽もて還りて。御讞斷に任しまつらん。とく／＼出よ。と索とり詰て。僉共侶にゆく程に。途にして天は明たり。却說件の雜兵等は。珠之介を牽もてかへりて。縡云云と聞えあげ。城主の出るを俟けるに。この日は民の訟の。生平よりも多かりければ。城主はその事稍果し。未の比に珠之介を。問注所の坪の内へ。牽入させてよしを問ふに。雜兵等はこの曉がたに茂林の辨天の社にて。搦捕たる縡の趣箇樣々々と遺もなく。猶又具に遞けるを。城主は聞つゝ頷きて。やをれ癖者。と呼かけて珠之介を左見右見つ。人はその貌をもて。邪正を定めがたけれども汝は只その容止の美しきのみならで身のさまも賤しからず。何の故にか夜をこめて古廟の中に獨臥たる抑當國なる人の子歟。又他鄉より來つるもの歟。その身の素生姓名を隱ず告よいかにぞや。としば／＼問れて珠之介は沈吟じたる頭を擡て。御諚のごとく在下は當國の者にあらず。故鄉は近江の某村なれども。はやく二親を喪ひて。よるべなき身となりしかば。筑紫の由緣を心あてに。浪速の浦より便船して。遙けき浪路をゆく程に。暴風にその船碎けて。皆大洋に沈みし折。在下は幸ひに。板子に

南膜擄持能與辨才天。わが窮阨を救せ給へ。と數回祈念して。又彼此と見かへるに。神戸帳のほとりに献供たる、一土器の夏桃と。野鼠の喫殘したる。一ト枚の餠ありけり。久しく饑て堪がたかるに。よき物得つと遽しく。とり卸して是を食ふに。日來は美味に飽たりしも。かゝる時には何まれかまれ。皆甘からずといふとなければ。霎時も置ず早に盡して。聊饑を凌ぎしかば。坐して曉るを俟程に。とさまかうさま思惟るに。こゝはいと乾淨たる。茂林の中にはあなれども。神前に供物あり。常夜燈さへ置れしを。おもへば人家の遠くもあらで。晝は詣る人もあるべし。天も明ばそこらに到りて。哀み告なば情ある。人の資にあふとの。ありもやせん。と尋思をしつゝ。身による彪脚を拂ふ手の。果は動ずなる隨に。渡勞て熟睡をしたりけり。浩處に。夜行の雜兵兩三名。非常に備る爲なるべし。この夜城外なる村落を。彼此とうち巡りたる。かへさに件の辨才天の。社のほとりを過る程に。人の鼾の聲せしを。忽地に聞つけて。怪しと思ひて立よりて。準備の燈罩もて。見れば果して一箇の少年。熟く睡りてありければ原來癖者ござンなれ。脫しはせじと。潛めきて。戸を蹝ひらきて犇々と。押へて索をかけにけり。珠之介は思はずも。雜兵等に綁められて。こは什麼いかに。とばかりに。且騷き且呆れて。夢かとぞ思ふ苦しさに。慌たる聲をふり立て。人々恕し給ふな。某犯せし罪あらず。と叫ぶを聽で皆口同音に。這偸兒が悍なしさよ。面の色は白かれど。年に似げなく膽太さ。癖者にあらざりせ

て。申さば候はん。笞を放べ給ひね。と叫べばさこそ。と雑兵等は。引起して推居たり。登時珠之介は。息を吻き跪きて。又上座にうち對ひ。この地を何國とまだ知らねば。なほ後難を測かねて。一旦欺きまうせしかども。賢察の明なる。鏡に向ふに異ならねば。隱し果べうも候はず。いでや實事を告奉らん。在下は末松氏。珠之介と呼るゝもの。年十六になり侍り。管領高國入道の。權臣で候ひし。香西四郎左衛門尉元盛に。身邊近く使れて。年來京師に候ひき。爾るに主なる元盛は。阿波へ使を承りて。彼地へ赴きてかへり來つ。在下等も倶せられて。船を尼崎に返せし折。元盛逆謀あるよしを。人に讒言せられけん。數百の討兵を差向られ。陸にも寄せず船中にて。主從凡百名あまり。討捕られ候ひき。その折に在下は。はやくも海に飛入て。脱れてこの地へ流寓りたるに。その縡の趣は。向にまうせしに違ふとなし。一旦詭り候ひしは。この所も亦管領の御方の城地ならん歟。と竊に危み思へばなり。なれども元盛逆謀なし。よしや些の越度ありとも。在下なるが一毫も。預知るべき事ならねば。おん憐愍を願ふのみ。といふに城主は驚きて。原來汝は管領の權臣と聞えたる。香西が扈從なりけるか。こゝは則備前州三石の城にして。赤松家臣の采邑なれば。故管領澄元ぬしに。舊婣の好みあり。知ずや先君。赤松政則朝臣の後室は。勝元朝臣の息女にて。洞仙院尼即是なり。かゝれば高國入道には。遺恨こそあれ親しからず。さばれ件の元盛は。民を虐げ驕を極めし。侫者ぞと人傳に。

携り潮に任せて。流れて洪波に打揚られ。この地の浦に寓るとぞが儘。一旦息絶候ひしを。又幸ひに甦生りて。四下を見るに苫屋もあらず。其處を何國と知るよしなければ。人にあはんと思ひつゝ。月を燭に幾十町をか。來つゝ疲勞れて樹間なる。社に憩ひてゆくりなく。霎時目睡たる程に。夥兵達に怪められて。搦捕られ候ひき。在下素より犯せる罪なし。衣の濡れしを乾たれども。潮氣は耗せずなほ濕れり。これを證に賢察ありて。免させ給へ。とわびしげに。實語虛說うち雜て。哀み告るをうち聞たる。城主は頭をうち掉て。入水の事はとまれかくまれ。總て汝がまうす趣。實しからず胡論なり。愿ず稟せいかにぞや。と問ふを珠之介推返して。御諚では候へども。いかでか詐詭を申しあぐべき。幾遍問せ給ふとも。外には情由も候はず。といはせも敢ず聲ふり立て。這奴甚大膽なり。その舊里は近江なる。某村にして父母を喪ひ。身のよるべなき隨に。筑紫の由縁を訪んとて。渡海の便船せしものならば。賤き民の孤にて。尤難義の旅なるべし。爾るに身のざま相應しからず。上には練の單衣。膚に著しは越後麻の襦衫にこそありつらめ。言と形狀と齟齬せるは。是詭言の明徵なり。憶ふに敵の反間者歟。然らずは別に情由あらん。今飽までに歐懲さずは。いかにして實を吐くべき。者共其奴に笞を當よと。烈しき下知に雜兵等は。承りつ。と應も果ず。左右齊一珠之介を。引捕へ推俯て。笞を揚て二三十。背をいたく打しかば。珠之介は皮破れ。肉ひらけたる苦痛に堪ず。細れる聲をふり濫り

景風聲までも。定かに摸り得たるをもて。今試に汝に問ふに。その言總て同じからず。かゝればば轡に元盛が。扈從なりき。といひけるも。亦是汝が詭辨にて。われを欺くものなるべし。是をもて推すときは。汝は敵の刺客。われに近づき刺殺さん。と欲するにこそあらんずらめ。今はしも免しがたし。觀念せよ。と敎閑て。足踏破る庭下駄の。音いと高くをり立て。引提たりける素鞘の。刀を晃りと拔手も見せず。珠之介が目前へ。刀尖丁と突著れば。吐嗟。と思へど必死の覺期に。睨つめて些も騷がず。霎時氣色を闚ふて。見かへりもせず冷笑ひ。刀禰そは理なき御思慮ならん。在下が聞僻か見違へたる歟知ず侍れど。問せ給ひし京師の事を。今さらに詭節りて。何でふ刀禰を欺くべき。然るをなほ疑ふて。手づから擊んと敎閑給ふは。吾命運の竭る所。逃るとも脫し給はじ。覺期を究め候なり。とく〳〵首を召れよ。と項を伸し合掌しつゝ。悍く答てつゐたり。賊主は猶も懲起て。いふにや及ぶ。と刃を引て。後に立つゝ聲をかけて。擊んとすると兩三回。いよ〳〵動せぬ珠之介を。左見右見つゝ感嘆して。姿態優美しき少年の有繫に武く勇しく。命惜ぬ今般の進止。現興房が猶子なりき。と褒る辭に珠之介は。訝りながら見かへりて。今興房と宣ひしは大內殿の家臣にて。左界の浦の戰ひに。澳の水屑になりにき。と風の便りに聞えたる。そが舊名は瀨十郎。陶駿河守興房ぬしの。事にしあらず候や。と問ふ間に遽しく。刃を斂め引よせて。やよ珠之介われこそは。爾が叔父なれ。興房なり。

豫て聞たる事しもあれば。そが滅亡はさるとながら。われ亦その非を正すにあらず。竊に京師の光景を、問まく思ふよしあるに。汝詳にいふべきや。と問へば珠之介歡びて。原來この地は備前なる。三石とやらんに候歟。只今の仰にて。再生たる心地ぞする。何事なりとも問せ給へ。知たる限告まつらん。といふに城主は頷きて。やよ勝兵們這少年に。飯を食せ勸りて。奥庭なる折戸の邊に。將てゆきてわが出るを俟べし。渠本心を傾けて。問るゝ毎に隱ず報なば。命を助るのみならで。厚く惠みて盤纏を取せん。然るをなほ詭りて。われを欺く事あらば。近屬得たる新刀あり。立地に頸撃落して。その鋭鈍を錬んのみ。且よくこの義をこゝろ得て。姑く索を放すべし。然ばとて出離して。とり逃しそ。こゝろ得たる歟。と示せば雜兵一議に及ばず。又遽しく左右より。珠之介を引立て。外面投て出にけり。却說城主も退きつ。日は稍未牌過る比。件の刀を携て。獨奥庭の、かなたなる。縁頬に出ければ。雜兵等は既にはや。折戸の裡面なる樹下に。珠之介を將て來てをり。遽しく引立て。縁頬の下に推居るを。城主は見つゝ雜兵等にうち對ひて。われ今竊にこの少年に。問んと思ふ事多かり。汝達は退きて。庭門を守れかし。とくへと急がせば。僉こゝろ得て退りけり。當下城主は珠之介に。京師の光景世の雜說を。これ彼となく諮るに。珠之介は凝滯せず。彼は恁々箇樣々々と曲々に答るを。城主は聞つゝ勃然として怒れる聲を苛立て。そは皆汝が虛言なり。われいぬる比間者をもて。那首の光

世には死せり。と思はれし。興房が存命て。四稔をこゝに送る事。詳に告ん聞ねかし。往時左界の退口に。御方の船は風波に。或は破られ覆りて。妻子從類士卒まで。うたてや魚腹に葬られ。只興房が乘たると。雜兵の船と二艘のみ。命つれなく眞金ふく。吉備の前なるこの地の浦に。辛くも流れ寓りしかば。いかでわれ會稽の。恥を雪めて左界の城を。再とりも復さずは。主君に見參すべからず。况周防へ阿容々々と。信をせじと思ひつゝ。潜びてけふまでこゝに在り。扨も這備前州は。赤松家子政村に至るの采地なれば。家臣浦上掃部助宗村これを支配して。その子浦上備前守隆宗をもて三石の。城主にはしたるなり。彼宗村は豫てより。わが主君大內殿へ。內附の志を顯して。他事なく聞えしよしもあれば。われゆくりなく隆宗の。資を得て城に逗り。合戰の義を謀るといへども。戰世の沿習にて。赤松家も亦多事なるに。宗村は又京師へも疎からず。もてなして首鼠兩端の意味あれば。わが爲にのみ力を用ひず。この故にわが宿望は。畫餠となりつゝ。栲繩の。長き光陰を送るになん。近屬かくと周防へ聞えて。歸參れ。と叮嚀に。仰下されたりけれども。倘しいだしたる事もなきに。今さら歸參は面ぶせなり。いかにせまし。と思ふ程に。這三石の城主なる。浦上隆宗は所要ありて。播磨へ赴きたるにより。興房城を預りて。敵地の備由斷なく。民の訴をさへ聽定めて。隆宗の還るをまつ折。別れて夥の年を歷て遂に面を認りずなりたる。爾に名告會たるは。是切てもの事にして。死ぬを不幸と思ひしに。

嚮に爾を責問ひし折。末松珠之介と名告りしかば。こはわが猶子にあらずや。と思ふ心を得まいはで。且その面をよく見るに。果して眉上に黒子あり。こゝをもて綁の。索を解しつこの奥庭へ。召よせて又その手を見るに。思ふに違はず右手の甲に。かの一文字の痣さへあれば。疑ひは稍解たれども。倘淺ましく生育て。心穢く浮世めく。ものにしあらば名告るも要なし。鉗して見んと。尋思をしつゝ。陽には強顔もてなして。殺さんとまで權せしに。武弁の家に仕へたる。甲斐あればこそ必死を究めて。刃に恐れぬ丈夫の心魂。吁感するに餘りあり。相別れしより十といひて。四稔になりぬ。汝が二親は。恙もあらで京師に處る歟。母の阿夏が云云と。わが事も又手の甲なる。痣をよすがに叔侄の。名告をせよ。と誨えけん。兆徵は是ぞ。と珠之介が。右の手首引よせて。その身の左の手の甲と。合して見せつ。見れば現。割符に似たる假黒子。一字千金。二手合體。三千世界に類なき。是再會の像見にこそ。と潛めき告る骨肉の。誠はこゝに顯れて。怺へ難つゝ共侶に。落る涙の珠之介も。歡しさと哀しさに。手を携かはしうち向上て。原來おん身は小父の刀禰。興房ぬしにてをはしけり。こゝは備前の三石ならで。冥土の阡陌三途河の。ほとりにははべらずや。おん身は四稔前つ比。左界の戰ひ敗れし折。船覆りて波の底に。沒給ひき。と聞えしに。思ひかけなき再會なり。故こそあらめ顚末を。告て惑ひを解してよと。せわしく問へばさもこそ。と爰四時下を見かへりて。現理りなる爾が疑ひ。

れに告しかば。興房は聞く事毎に。或は驚き或は感じて。且歎息すると半晌ばかり。叉きたる手を稍釋きて。憐むべし木偶介小夏は。山豪の手にかけられて。命はかなくなりけるよ。是よりの後阿夏が艱難。人の情に身を寓せて。爾を守も育たる。數年の苦勞然ぞあらん。加以周防まで。母子諳て來し甲斐も。あふよしもなく人傳に。訃音の聞えし折の。心の中を今さらに。汲見ては彼室津海の。千仭の底も數ならず。われもし那地に在るならば。面會憚ありとても。左も右もして取らせんに。悔て返らぬ事ながら。甚麼なる星の循り來て。活み殺しみ祟りけん。しかはあれども幸ひに。辛踏氏に再會して。伴れたるそがうへに。阿夏は其處によすがを定めて。渠が故郷へ赴きたる。事の情を猜するに。本意にはあらじ。さりながら。かの木偶介に別れしより。十稔あまりの艱苦を辭せず。久しき寡婦の稚兒を。守育しは興房に。見せましつべし。見られもせん。と思ひし事の空となりて。よるべ絶たる身のすべなさに。再縁して結びけん。情義に疎しといふべからず。那允四郎はわが舊友。永正の比深草にて。心しられしよしさへあれば。竟にその身を任しけん。是も亦いとあはれなり。さるにても。那福富とかいふ郷民が。阿夏母子を養ひしは。尤俠氣なるものか。兼顯卿のおん庇蔭は。これにも優て有がたきまで。辱きも今さらに。そが歡びをいふすべき。便著もあらずなりにたる。わが薄命のみならで。爾もおなじ流寓の。定めなき世に定めなき。身の往方こそ悲しけれ。嗚呼何とせん。

存命ずはけふ相見んや。その歳月は異なれども。叔侄共に入水して。等類はみな死したるに。其身々々は恙なく。おなじ備前の三石に。流寓りしは奇なるかな。歡しさに就て又。みやこの天もなつかしさぞや。爾はいかなる由縁ありて。那香西に仕へたる。その身の來歷親の事。詳に知せよ。いかにぞや。と問つ答つ武夫の。猛きこゝろも恩愛と。情義に脆き袖の露。習くとはなしにいと繁さ。言の葉末にあまりけり。珠之介はつくゞゝと。聞つゝ瞼を押拭ひて。有如之べしとは知ずして。母御と共に最大う。苦しき客宿をせし事あり。ではこの次に告まつらん。伃かりしその比の。親の苦勞は年長て。傳聞たる事ながら。おん身が猛に山口へとて。返され給ひし年の秋。家尊と異母ある女兒さへ。非命にこの世を去り侍り。是より後は近江なる。福富といふ片山里に。憂歲月を送りたる。母御の艱苦。吾儕のうへの。首をいへば箇樣々々。と木偶介が事小夏が事。阿夏がうへに忌むべき事は。皆省略ていはねども。大夫次が情にて。年來那首に養れたる。そこらの事は遺もなく。周防の客宿に蹩躠竭て。困窮至極したりし折。料らず幸踏兀四郎に。環りあひ資を得て。母子京師に伴れ。阿夏は又兀四郎が。故鄉へ還るに伴れて。陸奥のかたに趣き。珠之介は兼顯卿の。愛顧によりて京師に留り。職原諸禮を見習ふて。且く彼卿に仕る程に。香西元盛に懇望せられて。又その家に仕へたる。この幾條の長ものの語の。始終りを漏さず增さず。わきて周防の一段は。今見るごとく辭を連ねて。いともあは

き別れたる。亡親よりもなつかしく。思ひしおん身に一日なりと親しく事へまつらずば。侫たる甲斐もあらずかし。枉て許させ給ひね。と口説くを聴かず頭を掉て。愚なり珠之介。武運めでたく年老て。坐席の中にて身まかるならば。末期の水をとらせんず。と逆思ひし妻と子を。先だてゝ今遺る身に。再會測りかたかるべし。と思ひし侄にあひながら。追遣るものゝあるべきや。そを遠離るは武士の義理。公道人情両ながら。全うしがたきものなるを。愛惜せんは惑ひなり。とは思へどもつれもなく。只今出てゆけとはいはず。相別るゝとも爾が久後。心にかからぬわれならねば。東國へ薦遣して。仕官の途を開くべし。故管領憲實ぬしは。わが主君に身を寓せ給ひて。長門の深川にをはしませしが。いぬる比世を逝り給ひき。されば是等の内縁もて。今の鎌倉の両管領も。興房あるを知せ給へり。就中扇谷朝興朝臣の藩中には。年来相識る者多かり。那家やうやく衰へて。今は武蔵と上野のみ。所領二个國に過ざれば。武の河越に在城して。なほ北條家と戰ひ給へり。然けれども舊家にて。世々管領の貴族なれば。關東の武士これ彼と。志を運ぶもの。少からずと聞えたり。かゝれば又遠からず。鎌倉に還住して。威勢舊の如くにならん。よりて爾を紹介して。河踰へ遣すべし。朝興朝臣を主とし憑みて。名を揭家を興しねかし。かゝれば又今よりして。東西千里の別にあなれば。相見んとは難からず。就て警むべき數箇條あり。われつらつらと爾を見るに。その容止醜からず。世に美男たるもの

とばかりに。憂苦に堪ねば藻鹽草。かき口說たる壯士が。おはぬ恨みを得ぞいはで。阿夏が事を思ふのみ。佛生山に七稔の。仇を兩箇の夫かさね。又旡四郞に遭し夜の。情由を知らねばわけ迷ふ。歎きの霧ぞ深かりける。叔父の心を推量る。珠之介は涕うちかみて。いとおほけなき御述懷。然る御こゝろにましまさば。今よりこゝに留りて。左界の城を攻め給ふ日に。第一番に先駈して。戰歿せば那塹の。埋草になり侍りてん。この義を允し給ひね。と勇むを興房推禁めて。噫聲高し。何をかいふや。左界は主君のおん爲に。孤城なれば戍りがたかり。そを攻るとあるべからず。といぬる日仰下されたれば。又いかにともせん方なし。おもへば四稔先つ比に。わが妻をも又獨子なる。房子丸をも那浦にて。水屑となしたる是より以來。心の憂苦は淡雪の。消ぬるばかりに積れども。そを慰るものもなし。爾るに爾と不憶く。再會せしは迭の歡び。今は世に只叔父ひとり。侄ひとりなる事にしあれば。養ひとりて弓箭を傳へ。家を紹するものならば。幸なき中の幸なれども。左界の城を喪ひたる。愆に身を恥て。他鄕に蟄せしわれなるに。わが私の家の爲に。子を養はゞ貳ごゝろ。これあるに似て不忠なり。縱この義を免されて。養るゝよしありとても。爾をこゝに留めがたかり。そはわが心に羞おもふ。舊愆あればなり。やよ必な恨みそ。といはれてほゐなき珠之介は。沈吟じたる頭を擡て。吾儕をこゝに留めがたしと。宣はする事情を。定かに知るよしなけれども。いかなる過世の約束なりけん。佗きせに

なかれ。こゝろ得たる歟と説諭せば。珠之介は胸前を。錐もて刺るゝ心地しつ。慚愧後悔限りなく。畏りてぞ土居たる。登時興房は。外面にうち對ひて。掌をうち鳴らせば。庭門に退き居たる。夥兵等一齊阿と答て。遽しく來にけるを。なほも間近く呼よせて。この少年の來歷をわれ又具に糾問せしに。素是東國のものにして。その親はわが舊友なり。よりて翌人を隷て舊里に送遣りてん。今宵は城中に留め置て。かさねてわが下知を俟べし。等閑になものせそ。と叮嚀に命すれば。夥兵等は僉こゝろ得て。珠之介を將て退りけり。有之而又興房は。腹心の老兵二名に。珠之介が事を囁き示して。笠草鞋の類まで。客装の准備を急がし。扇谷家へ紹介の。一通を書寫て。更闌る比珠之介を。竊に召よせて扨いふやう。曩に示せし趣は。今さらに又いふに及ばず。扇谷家へ汲引の。書翰は既に寫め措つ。盤纏も聊取らすべく。老兵二名に送らせん。翌は夙めてこゝを出て。はやく東國へ赴くべし。戰國の常制なれば。路に新關も多かるべく。盗難も亦測かたかり。姿を窶し微行して。非常の患を禦ぐを要とす。就て東國に到ても今の名字であらん事。有繫に憚なきにあらねば。末松の松を省き。珠之介の玉を除きて。末朱之介晴賢と名告るべし。されば道家の教にも。小人罪なし玉を抱きて。罪ありとなもいへりしに。玉扁を除かば。この意に稱はん。只是のみにあらずして。末と陶とは文字異なれども。和訓は等しく。是須惠なり。又晴賢と名つくるよしは。天も晴ざれば。宇宙暗く。人も賢ならざれ

は。色の爲に生涯を。愆と往々多かり。これ亦その身の不幸といふべし。又爾は能辯にて。頗智才覺ありとおぼし。多辯は是德の害なり。默して德を脩るに不如。才あるものは自負て。行狀宜しからざるが多かり。周公の才の美なるも。驕且吝ならば。その餘は見るに足らずといはずや。爾が主なる元盛も。驕且吝にて。忠義に疎きものならずは。那滅亡に及ぶべからず。爾もそれを見習ふて。貪り驕を賢しと思はゞ。一旦權を執るとありとも。又元盛のごとくなるべし。世に浮薄なるものは。色を好み貨を愛して。恥をしらざる故に禮儀に疎かり。禮は是。貴賤を序る曲尺なり。一分は則寸に及ばず。一寸は又尺に及ばず。且よくこの義をわきまへて。分限を守るべし。かくはいへどもわれも亦。少かりし時愆多かり。わかき時の愆は。世に免さるゝとありとても。改ずは何の益かあらん。これを譬ば嫩樹の幹に。細小なる疵をつくるが如し。その樹大きうなるときは。疵も亦隨て。大きうならずといふものなし。かゝればわかき時の愆を。はやく改めざるものは。その愆大きうなりて。死後まで疵の亡ざるなり。わが今悔る所をもて。聊爾に示すのみ。智仁勇の三德も。忠信孝悌の八行も。自然と人の心に備る。なれども學て磨ざれば。五常八行顯れず。惡趣に染り易きもの。和漢今昔一致なり。興房が少かりし。その比の愆を。今は知る人なしといふとも。竊に心に恥ざらんや。その愆を知るをもて。今は愆鮮きのみ。この餘は爾みづから擇て。よしや忠信の狗となるとも。亂離の人となるとも

そは矢野宗好と。獄舎に繋ぎし偸兒のみ。那偸兒奴は欺撃に。はやく結果けたれば。後產は病ねども。心憎さは宗好なり。過分の賞祿を取らせしに。猶もこゝろに嗛ずや。功に誇れる面色す。然るを知りつゝ由斷して。那奴が口より洩されなば。後悔其處に立かたからん。この禍を攘ふに不如と。腹穢くも思量りて。竊に毒を餌んとせしを。人ありて矢野に告にけん。宗好は驚き怨みて。逐電して迹を埋め。丹波の八上に赴きて。波多野備前守植通に。尹賢が隱慝の顚末。元盛讒死の秘事を。遺なく囁き告しかば。植通聞て遺恨に勝ず。矢野宗好を留措て。その身は潜びて京師に赴き。弟柳本國友に對面して。縡云云と報知せ。右典厩尹賢をいふはわが兄の。寃家なると勿論なれども。入道殿高國をいふの淺はかに。讒言を信容て。さしも罪なき家臣を。むごく討せしこそ遺恨なれ。先や謀反の旗揚して。軈て思ひしらすべし。和殿もはやく丹波に還りて。力を勠せよ。と薦めければ。國友太く主を怨みて。原來いぬる比七枚の。誓書を賜りしも。かゝる事のあればなり。然りとも知らで欺れ。けふまでもよしなき忠義に。兄の枉死を思ひ易しは。かへすかへすも悔しけれ。宜ふ趣こゝろ得たり。共に覺期を仕らん。と應て植通を還し遣し。その日漁獵に假托て。竊に京師を立退つ。神尾の城に楯籠りて。兄植通と共侶に。近國の武士に諜じ合せ。阿波の三好に一味して。犄角の勢ひを張りしかば。京師の騷動大かたならず。然程に。三好筑前守元長は。植通國友が。返忠に時を得て。去歲の夏大永四年肆月九日。阿波の

ば。理に明ならず。冀くは爾が心術。暗からざる事蒼天の。亮々乎として晴たる如く。世々の賢者に恥ざれ。と今その氏の末かけて。をさ〳〵文字に表せしのみ。這名に羞て行狀を。愼めかし。と解示して。書翰に黃白如干兩を。とり添て取せしかば。珠之介は受戴きて。坐に感淚の進むを禁めあへず。御慈愛深き御洪恩。仰謹てうけばりまつりぬ。膽に銘じ心に勸みて。忠勤を奬みてん。憾らくは路遠くして。訪問容易からざるべし。願ふは自愛し給ひてよ。といふに興房歡びて。しからんには安堵たり。今はしも是までなり。はやく睡りて。とく起よ。と急し立れば珠之介は。いふべき事もいひ難て。別を告て臥房に入りしを。その曉かたに那老兵等は。呼覺し饌を薦めて。客裝を整しめ。兩人即珠之介に相具して。行旅を背負ひ笠子を携へ。城を出東を投て。武藏の河越まで送りゆくめり。こは興房が前の宵に。竊に分付たればなり。是よりして珠之介は。姓名を改めて。末朱之介晴賢とぞ名告りける。

第二十回　享祿の役君臣亂離す
鷹捉山に晴賢麑を逐ふ

且說。尼崎の城主。右馬介尹賢は。香西元盛を讒滅して。竊に怨を復せし後も。心安からざる所あり。獨つら〳〵深念をするに。元盛既に亡びたれども。渠が弟波多野稙通。柳本國友等にわが密謀を知られなば。縡の難義に及ぶべし初より件の密議を知りたるものは。兩箇に過ず。

く阿波より推よせ來つ。又宗村が主なりける。赤松二郎冠者政村は。年來宗村に權を奪れて。その身は有れども無が如し。冠履倒に置れたる。鬱憤を散さん爲。陽には宗村の加勢と倡て。みづから隊兵を將て。大物の浦に出陣し。潛に三好に諜し合して。裡衎をしたりしかば。常桓尹賢宗村は。只一戰にうち負て。士卒と共に陣歿す。時に享祿四年六月四日。この敗軍を世に傳へて。大物崩と喚做たり。尹賢宗村が撃れし折。高國入道常桓は。幸く脫れてそのわたりなる。紺搔の家に隱れしを。敵の雜兵に搜出されて。廣德寺大物の里に禁錮られ。おなじ月の八日に至て。詰腹を切せらる。常桓死する年四十八。廣德寺の住持埋葬して。法謚を三友院とぞ稱ける。義維晴元元長等の事。話是下になし。抑件の一條は。世の人の知る所。軍記の趣を抄錄して多く亦作意を雜へず。但高國入道と。柳本彈正等が事迹。尹賢幷に宗好等が終る所。天理の昭々たるをもて。勸懲の一端とす。又是作者の用心と知るべし。閒話休題。復說末宗之介晴賢は。那老兵等に送られて。廿日あまりの客宿をしつゝ。武藏州入間郡。河越の郷に著し。は城外に旅宿を投めて。衣裳を更め從者を將て城中に進み入り。管領扇谷修理大夫朝興の家臣。某甲が第に到りて。陶興房の書翰を出し。縡云云と述て對面を請しかば。件の家臣その意を得て。客房に迎入れ。出處來歷を曲に問て。爾後主君に聞えあげしに。陶興房がはるばると。紹介したる少年なれば。疑ふべきものにあらず。よしを興房に答遣して。末之介とやら

撫養にて薨給ひし。故將軍義植卿の公達。阿波の御曹司義維を。推て大將軍と稱へ奉り。故主右京大夫澄元の獨子。聰明丸晴元を。管領になさんとて。左界の城將。三好勝時。その子勝長等と先鋒の大將として。阿波讃岐の大軍を引卒し。京師を望て攻陟りしかば。道永禪門防ぎかね。將軍義晴卿に倶し奉りて。近江路へ落てゆきけり。三好等即上洛せしかば。阿波の冠者義維は。左兵衛督に任せられ。聰明丸も元服の後。右京大夫になされしかば。晴元とぞ名告りける。是より闘戰年を累ねて。三好が威勢盛なり。有如之程に。柳本彈正國友は。又晴元に昵近して。をさ〳〵逆威を振ふものから。三好が權威に及ざりしを。媢みて晴元に讒言しけり。この故に晴元元長。主従の間睦しからず。とかくする程に。享祿三年六月晦に。柳本國友は。播磨の依藤を攻ける陣中にて。何ものゝ所行とも知らず。寢首を搔れて亡にけり。これは矢野宗好が。所爲なるべし。といふものありしを。兄の植通眞事と思ひて。矢庭に宗好を擊捕りけり。實は讒言なりとぞ聞えし。國友といひ宗好といひ。その身の終りをよくせざりしを。是悖逆の天罰にて。汝に出て汝に返る。因果にこそ。といはぬものなし。この比高國入道は。法名道永を改て。常桓と號せしが。頻に三好に戰ひ負て。從父弟尹賢と倶に播磨に赴き。浦上掃部助宗村を頼みしに。宗村輙く相譚れて。播磨美作備前。三州の大軍をもて。常桓を援け勝に乘て。晴元を擊靡け。遂に尼崎大物の浦に屯して。四國を攻んと議する程に。三好元長大軍を將て。はや

四稔の寵遇故老に倍て。体躰この身に餘れども。いまだ御恩に報ずべき。一个の功なきを。朝な夕なに差怕れて。胸体かゝらず候ひしに。かゝる仰をうけ給はること。思ひがけなき幸なれ。及びがたき事なれども。命にかけて仕らん。仰つけらるべうもや。と眞實たちてまうしゝかば。神興ぬし歡びて。言下の承諾奇特なり。予が宿願は別義にあらず。曩に默契道德と喚れたる。抖擻行脚の沙門あり。一稔武藏に飛錫して。愚俗を濟度し給ふ程に。貴賤歸依渇仰して。如如來禪師と稱たり。因て予も。城中に請待して。その說法を聽聞せしに。衣鉢飄然として。傳燈白日なきが如く。梵唄殊勝にして。淸響塵俗の心耳を洗淨せり。實に是。濁世に多く値偶しがたき。人間未曾有の活佛なれば。與に輪回應報の。理りを了悟して。つら〳〵と思惟るに。わが家數世戰國に蹙觸して。一方の藩鎭たり。敵を殺し躬方を擊せし。その罪障無量なり。もし善根を栽ずもあらば。生ては子孫に禍ひなく。死しては奈落に陷るなるべし。いかでこの如如來禪師に相譚て。勝軍地藏大菩薩。百體を造り奉り。もて一箇寺を建立せば。當身淸果。自他平等。子孫繁昌のよすがならん。とはやくも思ひ決めしかば。即よしを禪師に告て。造佛の事を憑みしに。禪師許諾の氣色なく。御情願よしといへども。そは只有漏の緣にして。眞實の功德にあらず。縦一寺を建立せず。一佛を作り給はずとも。德を布て民を憐み。仁を施して政を正しくし。殘に勝殺を去り。公道にして。私慾を省き給はゞ。身後には升天の歡びあり。御

んをば。留置くべし。と命せらる。是により朱之介が。紈袴の望み事整ひ。送り來つる老兵等は。家臣許諾の報書と。朱之介が消息を受とりて。別れて備前の三石へ還りけり。却說扇谷朝興ぬしは。末朱之介が月俸を沙汰して。且子舍を賜り。爾后召出してこれを見るに。艶顏愛すべき少年にて。進止も疎鹵ならねば。近習の後に從して。左右近く使れけり。有如之程に朱之介は。言と行ひを愼みて。精悍しく仕る事。はや一稔になりしかば。朝興いよ〳〵愛歡びて。祿を增し格を升して。且くも。左右をはなさず。折々臥房に果して。二なきものにぞ。思はれける。有恁又燕往き雁來ぬる。春秋をかさね〳〵て。大永八年といふ年に。享祿と改元あり。朱之介は既にはや。十九歲になりたれども。骨太からぬ優形なれば。戰國の習俗にて。いまだ額髮を剃除かず。故の儘にて使れながら。いよ〳〵出頭して。第一の近習たり。然れども戰場に扈從して。軍功あるにあらざれば。莊園なんどは賜らず。從僕一兩箇を隸られて。子舍も君所の內にあり。一ト日の休暇を得ざりしかども。そを聊も眷念せず。勤勞他事なく見えしかば。主はさらなり老黨も。渠はお役に立べきものぞ。と稱て憑しく思ひけり。これにより朝興は。有一日坐邊邇く侍りたる。朱之介を見かへりて。われこの年來宿願あり。然ども粹の障り多くて。いまだこれを果すに由なし。汝この義をよくせんや。と問れて朱之介些も擬議せず。某ふかく御武德を慕ひ奉り。千里をも遠しとせで。推參仕たる甲斐ありて。いとも親く召使れ。

かたし。と宣はゞすべなからん歟。尊慮奈何に。と問まうせば。朝與のぬし感嘆して。われ初より汝が才幹。かくあるべしと思ひしに。そのいふ所果して違はず。禪師わが意を納得ありて。造佛の義を許されなば。東國へ伴ふに及ぶべからず。那處において事を肇め。堂塔も亦彼山の邊において建べきのみ。よりて這回は。沙金五百兩と。白布二百反を贈遺して。造佛の料とせん。この餘堂塔建立の諸雜費は。百軀の佛像成就の比。洊て齎し遣してん。今この件の金と布を。吉野まで運送せんに。道中幾十數の。從者を要するや。摠て汝が望に任せん。宜く攷定むべし。と亦他事もなく急れて。朱之介は脱るゝ路なく。霎時頭を傾けて。遄旅に多人數なるものは。還て人に怪られて。障りになる事候べし。有恁ば布とおん金は。韓櫃二前ばかりに藏めて。是を舁ものの七八名。別に宰領一名を添られなば。綽足るべうもや候はん。扨某は山伏の。峯入するごとく打扮て。大約這八九箇の。從者を將て路を急がば。誰か怪みて禁むべき。輙く那地へ到らんと。何の疑ひか候べき。この義は御心やすかるべし。と憚る所もなくまうししかば。朝與のぬし大く感じて。適徼妙く計りにけり。むかし義經の奥州落も。主從山伏に打扮て。安宅の關を踰たりと歟。顧ふに汝は今の世の。牛孺丸といはまくのみ。速に准備して。遠からず首途させん。さばれ那首に到るとも。禪師の許容あるまでは。よしや一年十箇月。逗留するともけしうはあらず。儞然る時宜に及びなば。無用の從者等は皆返して。綽の便宜をは

子孫長久疑ひなし。無益の所行に國用を費して。民を苦め給ひそ。と只顧教化せられしかば。その道理に感服して。且く思ひ止りしが。禪師ははやく東國を去て。今は吉野の山脚なる。六田川の上に蔭を締びて。行ひ澄してをはするよし。風の便りに聞えたり。こゝをもて。われ又ふたゝび思見るに。禪師の教化は尊けれども。われ聖人にあらざれば。いはれし如くに行ひ事かたかり。佛を造り寺を建るは。よしや有漏の緣なりとも。これを爲さば爲さざるに優べし。なほ又禪師によしを歎きて。這宿願を果さんず。と思ふ事頻りなりけれども。わが爲に使して。禪師に告て許容せられん。能辯奇才のものを得ず。加旃相模より。西も南も皆敵地にて。その往還容易からず。然るをよく那地に到りて。主命を傳ふべき。智勇のものは亦得がたし。これらの障りあるをもて。思ひかねつゝ竊に擇むに。この任に稱ふもの。汝が外にあるべらあ覺ず。かくなしがたきよしあれども。汝大和へゆくべきや。百十數里の敵地を過りて。主命を傳へ禪師に請ふて。予が宿願を果しなば。その功績莫大ならん。賞は宜く乞ふに依るべし。心を定めて言承せよ。と思ひ入りつゝ聞え給ふを。朱之介はおそるおそる。聞果て頭を擡げ。弱冠未熟の某を。人がましく思召れずは。かゝる仰のあるべしやは。縱敵地に候とも。凡霜露の降る處。舟車のかよふ所ならば。姿を窶し方便をもて。山をも河をも踰つべし。只心もとなきは。件の如如來禪師とやらん。造佛の義を許容あるとも。老體百里の往還を欺ふて。菴室を出

韓櫃を。八箇の奴隷に昇し先に立つゝ。乃介坊二郎を將て。北六田のかたに赴んとす。登時逆旅主人はさらなり。奴婢等もなべて朱之介等が。眞の修驗者ならぬを見て。疑惑ざるものなければ。よしを乃介に私き問ふに。乃介答て。否。疑るゝ事にはあらず。原是大諸侯の使者なれども。輙く敵地を過らん爲に。假山伏になりたるなり。必な怪みそ。と明々地に報しかば。皆衆初て心おちゐて。ふたゝび介意せざりけり。既にして朱之介が。出てゆかんとせし折に。主人はこれを送るとて。急に袂を掖とゞめ。烏許がましくおぼさんか。凡俗のおん身にて。精進潔齋し給ふとも。深信堅固ならざれば。禪師に御對面は惬ひかたかるべし。この義を念じ給へかし。といふを朱之介はよくも聞かず。應とばかりに回答して。はやふり捨て急ぎけり。然程に朱之介等は。六田川をうち渡りて。北六田と比曾寺の間なる。山里にゆきて諮るに。果して禪師の菴室は。里を去ると十町許。樹立深き岡のほとりにあり。進み近づきて且見るに。這柴門の正中に。空菴の二字を書したる。一枚の牌を掛出して。裡面より固く鎖したり。當下朱之介は思ふやう。實に人なき菴ならば。外面よりこそ鎖すべきに。內よりせしはいかにぞや。空菴は虛文にて。必人のをるならん。とく呼門へ。と急せば。從者等はこゝろ得て。聲を合して呼門ども。且くは應せず。呼こと半晌ばかりにして。年十ばかりなる喝食の。奥のかたより出て來つ。戸節の竅より闚覰て。來れるものは誰ぞと問ふ。朱之介は腹立しさに。一入聲をふり

やく報せよ。脫落あるべき事ならねども。よろづの進退肝要なり。只管憑む。と懇切なる。主命還もなかりしかば。朱之介は言承しつゝ。準備の爲に退りけり。却說朝興は當直なる。老黨を召よせて件の趣を說示し。如如來禪師へ調進の。件々を整へて。はや〳〵朱之介に遞與すべし。その餘の事は恁々と。辭せわしく命じ給へば。件の老黨奉りて。下知を彼此に傳へしかば。日ならず物みな整ひて。盤纏も多く遞與しけり。そが程に朱之介は。兜巾篠懸金剛杖。總て修驗者の打扮なる。客裝を整へて。主君に別を告奉り。宰領に立られたる。杖月乃介といふ雜色と。年來その身に隷られたる。坊二郎といふ小廝を將て。四箇の奴隷に。兩前の韓櫃を舁し遺る四箇を輪遞と定めて。此彼共に十一名。この年の秋捌月の。初旬に起行して。大和路投て急ぎけり。豫て計りし事なれば。通路の城下新關も。障るとなくゆき〳〵て。その月の望の比。吉野山の麓なる六田の鄕に著しかば。鄕の客店に宿投定めて。逆旅主人を呼近つけ。默契知如來禪師の草菴は。何處ぞと諮るに。主人答て。禪師の住せ給ふ處は。這六田川を渡らせ給ひて。北六田と比曾寺字地の間なる。山里で候へば。路程遠くもあらねど。けふははや黃昏たり。今宵より精進潔齋して。夙めて訪せ給へといふ。朱之介うち聞て。渠何をいふやらん。と思へどもその意に任して。敢亦魚肉を用ひず。さばれ兜巾篠懸なんどは。逗留の間に要なしとて。これらは皆脫捨て。野袴を穿たりけり。有恁而その翌旦。朱之介は行水して。衣裳を改め。二前の

にこそ。と窘めて。踵を旋らし奥に入て。呼ぞもふたゝび出て來ず。朱之介はせんすべなさに。又韓櫃を舁し河を渡して。六田の客店にかへりにければ。主人は遽しく出迎へて。いかに如如來禪師さまに。御對面候歟。と問れて朱之介は隱によしなく。縡云云と說示すを。主人は聞つゝ眉を顰めて。那菴室には喝食なし。初より禪師のみ。獨住せ給ふをもて。他鄉に出させ給ふ日は。空菴の牌あるのみ。留守する者はなき謗なるに。そはこゝろ得ぬ事にこそ候へ。憶ふにその喝食と見えたるもの。是則禪師さまにての。對面許しがたかるよしを。諷へて示し給ひしにあらずや。とまれかくまれ御逗留は爾るべき事ども覺ず。かへらせ給ふに優とおもらじ。と老實たもて諫しかども。朱之介は從はず。われ主命を稟ながら。いまだ禪師の面を見ずして。何處へとて歸還るべき。もし喝食が禪師ならば。狐狸に等しく化たるならん。本の形であらんとき。急にうち入て對面せば。脫るゝによしなかるべし。といひつゝ從者等を見かへりて。翌よりして汝達は。迭代に那首にゆきて。日々に菴を窺ふて。禪師の菴中に在りと見ば。走りかへりてわれに報せよ。脫落なせそ。と分付れば。衆皆齊一その意を得て。形のごとくにしたりける。有恁程に捌月は過て。玖月中浣になりしかど。禪師は菴にかへり給はず。さらぬだに旅は寂しきものなるに。日影短き秋の宿。降布く木葉。門の霜。隣に疎き山里の。聲は松風。夜は鹿の。聲より外に友もなく。寤ても寐ても徒然に堪かねたりし。朱之介は。懊惱として樂まず。心頼

立て。是は東路よりはる〳〵と。禪師にまうすべき旨ありて。主の使に立たるものなり。このよし聞えあげ給へ。といふを喝食聞あへず。原來鎌倉の管領家。扇谷朝興ぬしの。おん使に候歟とふたゝび問れて朱之介は。渠いかにして名をさすまでに。わがうへをはやく知りつらん。と思へば襟を和らげて。いはるゝ如く某は。朝興の使なり。禪師に見參せん爲に。うち驚し奉りぬ。といふに喝食又答て。わが師は近屬庵を出て。葛城山に籠り給へり。さるにより這柴門に空菴の牌を掛たり。歸菴の程は測かたかり。と〳〵東國へ還り給へ。といへども聽ず朱之介は。なほも戸際に身を倚せて。そは本意ならぬ事にこそ候へ。禪師は菴に在さずとも。主命に依て千里を辭せず。こゝまで來ぬるをいかにして。いたづらにやは還らるべき。旅宿に退りて歸菴を俟ん。さでも見參に入りがたくは。葛城山にわけ登りて。在處を索ね奉らん。といふを喝食推禁めて。疑ひ給ふな。勞して功なし。わが師の山に入り給ふに。或ときは吉野葛城。或は熊野高野の奥。一ト日も處を定め給はず。はやき時は兩三箇月。遲きときは一兩年。菴にかへらせ給はぬものを。何處を投て索ぬべき。いぬる日わが師の出給ふ折。吾儕を見かへりて宣ひしは。近き日に東國なる。管領扇谷朝興ぬしの使者。末某甲といふ靑侍來訪せん。渠は尚緣なきものなり。速にかへし去せよ。渠疑ふて逗留せば。竟に東國へかへりがたき。枉難其身に纏緣るとあらん。この義を傳へ候へ。と竊に示し給ひにき。有愆者はやくかへり給へ。無益

したりしかば。奴隷們はみな歡びて。別を告て。詰旦。山の端遠くあから引く。東へかへり去しかば。是より人の寡くなりて。いよいよ寂しく慰め難て。せん術のなけれども。朱之介はいぬる比。主君にまうせし事もあれば。今茲をこゝにくらすとも。禪師にあはずは阿容々々と。かへらじと思ひ決めたる。志を勵して。みづから件の草菴の。ほとりにゆきて窺ひつ。又乃介を坊二郎を。間なく時なく遣せども。柴門はなほ鎖されて。些も便宜を得ざりしかば。困じ果つつおもふやう。われは近江の深山の家に。年九ツの比まで在りければ。日毎に弓箭を手夾みて。獵くらしたりけるに。爾後はさる技もせず。大和は山又山のみなれば。獵夫なども多かるべし。さばれ吉野多武峯は。殺生禁斷の聞えあり。この六田川の北方なる。鷹捉山には異鳥多く。獮猴も兎も少からず。と人のいひしはさもありなん。われ河蹤を出る時。路に山賊を禦ん爲。角弓に箭をとり添て。囊に斂め坊二に持して。來つるものこゝにあり。翌は未明より彼山に。獵して日來の欝氣を散さん。さはとて軈て準備しつ。その宵乃介に云云と。よしを告留守を委ね。和殿獨で寥しからんが。翌は獲ものゝ鳥まれ獮猴まれ。羹にして酒を飲せん。霎時の程ぞ心をつけよ。といふを乃介は聞あへず。そは宜はするとながら。如如來禪師の活佛なる。神變不思義の噂あり。こゝをもて精進潔齋。深信堅固ならざれば。かの法顏を拜みがたし。とこゝの主人もいひしにあらずや。然までにはあらずとも。今その歸菴を俟ながら。殺生をして遊びくら

りに焦燥て。肚裏に思ふやう。われ河踰に在りし日は。主君と共に起臥して。鄙語にいふ海知らず。錢帛を手に取らねども。衣食に餘りありけるに。よしなき使に立られて。客店住ひの不樂しさは。三たびの饌も豆腐のみ。薄き蒲團にこの夜寒を。凌ぎ難るは罪なくて。配所の月を見るに似たり。然ばとて今さらに。かへるにも還りかたき。進退こゝに谷りぬ。いかにすべきと胸にのみ。苦しき日數を歷る程に。忽地に又思ふやう。啓行此の主命に。那地に到て。時宜により。逗留數月ならんには。無用のものを返すべし。と宣ひし事あるなれば。韓櫃舁八名なる四名は返してこれらのよしを。聞えあげなば後々まで。よろづに後安かるべし。さはとて軈て杖月乃介に。商量しつゝ奴隷等に。絆云云と聞えしらして。半分は留り半分は還れ。といふに此彼決着せず。衆皆齊一願ふやう。この日來なすともなく。僉徒然に候へば。武藏の事のみ思はれて。歸心箭の如くに候に。還るものこそ幸なれ。遺れるものゝいかゞはせん。鬼界嶋に蹉跎せし。俊寛に似ていよゝます〳〵。堪がたくこそ候べけれ。願ふは遺なく返させ給へ。よしや禪師の歸菴ありて。韓櫃を舁ものなくとも。川一ト條を渡すまでなり。その折は里人を。傭ひ給ふて事は濟むべし。一トたび武藏へ立かへらば。又おん迎にまゐりてん。是廣大のおん慈悲なり。承引給へ。と諸聲に。悲み乞て已ざりければ。朱之介はさもこそとて。又乃介等によしを示して。件の八人を返し遣し。只乃介と坊二をのみ。留めて韓櫃を守らせんといふ。商量決定

の主出しを。朱之介は遣も過さず。弓彎固めて瞟と射るに。その箭の竄ひ些し違て。魔の後足を射傷りけん。倒れんとして。遂に仆れず。足を曳つゝ逃走るを。なほ脱さじと赶ふ程に。大約五町あまりにして。何處ゆきけん見えずなりけり。正しく射たりと思ひし物を。走らせしこと悔しけれ。精鋭たらば必倒れん。是首歟彼首歟。とばかりに。いよゝ山深く入るを覺ず。さればば朱之介は穉き時。深山を奔走したりしかば。かゝる時にも足逸早きに。坊二は後れて陟り來ず。とかくする程に黄昏たり。かへるに路の遠ければ。朱之介は心慌て。麓へ降らんとて急げども。舊來し路の定かならで。日ははや暮つ天さへ曇りて。出べき月の出ざれば。又いかにともせん術なし。頻りに聲をふり立て。坊二々々と呼れども。絕て應をせざりしかば。渠は麓に俟にやあらん。と思へども心安からず。素より膽太き壯佼なれば。有恁けれども物とも思はで。腰に著たる囊より。燧を出し火を鑽て。落葉を燒て四下を見るに。彼此に細竹多くあり。是究竟と伐とりつ。手はやく紲ね焦火にして。路を索てゆけども〳〵。いまだ麓のかたに出ず。と見れば前路に石室あり。立よりて熟視るに。洞口は五尺可。奥へ入ると六尺に過ず。太古穴居の迹に似たり。この時天晴雲歛りて。隈なき月を瞻仰るに。夜ははや亥中になりにたり。且くこゝに疲勞を慰して。曉なば又路を索ねて。徐に麓に下るべし。と尋思をしつゝ焦火を。振滅棄て室内に進入り。弓箭を側に引つけて。坐してその天の明るを俟に。丑三にやとおぼしき比。

さば。禪師はいよ／＼忌避給ひて。拜顔かなひがたかるべし。思ひとゞまり給へかし。と諫なとの老實なれども。朱之介は才を負て。人を非とする本性の。この時に稍顯れて。陶興房が教訓を。うち忘れけん冷笑ひて。女々しき事をいふものかな。出家は出家の行ひあり。武士は武士の務あり。殺生は五戒の第一。出家はこれを。保べく。破るべからず。俗家に何の憚りからん。禪師を深仰すればとて。戰場に臨み敵にあふても。殺生せじとのみ念じて。敵に撃るゝものやはある。畢竟かゝる理に暗き。愚俗は共に論じかたかり。禪師は實に活佛ならば。この理りに點頭して。必許し給ふべけれ。さは思はずや。と說破れば。乃介は終に爭ひかねて。寔に然なりと答けり。却說その翌朝。朱之介は。野裝束して。角弓を挾み。坊二には箭を負し晝餉の割籠を持しつゝ。未明より宿を出て。鷹捉山に赴ける。時は仲月の中澣なりければ。疎林枝をまじえて。僅に翠微を見し。白雲出沒して。高く峯上にかゝるめり。溪は落葉に降埋れて。音はすれども。水を見ず。鳥は古巣を出てゆきけん。聲稀にして影遠かり。羊腸たる樵路に。枯草を結かけたるは。是何人がせし栞ぞ。嵯峨たる山峽に。怪松の生出たるは。造化の巧倣せるなり。山靜にして。短景を覺ず。巖累りて。長藤に携る。遉に趣なきにあらねば。朱之介は是首に奔走し。彼首に涉獵りて。兎一隻を獲たりしかば。猶も佳境に入らんとて。下晡になるまでも。還るヿを忘れたり。恁處に左手のかたなる。枯芒花の中よりして。一隻の麞

胡之採珠者。懼爲人所奪。遂劈股以藏珠焉。是非不愛其股。爲利珠已。由此觀之。惑利則忘愛。是以有售其子者。溺愛則忘訓。是故兒孫匱孝悌。名之爲迷惑。世間有此病。何以治之。言有一方。無如稗史小說也。蓋稗官架空之談。妙示勸懲而不迂。譱入里耳。罔所忤風俗澆漓。厭常耳食新奇。因其勢以奬導之。乃效驗非淺尠也。唐許胤宗。嘗以醫爲意。稗亦出於意匠。而有巧有拙。拙則亡論。巧者多隱微。知之不易矣。其知與不知。吾惡掛念。是書復續稾。至第三輯。剞劂人告成之日。聊亦題于簡端。

天保二年如月中澣　　曲亭蟫史撰

遠く南の方に當て。女子の叫ぶ聲したり。朱之介は耳を欹て。怪しむべし夜の深山に。女子の泣く聲の聞ゆるは。渠山賊に掻攫れて。將て來らるゝにあらざる歟。もし果してしからんには。この石室はその賊の。巣穴にこそあらんずらめ。さてはわれこの儘に。こゝに在りては便りよからず。箭間近く躱ひて。且そのやうを見ばやとて。はやく弓箭をとり揚て。遽しく室より出れば。その聲漸々に近くなりたり。何處にがな。と見かへるに。室の前面に小松繁れる。褊小なる岡ありて。間遠からざりければ。走登りつ弦銜潤して。今か〳〵と俟たりける。畢竟朱之介。癖者を射仆して。件の女子を拯ふや否や。そは第三輯の初の巻に。解分るを俟て聽ねかし。

近世説美少年録第二輯巻之五　終

作者云。草紙物語を批評するものは。猶五味を嘗るが如し。甘さを好むは。辛さを嫌ひ。酸を嗜むは。苦さと鹹きを妙とせず。好憎おのが隨なるをもて。作者の隱微を亮察して。深く骨髓に入るもの稀なり。獨勢坂の欒亭氏は。素より稗史の才あり。その著す所あるをもて。はやく世に知られたり。乃者欒亭郵書中に。美少年錄一二の編輯を批評して。予にその當否を問けるを。つら〳〵と閱せしに。五味みなわかち味ひて。好憎偏らざることく。深く作者の肺肝を撈得て。隱微を發明せしと多かり。實に才子のわざなるを。搔遣措んはさすがにて。彼金瑞が水滸傳の外書に倣ふにあらねども。錄してこゝに見すよしは。好る君子に見せまくほしさ。かゝる知音のあればなり。

○琴魚云。美少年錄第一輯の發端。大内義興の阿蘇山攻に。鬪戰の光景を書あらはさずして。沼の出水をもて埒をあけ。又地中より火を發して。はやく落城をかたつけられしは。初よりして看官の倦ざらん爲にとて。趣向を建たる省筆なるべし。かくてこの水火をもて。傲れる大將を恐嚇せしは妙なり。されどもかの火を地雷火と分解せず。阿蘇の大宮司が義興を慰る段に。この山の燃ると。往古より一所にあらず。云云といはせ。君が刃に觸らずして。云云なといはせしは。淡く手かろく書做したる。そが中に眞目あり。心をつけてよく看べき所なり。大約この一回に。水火既濟䷾の象あり。既濟は事既に成就せり。しかれども。又散亂すると速

近世說美少年錄第二輯總目錄

第一回至第二十回目錄見第一第二兩輯簡端

第三輯目錄終

よるものなり。八犬傳に。伏姫自殺の段とこの段は。水滸傳の發端。一百八の魔君を走せし趣向より。出し來れりとは見ゆるものから。皆換骨奪胎の手段にして。その趣同じからず。義興はじめは。弘元の諫を怒りて。害せんと思ひしも。蛇怪の一事に思ひかへして。弘元を賞美の段。人情寔に然るとあり。總てその人がらを。瞭然として見る如し。扨第四回に。瀬十郎が御廚野の辻堂にて。阿夏に邂逅する段は。上の時代物語と。忽地に機のかはる處。亦おもしろし。その折瀬十郎が。近ごろ東なる持資入道の。云云などいへるは。當時の洒落なるべしこゝに亦看官の心つかざる作者の用心あり。この時瀬十郎には。雨衣木履あり。阿夏にあるとなし。さればとて。阿夏は跣足にて。びしよびしよと出てゆかんは身榮わろかり。瀬十郎が借物の足駄を。阿夏に貸て穿せなば。瀬十郎が足の遣り所なかるべし。とにもかくにも難義の場なるを。幸ひにして辻堂の隅に。女の遺足駄ありしを。折介が見出せしは。妙の又妙にして。よくも心を用ゐられたり。かくて阿夏瀬十郎が相合傘の段。尤妙文。人有てうちかたらひつゝゆく形勢。この卷中に出顯して動くが如し。そが中に路地の地名。とん〳〵とはまりゆく處おそれ入たり。瀬十郎二階にうち陟りて。そこら見めぐらす形勢も。眞に逼りたり。柱にかけたる櫻の花笠。牡丹の扇笠。三絃胡弓あるを見て。その人がらを猜するも亦妙なり。且折介を且く遠離たる。女あるじの斟酌。目前の如し。されば又木偶介は。阿夏にこゝろ迷ひつゝ。遂にそ

なり。譬ば大内氏の富貴なる。義興の時に極りしは既濟の象なり。かくてその嗣義隆に至て。速に滅亡す。かゝる故に。君子は既濟の時に方て。後の憂患災害を慎むといへるに稱へり。又既濟は火上に水あり。水火相交りて。その形を成しその用を通ず。こゝをもて後に悪少年の生出ると。美少年の世に顯るゝ。大意を窃に示されしは。亦是水火烹熟の奇伏あり。恐入たる神機妙算。凡作の及ぶ所にあらず。又弘元が辨才天を深信して。且義興を諫め。又出水に推流されし時も。かの神を祈念せしは。その信心よく融れり。かくて素它六と邂逅の段に至りて。その情狀をおもふに。終始昧ひあり。又出水の光景を書つらねられし所。川下は只水の濁れるのみなどあるは實景なり。一時の洪水。その枝川にかゝるとあるを。予も目撃せしとあれば。わきて感深かり。又素它六夫婦の。弘元を管待す段に。雜魚に鹽ふる云云より。野にこそ摘ねあはせ物云云。といへるまで。今にはじめぬ錦心綉口。まねんとするとも及びかたかるべし。かくて素它六が嘉吉應仁の亂基を論ずる段に。男色の害によりて。その世の亂れしよしを説諭されしは。條々みな金玉の言なり。その段の頭書にも見えたる如く。一部の要領。この中に籠れるを。說得て意味深長なり。亦川角頓太が鳥銃を引提て出たるは。看官膽を潰すべき。奇妙の趣向なるかな。又義興の蛇穴を燒く段は。毛骨竦然として。夏なほ寒かり。無慙いふべうもあらず。大蛇燒爛れて死したる景迹。實に怨を遺したらんとおもはるゝは。全く作者の書さまに

に。往事を說て。後來を示さず。只その窮阨の解んよしを。諭したるは妙なり。そを又阿夏が夢に轉じて。ひとり物を思ふ折。黑藏が梁に吊りおきたる毒石の落たるより。毒殺と思ひつきしは。自然のごとし。看官は必二賊を毒酒もて殺すならんとおもふを。又一轉して。相撃にさせたる趣向尤精妙なり。この折珠之介かへり來て。二賊の枉死を見て駭きて。とりおとしたる弓を。又とり揚て信としたるより。初て珠之介の傳を立られ。その氣質も。この時より露れたり。かくて阿夏が過來しかたの物語の段に。木偶介が事。瀨十郎の事さへ說示して。自殺せんとせしを。珠之介に諫られ。又瀨十郎にあはまく思ふ意を。內に含て自刄を思ひとゞまりしは。自然のごとし。よしや浮薄の淫婦なりとも。死なんとせしは人心の。禽獸に異なる所。穿得て哀れなり。かくて二賊の亡骸を。埋んといひしは婦人の情にて。亦鳥獸に異なればなり。然るを珠之介は。はやくその亡骸の片つけやうを。工夫してわらはにいはず。錢三文でもとり遺しては。生涯の損なりとて。母に心をつけさせ。是より先にも。納戶に寢まりて。熟睡したる爲體。自然にわらはる丶惡少年の氣質を。精細に寫されしは。妙絕といふべし。かくて阿夏母子か山を出る段に。綠巽亭の事を思ひ出し。又その山路の光景を寫されたる中にも。蔓延といへる桔槹の。猿に引れて轆の綱に。似たりといふ妙文あり。この句は特に深山中の。遠景宛ら名工の畫るに異ならず。かくて細谷川の流に馬を失ひて。この處の路を斷。路費の金錢

の產を破りしより。阿夏は恩義の柵を被られ。已ことを得ず。渠を入贅にしたれども。奴僕の如く役使ひて。生活の献物をもち運せ。客稀にして。朝の煙の細れるをも。憂とせざりしは。今も比類するよしあるを。その情態寫し得て妙なり。又阿夏が。瀨十郎の遺扇の歌を見る段に。斑女の故事を。謠曲によりて判斷せしも。その人柄にかなひたり。扨又嵯峨の山莊。綠巽の亭號は。聞ても心にかゝるべく。この山莊にあらざれば。蛇孽の胎によりがたからんとある。頭書にて誰もしるべけれど。この一段の初中後に。わきて感じおもふよしあり。兩卿はゆくりもなく。殿下の御舘に赴き給ひて。阿夏瀨十郎が再會となる處。艶にして且因果をかさね。獻懲の意も籠りたり。白蛇の阿夏が腰に纏て。肌膚を舐る光景は。おぞましくも亦いやらしく。瀨十郎には氣絕させて。白蛇の往方を隱したる。意味淺からず。さて第六回に。瀨十郎は愆ありて。周防へ返さるゝ段に。完四郎を遣して。竊に消息を贈らせ給ひし。兼顯卿の人がら。實に粹なる搢紳家のおんはからひ。思ひ合するよしもあれば。一入感ふかき所なり。この深草の段は水滸傳なる。林冲が滄州へ配流るゝとき。その妻と訣別したる。趣とは事かはりて。密に契りし情人の哀別ながら。情態又憐むべし。就中稚兒の手に。一文字の。入ほくろして。再會の割符にせしは新奇なり。かくて磨鍼峠の段に至りて。阿夏に重々の厄を被らせ。密夫せしを後悔させて。看官にあはれがらせし。作者の用心專文の塲なり。又阿夏が神僧に遭段

近世説美少年録第三輯巻之一

東都　曲亭主人編次

第二十一回

獵箭を飛して晴賢麗人を拯ふ
妖獸を追ふて直行少年に遭ふ

再説。末朱之介晴賢は。獵くらしたる鷹捉山に。曉る天を俟つ石室の。内より出て岡の邊なる。樹間隱れに弓箭を刷ひて。あやしき物の近つくを。且く其處に張ふたる。折から皆暗の天霽て。玉兎鮮明なる深山路に。叫ぶ女子の聲嗄れて。這裡を投て伴るゝを。但見れば二八可なる。最美しき少女子を。扛もて來ぬる物ありけり。その容貌宛猻猴に似て。身長五尺許なると。四尺あまりなる妖怪の。此彼倶に面赭く。頭は眞白に長毛の。蓬を紊して背に垂れしを。人歟と見れば人にあらず。獸に類して獸に異なる。這物們が件の妙の。手を提へ足を拘へて。宙に吊もて將て來つゝ。はや石室の裡面に卸して。何言やらん囂々と。相罵るを聞もとられず。妙はな後もちからを究めて。倚るを寄せじと角へども。鷹に捉られし綵鳥の。翥くよりも甲斐なきを。惟物們は嘻々と嗤ひて。仰さまに推倒し。一箇は頭の方に跪居て。左右の手を提扼り。老大な

を失せたるは。妙智力といふべし。草舍に猿を喪ひ。谷川に馬を流し。意馬心猿の狂態を推鎭めしより。この厄難を救はせ給ひし。作者菩薩の善巧方便。妙といはんもなほあまりある。神出鬼沒の手段なり。かくて久禮畑の三池村に。母子宿を投て。五色の玉の出處をひらき。それをよすがに福富に至る段。初輯卷末の繡像を見れば。又後輯を俟るゝなり。太夫次が物かたらひに。蛇甑の中にして。五色の玉を得たりし事。又阿鍵が臨月その期に過ぎて。十二ケ月にして。蛇退皮を煎じ飮して。黃金を產たりなどあるも。八犬傳の玉の出處と。前後して似たるとなく。大く趣をかえられしは。自由自在の筆なるかな。但大夫五が休書を遺して亡命せしといふ一條のみ。いかなる故歟。思ひ得がたし。抑この翁は年中の著書十數部を。俗にいふぶつつけ書にして。一トたびも創稿を。易え給はずと傳へ聞たり。爾らばいにしへにも類なかるべく。後の世にはなほ有かたからん。然るをおのれ琴魚等が。叨に筆を走して。評するは鳴呼がましく。打出の杭に似たれども。かくまでに心をつけて。熟讀熟思せしよしを。告まつれるは拙評の。當否を問ん爲にぞありける。

右櫟亭氏の批評なり。第二輯の評もあれど。每卷楮數に定限あれば。すべてはこゝに附錄しがたし。そは異日第四輯を著す折。又簡端に附出さん。この評中なる水火既濟と。意馬心猿は特にめでたし。

はなはもおどろく〳〵。左さな右さな見かへりて。又朱之介をつく〴〵と。うち見て胸を撫下し原來おん身は妾が與に。這禍鬼を禳せ給ひし。恩人にてましますよな。伴をも倶せず只ひとり深山に宿し給ひしは。故こそあらめ。いかにぞや。と訝問るゝ朱之介。あけていはれぬ情由なれば。俺らは恁々ぞとて。且姓名を告知らし。君命によりて東國より。はる〴〵來つゝ六田の旅亭に。人を俟わびて日を彌る。徒然に堪ざりければ。けふしもこゝに獵くらし。獲物を貪り路に迷ふて。從僕さへに後れしかば。せん術なさにこの石室に。天の明るを俟たるなり。抑おん身は何處の人にて。這怪物等に捉られしぞ。と問かへされて。さればとよ。妾はこの山の。麓より程遠からぬ。上市の郷に世を渡る。杣木の落葉が女兒にて。斧柄と喚れ侍るなる。孀婦主人にあなれども。家則の嚴にて。聽より外に出されねば。漫行をせしとの。なき身にもかゝる厄難あり。甲夜には母親共侶に。亥中の比まで綿を摘て。臥房に入りて睡りしに。忽地親の外に出てわらはを頻りに喚起す。その聲睡耳に入りしかば。われにもあらで應をしつゝ。遽しく起出て。門の戸を颯と推開けば親にはあらでおそろしげなる。非常の物が右左より。妾を楚と搔抓みて。宙に吊して走るになれ。身は妖怪に捉られにけり と初て曉得れどその甲斐の。なゝより外にすべしらぬ。這山中に扛もて來られて。命も既に危かりしを はからず刀禍に救れしは。嶺上の松より彌高き。現再生の大恩なり。曉るに程もあらざるべし。家路に送

るは前より進みて。妙の裳を推披き。己が毛臑を露して。且犯さんとせし處を。朱之介は看濟して。克彎固めて摽と射る。矢坪違はず老犬なる。那怪物を背より。胸前まで射徹したる。窮所の深痍に霎時も得堪ず。呰と叫て仰反たり。思ひかけなき獵箭の響きに。頭邊に居りし怪物は。駭怕れ妙を捨て。走りて洞口を出んとせしを。程もあらせず朱之介が。發つ二の箭にこれも亦。吭を箆深く射串れて。叫びも果す仆れけり。這時朱之介は。弓を憂哩と投捨て。腰刀を拔放ち。引提て洞門に找遛つき。射て仆したる怪物を。是彼共に十々滅を刺して。拭ふて血刀を腰に斂め。件の妙を勦らんとて。さし入るゝ月を燭に。立よりてよく見るに。うたてや妙は齒を切り。眼を閉て氣息なし。目今是を救ひ得ずは。龍を屠りて珠を探らざる。烏許人に似たるべし。と獨語つゝ遽しく。腰に吊たる藥籠より。藥を取出て嚙摧き。やをら妙を抱起して。刀に附たる搤枝ても。齒を推開き吹入れて。呼んとするに名をしらざれば。こや喃々。とばかりに。呼活ると半晌ばかり。その聲纔に耳に入りけん。妙はやうやくわれにかへりて。下足を縮め眼を開き。朱之介を見て。よくも視ず。吐嗟と叫ぶ聲と共に。抱れし手を振放き。膝の上より輾落て。戰慄きながら逃んとせしを。朱之介は含笑ながら。臂を伸して曳留め。婦人さのみな怕れ給ひそ。俺は是變化にあらず。今宵思はずこゝに宿して。おん身の與に這妖怪等を。射て殺したるものなるぞ。且よくこれを見給へかし。といひつゝ指さす兩個の尸骸を。妙

く小腰を折めて。在下はその女子と。同郷の退糧人なり。武藝は家業なりといへども。田舍に要なき技なれば。筒算筆を人に誨て。纔に旦暮に給したる。安保箭五郎直行と。喚るゝものに候なり。しかるに昨夕小夜深し比。それなる斧柄があやしき物に。喚起されけん慌忙しく。立出て颯と推開く。門の戸音に母親は。睡覺て驚きあやしみ。はや追懸て出しかど。何地行けんそこらにをらねば。原來妖怪に喚出されて。將てゆかれしにあらんずらん。と心つきたる老女の推量。四隣の門をうち敲き。里人們を喚起して。よしを告救ひを求る。事急なれば霎時も猶豫せず。且聚合しものゝ十人有餘。咸速に準備をしつゝ。何處を投て追索んとて。相議するとき故老のいふやう。這首は山腹なれば。妖怪山魅に少女子の。捉るゝとの稀にはあり。落葉の刀自の令愛も。山魅に捉れしものにやあらん。しからば里を渉獵んより。鷹捉山にわけ入りて。とく索ねよと誨るに。僉こゝろ得て異議もなく。這山に來て渉獵りし甲斐に。はやく斧柄に遭ふのみならで。圖らず貴所の救ひを得て。那妖怪を退治せられ。その身に恙なかりしは。有がたきまで忝き。洪恩にこそ候なれ。といふを朱之介は聞あへず。和殿の賞美は分に過きたり。縦令こゝに及びしに。各位介意せらるゝは。俺この弓箭の故ならん。誘々といひつゝも。弓箭を捨たる怜利さに。箭五郎も里人們も。感嘆しつゝ僉共侶に。斧柄が身邊にうち聚ひて。且恙なき歡びを。述て朱之介が弓箭の修煉を。且感じ且謝して。扨石室の邊に赴き。那妖怪の

り給はゞ。親の歡びこの身の幸ひ。何もの歟亦これに優すべき。おん憐愍を。と他事もなく。憑む言葉の露よりも。脆きは袖の涙なり。長き夜ながら事あれば。深山の奧も明るにはやく。星光扶疎になりしかば。朱之介は山を下らんとて。斧柄を後に立しつゝ。出て捨たる弓箭をとり揚げ。路を徹めて山脚の方へ。赴んとする程に。遙に聞ゆる鉦鼙の。音響々と谺を誘ふ。其人許多蕉火を。振照しつゝ諸聲合して。やよ斧柄喃。おのゑなう。と呼聲漸々に近つきて。這裡を望て來にければ。斧柄はさらなり朱之介も。彼は正しく里人們が。迹を慕ふて來ぬるにこそ。と思へば軈て走り對ふて。應唯々々と答へつゝ。手を鳴らし手を抗て。只管に指招くを。山挾皓くなる隨に。うち見て歡ぶ里の衆人。原來斧柄は恙なく。那首に居たり。と散動めきたる。そが中に一個の武士。年齢は三十許なるが。はや先立て近つき來つ朱之介が弓と箭を。挾みたるを佶と見て。小松を楯に間なく寄らず。忽地に聲をかけて。斧柄に倶して咱們を。招きしは什麽何人ぞ。と問れて朱之介は些も擬議せず。俺は東國のものなるが。六田に久しく旅宿をすなれば。徒然に勝ずして。きのふは這山に獵しつゝ。路に迷ふてせん術なさに。那裡の岩室に坐を占て。ひとり天の明るを俟程に。不慮も這婦女子の。妖怪に扛攪れて。將て來られしを見過しがたく。獵箭を飛してその妖怪を。二頭まで射て殺しぬ。俺氏は末。名は晴賢。字を朱之介と喚るゝものなり。和殿は亦是いかなる人ぞと。問かへされて件の武士は。怯たる色も

六日に逗留し給はゞ。一路の序次も夕かゝらず。柾てこの議をうけ引て。彼首で休息し給ひね。といふを然なりと衆人も。誘引立て已ざりければ。朱之介は推辭かねて。遂にその意に任しつゝ。ふたゝび弓箭を携へて。そが儘斧柄と共侶に。箭五郎們に郷導をせられて。上市に赴く程に。午の貝吹く比及に。柚木の落葉か宿所に來にけり。却說這上市に。落葉と喚るゝ老女あり。原是主人の女弟なり。十稔あまり前つ比。家あるじは時疫にて。夫婦うち續きて身まかりつ。家に一個の女兒あり。是則斧柄なり。外に憑しき親族なければ。斧柄が成長るまでとて。後見をして繰遶す。世帶車に籰絲の。ながき光陰を織紬ぐ。世渡る業に暇なき。孀あるじでありければ。婢妾一兩名使ふのみ。先代よりの田も園も。人を傭ふて耕させ。富むにもあらず。貧しくも。あらで驕りぬ山里に。足ることを知る衣食住。三四五才の比よりぞ。幼稚き姪を護養ひて。今玆二八になりしかば。良婿がねをと擇めども。こゝろに愜ふものゝなければ。原の儘にて在明の。月光冴る冬の夜に。斧柄は山魅に捉られけん。臥房に在らずなりしかば。落葉は大く駭き患ひて。時を移さず里人に。告知せ迹を追して。出し遣りても心はおちゐず。いかに〳〵と思ひわびて。目睡もせで天は明つ。日は升れども便宜も聞えず。いとゞ心を苦しめて。立盡したる門の杉。日影も眞直になりし比。里の壯佼一兩名。鷹捉山より歸來て。斧柄は恙なかりし事。朱之介が山猿を。二頭まで退治して。斧柄を拯ひし縡の趣。箇樣々々と落葉に報て。令郎は今衆

死したるを。是彼倶につく〴〵と。觀るもの舌を巻ぬはなく。駭嘆じ相顧て。こは疑ふべくもあらぬ。山猴にこそあらんずらめ。といふに一人進よりて。左見右見つゝ退きて。箭五郎斧柄們にいふやう。吾儕は柚木を樵るをもて。山に日を歴るともあれば。這山猴を見知たり。柚人の山を出ずして。木を伐るとのある折には。板屋を葺て起臥するに。寒けき冬の夜な夜なには。這山猴が突然と。來つゝ地坑の火に當るを。人愈熟て駭怕れず。渠が隨意に煖らすれば。渠も亦害をなさず。默然として曉方には。出てゆくものぞかし。さばれ晝も人なき折には。或は樵夫の割籠を竊み。衣物をも竊去りて。彼もし喫ひもするとあり。常には好みて谷川なる蝦を捕喫へるが。婬なるとも大かたならず。その高老を歴しものは。里の婦女子を扛攫ひて。犯して後にその血を吸ふ。と豫て聞しに果して差はず。最憎むべきものにこそ。といふに頷く箭五郎は。衆人を見かへりて。這山猴の亡骸を。里へ牽もてゆかんは要なし。然ればとてこの儘に。うち棄措んも快からず。こゝろ得たるもの兩三名。遺り留りて火をかけ給へ。又壯佼達一兩名は。先へ走りて落葉の刀自に。この爲体を報告らしね。とく〳〵と。いそがし立て。又朱之介にうち對ひて。思ひかけなき洪恩にて。斧柄を無異にかへすと。親の歡びいへばさらなり。咱們までも面を起す幸ひで候へば。いかで是より上市なる。宿所に暫時立よりて。渠が親にも對面し給へ。勿論田舎の事なれば。させる饗應こそなからめ。さぞ辱く思ふべけれ。

ひ立て來つるなり。おん管待もありぬべし。且歡びをまうし給へ。と辭せわしく會釋をしつゝ。引汲すれば朱之介は。微笑ながら落葉に對ひて。名告をしたる初對面に。落葉は額さへ手を銜て。思ひかけなき恩人さま。吾儕は斧柄が養母に侍り。小娘の與には命の親。とまうさんもなほあまりある。山路の容子も聞まほし。且はや奥へ入らせ給へ。斧柄ハはやく客房なる。表席をみな推卷除て。とく掃淨めて賓客さまを。案内して茶を進らせよ。とく〳〵せずや。といそがして。又衆人にうち對ひて。各々さまにも歡びの。竹葉一盞まゐらせん。といへば衆皆頭を掉りて。否咱們は土足なり。倘曳遺せし諸葛菜もあり。乾さねばならぬ緜もあり。葛も蕨も曝さねば。ならぬ小春のけふの日和を。工夫に銷さばいかゞはせん。この隨放遣らるゝが。手釀酒の御馳走より。迥に愛たき管待なり。暇まうす。と僉いひ捨て。己が隨なる田舍兒の。禁めても留らじ動搖々々と。齊一出てゆきしかば。箭五郎も且宿所に退りて。かへりしよしを妻に告て。出なほして來つべし。といふを落葉も朱之介も。なほ霎時とて推留めしを後旹にと契りて遽しげに。病坊の宿へかへりけり。登時落葉は斧柄と倶に。朱之介に案内をしつゝ。客房の上坐に。推居て茶を看め。豫て准備の酒盃に。殽も種々とり添て。歡びを述恩義を感じて。最叮嚀に欵待したる。人の誠に朱之介は。辭ひ難つゝ盃を。受巡らしてぞ譚ひける。當下落葉は膝を找めて。刀禰はおん年も二十のうへを。まだ踰給はじと見え給ふに。いかなる故のなはし

人に。倶せられてかへり給はん。咱們は這吉左右を。おん身にはやく知せよ。と箭五郎ぬしのいはれしかば。先たちて走り來つるなり。といふに落葉は憂かりし胸の。日影の霜とうち解けて。天に歡び地に喜び。且壯佼們に茶を看め。酒をも喫して叮嚀に。勞ひてかへし遣し。猛に婢妾們を呼立て。扨衆人を管待の。準備に暇なかりけり。有恁程に安保箭五郎は。里人們と共侶に。斧柄を伴ひ。朱之介を誘引て。齊一歸來にければ。落葉は笑つゝ出迎へて。こは病坊の師匠さま。箭五郎ぬしみなさまも御劬勞なりけん。寔に斧柄は命めでたく。ある人さまに拯れて。妖怪をさへ退治せられしつ。その縡の崖略は。簫に壯佼達のいちはやく。かへり來まして報られたれば。痞も瘥て歡び侍り。斧柄はさこそおそろしくも。哀しくもありつらめ。吾儕も今朝まで立明して。うち歎きてのみありしぞや。といふ間に箭五郎は。斧柄を母屋に推拱めたる。陟框に手を掛て。喃家々さま。嗚呼がましくも總名代に。且壽きまゐらせん。恙もあらずかへり給ひし。令愛の貌を變して。常闇なりし磐戸より。天の明初し心地ならん。衆皆歡びまうすなり。といひつゝ後方を見かへりて。やよ家々さま。那方さまは。鷹捉山にて。大小兩隻の。山猿を射て捕て。斧柄とのを拯ひ給ひし。恩人で候ぞ。いぬる比東國より。來まして六田の客店に。逗留の徒然を。慰んとて山獵しつゝ。路に迷ふて日をくらし。山路に露宿し給ひたる。その折の事ぞとよ。山より旅亭に還ん。と宣はせしを推留めて。おん身に逢しまゐらせん爲に。誘

けし再生の。御恩をかへすよすがありとても。世に隱しき情由ありとても。吾儕母子の外に人なし。詳に示し給ひね。といはれて朱之介は思ふやう。現この母子はわが恩義を。深く感ずるものなれば。主君の御名もわがうへも。告知らするとも害あらじ。と深念をしつゝ微笑て。問るゝ趣その意を得たり。寡君の姓氏を諱さゞりしは。是敵國に憚る故のみ。さばれその性正げなる。懇意に頼て東國の事を。詳に說示さん。その換に俺も亦。問まくほしき事こそあれ。女あるじでをはするよしは。箭五郎ぬしに聞たれども。まだその故をよくも知らず。などてや年來人贅もせず。又令愛に婿をも索らず。恁廣やかなる家の内に。一個の僕をだも使ふとなく。何を生活にし給ふやらん。是第一の不審なり。人の世帯を馴々しく。問ふは要なき所行ながら。一樹の陰に宿れるも。一河の流を汲むとも。皆是他生の縁とかいへば。今よりして親族の。思ひをなすとありもやせん。わが疑ひを釋させ給へ。と他事なく問れて涙含む。落葉は瞼をしばたたきて。おん疑ひは理りなり。舊主人は吾儕の兄にて。杣木斧七と喚れたる。地方に由緒ある農家なりき。二十稔ばかり前つ比。吾儕は幸なく婣家を離れて。兄許寓居るほどに。兄斧七も嫂も。有一歲大く流行たる。時疫にて身まかりたり。迹に遺るは仯かりし。是この斧柄のみにして。外には親き族なし。吾儕は浮世を觀ずるよしあり。女僧にならんと願ひしとの。本意も得遂ず兄嫂の。稚兒をのみ遺し措て。黃泉の客となりしより。恩義の枷を被られて。こ

ましての東國よりはる〴〵と。旅宿をしつゝ六田の郷に。久しく逗留し給ふやらん。おん從者は候はずや。と問れて朱之介は愿むによしなく。否從者は兩人あり。一箇は獵に將てゆきしに。渠は後れて陟も來ず。果は麓に俟不樂て。昨夕旅亭に還りし歟。今朝は復那山に。索ね來けんも知るべからず。然ども俺身こゝに在れば。今まで遭ずなりにたり。又某が稍久しく六田の旅亭に日を累るは。主君の仰を禀まつりて。六田川のほとりなる。如如來禪師を訪ん爲なり。しかるに禪師は菴に在さず。よしや歸菴は遲くとも。對面をせで東國へは。還りがたき意味あることゝなり。その故は箇樣々々と。いかで件の禪師に請ふて。勝軍地藏一百軆を。造り奉らんとある主君の情願。許多の沙金白布を。齎し來たる緈の趣。その韓櫃を舁したる。夫役們は皆願ひのまに〳〵。武藏へかへせし情由までも。酒がいはする自家晤譚に。落葉は耳を側たてゝ。如如來さまの事はしも。吾儕も豫て人傳に。聞にしことの侍れども。過世の罪障深かるゆゑ歟。まだ法顏を拜み侍らず。誠や障りあるものは。百遍歩を運ぶといふとも。避て對面し給はず。と噂に聞たるとも侍れば。おん身も早には允されがたき。以ゐると歟心もとなし。いとうちつけなる言ながら。御主君さまは東國なる。誰さまにてましますやらん。願ふはおん身の御姓名をも。今一遍聞まほし。嚮に名告らせ給ひし折は。衆人達の訛聲に勾引れて得聞とり侍らず。六田の旅亭に在さんより。從者達を召聚へて。こゝに逗留し給はゞ。斧柄がう

といひつゝも目を押拭ふ。過來しかたの物がたりを。側聞して涙含む。斧柄が歎きの霧よりも。外の時間に醉醒て。心裏恥かしき朱之介は。さても〳〵。とばかりに。猛に貌を更めて。女あるじと見貶せし。似非尊大なる客態を。今さら悔しく思ひけり。

第二十二回　上市郷に斧柄恩人を倡ふ　奇偶を感じて落葉姪女を妻はす

且して朱之介は。膝うち鳴らし感嘆して。思ふに優たる刀自の用心。男魂徹りせば。豈よくこゝに至らんや。尚弱冠なる某なンどが。爲には後學になると多かり。願ふに所願は時ありて。成就するものなれば。終には良壻どのを。得給ふとのなからずやは。某も亦爾なり。禪師に對面するまでは。この地を去らで俟んと欲す。刀自は才女にをはすれば。俺主君をも猜し給はん。且試にいふて當給へ。といふを落葉は聞あへず。そは宜はすることながら。天見つ山外の片山里より。他を得しらぬ女の身にて。廣き東の武家さまがたを。眞にしるよし侍らんや。詮なきことを。とうち笑へば。朱之介も亦うち笑ひて。扇を颯と推披き。刀自且これを見給へかし。俺主君は。便是なり。かくてもいまだ悟られずや。といはれて落葉は頭を傾け。原來おん身の御主君さまは。關東の管領とて。こゝらの人も常にいふ。扇谷の殿ならずや。と問れて頷く朱之介は。扇を疊みうち戴きて。誠に推量違はれし如く。俺は。扇谷修理大夫朝興朝臣の

の家を成り侍れども。入贅なんどは思ひもかけず。願ふ所は孤なりし。斧柄をはやく成長して。良婿索ていかでわが。願ひの如く世を捨ばや。と思へばながき歲月を。送るに就て家の內に。男たるもの一個も在せず。斧柄が親の遺したる。田園は總て人を傭ふて。耕させ侍から。所得十分ならねども。亦煩しき事もなし。只旦暮に綿を摘み。又糸を繰り布さへ織りて。被も售もしてけふまでも。饑ず凍ず世を渡れるは。親と兄との遺德にて。吾儕が苦心も斧柄といふ。家兄の像見あればなり。現任せぬは浮世に侍り。渠もやうやく身材は伸て。生心つく比なれば。去歲の春より彼此人に。誂て婿を徵れども。片山里の悲しさは。意に擇み篩わけて。見れば是をと思ふ人なし。憖いへば自負がましくて。烏許なるものとおぼさんが。先祖は南朝の忠臣と聞えたる。越智殿の家臣なりけりと。家の口碑に傳へしを。子孫民間に降りしより。世を累ねて家風を喪ひ。朦男兒は絕果て。女の子ひとりになりぬとも。菽麥も得ぞしらぬ。田夫野人の筋なきものを。婿にすべうは思ひ侍らず。されば こその年來。一僕をだも使はぬは。孀あるじの用心にて。斧柄が與にも豫より。注連を引けばなり。かくまで意を用ひ侍るを。人は笑ふて人情に。疎きものぞといはるゝのみ。理任せぬは浮世に侍り。おん身が那如々來さまの。歸菴を俟わび給へるも。吾儕が聟を徵め難るも。今生の事後世の與。所願は同じからねども。隨ならねばこそ物をも思へ。身を摘てこそ又人の。痛さも察し侍るなれ。

身は木偶介どのゝ。笠屋阿夏に生したる。男兒にてありしよな。氏より育と俗にもいふ。人に捷れしおん身の射藝。二十に足らぬ小腕もて。妖獸一隻射て殺されし。魂胆の選しかりしを思へば親にはよは似ざりけん。甚なる過世の福ありけん。東國は武家の多かる中に。特にめでたき管領家。扇谷の御内人と。成發り給ひしも。思ひかけなきことになん。二親達に恙もあらで。倶に武藏にいまする歟。腹こそ異れおん身の姉なる。乙柚はいかになりにけん。心もとなし知らせてよ。といそがしたてて問ふ母親の。辭の間に今ぞ知る。斧柄も膝を推戕めて。日ごろ噂に聞えたる。安濃津の叔母夫の子でをはしなば。緣は絕てな刈稻の迹の。鳥の聲聞く心地ぞする。妾が與には從父姊妹なる。乙柚さなは恙もなきや。ふりにし事も聞まほし。今の容子も知してよ。と親子右よりひだりより。倶にせわしく問詰らるゝ。情由はしらねど恥おもふ。顏に秋楓の朱之介。駟馬も及ばぬ口の過。困じ果たる頭を擡て。且右を見つ左を見つ。思はずも嘆息して。はやり給ふな今さらに。亦何事をか隱すべき。親に聞たるとなければ。おん身母子は親類歟。由緣ある人歟しらねども。目今乙柚といはれしは。俺姉小夏の事なるべし。俺から言を盡さんは。面正しくもなきとながら。既にお身等に知られたる。親木偶介は唉にほふ。華の洛陽に住わびけん。俺身纔に三才なりし比。東國にゆきて歸了んとて。姉とわが身を携へて。母共侶に起行しつゝ。いく日もあらで禍鬼に。あふみに名たゝる磨鍼の。山路踰ゆく折でとよ。

家臣にて。いまだ物數ならねども。末朱之介晴賢。と召るゝもので候なり。俺名は尙にも名告りにき。よく記臆して給ひね。といへば落葉は朱之介を。つら〳〵とうち目成りて。いと憚あるとながら。おん身の語音は素よりの。東人とは聞えず侍り。今より七八年前つ比。大内殿の御内にも。陶氏の刀禰をはしまして。左果の城主なりけり。と這里にも聞え侍りたり。そが氏族にはをはさずや。と問れて驚く朱之介は。答かねしを咳きに。紛らしつ然らぬさまにて。否陶氏に叔父はあれども。俺すゑはすゑものゝ。陶にはあらで本末の。末といふ字を書るなり。原は末松氏なりしを。故ありて末松の松を省きて末とぞいふなる。周防の陶にはあらずかし。といふを落葉は聞咎めて。その末松と唱る地名は。伊勢州なる安濃の津に。程遠からぬ村にも侍り。さるにより那津の町には。近き比まで末松屋木偶介と喚れたる。商賈の侍りにき。後にはその家衰果て。京に陟りて借屋にをり。と只人傳に聞たるのみ。爾後の事はしらず侍り。原來おん身の御先祖さまも。末松村より出給ひし歟。同苗字の世間に。多かるべき該ながら末松ばかりこの外には。まだ聞しらず侍るかし。さはあらずや。と眞實だちて。根穿り葉を欲り問れたる。言葉の末に枝指て。花ならなくに朱之介は。實のある晤譚の興に乘して。更に又深念に及ばず。感嘆しつゝ膝うち鳴らして。奇なるかも奇なりけり。そをいかにして知られけん。那木偶介は俺親なり。とおもはず諦すその身の素生を。落葉ははやく聞とりて。原來おん

阿夏とのにおひそめて。世渡る業も手につかず。足にもつかず心から。身をもち崩して錢帛を。筧の水と年あまた。使ひ涸しつ故郷にも。京にも殘るは借財のみ。債の爲に家をも庫をも。人に取られて神風の。五十瀬に住むよしなくなりたれば。妻子從類四落八散に。なりにし時の悲しさを。さこそと想像り給へ。切て乙柚をとり留めて。親里へ將てかへらん。と思ひしかども世に物固き。兄斧七のうち腹立て。女の子といふとも父に隷て。憂目を見ておもひしらせよ。喁意に違はば女弟にあらず。といひおこされしに力及ばず。年もはつかに四五才なる。獨女を色界狂夫の。箋々に遞與して身は蟨蟬の。裳脱けしとく舊里へ。ひとりし歸る浮世の秋の。別れ悲しくなきくらし。泣あかしつゝいかでわれ。尼にならんと願ひしを。それすら兄の允さねば。漁火せぬ夜の歌舟。子ゆゑの闇を照らすべき。よすがもあらず心やりに。京師の便り聞く毎に。木偶介ぬしは阿夏とのと。ひとつになりと聞えし日もあり。又その後は阿夏とのに。男兒を生せし事も。乙柚を河原へ將てゆきて。舞踏しつ。生活の。便着にせられしとまでも。しる人ありて口歹く。都かへりの裏貌に。告られし時は鈍ましく。又哀しさも彌倍して。一日も胸は安からず。不便や乙柚は五六才より。河原掾了の疲勞足。趺蹶びて怪我せずや。繼母ならずは幼稚き女兒に。掾了せもせじ。出しもせじ。親がひもなき父親の。さまでに恥をしらずや。と思ふ心をいふよしも。泣顏隱す兄嫂に。介意をしつゝ送る日の。たつとはやく這親

星煞やあし引の。山豪の輿にうたてやな。父は命を隕せしとぞ。そが折に亦俺姉も。那山豪に投擲られて。千仞の谷に陥りつ。骸も留めずなりにしよしは。わが身九才なりし時。初て母に聞たりき。是よりして後母親は。憂事をのみ十寸鏡。家も定めず跉跰ひつ。或は人に身を寄せて。十稔あまりを送りつゝ。舊識人に誘引れて。陸奥へとて赴きたる。爾後音耗絶たれども。執袴に休暇なきをもて。安否も訪ずなりにたり。有恁而俺身はゆくりなく。或人に紹介せられ。遠く武藏へ赴きて。扇谷家に仕ると。まだ三四年に過ざれども。殊に主君の恩顧愛たく。大事の使に立られたる。これらの事は前にもいひにき。刀自は原是誰が妻にて。思ひかけなく俺親と。姉の事さえ知られけん。這地に由縁あるよしを。母のいはねば思ひ惑ひぬ。詳に示し給ひね。と問かへされてよゝと泣く。母子が袖の玉あられ。碎く斧柄の歎きより。わきて落葉は颳の。木の丸殿にあらねども。名告をせずは誰が子ぞと。知らであらんを愍に。その姉の事親の事。聞くに就ても恨しく。いとゞ哀しく形なき。昔を今に繰返す。涙は瀧のいと切て。絶入る可歎きしを。思ひかへしつやうやくに。頭を擡げ目を拭ひて。喃末松ぬし。おん身の母御のわがうへを。告も知らさで過されしは。了得に忌むよしあればなりけん。名告るも面なきとながら。吾儕はおん身の爹々公の前妻。乙柚といひしは女兒の舊名。小夏が生の母なりかし。言可惜くも聞給へ。おん身の爹々公木偶介ぬし。都かよひの折々に。その比那首に時めく歌妓。

の。いともはかなや叔母夫さへ。なき名聞して後々に。物おもへとやつれもなき。神の咎歟佛の罰歟。免れがたきは哀別離苦。世に死生の海なくは。人の心に波風の。起ともなくいつまでも。長閑からんを形きなの。歎きは多く歡びの。寡かりき。とおもふと。愚痴を併べてかき口說く。少女こゝろも哀れなり。言果しなき母子の悲泣を。朱之介は慰めかねて。且羞て頭を低。默然たると半晌ばかり。叉きたる手を釋きて。落葉母子に對ひていふやう。はじめて聞たる刀自の本末。由縁の端に連りたる。這身にとりても面目なし。恁いへばその子として。親を譏るに似たれども。亡父木偶介の放蕩無賴は。論するにも足らざると歟。心ひとつの惑ひにより。産を破り妻子を離別し。後妻に口を餬ふて。恥とせざりしは朽をしくも。亦歎かべきことにあらん。小生不才なりといへども。今よりおん身親子の與に。力を竭し骨を折て。年來物を思はせたる。俺親の不誼薄情を。贖んとこそおもふなれ。この義倘後々まで。誓ひに背くとあらば。死して必地獄に墮ん。さのみな怨み給ひそ。と世に賴しき言葉の露に。濡せし袖を叉絞る。落葉は涙を掻拂ひて。嬉しき人の誠心や。淡き老婦の悲みに。勝ねばこそあれ。愚痴をもいひけめ。いでいおん身を疎むべき。過去りしとはしも。皆是夢の浮世に侍れば。好も歹きも五十年。誰かはひとり殘らんや。況非命に世を去り給ひし。木偶介ぬしをいと惜し。と思ひこそすれ怨みはせず。然ればおん身の母御と聞えし。阿夏とのさへ憎しとは。神かけて思ひ侍らねど。只宍

里へ。かへされしより呉竹の。四とせになりし秋の比。木偶介ぬしは妻子を携て。鎌倉へとて起行にき。と聞えし後は噂する。人しなければ鷄が鳴く。東路遠く想像る。身の憂事の數そひて。兄斧七にも。嫂にも。死別れしより。生別れたる。乙柚をおもふ暇もあらず。這家の事。斧柄の事。只身ひとつに承持て。孕む姪に母とし呼れ。親と稱へて護養へば。渠も慕ふて孝行なる。恩愛情義兩ながら。迭に隔るとなく。咱子を捨て兄の子を。子とせしも是過世の業因。約束事でありけん。と思ひとりつゝ憂かりしとも。忘れて年を歷しものを。昨夕斧柄が禍鬼に。呼出されし必死の阨を。拯ひし人はわが爲に。故の夫の兒なりき。と知るだにもひとうれしきに。木偶介ぬしも。乙柚の小夏も。おなじ山路に死天の旅。ゆきて返らぬ人の數に。入りにし事を十あまり。七稔といふけふまでも。知らで今聞く哀傷悲愁。草葉の末に鼓ふ虫に。涙なくともいかにして。子ゆゑに泣ぬものあらんや。哀しきかな。と聲たてゝ。泣沈みたる姨捨の。月ならなくに慰め難し。斧柄も倶に泣聲立て。幼稚き比は綿摘みあへず。甲夜寐まどひの目覺し草に。母さまの說示させ給ひし。乙柚さまの事はしも。痛ましと思ひし骨肉の姉品。年闌るとも環會ふ。としもあらんとこゝろでは。果敢なきとをたのしみに。俟かひありて異母なる。その舍兄にはあひながら。消にし人は六の花。七歳八才を一期としけん。扨も命は浪速江の。短き蘆のふしあはせ。逢ずなりしをうらめしの。あふみとは誰が名つけけん。さして往方は磨針

に。従ふをしかいふとこそ見え侍れ。よろづおん身の御こゝろに。従はざると侍らんや。左にも右にも讓らせ給へ。といへば落葉は笑しげに。又朱之介にうち對ひて。目今聞れ侍るがごとく。斧柄も母と願ひは齊一。この議を承引給ふやと。當面に問ふ妹伕の縁談。朱之介は含笑ながら。思はずも膝を杖めて。そは有がたきまで辱き。御商量には候へども。當りがたきとにこそ。向にも既にいひけらし。初て親の非を知りて。その愆を貲ん。と思ひ起したりけるものを。おん身母子の與ならば。よしや火の中水の底に。入るとても辭ふべからず。然るをいはんやまうさんや。令愛をもて某に。妻せんとあるは意外の幸ひ。身を終るまでの歡びなり。扇谷は昨今の。主君にして譜第ならねば。久後とても憑しからず。なほ一兩年扈從するとも。用ひられずは退隱して。刀自に孝養を盡すべし。豈五斗米の爲に腰を折めて。馬前の塵を拂や。この義も御こゝろ安かるべしと。悍く勇る當座の應に。落葉はいよゝ望足りて。且感じ且歡びそれでこそ咱婿なれ。はや熟譚に及びしかども。媒妁なきをいかゞはせん。什麼誰をがな頼むべき。此歟彼歟。と母親女兒。潛めきて霎時相譚ふ折から。思ひもかけぬ次房にも。いつの程にか人ありて。その媒妁は在下が。必つかふまつるべからん。任用し給へかし。といひつゝ隔襖に手をかけて。左右へ颯と推開けば。落葉斧柄も。朱之介も。吐嗟とばかり駭きて。但見れば是別人ならず。安保箭五郎直行なり。登時箭五郎は。且席末に找入りて。あるじと客に報る

しきは小夏とか。名つけられたる乙柚が事のみ。とてもかくても這世では。わふよしもなき女兒の與には。箸折屈む弟なる。おん身にわひしは切てもの。歎きの中の歡びなり。既に斧柄が必死の阨を。拯ひ給ひし恩義を思へば。神所爲なるべき奇緣に侍り。這一事もておん身の爹々公の。舊愆を補ひ給ふに。足るべうは侍れども。いと美しき御心操に。愛て願しきと侍り。斧柄が心はしらねども。且試にうち出さん。おん身斧柄を妻として。柚木末松兩家の迹を。子孫に嗣し給はらば。本偶介ぬしと緣しは絕ても。二たび夫に見えざる。吾儕が貞操も屆くべく親と兄との祀も絕ず。これに優たる歡びあらんや。さばれ斧柄を武藏まで。送遣はべらんは。願しからぬとになん。おん身この地に逗留の程。且婚姻を整へて。扨斧柄をば留おき。功成名遂て仕を致し。この地に老を隨ひ給はゞ。夫婦聚る日あり。よしや一日半夕の。添臥しして も子を產むものあり。生涯枕を並べても。子のなきが世に多かれば。子のありなしは人力の及ぶべうも侍らぬにや。峰上隔て宿るといふ。鳥さへあるに東西。妹山伕山と別るゝとも。迭に心變らずは。よしや吉野も武藏野の。田面の里と憑しく。雁の翅に暢ずる。音簡の便りも疎からで。久後樂しかりぬべし。斧柄は否歟。いかにぞや。と問れていとゞはづかしの。森の下枝の露とだに。應難しをやうやくに。思ひ返しつ潜音に。物の本にも女のうへには。三従とやらんいふ。ふるき誨の侍らずや。幼しては父母に從ひ。成長りては良人に從ひ。老てはその子

にうち對ひて。おん身は翌より這裡に居まして。如如來さまの歸庵の日を。俟せ給ふが便宜に侍らん。然らば那おん布施物も。客店に措んは要なし。這裡には倉庫も二座侍れば。おん身と共に曳とり給へ。從者達は左も右も。おん身の隨意ならんかし。といふを朱之介はうち聞て。その義も尊意に從ふべし。那兩個の從者は。別に遣す所あり。といひつゝ刀を引寄せて。白金の割笄枝と。腰に吊たる藥籠を。遽しくとり出して。扇にうち載せ。箭五郎にうち對ひて。喃阿求入道藥籠は。曩に河蹈を首途する折。主君より賜ひしなり。又笄枝はその已前。叔父の養たるものなりき。旅にしあれば納采に。進らすべき東西もなし。よりて這二種を。朱陳の徵に見られんとを。冀ふ所なり。よろしく傳へ給ひねといひつゝ。遞與すを箭五郎は。恭しく受とりて。左見右見つゝうち咲て。這藥籠には竹林に。群雀の描畫あり。又笄枝には。重花菱の鏇彫あり。割笄枝は陽陰一對。又藥籠には偕老の。仙丹をや籠られけん。千歳の吉兆。當意即妙いざ受収め給ひね。と祝して斧柄にさし寄すれば。落葉も俱に歡びを。述て媒妁を勞ひけり。かくて又盃を巡らしつゝ。且飯を羞めなどしたる。管待に日の闌しかば。朱之介は旅亭に還りて。翌又來つべしとて別を告るに。落葉斧柄はその意に任して。軈て盃を納めけり。嗚呼緣あれば千里も合璧。緣なきときは肝膽胡越。寃家還て壻と成り。姑となり婦となる。それ是天歟。將人歟。月下翁の慫歟。實にあやしき情緣なり。案下某生再說。朱之介の從者坊二郎は。

やう。向に在下は宿所に退りて。晝膳たうべ出なほして。來つゝ次房まで伺候せし折。主客の閑談細やかに。愁歎の聲も聞えしかば。序次わろしとはやゝ猜して。側なく我みも入らず。ひとり那首に躊躇て。思はず時を移しつゝ。聞くとはなしに客わるじの。由縁ありける顛末も。又媾談の事までも。一五一十を聞得たり。事の情を按ずるに。婿君はいはでもしるき。鎌倉管領の御内人なり。當家も亦曾祖の時まで。越智殿の家臣と聞えたり。然るを田夫野人をもて。媒妁とせられんや。在下寔に不似といへども。亦是武家の退糧人なり。鷹捉山より誘引來ぬる。緣なしといふべからず。これ彼もつてこの良媾の。伐柯とならんもの。咱をおきてそれ誰ぞや。この故に無禮を斁はで。推て圓坐に入れるのみ。この義を允し給はんや。と辯舌水の流るゝ如く。鼻蠢めかして說誇れば。落葉母子も朱之介も。感嘆しつゝその人を。得たりとおもふ色見えて。且箭五郎に盃を。勸めて媒妁にたのむよしをも。又朱之介が親。木偶介等の事は。聞給ふとも聞捨て。人になしらせ給ひそとて。はやくその口を鉗しかば。箭五郎しば／＼頷きて。そこらに眷念し給ふな。在下もこれ武士なり。人にしらせて妙ならぬ。ことしりつゝ誰にかいふべき。好事は急げと俗にもいへば。翌明後のころ日を擇みて。とく婚姻を整へ給へ。神無月は忌といふ人はあれども僻言なり。十月は陽月とて。唐山秦の始皇の時に。正月とせし例もあれば。恁可愛たき折はなし。然はあらずや。と執持れたる。落葉は更に異議もなく。又朱之介

これらはいまだ奇とするに足らず。不思議の事もあるものなり。昨夜俺拯ひ得たる。斧柄の母親はわが爲に。父かたの叔母なりき。穉き時相別れしより。迭にしらでありけるに。思はず環會ひしかば。叔母の歡び大かたならず。翌より那家を旅亭にして。禪師の歸菴を等といひにき。俺おもふに。禪師の歸菴し給ふまでは。なほ且く程あらん。俺は那韓櫃を運移さして。叔母の居宅に宿りを替べし。しからんには汝達の。是首に在らんは徒然なるべし。所詮今茲の暮るゝ比まで。京まれ浪速まれ赴きて。佳宿覓りて遊びて來よ。盤纏はわれよくものせんず。といふは斧柄と婚姻を。しらせじと思ふ胸臆伎倆とは。しらで歡ぶ乃介坊二は。一議に及ばず領諾して。そは情あるおん計ひ。いと忝きことになん。然らば且韓櫃を。叔母御前の宿所へ遣して。俺們は霎時暇を給はり。南都多武の峯吉野はさらなり。竹都の伊勢參宮。京浪速まで徧歷りて。年極の比にかへりまゐらん。この義を允し給へかし。といふに朱之介は頷きて。そは各の隨意なるべし。翌上市なる叔母の宿所へ。韓櫃を遣す事は。別に人を傭んず。汝達は翌朝。こゝよりはやく發足せよ。且盤纏をとらすべし。これもてゆきね。と行嚢より。金幾兩か數出しつ。分ちて二人に與へしかば。乃介坊二は受戴きて。歡ぶよし大かたならず。その詰朝朱之介に。恩を謝し別れを告て。旅亭を出てゆきにけり。この日亭午の比及に。安保箭五郎は旅亭に來て。朱之介に對面し。且婚緣熟譚の。歡びを述來由を告て。けふは黄道吉日なれば。今宵婚

鷹捉山にておもはずも。朱之介に追後れて。索わびつゝ麓に下りて。日の暮るゝまで俟しかど。ぬしは降りも來ざりしかば。原來はや別路より。六田へかへり給ひにけん。とひとりごち路次を急ぎて。その夜更闌し比。六田の旅亭に立かへりて。乃介に問へば。朱之介は。いまだ還らずといふに復訝りて。追後れたるよしを。報知らせ。うち相譚へども。小夜深たればさらに又那山へゆくべうもあらず。胸安からねどその夜は就枕て。明朝又旅亭を立出。ひとり鷹捉山に赴きて。朱之介を索ねしかども。鈍や深くはわけ陟らず。朱之介は既にはや。箭五郎們と共侶に。上市へとて別路より。山を下りし後なれば。竟に復索ねも遭で。いよ〳〵訝ります〳〵憂ひて。困じ果つゝ六田にかへりて。よしを乃介に報しかば。乃介も倶に疑念起りて。兩人額を病しつゝ。評議を凝せど下司の智計。果しなき間に冬の日の。影は短くけふも亦。下晡になりにけり。浩處に朱之介は。上市の郷より歸來にければ。坊二郎は乃介と倶に。慌迷ひつゝ出迎へて。昨夕よりけふまでも。索ねわびたる縡の趣。箇樣々々と且報て。恙なかりしを祝しつゝ。ぬしのうへを又問ふに。朱之介はうち笑ひて。且茶を喫み衣裳を脱更て。扨昨夕鷹捉山にて。麑を追走らして路に迷ひ。せん術なさに露宿をしつゝ。料らずも那山にて。二隻の山猿を射殺して。斧柄を拯ひし爲体を。首より尾まで。今視るごとく說示せば。乃介坊二は舌を卷て。或は怕れ或は歡び。ぬしの射術に捷れしを。只管譽て已ざりければ。朱乃介はいよ〳〵笑ふて。

の愛くつがへりて。皆羨しくおもはぬはなし。かくて落葉は次の日に。餅を四鄰の里人と。箭五郎が宿所へ餽遣して。いぬる日斧柄を將てかへられし報ひとしつ。且招聟のとさへ告て稍宿念を果しけり。是よりして朱之介は。杣木の宿に起臥しつゝ。なすともなく日を彌るに。夫婦睦しからぬにあらねど。斧柄はよろづに折目正しく。浮たるとは露ばかりもなきを。朱之介はおもひしにも似ず。洞房の間には。趣なきを憾とせり。況落葉は朱之介を。なほ賓客のでとくにして。苟且にもうちとけて。要なき事にものいはず。然ばとて疎くもせず。斧柄が心つきなきとは。陰に立敎諭して。何事も朱之介に。不自由あらせじとて機をつくれども。朱之介は大く困じて。繭縣で頸を絞らるゝといふ。世の鄙語に似たる心地しつ。時々事に假托て。箭五郎許赴きて。うち譚ふをせめてもの。保養なりきと思ひけり。畢竟朱之介が。箭五郎を友として。又甚麼なる說話かある。そは次の卷に。解分るを聽ねかし。

近世說美少年錄第三輯卷之一終

姻あるべしと。落葉の刀自のいはるゝなり。有恁ば和君の行李をも。遺なく上市へ遷移して。那裡へ赴き給へかし。といふに朱之介は異議もなく。二人の從者を出し遣りたる。縡の趣を告しらせ。韓櫃を舁く人足を。傭んとて相譚ふに。箭五郎はこゝろ得て。旅亭主人によしを示して。猛に四下に莊客を。傭ふて韓櫃を舁しけり。然程に朱之介は。旅亭主人に座席を返して。日ごろの房錢を取せなどしつ。箭五郎と共侶に。韓櫃を先に舁して。柚木の落葉が宿所に來にけり。これを觀る里人們は那韓櫃を婿の衣裳と。調度ならんと思ひけり。されば落葉はこの旦開より。よろづの儲に暇なく。斧柄に結髮花粧をさして。準備やうやく整ふ比。氷人安保箭五郎に倶せられて。朱之介の來にければ。且二箇の韓櫃を。庫中に扛納さして。傭人足們を返し遣し。扨朱之介を。儲の席に著しめて。箭五郎にも茶を肴て。歡びを述などしたる。忙しさはいふべうもあらず。左右する程に日の暮しかば。燭臺二本ばかり措並べ。斧柄を席に著めて。朱之介と婚姻の。盃を執結するに。氷人箭五郎が妻なりける。奧手は午の比より來てをり。良人と倶に這婚姻の。席に列り執持て。千秋萬歲とて壽きける。縡不用意に出し婚席にて。素より田舍の事なれば。華やかなる儲なしといへども。美女美少年一對に。洞房花燭も光を增ん。錦の上に花を添たる。夫妻にこそと批評しつゝ。嘆賞せざるはなかりしを。恨る所は心ざまに。美惡賢不肖その差ありて。對すべくもあらずとは。今このときにしるよしなければ。傳聞くも

つかまつらん。誘給へとて立ときに。落葉斧柄に恁々と。よしを告て病坊なる。宿所へ倶してゆきしかば。朱之介は籠の鳥の。野に放されし歡びあり。既にして那裡に到れば。箭五郎が妻の奥手は。豫てこゝろを得たりけん。遽しく走出て。朱之介を奥まりたる。褊室に迎入れ。寒暖を述遂なきさまを祝し。茶を看めなどしたる。管待態の愛敬づきて。物のいひざま憎からず。斧柄には年歳。七歟八の姉にして。縹致も亦二の町ながら。髮の結ざま帶の締ざま。すべて今樣なれば趣あり。有恁而。主人箭五郎も共侶に。朱之介を歡待して。四面八表の雜談に。且く時を移す程に。奥手は準備の酒を盪め。殽も種々もて出て。朱之介に羞めけり。客もあるじも沙量ならねば。是より酒醼はじまりて。献つ酬えつ果しなき。議論に興を催したる。朱之介ははや薄酔の。多辯に任して屬日の。鬱氣を恁々とうち喞ちて。媒妁の目前にて。かういへばおかしからぬ。不走向に似たれども。舅母は旦ても暮ても。苦虫を嚼潰して。四角四面の氣韻高く。斧柄も亦烏と共に。起て糸を繰り機を織る。これより外に所作はなし。今樣早唄こゝそ事ふりにたれ。説經弄齋椰節を。學びたりやと問へば。知らずと答ふ。況て昨今は田舍までも。弄ぶ三絃なんどは。手で彈く物やら。足で搔鳴らす物なるや。夢にだも見たるとはあらず。偶然にものをいひ被ても。泣出したげなる面色して。返辭をするのみ餘情もなく。寢るときだにも三指にて。許させ給へといひながら。蒲團の端へ如恐怖に。枕引よせて就寢なり。畢竟木彫の偶人

近世説美少年録第二輯巻之二

東都　曲亭主人編次

第二十三回　知母補益して遠志を奬す　車前效を論して當歸を留む

復説末朱之介晴賢は。思はずも柚木の落葉が。舊き縁しを結び更て。斧柄をもて妻せたれども。素より主君の免許を歷て。その意に任せし事ならねば。額髪を剃除きて。一家の主人になりたるにあらず。晴ては人に名告かたき。只是日蔭の花壻なれば。暇ある身の徒然を。慰るよすがもなきに。落葉はさらなり斧柄さへ。その心ざまいと正くて。浮たることは兎毛の頭に。置く露ばかりもなかりしかば。朱之介が辯佞浮薄の。氣質にこれを比れば。氷と炭の合ざるごとく。獄舍中に處る心地して。窮屈いふべうもあらざれども。主客の勢ひ異にして。又いかにともすべからず。いと悔しくも困じ果て。日景短き冬の日を。消し難つゝ在りける程に。安保箭五郎のみ兩三回。朱之介を訪慰めて。わかき人のなすこともなく。傴垂籠てをはしなば。竟に病痾の發りやせん。折折は。蔽屋へ。來まして的でも射給へかし。お敵手にはなりかたけれども。在下も稽古

へて隔なく。交り淺からずなりにけり。かゝりし程に朱之介は。思はずも酩酊して。席にも堪ず見えしかば。箭五郎はそが儘に。臥さしめて枕を與へ。奧手に衣をうち被させて。盃盤をとり納め。その醒たる比呼起して。柚木の宿所へかへしけり。是より又四五日を歷る程に。朱之介は思ふやう。いぬる日われは箭五郎夫婦の。歓待を受たるに。酬ひをせずはあるべからず。然りとてこゝへ招きよせては。例に興なき所行なり。俺復那裡に赴きて。東道をせんと。肚裏に。尋思をしつゝ件のよしを。竊に手簡に書寫し。金一兩可封じ籠て。是を書筥の内に納め。慥實なる人を傭ふて。安保が宿所へ遣しけり。有恁而その次の日の未の比に。朱之介は綷に暇托て。箭五郎許赴きければ。待儲たるあるじ夫婦は。歡びて走り出。例の客室へ迎入れて。管待又細やかなり。當下箭五郎がいふやう。きのふは辱く。尊翰を賜りて。御教諭承知仕りぬ。曩には聊交遊の。歡びを表するまでに。薄酒を薦めまゐらせしに。その酬として。けふは又。東道せんとて一圓金を。豫て御附屬なされしは。御厚情餘りありて恥るに堪たり。既に刎頸の友垣を。結びたりける中なるに。些の薪水を費したりとも。酬を受んは心にず。辭み奉るべき筋なれども。然では還て好意に悖る。失敬の憚りあり。よりて准備をつかまつりぬ。といふに朱之介は微笑て。豫て知らせ給ふごとく。斧柄はさらなり。岳母も。性として酒を嗜ねば。酒客を見れば非類として。仇のごとくに思ふなる。そが中へ招きまゐらせては。七嬲八醋あり

と。枕を並ぶるに異ならず。恪ても夫婦といふべきや。粉糠三合有ならば。入贅にななりそといひけん。昔の人の格言なるかな。察し給へ。と不樂しげに。意中を蓄す酒興の述懐。箭五郎呵々とうち笑ひて。宣ふ趣無理ならねど。世の常言に石上にも。三稔といふとあるならずや。然とて貴所は入壻にして。又世の入壻とおなじからず。今にもあれ主用を。果し給はゞ袖うち拂ふて。武藏へ還り給はなん。爾らばこゝもなほ旅なり。到底は趣のなき。衒妻を旅宿の當分。月備にせしなりと。思ひ給はゞ不足はあらじ。且く堪忍し給へかし。といへば奥手もうち笑ひて。斧柄さまの光惚子なる。そはその該の事に侍り。焦たる桐も製らねば。良琴にはなり侍らず。煤けし竹も伐てこそ。愛たき笛になるとかいふ。譬諭を女子の諸禮書にて。見しとの侍りにき。斧柄さまも恁ぞかし。氣ながく敎育給ひなば。遂に佳音をあらはして。曉毎に臥房の窓の。隙よりしらむを共侶に。いとをしみつゝ離れ難ぬる。樂しき中になり給はん。そを敎ずして備らん。とを求め給ふは疎にこそ。然はあらずや。と慰れば。朱之介は手をうち鳴らして。是は寔にいはれたり。現格別なる才女の御指南。向後その諭を用ふべし。謬入て候なり。といふを夫婦は聞あへず。齊一噛と笑ひけり。登時箭五郎は。朱之介に。なほも盃を薦ん爲に。奥手に三絃を彈せ。共に謌ひて。酒席の興を添しかば。朱之介は泥のごとくに。心藻け魂浮れて。俺屬日の鬱腸を。この一席に洗ひにけり。と思へば是より箭五郎を。知己と稱

は。身にとりて被替なき。これ第一の靈寶なり。在下倘輸たらんには。渠を側室にまゐらすべし。是則遊仙窟にしるしたる。張文成が雙陸に。宿を賭にせしこゝろにこそ。といふを與子は聞あへず。そは亦何をいはるゝやらん。戯れ言も事による。否なることを。と敦圉て。罵りながら朱之介に。目を注せつゝうけ引ね。といはぬばかりに意中の情を。示すを曉得る朱之介は。心迷ひ魂飛で。更に亦些も凝議せず。箭五郎にうち對ひて。宣ふ趣その意を得たり。俺身十一二歳なりし比。師の坊に聞しとあり。むかし聖武天皇は。雙陸の賭ものに。三千貫の錢を賜り。延喜の帝は碁の賭ものに。玉のおん枕をさへ被させ給ひき。至尊すら然るおん遊の。なきにしもあらざるに。われ亦何をか惜むべき。さばれ燕の子安貝。龍の腮の玉なンどいふ。奇貨はわれもゑるとなし。古書畫古器物の價貴く。得かたきも亦錢帛の。光りに捷ざるべしやは。貴公内政を。賭物に出し給はゞ。われは亦金七兩二分を出すべし。便是世話にいふ。密夫の賍藏なり。此彼良對ならずや。といふに箭五郎は異議もなく。且感じ且歡びて。爾らば黃物先生を。先はやこゝへ出し給へ。然して雌雄を決すべし。といふを朱之介は聞果ず。はや懷中の財嚢より。數を違へず賭物を。出して折敷の上に措ならべ。よしや贏とも輸るとも。淡に變易すべからず。と誓ふて各默禱しつ。うち向ひ聲を合して。指を拔き指を僂り。且く挑み爭ふ程に。初にも似ず朱之介は。三たび續けて輸しかば。思はずも惴立て。又更めて財を出し

といふとも。獨酌の白梅と。香の物にもなほは劣りて。興あるべくもあらざれば。漫に失敬を見かへらず。又半日の庖丁を。煩し奉りて。共侶に歡びを。盡さばやと思ひつゝ。酒肉の料を寄せまつりぬ。この義を允し給へかし。といふ間に奥手ははや。盃をもて居たる。殽は又いぬる日の。管待よりも種々にて。手を盡して珍味を撰みし。用意等閑ならず見えたり。これよりして客もあるじも。盃を受巡らして。やうやく佳境に入る程に。迭に口誼むづかしく。飲せんとしつ。喫じと角ひて。果は猜拳もて勝負を決する。手段に笑ひ啀めきたる。その間には又奥手に。三絃を搔鳴させて。艶曲をもて興を添たり。既にして朱之介は。はや七八分醉たれども。猜拳には勝としばしにて。頬かき撫て誇りしを。箭五郎惴たる面色して。纔に一杯の酒なればこそ。われはおん身に輸もすれ。よき賭物であらんには。在下必贏べきなり。といふを朱之介は聞あへず。そは一段おもしろからん。何なりとも賭給へ。俺も又好みに任して。賭物を出すべし。といへば箭五郎膝うち鳴らして。ではおもしろくなりにたり。在下は是浪人の。貯祿薄ければ錢財なし。なれどもこゝに只一箇。身にも換かたき奇貨あり。そを賭物に出さんのみ。といふに朱之介はこゝろ得ず。主の寶貨は甚なる東西ぞ。と問はて箭五郎側を見かへり。在下が身にも換かたき。奇貨は是この奥手なり。渠なくては朝毎に。炊きするものもなく。目睡難る長き夜を。慰るものもあらず。然れば衣食の兩箇はさらなり。子種を蒔す土地にあなれ

腰刀。やをら引提て出てゆけば。奥手は紙燭も秉かへず。端近きまで送りたる。四下小暗き竹縁にて。引留つ立ながら。囁くと半晌許。背を敲きて別れけり。扨も朱朱之介は。思はずも酒輿に乗して。二十餘金を喪ひたれども。奥手と情由のありし初しも。那席よりのことなれば。亦箭五郎を疎みもせず。折々那首へ赴きて。猜拳もて件の損財を。とり復さんと欲せしを。箭五郎諫て従はず。和君知らざる所あり。在下故郷にありしとき。猜拳には頗名を得たり。何曾何曾目比反掌打。何まれ和君の得たる技もて。復會稽の恥をしも。雪んとならば敵手になるべし。唯いみ贏ては興なし。と親切めかして諭すにぞ。朱之介はその議に任して。然らばまづ。反掌打より翫んとて。這回は賭物をひとしくしつ。迭に多く酒を喫まで。頻りに雌雄を争ふ程に。朱之介は何の技にも。贏とは稀にして。輸るとの多かりければ。漸々に嚢中竭て。竟には彼五百両の。沙金のみになりにける。その折々に箭五郎は。空軍の歡びなりとて。酒肴美々しくものして。朱之介を管待しつ。その身も飽まで飲啖ひたる。果はいたく酔臥て。小夜深るまで覺ざりけり。然程に朱之介は。做す技毎に失却ありて。幾回となく損をすれども。箭五郎が酔臥したる。暇あれば思ひの隨に。奥手と姦通せざる日もなく。是にて損は補たりとて。盤纏の有無に脊念せず。虚々として送る日の。今茲も既にくれ竹の。はつかあまりになりしかば。世の人は春の儲に。いそがしからぬものはなかりしを。朱之介のみ暇あれば。一日又箭五郎許へ赴きた

て。再度の雌雄を爭ひしに。這回の猜拳にも又輸けり。こは朽をしや。とばかりに。且羞ていよ〳〵ます〳〵。已ことを得ず又更めて。賭物を出して爭ふものから。終に贏を得ざりしかば牡鹿の角の束の間に。廿二圓金餘を折れたり。今一番とて進みしを。奥手は急に推禁めて。酒興に任せし戯れなりとも。阿漕なりせば角文字の。いせのうら見の基にやならん。且く休み給ひね。と慰めつ推わけて。又盃を薦めしかども。朱之介は醉と共に。興さへ醒て悔しさを。なほ鼻唄に紛せども。胸塞り腹ふくだみて。盃は手にとりながら。又喫べくもあらざりけり。この時既に日は暮て。初更の比になりしかば。朱之介は宿所の首尾も。了得に心もとなければとく罷らんとて別を告るに。箭五郎は何の程にか。醉臥て呼べども答へず。登時奥手は件の金を。ひとつにしつゝ紙に包みて。これを朱之介に返していふやう。縦この金あらずとも。盤纏に事を缺給ふ。おん身にはあらざるべけれど。友垣結ぶ中にして。寶貨を折くよしあらんや。こはもてかへらせ給へかし。といひつゝ遞與すを朱之介は。手にだも取らず頭を掉りて。いかでかは然るとあらん。よしや猜拳には輸ずとも。饒りて衣食の資にせん。と豫てよりおもひにき。俺身幸ひに君侯より。路費の賜もの寡からねば。さばかりの金何にせん。そはその儘に措給へ。主の睡眠の覺しときに。宜く言傳給ひてよ。といと鷹揚に說諭す。言と心は表裡にて。與あらんとて來し甲斐もなく。興盡て還る本意なきを。色にも見せじと塗隱したる。花螺鈿の

右せんと。母子額を合しつゝ。うち相譚へど術もなき。淺き女子の智慧の海。浮寢の鳥にあらねども。丈夫ゆゑにこそひとり泣く。冬の夜寒く年は暮ても。晦しらずの主なれど。いはねば濟ぬ事侍り。響に暇を取らせ給ひし。おん身の從者乃介とやらん。坊二とやらんがつれ立て。けふ還りしとて黃昏比に。こゝへ尋て來にけるを。母さまはこゝろ得て。そが儘留め措き給ひぬ。倘かのよからぬ風聲を。從者達に聞れなば。武藏へかへり給ふて後の。おん身のうへにあらずや。と報るに駭く朱之介は。襀搔遣りつ身を起したる。氣色に見ゆる當惑の。初て夢の覺たるごとく。頭を傾け手を叉きて。暫思するも半晌ばかり。嘆息しつゝ妻に對ひて。喃斧柄。面目もなきわが越度。今さらいひとくよしもなし。如々來禪師はけふまでも。歸庵の聞えあらざれば。よしや春まで俟とても。なほ對面は心もとなし。然るを主從三人まで。寡あるじの岳母に。養れてはをりかたかり。一トたび武藏へ立かへりて。よしを君侯に聞えあげ。ふたゝびこの地に來つるとも。そが儘彼地に留るとも。時宜によるべきことながら。いと恥しくも查知のごとく。盤纏を用竭せしかば。進退こゝに谷りぬ。作麼いかにしてよからんや。と潛めきて問ふ折から。竊聞しけん屛風の陰より。忽地落葉が聲をかけて。朱刀禰その議はせんかたあらん。さのみな思ひ屈し給ひそ。といはれて吐嗟。と復駭く。朱之介は遽しく。襀さへ蒲團を反退て。孃はいまだ臥し給はずや。思ひかけず。とばかりに。やをら屛風を片よすれば。落葉は徐に

る。その夜亥中の比及に。柚木の宿所にかへり來つ。落葉は既に臥房に入りぬ斧柄は良人の還るを俟て。いまだ寢もせでありければ。背門の樞戸引開て。迎入つゝ戸を鎖て。今宵は特に遲かりき。物ほしうはをはさずや。と問つゝ軈て爐に沸起らせし。素湯に出し茶の箇茶碗。汲見てしるき錦手も。美し過ぎて惹氣せぬ。妻にも恥ぬ朱之介は。果敢々々しうは應もせで。稍醉醒の直渇に。茶を汲すると五六碗。飮盡しつゝそが儘に。衣をも更ず就枕りたる。横の裾折り領搔籠し。斧柄は良人の枕方に。惆然として在りけるを。朱之介は頭を擡て。見つゝ竊に冷笑ひて。なぞてそなたは睡らざる。俺身に恙なきものを。看病さるゝとやはある。といはれて斧柄は潸然と。落る涙を押拭ひて。おん身に恙ましまさぬ。そは素よりのとながら。奴家は屬日一日も。痞の發らぬとはなし。病の根は誰が所爲ぞ。皆是おん身ゆゑならずや。折もありなば諫んと。思ふものから強顏さに。とりつく巖もなきさ舟。波濤に漂ふ心地して。けふまで過し侍りにき。おん身は思ひ給はずや。武藏の盡處より御主君の。使に立し甲斐もなく。如々來さまの歸菴のとは。忘れしごく虛々と。良からぬ友と交りて。酒に亂るゝ本性の。浮氣はいとゞ增花歟。他の愛樹を手折らんとて歟。賭に耽りつ欺詐かされて。盡る盤纏を惜氣なく。使ひ果させ給ひぬる。惡事千里と俗にもいふ。諺草に漏る露なければ。人にしられてこゝらへも。噂聞えて氣を病したる。奴家のみかは母御さへ。驚れぬるおん身の不行迹。左してやよけん

うたてや勞して功もなく。竟に引れになりけるよ。といひつゝ嗟嘆したりける。日ごろに似げなき姑の。粹なる決斷に米之介は。頭を席薦に推著て。背に流す冬の汗。慚愧後悔限りなく。又いふよしもあらざりしを。やうやくに頭を擡て。額に著たる塵拂落し。貌を改め。落葉に對ひて。世に有がたきおん好情。おそれ入て候なり。路費をだに貸給はらば。日ならず歸國に赴くべし。さばれ一箇の難義あり。二百反の白布と。沙金を斂たる韓櫃を。舁すべき夫役なし。この義をいかゞつかまつらん。と問へば落葉は頷きて。それも愚按の侍るかし。年毎の十二月。廿二日より五日の間。この里盡頭に馬市の。建との侍るなり。翌は廿二日に侍れば。那馬市の初日なり。こゝろ得たる人に誂へて。良馬二疋を買とらせん。かくてその一疋には。二百反の布を駝せ。又一疋をば副馬として。沙金と行李を駝したるそがうへに。主從迭代りに乘るときは。道中の雜費を省く。これに優たる便利はあらじ。この議に從ひ給はずや。と世に憑しく說示す。心利たる姑の。指揮は危窮を資る良藥。無明の醉も醒ぬべき。米之介は感服して。更に亦異議もなく。數回嘆賞して。適愛たきおん計ひ。仰うけばり候ひぬ。翌その馬のいで來なば。明後は必這地を去て。武藏へ還り候はん。豫ても稟演たるごとく。なほ四五年も勤仕して。用ひらるゝとあらば。四五千貫の領地は得つべし。その折にはおん迎を。まゐらすべう候へば。斧柄と共に東へ來まして。孝養を受給へかし。倘不幸にして用ひられずは。仕を致し退隱して。

進み入り。朱之介にうち對ひて。喃朱刀禰。譬たうても譬られぬ。評判高きおん身の不行迹こ諫て武藏へ還さん。と思はざりしにあらねども。その愆を後悔して。かへる心のつくまでは。いふがひあらじと。思ひつゝ。俟得て本意あるおん身の怠狀。歸國の事を議し給ふを。聞ては今さらうちも置れず。及ずながら助言して。とくかへさんとて圍居に入りぬ。恁いはゞ烏滸がましくて。釋迦に說法。孔子に悟道の。譬にも似て侍れども。こゝらの童蒙も常に讀む。實語敎でありけん歟。童子敎でありけん歟。水は方圓の器に從ひ。人は善惡の友によるといふ。本文は何も得しらぬ。吾儕にも解しかたからで。思ひ合すると多かり。おん身が這回の愆も。わかき人をそゝのかしたる。これその友によるものならん。と心つきて改め給はゞ。濁れる水も澄ざらんや。かの人さまの人となりは。はじめは吾儕も知るよしなきを。鷹捉山よりその後まで。親切にものせられたる。人柄といひ辯者に侍れば。かゝるべしとは思ひもかけず。内祝言の媒妁に。憑みしを今は悔しく侍り。然とても人さまを。恨むは愚痴の身勝手なれば。そはそれまでと捨措て。おん身の歸國が肝要なり。信心薄きおん身にあなれば。如々來さまを侍給ふとも。拜顏允されかたかるべし。一トたび武藏へ立かへり。その行狀を改めて。心を擲ち潔齋して。出なほして又來給はゞ。やうやくにして君命を。遂するよしも侍らん。と吾儕は思ひ侍るかし。いよ〳〵歸國に決し給はゞ。路費は吾儕がともかくもせん。斧柄に出させたまへかし。

の恩。涙の雨にいと重き。頭を擡げ目を拭ひて。大かたならぬおん慈愛。咱身にとりても限りなき。幸ひにこそ侍るなれ。內祝言のその宵より。別れは豫て覺期の妹と佚。今さら歎き侍らんや。といふをさこそと母親は。左見右見つゝ頷きて。そなたのうへは心安かり。朱刀禰もかならずよ。今の心を心として。後々までも忘れ給ふな。長談義にて更爛たり。霎時なりとも休らひ給へ。といひつゝ立を朱之介は。斧柄と倶に目送りて。感謝に堪ぬ歡びの。言葉の露も冰る夜の。鐘鏘々と丑三鼓。響き幽に聞えけり。却說末朱之介は。その詰朝。乃介坊二郎に對面していふやう。今玆も既に暮んとするに。禪師は歸菴し給はず。然るを春まで俟とても。なほ覺束なきことなるに。盤纏も乏しくなりたれば。一圓武藏へ立かへりて。緯の趣を聞えあげ。その後の進退は。上の御諚に依まく欲す。さばれ韓櫃を舁すべき。夫役なければ馬に駝して。翌は這地を立去るべし。汝達も恁こゝろ得て。けふより準備をせよかし。といふに歡ぶ乃介坊二は。齊一笑て額をつき。そは思はずもよき折に。歸りまゐり候ひき。視べき所はみな觀たり。故鄉戀しく思ひしに。恁る御意を得つる事。凍えたるとき火に近つき。渴して泉にあへるが如し。然らば準備をつかまつらん。指揮を願ひ奉る。と應をしつゝその意に任して。那白布を韓櫃より。出して二籠簏に荷作りづ。莚に包みなどするに。冬の日景の短くて。けふも果敢なく暮んとす。されば落葉はこの朝。人に誂へて馬市にて。良馬二疋を買とらせ。荷鞍その餘の馬

この家を承嗣ぐべし。とてもかくても今よりして。屢時の程で候へば。みづから愛して恙なく。吉左右を俟せ給へ。これ晩生が願ひなり。といふを落葉はうち聞て。そはこゝろ得て侍れども。流るゝ水と人の久後。量り知られぬものなるに。昔に足らぬ後生の。いはるゝことを一トすぢに。憑んとのみ思ふて。斧柄を妻せたるにはあらず。いぬる比山猿に。斧柄が捉られたりしとき。おん身の資徼りせば。他豈生て還らんや。かゝれば斧柄が命根を。とり留めしはおん身の賜もの。是その恩義に報ん爲に。後覺束なき妹伕と知りつゝ。縁しを越に結せたり。かゝればおん身は河蹤へ。歸城の後に年歷ても。心に任するよしなくて。夫婦の再會かたくもあれ。斧柄は那時鷹捉山にて。死にきと思ひ諦めなば。生涯ひとりくらすとも。恩義の爲に立る操を。天道憐み給ふべし。恁いへば女才ありて。薄情に似たれども。原已とを得ざるの所行にて。情由の知れたるとなれば。斧柄も亦初より。この心にてあらんずらん。思へば奇しき因緣なるかな。吾儕がわかかりし時はしも。おん身の爹々公木偶介ぬしを。幾遍となく諫しかども。都かよひの優花を。妬むゆゑぞと思ひとられて。些も用ひられざりき。然るを今又その兒なる。おん身を諫めて武藏野へ。かへさねばならぬ時宜となりしも。親子二代の劬勞生。吾儕はとまれかゝもあれ。小夏が爲には弟なる。おん身を憎う思はんや。斧柄も心を鬼にして。泣顔見せず明後の朝は。起行を看送り給へかし。といふに斧柄は姬百合の。花ならなくに俯向て。側聞せし親

の坂を向坂と唱たり。そをこゝらなる里人は。車の前坂といふぞかし。那裡は晝も人跡稀にて。引剝に追れし人もありしなり。折々聞たるとも侍り。翌は旦開に那車野の前坂を過り給はん。心な山斷し給ひぞ。といふを朱之介はうち聞て。現那車野の前後の阪は。晩生も過りしとおりに。岡は曠野の帶に似て。松柏の繁立たる。藪澤さへあれば山賊の。患あるべき處なり。こゝろ得て候。と答る程に寢よとの鐘の。常より冴て音すなり。落葉は耳を欹て。翌は出立の早かるべきに。とく〳〵就枕り給へとて。盃を納めつゝ。ひとり納戸へ退きけり。この日朱之介が歸國の事を。里人にしらせしかば。送りゆかんといふもの多くて。煩しかりぬべし。曉かけて首途を。と落葉が豫ていひしかば。斧柄は睡らず。朱之介は。纔に就枕て呼覺され。女婢們は炊きを急がされて。なほ夜深きに起出つ。時を錯へず烹炙をしつゝ。主從三人に饌を羞めて。晝餉の割籠秣草まで。嚢に歛て出しけり。又朱之介主從は。且白布を馬に駝せ。沙金は分ちて三苞にしつ。その二苞は副馬の。鞍の左右に估と結著け。一箇は乃介に駝しなどす。副馬にも鞍下の。荷の多かるによりてなり。はや曉方になりければ。主從齊一姿を窶せし。行裝を整へて。別を告て出てゆくとき。乃介坊二は馬を牽き。朱之介は蕉火を。振照しつゝ先に立けり。これを目送る斧柄はさらなり。落葉も門に立盡したる。女婢們も共に名殘を惜める。隨涙は女子の情にぞ有ける。されば朱之介が大膽なるも。寸功なくて還りゆく。旅路は歩も進み難て。うし

具までも。遺もなく購求めて。そこらの准備も整ひければ。乃介坊二に酒うち飲して。叮嚀に欵待しけり。有恁し程に朱之介は。肚裏におもふやう。俺今猛に歸國の事を。箭五郎には告ずとも。奥手に知らせずはあるべからず。然ればとて人傳にて。奥手には憚りあり。箭五郎にのみ消息せば。奥手も必こゝろを得つべし。さはとて聽て密々に。件のよしを書寫し。事の紛れに坊二をもて。箭五郎許遣しけり。勿論回翰を請ふに及ばず。慥に遞與して來よかし。と竊に示して病坊なる。宿所を指て遣しければ。坊二は只その宿所を覺て。甚なる人といふよしも。何等の所要といふよしも。知らで病坊へ越きつ。件の手簡を奥手に遞與して。遽しくかへり來つ。扨朱之介に恁々。と報しを落葉斧柄はさらなり。女婢も乃介も知らざりけり。却說落葉は貯祿の。金二十兩をとり出して。朱之介が路費にとて。竊に斧柄に遞與せしを。朱之介は、受とりて。只管恩義を感じて巳ず。とかくする程に日の暮しかば。落葉は斧柄と共侶に。朱之介が歸國の首途を。祝して盃を薦めしかども。朱之介は愼みて。辭ひて亦多くは喫ず。斧柄は母に奬されて。泣じとすれど禁め難し。涙のやる瀨なければや。燭臺の光の屆ざる。小暗き處に侍りたり。登時落葉は朱之介に。道中の用心を。問試たる語次に。おん身這地へ來ませし折。過り給ひし歟しらず侍れど。這首より一里半許去回のかたに。車野と喚做す曠野あり。この車野の中央に。岡ありて樹木茂りたり。その岡を陟ゆくに。這方の坂を前坂と唱へ。那方

第二十四回　直行悪方加減を恣にす　晴賢竊嘗て中毒に駭く

登時前阪の樹間より。顕れ出る一個の癖者。手たる半弓投捨て。さし招き聲をかけて。未ぬし驚き怪み給ふな。咱眞夜中より和君を俟て。久しくこゝに在りしぞや。といひつゝ徐に阪を下りて。覆面頭巾を脱けるを。と見れば是別人ならず。安保箭五郎直行なり。今この綷の爲体に。朱之介はいよゝますく。疑惑ふて由斷せず。肚裏に思ふやう。原來彼奴は俺奥手と。情由ありけるを探知て。妻敵を撃んとて。且從者們を射仆して。わが身の翼を芟除き。本意を遂んと計較けん。遮莫彼奴一人を。俺爲ぞ怕れんや。なほ近つかば手は見せじ。撃れし乃介坊二が與に。怨を復さで巳べきや。と尋思をしつゝ聲ふり立て。俺從者を遠箭に被しは。山賊の所爲なりけん。と思ひしにも似ぬ蓬き擧動ひ。箭五郎和主でありしよな。恨があらば宿意を述て。雌雄を決せば武士とも思はん。然るを切所に埋伏して。弖器をもて從者們を。射て殺せしは卑怯なり。いふよしあらばいへ聞ん。欺撃にせらるべき。俺にはあらず言をかしや。と敦圉猛く罵るを。箭五郎呵々とうち笑ひて。差へりく和君の推量。咱豈怨あるゆゑに。その從者們を殺さんや、射て殪せしは和君へ忠信。こゝに未然の禍を。禳ふて和君を救ん爲のみ。譬ば和君が鷹捉山にて。那山猱を射殺して。杣木の妙を拯ひしと。是同日の情義なるを。恁ても曉得給は

と思へど馬を追ふ。榮枯得失身ひとつに。かゝる恨みのます鏡。曇らで缺し冬の月。影さへ寒き曉方の。天を瞻仰て別れけり。却說朱之介主從は。馬を追ひ里を離れて。ゆき〳〵て車野の前阪まで來にけるとき。東方やうやくしらみつゝ。月光薄くなりしかば。乃介坊二は馬を追ふて。阪を登らんとする程に。馬は二疋ながら鞋を損らして。その緒をながく引たりける。乃介坊二はこれを見て。こゝらに石の多かれば。いまだ二里には足らぬ路にて。はやくも鞋を損らしたり。いで〳〵といひつゝも。そが儘馬を牽駐めて。荷鞍に附たる易鞋を。とりおろし緒をとほして。土居て軈て前鞋を。結更つ。共侶に。立あがらんとする程に。誰とは知らず樹間より。弦音高く發つ箭に。憐むべし杖月乃介は。乳の下より脇坪まで。射られて苦と叫びも果ず。身を轉して仆れけり。是にぞ駭く坊二郎も。倶に吐嗟。と叫びつゝ。逃んとしたる程しもあらせず。ふたゝび飛來る二の箭の響きと。共に坊二は七九の兪の。わたりを箆深く射串れて。おなじ枕に臥たりけり。そが中に朱之介は。馬に後れしと一町可り。稍近つくとき從者們が。射られて即死の形迹を。見るといへども何處より。射出せし箭なりと見も認ず。仇の多少も量りかたさに。寄るとそが儘二疋の馬の。間へはやく衝と入りて。馬と馬とを盾にしつ。仇いで來なば擊とめん。と思へば騷がず刀の柄を。握り拿身を搆て。四下を睨で立たりける。什麼朱之介は今この箭面を。脫るゝや脫れずや。そはこの下に。解分るを聽ねかし。

と辭せわしく說諭せば。朱之介は怫然と。醉るがごとく醒るが如く。思はずも太息を吻きて感ずると大かたならず。人もや來ると見かへりながら。我み近づきうち對ひて。思ふに優たる御邊の才幹。いはるゝ趣その圖に當りて。先見實に差ふべからず。小生河鎚より啓行しつる頃。主君に稟せしともあり。主君も必ず這使を。よくすべきものなりとて。世に憑しく思はれしを。許多の盤纏を費しながら。寸功もなく歸りまゐらば。その罪脫れがたかるべし。よしや君侯はなほ憐みて、重く罪なひ給はずとも。老臣們は諾なふべからず。加以この年來。寵を娼みし朋輩が。折を得たりと讒言して。不測の罪に陷さん。と思ふもの多からん。其處に心のつかずして。乃者盤纏の竭たる故に。逗留難義に思ふ折から。岳母に諫められて。その資さへ得たりしかば。只管に歸國を急ぎて。この曉に立出しは。かへすがへすも淺慮の至り。御邊の好意微りせば。臍を噬むともいかにして。後悔其處に立べきぞ。感謝に堪ぬ幸なれども。從者二名を喪ひし。緣由を報ずして。柚木の宿へは還りかたかり。何處に在りて如々來禪師の。歸著を俟て素懷を遂ぐべき。この義も指揮を願ふのみ。といふを箭五郎聞あへず。そは今さらに女々しげなる。迂遠き了簡なり。禪師は菴へ歸るとも。かへらずとても今は要なし。人を用る戰國の。時に生れて志あり。才あるものがいかにぞや。纔なる祿に繫れて。既に武運の傾きたる、扇谷を戀慕ひ。悉ても果敢なき功を立て。武藏へかへらんと思ひ給ふは。老實過て時務に疎

ずや。才子に似げなきことにこそ。といはれてもなほこゝろ得ぬ。朱之介は沈吟して。然ばかり聞ては和殿の胸中。敵軈躬方軈猜しかたかり。俺が岳母の資を得て。歸國に赴くを妨して。從者乃介坊二郎を。殺せしをもて俺與に。禍を禳ふといはる。そは疑ふべく信ずべからず。いぬる比わが山猿を。殺して斧柄を救ひたる。情義とおなじかるべきや。と詰れば箭五郎冷笑ひて。原來和君はなほ迷ふて。その身の必死を知らざるのみ。然らば具に說示さん。心を鎭めて聽給へ。曩には和君。君命を稟て。這地へ來つるは何の爲ぞ。如々來禪師に佛像を。作らせん爲にあらずや。このゆゑに秋よりして。年極るまで逗留の。雜費に主君の錢財を。いくばくとなく使捨て。竟に禪師の面だも見ず。齎したりける布施物を。そが儘武藏へもて還りなば。苟にひとしき君侯なりとも。さばかりの祟なからんや。況從者には暇をとらせて。京浪速を遊歷せしめ。その身は舊緣あるに任して。里の孀婦の女壻になりしを。霎時は人のしらずとも。言の祥なきものなり。問ずかたりにいふとあらば。意にそのよし主君に聞えて。罪せられん事疑ひなし。縱はじめは君寵に。誇りし和君なりとても。一旦罪を得るに及ばゞ。君の寵愛も憑むべからず。微子瑕も終に首を刎られ。鄧通は餓て死にき。在下この義を思ふをもて。和君を死地に入らせじとて。從者二名を射て殪して。未然の禍を禳ひしは。友たるものゝ信にして。那山猿を射て杣木の妙を。拯ひ給ひし情義にも。優りこそせめ劣らんや。惑ひを霽し給ひね。

箇の尸骸を竹藪の。奥ふかく引退けて。又とり揚る半弓の。弦を外しつ鞭にして。二疋の馬を追ながら。はや前阪を横ぎりて。鷹捉の方へ急ぎけり。原るに。這安保箭五郎直行は。大内左京權大夫義興の家臣と聞えし。安保弦内直根が獨子なり。初周防にありし日は。なほ遊倅なりけるが。放蕩無賴の癖者にて。良からぬ事をせざるとなく。剩鞆峯に程遠からぬ。新室積にて奥手と喚做す。遊女にかよひ初しより。淫樂にのみ身を擲ちて。錢財を喪ふと。いくばくといふ限りもなければ。親の貯祿いへばさらなり。朋輩にも筋なき。借財の債を貲はず。果は弦内が預りの。兵庫中なる武器馬具を。竊出し典却して。その金をもて件の奥手を。贖出しけるに幾程もなくその事聞えて。罪せらるべきものなりしを。有繫に親の心よはくて。その子を罪過に殺すに忍びず。債はすべて。身に引うけ。箭五郎には盤纒を取らせて。大和の方へ落し遣りけり。これにより箭五郎は。件の奥手を携て。山口を亡命し。些の由緣を心あてに。大和の上市に落著て。軈て奥手を妻にして。六年以來病坊なる借屋にをり。里人の子共。坊買の小賭なゝどに。算筆を誨え口を餬ふて。幽なる世を渡るものなり、されはこそあれ心ざまは。取るよしもなき惡根なれども。うち見たるところ人柄よくて。佞辯利口世才あり。こゝをもて里人們は。僉欺れて且くは。好人なりと思ひたり。況落葉は箭五郎の。人となりを知らざれども。とりの内祝言に。媒介にすべきもの。渠ならではその人もなきに。鷹捉山より朱之介を。誘引

かり。和君今幸ひに。五百兩の沙金あり。且岳母の贈りたる。金もそが儘あるならん。只それのみにあらずして。二百反の白布と。この馬二疋を售るときは。又二三十兩の金を得つべし。柚木のこそを浪人の貯祿として。大諸侯に仕んと。三稔とは俟べからず。和君の發迹給ふまで。母子にはふかく隱して。在下宜舍藏べし。竊にこゝより引かへして。病坊へゆき給へ。今さら躊躇ふとかは。と毒氣を吹入む惡友に。そゝのかさるゝ朱之介は。信悅て異議もなく。御邊の敎諭は高論なり。けふより貴宅をあるじとして。祿を求めて良主に任ん。さばれ乃介と坊二們が。尸骸をこゝに棄措ば。人にしられて禍發らん。什麼何處へか隱すべき。と問へば箭五郎後方を見かへり。彼竹藪へ引もてゆきて。棄措くときは人に見られず。こゝらに狼多かれば。晝といふとも齅つけて。けふ一日に啖ひ竭さん。在下は又此馬二疋を。近鄕へ牽もてゆきて。布をも共に售潦し。よき價を得てまゐらすべし。有恁ば和君は重くとも。沙金の苞を三箇ながら。背駝ふてはやく間道より。藪屋へ赴き給へかし。人になしられ給ひそ。といふに朱之介はその議に任して。馬に附たる沙金の苞と。乃介に駄せしをも取おろせば。箭五郎も手傳ふて。索を引かけて背駝しけり。有恁而朱之介は。蹟を箭五郎に任しつゝ。笠をふかくし路をかえて。病坊を投て赴く程に。杪を離るゝ朔鳥の。聲彼此に聞えけり。當下箭五郎は。手はやく乃介と坊二郞が。腰刀を奪ひとり。衣物も血に染らぬ。襲なるは咸剝て。疊みかさねつ馬に附て。二

てかへるに漸く。安危を定めかねたるに。今箭五郎に説惑されて。亂離の人となることを思はず。渠が宿所に含藏ん。といはれしにより歡びあり。飽まで奧手と密會ふ。よすがを得たりと思ふのみ。なほその金を奪ん。と欲する箭五郎の伎倆を曉得らず。多慾薄情なるもの丶。動もすれば揣られて。かゝる圈套に陷ると。和漢今昔に尠からず。こを鑑て誡むべし。閒話休題然程に朱之介は。竊に箭五郎許赴きて。奧手にあふて。歸國の念を。斷てかへり來つる事。且箭五郎にいはれたる。縡の趣慇々と。有つる儘に囁き示して。三苞の沙金を預けしかば。奧手は笑つゝ受取て。そは歡しきことに侍り。三稔五稔なすとなくて。光陰を送り給ふとも。貯蓄價きおん身にあらねば。何事も後やすかり。いつ〳〵までもわが宿に。をはせしかし。と慰めて那編室にて茶を看め。早飯を羞めなどしつ。爾後は又何をかしけん。舟底形の木枕の。折々轢る音のみして。日の闌るまで相譚けり。有恁し程にあるじ箭五郎は。東野の前坂にて。朱之介に別るゝとき。いひつるごとく那馬二疋を。何處へか牽もてゆきけん。二百反の布はさらなり。馬をも行李さへみな沽却して。かへさに美酒一罇と。殽も種々買とりしを。人にもたしてかへり來つ。將て來し人を門より返して。奧手に酒を盪めさせ。その餘の事も恁々と。辭せわしく分付て。扨編室に赴きて。朱之介に對面し。布をも馬をも皆售しに。豫て直踏をしたるに違はず。三十餘金になりたりとて。件の金を懷より。とう出て遞與すに朱之介は。受取てこれを勞

來つる好もあれば。竟にその望みに任して。媒介にしたりしより。禍蕭墻の内に起りて。後の恨みとなると多かり。かゝりし程に箭五郎は。いぬる比はからずも。柚木の落葉が朱之介と。舊にし事を相譚て。迭に素生を說示せしを。初より竊聞して。朱之介が五百兩の。沙金を奪したるとも。盤纒も許多あるべきよしを。具に知て竊に歡び。推て斧柄と婚姻の。媒介になりて好を結び。朱之介には殊更に。いと親しくもてなして。遂に病坊なる宿所に引入れ。酒を薦め賭に耽らして。その盤纒を奪ふに及びて。渠に後悔わらせじとて歟。知りつゝ奥手に密通させしはこれを。釣らんと欲するとき。且香餌を投るといふ。漁父の手段に似たりしを。朱之介が俗才ありて。且奸智に長たるも。年少ければこれを悟らず。いぬる夜落葉に諫られて。武藏へ還らんとするに及びても。なほ奥手を戀憐して。渠に別を告ん爲に。箭五郎に消息して。歸國のよしを知らせしかば。箭五郎はなほ飽かず。這回朱之介が河踰へもてかへる。沙金白布をも物せんと思へば。その夜先たちて。車野の前坂なる。邊に來つゝ伏蔵れて。兩個の從者を射て殺し。朱之介には利害を述。思ひの隨に說惑して。歸國を禁めて病坊なる。宿所に舍藏んとて遣せしは。豫て計較あればなり。こゝに至て朱之介は。進退すべて小兒のごとく。みづから尋思に及ばずして。緯みなその意に任せしは。これも亦故なきにあらず。歸國は朱之介が情願ならねど。落葉が意見に從ふて。猛に這地を立去るものから。竟に寸功なきをもて。逦邅とし

父なりける。大内入道道頓を主君と仰ぎて。山口の城を攻んと議する程に。その事はやく發覺れて。弘直は誅せられ。その子二尾加賀四郎弘景は。大赦にあふて一命を助けられ。遂に追放せられたり。これよりして後加賀四郎は。本州比曾寺の郷に落着て。地方の郷士になりけるが。父弘直の貯藏たる。軍要金許多ありければ。その身他郷にさそらひても。今に至て貧しからず。田園を多く購求め。且里人に金を貸て。貨殖に賢きものにぞありける。那加賀四郎は在下が。母方の族なるをもて。父子倶に疎からず。因てその子復四郎を。在下に從して。算術を學したり。渠には交り給ふとも。影護きこともなく。親は豪家で候へば。おん爲になるとあらん。那復四郎が來るとあらば。勸めて倶に楊弓の。敵手になさば興あるべし。と眞實だちて説示す折から。窻の障子に鳥影さして。那復四郎が來にければ。箭五郎は手をうち鳴らして。奇なり妙なり。と稱へつゝ。軈て編室へ招きよせて。朱之介を引あはせ。二尾刀禰。この方ざまは。京家の某甲との丶嫡子なるが。繼母の讒によりて家を追れ。この地に閑居し給はんとて。某を賴み給ひき。この方ざまの大人は某舊交あるをもて。その意に任して留まゐらせたり。さばれ閑居の徒然を。慰めまうさん術なさに。那庭訓往來にも。正月には雀小弓の。舊事あるを思ひよして。揚弓をもてながき日を。消させまゐらせんと欲するに。爾るべき社友なし。和殿は咱舊族にて。よそ〳〵に隔あるとなければ。この敵手には究竟なり。けふより遊戲の夥計に入りて。わ

ひ。その金を十兩許。分ちて且當分の。食料にとて贈りしを。箭五郎は左右なく取らず。そは過たりとて推辭つゝ。やうやくにして收めけり。是より例の酒燕になりて。獻つ酬れつ相勸れども。外を憚るよしあれば。うち笑ふにも聲をたてず。況奥手に三絃を。彈するとなどはなかりけり。折から歳暮なりければ。朱之介はその次の日に。あるじ夫婦の被衣はじめにとて。又五兩の金を出して。これを奥手に贈りしかば。奥手は豫て欲かりし。流行衣裳を新しく。剌立て春を迎たる。正月は貴も賤きも。迭に交加ひ壽きて。なか〱にいそがはしきに。朱之介は彼編室に。垂籠てのみをるを。箭五郎は慰めかねて。京へゆく人などにや誂へけん。楊幹弓一具三四張を。何の程にか買とりつ。これを朱之介にすゝめていふやう。垂籠てのみをはさすとも。背門に空地の候に。大的などを射給はゞ。保養に宜しかるべけれども。外に出給はゞ人にしられて。柚木の母子に聞えやせん。これも亦影護かり。這楊弓は家の内にて。弄ぶに便よければ形のごとくに准備をしたり。在下が敵手になるとても。只二人では興なは薄かり。こゝよりは程遠くもあらぬ。比曾寺地名なりの郷士の子に。二尾復四郎弘澄と喚るゝ少年あり。和君には二才ばかりの。弟にておはすらん。聊在下と舊緣もあり。然らでも算術の弟子なれば。生平に親しく來つるなり。扨件の復四郎が祖父は。大内政弘ぬし義興の父の被官なりける。二尾加賀守弘直これなり。往る文明の初年。弘直は。主を怨るよしありて。猛に謀反の聞えあり。政弘主の伯

とり復さんと欲すれども。復四郎には優れるのみ。ひとり箭五郎に掻攫れて。落葉が取せし二十兩も。白布と馬の價の。使殘れるをも抓出して。纔の程に喪ひければ。いよ〳〵まけじ魂の。今さらに已がたくて。又那沙金を發して。使んと欲するに。箭五郎がいふやう。沙金百兩は。圓金五十兩に當れり。なれども這地方では通用せず。京の三條わたりへもてゆけば。時價宜しと聞たるのみ。路遠ければこれも詮なし。さばれ發賃をだに致ひ給はずは。咱もてゆきて發する家あり。おん身の隨意ならんかし。といふを朱之介は聞あへず。發價は俺決して厭はず。とく發して給ひね。と憑て奥手に預け措きたる。沙金一包をとり出させて。そが儘遞與すを箭五郎は。苞を解て包の數を。撿めて受とりつ。何處へかもてゆきけん。俟こと二晌あまりにして。圓金に換てもて來にければ。朱之介は歡びて。心つよしと思ひつゝ。いよ〳〵日々に楊弓を。射れども〳〵生憎に。正鵠はとにかく稀なりけり。以あるかな件の楊弓は。箭五郎が豫て伎倆あり。竊に細工人に誂へて。朱之介と復四郎に。授けし弓には機關ありて。彎固めても發ときに。狂はずといふことなく。箭も亦頭に鉛を籠て。落るにはやくしたりしを。這少年們は楊弓の。精麁をいまだ認らざりければ。その奸計に陷りて。朱之介は沙金をさへ。二三百兩喪ひつ。復四郎も親の財を。二包金あまりもち出して。果敢なく箭五郎の有にしてけり。こゝをもて箭五郎は。日々に奢ると大かたならず。三たびの膳にも珍味を盡して。一夕も酒燕せざる

が與に這客人を。慰め給はゞ幸ひならん。勿論世を潜ぶ人にをはせば。外にな洩し給ひそ。と實しやかに説示すを。復四郎はうち聞て。一議に及ばず唯諾をしつゝ。朱之介と名對面して。寒暖を演安否を諳ね。迭に四面八表をうち譚ふ程に。箭五郎は縁頰に的を建。花莚を布渡して。准備はやくも整ひければ。主客三名並坐して。楊弓を射て優劣を。相試て興すれば。奥手は箭を揺り茶を看め。果は又酒を薦めて。復四郎をも欵待しければ。復四郎は遊戲を歡ぶ。少年輩の癖なれば。是より後も親には隱して。算術の稽古に假托け。日毎に來つゝ朱之介等と。倶に楊弓を射たりける。有恁而五六日を歷る程に。有一日箭五郎は。朱之介復四郎等と相譚ふやう。恁日々に遊びくらせば。樂しからぬにあらねども。各々おなじ事をして。勝ても負てもその甲斐なければ。竟には飽て興盡ぬべし。年毎の正月には。いともかしこき禁庭にも。賭弓を叡覽あり。贏たるものには錢を賜ふて。賞せらるゝと聞えたり。有恁ばけふより俺們も。賭弓にして興を添てん。この議はいかゞ。とそゝのかせば。朱之介も復四郎も。しかるべし。と應つゝ。迭に數を定め。輸物を出して。終日輸じと射るものから。朱之介と復四郎は。左に右に正鵠稀にて。黄物を失ふと少からず。素より這兩少年は。いづれも武藝に疎からず。就中朱之介は射る技の人に捷れて。百發百中の修煉ありしを。楊弓は又格別にて。這回はじめて手にとれば。や。罕にも贏とを得ざりしかば。且羞且揣たらて。輸物を推のばし。只一日に屬日の。不覺を

にかはらず管待しけり。既にして箭五郎は。略るべきものはとり果つ。今はよき比なるべし。と思ふ心を色にも見せず。有一日朱之介に對ひていふやう。在下は要事ありて。翌は平城へ赴くなり。一兩日は逗留すべきに留守を憑み奉る。徒然にをはすべければ。是でも閲して慰めたまへ。といと正首によしを告て。きのふ上市なる。骨董店にて買とりたる。太秦の草紙の書卷物と。源氏物語の缺寫本の。纔に五六冊ありけるを。そが儘とう出て貸にければ。朱之介は受歡びて。そは何事か知らねども。疾ゆきてはやく還らせ給へ。今は日蔭の俺身にあなれば。留守にも役には立がたし。さばれ賊難の防禦には。狗に優とありもやせん。と應つゝ呵々とうち笑へば。箭五郎も亦うち笑ひて。奥手にも云云と。留守を委ねつ。その詰朝。宿所を出て八重櫻。まだ咲ねども名にし負ふ平城を投てぞ急ぎける。然程に朱之介は。去歳の暮より安保が宿所に。躱居れども折の歹くて。家あるじは外に出ず。楊弓を射て共侶に。遊びくらしたりければ。奥手とゝけてうち譚ふ。暇だになかりしに。はからずも箭五郎は。平城に所要のあればとて。今朝とく出てゆきしにぞ。幸ありけりと歡びて。且兩個の女婢們には。東西をとらせこゝろを得させて。酒をも沽べし。殽をも。買もて來よとて出し遣し。驅て奥手を褊室へ。招きよせ披著て。日ごろいはまく思ひし事を。いひもしつ聞もして。うち譚ふと半晌ばかり。夜艾までは俟わびしかりけん。そが儘倶に轉宿の。夢を且く結ぶ折から。何の程にかかへり來にけん。

となく。奥手には髪の飾に。玳瑁をもて頭を葺せ。衣裳には和漢を論せず。價貴きをのみ被せて。朝より粧り琢せ。猛に女婢二名ばかりを養着て。その一人には薪水の事を掌らせ。又一人には楊弓の箭をとらせ。盃盤調度に至るまで。思ひの隨に買とりて。忌憚るとなかりしかば。間近き里人們はこれを見聞て。驚き怪まずといふものなし。左右する程に。復四郎は親なりける。二尾加賀四郎弘景は。これらのよしを傳聞て。驚き怒ると大かたならず。緊しくその子を穿鑿せしかば。復四郎は隱むによしなく〳〵。頃者安保の宿所にて。楊弓を射たりしより。思はず財貨を喪ひにき。その故は箇樣々々。と有のまゝに報たりければ。加賀四郎いよ〳〵怒りて。那箭五郎奴が放蕩なる。周防を亡命したる比。遊女をさへ携て。咱を憑て來にければ。咱舊縁をおもふをもて。且く宿所に留措き。隣郷に家を求めて。移徙させて六七年。人なみに世を渡れるは。抑これ誰が庇ぞや。有恁る恩義をはやくも忘れて。年なほ少き復四郎を。そゝのかして悪事に引入れ。許多の財貨を喪はせしは。只是騙兒の手段に等しき。言語同斷の光棍なり。その義ならばせん術あり。必思ひしらしんず。と罵りつ敦圉きて。復四郎をばそが儘に。緊しく一室に拘籠て。縡の准備を急ぎけり。然程に朱之介は。復四郎が來ずなりしより。敵手足りざれば興さへ竭て。又楊弓を射んと欲せず。よしもなき遊戯に耽りて。貯藏をみな失ひつ。沙金も纔になりたるを。今さらに後悔して。鬱々として在りけるを。奥手は竊に慰めて。はじめ

次の巻に。解分るを聴ねかし。

近世說美少年錄第三輯巻之二 終

思ひがけなき箭五郎が。緣頰の障子蹴放ちて。奸夫淫婦を見出したり。其處動くなと罵りて。登走蒐れば朱之介。奥手も共に吐嗟とばかり。胸を潰しつ怕慌て。起んとせしを起しも立ず。しかゝれる手と膝をもて。聢と押えて準備の索を。腰よりはやく手繰出して。朱之介と奥手をも。犇々と綁て。左右へわかちて緣頰なる柱へ緊しく繫ぐ程に。酒と殽を買もて還りし。兩個の女婢們は這爲体に。駭怕れて逃んとせしを。箭五郎急に呼とゞめて。若們怕るゝとなかれ。そはよき東西をもて來たり。とく〳〵酒を盪めて。咱に喫せよ。といそがしつ。軈て件の酒殽を。飽までに飲啖ひけり。誠や恥をしらざるものも。敗れに及てその非を悔るが。なべて人たる甲斐にしあれば。奥手は勸解とも宥されがたし。と思ひたりし歟ものいはず。朱之介は箭五郎を。つく〴〵と見かへりて。安保ぬしさぞ憎みても。惡み飽なく思はれんが。色は深念の外とぞいふなる。俺愆は今さらに。いひとく〳〵よしのなけれども。素より交り淺からざりし。好に顧て命を助けよ。然らば他鄕へ赴きて。ともかくもならまく欲す。願ふは索を解きてよ。と輙つを箭五郎冷笑ひて。這密夫奴が何をかいふ。わが身舊里に在りしとき。夥の金を擲ちて。親に勘當せられしも。皆そのをんな故なるに。そを偸れて阿容々々と。宥していなす法やある。立野の陣所へ訴て。素頭を刎させん。覺期をせよ。と敦圉て。その儘奥手と朱之介を。籃輿に乘し人に舁して。立野の陣所へ將てゆきけり。畢竟朱之介奥手等が。罪の決斷甚麼ぞや。そは

偕に挙入れつ。找み對ひ額をつきて。姓名を告よしを述て。懐にしたりける。訴書をまゐらするを。一個の有司受とりて。高やかに讀にけり。順政ぬしうち聽て。やをれ箭五郎。汝は何等の好ありて。朱之介を留め措たる。抑他は何處のものぞ。と問れて箭五郎頭を擡。さン候這朱之介は。武藏より來つる旅客なり。在下交遊の好あるをもて。宿所に留措き候ひしに。荊婦奥手と密通したる。絆既に分明なり。よりて那奴們が密會の。折を覘ひ挫きて。形のごとくに細めつゝ此彼倶に推累ねて。蹴累さんは輙けれども。守この處にましませば。そを私に罪なはず。明々地に訴まつりて。御刑伐を願ふものなり。這奴等が頭を刎ならべて。怨を釋させ給へかし。と稟すを順政うち聞て。又朱之介と奥手に對ひて。今箭五郎が稟せしごとく。汝等は密通したるに。素より相違あらざる歟。と問れて羞たる朱之介は。早には答難たりしを。奥手は阿容たる氣色もなく。膝を找めてまうすやう。御諚では侍れども。賤妾は素より朱之介と。不執せしとはあらずかし。良人は今朝しも平城のかたに。所要ありとてとく出つ。婢們は物買に。出たる隙に朱之介が。賤妾を拘へて挑みつゝ。聽ずは縊り殺さん。といはれしに術もなく。有繋に命の惜しければ。僅にその意に任したる。折から良人のかへり來て。絆のこゝに及べるのみ。一旦他に從ひしは。實情ならず侍れども。その情由には證据なく。會ぬるとのみ良人に知られて。怒の烈しかりしかば。いひとくとも聽れはせじ。と思ふてその綁を。受つゝ口を鉗み

近世説美少年録第三輯巻之三

東都　曲亭主人編次

第二十五回　訟を聴て順政賊情を知る　媚を陳て落葉恩謝を乞ふ

再説。安保箭五郎直行は。奥手と朱之介を綑て。籃輿に乘し人を傭ふて。舁して立野の陣所へとて將てゆくに。よしを里長にも告知らせず。又四下隣なる里人にも。この趣を告ざりしは。慭に和解られて。繂の障りになりもやせんと。豫て思ひしによりてなり。この時大和の國主なりける。陽舜坊順政は。（榮舜坊順昭の嫡子なり順政一に順勝に作る。）彼此なる吏の邪正と。民の愁訴を知らん爲に。みづから封内を巡歴して。且く立野の陣所に在り。こゝにて越年せられしかば。箭五郎は件の訴に。遠く本城に赴くに及ばず。輙て陣所へ將てゆきて。繂恁々と聞えあげけり。然程に國守順政ぬしは。この日民の訴を聴果て。はや退かんとせられし折。有司又箭五郎が稟せしよしを。箇樣々々と告るにより。その儘問注所に著坐あり。雜兵をもて箭五郎を。坪の内へ召入れさして。訴訟のよしを尋らる。登時箭五郎は。索拿つめて坪の内へ。朱之介と奥手をも。共

な箭五郎に。御教諭ありて納得せられば。ことなくて守のおん慈悲ならん。只管願ひ奉る。と思ひ入りつゝまうすにぞ。順政ぬし頷きて。箭五郎彼を聞たる歟。朱之介は貯藏の。沙金二百餘兩をもて。汝に納て身の罪を。贖んとて願ふなり甚麽この義を允すや。と問れて箭五郎思はずも。含笑ながら額をつきて。こは有がたきまで辱き。御諚を承り候ものかな。世に男子たるものが。妻を強姦せられては。忍びがたき情由なれども。朱之介はその愆を。悔てみづから新にせんとて。沙金二百餘兩を納て。罪を贖んとまうすをも。なほ執念深允さずは。守のおん旨にも悖るに似て。いともかしこく候はん。その義に相違なきものならば。ともかくもつかまつらん。なほ御教諭を願ふのみ。といふをうち聞く順政ぬしは。笑つゝしば〳〵頷きて。しからば是箭五郎が。怨訴は既に平ぎぬ。恪ては向後いひ品なきや。とふたゝび問れて。さン候。沙金を遞與すに相違なくは。何しにいひ品候べき。和譚に變改候はず。と答まうせば順政ぬしは。忽地聲をふり立て。やをれ箭五郎。汝はいひ品なしといふとも。われはなほ許容しがたき。一條の罪科あり。誰かある。這奴をはやく綁めよ。と烈しき下知に雜兵四五名。齊一阿と應つゝ。左右一度に走り蒐りて。はや箭五郎を横倒し。押へて索を被しかば。箭五郎大く駭慌て。在下犯せし罪あらず。といはせも果ず順政ぬしは。呵々と冷笑ひて。いかでか汝に罪なかるべき。汝はいぬる比よりして。比會寺の郷士。二尾加賀四郎が獨子なる。復四郎といふ少年を。

たり。かの折一時の怒りに任して。倶に憎しと思ふとも。年來賤妾が心操は。箭五郎ならで誰か知るべき。垂乳母にも優すおん慈悲もて。この義を質させ給へかし。といひ瞞るを側聞する。朱之介は驚くまでに。いと淺ましと思ひたり。且して順政ぬしは。又箭五郎にうち對ひて。目今奥手が陳せしよしを。汝も具に聞つらん。思ひあはするよしなきや。と問れて箭五郎頭を傾け。寔に奥手が稟せしごとく。他は年來操正しく。貳こゝろなきものなりしかど。朱之介に手籠にせられて。強姦せられたりける歟。その義は覺期仕らず。適守のおん威勢もて。朱之介に問せ給はゞ。虛實定かに候はん。といへばさこそと順政ぬしは。頷きつ佶と見かへりて。やをれ朱之介。汝は一時の出來心もて。理なく奥手を犯せし歟。些も隱まで首伏せよ。この期に及て詭飾らば。骨を拗ぎて實を吐せん。有つる儘に稟さずや。と緊しく問れて朱之介は。思はず咨嗟嘆しつ。跪きつゝ稟すやう。仰うけばり候ひぬ。奥手はそのこゝろより。在下と相歡びて。從ざりきとまうすとも。既に枕を並べては。五十歩逃て百歩を笑ふといふ。諺にも似たるべく。何の方にも密通の。惡名は雪めかたかるべし。然ばとて操正しとて。譽らるゝ他妻を。這身と倶に罪なはれなば。寔にこれ不便の事歟。よりて願しき義の候なり。在下が盤纏の爲にもて來つる沙金二百兩あまり。箭五郎の宿所にあり。この金をみな箭五郎に。贈りて罪を贖はゞ。操正しき奥手はさらなり。在下も亦罪を免れて。他郷へ赴くことを得つべし。いかでこの義

介が。美少年なるをもて。辭ふとなく歎待したれば。朱之介はいよ〳〵惑ひて。多く財寶を擲ちたり。しかれども用遣せし。沙金はなほ二百兩あまりあり。それをも畧んと計りしかども。復四郎が來ずなりては。彼技をもて奪ひがたかり。他が奥手と密會ひぬる。折に捕へて奪ふべし。と思ふものから他が金を。日ごろ畧りたる人情も候へば。大宅沙汰にあらざりせば。他に彼沙金をもて。罪を贖せんと欲するとも。術剛くいひがたき所あり。然るを訴出るに及ばば。渠が怕るゝよしもあれば。專立地に成るべし。と深念をしつゝ里長にも。知らさで御陣所へ將てまゐりし甲斐に。豫て計りし胸に差はず。朱之介は彼沙金をもて。罪を贖んと願ひしば。既に十二分の歡びあり。金を奪ふて追出さん。と思ひしはそらたのめにて。明なると曇にざる。鏡に等しき憲斷にて。伎倆をはやく察せられ。臆二尾加賀四郎が。訴によりて良らぬ技を。なしゝとさへ發覺れしを。知ざりけるこそ愚なれ。その罪萬死に當るといへども。大慈大悲の大御心もて。恩赦の御沙汰ましませば。歹き心を新にして。良民となり候はん。とかなし細にて遺もなく。伎倆を首伏したりける。順政主うち聞て。有恁ば夫婦熟合て。計りしよしは箭五郎が。既にはや首伏したれば。重て奥手を責るに及ばず。且病坊なる里長と。故老の里人們を召聚へよとて。猛に雜兵們に下知ありしに。彼裡の里長里人們は。箭五郎が云云の。情由も知らさで女房奥手と。密夫を縛めて。立野の陣所へまゐりしよしを。後に聞つゝ皆驚きて。

欺きつ引入れて。賭に事托てその財寳を。許多掠畧たるよし。復四郎が親。加賀四郎が愁訴によりて。その事初て聞えたり。因て汝を搦捕して。鞫問せんと思ふ折から。汝は密夫を訴出て。みづから。こゝにまゐりしかば。旦那一義を閣きて。その訴を聞試しに。その情夫婦構賊にて。朱之介が所持の沙金を。奪ん爲に妻の奥手に。密通させしものなるべし。有恁ば這朱之介をも。良からぬ技に引入れて。その錢財を掠畧り。遺れる金をもみな奪ふて。追出さんと計較たる歟。これも亦知るべからず。今飽までに毆懲さずは。いかにしてその實を吐くべき。笞を當ていはせよ。と辭烈しく下知せられたる。雜兵們は承りぬ。と應つゝ箭五郎を。推伏せつ登し蒐りて。笞を揚て二三十。背をいたく毆しかば。箭五郎は皮破れ。鮮血流るゝ苦痛に得堪ず。絶もしつべき聲ふりしぼりて。まうしあげ候はん。笞を放し給へかし。と叫べば雜兵手を止めて。掖起して推居たり。當下箭五郎は。やうやくにわれにかへりて跪きつゝ。稟やら。守の御明察に違ふとなく。朱之介は盤纏を多く。もてる旅客で候へば。淺からず交りて。遂に宿所に留措き。しば〳〵良らぬ技を薦めて。その金を畧り候ひしに。敵手足らざる故をもて。那復四郎をも引入れて。箇樣々々に欺きつ。又彼者の有財も。多く手に入り候ひしは。胸算用の外にして。張公酒を喫すれば。李公も醉ひき。といへるがごとく。重中で候ひき。されば縡の初より。女房奥手と諜し合して。色をもて朱之介を。とり留たれば疑れず。奥手も亦朱之

おもふに汝は盜賊歟。然らずは必敵國の。間諜者にてあらんずらん。鞭撻懲して首伏させよ。と敎圍き悍く下知せしを。有司們霎時と推禁めて。おそる〳〵諫るやう。日ははや西に淪みしに。這罪人の譴責は。けふのみに限るべからず。生平にも倍して昍るまで。訟を聽し召れしかば。御疲勞もさぞあらん。今宵は獄舍へ遣して。後日に御詮議あるべきのみ。この義を願ひ奉る。と稟すを順政主見かへりて。然らば彼奴も禁獄せよ。その餘の事は恁々。と叮嚀に宣掟て。この日の廳は果にけり。然程に。箭五郎夫婦と朱之介が。立野の獄舍に繫れたる。繹の風聲隱れなく。はやく上市の鄕へ聞えしかば。斧柄は駭きうち歎きて。思ひ難つゝ母にいふやう。咱所天の禁獄せられしといふ。風聲を聞給ひし歟。われは空になでし給ひしに。いふ甲斐もなく武藏へは。かへらで安保に倡引れけん。彼人許潛居て。又禍を釀しつゝ。その身の破滅に及びしは。自業自得といはまくのみ。しかはあれども妹と脊の。緣しを結びし恩義をおもはで、能はぬまでも救はずは。人たる道に缺なまし。作麼何としてよからんや。と問つゝも目を押拭へは。落葉は聞つゝ領きて。然なり。彼人の風聲は。吾儕も詳に聞たれば。淺ましき事限りもあらず。左さま右さま尋思しつゝ。救んところを思ふなれ。現彼人の薄情なる。慾の爲にはその身の安危も。思はぬ烏滸の白物なりしを。只一旦の恩義に感じて。はや〳〵儞を妻はせしは。うたてや人を知らざりし。吾儕の淺慮。そなたの薄命。箭五郎といふ奧手といふ。睛の寄る方へ目

恁る事のあるときは。里長と四隣のものが。必且扱ふて。然でも和談の整はずは。守へ訴まつれるが。なべての里の恒例なるに。彼人一時の怒りに乘して。人にも告ず訴出しは。短慮の至り是非に及ばず。遠くゆかずば追留んとて。里長里人共侶に。迹を慕ふて立野なる。陣所まで來にけるを。知れるものありて箇樣々々。と這時聞えあげしかば。順政則里長と。故老のものを召よせて。箭五郎が罪戾の趣を恁々と說示して。這の箭五郎が宿所には朱之介が沙金二百餘兩と。二尾復四郎を欺詐りて。掠略たる錢財の。使用殘れるもなはあらん。そは汝等に預るなり。迭代に渠が宿所を。戍りて失ふとなかれ。と嚴に下知せられしを。衆皆齊一言承しつゝ。家路を投て退りけり。有恁而又順政ぬしは。雜兵們にこゝろ得さして。且箭五郎と與手をも。獄舍に遣し繫せて。拘遣されてついゐたる。朱之介をつら〳〵見て。汝は武藏の旅人といへれど。何の里の人氏ぞ。いふとも詳に報げず。原是何等の所用ありて。這地に來つゝ逗留したる。且沙金は本州にて。通用せざるものなるに。許多齎したるも不審なり。その身の素生と沙金の來歷。その餘の事も具に稟せ。とくいはずや。と譴問れたる。朱之介は困じ果て。跪きつゝ陳ずるやう。彼沙金には來歷あり。這身の素生も疑しき。ものにては候はねど。さしも憚るよしあれば。明々地には稟しがたかり。この義は許させ給へかし。といはせも果ず順政ぬしは。眼を瞋らし聲苛立て。沙金の由來もその身の素生も。隱すは不正の情由あらん。

ぞでなは少年の思慮淺くて。伎倆の罠に被られけん。これも亦不便に侍り。出處正しきものにして。落葉が女壻で侍るよしは。里正を初として。里人們も皆知れゝば。それを證人として願ひまつりぬ。あはれ恩赦の御沙汰をもて。朱之介が禁獄を。免させ給へ。とねがふと。兩三回に及びけり。かくて又。落葉は獄舍へ日毎々々に。食物を餽遣して。恩免を願ひまうせし。その趣は恁々と。密やかに告しかば。朱之介は歡びて。爾後素生を責問れしとき。落葉が聞えあげたるごとく。招道に及びしかば。やうやくに疑ひ解けて。原來盜賊にもあらず又敵がたの間諜者にも。あらざりけりと定められて。その罪輕くなりにけり。有恁而又。箭五郎奧手も呵責を稟て。その餘の惡事を問れしかども。嚮に朱之介と復四郎を引入れて。賭を事とせし外には。犯したるとあらずといふのみ。彼車野の前阪にて。乃介坊二郎を射て殺したる。そこらの事は知れる人なく。箭五郎も朱之介も。死を極めていはざりければ。竟にその事露れず。然けれども箭五郎は。その惡事騙賊に等し。首を刎べしと議せられしに。順政ぬしの母君の。病て久しく瘥り給はず。この比重らせ給ひぬとて。封內に赦を行れて。五逆と人を殺せしならねば。追放すべしと下知せらる。これにより箭五郎も。猛に死刑を宥められ。他が家財を籍て。沙金二百餘兩と。朱之介が行衣腰刀は。そが儘落葉に賜りつ。この餘の錢財と。家具衣裳の多くありしを。二尾加賀四郎に賜りて。その損財を補せ。復四郎には。その愆を。咎めて。意狀

子もよる。これに就ても世間に。人たる人は稀なりけり。とばかりにして人の不實を。怨みて仇の思ひをなさば。共に不實の人となりてん。人の心はとまれかくまれ。今一回救ん。と思ひにければきのふ竊に。里正刀禰と故老達に。うち相謂つ願書を。立野の御陣にもてまゐりて。命乞をせん爲に。准備大かた整ふたり。翌は夙早て立野へ參りて。恩赦を願ひ奉らん。心がゝでも人は又。命運によるものと歎いへば。果敢なきことを思ひ屈して。病な煩ひ給ひそ。と慰められて又袖濡らす。斧柄はいとゞ胸苦しくも。有恁る時すら脱落なく。雄々しき親の計ひを。且感じ且歡びて、又いふよしもなかりけり。有恁而その詰朝。落葉は里の故老們に。伴れて。立野の陣所に赴きつ。扨問注所に告訴して。緣由を稟すやう。這回禁獄せられたる。朱之介は落葉等が。舊緣あるものにして。武藏の河蹊より來にければ。迺宿所に留おきて。女兒斧柄を妻はせたり。又他が齎したる。沙金如干兩は。河蹊に施主ありて。如如來禪師に請まうして。佛像許多造らんとて。曩に朱之介が這地に來つる。便りに就て件の金を。齎せしよし聞えしかども。禪師の菴にましまさねば。又いかにともせん術なさに。一たび河蹊へ立かへりて。よしを件の施主に報て。沙金を返さんといふにより。その意に任して起行せしに。箭五郎が惡心にて。竊にその路に出て抑留め。さまぐ\に誘へて。宿所に藏措にき。と世の風聲に聞え侍り。他が惡友に倡引れて。暗からぬ身を暗くしつ。良からぬ技に耽りたる。その罪免れがたく侍れ

かねしを。斧柄はさこそと慰めて。夕膳を羞めたる。管待日ごろにかはらねば。朱之介はいよいよ恥て。この身を日景の雪にして。消も失よと思ひけり。有恁而その甲夜の間に。落葉は朱之介を召近つけて。斧柄をも側に侍らせ。且恩赦の歡びを。演て四下を見かへりつゝ。聲を微めて捌いふやう。朱刀禰諫め甲斐もなかりし。再度の愆を今さらに。咎めて云々といふにはあらず。わかき人の浮氣なる。世にも多かるとながら。それには大く品かはりて。おん身の放蕩は筋歹かり。憑しからぬ女壻なれども。女兒の必死を拯れたる。恩を思へば今一トたび。骨を折んと思ひつゝ。斧柄と倶に神に祈り。佛を念じて立野の御陣へ。幾回となく參りつゝ。願ひまうせし誠届きて。志は致したり。恥を思はぬ性なりとも。これに懲ざるとやはある。その心をだに改めて。信ある人になり給はゞ。おん身一巳の幸のみならで。吾儕母子の福ひなり。なほ又思ふよしもあれば。今茲一ト稔辛防して。氣ながくこゝにをはせよかし。さばれ心もとなきは。かの乃介とやらん。坊二とやらんの事に侍り。件の兩個の從者の。往方を詳に聞まほし。いかになりたる。甚麼ぞや。と問詰らるゝ朱之介は。はやうち騒ぐ胸を鎮めて。さらぬさまにて頭を擡。實の親も及がたき。かさね〳〵し慈悲鐘愛。骨に徹り膽に銘じて。有がたきまで辱くて。感涙の外は候はず。このうへながら行狀を。愼みて這洪恩を。復しまつらんと思ふのみ。謂に武藏へ還らざりしは。那惡友に說惑されて。なほも禪師の歸菴を俟て。君命を達せずは。

をたてまつらせ。女婢二名には。身の暇を取らせよとて。家は借屋たるをもて。その家主に返し賜り。扨二尾加賀四郎と復四郎と落葉并に。比曾寺上市病坊なる。里長と里の故老を召聚へ。罪人恩赦の趣を。云云と宣示して。朱之介は罰杖三十と定められ。背をいたく鞭撻して。そが儘落葉に遞與給はり。奥手も亦罰杖三十にして。もてその向後を懲され。箭五郎は笞の數。一百毆れて奥手と倶に。大和を追放せられけり。抑本州の守順政主は。その先祖。南都の寺家より發起て。彼此を討靡け。その父順昭の時に至て。大和一國を平均せしかば。威勢隣國に盛なり。然けれどもその家門。素より長袖なりければ。戰國にはいと稀なる。刑罰を寛して。しば〳〵恩赦の聞えあり。よりて箭五郎朱之介等は。再得がたき頸を續れて。剩朱之介は障もなく。岳母落葉に遞與されけり。大赦は君子の不幸にして。小人の幸ひなるよし。古人のいひけん以あるかな。と識者は竊に評せしとぞ。閒話休題。却說落葉は。加賀四郎等の後に跟て。國守の恩を拜謝しつ。朱之介を受とりて。退出て軈て准備の籃輿に。乘して笞瘡を勦らせ。里正里人と。つれ立て。上市の宿所にかへり來にければ。斧柄は歡び。出迎て。衆人を勞ふ程に。送り屆し衆人は。里正と共侶に。歡びを述別を告て。皆動搖々々と出てゆきけり。登時落葉は斧柄と共に。朱之介を勦りて。奥なる子舍に休はせ。湯液を與へなどするに。朱之介は幸ひに。笞瘡は痛まねども。面目なさに弱り果て。只その恩義を謝するのみ。いふべきこともいひ

帚除。戸の開閉も人手をまたず。或は糸縢の出納。小使錢の日記などを。總てその身の務にして。聯家事を資けゑかば。斧柄はさらなり落葉さへ。愛歡びつ今番は。いひがひありきと思ひけり。然ははじめは朱之介を。大く譏りし里人們も。落葉斧柄の儔稀なる。慈善貞實。義理に督しき。心操を傳聞て。感嘆せざるものゝなければ。朱之介をも惜まずなりぬ。人の噂も七十五日と。世俗のいひけん以あるかな。善に與する人心。流るゝ水の低きに就くと。亦何ぞ異なるべき。十室の邑にも忠信あり。義姑賢妻の世に有がたき。誠心のよく一鄕を。感せしめしにいかなれば。朱之介のみ遂ざりし。末の陶こそうたてけれ。

第二十六回　多金を齎ゑて落葉女壻を遣る　唐布を索ねて晴賢義弟に遇ふ

却說光陰荏苒して。是年も果敢なく暮つ。木芽若やぐ春立かへりて。如月中浣になりにけり。朱之介は河踰の。首尾も有繋に心にかゝりて。獨竊に思量るに。這地の容子を問せんとて。倘又使を立られなば。隷られたりける乃介坊二が。をらずなりしも不便なり。何とか答へまうさんや。と腹に問ひ肚に答て。分別もなく旦し暮すに。曩に東國を立出しより。はや兩周の春を迎へて。三稔といふ今までも。武藏の音耗絕たるは。これも以ある事にして。扇谷朝興ぬしは。山内の管領と和睦しつ。軍を合し士卒を鳩て。相摸なる北條氏と。戰ふとしば〳〵なり。この

禍この身に及ん。と思ひしにより倡導れて。その奸計に陷りしは。俺ながら愚痴輕才。かへす〴〵も面目なし。目今諳ね給ひぬる。從者乃介と坊二郎は。かの折河踰へかへしたり。その時の口狀に。如如來禪師を俟候に。今に歸菴あらざれは。在下は來年まで。這地に逗留仕らんと。聞えあげよ。と教諭して。注進の爲に遣したれば。いつまでこゝに在るとても。主君の咎めなかるべし。この義は御こゝろ休かれかし。と實事しやかにいひ瞞れば。落葉は聞つゝ頷きてしかゝらんには。安堵たり。おん身今茲は廿歲ならずや。君の御ゆるしを受ずとも。なほ又こゝに在りながら。額髮は似げもなく。外の人覗も宜しからず。翌は斧柄に剃除せて。大人になることそよかンめれ。かくて宿念を果すに及びて。武藏へ還り給ふ日は。復額髮を置んとも。そは左も右もなりぬべし。願ふは心を改めて。深信堅固に時節を俟ね。如如來さまに君命を。達せずは共侶に。盡す心も空なるべし。この義を忘れ給ふな。と諭す誠ははゝそ木の。落葉に袖の露しぐれ。斧柄はよゝと泣に立つ。慈悲と情義の兩幹枝に。やどり苦しく悔おもふ。はだもみぢ葉の朱之介。褐散るばかり不樂にけり。有恁而朱之介はその次の日に。額髮を剃て貌を更め。是より柚木の宿所にをり。なほ且くは落著ぬ。心苦しとのみ思ひしも。落葉母子の誠心に。漸々に化せられて。先非を悔つゝ早晩に。正首に立働きて。斧柄にも睦しく。落葉には特さらに。賢だちたる言語を愼み。させる役には立ねども。心ばかりは脫落なく。家の內の拂

思ふて昨夜斧柄にも。商量したるとぞかし。沙金の不足は三百兩歟。圓金もて換るときは。百五十兩にて整ふよし。これらの事は豫てより。それとはなしに人に尋て。吾儕もこゝろ得侍りたり。さばれ沙金はこの大和にて。通用せざる財に侍れば。京師までもてゆきて。兌せでは整ひがたし。とある人の誨侍りにき。只この不便のみならで。隔昨歳の極月那白布を。おん身が韓櫃より出さして。分ちて苞にせられしとき。吾儕は初て見てけるに。他も咱も常に織る。布にはあらで唐縣布を。二布に裁も分たるなれば。那布も亦こゝらにて。買取らるゝ東西には侍らず。これも沙金と共倶に。京にて買はゞ整ひてん。那白布は裁分の。二百反で侍るから。這回貨ふ唐縣布の。本幅であるならば。一百反にて足りぬべし。この價をもいぬる比。こゝろ得たる人に尋ねしに。大約は一反二十匁あまりで。買るゝものぞといはれにき。恁ればこれ彼うち合して。百八九十兩の金なくては。整へがたき東西にしあるを。吾儕なりとて二包金の。貯祿はあらずかし。這才覺に胸塞りて。いかにせましと思ふ折から。今朝はからずも里長刀禰の這裡の門邊を過られしを。遽しく呼入れて。猛に金の要用あり。女壻の出世の筋なれば。借出して給へかし。質には田園を遞與すべし。百金ばかり欲しく侍り。と密やかに憑みしを。長刀禰の承引て。男子も及ばぬおん身のたましひ。表裏なきは。咱よくしれり。然まで火急の事ならば。貸まゐらせて間を合せん。なれども咱們が金にはあらず。山年貢を預りたる。積金で候

故に朱之介が。久しく歸り來ずなりし。安否を訪するに暇なく。那造佛の一條は。他に任しつ度外に措て。鬪戰防禦に秘計を旋らす。軍旅に他事はなかりけり。係るべしとは知るよしもなき。落葉は一日朱之介を。身邊へ招き近つけて。おん身はいまだ聞給はずや。如如來さまのこの春は。山より還りまし〳〵て。御在菴さるゝよし。吾儕はきのふ傳聞にき。つら〳〵おもふにおん身の行狀。心ざまさへ改りけん。久しく俟たる甲斐ありて。禪師の歸菴なしませしも。そこらの故にぞあらんずらん。なほ深信を怠らで。東西整ひなば御菴へ參りて。君命を述許容を得て。めでたく歸國し給へかし。と壽きつ笑しげに。告るをうち聞く朱之介は。それはとばかり當惑の。胸安からず額を病して。沈吟すると半晌ばかり。やうやくに頭を擡て。そは歡しきことにこそ候へ。只悔らくは這身の愆。沙金も布さへ喪ひしを。今さら贖ふ術もなし。使用殘りし二百餘兩の。沙金ばかりを齎して。枉て那里へまゐるとも。東西と目錄と合ざれば。毛を吹て疵を求る。事損ねにこそ候はめ。作麼何としてよからんや。と潛めき問ふだに不樂しげなる。顏つく〴〵とうち目成りて。そはその該の事に侍り。吾儕なりとて知らるゝごとく。婦あるじの事にしあれば。談合敵になるよしもなき。貯祿多くは侍らねど。倘この時に力を勠して。おん身に本意を遂させずは。女壻宅母たる義理立ず。斧柄が必死を拯れたる。恩を忘れしものに似て。心裏恥しき事にし侍れば。よしや田園を地質に典れても。東西整へてまゐらせん。と

たのむぞや。斧柄留守を。といひつゝも。背門より出てゆきにけり。是より斧柄もいそしくなりて。洛上りの良人の爲に。笠の紐さへ。脚絆さへ。はや縫果て揃措く。用意も色かえぬ。松の操や松葉茶の。夏織絹の長財布。この餘は杖よ草鞋よ。と婢妾們すら共侶に。東西とゝのふる程しもあれ。落葉ははやくかへり來て。朱刀禰斧柄も歡び給へ。那一種は手に入りにき。委細は後に。幸便や。といふをさこそと朱之介。斧柄も倶に慰めて。汲て薦る一ト柄杓。立茶の泡のあはれげに。恩義の爲に使るゝ。親さへ子さへ暇なき。心盡しを心ある。人に見せばや津の國に。ありといふなる武庫の山。塒に榮なき徒華の。散りぞしぬべき入相の。山寺の鐘音つれて。燈點し比になりにけり。然程にその夜さり。落葉は女婢們を遠さけて。朱之介と斧柄をも。側に招き侍らして。けふ借得たる金百兩と。貯祿の金百兩を。とり出しうち合して。朱之介に遞與していふやう。嚮にもいひしとながら。這二百金は鷹捉山にて。斧柄が必死を救れたる。報恩の爲に進らする。是をもて洛に上りて。足らざる沙金と百反の。唐縣布を買取て。如來さまへおん使を。めでたく勸め給へかし。吾儕が去歳より預り措たる。沙金は廿一包あり。十兩包と覺れば。不足は廿九包なるべし。これに布の價を加えても。十五六金は殘るべし。京師までの路費には。さばかりは缺るまじけれども。沙金にも又唐布にも。時價の高下あるべきに。多しとてもてゆかずは。不便の事のあらんとて。不足を補ふ貯財の。これなくて後悔せ

へば。朞月を違へず返し給ひね。田質の事は要なし。といと憑しくいはれしかば。はやくも胸はおちゐたり。しからば女壻を伴ふて。翌おん宿所へまゐるべし。その折遞與し給ひね。となほ期を推してたのみしに。否壻刀禰は來ずともよし。おん身を目標に貸金なり。證文寫て侯べきに。印章をな忘れ給ひそ。と辭せわしく囁き示して。そが儘出てゆき給ひにき。然れば金は整ふたり。この義をこゝろ得給ひね。と心の秘密うち明て。告るに歡ぶ朱之介は。感涙坐に進むを覺ず。恭しく額をつきて。過世いかなる契りや有けん。かくまで思はれ奉る。身の果報こそあやしけれ。如如來禪師に見參して。君命をだに達しなば。とく歸國して金をとゝのへ。遠からず返しまゐらすべし。といふを落葉は聞あへず。そは益もなき口誼なり。這回の金を返されんとて。取替て間を合する。浮たる事では侍らずかし。斧柄が必死を拯れたる。恩義の爲にまゐらする。金にしあれば返されずとも。そを恩がましく思はんや。そこらの事には掛念せで。只深信こそ肝要なれ。と諭し示しつ。掌鳴らして。斧柄々々と呼近つけて。昨夜話せし事により。吾儕は目今里長刀禰の宿所へゆかん。葛籠なる。衣物出し給ひね。といふに斧柄はこゝろ得て。取出しつゝもて來ぬる。手織小袖の染紬絹。太織は名のみ瘦宍に。帶の端さへあまりある。眞と辛苦をやる瀬なき。表衣ばかりを脫更て。繕ひのなき白踏皮も。水入らずなる親子中。脫し舊衣疊む間に。鼻紙折て懷へ。これもと遞與す印章を。取て藏る袖頭巾。引提て。朱刀禰

思ひしのみにして。行ふとの得ならねは。私慾の爲に天然の。善心を滅却して。一ト日も靜ならねばなり。と或心學の先生のいはれしを。少かりしとき聽しとあり。寔にしかぞ侍るべき。老たる親の意見を聞ても。理に暗ければ腹を立。道理と思ふも得用ひぬは。それを聽との等閑にて。行ふとの難かるなり。只善事を好とおもひて。行はずはそのよき事を。よしと思ふも無益にこそ。と兄にいはれしとも侍りき。寔にしかぞ侍るべき。醋も辛も嘗味ひて。よろづに脱落なきおん身には。冷笑はるべき談義に侍れど。洛上りの餞ぞ。と思ふて腹をな立給ひそ。多辯は傍痛きものにて。わきて女子は長舌の。譏を脱れがたけれども。いはで巨已ぬ後の悔。あらせじと思へばなり。拙工でも側覩八目の。助言を有理と信容て。いふかひあらば後々に。又いふべきともなし。倘舊病の復發りて。みづからその身を愆給はゞ。又いはんと欲するとも。これ限りにぞあらんずらん。好てもいはず。歹ても。ふたゝびいはぬ吾儕が意見の。的中せんも。當らずならんも。おん身の心ひとつにあり。斧柄も憖こゝろ得て。等閑にな聞給ひそ。と言語雜なしく說諭したる。明辯驟譚に朱之介は。胆を潰しつ。理りながら。腹は立ども返すべき。よしのなければ件の金を。左右の手に受戴きて。今にはじめぬ慈愛教訓。いかでか空に承るべき。御心安く思召れよ。翌は京師へ赴きて。沙金と布を買とるべし。旅路の準備も仕りぬ。この義も御こゝろ安かれかし。といふに落葉は頷きて。嚮に暦を見たりしに。翌は社日でよろ

ん。皆もてゆくこそよかンめれ。こはいふまでにあらねども。京師は色の世界に侍れば。目に觸るゝものみな愛たく。耳に聽もの美しかるべし。そを初より警めて。宿遊女の圏套に。入らじと念じ給へかし。憾いへばなき人の。事さへこゝに引出て。窘るに似たれども。おん身の爹々公木偶介ぬしも。都かよひの折々に。意の駒の狂ひ出て。家さへ身をも亡し給ひき。這回も人にそゝのかされて。倘その金を喪ひ給はゞ。還らんと欲するとも。遂にこの家に入ると得ならじ。吾儕も亦これまでの。縁しと思ふて離別せん。心を定めて聞給へ。おん身も豫て知れるがごとく。斧柄は既に有身て。帶する程になりにたり。然とてもその心から。惑ふて金を喪ひ給はゞ。斧柄はおん身の妻ならず。生れんその子も後々まで。おん身の子とな思ひ給ひそ。譬ば那杜鵑が。鶯の巣へ產棄し。その子ありとも子で子にあらぬ。類とならば悔しからまし。よしや妻をば棄るとも。慾の爲に子を棄るを。賢人といふべき歟。又只愚人といふべき歟。みづから思ひ給へかし。吾儕もそこらの數には洩れ傳。乙柚の小夏に生別れせし。心の歎きは今もかも。增りこそすれ忘れんや。そは棄たるにはあらずして。棄させられし母親の。親甲斐もなきをいかゞはせん。わかき人の才あるは。その才の働く隨に。良からぬ行ひするもの多かり。和漢の經書。果敢なき草紙物語にも。忠臣孝子のうへを述て。義理分明なる條を看れば。誰も有理と心に信て。その身の及びがたかるを。悔しく思ふは本然の。善心に侍れども。よしと

別離とは。豫てぞ知るやしら梅の。盛過ぎたる竹笆に。北風寒さ旦開さ。門に置霜踏占て。影見ゆるまで目送りけり。却說末朱之介は。この日頻りに路を急ぎて。日暮て浪速津に宿を投め。次の日の黃昏比に。京の三條なる。客店に著にけり。京師は素より憚りあり。管領家（高國入道常桓）の方ざま人に。知らるゝとのあらんかとて。影護く思ひしに。朱之介が故主なりける。香西元盛が滅亡せしより。はや五六年を歷て。高國入道の武威衰へ。しば〳〵三好に攻惱されて。伊勢路へ沒落し給ひぬ。と世の風聲に聞えしかば。（この明年、享祿四年に至りて、高國入道亡びたり。）心安しとおもふのみ。彼西殿にはさまでに怕れず。かくてその明の朝より。洛中を徧歷りて。沙金と唐布を買んとするに。東西として悉く。輻輳せざるとはなかりし。花洛なれども應仁以降。年々の兵火に荒れて。良賈も頽轉したれば。錦繡店にも唐緜布はなく。兌坊にも三百兩の。沙金を藏弃るはなかりけり。朱之介はこの爲体に。且呆れ且憂て。兩三日は洛外まで。隈もなく涉獵しかども。竟に亦あるとなければ。困じ果つゝ人に問ふに。ある人の誨るやう。和泉の左界なる某の町に。船積荷三太といふ豪家あり。そが家號を。浮寶屋と喚做したり。渠は大內家に由緖あるものにて。周防なる山口にも枝店あり。こゝをもて。來舶の唐物多く引請て。買賣せずといふとなし。沙金も亦那里にあり。兌尤自由なり。左界へゆきて徵め給へ。と叮寧に示せしかば。朱之介は歡びて。次の日浪速まで引かへし。こゝにて又人に問ふに。京にて聞しに違はねば。又その

づよし。と下段にあれば吉日なり。さばれ許多の金を齎して。ひとり遣らんは心もとなし。といふて四下の人を傭ふて。倶してゆかんも倒に。心つかひにあらんずらん。大和山城は隣國にて。この上市より浪速津まで。十四五里ありとか聞にき。浪速へ出て京へゆくとも。急がば二宿次ならんのみ。那地に到りて布を買取り。沙金の兌し給はゞ。重驛馬にうち駄して。とく還り給へかし。といふに朱之介は異議もなく。仰こゝろ得候ひぬ。東西速に整ひ難て。京に且く逗留すとも。六七日には過べからず。程なく歸鄕つかまつらん。今宵ははやく睡らせ給へ。といへば斧柄も共侶に。御辛苦も皆報恩の。爲とし思召れぬる。這身ありての故なるに。孝行ゝらしく仕へはせで。かさね〳〵の御丹精。天おそろしく侍るかし。といふを落葉は聞あへず。噫益もなき。親となり。子となるもみな過世の定業。その子の爲に親たるものが。骨を折ずば誰か折るべき。とく退きて就枕給はずや。といふに夫婦は額づきて。別を告て呉竹の。ふし處へ入るも短夜や。夢もむすばぬ押縁索の。藪鶯に起さるゝ。黎明にはやなりにけり。然程に朱之介は。斧柄にしば〳〵呼覺されて。起て早飯をたうべ果て。行裝を整るに。商客の摸樣に打扮て。只一刀を帶たるのみ。脚絆甲被に身を固め。那二百金を懷にして。落葉斧柄に辭し別れ。管笠ふかくうち戴きて。都路投て起行けり。迭に別を惜みぬる。逆旅千里の首途ならねば。落葉斧柄はいふべきことを。いひも盡さで出し遣る。離合時あり。前知しがたし。こを生涯の長

しにより妻子には。とく還らんといふて出しを。よしも知らさで長逗留せば。妻子のものを思ふべく。路費も意外に多く没るべし。なれどもたま〳〵來し甲斐に。浦の名所を見まく欲しかり。貴意に任して兩三日。御厄會になるべきのみ。宜く頼み奉る。といふに主管はいと易し。と應て一個の小厮を召て。縡恁々と分付れば。小厮ははやくこゝろ得て。誘とばかりに朱之介を。いそがし立てそが儘に。あるじの居宅へ倡導ひけり。登時朱之介は。件の居宅に來て見るに。棟瓦いかめしく。座席幾間もありとおぼしく。工を盡したる豪家の家作は。壁の塗ざま。戸走りに。斜なきにも知られたり。有恁而客房に赴けば。主翁の二男城藏と喚るゝ壯佼。奥より出て對面し。迭に名を告り。恙なきを祝しけり。當下朱之介は。來意を報て。且はからざる寄宿の歡びを演る程に。年十三四なる小厮が。茶を薦めなどす。且して城藏がいふやう。討め給ふ唐縣布の。折から舶間にて。早の所要に。立がたきをいかゞはせん。さばれ本店の貿易船の。遠からず入津すべければ。且く逗留し給へかし。勿論得意の商客達は。質索を旨とし給ふにより。宿賃も亦廉なり。故に馳走はつかまつらず。且風爐に浴給へ。爾後飯をまゐらすべし。主翁は他郷の留守なるをもて。某は尤多務なり。應對疎略失敬あらん。この義を允し給へかし。と辭せわしく口誼を演て。辭して奥へぞ退りける。とかくする程に。又那小厮が案内をして。朱之介に浴湯させ。舊の座席にかへしをらして。夕膳を羞めけり。この時春の日やうやく暮て。

次の日左界に到りて。那浮寶屋の市鄽を見るに。店舗は五間ばかりなるを。過半は細骨の隔子にして。小厮五六名居たりけり。登時朱之介は。件の小厮們にうち對ひて。些まうすべきとこそ候へ。俺們は大和なる上市の坊賈にて。朱之介と喚るゝものなり。唐木綿一百反と。沙金三百兩ばかり買まく思ひて。今番京に赴きしに。那里は兵火の爲に荒て。思ひしにも似ず然る東西の。ひとつとして整ざりき。よりてある人の誨に任して。又この津まで來つるなり。且唐縣布を見せ給へ。といふに小厮們はこゝろ得て。しからば這里へ找せ給へ。と應て上座に推登して。寒暖を述長途を勞ひ。茶を看めなどする程に。この店の主管とおぼしくして。年齢五十ばかりなるが。奥のかたより出て來つ。朱之介に對面して。口誼を演て。却いふやう。徴め給ふ沙金の兌は。目今にてもいと易かり。但唐縣布は舶間にあなれば。その數速には揃ひがたかり。勿論主人はいぬる比。周防なる枝店へ赴きたり。是則國守へ年始のおん禮の爲。兼ては貿易の爲に候へば。その船遠からず入津せん。さはれ波上の事なれば。遲速はこゝに測るべからず。この餘もなほ所要ありて。逗留を歡ひ給はずは。他に宿を討め給ふにも及ぶべからず。大和は平城。丹波市。五條にも。得意の販子多くあり。この地へ貨販に來給ふ毎に。當家に逗留し給ふなり。然りとも歸郷を急ぎ給はゞ。且御在所へかへらせ給ひて。三四月の比來給へかし。といふに朱之介は沈吟して。そは亦折の歹かりき。京にゆきなば東西整ん。と思ひ

ね。又這浮寶屋の枝店の。鶴峯の城下にあれば。其處へも賴遣して。安否をしらまく思ひしかども。叔父公の名を忘れしかば。竟に便宜を得ずて過ぎにき。などて周防には落も着かで。商旅になり給ひたる。母御は恙ましまさずや。と問へば朱之介は聲を微めて。さればとよその事なれ。俺身今は大和の上市に在り。なれども那里もなほ旅なり。曩に母親共侶に。福富翁に辭し別れて。周防の山口へとて起行たる。是より以來無量無邊の。苦樂は一朝に盡しがたかり。久風流なり且喫べし。といひつゝ盃をとり揚て。酌して二三度傾けて。酒息吹て献す折から。給侍の小厮が汲とりし。煎茶の茶碗を塗盃に。うち載てもて來ぬるを。景市急に見かへりて。丁市よ。這阿客は。俺素よりの知己なれば。姑く盃の敵手をせん。和郎は且這飯の。折敷をのみ退らして。銚子を更てもて來て措ね。殽もこれはあまりに無下なり。何ぞあるべし。庖湢へいて。景市が恁々と。いふたりと告て多くもて來よ。とく〳〵せずや。と急がせば。小厮ははやくこゝろ得て。夜食の折敷と銚子とを。左右にとりて退きつ。更し銚子に兩三種の。殽をとり添てもて來にければ。景市これを受とりて。和郎はこゝにをらずもよし。銚子竭なば又召ぶべし。ゆきね〳〵。と追立したる。蹟は竹馬の友垣や。結鑣の甲斐ありて。料らずこゝに寄胡桃。炙鷄蛋のきみとわれ。笔殽は片身でも。うらめづらしき飲同士の。晤談に時を移しけり。然程に朱之介は。はじめ母親に倶せられて。周防に赴きし此の艱難。叔父には遭ずなりし

又中酒を薦めらる。塗折敷に取合したる。撮殽は三種に過ず。玆姑の皮剝圓製と。章魚の足の櫻煮をのみ。些し小高く積れたるは。大和に名たゝる妹山と。脊山にも似たるべく。金絲鍋の光やかなるは。中を流るゝ吉野川歟。と思へども敵手なければ。醉までに喫べくもあらず。よしや世の中とひとりごちて。三度傾けて茶を乞へば。小廝は立にき。かゝる處に。年尙少き一個の男子。うち咳きつゝ這里へ來て。客人御酒を召れしか。いと徒然に見え給ふに。お間をや仕らん。といふに朱之介は微笑て。誰さま歟しらねども。そは何よりの御馳走なり。いと憚に候へども。献しまゐらせん。過したまへ。と應て勸る盃を。件の男子は受て戴く。程しもあらせず朱之介は。はやく銚子をとり揚て。酌んとするを。物体なや。と遽しく推禁めて。噫うち置し給へかし。小生手酌に仕らん。と辭ふを朱之介はなほ允さず。獨酌にては献し甲斐もなし。俺們に任し給へとて。推禁る手を拂退けて。膝を找めつなみ〳〵と。酌とき迭に燈光にて。顏つく〴〵とうち見成りたる。これ彼齊一聲をかけて。和君は大哥にあらざるや。然いふ和殿は日高氏。然なり。景市で候ぞや。こは〳〵思ひかけもなき。再會にこそありけれ。と倶に手を拍膝うち鳴らす。歡び限りなかりけり。當下景市は。受たる盃を一吸に。傾盡して返していふやう。相別れしより僂れば。はや九稔になりにけり。小弟は只一向に。大哥は周防の山口に。在するとのみ思ひしかば。這首に來つる初より。出船入船の便りに就て。人に言告て在處を索

より五稔といふ秋の比。鎌倉の大刀自は身まかりにき。その次の年太夫次翁は。腰痛を湯治せんとて。從者二名ばかりを將て。信濃の筑摩なる温泉に赴きて。且く逗留する程に。その相宿に一個の金剛禪をり。年歳の三十五六なるべし。一個の嬖妾の。廿歳可にていと美しきと。兩個の女童を從へて。倶に日毎に浴湯をすなるが。そのをる所は大夫次翁と。重紙門一隔をもて堺としたれば。只いつとなくものいひかけられ。ものいひかけて相譚ひつゝ。他が爲体を熟視るに。携たりける盃盤器物の。總て金銀ならぬはなし。況那嬖妾の艷妖なる。いにしへの衣通姫、小野小町は昔にのみ聞たれ。そは甚麼なりけん見るによしなし。今這美人の面影を。繪にかくとも筆に及びがたく。文に演るとも寫し易からじ。世に萬々金を積藏て。優なるものゝなきにしもあらねど。誰か這歡樂に及ぶべき。いかなる過世の果報ありて。今世に恁る自由を得たる。聞まほしけれど。思ひつゝ。有一日又江湖上の。もの譚ひせる語次に。大夫次のいふやう。最卒爾には候へども。尊師は作麼何州の先達にて。恁まで富貴を極め給ひたる。携給ひし器物さへ。皆黄白ならぬはなし。數しからずは尊號を。知まく欲う候なれ。といふに那人微笑て。貧道は。京師に程遠からぬ。北白川なる山里にをり。有驗觀主、舌論道人と喚るゝものなり。先祖に渡唐のものありて。煆金煉銀の一法を傳へたり。よりて黄白に富るのみ。といふを大夫次訝りて。古よりして吉備大臣。安倍仲麿弘法大師。この他も渡唐の聞えあ

事、母親阿夏は舊識人に。よすがを求めて陸奥へ。携られてゆきし事。その身は京師に留りて。兼顯卿に仕へたる。その事の始より。香西元盛に扈從せし時。元盛は滅亡して。その身は辛く危窮を脱れし。はからずも叔父興房に。環會ひ資を得て。武藏にゆきて扇谷朝興ぬしに仕へつ。然々の義によりて。廼主君の使として。去々年の秋大和なる。六田川の邊に來つ。如如來禪師に君命を。達せんとせしに障ありて。逗留久しくなりし事。那造佛の事施物の事。鷹捉山に獵せしとき。山猿を射たる事。斧柄が事落葉が事。安保箭五郎夫婦の事。件の禪師に主君より。寄進の沙金唐緜布を。喪ひし事の顛末。岳母落葉の資によりて。沙金と唐布を買んとて。姿を窶し金を齎し。京師を投て來にければ。東西整ねば引かへして。這津へ來つる終りまで。人に知さぬ秘事も。心しられし景市に。隱すべくもあらざれば。額を合し膝をまじへて。閑談數刻に及びたる。言果て朱之介は。又景市にうち對ひて。賢弟は亦何等の故に。近江にはをらずして。這豪家に來て仕へたる。福富の翁はまだ死なずや。黄金は大きくなりつらん。はや招壻をせられし歟。爪作はいかにぞや。と問れて景市四下を見かへり。然なり。大刀自屯倉は世を逝り。翁も亦身まかりたり。彼家大く衰へ果て。姨捨山の姨ならねども。とり遺されしは阿鍵の刀自のみ。福富村にひとりなり。大夫次翁の事に就ては。古今未曾有の奇談あるを。且聽給へ。といひかけて。亦復後邊を見かへりて。簾亮を引よせて囁くやう。大哥がをらずなりし

にける。誰か知るべき此はこれ。縮金の法にして。一兩の黄金を。縮めて粟粒ばかりにせしに。黄銅汞薬種を加えて。稍久しく煉るときは。その黄銅と汞は。盡く消失て。那縮金のみ氈毿て。いと大きくなれるなり。便是騙賊の術にて。その黄金の殖るにあらず。形の大きくなるのみなりしを。愚俗多くは瞞されて。實に金の殖たるなり。と思はざるものあると稀なり。今大夫次もその類にて。恁る奇特を見てしより。且呆れ且感じて。只管に愛羨みて。含笑ながら舌兪に對ひて。秘法寔に至妙なれども。恁きは瑣細の金なり。思ひの隨に數多く。煉取るとのなるべきや。と問へば道人頷きて。そは母金の多寡によりて。いくばくなりとも自由なり。といふに大夫次歡びて。老拙優なるにあらねど。家には些ばかりの貯蓄あり。ある限りをもて母金とすべし。願ふはこゝより駕を枉て。俺宿所にて九還丹の。修法を行ひ給はらば。時莫大の高恩ならん。尊師は黄白に富給へども。旅中なれば別に東西なし。叱留あらば幸ひならん。といひつゝ遽しく懐中より。金十兩を取出して。扇に載て贈りしを。舌兪道人辭ひて受ず。貧道實に這東西多かり。是は盤纏にし給へかし。といふをば聞かで勸解るが如く。納め給へ。とくりかへしつゝ。頻りに薦めて果しなければ。舌兪はやうやく金を受て。扇を疊て返していふやう。翁の請待默止しがたかり。さばれ側室と女童們を。且白川へ將てかへりて。別に貴宅へ赴くべし。この儘にては便なし。といふを大夫次は聞あへず。宣ふよしは理りなれども。老人

る。賢人名僧多かれども。歸朝の後に子々孫々まで。金銀に富たりといふとをしも聞しらず。抑鍛金煉銀とは。いかなる法に候やらん。願ふは教え給へかし。と又他事もなく請問ふを。舌兪は聽かず。頭を掉て。この義は一子相傳なり。他人の爲に口外しがたし。問せ給ふは無益にこそ。といふを大夫次推返して。そはその該であるべけれども。老拙は田野の愚人。只老實をもて稱せらる。秘法を敎諭し給ふとも。人に傳るものにあらず。その交易には何まれ彼まれ。所望の東西を進らせん。枉て示させ給ひね。と頻りに問ふて已ざりければ。舌兪道人叉きたる。手を釋つきゝ頷きて。旅宿ながらにうちとけられて。友垣結びし翁の懇望。深信堅固の人とし思へば。今さらに默止がたかり。勿論無類の秘方にあなれば。必外にな洩らし給ひそ。扨も件の一方は。無上九還丹と名つけたり。是則唐山なる。道士丹客の傳法にて。咱先祖渡唐の日。傳授せられし神訣なり。且その法に遵て。十兩の金を煉取らんと欲するときは。一兩の眞金をもて。これを母金とするなりけり。かくて又九兩の黃銅と汞とを相加え。別に叉藥種を加えて。稍久しく煉るときは。その黃銅と汞と。化して眞金とならざるとなし。銀を煉るも。その法これと相同じ。疑しくは咱法術を。眼前に見せまゐらせん。いで〳〵といひつゝも。軈て鑄鍋をとり出して。粟粒ばかりの金を入れ。更に叉黃銅と。汞藥種を相加えて。法を行ひ火に被てゝ煉ると凡半晌ばかり。火を退けて蓋をとれば。果して黃銅も汞も。化して金にぞなり

近世說美少年錄第三輯巻之四

東都　曲亭主人編次

第二十七回

仙術を示して舌兪哄騙す
丹鼎を戍りて福富指を染

復說福富大夫次は。金剛禪。舌兪道人と。その側室小槌等を伴ふて。連りに路次をいそぎつゝ。宿所近くなりし日に。一個の伴當を走らして。伴の縡の趣を。はやく阿鍵に告たりければ。阿鍵は奴婢們に分付て。形のごとくに準備をしつゝ。今か〳〵と俟程に。その日晡時の比及に。大夫次は舌兪を倶して。宿所にかへり着きにけり。今朝より迎の爲にとて。途まで出たる里人と。奴婢們の奔走混雜して。いふべうもあらざりしを。大夫次それには目も被けず。みづから舌兪を倡ひ立て。小槌は籃輿に乘したる儘に。庭口より舁容さして。打出丁兒も共侶にとて。離舍へ案内をしたる。主人態等閑ならず。賓客儲は豫より。阿鍵が心を用ひたる。給使の小厮養娘が。茶を看め又果子を薦め。抑その後に風爐に浴れ。夕饌酒肉これ彼と。管待丁寧なりけれども。客も主人もしかすがに。長途の疲勞なきにあらねば。舌兪は屢これを辭ひて。は

の性急にて。異日の再會は不樂しかるべし。寔に田舍の茅屋なれども。屋敷ばかりは序廣にて。離坐席も候へば。お宿を仕るに便宜なり。脚小達を伴ふて。こゝより光臨し給へかし。三七の湯治にて。老拙が痛所は愈たり。尊師の隨意おん伴しつべし。この義を願ひ奉る。と辭を盡し意を演て。直倡ひに誘引ければ。舌兪道入沈吟して。貧道宿所に母親あり。俟わびしく思はれんが。懇望あまりに切なれば。枉て同道致すべし。といふに大夫次は歡びて。しからば翌は這地を去て。齊一歸路に赴くべし。とはや約束をする程に。舌兪は嬖姿を引合して。渠は小槌と呼做すものなり。且く貴宅に逗留中。御厄會になるべからん。那女童們は。一人は打出。一人は丁兒と喚做したり。おん目を給はり候へ。といふに大夫次は惚々と。小槌を見つゝ叮嚀に。向後を契りて遽しく。翌の准備をすべけれとて。其身の坐席へ退きけり。有恁而その詰明。大夫次は件の小槌と。女童をも行轎にうち乘して。この餘の物は馬に駄しつ。舌兪道人と相倶に。從者二名を隨へて。宿を出て近江なる。福富村を投て急ぎけり。畢竟大夫次が。舌兪を宿所に伴ふて。又甚麼なる說話かある。そは次の卷に。解分るを聽ねかし。

近世說美少年錄第三輯卷之三　終

も及ばず。舌兪は倏速に。爐を造られしを勞ふて。翌は黄道吉日なり。今宵母金を丹鼎に斂て。翌より法を行ふべし。といふに大夫次こゝろ得て。所藏の圓金千兩を。竊に手つから取出して。そが儘舌兪に遞與すにぞ。舌兪はなほも指揮して。黄銅をもて造りたる。火函鑊鍋碗碟まで。あるべき限り取出さして。件の金と共倶に。汞藥種を相加え。最大きなる丹鼎に斂めて。泥もて厚く封じつゝ。火口二方を開たりけり。綷果て舌兪がいふやう。母金の多寡は千兩なれば。修法によりて十倍の。利を得られんと疑ひなし。なれども多金は一朝に。煉取らるべきものにあらず。八八六十四个日にして。初て成就すべきのみ。その間老實なる。小厮二名ばかり隷置て。晝は三番夜は二番。由斷なく炭を繼して。須臾も火を絶すべからず。その炭を繼ぐ折には。貧道宜く指揮せん。件の小厮二名の外に。爐邊に近つくことを許さず。倘不淨のもの立入るときは。丹鼎の壞るゝのみならず。母金も共に銷散して。臍を噬むの後悔あらん。この義をよくよく戒むべし。貧道は翌よりして。一晝夜修法あり。炭も手つから繼ぐべければ。第二日の朝よりして。件の小厮を隷給へ。是より後には所作もなし。翁も折々こゝろをつけて。等閑になし給ひそ。と丁寧に説示せば。大夫次深く感服して。這夜は且土庫を。鎖して倶に退きけり。倏而その詰且。舌兪はひとり爐邊に到りて。火を發し法を修して。三たびの饍に向ふの外は。次の日まで出て來ず。登時大夫次が思ふやう。八卦爐の炭繼には。爪作と景市などが。相應しか

やく枕に就にけり。恁而その夜大夫次は。阿鍵に舌兪が縁由を。箇様々々と聶示して。那人は清淨を。旨とし給ふ驗者にをはせば。婦女子は憚りあるべき事歟。翌よりして逗留中。日毎の應對は俺傚べし。媳婦は萬事に機を屬て。管待をな虧給ひそ。那人はこれ俺家の。活大黑でをはするかし。といふに阿鍵はこゝろ得て。舌兪にも小槌們にも。一番も對面せず。給使も天閼なき。十二三なる養娘と。小厮をのみ侍らして。いよ〳〵疎畧なかりけり。然程に大夫次は。次の朝より間なく時なく。離舍に赴きて。をさ〳〵舌兪を訪慰めたる。語次に煉金の修法を請ふて巳ざりしを。舌兪は然こそ。と頷きて。その義は催促せられずとも。貧道既に用意あり。且八卦爐を造るべし。因て方位を考へしに。這里より五六十歩にして。土庫あるこそ幸ひなれ。乾金坤土相對して。土生金の義に稱ふ。是究竟の處なり。且這里よりも面屋よりも。天井をのみ隔たる。廊下續きで遠からず。日毎の往還に便りよければ。廼那里を用ふべし。快々准備をし給へ。といはれて大夫次怡悅に堪ず。猛可に泥匠を召よせて。塗竈の事云々。と告示してこゝろ得さして。僮僕們には土を採らせ。庫なる東西は遺もなく。出して他所に移さしつ。總て舌兪の指揮に任して。庫内に爐を造るに。形狀を八角にして各寸尺あり。八角は是八卦を表す。皆その法に從ふて。終日にして作り果けり。軈て火をもて乾しければ。はや用るに足れりといふ。藥種は舌兪が携來つる。貯藏のあればとて。只汞を求るのみ。その餘の東西は買ふにし

白川なる宿所より。一個の耑人の索來て。却舌兪に報るやう。いぬる頃より母君の。風の心地とて臥し給ひしより。やうやくに衰へて。最も危く見え給へば。はやく還らせ給へかし。是等のよしを告まうさんとて。筑摩の湯屋へ赴きしに。那里にはをはしまさず。這里の老爺に誘引れて。倶に立出給ひしよしを。那客店にて聞しかば。迹を慕ふてまゐりにき。といふに舌兪はうち驚きて。そは安からぬ事にこそあれ。俺が母刀自は健にて。持病とてもなかりしかば。旅宿を累ねし由斷は大敵。齢六十にあまれる親の。邪熱に疲勞を增したまはゞ然こそ危窮にあるべけれ。什麼いかにせん。と當惑の。眉根を顰め手を叉きて。歎息の外なかりしを。僅に思ひかへしけん。手を解き。大夫次にうち對ひて。目今聞せ給ふが如し。母の病着重かるよしを。傳聞ては一日も千秋。翅なき身を恨るのみ。只速に立かへりて。看とるべうは思へども。愍に賤妾們を。携たれば路の程。愚意に任せず遲滯に及ん。當惑この義に候。といふを大夫次慰めて。不慮の事にて御辛勞。憂を分つよしもなし。遮莫母君はこの年來。無病に御座したらば。只霜露の輕症にて。程なく瘥り給はなん。然とも急に還らん。と思ひ給はゞ脚小達を。この儘遺し置給へ。然すれば急ぎ給ふとも。路次の煩雜ひあるべからず。母君本復し給ひて。尊師光臨あるまでは。老拙預り奉らん。この義は甚麼。と他事もなく。いと正首に相譚へば。舌兪は迭りに感嘆して。そは辱きおん計ひ。貧道方寸既に紊れて。今さら深念に及がたかり。左

るべき役なれども。他們は心浮々しくて。老實ならぬものなるに。愆あらばいかゞはせん。仁八三五郎こそよかめれ。と豫て心に擇みつゝ。年十六と十五なる。兩個の小厮に分付て。第二日の朝より。件の爐邊に隷置て。大夫次は舌兪と共に。折々其頭を看輪るのみ。その樂しさといふべうもあらず。竊に首尾を思惟るに。這九還丹一竈にて。一萬金の所得あり。そを母金にして又煉らば。そのたびは十萬金。凡三番折かへさば。百萬金の富久者にならん。慿手短なる挊了はなし。春蒔て秋外斂め。冬蒔て夏熟る。田畑は風雨の患ひあり。況綿を採り糸を繰りて。織出す布などは。綿に豐作稀にして。工手間かゝればその利薄かり。又牧の駒などは。有身てより十三个月の。光月を過してやうやくに。一疋ならでは產も出さず。そも良馬は得がたきに。本錢寡く利の多かる。這仙術の資助に遇ひしは。冥加に餘る天の錫。黃金が一期。いへばさらなり。子子孫々まで相傳へて。その富諸侯に敵すべし。吁愛たや。と肚裏に。目算したる大慾は。無慾に近き守錢翁の。こゝろ祝ひに他事もなく。日毎に舌兪を管待すに。東西の費を些も厭はず。その身も共に酒うち喫て。世の雜談に日を消す。事情を得知らぬ奴婢們は。疑訝らざるもなく。那爐は不老不死とかいふ。仙丹などを煉るにやあらん。不足なき身もなほ欲かるは。壽命にこそ。とうち笑ひて。心もとなく思ひけり。左右する程にはや。八九日を經たりける。有一日又大夫次は。離舍に赴きて。舌兪小槌に盃を。薦めて只顧欵待す折から。舌兪が北

に誂へて。はる〴〵と買とらせしを。數多く貯措て。日毎に手づから小槌に薦めて。正首に管待したる。有一日又小槌にいふやう。尊師のかへり來ますまで。さぞ俟不樂しくをはすらめ。まだおん目には被らねど。鬼妻にひとしき媳婦もあり。孫女兒も候なり。都の手ぶりを知るよしもなき。田舍兒で候へば。這徒然を慰る。辭敵に得ならずとも。切て他們を陪堂にも。と思ふものから豫より。尊師に緊しく敎諭せられて。炭繼の小廝ならぬものの。爐邊はさらなり這頭へも。立入ることを允されねば。左にも右にもせん方なし。心つきなき事あらば。仰られよ。と懇に。いはれて小槌は笑しげに。寔に不思議のおん緣しにて。物の役にも立ぬ身の。とり遺されて恁までに。御厄會になりしこそ。心苦しき宿りに侍れ。打出丁兒が側に侍れば。徒然なりとは思はねど尤離舍のとにしあれば。夜分は殊さら寂しくて。目睡難る曉毎に。結びも果ぬ夢こゝろ。有繫に物のおもはるゝを。猜し給へ。といひかけて。見ろ目に流す秋の波に。春の心のはや動く。老樹も花の空名草。散まくをしき大夫次は。辱さと恥かはしさに。胸のみ連りにうち騒れしを。やうやくに推鎮めて。そはその該の事なりかし。爾らんには今宵より。咱們爐邊に寢まるべし。這里より那里へ遠くもあらぬに。主人が宿直に立たらば。心つよく思はれて。優に睡り給はんず。這義に任し給ひね。といふを小槌は推禁めて。いかでかは然るとをせん。その義は允させ給ひてよ。と辭ふを聽かず眞實立て。こゝろ得貌に退りたる。大夫次は

にも右にも交遊の。貴意に甘へて賤妾們は。なほ且く這許の。御厄會になるべけれ。九還丹の修法には。六十餘日の限りあり。貧道宿所へ還るの後。母の病着瘥らで。萬一の事ありとても。けふよりして五十日の。間には再來つべし。炭繼の事不淨の警め。おん身咱們に做代りて。折くゝていろを厲給へ。炭の加減は小槌も知れり。こゝろ得がたき事あらば。他に問ふても辯ずべし。饗にも既にいひつるごとく。不淨の警め疎にして。八卦爐を汚穢す愆あらば。法術遂に成就せで。本を喪ふ後悔あらん。この義をな忘れ給ひそ。と辭せわしく說諭して。小槌を見かへり。召近つけて。阿嬬も聞たる趣なれば。又初よりいふにしも及ばず俺が立かへり來つる日まで。那爐の事に心を用ひて。虛々と日を送るべからず。月の障りは十日の間。籠居て不淨を避よ。等閑にして愆あらば。俺決して阿嬬を許さず。佗とその罪を糾すべし。打出丁兒も這意を得て。側杖受な。と暴やかに。示す言葉の露の間も。去向をいそぐ草枕。行裝も疎忽々に。告別しつ要用の。行籠を當人に駝して。風に一葉の散る如く。飄然として出てゆくを。禁め難たる大夫次は。先に立つゝ庭門まで。小槌も兩個の了鬟と。共に別ををし鳬の。居越の浮宿不樂しげに。來ん日を契る妹と佚の。緣頬に出て目送りけり。却說福富大夫次は。舌斂がをらずなりしより。內外の批評の影護さに。離舍に交加して。酒燕などはせざれども。三たびの饍は珍味を擇て。なほ聊も疏略にせず。或は乾果子煎茶の類。名酒名物これ彼となく。京師の便り

うち連立て母屋なる。僮僕隔室にぞ罷りける。爾後又大夫次は。件の縡の趣を。阿鍵にも說示して。是より夜毎に只ひとり。那庫士にうち臥して。爐の炭さへに折々に。手づから繼ぐは豫より。こゝろに計校あれぱなり。然程に。小槌は大夫次が遣りたる。筑紫琴も三絃も。素より愛る東西にしあれば。倣す事もなき手游みに。間なく時なく搔捋せども。晝は憚りなきにあらねば。密奏にて些も歌はず。はや日は暮れつ甲夜過てより。殊さら調を高うして。聲最妙に歌ふを聞けば。京師で流行る艶曲なり。母屋へは程遠ければ。洩て確とは聞えねども。大夫次が臥簟へは。側にありて奏るごとく。枕に暢ふ妙音佳曲に。心浮れて宿も寐られず。拙技歟高手歟知るよしなきも。愛る耳には黄金が師なりし。阿夏に劣るべくもおぼえず。左さま右さま思へども。思ひ離たる無分別。男子と生れし甲斐ありて。那風流婦と一宵の。夢を結ばゞ老後の想得。いかにせまし。と肚に問。腹に答て膽向ふ。心の惑ひは御垣戍る。衛士の焼火にあらねども。夜こそ燃れ身内の。温熱をやるせなかりけり。扨も這大夫次は。その性貨殖に賢くて。酒に亂れず。色に耽らず。浮たる方には苟且にも。誘るゝとなかりしかば。曩に阿夏を四五稔。宿所に留置たれども。些も心を動さで。最正首にものせしに。六十のうへを幾歳か過して。孫の黄金が年もはや。二八になりし今さらに。小槌が色に惑ひしは。始終の氣質融らずして。狂人の沙汰に似たれども。見識卑き俗骨人には。恁る事亦なきにあらず。却又阿夏がをりし比。

且くして。炭繼の小厮仁八三五郎に。筑紫琴と三絃を。もたして離舍に遣して。小槌に遣りていはするやう。おん徒然にあるべければ。折々これを搔捋して。みづから慰め給へかし。黄金に讀せし策子もあれど。多くは女子の敎訓狀にて。肩の張るべき東西なれば。且これのみにこそ。といふ。心屬れし口狀を。小槌は聞つゝ琴三絃を。打出丁兒に受とらして。宜くまうし給ひてよ。と答て小厮を返しけり。恁而仁八三五郎は。小槌の返辭を箇樣々々と。大夫次に報しかば。大夫次然こそと頷きて。はや退かんとしたりける。兩個の小厮を呼とゞめ。やをれ俟ねいふ事あり。若們はいぬる比より。炭繼の役に宛られて。暇あるに似たれども。夜毎に一二度起さるゝと。走行の自由ならねば。倒に窮屈ならん。道人附添居られなば。別に子細もなからんを。若們も知るごとく。那人且く這首に在らねば。爐邊の進退心配多かり。倘毫ばかりも愆あらば。年歲甲斐もなき俺が面を。道人に虧くのみならで、人の得しらぬ失脚あらん。恁れば俺は今宵より。土庫の內に起臥して。炭も手づから繼ぐべきなり。晝といふとも若們に。うち任せんは由斷に似たり。大抵はわれ心を屬て。用事あらば。召ぶべきに。若們は且退きて母屋搿きせよかし。といはれて歡ぶ兩個の小厮は。一議に及ばず應をしつゝ。そは辱きおん計ひ。こゝろ得て候なり。日毎に炭を繼ぐ折は。必召せ給へかし。時刻にならば身を淨うして。おん指揮をこそ受べけれ。吁愛たや。と自祝して。狙公の檐に繫れし。狙猴の山に歸るが如く。

して炭の加減を。𢌞し給へかし。この義を賴み奉る。といふ聲さへに胴戰して。困じ果たる面色なるに。小槌は否ともいひ難て。そは亦便なき事に侍り。且く俟せ給ひね。といひつゝ紙燭に火を移して。携ながら身を起せば。大夫次は三尊の。來迎よりも尊げに。紙燭を受とり先に立て。丹爐の頭へ伴ひけり。登時小槌は徐に居よりて。且はや炭を繼んとせしに。炭は旣に繼てあり。加減に異なる事もなければ。思はず吻々とうち笑ひて。噫をかし。是程までに。爐裏に火はあるものを。何を見よとて人迷しに。益なき事を。と呟きて。立んとするを大夫次は。抱き禁めて些も緩めず。脫齒に漏る聲戰はして。年にも羞ず恁いへば。面なき所行に似たれども。實におん身に迷ふたり。憐とおもふて一宵の。情にわはし給はゞば。死するとも恨なし。やよ喃々。と口說立て。放つべうもあらざれば。小槌は困じて嗟嘆に堪ず。やうやくに見かへりて。今宵のみかは日屬より。淺くもあらぬ御心操を。空には思ひ侍らねども。妾は人の側室なるに。道に違へる枕を薦めて。主のかへらば爭何ん。且這八封爐の頭にて。些も不淨の事あれば。丹鼎壞れて法術成らず。と箴められしとしもあるに。猥りがはしき事をせば。後に悔しく侍らまし。又よき折もあるべきに。放ち給へ。と諫るを。大夫次聽ず火起て。瘦骨高き頰髯を。素き項に搨着々々。そは宣ふな豫より。千も二千も承知なり。非如丹鼎は破損ねて。財寶冥利の竭るとも。乘懸たる這弘誓の船を。渡さずは冥路の障りにならん。救せ給へ活菩薩。利

大夫次には妻の屯倉在り。且その子大夫五が。逐電したる歎の霧の。まだ霽間もなき折なるに。阿夏は名たゝる淫婦なれども。總角なりし子持にて。佛生山なる兩賊にいたく懲たるそがうへに。瀬十郎に遭んとのみ。思ふ心の移らねば進止に愼て。主人夫婦に仕へたり。これらの故に大夫次は。色をも香をも見かへらず。只利の爲に張稠し。心石より固かりしに。嚮に屯倉が世を去りしより。老ても鰥夫の寤寐寂しく。思ふ折から騙賊の爲に。魅されて心神浮れ。戯けき心の發りしは。その家應に亡ぶべき。命運にもやありつらん。と後に識者の評せしとぞ。こは此作者の自注にて。景市が説く辭にあらず。看官宜く察すべし。閒話休題。大夫次は情慾の。猛火連りに身を焦して。いと堪がたく思ひしかども。打出丁兒が側にあらば。便り歹しと思ひかへして。且く時を移す程に。琴のしらべの音絶て。子二刻比になりしかば。折こそよけん。と起出て。離舍に赴きつ。且障子に唾を塗りて。指もて穴して闚窺るに。那丫鬟們は枕を並べて。既に熟睡をしたれども。小槌はいまだ臥簟に入らず。孤燈の下に道中記を。獨閲してありしかば。やをら障子を推開て。呼も得かけず招くにぞ。小槌は驚き見かへりて。こは思ひかけもなき。什麼何事のをはしまして。小夜深たるに來ませしぞ。と問れて大夫次。さればとよ。今宵よりして炭繼の。小厮們を休らはして。咱們が炭を繼んとせしに。聊加減をとり忘れて。心もとなく思ふになん。そを問んとて來つるなり。いまだ睡らせ給はずは。那里へ來ま

といふを大夫次推返して。恁思はるゝはおん身の實情。いと辱きとなれども。多ければとて邪魔にもならぬは。なべて浮世の錢帛なり。髮の上の飾。衣裳なゞどを。贈らば外の覩に立て。那道人に疑るゝ。媒介になる東西なれば。思ひながらも進らせず。切て是でも受られずは。何をもて俺心の。誠を表すよしあらんや。枉て寸志に從ひ給へ。と賠話るが如く推薦めて。或は五兩。或は三兩。嚢中を費すと。兩三度に及びけり。左右する程にはや。舌俞が北白川へかへりしより。四五十日を歷にければ。九還丹の煉法も。滿足の日に近づきたり。登時大夫次は思ふやう。仙傳無上九還丹は。八八六十四个日にて。初て成就すと聞しに。その日子も旣にはや。三四日の程になりにたり。俺身小槌と土庫にて。夜每に些の情由ありとても。爐の頭へは屛風を建て。不淨を避たるとなれば。丹鼎に障りあるべからず。那道人はかへり來ずとも。かの日に至りて丹爐を披かば。一萬金の大利を獲つべし。又そがうへにも造化宜しく。道人暴に病痾に罹りて。溶遣地に來ると克はで。竟に身まかるとなどあらば。謝禮に金を分るに及ばず。恁て小槌を側室にせば。そは十二分の造化なり。萬事に幸ひある折なれば。是等の事も知るべからず。思ふごとくになれかし。と計校む胸の愚痴妄想も。慾には限り奈麻與美の。甲斐の白峯に起といふ。浮べる雲の富貴自在。樂しさ比類なかりけり。恁思ひしより三四日を經て。舌俞は兩個の從者を。倶して白川よりかへり來にければ。大夫次はあらずもがな。と思ふものか

益におはで已べきやとて。相撲ふがごとく引立て。理なく臥簟へ伴ひけり。偖而小槌はその曉方に。起別れんとしつるとき。大夫次も共侶に。身を起し伏拜みて。旣に日頃の想ひを遂て。魚水の契りを結びたる。君の爲にはいくばくもなき。餘命をいかでか惜むべき。心の花の香を留て。老樹なりとて嫌れずは。夜每々々のかよひ路を。猶いつまでも祈るのみ。といふを小槌は聞あへず。そは宣はするまでも侍らず。濡ぬ先こそ露をも厭へ。引くに曳れぬ小車に。重き情を乘せられて。主の祟も這身の科も。思はぬまでにいと欲しき。男女の色情は。老曾の森に若松の。立添ふ例も世に多かり。願ふは今の御心の。變らせ給はぬものならば。獨宿もせじ寢せもせじ。然ども妾が側には。打出丁兒が臥てをり。他們が熟睡して後の。暗號をな忘れ給ひそ。と契る辭の虛情。虛には承ぬ大夫次は。廓下續きの後朝も。別をしかの草の床。離れがたさを放ちてぞ。離舍へ還しける。是よりの後大夫次は。小槌と密會ふをのみ。身の樂にしたりしかば。内外の人の誹謗をおもはず。活業は皆老僕に任して。丹爐の事すら等閑なれば。折々に只炭を繼ぐのみ。願くばいつまでも。舌命がかへり來ずもあれ。と思ふばかりに小槌の色に。溺れて痴情に堪ずやありけん。盤纏の爲にとて。竊に金を贈りしを。小槌は推辭て手にだも觸れず。豫も知らせ給ふが如く。良人は黃白自由に侍れば。妾も東西の匱しきとなし。只何時までも御こゝろの。變せ給はぬものならば。それに優たる歡びあらんやとはとり收め給ひね。

思ひかけもなき。火急の歸村に已ことを得ず。遺し措きたる賤妾們を。召とらんとは思ひしかども。喪中にあればこゝろに任せず。是すらけふに及びしと。かへす〳〵も意外の趣舍。なほ寛やかに謝しまつらん。誘共侶に那里にゆきて。丹爐を披きて修法の財寳を。とり出さんず快々。といふを大夫次勞ふて。長途の疲勞を猜しまつれど。日限あれば貴意に任せん。爾らば這方へ來ませとて。はや土庫へ伴ふにぞ。小槌はさらなり。打出丁兒も。修法の奇特を見まくほしとて。迹に跟きつゝ共侶に。丹爐の頭へ赴きけり。

第一十八回　姦を詐りて有驗觀爐を破ニ　慾に耽りて大夫次家を亡す

却說舌僉道人は。大夫次と共侶に。土庫に赴きつ。丹爐の頭に坐を占て。且その炭の繼ざまと。爐内の容子を得と見て。うち驚くと大かたならず。慌たる聲ふり立て。噫無慚や八卦爐の。丹鼎は太く壞れたり。といふに大夫次も亦駭きて。そは宣はするとながら。教のごとく炭を絶さず。日夜由斷はなかりしに。然るとのあるべうもおぼえず。こゝろ得がたきとにこそ。といふを舌僉は冷笑ひて。陳じ給ふな論より證據。是見給へ。と暴やかに。腰なる鐵如意拔出して。丹鼎の泥土を彼此と。突崩し打墮して。蓋とり揚れば果して違はず。何の程にか丹鼎は壞れて。黃銅汞といへばさらなり。那千兩の母金すら。耗て些もなかりしかば。大夫次は直と呆れて。

ら然氣なく。離舍に赴きて。はやく舌命に對面して。且その老母の安否を問ふに。舌命は思はず嗟歎して。されば候俺が母親は。鍼灸藥餌の效もなく。身まかりし日はいぬる比。崇人の這里へ到着せしと。これ彼同日なりければ末期にあふよしなかりける。遺憾さは今さらに。亦いふべうも候はず。道中にてはかくあるべし。と知らざりければ夜を日に繼て。宿所にかへりし甲斐もなき。哀傷悲泣に堪ざりしを。却あるべきにあらざれば。安葬の事。過七々の。追薦讀經に日を送りて。けふまで貴所へ疎濶になりたり。なれども修法成熟の。日子も既に近つきたれば。四十九日を過すとそが儘。秡禊をしつゝ又首途して。夙に起晩く宿とり。一日片時も由斷なく。飛が似くに來つるなり。今日則吉日なれば。快々丹爐を披くべし。といはれて大夫次一議に及ばず。且その不幸の悼を演て。母御の憂に丁らせ給ひて。追慕の袖も乾かであらんを。這方の事すら傒までに。御こゝろに掛られて。時日を違へず來ませしこそ。大かたならぬ御深切。實に感佩仕りぬ。八卦爐の事は貴敎の如く。今までも由斷なく。折々に炭を繼たれば。心安く思召れよ。俺のみならで小槌刀禰も。丁鬟達も俟不樂て。徒然にのみありけんを。けふは一時にとり復して。傒は迭に恙もなき。對面は那骨にあふ。水母はものかは筋刀厲まで。さそな嬉しく思はれけめ。といへば小槌も膝を找めて。いぬる比より稍久しう。御厄會になり侍りたる。妾が爲に歡びを。まうさせ給へ。と會釋をすれば。舌命は然こそ。と頷きて。曩には

撻んとす。最も烈しき勢ひに。小槌は吐嗟。と駭怕れて。逃んとするを遣りも過さず。なほも撻んと身を起せば。大夫次慌忙きて。推隔携禁めて。尊師の腹立理りなれども。こは此女中の科にはあらず。皆老拙が愆なり。いかで過怠の科を屬て。老拙御勸解を仕らん。先且怒を納め給へ。と辭を盡し推寛解て。仁八に囁きて。恁々と。事情を得さすれば。仁二は屢應をしつゝ。走りて母屋へ赴きけり。且くして一個の老僕が。土庫の戸口へ來つるを。大夫次はやく見かへりて。身を起し找み向ひて。もて來し金を受とりて。舊の席に立かへりて。おそるおそる件の金を。舌偸に贈りて却いふやう。こは最薄義に候へども。過怠の料に受させ給ひて。小槌刀禰の許されなば。歡びこれに優すとなし。と賠話つゝ包みし紙を解く。金は七兩二分ありけり。舌偸はこれをよくも見ず。亦復大く性起て。こは何事ぞ淺ましや。密夫の臧價を。七兩二分とか俗にいへばとて。俺かばかりの伪金を。受て小槌を允さんや。畢竟咱們を戇にせらるゝ。這等の和譚言語同斷。恁てはいよ／＼一身立ず。那衒妻奴を撻懲して。招遊さして奸夫と倶に。推併て四段にせん。其首退き給へ。と敦圉て。罵り狂ふを大夫次は。又やうやくに推鎮めて。なほ外面にをりし老僕に。恁々と分付て。ふたゝび金を取よして。一足躍に數を增て。五十兩にして遞與せども。舌偸は承引く氣色なく。いよゝます／＼罵狂ひて。緈果べうもあらざれば。大夫次は内外の者に。聞れんとの胸苦しさに。幾遍となく件の老僕を。母屋へ返

これは〳〵。とばかりに。眼を瞬り舌を吐きて。面色蒼くなるまでに。胸を病して默然たり。登時舌命は敦圉猛く。又大夫次にうち對ひて。足下の懇望已とを得ず。俺交遊の義を以。家傳の秘方を修したるに。俺が白川へ還りし後。惡魔の爲に傷られし歟。只是足下の怠慢にて。自業自得といひながら。こは權着なる不淨をもて。丹爐を汚穢せし故にはあらじ。必男女密會して。這災を釀せしならん。炭繼の小厮們を。快この處へ召よせ給へ。といはれて大夫次推辭に由なく。身を起しつゝ庭に出て。仁八三五と呼立れば。母屋の奴婢が呼續けん。件の仁八三五郎は。土庫の頭へ來にけるを。舌命は招き近つけて。やをれ三五郎仁八とやらん。汝達はいぬる比より。這爐の炭繼に隷られしに。爐頭にはをらずして。何とて母屋へ退りたる。さる怠慢のあればこそ。丹爐は不淨に犯されて。俺が法術は破れたり。慝さず報よ。俺がをらぬ日に。傲せし惡事のありつらん。快々報よいかにぞや。と緊しく問れて兩個の小厮は。頭を掻きつゝ目を注して。共侶に答るやう。否。俺們はいぬる比より。炭繼の役を免されて。母屋掙きに舌命は頷きて。それにて情由を猜したり。這疑ひは小槌にあり。といひつゝ佗と見かへりて。やをれ衒妻。俺が這丹爐を。破りしものは汝ならん。甚麼なる奴と這里に宿て。秘方の丹爐を汚穢したる。快詳に招道せよ。いはずは目に物見せんず。と罵りつ鐵如意を。振閃めかして

したりしかば。這爐の事には與らず。夜も日もひとり東人の。手づから繼せ給ひにき。といふ

那母金千兩を。喪ひしは寔に所以あり。那事なくは思ひの隨に。十倍の利を得べかりしに。思念の外とはいひながら。俺が身上の傷となり。大損をなせしそがうへに。六十餘日饗應の。雜費も少挫の事にあらず。膿又二百金を。折きて無異に治めしかども。這外聞を爭奈はせん。悔しき事をしてけり。と蹉跎しつゝ藻にすむ虫の。われからに身を恨るのみ。こゝろの秘密うち譎て。いふよしもなき氣を腐らして。人にあはんは面なさに。獨納戸に垂籠て。且くは得も出ざりけり。然程に闔宅の奴婢們は。咸這椿事に膽を潰して。這首に聚合那首に停在。主の噂に日を餔す。その事隱れもあらざれば。阿鍵もよしを傳聞て。驚きつ且呆れて。心苦しく思ひけり。とばかりならで這次の日に。當國の守佐々木高賴の陣代なりける。捉山柴太郎玄繩と呼るゝ武士。夥兵廿餘名を從へて。呼門もせで福富の。宿所へ直と推寄せ來つ。前後の門より亂入りて御諚ぞふ。と呼かけ呼掛。玄關客房。書院綿室。庖厨中間僮僕廂。浴室雪隱。柴木場土庫。離舍に至るまで。奥ともいはせず。端ともいはせず。遺る隈なく搜宅したる。騷動いふべうもあらざれば。奴婢們はさらなり。老僕さへ。景市爪作。甲乙となく。駭怕れ搦撑しつゝ。隱れんとして度を喪ひ。十手に背を撻惱されて。吐嗟と叫ぶも多かりけり。當下福富大夫次は。慌惑ひつ納戸より。走出て玄繩の。身邊近く跪く。膝節戰へて慄れたる。訛聲高くふり絞りて。殿達要時等せ給へ。在下福富大夫次なり。何等の御用か知らねども。這身にとりて搜宅せ

し遣して。漸々に和解の。金を延して。思はずも。二百金に泊しかば。舌俞は僅に領きて。俺は豫も知らるゝ如く。黃白を殖す事。自由自在なるをもて。錢鈔を見れば餓鬼に等しき。世の人と素より異なり。然るを。毅繞なる。這二裹の金をもて。面を毆んとせらるゝとて。許容べうは思はねども。苟且ながら謬て。友垣を結びし老人に。飽まで恥を燿せんとも。亦長袖の本意にあらず。この故に胸を捺りて。乞るゝ隨に。要なき東西を。受て小槌を將てゆかん。大夫次和老とは絕交なり。この再生の洪恩を。忘れなせそ。と窘めて。いひたき儘の似非廣言を。嘈きに喋く驅賊の魂胆。件の金を懷へ。楚と納めて。快立ね。と頤で誨て相槌の。小槌と倶に打出丁兒を。先へ立しつ悠々と。離舍へ。退きて。却兩個の從者に。粹恁々と 私示せば。一個の從者こゝろ得て。走りて外面へ出たるが。豫准備をしたりけん。はやく四個の轎夫に。行籃輿二挺吊せしを。伴ふてかへり來にければ。舌俞は小槌をいそがし立て。打出丁兒の相轎にとて。件の籃輿に乘する程に。又一個の從者は。小槌が其頭へとり散したる。衣の調度も一所に裹て。手はやく二裹に荷造りしを。分ちて軈て此彼二名。楚と駝ひて身を起せば。舌俞も草鞋の紐引締びて。朱鞘の雨刀苛めしげに。巨手を振りつゝ庭門より。皆共侶に出るとき舌を吐き冷笑ひて。造化精妙。といへばえに。啞欲融す苔淸水。迹は濁せど底深き。伎倆に乘せし篠葉舟の。往方も知らずなりにけり。有恁けれども大夫次はなほも惑ひの覺ざれば。俺が

日。折から他が在所と聞えし。洛北白川より飛脚到着して。そが母の病着の。重かるよしを報しかば。はや〳〵宿所へ還らん爲に。小槌と喚做す嬖妾と。兩個の了鬟を遺留て。猛可に出てゆきしより。五十餘日に及びたる。きのふやうやくかへり來て。老母の身まかりたりしかば。思はず疎濶に過せしとて。歡びを述告別して。三個の女子を携て。遽しげに立去りしは。昨未牌の比なりき。恁れば在下いかにして。那徒を落し遣るべき。隱せし事も絕てなし。菊池の殘黨ならんとは。知るよしもなく遣際の。宿せしのみに候ひしを。賢察あらば這身の大幸。只おん慈悲こそ願しけれ。と啣言がましく陳ずれば。玄繩聲を苛立て。那修驗者の逆徒なりしを。知らずといふとも證據なし。そをいひわけになるべきや。加旃疑しきは。今俺が展撿したるそが中に。離舍の頭なる。土庫の内に造りし爐あり。鑄竈のごとく塗籠しを。突碎きたるごとく見ゆるは。何等の爲ぞ。尷尬なり。この義も稟せ。いかにぞや。と問れて大夫次彼はとばかり。困じて答難しかば。玄繩いよ〳〵苛立て。那爐の事すら推隱す。野心は旣に顯れたり。兵們這奴を緬めて。鞭撻懲して招道させよ。と最も烈しくいそがしたる。指揮に從ふ隸兵們。承る。と應も果ず。はや兩三名衝と立て。走り蒐りつ大夫次を。犇々と緬めて。背を痛く撻惱せば。大夫次は老人の。苦痛に堪ず恁々。と那煉金の緈の趣。鈍くも舌俞に說惑されて。一千金を喪ひたる。一五一十を首伏す。玄繩聞つゝ冷笑ひて。非如異國の傳法なりとも。

らるゝ。罪わりとしもおもはえず。人たがへには候はずや。といはせも果ず捕手の頭人。女縄信と疾視て。默れ大夫次。科なくて、俺這處へ向んや。こはいふまでにあらねども。守よりおん下知の趣の。大略を告示さん。近く進みて承れ。近屬菊池武俊が殘黨に。野衾鍛治郎有廉と聞えしは。綽號を鐵屑と喚做ものなり。他叛逆の志あるをもて。竊に修驗者に打扮て。有驗觀主舌俞道人と僞稱へて。一個の淫婦と。兩個の丫鬟を相携へ。京畿五个國を遊歷して。豪農富商を倡惑し。專錢帛を貪略て。軍要金にせまく欲す。と世の風聲に聞えしかば。他當國にも來るとあらん。と守の賢慮あるにより。豫密々のおん下知を。女縄等も亦承りて。その物色を探る折から。いぬる比より汝が宿所に。那野衾の鐵屑鍛治郎。並に等類の賊婦們を。留置くよし知るものありて。慥に告訴しつるにより。俺們速にうち向ひ。不意に起て件の逆徒を。搦捕んと思ふにより。部を定め稠入て。撿宅せしはこの所以なれども。はや逃せし歟。隱せし歟。那鐵屑們は影だも見えず。什麼何方へ隱したる。快々稟せ。いかにぞや。と辭せわしく責問れたる。大夫次いよ〳〵駭きて。初て曉得る騙賊の奸計。後悔今さら恁々と。いひ釋くよしもなきものから。いはで已べきとならねば。おそる〳〵頭を擡て。御諚では候へども。在下素より件の舌俞を。逆賊なりとは夢にも知らず。嚮に筑摩へ赴きて。且く湯治したる折。他も亦おなじ宿りに。日を累ねしよりうち解られて。かへさに這里へ立よりつ。逗留せしと七八

も。守に憚りて憑しからず。矧奴婢們は連係の。科を怕れてしのび〳〵に。只活路を求るのみ。商量敵にならんと欲する。ものとてはなきそが中に。獨小忠二と喚做たる老僕あり。その心ざま老實にて。進止に表裏なく。主の憂ひを共に憂ひて。阿鍵黄金を慰めたる。語次に聶くやう。左ても右ても鐵屑の。舌俞が往方を搜索めて。告訴仕るにあらざりせば。家公を救ひがたかるべし。舌俞が宿所は洛北なる。白川なりと聞えしかども。そも搗鬼でありけん歟。心もとなき事ながら。某北白川へ赴きて。その物色を撈りなば。萬に一ッ手かゝりを。得る事も候はん。是より外にせん術あらじ。といふに阿鍵は頷きて。爾の了簡寔に以あり。はやく那里へ赴きて。便宜を聞かし給ひね。と頼めば小忠次こゝろ得果て。准備をしつゝ潜出て。北白川へ赴きけり。爾後阿鍵は諄思して。爪作を召近つけ。おん身今茲は十八ならずや。既に男になりたるに。正しく大人（大夫次などいふ。）の親族なれば。密議の使を憑むなり。俺身つら〳〵思惟るに。千金の子は市に死なず。と世の人の口順む。故事もあるなれば。久禮畑の陣所なる。有司に人情を贈りて。竊に恩赦を乞まうさば。大人の爲なる善根功德。地獄の制度も金に依る。利益にあふて獄舍の呵責を。脱れ給はんと思ふなり。この義を相計給ひてよ。と密やかに相譚ふて。金幾兩か遞與せしを。爪作は數へ見て。宣ふ趣理りなり。恩を受たる家翁々の窮阨。救るゝものならば。いかばかりに骨を折るとも。素より願ふ所なれども。這金にては尚寡し。五十兩も

寡き金を煉殖して。十倍に倣すよしあらんや。倘その術のありとても。私に財寶を造らば。されがたき國賊なり。一文不通の愚民でも。然ばかりの事は知りたらんに。大夫次は十箇村の邑長でありながら。そを辨へぬ事やはある。この義も亦胡論なり。况野衾の鐵屑們を。留置たるのみならで。這期に及て走らしたれば。汝もその罪同じかるべし。且く獄舎に繋置て。なほ責問ふて實を吐せん。覺期をせよ。と罵懲したる。理に責らるゝ大夫次は。後悔の外なかりけり。この時阿鍵は次の間に。竊聞しつゝ驚きを。かさねて憂苦に堪ざりし。涙を拭ひ走り出て。兩三個の老僕と倶に。玄縄にうち對ひて。大夫次が爲に云云と。辭を盡して勸解れども。玄縄頭をうち掉て。若們何と稟すとも。大夫次が罪重ければ。後々までも願ひは稱はず。那鐵屑が逆謀に。與せずといふとの。僞りなくは往方を索ねて。摘捕て將てまゐれ。その事成らずは若們迄。等類の罪免れがたかり。恁ればあるじ大夫次が。罪科の讞斷定まるまで。家内の奴婢們一人ゝたりとも。叨に離散すべからず。皆謹て籠居よ。等閑にせば若們が。越度ならんず。後悔すな。と辭緊しくこゝろ得さして。却四下に近き里の古老を。幾名か召よせて。大夫次が罪科の趣。箇樣々々といひ知して。幾座かある土庫の。鎖を遺なく封じ籠て。若們里人と示合して。由斷なくよく戍れとて。掟て聽て大夫次を。牽立さして久禮畑なる。陣所を投て還りけり。然程に。福富の宿所には。阿鍵黄金が患悲悲歎の。やるかたもなかりしを。恁る時には親族緣者

遠かるに。太義ながら快ゆきて。事をな愆給ひそ。といへば爪作頷きて。その義は御心安かりてん。咱們宜く誘へて。吉左右を聞せまつるべし。それ將金の多少による。整へ給へ。と期を推して。巳が子舎にぞ退りける。恁而又その次の日に。阿鍵は爪作を招きよせて。きのふ密に相譚ふたる一義によりて藻鹽草。掻裒めてもいはれしごとく。金二裹は整ねども。百兩あまり侍るなり。寡からんがこれをもて。右も左もして給へかし。這一裹の外なるは。おん身の盤纏にまゐらする。數展撿めて受とり給へ。といひつゝ遞與すを爪作は。受納めて亦異議に及ばず。豫も知らせ給ふごとく。俺が親は佐々木家の。陪臣で候ひしを。故ありて身の暇を賜り。退糧してより幾程もなく。兩親共に世を去りにき。俺が稚き比なりければ。那藩中に面を識られし。人とてはあらねども。名告らば了得に舊縁を。おもふもの多かるべし。ム們に因て相譚はゞ。やうやくに便宜を得て。家翁々を救ふ據とならん。且く逗留すべければ。かへり來る日の遲くとも。御心をな勞し給ひそ。といと正首に慰めて。却退きて密やかに。行裝を整て。景市にのみ恁々。と聒きつこゝろ得さして。その黄昏に潛び出て。ゆくと僅に二里許。一村落に宿を投て。臥つゝ肚裏に思ふやう。這番俺が翁の罪惡は。叛逆人を引入れて。留置たるそがうへに。討兵の向ふを聞着て。逃せしならんと疑れたる。そこらの紛解立がたくは。這一裹の金を散して。竊に便宜を徼るとも。いかにして免さるべき。その首伏の科によりて。那鐵屑と

給はらずは。振被足らず候はん。といふに阿鍵は異議もなく。その意に任し數を增して。ふたたび金を遞與せしかば。爪作これを受とりて。その曛昏に後門より。出て久禮畑へ赴きつ。便りを求めて大夫次が。禁獄中の安否を問ふに。他は觀音寺の城へ送遣られて。這首にはをらずと聞えしかば。件の金を些も散さず。次の日の夜に紛れ。福富の宿所に還りて。竊に阿鍵に報るやう。某久禮畑の陣所にゆきて。相識者に便りを徵め。件の金もて罇酒菜。卷衣なンどを買とりて。その餘の東西も形のごとく。彼へも此へももの〔の〕しつゝ。家翁々の事を賴みしに。家翁は那首の獄舍より。觀音寺の城內へ。送られ給ひき。と聞えたり。はやくその義を聞知らば。東西を贈らで還んに。知らぬ事とて五十金。費せしこそ益なけれ。とばかりにして已ときは。彌勒出世の折におふまで。家翁々は赦されがたかるべし。いかで觀音寺へ赴きて。又一手段仕らん。なれども守の御座す。本城の事なれば。有司もさぞあらん。よりて愚意をもて推量るに。百兩にてはまだ足らず。三百金も費さずは。便宜を得がたく候はん。と辭巧にそゝのかせば。阿鍵は眉をうち顰て。そは又便なき事なりき。いくその財寶を費すとも。救取らるゝものならば。惜むべき事ならねども。嚮には大人の思ひ惑ふて。一箱あまりの大金を。舌兪に掠奪られ給ひし。そがうへに又土庫を。守より封し給ひしかば。俺が臂近に然ばかりの。閙財はなけれども。あるべき限り搔集めて。翌又おん身に遞與すべし。同州の內なるも。觀音寺までは

頭ならずや。と思ひつゝ。なほ又京師に赴きて。その投すかたを索ねしに。素よりあるべき事ならねば。舌俞の在處は知れざりき。然るに在下洛外に逗留の日。世の風聲に聞し事あり。野衾有廉と喚做すものは。即菊池の家臣にて。舌俞とは別人なり。那舌俞が原名は。即鐵屑鍛治郎にて。いぬる永正六年の春。備中介大江弘元主に討滅されたる。肥後州山本郡。飯田山の賊の頭領川角頓太盈連が。隊に從ふたる小賊なり。連盈斧鉞に死せし折。彼は両三個の等類と共侶に。はやく山寨を逃亡て。彼此に潜びてをり。或は廻國の修行者に打扮て。宿せし家の東西を竊とり。或は野に伏山に立て。旅客を嚇し。年來猖獗の惡行を。事とせしものなるが。近属は又修驗者に打扮て。仙傳丹鼎の奇法を借へ。貪婪多慾の豪農富商を。迷してその錢を奪ふに。一個の美婦を媒鳥とす。件の美婦は鍛治郎と。深く契りし遊行女なり。鐵屑竊に件の遊女に。奸計を說示して。豫そのこゝろを得させ。却その妓院の親方に。多く金を取せ遊女を借て。そが使ふ小三板をも。相携へて遊歴す。この故に那遊女を。久しく返さぬ事もありしを。妓院にては鐵屑鍛治郎の。賊なるよしを知らざれば。央錢の多きに顧て。饒して放遣るといふ。恁れども件の美婦は。何地の柳巷の遊女なるらん。これを巨細に知れるものなし。恁りし程にこの風聲。やうやくに世に聞えて。京にても鎌倉にても。追捕の沙汰はありながら。戰世の癖なれば。攻戰軍旅に遑なくて。今に及ぶと聞えたり。おもふに舌俞の鐵屑鍛治郎は。出沒不測の

一味のよしに。定められなば三族を。夷けらるゝ祟あらん。俺も亦慭に。翁の舊族なるをもて。共に頭顱を刎らるゝ事しもあらば。爭何はせん。縱其首までに至らずとも。大厦の覆らんとするときに。一木のよく拄んや。又只這意味あるのみならで。俺が親の佐々木殿に。仕へて觀音寺の城内に在りしとき。犯せし罪の免れがたくて。景市が親と共に。久しく獄舍に繫れしを。幸ひにして恩赦に遇ふて。遂に追放せられしよしを。傳聞ぬるとしもあるに。俺今那首へ赴きて。親の子なりと名告らずとも。萬に一ッ知る者ありて。守へ訴へ奉らば。立かへりの科を糾彈されて。縲絏に及ぶ事もあるべし。是等を思へば忠も義も。這身ありてのうへなるに。石を抱きて淵に臨み。薪を負ふて火に近つくより。なほ危きを見かへらで。憂を分ちて禍を。倶に禀んは愚なり。阿鍵刀禰より預りたる。金は一百五十兩。こはわが爲の奇貨にして。この外にもなほ盤纏あり。今この折に影を隱して。身の安穩を料らずは。後悔其首に立かたからん。噫噫爾なり。と計校む惡心。分別はやく定りければ。その詰朝宿りを出て。往方もしらずなりにけり。這次の日。福富の宿所には。北白川へ赴きたる。老僕小忠二がかへり來て。竊に阿鍵に報るやう。在下那地に赴きて。舌兪の宿所を詢ねしに。里人すべてこれを知らず。多くは皆是石工にて。修驗めきたるものとては。絕て一人もあるとなければ。忽地望を失ひて。なほ彼此と渉獵しかども。終に便宜を得ざりしかば。又さらに疑惑ふて。倘洛東なる白川橋の。

かばやうやくに。疑心起りて。二十に足らぬ後生の。許多の金を懐にして。只獨行く旅なれば。山客などに跟られて。撃れはせずやけふまでも。かへり來ぬこそ不思議なれ。と獨言つゝ俟不樂て。一ト日も胸は安からず。又一層の苦を増して。悔しく思へば。小忠二を。迎に遣んと欲せし折から。有一日久禮畑の陣所より。捉山玄繩の下行狀到來して。阿鍵並に福富の家の老僕們と。里の故老を召よせて。玄繩卽下知するやう。太夫次は罪ありて。嚮に禁獄せられしに。久しく獄舎の内にて身まかりたり。他は菊池武俊が殘黨と聞えたる。鐵屑鍛治郎野衾有廉を。家に隱し置たる。そがうへに當所より。討兵向ふと聞知て。那有廉を逃したる。罪叛逆に異ならねども。いまだ招道致さずして身まかりたれば。寛仁の御沙汰あり。その子大夫五も家に在らば。父と同罪たるべけれども。他は曩に亡命して。往方知れざるよしなれば。措て重て問るゝとなし。遺餘は大夫次が媳婦の鍵。孫女黄金など。皆是婦女子の事なれば。緣坐の讞斷に預らず。奴婢們も總て進退は。主從の隨意たるべし。なれども大夫次が罪輕からざれば。莊園家作雜具まで。遺なく沒收せらるゝものなり。故老們遺漏すとなく。籍て聞えあげよ。皆是守のおん慈悲なれば。忝く思ひ奉りて。このおん旨を得よかし。と最嚴に告示せば。衆皆齊一言承して。うち連立てぞ退出ける。然程に福富の家の奴婢們は。阿鍵が久禮畑の陣所よりかへり來て。御諚の趣云云。と告るを聞つゝ胆を潰して。猛に事の起りしごとく。籍られぬ

手段あり。こゝをもて。世の人遂に聞僻めて。菊池の殘黨なりといへども。その言は實ならず。南朝の武臣達は。一箇も忠義ならぬはなし。この故に殘黨餘類の。飢渇に迫りて死に至るまで。綠林白波の儔と做て。惡名を世に遺せしも。亦一人としてあるとなし。這義をもて推量るに。那鐵屑鍛冶郎は奸賊なり。他豈菊池の殘黨ならんや。初他が頭領と仰ぎたる。川角頓太連盈も。亦是肥後州にあり。當時那連盈は。武俊に從ふて。後に逃去りたるものなれば。此彼竟に相混じて。菊池の黨といふにやあらん。いと淺ましき誣言なりとて。宿の主人にある人の。うち譚ひしを紙戸隔に。在下聞得て胸の内に。件の遊女の出處を知らば。那鐵屑の舌兪が往方を。索る據あるべし。と思ひしかども風を追ひ。影を捕ふる街談衢說に。拘つらひて日を彌るも。亦益なしと深念して。立かへりてこそ候なれ。といふに阿鍵はうち驚きて。然るおそろしき殘賊と。友垣結びて筑摩の湯より。這里へ伴ひ給ひたる。薄情や日屬は萬のうへに。用心深くものし給ひし。大人の氣質に似げもなく。寃屈の縲絏を釋くよしも。あらずなりしは這家の。滅却ぬる時節歟。と口說立つゝうち歎くを。小忠二も理りと。思へば共に慰め難て。嘆息の外なかりけり。當下阿鍵は爪作を。觀音寺へ遣したる。事情を悉々と。小忠二に囁き告て。千條の綱は斷たれども。這一條のみ果敢なくも。なほ憑しき心地ぞする快かへり來て吉左右を。聞せよかし。と指を折て。專爪作を俟程に。二旬あまりを經にけれども。その信だもなかりし

たる。鍋に類するものなればとて。そが儘他さへ留置て。里人をのみ返しけり。却又阿鍵は大夫次の。亡骸を乞せん爲に。小忠次に盤纏を取らして。觀音寺へ遣しければ。小忠二は夜を日に續て。走りて那里へ赴きつ。術よく主の亡骸を。乞求め煙となして。白骨を壺に斂め。そを携てかへり來にければ。阿鍵は胸且塞りて。はふり落ぬる涙の間に。件の壺を受とりて。一夕家廟に容措つゝ。香華を手向看經して。通宵戌りて。次の日に。香華院へ安葬して。密々に追薦の。法莚讀經形のごとく。丁寧に執行ひて。日を經て墓表の石を建けり。這時までも爪作が。信絶てなかりしかば。阿鍵はさらなり小忠二も。いよ／＼横死と思ひ決めて。大夫次が過七々の。好事を執行せし毎に。亦爪作が菩提さへ。吊ふも涙の袖の雨。霽ぬ歎きに日を彌る。阿鍵は良人大夫五が。事をしいとゞ思ひ出て。憂苦に堪ずや。動もすれば。うち臥てのみありけるを。小忠二に奨されて。這年の冬の比。些の店舗を修理ひて。酒を活り油を鬻ぎ。隱田の畊作には。莊客二名を使ふて。その事を掌らせ。この餘一個の炊妾と。一個の小厮と主僕六口。半商半農の世の經營に。女あるじの事にしあれば。小忠二は精悍しく。後見をしたりける。現古川には水涸ずといふ。世の諺は虚語ならず。その家一旦亡びたれども。幸ひにして地方を去らず。榮枯得失反覆しつゝも。なほその迹の絶ざりしは。大夫次が性の慳くして。且狡かりしかど。克數个村を差配して。暴戻殘忍の行ひなかりき。只その積て散すヿを。知

閒にとて。咱が東西主の東西ともいはず。各々手はやく搔攫ひて。暇を請ふも。請ぬもあり。慌しくも。出てゆく。絆の紛れに景市も。金二三十兩竊せしを犢鼻褌に結着て。身装はしたれども。投てゆくべき親里なければ。阿容々々として留りたる。けふより後の身の往方。心もとなく思ひけり。此に就彼につきても。阿鍵黃金が心裡哀しさは。石崇誅せられて。妻子離散し。糜竺死して窮鬼歡ぶ。盛者必衰。有爲轉變。いふもさらなる事ながら。身に從ふものとては。只小忠二と景市のみ。幾間ともなく建つらねたる。家さへ庫さへ遺し措て。里盡頭なる人の空屋を。購求めて。移りたる。この比の煩雜は。目も當られぬ光景なり。矧牧も田も畑も。戸帳に照して闕遺なく。沒官られたりけれども。なほ幸ひに隱田あり。主僕四五人の衣食の料に。なりぬべきものなれば。里の故老の私意によりて。只これをのみ殘されたり。恁る折にはいとどしく。子をおもふ親の脫落なき。阿鍵は老僕小忠二と。里の故老に商量して。黃金を和泉の左界なる。浮寶屋へ預んとて。移徙したる次の日に。黃金を行轎にうち乘して。老實なる里人と。景市を隸て遣しけり。阿鍵が是等の用心は。今の僑居の荒々しきに。親子の零落を侮りたる。歹人などが不測の所行を。做すともやあらんかとて。恁計ひしと聞えたり。然ば左界の巨商。浮寶屋荷三太は。船積氏にて阿鍵が叔父なり。黃金が爲には從母。大叔父なれば這寄ありしを。荷三太は驚きながら。阿鍵が書簡をつら〳〵。と見つゝ黃金を受とりて。景市も鰯を賚

近世說美少年錄第三輯卷之五

東都　曲亭主人編次

第二十九回　諫を遺して景市西都に赴く　璧を分ちて黃金東行を辭ふ

却說黃金は思はずも。和泉の左界に赴きて。母黨の大叔父なりける。船積荷三太許寓居る程に。主人夫婦の所望によりて。這年の冬十二月。その子棧太郎に妻せられ。遣嫁の儲に一金だも。費すに及ずして。居ながら豪家の媳婦になりけり。抑浮寶屋の主人船積荷三太に。兩個の兒子あり。件の棧太は次郎なれども。正妻雄波の腹なりければ。軈て總領に立られたり。太郎は則城藏なりしを。こは庶子なりければ。貶して二男にしたるなり。又城藏が實母には。曩に身の暇を取せて。近鄉なる小賈。某乙の妻に做したるが。幾程もなく身まかりけり。現天道は盈るを虧く。棧太郎は富たる家の。總領には生れしかども。心ざまいと愚にて。菽麥だにも辨識らず。目には才に五色をわかち。身には寒暑を覺しのみ。是すら黃金が不得意なりしに。他を娶りし次の年。棧太郎は年廿一にて。痘瘡を患て危かりしを。良醫の匙に救れて。命ばかりと

らざりし故に祟あり。因て識者の評すらく。大夫次は當初。途に蛇甑あるを見て。撈りて五色の玉を獲たり。是より猛可に發迹て。富一鄉を傾けしも。その亡んとするに及びて。舌兪が爲に謀られたり。舌兪は即蛞蝓にて。俗になめくじりと唱るもの。蝸牛に似て売なく角なし。蛇この虫に黏るゝ時は。身を縮して動き得ず。竟に死に至るといふ。この事いまだ經驗ざれど。蠱毒の術にありとかいへば。その所以なしとすべからず。且舌兪は鐵屑鍛治郎なり。鐵も赤蛇の怕るゝもの。此彼共に相尅の義あり。物その尅に遇ふときは。利あらずして必衰ふ。亦奇ならずや。といひしとぞ因に作者も自評すらく。朱之介が大和にて。箭五郎に謀られて。その妻奥手と姦通して。多く金を喪ひしと。大夫次が舌兪に哄されて。その妾小槌と密會て。多く金を奪れしと。相似てその趣おなじからず。又落葉が朱之介に金を齎して。京師へとて遣せしと。阿鍵が爪作に金を齎して。觀音寺へ遣せしと。相似て用心亦異なり。譬ば那能因と頼政と。白川の關の歌の相似たるも。非等類の判あるが如し。看官疑似の眼を拭ふて。よく翫味せば分明ならん。問話はとまれかくまれ。畢竟黃金が船積許赴きて。後の話說甚麼ぞや。そは次の卷の首に。解分るを聽ねかし。

近世說美少年錄第三輯卷之四　終

役に立んと欲するのみ。然るにより這春は。周防の山口へ將てゆきて。大内殿へ見參を。請まつらんとて親子共侶。正月の初旬に首途したるが。且交易買賣の。所要を兼たる旅なれば。那地の枝店に逗留して。春闌るまで歸り來ず。その際左果なる。店舖には主管あり。居宅は二男城藏に預措て。内外の差配を任せしに。城藏は兄に似ず。今玆は二十五歲なるべし。男態苦味ありて。奴婢の長と做すに宜く。辯舌水の流るゝ如く。浮薄ながらも應對に。よく人の機を攬りしかば。日毎に親の名代に。得意の武家をうち巡りて。その所要を承るに。諸家の評判歹からず。他は親にも優たりとて。毎より利潤多かりけり。却是までは景市が。浮寶屋の居宅なる。客房にて朱之介に。話き告る福富氏の。慾に迷ふて自滅を取りし。その迹既に零落したる。綷の顚末遺もなき。長物語にぞありける。當下又景市は。朱之介に話くやう。福富氏の滅れし時。俺が年十七なりければ。額髮だにまだ剃らず。這里へ來て後にこそ。稍男にはなりたれども。小猴子なれば搾きなかりき。那折からに稱したる。金は僅に三十兩。その年の冬闕鍵刀禰の。安否を問へとて福富村へ。遣られたりけるかへるさに。霎時京師に旅宿して。一夕柳巷壯觀より。忽地に病着て。遊女の爲に那金を。夢の似くに使果して。又身ひとつになりしかば。西へも東へも振がたさに。なほ又這里に歇舟、内外の機通間を拿揖でも。底涂に誘引水もなく。そを慰る友綱も。あらで過せし滿三年。料らず長兄と對面の。這春宵は一刻千金。殺はなくて

り留たれども。相貌醜うなりて。眼包引吊鼻歪み。肌膚は炙卵を。炙過して焦せし似く。聲頻嗄れて鼻へ漏る。三十二相一個として。欠ぬ處もなくなりたれば。黄金はいよゝ淺まし。と思ふものから親里は。昔にも似ずなりにしを。知りつゝ這里を出てゆきて。一個の親にものを思はせ。再富饒き人の妻に。なるよしなくは悔しくて。世の胡慮になりぬべし。左ても右ても這身の薄命。良人は痴漢でも醜郎でも。手鍋引提ず常綺羅で。夥の奴婢を使ふを思へば。痛苦忻て身の爲に。炙灼て觀る山ふたつ。出の字を巳るに優とあらじ。と尋思をしつゝ初に變らで。陽ばかりは睦しげに。萬事良人に機を屬て。その足らざるを補ひければ。船積の二親は。歡ぶと大かたならず。俺が媳婦は尙弱けれども。今の浮世に多く得がたき。貞女にこそ。と竊に稱へて。願ふははやく初孫を。産出せかし。見まく欲し。いかで〳〵と朝な夕な。子ゆゑに祈る親心。神ならぬ身の情由知らで。間ある閨の空枕。背合する妹と伕が。片宿癖つく耳胝の。疼みを悟るよしもなき。荷三太が妻の雄波は。年來血暈の持病あり。是より又餘病發りて。目を病煩ふと一稔あまり。晝は日影の厭しきに。夜はなほ物を見ると克はず。近属は又逆上にて。耳さへ疎くなりしかば。旦暮奥に籠りてをり。家内の事はしも。乙より拾まで黄金に任して。心安しと思ひたり。又荷三太は棧太郎が。心ざまの鈍きを知れども。片羽なる子は不便さの。彌增す夜の鶴の脛。斷まく惜しき恩愛の。やる方とてもあるとなければ。只折々に敎訓して。

し。素より主の爲なれども。好む所に高味あり。雖然絆の敗に及びて。勢ひせん術なき隨に。遂に良人と併びしならん。又箭五郎も恁ぞかし。他は根生の騙賊にあらず。長兄の盤纏の多きを見て。猛可に起りし惡心なれば。損したりとも饒すべし。又小槌には實情なし。譬ば猴が狙公の。爲に勉て儛踏るが如し。觀者只管愛れども。素より他が得意にあらず。その情なきを知るべきのみ。又舌欣の鐵屑は。最怕るべき奸賊なり。初よりして豪家の財を。騙奪んと欲する伎倆あり。福富一人に限るにあらねど。運歹くてその騙術に。乘せられたるは寔に所以あり。箭五郎とやらの儔にあらず。はやく曉得て損せずとても。那奴は決して饒すべからず。況一千二百金を。公然として掠奪たる。その罪阿保と廷遝あり。當否は知らず俺が臆度もて。評する處かくのごとし。然はあらずや。と説謗れば。朱之介うち頷きて。俺はけふまで那奥手が。宿反りたるを怨し。と思ひしは淺慮にて。和主の諭しは高論なり。さるにても爪作は。横死したる歟。逃亡せし歟。倘山客に跟られて。命を其處に隕しなば。いと憐むべき事にこそ。といふを景市慰めて。鷲津の生死存亡は。咱們も知るよしなけれども。他が觀音寺へ首途の。折から咱們に恁々と。別を告し辭の端に。狐烹られて兎憂ふといふ。古語もあるなれは。といひかけて後をいはざりき。是等を思へば連係の。祟を恐れて逃たるならん。盤纏の多寡は聞ねども。虛々として山客の。爲に死すべき男子にあらず。そを那折に阿鍵の刀自も。小忠二も共侶に。

も味酒の。三輪の謠曲にあらねども。晝こそ見えね夜を深す。再會湯の即效にて。黴の生たる鬱胸を。塵も遺さで漏らしたり。且飲給へ。と献す盃を朱之介は取抗ながら。數番嗟歎して。思ひきや福富翁の。慾に耽りて可惜しき。富も榮も五十年。家さへ身さへ一炊の。夢物がたりにならんとは。袷といひ恰と云。世には相似て對すべき。奇事なきにしもあらずかし。上にも既に話せしごとく。俺が箭五郎に謀られしも。福富翁の舌兪とやらんに。哄されしも亦到底は。皆騙姦の手段にて。その圈套に入りたるなり。といへば景市頭を掉て。只一向に聞くときは。似たる像く思ふもあらんが。綷の趣同じからず。そをいかにぞと推ても見給へ。色に迷ふて密通財を。使ふは凡世間の。後生に多かれば。長兄が安保に謀られしも。憎うはあらずその所なり。又福富の愆は。是貪慾の致す所。那騙姦に遘ずとも。既にはや一千金を。竊接いれしよしを悟らで。密夫に墮て二裹の。金を添しは阿饒なり。總て世の吝嗇家の。驕奢を好む心から。淫を貪らざるもの稀なり。然ればとて賣色は。財の惜しさに措て講ぜず。又妾にも費あり。第一に家家が怕しさに。是等の慾も竟に果さず。こゝをもて些ばかりも。鈔を使はで竊せんとて。薄情き人の妻妾の。羽籠に羅りて意外の錢を。他が隨意豪奪らるゝは。原是鄙吝の算盤錯誤。長兄の愆に比れば。雲壤の差別あり。豈同日の論ならんや。是によりて彼此の。情狀虛實を猜するに。奧手とやらんは實情あり。譬ば猫兒が主の爲に。鼠を捉て喰ふが如

八九年。舊縁なほも竭ねばこそ。思ひもかけず這里へ來て。あはでいなんは本意ならず。什麼いかにして可らんや。と眉根を顰めて相譚へば。景市然こそ。とうち笑て。いたくな思ひ屈し給ひそ。咱們は沒引しがたけれども。なほ又便宜なきにあらず。這里の奥にて澳路と喚做す。一個の養娘あり。他は御新娘の意に愜ふて。鍼妾にも優す出頭なり。咱們と些の情由あれば。翌は夙めて起出て。私に首途を目送るならん。その折他に長兄のうへを。聶き示してこゝろを得さして。奥へ通達致させてん。澳路が橋を渡すまで。心長閑けく俟給へ。然とて隱す事にはあらず。曩に長兄が母御と倶に。周防へ赴き給ふ折。福富夫婦阿鍵の刀自まで。黄金を長兄の妹品に。と約束しつゝ盃を。とり酌されし縁故は。咱們が折々いひ出て。噂をしたる日の多かればは。這里でも知らぬものはなし。又只這意味のみならで。姑孃は耳疎く。目も亦見えねば垂籠て。鳥こそ追ね對王丸の。母御前に似たる廢人なれば。黄金刀禰に對面の折。そこらに影護さことなし。又城號は親の外代に。日として出ぬ事もなければ。後安さに似たれども。親み過ぎては第一に。黄金刀禰の爲歹かり。澳路が進退すべければ。對面は只一兩度にて。買んと欲する東西整はば。大和へ還り爲へかし。と辭せわしく眞實たちて。又他事もなき密談に。朱之介は異議もなく。思はず滿面笑を含て。いはるゝ趣こゝろ得たり、情麗にも宜く頼むのみ。勿論女才はあるまじけれど。俺が大和にて杣木氏の。女壻になりたる事なぞは。誰にも秘していは

鷲津は橫死しつらんとて。菩提を弔れし事情の。後に這里へも聞えしを。傍痛く思ひたり。といふに朱之介は又頷きて。謂を聞けば然もあらん。そはとまれかくもあれ。黃金が這里の媳婦になりしは。是第一の異聞なり。いかで和主の汲引によりて。相見るとのなるべしや。といへば景市含笑て。そは左も右もすべかるを。咱們は翌の朝船に。乘て周防へ赴くなり。と報るを朱之介は聞あへず。術のよき事をいふものかな。搗鬼ならずや。甚麼なる故ぞ。と問ば景市。さればとよ。搗鬼にてはあらずかし。きのふ山口の枝店より。東人の書翰到着して。這春は當所にて。瘟疫の流行病あり。折から主管も小厮們まで。八九名病臥たれば。枝店の生活不便なり。景市は游客なれば。三四個の小厮と共に。はやく出船に乘走らして。由斷なく來着せよ。この故に俺も亦。速にはかへりがたかり。城藏這義をこゝろ得て。快々せよ。とありければ。咱們も猛に夫に差れて。三四個の猴子と共に。翌の旦開に首途の。准備は既に整ふたり。長兄の這首へ來ますとも。一日遲くは再會の。據もあら傳猶何時までか。迭に知らであるべかりしに。料らず對面の歡びを。盡す間なく袂を分つ。這便なきを爭何はせん。今宵は既に更闌たれば。御新娘に告るに由なく。翌は首途の早ければ。起出らるゝを俟間なし。這義を猜し給へかし。といはれて。有理。とばかりに。朱之介は困じ果て。沈吟ずると半晌ばかり。思ひ難たる頭を拊て。和主も豫知れる如く。俺と黃金は兄妹の。約束せられしよしさへあるに。相別れてより

立て。墨本粘の。屏風をやをら建輪して。軈て枕に就きにけり。却説その曉がたに。景市は三四個の。小廝們と共侶に行装を整て。左界の港口へ赴きつ。周防へ還る船に附て。西を投てぞ走らせける。又朱之介は小夜深て。睡りにければ貪宿くて。其頭の事に掛念せず。日ははや高く昇りし比。やうやくに起出て。肚裏に思ふやう。黄金に對面せん折に。些の土宜を齎せずは。當座の墨付歹かるべし。其も何をがな贈るべき。綾も錦も。高麗物も。商賈柄で鄽にあらん。又玳瑁の櫛笄。白銀の指環なども。皆高麗物に隷く東西なれば。珍しげなく思はれん。要こそあらめ。と尋思して。且早飯をたうべたる。爾後街衢に立出て。料紙になるべき修善寺紙。鼻紙にすべき陸奥紙。葦手歌繪を畵きたる。紈扇と共に總て三種。價を數はず二具一對。皆極品を購求て。檀紙に裹せ。紅白なる。水引の紙撚を締て。名字を寫し袖に抱きて。遽しくかへり來つ。又客房に獨をり。澳路が出て來る歟とて。起て見居て見。俟不樂て。果は欠伸に涙陀む。睡氣覺しに隔亮を開て。鄰坐席を見亙せば。花も丹楓も浪速なる。浦の苫屋の秋ならぬ。長き春の日傾きて。下晡になりにけり。浩處に奥のかたより。年十七八可なる。一個の女子出て來つ。是則澳路なり。朱之介にうち對ひ。恭しく額をつきて。おん客さま長き日ぐらし。さぞ徒然にをはすらめ。景市主の恁々と。いはれしによりおん身のうへを。具に聞知侍りにき。獨那人のみならで。賤妾が主にも兄品にて。をはせしものを外々しく。うちも過

ぬがよし。只本意なきは異姓の兄弟。九个年以來相別れて。再會は這一夕歟。願ふははやくかへり來て。世に落着ぬ俺輿に。商量敵になり給ひね。といへば又景市も。愀然として嗟歎に堪ず。むかしは長兄が周防なる。山口へとて首途の。折から咱們と爪作と。倶に送りて別を惜み。今は咱們が周防なる。山口へとて赴けば。長兄に別を惜る丶。思ふ同士なる中を劈く。那里は劍の山口歟。是より迭に發迹て。竟に寶の山口と。なるよしある歟。前知しがたき。人間萬事塞翁が。馬の足搔に譬たる。日月は立とはやくとも。なほ春秋に富たれば。後會は又いくらもあらん。那大和にて入贅の。事を誰にか知らすべき。俺はいはねど口走らして。馬脚を露し給ふな。と辭を放ちて勵せば。朱之介は忽地悟りて。然なり離合は必時あり。縱賢弟は周防なる。枝店にて日を累ねずとも。俺亦武藏へ還去かば。あふとかたき天の一方。歎くとかは。是より別れん。舟行の無異を祈るのみ。と祝せば景市頷きて。翌の首途に伴侶あれば。再別を告ずして。曉かけて立出ん。なほ後會の折もあらば。遺れる意中を罄すべし。といふ間に中房なる。土圭の鱗るを傻れば。夜ははや八鼓になりにける。景市四下を見かへりて。扨も今宵は夜の短さよ。輿に乘せし長物語に。更闌たれば小厮們は。饒されてはや就寢りにけん。長兄も休らひ給ひね。といひつ丶手づから盃盤を。取て遽しく退きつ。程なく夜具を出し來て。臥簟を舖告別して。その身の子舍へ罷る程に。朱之介は幾番となく。歡びを述勞ひて。淨手に

きを祝し。別後の口誼細やかなるに。黄金は羞て應をするのみ。いふべき事もいひ難しを。澳路はこゝぞと精悍しく。朱之介に茶を看め。果子を薦めて款待けり。且くして朱之介は。茶を喫ながらつら〳〵と。黄金を見れば魂浮れて。思ふに倍たる美人になりぬ。むかし見たるは含の花。今は盛の楊貴妃櫻。外に儔は仲秋の。鮮明き月にも譬ふべく。肌膚清らに衣通りて。富士峯の雪に似たるべし。清亮たる聲音を聞ては。迦陵頻伽も恪やと覺え。徐々たる進止を覘へば。金蓮足下に開く歟と疑る。那神泉苑に雨を禱りて。歌を詠せし小野小町も。滋賀寺に車を駐めて。迷ひを覺せし京極御息所も。尚存命て相遇ば。必顰に傚ひてん。正是月宮殿の女仙謫せられて。遂に下界の凡胎に。降誕せしにあらざりせば。佐保龍田なる山野の神の。楓妖花精を走らして。後宮三千の顔色の。あらずなりにし風流少女も。是歟とばかり目を驚す朱之介は今さらに。娼きといふべくもあらず。聞くが如きは這良人なる。棧太とやらんは醜郎にて。取るよしもなき白物なるに。縱過世の果報なりとも。名花を手折て馬槽に。活て眺る烏滸の媚。産靈の神の愆歟。和漢今昔不平の事。美人醜郎を抱きて睡り。駿馬痴漢を騎て走る。若これをしも忍ぶべくは。亦孰をか忍ざらん。憐むべし〳〵。とくり返したる胸裏に。快らず思ひたり。登時黄金は朱之介に。三種の東西を贈られたる。歡びを述る語次に。澳路にも亦種々なる。愛たき東西を賜りしとて。他も歡び侍るなり。母御前は恙ましまさずや。今は陸奥

して禮なかりしは。奥と面亭と隔りて。聞と遲き故なれば。いかで允させ給へかし。則よしを新奥さまへ。聞えあげ侍りしかば。うち驚かせ給ふまでに。おん歡びは限りも侍らず。思ひかけなく義兄の君の。來ませしは什麼夢にあらずや。はやく對面せまくほしさに。おん案内をせよかし。と宣はせしによりてなも。おん迎にまゐり侍りにき。と告るをうち聞く朱之介は。含笑ながら膝を枳めて。原來おん身は澳路刀禰。景市の噂にて。緣起來歷咸承知。恙もなくていとめでたし。獨黃金の刀自のみならで。おん身も又俺爲に。女弟といふとも怪しうはあらじ。這義によらば介意なく。後々までも憑しからん。就て這二裹は。珍しけなき東西なれど。上なるは御新娘へ。一箇はおん身にまゐらする。折敷を貸させ給へかし。といひつゝ遞與すを受取て。思ひかけなく賤妾にさへ。御こゝろ屬れしおん土宜の。貺ものは最有がたう。戴き侍り。と歡びを。述てそが儘携て。誘とばかりに先に立つ。けふよりしての友衞。かよひ熟けん長廊下なる。船底張の板疊。拭磨きて塵もなき。春の澳路に引れゆく。朱之介は旣にして。黃金が便室の頭に來にけり。登時澳路は朱之介を。程よき處に留置て。走りて納戸に赴きつ。那一裹を漆折敷へ。手はやく載て遽しく。黃金の身邊へもてゆきて。箇樣々々と披露をしつゝ。却朱之介を見かへれば。朱之介はこゝろ得て。衣領かき合しうち咳きて。徐に席に找み入りて。軈て黃金に對面す。當下黃金は席を避て。上坐に請薦るを。朱之介は屢推辭て。寒暖を述恙な

笑ひ愛覆りて。樂しき事に思ひけり。左右する程にはや。這日も既に暮れしかば。菊燈臺の蠟燭にて。光を增したる珍客に。欵待はなは半酣にて。又夕饍の准備あり。澳路は時分をこゝろ得て。辭して庖厨へ退りしかば。傍に人のをらずなりたる。朱之介は折を得て。竊に黃金を挑みしを。黃金は聽かず振拂ひて。こは淺ましや何事ぞ。おん身は奴が兄品ならずや。調戲も人にぞよらん。要なき事をと。窘れども。朱之介は些も怯まず。なほ生憎に紆りて。兄品素より承知なり。倘わが妹にあらざりせば。主ある人を何とかすべき。曩に別れに及びし折。おん身の母御にいはれしよしを。はやくも忘れ給ひし歟。良人が妻を妹と呼べるは。即女弟に擬へたる。親みに由る故なれば。夫婦をなべて妹兄といふも。妹と兄の義なるべし。同胞もなき黃金が爲に。後々までの後盾に。賴むとありしはけふ再會に。結び添てん妹兄の天緣。是その語の識ならずや。若嫌れずは百稔の。命もいかでか惜むべき。おん身の心いかにぞや。應を聞し給ひね。と辭巧に。義理ならぬ。義理の柵搔遣難て。思ひ迷ひし女子の水性。黃金はいよ〳〵心動きて。又いふよしもなき折から。澳路が饍もて來とおぼしく。足響近く聞えしかば。朱之介は驚きながら。故の席に快退きて。大くも醉て臥たる像く。陽睡して呼べども起ず。登時黃金は澳路にいふやう。義兄は大く醉給ひしに。姑く睡らしまゐらせん。夕饍は且退けて。這盃盤も取納めよ。客房へは昨夜のごとく。義兄の臥簞を儲よ。と小厮們に吩咐て。儞も今宵は休

にをはするとかいとなつかしく思ひ侍り。奴がうへは景市刀禰に。大抵聞せ給ひけん。舊里の事はしも。見果ぬ夢の心地して。いと恥しくいと哀し。その折からの憂かりしを。思ひ出れば幾十里。距てひとり殘し置く。母親の事心にかゝりて。今も今とて一日も。胸安からず侍るかし。といふを朱之介は慰めて。そはその該の事ながら。壯なる者は必衰ふ。貧富得失各々時あり。咱們も亦這八九年。彼此と流浪して。今とてもなほ落着ず。曩には母と共侶に。遙けき周防へ赴きしに。叔父には得あはで母にすら。生別せし艱難憂苦は。一朝に說盡しがたかり。爾後東國に由緣を求めて。一大諸侯に仕へしかども。又故ありて遠さけられ。大和に旅宿しつると。兩三年に及びたり。並べいはんは烏許なれども。俺が薄命に比れば。おん身は過世歹からず。故鄉は初に似ずもあれ。恁る豪家の所望にあふて。計らず媳婦になり玉へば。歡びこれに優とおもはじ。といふを黃金は聞あへず。はやくも顏に緋櫻の。はづかはしさを紛かす。袖の刺着莩引拔て。そは宣はするとながら。家は富ても物足りても。心に任せぬと多かり。返らぬ昔の戀しきのみ。といふ間に幾箇の。女婢が手繰にもて出す。准備の湯羹。酒殽。處陝まで安排べつゝ。澳路が量酒に。盃を。薦る賓主の席を改め。管待丁寧なりければ。朱之介は景市にいはれしよしを思ひも出さず。献つ酬れつ半醉に。はやくも本色を露して。浮世雜談。迷語秀句。婦女子の機を攬る辯佞利口に。艷語をまじへて興ずれば。黃金はさらなり澳路まで。齊一

かゝりし程に有夕一黄金は。朱之介にいひけるやう。おん身の豫徴め給ふ。那唐布縣の手に入らば。東へ還り給ふならん。憖に相遇ふて。後の別を爭何はせん。然ばとて伴れて。奔てこゝを出てゆかば。故郷に在する母刀自の。さそな歎せ給ふらん。不義と不孝を身に駄て。なほ浮浮しきおん身にすら。棄らるゝとあるならば。悔ともいかでか及ぶべき。いぬる夜おん身が共侶に。東へ奔れと宣ひしを。左右なく承も引ざりしは。阽むよしのあればなり。恁れば這番は且相別れて。かさねて遇ふ日を俟んのみ。就て預けまゐらせん。と思ふ東西侍るなり。是を認りてをはする歟。といひつゝ軈て肌膚守なる。嚢を拿てうち披き。はやとり出す玉顆の玉を。鼻紙臺にうち乘せて。喃未主。曩に這玉の失せし折。おん身の母御に拾れて。不思議に返し給はりし。奴が秘藏の東西なるを。いまだ忘れでをはする歟。吵かりし比よりして。一日隻時も身に放さねど。今這玉を三顆分て。おん身に預けまゐらせん。誓ひ給ひし言の差はで。後々までも奴ぞ。と思ふて夜も日も身に着て。喪ひ給ふとなくは。かさねて這里に來ます日に。倶に奔りて妹と兄の。緣しを其處に結ぶべし。その誠心を見るまでは。親をも身をも思はずに。伴はれては出がたかり。この意を忘れ給ふな。とくり返しつゝ。私示して。玉は好みに任せしかば。朱之介は感じて罷ず。肚裏におもふやう。俺いぬる夜の私語に。黄金に倶して走らん。といひしは素謗て見つるのみ。非如納得せらるゝとも。只今はなほその義に便なし。爾るに後日

めかし。といふに澳路はこゝろ得て。いはれし隨に計ひつ。朱之介が身邊へは。四折屛風を建輪して。辭して子舍にぞ退りける。然程に小夜深て。曉近くなるまでも、朱之介は起出て。客房へは赴かず。遂に黃金と倶に宿て。通宵相譚曉しつゝ。黎明の比起別れて。その身の臥房に入りにけり。噫姦淫は人の大惡。三尺の童子といふとも。その非を知らぬものはなきに。性惡なれば。情を裂き。慾を禁る事をおもはず。朱之介が浮薄なりしは。又論ずるに足らねども。黃金も亦是不貞の婦。舊焦木には移るにはやき。火と土性の相生あり。只是のみにあらずして。朱之介とは幼稚き比より。一所に育ちし親み深く。年歷て再會しつるに及びて。艶冶妖麗相歡びて。法曹借さず。禽獸に。等しき罪人となるよしを見かへらず。是併前世の業因。脫れがたきよしさへあるを。後にぞ思ひ合されける。間話休題。是よりの後朱之介は。夜每に黃金と密會ふて。迭にその情慾を。放にしたりしかば。大和にかへるとをすら。虛虛として忘れたり。然けれども主人の妻。雄波は目も瞽耳も疎くて。何事も聞知らず。朱之介は黃金が爲に。兄品なりといふよしの。豫聞えしよしもあれば。遂に疑ふともなし。又城藏は日每に出て。屋敷巡りに暇なければ。恁るべしとは想ひもかけず。這他奴婢們の防禦には。澳路が進退脫落なく。その身は常に黃金が臥房の。次房に宿にければ。その姦淫を相資けて。些も外へ露さず。原這澳路も景市と。密通したる情由ある故に。主の與はわが爲ぞ。と念じて如之は相計ける。

る。澳路は顔色土の如く。駭怕れて一句も出ず。免させ給へ。とばかりに。身を戰して且くは。頭を擡得ざりしを。城藏呵呵と冷笑ひて。俺が憤は憖なれども。又汝か拵きにて。主を拯ふてその身にも。恙なき手段あり。われとても初より。嫂御に執心なきにあらず。左ても右ても兄の東西を。他人に賞翫せらるゝならば。俺も賞翫せざらんや。今霄は俺身朱之介に。先だちて嫂御の臥房に。潜びゆきて本意を遂ん。その折嫂御が不承知の。不の字だもうち出さば。汝も倶に覺期して。命はなきものと思へかし。もし又嫂御が承引て。咱們を慰め玉はらば。朱之介にも半分讓りて。一宿代りに嫂御にあはせん。俺がいふよしは神かけて。毫ばかりも鬼話なし。汝この議を嫂御に談じて。首尾整へて命を助かれ。等閑にして後悔すな。と飽まで權し懲さるゝ。澳路は慌迷ひつゝ。言承しつゝ退きて。黄金が側に人なき折に。城藏にいはれたる。縡の趣箇樣々々と。報るに黄金もうち驚きて。困じて今さら謀の。出る所を知らねども。まだ日も暮ぬに朱之介を。招きて商量すべくもあらず。主從共に氣を悶て。左さま右さま思惟るに。才に智略を得たりける。黄金は澳路に聶くやう。那城號の難題を。聽じといはゞ俺のみならで。儞も側杖打るべし。その殃危を脱れんには。儞と俺身と臥房を易て。今霄竊に睡るべし。願ふは儞俺が身代りに。謀りて那人と一夕宿よ。然らば昔の忠臣義士にも。劣らぬものと思はなん。この義を頼む。と他事もなく。拜ぬまでにかき口説けば。澳路は眉を顰して。縡の

の約束に。他が愛する玉を分ちて。預けんといへるをもて。その實情を知るに足れり。俺且武藏へ立かへりて。那里の首尾を繕ひて。事に假託け再來て。その打擾ふて將てゆかん。是に優たる分別あらじ。と尋思をしつゝうち頷きて。いはるゝ趣理りなり。這玉の事はしも。その傳來まで俺よく知れり。おん身の愛るものなるに。いかにしてうち忘るべき。こを後會の識にとて。預けらるゝはこよなき眞實。おん身と思ふて肌膚に着て。念じて後の便着を俟ん。因て思ふに這番は。獨東へ立かへりて。又出なほして來ぬるとも。一兩年に過べからず。いで〳〵といひつゝも。五色の玉を彼此と。擇みて三顆を手に拿て。白と黑きは陰の色。黄なるは土にて又陰なり。俺この三顆を預るべし。迹に遺るは赤きと靑きと。則陽の色なれば。咱們と思ひ給ひね。と諭して軈て件の玉を。その身も持る膚附の。護身嚢に歛めけり。這夜は雨の蕭やかにて。迭に饜ぬ睦語に、七鼓は過て明るに易き。別を惜む情慾の。安濃の浦に曳く綱ならで。たび累りしうへなれば。城藏竟に覷着て。娼きと限りもあらねば。有一日澳路を竊に召て。目には睨めど聲潜やかに。やをれ澳路。俺今汝に問ふとあり。嫂御は乃者朱之介を。夜每に臥房に掖入れて。忌憚らず樂まるゝは。汝が妁せしならん。俺は主人の次男にて。親と兄との留守を預る。身に太役を承たるに。閨門潰れし不義淫奔の。縡の始末を聞知りては。汝も倶に饒しがたかり。兄の爲に妻敵を。討て怨を雪んず。隱まず告よ。いはずや。と勢ひ猛く責問れた

ずはやく臥房を易て。宿ばやと思ふ程に。毎にはあらで主人の妻の。雄波が猛可に所要ありとて。いそしく人もて呼せにければ。折夕かりと思へども。いなで罷べきとにしあらねば。走りて納戸へ趣きしを。雄波は招き近つけて。喃澳路。甲夜過たれば夜務は退て。はや就枕でもあるべきが。霎時肩癖を擊て給。黄昏比より小女子們に。迭代に擊せしかども。小腕なれば些も利かず。果は孰も睡臥て。物の役には立ずかし。御新嫂に使るゝ。儞を召て夜深しに。俺身の按摩を執らするは。最も無心の所行ながら。且く賴む。と他事もなく。いはれて澳路は推辭によしなく。そはいと易き御用に侍り。賤妾とても指頭に。力なければ御こゝろに。稱ふべくは侍らねども。抓み療治に疲勞るゝまで。且阿肩より揉侍らん。允させ給へ。とさし寄て。擊つ肩癖の手拍子も。人こそ知らね間の歹き。今宵の事の膽向ふ。心ひとつに掛りても。又せん術はなで肩の。機轉利手に拈りては。立つに立れず。立でもの。腹には有繫易かたき。脊筋徐に撫降す。灸灼の潰痂這頭歟。と思へば避て右へ引く。七の兪九の兪苦の世界。十指の運動き暇なみ。十二三より使れし。根柢の主と宅母君の。所要に小夜の深ぬれば。那約束は脇に做る。穴所も知らで章門の。出し後れにならんか。と氣さへ心を揉勝手。手前勝手は人慾の。私雨にあらねども。外へはふらぬ鈴の間の。土圭も胸も狂ふとは。知らぬ雄波は笑しげに。やよ喃澳路太義々々。やうやく肩の輕う覺えて。重擔を卸せし心地ぞする。今宵は眠り易かるべし。憖

難義を知りながら。推辭まうすは忠をも義をも。思はぬものに似たれども。その事ばかりは饒させ給へ。といふを黃金は聞ゐへず。儞が澁りて承引ぬは。景市と情由あればならん。其頭の事も月來日屬。知らざるにあらねども。知りつゝしらぬ面色せしは。儞を愛する心の誠。然とはおもはで主の難義を。救はじとならば今面前に。刃に伏してわれ死なん。さる鬼々しき心とは。知らで早晚儞の與に。外視禦ぎてひともじの。臭きに蓋せし悔しさよ。と淚陀つゝ怨ずれば。澳路は困じてやうやくに。思ひかへしつ嗟嘆して。さまでに思召ならば。そは左も右もしはべりてん。いたくな怨み給ひそ。と勸解れは黃金は歡びて。爾らんにはおちゐたり。景號はいぬる日に。周防の枝店へ赴きて。圭里に在らねば那人と。宿るとも後安からずや。他し枕を易すとも。身をこそ任せ心まで。任せざりせば疵つかず。迹の滅るべきものならねば。術よく謀りて城號に。努曉得られな賴むぞや。然らば恁せん右し給へ。と謀し合する主從の。密談數刻に及びけり。憶ふに蛇は。その性淫なり。むかし大內義興の。燒亡せし蛇に大小ありて。煙の內に顯れたり。恁れば城藏澳路們も。亦那小蛇の後身歟。薄情かりける邪淫なり。

第三十回　閨門を閙して荷三太客を逐ふ　妓院に宿して朱之介禍に値ふ

然程に日に暮れつ。這夜も既に時移りて。音四との鐘の響くにぞ。澳路は黃金と約束を。錯へ

歩しつゝそが儘に。黄金が便室にぞ赴きける。却說黄金はその甲夜の間より。いかで術よく城藏を。欺んとのみ思ひしかば。二更の土圭の響く比。連りに澳路を呼びしかど。他にはあらで一個の女婢が。澳路は目今納戸へ召れて。老奥さまの肩癖を。打まゐらせて侍るなり。といふに默止して稍久しく。等ども等ども出て來ず。今にもあれ那人が。潜びて來なば爭何はせん。非如俺身ひとつを。澳路が臥房へ避たりとも。代りて這里に宿るものあらずは。何をもて那人の。手を容しうしてかへり去べき。這里と那里と近ければ。躱るゝとても見出されん。左やすべき右やせまし。と思ひ難つゝ安からぬ。胸うち騒ぐを鎮んとて。衣引被ぎて臥てをり。浩處に城藏は。櫓に澳路を黠く權して。今宵ゆかんといひしかば。他が必黄金に報て。綷のこゝろを得させしならん。われ朱之介に先たちて。日屬の想ひを遂んず。と尋思をしつゝ。人定りたる。その夜亥中の比潛やかに。黄金が臥房に來にければ。黄金は吐嗟と駭きながら。聲を立なば怒に乘して。殺しやすらん。と思ふにぞ。有繫に物のおそろしければ。身を縮して息もせず。城藏は這光景に。首尾こそよけれ。と含笑て。衾の内にぞ入りにける。噫嘻閨房の濫。中冓の言。墻に生ぬる茨に似たり。拂ふべからず說くべからず。その說べからざるものを。說くは則小家の珍說。こも勸懲を示すに在り。姦夫淫婦の恥を知らざる。人形にして獸慾なるもの。那一雙の牝狗を趕て。群狗喘ぎて亂走するなる。と又安ぞ異なるべき。現容止は美人にして。心の惡

いはゞ附もなき。問ごとに似たれども。面亭に在す逗留客の。朱之介刀禰とやらんは。黄金が爲に兄品の。好みありといふよしを。豫も傳聞たるに。黄金が對面すべきや。と問れし折には氣も屬かず。年來疎遠なりとても。義理ある兄公の來ませしならば。對面せん事勿論なり。宜く管待し給ひね。と允せし事は允せしかども。逗留もあまりに長かり。棧太郎も家老爺も。周防へゆかせ給ひたる。旅宿の留守の事なれば。其首に女才はあらざめれど。親み過して幾番も。對面は入らぬもの。甚麼黄金は爾後も。兄公に對面しつる歟。と問れて澳路は赧うなる。顏は瞽者に見えねども。片輪車も心あれば。轟く胸の苦しさに。推手も緩む迹戻り。言も訥りて姑くは。答難しを。然氣なく。否那大和の阿客人は。商賣用の多ければとて。彼へも此へも赴さ給へば。宿にいますは稀なり。と聞えしは現僞ぞ侍らん。新奥さまはいぬる日に。對面なされてその後は。といふても雄波は耳疎ければ。屢いはしてうち頷き。然ばかりにまでせられずとも。よき事はよけれども。わかき人達の心つきなく。思ひたがへもあらん歟とて。却爾には問ひしなり。序次もあらば御新娘に。俺身が恁々いひつるは。と報るともけしうはあらず。夜は深たらん休みねかし。臥簟は甲夜に布してあり。俺身はこの儘就枕りてん。火の用心を頼むぞや。太義々々。と勞ふて。養るゝは遲き身の暇。澳路は思はず吻とつゝ息の。曇りに冴ぬ鐘の音も。拍子脱して立つ腹を。横に臥さして衾かけて。告別して遽しく。走るも外へ憚りの。鼠

居宅の內にして。這里と那里は遠くもあらぬ。廊下傳ひの案內は。他に緣らずも俺よく知れり。眞夜半ははや過ぬらんに。今宵を空に過さんや。とひとり焦燥つ情慾の。禁むべくもあらざれば。横搔遣りつ起出て。廊下を過りて例の杉戸を。そと推す隨に開きけり。其處よりやをら潜び入りて。黃金が臥したる枕方なる。屛風を聊推開きて。進み入らんとする程に。と見れば思ひかけなくも。既に一個の男子ありて。黃金と倶に臥てをり。驚きながら遠火光の。刺すを便りに熟視れば。這密夫は別人ならず。主人の二男城藏なり。淺ましくも腹立しくも。心惡くも。鈍ましくも。その娼妬と堪がたければ。抓着まく思へども。俺とても俺が東西ならぬ。他の妻の重夫累姦を。咎めて撻ん理はあらず。黃金に情由を問もせで。性起らば不覺を取るとあらん。と深念をしつゝ。阿容々々と。外面へ退きて。惆然として又思ふに。那城藏は俺より先に。嫂と情由のありける歟。大槩は然もあらで。俺と黃金と情由あるよしを。那奴は誰にか聞知りて。這宵竊に抜駈して。不意に起て短兵急に。攻着て竟に乘取りけん。寔に夜擊の城藏が。陣法智略の素速さよ。若果して爾らんには。黃金は實情ならねども。他が意に任せずは。事の敗にならんかとて。俺が爲にこそ從ひけめ。澳路に問はゞ是等の意味の。具に知るゝよしあるべし。と思ひかへしつゝそが儘に。又次の間に赴きて。見れば澳路は熟睡して。搖覺せども每よりも。遲く臥したる睡端の。春の短夜貪宿く。靑年女子の癖なれば。應するだに夢ごゝろ。時移るまで

女なきにあらず。姿の美なるは人僉見れども。心の醜は人に見られず。その見る所の美惡より。見えざる所に美惡多かり。類して美惡を心に擇まば。誰か黄金の美を羨み。誰か黄金の色に迷ん。便是張文成が遊仙窟。紫氏の源語の餘涎を舐りて。時好に筆を曲るにあらず。看官こゝに見るよしあらば。作者の辨を俟ずして。無明の酔を醒すもあらん歟。間話休題。再説その夜艾。澳路はやうやく子二刻比に。納戸より退き來て。黄金の臥房に入らんとせしに。こはいかに何の間にか。黄金は旣に城藏と。枕を並べて臥てをり。淺ましき事今さらに。いふべうもあらざりしを。はやくも其首を退きて。次の間なるその身の臥簟に。還り入りつゝ思ふやう。今宵に限りて生憎に。納戸へ召れて更闌るまで。引着られてありしかば。那約束の時刻後れて。心ならずも新奥さまの。御難に遇せ給ひけん。俺身の役を免れしは。歡しきに似たれども。いひ甲斐もなく牲に。做せしとて怨み給はなん。鈍ましきとしてけり。と臍を噬まで悔しきを。祐る神はなけれども。祭渡りし筑摩鍋。神輿を安措て睡一睡。翌快起て賠話せん。と思へば帶を解捨て。軈て枕に就にけり。恁りし程に朱之介は。夜毎に澳路が暗號して。黄金が臥房へしのばせしに。這宵は小夜の深るまで。絕て音づれなかりしかば。いかに／＼と俟不樂て。睡らんとするに宿も寢られず。つく／＼と思惟るに。黄金が臥房の頭には。澳路ならで宿るものなく。導引に夜來を累ねしかば。他はやうやく懈りて。睡忘れたるに疑ひなし。おなじ

左右に媚たる爲体に。相似てなほも甚しき。濫行邪淫に恥を知らざる。白物們の癖なれば。城藏と朱之介はやうやくに。和睦しつ。交り柳巷に相伴ふ。嫖客に異ならず。迭に秘すべき閨房の。秘事さへに隔なく。公然として相譚つゝ。日毎に晝は酒うち飲て。夜は淫樂を事とせしかば。朱之介は虚々と。大和へ還ることを思はず。城藏は親の外代に。出る活業をうち忘れて。莫逆知已と唱るのみ。家事理らず臭聲聞えて。世の胡慮になりぬべき。事情を原るに。城藏が朱之介を。忌嫌ずして親しうすなるは。他が黄金と情由あるにより。その破隙に跟入りて。謀りて本意を遂たるに。俺のみ獨羸せんとて。强顔丁らば黄金も怨みて。俺が自由にはならざるべし。一宿代りに他に讓りて。迭に慾を分つときは。黄金も俺を女才にせず。非如世にいふ强顙なりとも。生涯よく畔を讓りて。竟に一畝も失ずといふ。諺に似て俺に利あり。倚親兄に這事聞えて。發憤しくなるとても。その折には朱之介に。口を開せず塗着る。活路あり。と尋思して。後々までも忌まず嫌はず。又朱之介は是より先に。城藏が事の趣を。黄金に聞て腹は立ども。今さら他と長短前後を。爭ふときは俺が事敗れて。黄金と長き別れにならん。黄金が他に從ひしは。俺に別れん事の惜しさに。恁々といひし誓言は。是實情の致す所。且く城藏と和睦して。一宿代りに餌を養はゞ。他も亦望足りて。俺が身の爲になるとあらん。宿遊女に譬ていはゞ。他は客なり。われは間夫なり。そを娼んは倒に。胸陝き所爲なるべし。と思ひにけれ

覺ざりける。寢貌を熟うち目戍りて。是を黃金に比れば。二の町過ぎて三の町。四月初旬の初堅魚と。五嶋鯆に似たれども。黃金は既に先客あり。這宵はこれを名代雛妓。手を空くして客房へ。罷りて獨宿るには優ん。原景市の情人なれば。亦是緣なき衆生にあらず。こを濟度して持にせん、と腹に計較む浮氣の惡性。行燈を風と吹滅して。その懷に入りしかば。澳路は忽地駭覺て。城藏なりと思ひしかば。鬼に取らるゝ心地して。念じて些も聲を得立ず。然るにてもこゝろ得がたきは。這宵の約束齟齬ふて。城藏主は既にはや。新奥さまのおん臥房に。潜び來ましして共侶に。宿給ひにきと思ひしが。鈍や夢にてありける歟。もしその事の夢ならば。這里は俺が身の臥房にあらで。入替りてこそ睡りけめ。爾らざりせば城藏主の。新奥さまぞと思ひ違へて。わが方に來ますとやはある。嚮には兔れて嬉しや。と思ひしは空憑めにて。竟に脫れぬ腐緣。せん術なし。と覺期をしても。思ひ惑ひし事なれば。朱之介とは知らずして。空に枕を並べつゝ。天の明る比やうやくに。城藏ならぬを悟りしかども。世に亦儔多からぬ。艷治郞なる朱之介。と結びし假寐の夢なりければ。覺るを惜しと思ふのみ。知れども知らぬ面色して。後々までも。この事を秘して黃金に報ざりけり。是よりして城藏は。朱之介と一宿替りに。黃金が臥房に暢ふと。此彼共に懈怠なし。勢ひかくのごとくなれば。黃金は朱之介にのみ。會んと欲すると克はず。譬ば阿夏が佛生山にて。夜行太黑藏二名の賊の。耦配の妻にせられて。

棧太郎は幼稚き比より。質弱多病なりけるに。今又病後の事なれば。陸路を籃輿にて還れとて。他には従者兩三名を。隷て前日に起行せ。荷三太は左界より。將て來つる從者を。才に一名隨へて。浪速へ赴く海船に。便りを求めうち乘て。浪路を風に儘せしに。日毎に順風なりければ。歇舟するとは稀にて。思ひしよりなほ速に。左界の港口へ乘着しは。肆月廿六日の。眞夜半比の事にぞありける。又棧太郎は初旅の。かへさは親と立わかれて。獨自由を得たりしかば。這里に立寄。那里に憩ひて。專遊山翫水の。爲に日數の後るゝを。迎に人を出されて。やうやくにしてかへり着けり。是より先に荷三太は。港口へ船の着し時。眞夜半なれども居宅まで。五六町に過ざれば。又那從者一名を將て。宿所へかへり來にけるに。小夜深たれば熟睡をしけん。奴婢們をな閙せそとて。潜やかに背門より入りて。雄波に對面しつるのみ。黄金にも城藏にも。かへりしよしをいまだ知らさで。そが儘納戸に就寢りたる。詰朝快起て。早飯を果せし比。且はや黄金に對面して。棧太郎も恙なく。かへり來ぬるよしを報んとて。黄金が便室に赴きしに。昨夕は朱之介があふ夜にて。曉かけし私語に。些も睡らで明さん。と思ひしかども夏の宵の。人貪睡き比なれば。思はず倶に熟宿して。既に天は明日の出て。窓の戸節に刺す影を。枕に受てもまだ覺ず。とは知らねども荷三太は。這光景に快からず。青年女子の癖なればとて。俺們親子が長旅の。留守に朝宿はよからぬ事なり。快覺さんと思ひつゝ。黄金々々と呼び

ばこれらのよしを。黄金に聶きこゝろ得さして。形のごとくに相計ひつ。陽情ばかりは城藏と。莫逆になりたるなり。左右する程に春は過て。四月も下浣になりけるに。黄金は季春の比よりして。二个月月水を見ず。乳頭の色も黑むにより。懷胎にもや。と心に掛れば。朱之介に聶き報て。倘有身たらんには。おん身の胤で侍れども。良人の旅の留守なれば。いひときがたき所あり。什麽いかにしてよからんや。と問ふを朱之介は聞あへず。世に八月出生もあるなれば。月足らずとも棧太郎が。還らば塗着給へかし。倘又久しう還らずは。城藏に商量して。竊に墮胎すもよかるべし。實に口が子歟。城が子歟。正かに知るよしなきものを。他も亦然ばかりの。骨を折るとて恩でもなし。苦勞にすべき事にはあらず。といとも易げに慰めて。些も掛念せざりけり。然程に。主人船積荷三太は。今玆正月の初旬より。その子棧太郎と共侶に。大內家の城下なる。周防山口の枝店に赴きて。逗留既に三四个月。快にも還るべかりしに。那里の主管小厮們が。流行病に犯されて。久しう起も得ざりしに。剩棧太郎もおなじ病症にて。うち臥したると一月あまり。やうやく四月の中旬に暨て。主僕瘥り果しかば。初て進退自由を得たり。この故に左界より。景市並に小厮們を。三四名召とりて。その闕たるを補ひしに。枝店の小厮兩三名病痾によりて親里へ。遣したるはいまだ還らず。身まかりたるもありければ。景市をも及左界より。來つる小厮をも枝店に留めて。荷三太と棧太郎は。左界へ還らんと欲するに。

が。大和より尋來て。久しく逗留せらるゝならずや。何等の故に三四ヶ月。留めて大和へ返さぬぞ。と問れて城藏さん候。那人は一百反の。唐布をも買とるべく。沙金も多く兌せんとて。尋ねて這里へ來つるなり。爾るに知らせ給ふごとく。唐布は船間にて。その數足らず候へば。入津の日を俟んとて。逗留途に今に及べり。勿論嫂御の兄品にて。總角の比母親と。共に福富の宿所にをり。爾後他郷へ赴きて。疎遠に過せしよしなれども。又苟且の客人ならねば。出てゆけともいひかたさに。その意に任し候ひき。といひ矚るを荷三太は。聞つゝ頭をうち掉て。そは生活の爲なりとも。家には妻子もあるべきに。長逗留は要なき所行なり。況今茲は唐布の新渡なければ荷は整はず。縱何時まで俟るゝとも。望の稱ふべくもあらねば。這義を報てけふ速に。出し遣ることそよかゝめれ。然とも那人疑ふて。還らじといはゞせん術あり。畢竟和郎も由斷なり。等閑にな思ひそ。とこゝろありげに吩咐れば。城藏は瘀もつ足の。臑毛拔るゝ心地して。痛入たる親の裁斷。倘俺がうへさへ知られはせずや。と思へど色にも顯さず。只阿唯阿唯。と言承して。その身の子舍に退きつ。朱之介を竊に招きて。只今親にいはれし趣。箇樣箇樣と耳語告て。この事必謂あるべし。親爺は昨夕眞夜半比に。船着きたりとて還られたり。爾るに嫂御は今までも。昨夕の儘に起ても出ず。女婢們に諮ねしに。持病の癪もや發りにけん。とばかりいふて誰も得しらず。思ひ合する事はなきや。と問れて朱之介は慝むによしなく。さ

ながら。建たる屏風に手を掛て。二折許引開て。と見れば思ひかけなくも。黄金は一個の後生と。枕を並べて臥たるが。この時倶に驚覺て。起んとしつゝ男女齊一。無慙や主人と面を照して。怕慌つ避易したる。朱之介は度を喪ひて。吐嗟とばかり平張俯すを。黄金は透さず襟うち被て。頭顱隱せど尻癖の。歹き科とて術もなく。綻びけらし寢間衣も。繕ひがたき大難義。折もあし邊の蟹ならで。穴はなき歟。と思ふのみ。身の置ところなかりけり。慥りけれども荷三太は。素より思慮ある老煉の。なほ堪忍を旨として。駭きながら罵も咎めず。手はやく屏風を引輪らして。足はやに退きつ。軈て納戸に立かへり。妻の雄波にうち對ひて。逗留客の有やと問ふ。當下雄波は朱之介が。事の趣恁々と。聞つる隨に報知して。那大和なる商旅は。黄金が爲に兄品の。舊き好みのあるよしなれど。對面は只一度のみ。日毎に彼此出あるきて。宿には在らずと聞侍りき。といへば荷三太冷笑て。目さへ耳さへ疎き渾家の。何事をかよく知るべき。身の正直に思ひ比べて。人毎に皆正直ぞ。と思はゞ不覺の事あらん。そは城藏に問ふべけれ。と呟きつ掌鳴らして。城藏召べとて呼せけり。然程に城藏は。昨夜半に親荷三太の。歸郷を夢にも知ざりしに。今朝は未明に呼覺され。よしを聞起出て。そが儘父に對面して。留守中の所要を述。損益を論じなどして。その身の子舍へ退りしに。且くして又召れしかば。走りて納戸へ赴きしを。荷三太身邊へ招きよせて。やよ城藏。聞くに黄金が兄品なる。朱之介といふ後生

離縁を薦めて親里へ。還さんとこそ思はれけめ。この義も安危の定る日に。俺亦はやく〳〵報まうさん。といふに朱之介は歎びて。爾らんにはおちゐたり。且宿易を急ぐべし。と聶き果て遽しく。客房へ退きて。旅行の打扮故のごとく。特に手はやく整て。却城藏等に別を告て。浪速津投て立出けり。是よりの後城藏は。竊に怕れ身を阽みて。黄金が事を思ひ絶けん。猥褻がはしき舉動せず。俺幸ひに美日にあふて。朱之介只一人を。損代に出せしは。このうへもなき造化なり。と思ひにければ後々まで。閨門おのづから理りて。制せざれども牆に鬩ぐ。外の侮りなかりけり。遮莫黄金は初より。實情をもて城藏に。兩路かけし契りにあらねば。そこらの事は倒〳〵に。物怪の幸に似たれども。心にかゝる朱之介が。出て往方と身の久後も。測りがたきは舅の胸裏。罵りもせず咎めもせねど。面目もなき愆を。いひも釋れずその朝より。持病の積に假托て。臥房籠りに長き日を。消し難つゝ不樂しさに。壁に向ひてつく〴〵と。おもひ疲倦れて苦しくも。吻とつく息は雲となり。雨となりにし夢の跡。結びも果ぬ妹と兄の。山外戀しと歎きたり。案下某生再說。朱之介晴賢は。思はず左界に逗留して。邪淫の爲に家路を忘れ。虛く々として在りける程に。竟にその事發覺れて。主人船積荷三太に。逐出されて又さらに。進退其首に谷りしを。城藏が云云と。慰めしをのみ心當に。且攝津州まで退んとて。住吉を投てかへりゆく程に。肚裏に思ふやう。俺唐布を買ん爲に。左界に杖を留めしに。折の歹くも手に入

ればとよ。その事なれ。今朝は咱們も黃金さへ例の時刻を宿遺れて。日の出るまであわりける程に。鈍や親公に見られたり。その爲体は恬々なりき。と今見るごとく聶き示して。かの折咱們は親公と知らぬを。黃金が目注で諭せしかば。撲仆して逃んはさすがにて。われにもあらず狽狽て。活たる心地もせざりしに。罵も咎めずそが儘に。親公の退き給ひしかば。透を得たりと脫出て。客房にかへり來にけれど。左ても右ても這里にはをられず。逃去らばや。と思ふものから。那唐布の一義もあれば。和君に商量して後に。と思ひかへしておりけるに。遲出さるゝのみにして。事治らば且めでたし。しかはあれども唐布と。沙金の二種手に入らされば。大和へとては還りがたかり。いかにせまし。と陶惑の。密議に城藏又駭きて。それにて事は稍解せたり。然のみな思ひ屈し給ひそ。沙金の事は今でも易かり。唐布は新渡なし。と親爺のいひしはこゝろ得がたかり。哥々を出し遣るべき爲の。搗鬼にもやありつらん。程なく船の入るべきに。左も右もしてまゐらせん。哥々は這里より程遠からぬ。攝津州住吉の社頭なる。岸松屋といふ客店に。宿易をして俟給へ。那岸松屋の主人とは。咱們相識ならねども。その名は這里へも聞えたり。今その旅亭を定るは。後日に音耗せん爲なり。這義を忘れ給ふな。と世に憑しく慰れば。朱之介はうち頷きて。いはるゝ趣こゝろ得たり。黃金はいかになるべきや。と問へば城藏沈吟して哥々のうへだに無異なれば。親のこゝろを推量るに。兄棧太郎の歸鄉を俟て。

る歟。咱們は大和の旅客なるが。左界の所親許赴きて。目今はかへるさなり。爾るに人と約束せしとあり。その人誨て。住吉なる。岸松屋に逗留して。音耗を等。といはれしかば。その旅店に宿を投ん。と思ふものから不知案内にて、心もとなきよしもあれば。且這主人に問たるなり。といへばその人頷きて。いはるゝよしはこゝろ得たれども。和主知らざる所あり。那岸松屋は年々に。活業やうやく衰へて。借財多くなりければ。債を償ふと克はず。この故に家を鎖して。門を賣居の紙牌を貼出し。外の借屋へ轉宅せしは。四五日前の事なりき。といふに朱之介は駭歎じて。そは亦的が違ふたり。約束せしは岸松なるに。外の客店に宿を投て。僕とも使の索わびて。遂に屆かずなりぬべし。さても〳〵。とばかりに。困じ果たる面色なるを。件の俠者慰めて。爾らんにはせん術あり。咱們は十三屋九四郎と喚れたる。地方で一二の俠者なり。那岸松屋の舊宅の。東鄰は咱が宅にて。西鄰は空地なり。こゝをもて岸松屋を。訪來るものゝ一人として。わが宿所に立よりて。他が往方を問ぬはなし。咱們は客店ならねども。けふより和主の宿すべし。然らば約束せし人より。異日に使を來さるゝとも。索當ざる事やはある。この義に從ひ給はずや。と他事なかりける俠氣の。いと憑しく聞えしを。朱之介は承歡びて。そは思ひかけもなき。好意にこそ候なれ。晩生は大和なる。上市の商旅にて。朱之介と喚るゝものなり。宜くひ計給ひねかし。と賴めば九四郎異議もなく。然らば咱們と共侶に。日の暮れぬ間に急ぎ

らず。なれども春より三个月の。僦賃わるを取られねば。わが金は故の儘にて。なほ二裏こゝにあり。大和へかへると克はず。武藏へ歸參しがたくとも。是だにあれば往さき毎に。四海皆兄弟なり。又憑しき友達いで來て。落着く處のありもやせん。そは己とを得ざるの所爲にて。俺が本意ならぬ事なれば。且城藏が意見に任して。黃金が安危も聞知るべく。唐布も買るゝならば。買て大和へ還るに不如。と尋思をしつゝ急ぐ程に。はや住吉へは半里ばかりも。あるべからんと思ふ頃。物欲しくなりしかば。その路の傍なる。村落酒肆に立よりて。尻掛酒を喫ながら。酒肆の主人を見かへりて。翁よ問まくほしき事あり。住吉の社の頭に。岸松屋といふ客店あるや。と問れて主人は頭を傾け。那社頭には海船の。宿する客店多くあり。岸松屋も姬松屋も。有としならばありもせん。己は聞知り候はず。といふに朱之介は疑心起りて。なほ云云と諮る折。後の発に尻を掛て。憩をりし一個の男子あり。朱之介を呼かけて。客人咱們は住吉の人氏なり。抑何等の所要ありて。岸松屋を問給ふぞ。といはれて朱之介は駭きながら。急にその人を見かへるに。身長高く全體肥て。面は薄赭色なるが。年歳は四十有餘なるべし。身には仁田山紬の大縞なる夾衣に。皂紗綾の裏衣領とかいふものを被たるを。二領ばかり襲着て。腰には白金の重帶したる。苛物作の長腋刀を横佩たり。若是角力士にあらずは。必地方に名の賣れたる。俠者なるべしと思ひしかば。遽しく會釋をして。原來和君は住吉の。里人でをはす

なる。惡心あるべきものにあらず。然るをなほ疑ふて。所藏の金は多からず。と僞りて預けずとも。夫婦に賊心あらんには。殺して奪んも易かるべし。いはるゝ隨に預措かば。倒に後安かりなん。と尋思をしつゝ一議に及ばず。心屬れし親切の。歡びを述金を出して。九四郎に預けしかば。九四郎受とりて數撿るに。百九十五兩ありけり。初落葉が朱之介に。遞與せし金は二百兩なり。そを二兩は京師と左界にて。路費と贈東西などに用ひしを。今又盤纏の爲にとて。三兩遺して預けしなり。登時九四郎は。女房乙藝を身邊へ召て。辞憑々と言示し。金預りの手實を寫て。朱之介に遞與しつゝ。そが眼前に件の金を。乙藝に簞笥へ藏めさせて。緊しく鎖してその鍵を。乙藝に預けて。留守の間の。用心を教諭しつ。その詰朝幾十名の。講夥計と共侶に。海船にうち乘りて。安藝を投てぞ走らせける。是よりの後九四郎が。義弟乾兒の後生們は。日毎に立替り入代り。詣來て留守の安否を諮ね。或は東西を贈るもありて。朱之介にも親しくなりけり。恁りし程に朱之介は。いかで日屬の鬱胸を。醫さばやと思ひつゝ。有一日酒を活ひ。魚肉を徵め。件の後生們に薦め團坐をさして。四表八面をうち相譚せて。をさ〳〵笑ひ樂む程に。後生們がいふやう。客人は這頭に名高る。乳守の里を視給はずや。江口神崎は衰へたり。京師の外に乳守に優たる。柳巷は又あるべからず。誘給へ。俺們案内を仕らん。よき家裏にあらずや。と言語齊一そゝのかせば。色好みなる朱之介。然らでも醉たる癖なれば。聞つゝ連り

給へ。けふは這頭に所要ありて。來つゝ咱們もかへさなり。酒をも喫つ思ひの隨に。憩ひにければ誘ゆかん。やよ快々と急ぐにぞ。朱之介は遽しく。酒肉の價を主人に取らして。菅笠引提て九四郎が。後に跟きつゝ出にけり。恁而十三屋九四郎は。朱之介を伴ふて。はやく宿所にかへり來つ。女房乙藝に恁々と。朱之介が事を告しかば。乙藝は軈て朱之介を。褊室に休らはして。茶を看め饍を羞めて。最丁寧に管待けり。是より日々に朱之介は。主人の進止を見て知りぬ。その活業は櫛挽にて。店舗に職匠兩三名をり。そは皆乙藝に任用して。九四郎は活業を旨とせず。年來地方の後生們の。頭梁品に立られて。鬪諍の摺擇。夫婦の離別。或は人の子の勘當せらるゝを。和解て舊へ納るを。已が任にしたりしかば。宿所に在ると稀なりけり。然程に朱之介は。思ひがけなく九四郎が。俠氣をもて主せられて。をると一旬にあまりしかども。城藏が浮薄なる。亦音耗をすべくもあらぬを。いかに〳〵と俟不樂て。狐疑して安からず思ふ程に。有一日九四郎がいふやう。咱們は嚴嶋の辨才天の。百味供の講頭なれば。翌は船路を安藝へゆくなり。勿論和主の逗留は。何時迄なりともけしうはあらねど。商旅の事なれば。本錢も盤纏も多かるべし。懷にせし金あらば。咱妻乙藝に預け給へ。爾らば手實をまゐらすべし。咱們が這里にあらんには。非常の怕れなけれども。旅宿の留守には他鄉の客を。侮るものゝありもやせん。故にこの義に及ぶのみ。といふを朱之介はうち聞て。肚裏に思ふやう。現這主人の俠氣

稍久しくして。那今様は臥房に來にけり。然ども痞の發りしとて。うち解もせずそが儘に。背を抱せたりければ。朱之介は艴として。その無禮なるを咎めしかども。然しもいふ甲斐なかりしかば。思ひしにも似ず興盡て。酔に堪ねば熟睡をしたる。その間に今様は朱之介が。脇挿の。刀を竊に引拔て。みづから吭を串きつ。俯たる隨に死にけり。この故に朱之介は。濡衣を被せられて。領主の廳に牽れつゝ。緊しく獄舍に繫れけり。その綷の趣を。なほ詳に知まく欲せば。そは編を繼ぎ卷を易て。第四輯の開場に解分るを聽ねかし。

近世説美少年錄第三輯卷之五 終

に雀躍して。ゆくべし〳〵。行ざらんや。咸共侶に。と身を起すを。乙藝は屢禁れども。朱之介は聞ぬ態して。蹌踉きながら立出たり。そが中に二三名。乙藝に叱られ呼禁られて。遂に得ゆかずなりしかど。六市四摠と呼倣る丶。此彼兩個の後生は。そが儘朱之介に從ひて。乳守の里に赴きつ。柳巷内を那這と。且く浮れあるく程に。朱之介は今宵初て。路柳牆花の美麗しく。鄭聲艶曲の狡猾しさを。目撃したる事なれば。魂さらに身に附はず。誘青樓に登らんとて。獨をさ〳〵進みしを。六市四摠は酒の醉と。共に興さへ稍醒て。天明て倶にかへりゆかば。牽出せしを科にして。いよ丶嫂御の腹を立て。哥々が還らば必告ん。紛て戻るに優とあらじ。と思へども然はいひ難て。浮世袋屋と喚倣したる。乳守第一番なる。名樓へ案内をしつ丶。件の二人は引外して。逃て宿所へ歸りけり。且くして朱之介は。六市四摠が逃たるを。知るといへども今さらに。出てゆかんはさすがにて。妓有に引れて樓上にうち登り。目擇て本樓第一と聞えたる。今様といふ名妓を央けり。獻酬の玉觴。初會の式禮事訖れば。いまだ客なき遊君們。幾名歟聚來て。歌舞艶曲の技を盡し。或は馬潑六して興を催す。快樂の歡會いふべくもあらず。その席上の光景と。洞房の趣は。毎輯楮數に際限あれば。具に述るに遑あらず。看官宜く猜すべし。愒而更闌席散りて。朱之介は了鬟に。倡導れて臥房に入りぬ。綾羅錦綉の重衾。沈麝鷄舌の香の薫。亦人間の東西としもおもほえず。身は遊仙の崫に。神女と睡る歟と疑はる。俟と

み同くして。技と心術と同じからざれば。竟に相及ざる者。比々として皆是なり。非如百曾參。百人麻呂ありといふとも。彼の曾子と我柿本氏に。損益あるとなし。其才其德同からざる故なり。又其物同くして。其名の同からざるは。萬をもて數ふべし。古歌に所云。浪速の蒹葭は伊勢の濱荻。今更毛擧に遑あらず。本草啓蒙に錄する所。一物にして數名あり。土呼方言も。亦知らずはあるべからず。今吾是編に名けぬるも。他と相似たる意味なきとを得ず。是も亦其物同くして。其名異なりとやいはるべからん。漫に自笑して。毫を著作堂の南簷に閣く

弘化二年乙巳春正月之吉

蓑笠漁隱重序

新局玉石童子訓小序

設夫以れは。和漢今昔。其名同くして。其物同じからざるあり。玉のいまだ磨ざる者。是を璞といふ。鼠の既に死したる者。亦之を璞といふ。鱗族の長を龍といふ。又星宿を龍といふ。駿馬の千里なる者。又是を龍といふ。此は是一名にして三物なり。又鳥の子を雛といふ。上巳の木偶亦是を雛と云。係る類極て多かり。在昔唐山魯の哀公の時。魯國に曾參あり。こは孔門の随一人。賢にして且孝なり。是時に當りて。宋國に曾參と云者あり。其性兇悪にして爲ざるとなし。後竟に人を殺して。彼身刑せらる。其璞と云將龍と云。雛と云曾參といふ。其名一なり。其物の異なるを辨ずるときは。宛宵壌の差別あり。世に由縁もなき高名才子の。名號を冒紛らして。生活の便宜に倣す者あり。唐山の曾參と。天朝の人麻呂に焉ぞ異ならん。昔は天朝に。人麻呂と稱する者。前後七人あり。然れども古俗今俗。人麻呂とだにいふときは。柿本氏を指ざるはなし。那高名才子の名號を。取りさて己が名として。世俗を眩惑しぬる者。只其名の

新局玉石童子訓巻之一上冊

東都　曲亭主人口授編次

第三十一回　自傷の落花衆人を惑しむ　無明の臺月正婦を繋ぐ

在昔孰の御時。孰の國に歟ありけん。槐の郷蟻宮村といふ一村落に。架空先生と喚做たる生儒ありけり。原是京家の學士にて。江家の流を汲む者なれども。其性清白に過て。世と推移るとを得ず竟に這頭に流寓ひて。里の總角等に。手迹を敎るをもて。生活にしぬる程に。客を愛する癖あれば。手習兒等皆辭し去て。最徒然なる折は。田夫山妻。這那となく訪來ぬる毎に。其好む處の稗史小説を說和げ。或は古人の賢不肖。善惡邪正を論辨して。善を薦め惡を懲し。自警め他を誡ると多かりければ。鄕黨等相歡び信て。皆其話說を听まくす。然ば架空先生は。有一日耕作の暇ある莊客等が。うち連立て來にけるを。集へて是に告て道く。俺昨宵奇妙なる夢を見たり。夢は果敢なき者なれば。泡沫夢幻と浮屠家も說にき。遮莫周禮に占夢の官あり。上古唐山姫周の時。原夢をもて事の吉凶を判斷したり。然れば我大帝國も。邈古は貴賤夢を取る

新局玉石童子訓卷之上帙五册目錄

介は。月瞻る宵の雨障り。雲と倣るべき樂みの。いまだ央ならずして。酒の醉さへ興覺て。腹立しさは涯りなきを。罵懲さんはさすがにて。左さま右さま思ふやう。俺青樓の遊樂は。只是今宵創なれば。意氣地とやらンに疎けれども。這奴何等の所以ありて。今業平ともいはれぬる。咱等を慘兒背着けん。情態寔に解かたかり。非除是等の容華は。色香を馨して靡くとも。路の柳。牆の桃のみ。黄金が容顏眞實情に。豈優らんや。最烏滸なり。恁とは知らで浮れ來て。可惜錢を費しにき。悔しき事をしてけり。と思ふ兀自宿も寢られず。蔫兒なき夜は忘れ草。忘るゝとにはあらねども。歎息盡て短夜の。深ゆく隨に心疲れて。寓處なき宵は船底の。枕外すを覺ぬまでに。竟に熟睡をしたりける。恁而丑三の時候にやありけん。朱之介は睡覺て。寐返をせまくするに。最腥き血歟。水歟。流れて枕兒を浸せしかば。訝りながら頭を擡げて。其頭を倩と見かへるに。噫無慙やな。今樣は。刄に吭を刺串きて。俯して我身邊に在り。那身はさらなり。衾兒も蒲團も。皆是朱に染做て。亦生べうもあらざりける。今這事の光景に。朱之介は且驚き。且慌て聲を惜まず。事あり。事あり。と叫びつゝ。屛風を連りに打鳴せば。左右の坐席に臥したりける。嫖客も娼妓も駭き覺て。倶に間の重紙戸を。悄と推啓き闚窺て。吐嗟とばかり聲も得たてず。怕れて又夜衣を被ぎて居り。有斯る折から一個の妓有が。客の間每の行燈の。油を遺なく餙足さんとて。油壺を攜て。廊下傳ひに來にける程に。今朱之介が事あ

事あり。崇神天皇の四十八年春正月巳卯に。天皇詔して。兩箇の皇子。豐城命と活目尊の。各貢し、夢によりて。天日嗣を定め給ひし事。日本紀に見えたり。又欽明天皇は。初皇子にて在し、時。瑞夢空しからずして。後竟に大位に即給ひにき。恁れば丁固の腹に。松生たりと夢に見て。後竟に三公に登りしといふとも。誣たりとすべからず。俺見し夢は是等と異なり。各位も聞つらん。近曾世に隱れなき。那惡青年。末朱之介晴賢が人成りはさらなり。大和の由緣を立去りて。浪速の浮世袋屋にて。不測の禍を釀したる。其事の起りまでは。既に世に聞えたれども。其後の事は甚麼ぞや。是を知るよしなかりしに。所云昨宵俺夢に。他が上に就て。其後の事いへばさらなり。兩善童年と聞えたる。大江茂林四郎成勝。峯張栄六郎道能等。主僕出世の顛末まで。具に是を知り得たり。汝等が爲に說出さん歟。言長くとも听ずや。といふに大家歡びて。そはこの年來日屬より。渴に水を欲する如く。聞まく思ひし事に侍り。いかでいかで。と促せば。架空先生えたり貌に。書案引よせ扇子を笏に。其物語にぞ及びける。却說。末朱之介は料らずも。住吉なる。十三屋九四郎許旅宿の程。酒癖の舊病禁め得ず。當晚那乳守の里の妓院なる。浮世袋屋に名もしるき。今様と枕を並べて。一夜の夢を結まく欲せしに。憶ふにも似ず今様は。猛可に痞發りぬとて。背推向け。陽睡して。呼び搖動せども應せず。是等の事の趣は。前輯第三十回の。結末に寫し出したれば。今又こゝに具にせず。然ばこそあれ朱之

思ひしを。いまだ佳境に入さるに。六市四揔は逃去りて。鈍や俺のみ這里に在り。這今様を呼取しに。自餘の娼妓も聚合來て。艶曲歌舞に慰められし。其席稍竟りて。臥房に入りては趣もなく。俺敵手なる這今様は。持病の痞發りぬとて。背向に臥て呼べども答へず。浮の空吹く風暢ふ。出口の楊柳ならねども。靡くを恒なる河竹の。意にうき節ありとても。財貨に儘する一宵妻が。客を客ともせざりけり。無禮しさは憎かるを。罵懲さんはさすがにて。俺さへ醉に勝ざれば。そが儘に熟睡して。小夜の深るを知らざりける。枕血臭く衣濡て。肌膚に堪ねば驚き覺て。枕上なる這行燈の。光に就て四下を見るに。思ひがけなき今様は。俺脅挿の行刀もて。自殺して俯て在り。最淺ましき凶變に。うち驚きつゝ聲を涯りに。妓有等を呼びしは這故なり。いかで亮察あれかし。と詞徐に説示すを。暖簾次听つゝ沈吟じて。いはるゝ趣眞なりとも。鄙語に云死人に言なし。今さら御身の片言もて。何でふ疑ひを解くよしあらんや。闇き處には神明あり。明き處には王法あり。一も入らず二も入らず。里長に告。且訟まつりて。虚實は曇らぬ鏡做す。守の御明案に依んのみ。這方へ來ませ。と兩個の妓有に。朱之介の兩手を捕せて。推立しつゝ乾淨たる。老鴇子舍に屏居て。人を附てぞ守らせける。左右する程に。早天明に做りしかば。客は皆かへり去りて。娼妓等をも其頭に在らせず。然らでも早開は靜悄なる。青樓然しも寂寞たり。只朱之介をうち守る。妓有。及常傭の鳶兒とかいふ。究竟の壯佼等。四

りとて。叫ぶ幾聲にうち驚きて。走りて軈て开里に來て。開く障子と屛風さへ。隻手を掛て差覗く。臥簟の裡の大變に。膽を潰しつ。怕れ惑ひて。二たびはよくも見ず。そが儘踵を旋して。走り出つゝ檀階子を。墜るが如く降り來つ。主人の臥房に赴きて。今樣が横死したるを。看一看ける隨に告しかば。主人夫婦の驚き。いへばさらなり。一家兒なる奴婢等皆起出て。相囁くのみ。せん術を知らず。叉手在べきにあらざれば。主人は只得兩個の妓夫に。手燭を秉し先に立せて。徐に樓上に升り來つ。今樣が臥房の外面より。且其事の光景を見るに。果して今樣は横死して。鮮血流れ横はり。膝を容るべき處を知らず。客は則靑年兒にて。膝を組み手を叉きて。噪色なく端然たり。當下主人はおそる〳〵。朱之介にうち向ひて。客人何等の怨ありて。今樣を殺し給ひたる。小可は當家主人。浮世袋屋曖簾次是なり。思ひかけなき這爲体。人を殺せば身も殺さるゝ。素より覺期の上なるべし。抑御身は那里の人ぞ。出處來歷。怨の顛末。一事も隱まず告給へ。天も明ば訴まつりて。守の御讞斷を仰ぎまつらん。いかにぞや〳〵。と急迫しく問ども毫も噪がぬ。朱之介答へていふやう。主人の推量。酷く錯へり。俺豈何等の怨ありて。かゝる暴虐を做す者ならんや。俺は大和の旅客にて。末朱之介と喚做す者。いぬる比より住吉なる。十三屋九四郎許。淹留止宿の徒然に堪ざれば。九四郎の乾兒なる。六市四摠と喚做したる。一二の壯佼を相俱して。今宵這里に浮れ來つ。解語花を酒菜にして。夜と共にと

一句も錯へず陳ずれば。賴紀聞あへず頭を掉て。其言究めて胡論なり。非如熟睡をしたりとも。枕を並べて臥たる娼妓の。自殺を知らざるとやある。且今樣が身を傷りしは。儞が帶たる刃ならずや。それのみならで儞が衣と。身にも流血塗れたり。袷と云恰と云。這娼妓を殺せしは。儞にあらで是誰ぞや。疾縛めよ。と暴やかなる。聲共侶に伙兵等は。承りぬ。と應へも果ず。走り蒐りつゝ。朱之介を。緊しく結扭りて推居けり。免れがたき禍鬼の。寃屈に係るゝ。朱之介は慌て惑ひて。跪きつゝ賴紀に。うち向ひて陳るやう。御疑はさるとながら。小人實に今樣を殺さず。家は大和の上市に在り。孀婦主人落葉が女壻にて。妻は那家の女兒に侍り。小人はいぬる比より。生活の爲左界に來つ。這頭に人を待よしありて。十三屋許宿にしぬるのみ。且左界なる船積荷三太と。其子城藏には舊緣あり。城藏を召よせて。問せ給はゝ分明にて。御疑は解けつべし。いかで〳〵。と諄かへすを。賴紀听かず。冷笑ひて。大和に岳母ありとても。又左界なる荷三太等に。舊緣ある者なればとて。人を殺さずといふ。分說になるべきや。いふよしあらば陣館へ。參りてこそ。と叱禁めて。却乳守の故老等を見かへりて。儞等は蚤く住吉に赴きて。這朱之介が宿なりといふ。九四郎を將て廳へ參れ。九四郎倘家に在らずは。還るを俟て明日將て來よ。急げ〳〵。と赶立遣りて。卒や浪速へ退んとて。朱之介を牽立させて。軈て樓上を下り來ぬれば。暖簾次里長いへばさらなり。浮世袋屋の主管妓有鳶兒までも。主の

五名其里に集合居り。爾程に暖簾次は。猛可に人を走せて。這事の凶變を。里長に告知らせつ。是又住吉なる。十三屋へもこの義を告て。朱之介は那里にある。旅客なるや。と問せなどす。是により乳守の里長故老們は。浮世袋屋に聚ひ來て。先今樣の亡骸を。撿し果て却朱之介の。いふよしを听正し。告訴一通に載ざるとなく。暖簾次と共侶に。三好の陣館へ訴けり。是時京都の管領。高國入道常桓は。屢三好海雲と戰負て。沒落して伊勢に在り。この次の年。享錄四年に至りて。高國入道は。攝津の國。大物の戰に敗死す。事は前輯第二十六回に見ゑたり。左界幷に浪速津は。新管領右京大夫春元の領地にて。家臣三好筑前守。元長入道海雲の一族なる。三好木工頭職善は。一隊の士卒を從へて。則浪速の陣館に在り。この日乳守の妓院なる。浮世袋屋暖簾次が。里長們と倶に訟にて。娼妓今樣が横死の事。其客朱之介の事の趣さへ。詳に知られしかば。職善則其隊の頭人。鷹嶋背人頼紀を使として。事の虚實を撿せしむ。頼紀則伙兵を將て。浮世袋屋に赴きつ。先今樣の屍骸を撿して。他が出處を諮に。暖簾次答へて。這今樣は。出處西國なりと聞しのみ。その親里は詳ならず。今より七八稔前つ比。浪速に乾父候て。その手より十稔期に買取りし。娼婦にて候へども。其乾父某甲は。前つ半身故りて。外に緣處は候はず。又今樣を害したる青年兒は旅客歟。旅客ならぬ歟。知らず候へども。熟客には候はず。と報るに頼紀點頭て。却朱之介を召よせて。事の顚末を質問ふに。朱之介は阿容たる色なく。嚮に暖簾次に說示し〻。其事の顚末を。

る由聞え。又左界なる浮寶屋船積荷三太は。活業の爲に。いぬる日其子棧太郎と倶に。周防の山口なる枝店に赴きて。今は家にあらず。又二男城藏は。昨今感冒の疾病にて。うち臥て候へば。只得主管鼠七と喚做す者。摠代として參り候ひぬ。と聞え上けり。この時前廳果しかば。職善則局の內へ。乙藝鼠七。六市四摠。其地の里長等はさらなり。朱之介をも獄舍より牽出させて。先鼠七に訝るやう。鼠七儞は。這朱之介を認れりや。他旣に陳じて。荷三太城藏等と。舊緣ありといへり。實に然るや。甚麼ぞや。と問へば鼠七額衝たる。頭を擡げて。傍なる。朱之介を見かへりて。然ゝ候。這靑年兒は。さきつ比。大和の旅客なるよしにて。沙金と唐布を買んとて。左界の店に來にける折。唐布は船間にて。いまだ入津せざりしかば。姑且止宿を饒せしに。淹留一向を經ぬる隨に。好らぬ噂のありもやしけん。主人荷三太歡ばず。猛可に辭て。立去らせ候ひき。但是止宿の旅客にて。荷三太親子に舊緣の。これある者には候はず。といへば職善點頭て。やをれ朱之介聞たる歟。今鼠七が稟す所。荷三太等に舊緣なし。儞が誑伴知るべきのみ。といはれて朱之介頭を擡げて。御諚では候へども。小人荷三太城藏等に。緣ある者に候はねども。那家の新婦黃金には。正しき舊緣候なり。といはせも果ず職善は。怒れる聲を震立て默れ嚚癡兒舌長し。儞嚮には荷三太親子に。舊緣あり。と陳じしに。今鼠七になしといはれて。又其新婦に舊緣あり。と言を變人を易て。佯陳ずる賊情分明。最烏滸なり。と叱懲し

安危心許なしとて。准備の褁飯を一兩個の。小廝に駝せ相從ふて。陣舘へぞ參りける。爾程に悳嶋皆人頼紀は。日景傾く時候かへり來ぬる。三好の陣舘なる局の内へ。朱之介を牽入れさせて伙兵幷に。暖簾次里長等に守らせつ。那身は則後堂に造りて。三好木工頭職善に。娼妓今樣が横死の爲体。罪人朱之介が。陳じし言の趣を。箇樣々々。と報しかば。職善听て。爾らんには。俺出て听べしとて。其儲をいそがせらる。有斯し程に暖簾次里長等は。廳の局の片隅に。等と半晌許にして。三好職善出席あり。有司悳嶋頼紀等。侍坐して先朱之介を。檐の下に牽居させて。職善みづから。其罪を質問ふに。朱之介又答る事始のごとく。今樣は自殺にて。小人が害せしならず。といふを職善叱禁めて。儞は只管寃枉を唱へて。云云と陳ずれども。今樣を刺殺しゝは。則儞が行中刀にて。其身も鮮血に塗れたれば。かばかり正しき照据はなし。儞が數日の宿なりといふ。十三屋九四郎と。左界の城藏をも召よせて。事の虛實を鞫問ん。又娼妓今樣は。乾父既に世を去りて。緣所なき者ならば。其亡骸は暖簾次等。形の如くに執措べし。猶も諮る義あらば。異日亦復召よせてん。この意を得よ。と宣示して。身の暇を賜りつ。朱之介をば开が儘に。緊しく獄舍に繫せけり。恁而木工頭職善は。この次の日も朝より。地方の民の愬訟を。听定めて在りける程に。昨日悳嶋皆人頼紀に吩咐られたる。乳守の故老等は。住吉なる里長と共侶に。十三屋九四郎が女房乙鸒。幷に九四郎が乾分。六市四摠を將て詣來ぬ

放さねば。已ことを得ず共侶に。那里まで行しかど。乾父にて候九四郎は。任侠を磨く心もて。小人輩を警て。四下近き艶郷に。止宿を饒し候はねば。後に知られんことを怕れて。辭し去りてこそ候なれ。といふを職善うち笑ひて。非如止宿せずもあれ。其席に連りて。猶云々と陳ずるは。五十歩をもて百歩を笑ふといふ。古語にも似たるべし。刃は左まれ右もあれ。實に朱之介は旅客なれば。九四郎が宿所には。必他が行裹あらん。若們それを知らざるや。と問れて乙蘂は答るやう。否。朱之介が行裹は。雨衣菅笠のみにして。然せる東西は候はず。但襤褸は圓金にて。一百九十五兩ありしを。九四郎が起行つ折。他が手より預りて。奴家に藏置ねとて。刃が儘遞與し侍りにき。と告るを職善うち聞て。刃は最多かる襤褸なり。儞其金をもて來ぬるや。と問へば答へて。御諚の如く。這義を問せ給ふとの。ありもやせん。と思ひしかば。里長達に商量して。そが隨懷にして參りにき。といへば職善微笑て。刃はよくこそ心つきたれ。其金を疾見せよ。といはれて乙蘂は遽しく。項に掛たる財囊の紐を。解披きつゝ件の金を。裹し隨に呈すれば。惠嶋賴紀受拿て。聽主君に進するを。職善やをら机案に登して。一二襲に裹たる。紙を徐に解開きて。先其金を得と見つ。又其金の裹紙を。推伸しつゝ是をも見て。眉を顰めつ頭を傾けて。乙蘂這裹紙は。始よりこれある歟。然らずは又九四郎が。裹て儞に遞與しし歟。と問へば答て。否。其紙は。朱之介が裹る隨にて。良人が預り侍りにき。といひも果ぬ

て。敢又多辯を饒さず。職善當下。擔廊に侍りたる。惡嶋皆人頼紀を見かへりて。住吉なる里長等は。何どて九四郎を倶せずして。妻と乾兒を得て來たるや。と問へば頼紀額きて承て。然ン候。九四郎は。前日講聘家と共侶に。安藝の嚴嶋なる辨財天へ。詣んとて。船出して候へば。亟の召に充がたかり。この故に里長等相計つ。九四郎が妻乙藝。同宿なる兩個の乾兒。六市四摠と喚做す者を。倶して參り候なり。件の六市四摠等は。前夜朱之介に案內して。浮世袋屋に適きし者なり。勿論夙〳〵辭し去りて。止宿せずと稟せども。連係なき者にあらねば。召倶させ候ひき。と告れば職善又點頭て。軈乙藝と六市四摠を。擔頭近く召よせて。先乙藝に諮るやう。儞が良八九四郎は。素是何等の由縁ありて。朱之介を留在せたる。と問へば乙藝答ていふやう。否。緣も好も侍らねども。他はいぬる日。奴家が家の隣なる。岸松屋てふ客店を。宿にせんとて來にけるに。其岸松屋は近き比。生活既に衰て。他鄉に移りて在ずなりしかば。他は困じて云々。といひしを良八の俠氣もて。不便にや思ひけん。そが隨留在せしに。九四郎は人に誘引れて。安藝へ出船の留守の程。思ひがけなき禍鬼に。胸のみ潰れ侍れども。九四郎在ねば。この餘の事は豫より。聞たる事は侍らずかし。といへば職善又點頭て。然らば又六市四摠は。朱之介と共侶に。娼妓の。席に連りながら。何どて蚤く辭し去りたる。と問へば六市四摠等は。言語齊一答るやう。然ン候。かの折に。朱之介が醉に乘して。乳守に行て復喫んとて。誘引立て

止宿の夜分。醉て不覺に懷なる。密書を今樣に見られなどせしかば。已ことを得ず殺えしならん。今打つ鎚は外るゝとも。這公案は違ふべからず。速に招了して。呵責の咎を免れよ。と聲苛高く譴問へば。朱之介は驚きながら。跪きつゝ稟すやう。御推量では候へども。小人が盤纏多さは。大和なる岳母の。沙金唐布を買取れとて。齎したるにて候へば。不正の東西には候はず。いかで大和へ御下知ありて。岳母落葉を召よせて。問せ給はゞ出處來歷。立地に相知られて。御疑は解つべし。況舌俞が。支黨にて。今樣さへに殺せし歟と思召は憚りながら御疑の深き故にて。寃屈にてこそ候なれ。といはせも果ず職善は。怒れる聲を震立て。這奴究て胆太し。前にも漫に頼陳じて。船積荷三太城藏に。舊縁ありといひつる如く。今又其路近からぬ。大和なる岳母落葉を。照据兒に做なくするとも。幵を孰か實事とせん。這奴酷く撻懲さずは。竟に實を吐くべからず。咎を中よ。と劇しき下知に。局の左右に土居たる。伙兵等蚤く衝と寄て。朱之介を推伏て。幾つともなく。鞭ち責れば。然らでも兩手を縛られて。頭枷さへに身を縮る。朱之介は苦痛に得堪ず。聲を涯りに叫ぶのみ。呼吸も絶べく見えしかば。伙兵は軈咎を止めて。曳起しつゝ退けて。水を飲せなどせしかば。やうやくに我に復りて。死ざることを得たりける。當下三好職善は。仡と乙藝等を疾視て。約莫この條の疑は。獨朱之介のみならず。九四郎も耦賊にて。鍛冶郎が支黨なるべし。故何とならば。他は面善兒ならぬ。朱之介が索ね

に職善は。机案を撲地と拍鳴して。怪むべし這紙には。有験観主呑舟道人と寫してあり。やをれ朱之介。是は爾が手迹なるや。と緊しく問れて朱之介は。深念に及ず。答るやう。現に然る事も候ひき。曩に小人。船積荷三太許逗留の折。人に聞しと候なり。近曾呑舟道人と喚做す者あり。他煉金の哄騙をもて。豪農巨商を惑して。幾千金を掠奪りぬる。其術無量なりといふ。異聞怪く奇しければ。後亦人に夜話する折。其名を忘れざらん爲に。懐紙に書寫志しに。果は忘れて我金を。九四郎に預る折猶懐にしたりける。其紙をもて重裹して。遞與たるにぞ候なる。とわりつる隨に聞え上れば。職善聞つゝ冷笑ひて。それにて事皆亮察したり。近曾有験觀主呑舟道人と喚做す奸賊あり。他は肥後國飯田山にありける。山賊の頭領。川角頓太連盈が殘黨にて。鐵屑鍛冶郎即是なり。他洛外に脱れ來て。東西となく徧歷しつゝ。愚にして慾深き。豪家の主人を哄誘すに。那煉金の術をもて。幾千金を掠略るといふ。風聲豫聞えしに。其後他が往方を知らず。爾るに件の鍛冶郎は。支黨と共侶に。今茲は周防の山口に在り。又煉金の哄騙をもて。人を謀まく欲せしに。其事竟に發覺れて。那身は搦捕れたりといふ。この事往日大内家より。急遞脚の密使をもて。左界の城へ告られしかば。俺も聞知ることを得たり。因て憶ふに。朱之介は。必鍛冶郎が支黨にて。這頭に止宿しぬるならん。倘しからずは相應しからぬ。其身は獨行なるに。百九十五金なる。盤纏を懐にするよしあらんや。然ば他。浮世袋屋に

にて。時宜によらば賞祿を得させん。然るを猶惑ひを取て。諄々と願言せば。若們も饒すべからず。無益にこそ。と叱懲しつ。才に言を和げて。左界の問丸。荷三太が。老僕鼠七承れ。荷三太父子は。朱之介に。舊縁ある者ならねども。賣買の便宜にて。止宿を饒せしのみならば。又諮ぬべき事もなし。退出て異日城藏が。疾病搓り果る折。參りて其義を聞え上よ。大家都て心得たる歟。と言鷹揚に宣示せば。罷立ね。と賴紀が。烈き聲に鼠七里長。故老等も皆共侶に。唯々とばかりに額衝承て。うち連立てぞ退出ける。爾程に。悳嶋皆人賴紀は。伙兵獄卒等に下知を傳へて。男女四名の罪人を。幵が隨獄舍に遣すに。朱之介を首にて。六市四摠を一牢にす。乙藝は女流のとなれば。別に禁獄せらるゝなるべし。幵が中に朱之介は。素是好人ならねども。這回の罪過は寃屈にて。自作せる孽にあらず。況乙藝六市四摠は。毫も犯せる罪あらで。疑獄の縲絏に繫るゝ。那身の憂苦甚なるべき。時の不幸といひながら。一毫こゝに謬れば。差ふに千里を以すと云。易緯の格言果せるかな。耳を貴み心を師と倣す。職善も後に覺なば。遂に悔く思ふなるべし。

新局玉石童子訓卷之一上冊　終

來ぬる。岸松屋があらずなりしとて。事を好みて朱之介を。己が家に禁めしは。必是情由あらん。然ども九四郎は。今西國の逆旅に在らば。還るを俟て召捕てん。其折まで女房乙藝と。六市四捴を禁獄せば。こも亦要ある保質にて。縦九四郎を求獲ずとも。他日名告て出ん。兵毎索を被ずや。と思ひかけなき再度の下知に。乙藝六市四捴等は。胸を潰しつ怕れ惑ひて。戰れたる歯も合ず。开は情なき御裁斷。九四郎は人に知られたる。俠者にて侍るものを。何でふ其歹人の。舌俞とやらんの伙計なるべき。里長を首にて。照人は多かるに。この義を思召れずや。と叫べば六市四捴等も。倶に寃屈を叫ぶのみ。饒さるべきにあらざれば。伙兵は十手を揮閃めかして。益なき謼言。默らずや。と背肩尖此彼となく。撻悩しつゝ推並べて。結縛りて軈牽居けり。當下住吉の里長等は。膝を找めて。おそるゝ。悳嶋皆人に稟すやう。畏けれども勸解奉る。十三屋九四郎は。地方に久しき俠者にて。善に與し惡を拉ぎ。威勢あるにも諛らはず。錢財あるにも從はず。乾兒義子弟の多さのみ。鍛治郎と歟いふ歹人に。交るべうも候はず。這義を仰上られて。乙藝六市四捴等を。饒させ給はゞこの上の。御仁慈にこそ候はめ。と願ふを職善うち聞て。愚なり里長等。千仞の海は測とも。人の心は量がたかり。九四郎が仁義を倡へて。陽には俠者と誇るとも。陰には邪術奸虐の。交を做すや做さずや。何人歟よく是を知るべき。若們夙く惑ひを覺して。九四郎が還り來ぬる日に。欺きて將て參らば。是第一の忠節

同居せず。這故に連累の。罪を免れたりけるを。住吉の里長等は。是切てもの幸なり。と思へば浪速の陣舘へ。この者あるを聞えも上ず。粂六郎も憂苦を忍びて。兄の宿所へ來ぬる事なく。深く躱て便宜を俟けり。然ば是時。住吉の里を距ると。十町許なる村落の。字を小松と喚做したる寒村に。由來山孟林寺と號する。一座の小梵刹ありけり。住持木隱和尚は。安藝國の人氏備中介大江弘元の。庶兄なりければ。この寺大江氏に由縁あり。先住木隱和尚は。近曾遷化して。今は其徒弟。木玄道德住持たれども。猶昔の餘波にて。大江氏と疎からず。今も其坊料あれば。師檀の好み絶るとなし。こゝをもて。弘元の四男なりける。大江四郎成勝は。この孟林寺に寄宿して。安藝へかへるとを饒されず。こも亦二八ばかりの少年にて。弓馬の技に疎からず。武藝文學其師に就て。手習讀書は幼稚より。怠る事なかりしかば。竟に文武の達者になるべき。久後憑しきのみならず。才も貌も世に捷れて。現に美少年なりければ。見る人譽ぬはなかりける。爾るに這四郎成勝は。親胞兄弟に相別れて。這頭に長と成ぬるを。看官訝り思ふもあらん。こも亦故ある事なりかし。抑十三屋九四郎。峯張粂六郎弟兄の親を。峯張九四藏通世と喚做して。素是信濃退糧兒にて。岐岨路を去て浪速に來つ。兵法七書を人に敎て。僅に口を餬ふ程に。其妻に三個の兒子あり。初子は則女子にて。名を億祿と喚れたる。年既に二八ばかりにて。心操いと怜利しく。縹致も亦人に勝れたり。次の兩個は男子にて。九四郎と粂六

新局玉石童子訓卷之一下冊

東都　曲亭主人口授編次

第三十二回　書刀を畀して弘元母子を托す　寺僕に憑て兩少義姑を知る

却說。職善疑似の惑ひにて。織芥も罪なかりける。乙藝六市四摠さへ。倶に獄舎に繋れしかば。九四郎が宿所なる。櫛工們は居とを饒されず。里人等是を守りて。九四郎が安藝の嚴嶋より。かへり來ぬるを待なるべし。爾程に九四郎が乾兒等の。這禍鬼に驚怕れて。皆慨しく思へども。亦連累の罪を怕れて。謀の出る所を知らず。只里長等に相譚ふて。獄舎に飯を餽るのみ。有愆事をば知るよしもなき。九四郎がかへり來ば。必搦捕られなん。非如日數は歴ぬるとも還ず欲得。とうち不娛て。路遙なる西の盡處へ。言告遣らん春の雁の。翅なければ徒に。心苦しく思ふもあり。或は巳が蜂吹く故に。祟を怕れ夥計別して。深切始の如くならず。事に假托け他所に移りて。疎濶になるも多かりける。この餘は憂を分つに足。然るべき親族なく。只九四郎に一個の弟あり。峯張梁六郎通能と喚做して。今茲は十八歲の少年なれども。年來其兄と

その折安藝へ將て來よかし。俺亦折を見合て。妻にも及兒子にも。この子あるとを說示して。術よくこゝろを得させてん。然ば障りはなかるべし。といひつゝ豫寫したる。親子の照書一通を一裹の金と共に。懷より拿出しつ。又伴當に持せたる。大小の兩刀を拿よせて。裹し袱を解開きて。共に九四藏に遞與して。又いふやう。其一通は俺自筆にて。四郎と親子の照書なり。縱俺身なき後なりとも。是をもて安藝に造らば。四郎が兄等の疑はで。弟ならずとて拒む者なかるべし。又この兩刀は。俺先祖大膳大夫廣元朝臣より。世世相傳の名刀なれば。四郎が爲に貽裹にす。成長後他に取しね。又這金子は。俺盤纏の餘財にて。僅に是一百兩あり。こは稚子を養育の爲に。貽置く者なり。然れどもこの金子のみにして。久後遠き母と子の。衣食に足るべうもあらざれば。其折には俺兄なる。孟林寺の木隱和尙に。告て資助を乞ねかし。俺往日老和尙に。この密議を。明々地に。告て爾後を憑しかば。伯父坊必憐て。四郎が資助になる事あらん。恁はいへども浪速と安藝は。水陸共に路近からぬ。各天の一方なり。矧今戰國の時にして。脚力使札自由ならず。是に加るに。人の命數は涯りあり。老少不定なり。四郎が長と成るをまたで。俺命終なば。億祿を巢守に做さんと。是も亦不便なり。是よりの後音耗絕て。再會何時と期がたくは。億祿は相應しき依着を求めて。他妻になるとても。俺決て怨なし。こゝろ得てよ。と叮嚀に。示し諭しつ他事もなく。告る別の理りなれば。九四藏夫婦

なり。當時大江弘元は。尚壯年なりければ。京師の光景をも覘ひ知るべく。東國の治亂をも探らばやと。思ひつゝ。伴當一兩名を將て。悄々地に浪速に來つ。小松の孟林寺を宿にして。淹留年を累る程に。那峯張九四藏が講に入しより。他が旦暮の足ざるを資などして。斷金の思ひ淺からざりければ。九四藏も其恩義を感じて。主の旅宿の徒然を。慰る爲にとて。則女兒臆祿をもて。弘元の側室にす。是よりの後弘元は。折々九四藏許止宿しぬる程に。臆祿は早く有身て。男子を生にける。四郎成勝 即 是なり。弘元安藝には嫡室あり。兒子あり。冢子興元。後に備中守に任ず。こは不幸短命にて。父に先たちて身故りけり。興元にも子あり。幸松丸といふ。是も亦早逝す。この故に。弘元 則 二男少輔太郎音就を嫡子とす。三男少輔二郎元綱と共に。安藝國高宮 郡。治比郷の舘に在り。是時は。弟兄皆髫歳なるべし。閒話 休 題。爾程に弘元の四男。四郎腋子。三歳になりける秋の時候。弘元京攝の密要果しかば。悄地に安藝へ還らまくす。其別に逮て。九四藏夫婦。億祿九四郎等に告ていふやう。俺故郷へ還りては。再會究て料がたかり。然ば四郎と億祿さへ。將てゆかばや。と思へども。故郷にも嫡室あり。兩三個の兒子あるに。苟且の旅宿の程に。側室に子さへ生せしとて。倶していなんはさすがにて。面正しくもなき所行なれば。只得四郎は這隨に。億祿と倶に留在せん。この子の性美しく。教ゆべくは。外祖父外祖母。爲に文武の師を擇て。教導 長と成して。武士になるべき者ならば。

給ふとも。尙兩俺の舍弟あり。女弟品さへあるものを。寡居も寓處あり。いかで腋子を守育て。長と成しまつらんと。思ふ心を知らず貌に。他妻になれとある。御諭こそ恨しけれ。といひも果さずよゝと泣くを。叱り禁むる二親も。おなじ思ひをいへばえに。嵒研流す溪水の。淺からざりし誠心は。清き言葉に見れけり。當下弘元感じて已まず。憮然として答るやう。今に創ぬ親子の實情。幷を知らざるにあらねども。正開の花を萎むまで。人にも見せず埋木に。做なんとの最惜さに。思ひ憶ず云々。といひしは口の過なりき。今は千萬いふとも甲斐なし。再會は只。天に儘せん。四郎が上を憑むのみ。と慰められて本意ある親子が。心才に解ぬべき。春の淡雪ならねども。松に祝ふや留別の酒盃。准備の酒菜拿出て。九四郎さへに圓坐しつ。是時は年十五六にて。乙藝と喚做す食客女に。酌を執する東道態に。弘元も稍うち笑れて。献つ酬つ篩程に。酒外せぬ粂六は。是時年尙五にて。四郎君には二歳の兄ぞ。と窘されて大人やかに。御ふ餚に累掌の。愛々しさに弘元も。主人夫婦も共侶に。憶ず笑局に入日刺す。紙窻ある次の間には。弘元の伴當等。旣に九四郎に召登されて。殘饗餘殽の管待あり。各飽まで飲啖して。倶に薄醉ならぬはなし。恁而在るべきにあらざれば。弘元は幾番となく。酒盃を辭し茶を請ふて。告る別の詞寡く。刀をやをら掻拿て。立去まくする程に。九四藏夫婦は留難て。只再會を契るのみ。億祿は胸のみ塞りて。いはまくほしき事をしも。得いはで四郎の手を掖立て。

は。感涙の。進むをおぼえず照書と。大刀さへ金子さへ受戴て。答口訥る弁が中に。億祿は涙禁めあへぬ。膝に睡りし稚子の。顏さへ濡て共音泣くを。敲着つゝ横抱に。軈て乳首を含すればゝそが儘睡る夢の夜や。覺ねばこそあれ豫より。別は然しも知ながら。昨日は過てあすか川。明日といはれて今さらに。驚かれぬる愛惜の。歎ぞやる瀬なかりける。女兒の心思ひ汲む。母親も涕うちかみて。慰難つ云云と。倶に別を惜むのみ。是時は年尚少き。九四郎さへに愀然と。頭を低手を叉きて。倶に其言をうち聞居り。姑且して九四藏は。弘元に向ひていふやう。仰承り候ひぬ。君幾までも這浪速に。在すべきにあらざりしを。苟且ながら四稔以來。親く交り奉りしのみならず。賤小娘億祿が。枕席を。薦め侍りしより程もなく。男子さへに擧けしは。是餘ある歡びにて。久後までも憑しかり。況心を用ひられたる。三種を腋子に畀賜る。そをしも推辭まつらんや。君今臣等親子に。惠給ふに誠をもてす。臣等叉君に答るに。忠心をもてせずもあらば。不義の奴といはれんのみ。君御心安かるべし。四郎君は左にも右にも。護養育て長と成して。安藝へ倶しまつりてん。非如其事幸なくて。得遂がたく候とも。億祿は腋子の母といはれて。この儘に身を終なば。富榮ぬる他妻に。倣るには優て本意なるべし。然るを今別に臨て。聞だにも忌々しき。他妻になれなゝど。宣するは情なし。と怨じて傍を見かへれば。億祿は涙を推拭ふて。爹々さま。いしくも宣ひけり。縦今より年闌て。二親在らずなり

其子四郎に留別の事の趣と。相觸るゝ所あらで。君子小人貞女淫婦の情態。恰雲壤の差別あり。彼は則秘密の哀別。親子手の甲に黥印して。再會の徵にせしも。後竟に本意を遂て。骨肉相逢ふのみならず。最後に其子家を紹て。時と志を得ぬれども。這親子の行狀。邪淫に起りて。邪淫に畫。這故に天鑑饒さず。事敗れて滅族の。禍なきことを得ざるべし。又弘元の傚す所。億祿が是に仕ふる所。倶に邪淫の行ひなし。其相別るゝ時に臨て。弘元則其子に畀すに。照書一通と。先祖相傳の兩刀をもてす。武士たる者の眞面目。人に對して説がたき。意中の秘事毫もなし。しかはあれども夫婦父子。命の長短各差あり。後竟に再會の。本意を得遂ずなるとても。其子は果して兩個の舍兄を。資けて家を興す事あらん。是則善を勸め惡を懲る。本傳作者の大關目。隱微を開きて看官を覺まくす。那阿夏朱之介母子の。猥褻。邪慾を旨と綴りて。時好に具る筆ならぬを。いまだよく見果ずして。評する者もあらん歟とて。漫に贅言しぬるのみ。然とて天機を漏すにあらず。只是老婆深切ならん歟。閒話休題。弘元安藝へかへり去りしより。光陰又梭の如く。四稔許を歷ぬる程に。大江四郎は年七になりしかば。外祖峯張九四藏其師を擇て。手習讀書を敎え創るに。九四藏が季子楽六郎は。是時年九歳なり。他をば腋子の陪堂にとて。倶に讀書手習させて。四郎が其師許ゆく折には。必伴に立せけり。是より又鴻雁かへり玄鳥來て。四郎が九歳といふ春の時候より。弓馬擊劍何くれとなく。武藝

倶に目送る庭門なる。片折戸の頭には。兩個の伴當褄挾して。跪居て主の出るを待けり。當下九四郎は。那御寺まで送らんとて。出るを弘元推禁めて。伴當を將て遽しく。孟林寺へかへり來つ。この宵行裝を整へて。木隱和尚に年來の。止宿の歡びを舒相別て。曩に安藝より從ひ來つる。伴當僅に兩名を將て。其曉天に浪速なる。馬頭上に造り便船して。水路を西へいそぐ程に。又峯張九四藏通世は。其子九四郎と共侶に。甲夜より夙く這里に來て。弘元を待て居り。弘元が來ぬるに及びて。准備の褁飯簞酒を開きて。又盃を薦る程に。九四郎は女兒億祿の。弘元へまゐらする。書翰一通を呈閲す。左右する程に。橫雲低き水や天。風波噪ぐ黎明時に。今纜を解くと叫ぶ。舵工の訛聲屢高ければ。便船の行客等。驚かされて聚ひ來つ。弘元主僕も遽しく。倶に其船に乘程に。峯强九四藏九四郎は。於是僅に水送の。志を致せども。惜む別の果敢なさに。立盡しぬる浦曲の松の。待としいへど歸來る。時は幾ともしら浪に。任せてぞゆく澳津帆の。見えずなるまで目送りけり。抑這箇一條は。前に寫しゝ朱之介乙藝等が。囚牢に繋れし段より。十四五年上の昔話にて。大江四郎成勝。峯張楽六郎通能。主僕兩少年の出處來歷を。備に寫し出せるなり。是より下も。又孟林寺の段に復までは。右に續ける過去來の。話說なるを知るべし。因て憶ふに。本傳に說く所。昔年陶瀨十郎興房が深草の茶店にて。情妓阿夏と。其子珠之介に。相別るゝ折の事の趣と。今又大江備中介弘元が側室億祿と。

と倶にすめり。既にして。九四藏在ずなりしより。兵法の弟子は。胡越の如くなりもてゆきぬ。是時九四郎は。いまだ定めたる活業なけれど。小松村の邊には。親の購求めて。人に預けて畊せぬる。些の田園あり。貯祿も亦なきにあらねば。次の年の孟夏。住吉の里に。人の賣屋あるを購得て。轉て其里に移徙して。木櫛を賣て生活にす。且乙藝をもて妻にして。をさく内を任せけり。這婚姻の事はしも。二親生平に。九四郎に。云云といひし義あり。其遺言に依てなるべし。爾はあれども九四郎は。疎人にて文學を好まず。撃劍白打は人並にて。其性素より義侠あれば。武家に仕へて。五斗米に。腰を折る事を樂はず。然ばとて又商賈の。來ぬるを迎へ。還るを送る。利潤を屑とも思はず。この故に外看ばかりの。店舗には僅に一兩個の。傭櫛工を在らせて。他等に櫛を賣するのみ。閏の多からぬを患とせず。九四郎が行狀。大槩はかくの如く。親九四藏に同じからぬに。且這夫婦尙少ければ。四郎腕子の事はしも。九四藏豫九四郎に。定しける遺教あり。九四郎も亦孝順なれば。敢親の遺言に違はず。是年の秋の時候。單孟林寺に詣て。木隱和尙に云云。と四郎の上を遺もなく。初弘元の別に臨て。契りし言の顚末と。照書の事。兩刀の事。養育料の金子の事まで。自他となく叩き告て。既に知らせ給ふ如く大昨年より打續きて。俺姉も二親も。世に在らずなりしかば。尙年少なる小人夫婦が。よく守育べくもあらず。然らでも腕子は名家の胤なり。民間に人と成さんは。可惜しき事ならずや。衣食

を學するに。楽六も相從ふて其師を倶にす。折から戰國の習俗なれば。市井村落にも。武藝の師たる者に匱からず。矧又大江四郎は。生ながらに文武の才あり。楽六も亦愚魯ならねば。いまだ久しからずして。手習學問いへばさらなり。大刀合する技なども。人に勝れて見しかば。九四藏夫婦の歡びはいふべうもあらず。億祿も是に慰て。猶久後を俟かひもなく。弘元が安藝へかへり去りしより。六稔有餘を歷ぬれども。風の便は一たびも。こゝには絕て浪速なる。浦の出船も入船にも。外の噂を聞のみなれば。億祿は單幾となく。思ひ細りし氣積の疾病。積蘊て後竟に。病の牀に就しより。鍼灸藥餌の驗なく。尙杪若き二十五の。菩薩や迎へ給ひけん。其曉の夢覺て。那身空しくなりしかば。二親胞兄弟の歎きはさらなり。四郎は九歲の童なれども。孝順特に淺からねば。母親枕に就しより。間なく時なく身邊を離れず。或は手を撫。腰さへ摩りつ。湯液を薦め粥を薦めて。看病りし甲斐も涙の種の。果は流て逝水の。かへらぬ人に做りしより。倶に死べく哭泣たる。孝子の薄命憐むべし。幸なきは只是のみならで。其次の年三月の時候より。九四藏夫婦は。温疫にて。うち續きて身故りけり。九四藏は年六十。妻は五十有餘なるべし。尙憑しく思ひたりし。九四郎楽六乙藝等の。哀悼悲泣は凡庸に過て。里人も是が爲に。絃歌を禁め相吊ふて。柩を送らざる者なかりけり。然ばこそあれ。大江四郎は。賴む樹下に雨漏て。哀戚の袖乾く間なきを。やうやくに忍び得て。七七の墓參も。九四郎楽六等

亦四郎粂六が。夏冬の衣夜物と。硯冊子四書五經。兵法七書は書櫃に。藏めたる隨にして。木隱和尚に餽進する。餅子煮染東西を。折小櫃に裝たるを。大袱に分包みつゝ。擔造て傭從僕に遞與などす。是時四郎は年十一歳にて。粂六は十三なり。主僕迭に今の別の惜からざるにあらねども。孟林寺は隣村にて。訪問るゝに便よければ。倶に志を奬して。最大人しく乙藝等に。告別して出てゆくめり。爾程に孟林寺の住持木隱は。九四郎が約束を違へず。侄の四郎と他が弟粂六を。送て住吉より來ぬるに及びて。軈召入れて對面す。迭の口誼さぞあるべし。言省て備にせず。當下九四郎は。這童子主僕の上を。木隱幷に徒弟なる。一兩個の靑法師等に憑聞えて。齎たる折小櫃と。四郎粂六が。衣裳調度を渡し果て。傭奴を將てかへり去ぬ。是よりして木隱和尚は。方丈の次の間なる。小室を掻掃せて。四郎主僕の子舍とし定めて。手習讀書を學せらる。然ればとて。這兩童子は。僧に做すべき者ならねば。武藝も亦原の如く。其師許往還して。習ふ事を僥せしかば。四郎粂六は相歡びて。晝は出て武藝を習ふに。敢一日も懈るとなく。夜は又入て手習讀書を事とす。乙藝も年尚少けれども。其性老實なりければ。那習學の懈怠なきを。傳聞毎にうち笑れて。折々餅果子。飯の菜蔬などを。煮もし茹もして。餽遺す事屢なり。或は又四郎主僕の不斷衣。木隱師徒の敗衣さへ。折々解洗して。老實にものせざる事なし。又九四郎は月毎に。孟林寺へ諸來て。四郎粂六が爲に。日傭錢を遞與などす。然ば

は小人餽りてん。今より御寺へ召執て。教育あらば亡親姉の。遺言を果すのみならず。大江大人の教にも。稱ふべくや候はん。這義誰何と談ずれば。木隱聞つゝ點頭て。其義寔にしかるべし。四郎が事は弘元に。うち聞しより久しくなりぬ。他は俺侄なるに。何でふ衣食の賄を望ん。心に係るは弘元が。安藝へかへり去りしより。今に至りて信なし。那地に異變あらずや。と思ふものから海山千里を。隔てぞ居る戰世の。不自由なるを爭何せん。然ばとて俺弟の。賴みし事を今さらに。不の字をいふべき拙僧ならず。この義は心安かるべし。なれども四郎は總角なるに。那身單を寂莫たる。寺に在らせんは不便なり。和殿の弟楽六をも。共侶におこし玉へ客ある折に茶の給仕には。豫より欲かりき。好食客にこそあるなれ。と又他事もなき老和尚の。答に九四郎歡び承て。明日と契て退りけり。却說蜂張九四郎は。其宵四郎と。楽六乙藝を喚聚へて。今日孟林寺の木隱和尚に。商量しける事の趣を。箇樣々々と說示して。明日は黄道吉日なり。四郎腰子に。楽六を傳まゐらせて。御寺へこそ遣すべけれ。其頭の准備をし給へ。といふに大家諾なひて。誰か亦異議すべき。この次の日も天よく晴て。事の障りなかりしかば。九四郎は晝餉を果して。四郎楽六主僕を將て。孟林寺へ送りゆくに。四郎には父弘元の畀たる。兩口の名刀を帶させて。且其護身囊には。弘元の自筆なる。父子の照書を藏めて。警るに失ふとなきを要とす。又楽六には。親九四藏の紀なる兩刀を取せて。主僕に袴を穿などす。乙藝は

うち顰て。其事の顛末を尋るに。實に是疑獄にて。那旅客朱之介とやらんを除の外。乙蘗六市四捴等は。寃屈なる事疑ひなし。こゝをもて楽六は。浪速の陣舘へ推參して。この義を陳て娌等の。赦免を請まつらんとて惴りしを。住吉の故老推禁めて。其義究て無用なり。ゆかば必禁獄せられん。九四郎大哥のかへり來ざるは。反て幸なるものを。和郎倘出て自訴しなば。毛を吹とて疵を求んのみ。其故は箇樣々々。如此々々の情由ありとて。那鐵屑鍛治郎の舌俞が哄騙の事の顛末を。聞たる隨に咡き告て。他は近曾周防の山口にて。搦捕られにき。といふ風聲あり。この故に三好の刀禰は。朱之介さへ大哥さへ。舌俞が伙家ならずや。と御疑ひの深ければ。娌々を當座の保質にとて。そが儘禁置るゝなり。然ば大哥も朱之介も。鐵屑が伙家ならずといふ。正しき照据徴りせば。彌勒の出世に遇ふまでも。娌々を救ひ出しがたけん。其頭にこゝろし給へ。と咡き示してこの後は。孟林寺へ訪も來ず。楽六にも四郎にも。白晝は面を顯して。住吉の里にだに。往還するとを饒さねば。這兩個の少年は。又一層の憂を増て。いかにせまし。と相譚のみ。謀の出る所を知らず。暮るゝを俟て悄々地に。住吉の里へ赴て。乙蘗等の安危を撈りて。賴て囚牢へ飯を餽るも。人傳なれば自由ならず。左右する程に。五月は過て。暑熱彌增六月も。既に中旬になりぬれど。九四郎はいまだ還らで。講伙家の甲乙のみ。歸村の噂あるを探聞に。九四郎は治比なる。相識許立よるとて。一路人と別れたり。然ども五六

這童子主僕は。内外にかくの如き幇助あるに。倶に其才に價からねば。文武の學術年に從て。薦ずといふとなし。去程に這主僕。寺に在る事四稔有餘。五稔といふ秋の時候。木隱和尚遷化して。其徒弟。木玄道德。後住に做りぬ。這木玄も老實兒にて。師父の遺教に叛くとなく。四郎柔六等を相憐て。管待初に變ねば。四郎はさらなり柔六も。倶に憑しき心地して。いよいよ武藝を勵みけり。恁而其次の年。峯張柔六は十八歲にて。大江四郎は十六歲に做りぬ。是時主僕自撰て。四郎は其名を成勝とす。柔六郎は通能と名告ぬ。又只この義のみならず。大江四郎は孟林寺にて。長と成ぬる少年なれば。人或は綽號して。孟林四郎と喚做しけり。然るを後にはみづからも。茂林四郎と稱する日もあり。又俗字に從ふて。杜四郎ともいひけり。譬ば峯張九四郎が綽號を。十三屋といふが如し。九と四を合すれば十三なり。孟林は大江の廟號にて。其茂林といひ杜といふも。是に由て知るべきのみ。閒話休題。是年の夏四月盡に。十三屋九四郎は。講夥家と共侶に。安藝の嚴嶋へ詣るとて。四郎柔六。木玄道德に。告別に來にけるに。其後いまだ久しからずして。那家に不測の祟あり。往日より十三屋に止宿の旅客。朱之介と喚做す青年兒が。乳守の里の妓樓にて。今樣と歟いふ倡妓を。刺殺したりければ。那身は矢庭に捕捉られ。其歇店主人。九四郎の妻乙藝。乾兒六市四摠さへ。浪速の囚牢に繫れしを。住吉の里人等が。悄地に孟林寺に來て報しかば。四郎柔六の驚きいへばさらなり。木玄道德も眉

郎に唆誘されて。主君より預り來ぬる。許多の沙金白布を。失ひしより東國へは。得かへりがたく做りしかば。逗留三稔に及びしと。落葉が慈善。斧柄が貞實。其崖略を聞たる隨に。説示して又いふやう。那家は杣木氏にて。原は豪家で侯ひしに。不幸にして先主人。夫婦うち續きて身故りしより。迹には一個の女兒あり。斧柄といひしは即是なり。然るを主人の女弟なる。良人の家衰果て。離別せられて。伊勢の津より。かへり來て在りしかば。只得守に居られて。稚幼姪の斧柄女郎を。愛慈み長と成す。婦女主人で今もかも。家風を亂さぬ賢女なるを。里人知らぬ者ぞなき。落葉の刀自は即是なり。又那末朱之介は。落葉の刀自の離別の後。故夫が後妻に。生せたりける孤なりしを。初對面の折に知られしかば。刀自は舊縁恩義を感じて。斧柄少女を妻せて。入壻にせられしに。那青年兒は猶飽かで。酒に耽りつ奸淫賭博の。債は多く做りけるを。落葉の自刀が償ふて。術よく理めたりといふ。噂も聞候ひき。是等によりて思ひ惟るに。落葉の刀自が所以ありて。那青年兒に金銀多く。齎して東西を買せんとて。浪速津へ遣したる。事しもなしとすべからず。是よりの外舌榆とやらん。鐵屑と歟いふ歹人の。噂は聞ず候ひき。と一五一十を說盡せは。兩少年も老和尚も。倶に耳を敧て。うち含笑つゝ听果て。更に便宜を得たりける。其歡びばいふべうもあらず。姑且して紫六がいふやう。今聞所をもて推ば。朱之介は鐵屑が。支黨にはあるべからず。這柿八に引汲させて。夙く上市に赴きて。

日を經ば。必かへり來つべしといふ。こも人傳に聞えたり。安否を知るは本意なれども。かへりぬと聞えなば。召捕らるゝ事のなからずや。と思へば是も胸安からず。只那犯人朱之介は。大和なる上市の。鄉より來にける旅客にて。舊里には妻もあり。岳母もありといふ。其事僅に聞えしかば。四郎柒六は。この義を住持木玄に。咡き告て。咱等悄地に大和へゆきて。那朱之介が宅眷を訪ふて。他が禁獄せられしよしを。詳に告もしつべく。他が出處來歷と。路費の金の多かるを。撈訂さば俺嫂の。罪を償ふに足りもやせん。とは思ひ候へども。其宅眷とは。知る人ならぬ。少年の俺們が。那地に造りて談ずるとも。訝りて實を報られずは。こも亦勞して功なき所爲なり。御意見もや候。と問へば木玄點頭て。开は究竟なる人こそあれ。和殿等も知る如く。前月より當山へ。新參なる奴隷柿八は。大和上市より。老後揖了にとて。這頭へ來ぬる者なりと聞にき。他に問はゞ知るよしあらん。といひつゝ掌うち鳴して。件の奴隷を召よせけり。當下四郎と柒六は。柿八にうち向ひて。那朱之介が事の顚末を。箇樣々々。と說示して。汝舊里に在りし時。件の朱之介を知らずや。と問ば柿八。然ン候。宣する朱之介と。小可は面前ならねど。那人の事はしも。人の噂に聞しと多かり。首をいへば云云なり。尾は箇樣々々なりとて。朱之介が事の顚末。他は東國なる管領家の使にて。如如來禪師を訪し事。又山㺔を射て殺して。少女斧柄を救ひしかば。落葉に女壻にせられし事。他が放蕩無賴のと。安保箭五

新局玉石童子訓卷之二上冊

東都　曲亭主人口授編次

第三十三回

穴隙を鑽て二賊夜師徒を脅す
生口を呈して両少年疑獄を解く

再説。大江杜四郎成勝。峯張楽六郎通能は。料らずも柿八が話説にて。事の便宜を得てければ。先住吉の故老們に。這義を告てこゝろ得させて。明日は大和へ起行せんとて。是日黄昏の比及より。主僕編笠を戴きて。倶に孟林寺を立出るに。折から六月中旬にて。晝は酷暑に堪かたかるも。夜は涼しき反畝路。天よく晴て月清く。隈なき景に送らるゝ。路の去向の草蒸源。冷ては處得貌なる。馬追いそぐ轡虫。鳴く音は人の跫响に。一霎時絶ても堪がたき。憂は浮世の哀愛苦勞。早稲の葉並も短夜の。深ぬ程にといそぎけり。然れば又。この宵孟林寺の住持木玄は大江峯張両少年主僕の。住吉へとて出てゆきしより。必久しからずして。かへり來つべし。と思ひしかば。梵僕柿八に吩咐て。既に前門は鎖せども。角門は閉たるのみにて。閂を打せず他等がかへり來て敲きなば。疾開て入れよ。といはれしかは。柿八則こゝろ得て。已が小子

落葉に告て那金子の。出處正しき照据を取て。三好殿に聞え上なば。疑獄は解て朱之介の。罪輕くなるときは。俺嫂は赦免せられて。家に還さるゝ事を得つべし。這義什麼と請問へば。四郎も然なり。と頷きて。俺們大和へ起行せんに。先住吉なる故老等に。告て心を得させずは。事ある折に不便ならん。と議するを木玄うち聞て。开は勿論の事なりかし。和郎達晝は憚あり。日暮て先住吉へ。所要を果して旦の旦開に。柿八を將て大和路へ。起行こそよからめ。といふに兩少年諾ひて。逆旅の准備をいそぎけり。畢竟四郎柰六主僕が。是等の事の便宜を得て。後の話説何麼ぞや。开は下回に。解分るを聽ねかし。

新局玉石童子訓卷之二下冊 終

下又一個の强盜は。柿八にうち向ひて。やをれ老耄兒命惜くば。住持の臥房へ案内をせよ。然るを今さら頭を掉らば。其首即坐に撃落さん。蚤く立ね。と推立すれば。柿八は事の勢ひ。從はざることを得ず。阿容々々と先に立て。引て住持の便室に至るに。件の兩個の强盜は。引提し刃を鞘に斂めて。含笑ながら跡に跟。闇き二間の坐席を過て。燈火見ゆる垂蟵の。臥房の邊へ近つく程に。所化子舍に臥たりける。兩個の沙彌は驚き覺て。來ぬるは誰ぞ。と問せも果ず。一個の强盜刀を拔きて。蟵の吊緒を斫墜せば。いよ〳〵噪ぐ兩個の沙彌等は。盜兒入りぬ。と稍知りて。逃竄れまく欲すれども。蟵に那身を包まれて。網羅の鶉に異ならず。術も夏野の草枕。夢になれとぞ念じたる。程もあらせず强盜は。甲乙倶に膂力に任せて。沙彌等を慘刻蹂躙れば。憐むべし兩個の沙彌は。叫んとするに息絶て。死活は知らず僵りにけり。爾程に木玄道德は。四郎業六がかへるを俟て。睡りも得せで在りけるに。小夜深る隨に堪がたき。蚊の多ければ蚊帳に入りて。軈て枕に就兀自。心に懸れば宿も寢られず。既にして更いよ〳〵闌て。子の時ならんと思ふ比。盜兒や入りたりけん。平ならぬ物の响。所化子舍のかたに聞えしかば。驚きながら敢噪がず。軈て悄地に蚊帳を出て。吊緒を解きつ行燈の。燈心を增搔起て。蒲團小縫搔遣りつ。趺坐して徐に數珠爪繰て。念佛して在りける程に。既にして兩個の强盜は。跫音高て挑み近つく。住持の臥房は思ふにも似ず。一個の法師怕るゝ色なく。端然として在りけれ

舎の窓推開きて。蚊遣火しつゝ月を燭に。明日起行の。用意に。脚絆雨衣拿領ふ。笠の紐縫ひ草鞋の。絺を融しなどしつゝ。睡らで兩個の少年を俟に。短夜なれば更闌て。既に亥中になりぬれど。他等はいまだかへり來ず。いかに〳〵。と思ふのみ。果敢なく打肫を催して。寐とも知らず在りし程。子二刻時候になりぬべし。折から人の跫々と。角門を敲く音す。柿八宿耳にうち聞て。是必青年達の。かへり來にけり。と思ひしかば。一聲高く應と答て。遽しく身を起しつゝ。板金剛を撈りよせて。足に曳穿外に出て。刀禰們還り給ひし歟。と問つゝ軈て角門の。掛鎖をやをら外して。開くを遅しと外面より。突然と找み入る者あり。四郎楽六主僕にあらで。小皐の像き兩個の尷尬兒。身の材五尺八九寸。涅染なる廣袖の。單衣を裙短に被做したる。圓括の帶尻高に。紈結びし那腰には。銅鑵卷なる山刀の。二尺七八寸許あるを。鐺下りに挿做て。重裏なる草鞋を。紐短に穿たりける。面魂の鬼魅しきに。蝮蛇かとぞ思ふ圓なる。眼赫奕一對の。威勢當るべくもあらねば。柿八に吐嗟とばかり。叫んとするに聲立ず。逃んとせしを一個の强盜。走蒐りつ項髮を。搔抓み揉仆して。背を踐へて動せず。這奴倘聲を立なば。只一刺に息の音留ん。と晃哩と引拔く刃の光に。眼を射らるゝ柿八は。更に生たる心地せず。許給へ。といふ聲も。脫齒に漏て術なきを。然もこそあらめ。と蹴返せば。一個の强盜立替りて。起んと蠢く柿八を。起しも果ず兩手を捉て。腰なる麻索掖出しつゝ。最も緊しく結扭けり。當

に併らる。この義に據て俺們も。人を屠りて東西を略る。山豪榮曜に誇りしも。一向は造化歹くて。獲はわらず。錢竭たれば。今宵和尚に借んと思ふて。白刄で推參したるなり。錢まれ金まれゐる涯り。出して夙くいなさずや。と兩聲尖く責嚇すを。木玄怕るゝ氣色なく。念珠を止めて答るやう。和郎等偶來ぬれども。开は見る所の錯へるなり。當寺は素より寒 院にて。檀越坊料多からず。况今戰世の在俗は。殘忍不仁ならぬは稀にて。塔を供養し。法師に布施する。善男善女あるとなし。然るを何等の餘財をもて。和主等に取んや。といはせも果ず甲乙兩個の。强盜は又聲苛立て。暗きたり老狸奴が。縱 術よくいひ瞞るとも。昨日も今日も俺們が。晝悄地に來て覘 知たる。本堂の光景。阿彌陀の箔。客殿の席薦障子まで。手の屆きたる造作結構。敗銕經紀に見せたりとも。錢なき寺と誰かいふべき。詩も語も入らず疾身を起して。財庫へ案内をせよ。开を猶惑ふて不の字をいはゞ。這巨刄もて引導渡さん。いかにぞや〳〵。と刄を席薦へ銜立々々。倶に睨へ哮れども。木玄噪がず推禁めて。小架棚より拿出す。袈裟筥の鎖を開きて。圓金五兩を擸出しつ。又强盜等にうち向ひて。和郎等いかばかり譴るとも。是より外に金子はなし。是もてゆきね。と投與るを。强盜等はよくも見ず。怒れる兩聲又震立て。這奴究て膽太し。强情張て時を移して。天を明さまく欲するとも。虐々として其術を喫んや。今はしも饒しがたかり。觀念せよ。と左右齊一。刄を晃哩と震抗る。那時遲し。這時速し。背後に覘ふ兩 少年。

ば。撃莵らんはさすがにて。倶に刄を引提て。金剛神の暴たる像く。雙立つゝ疾視たり。有恁りし程に。大江峯張兩少主僕は。甲夜に住吉の里に造りて。故老等の宿所を訪ふに。他は里長許赴きて。いまだ還らず。と聞えしかば。只得還るを俟程に。憶ふにも似ず小夜深て。遂に亥中の時候に及びて。其人かへり來にければ。則事の便宜を告て。云云と相譚ふに。夏の夜なれば短くて。子の時近くなりしかば。遽しく辭し去りつ。明日は早天に大和路へ。起行の准備はしたれども。這頭を小夜に深ししは。鈍ましかりき。と共侶に。呟きつ路次をいそぎて。子二刻ならんと。思ふ時候。倶に孟林寺へかへり來て。と見れば角門は開きてあり。眞夜半なるに忘れたる歟。柹八が歳老かひなく。最烏滸なり。と思ふのみ。鎖せざれば敲くに及ばず。主僕いそしく内に入るに。庖湢の戸も亦開きてあれば。倶にこゝろ訝りながら。幵が儘に找み入るに。庖湢中房所化子舍まで。燈火滅て黑白を分ず。只奥のかたに丁りて。耳熟れぬ人の聲音にて。罵るごとく聞えしかば。いよ〳〵訝る四郎楽六。原來强盗入りたりけん。師父の上心許なし。惴りて愆し給ふな。こゝろ得たり。と吅きつ。吅れつゝ共侶に。袴の稜を挾み。單衣の袖卷返して。刀の鯉口甘る。准備も倶に精悍しく。熟ては闇きに迷ふとなく。竊歩しつゝ二間の坐席を。過て聲する奥のかた。住持の便室に近づきけり。是より先に兩個の强盗は。住持木立にうち向ひて。やをれ坊主落着貌すな。今戰國の習俗にて。弱は强に征せられ。小は大

長く肱を伸して。件の金子を搔拿つゝ。又袈裟筥へ藏れば。四郎楽六答ていふやう。住吉まではは遠くもあらぬに。今まで還らず候ひしを。訝り給ふは理りなり。俺們主僕甲夜の間に。故老許ゆきたりしに。水田の樋を修復によりて。里長許參會あり。召れて那里へゆきたり。といふに只得屋主人の。還るを俟と二時有餘。是等の故に小夜深て。所用を果しつ稍方僅。かへり來ぬれば不慮の賊難。師父に傷損のなかりしは。是切てもの幸ながら。所化達も柿八も。いかに做りけん心許なし。いまだ知らせ給はずや。と問ば木玄然ばとよ。他們が上は洒家も得知らず。疾紙燭して見給はずや。といふに楽六こゝろ得て。蠟燭に火を移しつゝ。手燭を秉て先に立ば。杜四郎も共侶に。刀を引提て出て見る。次の間なる壁際に。結扭て俯したる者あり。是則柿八なり。火光を見つゝ頭を抬げて。腋兒よ咱等を救ひ給へ。と叫べば四郎楽六は。手燭を抗て得と見て。無慙や是も強盜の。所爲なるべし。と慰めて。軈て其索を解捨れば。柿八は先腕を摩り。腰を敲きつ膝折布て。却強盜に結扭れて。只得案內に立られて。這一室まで來ぬる程に。果は蹴られて。仆れける。首尾を報しかば。木玄も是を聞て。倶に所化子舍にゆきて見るに。兩個の沙彌も死に至らず。嚮に他等は強盜に。蟵の吊緒を研落されて。剩酷く蹈れしかば。一旦氣絕したれども。倶に窮所にあらざれば。姑且して息出て。倶身に恙なけれども。又只物のおそろしさに。出も得やらず在りといふ。事の趣を告しかば。果は四郎も楽六も。住持も絕

四郎楽六兩聲に。盗兒等と喚禁れば。驚き見かへる兩個の强盜。敵手は數にも足らざるべき。少年なるを侮りて。鷲の兎を鷙る像く。蚤く踵を旋して。撃んと競ふを四郎楽六。相迎て物ともせず。引外しつゝ共侶に。拔合したる刀の雷光。丁々托地と殺締ぶ。修煉の刀尖撓みなく。岌より蒐る勢ひに。强盜等は膽落て。受刀にのみ做りしかば。甲乙ともに淺痍を負ふて。流るゝ鮮血に大刀筋亂れて。竟に怺へず引外して。逃んとするを毫も透さぬ。大喝一聲。兩少年が。武勇も對の剽姚に。二賊は刄を撃落されて。怯むを得たりと主僕の手術。倶に刃の背撃に。窮所を撲地と撃しかば。二賊は苦と叫びも果ず。身を轉して仆れけり。當下木玄道徳は。憶ずヤヤと聲を被て。扇子を開きて兩少年を。うち扇ぎつゝ譽ていふやう。思ふに優たる。和殿等の武藝剽姚。然しも猛かる這奴等を。殺さずして撃仆ㄠしは。出家人たる俺本意に。相稱ふて最愛たし。然とても由斷すべからず。陽滅ならば逃もやせん。蚤く手脚を括らずや。と心属れば兩少年は。應をしつゝ左見右見て。强盜毎が腰に夾みし。麻索あるを拔拿て。甲乙倶に曳起すに。二賊は窮所を中られたれば。半死半生にて身を動し得ず。當下四郎楽六は。軈て件の麻索をもて。思ひの隨に二賊を結扨て。且櫓廓なる障子を開きて。背合に眞柱へ。圍々卷に縢着しかば。木玄うち見つ含笑て。それでこそ安堵たれ。和殿們は何等の故に。那里で小夜を深したる。倘一歩遲かりせば。咱身は非業に命を果さん。好造化でありけるよ。といひつゝ

和郎等を饒して。放遣まく欲けれども。いかにせん。這義を守に訴ずは。後難も亦料りかたかり。咱自由を得ざる所。法度に憑ずはあるべからず。この故に是なる少年。大江杜四郎成勝がいひつる如く。和郎等免れがたくして。死刑に其身を終るとあらば。咱戒名を授け。墓碑を建て。永久菩提を修し得させん。其名を問しは這所以なりき。と諭せば峯張楽六も。悟りて膝を打鳴らして。爾也々々。俺愆ちぬ。威をもて拷問せまくしつるは。倒に益なかりき。山の刀禰達腹をな立そ。慚愧々々。と慰れば。両個の強盗うち聞て。爾いはるれば告ざらんや。先這索を緩めてよ。といふに楽六心得て。巻たる索を解復しつゝ。両手を饒さで推居れば。一個の強盗陳じていふやう。現に強弓も。其弦斬る時あり。最小の鍼も刺ざるとなし。俺心を和る。両少年の文武才幹。和尚の慈善はいよ／＼得がたし。俺們も亦人なり。既に諭を承ぬれば。今さらにいはで已んや。俺等両個は世に知られたる。鐵屑鍛冶郎が支黨にて。俺は則低杭駝鳥太。又是なるは。狸毛吹五郎と喚做されて。去歳より頭領鐵屑に。相従ふて周防なる。山口鵜峯の城下に在り。又煉金の騙もて。人を掠らまく欲せしに。其事夙く發覺れて。討隊の士卒向ひしかば。怱、霎時は防ぎ戰ふものから。終には大刀折れ勢力竭て。頭領鐵屑は搦捕られ。俺們両個は。虎口を脱れて。便船を得て浪速に來つ。歇店を求めて潜びて居り。といへば吹五郎其語を續ぎて。然ば又俺頭領の。情熱の土妓に。今様と喚做すあり。他は人に知られたる。乳守

ず腹を抱て。倶に無異をぞ歡びける。爾程に柿八は。竈に蒼柴折燒て。茶を煑て四郎楽六と。木玄に夜饌を薦めなどす。左右する程に。曉天に做りし比。件の兩個の强盜は。やうやくに息出て。氣力は我に復しかども。刀瘡痛て堪がたければ。倶に頭を低て居り。當下峯張楽六は。うち見て呵々と冷笑て。虎狼も檻に入りては。人に命を乞ざる者なし。やをれ强盜每。其身に做りしは積惡の。報ならんを思ひ知るや。姓名出處支黨まで。招了して死に就ずや。といはれて兩個の强盜は。頭を抬げ眼を睜りて。這頑童奴が何をいふや。咱等は名もなき山賊ならねど。運盡て乳の臭失ざる。若們に戰ひ負て。俘擒に做りたりとも。招了すべき口は得もたず。烏滸をないひそ。と罵れば。楽六怒て扇子を拿て。撻懲さんとて身を起すを。杜四郎推禁めて。徐に二賊にうち向ひて。禮正くして諭すやう。今戰國の習俗にて。武士たる者も糧竭れば。响馬剪徑に做る者あり。和郎等も亦其儔なるべし。しかれども法度を犯して。惡を做す者は。律令のある所。刑戮せざることを得ず。こゝをもて天も明ば。國の守の廳へ牽べし。なれども這道場よりり。罪人を出さん事。豈是出家の本意ならんや。實に已ことを得ざるのみ。非如和主等免れがたくて。頭を法度に喪ふとも。我們必師父に請て。其なき迹を吊ひ得させん。姓名出處を具に告よ。といへば木玄も倶にいふやう。四郎の理言咱意に稱へり。慈悲は阿彌陀の本願なるに。幸にして東西を畧られず。咱さへ沙彌さへ一人として。傷損しつる者あるとなければ。この儘に

の密使をもて。贈來しける消息あり。其書函に斂めたる。圓金十枚と一撮の。雲鬟を裹添てありしかば。則是を受拿りて。然氣もなく使介を返しつ。其後宿の閑室にて。吹五郎と共侶に。其消息を閲するに。其文其書の美しげにて。俺們が知所ならねど。寫連ねたる事の趣は。哀しからずといふとなく。鍛冶主世を去り給ひなば。誰を所依に苦海の。湍に猶立てながらへん。有斯る浮世にすみ染の。あまになるべきよしもなく。果敢なかりける一葉の船の。こがれ〳〵て死なんのみ。單殘りて世にし在らば。竟には那秘事を。人に知られて俺身すら。召捕らるゝ事あらば。恩ありて怨なき。親方までも連累の。罪免れがたくやあらむずらん。袷といひ恰といひ。既に覺期を極め侍り。聊ながら御約束の。茶蘼花十枚まゐらする。紀念料とも見給ひね。又この黑髮は。奴が髻結の梢に侍り。いかで紀の高野の御山へ。斂め給はゞ後の世の。苦を免るゝよしもやあらん。憑みまゐらするはこの事のみ。あなかしこ。とありしかば。開きて悔しき鬼百合も。露の涙に堪ざりしを。巻復して二たびは見ず。只其金子を有負人と。做していよ〳〵潜びて居りといへば。吹五郎語を次て。しかるに其夜の事なるべし。件の小槌の今樣は。自刃して亡にき。と人の噂に聞えしかば。驚きもしつ不便なれども。那身既に在らず做りなば。俺們何個を鐵屑が。支黨なりと知者なく。人の口より洩るゝとあらじ。と思へば倒に憚らず。後安くて日を彌る程に。那十金も房賃と。酒肉賭博に使果して。せん術のなき隨に。舊癖發らざ

なる浮世袋屋の。名妓にてありけるに。過世ありてや鐵屑と。相狎しよりこの年來。暢路の數累りて。相愛する事魚水の如く。死をもて誓ふ妹伕になれば。鐵屑遂には秘密を告て。彼煉金の術を傚すに。他を媒鳥に使ふ事あり。其折には浮世袋屋の。主人に多く閨房金を取らせて。他が兩個の小三板まで。或は三月小半年。相携て他鄉に遊時。今樣を小槌と喚傚し。又那兩個の小三板を。丁兒打出と喚傚したり。然れば去歲の九月に。頭領西へ赴く折。今樣は別れを惜みて。幾日も放離たりしを。俺們屢是を諫めて。竟に袂を分ちにき。といへば駝鳥太又いふやう。然ば又俺等兩個が。周防より脫れ來て。潜びて浪速に居程に。坐して喫へば箱も空しく。盤纏既に竭しかば。いかで那今樣に。些の錢を借んと思ひて。豫相識る君なれば。往る五月のムの宵に。俺等浮世袋屋へ赴きて。初會の客なる面色しつゝ。當晚今樣に逢ふことを得て。小夜深け人定りて。却周防にてありし事。鐵屑搦捕られしかば。竟に死刑に處せらるべき。那折俺身は。吹五郎と。倶に這地に來つるよしを。遺もなく囁き告て。路費の資助を乞求るに。今樣は聞も得果ず。流るゝ淚は泉の如く。終夜泣明ししかば。俺も困じて睡ることを得ず。其明旦別れに臨みて。今樣淚を止めていふやう。憑ませ給ふ路費の事は。こゝろ得て侍れども。目今は鑿がたかり。後に必使をもて。御歇店へ齎してん。といふに俺等は歡び承て。俺隱處と坊名と。屋主の名を囁き告て。後便を契りしに。果して其日の曛昏に。今樣は約束違へず。一個

等懺悔のこゝろもて。其いふ所照据あり。汝兩個が身を殺して。罪なき男女四名まで。死を免る丶由あれば。其積惡は憎むべく。言の悔懺は賞すべし。聞もしつらん今樣が。自殺の夜艾。初會の客なる。大和の旅客。朱之介と喚做す壯佼は。分說建ず禁獄せられて。剩鐵屑鍛治郎の。支黨なるべし。と疑はる。這故に朱之介を宿したる。十三屋九四郎の。逆旅の留守なる。渾家と兩個の。乾兒さへ連累せられて。今も猶囚牢に在り。といへば柰六も俱にいふやう。其九四郎は俺兄なり。いまだ安藝より還らねども。嫂乾兒の寃屈の罪を。救ふに由なく一日も。安き心のなかりしに。時なる哉料らずも。汝等兩個の。照兒を得てける。日屬念ずる神明佛陀の。靈應利益にぞあらむすらん。陣館へ牽る丶折。言を違へず招了するや。といはれて駝鳥太吹五郎は。面を注し嘆息して。其解屍人の事はしも。風聲により聞ざる事なし。然しも寃屈の分說達たで。皆其首を喪はゞ。是俺們が身代にて。いよ〳〵後安かるべし。と思ひしは虛負にて。反て俺等が其男女を。救ふ奇貨にせらる丶は。造化の小兒の所行なる歟。天の網こそ漏がたけれ。不思議々々。とばかりに。呆れて又いふよしもなし。當下峯張柰六は。今樣の書簡と黑髮を。分ちて鼻紙に推褁みて。却木玄に呈閱しぬれば。木玄則其黑髮を受拿りて。書簡をば柰六に。かへしけり。左右する程に。茂林を離る丶鴉の聲して。天は夙く明しかど。杜四郎も柰六も。乙藝等を救ひ拿るべき。照据の二賊を獲てければ。今さら大和へ起行に及ず。先仕吉なる。里長

ると得ず。這孟林寺は先住より。倹約をのみ宗とすなれば。褊院なれども錢あり。と人の噂に聞知りて。熟し今宵の暴挊ぎ。事十二分なりければ。造化精妙。と思ひしに。鈍や和郎等に雌伏せられて。復生べくも思はねば。今はこの世の遺裹に。有し實事を吐盡して。和郎等が恃に後々までの。夜話種に做せるのみ。是にて滿腹したらんず。と多辨に誇る惡人も。慈悲と禮儀に勝よしもなき。招了備なりければ。四郎楽六の歡びはさらなり。木玄も言意表に出て。一霎時嗟嘆の聲を得たゝず。聞果て二賊に向ひて。聞が如きは那今様が。鍛冶郎を歹人と。知りつゝ侶に相愛して。他が哄騙の媒鳥にさへ。做りて其惡を幇助しは。是情慾の惑ひにて。竟にみづから刃に伏しゝは。他天罰の免れぬ所。憎むべく憐むべし。遮莫人の懺悔には。五逆十惡も滅るよしあり。然ば汝等の菩提はさらなり。他が剪たる頭髻の梢も。俺必廻向して。蓮華王院へ斂てん。其黒髪はいかにしたる。と問ば駝鳥太答ていふやう。开は辱く承りぬ。今様が贈りたる。金子こそ使ひ果したれ。其書殼と黒髪を。燒却んはさすがにて。今も俺懷なる。勒肚に藏めて在り。疑しくは拿出して。見らるゝともけしうはあらず。といふに歡ぶ四郎楽六。共侶に身を起して。駝鳥太の懷へ。手を指入れて搔撈るに。果して勒肚ありければ。縮を解きつゝ曳出して。見れば書簡と黒髪あり。倶に其書簡を讀見るに。今這二賊のいふ所。詭譎ならぬを知るに足る。既に明證を得てければ。意外の怡悦に勝ざりける。四郎は二賊にうち向ひて。汝

門前に集合て居り。當下峯張粂六は。孟林寺の沙彌木訥。幷に住吉の里長故老等と倶に。告文を捧げ衙下に參りて。住吉なる櫛買。十三屋九四郎の弟。峯張粂六等。同宿して小松の孟林寺に在り。昨宵件の寺に推入りたる。兩個の强盜は。鐵屑鍛冶郎が殘黨にて。低杭駝鳥太。狸毛吹五郎と喚做す者なりしを。搦捕りて候へば。牽もて參上り候。と聞え上て。則告文一通と。照據の書簡を呈閲しゝかば。家臣悳嶋皆人頼紀。其二書を受拿りつ。生口の二賊と粂六里長等を。廳の局の內へ召入れて。伙兵四五名をもて守らせけり。爾程に三好木工職職善は。曩に禁獄したりける。大和の旅客朱之介。及連坐の罪人九四郎が妻乙藝。乾兒六市四摠等の。疑獄の虛實を定難て。屢朱之介等を。囚牢より牽出させて。拷問の笞を緊しくしたれども。朱之介等は。素より知らぬとなれば。皆只寃屈を叫ぶのみ。倶に承伏せざりしかば。職善いよ〳〵思惑ひて。竟に本月の初旬に至りて。兩個の間諜兒をもて。大和の上市へ遣しつ。朱之介は那鄉なる。落葉が女壻歟。非耶。且他か年來の。行狀と。落葉が心術の好歹を。那里人に因りて撈らせしに。其間諜兒かへり來て。聞つる隨に告しかば。朱之介が上市にて。放蕩無頼の事の趣。且他は前にも罪ありて。國の守に召捕れしを。落葉が救ひし事の顚末。且這春に至りて。落葉は朱之介の爲に。沙金と唐布を買せんとて。他に金子を多く齎して。京へ遣したりといふ。其崖畧を知りれしかば。職善疑ひ半分解て。肚裏に思ふやう。然らば那百九十餘金は。落葉とやらんが朱之

故老等に這義を告て。出訴の准備をいそがんとて。倶に庖湢へ退けば。既にして柿八は。早飯を炊き果て。先這兩個の少年に。薦めて出し遣まくす。早飯果て楽六は。住吉へ赴きつ。杜四郎は又。駝鳥太吹五郎が。招了の條々を。告文に寫さんとて。料紙硯を携て。單所化子舎に在り。又住持木玄は。柿八に吩咐て。大きやかなる握飯に。燒鹽を塗らして。綁りし儘なる駝鳥太と。吹五郎に喫せなどす。こも亦出家の慈悲なるべし。爾程に。この日巳の比及に。峯張楽六郎通能は。住吉の里長故老と。十三屋の近隣なる。里人櫛工們を將て。孟林寺にかへり來にければ。木玄則召入れて。杜四郎と倶に對面す。登時里長故老等は。四郎楽六の武勇大功を相祝し。且乙藝等を救ふべき。告愬の一義を商量して。陣舘へ訟人は。則峯張楽六と。住持木玄の名代には。木訥と喚做したる。沙彌一名參るべし。と定めけり。杜四郎は名家の子なれば。功を秘して。這隊に入らまく欲せず。なれども陣舘の門前まで。倶にゆくべしとて身裝す。這小松村は。住吉の枝郷なれば。那里の差配に由らざるとなし。這故に村正を置ず。只孟林寺の門前なる。貧民八九名。詣來て伴に立んといふ。商量既に果たれども。生口の二賊駝鳥太吹五郎は。倶に脚に刀瘡あれば。曳立れどもいかにせん。步より行べうもあらざれば。他等は軈て[illegible]に乘て。貧民們に舁せけり。恁而大家孟林寺を立出て。酷暑を忍びていそぎしかば。既に未の時候に至りて。三好木工頭職善の。陣舘へ來にければ。杜四郎は里八櫛工等と倶に。其

に。件の二賊を牽もて來て。訴まつると聞えしかば。職善則有司を從へて。正廳に着坐しぬる程に。直嶋頼紀承りて。先伙兵をもて。罪人末朱之介と。乙藝六市四摠等を。囚牢より召出させて。並て局の内に在り。頼紀則○孟林寺の住持木玄と。峯張栄六等が。連署の告愬狀をうち開きて。聲朗に讀むと一遍。職善是を聞果る時。頼紀又今樣が。遺墨なりといふ。一通を呈閲す。職善みづから是を讀見て。先住吉の里長を。檐廊の下に召よせて問ふやう。今告愬狀に出るに。武功の少年峯張栄六は。十三屋九四郎の。弟なるよし聞えたり。遮莫俺いまだ九四郎に。弟あるヿを聞知らず。あらば何とて始より。聞え上ざるや。と詰りけり。因て里長答るよしあり。這段は尚長やかなれば。又この次の回にてこそ。

新局玉石童子訓卷之二上冊　終

介に。東西を買せん爲なれば。是不良の財にあらず。遮莫朱之介は。今様を殺したる。罪を償ふ所なし。矧又舌俞の鐵屑が。支黨ならずといふ。照据なければ其罪の。輕重いまだ定むべからず。但九四郎の還るを俟て。敲かば知るよしあるべし。と更に尋思をしたりしかば。是より呵責の杖を禁めて。朱之介を牽出させず。就中乙藝等を。獄卒毎に勦らせて。撲殺の手段に效ふのみ。其次の日。船積城藏を召よするに。城藏は是より先に。屢陣館へ召されしかども。猶疾病に推托けて在りしに。今は辭ふに詞なく。軈て鼠七と倶に參りしかば。職善則朱之介がいふ所をもて。他と舊縁の虚實を問ふに。城藏は連累の。罪を怕れて具に答へず。但云。曩にも鼠七が稟上し如く。那朱之介は。當春賣買の事により。賤父荷三太の店舗に來つ。折から入船を俟よしありて。姑且止宿しぬるのみ。其折まで小人は。他と相識に候はず。况小人の兄。棧太郎の妻黃金と。舊縁あるべくも候はず。黃金の故郷は近江にて。荷三太が親族の。獨女で候ひしを。迎拿りたる新婦なれば。いかにして朱之介と。舊縁の候はん。皆是他が陳ずる所。佯詐にこそ候はめ。と辯に儘して稟しヽかば。職善聞つヽ點頭きて。さぞあらんさぞあらん。曩に鼠七が。答稟しヽと相同じ。然ては儞等に所要なし。重ねて參るに及ずとて。鼠七と共侶に。身の暇を取せけり。恁而二三日を經ぬる程に。是日孟林寺に同宿の一少年。峯張梁六郎通能と喚做す者。昨宵鐵屑鍛冶郎が支黨なる。二賊を搦獲たりとて。孟林寺の沙彌。住吉の里長と倶

俺們が。命運の盡る處。這少年等に戰負て。倶に痛疵を負しより。生捕れて候へば。何事をか隱すべき。告愬狀に載られたる。首伏の事の趣。些も相違候はず。といふに職善は今樣の。書簡をやをら拿抗て。爾らんにはこの書簡は。今樣が自筆にて。終焉に莅て若們に。贈しは是實なる歟。と問を二賊は聞あへず。开は御尋までもなし。告愬狀に明白ならめ。といふに職善又問やう。然らば這朱之介と。十三屋九四郎等は。若們と相識らず。素より鐵屑鍛冶郎の。支黨にはあらざるや。と問ふを二賊は聞あへず。开は勿論にこそ候へ。他等は何でふ支黨なるべき。疑れしは這人々の。不幸にこそ候はめ。といふに職善嗟歎して。爾らば實に今樣が。横死は則自殺にて。朱之介が所爲ならず。又九四郎に罪なき上は。乙藝六市四捻等は。赦して放ち返すべき者なり。然けれども。只這二賊の片言をもて。事忽焉にすべからず。明日又暖簾次等を召よせて。相質して違ずは。實に疑を解に足るべし。楽六木訥等は。這旨を得て。明日又當廳へ參るべし。駝鳥太吹五二賊はさらなり。朱之介乙藝。六市四捻等も。這儘獄舍へ返すべし。住吉の里長故老等も。都て這意を得よかし。と最嚴に宣示して。是日の廳は果にけり。却說其詰朝。峯張楽六河彌木訥等は。住吉の里長故老等と倶に。又浪速の陣館へ來ぬる程に。浮世袋屋暖簾次も。當廳へ召よせられて。今樣に使せたる兩個の小三板。早歌調子と喚倣して。今茲は倶に十二三歲なるを相倶しつ。乳守の里長故老まで。旣に局の內に在り。當下憲嶋皆人頼紀

新局玉石童子訓巻之二下冊

東都　曲亭主人口授編次

第三十四回　賞罰路を異にして乙藝家に還る
九四郎五金を晴賢に齎す

登時住吉の里長は。峯張楽六の上云々と。職善に詰問れて。則答稟すやう。御諚では候へども。楽六は幼稚より。孟林寺に扈従して。兄九四郎と同居せず。小松人で候へば。稟上ず候ひき。といふを職善うち聞て。現楽六は少年なれども。武藝の本事あればこそ。両個の夜盗を摘捕けめ。やをれ楽六。儞は實に身単にて。這両賊を生拘たる歟。と問へば楽六答ていふやう。然ン候。小人が親。峯張九四藏は。兵法武藝を人に教て。名を知られたる者なりしかば。小人も其大刀筋を。聊學得たれども。實に昨宵の挊きは。助劒の者ありて。俺身の武功に做り候ひき。といふに職善點頭て。件の二賊を執索兒に。牽よせさせて佶と見て。やをれ駝鳥太吹五郎。若們が出處來歷。且今様が自殺の事。都て孟林寺の住持木玄と。峯張楽六が告愬状に。具に載たる條々と。相違あらぬ歟甚麼ぞや。と問れて二賊は些も疑議せず。言語齊一答るやう。然ン候

従すると間是あり。今より四五稔前つ比。洛北岩倉の邊より。今様許暢來ぬる客ありて。錢を使ふと大かたならず。約莫一稔許を經て。今様を將て筑摩なる。温泉にゆかんといはれしかば。其間なる身價は。思ひの隨に受拿て。貸遣し候ひき。今稍思合すれば。件の客は歹人の。鐵屎鍛冶郎とやらゝなりし歟。然りとは知らで疎忽の至り。今さら後悔仕りぬ。といはせも果ず職善は。眼を瞪らし聲苛立て。里の恒例なればとて。筑摩の温泉は信濃にて。其踏近きにあらざるに。今様を貸遣す折。僅に兩個の小三板をのみ。隨從せしは甚麼ぞや。最鳥滸なり。と叱り懲しつ。暖簾次が俱したりける。又那兩個の小三板。早歌調子を召よせて。詞を和げて諸るやう。曩に若們は。今様と共侶に。鍛冶郎に俱せられて。筑摩の温泉にゆきし時。他が煉金の計較を。必見も聞もしつらん。匿ず告よ。いかにぞや。と屢問れて早歌調子は。おそる〱答るやう。否。筑摩とやらへゆきし比は。奴每は年九歟。十ばかりにてありしかば。何事も記臆侍らず。況怪しと思ひしとは。聊もあらざりき。一霎時名をのみ更られて。打出丁兒と喚れしのみ。この餘の事は知らず侍り。といふよしさへに取捨にて。佯誑ならず聞えしかば。職善は亦之を詰らず。鮀鳥太等にうち向ひて。若們はこの年來。鍛冶郎が腹心にて。機密は都て知つらん。暖簾次は始より。鍛冶郎を騙賊なり。と知りつゝ他に相譚れて。其利の爲に今様を。貸て他鄉へ遣せし歟。と問ふを二賊は聞あへず。そは言新しくこそ候へ。今様こそ鍛冶郎と。

承りて。兩個の强人。低杭駝鳥太。狸毛吹五郎。幷に末朱之介晴賢。十三屋九四郎の老婆乙藝。乾兒六市四摠等を。囚牽より牽出させて。執牽兒等うち守りて居り。既にして。三好木工頭職善は。出て公案の上に着坐しつ。召人等は皆。擔廊の下に召よせられて。膝行頓首せざるはなし。職善列々是を見て。先暖簾次に問けるやう。爾は這駝鳥太と吹五郎を。認りてぞあらんずらん。といはれて暖簾次頭を擡げて。見つゝ驚く色もなく。否。小人は。この者毎を。毫も認り候はず。といふに又職善は。今様の書簡を拿出て。熏嶋皆人に執接せて。是を暖簾次に見せていふやう。暖簾次其書簡は。今様が。自筆なるや。非や。と問れて暖簾次訝りながら。承戴きつゝうち開きて。讀見て愕然と驚きて。寔に是は仰の如く。小人が認りたる。今様の手迹にて。紛ふべくも候はず。といへば職善冷笑て。爾らば是今様が。横死は則自殺にて。朱之介の所爲ならず。知ずや其首に牽せし駝鳥太吹五郎は。有驗觀主香俞道人。鐵屑鍛冶郎が支黨なり。爾は他等を知ずといへども。曩に爾が鐵屑鍛冶郎に。娼妓今様を貸て。他郷へ遣しゝ時。隨即今様をもて。他が哄騙の媒鳥にせしといふ。駝鳥太吹五郎が招丁にて。事既に發覺たり。有恁れば。爾も鍛冶郎の。支黨なると分明なり。素より覺期の上なるべし。といはれて暖簾次駭怕れて。うち戰慄つゝ陳ずるやう。御諚では候へども。小人何でふ那客の。歹人なりしを知り候はん。乳守の里の恒例にて。身品宜き熟人の客には。所望によりて娼妓を貸て。遊山に

個に喚よせられて。並て檐廊の下に在り。其が中に。乙藝六市四摠三名は。既に綁縛の索を解饒されて。倶に頭を低て居り。職善先柒六にうち向ひて。峯張柒六。倘少年の小腕をもて。二賊を摘搦りし事。助劍の者ありといへども。其挊きの故をもて。料ずも疑獄を解くと。其功賞すべし。恁れば那身に所要なし。木訥も這旨を得て。倶に歸寺して木玄に。這義を具に傳ふべし。又乙藝六市四摠は。二賊吹五郎駝鳥太の。招了により實を得たれば。九四郎は鐵屑が。支黨ならぬ事分明なり。九四郎既に罪なき上は。若們男女三個の者を。權且も留置くべからず。こゝをもて放免す。住吉なる里長故老等も。共侶に這意を得て。九四郎が安藝より還るとも。倶して當廳へ參るに及ばず。只這旨を告知らね。獨朱之介は同じからず。他も亦幸に。罪解屍人を免れたれども。俺いぬる日間諜兒をもて。大和の上市へ遣して。他が那里に在し日の行狀と。二百金の盤纏の事まで。那里人に縁て撈らせしに。朱之介は東國なる。一諸侯の愛臣にて主君に使を奉り。大和路へ來て逗留の程。故ありて上市なる。落葉が女壻に做るものから。那身は放蕩無賴にて。主君より預來ぬる。沙金三百兩と白布幾百反を。賭博の為に喪ひつゝ。剩同郷なる破落戶。安保甲某に謀られて。奸淫の罪脫るゝ路なく。國守に召捕られしを。落葉が辛く救ひ得て。又那家に養ひつ。教訓數日詞を盡して。嚮に他が喪ひたる。沙金と唐布を買せんとて。金二百兩を齎して。京師へ遣したりといふ。其事正可に知れたり。但這舊惡のみなら

死をもて誓し中なれば。竟に機密を畊き示して。哄騙の圀児に使ひしのみ。暖簾次なンどがいかにして。知る事に候べき。鍛冶郎は始より。支黨の多きを嫌へり。這故に年許多。他が行ひし騙術の。洩るゝとあらざりき。开を這浮世袋屋さへ。罪せられんは無益にこそ。といふを職善うち聞て。暖簾次は鍛冶郎が。支黨にあらずとも。他今様を從はせて。其圀児に做たるを知ざりしは。數日の閨房錢多かるを。利としぬる罪。免るべからず。兵毎這奴を綁めて。駝鳥太吹五郎と共侶に。夙く獄舎に繋ずや。と烈き下知に伙兵等は應も果ず衝と寄て。駭怕るゝ暖簾次の。兩手を背へ捩抗々々。緊しく。索を被にけり。當下職善又いふやう。駝鳥太吹五郎暖簾次等は。猶拷問の義あれば。开が儘獄舎へ遣すべし。又早歌調子等も。今様に相似たる。其罪なきにあらねども。年尚十五未滿にて。且今様に從ふて。鍛冶郎に倶せられし。其比は猶幼小にて。善惡邪正を知らずといへば。他等は格別の義を以。里長等に預置てん。乳守の里長故老毎。皆這旨を得よかし。といひ渡されて阿とばかりに。答口訥る乳守の衆人。怕惑ひつ早歌と。調子を倶して外面へ。出て承書一通を。猛可に物して呈すれば。身の暇を賜りつ早歌調子を伴ふて。乳守へ還りゆく程に。吹五駝鳥太暖簾次は。執索郎に牽立られて。四牢を投て退りけり。登時沙彌木訥と。峯張楽六は。悳嶋皆入 承りて。喚登されて檐廊は在り。他は九四郎の弟なれども。孟林寺に扈從せる。寺院侍なればなり。又乙藝六市。四摠朱之介は。一個一

と一百杖。殆苦痛に堪ざれば。聲を涯りに叫ぶのみ。遮莫俗に云藤身なる歟。皮破るゝに至らねば。獄卒夙く撻果て。曳起して推居けり。登時伙兵両三名下知によりて共侶に。朱之介を受取て。退きて準備しつ。赶立て出んとす。是日浪速の里稍盡處まで。倶して追放すべき爲なり。是より先に。乙藝六市四摠等は。楽六木訥里長に倶せられて。退りて門前に出しかば。大江杜四郎成勝は。柿八を從へて。十三屋の隣人。及九四郎が乾兒櫛工等の。この地に躱在る者と。甲乙都て八九名。其頭の茶店に待て居り。蚤く乙藝等を見出して。走り出つゝ皆共侶に。軈て茶店に誘容て。歡びの聲洋々と。甲一句乙一句。先茶を薦め。簞食を拿出て。開まくする程に木訥は是を推辭て。衆人に向ひていふやう。師父の待不樂給はんに。小僧は蚤く寺に退りて。這歡びを告稟さん。大江峰張は格別なり。嫂々を宿所へ送屆けて。明日還るともけしうはあらじ。といふを楽六うち聞て。其義寔にしかるべし。嫂の窮阨解たれども。俺兄逆旅の留守なれば。急ぎて宿所へ送るは要なし。この義を師父へ稟し給へ。といへば亦杜四郎も。木訥にうち向ひて咱等も。亦時宜によりて。明日ならでは還りかたけん。這義をこゝろ得給ひね。と憑ば木訥應をしつゝ。却衆人に別を告て。柿八を將て遽しく。孟林寺へかへりゆく程に。住吉なる里長故老等も簞食を辭ひて。還らまくす。當下隣人等のいふやう。今日は赦免の聞えあれば。姐樣の麻衣一襲と。帯と日傘は主の宿所にて。索出してもて來り。被更給へ。と袱包を。渡せ

ず。他は浮寶屋に止宿の程。做せる悪事のある故に。荷三太怒て追出ししといふ。這事も粗聞えたり。剏又今様が自殺の夜艾。朱之介が旅刀をもて。吭を刺て死したりけるに。枕を並て臥ながら。开を夢にだも知らざりしは。寔に烏滸の白物なり。紿と云恰と云。齎憑る無慙の臘尬兒を。この儘饒して還しなば。何をもて江湖上の。歹人を懲すべき。この故に朱之介は。大和へ還ることを饒さず。又京浪速住吉左界に。脚を留ることを饒さず。背を一百鞭せて。東へ追放すべき者なり。又曩に朱之介が。九四郎に預けし金なりとて。乙藝が當廳へ差出したる。百九十五兩は。朱之介が盤纏にあらず。素是上市なる落葉が。沙金と唐布を買せんとて。他に遞與せし要金なれば。必故へ返すべし。この故に俺既に。使を上市へ遣して件の落葉を召せにき。異日落葉が來ぬる日に。這義を以他に取せん。樂六乙藝里長等。皆這旨をこゝろ得て九四郎に傳示しね。疑獄不思議に氷解したるは。正に公私の歡びなり。と稱て身の暇を取すれば。大家倶に額衝て。唯々と言承したりける。當下賴紀聲高やかに。兵毎蚤く朱之介に。笞を中て追立ずや。と劇しく下知を傳れば。執索の獄卒等。承りぬ。と應つゝ。朱之介に被たる索の。小手を饒しつ推伏て。笞を抗て撻懲す。數は百八煩惱の。迷も斯や墮獄の鬼を。冥府の呵責目前に。見るも鬱悒き乙藝等は。傍痛く思へども。然而在るべきにあらざれば。六市四摠いへばさらなり。樂六木訥里長故老。皆身の暇を賜りつ。外面投て退出けり。爾程に朱之介は。背を撻るゝ

明日は又御宿所へ。参りて歡びを稟さめ。といふもいはぬも誠ある。乙藝四郎楽六等に。目禮しつゝ各々。去向いそぎて別れけり。復說。六市が小母夫は。世話介と喚做たる。小經紀なりければ。この日も又早旦より。生活の爲に出ていまだ還らず。然ども小母は今日六市等を。赦免せらるべしと聞知りて。其歡びに堪ざれば。飯を炊ぎつ湯を沸して。他が立よるを待程に。果して亭午過る時候。六市四捴共侶に。乙藝杜四郎楽六を先に立して。額の汗を拭ひつゝ。背門口より來にければ。小母は遽しく出迎て。こは六市も恙なかりしや。皆さまよくこそ來ましたれ。先這方へ。と華筵を。坐席に布て請ずれば。大家倶に應つゝ。袂を撈り手拭をもて。各裳の塵埃を拂ひて。倶に母屋にうち登るに。四郎乙藝を上坐にて。楽六六市四捴等は。程よく左右に侍りたり。當下屋主の老婆は。先恭しく乙藝に向ひて。不慮の厄難赦免の歡び。祝せば乙藝も云々と。四郎楽六六市四捴。詞も長き夏の日の。炎暑數はぬ東道態に。先晝饌を薦んとて。いそしく立まくする小母を。大家急に推禁めて。飯は方僅茶店にて。思ひの隨に喫べたり。いかで嫂々に浴させて。結髮をこそ願はしけれ。といふに开はいと易かりとて。庭に雨戸を二枚三枚。うち遶らして大盥を。出して直す假浴室。汲拿る熱湯二手桶。水汲入るゝ大柄杓。二三四手を入れて。是で加減は吉岡染の。浴衣を出す管待態に。卒とて乙藝に薦れば。乙藝は屢歡びて。野邊の石竹植られて。盛過たる盤片よせて。饒し給へ。と簀子の上に。衣脫

ば。乙藝は受戴きて。危かりける大厄にて。思ひかけなく大家さまの。御阨會に做侍り。衣のみ蚤く被更ても。顔さへ手さへ垢脂染て。久しく櫛の齒を容れぬ。這頭顱を爭何はせん。といふを乾兒等諾なひて。六市が小母の宿所は。這里よりして十町に過ぎず。こゝにて時を移さんより。那里へ立より給ひなば。身裝は易かりてんといふに。六市四摠等も。聞つゝ倶に點頭て。咱等も如右こそ思ひたれ。卒立給へ。といそがすを。自餘の乾兒等推禁めて。しかりとも午は過たり。皆物發しき時候なるべし。這齎を喫てこそ。左も右もし給ひね。といひつゝ軈て茶博士に。茶を請ひつ簞食を開きて。里長故老乙藝はさらなり。六市四摠を首にて。四郎楽六以下の毎。手に〳〵簞食を引よせて。裝る果子盆に握飯。迭に世話を。燒鹽に交たる胡麻は色見えて。鹿兒皸。斑竹子は。延て節立生魚脯に。蕗蒟蒻の煮染物。裂箸添て配り做す。中酒の壺漿拿抗て。甘き辛きは嘗て知る。一口茄子紫の。灰後れざる。糠漬は。半分入たる庖丁の。斫離れよき男同士。女一人を上客にて。晝飯既に果しかば。乾兒櫛工共侶に。食籠小盆拿斂て。裹む袱。中結の。紐は一筋千筋なる。縞の麻衣拿出す。隣人等は帶さへに。乙藝に締更させて。卒とばかりに皆共侶に。身を起す時誰やらん。蹴盄す茶碗の忘れ水。忘れはせじ。と一緒の。錢を出しつ茶博士に。還して出る日晝に。流るゝ汗を絞りもあへず。日蔭索ねていそぐ程に。遠くもあらぬ六市が。小母の宿所に來にければ。里長故老隣人。乾兒櫛工等はこゝより辭ひて。

四郎と桒六は。側開して倶にいふやう。嫂々の量箇寔に好。五保子に留守せらるゝに。幾まで歟遣里に在るべき。卒立給へ。といそがせば。六市も禁めあへず。敗たる菅笠兩箇まで。索出しつ其一箇を。四搃に遞與して先に立ば。乙藝は猶も老婆に。歡びを舒て身を起せば。杜四郎と桒六も。詞を添つ青傘を。乙藝に遞與して各々。菅笠引提て皆共侶に。出るを目送る主の妻に。四搃も亦別を告る。詞短き笠の紐。引伸しつゝ倶しにけり。却說乙藝は四郎桒六。六市四搃に送られて。俺宿にしもかへり來ぬれば。思ふにも似ず店の簷には。生平に變らず十三屋と染做たる暖簾を掛亘してあり。訝りながら內に入る程に。兩隣の老婆が。莞爾やかに立迎て。こは乙藝さま思ひしより。然ばかり牢疲もなく。還らせ給ひし愛たさよ。六市四搃兩哥哥も。辛き目に遇ひ給ひけん。孟林寺の刀禰達も。炎暑歟はで御苦勞やと。いと喋々しく慰めて。乙藝が右より左より。扇ぐ團扇も深草や。鶉の床に對を思ふ。乙藝は四下を見かへりて。料らざりける禍鬼の。祟は俺上のみならで。皆さまにすら御苦勞を。被ると聞ていとゞなほ。心苦しく侍りしに。稍厄解て還され侍り。一向留守し給ひける。人達は在さずや。と問ば老婆等答ていふやう。然なり。五保達は。迭代りに二人宛。今朝までこゝに在せしが。奴家每が來ぬるによりて。剛才出てゆき給ひにき。今日は此上なき吉日なりけん。斯うち揃ふて還らせ給ふ。赦免の歡びのみならず。已の比及に九四郎主が。安藝より還り給ひにき。然ば逗回の禍事

措て湯に入れば。老婆は猶精悍しく。襷を掛て手拭を。團めて垢脂を搔まくす。迭の口誼果しなく。鄙語にいふ湯の辭義は。水にやならん。と匿笑。六市四摠は身を起して。俺們は街衢なる。湯にも入るべく髯をも剃して。先や男を作らんとて。小母を喚つゝ錢を借て。手拭引提て出てゆく程に。杜四郎と桒六は。吹入るゝ風を待顏に。凭柱に身を倚て。憶ず一霎時打眠たり。悠而乙藝は浴し果て。櫛笥を借て梳る。有繫に長き雲鬟の。亂れ苦しき憂事を。今ぞ稍解水櫛に。搔下し又搻着て。小指に縢髻結の。締り心も夏の日に。流るゝ臙油脈しく。照す鏡に水髮の。淡きも時を移しつゝ。結髮も亦果にけり。當下主の老婆は。土瓶の素湯に茶を入れて。盧生が枕ならねども。碟子に儲の粟餅を。裝つゝ四郎桒六をも。喚覺しつゝ。乙藝より。次第に煎茶を薦る程に。六市四摠は浴しつ。結髮させてかへり來ぬれば。乙藝は圓座に召入れて。主の老婆に。歡びを舒ていふやう。いそぎて家に還るとも。良人は長き旅宿にて。信いまだ聞えねば。悦るべきよしもなく。かへり榮なき宿ながら。いぬる比より稍久しく。近き邊の人々に。阨會祓て守らるゝを。知ず顏して在るべくも侍らず。日蔭は程よく出來しに。宿所へ還り侍るべし。御庇によりて浴しつ。髮さへ結て侍るから。恁ては外看歹からず。小父の還り給ひなば。六市等も恙なく。赦免せられし歡びを。宜く稟し玉ひね。といふに老婆は禁難て。开は其該で侍れども。日は尙未の時候ならん。今一霎時憩せ給へ。夕饌をこそまゐらすべけれ。といふを

らが信義老實。聞事毎に感嘆せられて。又いふべうもあらずかし。是に就ても好しからぬは。朱之介が浮薄の本性。人は形貌によらぬ者にて。女にして見まほしき。艶冶郎なりければ。俺愍に他を留めて。薄情や事を惹出されしは。俺思ひ足らざりし。愆なるを爭何はせん。遮莫乙藝も六市四摠も命芽出たくかへり來ぬるは。是切ての歡びなり。却俺嚴嶋詣して。料ずも昨今まで。長旅に做し故は。治比の郷に立よりて。大人大江弘元に見參したればなり。約莫是等の秘事は。四郎腋子に所要あれども。开は後にこそ告稟さめ。といひつゝ傍を見かへりて。喃姐様達。誂たりける酒餚を。今こそ出し給はずや。といふに兩個の隣妻は。應をしつゝ共侶に。軈て庖湢へ退きて。酒盪めてもて來ぬる。坐着酒菜の二種と。三脚なりし吸物膳を。一個々々に措居るを。六市四摠は執接て。似げなく酌を拿舵や。船切の蕎麥は後段にて。先酒盃を拿揚る。主人の一度を首にて。强飲も沙量も推並て。迭にさしつ瑣小盤の。蜘蛛の行ひそれならで。かへり來にける俺夫子の。恙なかりし歡びと。又俺妹子も幸に。寃屈の罪を発れし。其壽ぎの酒祝ひ。憂を轉す歡びに。過にし事をいひも出。うち聞もしつ時移るまで迭に醉を盡しけり。當下又九四郎は。乙藝菜六等にうち向ひて。聞が如きは那朱之介は。其性善らぬ者なればこそ。果して禍孽釀せしより。乙藝六市四摠さへ。連累の祟にあへり。开は疑獄の所以にして。他がみづから作しゝにあらず。然るを乙藝六市四摠等は。厄解て赦にあひしに。他のみ單轍撻れて。

と。今日御赦免の事をしも。こゝに初て聞知りて。其驚さは大かたならず。又歡びも一入にて。先や里長以下の毎。故老達にも五保にも。禮稟さんとてそが儘に出て一郷をうち巡りて。還り給ひしは午の時候なり。この故に庖厨儲を。奴家毎が憑れて。倶におん身を待程に。主は疲勞に堪ざりけん。軈て納戸へ退きて。假寐してこそいますなれ。と告るに乙藝は含笑て。そは歡ばしき涯りに侍り。然わらんとは知るよしもなく。幾日ともなく垢脂染て。海松の像くに搔垂し。髮をそが儘結もせで。還りいなんはさすがにて。六市小母樣の宿所に立より。憶ず時を移ししは。悔しくこそ。とうち陪話れば。四郎楽六いへばさらなり。六市四摠も歡びて。折から大哥の歸郷ありしは。水母の骨にあふ心地して。斯歡ばしき事はなし。喚覺さん歟。と散動たる聲に九四郎は目を覺しけん。うち咳きつゝ間なる。重紙戸開きて出て來つ。其頭に程よく坐を占て。こは皆恙なかりしや。腋子よ四郎たいふ其首は端近かり。這方へ找み給ひね。といふに四郎は應をしつゝ。乙藝楽六共侶に。折に幸ある歸寧と。大厄解し歡びを。云云とはまくするを。九四郎は聞あへず。否。洒家は嚮に還ると軈て。里長刀禰にも故老達にも。逢ふて具に聞知りたり。又只其事のみならず。孟林寺の木訥法師が。陣舘より事果て。還る路にて出會しかば。腋子と楽六が武勇の擇き。鐵屑とやらんが支黨なりし。二賊を輙く生拘て。竟に疑獄を解きしといふ。其顚末をいへばさらなり。柿八老奴が話說にて。肇て知られし大和なる。落葉とや

ゆく。勢ひ奔馬に異ならねば。六市四摠は乒乓く脚を。駐めもあへず。後れじとて。喘々そ從ひける。この時暑傾きて。晡時に倣しかば。兩隣の老婆は。手に〳〵運ぶ盃盤を。遺なく庖涸へ退けて。乙藝等に向ひていふやう。奴家毎は暇を賜りて。明日の炊きも致すべく。汗流の湯をも沸してん。思ひかけなく饗饌の。御欵待に與り侍り。といふに乙藝も九四郎も。共侶に勞ふて。好御幇助を得たればこそ。手をも濡さで内祝ひの。酒盃を濟したれ。明日は又主達を。招きて薄酒をまゐらすべし。宜く稟し給ひね。といふに兩個の隣妻は。應としつゝ身を起して。左右の宿所へ還りけり。恁而四下に外人なければ。九四郎は恭しく。杜四郎にうち向ひて。和子今こそ聞給へ。小可安藝へ赴しは。今茲が初旅なる兀自。嚴嶋詣は附たりにて。いかで治比へ立よりて大人弘元に見參せまくほしさに。講夥計に相別て。單那里へ推參しけるに。大人は果して遐棄給はず。九四郎よくこそ來つれとて。先一兩日憩せて。遂に拜見を饒給ひけり。折から大人は風濕の疾病あり。なれども大病ならざれば。病牀に在しながら。小可を近く召させて。うち相譚せ給ひにき。曩に別れまつりしより。十稔有餘過にしより。云云と告まつるに。俺二親九四藏夫妻の身故りし事。女兒億祿は短命にて。事皆畫餅になる兀自。和子杜四郎は健に生育給ふ事。柰六を傳まゐらせて。孟林寺へ寓居の事。木隱和尚遷化の事。後任木玄道德の。老實澁欵に背ざる事。和子の才幹。文學武藝に。志厚かる事まで。詳に告稟しかば。大人

大和へは返されず。そが儘追放せられしは。舊惡の咎なりとても。最不幸といひつべし。他百九十五金を沒官られて。鐚一文の盤纏なく。他鄉へ追も放されなば。必路頭に立べからん。俺慾に他を留めて。今其窮阨を救はずは。始ありて終なし。何をもて俠者といはれん。柴六は大義ながら。是もて他を赶ずや。といひつゝ懷なる長財嚢より。圓金五兩を數へ出して。是を柴六に遞與していふやう。俺意ふに那壯佼は。必浪速の鄕稍盡處まで。伙兵達に倶せられて。追放るゝにぞあらんずらむ。八彥爺の這方まで。赶もてゆかば逢ともあらん歟。なれども時既に後れたり。及びかたくはそれまでなり。倘幸に遠く得去らで。他跡蹈て其頭に在らば。汝よく俺意を傳へて。其金子を路費に取せよ。こゝろ得たりや。といそがするを。六市四摠もうち聞て。然らば俺等も倶にゆきてん。捷徑こそあるなれ。と惴るを柴六推禁めて。已ね〳〵。和主等は。既に大く醉たるに。倶しなば路の障にならん。といふを六市四摠等は。聞も果さずうち笑て。柴公其義は心安かれ。出なば幾程もなく。夕風に吹醒されて。走る勢生平に增すべし。いで〳〵。といひつゝも。裳を褰て出まくするを。九四郎ヤヤと喚返して。若們が醉狂なる。倶にゆくとも柴六に。佶と從ふて愆すな。といふに乙藝も杜四郎も。心を屬邢が程に。柴六は件の金子を懷に。𨑕と夾めて。外套を腰に挾み。兩刀手はやく帶做て。卒走一走にいて來てん。といひつゝ驀て外に出て。脚半草履穿だにも。心急迫しき夏の日の。暮れぬ程にぞ出て

身に添ば。魂氣必長かるべからず。この故に再會を四郞に契る事を得ず。和郞俺爲に言傳せよ。四郞は民間に生出て。且寺院に寓居しぬれば。縱武藝の志ありとも。竟に緇流に化せられて佛意の馮もやせん。今はしも好時候なり。楽六と共倶に。孟林寺を辭し去りて。武者修行して諸國なる。豪傑に交りて。資助を求るにしくとなし。夫百足の虫の。死して仆れざる者は。扶助多さによりてなり。其も他尊大なるときは。必人に疎るべし。然ば汝弟兄は。四郞が外叔父なれども。楽六は四郞に增す事。僅に二歲の兄ならずや。こゝをもて。主僕の尊卑をいふとなく。倶に胞兄弟の思ひを做して。是を資助の創にせば。竟に武功を做事あらん。其成功を家裏にして。この地に到て兄音就を。輔佐て地を開く事あらば。大孝順といひつべし。這義を四郞に傳てよ。と宣ふ聲も惱しげにて。病苦に堪ず見え給へば。慰難つ唯々とばかりに。言承しつゝ退きて。却兩三日を經て。立去らまく欲せしに。大人は別を惜み給ひて。一日々々と留め給ふに。太郞君二郞君も。倶に孝順なりければ。朝夕枕方脚方に侍りて。慰給ふ。詞敵に。小可をも日每に召させて。放ち給ふべくもあらざれば。憶はず淹留久しくなりて。三伏の夏闌たり。俺家の事和子の事。心に掛らざるにあらねば。屢身の暇を乞稟すに。大人は竟に禁め難て。看病に侍る女房に吩咐て。鎧櫃に藏措れたる。金二裹拿出させて。幵を小可に遞與させて。且宣ふやう。其一裹は四郞楽六が。武者修行の路費に取せよ。又一裹は。這年來汝夫婦と。孟

は聞つゝ或は歡び。或はうち歎き給ひて。驚きも亦大かたならず。這里にも係る事ありとて。告させ給ふを承るに。和子の大兄。備中新司興元君は不幸短命にて。三稔前に世を去り給ひぬ。憂は只この事のみならで。興元主の冢子なる。幸松君も四五歳にて。果敢なく殤させ給ひにき。興元主の母上弘元の嬬人は。うち續きし御歎きにて。是も亦去歳の秋。暴に黄泉に赴き給ひぬ。小なれども和子の兩兄。太郎君大江音就二郎君基綱は。倶に恙あることなく。既に長と成給ひしかば。小可御目を賜りつ。和子の上さへ叮嚀に問せ給ふに答まつりぬ。當日大人の宣ふやう。相別しより十餘年。這里にも亦其方にも。鬼籍に入る者多かりける。老少不定の世は夢なり。今戰國の時なりとて。俺一筆の雁書を惜みて。四郎が安否を問せざるにあらず。其故は西七國の守。大內義興主世を去りしより。嫡子義隆少年なれば。佞人稍時を得て。賢者を遠離忠臣を譖ちて。人を損ふ事間是あり。俺は那家の被官ならねども。附庸に似たる小身なれば。從はざることを得ず。こゝをもて近曾は。出仕を歇め謹愼を宗として。遠く使札を出す事なし。遮莫荊婦の世に在し日に。他はさらなり音就にも。基綱にも告示して。四郎億祿等母と子の。上をしこゝろ得させしかば。其頭に障りあることなく。荊婦は臨終にも。四郎に對面しがたきを。遺憾しとて不娛たりき。況音就基綱は。なつかしくこそ思ふべけれ。然るを俺荊婦はさらなり。億祿は年尚三十に足らで。黄泉の客に做りにしを。今初て知る慨しさよ。俺年年に衰へて。病苦かくの如く

新局玉石童子訓巻之三上冊

東都　曲亭主人口授編次

第三十五回　陰徳陽報如如來樞を導く　積善天感落葉其實を賜ふ

再説。十三屋九四郎は。當日杜四郎戍勝に。絶て久しき治比の信。弘元風濕病臥の事。且教訓の言の顛末。又贈れし金子の事。音就基綱の上さへに。言詳に傳示して。弘元の授たる。一書を取出て遞與ししかば。杜四郎は今始て知る。父の疾病嫡母の逝去。大兄興元親子の早逝。聞事毎に胸潰れて。漫に涙の進むを覺ず。其書を屢承戴きて。歎息しつゝ且いふやう。思ひきや治比にも。不幸かくの如くならんとは。斯いはば女々しくて。喞言には似たれども。俺薄命の至す所歟。髫歳にして實母刀自を。喪ひしより幾程もなく。外祖父母さへ世を去て。今は安藝なる親弟兄に。會まくほしとのみ思ひしに。大兄も命長からず。況や大人は疾病に。臥給ひぬと聞くからに。翅なき身を怨るのみ。縱去向は幾百里。雲と水とに隔るとも。一葉の舟に便り求めて。瞬間に彼御許へ。參りて拜見せずもあらば。後に悔しく思ふとも。何をもて及

林寺の現住が。四郎を教育の報ひとす。逆路の重荷なるべけれど。もてかへりて配分せよ。と仰に小可畏み承て。這一裹は左も右も。小可なゝどに賜は。當かたく候。と推辭稟せば頭を掉て。そは又要なき口誼なり。病中自由ならざれば。音就に寫せたる。短文の一書あり。其を證据に四郎に見せよ。と言叮嚀に示し給へば。太郎君は件の御書を。小可に渡し賜りて。異日を契り給ふにも。身は感涙の外あらず。却あるべきにあらざれば。身の暇を賜りつ。退きて件の金子を藁苞にして恙もなく。水路の旅宿日數歴て。かへり來て聞けば宿所の凶變。乙藝六市四摠等の。疑獄は和子と楽六の。武功に解たる歡びを。大人には告る由なさよ。先那御書を。と懐より一通を拿出して。杜四郎に遞與す折から。外面に人の脚响して。這方を投て來る者あり。开は又下の回に解分るを聽ねかし。

新局玉石童子訓卷之二二下冊　終

饒給へ。と徐やかに。草履を其里に脱措て。黍登れば九四郎も。訝りながら膝を找めて。訪せ給ふ屋主人。十三屋九四郎は。俺等にこそ候なれ。什麼那里より來ましたる。と訝り問へば。點頭て。まだ面善にも侍らぬに。恁地狎々しげなるを。こゝろ得かたく思れん。奴家は。嚢に這御宿所に。在りと聞えし大和の旅客。末朱之介に由縁ある。上市なる落葉に侍り。と名告に驚く九四郎乙藝。思ひがけなや。开はよくこそ。其里はあまりに端近にて。御話説を听侍るに宜しからず。且這方へと右ひだりより。上坐へ請居しつゝ。二枚折なる小屏風を。建て片象る客儲に乙藝は。店舖の火盤なる。眞鍮藥鑵掛試て。溫茶汲拿る箇茶碗。茶托蕁てうち載て。卒とばかりに薦れば。受戴きつゝ傍に置て。原來御身は。九四郎主の御對偶。乙藝刀自にをはする歟。といはれて乙藝はこゝろ得ず。乙藝は即奴家に侍り。幾の程にか知られけん。故こそあらめ。と訝れば。九四郎も倶にいふやう。酒家は今朝旅より還りて。人傳に聞し御身の事。彼朱刀禰を幾番歟。救ひ給ひし慈愛良善。及びかたし。と思ひしのみ。今日俺家に來まさんとは。神ならぬ身の知らざりき。といへば落葉は又點頭て。开は其該で侍るかし。奴家なりとて這頭まで。出て來べうは思はざりしに。近曾御身の宿し給ひたる。朱之介は俺女壻ながら。いふかひもなき浮薄の本性。そを知らざるにあらねども。已かたき情由ありて。當春東西を買せんとて。京師のかたに遣しゝに。夏闌るまでかへり來ず。遊興の癖又起りて。那金子をしもなでり

んや。然は然ながらいかにせん。御教訓の重かるに。今一介の功なくて那里へは參りがたかり。悲しきかな。と聲立て。泣ぬは泣くに彌增たる。孝子の心思ひ汲。九四郎さてぞと慰めて。其御歎きは理りながら。大人の欠安の大病ならねば。療藥必經驗ありて。竟には瘥り給はなん。路費の金さへ賜りたるに。其義は權且思ひ復して。楽六を將て東の方に。武者修行し給はゞ。大人の教に悖る事なく。後の見參安かるべし。といふに乙藝も云云と。詞を添て諫れば。四郎は僅に點頭て。現に從ぬ。行も從も。親の教に從ふを。孝子の道といはれんのみ。這一通は。俺兄の代筆にて。大人の賜書と承れば。今見參の心地ぞする。いで〳〵。といひつゝも。又其一書を戴きて。封皮を拆まくしぬる折から。跫然として外面より。這方を投て來ぬる者あり。と見れば。一個の老女の。年齡は六十に近くて。手袋脛衣巳の時なる。夏衣ながら行裝は。貧しからざる打扮にて。繻子の前帶裳短なる。副帶さへに精悍しく。後方に吊せし行轎子の。轎夫兩名從ふて。十三屋の店前へ。來つゝ暖簾を瞻仰見て。這里なりけり。と單領く。老女は莞爾に揖讓して。卒爾ながら問侍らん。九四郎主は宿所に在すや。といふを四郎は見かへりて。折歹かり。と父の書を。开が儘に懷に。夾めて。急に身を起しつゝ。避て奥へぞ退りける。當下乙藝は端近く。件の老女を立迎へて。那里より歟知らず侍れど。訪せ給ふ九四郎は。西へ旅宿の日數歷て。今日かへり來て宿所に在り。櫛の御用や候。と問復されて。嬉しやな。

具に聞知りたれば。倆を召よせし事別義にあらず。曩に朱之介が盤纏なりとて。九四郎に預けしといふ。百九十五金は。聞くに朱之介が有財ならず。倆が沙金と唐布を買せんとて。朱之介に遞與たる。金子なる故に沒官せず。倆に返し取するなり。但し其金は。故二百兩なりけるを。五兩は朱之介が路次の行籠に。使減したりといひにき。這義をもよく存せよ。とみづから仰渡させて。件の金子を賜りしかば。感まつるも畏さに。一霎時退りて長刀禰の。加印の承書をまゐらせしかば。事立地に着落して。身の暇を賜りにき。於是初て聞知りける。刀自逵三名の寃屈の罪は。俺女婿朱之介所以なりしに。俺身料らず這地に來ながら。宿所を訪ふて詫解もせず。朱之介が房錢の。債もあらんを償はで。大和へ還りいなれんや。と思ふ心を村長刀禰に。告て浪速に宿投て。一霎時這身の暇を請ふて。吊せし行轎にうち乘りつ。方僅這頭へ來て聞けば。九四郎主は今朝安藝より。かへり來ませしといふ人の誨に。いよ〳〵便方からねば。さてこそ推參し侍りにき。と告る詞の淀なきに。流るゝ汗も納れつべき。夕風よりも憑しく。思ふ乙藝は應をしつゝ。僅に聞知る御身の誠心。違ざりしも不思議の對面。俺們三人は罪饒されて。世間廣くなりけるに。彼人ばかり追放されて。往方も知らずなり給ひしを。心苦しく思ひしのみ。救ふべくもあらざりき。といふを九四郎推禁めて。落葉が實義を謝していふやう。初俺朱刀禰を。家に留めしは故ある事にて。那人は俺隣なる。岸松屋を宿にせんとて。左界より來にける

なく。喪ひやしつらん。と猜しゝのみにて大和なる。家にも慨しきこと多く。うち歎きてのみ在りける程に。いぬる日浪速の陣舘より。御使を下されて。猛可に奴家を召せ給ひぬ。思ひがけなきことなれば。うち驚きつゝ承るに。朱之介の一義なり。國守にも告られけん。守よりも亦御下知あれば。等一等ある時誼には侍らず。留守には故老隣人の。老實なるに憑在らせて。其次の日の早旦に。村長刀禰に倶せられて。上市の家を出立しより。一日二日と旅宿をしつゝ。炎暑に堪ぬ今日午の時候。倶に浪速に來にければ。軈て陣舘へ參上りしを。局の内へ召よせられて。頭の殿いふ職善ぞ御出坐在り。有司に讀せて聞せ給ふ。朱之介が越度の條々。其顛末を創て知りぬ。朱之介は這十三屋を。宿にして在りし日に。今様と歟喚做たる。娼妓の自殺に事起りて。那身はさらなり。宿の内室。乙蘂刀自さへ乾兒達。兩三名繫累せられて。久しく獄舍に繫れしに。九四郎主の舍弟なる。勇少年の揮きにて。鐵屑と歟いふ騙賊の。手下の夜盗を兩名まで。搦捕給ひしかば。其强盜等の招了にて。今様が自殺も知られ。又朱之介も九四郎主も。鐵屑が支黨ならぬ。證も其里に達しかば。頭の御疑稍解て。刀自と兩個の乾兒達は。今朝其侶に赦にあふて。宿所に還り給ひし事。升が中に朱之介は舊惡多かる事までも。這時既に聞えしかば。更に罪を被りて。大和へは返されず。背を一百鞭せて。東へ追放せられし事まで。其條々に備なりき。有司達讀果る時。頭の殿宣ふやう。落葉儞が慈善なる。俺間諜兒をもて。豫

からず。然らでもうち續く憂事にて。痞はいまに治らず。自由には侍れども。夕風のよく吹入るゝ。這里にこの儘置れんこそ。こよなき管待なるべけれ。といふに九四郎諾ひて。爾らば兩個の轎夫は。背門に召容て酒飲せんず。といふを落葉は聞あへず。否。他等は。浪速の宿所へ返して。今宵の情由を村長刀禰に。告ずは不便に侍るべし。といひつゝ、やをら身を起しつゝ。店頭へ立出て。こや〳〵と喚よすれば。店舗の傍に行轎を。舁居て主を俟。件の兩個の轎奴は。應と答て來にけるを。落葉は猶も近つけて。奴家は這里に所要あり。一夜明して明日いなん。和郎達は浪速の宿へ。退りて由を長刀禰に。告て明日又朝夙く。奴家を迎に來よかし。と詞急迫しく吩咐れば。九四郎も勞ひて。和郎達大義にあらんずらん。酒菜はなけれど酒はあり。背門より入りて喫ずや。といふを轎奴等は聞あへず。否沙量なれば欲からず。飯も剛才賜りぬ。卒然らば阿懷さま。明日又迎にまゐりてん。と告別しつ行轎を。擡起して浪速なる。歇店を投て退りける。當下九四郎は外に出て。暖簾卸しつ推疊て。箱招牌にうち乘て。幵が儘店舖の片隅へ。遽しく拿入れて。戸を繰下す兩三枚。都ては閉ぬ夏の夜の。風も馳走の一蒸熱。乙藝は行燈引提來て。碟子に裝做す葛の粉餅。に掛し砂糖は夏の霜。心も解けし欵待態に。煎茶の出飥汲更て。何はなけれど是なりとも。御口取に。と薦るを。落葉は受つ戴きて。こはうち措せ給はずて。御阨會に倣り侍り。這葛餅子を賜るだに。吉野に近き俺家の。事をし思ひ出

に。其岸松屋は他郷へ徙りて。這地にあらず做しかば。左界の人と約束したる。宿違ひては便なし。といはるゝにうちも置れず。其隣なる故をもて。只得俺家に留めしなり。矧又那百九十五金は。洒家安藝へ赴く折。朱刀禰より預しを。乙藝に藏置せしに。幾程もなく禍事起りて。件の金子を陣舘へ。召されて出處を鞫問あり。故の主なればとて。御身に返し賜りしは。是切てものとながら。俺豈今さら那人の。房錢を欲せんや。皆是時の不幸にて。乙藝と六市四摠等を。一旦連累せられたりとて。怨むべきとにはあらず。那人の心術は。好もあれ歹もあれ。俺は俺誠心をもて。權且家に留めしに。無慙や。那人追放せられて。鐚一文の盤纏もなきを。救ずは俠者にあらず。と思ひにければ俺弟。梁六をもて金五兩を。贈らせんとて赶せたり。なれども時の移しかば。及べきや否を知らず。又那二賊を生拘しより。遂に疑獄を解きし揚きは。弟梁六の功のみならず。另に一個の勇少年あり。开は杜四郎成勝と喚做て。梁六と共侶に。小松の孟林寺に寓居しつ。嚮に訪來て奧に在り。といひつゝ外面瞻仰見て。日ははや沒て黃昏たり。乙藝行燈を出さずや。喃大和の姨御。いふべき事も聞べき事も。迭に猶多かるに。今宵は這里に留らせ給へ。といふに乙藝も共侶に。留守の程なる禍事にて。櫛工等も炊妾さへ。一個もあらず做りしかば。然せる欵待は得ならねども。先夕饌をまゐらせん。陜くはあれど納戸にて。夜と共に語り給ひねかし。といひつゝ立を掖歇て。否。剛才來ぬる路にて。物喫たれば欲

も。怨むべき事にはあらず。九四郎は安藝よりして。いまだかへり來ずもあれ。老婆乙藝に悲み請ふて。錢まれ金まれ借らばや。と尋思をしつゝ路を易て。執て返しつ浪速を過りて。住吉の里に來ぬる程に。既にして日は暮けり。當下朱之介は。甲夜闇に紛れつゝ。十三屋の店頭に潜來て。閉遺したる戸の間より。家内の光景を覗ふに。思はざりける九四郎は。何の程にかかへり來にけん。乙藝と倶に店舗に在り。奇きは又只是のみならで。大和なる落葉さへ。主人夫婦にうち對ひて。打譚ふてありしかば。吐嗟とばかり。膽潰れて。夢ならずや。と思ふのみ。內に入るべき便宜なければ。悄と退きて呼門せず。猶も容子を知まく欲さに。這府舗の傍なる。拾簀子を悄地に下して。柱に身を倚せ尻うち掛て。單面しつ耳を澄して。主客うち相譚を。竊聞してぞ居たりける。裏面には是を知るよしもなく。落葉は屢嗟嘆して。九四郎に答るやう。人にして人ならぬ。朱之介の禍事故に。尙年少き刀禰達の。近くもあらぬ俺家を。訪んとまで準備ありけん。心操こそ憑しけれ。斯いはゞ暗き恥を。明々地に做すに似たれど。朱之介の事はしも。柿八とやらんが話說にて。知られたらば隱も要なし。他は俺姪斧柄の必死を。拯ひて妖怪を。對治したる者なりき。且奴家が伊勢の阿濃の津に。遣嫁して。商賈の妻なりし時。其家痛く衰果て。夫婦離別しける折。其年僅に五歲なる。獨女兒を泣別して。舊里なれば大和なる。兄杣木斧七の。家に歇りて在りし程。斧七夫婦は時疫にて。共侶に身故りつ。遺るは姪の斧柄

られて。常言にいふ憂者は。逆旅にてこそと涙暗む。庖湢の蚊遣煙り來て。人を泣する袖の露。夜の席の蕭然に。閑談時を移すめり。姑且して九四郎は。坐して落葉にうち向ひて。前にもいひし事ながら。杜四郎と桀六が。御身の上を聞知りしは。いかで上市へ赴きて。那百九十五兩の金子の。出處來歴を。問も質して自他一件の。疑獄を解ん爲なりき。爾程に孟林寺に新参なる。柿八と喚做す奴隷の。故郷は上市なりと聞えしかば。他に就て朱刀禰の。出處の虚實を問しより。那人の放蕩無頼。御身の慈善德義まで。具を聞知ることを得て。倶に大和へ起行せんとて。準備をしける其夜芟。疑獄を解くべき照据を得たれば。大和へゆかず做りけるに。反て御身に訪るゝは。緣ある所以歟。こも奇なり。といふに落葉は膽向ふ。心の裏に思ふ事。うち出て爾いへばえに。踰越す波濤歟。擬歇難し。涙に笞口籠りけり。有恁る折から竊歩しつゝ。這店頭へ來る者あり。是則別人ならず。末朱之介晴賢なり。他は舊惡の故をもて。嚮に陣舘の雜兵二三名に。追立られ將て去られて。則浪速の中閖亭にて。幵が儘に追放されて。雜兵等はかへり去りけり。爾程に朱之介は。罪解屍人を免れたれども。既に追放の身と做りて。僅に錢一緡の。盤纏だにあるとなければ。進退其里に谷りて。ゆきも得やらず跡傍なる。樹下に立よりて。跪居て肚裏に思ふやう。曩には俺寃屈の罪にて。宿の老婆乾兒等さへ。一旦獄舍に繫れたれども。俺做せる蘖にあらず。況や他等は饒されて。異なく家に返されたれば。俺を憐惑思はずと

又汝の女壻。末朱之介の如きは。原是邪物の後の身なり。緣に觸事に感じて。斧柄が必死を拯ひしは。是孽の寓る所。其拯ひしは拯ふにあらで。反て是を殺すなり。然るを汝が疎忽なる。初對面より壻做の。約束して悔もせず。夙く斧柄を妻せて。他が邪淫に喪ひたる。主君の財貨を喪はせじとて。償得させしは惑ひのみ。慭に義に仗まく欲して。邪物の惡を肥しゝかば。其益なきを今こそ知りめ。然ば朱之介に齎したる。二百金も空花にて。生れし小兒も孫ならぬを。後に悟るよしあらん。然ばとて世を果敢なみて。女僧に做らまく欲するとも。這家いよく羈に做りて。今は本意を遂かたかり。好も歹きも自然に任して。哀むべからず歎くべからず。只愛惜の念を斷て。斧柄がとを忘れよ。と教化一入叮嚀にて。いまだ告ざるに俺家にありにし事を見る如く。知せ給ひし善智識の。法語に驚き。且畏みて。合掌しつゝ稟すやう。罪深かりし迷の雲も。御教化によりて霽侍り。然るにても朱之介に。齎したる金二褁は。斧柄が厄を救れたりし。報恩の其一種なれば。他又遊興淫樂に。使失ひたればとて。惜むに足らず侍れども。他が東の主君より。仰を承てもて來にける。唐布百反と。沙金五百兩なりと聞しのみ。开は禪師に乞まつる。造佛の爲なりしを。他淫樂に使捨て。殘るは沙金二十一包。留めて俺家に在り。他は倘那儘に。這地へかへらず做りもせば。件の沙金を遣かたなし。其折には禪師樣。いかで受させ給ひねと。願へば頭をうち掉て。造佛は是有漏の緣。扇谷の情願を。許さゞり

のみ。其比は尙稚かりしを。稍守育長と成して。好女壻欲得と徼る折から。朱之介が斧柄を拯ひし。恩義あるのみならず。他は俺故の良人の。後妻に生たる。獨子なりき。と聞えしかば。新恩舊緣兩ながら。深くも感じ思ふの故に。漫に斧柄を妻せしより。斧柄は遂に有身て。五月に做し今茲の春。朱之介に東西買せんとて。京へ遣したりけるに。久しくなるまでかへり來ず。信だにもあるとなければ。斧柄はそれを苦に病故にや。いまだ臨月には做らざるに。猛可に產の紐解きて。八月子を生たりき。其生しは男兒にて。然しも恙はなけれども。只痛しきは斧柄の薄命。其夜急症にて身故りにき。年來守も育たる。姪にはあれど實子に。異ならず思ふ老が身の。賴む樹下に雨漏りて。袖のみ濡す憂事の。憂に堪ねば共侶に。死ばやとうち歎きつゝ。一日二日と辨よしもなく。安葬もせでありける程に。思ひかけなき如如來樣の。六田の畚を出まして。這頭を劵緣し給ふとて。人多く俺門に。立集ふと聞えしかば。慌惑ひつ走り出て。禪師樣の御法衣の。袖に携りつ斧柄が爲に。廻向を願ひまつりしかば。姑且錫を駐めつゝ。俺家にのみ立より給ひて。斧柄が柩に廻向あり。且奴家に諭給ふやう。約莫生とし活る物。那生あれば這死あり。喪ざれば得るとなし。何をか哀み何をか歎ん。俺今無量の法語あり。善女謹で聽聞せよ。汝はさらなり死しける女兒も其心貞實にて。惡心惡行なしといへども。不幸かくの如くなるは。倶に前世の業報のみ。今この惡報あらざれば。死して淸果を得べき事かたかり。

髮の優婆姨なりとも。寧煩惱の絆を斷て。心を安養極樂淨土に。置ば何ぞ措ざらん。と思ひ復しつ歎きを禁て。今は斧柄が像見なる。赤子の爲に乳を討るに。片山里は亟の所用に。嬭母を徵め易からず。折から新町なる敗鐵經紀。釘六の老婆も。二十日已前に子を生たるに其赤子は亡なりて。懷寂しきのみならず。乳房盈て堪がたさに。雛鷇を索むると聞えしかば。先當分の凌の爲に。斧柄が赤子の乳名を。玉五郎と命けてぞ。釘六許遣して。其老婆に字育すれば。聊心は安堵たり。是よりの後。梅雪信女の。爲に香を燒花を賻けて。看經に日を送る程に。まだ三七日にはならざりける。當日浪速の陣舘より。召るゝと聞えしかば。うち驚きつゝ喪服を脫て。這地に來つる事の顚末。長々しくて飽れやすらん。要なき身上話說にこそ。といひ果て歎息す。九四郎乙藝は共侶に。聞くに哀しき人の家の。艱を今さら慰難て。屢嗟嘆したりける。當下落葉は。項に掛たる。紐を延しつ財囊を出して。主人夫婦に示していふやう。前にも告たる事ながら。這箇金二百兩は。朱之介の爲に調達して。他に遞與亢し幵が內中を。五兩鈥他は使ひしのみ。殘る一百九十五金は。這財囊の中にあり。今日陣舘より賜りて。故へ復し金子ながら。嬉しくも思はぬに。もてかへらんは心似ず。いはでも知るき事ながら。朱之介が釀したる。禍鬼に拘つらひて。乙藝刀自さへ乾兒達さへ。疑獄に繫れ給ひしかば。御活業さへ禁められたる。東西の沒匁の多かりけん。然るを朱之介を憎みもせで。他に盤纏を取せんとて。

しは這故なり。なれども汝が深信切義。賞すべきよしあれば。其沙金は柩に乘て。斧柄が亡骸と倶に瘞めよ。其金後に世に見れて。爲に佛像を作る者あらん。然ば扇谷朝興の。夙願を果すに足るべし。必な疑ひそと。諭しつ料紙硯を求めて。則斧柄が法名を。梅雪信女と命じ給ひつ。件の沙金を出させて。財嚢の隨に柩の上へ。紐もて結付させて。又敎給ふやう。俺思ふ旨あれば。這亡骸を六田川の。邊へ抬げ出させて。俺庵近く葬るべし。是も緣あるとなりかし。といひつゝ四下を見かへり給ふに。里の老弱百十數名。禪師を渇仰しぬる者。に這坐席へ稠入りて。圍繞して在りしかば。禪師列々看亘て。衆人目今俺爲に。這柩を抬げ出して。六田川の邊に葬れ。疾々せよ。といそがし給へば。里人歡び承ざる者なく。慓雄の壯佼五六名。合肩入れて抬げ出せる。柩に從ふ里の老弱。皆後れじとて外に立ば。禪師は錫杖衝鳴して。是を導き給ひけり。憶りなかりし野邊送に。奴家はさらなり一家兒なる炊婦も鍼妾も。且呆れ且畏みて。門方に立て目送る程に。數珠もて拜むも多かりけり。誠に不測の佛緣なる哉。如如來樣を信ずる者も。腹黑き毎は。十遍百遍詣るとも。拜面を饒し給はず。と豫聞たる事しもあるに。斧柄が不幸。死亡の折。招ざるに出まして。聚合し里の衆人に柩を舁せて將て去りて。六田川の上なる。御庵の傍に。安葬せ給へるは。過世ありける洪福にて。歎きの中の歡びなり。最淡々しき女子の淺智に。量知べきよしもなき。活菩薩の敎化に任せて。形貌は有

ん。と思ふばかりの寸志に侍れど。开も斫れぬを爭何はせん。知せ給はぬとながら。奴家が伊勢の津に在りし時。故の良人木偶介は。家をも子をも忘るゝまでに。色に惑ひて錢財を。湯水の如く使捨たる。其後妻に生せしといふ。朱之介も父に似て。いふかひなきこそ悲しけれ。是に就ても思ひ出る。奴家が實の單女兒。乙柚は僅に五歳の時。生別して二十稔有餘。絶て信なかりしに。近會朱之介が話說にて。創めて聞知る他が薄命。名を小夏と喚更られて。繼母の手に養れ。華の洛陽も身を杪枯の。果敢なき世渡りして在りしに。親は京師に住托けん。乙柚が九歳なりし秋。男女兩個の子を携て。夫婦鎌倉へ赴道中。榻鍼嶺を踰る折。山豪に撞見て木偶介主は命を喪ひ。乙柚の小夏は谷底へ。投棄られて。陽炎の。命空しく做りけん。と聞にし折は胸潰れて。哀さ涯りなかりける。遮莫其折朱之介は。年三の秋なれば。事の光景を覺ねども。年闌て母親阿夏の夜話に。聞しとて告られたれば。實なるべし。其哀悼に袖濡て。まだ乾かぬに斧柄すら。命短く子をのみ遺して。先たちたれば千萬の。金ありとても何にせん。寄處なき遺老の身を。慰めはせで。御夫婦達。情強や。とばかりに。懷ず財嚢を投捨て。よゝと泣つゝ伏沈めば。九四郎は手を叉きて。默然たる开が程に。乙藝は涙雨の如く。同じ浮世の笠宿り。夕立ッ天にあらねども。曇や胸に思ふ事。いはまくすれど悲しさと。歡ばしさに濕る袖を。絞もあへず身を倚せて。落葉が背を撫下し。又撫下して。喃御懷樣。今宣せし綷の趣。

賢弟をもて赶せ給ひし。九四郎主の任侠の。有がたきまで忝きに。些の報をせずもあらば。這地へ來つる甲斐はなし。願ふは御夫婦這金子を。受納て是までの費に充させ給へかし。といひつゝ財嚢を拿抗て。遞與まく欲するを。九四郎は手にだに觸ず。推戻して且いふやう。幵は思ひかけもなき。其金受て何にせん。御身こそ朱刀禰に。幾層の鈔を沒れながら。那人都て事を得達ず。幵が上に令愛の不幸の。沒匁もさぞあらん。其は其儘もてかへりて。佛事に用ひ給ひね。と推辭めば乙藝も倶にいふやう。如如來樣の事はしも。這里にも人のいふ者あり。其活佛の引接を。承給ひしは御息女樣の孝順貞義と。御身の慈善の。故にこそあらんずらめ。其に及ぶべくはあらねども。九四郎が任侠なる。人に東西を施しはすれ。然もなき故に人さまより。東西を受る事は侍らず。幵を云云と强給ふは。憚りながら人を知り給はぬ。故にこそ侍らめ。と辭ふを落葉は推復して。そは其該で侍れども。目今いひし情由なれば。枉て受させ給ひね。と又薦るを毫も聞かぬ。夫婦齊一固辭のみ。遣りつ返しつ果しなければ。落葉は只得件の財嚢を。幵が儘側に閣きて。憶ず落る感涙を。袖に搵めて又いふやう。思ふに増て誠ある。御夫婦の方正さよ。負て本意なく侍るかし。斯いはゞ心裏恥しき。不問語に侍れども。這金子なりとて有餘。游財にはあらずかし。朱之介を世に出さまく。思ふばかりに內百兩は。他借して他に遞與ししに。そも亦空に做りしかば。切て御身御夫婦と。舍弟達二柱の。恩義に報ひまつら

り。他は和殿親子に過世ありて。必娘に做るべき者ぞ。今勉て那死を救はゞ。後に幸多からん。是を用ひて死を起しね。と説示しつゝ懐より。拿出す一貼の。薬を與て答を俟ず。飄然として行過けり。思ひがけなきとなれば。俺父は奇異の思ひを做すのみ。然ばとて疑はず。行と一町有餘にしてと見れば老たる跛松の。溪水の上に指出たる。木杈に夾れて。死したる如き一個の童女あり。是なるべし。と思ふにぞ。伴當と倶共に脛の漏るゝを數ず。やうやくに近つきて。見れば那身に瘡はなし。やをら推揚て抱拿つゝ。舊の處へ退きて。草を折布き臥しめて。先四下を見かへるに。其頭に寃家のあるとなし。又其童女をよく見るに。年は八か九にぞあるべからん。敗たる構の夾衣を壺折て。藍染なる仁田山紬の帶の。申時ばかりなるを。端短に結做して。手には胈被足には脚絆。小形の草鞋を穿たれば。旅ゆく賤女なるべしと猜せらる。形貌こそ斯窶れたれ。容顔醜からざれば。痛ましさも一入にて。其脈を診に。絶たる如く有に似たり。軈て件の散薬を。口中に揮入れて。溪水を掬て沃下しつ。主僕力を勠せて勸る程に。件の童女は稍息出て。死ざるを得たれども。ものいふまでに至ねば。只得伴當に搭駝せて。其夜歇店に就てこそ創て聞知る他が素生と。名を小夏と喚れたる。事云云なりといへるのみ。父も亦繼母も。稚き弟も山豪に。屠られて命をや殞しけん。恙あらずや知らねども。外に親族とてもなき。憂身を憐愍給ひね。と泣口說れて俺父は。いよ〳〵捨がたき思ひあり。倘見る由

俺身に思ひ合するよしあり。御身の故の對偶は。伊勢の阿濃なる町人にて。木偶介主と宣ひし。其屋號は末松にて。乙柚の小夏は奴家に侍り。と名告るに落葉は驚きながら。頭を擡げて左見右見て。原來其方は俺女兒。乙柚なりし歟。しかれども。他は九歳なりし時。寃家の爲に千仞の谷に。投落されしと聞たるに。世に存命てあるべしや。こゝろ得がたしと。訝れば。九四郎然こそと。膝を找めて。其疑ひは理りなり。俺身總角なりし比。二親に聞しとあり。言多くとも詳に。告て御身の惑ひを解ん。抑俺父なりける。峯張九四藏中原通世は。原是信濃の一諸侯。木曾氏の家臣なりしに。壯年の時故ありて。致仕して宅眷を携て。浪速に移來て。卜居しつ。兵法武藝を人に敎て。左も右もしてありける程に。永正九年八月の時候。舊里に要事ありて。一僕を將て峯張の。岐岨路に赴たりけるに。其比摺鉞巓には。折々山賊の禍ありと聞えしかば。素より武藝に事足る兀自。謹愼其身を愛する故に。敢危きに近つかず。其往く折にも還るさにも。件の高嶺を上下せず。案内知つたる上なれば。樵夫のみ通ふといふ。山脚路に分入りて。荊棘を踏啓。溪水を涉しつゝ。辛くしてかへり來ぬる程に。日は既に傾きし比。前面より來ぬる一個の行僧ありけり。頭には檜笠を戴きて。背に駝做す網代の笈。手に錫杖を携たる。其形容飄々然として。面色も亦凡ならず。蔦の細路相讓んとて。行過るを俟程に。件の行僧歩を停めて。俺父に向ひていふやう。這里より西なる溪松の邊に。賊難危窮の童女あ

ぬる比。這里に宿せし朱之介は。異母なる俺弟。珠之介なりけるを。迭に知らず知よしもなく。倶に獄舎に繋れし。身は免れてかへり來つ。他のみ單追放の。往方も知らずなりけるは。現に善惡の報にこそ。と思へど不便に侍るかし。といふに落葉は泉做す。涙に聲は口籠りて。現に理りなり俺も亦。久後憑しく思ひたる。斧柄は反て短命にて。死せりと聞し其方は異なく。環會ける歡びは。現か夢か幻歟。量知られぬ生死の。海と山迹に老樹の櫻。枯たる枝に開く花の。一重は疎八重九歳の。秋より受し屋主の。再生の恩を忘給ふな。と慰めつ慰られて。迭に手を拿拿れつゝ。向上直下す兩對の。背たるを今ぞ心憑く。目鼻貌さへ墨子まで。現に爭れぬ親子の照據。鬼神不測の再會を。倶に歡ぶ九四郎も。只管感嘆したりける

新局玉石童子訓卷之三上冊　終

あらん歟。とて他が護身嚢を撿するに。臍帯あれども父母の名を寫さず。この餘は皇大神宮の雛太麻と。除厄弘法大師の御影あり。こゝに至て俺父は。踧然として思ふやう。原來那行僧は。必大師の化現にて。伊勢の御神の擁護もあるべし。そを疑はゞ不仁に似たり。と深念をしつゝ开が儘に。童女を浪速へ將てかへりて。俺母に告しかば。母も慈善の本性なれば。相憐て乙藝と名づけて。手習縫刺何くれとなく敎導き愛慈む。恩愛は俺女兒なりし。億祿にしも異ならず。恁而二親世を去て後。遺言なればそが儘に。乙藝を妻にしつるにこそ。と一五一十を說示せば。乙藝は僅に淚を歇めつ。肌膚護の嚢を開きて。拿出す臍帶の。包紙を拊伸して。やよ嫡奶々。這紙に。永正元年。甲子の冬。十一月三日の誕生。乙柚が臍帯とある幾文字は。御身の手迹で侍るべし。相別しは五歲の春にて。生平には奶さまと喚しのみ。實の御名も顏色も。いかにありけん得も覺ず。況御身の親里は。伊勢歟大和歟知ざれば。年七八に做し比。开を爹々に問しかど。忌よしありけん實を告ず。汝が實の母親は。相別し比身故りにき。开を問ふと歟。と叱られて。哀しかりしに思ひきや。父は身を刺榻鍼の。巓を死天の山豪に。亡れ給ひしを。知らで過せし十九年。環會日のあらん歟。とて空憑して薪樵る。鎌倉へゆく人あれば。言傳遣し甲斐なさよ。其存亡は反覆にて。世になき人と思ひぬる。々奶は今も恙なく。過世吉野に程遠からぬ。上市の里を出まして。料らず名告會給ふ。這歡びに就て亦。最淺ましきはい

題簑笠先生隱居 關弘道

蕭蕭脩竹達茅廬 雨笠烟簑一老漁
紫石潭頭閑下筆 釣來新著幾篇書

關賢才者三世與予同好友也童年嗣父祖箕裘而善書且嗜詩云劣孫興邦嚮得此詩卽呈閱於予吟誦之間歎有餘蓋才之長短不由老弱譬彼我之年歲相距六十有一于茲老而顧已似有庭徑矣彼出藍之所稀自今而後上達可知時童子訓第二版剛人告成因而明取以錄於簡端餘紙

弘化二年如月清明前一日 著作堂老禿

新局玉石童子訓巻之下帙五册總目錄

折よくかへり來ぬるとも。多寡の知れたる五兩金。往方定めぬ俺道旅の。路費に足べくもあらず。所詮窘き人を頼みて。其懐を當にせんより。兀自那財嚢を搔攫ひて。走らば西まれ東まれ。世を渡るに本錢あり。噫嘻然なり。と万人の。恩を思はぬ非義の本性。計較既に定りて。悄地に四下を見かへるに。這時十八日の月出て。外面は稍明かるに。と見れば擡簀子の邊に。朝夕暖簾を上下する。鈎竿の長きあり。是究竟と拿擡て。閉遺したる戶の間より。裏面の光景を覘ふに。落葉乙藝は泣つ笑ひつ。過去來の物語に。外を見かへる暇なく。九四郎も亦愀然と。眼を閉手を叉きて。其會話を。うち聞て在りしかば。朱之介は便を得たり。とうち含笑つゝ鈎竿を。徐々と刺伸して。落葉が投捨たる那財嚢の。登框の頭に在りしを。闇き方より引掛て。悄地に奪拿らまくす。爾程に。峯張粂六郎通能は。嚮に朱之介を赶んとて。六市四摠を從へて。連りに路を走りつゝ。是日下晡の時候。浪速の串明亭に造りて。悄地に其頭の人に問ふに。既に朱之介は追放せられて。那地ゆきけん知る者なし。且其時刻を尋るに。兩三晌巳前なりき。といはるゝに力及ばず。只得其首より思ひ捨て。亦復路をいそぎつゝ。住吉の里へかへり來ぬる程に、六市四摠も壯佼なれども。囚傘疲勞ある故に。還さは路を走り得ず。世話介許立よりて。將息をすべけれとて。途にて粂六に相別れしかば。粂六は身單にて。いよいよいそぎて立も憩はず。既に日は暮たれども。いまだ月の出ざる時候。十三屋の店前近くか

新局玉石童子訓卷之三下冊

東都　曲亭主人口授編次

第三十六回　善悪少年月下に雌雄を争ふ　多財を復して楽六郎多財を喪ふ

前回十三屋九四郎が店舗の段。落葉乙藝が會話に。いまだ言を罄さねば。重てこゝに文を續て。却說。登時末朱之介は。野干玉の夜に紛れて。久しく外面に在り。店の柱に身を倚て。既に竊聞したりける。落葉乙藝親子の再會。其過去來の話說に。膽を潰しつ。且呆れて。肚裏に思ふやう。誰か知るべき那乙藝は。俺も亦豫より。那名ばかりを聞知りたる。異母にて女兄品なる。小夏なりしは最奇なり。然では大和の阿懷も。實の女兒に心引れて。主張始に同じからずは。俺今阿容々々と恥を忍びて。裏面に入りて哀乞とも。那金一百九十五兩を。遺なく俺には返すべからず。僅に五兩十兩の。仂財を貰んとて。憖に面出して。脂取らるゝ長談義をうち聞んは鈍ましくて。そは智恵なき者に似たり。又前には九四郎が。金五兩を楽六に齎して。俺を赶せたりといひしかど。俺這里へ來ぬる途にて。遭ざりければ开も益なし。非如今楽六が。

なる。俺倉兄の義侠なる。財嚢の金子は左まれ右まれ。盤纏の爲に幾十金。百金なりとも惜むとなく。取せざるとやある。其を恥て盗を恥とせず。愚物の本性憎むべし。推捕らへ撻懲して。目今金子をとり復さずは。俺かへり來たる甲斐はなし。と尋思をしつゝ又よく思へば。這里にて那奴を撻懲して。二包一財嚢なる。金子をとり復すは易けれども。然しては那刀自の。慈善にしも悖るべく。且俺兄の爲にも恥なり。一霎時遣過し。這頭を離れて。せん術あり。と深念をしつゝ。猶身を潜めて在りける程に。朱之介は財嚢の金子を。既に盜拿りしかば。うち戴きつゝ懐に。巻と夾めて退く時。落たる手拭拿揚て。罨面して鑷歩しつゝ。浪速の方に逃去を。楽六は吐嗟とばかりに。蚤く庇間より立出て。相距と十間許。月を便に跟てゆく。善少悪少道異なれども。走るは同じ夏の夜に。吹風凉しく更切て。入定近くなりにける。然れば這時十三屋の店内には。落葉乙藝が。今昔の話説稍果しかば。九四郎は惆然たる。頭を擡げ膝を找めて。更に落葉に向ひていふやう。離合時あり。禍福齊く至らず。抑乙藝が不幸なる。奶々に相別しより。今十あまり九の。春秋を歴て憶りなく。再會の本意を遂しは。俺二親の素懐に稱ふて。己も深く歎びおもへり。是併 慈悲積善を宗とし給ふ。御身の老後を神佛の。憐ませ給ひぬる。感應利益にこそあらめ。然ばにや。御身年來苦勞して。守育給ひたる。姪女斧柄刀禰とやらんの。孝順にして短命なりける。其代に年五より。棄て生死だも知るよしなかりし。實の女

へり來ぬるに。夏夜なれば戸を閉果さず。裏面には老女客ありて。九四郎乙藝と額を合して。うち譚ふ聲聞えしかば。訝りて左右なく入らず。又只那客のみならで。撞簀子の邊に人ありて竊聞しぬる者に似たり。甲夜闇なれば見えわかねど。老女客の伴當歟。と思ふものから他も亦。蚊に螫るゝを厭ずして。潜びて在るは疑ふべし。是臚匝兒にあらずや。と猜しつ敢て驚さず。幵が儘庇間に身を潜して。内外の容子を覘ふ程に。身に寄る長脚蚊を拂ひつゝ。猶覘ふと一晌許。料らず聞知る落葉乙藝の。親子の再會長談の。奇しく妙なる幾條に。感嘆しつゝありける程に。夜は既に初更に過て。月出て影涼しく。檐端近く飛螢は。風に撲れて墜るもありけり。楽六は今這月の。光に就て。悄やかに頭を出して。件の臚匝兒を熟々視時。他が面罩せし手拭の。風に吹れて落しかば。疑ふべくもあらざりける。昨日も今も陣舘にて。既に面を見知りたる。末朱之介なりければ。心悄地に訝りて。原來他は要ある故に。潜びて來つるにぞあらむずらん。何とてや内に入らざりける。と思ひつゝ聲をば被ず。猶も闕窺る程に。朱之介は是を知らず。悄地に鈎竿を刺伸して件の財嚢を引掛て。竿を繰つ。引よするに。框の邊は燈火の。光屆かで暗かりけるに。落葉乙藝九四郎さへ。心其里にあらざれば。盗兒あるを毫も知らず。只峯張楽六のみ。見ると既に分明なれば。且驚且怒に堪ず。性起るを推鎮めて思ふやう。噫無慙やな。朱之介奴が賊心なる。後闇き事をせずとも。明々地に哀乞はゞ。落葉の刀自の慈善

も侍らず。然らば奴家は隱居して。佛に仕まつりてん。この義を憑み侍るのみ。といはれて九四郎沈吟じて。そも亦要ある事ながら。必や輕諾は。信寡し。と古語にもいへり。いかにして今即坐に。決定の答に及ん。勿論俺家は幸に弟渠六あり。他は武士にて武藝さへ。親の後を嗣に足れり。其頭は後安けれども。已が隨意世を渡る。九四郎が分際にて。熟れぬ農家の一世帶を。よく承嗣ぐべくもあらず。俺身は左まれ右もあれ。便寡き御身の爲に。異日乙藝をまゐらすべし。幾までも留在らせて。商量敵にしたまへかし。便宜は只この事のみならず。御身は又遠からずして。一個の孫を得給ふべし。弃は乙藝に問給ひね。といはれて乙藝も倶にいふやう。俺身良人に仕しより。十稔近くなりぬれど。子といふ者は得がたかりしに。今茲は春より身重く做りて。三月四月になりける程に。折から思ひかけもなき。禍鬼起りて稍久しく。獄舍に繫れたりければ。必傷産するならん。と思ひつゝ胸安からざりしに。肌膚に掛たる護身嚢に。藏めて深信怠らざりける。長谷淸水の兩觀世音。及除厄弘法大師の。御影の利益にやありけん。俺身はさらなり胎内なる。赤子さへ恙あらずかし。と告るに落葉は歡びて。吁めでた。爾らんには。俺身にも亦子孫あり。喃九四郎主。諄きは老の癖ながら。御身耕し耘る技に。得熟れずとてもけしうはあらず。老女の咱すらこの年來。傭作して人並に。秋の登を得たるなり。いかで乙藝共侶に。杣木の家を嗣給はゞ。其子寶を大和へ移して。久後いよ〳〵安かるべし。

兒を得給ひにき。斧柄刀禰には及ずとも。他も孝順の心なからんや。斯いふ俺九四郎も。今よりして御身の女壻なり。大和津國同鄕ならねど。一臂の力を盡すべし。心つよく思ひ給ひねかしと。詞徐に慰むれば。乙藝も且倶にいふやう。瓢形の天。鑛金の。地に等しき生の恩。返すよしなき玉鉾の。身の薄命とはいひながら。二十の上を七まで。歳長て今料らずも。環會まつりしは。過世ありける幸ながら。开も九歳の秋よりぞ。養ひの恩淺からぬ。這里なる故の家主人。御夫婦の慈悲微りせば。今この歡びあるべしや。是に就ても痛しき。家父の大人木偶介のみ東路に。ゆきて還らぬ人の數に。入りにし山の恨しさよ。といひつゝよゝと。泣沈めば。落葉も涕をうちかみて。現に其事なり。親子兄弟。うちも揃ひし仁義の家に。養れぬる汝の果報。過世あるべき事ながら。皆九四藏主御夫婦の。慈恩といふもあまりあり。俺身なンどが及んや緣に觸ぬる身の幸に。猶願しき事侍り。といひつゝ九四郎にうち向ひて。喃女壻の刀禰。斯いはゞ卒爾に似たれど。知らるゝ如く大和なる。杣木の家は續ぐ者なし。朱之介をば義絕しつ。斧柄が遺しゝ孤なる。玉五郎ありといへども。他は生れて五十日にも至ぬ。赤子なれば憑しからず。譬ば水の上なる泡に似たり。非如成長しぬるとも。久後短き老が身の。よく後見をすべくもあらず。願ふは御身乙藝と倶に。上市なる家に移り來て。杣木の跡を嗣ねかし。豪農名家ならねども二十町八反の田園あり。又年毎に伐出す。山の林も少なからねば衣食に物を欠べく

ずや。といはれて落葉は心つきて。寔に然なり。爾なりき。平生には鐚一文でも。棄べうは思はざりしに。主人夫婦の方正さに。强難て性起りにけん。一百九十五兩ある。財嚢を漫に投捨しは。歲に似げなき短慮にて。傍痛ゝ思れけん。俺後方にあるべきに。乙藝看一看拿りてよ。といふに乙藝は行燈の。灯口を其方へ引向けて。身を起しつゝ左右と。件の財嚢を索るに。あるべくもあらざれば。杜四郎も指燭して。店の四隅脱履塲。箱招牌の蔭までも。漏す隈なく求獵れども。那地ゆきけんあるとなければ。落葉が後悔いへばさらなり。九四郎眉をうち顰めて。原來外面に盜兒ありて。事に紛れて掻攫ひけん。甲夜には殊に熱かりければ。漫に風を貪りて。店の戶を三が一。閉遺したる。由斷は大敵。脫落にけり。と悔恨めは。落葉は連に嗟嘆して。金銀は上なき御寶。聊なりとも。受戴きて。等閑にすべき物ならぬを。誰も知りたる事なるに。薄情婦女子の胸陜く。悲泣に心狂しくてや。苟且ながら二包の。金子を踈忽にしたりしは。是まで覺えぬ俺身の失誤。左ても右ても那金は。無益に喪ふ時節ならめ。やよ乙藝。四郎腋子も。うち捨て措給へかし。と制められても疑ひ解ねば。乙藝杜四郎は慰めて。世の常言に。七たび索ねて。後に人を疑へ。といふともあればとて。迭に手燭を續更て同處を幾番も。索るかひぞなかりける。話分兩頭。爾程に。峯張柔六郎通能は。末朱之介が後を跟て。ゆくと約十町許。既に住吉の里を離れて。右に川あり。左に小隄防あり。逃べき岐路あるとなければ。

开を乙藝のみ召拿りて。御身獨宿し給はゞ。俺心何ぞ安かるべき。いかで〳〵。と請談すれば。九四郎頭を傾けて。這櫛店は俺親より。讓られたるにあらざれば。六市四捴に任用せて。俺身大和に移住とも。开は左も右もの事ながら。明日又楽六。四郎腋子に。告て商量して後に。是非を定め候はん。と答る折から杜四郎は。咳きしつゝ奥より出て。九四郎乙藝を呼いふやう。夜は深て候に。店の戸鎖て客人を。納戸へ伴ひ給はずや。楽六哥々が今までも。かへり來ざるは心許なし。猶戸鎖さずして竢給ふや。と問ふを九四郎聞あへず。否楽六は遲くとも。六市四捴を倶したれば。他が上は後安かり。且這方へ。と傍に召きて。更に落葉に向ひていふやう。嚮にも既にいひけらし。この少年は。俺故女兄の腹なりける。大江大人の蔭子にて。杜四郎成勝是なり。這回楽六と共侶に。朱之介乙藝等の。疑獄を解きける一人なりき。と告れば落葉は席を讓りて。开はよき折に拜面し侍り。奴家は乙藝の實の母。大和の落葉で侍るかし。と名告を四郎はうち聞て。咱等も甲夜より奥の間にて。御話語の條々を。遺もなく洩聞たれば。感心の外候はず。俺も亦九四郎楽六の。外侄に候へども。楽六とは弟兄の。思ひをさへ做す者なれば。介意せらるべくもあらず。やよ嫂々。更闌たるに。奶々はさそな冷やかならん。納戸へ伴ひ給へかし。といへば乙藝は點頭て。然なり。奥へ臥簟を儲けて。母を休せ侍りてん。喃奶々。甲夜には不如意に焦燥給ひけん。投捨られし那財嚢は。其頭にこそあらんずらめ。拿納め給は

づき來て。相距こと一丈許。勝負什麼と覘ふ程に。月は急地雲隱れして。四下小暗くなりしかば又只件の旅客は。慾に心や動きけん。鑷歩しつゝ找み出て。今朱之介が投たりたる。財囊を左右と搔撈りて。拿揚試に重ければ。憶ず莞爾と微笑て。手はやく紐を解開きつゝ。那二包百九十五兩の。金子をのみ懷へ。楚と夾めて又搔撈に。恰好小石兩箇あり。是究竟と搔拿りて。悄地に財囊へ入替て。故の如くに紐さへ結びて。ありける處へ閣きて。蚤く那身を躱してぞ。往方は知らずなりにける。兩虎食を爭ふ時。狐其虛に乘といふ。古語は現に以ある哉。然ば這方の兩敵は。迭に是を見ず知らず。猶も爭ふ幵が程に。天には月の雲霽て。影復鮮明なりければ。柒六是に便宜を得て。既に疲勞し朱之介を。耶と聲かけて投しかば。朱之介は筋斗りつ。蜘蛛の像くに平張て。亟には起も得ざりしを。柒六透さず登し蒐りて。背を踏締て動せず。勇る聲高やかに。やをれ朱之介思ひ知るや。那金百九十五兩は。儞が大和より。もて來ぬるといへども。原是落葉の刀自の慈善にて。沙金と唐布を買せんとて。儞に遞與えし出處なれば。今朝浪速なる陣舘にて。落葉に返し給ひしよしを。儞も甲夜より竊聞して。必や聞知りつらん。然りとても那折に。儞刀自に對面して。明々地に哀乞はゞ。素より刀自は慈善の人なり。時宜によりて那金子を。儞が盤纏の爲にとて。取らする事もあるべきに。何とて竊みて走りたる。其賊情を懲さんとて。俺退里まで跟て來つ。今那金子を拿復して。落葉の刀自に返さまくす。

こゝ究竟と去向を揣りて。脚を蚤めつ聲高やかに。盗兒等。と喚禁れば。朱之介は驚きながら後方を見かへる程しもあらせず。柰六蚤く跳蒐りて。項髮捉て動せず。怒れる聲を震立て。刑餘の臨跄兒朱之介。陣舘にて面善なる。峯張柰六を忘れはせじ。剛才十三屋の店前にて。儞が竊みて走りぬる。財嚢の金子をとり復さんとて。跟て來ぬるを知らざるや。夙く返せ。と懷へ。手を刺入れて掖出す。財嚢を楚と拿禁て。隋きたり。前髮猴子。この金一百九十五兩は。俺大和よりもて來たる。俺物なれば俺物なるを。儞に干る事やある。盗兒喚り外面歹し。こゝ放さずや。と挑拿りて。逃んとするを柰六は。毫も透さず肩尖抓みて。掖戻しつゝ件の財嚢を。捉を放さぬ朱之介。自得の白丁術を盡して。挑爭ふ一生懸命。財嚢を後方へ投退れば。柰六いよいよ怒に堪ず。身に兩刀を帶たる甲斐に。擊果すは易けれども。然しては亦落葉の刀自の。歎きやすらんと思ふ可に。敢其本事を盡さず。一霎時他を疲勞して。拉んと思ひしかば。柔受柔受挑む程に。天ゆく雲の雨催ひ。今まで明かる夏の夜の。月を隱して朦朧と。忽地暗くなりにける。浩處に一個の行客。年齡は四十餘。身には單衣を褙折て。上に重縹の麻の雨衣の。身半なるをうち披り。腰に短き兩刀を跨たれば。是則武士なるへし。頭に戴く竹皮笠。脚には脚絆草鞋の。打扮さへに精悍しく。故ありぬべき夜の行に。伴をも倶せず只一人。住吉の方よりして。步を蚤めて來にける程に。今柰六と朱之介が。挑角ふを遥に見て。うち驚きつゝ近

き數へ見て。嘆口氣して其金子を。包て先犢鼻褌へ。結着ても東西足らぬ。身の往方さへ定め難て。只諄々と呟くやう。折角物せし金二包を。柒六奴に拿復されて。其損料には五兩金。是を落葉と乙藝等が。斷緣金には廉けれども。斧柄と産後に身故りて。生れし赤子は恙なし。と落葉が口說きし愁歎話を。竊聞したる事もあれば。この金子の竭たる比に。悄地に大和へ赴きて。又物にする時宜もあらん。只是星煞にて。好も歹きも七轉。八起に起ねば男子にあらず。先京師まで退きて。せん術あらんと獨言つ。胸逞しき虎狼の本性。臂と膝とに塗れたる。壞を拂ひつ揃摩りて。身を起しつゝ悠々と。東を投て立去ける。迹には聚鳴虫の聲。土旺中央に立秋風に。戰ぐや隄防の細芒も。招ざるべき歹人の。一進一退出沒不測の。久後も猶怕るべし。案下某生再說。當晚十三屋の店内には。乙藝杜四郎は財囊の金子を。索難つゝ精疲勞らして。竊れけんとやうやくに。思ひ絕て店の戶を。鎖んとて手を掛る折から。外面より來ぬる者あり。是則柒六なり。近つく隨に聲を被て。嫂々自今かへり侍りぬ。其里開て給ひぬ。といふに乙藝も杜四郎も。噫遲りし待不樂たり。疾這方へ。と閉かけたる。戶を又一枚推開けば。柒六は衝と找み入りて。坐して九四郎に向ひていふやう。嚮に小弟。六市四摠と共侶に。走りて中明亭に造りしに。朱之介は亭午の時候。追放されたりと聞えしのみ。時も後れ往方も知れねば。只得かへり來ぬる程に。六市四摠は疲勞に堪ず。世話介許止宿して。明日參らめとて別

俺身の慾に做す事ならんや。憎むに勝たる儞が賊心。有恁るべしとは思はざりける。俺兄九四郎の義侠なる。儞は舊惡ある故なれども。單追放せられしを。殊に不便に思ふの故に。金五兩を齎して。俺に課せて追せしに。時後れて及ねば。日暮て徒にかへり來にける。十三屋の門傍にて。儞が甲夜闇に立紛れて。裏面の容子を張居たるを。見出したれども。訝しさに。聲をも掛ず裏面にも入らず。況や件の金五兩を。遞與すべき時宜ならねば。事の玆に及ぶものから。俺兄の好意を。空に做さんはさすがにて。落葉の金子を拿復すは 前是公道なり。俺兄の貺を。傳へ取するは人情なり。公道と人情と。兩ながら闕べからず。儞這義を辨知りて。今よりみづから新にせよ。落葉の刀自には義絶の壻なり。この故に讞斷せられて。大和へは返されず。俺嫂乙藝には。義絶の弟なり。十三屋へ立入るべからず。この義を後まで忘るゝな。と思ひの隨に罵懲して。却懐を搔撈て。紙に包し金五兩を。开が儘に拿出して。卒とばかりに朱之介の。頭へ托地と投付與へて。そが儘些し退きて。月を燭に四下を見るに。朱之介が投退けたる。財嚢は故の儘にして。後方八九尺の間に在り。柒六是を拿上て。沙うち拂ひて 懐へ。夾めていそぐ夜の路。十三屋を投てかへりゆく程に。十八日の月影も。眞夜半時候になりにけり爾程に朱之介は。頭を鶴し身を龜めて。屢四下を見かへるに。柒六は故の路へ。かへりゆきけんあらずなりしかば。やうやくに身を起して。柒六が投與へたる。金五兩を搔拿りて。包を開

べくも侍らず。一旦他に取せたる。金子なる者を明々地に。乞はで後闇き事をしたれば。冥罰覿面柴六主に。とり復されたる鈍ましさよ。といひつゝ財嚢を拿擡れば。九四郎急に推禁めて。親き中にも念の爲なり。内を閲して受拿給へ。と心属れば。然なり。と答て。財嚢の紐を解開きて。拿出すは二包の。金子にはあらで小石なり。是は什麼。とばかりに。呆れてやをら投出せば。九四郎乙藝杜四郎も。倶に訝る开が中に。柴六は驚き見て。且恥且悔ていふやう。原來夙くも朱之介奴が。財嚢に小石を容易て。俺を欺きたるならん。然とは知らで疎忽の態儛。いひ解くだにも面目なし。那里までも赶蒐て。金子拿復さでやは已ん。いで〳〵。といひつゝも。刀を拿て身を起すを。九四郎はやく喚禁めで。柴六そは勞して功なし。和郎幾里赶ふとても。逃る者は路を擇ます。他虚々と和郎を俟んや。敦圉くとても今は要なし。揣ずに仔細を告よかし。といはれて柴六嗟嘆に堪ず。姑且しく答るやう。現に愆ぬ。今さらに。身の非を飾るに似たれども。朱之介が那金子を。竊拿し首より。俺闚窺て由斷せず。开が儘迹を跟ゆきて。投伏て這財嚢を。とり復しゝ終まで。他いかにして這小石を。容易る暇あらんや。但挑み角へる折。他財嚢を投退しに。照る月猛可に雲隠れして。一霎時暗く做しかど。それ將久しきとにはあらず。雌雄を爭ふ折なるに。三面六臂ならざりせば。他何等の暇ありて。然る科玉を要せんや。是に由て是を思へば。這小石は朱之介が。竊拿ざる以前より。財嚢の内にありける歟。其事な

れたり。是よりして俺身單。日暮て這店舖頭まで。既にかへり來にけるに。又不慮の事ありて。見過しがたくて裏面には入らず。其義は後に稟さめ。と告るを九四郎うち聞て。开は何事か知らねども。這里にも甲夜に賊難あり。そは今急に告るとも益なし。這客人は和郎も聞知る。那上市なる落葉の刀自なり。乙藝の實の妳々なりしを。今宵不測に知り得たり。といふに柰六恭く。落葉に向ひて口誼を舒れば。落葉もやをら膝を找めて。初對面の歡びを。盡す詞の露の間に。乙藝は店舖を戶鎖果て。杜四郎と共侶に。柰六にうち向ひて。甲夜に落葉が喪ひたる。那財嚢の金百九十五兩の。事云々といひ出るを。柰六は聞もあへず。其義は咱等よく知りたり。今詳に說示さん。刀自も長兄も聞給へ。其故は箇樣々々。と甲夜に末朱之介が。這店頭に潛び來て。主客の話說を竊聞しつゝ。財嚢の金子を竊拿る時。柰六はそを闚窺居り。推捉へ撻懲して。金子を拿復さまく思ひしかども。然しては又落葉の刀自の。爲に妙ならざれば。朱之介が竊み得て。浪速の方へ立去折。十町許跟ゆきて。如此々々の地方にて。喚禁め厮鬪ふて。思ひの隨に投伏て。件の財嚢をとり復しつ。九四郎が拿せぬる。金五兩を投與へて。かへり來にける顚末を。今見る如く說誇りつ。懷より其財嚢、拿出て落葉に返すにぞ。九四郎落葉を首にて。杜四郎も乙藝さへ。膝の找むを覺ぬまでに。倶に感嘆したりける。當下落葉は羞たる色あり。九四郎乙藝に向ひていふやう。這金子の失たるは。朱之介が所爲ならば。然ばかり惜む

新局玉石童子訓卷之四上冊

東都　曲亭主人口授編次

第三十七回　成勝通能遊歴して東路に赴く　晴賢松下に睡りて蚺蛇に呑る

登時九四郎は。柒六が陳じぬる。財嚢の事をうち聞て。沈吟じて且いふやう。聞が如きは朱之介が。汝と挑爭ふ折。財嚢の金を遞與さじとて。後方遙に投遣けるに。照月猛可に雲隠れして。四下暗くなりしといへば。その折朱之介の支黨の躱居ける者ありて。金子に小石を入易たる歟。是も亦知るべからず。とは思へども倘果して。支黨の所爲ならば。徑に財嚢を掻攫ひて。逃も躱もすべかるに。人を欺く便直もて。金子に小石を入易たるは。何等の意ぞ解しがたかり。と詞急迫しく論ずれば。落葉も聞つゝ推禁めて。九四郎刀禰閣給へ。开は左まれ右もあれ。素より那金三百兩は。朱之介の爲にとて。調へて遞與ししに。非如所要を果さずとも。又他が手に入りたらば。斷縁金と思んのみ。惜けくもあらずかし。故何とならば。他が主君より與り來ぬる。沙金は二十一包。殘りて俺家にありしを。如如來樣の示教によりて。梅雪信女の柩と共

しといふ時は。いよ〳〵奇しくます〳〵怪し。斯と知らば這店頭にて。朱之介を推捉へて。財嚢をとり復すべかりしに。落葉の刀自の心を汲て。地方を易たる故にこそ。照据人ある事なければ。俺分説も闇きに似たり。悔しき事をしてけり。と喞言がましく陳ずれば。乙藝杜四郎も慰難て。左あらん右やあらん。といふのみ。倶に疑解ざりけり。この段文猶多ければ。いまだ説も盡すべからず。又卷を更て下回に。解分るを聽ねかし。

新局玉石童子訓卷之三下册　終

り復し得ざりしは。楽六が愆なるに。御身は慈善の心もて。朱之介に返し遣ぬ。と思へば惜からず。と宣ひしを。俺歹く聞にはわらねど。錢財の事はしも。親しき中にも言品出來て。迭に疎く做る者あり。況任俠を磨く者は。授受明白ならざれば。乾兒假子も從はず。何をもてよく人を制せん。この故に。楽六が失ふたる。一百九十五金の內中。俺百金を贖ふて。目今御身に返すべし。といふを落葉は推禁めて。夫は又御身の一徹ならずや。昨宵もいひし事ぞかし。柚木の家を嗣せんと。思ふ御身に損被て。其百金を受られんや。況那金子の亡たるは。楽六刀禰の愆歟。愆ならぬ歟。俺手親、俺渡し、財嚢ならねば。那子を咎るは無理なるべし。人の得ぬると失ふとは。是皆時運に由ると歟聞ぬ。只うち捨て措給ひね。と言叮嚀に諭せども。九四郎所ず頭を掉て。夫は辱き御心ながら。人の養嗣たる者は。其家に益あらせて。減す事なき挊きあらずは。其養嗣たる甲斐はなし。然るを今俺們夫婦は。小弟の所以といひながら。いまだ養家に贊らずして。養母に一百九十五金の。損をしも被たらんには。誰か益ある者といふべき。然るを。剡那金子の內中。御身百兩は他借して。朱之介に遞與し給ひしならずや。其金子だにも今返さずは。守の御善政を空にしまつる。單御身のみならず。俺も亦百金の。債ある者に似たり。必な推辭給ひそ。と義を見て勇む俠氣に。落葉は竟に爭難て。又いふよしもなかりけり。當下九四郎は。懷なる長財嚢より。金二包を拿出して。四郎楽六等に向ひていふや

に。六田の河邊に塋めさせしは。那作佛の志願に因る。そも朱之介の爲なれども。其沙金と那圓金を。交易にしたりと思へば。いよ〳〵後安かりき。と諭せば九四郎うち笑ひて。开は只是婦人の仁のみ。佛意は然もあるべし。なれども桀六が慾に。那金子をとり復さんとて。反て金子を失ふて。其財嚢をのみもて來にければ。鄙語にいふ璧を返して。櫃を留むる者に似たり。倘他人をもて是をいはゞ。桀六にも疑ひなきにあらず。然ば件の百九十五金は。咱等必贖ふべし。といふを落葉は聞あへず。そは又要なき理論なり。俺世帶をしも讓らん。と思ふ御身等に那金子を。贖はせて何にせん。他人がましき事いはるゝは。似げなく聞え侍るかし。と諭すを九四郎推復して。猶云云と論ずるを。杜四郎諫ていふやう。其義は今宵に限るべからず。短夜なれば酷く深たり。明日又商量し給へかし。といふに乙藝も共侶に。良人を勸る言果て。落葉を納戸へ案内をすれば。桀六は兄の意見の。理りなるに感服して。重て復す詞もなく。咱等は店に寢宿んとて。帚をもて來て掃などす。乙藝はいとゞ勤しげに。臥簟儲も三所へ。配る三張の蟵垂て。各枕に就にけり。恁而其詰朝。十三屋の炊妾櫛工等は。乙藝が赦にあひし事。九四郎も恙なく。歸郷のよしを聞知りて。早旦にかへり來にければ。薪水の事に其人あり。早飯既に果しかば。九四郎は落葉乙藝。杜四郎桀六等を。皆納戸へ招聚へて。又只昨日の金子の事を。悄やかに談ずるやう。上市の奶々聞給へ。那一百九十五金は。其盜兒を知りながら。と

はねども。受ねば人の志に。悖るとあるを爭何はせん。受ての後に左も右も。又せんかたのありぬべし。好意を藏き侍り。乙藝宜しく憑ぞや。と謝して財嚢へ件の金子を。納めて項に掛る折から。炊婢が來て告るを聞に。上市なる村長は。今朝夙より。落葉を酷く俟托て。伴當二名を從へて。且兩個の轎夫に。落葉が行轎子を吊せつゝ。索て十三屋へ來にければ。落葉は九四郎乙藝と倶に。遽しく出迎へて。奥なる坐席に請登しつ。先茶を薦め果子を薦むる。主人夫婦が初對面の。口誼も稍果し時。落葉は村長に向ひていふやう。奴家は今朝夙より。歇店へ還るべかりしに。迎の籃轎はいまだ來ず。且奇事のありしかば。憶ず時を移しにき。其故は箇様〳〵々々と。乙藝は實に女兒なりしを。迭に知らず知られずして。環會ける崖略を。囁き告て又いふやう。是等の内縁あるなれば。這夫婦を上市へ。喚とりて柚木の家を。嗣せまく欲しぬる。商量もし侍りにき。この義を歡び給へかし。と說れて村長掌を拍鳴らして。吁芽出たやな。开は料らざる洪福なり。御身が老實慈善なるも。是まで善報はあらで。朱刀禰の無頼。いへばさらなり。斧柄少女の夭折を。最悼しく思ひしに。幼稚時に生別し。令愛夫婦に。環會給ひしは。是則陰德陽報。御身の慈善と薄命を。神佛の憐み給ふ。利益にこそあらんずらめ。寔に賀すべし。〳〵。と祝して九四郎乙藝等に。其歡びを舒にけり。當下落葉は。又村長に談るやう。御身も知らせ給ふ如く。昨日陣館より返し賜りたる。其金百九十五兩を。單奴家が腰に纏ひて。

う。昨日も既に告し如く。這金二百兩は。治比の大人弘元の賜にて。内中五十金は。四郎腋子へ。五十金は楽六へ。こは武者修行の路費にせよとて。取せ給ふ所なり。又五十金は。孟林寺へ布施すべく。五十金は俺九四郎へ。賜ふ物即是なり。是をもて俺五十金と。楽六の五十金と。合して百金は。目今乙藝が奶々に返して。那債を贖ふべし。猶九十五金足らねども。丌は奶々の慈善なる。那沙金と交易に。朱之介に取せにき。と思はれなば恨はあらじ。勿論楽六が路費は。俺別に調へて。起行折に遞與すべし。四郎腋子の五十金は。目今渡し參らせてん。といふを杜四郎推禁めて。否其金子をいそぐは要なし。啓行の日にても好。勿論俺們二人が修行の路費は。五十金にて足りぬべし。逆旅に財貨多かるは。是禍を招くに庶幾。と辭へば楽六も倶にいふやう。昨宵咱等がとり復したる。財嚢は反て仇と做りて。斯まで劬勞を被まつるは。心苦しき涯りなるに。何でふ路費を欲すべき。術よく計ひ給ひね。と勸解れば九四郎點頭て。然では商量整ふたり。いで〳〵。といひつゝも。先一包の金子を拿て。故の如く長財嚢に。斂めて殘る一包を。傍にありける團扇に載て。卒とて落葉に遞與すにぞ。落葉は左右なく受難て。猶云云と辭へども。九四郎敢承引ず。楽六も亦杜四郎も。倶に薦めて已ざれば。乙藝は孰を孰とも。分るよしなく慰難て。心苦しく思ふのみ。默然として在りし程。落葉はやうやく件の金子を。受戴きつゝ涙嗜て。非如何といはるゝとも。今這金子の情由さへ聞ては。受べうは思

晝起にして退るべし。といふ間に九四郎は。乙藝等に吩咐たる。銚子盃酒菜さへ。甲乙となく安排て。村長と落葉に薦ける。迭の口誼献酬も。沙量なりければ時を移さず。更に準備の晝饌は。只這席のみならず。村長の伴當轎夫等にも。欵待周ざる所なく。各飽て辭ふ時。住吉の神社にて吹鳴らす午の貝の。遠音遙に聞えけり。當下落葉は九四郎と。乙藝を召て別を告れば。九四郎乙藝は留めあへず。倶に異日を契りていふやう。切て猶兩三日も。留めまつらまく思へども。御一路人のあるなるに。人に任する留守の宿の。心許なし。と宣はすれば。今さらに力及ばず。四郎楽六が起行を。目送果し候はゞ。乙藝を大和へ參らすべし。時宜によりて九四郎も。共侶にと思ふなる。一霎時の御別に候へば。通路酷暑を凌ぎて。後の便を俟給ひね。と。言語齊一慰めて。九四郎が家裏なる。安藝半紙幾十帖と。手製の木櫛十枚有餘を。土産にとて轎夫に。渡して轎子に容措しつ。又村長には土産料に。一裹の人情あり。この餘伴當轎夫にも。遺なく取する裹錢。行屆きたる饗應に。皆歡ざる者なく、告別さへ散動めきて。草鞋を更て立程に。落葉は今さら思ふ事。いはまくすれど嬉しさと。又悲しさに胸塞りて。詞寡く村長に。うち續きつゝ立出れば。杜四郎と楽六は。孟林寺へかへるさに。途まで是を送らんとて。身裝して出て來つ。落葉村長に別を告て。轎子の後方に立程に。九四郎乙藝を首にて。炊婢も櫛工等も。皆店頭へ立出て。目送る榮は故郷へ。飾るや秋の錦ならで。冬樹の黄楊の櫛

大和へ還らば重荷にて。不便にこそあらんずらめ。這春御身に借用したる。百金を返しまつるべし。御身も重擔なるべけれど。這里にて受取給ひねかし。といひつゝ財嚢を解開きて。金一包を拿出して。幵が儘村長に返して。又いふやう。利金は何ばかりか知らず侍れど。こは本金のみに侍り。といふに村長含笑て。件の金を受戴きつゝ。懐より眼鏡を拿出て。掛て圓金の包を開きて。兩三番數へ見つ。眼鏡外して懐なる。財嚢へ件の百金を。楚と納めて行疊帖より。證書二三通を拿出して。甲乙と開き見つ。其一通を落葉に返して。殘るを又懐へ。藏めて落葉に向ひていふやう。有斯るべしとは知らねども。陣館にて那金子の。事をし問せ給はん歟。と思ふばかりに證書を。懐にして來にければ。授受都て事濟たり。原那金子は山歳貢の。積金をもて用達たれば。利銀は決て欲からず。夙く銷印し給へかし。といはれて落葉は感謝に堪ず。受戴きつゝ開き見て。幵が儘九四郎に渡しゝかば。九四郎も亦是を讀見て。隨即乙藝に吩咐て。鐵硯を拿よせて。筆を染つゝ印信を。抹て落葉に返しけり。當下村長は。又落葉にうち向ひて。御身は這回思ひかけなく。絶て久しき令愛に。環會給ひしかば。猶所要多かるべし。復來まさんは易からぬに。姑且止宿し給ひね。咱等は暇を稟すなり。といひつゝ聽て身を起すを。落葉は急に推禁めて。奴家とても人さまに。留守を憑て來にけるに。幾までか逗留すべき。乙柚の乙藝も九四郎も。大和へ訪來る該なれば。又逢がたき別にあらず。奴家は御身と共侶に。今日

便は是のみならで。楽六の武者修行にも。和殿夫婦の大和へゆくにも。盤纏多からずはあるべからず。この故に。俺今這五十金を。和殿弟兄の。餞別に拿せんず。といふを九四郎聞あへず。そは忝く候へども。治比の大人の布施し給ふ。金子を賜りて俗事に充なば。佛の箔を剝すに似たり。小可も然ばかりの。貯祿のなきにあらず。其義は許させ給ひね。と辭めば楽六も倶にいふやう。豫知せ給ふなる。兄が氣質に候へば。受奉るべくもあらず。うち措せ給ひねかし。と執合すれば木玄は。頭を左右にうち掉て。然にあらず。〳〵。這金子は弘元主の。布施にはあれども兩少年の。年來當寺に同宿の。謝物にこそあらんずらめ。然ば今兩少年の。往方定めぬ武者修行に。出るを祝して僅ばかりの。餞別をせざらんや。約莫出家人たる者の。錢を欲するは佛の教に。叛きて塵俗にも劣る事あり。況今當寺には。破損修復の費用なし。徒にこの金子を。藏めて賊難を怕んより。今弟兄の路費に做さば。弘元主の素意にも稱ふて。其利益莫大ならん。然とも徒法師の手より。受るを厭思れなば。發跡て後年毎に。三兩まれ五兩まれ。徐に返さば貰ふにあらず。非如俺なき後なりとも。後住の爲に反て益あり。枉て這意に任してよ。と諭しつ件の五十金を。开が儘楽六に遞與しゝかば。楽六は受戴きて。感謝に堪ず。杜四郎と。倶に其歡びを陳て。九四郎を諫るにぞ。九四郎僅に頭を擡げて。師父の清談理の當然。然ては脱るゝ路あらず。權且借用仕らん。楽六手實を寫ずや。といふを木玄推禁めて。いか

店舗に。惜別は峯張の。岐岨に異なる大和路も。同じ山路を想像る。乙藝の小夏暑日に。出しやる親の轎子の。見えずなるまで慕れて。立盡してぞ奥に入りにける。恁而是日九四郎は。六市四摠が來ぬるに及びて。昨宵よりありし奇事を。遺もなく說示すに。六市四摠は駭嘆じて。朱之介を憎む事。日頃に倍て甚しく。更に落葉の誠心を。感じて慕しく思ひけり。左右する程に。未過時候に做しかば。九四郎は孟林寺へ詣んとて。這同安藝よりもて來ぬる。土產物一裹を。伴當四摠にもたせなどして。倶して件の寺に赴きて。住持木玄に見參す。杜四郎と楽六も。其席にぞ侍りける。當下九四郎は。木玄に拜面して。治比にてありしと。大江弘元の病臥の事。且其口狀を傳達して。寄進の金五十兩を。拿出て木玄に遞與しけり。是より先に木玄は。杜四郎楽六がかへり來て。言詳に告たりける。落葉乙藝親子の再會。當晚朱之介が潜來て。落葉の金百九十五兩を。竊拿て走りし折。楽六が赶蒐て。拿復ししは小石にて。財嚢に金子のなかりしかば。九四郎は已とを得ず。曩に弘元の。那身と楽六に賜りたる。金子一百兩をもて。那失を贖ふて。落葉に返しし事までも。既に聞知りたりければ。又其事をいひ出て。意見を九四郎に示すやう。弘元主の病臥は。胸安からず思へども。まだ老朽たる那身ならぬに。霜露の輕症なるべければ。久しからずして痊り給はん。就て那主の。和殿と楽六に。賜りたる百金を。義俠の所以とはいひながら。那贖に喪ひしは。惜むべき事ならずや。事の不

賊難を防ぐべし。色に惑はず慾に導れず。才あるにも欺れず。愚なるをも侮らず。主僕心を一緒にして。世の英雄と交りて。功なくば還るべからず。この義をこゝろ得給ひね。と諭せば四郎も楽六も。共侶に感佩して。教訓道理至極せり。胆に銘じて忘るべからず。遮莫百金は路費に多かり。半分は留めて大和へ赴く。所用に做給へかし。といひつゝ返す楽六の。五十金を九四郎は。手にだも觸ず。推戻して。否其金子は治比の大人と。當寺の師父の和郎達へ。餞別に做さるゝに。俺私に用ひんや。益なきことを。と窘めて。猶も餘談に及ぶ程に。木玄も其義を感じて。急に掌うち鳴して。木訥を召よせて。茶を看よ果子を薦よとて。款待す程に沒日刺。風も涼しく做しかば。九四郎は木玄に。歡びを舒。別を告て。四摠を将て遽しく。家路を投て退りけり。然ば乙甕は是等のよしを。傳聞しこの日より。四郎楽六が起行と。自親も大和へ赴く。準備に衣の解洗して。襤褸刺せてふ鳴虫は。まだ鳴ねども縫刺に。暇はあらず夏過て。七月中旬に做し時候。又聞一の奇事ありけり。其故を原るに。曩に浮世袋屋暖簾次は。鍛冶郎と今様の。悪事によりて罪を免れず。久しく獄舎に繋れて。駝鳥太吹五郎と共侶に。拷問緊しかりけれども。駝鳥太吹五郎は死を究めて。詭詐をもて人を誣ず。暖簾次が爲に直言して。他は鍛冶郎が。騙賊なりしを知らず。又今様が鍛冶郎の悪を幇助たるを曉らず。只目前の利に惑ふて。今様を貸たるのみ。其悪意あらざる事は。俺們素より是を知りぬ。と陳じて數回

でかは手賓に及ん。貸は俺心なり。借るは人の心なり。縦數通の手賓ありとも。借て返さずば爭何はせん。又一行の手賓なくとも。返す人は必返さん。況法師の物を貸に。其人を疑んや。已ねく〳〵。と手を掉ば。九四郎いよ〳〵感服して。師父の大量。今の世の。出家人には多く得がたし。以取べし。取れば廉を破る。以取事なかるべし。取らざれば惠を破る。と孟子にあるを總角の時。讀しを思ひ出ながら。俺は反て及ざりける。師父も亦義士なる哉。御意承り候ひぬ。と稱て拜謝したりける。姑且して杜四郎は。九四郎に談るやう。咱等家尊の大人の病臥を。傳聞し其日より。千里の路も一時に。走り行まく思へども。大人の消息こゝに在り。いまだ一功もあらで。治比へ入るとを許されず。然ば今番の武者修行は。故郷へ還る首途なり。一日も蚤く起まく欲す。這義を計ひ給ひね。といふを九四郎うち聞て。其は理りに候へども。一月半稔の逆路ならば。啓行をいそぎもせめ。幾を涯りと量知られぬ。宿旅に去向をいそぐは要なし。三伏果て盂蘭盆まで。俟ば必炎熱醒て。朝夕は涼しからん。其折までに起行の。准備をこそ仕らめ。といひつゝ先懐より。圓金五十兩を拿出して。是を杜四郎に遞與していふやう。桨六も聞候へ。主僕の盤纏を合すれば。正に是百兩あり。馬轎に乘ず。粗飯を厭はず。旅宿に儉約を旨とせば。五六稔は杜ゆべし。四郎朧子は才子なり。俺言を俟ずして。萬事にこゝろ得あるべけれども。桨六はいよ〳〵愼め。孰の郷に造るとも。皆敵地の思ひを做て。

賊の謂らざるを粗知れり。惡縁なれども其亡骸を。葬る事は厭しからず。但墓所には憚りあり。門外なる藪蔭に。埋むべしとて饒しゝかば。九四郎隨即旃陀羅に。課せて其地を深く穿せて。兩箇の柩を埋葬るに。沙彌木訥等承りて。安葬の讀經あり。木玄も立出て。是を引導したりける。其次の日より。大江杜四郎。峯張楽六等。爲に施主に做て。寺の門前なる石工に課て。無銘の五輪石塔婆を造立て。駝鳥太吹五郎の墓表にしけり。又住持木玄は。那時より藏置たる。今様が頭髻の杪を。他が生前の願ひの隨意。高野山なる骨堂に斂んとて。柿八に吩咐て。寄進の黄白さへ齎して。紀伊國へ遣しける。左右する程に。盂蘭盆會になりしかば。木玄は又近村なる。僧徒を多く招會せて。駝鳥太吹五郎今様等が爲に。施餓鬼の法會を修行しけり。是日も杜四郎九四郎楽六等。又施主に做りて。衆徒に齋を薦めなどす。結縁の爲に參詣しぬる。老弱男女極めて多かり。既にして。法會果ける其夜分。住持木玄の夢に。今様駝鳥太吹五郎等が。在りし世の姿にて。倶に枕上に來て禀すやう。俺們三人は。前世の惡業によりて。竟に其死然を得ず。身を白刄に串れて。死しては地獄に墮べかりしに。禪師大慈悲の引接によりて。解脫淸渠の洪福あり。極樂淨土に到ることを得たり。疑しくは是見給へ。といふ歟と思へば。倶に身を轉して。忽地三莖の蓮花に變て。西に靡きて失にけり。當下木玄驚き覺て。單其事を思ふに。有にも似たり無にも似たり。折から轢る土圭の音を。聞つゝ徐に數れば。正に丑の時に

の拷問に。毫も言を變ざりければ。木工頭職善は。竟に其疑解て。七月の初旬に。暖簾次を獄舎より。饒し出して。家に屏居在せけり。左右する程に。駝烏太と吹五郎は。那身に刀瘡ある上に。數日の呵責に其瘢破れて。遂に破傷風に做しかば。倶に獄舎に身故りけり。この故に梟首せられず。職善下知して。件の兩個の亡骸を。倶に市に棄させて。則暖簾次と。乳守の里長等を召よせて。みづから件の趣を。云々と言示して且いふやう。暖簾次は鍛冶郎の。惡事には與せざれども。今樣を貸たる罪あり。這故に賄銅。百貫文を献りて。もて軍用に充べし。又小槌の今樣に使れたる。兩個の小三板。打出の早歌。子兒の調子は。始より事の仔細を辨知らず。且年三五未滿の僮女なれば。倶に罪を饒すべし。と掟らる。賞罰是にて果にけり。爾程に。十三屋九四郎は。人の噂に件の一義を。聞知りて感じて已ず。悄地に旃陀羅に相謂ふて駝烏太吹五兩個の屍骸を。柩に斂め是を舁せて。常晩孟林寺へ送り來て。住持木玄と。杜四郎柴六木訥等に。この義を告知らして。又いふやう。俺意ふに低杭駝烏太。狸毛吹五郎は。鐵屑鍛冶郎に。等しかるべき强人なれども。倶に義侠の心ありけん。最期の正念殊勝にて。其招了に。敢善人を誣ず。こゝをもて。朱之介を首にて。乙藝六市四摠。暖簾次に至るまで。皆疑獄を免れたり。我に功なしとせず。この故に俺憐思へり。いかで件の亡骸を。當寺の境内に葬らまく欲す。この義を饒させ給へかし。と憑めば木玄點頭て。俺も亦始より。那二

學の淺薄は。聊なる文を見ても知らる。况卷を成たるをや。其考證ある條は。竊に人の説を取て。已が説に倣せるなるべし。又近曾高名家の戲墨に。粗地名の辨あるを酷く譏りて。道灌の歌を證にしたれど。廻國雜記にも證歌あるを引ず。从を引ば己が説の窮する故なり。又東鑑にも證据あるを知らずして。おろかなり。うるさしなど。いひ罵るは怨ある故歟。譬ば陳壽が。諸葛武侯に舊怨ある故に。蜀志の列傳に。軍旅の事は拙しとて。譏りし心術に同じ。といはんは猶過たり。或は又孔子の言を引て。論語を中庸とす。何ぞ疎忽なる。人の非をいはまく欲さは。先已を正しく詳にすべし。這他珍説なりと思ひけん話も。遼東の豚に似たる事多かり。其文の杜撰なる。假字づかひの孟浪なる。けりけるけれの。天爾遠波だも知らず。是等をこそおろかなりとも。うるさしともいふべけれとて。四卷ありけるを。僅に二卷見て。其似而非冊子を返すとて。戲笑歌をよみて遣しける其歌『假字つかひ天爾遠波だにも叨なる。生ものしりの生著述哉。』又『淺つきなわけきも知らで人の非を。いはつきねぶか口の臭さよ。』世にはかくの如き才女あれども。其香臭に心つきなく。只其形狀の似たるを見て。蕙蘭も葱韭も。一草なりと思ふも多かるべし。もて辨せずはあるべからず。とぞいひける。こは是後の話說なり。

去程に。殘る暑の稍退きて。七月二十日あまりに倣りしかば。大江杜四郎成勝。峯張柴六郎通能は。武者修行の首途に。心只管いそがれて。倶に吉日を擇みつゝ。住持木玄に別れを告て。

ぞありける。其詰朝木玄は。四郎楽六木訥等に。這奇夢を說示せば。駭歎せざるはなく。倶に佛法不可思議の。妙要をぞ感じける。この比又住吉の里に。今様をよく知りたる者ありて。九四郎に語道。那今様は容止美しく。心操も風流て。平生に歌を好みて詠けり。何なる折にやありけん。河竹の浮節繁くて。夜毎に替る枕の數の。定めなき世を果敢なみて。今宵誰が來てやぬるらん敷たへの。枕は知らめ吾またなくに。有恁る風流女なれども。其心の惑ひにて。染所宜しからず。惜むべし。其生涯を謬しは。彼に愚にして。此に賢なりとやいはまし。是に就て又一話あり。近曾東に。隱沼と喚做して。才闌たる名妓の。老て女僧に做りたるありけり。書讀事を好みしかば。ある人當春世に見れし。細人の瑣言せる。隨筆やうの刻本をもて來て。是見給へとて貸たりければ。受て是を讀見る程に。其人又訪來て。那書の好歹を問しかば。隱沼の女僧答ていふやう。己を知らざる曲學者は。忌憚所なく。人を人とも思はざりけん。熟是册子をよみ見るに。只一書一說を信容れて。古より人のいひもて傳て。證文多かる。故事を誣たるもあり。或はまた方位を論ずるに。今の曆日にも載させ給ふ。金神八將神などを。取るに足らずといひしは。過當の浪言なり。抑方位の事は。近曾唐船の載來ぬる通書多かり。術者の世俗を恐嚇しぬる者。豈只金神のみならんや。倘方位の用捨を論せまく欲さば。唐山なる通書を。遺なく看破りて後にいふべし。意ふに這編者は。唐本などを讀うべくもあらず。其

毎に出て洛内洛外なる。名所古跡を遊覧しつゝ。憶ず秋を送る程に。當時近江なる観音寺の城は。佐々木近江判官高頼在住して。六角殿と稱せらる。其家累世。武功多かる。大諸侯なりければ。繁昌西の都なる。大内家の鶴峰にこそ及ばね。威勢室町殿をも憚らず。既に獨立の思ひありしかば。武藝に勝れたる浮浪人等。那城下に集合來て。仕官を求る者少からず。況城内なる諸臣には。兵法陣列。弓馬撃劍。槍棒白打に捷れたる者。多かりと聞えしかば。杜四郎梁六は。卒や是より先觀音寺の城下に赴きて。權且修行儆すならば。世の英雄豪傑に。値遇する事もあるべしとて。遂に京師を立去て。近江へゆかまく思ひけり。話分兩頭。爾程に。末朱之介晴賢は。落葉が財嚢の金を竊みて。走りける其夜分。峯張梁六に追蒐られ。件の財嚢を奪復されて。僅に九四郎が取せぬる。圓金五兩を得てければ。只得是を盤纏にして。投て往方は定めずも。こも亦京師に來ぬれども。洛内は憚りあれば。東山の邊にて。侘たる歇店に止宿しつ。憶ず三伏の夏の日を。徒に送る程に。單熟思ひ惟るに。大和なる上市は窒りなり。然ばとて這樣にて。今は故郷にありと聞えし。叔興房に便求めて。周防の山口へはゆきがたかり。只近江國坂田郡福宮村なる。福宮氏は。舊緣あり。那家衰果たれども。黄金の母親阿鍵刀禰は。甕武則で村盡處に。小店を開きて在りとしいへば。先や那里へ尋行て。身の隱處に做さばや。とやうやくに尋思しつ。是より折々市閭して。僻洗たる夏秋の敗衣と。一尺五寸ば

身の暇を乞しかば。木玄則其義を許して。柿八をもて送らするに。柿八は高野山より。既にかへりて寺に在り。四郎楽六が爲に、所要の袱包を。負もしつ引提もして。十三屋まで從ひゆくめり。然ば木訥を首にて。同宿の沙彌等別を惜みて。出て是を目送りけり。是日亭午の比及に。杜四郎楽六は。俱に十三屋に來にければ。九四郎乙藝は豫てより。准備して待て居り。柿八を勞ふて。晝飯を喫せなどして。折乾には錢二緡を。取せて寺へ還し遣し。却四郎と楽六には。奥坐席にて酒飯の儲あり。萬里の首途を壽きて。去向の小心を教誨し。且この秋は。九四郎も乙藝も俱に。大和へゆくべきよしを。說示しなどす。只這席のみならず。日暮ても其言罄ず。迭に別を惜むのみ。然とていそぐ逆旅ならねど。杜四郎と。楽六は。其曉に喚覺されて。早飯果て。俱に旅裝す。路費の金子は。各勒肚に斂め。或は肌衣の襟に縫入たるもあり。杜四郎が兩刀は。那身砂りし時。父弘元の賜りたる。大江家傳の名刀なり。又楽六が兩刀は。父通世が遺刀にて。關の孫六にぞありける。行裹重かるは。路の煩ひなればとて。俱に身輕に打扮て。油衣菅笠の外に。所要ある袱包を。背にしたるのみ。恁而其詰朝。杜四郎楽六は。先京師まで造んとて。乙藝に年來愛顧淺からざりし。歡びを舒。且別を告て。草鞋穿締て立出れば。九四郎は六市四捻を從へて。みづから浪速まで送行て。竟に袂を分ちけり。是日杜四郎楽六は。路を走る事十三四里にして。蚤く京都に來ければ。姑且這里に旅宿して。日

新局玉石童子訓卷之四下冊

東都　曲亭主人口授編次

第三十八回　罪過を秘して晴賢阿鍵を訪ふ　小忠二怒て朱之介を逐ふ

復說。末朱之介晴賢は。近江の山路を辿りも果ず。亭午の炎暑堪がたければ。樹蔭求めて路傍なる。老たる松の下涼み。一霎時とて立よりしより。拭はで汗を納つべき。風は極樂上品淨土と。程よき石に尻うち掛て。憶ず睡りて在りし時。但見一箇の蚺蛇あり。眼は百煉の鏡の如く舌は燃る柴薪に似て。松の幹より太かるべき。身を樹の杈より下し來つ。口を張舌を吐て。黑白も知らぬ朱之介を。只一呑にぞ呑にける。爾程に朱之介は。既に大蛇に腹せられて。蚤く咽喉を下る時。愕然と驚覺て。こはいかにと訝るのみ。いまだ其故を知らず。悄地に其頭を撈試るに。黏ると粘瓶に陷たる如く。熱さと沸湯を沃ぐに似たり。原來俺身は蚺蛇に。吞れにけん。とやうやくに。心づきても今さらに。謀の出る所を知らず。苦き隨に又よく思ふに。今手を空しく做なすならば。竟に這身は消化せられて。蛇糞と做りて肛門より。出て知る人あら

かりなる。短中刀を買拿て。聊身の皮を繕ひつ。又阿鍵へ贈る。些の土産物を准備えしかば。數日の宿錢と共に。盤纒に憑む五枚の圓金は。殘り纔に做りしかど。近江は隣國なるをもて。事足べし。と思ひつゝ。其六月下旬に東山なる歇店を立去りて。單近江路に分入るに。坂田郡は殊さらに。山又山に連りて。去向に嶮岨多ければ。朱之介は一日にして。いまだ福富村に造り得ず。次の日も殘る暑に疲果て。山蔭なる松の下に。憩て憶ず睡し程に。忽地一箇の蟒蛇あり。太さは十圍にあまるべく。長さはいまだ量知られず。近き沼より見れ出て。松に掛りて朱之介を。只一口に呑にけり。畢竟這惡少年が大蛇の腹に。葬れて後甚麼ぞや。开は下回にこそ。

新局玉石童子訓卷之四上册　終

玉を三個分ちて。贈れしより今も猶。護身嚢に斂めてあり。なつかしく思ふ折々は。拿出てみづから慰めよ。といはれしとも野干玉の。夜の衣の餘香も。耳に住り袂に殘て。別果敢なき短宵の。彼も夢なり是も亦。地方替れば品降る。鄙を去向の山中に。草を細の草枕。逆旅の疲勞思はずも。結びし夢こそ怪しけれ。と獨語つゝ項に掛たる。護身嚢の紐解緩めて。やをら拿出す三色の玉を。掌にうち載て。左見右見つゝ含笑て。素この玉は五色にして。其數即五あり。初福富大夫次が。蛇飯を撈りしより。獲たりといひし無類の瑞玉。宮殿人物禽獸花草。自然と見ゆる幵が中なる。黄と白黑なる三色の玉は。曩に黄金に別るゝ折。俺分ち拿てこゝにあり。此は是陰玉なり。又青赤二色の陽玉は。留めて黄金が懷に在り。過にし事を云云と。思ひ出つゝ見る玉は。今も初に變らねど。替るは人の有爲轉變。俺身京師に在りし時。香西元盛主に仕し日も。後又扇谷朝興主に仕て。武藏の河踰に在りし日も。寵愛朋輩を傾けて。出頭せざる事なかりしに。皆禍鬼に損れて。得遂ざりしのみならず。果は大和の上市なる。杣木の女壻に做降りても。其里にすら猶落着で。恩愛寃家と做るまでに。斧柄は産後に身故りつ。分娩しゝは男兒にて。玉五郎と歟名つけしといふ。落葉の媼の。世迷言さへいぬる比。竊聞しても親甲斐に。見る事克はぬ身の往方。定難たる逆旅の天に。物を思ふは愚癡なりき。と獨言つゝ餘念なく。件の玉を撮拿て。うち返し見つ左へ移し。右へ移して又見る程に。松の梢に集

ずなるべし。克ぬまでも一方を。斫破らば呼吸の中に。免れ出るとなからずや。と思ふ心を勵して。腰を撈るに幸に。短刀は落も失せず。我物得たりと。引拔て。腹なるべしと思ふ邊を力に儘せて禺然と刺す。刺れて大蛇は苦痛に得堪ず。二十尋有餘の身を縮め。又身を伸す七轉八倒。腹内なる朱之介も。倶に其身を拮抗せられて。輾轉反側しぬれども。持たる刀の柄を緩めず。拳を定めて斫破るに。其短刀はいぬる比。骨董店にて買拿ける。價僅の賤物と。思ふにも似ず。世話にいふ。掘出物歟。鋭味精妙。刄は拳に從ふて。厚く固かる大蛇の腹を。裂よ布に異ならず。手も亦利たる危窮の剽捷。思ひの隨に斫開けば。潑と濆る鮮血の勢ひ。朱之介さへ推出されて。地上に礉と轉ぶと思へば。是なん南柯の夢なりける。登時晴賢愕然と。驚覺ても安からぬ。心神いまだ定らず。恍惚として病しげなる。頭を擡げて東西を。見かへりつ大息嘈て。世とて時とて這容に。傲り果しより夢にすら。虛驚させし鈍ましさよ。吉凶いまだ知らずといへども。俺奶々の生來は。已の年なりと歟聞し事あり。十二生肖已も亦蛇なり。其腹内より生出たる。俺生來を思ふにも。相別しより八九年。音信絕てなつかしき。母親の事今も猶。忘れたるにあらねども。薄情や虛し夫の爲に。子は棄られし藪の下の。別を思へば恩でもなし。それよりも猶忘れがたきは。獨那君の事なりき。世に子寶といふめれど。俺は黃金に優者なし。曩には悄々地なる。那洞房の細々密言に。又逢ふまでの紀念にとて。五色の

熟路にて。年十二三なりし比まで。遊耽りし地方なれども。今の福富の家を知らねば。又通路人に諦て。福富村の稍盡處なる。那店舗に來て見れば。是歟とまでに驚かるゝ。在りし昔の俤はなく。間口僅に二間に過ず。澁染暖簾酒帘。杉葉建たる又六が。門ならなくに極樂と。人はいへども世渡りは。苦しき海と山里に。憂と繁き夏草の。しのぶにあまる萱の檐。半分は朽し板庇。哀は日々に升賣の。地酒をや鬻ぐらん。店の傍に水埒あり。又半切の沙桶あり。裏面には左右に酒樽あり。皆吸子を附られたる。片隅に燈油樽あり。棚には大小の紙嚢に。稠たる晩茶と線香あり。中折の鼻紙返魂紙あり。草履草鞋は吊されて。地天泰の象あり。年十四五許なる。一個の小厮が酒沽ふ客を。待侘しげに発兒に尻を。掛て外面を長視て居り。又店の上屋なる。錢埒の頭には。年二十八九なる一個の女房の。京染の栲の單衣の。申の時可なるに兩麻の前掛して。徒然なる歟。苧を績て在り。當下朱之介は。這店舗の光景を。熟々とうち見入れて。脫傘る菅笠引提て。找み入らまくしぬる時。小厮は蚤く聲を被て。入らせ給へ〳〵。好酒の候ぞ。上酒は一斤京銀六分。酒の御用に候歟。と問ふを朱之介聞あへず。否。俺等は物買ふ客にあらず。大和より來ぬる旅客にて。末朱之介晴賢即是なり。初俺姓名を末松珠之介と喚れし時。當家に寓居の舊縁あり。阿鍵刀自は恙まさずや。このよし稟し給ひね。といはれて小厮は頭を搔て。然るむづかしく長々しき。口狀は得稟されず。先よく習ふて後にこそ。と

鳥あり。突然と降し來つ。疾と宛投石の像く。朱之介が掌に。載て他事なく弄ぶ。三彩の玉の开が中に。黃なる一玉を抓攫ふて。虛空遙に飛去ける。勢禁むべくもあらざりし。朱之介は吐嗟とばかりに。驚慌て。向上るのみ。鳥の形も認得ず。翅なき身はいかにして。及べくもあらざれば。後悔臍を噬までに。蹉跎しつゝ恨めども。其甲斐なければ思ひ捨て。歎口氣して殘れる玉を。護身嚢へ歛めつゝ。項に掛て呟くやう。俺慾に過去來を思ひ出ずは這頭にて。黃金が紀念の奇玉を。拿出て單玩んや。那畜生面が卵ぞ。と見遣て銜み去にけん。こも亦意外の禍事なる哉。夫黃は中央土に象る。今其黃玉を喪ひしは。俺身住にし土地に離れて流浪しつべき兆なる歟。或は又邪玉を喪ふべかりし前兆にて。大蛇に吞るゝ夢を見たる歟。开は左まれ右もあれ。黃金に再會しぬる折。件の玉はいかにしつる。と問れなば何と答ふべき。遮莫浮寶屋は窒なり。生涯黃金に逢がたくは。售て許多の錢にしつべき。奇貨なるを畜生面に。もて攫れしは誰が愆ぞ。鈍さも涯りあるものを。星煞の歹ければ。心も鈍くなりけるよ。と不問語に身を摘て。腹より出す思ふ事。由なや憩過したり。卒や去向をいそがんとて。玉に恨の玉櫛笥。二裹なる行袱を。开が儘肩にうち掛れば。中細くして首尾圓く。蜘蛛にも似たり蜘蛛の園の。編手の菅笠戴きて。窘くも脚曳の。山路を只管いそぎつゝ。ゆくと二三里許にして。日影傾く夏の日の。暮るに近き久禮畑の。三池郡に辿り來にけり。這頭は大槩

婢們は並て已が自恣。散ばひゆきし开が中に。おん身も豫面善なほ。老僕小忠二のみ憑しき。忠心ある者なれば。僅に他に後見せられて。這店舗を執達侍り。身さへ心も細本錢なる。是を昔の餘波ぞ。といはれんは最恥しけれど。世なり時なり。爭何はせん。然ば是等の小經紀して。明し暮しぬる事も。又年來になる隨に。小忠二には措名といふ。妻を娶らせて今はしも。夫婦に世帶を任せしより。人見ばかりの樂隱居。朝夕安さにあらねども。昔御身と中好なりし。黄金は單幸歹からず。曩に左界の親族なる。船積荷三太翁の息子の新婦に。乞れて遣したりしより。猶富榮て那里に侍り。といひつゝ外面見かへりて。やよ丁太郎奥へいて。茶を汲もて來てまゐらせずや。噫俺ながら鈍ましかりき。御身の上を問はせで。いひたき隨の身の贅託を。傍痛く思れけん。相別しより十稔に近き。浮世は通て夢なるかな。大人備給ひし御身の面影。僾れば年既に。二十歟二十一なるべし。遮莫優質なる所以歟。尚少年の心地ぞする。奶々は今も恙まさずや。御身は又何等の故に。年來大和にいましたる。這回京師に出給ひしは。賣買の爲なる歟。夏の最中に炎暑も厭はで。よくこそ訪せ給ひたれ。有繋に昔偲る〻。熟客に何か優者あらん。寛裕に相譚給ひね。と女主人の老婆心に。慰らる〻朱之介は。其言毎に應をしつ〻。聞果て答るやう。然なり。母は周防なる。旅宿甲斐なく流浪の折。憶ずも相識人に。依處求めて陸奥へ。伴れたりしより。今に至りて八九年。音耗絶て候へども。恙なくこそ在べ

推辭を女房叱禁めて。やよ丁太郎閣ね〳〵。奴家が執接稟さんとて。苧桶搔遣身を起して。开が儘奥に退りける。姑且して屋主人。阿鍵は奥より出て來つ。出居に垂たる長暖簾を。推開きつゝ朱之介を。見つゝ遽しく立出て。現に珠刀禰とてありけるよ。やよ丁太郎よ。盥をもて來て。脚を濯せまゐらせずや。といふを朱之介推禁めて。否。今來ぬる路の程。一町許那方にて。底脱草鞋を解棄て。草履を買ふて穿し時。脚をば濯ぎ候ひき。饒給へと裳を下して。兩掛にせし行裹を。引提て膝衝登りつゝ。恭しく阿鍵に向ひて。三拜して且いふやう。別まつりしより八九年。御居宅こそ變りたれ。恙もまさで最愛たし。小可親子が薄命なる。曩には遙けき周防なる。山口へゆきしかひもなく。叔父には得逢ず母にも別れて。身はこの年來大和に在り。這回京へ上りしかば。人傳に聞し當家の災害。胸の潰るゝ事のみなれば。いかで安否を訪まつらん。と思ふばかりの寸志にこそ。といひつゝ一箇の行包を。遽しく解開きて。出す兩箇の嚢物を。准備の盆にうち載て。是を阿鍵に贈りていふやう。こは聊に候へども。大和綿なり吉野葛なり。土產の識と稟さんは。恥しくこそ候なれ。といひつゝ猶も指寄すれば。阿鍵は受て傍に閣て。こは御土產に預り侍り。既に人傳に聞れたらば。又いふべくもあらねども。思ひがけなき當家の滅亡。大人大夫次は果敢なく世を去り給ひて。俺良人大夫五主は。いかに做りけん今までも。信絕て知るよしもなき。景市爪作いへばさらなり。年來家に仕たる。奴

こそ御身の上を。告て言よく商量して。成ると成らぬは他が隨意。奴家が自由に做がたかり。其折までは店番して。留守の幇助に做給はゞ。小忠二も歹くは思はじ。先奥へ赴きて。措名にも相識に。做りて休ひ給へかし。やよ這方へ。と他事もなく。心隔ぬ長暖簾。抗て徐に誘へば。朱之介は應をするのみ。开が儘亟には立離る。計較折けて安からぬ。肚裏に思ふやう。小忠二が京浪速を。走り遶れる賖乞は。首尾好もあれ歹くもあれ。俺に干渉る事ならねども。他果して左界に造りて。船積許止宿せば。俺と黄金が情由ある事も。又浪速の陣舘にて。俺身追放せられし事も。他必聞知りて。この盆前にかへり來ば。阿鍵が商量空と做て。必俺を追出さん。然る時は盤纏もなし。阿容々々と出てゆかば。智計なき者に似たれども。开は其折に主張せん。苦に病事歟。と大胆無敵の。色には毫も見さず。猶然氣なき面色しつゝ。引れて奥にぞ入りにける。恁而措名も朱之介に。初對面の口誼果て。夕饍を薦め浴させぬる。歎待殊に淺からねば。朱之介は其甲夜間に。故にし事さへいひ出て。詞巧に慰れば。阿鍵はさらなり措名等も。詞敵を得たりとて。倶に憑しく思ひけり。爾程に朱之介は。店に敗たる幗垂て。丁太郎と共侶に。軈て枕に就しより。長途の暑熱に疲果て。熟睡二時許にして。忽然と睡覺て。心地猛可に例ならず。全身太く發熱して。且癢き事堪がたければ。姑且も手を放し得ず。現心に抓く程に。其曉天に又睡て。起出る比は熱氣醒て。心地生平に異なるとなし。只怪きは一夜

けれ。又小可は大和なる。親族許身を寓て。左も右もして在りしかど。鄙語にいふ。一舛瓢箪の。身の一生を量り思へば。憑しからず住不樂て。京に上りて賣買せん歟。然らずは良賈の。家の小廝にならばや。と尋思をしつゝ來にけるに。京師も戰馬の蹄に荒て。膝を容るゝに所を得ず。賣買せんにも仕んにも。便宜なければいかにせまし。と思難つゝありける程に。人傳に聞し當家の大變。昔承たる洪恩を。復しまつらんは是時なり。御身の安否を訪まつるべく。時宜によらば生活の。郝助にこそ做るべけれ。と尋思をしつゝ來ぬるなり。給銀なンどは欲からず。然せる所用に達ずとも。心隈なく使れなば。素より願所なり。這儀を饒させ給へかし。と言貞實しげに說瞞めつゝ。巳が惡事を塗秘す。舌も輪るや燕脂刷毛の。色には出さぬ辯佞利口に。阿鍵は淺く說惑はされて。承歡びつゝ點頭て。思ふに勝たる御身の誠心。最辱く侍れども。見らるゝ如く悉ばかりなる。寒店なるにいかにして。人がましき副管なンどを。使ふ力はあらずかし。然りとても面も難く。出ていねといふにはあらず。小忠二は京浪速に。先代の賖多くあり。非如ゆきて債るとも。今は人代り世も異なれば。誰歟よく舊算用を。果さるべくは思はねども。然ばとて那儘に。うち棄んは可惜事なり。取らるゝ涯り債りもしつべく。且左界へも立よりて。那里の安否も訪んとて。猛可に逆旅の准備をしつゝ。身單出てゆきけるは大昨日の事なりき。非如其賖如意ならで。淹留久しくなるとても。盂蘭盆前には必還ん。其折に

益を告れども。朱之介の事をのみ。阿鍵すらいひ難て。猶默してありしかば。小忠二はいまだ是を知らず。恬而其詰朝。阿鍵は竟に已ことを得ず。小忠二に咡くに。いぬる比。朱之介に訪れたる首より。他は惡瘡出來て。難義に及びし尾まで。事遺もなく告しかば。小忠三は驚きながら。聞果て答るやう。那珠之介の朱某は。人に忌る丶破落戸にて。剩罪人に做りしかば。身を措處なき故に。這頭へ流寓來ぬるならん。其故は箇樣々々。如此々々の情由ありとて。當春朱之介が。大和より左界へ來て。船積許止宿せしは。物買ん爲なるに。悄地に黃金と狎親みて臭聲や聞えけん。又其事を見たりけん。荷三太翁は周防より。還ると聽て斷いふて。朱之介を追出し丶事。其後又朱之介は。乳守の娼妓今樣が。自殺の事に拘つらひて。久しく禁獄せられしに。幸にして解屍人の。罪を免れたりけれども。他は大和に在りし時。舊惡も亦多かりければ。三好職善主の制度として。那身を追放せられし事まで。聞たる隨に咡き告れば。阿鍵はさらなり措名さへ。呆れて口を鉗て居り。當下小忠二又いふやう。左界にては浮寶屋の御一家兒。孰も恙ましまさず。勿論大爺荷三太主は。所以ありて樸太郎刀禰と。黃金刀禰を携て。又周防なる枝店へとて。船出做されし留守なれば。俺等は御目に懸り得ず。朱之介の事はしも。城藏主の噂にて。創めて聞知り候ひき。爾るに那破落戸を。這頭に留在らする事の。異日左界へ聞えなば。御身も亦在下も。疼からぬ腹を搜られて。歹く思はれんのみならず。第一

の間に。朱之介が全身に。粟の如き瘡出きて。毫も絶間あらざりしを。みづからはいまだ知らず。丁太郎は夙く見出して。こは什麽と訝れば。阿鍵措名も是を見て。告るに朱之介は驚きて。袖を褰げて其手を見つ。裳を却して脚を見つ。鏡を借て照し見る。面部總身果して瘡あり。何の故なるを知よしなければ。且驚き且訝りて。肚裏に思ふやう。大蛇に呑れて死なざる者も。蛇毒によりて。宍爛れ毛髪脱て。目鼻も一緒に做る者あり。と物の本には寫しもすめり。俺大蛇に呑れしは。是假寐の夢なりければ。蛇毒に中るべくもあらず。こは浪速の陣館にて。久しく禁獄せられたる。牢瘡なるべし。と思ふものからうち明て。人に告べきとならねば。敢又憂とせず。日を歴ば自然に愈べし。と思ひつゝありける程に。是よりの後漸々に。其瘡都て大くなりて。全身腫ざる處なければ。阿鍵措名も是を厭ふて。あらずもがな。と思へども。出ていねとはいひかねて山歸來忍冬なんどを。連りに煎じて薦るのみ。然ばかりの湯液にて。瘥るべくもあらざれば。果は膿水流れ蝨生て。其臭氣に堪ざりける。人僉鼻を掩ふのみ。今は店にも在せがたくて。臥簟儲も間數なき。奧にはいよ〳〵歎しく。人に傳染んとを怕れて。僅に席二枚布たる。空小室に在せて。三度の飯を與るのみ。よく看病者なかりけり。左左する程に。二十日有餘の日數歷て。七月十一日の黄昏に。小忠二は恙もなく。京浪速の賖を果して。左界よりかへり來にければ。阿鍵措名等の歎びいふべうもあらず。軈て浴させ飯を薦めて。留守の損

に已ことを得ざるのみ。速に立去て。他所へ歇店を移してよ。と言苦々しく宣示せば。朱之介うち聞て。豫期したる事なれば。敢噪ぐ氣色なく。稍身を起して答るやう。开はいはるゝ事ながら。左界にて俺上を。云々と歹くいひしは。只是人の娼嫉なるを。よくも査し給はぬなるべし。又浪速の陣館にて。俺身追放せられしは。素より寃屈の罪なるを。誰とて知らぬ者はなし。なれども出てゆけといはるゝ。宿に幾までかくてあるべき。身は野曝になるまでも。俺も亦男子なり。立去る事は厭しからねど。今俺腰に盤纒なし。昔俺母の。福富翁より受拿るべき。算帳の殘りあり。其金目今遞與しねかし。と豪乞るを小忠二聞あへず。开は何をいはるゝやらん。昔和殿親子の別に。故翁大夫次をいふの取せ給ひし。金子は則十兩なるを。俺もよく知る所なり。其外に算帳の。遺りあるべきとかは。といはせも果ず朱之介は。呵々と冷笑ひて。小父よみづから思惟よ。俺母當家に在りし程。四稔五稔扱使れしに。給銀なンどは夢にも見ず。況世に類なき。五色の玉を。返したれども其報に。何取せたる事やある。矧又黄金少女に。飽まで琴を教えさせたる。中免許奥免許は。謝物の定あるものを。其頭も都て無賽にて。別に臨て十兩金の。餞別を恩がましく。物せられしに腹は立ども。俺母は人歹からねば。何ともいはで受たりし。是等の殘金なしといはんや。今この折に其算帳を。果されずは神輿を居て。幾までも養れん。手鈷でも動く俺にはあらず。先其金から出さずや。と執篦返しに歹人の。膝うち

黄金刀禰の爲に宜しからず。倘離縁なせられなば。後悔臍を噬んのみ。矧又京浪速なる舊き賒は。債りても悲乞ふても。誰も皆沙汰に及ばず。可惜盤纏を費して。浪速三界京左界まで。炎暑も厭はで西東と。走遶りて徒に。還りて聞けば無要の客あり。寃家に等しき。歹人を。知らぬ事とはいひながら。留め給ひしはいかにぞや。疾追出し給へかし。世の常言に。人増ば。水増といふなるに。要なき人を一日も。養ふて何にせん。無益にこそ。と呟けば。措名も倶に慰難て。そは理りに侍れども。奶々なりとて故よしを。豫より知り給はば。一宿も留め給はんや。昔馴染をいひ立て。訪れし人を开が儘に。出し遣んはさすがにて。御身のかへり來ますを。俟給ひし故にこそ。といへば阿鍵も嗟嘆して。今は千萬悔ても甲斐なし。俺殿術よく誘へて。出し遣なば安かりなん。といふに小忠二沈吟じて。身を起しつゝ外面へ。遽しく出てゆきぬ。約莫半晌許にして。那里にて轎買拿けん。小忠二は最故たる。坐行車を牽もて來つ。却朱之介の臥籠に造りて。別後の口誼を述ていふやう。和殿舊縁ある故に。訪れしは然る事ながら。俺左界にて聞たる事あり。开はいはずとも覺あるべし。知らるゝ如く俺家は。船積氏の親族にて。且黄金が媚家なり。庇に依ざるを得ず。這故に他に對して。和殿を這里に留めがたかり。又和殿は罪ありて。浪速にて追放せられしならずや。且當國は。京浪速に遠からず。是も亦憚りあるべし。給と云恰と云。身に瘡ある病人を。出し遣は無慈悲に似たれど。實

瘡愈なば。左も右もして身單の。生活種は出來もせん。由なき腹を立ずとも。鄙語にいふ膝とも商量。人の意見に就も亦。其身の爲にあらずや。と賺勸解包金は。掻集たる藻塩草。二分歟三分歟。紅白線を。掛たる儘に取らすれば。朱之介は默然たる。肚裏に思ふやう。小忠二が言品悄さに。俺も亦いひたき隨を。角口したれども。然りとて物になるべくもあらず。今阿鍵が和解を。听かで二分まれ三分まれ。拿らずは俺身は圓潰に。做て立端を失ふべし。聊なりとも和解料あり。俺言品の立ぬにあらねば。是を別の潮にして。觀音寺へゆきて湯治せん。と尋思をしつゝ包金を。拿上て押て見つ。阿鍵に向ひて答るやう。敎諭寔に其理あり。俺等なりとて爭ひを。好むにはあらねども。忠公が言品の。積に碍れば堪難て。いふべき涯りいふたればこそ。この人情は出來たれ。實に御身の意見に任て。觀音寺へ赴きて。湯治すべう思へども。俺腰立ぬを爭何はせん。籃輿を央ふて那里まで。融通で遣りね。憑むぞよと。豪乞るを小忠二推禁めて。そは又榮曜の上裝なり。觀音寺までは路の程。五六里に餘る山路なるに。其轎錢を誰歟出さん。況今莊客は。田の莠を拔最中なれば。傭轎に出る者なし。なれども準備せざらんや。咱等今朝市に闕して。車一輛買拿たり。和郎を載て遣ん爲なり。みづから推て徐にゆかば。路費を省く便宜あり。謝狀寫て疾ゆきね。と說訖て聲高やかに。やよ丁太郎措名も在らずや。夙く膳を拵て。珠刀禰に飯を薦めよ。紙と硯を先もて來よ。と叫ぶ隨意丁太郎は。

鳴らして説誇れば。小忠二も亦勃として。聲高やかに答るやう。开を今さらにいはるゝ事歟。昔世盛なりし日に。故翁の慈善なる。和殿親子を年許多。留め在らせ給ひたる。衣裳調度の費を厭はず。和殿には其師を擇みて。手習讀書を敎給ひし。洪恩海山而已ならんや。然るを又別に臨て。十兩金を賜りしは。過分の造化なるべかりしに。其折不足をいひはせで。當家既に衰て。昔の事に預らざりける。咱等に向ひて理りならぬ。理りを理りめかして。いはるゝとても聞く耳あらんや。然りとても出てゆかじとならば。是則豪奪なり。先村長に告知らせて。守へ訴奉らん。卒觀音寺へゆかずや。と敦圉暴く曳立る。其手を拂いて毫も動ず。疾視哮る聲高やかに。觀音寺ても勢至院でも。この義に就ては一分一厘。闇き事なき俺なるに。碟子に受裝る凍藻。衝出さるゝを怕るゝ者歟。と弱目を見せぬ歹人の。負じ魂火を發す。爭ひ果しなかりしを。前より竊聞したりける。阿鍵は开が儘出て來つ。朱之介にうち向ひて。珠刀禰そは人歹かり。初御身の來ませし時。奴家がいひしを忘れし歟。今は有係る寒店にて。副管なンどは要なけれども。小忠二が還るまで。止宿は然ばかり厭しからず成ると。成らぬは他が隨意。奴家が自由に做しがたかり。といひしは今の事ぞかし。然るを思ひがけもなき。昔の事をいひ出て。錢にせまく欲するとも。承引るゝ事にはあらず。こは聊に侍れども。奴家が聞錢なるをもて。路資にまゐらせん。觀音寺までゆき給はゞ。好藥湯もありぬべし。湯治して

向の路を共に教て。丁太郎を將て還去りける。素より惜む別にあらねど。小忠二は思ひの隨に。朱之介を出し遣て。還るに快からざる所あり。况朱之介が殘忍なる。物の哀を知者ならねど。今は脚なき蟹と做て。他鄉に呻吟ふ憂苦艱難。猢猻の枝に離れし如く。水虎の水を失ふに似たる。心細さのやる方なさに。小忠二主僕のかへりゆくを。幾番となく見かへりけり。爾程に朱之介は。是より推木を左右に拿て。みづから車を遣まくすれど。素より熟ぬ技なるに。病て腕に力なければ。一推推ては息を吻き。二推推ては車上に俯す。其苦辛いふべくもあらず。唯沸々と口を極めて。阿鍵と小忠二を罵るのみ。恁ては孰の日孰の時に。觀音寺へ造んや。と思へば心焦燥ども。筋力及べくもあらざれば。ゆくと這日は十町に過ず。饑る時は一碗の。飯を買ふて喫ふのみ。宿を求めまく欲するに。人皆其毒瘡を見て。怕れて一宿も留る者なし。夜は只得稻塚の蔭。或は又里の空屋の檐下に便りて。車を寄て露宿するのみ。殘暑いまだ退かざれば。晝は路をゆくべくもあらず。况雨ふり風の吹日は路の泥土に車找まで。笠は破れて凌ぐに足らず。蓑も敗たれば雨の漏ざるとなし。身は濡瘡も亦痛みて。心地死ぬべく覺る事。其折折にこれあれども。命數いまだ盡ざればにや。恁ても猶死なざりけり。抑這朱之介晴賢は。始母親阿夏と俱に。近江の賊寨に在りし時。强人の所作を見て。長と成たる者なれば。心殘忍ならざる事なし。其後福富大夫次の。家に寓居しぬる時。其氣質見れたれども。いまだ甚し

朱之介応をしつゝ箱硯を。引提て紙さへもて來にければ。小忠二は墨摺流て。謝書の文言を。朱之介に好みなどす。既に和睦の上なれば。勢推辭ことを得ず。朱之介は阿容々々と。書寫す一通に花押を物して小忠二に。渡す折から丁太郎は。措名が指揮の膳拵して。もて來て朱之介に薦めけり。當下阿鍵は立まくしつゝ。又朱之介に向ひていふやう。珠刀禰今は餘波に做りぬ。飽まで飯を喫給ひね。嚮にもいひし事ながら。御身を留めがたかるは。左界なる浮寶屋へ。聞えを憚る故なれば。迭に疎くならんのみ。願ふは早く瘡愈て。孰の里孰の浦にも住着給へ。と祈るのみ。然らばにこそ。と告別。了得に老婆深切の。柔よく剛を征すれば。朱之介は唯々とばかりに。飯は吭に噎ねども。答難てぞ目送りける。恁而湯淘飯果しかば。小忠二は丁太郎にも手傳せて。朱之介が坐したる蒲團を。吊もて背戸へ將てゆきて。准備の車にうち載るに。其蒲團を折累て敷物にす。この他は敗たる蓑一箇。大きなる竹笠一箇。湯飲の碗。飯行李の內には。晝食の握飯あり。又朱之介が從來の行裹。小腋挿の行刀。手拭扇子に至るまで。漏すとなく車に載れば。措名も背戸に出て告別す。准備遺なく整ひしかば。小忠二は丁太郎に。朱之介の歩行車を。曳せて村盡處まで送りゆくめり。事懇切に似たれども。小忠二が肚は爾らず。倘當村にて事あらば。猶係合になるべし。と思へばみづから送行て。夙く境を出さんとてなり。爾程に。福富の村盡處なる。他郡の境に來にける時。小忠二は朱之介に。觀音寺の城下に至るべき。去

新局玉石童子訓卷之五上冊

東都　曲亭主人口授編次

第三十九回　非常の根抵妙に奇瘡を美す　刑餘の細人迭に機會に驚く

却說。末朱之介晴賢は。枸杞村なる孤屋の。門に車を遣留めて。只管に呼門ふ程に。主人とおぼしき一個の莊客。年齡は五十有餘にて。蚊拂團扇を手に持ながら。應と答て出て來つ。朱之介を左見右見て。這癩蝦蟇が何事ぞ。曛昏に物々しく。人を呼出す事やある。手の內欲くは始より。乞はで何等の所用あるや。と叱るを朱之介聞あへず。否。咱等は。乞兒非人にあらず。福富村より觀音寺へ。湯治の爲にゆく者なれども。身に惡瘡ある故に。人敢て宿を貸さず。稍這里まで來にけるに。前程は都て山路にて。單車を遣るべくもあらず。俺腰に些の盤纏あり。願ふは御身俺爲に。今宵より人を央ふて。明日は早天に車を牽せて。觀音寺へ送らせ給はゞ。俺然ばかりの報をすべし。這義を憑まゐらする。と請ふを主人はうち聞て。开はかたくもあらぬ事ながら。當村は觀音寺の。御城の普請の夫役に徵れて。壯佼毎は一人も居らず。偶家に在る

きに至らざりき。恁而香西元盛に仕し日も。又扇谷朝興に仕し時も。單龍陽の寵を負みて。竟に敗を取ざるとなし。矧又大和にて。義姑賢妻の帮助を得たる。恩に報ふに仇をもてせし。其悪既に極りて。冥罰の致所。この悪病を禀たるなるべし。爾れども人の果報は。善悪倶に過世あり。報ふとの速かると。遅かると同じからず。人其遅きを見て。天を怨るは。其時あるを知らざるなり。朱之介が一浮一沈。前身靈蛇の怨に由。其終を見て知るべきのみ。閒話題休。是時末朱之介は。約莫五六里なる路を。ゆくと四五日にして。枸杞村と喚做したる。片山里まで辿り來にけり。這里よりして。觀音寺の城下へは。二十町あまりなりといへども。去向は都て山路にて。車の找むべくもあらず。權且這里に車を駐めて。將息しても克ずは。人を央ふて牽せばや。と尋思をしつゝ其曛昏に。孤屋なりける莊客の。門に車を遣駐めて。呼門て請ふよしあり。何なる事をいふやらん。开は下の回に說分るを聽ねかし。

新局玉石童子訓卷之四下冊　終

しく思ふのみ。這里は俺等が宿所にあらず。舎弟留守七と喚做す者。夫婦身故りたりけるに。其子盆九郎は夫役に徴れて。家を守者なき故に。只得俺等が留守するなり。阿加々は三池の宿所に在り。昔馴熟の和郎なるに。非如難病なればとて。空小屋ばかりは貸もせん。観音寺には温泉なし。薬湯風爐はあるなれど。然る難病の愈たりといふ。噂を聞くとあらざりき。今些し痊らば。那里へゆきて名ある醫師に。療治を乞ふこそよかンめれ。其折までは那里にて。徐に將息し給ひね。と懇切に慰めて。軈て車を推遣りつゝ。件の空屋へ資入れて。菰莚二枚を。布舗などしつゝ。朱之介の臥箪にす。其後大きなる。握飯三四箇と。煎茶の土瓶執添て。もて來て夕餉に取らすれば。朱之介は且感じ。且歡びに堪ずして。犢鼻褌に結着たる。金一分を搜出しつ。是を宿六に贈りていふやう。こは聊に侍れども。今より後の食料に。先受收め給ひね。といふを宿六聞果ず。いかでかは其義に及ん。人並ならぬ和郎の難病。療治に多く錢は沒べし。痊て後にこそ。謝物とならば受もせめ。今は要なし〳〵。と辭ふて出てゆきしかば。朱之介は一錢を。費さずして三度の飯あり。僅に安身の所を得て。八月の時候まで這里に在り。約莫この一村は。枸杞最多かる地方にて。芟棄れども又生出て。せんかたのなき隨に。家毎に是をもて。生牆に做さゞるはなく。或は田園の畔などに。この物多きを芟拿て。薪にすれども盡ざれば。人喚做して枸杞村といへり。枸杞は素是神藥にて。顔色を増鬢髪を黒くし。歯を固くし精を壯に

者は。俺に等しき老人なれば。備ふべき者ある事なし。开は又外を頼みねかし。と辭ふを朱之介聞あへず。然らば其人々のかへり來るまで。咱等はこの地に車を留めて。姑且將息せまく欲す。見れば前面に空小屋あり。要なくは俺等に貸て。四五日起臥を饒し給はゞ。其房錢は佗とまゐらせん。いかで〳〵。と請求るを。主人は聞つゝ沈吟じて。那里は俺等が稻置小屋にて。只今は要なけれども。出處不定の孤旅客の。而も難病ある者を。留るとは做しがたかり。と固辭ば朱之介は恨しげに。其顏熟々うち向上て。思ひ出たり。珍しや。和主は是三池邨なる。宿六叟にあらずや。と問れて主人は胆を潰して。开をいかにして知られけん。抑和郎は何人なるぞ。と問復されて。然ばとよ。俺等は八九年前つ比まで。母親と共侶に。福富許寓居したる。末松珠之介　即是なり。和主　必覺あるべし。今は姓名を改めて。末朱之介晴賢と喚做て。久しく大和にありけるに。福富には猶受拿べき。算帳の餘波ある故に。そを乞んとて來にけるに。其次の日よりこの瘡出來て。身の難義に做しかば。和主の宿所を訪ざりき。然るを小忠二が貪慾なる。遞與すべき金子を渡しはせで。觀音寺へゆきて湯治せよとて。車に載て追出したり。腹は立ども身の甲斐なさに。稍這里まで來つるなり。和主は又何等の故に。三池邨に居ずして。這頭に轉宅したるぞや。と問へば宿六嗟嘆して。和郎の面影變りしかば。名告られねば知るよしなきを。現に聲音に覺あり。原來珠刀禰にてありけるよ。人の落魄は知られぬ者にて。只痛ま

の下に坐して。單更闔るまで在り。浩處に。最小なる兩箇の獸。忽然と出て來て。朱之介の身邊に在り。朱之介是を見て。田鼠ならんと。思ひしかば。手を拍鳴らして是を逐ふに。走りて枸杞藪の內に入りつ。姑且して又出て來ぬるを。朱之介は月を燭に。其小獸を覘見るに。鼠にはあらずして。形狀狗兒に肖たりしかば。深く心に訝りて。こは奇き獸なるかな。生拘て人に賣らば。錢に做るとなからずや。と尋思をしつゝ傍なる。竹笠をそと引よせて。猶近つくを俟程に。又只件の小獸は。敢人を怕るゝとなく。又朱之介の膝の邊へ。うち連立て來ぬる時。待儲たる朱之介は。手はやく准備の竹笠もて。阿呀と叫びてうち掩へば。獸は逃るに暇なく。二頭ながら笠に布れて。透を求めて出まくす。當下朱之介思ふやう。這奴些し傷ずば。捉逃す事もあらん。要こそあれ。と車の推木を。掻拿つ。笠の上より。漏す曲なく突しかば。兩箇の獸は弱りにけん。寂として音なく做りぬ。今はよき比なるべしとて。やをら笠を擡げて見に。果して奇しき兩箇の獸は死して笠の下に在り。生拘まく思ひしに。突たればとて笠を隔て。身を傷るに至らざりしに脆き奴かな。と呟きて。やをら拿抗て又よく見るに。頭より尾に至りて。長僅に四五寸に過ず。形狀は狗兒に似たれども。眞の獸にあらずして。正に是木の根にて。彫るが如くおのづから。狗狀を做せるなり。造化の精妙涯りなき。這天工に又驚く。朱之介は呆果て。左さま右さまに思へども。素是何等の物なるを知らず。其形の奇さのみならず。馥郁とし

す。皆是補益の良劑にて。脾胃を調へ瘀血を和げ。毒瘡を治し。雨濕を拂ふ。この他の效驗數へ擧に遑あらず。しかれどもこの地の愚民等。是を知る者あるとなければ。徒に藪を做て。斐ども盡ざるを患とす。然れば秋八九月に至る毎に。其實紅に染做て。有繫に長艆なきにあらねど。枝に刺あれば手折者なく。況食料に做すに當らず。只春毎に。其蒻葉を摘採て。蒸て煎茶に代る者あり。この故に木村の莊客は。長壽七八十に至る者あり。しかれども其經驗を知らず。世に千里の馬なきにあらねど。李伯樂にあらざれば。誰歟よく是を知るべき。そをもて畋圃に糞ふのみ。良藥も是に似たる事あり。只知らざるを怨とす。閒話題休。爾程に朱之介は。盆九郎の空小屋に。單起臥しぬる程に。秋も八月の中旬になりて。夾衣欲かる時候なれども。件の小屋の邊には。一叢の枸杞藪あり。又左右三面には。枸杞の生牆ありければ。長脚蚊はいまだ亡ずして。晝も身に寄るを拂ふのみ。夜は漸々枕に聚く。虫の聲より外に友なく。衣片布く霜は置ねど。折から十五夜の月隈なく霽て。茂林を匝る鴉の聲す。罪なくて配所の月を。見まく欲といひけん。昔の歌人の風流には。似るべくもあらざりける。賢となく不肖となく。人靜なる時は。萬慮袪きて忘想なし。動くによりて慾情起る。歹しと知りつゝ做す事あるは。慾を禁め得ざればなり。譬ば朱之介の如き者は。難病既に身に逼りて。只其平愈を祈るの外なく。思慮を費す所あらず。矧又今宵は特に。天霽月明にして。睡んとするに宿も寢れず。只得淸光

六は胆を潰して。是は什麼。とばかりに。即今見る所をもて。事云と朱之介に。告て其故を諮れば。朱之介も又驚きて。みづから手を見つ脚を見つ。頭と顔を揃て見て。其瘡瘥り果しを知る。歡びに堪ざれば。既に乾きし單衣を。搔拿つ是を被て。遽しく帶を結びて。謝して宿六に答るやう。少刄よ俺瘡の愈たるは。箇樣々々の事ありとて。昨宵兩箇の奇獸を。捉得たる首より。折から物欲くなる隨に。其一箇を喫しかば。猛可に瘡より水出て。拭ふに遑なかりし事。其後睡眠を催して。今まで熟睡しける尾まで。說盡して又いふやう。件の獸は最小さなる。狗兒に似て眞物にあらず。實は木根の天然と。其形狀を做せるなり。とばかりいふては人疑ふて。虛談にてこそせられめ。と思ひにければ其一箇を。留めて則這里に在り。是見給へ。と飯行李を。開きて件の奇木根を。拿出て那が儘指示せば。宿六は聞事毎に。感嘆の聲を得絕ず。件の木根を左見右見て。且歡びて談するやう。此は是豫聞く。枸神と歟喚做たる。神藥にてそあらんずらめ。世に得がたき良劑なるに。和郎不用意に是を獲て。毒瘡立地に愈けるは。年比信ずる神佛の。利益にもやあるべからん。就て一條の話說あり。近會觀音寺の城下に。五足齋延明子と喚做したる。一個の醫師あり。那はいぬる比弟俺。留守七夫婦の大病の折。久しく療治を乞しかば。俺等も粗面善なり。しかるに那吾足齋に。一個の女兒あり。其名を晩稻とか喚れて。今玆は十六七歲なるべし。儔稀なる美女なれば。觀音寺の城內にて。第一の權臣なる。多賀某

て香氣あり。喫はゞ饑を凌べき。事もやあらんと思ふにぞ。夜は丑三の時候にして。既に物欲しく做りしかば。試に其一箇の獸の。前脚を嚼見るに。木根なれども塗れし壞なく。味甘くして固からねば。敢手を放つとなく。憶ずも其一箇を。遺なく喫盡ししかば。立地に飽滿して。心地清爽に做りにけり。遺る一箇は人に見せて。後々までの話柄に。做さばや。と思ひしかば。开が儘飯行李の内に斂めて。是をもて枕にしけり。有恁りし程に。朱之介が全身の毒瘡より。猛可に水膿の流るゝと。雨の樹杪に沃が如く。石滴の山より溜るに似たれば。朱之介は驚きて。手拭をもて是を拭ふに。單衣さへ絞る可に。身の濡るゝと一時有餘。其曉天に水濃の。流も出ず做りしかば。身も隨て輕く覺て。且睡眠に堪ざれば。單衣の乾くを俟たず。赤裸にて車蒲團を。被て。熟睡したりける。恁而其次の日に。宿六は例の如く。炊きし朝飯を喫果て。野田巡などして來ても。朱之介はいまだ覺ず。他は難治の病人なるに。倘宿沒なとするとあらば。反て村の厄會にて。俺錢の沒事もあるべし。呼覺さばや。と思ひつゝ。握置たる朝飯に。團味噌煎茶を拿添て。空小屋へもてゆきつ。轔らぬ蓆戸推開て。やよ珠刀禰起給へ。日の高さと三四丈。巳牌は既に過たり。やよ起給へ。と呼覺せば。朱之介は應と答て。被ぎし蒲團を掻遣りつ。赤裸にて。起出るを。と見れば又怪むべし。他が全身透間もなく。抓亂したる毒瘡の。一夜の間に餘渡なく。皆悉愈果て。瘡痂だにも遺者なく。面部總身潔白く。全身美しく做しかば。宿

ありしは十二分の。好造化といふべきに。殘る一箇を金百兩に。賣らば冥加に餘りぬる。一大奇事にあらずや。と鼻蠢めかして說諭せば。滿面笑るゝ朱之介は。听つゝ憶ず雀躍して。そは又奇なり妙なるかな。和主夙く媒妁して。這奇貨を百兩に。賣て其金子を受拿らば。俺其折に報をせん。徒にはあらず骨折給へ。と憑めば宿六點頭て。幵はこゝろ得たり。しからんには。俺は枸神を携て。吾足大人許赴きて。見せて機にだに入るならば。其折和郎を將ていなん。既に身の瘡愈たるに。幾まで歟這里にあるべき。卒母屋へ來て留守し給へ。善はいそげと。いふ事あるに。一刻なりとも早きがよけん。といふに朱之介再議に及ず。しかるべし。と應つゝ。件の枸神を飯行李に。容たる儘に宿六に。遞與して倶に母屋に造れば。宿六は持かへりたる。握飯と煎茶の土瓶を。地坑の邊に閣きて。遽しく葛籠より。洗晒して粘剛なる。單衣と麻の外套を。出しつ手蚤く被更つゝ。帶引結て枸神の行李を。懷へ楚と夾めて。又朱之介に向ひていふやう。哥々握飯に飽たらば。飯櫃は這里にあり。やよ又茶を煑て手裝にし給へ。いで〳〵。といひつゝも。脚半草履引穿て。立出る時菅笠を。搔拿つ戴きて。觀音寺を投ていそぎけり。爾程に朱之介は。早飯を喫などして。單宿六のかへるを俟に。昨宵はこの曉天まで。得睡らざりければ。詞敵もなき宿に。單徒然に堪ざれば。横臥しより嗜睡くて。この日未牌過る比。稍覺て起出て。又晝飯を。喫果しなどせし程に。宿六かへり來にければ。朱之介は出向へて。小父

甲殿に戀れて。既に媚談ありけるに。無慙や件の小姐さまは。面瘡猛可に那身に出來て。花の顔忽地に。羅刹の如く做り給ひしかば。二親痛く憂歎きて。素より家業の事なれば。和漢の藥種。價を惜まず。煎藥膏藥。いへばさらなり。或は煉藥藥風呂。療治にをさ〳〵術を盡せども。竟に效驗あることなければ。吾足齋嗟嘆して。俺療治今はしも。盡たるに似たれども。猶一箇の奇藥あり。枸杞を用るにあらざれば。即效を得がたかるべし。述異記にいはずや。人參千歳なる時は。其精化して小兒に做りて。夜出て藥圃に遊ぶ事あり。枸杞も亦千年なる時は。其根化して狗兒に做りて。夜出て遊ぶと。人參に相同じ。所云枸神は。即是なり。この事載て本草にもあり。然りけれども古より。和漢の名醫是を得て。よく用ひし者極て稀なり。況今京浪速の。藥舖にはあるべくもあらず。但し枸杞村は昔より。枸杞最多かる地方なれば。其地の莊客是を得て。藏措者あるべき歟。是も亦知るべからず。非如然る者あらずとも。多かる枸杞の根を穿て。形狀狗兒に似たるあらば。俺百金をもて是を買ん。急々如律令。と書寫して。當村の衆人に就て。求むること急なりければ。慾深き毎は。各家の四下なる。牆ともいはず藪ともいはず。皆枸杞の根を穿啓きて。狗兒に似たるを採まくすれども。素よりあるべき物ならねば。勞して功なきのみならず。果は胡慮になりにけり。こは七月の事にして。然ばかり久しき話にあらず。然るを和郎は手も濡さで。枸神兩箇を輙く獲て。其一箇をもて身の毒瘡に。即效

ふやう。明日といへども早天より。問れなば薬の効驗。いまだ詳ならざりせば。事不便にてそあらんずらめ。未牌の時候より其人と。共侶に來るならば。俺も在宿して俟べきなり。こゝろ得てよ。といはれにき。吾足大人の奥ざまには。いまだ御目に掛らねども。この義を夙く知られけん。歡びの聲聞えたり。是好首尾にあらずや。と說誇りつゝ件の手實を。拿出て渡せば朱之介は。受拿て開き見るに。其書に道く。可買取藥種の事。枸神一枚。價直金百兩也。右於即效有之者。明十七日。金子無遲滯可渡之候。爲後照手實仍如件。享祿三年八月十六日。吾足齋延明印。旅人朱之介丈。保人宿六丈。とありしかば。朱之介は含笑て。是だにあれば百兩は。明日未後にものいはず。受取るは知れてあり。小父よ這前祝に。醉を盡して寐て待ん。有憖る果報を。徒に。澁茶啜りて居るとかは。といひつゝ先件の手實を。疊み斂めて懷より。金一分を掻撈出して。宿六に遞與していふやう。小父是をもて好酒二斤と。何まれ殽を買もて來よ。生鮭は這頭になし。源五郎鯽魚瀬田蜆。豆腐に初茸もよかンなん。錢をな惜みそこゝろ得てよ。といへば宿六うち笑ひて。まだ那金子を手に拿らで。一分郤舍は早からずや。俺よき程にものしてん。いで〱。といひつゝも。緒付の籠引提て。市を投てぞ出にける。爾程に朱之介は。宿六がかへり來ぬるを。俟と約莫半晌許。下晡に做りし時候。宿六は思ひの隨に。酒と酒菜を買拿りて。左右に引提てかへり來つ。罇と籠を階框の。頭にやをら閣きつ。是を朱之

よさぞ熱かりけん。那里の首尾は甚麽ぞや。と問へば宿六。好首尾好首尾。开は緩やかに話すべし。朝夕は冷やかなれども。頃者の秋日和にて。晝は暑中に異ならず。八朔の晴衣を。絞るばかりに濡したり。この汗を先晒乾てこそ。といひつゝ帶を解捨て。單剃子に脱更る。手も遽しき澁團扇。扇ぎも果ず箇茶碗に。澁茶汲拿り。一呼吸に。飲て开が儘高胡坐。却朱之介に向ひていふやう。哥々先所給へ。俺等嚮に觀音寺なる。吾足大人許赴きて。面談を請稟しゝに。折よく大人は在宿にて。即出て對面あり。縡の來意を問れしかば。俺等枸神の一義を告て。こは俺家に寓居の旅客。朱之介と喚做す壯佼が。不用意にして兩箇を獲たる。其一箇にて候なり。縡の所以は箇樣々々。と和郎が毒瘡難義の事。又其枸神一箇を喫て。一夜の間に毒瘡の。餘波もあらず愈しよしを。言詳に說示して。曩に我村中へ寄させ給ひし。告文に違ふとなく。價百金を賜らば。朱之介は賣んといへり。先覶。と飯行李を。開きて枸神を指出せば。吾足齋は聞事毎に。感悦特に淺からず。やをら枸神を拿抗て。左見右見る事半晌許。含笑れたる額を拊て。俺徵るは是なり是なり。遮莫世に稀なる者なれば。俺も見ること多からず。然れば目前這枸神の。眞僞をばまだ定めがたかり。先俺女兒に是を用ひて。面瘡に即効あるならば。這價金百兩は。明日必遞與すべし。言相違なき照据には。先や手實を取せんずとて。軈て手親筆を染て。其一通を書寫しつ。印して是を渡されしかば。俺等則受拿て。明日と契りて退る時。吾足齋又宣

に。では早かりきよき折なり。先這方へ。と請登すれば。宿六は唯々とばかりに。聽て玄關にうち升りて。吾足齋と面談す。當下朱之介は。那聲をうち聞て。是必屋主人。吾足齋ならんと猜して。外面より闕窺るに。物色安定ならねども。年齢は正に是。四十有餘にて總髪なり。身には仁田山紬を。縹紕に染做たる單衣を被て。聖柄なる短刀を佩たり。當下宿六は。吾足齋にうち向ひて。昨日見せまゐらせたる。枸神は即效候ひし歟。御約束で候へば。沽主を相倶して。伺ひまつり候なり。といふを吾足齋聞果ず。然ればとよ其事なれ。昨日和主がかへると聽て。咱等枸神を製劑して。拙女晩稻に服用させしに。味最宜しとて。時を移さず其一劑を。嘗盡したりければ。心地清爽に做りぬといへり。恁而其曛昏より。晩稻が面瘡の腫増て。薄膿の流ると。涌成す泉に異ならず。さてぞ拭ふに遑もなく。約莫一時許にして。膿竭て地腫減じ。病人は快げに。聽て睡に就しかば。敢又驚さず。母は枕方に是を護りて。其覺るを俟程に。今朝しも巳の時候に至りて。覺て起出るを見れば。晩稻が面瘡瘥り果て。瘡痂だにも殘る者なく。其容止は病ざる時に。倍て美しく做りしかば。那身はさらなり俺們夫婦が。歡び何事か是に勝べき。然れば晩稻に浴させ。髪結化粧に時移りて。今身裝を果しにき。有恁れば那姻談に憚りなく。俺情願を果さん事。誠に枸神の即効に由れり。然れば約束に違ふ事なく。那代金を遞與すべし。沽主朱之介とやらんにも。咱等目今對面せん。這意を傳へて伴ひ給へ。といふに

介に見せていふやう。朝市ならば自由なれども。夕市には然せる物なし。和郎の機には入るまじけれど。是でも五緡費したり。といひつゝ殘れる銀と錢を。拿出て還せば朱之介は。手にだも觸ず推戻して。然ばかりの錢何にせん。开は又明日の飲料に。小父預りて別當せよ。といひつゝ提籠引よせ見て。噫無慙やな炙鯽五串。泥鰌一笊。油のやうなる酒一升。豆腐はあれども初茸なし。是で五百は高間の原に。留まり給ふ八十萬の。神には御酒を献せずとも。夾殺のなき代に。蟹味噌擂て汁にせん。小父先竈を燒ずや。と我から口に使るゝ。客と主と二人して。抓料理の兩三種。迭に骨を折暦手の。茶碗酒にて間沒らず。夙くも罇を盡しける。現に張奘が當喫に。物見の松と杉箸を。裂て養歯に使ふまで。强飲敵なき癖なれば。己が隨なる戯言を。諄返しぬる自負傲慢。竟には俱に醉臥て。日の暮たるも知らざりけり。恁而其次の日に朱之介は。日屬朧に塗れたる。單衣を洗などして。乾くを俟て是を着て。市に出て浴しつ。髪を結せてかへり來ぬれば。秋の日最大短くて。既に未牌の時候に做りけり。時分はよけんと宿六を。いそがしつうち連立て。吾足齋許赴くに。宿六は異議に及ばず。今日事成らば百兩の。十分一は俺物なり。いかで障る事あらで。金子受拿せて一本錢の。福分させん。と肚裏に。思へば俱に歩も捗みて。蚤く觀音寺へ來にければ。朱之介をば开が儘に。那宿所の門に立せて。宿六先裏面に入りて。聲高やかに呼門ふ程に。奥の方にて應と答て。吾足齋出て來つ。宿六を見て笑しげ

里にや居る。珠之介が來つるぞよ。出て對面し給はずや。と兩三番呼はれば。阿夏は夢歟。とばかりに。慌惑ひて出て來て。朱之介を見つ。宿六を。見つゝ二たび膽を潰して。現に珠之介でありけるなり。思ふに倍て大きう做にき。主の見忘れ給ひしも。故なきにあらずかし。宿六主さへ連立て。訪來ませしは不思議の再會。誰に聞て歟珠之介を。將て來て逢し給ひぬる。御情こそ嬉しけれ。と謝すれば又宿六も。呆るゝと半晌許。頭を搔つゝ答るやう。否。小可は這御宿所を。然る方ざまとは思ひもかけず。昨日枸神の事に就て。推參しまつりし折。故弟留守七の。噂の外に餘談なく。今日珠刀禰を將て來つるのみ。人には聞くと候はず。といへば吾足齋點頭て。然なり。和主の事はしも。阿夏に聞たるよしあれども。今は忘れて思ひも出ず。名を宿六と告られても。其人なりとは知らざりき。況大和の旅客なる。枸神の沽主朱之介と。いふ名は昨日より聞たれども。實は俺乾兒なる。珠之介にてありけるを。神ならずして誰歟悟らん。开は其該にあらずや。といひつゝ呵々とうち笑へば。朱之介は母親阿夏と。吾足齋にうち向ひて。別まつりしより八九稔。猶陸奥に在するならん。と思ひし者を思ひきや。幾の比に歟這鄕へ。移り來まして今料らずも。再會の本意を遂んとは。世に稀なるべき幸ながら。大人の姓名俺名さへ。今は昔に同じからねば。迭に知らず知るよしもなく。酷く無禮を仕りぬ。と陪話ば阿夏は恥たる色あり。朱之介にうち向ひて。名を改めしは主と汝と。又只二人のみならず。

宿六再議に及ばず。歡び承て答るやう。幵は又愛たき涯りに侍り。小姐様の面瘡御平愈と。朱之介が毒瘡の。平愈と其事相似たり。現に神藥の效驗は。爭ひがたき者にこそ候へ。金子をば他に賜りね。手實を返しまゐらすべけれ。といひつゝ聽て身を起して。走出つゝ朱之介に。件の首尾を呫き示せば。朱之介は天に歡び。地に喜びて點頭のみ。餘談に暇なき折なれば。引れて玄關に登り來つ。宿六は云云と。執合すれば吾足齋は。是へ〳〵。と招くにぞ。朱之介は阿とばかりに。膝行頓首。初見參の。禮を做す事大かたならず。僅に頭を擡げていふやう。昨日は宿六の媒妁にて。御用に達し奇藥の即效。仰示させ給ひぬる。御歡びを査しまつりぬ。いかで價の百金を。目今遞與し給ひねかし。と乞ふを吾足齋うち聞て。幵は勿論の事なりかし。百術盡たる俺女兒。晩稻が面瘡の一夜の間に。愈て痕だにあらず做りしは正に和殿の賜なり。和殿は大和の人と歟聞ぬ。料らざりける對面なり。やよ先近く找み給へ。然ばかり介意するとかは。といはれて朱之介は辭ふによしなく。しからば饒させ給ひね。と應つゝ膝を找めて。頭を擡げて吾足齋に。うち向ふ時創て知る。心の驚き大抵ならず。憶ずも聲を被て。御身は是辛踏氏。无四郎主にあらずや。といはれて驚く吾足齋は。睛を定め。佶と見て。思ひがけなや。現に和郎は。珠之介にてありけるよ。幾の程にか大人備て。童顏の耗たれば。見忘れしてこそ鈍ましけれ。汝の母は奥に在り。夙く逢して。歡ばせんず。といひつゝ聲をふり立て。やよ老苧。其

つ。倶に目を擧て晩稲を見るに。面瘡病たる少女に似ず。世に稀なるべき美人にて。沈魚落雁。閉月羞花。とやいふべからん。玉顏雪膚。鄙にして鄙ならず。眉連れる蝦夷遠からぬ。陸奥の盡處にしも。這個小町もありけるよ。と思へば倶に羞慚みて。初對面の口狀も。果敢々々しくはいはざりけり。恁而吾足齋は。宿六等に揖讓して。盃を創るに。主も客も强飲家なれば。献酬の間には。長談多辯餘念なく。倶に笑局に入りにける。當下老苧は。朱之介にうち向ひて。珠よ汝は這年來。孰地に軀身を寓たる。俺身陸奥に在りし時。京師の便に言傳て。鷹の翅に書の數。兩三番に及ぶまで。西殿へとて訪せしに。往方知れず。とのみ聞えて。術も歎さの杜ならで。神に佛に願言の。今日屆さしてこそ娯しけれ。是に就ても痛ましきは。福富翁の事なりき。俺身この地に旅宿の比。人の噂に聞知りたる。那家の禍鬼は。又いふべくもあらずかし。宿六叟は何等の故に。三池郡に在らずして。何とて枸杞村に移り給ひたる。給と云恰と云。情由を聞ねばこゝろ得がたかり。具に告よ。甚麼ぞや。と問れて朱之介嗟嘆に堪ず。受て手にある盃の。酒を一口に飲乾て。主に返して答るやう。奶々の疑寃に所以あり。俺身御身に別し後。日野西殿中納言兼顯卿の紹介にて。香西元盛主に扈從しつ。寵遇時を得たりしに。元盛主は人の爲に。讒訴せられて撃れ給ひぬ。其折俺身は辛くして。海を渉しつ播磨路と。備前國の封疆なる。三石の城に脂りし時。料らずも叔父興房主に。環會ける歡びあり。是時より俺乳名の。珠之介を改

俺身も亦故ありて。近曾這里へ來ぬる時より。名を更めて老苧の刀自。と喚做され侍りにき。この餘會話は。亟に盡すべくもあらず。宿六叟も共侶に。卒這方へと請拭むれば。吾足齋も倶にいふやう。多くもあらぬ若黨奴隷は。前日猛可に故ありて。身の暇を取らせしかば。折から無僕の宿にして。然せる欸待は得ならずとも。心ばかりの酒盃を。薦めて歡びを盡さゞらんや。卒先奥へと。右ひだりより。誘ひ立て巳ざれば。宿六は困じながら。應をしつゝ朱之介を。立せて倶に奥に入る。儲の席は六疊可を。布成たる小室にて。檐廊あり莎庭あり。朱之介と宿六は。相双びて。客坐に就ぬ。无四郎の吾足齋と。打譚ふてありし時。程遠からぬ酒肆の小厮が。所用を聞に來にければ。阿夏の老苧は悄やかに。酒殽を吩咐て。いそがし立て遣しつ。女兒晩稻に茶を煑させて。手親是を宿六と。朱之介に薦などす。姑且して酒肆の小厮が。酒一罇と酒菜幾種歟。引提の沙桶に容たるを。背門口よりもて來にければ。老苧は是を受拿て。錢を還して小厮をかへしつ。晩稻に酒を盪させて。或は碗或は碟子に。酒菜を裝分などしつゝ。酒盃銚子と共侶は。次第に客坐席に安排て。晩稻に酌を執する時。朱之介等に告ていふやう。こは俺家の螟蛉女兒にて。名を晩稻と喚做侍り。陸奥に在りし時。主吾足齋いふの親族の孤にて。便着なき者なれば。年七許なる時より。養ひ取て今はしも。年來に做侍り。珠之介には義女弟なり。宿六叟も相識に。做給ひね。と正首に。女兒自慢の親心。執合すれば朱之介と。宿六も應をしつ

人の癖なれば。舌の劍は莫邪にて。恩ある人を恩とせず。是を誣るに怨を以し。惡事を秘して身の非を飾る。其詐佯も時に取ては。實事ならずと聞者なければ。吾足齋晩稻いへばさらなり。思宿六さへに感激して。嗟嘆に堪ぬ幵が中に。阿夏の老苧は涙諳て。朱之介に向ひていふやう。思ふに増たる汝の艱難。三石とやらンにて。小父公に環會けるを。今聞だにも歡ばしく。思ふものから久後遂ず。何どて果敢なく別にけん。それだにあるに大和にて。木偶介主の前妻の。女壻に做しは其家の。女兒の危難を救ひたる。恩義に二たび結れぬる。舊き緣しの故なれば。幵は切てもの事ながら。家の女兒の身故りしとて。汝に慘刻中りけん。落葉の老婦の腹黑さよ。舊怨を思へばや。憑しからぬ岳母の。機嫌を然しも取難て。辭し去りしより浪速にて。窕屈の罪の縲絏。かゝる憂身に枉津神の。夙くも解けし夏の霜。月さへ雨の漏宿を。賴に堪ず福富へ。辛くも尋ゆきけんに。那家今は衰へて。昔の如くならずとも。小忠二が慳貪なる。舊熟兒を思ひはせで。主人顏していかにぞや。恩をも知らず義も知らず。現に塵の世の塵塚に。在とし人に人らしき。人のなきこそ怨なれ。幵は左まれ右もあれ。今日より大人の資助あり。發跡るまで茲に居て。時を俟てこそよかめれ。と詞雄々しく諭すのみ。只已が子の虛言を。實語と承て身勝手に。耳を貴む婦女子の愚癡を。宿六は慰難て。喃阿夏樣。幵は理りに侍るかし。俺等も今は福富へ。疎ければ小忠二叟の。心術をよくも知らねど。大夫次大人のあらず做ては。憑しか

めて。末朱之介晴賢と喚做たり。こも亦小父公の教によれり。然れども那里に留められず。則小父公の指揮にて。武藏の河蹠に赴きて。扇谷朝興主に仕しより。愛顧老黨に彌増て。出頭せずといふ事なく。大和へ使を奉りつ。沙金白布を多く齎して。遙に那地に屆りし時。山賊の爲に藥せられて。那御物を喪ひしかば。進退其里に谷りて。せん術のなき折から。俺亡父の前妻と聞えたる。落葉の刀自の姪なりける。斧柄少女の大厄難を。俺等料らず救ひたる。恩義によりて女壻にせられて。三稔以來那家に在り。單生活に骨を折て。よく岳母に仕しに。斧柄は曩に難產にて。身故りしより岳母の。心始の如くならず。折に觸ては燻さるゝが。最難面ければ。辭し去りつ。徑に浪速に赴きて。十三屋てふ客店に。逗留して在りし時。人の爲に誣られて。思ひがけなく浪速なる。陣舘へ召捕られて。久しく獄舍に繫れしに。そも亦寃屈の罪なれば。竟に俺身の厄解けて。世間廣く做しかど。盤纏なければ福富なる。阿鍵に錢を借んと思ひて。單那里へ赴きける。其次の日より身に瘡出來て。打臥て在りけるに。小忠二が殘忍なる。錢をば貸さで罵るのみ。果は俺身を車に載て。逐出されて端なく。理には勝ども威勢に。克よしなければ辛くして。枸杞村まで來にける程に。宿六叟に環會て。厄會に做しより。枸神の即効。惡瘡平愈の。俺身安かるのみならず。創て逢見る義女弟。晩稻が面瘡瘥り果て。思ひかけなく親達に。今日再會は豫の情願。得易からざる幸なるかな。と口に信する巧言多辯。現に小

新局玉石童子訓巻之五下冊

東都　曲亭主人口授編次

第四十回　吾足斎盃を挙て往事を詳にす　晩稲袖を払て獨閭門を正くす

登時辛踏无四郎の吾足斎延明は。朱之介と宿六等にうち對て。目今もいひつる如く。珠は俺乾児なり。又宿代児は。俺渾家阿夏の老爺が舊識ならば。今さらに何を欺隠さん。俺上は箇様箇様。如此々々の事ありとて。言詳に説示すを。朱之介も宿六も。耳を敧けてうち聞くに。原這個辛踏无四郎竃成の父は。辛踏愿斎と喚做して。陸奥國信夫の郡。信夫の郷なる醫生なりき。然せる方術あるにあらねど。家傳の田圃十餘町あり。是をもて其家貧しからず。彼身は半農半醫にてありける程に。本妻に生せたる。獨子无四郎が。年七八歳なりける夏の時候。妻は時疫にて身故りけり。人の家に婦人なきは。臼に離れし杵に似たり。况十歳にも足らぬ稚子を。父親の身單もて。守養べきにあらざれば。愿斎は已ことを得ず。後妻を娶りてぞ。一家児を任用せける程に。无四郎が稍長成随に。生さぬ中とて畊も慈ならず。子も亦孝順ならざれば。動もす

らぬ事もあるべし。其頭には同じからぬ。俺等が枸杞村に來て居るは。一向留守居なき弟の。孩兒の後見すればなり。阿加々は三池の宿に在り。折に觸ては御身の噂を。いひ出ける日も多かりしに。今日の團坐を聞知らば。然ぞ羨しく思ひ侍らん。單俺等が手に乘ぬは。侄盆九郎のみなりき。錢だにあれば酒を喫ども。親の藥禮を今に果さず。大人に御無沙汰仕りぬ。と陪話るを吾足齋推禁めて。いかでかは其義に及ん。俺始より珠之介に。俺素生を告ざりしは。其比他は童年にて。いふかひなきを思へばなり。今は昔と同じからぬ。他にこの義を說示さずは。疑ひ氷解すべからず。宿六叟は老苧の舊識。倶に聞ともけしうはあらず。いで〳〵。といひつゝも。又酒盃を遣替して。說出す一條の。文多ければ盡しがたかり。开は又下回にこそ。

新局玉石童子訓卷之五上册　終

是より前に父悳斎は。老病既に身に逼りて。鍼灸薬餌の験なく。命危き折なりければ。所親はさらなり。疎からぬ。郷黨相歡びて。有來事を云云と。告て病床へ伴ひなどす。悳斎は類中にて。ものいふとの不便なれども。今无四郎が還り來にけるを見て。喜びの涙禁め得ず。枕方に侍らせて。霜の朝に鳴く虫よりも。衰りし聲を絞出して。後の事を云云といはまくすれど舌強りて。一言半句も安定ならねば。孰かよく聞取るべき。應のみして慰めたる。无四郎是に便宜を得て。當晩阿夏を里稍盡處なる。客店より召取りて。親にも亦所親にも謊りて。俺身京師に在りし時。兼顯卿に給事しし女房を。這回餞別に。妻にせよとて賜りしかば。已とを得ず將て還りにきと。誠しやかに告知らするを。悳斎は只うち聞くのみ。其事の好歹を。訂すべくもあらざれば。所親も不の字をいふに由なく。皆面出たしとて祝しけり。是より纔に一日を經て。悳斎竟に身故りければ。送葬の事佛事追薦。都て无四郎が隨意せざる事なし。家には奴婢三四名あり。家傳の田圃十餘町あり。況貯祿の金。思ひしよりも少からぬを。无四郎都て受納しつ。是よりの後。月額を剃ず。總髪と歟いふ頭顱に倣濟したる。其忌闋の日より。親の名を紹て。辛踏悳斎と自稱しつ。醫をもて家業にしぬるのみ。曩に京師に在りし程。彼身名醫に負笈して。學得たるにあらざれば。匙は親にだも及ねども。地方に久しき醫生なれば。療治を乞ふ者絕ずして。兩三稔を歷にけるに。阿夏が腹に子の出來ねば。无四郎の悳斎は。猶飽ぬ

れば口舌起りて。四隣を閙すると屢なりけれども。悳葊是を制し得ず。肚裏に思ふやう。右にも左にも无四郎を。這地方に在らせては。俺家一日も安かるべからず。姑且彼身を遠離て。又せん術もあらんとて。无四郎には然氣なく。京師へ登りて遊學せよとて。路費程よく取らせなどしつ。舊縁ありける日野西殿へ。消息をたてまつりて。其子の上を憑みまうしける。然ば无四郎寧成は繼母の讒言を。最朽惜く思へども。威勢辭ふとを得ず。遂に京師に赴きて。日野西中納言兼顯卿に扈從しつ。雜掌の如くにてありける事の光景は。第一集第二集に見えたる如し。爾後又年を歷て。无四郎が繼母。陸奧にて身故りしと聞えしに。這時父悳葊は。歲七旬の翁になれば。萬事の就きて不便にやありけん。手親无四郎に消息して。汝蚤く故鄉に還りて。俺を資助よとある郵書。京師に屆き來にければ。无四郎悄地に歡びて。兼顯卿に乞稟しつ。奧へ退らんとしぬる程に。漫に阿夏の色に惑ふて。尙總角なる珠之介を。君家に留め在らせつゝ。事の術よく誘果して。阿夏を俱して陸奧なる。信夫の鄉へ還りゆきけるとの顚末は。又是第二集に說次たれば。今さらにいふべくもあらず。然程に幸踏无四郎は。當時逆旅の日數歷て。舊里信夫に近づく程に。阿夏が事こゝろに掛りて。親の允さぬ妻をしも。京師にて娶りしとて。親にも所親にも。告知らせんは今さらに。面正しくもなき所爲なり。いかにすべき。と思難て。家に還着ぬる日に。其夜阿夏をのみ客店に。留在らせて。无四郎一箇信夫の家に還來て聞くに。

縫せて。糸針を手にだも取らず。然せる所要なき折も。良人と共に夜を深し。良人と共に朝寝して。猶暇ある隨に。女兒晩稻に敎ぬ折も。筑紫琴を掻鳴し。三絃を彈て身の勤とす。この餘は只朝夕に。彼身の化粧結髮に。時の移るを知らざりける。夫婦かくの如くにして。五七年を送る程に。所帶を驕奢の爲に使減して。親の禪りし田圃さへ。質に典ざるとを得ず。嵩むは借財のみなれども悳莾が人と成り。素より浮薄の性なれば。既に人歹くなりて。東西なる財主の債りを物とも思はず。這時件の螟蛉女。晩稻は年三五にて。鄙に稀なる美女なれば。媒妁をもて婚緣を。欲する者多けれども。悳莾敢承引ず。我女兒は數萬貫なる。國守城主にあらざりせば。いかにして女壻にせん。要なき事を。と誇るのみ。筋歹き借財の。債りに分說術竭て。錢欲し。とのみ思ふをり。又緣談を誼する者あり。抑這信夫の鄕に。兩箇の豪家ありけり。西に居は西岳氏にて。東なるは東原氏なり。因て土人彼等を稱て。西の長者。東の長者と喚做たる。其西岳某甲が。妾を欲するとて。晩稻を媒妁する者あり。悳莾は債りに困じて。術計盡たる折なれば。敢又尋思に及ばず先他を囮兒にして。金を借らんと思ひしかば。一議に及ばず。其意に任て。晩稻を飽まで粧飾せて。初見參に遣しけるに。事立地に整ひて、俗にいふ支度料にとて。金百兩を贈られけり。悳莾則是をもて。免れがたき借財の。債を僅に果す程に。東長者もこの事を。傳聞たるや。聞ざるや。昔も今も兩雄は。雙立ざる物にしあれば。西に負じ

心地して。養子せばや。と思ふ程に。辛踏の家に舊縁ある。似我八といふ寒民あり。夫婦うち續きて世を去りたる。跡には年七八歳なる。獨女兒のみありて。憑しき親族なければ。件の女兒は。親似我八の店保人。某甲の家に歇居ども。其保人も。最貧しき者なれば。憐むべし件の女兒は娼妓にや售れんといふ。人の噂に聞知りたる。悳蒡是を不便に思ひて。みづから其保人許行て。件の孤女を見るに。顔は垢染て。髪には膏脂なきまでに。形貌こそ窶れたれ。其眉目人に勝れたれば。成長る後々は。傾國の本色を。出すとあるべし。と思へば捨がたき心あり。軈て保人某甲に。舊縁を告け。商量して。養女の一議整ひしかば。俗にいふ親不知の約束にて。保人某甲には。手斷金を程よく取らせて。後の爲に證書を取迭し。其日件の女兒を將て。宿所に還りて事云云と。阿夏に具に告知らするに。阿夏も歡び愛慈みて。湯浴させ結髪させて。猛可に新しき衣裳を製して被せなどす。是より其名を改て。晩稲と喚て手習させ。艶曲歌舞何くれとなく。遊藝さへに習する。其費寡きにあらず。矧又後の悳蒡は。其本性親に似ず。酷く酒を嗜むの故に。客を愛して家業に怠り。專外物を飾る故に。敗きを惡みて費を厭はず。世の常言に。似たる者は夫婦といへり。阿夏は素是歌妓なれば。浮たる事にこそ賢かるべけれ。人の妻のよく內を政ちて。薪炊の損益に。心を用る性ならねば。良人と共に酒を貪りて。食好みをせざる日もなく。有が上にも衣裳を欲して。流行を旨としぬれども。其將人に

人を中に捕籠て。挑爭ふ慾界の。風波噪ぐ口舌の海に。玉を採得ぬ志渡の蜑戸。取次に狂ふ程しもあらせず。奥に集合し悳荼の。酒肉の惡友洩聞て。素破事あり。と共侶に。驚立たる酒氣に乘して。襖戸蹴開き吐也々々と。跳出つヽ理不盡に。件の兩箇の媒人を。目鼻もわかず撃仆せば。吐嗟と叫びて起んと蠢く肩腰に。登蒐りて蹂躪れば。憐むべし媒人等は。頭顱を傷られ板齒を折れて。血に塗れつヽ平張たる。事の騷劇に四下なる。里人等走來て。或は兩箇の痍負兒を勦助け。或は悳荼を推鎮めて。事の顛末を諮問ふ程に。側杖打たる酒客等は。序次歹しと思ひけん。何の程に歟退さて。背門より出てゆきにけり。這時にしも悳荼は。忽地酒の醉醒て。後悔すれども及ばねば。身の非を飾りて陳ずるのみ。言果べくもあらざりける。然れども兩箇の媒妁兒等は。幸ひに痍深からず。命に恙なきものから。事私に。治るべきにあらざれば。隨即縡の顛末を。里正に告知らせて。領主の廳に訴けり。爾程に當國守。大崎左少將の陣代なりける。信夫の郡司充信。件の訴訟をうち聞て。雙方を召問ふに。悳荼陳ずるを得ず。其非義既に分明なれば。彼身を禁獄せられけり。爾后又充信は。西岳東原の兩長者を召よせて。事の虛實を質問ふに。彼等も亦隱とを得ず。辛踏悳荼が女兒晩稻を。妾にせん爲に西は百金東は百五十金を齎して。衣裳料に遣しヽに。悳荼女兒を重賣して。金を奪ふて女兒を遞與さず。事延引に及ぶの故に。緊しく催促しぬるを怒りて。反て媒人等に。打擲の拳を中

とや思ひけん。俺其晩稲を妾にせんとて。又媒妁兒をもて。晩稲が衣裳調度の料に。金百五十兩を贈りしかば。悳蓉是をも受納して。諸方の借財は多くも還さず。日毎に飲食の友を集合て只酒讌遊樂に。夜をもて日に接ざるとなく。其折々に阿夏に歌せ。晩稲に舞踊せて。猶飽ぬ心地すめり。爾程に。東西の兩長者の媒妁兒等は。只管悳蓉に催促して。蚤く令愛を主家へまゐらせ給へとて。其懈りを責れども。悳蓉噪ぐ氣色なく。或は病着。或は月の障りありとて。約束の日を延すのみ。遣すべうもあらざれば。東西の媒妁兒等。初は疑ひ。後は皆。謀られけり。とうち腹立て。云合さねど東西齊一。辛踏の宿所に來て。憶はず聲の高くなるまで。其怠慢を責罵れども。悳蓉阿容たる色もなく。呵々と冷笑ひて。噫嘆や。汝等思ひね。天に不測の風雨あり。人に不測の疾病あり。假令約束したりとも。晩稲は一向病着に。打臥たるを爭何はせん。非除一年三箇月。事遲々に及ぶとも。我等閑にはあらざるなり。氣長く等ね。といはせも果ず。そは虛言なり已ね〱。嚮に來る時令愛の。背影を見しを知らずや。詩も語もいらず疾渡しね。と一箇がいへば。又一箇が。惴立つ訛聲振立て。俺等は既に先約なるに。女兒一人を東西へ。斫賣にする事やある。开では濟ず里正許。牽もてゆきて思ひ知らせん。蚤く立ねと曳立るを。烏滸技すな。と突仆す。その手を捉たる東の媒人。先約後約は知らねども。俺等が花主は西よりも。支度料に五十兩の。增金あれば西へは遣らず。這方へ渡せ。然はさせじ。と主

倶して立去て。里盡處にて良人を俟程に。是日辛踏悳葊は。背を一百鞭うたれて。軈追放せられしかば。計らず阿夏晩稻等に。逢ことを得て歡ふのみ。當晩は近郊なる。白屋に宿りを投めて。笞傷の痊るを俟ず。往方孰處と定ねども。京師の方を心當に。次の日より路次を急ぐに。倘西岳東原の徒の。先度の遺恨を復さんとて。追蒐來ぬる事もや。と思ふ心の安からねば。人馬稀なる間道を。走ること兩三日。是日は都て山路にて。鳥路熊徑の幽なる。頃は歳梢の孟なれば。天寒くして雲雪を催し。風暴れて梢羅に似たり。宛屛風を建たる如き。山又山を登りゆく。親子三名背に汗する。一歩は一歩の艱難あり。百歩は百歩の苦患に堪ず。开が中に晩稻は咽喉の渴くとて。只管水を欲すれども。這頭は人家遠くして。茶店あるべくもあらざれば。已ことを得ず岡蔭に。流るゝ石滲を見出して。阿夏が准備の腰着碗に。溢るゝ可に汲拿りしを。卒とて。晩稻に飲すれば。晩稻は最旨しとて。飲といまだ半分に至らず。忽地に舌强り。面色變りて仆れんとす。阿夏は是に驚きて。晩稻を楚と抱き停めて。叫びて良人に告知らすれば。悳葊も驚きながら。先其脉を診ていふやう。約莫太山には嶂氣あり。又其水には。蛇毒あり。意ふに晩稻は蛇毒ある。水を飲たるにぞあらむずらん。といひつゝ四下を見かへるに。其頭に老たる松の枝に。最大きなる蛇蛻。三四掛りてありしかば。阿夏は毛骨竦までに。丈夫の言の違ぬを。駭けるのみにて術を知らず。當下悳葊又いふやう。今這蛇毒を解んには。良藥麝香に優

て。事の茲に及びぬる。其佞倆騙兒に異ならねば。已ことを得ず憲斷を。仰ぎまつるにこそとい
ふ。東西同病回憂にて。口狀脗合したりける。左右する程に。兩箇の媒妁兒等が。撲傷平愈し
たりしかば。這歳の冬の終に。信夫の郡司充信は。罪人辛踏悳蓉を。獄舎より牽出させて。且
東西の訴訟兒等と。信夫の里正故老を召よせて。則宣示すらく。醫生辛踏悳蓉の事。云云の
罪あれば。家傳の田圃居宅まで。皆悉く沒官して。宅眷も倶に追放すべき者なり。又西岳東
頤甲乙等は。各齡五十に及びて。色を好みて財貨を擲ち。反て悳蓉に謀られて。恥を恥とし
思はぬは。寔に烏滸の白徒なり。今その奢侈を戒めずは。何をもて後を懲さん。この故に賄銅
各五十貫文をまゐらせて。以後を佗と愼むべし。又兩箇の媒妁兒丙丁等は。倶に利の爲に。
人の女兒を媒妁して、謀られけりと悟りなば。蚤く訴稟すべきに。然はせずして鬪諍に及び
しは。疎忽の至り烏滸ならずや。這回は且宥免す。この後を佗と愼むべし。と事嚴重に掟ら
る。有恁りし程に。阿夏等は。屛居られてありけるに。この日良人悳蓉は。所帶遺なく沒官せ
られて。追放さるべし。と聞えしかば。いよ〳〵駭き且患ひて。事の迫らぬ先にとて。當晩悄
地に腹心の人を賴みて。衣裳調度を沽却すに。其價四五十金を得たりしかば。則是を懷に
して。女兒晩稻と共侶に。行装を整へて。領主の沙汰を俟てをり。有恁而次の日。里正故老
等が來て。領主の下知を傳るに及びて。阿夏は宅をも戸帳をも。皆里正等に相渡して。晩稻を

なきにあらず。先や那里に赴きて。便宜を徴めて生涯の。謀を做さまく欲す。渾家の意いかにぞや。と問へば阿夏は異議もなく。然るべし。と應しかば。悳菴隨即宅眷を將て。觀音寺の城下に赴きつ。津問屋といふ客店に杖を駐めて。相應しき借屋を求るに。去歳は果敢なく逆路に暮て。春正月の初旬になりぬ。折から津問屋の東隣に。間口二丈あまりの借屋の。庭もあり土藏あるを借得て。二月上旬に移徙しつ。この時无四郎の辛踏悳菴は。吾足齋延明と名を改め。阿夏は老苧と呼易られて。良人の醫業を資助たる。是までの諸雜費は。曩に阿夏が陸奥を立去時。沽轉しける衣裳調度の價。四五十金あればなり。斯てぞ悳菴の吾足齋は。療治人並に行れて。觀音寺の城内へも。折々出入する程に。晩稻が美女なるを聞知りて。病もなき少年輩の。丌を見ん爲に吾足齋許。來つゝ湯液を乞ふもありけり。丌が中に佐々木家の權臣なる。多賀與膳政朝の家男。志賀介政賢と喚做したる少佼あり。こも亦晩稻を眷戀して。親に乞ふて娶らまく欲す。父政朝是を聞て。先吾足齋と相識る者をもて。他が素生を問するに。吾足齋延明は。其事情を得て。歡びて答るやう。葢我遠祖は。在昔奥陸郡の主なりける。安倍賴時の氏族にて。金氏より出たり。數世の後信夫郡に移住て。遂に醫生に做りしより。國守大崎氏に從事して。侍醫の員に充られし後俺身に至りて。父祖の家業を零さず。爾るに近會朋輩の讒言にて。罪ならぬ罪を得たりしかば。已ことを得ず身の暇を給はりて。這地の繁昌。佐々木殿の。武

者なし。又白柿も的中す。俺信夫の宿所には。麝香龍脳這那となく。使用餘もありつらんに。這逆路にて爭何はせん。といふを阿夏は聞あへず。其頭に脱落は侍らずかし。往る日宿所を立去るをり。錢になるべき藥種をば。皆行囊に拿籠て。腰に着てもて來にき。麝香も玆になからずや。といひつゝ手蚤く行囊を。解開きつゝ棗形なる藥盒を拿出して。渡すを悪弃受拿て。奇妙々々と嘆賞しつゝ。件の麝香を思ひの隨に。撮拿て晩稻が舌に。幾回歟塗らしつ。猶も咽喉に吹入れて。うち守りて在程に。晩稻は一聲呀と叫びて。水を吐くと二三合。忽地に我に復りて。心地凊爽になりしといへば。阿夏は然こそ。と歡びて。麝香の即效云云。と告るを悪弃推禁めて。有恁る太山は蛇毒のみかは。豺狼も出つべく山豪の害怕なからずや。誘ゆくべし。と急がして。辛くして山を下りて。這宵は山脚の客店に。天を明してぞ猶急ぐ。去向は都て驛路にて。二十日あまりの旅宿をしつゝ。既に京師に近づく程に。有一日悪弃は。阿夏晩稻に譚ずらく。這より京師へ赴きて。兼顯卿に。憑禀さば。恥を知らざる者に似たり。矧京師は戰馬に暴て。王室の卑しかりしより。搢紳達も衣食足らぬは。西の都に巣を易給ふも。尠からずと聞えたり。憑しからぬ故主に身を寓せて。人の胡慮にならんより。近江の觀音寺へゆくこそよかめれ。國守近江判官佐々木高頼主は。武威隣國を威服して。室町殿を補佐し給へば。今觀音寺の城下は。繁昌京浪速に優れり。曩に俺京師に在し時。那藩中の人々に。相識られしも

を飲し者ありけり。其蛇死なず。腹内にあり。患者苦痛に勝ざれども。亦いかにともせん術なく。命危かりし時。白柿を多く切みて。煎じて五六升を用る程に。其人酷く水瀉して。蛇の肛門より降るを見るに。約一寸許に斷離れて。首尾續く者あるとなし。是より補藥を用ると。一七日にして本復したり。と當時人傳に聞しとあり。疾白柿を求め給へ。といふに老苧は歡承て。猛可に人を央ひなどしつ。隣國美濃へ遣して。大垣加納なんどの。白柿を多く買拿て。煎じて晩稻に飲する事。十日あまりに及べども。是も亦勞して功なく。惡瘡彌臭氣に堪ねば。吾足齋疑惑ふて。原來晩稻の惡瘡は。蛇毒にはあらざる歟。と思ふのみにて今はしも。施すべき奇方を知らねば。夫婦齊一旦暮に。神佛に祈るのみ。酷暑に堪ぬ六月の時候。人ありて吾足齋に告るやう。攝津國住吉の下禰宜の家に。無名の惡瘡の妙藥あり。即效百發百中なりと聞にき。醫師なりとて外の藥を。忌給ふべくもあらず。令愛の爲なるに。ゆきて討め給はずや。といひけり。吾足齋是を聞て。其匙盡たるをりなれば。敢亦疑はず。軈老苧に商量して俺みづからゆかんとて。行裝も慌しく。往還五六日の旅宿をしつゝ。住吉に赴きて。件の禰宜の宿所を問ふて。來意を告て。惡瘡の妙藥を求るに。主の禰宜答るやう。いはるゝ義はこゝろ得たれども。开は聞錯給ひしならん。我家にて然る惡瘡の。妙藥を賣にあらず。先祖より傳來したる。奇妙の藥方是あるのみ。然ればとて秘するにあらず。約莫無名の惡瘡の。百藥經

德を景慕しぬるの故に。遠く宅眷を携て。這地に僑居しぬるなり。と實しやかに說誇れば。其人承歡びて。退りて政朝父子に告るに。政朝聞て。爾らんには。先其親を薦擧て。當家の醫官に做して後。咱兒の姻談に及ぶべし。事速には成がたしといひけり。吾足齋阿夏の老苧は件の首尾を傳聞て。時至りぬと歡ぶ程に。這年の夏正月の時候より。晩稻が面部總身に。怪しき瘡多く出來て。其人としも見えわかず。花の枝に毛虫群がり。月の前に雲聚る。毛嬙西施の嬋妍も。變じて黑暗女に做りしに彌增。晩稻を見る者唾して。他癩病ならざりせば。必楊梅瘡なるべしとて。爪彈をせざるはなし。この事蚤く觀音寺の。城內に聞えしかば。多賀の政朝政賢は。倶に驚き呆れ果て。原來彼少女には。癩病の筋ありけんを。猶知らずして娶りなば。必我家を汚さん。怕べし〳〵。と舌を掉ひつ色も戀も。醒て彼議は止にけり。爾程に吾足齋老苧等は。搖錢樹と負みたる。晩稻が不慮の悪瘡に。膽を潰しつ其日より。膏藥煎湯術を盡せども。經驗あるべくもあらざれば。吾足齋は匙を駐めて。阿夏の老苧に咡くやう。俺顧ふに。這回晩稻が。病着は。癩病ならず。黴毒にもあらず。去歲の冬。陸奥より來ぬるを。他蛇毒に中られて。命危ふかりけるに。幸に麝香の功あり。恙もあらず成りしかど。其餘毒猶腹內に在留りて。悪瘡に做れるならん。と思ひにければ始より。多く麝香劑をもてせしかども。今に至りて經驗なし。只這上は。白柿を煎じ用るにしくとなし。俺陸奥に在りし時。謬て小蛇

枸神を求るとの趣き。價百金をもて。買とらんといふ事まで。幾枚敷寫つけて。心利たる者を央ふて。持して枸杞村へ遣しつ。則件の紙牌を。村人の背門柱。或は門前なる松柏の。幹などへ。貼せたりしは。秋七月の時候なるべし。其後八月の中浣に至りて。思ひがけなき三池邨なる。宿六が汲引にて。枸神を得て晩稻の惡瘡。立地に瘥しのみならず。朱之介に再會の歡びを盡したる。无四郎の吾足齋。阿夏の老苧が來歷の。實事は恁地なれども。今朱之介と宿六等に。夫婦の身の上云々。と詳に說示すに及びて。忌べき事は推隱して。愆を飾り人を虐げ。只已のみ賢なる如く。云瞞めたる長談脩話に。朱之介宿六等は。應するのみ聞果て。倶に感嘆したりける。當下吾足齋又いふやう。俺始より枸神の價を。金百兩と定めしは。他人の物を買んとてなり。爾るに今幸に。枸神を珠之介の手より得て。他が爲には義女弟なる。晩稻の惡瘡瘥たれば。便是一家の事なり。何でふ價を論ずべき。況弱き輩に。金多く持せなば。無益の事に使ひ果して。反て其身の害になるべし。然とても。俺其金を惜むにあらず。珠が爲に所緣を求めて。相應しき事あらば。俺百金まれ五十金まれ。其雜費を資ざらんや。先よく這義をこゝろ得てよ。又宿六叟は。阿夏の老苧と舊緣の義をもつて。珠を幾日欸養ふて。料らず案內をせられしかば。其歡びにこゝろばかりの。報ひをせずはあるべからず。といひつゝ老苧に目を注すれば。老苧は早くこゝろ得て。軈納戸に退きつ。一霎時ありて金三分を。紙に裹みて

驗なき者に。狗神一枚を。細末にして用ふれば。響の物に應ずる如く。立地に其瘡愈て。痕だにあらず傚れるなり。只其藥種の得がたきのみ。和殿醫師ならば無禮ながら。枸神は千歳の枸杞の根の。化して狗の形に傚れる物是なり。京浪速なる藥店を。渉獵給はゞありもやせん。非如ありとも高料ならんに。百金ならば猶廉かり。勉て尋ね給へかし。と言叮寧に誨れば。吾足齋は思ひしに似ず。玆に望みを失ふものから。奇方を得たるを切てもの。幸ひなりけり。と思ひかへしつ。主人に謝して退きて。浪速三界蜑崎。堺は勿論。京大津まで。藥店のある限り。漏す隈なく適遶りて。枸神やあると尋るに。元是何等の物なるや。と問復すのみ其名をだも。知りたる者のあるとなければ。吾足齋困果て。只得宿所にかへり來つ。阿夏の老苧晩稻等に事云云と告知らすれば。老苧は額を病するのみ。計の出る所を知らず。當下吾足齋又いふやう。俺嘗聞ける事あり。這里より遠程からぬ。一村落に。枸杞村と喚做すあり。其一村は皆杞杞にて。芟れども盡きず。彌生に。生茂るとぞいふなる。意ふに件の枸杞村には。枸神をもてる莊客の。是なしとすべからず。縱令所藏の者なくとも。多かる枸杞の根を穿らば。枸神を得ぬるともやあらん。なれども俺は那村に。一箇も相識あるとなし。箇樣々々に計ひて。利に誘はゞ我望を。遂るともあらむずらん。といふを老苧はうち聞て。心許なき事ながら。手を空くして在んより。左にも右にも計ひ給へと。いはれて吾足齋再議に及ばず。紙を剪牌に爲りて。

ける。怨を隠して色にも出さず。朝には吾足齋の敎を受て。藥の調合に預り。夕には母親老苧を資けて。薪炊の事に代り。萬事精悍に擧動ひける。底意を曉らぬ吾足齋。阿夏の老苧は愛歡びて。好食客を得たりとて。最愚しく思ひけり。爾程に吾足齋延明は。曩に多賀志賀介の。媚談の藉を曳れしに。晩稻の惡瘡の故をもて。その事聞えずなりけるを。遺憾く思ひしかば。病架の爲に招れて。觀音寺の城内へ赴く毎に。人に對ひて說誇る。晩稻の惡瘡平愈の顚末。拘神の即功云云。と其精妙をいはざるとなく。拙女晩稻が病着は。原是蛇毒に中られて。無名の瘡の出來しのみ。黴癩にはあらざりしを。花に毛虫の世の醜女等が。薄情や妬みこゝろもて。あらぬ事さへ云云。と言徇されしは一霎時にて。雨夜の月も霽るゝ時あり。今こそ人の疑ひはおのづから解たらめ。うるさき事にて候ひきといふ。自問自答を笑ふもあり。又奇を好む壯佼等は。語接ぎいひもて傳へて。この事隈なく聞えしかば。多賀志賀介政賢は。父政朝に如此如此。と告て晩稻を娶らまくす。然れども政朝いまだ許さず。先吾足齋に對面して。屢問試みなば。事の虚實も彼人の。心術も知らるべし。急ぐとかは。と推禁めて。次の日病痾に假托て。吾足齋を招きしかば。吾足齋は時來にけり。と心悄地に歡びて。走りて多賀の宿所にゆきて。主劑を調進したりしより。休藥の後々まで。日毎に政朝を訪はざるとなく。只顧に媚諂ひて。陪堂の如くになりにけり。不題復說末朱之介は。思はずも吾足齋の。宿所に光陰を過す程に。

もて來にければ。吾足齋受拿て。傍にありける黑漆盆に。恭しくうち載て。是を宿六に薦めていふやう。叟よこは些少ながら。憶はず骨を折せたる。俺歡びの折乾なり。いかで笑納あれかし。といはれて呆るゝ宿六より。朱之介は立腹を。壓難つゝ默然たる。おなじ思ひをいへばえに。岩が根松に集る鳥の。宿巢にあらぬ宿六は。噫思ひかけもなき。御賜よ。とばかりに。興さへ酒の醉醒て。肚裏に思ふやう。枸神とやらんを朱之介に。賣せなば其價の。一割十兩ものいはずに。押し促織と今までも。胸算盤の玉翦て。這里の主人の吝嗇なる。朱之介の乾父面して。俺等を阿夏の舊識なりとて。熟善轉しに甚ぞや。恁許の金出さるゝと歟。と胸に恨の數數を。鎭めて只得澁々に。件の金を受戴さて。こはうち閣し給はずに。御心使に預り侍り。といひつゝ軈懷へ。楚と挾めて盃を。辭ふてかへり去らまくす。這時既に日の暮たれば。吾足齋老苧等は。敢又強て留めず。いはるゝ隨に盃を。納めて迭の辭誼口誼。料らざりける珍客なるに。不用意にして然ばかりの。欵待もせぬ鈍ましさよ。挑燈をやまゐらすべき。といふを宿六聞あへず。否。那里の窓を襟せ。十七日の月出て。晝の如くに明かるに。挑燈を何にせん。珠刀禰話說もあるべきに。暇ある折來給ひね。娘さま造作になり侍り。と告別しつ出てゆくを。阿夏の老苧と朱之介は。應をしつゝ遽しく。紙燭を秉て共侶に。玄關までぞ送りける。是よりして末朱之介は。吾足齋の宿所に歇居程に。枸神の價百金を。得遞與されずなりに

は只利の爲にて。奴家は義女弟なり。と知られし故にあらざれば。恩には侍らず只利のみ。といはせも果ず朱之介は。晩稻を佶と疾視て。少女に似げなき強情多辯。俺身今こそ零落たれ。今業平と世に謠れて。思ひを被し少女子に。背見せられし例はなし。意ふに汝は。多賀政賢の。姻談を聞知りて。襟に附にぞあらンずらむ。と詰るを聞かず立まくしぬる。晩稻を遣らじと扳留るを。噫やとばかり紿尺もて。打ど拂へど女子の甲斐なさ。困じてせん術なき折から。覺然として庭門に。蹄形木履の音聞えしかば。朱之介は母親の。かへりにけり。と見かへりて。身を閃めかして玄關に。出て藥を切みてをり。當下晩稻は亂れたる。鬢搔揚て。雨後の水。澄ぬてゝろを然氣なく。母を迎へて小土瓶なる。茶を汲取て。薦などする程に吾足齋は。笑しげに。外面より還り來て。老苧を納戸へ招きよせて。囁くと半晌許。其後中の間に立出て。朱之介を召ていふやう。珠よ聞ね。好事あり。俺今日城内なる。多賀殿へ參りしに。政朝主譚るらく。明日は君侯馬見所に出まして。當藩邸なる少年輩の。武藝の勝負二十番を。御覽あるべしと仰らる。是に因て兵頭。高嶋石見介好純が請稟すよしあり。其所以は好純の宿所に。武者修行の兩少年逗留して在り。共に武藝の達者にて。好純と舊緣是あり。いかで明日の擊劍に。召加えらるべうもや。と只管願ひ稟すにより。君侯隨即御許容ありて。件の兩箇の少年等を。其數に加えらる。聞くに和老の宿所にも。乾兒末朱之介と歟喚做す壯佼の。逗留して在るにあらず

晩稲の容色世に優れて。多く得がたしと見るまでに。舊病發りて巳のみ。狂ふ猿馬を鎮め得ず。二親の目をしのび〳〵に。調戯けき言葉を吐ちらし。長き袂を曳く毎に。晩稲は酷くうち腹立て。其手を拂ふて物だにいはず。顔赧やかに走退く。現に處女の趣きなきは。恁こそあらめ。と思ひ侮る。朱之介は懲ずまに。猶も便宜を窺ふ程に。有一日吾足齋は。朝より出ていまだかへらず。阿夏の老苧はいぬる頃。津問屋より物贈られし。歡びをいはんとて。背門より出てゆきしかば。朱之介は折を得て。中の間に衣縫居たる。晩稲を矢庭に掖捉へて。口說を晩稲は吐嗟と叫びて。力涯に衝仆しつ。貌を正くしていふやう。噫無慙やな。調戯も。人にこそよらめ。一度ならず二度ならず。猥がはしく見え給ふは。奴家はおん身の女弟なるを。忘れ給ふ歟烏滸なり。と罵る間に朱之介は。身を起しつゝ冷笑ひて。さないひそ。汝も烏滸なり。俺は母こそ骨肉なれ。阿爺は原是他人なり。況汝は螟蛉女にて。女弟にあらず。兄にもあらず。非除緣しに繫れて。兄と呼れ妹と喚とも。養嗣夫妻といふとは。世間に間是あり。今さら何ぞ禁忌を繰んや。矧又汝の惡瘡。百藥驗なかりしに。枸神を贈れる俺なくば。汝は生ながら蛐蛆に化りて。腐滅に死ぬべからん。恁れば俺は命の親なり。其大恩を思はずに。最强面きは甚麼にぞや。と譴るを晩稲は聞あへず。开はいはるゝとながら。養嗣夫妻も二親の。隨意ならば推辭に由なし。そを護らずに妹と伕の。約束せんは是不義なり。又枸神を贈られし。はじめ

大祿をもて御家臣に。なさるべうもやと思へばなり。珠は病後の儘にして。今に其月額を。剃ざりしこそ幸なれ。今日結髪をしぬる折。額髪を剃殘して。元の大童に成るとても。優貌なれば相應しくて。見て怪む者なかるべし。疾錢湯に浴て來よ。身裝して得させんず。なれども一個の不足あり。俺は醫師の事なれば。珠に貸すべき袴なし。老苧隣家へ適一適て。己の時可の袴あらば。借もて來て明日の間に合せよ。噫閙しや。と榮利の爲に我から單使るゝ。現に小人の時を得貌に。果敢なく憑む富貴の宿。筧の水にあらねども。是是僥倖を。被てぞ願ふ其が中に。晩稻は歡ぶ氣色なく。納戶に在りて出ても來ず。只朱之介が無禮なるを。憎しとのみぞ呟きける。是より下は衆少年の撃劍の段なれども。楮數玆に涯りあれば。作者の自由になしがたかり。又編を續ぎ卷を改めて。後板に鐫著すべし。蓋前文に旣に云。彼武者修行の兩少年は是何人なるぞや。看官早く猜しけん。いはでもしるき大江杜四郎成勝。峯張來六郎通能等が。武名を觀音城内に。揚ぬる事の光景を。猶詳に知らまく欲さば。亦是後の一卷に。編次るを俟ねかし。

新局玉石童子訓卷之五下册　終

や。年は幾に成るやらん。武藝の本事あるならば。今より君侯に聞え上て。明日の隊に召入れてん。勿論衣裳武器などは。志賀介の副衣あれば。そを貸て間に合せん。この義甚麼と問れしかば。巳答稟すやう。そは忝き造化にこそ候なれ。拙郎末朱之介は。今玆二八の弱輩にて。武藝は人並にぞ候はん。然るを明日の擊劍に。召入られ候はゞ。實にこよなき幸にて。第一の修行になるべし。宜く願ひ奉る。と當坐の應に政朝主も。共に本意ある面色にて。然らば明日未明より。和老其朱之介を。倶して俺宿所に來給へ。餘談は其折々。と頻りにいそがし立給へば。暇まうしつ退出て。走りてかへり來にけるなり。思ひがけなき幸なれども。只心許なきは。和郎が武藝いかなるべき。俺其本事を知らざれば。胸安からざる所あり。といふを朱之介聞あへず。忻然と含笑て。腕を扼りて答るやう。爹爹其義は心易かれ。俺身十一二歲にして。福富の家に在りし時。鷲津爪作。日高景市等と。謀合しつ密密に。弓馬劍法。槍法白打。自得せずといふことなし。就中射藝は。百發百中の手段あり。こゝをもて。曩に大和に在りし時。一箭に狒々を射て仆して。斧柄の必死を救ひにき。明日の敵手は孰にもあれ。何等の害怕候べき。と威勢猛く說誇れば。老苧も聞つゝ呆るゝまでに。歡び涯りなかりける。當下吾足齋又いふやう。俺僂見るに。珠は今玆二十歲なる歟。二十一歟二ならんを。多賀主へは實を告ず。十六歲に候。といひしは其身少年にて。武藝拔萃ならんには。國守の賞感入に增て。

ならんと思ふべし。然るを今版第四十五回に至りて。頭陀幻泡といふ法師出たり。この幻泡は大夫五入道にあらず。おのづから是別人なるを。看官心つきなくて。訝り思ふもありぬべし。是等の疑惑は猶編を重て。数十回の後々に至らざれば。必了解しかたかるべし。都て長編なる物の本は。作者の意匠も深長にて。前より知らるゝ者にあらず。其前より知らるゝは。初心の短筆に多くあり。和漢の兀籍是より出たり。そをあげつらふにあらねども。ひはで巳んはさすがなるべからん。思ふに烏滸のすさみにぞありける。

弘化二年乙巳皐月之吉

曲亭癡老識

新局玉石童子訓第三版附言

本編第三集。第三十回に末朱之介が住吉なる岸松屋を尋てゆく折。其路傍なる尻掛酒肆にて。十三屋九四郎に邂逅する段に。他が年歳を四十あまりなるべしとあるは。當時朱之介がうち見たる推量をもていへるなり。九四郎實は是時三十歳許なるべし。何とならば。後版第三十二回に至りて。九四郎の女兄臆祿は。年二十五歳にて身故りぬ。是年其子大江四郎は甫の九歳なり。是より亦八稔を歴て。杜四郎十六歳になりし時。九四郎は朱之介に相逢ふて。已が宿所に留め在たり。この時まで臆祿猶世に在らば。正に三十二歳なるべし。九四郎は臆祿の弟なれば。三十歳許ならんを。人はうち見に。其面影の老たるあり。弱きもなきにあらねば。朱之介が謬認て。四十あまりなるべし。と思ひしなり。第三十二回以下に。九四郎の年齢を。幾歳といふ文なければ。看官思惑はん歟とて。作者みづから評注を。聊略記しぬるなり。又只この事のみならず。本編三集の端像に。幻泡法師といふ者見えたり。其像賛に。ふり捨て出にし里を見かへれば。あしたのけぶり軒のまつ風。といふ歌あれば。看官なべてこの幻泡は。福富大夫五

和漢の稗史物の本の作者。多く古人の姓名に嫁して。一部の小説を作設るは何ぞや。蓋編中の人物世に聞えて。婦幼も耳目に克熟たる。將相勇士の類にあらざれば。其一部の世界不立。看官も亦據あらざれば。飽ぬ心地すなればなり。是をもて事を故事に借て。義を勸懲に作せるのみ。この故に毛氏が琵琶記の評注に。蔡邕を評すらく。後漢の蔡邕にこの事なし。おのづから是同名異人。なりと見るべしといへるは。其言老實に過ぎたるに似たれども。蒙昧の爲に解んには。實に是致言といはまじ。然るを克思はざる者。其正史に合ざると。歳月の錯へるを詰りて。論するもあるは笑ふべし。稗説傳奇架空の言。只情態を寫し得て。且善を勸め惡を懲すを。作者の本意と做せるなり。或は是を無用の技とし。或は是を有用の物とす。無用の中に有用あり。有用の中に無用なきにあらず。好憎をもて褒貶せば。私論にして廣からず。取捨は人々の意衷にあるべし。

曲亭老人重識

新局玉石童子訓第三版　自四十一回至四十五回　總目錄

介を熟々相るに。最優形なる少年なれば。憶はず眉をうち顰て。朱之介に向ひてひふやう。和殿も豫聞れにけん。今日の試撃は晴技にて。國守高頼みづから御覽せらる。こゝをもて當藩中なる。武勇の少年。四十名を擇出して。弓馬撃劍槍棒白打。各得たる所をもて。勝負を定めらる。和殿は員の外にして。件の隊にあらねども。然ばかりの本事なくは。咱等汲引を致しがたかり。實に試撃を願るゝや。と問れて朱之介頭を擡げて。然候。武藝は好所にて。年八九の時よりして。習ひ得て候へども。性鈍ければ人並にて。今猶修行の最中に侍り。亓が中に弓馬のみ。人に讓るべくも候はず。と雄々しく答る卑下傲慢。庸人ならず聞えしかば。政朝頷きて。それでこそ安堵たれ。是なる拙郎志賀介も。今日の撰擇に入れられたれば。試撃の準備進退は。志賀介に問ねかし。と諭しつ又吾足齋にうち向ひて。和老は事の果るまで。終日こゝに在んは要なし。宿所に退りて吉左右を。俟こそ便宜なるべけれ。といはれて吾足齋歡び承て。いかで宜しく〳〵。と應をすれば朱之介も。主人父子にうち向ひて。口誼を演る亓が程に。兩個の若黨茶をもて來て。這客親子に薦めつゝ。更に主にうち向ひて。准備宜く候。と告るを政朝うち聞て。しからば出仕をいそがんず。志賀介も疾立ね。といそがしつ吾足齋等に。辭して父子共侶に。そが儘奥に退りしかば。吾足齋は朱之介を。留めて立まくする程に。一霎時叩きこゝろ得させて。宿所へとてぞ罷出ける。有恁し程に。志賀介政賢は。遽しく奥に退りて。父

新局玉石童子訓卷六之十一

東都　曲亭主人口授編次

第四十一回　觀音寺の城に衆少年武藝を呈す　弓馬槍棒主僕朱之介を懲す

復說辛踏吾足齋延明は。次の日の早旦より。末朱之介を將て。觀音寺の城內なる。多賀典膳政朝の宿所に赴く程に。朱之介の身裝の。早に整ひかたかりしを。袴は昨日阿夏の老苧が。隣家より借もて來つ。時服と腰刀は。吾足齋が副衣副刀を取出て。被せもしつ佩せもして。頭顱は額髮を剃殘して。十六七なる少年の。像くに作り做しけるに。朱之介は猶𢈘ずやありけん。悄地に母の鏡台なる。白粉を取出して。薄化粧さへしたりしかば。心術こそ奸惡なれ。うち見は世に多からぬ。美少年なりけり。と謬思ふもあるなるべし。爾程に吾足齋は。朱之介を相倶して。政朝許來にければ。政朝則客の間に召入れて。其子志賀介政賢と共侶に。出て朱之介に對面す。當下吾足齋は。遽しく額を衝て。昨日御內意を承まつりし。愚息末朱之介晴賢を。召倶してこそ候なれ。といひも果ぬに朱之介は。膝行頓首したりける。こゝに迨りて政朝は。朱之

の醒たるのみ。是我家の幸なるかな。といひつゝ外面瞻仰て。噫漫なり。時もや移らん。疾々。といそがして。親子衣裳を改めつゝ。供の若黨蒼頭に。准備の武器を多く持せて。朱之介を相倶しつ。試撃の場にぞいそぎける。然ば這多賀典膳政朝は。其妻三稔前に世を去りて。志賀介の外に兒子なし。但年三十有餘なる妾あるのみ。この故に新婦を欲して。其子志賀介の爲に。をさ〳〵婚縁を求めしなるべし。話分兩頭。爾程に。大江杜四郎成勝。峯張桒六郎通能は。京師の旅宿を立去りて。本月の上旬。近江なる觀音寺の。城下に來にけるに。佐々木家の兵頭。高嶋石見介好純は。桒六の父なりける。峯張九四藏通世が爲には。兵法七書の弟子なりしに。通世が世を去りし後は。胡越の似くなりもて行て。相訪ふともなきものから。四郎桒六も豫より。其名ばかりは聞知りたれば。先や高嶋氏を訪ふて。彼人の意見に就かば。萬事に便宜なるべしとて。共に城内に找み入て。甲乙となく人に問ふて。石見介の宿所に來つ。姓名を告來意を演て。對面を請しかば。好純も亦豫より。彼子あり彼孫ありしを。知らざるにあらざれば。軈迎入れて對面す。看茶の禮事畢りて。杜四郎桒六主僕は。宿願の事武者修行の事。且當家の武功を景慕の故に。幸に舊縁ある。主人の資助を借んとて。推參しける事情を。演說叮寧なりければ。石見介歡承て。そはよくこそ訪れたれ。我身遊倅なりし時。難波津に游學して。峯張翁の敎を受しを。思へば今は昔に做りぬ。其折に和殿等は。尙幼稚かりしかば。迭に面善

に向ひて呼くやう。大人はいかに思食けん。彼末朱之介が皎皎しき。女子の愛べき艶冶郎にて言語應答の浮薄なる。武藝に勝れし者に似ず。然るを今慭に。他を試撃に召倶し給はゞ。我們さへに面目を。失ふ事もや候はん。この義御深念候歟と。問ば政朝沈吟じて。爾なり我も亦。そを思はぬにあらねども。人はうち見によらぬ者にて。昔の牛若御曹司。楠正行新田義治。皆是美少年にして。武藝は千騎萬卒に。敵するに足しにあらずや。他其類ならずとも。御用に違べき者ならば。薦擧て當家に留めん。若又不覺を取事ありとも。我力の及所にあらず。其折には追退けて。當家譜第の壯佼等の。武藝を都鄙に知せんのみ。加旃他が事は。昨日既に君侯に。聞え上たりけるに。今さらに省きがたかり。然ばとて。我最員のこゝろもて。吹擧しぬるにあらざるを。知る人は知るべからん。然のみ阽むとかは。と諭せば志賀介再議に及ばず。御寔に理りなり。是に就てもいぬる頃。吾足齋の女兒晩稻とやらんを。娶まく思ひしは。心恥しき惑ひなりき。晩稻が惡瘡愈たりとも。今其親と兄とを見て。思へば愛べき少女にあらず。この義は御心安かりてん。と陪話れば政朝含笑て。然ばとよ其事なれ。我始より那婚姻を。許さゞりしは所以ある事にて。晩稻が惡瘡愈たり。と聞えし後に吾足齋を。召近つけて試けるに。只是浮薄の小人なり。遮莫其子朱之介は。吾足の實子にあらず。乾兒なりと歟いふめれば。親には似ざる者ならん。と思ひしは空負にて。我も亦疎忽の失。是なしとすべからず。吾郎の惑

を談し武を講ずるに。其才大江峯張の。右に出るはなかりける。左右する程に。國守の命あり。當城内なる壯俠等の。武藝を御覽あるべしとて。豫より下知せられしかば。其撰擇に充られたる。少年等皆勇立て。稽古に暇なかりしを。四郎口六は羨みて。石見介に請ふよしあり。好純も亦這少年等の。倣す事あらん。と思ひしかば。軈て主君に聞え上て。既に免許を得たりしより。當日の准備武器身甲。衣裳兵鞋に至るまで。主僕盤纏に買しからねば。思ひの隨に相整へて。其日を遲しと俟たりける。却説是年の秋九月十五日。當國守佐々木六角彈正大弼源高賴主。（高賴或は定頼に作るはじめ左衛門尉なりしかば時の人相稱て近江の判官さもいふなるべし。）軍旅の暇あるをもて。城内なる少年等の。武藝を撿覽すべしとて。本日巳の比及より。儲の架屋に着坐あり。其事の爲體。縱六十間横九間なる。走馬埒の中央に。五間四面の架屋あり。俗に云馬見所即是なり。四目結の花號染做たる。荏土紫の幔幕を引旋らして。處々を括揚たる。裡面には金屛二三雙建連て。眞中に儲の牀几あり。高賴則立烏帽子を戴きて。縹纈綢の時服に。長袴を穿下しつ。小刀を腰にして。手に中啓の扇を把つ。件の牀几に尻うち懸たる。左右には文武の長臣二十餘名。多賀典膳政朝。高嶋石見介好純を首にて。共に朝服の袖を連ねて。齊々整々と侍坐したる。後方には近習の輩。童扈從等。或は主君の太刀を執り。或は唾壺鼻紙台を相捧げて。謹愼仕へずといふ者なし。この他架屋の左右には。鳥羽の鎗二十條。弓矢三拾張を飾立て。其隊の頭人。隊兵等と共に這里に

ならねども。楽六刀禰の面影は。故翁によく肖たり。矧又大江主の尊大人には。昔我一面の好あり。爾後奶々。不幸の事。風の便に聞えしかども。其比我も憶りなく。失粘失特の憂あり。爾後家督を承嗣ては。紈袴に暇あるとなく。這里より浪華へ路の程。三宿なれば。往還自由ならで。年來疎濶にうち過しに。思ひかけなき兩才子に。訪れぬるこそ歡びなれ。外に宿りを求んより。幾までも這里に居ませよ。させる欵待はあらずとも。當藩中には忠義の士。武藝修練の壯佼の。なきにしもあらざれば。異日面會し給ふとも。損友にはあらざるべし。且はや甘ぎ給へとて。急に家の老僕を召て。乾淨たる小室へ。件の主僕を誘引せて。丌里を起臥の處と定め。且湯浴させ。夕饌を薦めたる。欵待特に淺からず。爾後主人の妻も出て。この兩少年に對面しけり。聞くに石見介好純に獨子あり。高嶋硯吉郎玄純と喚做して。今茲は十四五歳なるべし。尙遊倅なりければ。當春主君に願ひ稟しつ。所縁に就きて周防なる。山口へ遣して。遊學させて彼地に在り。今は對面由なけれども。好純の侄なりける。長橋倭太郎勢泰。及兵法の弟子なりける。象船算彌知量と喚做して。共に十七八歳なる。義勇の兩少年ありけり。國守の近習なりければ。勤仕の暇ある毎に。朝となく夕となく。高嶋の宿所に詣來て。師説を受ざる日のなければ。大江峰張兩主僕に。一番言語を交へしより。迭に其才其智に愛て。捨がたき思ひあり。只是のみにあらずして。好純の弟子も。亦弟子ならざるも。親しきは聚ひ來て。文

雄を爭ふ者二十番。記錄の祐筆。其甲乙を寫しつけて。主君に呈閲したりける。是よりして又。走馬の遲速を試られ。更に鬪射の勝負あり。丌が中に。弓矢の故實に勝れたる者。共に笠掛十番を射て。君の撿覽にぞ備へける。然ば試撃の少年等。この日を晴と打扮たる。戎衣勒肚腰刀。衣裳手甲脛衣に至るまで。孰も錦の上に花を添て。疎なるはなきものから。負たる者は色を失ひ。勝たる者は意氣洋々と。式禮してぞ退きける。既にして事果て。高賴主は。件の少年等の。武藝の甲乙を閱し給ふに。就中多賀典膳政朝の獨子なる。志賀介政賢。幷に高嶋石見介好純の侄なりける。長橋倭太郞勢泰。及其弟子。象船算彌知量等は。試撃の本事拔萃にて。射藝も亦人に讓らず。後を取ると絕てなければ。高賴感悅大かたならず。軈て架屋に召よせて。譽て當坐の纒頭物に。有名の刀各一口を。被けさせ給ひしかば。政賢勢泰知量等は。時の面目身にあまりて。共に君恩を拜しまつりしを。見る者聞く者嘆賞して。羨まざるはなかりけり。當下典膳石見介は。倶に席を降り主君を拜して。政賢勢泰知量等の。爲に恩賜の歡びを。稟果て又いふやう。昨日も聞えまつりし如く。浮浪武者修行の三少年の。武藝を御覽あるべうもや。既に今朝より召倶して。東西なる集會所に在り。臣政朝に因て。今日の試撃を願ふ者は。當城外なる醫師にて候。吾足齋延明の乾兒と聞えし。末朱之介晴賢。及臣好純に舊緣の兩少年。大江杜四郎成勝。峰張楽六郎通能等。即是なり。いかに計ひ候はんや。と言語齊しく請稟せば。

在り。架屋の東西十四五丈にして。試撃に召るゝ少年等の。集會所二箇所あり。西の方に二十名。東の方に二十名。各介副の老兵あり。東西架屋の四方には。幕串建て幔幕を曳繞らし。裡面には細縁の薄席薦。四五十枚布做たる外面には。究竟なる良馬四十餘頭。磨立たる鞍鐙して。各兩個の鑣奴等が。絆を執りてぞ立りける。又只是等のみならで。這頭なる左右の小堤に。袖搨の竹牆を締連ねて。西の方に安土あり。警固の走卒二百名。各布袴の稜高く結みて。藤柄の兩刀を跨へたる。手に赤樫の捍棒を。處々に衝立々々。もて非常に備らる。是日試撃の進退を奉りぬる頭人四五名。各騎馬にて。東西に別れて立り。約莫試撃の少年等を。找る時は大鼓を鳴し。退くには銅鑼をもてす。配隊等閑ならざりける。折から秋の季なれば。馬場の左右なる長小堤に。殘菊這那里に咲亂れたる。白きあり。黄なるあり。況松栢の蒼然たる。獨楓の折を得貌に。眞紅なるあり。黄黑も交れり。鳥は梢躱れて。聲外に聞え。馬は嘶立て乘を俟めり。この日は朝より天よく晴て。風さへ枝をならさねは。馬蹄の黄土も多く得起ず。其方ざまの人々は。各勝を祈らぬはなく。共に東西なる集會所に在り。この他試撃の少年等の。伴當奴隷夫役等まで。各其主に引添ふて。咸東西なる幕の内外に。集合て混雜したりける。有恁而この朝。辰の時候より試撃創りて。東西なる少年等。豫より定められたる。一番二番の次第を紊さず。蒐大鼓に從ふて。東西齋しく出て來つ。或は劍法槍棒白打。迭に得たる所をもて。雖

桃紅なる。星眼清く鼻高く。筋骨の逞しげなる。昔筑紫の八郎主に。及ぶまでにあらずとも。必覚ある者ならん。と衆人固唾を飲ぬはなし。登下朱之介晴賢は。敵手の姓名記憶ある。彼十三屋九四郎の。弟なりしと豫聞く。峰張楽六なりければ。且驚き且怪みて。心に十二分の鬼胎あり。他いかにして今日の試撃に。召入られたるやらん。と思ふものから毫も撓まず。素より無敵の豪奸なれば。肚裡に又思ふやう。往る夏の夜。彼奴の為に。追逼られて。彼財嚢さへ。採復されしは所以ある事にて。其折我身に寸鐵なく。且牢獄疲労にて。膂力衰へたればなり。先度の遺恨を復さんと。只この一挙にこそあれ。と尋思をしつゝいよ〳〵騒がず。楽六も亦朱之介の。姓名を今聞しより。訝りながら其面影を。見れば果して其人なり。今日の敵手は多からんに。彼奴に逢こそ幸ひなれ。思ひの随に突伏て。時宜に依らば往る夜の。一百九十五金の事も。責問でやは已べき。と思へば勇気十倍して。既に栰むる馬の脚掻に。鑣児の音も鈴々。と臨機應變便宜を料る。智あり忠あり遠慮ある。勇士の心と表裏なる。朱之介も馬を栰めて。東西齊しく。架屋に向ひて。馬上の式禮形の如く。両掯打れて馳違はする。二馬の駿足目覚しく。駈を乗る者両三遍。程よく両敵相對ひて。聲を合せて衝出す。槍の梢頭は電光石火の。閃めくに異ならず。将この槍は眞物にあらで。梢頭には小毬の像き。括りたる布の圓嚢あり。嚢の内中には溢るゝまでに。蛤粉を多く籠たれば。衝るゝ者は顯然と。その迹遺らざるはなし

高頼聞つゝ點頭て。現然者もありけるを。事に紛れて忘れたり。遮莫我家の少年等の。試撃は既に事果たるに。茲より敵手を出すは要なし。其少年等を相番せて。弓馬槍法を一覧せん。約莫兩軍相逢ふ時。遠さは矢を射出して。敵の一陣を亂すべく。近きは必槍を入れて。突頽す事勿論なり。然ば今の戰場に。士卒の器械は弓矢と槍のみ。是に勝者何歟あらん。この意を其少年等に。得させて准備を急ぐべし。この餘の事は箇樣々々。如此々々に致すべしとて。言語急迫しく吩咐給へば。政朝好純承りて。猶も架屋に侍りたる。志賀介と倭太郎等に。御意の趣云云。と示して准備を急がすれば。志賀介と倭太郎は。心得果て東西なる。集會所へ走去りけり。是よりの後時を移さず。准備整ひぬ。と聞えしかば。進退使の老兵二騎。馬を東西に乘駐て。東の少年末晴賢。西なる少年峰張通能。出て勝負を決せずや。と相呼はりづ共侶に扇を抗て指招けば。早打鳴す寬大鼓の。鼕々たる高音と共に。東西齊一馬を桟むる。末峰張がこの日の打扮。正に是一對にて。黒革縅の身甲に。元涅腸綿袿に玄囉紗の戰袍。元青緞の加褶袴を穿下して。頭には裏銀なる。戰笠を戴きたる。腰に兩刀を跨做して。手甲脛衣も黒さを要とす。馬さへ純黒の逸物にて。東西俱に腰靮なる。手には各一條の。習學槍を挾みて。馬を倏々と桟めたる一箇は。是白面の美少年。臥蠶の眉丹花の唇。女子にして見まほしき。昔鞍馬の御曹司も。かくやと思ふ可なるに。一箇は亦問でもしるき。勇士の蘖。威風凜然。面の色淺

兵二騎。馬を東西に乘出して。扇を啓き指招きつゝ。東の少年末朱之介晴賢。西なる少年大江杜四郎成勝。疾疾と。喚れば。成勝晴賢阿と答て。東西齊しく馬を棧る。打扮前と同じからず。笠と腰刀を除くの外。戎裝衣裳兩敵共に。咸淡官綠ならぬはなく。背に白羽の箭を駝做して。左手には握太なる。重籐の弓を携へて。桃花の肥て逞しき。三歲駒馬に雲珠鞍置せて。韁寛に乘做したる。兩敵共に一對の。美少年とは見ゆるものから。大江杜四郎成勝は。骨法朱之介に立優り。其面影の花やぎて。最美しきのみならず。威風凛々たるも。凄じからず。譬ば末朱之介は。其眉目剪綵に似たり。美しけれども天然にあらず。又大江杜四郎は。容止の馨やかなる。雪中なる梅花の如く。風に春知る櫻に似たり。是なん牛若御曹司の。後身ともいふべけれどて。心ある者は評しける。閒話休題。爾程に朱之介晴賢は。既に心に計りし如く。這回弓箭の勝負には。柴六奴を破滅に傳て。先度の怨を復さんず。と思ひしは虚憑にて。殊人なれば本意ならねども。往る夏十三屋の店前にて。竊聞しける夜其名を知る。杜四郎成勝にて。指敵にあらねども。彼奴も寃家の半隻なり。允すものかは。と思誇りし面色なるを。四郎成勝遙に見て。毫も擬議せず馬に拍れ。驀地に馳出れば。朱之介も後れじとて。程よき地方に馳よせたり。這回は騎馬の的弓にて。兩敵三箭と定められ。纔に二寸の金的を。安土の邊に掛られたり。然は末大江の兩少年は。箭を拔出し馬を飛して。箭程を測りて瞟と射る。共に覺の手煅煉にあな

この故に末峰張の衣裳も馬も。東西都て。黒きを着用せられたり。間話休題。爾程に晴賢通能は。威力を出し修錬を盡して。挑戰ふ者半晌許。劣らず優ず見ゆる兀自。朱之介は自得の藝術。修錬の上にも透間あり。又柰六は師傳の槍法。藍より出て藍より青き。一人當千なりければ。晴賢竟に敵し得ず。這里を衝れ那里を突れて。黒き衣裳も馬さへに。只雪の日の案山子の像く。總て眞白になりにけり。かくてぞ朱之介晴賢は。腕亂れ眼眩みて。吐嗟自今馬上より。衝落さるべう見えしかば。退進使の老兵扇を抗て。やよや兩少年手を止めよ。勝負は既に分明なり。と喚はる聲と共侶に。打出す銅鑼の響きに。柰六は自由を得ず。今一手にて朱之介奴を。衝落すべかりしに。と思へばさらに不樂しげに。そが儘馬を乘退れば。朱之介は是幸。と一霎時馬上に喘を止めて。進退使にうち向ひて。嚮にも多賀主に稟せし如く。在下槍法は人並のみ。本事は只是弓箭にて。百發百中の手段あり。いかで這次の試撃には。射藝を試給へかし。と聲振絞りて乞求れば。進退使微笑て。开は左も右もの事なるべし。且退きて休息あれ。といふに柰六も會釋しつ。軈て東西に別れつゝ。集會所へ退く折。柰六は架屋の這方にて。下馬して笠さへ脫捨て。國守の面前を過りゆく。其爲体禮ありとて。譽ぬ者なんなかりける。是よりして架屋には。君臣件の兩少年の。武藝を云云と批評して。倶に笑局に入日刺す。景は短き秋の天。夫鰍申鰍鎬々。と遠き山院の鯨音と。倶に亦復打鳴す。莵大鼓に從ふて。進退使の老

雁を押えて。軈て架屋へもて参りて。君侯に見せ奉るに。朱之介が射たりし雁は。腹より背へ射串れたれば。鮮血に塗れて既に死したり。又杜四郎が射たる雁は。隻翅を縫れて身を傷らねば。逃まく欲する勢あり。高頼是等を得と見て。感悦特に淺からず。且いへらく。成勝晴賢兩少年の。射藝は多く得がたけれども。生は難くして死は易かり。這回も成勝なるべし。先この旨を傳へよ。と仰に進退使こゝろ得て。出て件の兩少年に。御意云云と宣示せば。朱之介聞あへず。其義御諚で候とも。已等は感心しがたし。何とならば。軍陣に敵を射る者。其箭彼身を傷らずして。鎧の袖を縫ふたりとて。是を大功といはれんや。且翔鳥は殺さぬも猶易かり。兩敵東西に馳違ふ。亂軍の中にして。指す敵を射て隊すは。鴻鴈飛鳥の類にあらず。いかで目今成勝と。射騎の勝負を試み給へ。非如彼箭に身を傷られて。死するとも怨なし。いかでいかで。と乞求むれば。進退使已ことを得ず。晴賢が稟す所。箇樣々々。と聞え上れば。高頼主苦笑ひして。扨も末奴が口の強さよ。しかりとも今日の試撃は。人を殺すべき爲にあらず。然ば鏃を抜去りて。箇樣々々に計ひね。杜四郎と今一度。射騎の勝負を。決するもよかんなん。準備をせよ。と急し給へば。進退使領衝承て。かゝるべしとは知らず候へども。鏃なき箭も豫より聊準備仕りぬ。と應て軈て出て來つ。末と大江の兩少年に。再度の御諚云々。と言詞急迫しく宣示しつ。大江生も馬上の闘射を。願はるゝ歟いかにぞや。と問れて杜四郎敢異議

れば。的の眞中貫きけり。是より二箭三箭まで。杜四郎は虚箭なくて。正に皆中の譽あり。又朱之介晴賢は。一箭二箭は的中したれど。第三箭は酷く翦て。安土の礎を射削りけん。鏃碎けて怪葢たり。是にて甲乙分明なれば。杜四郎も共に下馬して。安土の邊を過る時。朱之介は腹立しさに。一個の進退使にうち向ひて。聲高やかに論するやう。言無禮に似て烏滸なめれども的は只是死物のみ。動靜進退自由なる。人倫禽獸と同じからず。然ば戰塲に莅む時。敵豈大小の的の如く。動かずして我箭を受んや。この故に小可は。年十二三なりし時より。翔鳥を射て的を好まず。是をもて今の一失あり。この理を思召されずや。と敎囹猛き傲言を。高頼主洩聞て。理りなり。と思ふ程に。時既に秋の季なれば。創めて渡る天津雁の。一行遠方へ來にけるを。高頼遙に瞻仰て。こは究竟なる物こそあれ。晴賢戚勝兩少年に。那雁を射て落させよ。と仰によりて近習の士。曾根見五郎平。檐廝に走出て。末大江の兩少年。國守の御意に候ぞ。今來る雁を射て捉候へ。疾々と。急せば。末も大江も阿とばかりに。心許なく思へども。辭ふべき時宜ならざれば。共に弓矢を把抗げても。雲居遍に遠かりける。其雁約莫十隻あまり。架屋の邊を過る時。箭を搔抓みて投上れば。是にぞ驚く一行の。雁は亂れて降り來る。箭程を量りし末大江。克彎固めて瞟と射る。修錬違はず二隻の雁。地上に鶩と墜しかば。架屋に侍る老黨近習。憶はずも聲を合して。射たり〳〵。と譽にけり。登時兩個の進退使は。透さず二隻の

免許を被り席を亂して。倶に架屋の檐廊の。左右に出て是を見る。折から秋の夕風に。左右なる小堤に色ぞ增す。梢は高き丹楓葉の。散蒐りぬる光景は。矢塚に狂ふ赤卒の。群飛ぶに似て最興あり。有斯りし程に朱之介は。敵手の人馬の疲勞をまたず。箭程を揣りて丁と射る。那時遲し這時速し。杜四郎は片鐙を。閃りと外す至妙の剽輕。鞍褁れをしてければ。末が射る箭は徒に。遥に飛で落にけり。朱之介は一の箭を。射損じたれば心慌て。杜四郎が鞍局に。居置る處を丁と射る。二の箭を四郎は小盾をもて。發矢と受たる神速精妙。其箭後方に反復つて。朱之介の馬の鼻面を。下高に打しかば。馬は嘶き跳狂ふて。駐るべくもあらざりしを。朱之介は辛くして。乘鎭めてもかひぞなき。始の廣言虚となりて。箭ははや既に盡しかば。且呆れ且恥て。姑且馬を駐めて在り。當下四郎成勝は。盾を戞哩と投棄て。適候晴賢主。迭に守の御意に因る。約束で候へば。己も一箭まゐらせん。よく受給へ。といはせも果ず。いふにや及ぶ。と朱之介は。弓を棄小盾を取りて。倶に馬をぞ抶めける。この段叓に盡しがたかり。又下の回に。解分るを聽ねかし。

新局玉石童子訓卷六之十一　終

せず。仰承り候ひぬ。左にも右にも晴賢の。隨意一箭仕らん。と言大人しき即答に。進退使等歡感じて。准備の征箭を出し來つ。是を兩少年に示していふやう。各先この箭を見よ。鏃に代るに最小なる。瓢をもてしたる故に。射て中るとも彼身を傷らず。反て其迹分明ならん。故何とならば。瓢の底に穿る穴あり。内中に桐灰粉を籠たればなり。勿論各二箭を涯りとす。多く射出すことを許さず。但し其箭を受る者は。楯なくは不便ならん。前後は鬮に依べしとて。長短き紙索を出して。末と大江に掖するに。朱之介は長きを掖得て。事の姑に定められて。其歡び大かたならず。各彼箭二條と。小盾一枚を受取りつ。左りに弓を挾み。鞍の前輪に手を掛て。馬に閃りとうち跨れば。又打出す蒐大鼓の。音も烈しき再度の晴技。朱之介晴賢は。這回こそ四郎奴に。白泡喫せてくれんず。と思ふ威勢阿脩羅の像く。馬を東西に馳錯はせて。透間を射まく欲すれども。大江は騎馬の達者にて。馬さへ駿足なりければ。秋の胡蝶の閃く如く。風に木の葉の散るよりも奔蹄進退自由を得たれば。猛く勇める晴賢は。いまだ箭程を得ざりける。然ばこの勝負を見んとて。衆少年も伴當等も。集會所を出て來つ。埒の邊に身を鎗めて。いかに〳〵。と思ふも多かり。況峯張柴六は。集會所の幕の間より。外目も揮らずうち見て在り。然ば又架屋なる。主も家隷も今日の見物は只此の一擧にありけり。と思はぬもなきそが中に。高嶋石見。多賀典膳。長橋倭太郎。象船算彌。志賀介政賢等。曾根見五郎平に至るまで。

ず、身を仰反して馬上より。大地に撲と墜しかば。是を見る者堪ずやありけん。齊一咄と笑ひけり。當下多賀の伴當等。兩個鎗奴と共侶に。東の集會所より。遽しく走來つ。或は馬を牽駐め。或は朱之介の手を拿て。扶起さまく欲するに。朱之介は墜ける時。馬に酷く踏れしかば。速には立も得ず。苦痛を忍び聲振絞りて。衆人さのみ俺をな笑ひそ。俺豈彼箭に。射られんや。避んとしつゝ謬て。鐙を外して墜たるのみ。といふを鎗奴等聞あへず。そは負惜みなり。卒是見給へ。おん身の衣裳は胸にも肩にも。桐灰粉多く塗れたれば。射られたる迹分明なり。立給へ。と箝めて。肩に掖被辛くして。集會所へ將て去りければ。猶這里に在る少年等は。朱之介の口の歹さを。憎みて勦る者もなし。幵が中に。多賀志賀介政賢は。慾に親の吹擧したる。朱之介が事の爲體に。且羞且腹は立ども。然而在るべきにあらざれば。伴の奴隷に吩咐て。朱之介を宿所に返すに。膂力ある奴隷每。朱之介を搭駝つゝ。多賀の宿所に將て來にければ。留守なる老僕こゝろ得て。朱之介に貸て被たる。戎裝衣裳を脱易させて。猛可に籃輿にうち載て。吾足齋の宿所へとて。送遣したりければ。是を見る者いひもて傳へて。いよ〳〵胡慮になりにけり。是より先に高賴主は。末大江の鬪射果し時。左右に侍る多賀典膳と。高嶋石見介を見かへりて。汝等は何と思ふや。彼大江杜四郎。峯張梁六郎の。槍棒弓馬は。今日の試撃の花なり實なり。因て這里へ召よせて。些の賞祿を取すべし。然れども又彼末朱之介も。翔鳥を射て墜した

新局玉石童子訓卷之十二

東都　曲亭主人口授編次

第四十二回　家傳の刀子兩善少年を留む　百金の證書同居の母子を裂く

重說。大江杜四郎成勝は。朱之介が射る一二の箭を。拂ふ剽輕目覺しく。彼箭は旣に盡しかば。主客の勢ひ地を易て。早くも射手になる隨に。小盾を投棄弓箭を刴ふて。射んとて馬を拺むれば。朱之介は心慌て。悔しく思へど今さらに。已べきにあらざれば。弓を搔遣り小盾を取て。馬を東西に馳違せて。寄て組まく欲すれども。杜四郎は人馬一致の。奔蹄迅速自由を得たれば。他を毫も近づけず。西へ走らせ東に返して。互に駈つ駈らるゝ。鈴々たる鑣の音。丁々たる蹄の響。孰に暇なかりける。馬は汗し人は疲るゝ。末は憶はず乘後れて。間程よくなりしかば。杜四郎は背さまに。身を反りつゝ剽と射る。弦音高き馬上の强弓。朱之介は小盾をもて。受まくするに何ぞ及ん。鈍や右の肩尖を。射られて骨に徹ふるまでに。疼痛を忍び馬を回して。避まくしぬる那時遲し。杜四郎が射出す二の箭に。朱之介は胸を射られて。一聲呀と叫びも果

こゝろわりての技なる歟。と問れて杜四郎頭を擡げて。然ゝ候。漢籍の例を思ひ候に。鴈は素是信義の鳥なり。是をもて秋毎に來賓す。徳を諸侯に比らべたり。この故に諸侯の贄には。必鴈を執といへり。然れば今。國守の御意に從ひまつりて。射て墜す鴈なりとも。殺して捉らんはさすがにて。形の如くに仕りぬ。と言爽に陳しかば。高頼感悅大かたならず。憶ず膝を打鳴して。然也々々寔に然なり。汝は武藝のみならず。文學も亦今の世に。稀なる才子といひつべし。今日よりして通能と。共侶に予に仕へよ。秩祿は乞ふに任せん。諸國を遊歷するとかは。と遮りに留めて已ざりしを。杜四郎は阿とばかりに。應難つゝ後方に侍る。棐六を見かへりて。倶に答稟すやう。思ひがけなき御懇命を。推辭まつるは無禮なれども。臣等は素より情願ありて。共に武者修行に出たるに。いまだ百里の路だもゆかで。なでふ仕官を求むべき。その義は免させ給へかし。と辭ふを高頼主聞あへず。开は然る故もあるべけれども。藝術未熟の者ならば。武者修行するよしもあらん。修錬の上には要なき事歟。と諭せども四郎棐六は。從ふべくもあらざれば。多賀典膳高嶋石見。共侶に膝を進めて。言語齊一說諭せども。杜四郎も棐六も。只云云と固辭のみ。言果べくもあらざれば。主君の後方に侍りたる。曾根見五郎平堪ずやありけん。突然と進み出で。杜四郎等にうち向ひて。名告をしつゝ且いふやう。和殿等さりとは情強し。いはでもしるきことながら。我君は世々當國の大國主。京都將軍家の御爲に。御後見でをは

る。修錬を思へば凡庸なる。少年にはあらずかし。不幸にして他に一倍せる。成勝通能を敵手にしたればこそ。竟に後れを取つらめ。他が負たりとて然ばかりに。笑ふべき者ならねども。彼多辯にして愆を。飾りて人を誣るが如きは。實に是憎むべし。當城内なる壯佼等が。漫に他と交らば。浮薄に成るもあるべからん。汝等よく這こゝろを得て。今よりの後朱之介をば城に出入を禁めよ。と理り切て諭さるゝ。典膳は背に汗して。仰畏うも承り候ひぬ。臣も彼朱之介を。然る者とは思はずして。今日の試撃に召倶しゝを。後悔の外候はず。と陪話るを高賴主聞あへず。否。汝を疎忽として。咎るにはあらずかし。ひはでもしるきことながら。今戰國の最中にあなれば。一藝ある者を薦擧て。君の役に立まくしぬるは。臣たる者の職分なり。然ばとて其人毎に。賢良の者のみあらんや。そを擇て用ると。用ひざるとは是も亦。君たる者の職分なり。今よりの後朱之介に。懲りずに薦擧を宗とせよ。何かは恥るとあらんや。と最鷹揚なる君命に。典膳は稍心おらゐて。畏りをぞ稟しける。當下高賴主は。又石見介を見かへりて。要なき言に時もや移らん。彼成勝と通能を。蚤く召ね。といそがし給へば。石見介は阿と答て。出て杜四郎と粜六を。倶して架屋にかへり來つ。かくと聞え上しかば。高賴席を改めて。件の兩少年に對面あり。且いへらく。憶ふに倍たる汝等の。武藝剽輕一人當千。得がたき俊傑なる哉。但し成勝は。天飛鴈を射て墜せし時。傷つけずして隻羽を縫しは。偶然るや然はあらで。

晷いよ〳〵傾き落て。下晡になりにける。當下杜四郎楽六は。高嶋石見介と共侶に。遽しく架屋を出て。土居て國守を見送果て。杜四郎は要ありとて。石見介の袂を曳て。請ふて集會所へ退く程に。試撃の爲に召されたる。少年等は皆かへり去りて。只高嶋の伴當と。十餘箇の夫役等のみ。残りて幕の外面に在り。この餘は人のなくなりたれば。杜四郎は密やかに。石見介に談するやう斯いはゞ何とやらん。面正しくもなき事ながら。嚮に在下憶りなく。這腋挿の刀に附たる。刀子を失ひぬ。抑俺這兩刀は。昔天喜の年間。鎮守府將軍。源頼義朝臣の爲に。筑石の刀工が作る所。青海波の三言銘あり。其後多くの春秋を歴て。建久の年にやありけん。我遠祖大江廣元に。頼朝卿の賜りしといふ。家の口碑に傳へしを。父の遺書にて稍知りぬ。刀子も亦同作にて。小柄は則全白金なり。波濤に知鳥の高彫あれば。紛ふべくも候はず。身にも代がたき至寶なれば。今日も亦腰を放さず。只晝飯を賜る時。解て傍に置きしのみ。折から衆少年の伴當等。夫役も多く立稠たる。混雜の中なりければ。盗れたるにぞあらむずらん。いかで我爲に。其盗兒を穿鑿て。とりかへして給ひね。と憑めば又楽六も聲を低めて。嚮に小可も推並びて。其傍に在りながら。毫も心つきなかりしは。野狐にや魅されけん。面なくてこそ候なれ。と共に叩く秘密の要事を。石見介は列々と。听果て嗟嘆に堪ず。屢四下を見かへりて。現に安からぬ事なりき。頼れずともそが儘に。捨措くべき事にあらず。なれども暮るゝに程もな

しませば。主君に取て不足はあらじ。よしもなき虚辭退して。後悔をなし給ひそ。と挑むを楽六聞あへず。勃然として答るやう。吾はいはるゝ事ながら。人各情願あり。匹夫も志を奪ふべからず。已等主僕は故郷に親あり。兄さへあるに教に悖りて。他郷の君に仕へんや。といひも果ぬに杜四郎は。目を注せつゝ推禁めて。更に典膳石見介等に。向ひて謹て稟すやう。御諚は實に有がたきまで。辱く候へども。既に楽六が稟さし如く。臣等は父兄の爲に。已がたきよしも候へば。いかで只この儘に。放ち遣せ給はんとを。願ひまつるの外候はず。御縁竭ずは異日又。見參に入る日もあるべし。この義宜しく御執成を。と辭ふを高頼主うち聞て。しからんには是非に及ばず。抑留の念は斷ぬ。五郎平賞祿を取せよ。と仰に五郎平阿と答て。懐にしたりける。目錄二通を拿出して。卒とて遞與せば四郎楽六。受戴きつゝ開き見るに。近江布十反。沙金五包。大江杜四郎へ。とあり。楽六が受たる目錄も。亦是に同じきを。卷收め懐にして。倶に恩を拜していふやう。小人毎は然せる功なし。爾るに是等の賜を。受奉るはこゝろにず。然りとて又辭ひまつらば不敬の罪を增もやせん。殆當惑仕りぬ。と謝するを高頼主うち聞て。然ばかりの東西何歟あらん。今日の武藝を賞するのみ。尚この地に所要あらば。逗留は隨意なるべし。石見介も這意を得て。他等が他郷へ立去をり。先たちて予に報よ。卒退らんとて立給へば。多賀典膳。曾根見五郎平。以下の近臣相從ふて。倶して後堂へぞ赴く程に。

のとをのみ。云云といひ出て。其資助を乞討れば。楽六は又朱之介の。舊悪の事の顛末。彼百九十五金の事。又財嚢に入換られたる。両箇の小石の事はさらなり。九四郎の義俠落葉の慈善。其崖畧を説示して。思ふよしさへ喁き告れば。石見介は驚きながら。听果て答るやう。已も昨宵終夜。愚按を旋したりけるに。彼刀子の盗兒は。是必外人ならで。衆少年の伴の奴隷歟。然らずは夫役等の所為ならん。と思ふものから何人と指す。證据を得ざれば是も亦。雲を抓み風を追ふごとし。果敢なかるべき闇猜なり。因て又思ふに。彼刀子の盗兒は。必人に沽却して。錢に換るにぞあらむずらん。倘果してしからんには。夜々城外に立出て。或は典物舗骨董店を。渉獵もしつ問も訂さば。見出すともあるべからん。是より外にせん術を知らず。又末朱之介の事はしも。舊悪形の如くなりとも。其金子に識なくば。叨に捉へて責問がたかり。且他が乾兒吾足斎は。當家の權臣多賀典膳の。宿所に出入する者なり。と人傳に听し事あり。遮莫典膳親子は。思慮ある老實家なれば。最屓の沙汰を做す者ならねど。證据もなき朱之介の。舊悪を訴がたかり。裕と云。恰と云事皆難義にあらざるはなし。猶又再思し給へといふ。最正首なる密談に。楽六はいふもさらなり。杜四郎歡承て。御示教寔に其理あり。彼百九十五金の事は。當時九四郎が償ふて。其内中なる一百金を。落葉に還したりければ。しうねく祟らでもありぬべし。只等閑にしがたきは。我家傳なる刀子なり。芳意に儘せて今宵より。街衢に出て渉獵てん。

し。剰又この所は。長談の室におちねば。誘給へ宿所に退りて。左にも右にも主張せん。といひつゝ更に聲振立て。伴當等を召よせて。いそしく立ば杜四郎も。桀六も相從ふて。宿所へいそぐそが程に。この日も果敢なく暮にけり。復説高嶋の宿所には。主人も客も終日の。疲勞なきにあらざれば。共に夕饌を果して後。蚤く臥房に入りしかど。杜四郎は今日失ひし刀子の事こゝろに掛りて。睡らんとするにいもねられず。おなじ思ひに桀六も。小襖兒を被ぎ向坐して。うち譚ふ語次に。桀六がいふやう。今日稠人の中なりとも。刀子の失しは怪しきに。猶怪しきは朱之介が。試撃の隊に入りしのみ。其來歷を知らざれば。左にも右にもこゝろ得がたかり。この折をもて推捉へて。敲かば他奴が竊拿て。石を喚玉に抓せたる。一百九十五金の事はさらなり。刀子の盗兒をも。知る所縁にもやなるべからん。といへば杜四郎點頭て。そは勿論の事ながら。我們は旅客にて。權もなく威もなきに。人を捕へて罪を正さば。毛を吹きて疵を求るに似たり。只高嶋生にのみ。呷き告て彼人の。意見に由るにしくとあらじ。俺憶ふに。今日の試撃に。朱之介は東に在り。我們は西に在り。其間近からねば。非除朱之介を責訂すとも。百九十五金の外に。彼盗兒は知れがたからん。然は思はずや。と呷けば。桀六は有理と答て。猶も餘談に及ぶ程に。長き秋の夜更闌て。丑三時候になりしかば。倶に枕に就きにけり。然ば杜四郎と桀六は。其詰朝疾起出て。主人の身邊に人なきをり。閑室に請迎へて。杜四郎は又刀子

右もの事ながら。其日定らば高嶋主。疾聞え上給へかし。暇まうす。と身を起すを。石見介推禁めて。猛可の事にて儲なけれど。薄茶一服まゐらせん。といふをば聞かで刀を曳よせ。そは忝く候へども。知らるゝ如く多務なれば。異日推參仕らめ。と推辭つゝ立出るを。四郎柔六石見介も。玄關まで是を送りて。異口同様に勞ひけり。かくて杜四郎等は。主人と倶に退きて。悄やかに談するやう。豫心を知られし如く。仕へずして去まく欲する。我們がいかにして遣賜を受られんや。こはこの儘に藏め置て。異日この地を立去るの後。寶庫に返し玉ひね。と憑めば石見介沈吟じて。丌は最難義の役ながら。志ある者は。孰もかくこそあるべけれ。こゝろ得てこそ候なれ。と應て聽老僕を召て。件の沙金白布を。長櫃に弃させ。手親封じて。舁せて土庫へ遣しつ。其身は若黨奴隷を將て。君所へ出仕したりける。是日長橋倭太郎勢泰。象船算彌知量は。大江杜四郎。峰張柔六の。試撃の勝を賀せんとて。石見介の弟子等と共侶に。高嶋の宿所に來にければ。件の大江峰張は。猶逗留すと聞知りて。歡ぶと大かたならず。是よりの後間なく時なく。參來て討論しぬる程に。多賀志賀介政賢も。早晩其隊に入りて。交り淺からずなりにけり。然ば杜四郎柔六は。晝こそ交遊の爲に暇なけれ。夜は訪來る人のあらねば。出て彼刀子を。索ねまく欲すれば。石見介も案内の爲に。倶に微服にて。夜毎に城外に立出て。をさ〱市に閱する程に。秋盡きて霜寒さ。十月の中浣になるまで。いまだ便りを得ざりける。

と答る間に。老僕が來て御客あり。と告しかば。石見介急に見かへりて。誰ぞと問へば。別人ならず。曾根見五郎平宗玄が。昨日守高頼主より。杜四郎柒六に賜りたる。沙金十包と白布を。吊臺に載奴隷に舁せて。みづから齎し來ぬるなり。是により石見介は。遽しく退きて。衣裳を更などする程に。杜四郎と柒六も。袴を穿て共侶に。客房に出て對面す。迭の口誼言果て。五郎平は又杜四郎と。柒六に向ひていふやう。昨日は不慮に君邊にて。論辯過言に及びしを。後悔の外候はず。必な介意し給ひそ。就て其折寡君より。兩兄に贈り給はせし。二種を齎したり。といふ間に若黨等が。玄關より運び來ぬる。四箇の有脚の大折敷に分ち載たる。沙金十包と白布二十反を。處狹まで置並れば。四郎柒六額衝承て。言語齊一答るやう。武藝は家業の事なるに。功あらずして恩貺を。受まつるべくもあらねども。推辭稟さば不敬といはれん。異日又好純をもて。稟上るよしもあるべし。這義宜く御承を。賴みまつるにこそと云。其語を接て石見介も。五郎平に謝していふやう。今日の一義は。宰領の。走卒のみにてあるべきに。貴所の光臨。當りがたかり。己も程なく出仕して。御恩を拜しまつるべし。といふに五郎平。否俺等は。大江峰張の兩才子に。送別を兼たるなり。幾比立去給ふぞや。と問れて杜四郎。然ン候。仕官を辭ひまつりし上は。蚤く去まく思ひしに。奈何せん。已がたき要緊の事出來しかば。猶又時日を累るまでに。長逗留になるべき歟。料りがたく候。といふに五郎平領きて。幵は左も

も問んとて。些の人情を懐にして。朝疾出て観音寺の。城に入らまくする程に。守門の城兵推禁めて。且いふやう。汝は吾足齋延明ならずや。昨宵守より御下知あり。汝の乾兒末朱之介はいふもさらなり。吾足齋をも當城内へ。出入を禁めよと。仰付られたりけるに。入らまくするは大膽なり。疾いなずや。と窘れば。吾足齋驚きて。其は何事歟知らねども。咱等は犯し丶罪あらず。そは多賀大人こそ知らせ給はめ。いかで彼大人に。吾足齋が参りにき。と告給はらば厄釋て。召入れらるゝにぞあらむずらん。いかで彼大人の御宿所へ。このよしを告給ひね。と口説を城兵聞あへず。默れそは烏滸なり。禁門の一條は。多賀殿より徇られしに。吾足齋が推參して。追ども去らず。と報稟さば。搦捕れとこそいはるべけれ。然でも去らずや。かへらずやと。敦圉ながらをり立て。權威の捍棒掻拿蚤く。打拂はまくしてければ。吾足齋は吐嗟とばかりに。怕慌て遯る時。甃石の稜に趺きて。忽地撞と輾びしかば。城兵等は堪難て。齊一咄と笑ひけり。既にして吾足齋は。膝頭を擦破りて。疼痛に勝ねば唾を塗て。隻脚を曳つゝ城下なる。巳が宿所にかへり來つ。生平にはあらぬ聲高やかに。老莩を屢喚近つけて。嚮に城兵にいはれし事。那里の不首尾箇樣々々。と具に告て又いふやう。畢竟は朱之介が。愁なると做出しても。負じ魂懲ずまに。好らぬ口を嗜きにけん。守はさらなり多賀殿に。悄まれずはいかにして。罪もなき俺さへに。禁門の祟に逢んや。かゝるべしとは知るよしもなく。晩稻の面瘡愈果

休題再說。末朱之介晴賢は。那日大江杜四郎に。射て落されて落馬しつ。馬に踏れて腰骨を。損ねたるのみならず。初峰張楽六に。習學槍もて衝れし時の。撲傷も一度に發りにけん。胸痛み身は毰毸て。堪べうもあらざりしを。多賀の奴隷の吩咐られて。开が儘籃輿にうち載て。宿所に送り來にければ。母の阿夏の老苧はさらなり。无四郎の吾足齋もてはいかに。と驚き惑ひて。夫婦右より左より。籃輿なる朱之介を扶出しつ。軈て小子舍に臥しめて。事の顛末を問まくするに。朱之介は只嚍くのみ。辭詳ならざれば。吾足齋已ことを得ず。多賀の奴隷を勞ひて。朱之介が怪我したる。事の首尾を諮れば。奴隷每は秘すによしなく。彼大江杜四郎。峰張楽六の射藝槍法。諸藝に秀しを。朱之介が懲ずまに。二度まで試擊を乞しかば。槍にも弓にもうち負て。果は大江の瓢箭に。射て落されて馬に踐れし。其事の光景を。聞たる儘に說示して。告別しう外に出て。二人は空籃輿を擡起し。一人は又。箱挑燈の。蠟燭を接更て。城内へかへり去しかば。吾足齋老苧等は。倶に呆れ且腹立しさに。朱之介の生兵法は。怪我の基よ。と呟くのみ。晚稻は又始より。朱之介の調戯きを。快からず思へばや。納戸に在りて出ても來ず。然りとて已べき事ならねば。吾足齋は膏藥を。拿出て朱之介の。痛處に布などする程に。老苧は方僅良人の取らせし。湯液を急に煎果して。朱之介に薦めけり。爾程に吾足齋は。次の日多賀の宿所にゆきて。昨日衆少年の試擊の折。朱之介を返引せられし。歡びを稟すべく。事の首尾を

閙搔遣り口漱ぎて。母の身邊へ來にけるを。阿夏の老莘は見かへりて。珠よ疼痛は甚麼ぞや。始よりして三夜は。生平に異ならざればにや。瘦だに見えず最芽出たし。といふをば聞かで高胡坐。將搔掛て喃奶々。撲傷の愈しは今日のみかは。五日も六日も前日より。起も出まく思ひしかども。阿爺に面を見られなば。睨着られ燻されて。耳囂く堪がたからんに。晚稻すら一向は。何等の腹の立やらん。ものも得いはで皓々と。目を皈るが心惡さに。今日まで臥釋迦で在志しかども。幾までか斯てあるべき。髮を結させ湯にも浴てん。俗にいふ木葉落しにて。朝夕は最寒かるに。いまだ刺被の沙汰もあらず。この容にて何處へ出られん。錢まれ衣まれ貸給ひね。身裝して暇稟さん。他人に劣る這里のみに。日の照るもの歟。と喧嘩の緒。解を老莘は聞あへず。復しても橫道兒。鴉は口に惡まるゝ。と人の謠ふを思はずや。爹々は何とも宣はねども。咱敗衣を解洗ひして。綿衣は疾に出來たり。是被て出て來よかし。といひつゝ立て竹櫃なる。陸奥太織の絮腸衣と。共に拿出す鐚百錢を。卒とて聽て取すれば。朱之介はよくも見ず。爾がまゝ傍に閣きて。喃奶々。思ひ立日が吉日と。世の常言にもいふなれば。今日より他處に巢を易て、邪慳の宿を解脫せん。就て阿爺に預けたる。枸神の代金百兩を。目今出し給ひね。といふを老莘は聞あへず。爾は亦思ひかけなき事なり。始爹々の教訓を。爾は何と听たるぞ。非如枸神の即效にて。晚稻の面瘡愈たりとも。爾の爲には女弟品。大人とは義理ある親子なる

たれば。始より猶美しく。なりにしよしの那里へ聞えて。又婚姻を議せられん。媒人の來よかし。と其方の天を仰ぐまで。日毎に俟しは空憑めにて。心筑紫の琴の緒よりも。果敢なく斷れしえんのつな。結ぶよしなくなり果しは。皆是彼奴が所爲ならずや。と席薦を敲く腹立聲に。外の聞えを忘れたる。然しも良人の空憒を。老苧は聞くだに胸苦しくて。倶に額を疚するのみ。又いふよしもなかりけり。折から晩稻は納戸に在り。親の高聲聞知りて。涙は袖によるの雨。まつにかひなき志賀介と。絕し緣しは我からさきの。世にしなしたる罪障の。報なる歟。とうち歎く。壁に對ひて吻く息の。出雲八重垣まだ見ぬ夫と。絕し緣しを復結ぶ。神なし月も怨めしく。思ふ小春の空櫻。脆さは風の咎なるべし。是よりの後吾足齋は城內に病架あらずなりて。玄關寂しくなりしかど。町家には猶藥を乞ふ。得意なきにあらざれば。日毎に出て。朱之介を見かへらず。晩稻も亦枕方に。立よるとだに斁ふの故に。只難面て他が安否を。知らず貌にて問ねども。母の老苧は骨肉の。恩愛に羈されて。夜に日に看とりて粥を薦め。獨朱之介の爲に。膏藥を貼替湯藥を煎じて。暇もあらず立揮けば。いとゞ短き初冬の。日景を巳が爲にのみ。猶短しと思ひけり。爾程に朱之介は。病臥二三十日にして。撲傷は餘波なく瘥り果しかど。吾足齋に疾視られ。呟るゝが腹立しさに。そが儘臥て在る程に。十月望の日になりぬ。這朝吾足齋は。東西なる病架に招れて。宿所に在らねば。朱之介は折てそよけれ。と起出て。蒲

も地にも只一個なる子を棄て去れし藪の下の。別れを思へば世間に。慈悲ある親の心と異なり。骨肉ですら八九年。音信不通で過されしに。素他人なる今の阿爺が。乾父滾しに金百両を。踏まくするとも取らで已んや。一も入らず二も入らず。萩の花餅より大きなる。印判押て渡されし。彼百両の手簡茲にあり。是見給へ。と懐なる。鼻紙の間より。彼一通を拿出して。皺を伸しつうち開きて。是聞給へ。とうち咳き。可買取薬種の事。枸神一枚。價直金百両也。右於即效有之者。明十七日。金子無遅滞可渡之候。爲後照手簡仍如件。亨祿三年八月十六日。吾足齋延明印。旅人朱之介丈。保人宿六丈。と讀訖りて。喃奶々。阿爺は宿に在らずとも。かばかり正しき證据あれば。這一通と交易に。おん身彼百両を。俺等に遞與給ふとも。阿爺は言品なかるべし。這照文がものをいへばなり。おん身は知らずと宣へども。阿爺に貯祿多かるとも。そを秘措るゝ處まで。俺等は先刻猜したり。是欲からずや。と賣弄する。手簡を老苧は搔拿て。見つゝ熬辣哩と引裂棄れば。朱之介は吐嗟とばかりに。駭慌て。禁むれども。及べくもあらざれば。勃然として怒に堪ず。眼を瞋らし聲苛立て。奶々は狂女歟亂心歟。苟且ならぬ百金の。手簡を引裂棄られては。親子なりとて許さんや。と罵る面色凄さを。老苧は見る目に涙滑て。否狂亂もせず。件の金を。惜みて做しゝ事ならねども。始儞を珠之介と。知らで爹々の渡し給ひし。這手簡のある故に。親を親とし思はざる。蓬き儞の大慾心。を撓直さんとて

に。他人かましく算盤立て。貸借をいふ事かは。と詞急迫しく窘るを。朱之介は冷笑ひて。开はいはるゝ事ながら。親子間でも錢財には。言品出來て後竟に。愛を失ふも世に多かり。おん身こそ我母なれ。阿爺は素是他人にて。恩もなく義もあらず。邂逅環會ふたればこそ。乾父面して宿せらるれど。犬猫でも喫ではあらぬ。纔に三たびの乾菘飯の。外には何養たる例もなし。そを見傚ふてか晩稲まで。傲慢高上る無愛想。縹致自慢歟知らねども。いひ甲斐なければ何事も。時世と辛防したれども。今日は行蒐の駝賃なり。枸神の價を還しね。と漸々に募る高聲に。老苧も亦勃として。いはせて閣ば不敵の本性。親を親とは思はずや。昔年周防の山口にて。无四郎殿に逢ざりせば。儞はさらなり我身すら。辛き浮世に堪難て。鹽燒く浦の煙りとも。なりなんものを彼大人の。好意によりて伴れ。儞は京師に留りて。西樣中納言兼顯に召置れ。我身は單陸奥へ。將ていなれたればこそ。富までにあらずとも。人並に世を渡來ぬるを。恩なし義なし。といはれんや。況錢財の事はしも。大人の手づから出納して。奴家に任せ給はねば。今百兩といふ金の。有やなしやは知らねども。縱貯祿ありとても。そを朱之介に取せ給ひね。と俺口親いふよしあらんや。烏滸なる事を。と敦圉くを。朱之介呵々とうち笑ひて。そはいはるゝ事ながら。昔年周防の山口にて。我們親子の窮阨を。救ひしは今の阿爺の。肚に計較あるとにて。おん身に惑ひし以所なれば。恩にはあらず。義ではなし。おん身も亦爾ぞかし。天に

を得たらんに。倍て幸多かるべし。左ても右ても這家に。同居せじと思ひなば。そを留るにあらぬども。爹々は今日或病架の。床徹の壽祝に。招れたれば小夜深なん。遅くは俟ずに寝りね。と今朝宣はせしよしもあり。日景も午は過たるに。明日立去ともけしうはあらじ。我身も今は何ばかりの。遊財はなけれども。去歳の冬陸奥なる。信夫の郷を立去る時。今は要なき髪の飾りと。花やぎたる衣なんどを。沽却なしたる金子四五兩あり。汝の盤纏に取せんず。卒とて軈て身を起しつゝ。納戸へ入るも影護さ。晩稲に聞れじ見られじ。と思ふこゝろの安からねば。我物ながら盗むが如く。圓金五兩を出し來つ。紙に拈りて朱之介に。渡すを楚と受取て。この五枚は百兩の。一割にだも足らねども。なきには優べし。罷りてん。今より浴し。結髪して。枸杞村なる宿六許。訪ふて那里に一宿明して。翌日起行こそ便宜に侍れ。阿爺の還さを俟着て。愁に告別せば。復も口舌の起りやせん。おん身代りて左も右も。宜く稟し給へかし。といひつゝ衣を脱更て。豫准備の長財囊に。金子はさらなり。卜書さへ。錢さへ藏めて腹に纏締。外には敗衣敗脚絆。踏皮も一緒に推圓めて。袱に包などす。菅笠までも遺なく。とり揃へても東西足らぬ。腰に短き逆旅刀。さして往方は定めなき。雲と水との別路に。老苧は餘波惜まれて。淚と共にとゞめかねし。只獨子を放遣る。憂は浮世の習ぞ。と思絶ても又あふ事の。何時と知らねば堪難し。洟うち噬て送別。聲曇らして。やよ珠よ。周防はさらなり。那里まれ。落着地

引裂棄たり。非如今其百金を。出して儞に取するとも。有る時は有るに信せて。湯水の如くに使ひ棄ぬる。金は其身の怨家なるを。知らで欲する愚さよ。是に就きて思ひ出にき。初儞の生れし時。奇き事のみ多かりければ。賣卜翁に問試しに。其折寫ておこされし。卜書一通玆にあり。そは漢字にて讀ねども。要あるべし。と思ひしかば。軈て儞の腰吊の。護身嚢に秘置しかど。佛生山に在りし比。失れやせんと思ひかへして。移して我身の神符嚢に。藏め置たればこそ。幾層の年を歷ぬるまで。故の隨にて今尙あり。是先讀て聞せよ。といひつゝ懷抱の嚢より。其一通を拿出して。卒とて渡せば朱之介は。やうやくに怒氣を治めて。默然と叉きたる。手を解きつゝ其卜書を。拿上て讀程に。老苧は膝を進めて听けば。其文にいへらく。子而非子。非親　是親。一窮一達。因果輪々。この一條は第五回に見えたりとあり。朱之介は兩三番。讀復してもこゝろを得ねば。眉を顰めて。喃々。こは最解し易からねども。親にあらずして是親なりとは。我身には實父の外に。乾父たる者三四名あり。周防の叔々も其中なれば。其等の事をいふにあらずや。と問ば老苧は沈吟じて。今こそ思ひ合したれ。こは周防なる叔々の事と。儞の上をいふなるべし。一窮一達云云。とあるは今こそ困窮すれ。後に望を達する日の。ありとしいへる卜定の。隱語にぞあらむずらめ。倘果してしからんには。山口まれ三石まれ。行て叔々に再會の折。其卜書を見せまゐらせなば。いよゝ愛歡びて。必資助になり給はん。然ば今枸神の價の。百金

けん。血を分たる親子でも。彼百金の情由あれば。出ていねとはいひかたかるに。猛可に他がこゝろから。辭去りしは幸に侍り。といふ間に納戸より。晩稻は徐に出て來つ。爹さまかへらせ給ひし歟。と問つゝ母の後邊に在るを。老苧は急に見かへりて。晩稻頭痛は瘥りし歟。儞にはまだ告ざりき。朱之介は云云。といふを五足齋推禁めて。彼奴は生涯來ずもあれ。養老小孃の晩稻だに。恙もなくは我們夫婦は。左團扇で百年までも。樂隱居とやいはるべからん。其頭の餘談は後にして。彼進物を何まれ彼まれ。見繕ふて出さずや。日の短さに。といそがせば。老苧は那這搔撈りて。稍挈出す堅魚脯を。三歟五歟推裹む。陸奥紙に楮線掛て。標題寫す走筆。そを褊絹袱に重裹して。卒とて渡すを吾足齋は。受取りつ得と見て。是で好。これでよし。今朝しもいひし事ながら。今宵我かへさの遲くは。前後都てよく鎖して。寢まりて敲くを俟給へ。いで〳〵。といひつゝも。刀の鐺衝立て。身を起しつゝ遽しく。背門より出てゆきにけり。爾程に朱之介は。腹に計較むよしあれば猛可に母に別を告て。立去りてもまだ遠くはゆかず。巷頭なる錢浴室にて浴しつ。篦頭店に立よりて。結髮をさする程に。肚裡に又思ふやう。往る比城內にて。試擊の折に思ひかけなく。九四郎の弟なる。柒六奴を敵手にしたれば。彼奴が口より我舊惡を。漏さば人に知られやせん。事の破に至らぬ先に。巢を易ばや。と豫より。思はざるにあらねども。杓神の價百兩金を。取らでいなんはさすがにて。母を債揮し甲斐もなく。

方を得ぬる日に。蚤く便を聞せよかし。やよ喃々と諄返すを。朱之介は應へのみして。袱包笠草履。兩手に引提て玄關より。いそしく出てゆきにけり。是日晩稻は己の時候より。頭痛すとて納戸に在り。寢とはなしに横臥びて。枕に就て在りし程。母の老苧と朱之介の。密談を洩聞しかど。起出んはさすがにて。故の儘にて在りける程に。阿夏の老苧は玄關に。朱之介を目送果ても。晩稻は起て出ても來ず。他に告ずはあしかりなん。と思ひつゝ奥に入る折から。思ひがけなく吾足齋が。かへり來て坐席に在り。老苧は驚き且訝りて。おん身は今宵云云にて。深けずは還りかたかるべし。と宣はせしに誰何ぞや。生平よりも最早かりき。といはれて吾足齋。然ばとよ。今日十々綿屋の床徹の。賀席に招れながら。祝ふて些の人情を。齎せずはあるべからず。と方僅心つきしかば。そを整ん爲にのみ。背門よりかへり來にけるをり。爾と又彼珠が。長問答の顚末を。听とはなしに听知りて。呆れもしつ腹は立ども。團坐に入らば妙ならず。と思ひかへして緊れて在り。彼奴が出てゆく背影を。見つゝ顯れ出たるなり。斯いはゞ何とやらん。無慈悲には似たれども。破落戸と知りながら。珠之介を留置ば。後竟に親の首に。繩を掛るとなからずや。と思へばこゝろ安からざりしに。彼奴が猛可に辭去りしは。我と爾の厄禳にて。是より造化直るべし。就中彼枸神の。百兩の手實を引裂棄たる。雄々しき爾の拚きは。譽るにも猶あまりあり。適吾足が妻なる哉。といはれて老苧は苦笑ひして。原來言皆聞れに

新局玉石童子訓巻之十三

東都　曲亭主人口授編次

第四十三回　深夜に盗を捕へて賢郎家寳を全す　闇刀玉を砕きて老賊創て懺悔す

登時末朱之介は。呼門ふ随に奥より出ける。其人は宿六ならで。まだ見も知らぬ壮佼なれば。訝りながら找み入りて。和郎は是何人なるぞ。宿六叟は在さずや。と問へば壮佼。然ばとよ。小父は前月節供の比。三池郡へかへり去りぬ。何等の所用歟知らねども。今日の間にはあひがたかり。我上は豫より。小父に聞れし事もあらん。這里なる故の家あるじ。留守七の獨子なる。盆九郎即是なり。和君の事は小父宿六の。話説にて聞知りたり。卒先這方へ找ませ給へ。といふに朱之介こゝろ得て。我も亦其名を知る。盆九哥々でありけるよ。許し給へ。と肩より下す。襆裹と酒鐏を。やをら其頭に閣きて。地炕の邊に坐を占れば。盆九郎は埋火を。搔起しつゝ扱いふやう。偶來ませし珍客なるに。宿六は在らずとも。代りて些の款待を。必すべき該なれども。いかにせん。恥をいはねば理も聞えず。と世の常言は宜なる哉。親留守七の病中

纔に五両を餞別に。當養れたればとて。西國までの盤纏はさらなり。小使料にも春の雪。程なく消てあらずなりなん。商量敵に足らずとも。先宿六許赴きて。立たる腹を横にするまで。氣を轉してこそ左も右も。去向を定るにしくとあらじ。と深念をしつゝ其前面なる。酒肆にて酒一斤を。小罇に篩せて酒菜さへ。二三種買とりしを。袱包と一荷に去て。やをら肩にうち被つゝ。枸杞村を投ていそぐ程に。下晡になりにけり。既にして朱之介は。枸杞村に來にければ。まだ見も忘れぬ宿六の。門より裏面を刺窺きて。宿六叟は宿所に在歟。珠之介が來つるぞや。と兩三番呼門へば。應と答へて敗紙戸の。走難るを左右して。推開て立迎ふるを。と見れば宿六にはあらずして。年二十五六なる一箇の壯佼。面の色黑くして。澁塗の苧箒の如く。身材高くして。癈院の金剛に似たるが。襀縞なる方袖の綿衣の。申の時可なるを被て。柿色の故りたる。細布を帶にしつ。破れて大指の顯るゝ。官綠の刺踏皮を穿て。背の虱兒を搔ながら。奥より出て來ぬるなり。此は是何人ぞや。开を下回に。解分るを聽ねかし。

新局玉石童子訓卷之十二　終

身を起して。門の戸引て坐にかへる。主客迭に薄酔の。舌さへ廻る朱之介は。溢る丶までに餙せたる。茶碗の酒を一口飲て。又盆九郎に向ひていふやう。多辯は要なき事ながら。嚮に開塲をしたる我上を。今詳に盡さん歟。我阿懐は骨肉の。恩愛なきにあらざれば。客扱ひにはせられねど。阿爺は素是贋物にて。親類滚しに彼百金を。久しくなるまで竟に遞與さず。剰往る比。城内にて試撃の折。我愆て落馬して。腰の骨を折きしより。阿爺はそれを科にして。疾死ねかしといはぬばかりに。只難面のみもてなされたる。怨なきにあらねども。親といふ字に勝よしなければ。蚘を押えて愈るを俟しに。四五日前より稍瘥りて。百里の路もゆき易ければ。先や他郷に走らんと。尋思をしつ丶。阿懐に。談じて枸神の百両金を。受取らまく欲し丶に。然しも婦人の淺はかにて。阿爺と肩を比べにけん。手實を引裂棄られたり。腹立しさは涯もなけれど。敵手は親なり婦人なり。いふ甲斐あるべき者ならねば。阿容々々と告別して。軈て那里を立去りしは。今日亭午の時候なりき。非如手實を破られても。宿六といふ證人あれば。倶に國守に訴て。百両金を取らでや已ん。と思ひつ丶。今來る途にて。又克念へばそれも亦。迂遠にて埒開がたけん。亓には優て手短なる。主張なきにあらねども。初對面なる和主には。這肝膽を吐かたかりと。いはれて盆九郎眼を睜りて。そは亦聞えぬ事なりかし。我小父ながら宿六は。老邁にて役に達べくもあらず。任は猶子の如し。錢になるべきことならば。和君の資

より。年貢の未進。村には借財。せん術のなき隨に。我身は久しく夫役に參りて。城内に在りしかど。僅に糧を賜るのみ。酒も得飲ず。寒天に。袷衣一領で藻鹽草。掻集めては亦略らるゝ。鬪錢境には造化歹くて。西へも東へも身の振がたさに。一霎時暇を給はりて。かへり來ぬれば又借財に。債られて術なさに。村長刀禰に振向けて。今日這家を賣渡ししかば。我有にして我有ならぬ。這里に寢るも今宵のみ。明日は又城内へ。かへり參りて夫役部屋の。厄會にならばや。と思へば今朝より氣を腐らして。肱を枕に抱火盤。炭團と共に瘦るまで。現に苦の絶ぬ世にこそ。と喞言がましき身上話に。朱之介も嗟歎して。开は妙ならぬ事なりかし。我も亦。宿六叟の知られし如く。彼枸神の一義より。絶て久しき母刀自と。今の阿爺に環會ふて。开が儘同居したれども。といひつゝ外面見かへりて。はや日は暮なん最寒かり。有斯るべしとは知らずして。齎したる酒茲にあり。夜食代りに酌替して。夜と共に話すべし。是温めずや。と拿抗て。出す件の酒罇酒菜を。盆九は見つゝ含笑て。こは逆なる御造作にて。反て痛み煎鍋も。燗鍋も皆售竭して。酒盃もあらずなりしかど。貧乏墟は身を離れず。輾轉て御坐す。是にて事は罇の酒。移して尻を焼てん。とうち戯れつゝ纔なる。蒼柴地炕に折焼きて。稍煖る墟酒。茶碗一箇を敗折敷に。酒菜も載る竹の皮。松にはあらね杉箸添て。迭に酌をとり膳に。彼一椀。我一椀。献しつ酬えつ手袂より。はや暮にき。と柄火燭して。四下を光らす夜酒醼。盆九郎は

笑ひて。否今の言は戯れのみ。然らば我計較の。奥の院をうち開ん歟。耳をおこせ。と曳よせて。今既にいひつる如く。敵手にならぬ阿爺の吝嗇。血を分られたる阿懐すら。形の如くの造化なれば。左ても右ても商量盡では。枸神の價百兩金を。渡さるゝ事にはあらず。所詮今宵潜入りて。阿爹の金銀の有涯り。掻攫ひて走るとも。親の物は子の物なり。鼠むに似て盗むにあらず。差引出入過不及なしの。算帳を消されんのみ。是等の事は我身單にて。做しがたきにあらねども。いまだ飽ず思ふよしあり。阿爹が養老種にとて。愛る一箇の螟蛉女あり。其名を晩稲と喚做して。年は二八で十二分の。縹致這頭に稀なれども。我又其奴に怨あり。兀自の腐骨折序次に。宿鳥の晩稲を掻抓みて。京歟浪華へ將てゆきて。娼妓に售らば。五六十金の。身價は得易かりてん。この義を和郎に賴むなり。今宵阿爺は或病架の。床徹にとて招れて。酒を裝るゝ該なれば。かへさは必眞夜中過ん。子二刻の時候。我と和主と。那里にゆきて窺ふて。我は背門より潜入りて。阿爺が納戸に秘措ぬる。款冬花をものしてん。和主は前門の頭なる。竹牖を乘て裡面に入りて。先脱路を啓くべし。而して玄關に潜入らば。其次は中間なり。又其次は出居の間にて。左りは庖湢。右は納戸なり。晩稲の臥篭は納戸にあり。和郎は咱等に斟酌せで。晩稲に蚤く布囊を。銜せて肩擔出しねかし。出合ふ地方は圓通河原の。材木の蔭にて俟ん。和主はやくは其首にて等ね。辛苦錢は等分なり。よくせよかし。と呫々。言詳に說示せば。

助にならざらんや。とばかりにして照据なくは。猶も疑ひ思はれん。要こそあれと。奥の方より。敗たる扇箱をいだし來つ。开が儘朱之介に示していふやう。我家祖傳の什物なり。是を質として和君に預けん。先見給ひね。と拿出すを。朱之介受取て。燈下にて熟視るに。小柄附たる刀子にて。青海波の三字銘あり。小柄は則全白金にて。波濤に知鳥の高彫あり。朱之介冷笑ひて。盆九然ばかり胡詐をな盡そ。こは世に稀なる名刀なるに。假令先祖傳來なりとも。貧農の和主等が。今まで藏め置べくもあらず。必別に來歴あらん。隠さで告よ甚麼ぞや。いかにぞやと詰らるゝ。盆九は困じて頭を掻て。爾か見られては脱るゝ路なし。其刀子はいぬる比。咱等がものしつるなり。开を詳に説く時は。彼城内にて試撃の折。咱等は茶番の夫役にて。西なる集會所に在り。其日大江と歟いふ少年の。中刀に附たる這小柄の。錢になるべく思ひしかば。久しく隙を窺ひしに。彼人腰に放さねば。手を下すよしなかりしに。晝餉の割籠を披れし折。ものしつる者即是なり。なれども蚤く是を售ば。立地に人に知られて。事の破れになりもやせん。と思ふの故に秘置しを。今拿出して和君に見するは。赤き心を知らせんとてなり。外へな漏し給ひそ。と眞實立て叫くを。朱之介は又冷笑ひて。膽魂は見どころあれども。开は只刀子細工にて。我片腕に負むに足らず。先はや是を斂めよ。といひつゝ投返す刀子を。盆九郎は本意なげに。扇箱に藏めても。治りがたき口の咎。漫なりきと呟けば。朱之介うち

す。當下盆九郎は。籬笆を乘。內に入りて。先前門なる樞戸の鎖を外し。戸を密と開きて。脱路に便りよくしつ。又玄關の戸を外して。納戸を投てぞ潜入る。この夜吾足齋の宿所なる。阿夏の老苧は晩稻と共に。良人のかへるを俟けるに。既に亥中は過れども。門の戸敲く音もせざれば。晩稻は遂に允されて。納戸に入りて枕に就きぬ。老苧は獨細やかなる。燈下を掲げつゝ。單物の本を讀見て在りしに。更ゆく隨に寒氣に堪ねば。置炬燵に大火桶なる。火を拿移しつ蒲團を被て寢るとはなしに脚踏入れて。横臥しより程もなく。そが儘熟睡したりしかば。前後の門より盜兒の。入るを夢にも知らざりけり。爾程に朱之介は。案內しつたる上なれば。吾足が家の裏手より。板塀を乘。松を傳ふて。庭に閃りと下立て。左右して檐廓なる。戸を一枚推開て。納戸へ潜入る程に。盆九郎も亦茲に來つ。晩稻が枕の頭なる。圓行燈の火光にて。面を對して頷くのみ。朱之介が今撈らまくする。樫木戸架の鎖固ければ。盆九郎も手傳ふて。力を勠して揉斷捨るに。晩稻は方僅睡端にて。且年少ければ。嗜睡きを。朱之介は覺ずやある。と見かへりながら指さし示せば。盆九郎はこゝろ得て。晩稻の夜被を掻拿蚤く。發し蒐れる勢ひに。晩稻は忽地驚き覺て。吐嗟と叫ぶそが口へ。手拭銜する布囊。掙扎く兩手を扼りて。屏風に掛たる帶をもて。繰々纏に最緊しく。綁縮めて動かせず。开が間に朱之介は。戸架の內なる小簞笥を。撈りて奪ふ財囊には。金二褁の重みあり。かくあるべしと豫より。思ひしとよ。

盆九郎は幾回となく。頷きながら含笑て。そは最妙なり。こゝろ得たり。初更を過して這里を出なば。子の時候必那里に迨らん。又喫べし。と地坑なる。壜兒をやをら掖出し見て。噫鈍や無慙やな。長談に心引れて。纔に殘る一壜を。煎酒にこそしたるなれ。といひつゝ自酌に茶碗に受て。吹きつゝ三口に喫乾して。卒とて献せば朱之介も。興に乘して又一霎時。倶に醉をぞ盡しける。現同病相憐み。同氣相求め得たる歹人の。一面にして故舊の如く。堯を吠ぬる盜跖の。犬自物なる身の好歹を。迭に知るや。白布の。犢鼻褌の端を顯すまでに。酒に寒苦を忘草。心の鬼の醜草も。冬枯れぬらし長き夜の。遠寺の鐘に深初て。既に時分になりしかば。朱之介は盆九郎を。いそがし立て出まくす。當下盆九は身を起して。身整して。且いふやう。我身に寸鐵なかりせば萬に一人に知られて。逐るゝ事のあらん時。何をもて敵に當らん。撮小なれども物したる。青海波の刀子茲にあり。是究竟。と拿抗て。折敷に殘る竹の皮を。三折に卷て鞘にしつ。那刀子を懷に。楚と挾めて立出れば。朱之介は旅中刀を。腰に帶つゝ袱包を。引提ていそぐ夜の路。颪し寒き望月の。影明ければ惑ひもせず。圓通河原を過る時。朱之介は菅笠と。袱包を。其頭なる。建し材木の蔭に隱すを。見かへる盆九は歩を駐めて。大哥かへさに取る爲歟。といふ間に朱之介は。走り就つゝ去向の首尾を。諜し合してゆく程に。夜は子の初刻とおぼしき時候。吾足の門に來にければ。朱之介は相別れて。背門より潛入らまく

山峽の。腸を斷つ鮮血の絳。吾足は人や錯にけん。と思へば躊躇ふ幵が程に。盆九は晩稲を投棄て。懐なる刀子を。拔出しつゝ吾足の脇を。小柄も徹れと。丁と刺す。刺れて吾足は苦とばかりに。臀居に撻と仆るゝ程に。盆九は刄を拔取りて。跳越つゝ驀地に。外面投て逃去る折から。這頭を過る少年あり。是則別人ならず。大江杜四郎成勝なり。今宵も青海波の。刀子の。在處を撈り知らまくほしさに。峯張柰六郎通能を將て。石見介好純と共侶に。甲夜より市を涉獵つゝ。更闌てかへる路程。料らずも吾足の門を。過る折から門内より。突然と出る暴漢あり。右手に刄を執たれば。賊なるべしとはやく猜して。去向に立て聲高やかに。やよ留まれ。といはせも果ず。盆九郎は。刀子を。振晃めかして走蒐るを。四郎は閙がず身を反して。利手を捉て撲地と蹴る。蹴られて盆九は刄を捨て。筋斗りつ一丈ばかり。前面へ撻と仆るゝ折しも。後れて來ぬる柰六に。杜四郎聲を被て。峯張其奴を綁ずや。といふに柰六こゝろ得て。起んと掙扎盆九郎を。捕て壓へて動かせず。腰に准備の早繩を。手繰出しつ犇々。と緊しく結扭て推居けり。是時高嶋石見介も。挑燈の蠟燭を。途に接易て來にければ杜四郎見かへりて。只今怪しき暴漢を。搦捕たる事の顚末。箇様々々と告知らしつ。石見介が携たる。圓挑燈の光りを借りて。今暴漢が振捨たる。刄を索ねて拿抗見るに。こは疑ふべくもあらぬ。三十日夜索難たる。青海波の刀子なりければ。杜四郎の歡び。いへばさらなり。石見介も柰六郎も。欣然とし

といへばえに。喦に集るてふ暴鷲の。雛猴を抓むに異ならぬ。盆九郎は音に泣く晩稻を。小腋に楚と抱き揚て。外面投て出る時。阿夏の老苧の枕方なる。火桶に撲地と跌ければ。上にありける眞鍮藥鑵の。瓦辣哩と墜て灰さへ茶さへ。烟を起て散亂す。老苧は是に驚き覺て。身を起しつゝ盆九郎を。見つゝ吐嗟と膽を潰して。戰れても心利たれば。墜たる藥鑵。鐵火箸を。兩手に拿てうち鳴しつゝ。命を涯り聲限りに。賊有々々と叫ぶ程に。合壁なる津問屋の。主人はさらなり旅客まで。事ありけりと驚き覺て。霎時もあらず咸起出て。庭口傳ひに片折戸を。推つ敲きつ入まくす。浩處に吾足齋は。彼病架にて強られたる。酒に醉ても本性錯はず。夜深てやうやく辭去りて。單宿所へいそぐ程に。小謠曲唄る生醉の。一步は高く一步は低く。只是踉々蹌々と。辿り着ける己が門を。と見れば樞戸開きてあり。訝りながら找み入れば。玄關の戸も亦一枚。外されたる歟。寄掛てあれば。いよ〳〵心驚きながら。开が隨にうち登る程に。盆九郎は縛膝げし。晩稻を小腋に掻抱きて。撞見兒に吾足齋に。磤と相値ふ迭の驚き。前後へ退く兩三步。吾足は透さず聲立て。盜兒まて。と引提たる。小挑燈を衝と刺出せば。盆九は面を見られじ。と左の拳を拌して。挑燈撲地と打落す。闇夜は善惡なし虚々實々。間もあらせず吾足齋が。拔き晃めかす刄の雷電。盆九は抱きし晩稻を盾に。兩手に擧て受留る。須舍を擊たる刄の鋭味。憐むべし二八の少女は。胸の邊を深痍の一刀。叫びもあへぬ猿纈は。只是巴蜀

つゝ。呼門へども。奥には人の聲するのみ。出迎る者なかりけり。是より先に末朱之介は。晩稲を掠奪るべき事を。盆九に任して見かへらず。只彼金子をものせんとて。辛くして小簟笥なる。財嚢を撈り得て掖出すに。最重やかなりければ。憶はず滿面笑を含て。搔抓みつゝ身を起す程に。次の坐席に臥たりける。母老苧が睡眠覺て。何にかあらんうち鳴しつゝ。賊有々々と叫ぶにぞ。朱之介は心慌て。面を見せじと思へども。其頭を過るにあらざれば。庭に出る脱路なければ。只得其次の間へ。出るを老苧は驚きながら。燈火の光に看一看て。开は珠にあらずや。と喚も得果ず身を起して。推留めまくしてければ。朱之介は彌慌て。螽の如く檐廊へ。身を跳して走り出て。庭へ閃りと飛下る。勢力劇しかりければ。憶はず柱の肱壺鐵に。持たる財嚢を掛留られて。紐は斷離れて手に殘り。財嚢は柱に吊りてあるを。立戻りて拿る暇なければ。庭の折戸を蹴破りて。逃去まくする程に。隣家なりける津問屋より。庭口傳ひに人多く。這方へ來ぬる挑燈の。火光間近く見えしかば。朱之介は度を失ひて。進退玆に窮るものから。案内知たる上なれば。庭なる涸井に身を躱して。透を得ば塀を乘て。逸去まく思ふのみ。いまだ便を得ざりけり。爾程に津問屋には。老苧が烈しき喚聲と。打鳴す物の響の。常ならざるに驚覺て。事ありけり。と主も小厮も。挑燈を引提。六尺棒を衝立て。裏手傳ひに來にける程に。當晩同宿の旅客等も。思ひ合するよしやありけん。皆共侶に起出て。主人の後に従ふて。

て倶にいふやう。原來這奴は前月望の日。大江家寶の刀子を。竊み拿りたる賊なる事。問ずして知るべきのみ。といへば杜四郎點頭て。只其罪あるのみならず。這刀子にも其奴が衣にも。鮮血多く塗れたれば。憶に今霄竊盜の爲に。這家に潜入りて。人に傷たるにぞあらんずらん。今緊しく敲かずは。何をもて實を吐かん。蚤く拷問せよかし。といふに桀六阿と應て。腰なる鐵扇拔出して。息をも養れず撻懲せば。盆九郎は苦痛に堪ず。その身の素生云云。と具に告て又いふやう。御推量の如く。其刀子は。衆少年の試撃の折。己が出來心にて。竊拿りたりけれども。這頭で售らば其主に。早く知られん事を怕れて。深く秘措き候ひしに。這里の家主人吾足齋にいはで。己がたき怨あれば。今霄詣來て彼人と。角口の怒りに乘して、其刀子をもて痍を負して。走り去らまくしたる折。刀禰原に撞見ふて。搦捕れ候ひしは。天罰にこそ候はめ。といふを石見介冷笑ひて。大江主。聞給ひし歟。今這奴が招了する所。刀子の事は實なるべく。吾足齋の事は信がたかり。といへば桀六も倶にいふやう。件の吾足齋延明は。俺等相識ならねども。彼末朱之介の乾父なりといふ。人の噂に聞しのみ。今宵其門前にて。他に仇し丶賊を捕へて。青海波の刀子を。とり復けるも最奇なり。といふに杜四郎再議に及ばず。現に這盜兒の片言を。詰りて時を移さんより。疾這家に呼門て。事實を探るにしくことあらじ。といふに石見も桀六郎も。しかるべしと應つ丶。倶に盆九郎を牽立て。開さてぞある角門より。找み入り

隨即父女の亡骸を。幷が儘坐席に舁入れて。藥よ灸と罵りて。倶に介抱しぬる折から。外面に人ありて。幾回となく呼門しを。事に紛れて誰もかも。耳には入らでありけるに。津間屋の主人が稍聞つけて。訝りながら小厮を出して。其來意を問するに。一霎時ありて三箇の武士。一箇の暴漢に。重索掛たるを牽せつゝ。件の小厮を案内にして。主人の妻に對面せんとて。軈て奥まで來にければ。老荸はさらなり。津間屋の。主人も其人々を。知らねば心訝りながら。先上坐に席を讓りて。又其來意を請問へば。一箇の武士答へていふやう。俺は當國守家の兵頭。高嶋石見介好純是なり。又是なる同伴の兩少年は。武者修行の爲この地に來ぬる。大江杜四郎成勝。峯張梁六郎通能是なり。と名告ば杜四郎も倶にいふやう。俺いぬる比城内にて。乘少年の試撃の折。我腋挿の刀に附たる、家寶の小柄を喪ひしかば、高嶋主と相謀りて。夜々市に渉獵程に。方僅這頭を過るをり。這個盜兒盆九郎が。手に最小なる刃を握持て。是の門内より走り出るを。心ともなく見てければ。遣も過さず搦捕て。其事實を責問しに。這奴は枸杞村なる。古人留守七の。獨子にて。盆九郎と喚做す歹人なる事も。俺刀子を竊拿たる事も。招了によりて知られしかば。其刀子は立地に。とり復して茲に在り。と告れば梁六其語を次て。爾るに件の刀子にも。這奴が衣にも血の塗れしかば。故ありぬべく思ふをもて。猶も緊しく責問しに。這家主人吾足齋に。怨ありて口論の折。瘢を負せたりといへり。其事信じかたければ。

庭門まで來にけれど。內に入らんはさすがにて。开が儘樹蔭に立集ひて。事の容子を知らまくす。老苧は是を知らねども。今津問屋等が來ぬるを見て。泣聲立て。やゝ起立。疾來給ひね。今宵我家の前後の門より。兩箇の盜兒潜入て。倶に納戸に在りし時。箇樣〳〵の事により。奴家が睡覺しかば。恐怖忘れて皆さまを。喚集へまくせし程に。件の一箇の盜兒は。蚤く外面へ逃去りぬ。又一箇の盜兒は。庭へ走出たれば。そも既に逃亡けん。今は影だに見えずなりにき。猶心許なきは。方僅納戸にゆきて見るに。晩稻は臥簞に在らずなりぬ。戸架は鎖を毀れて。良人の貯祿の金子などりなく。竊み拿られたりける歟。簞笥の內はまだよく見ねども。狼籍いふべうもあらずかし。又只その事のみならで。方纔玄關の方に當りて。人の挑む如き音聞えしに。其後はいかにあるらん。ゆきて見ばやと思へども。然しも物のおそろしくて。胸のみ騷がれ侍るかし。と告るに驚く津問屋の。主人も小厮も眼を睜りて。开は安からぬ事なりき。いで〳〵といひつゝも。亦挑燈を振照して。主僕玄關にゆきて見るに。思ひがけなき吾足齋は。深痍をや負たりけん。右手に刃を持ながら。鮮血に塗れて仆れて在り。又其身邊に女兒晩稻は。帶もて手足を括られて。胸より腹に刀瘡あり。共に生べうもあらざれば。こは什麽如何。とうち騷ぎて。老苧を呼て云云。と告るに老苧は胸のみ潰れて。淚の外にわくよしもなく。丈夫と女兒の空しき骸を。抱き起しつ呼活れども。甲斐あるべうもあらざれば。津問屋の主僕手傳ふて。

闇に紛れて小女を盾に。受し刃尖。憐むべし。小女の深痍に彼人は。違ひぬる歟と思ひけん。撓むを得たり。と懐なる。刀子をもて彼人の。脇腹爿煞と刺仆して。角門より逃去る折。殿們に撞見ふて。搦捕れて今さら後悔。別に仔細は候はずといふ。招了分明なりければ。阿夏の老莘は羞たる色あり。又石見介等にうち向ひて。聞くが如きは今宵の禍事。我子といはんも耻しさ。人にして人ならぬ。朱之介の悪心より。這盆九郎さへ荷擔して。丈夫も女兒も横死の折。殿達の出來まして。地方も去らず我寃家を。搦捕せ給ひしは。歎きの中の歡びなりき。といふ間に隣家の主人も。找出つゝ倶にいふやう。小可は合壁なる。客店の主人にて。津問屋集三郎是なり。嚮に這女房が。慌忙しき喚聲に。うちも措れず小厮等を將て。走來ぬる甲斐もなく。早盗兒等は逃亡て。吾足と女兒の横死を知るのみ。相應しき御用も候はゞ。承り候はん。仰付らるべうもや。といふ間に石見介は。身を起しつゝ吾足齋と。晩稲の金瘡を得と見て。杜四郎等に示していふやう。大江峯張是見給へ。晩稲とやらんは深痍にて。膽胃の二經斷絶したれば。左ても右ても生べからず。吾足齋は刺瘡にて。こも亦必死の深痍なれども。鳩尾猶溫にて寸口の脉わるに似たり。抑我家昔より。仙傳不思議の神藥あり。約莫刀瘡にて死したる者。いまだ三日を經ずもあらば。其藥を用るに。一旦甦生せざる者なし。縱令其命長からずとも。或は後事を辨じ。或はよく遺言する者。兒孫の爲に裨益あり。只頭を撃落されし者と。五臟を

事の實を知るべき爲に。扨こそ牽もて來つるなれ。といふに老苧は涙を斂めて。件の三士に向ひていふやう。奴家は老苧と喚れたる。吾足齊の妻にて侍り。今日しも良人は病架に招れて。更闌るまでかへり來ず。折から兩個の盜兒あり。其一個は我夫の。貯祿のある所を。豫知りけん納戸に入りて。財嚢を引提て背戸の方へ。出るを見しのみ。往方を知らず。又一個の盜兒は。女兒晩稻を搔擾ひて。玄關の方に出去りしを。奴家は楚と認めねども。其折良人のかへり來て。厮戰ふて親も女兒も。倶に深痍に息絶たる歟。开は何なりけん知らず侍り。と告るに石見も杜四郎も。楽六も倶に點頭て。それにて事皆亮査したり。やをれ盆九郎。吾足齋と晩稻とやらんを。斫殺しける顚末を。招了せずや。と責問へば。盆九は頼ることを得ず。跪きつゝ陳ずるやう。今は何事をか隱すべき。今日しも彼末朱之介が。我枸杞村の宿所に來て。密やかに相譚ふやう。乾父吾足が。吝にて。枸神の價百金を。今に渡さぬのみならず。實母すら慳貪にて。手實を引裂捨られたれば。今はしも堪がりかり。今宵家内に潜入りて。咱はある涯りの金銀をものせん。汝は晩稻に布嚢を。銜せて肩駝出しねかし。咱又彼小女にも怨あり。利得の金は等分なりと憑れしより心惑ひて。倶に納戸に潜入りて。朱之介は那這と。搜りて財嚢を引出し。己は晩稻に布嚢を。銜せて手脚を緊しく縛りて。肩にうち載て出去るをり。主人なるべしかへり來ぬる。玄關の頭にて。盜兒入りぬと思ひけん。罵咎めつゝ刀を拔きて。繫んと找むも野干玉の。

是後の誠に。做るよしあらんを。俺渾家も。人々も所給へかし。誠に善悪應報の。終に脱れぬ。理りを。物の本にも寫してあれば。孰も知りたる事ながら。慾に惑へば思ひも出ざる。人我凡夫の愚さよ。蓋當夏晩稲の悪瘡。療薬術計盡し折。住吉なる神主の。家に其薬ありと聞えしかば。三伏の日の暑も數はず。我身那里に尋ゆきしに。薬方をのみ傳授せられて。枸神一枚用ひなば。即效疑ひなきものなり。但し枸神は。和漢に稀なり。價百金ならざりせば。得かたからんといはれたり。奇方を得たるは嬉しけれども。俺に百金の貯祿なし。いかにすべき。と思難て。旅宿へかへる夕月夜。住吉の郷を距ること。十町ばかりなる畷路を過る程に。と見れば去向に兩個の少年。一箇の財嚢を爭ふて。挑戰ふ程こそあれ。月額の迹最長き。一人は竟に勝ずやありけん。持たる財嚢を捉られじとて。後方逈に投遣りたり。折から照る月雲隠れして。朦朧と做る隨に。俺竊窺ておもへらく。得がたき枸神ありとても。そを買拿るべき百金なくは。何をもて本意を遂ん。那財嚢の重やかなる。投らるゝ時大地に應て。音せしにより推量るに。東西多きを知るべきのみ。今是をしも採らずもあらば。寶の山に入ながら。手を空しくして歸るに似たり。嗚呼爾也。と身勝手に。惑初たる不義の慾。徐哩々〱と近就きて。件の財嚢を拿まくする時。手に障る小石二三隻あり。當下俺又おもへらく。財嚢を這儘掻攫ひなば。他等は必外人に。奪れたりと思ふべし。然ては今より後々まで。背安からざる所あり。要て

破られたる者は。其效驗あることとなし。正に是軍陣必用の奇藥なれば。咱等生平に腰にして。今も猶茲にあり。是をもて吾足齋を一霎時なりとも。活さん歟。といふに四郎も桒六も。倶に感悦大かたならず。开は奇妙なる仁術なり。しかるべし。といそがせば。石見介敢遲疑せず。則老苧と集三に。事云云と宣示すに。相こゝろ得て身を起しつ。集三は一條の。布を索ねてもて來つゝ。吾足齋の痍口を。三四重埜と纏程に。老苧は茶碗に最淸き。水を汲拿りてもて來にけり。當下石見介は。腰に吊たる藥籠を。啓きて出す彼仙丹を。吾足齋の口中に推入て。件の水もて灌下せば。津問屋主僕は吾足齋を。抱き起しつ老苧も倶に。聲を合して喃々と。呼活ること半晌許。其聲やうやく耳に入りけん。吾足齋は忽然と。眼を睜り左見右見て。原來俺身は死したりし歟。といふに老苧は歡しさに。携り附つゝ喃我佚。心地正可に做り給ひし歟。今宵おん身に痍を負せたる。寃家は枸杞村の盆九なりしを。這殿達に搦捕れて。牽れて今猶茲に在り。晩稻の横死は。おん身の愆。親の刃に身を果したる。事の起りは朱之介が。枸神の價百金の。空になりしを怨みけん。盆九郎さへ伴ふて。子二刻の時候潜び來て。おん身が納戸に秘置き爲ひし。財嚢を奪ふて逃去りにき。晩稻の上は箇樣々々。おん身の甦生は茲にます。高嶋大人の御庇にて。仙傳奇特の神藥の。即效にこそ侍るなれ。と告るに頷く吾足齋は。憶はずも嗟嘆しつ。形貌を改め膝組直して。石見介等に謝していふやう。告るは面なき事ながら。又

衣裳調度に做すにはしかじ。と尋思をしつゝ朱之介を。开が儘に留め在らせて。敢枸神の價を遞與さず。其後城内にて試撃の折。口も八調手も八挺なる。朱之介に勝利あらば。俺立身の階梯に。做るよしもあるべし。と思ひしは。空憑にて。大江峰張兩少年に。戰ひ負て。剩。落馬の撲傷に病臥たれば。出ていねとはいひ難て。只厭しく思ひしに。老苧は其子を陳難て。懲さん爲歟。枸神の手實を。無心に引拆棄しより。朱之介は親を怨て。告別して出てゆきて。今宵夕人盆九郎と。共に納戸に潜入りて。彼一百九十五金を。奪ふて走り去りたる歟。盆九は晩稻を豪奪して。玄關より出てゆく折。俺憶りなくかへり來て。闇きに迷ふて撃刀に。晩稻を害れしのみならず。俺身も反て盆九の爲に。必死の深痍を負ふたりし。緣故を原れば。色情利慾兩ながら。猿馬狂ひし俺咋非にて。君に仕て忠ならず。親に仕て孝ならず。友には信なく。子に慈なき。果は故郷に住托て。他鄉の鬼に做るまでに。這禍害にあふみ野を。露の命の置き所。慾に惑へば。身は闇き夜に。人の爭ふ財囊の金を。搔攫ひつゝ幸あり。と愛歡びし罪科を。思へば盆九朱之介等の。竊盜無慙の惡行と。相距ること遠からず。五十步百步といはまくのみ。倘他等をのみ惡とし憎まば。鄙語に云。豕を抱て。臭きを忘るゝ。類に似たり。と今やうやくに。悟り得ぬるも遲からずや。といふ事每に。息吻きあへず。實に必死と見えたりける。這段文尙多ければ。又下回に。解分るを聽ねかし。

それ。と尋思をしつゝ。遽しく財嚢を開きて。有ける圓金二裹を。天の與へと懐へ。楚と挾めて。件の小石の。程よきを二隻拿抗て。开が儘財嚢に入易て。手はやく紐を結びつゝ。舊處に閣きて。竊歩しつゝ樹間に入りて。蚤くも其首を立去りつ。當晩浪華の旅宿にて。單孤燈の下にして。件の金子を數まへ見れば。一百九十五兩あり。是もて枸神を購得ても。尙八九十金の餘りあり。と思へば心つよくなりて。浪華はさらなり。京左界。大津草津の盡處までも。約莫藥店のある涯り。をさ〳〵枸神を徵めしに。竟に亦あることなければ。只得宿所にかへり來つ。俺妻阿夏の老苧にすら。件の金子の實事を告ず。這回京にて憶りなく。一舊知己に逢ひしより。多く資料を得たりとのみ。詭示して更に又。この觀音寺の。城下より。枸杞村久禮畑に至るまで。枸神を藏弃する者あらば。價百金に買取るべしといふ。其義を多く書寫して。隈もなく徇示ぇしに。三池の莊客宿六の汲引にて。枸神一枚を得てければ。軈て晩稻に煎用るに。一夜の間に惡瘡愈て。疥迹だにあらずなりしかば。俺歡び知るべきのみ。然れば其次の日に。宿六の倶して來ぬる。枸神の沽主朱之介に。はじめて對面しぬるに及びて。おもひきや朱某は。俺妻老苧の實子なる。末松珠之介ならんとは。面忘るゝまで年を歷たる。再會の歡びに。就て主張當初に異なる。俺肚裏に思ふやう。朱之介は俺乾兒にて。晩稻の爲に義兄なるに。他人がましく今さらに。枸神の價を取らするは要なし。俺貯祿は異日亦。晩稻の所緣を徵る折。

新局玉石童子訓巻之十四

東都　曲亭主人口授編次

第四十四回

因果覿面嚢金故主に復る
宿縁不空孤孀舊家に寄る

阿夏の老苧は吾足齋の。舊惡懺悔の顛末を。听くに惑ひは晴ながら。霽ぬ涙の夜の雨。袖のみ濡れて術なきを。思ひ復して。喃咱伕。今はじめて知る金子の事。然あるべしとは思ひもかけず。只朱之介をのみ誡め難て。枸神の手實を引裂棄しは。心裡恥しく侍るかし。是に就きても痛しきは。親の刄に身を果したる。晩稲は素より行状に。兎毛ばかりも疵はなき。心操さへ縹致さへ。美し過ぎて陽炎の。命短くわらずや。と思ひ過しは親の愚癡。富も榮ん壻がねを。神に佛に願言の。果は歎きの森となる。實子よりもいとをしさの。千百十寸穗の繁薄。招く甲斐なき魂招ひ。かへらずなりし別路は。親の因果の子に報ふ。例ありともいかなれば。親さへ子さへ同じ夜に。簷の垂氷の劔太刀。身を殺しぬる哀しさよ。といへど答へは亡骸を。搖動して繰かへす。倭文の苧環今茲に。輪々て因果覿面。昔阿夏が卜問し。彼神卜の讖文に。子而

新局玉石童子訓卷之十三 終

追放せらるゝを憐みて。楽六をもて金五兩を。贈らせんとて追せし事。この宵十三屋の櫛店にて。落葉の媼の悲泣の折。朱之介がかへり來て。裏面へは入らで竊聞しつゝ。其頭に措れし財嚢の金を。偸拿て走るをり。楽六も亦かへり來て。朱之介の不義の爲体を。既に窺知りたれば。跡を跟つゝ畷路にて。朱之介と力戰して。投懲し踩躙りて。九四郎の取らせよと。いひし金五兩を投與へて。財嚢を索拿抗て。十三屋へもてかへりて。落葉の媼に渡しゝに。孰か知るべき財嚢の内なる。二裹の金は金ならで。兩箇の小石なりければ。人々疑惑せざるもなく。就中我踈忽を。いひ解よしのあることなければ。兄九四郎の贖ふて。其内中なる金百兩を。落葉の媼に返しゝかば。後安きに似たれども。其疑ひは我もかも。今に解よしなかりしに。原來彼折財嚢の金を。奪ふて小石を入易しは。延明和老でありしよな。といはれて驚く吾足齋。寔に然なりとばかりに。阿夏の老芧も共侶に。差て頭を低て居り。當下杜四郎成勝は。石見介に會釋して。找み出つゝ老芧に向ひて。喃阿夏の老芧とやらん。俺又楽六の舌に代りて。驚かすべき一話あり。和女郎の前夫と聞えし。末松木偶介の寳女。乙柚の小夏は。年九歳の秋。磨鍼嶺の賊難に。千仞の深谷へ投降されて。死すべかりしを神佛の冥助にやよりたりけん。俺爲には外祖父なる。峯張九四藏に救ひ拿られて。其名を乙藝と喚更られ。成長なる後九四郎と。夫婦に成りて今も猶。住吉の里の宿所に在り。折に觸れては父木偶介と。和女郎の事さへいひ出て。

非子非親是親。とありしは晩稻朱之介等の。上ならずや。と思ひ惑ふ。無明の醉のまだ醒ぬ。婦女子心にとり亂しては。外看忘れし諄言を。津問屋主僕は慰難て。愀然たる开が中に。深痍に屈せぬ吾足齋は。頭を擡げ眼を瞬りて。やよや老芋。愚癡をないひそ。俺隱匿の報ひを思へば晩稻の横死も歎くに由なし。然るにても往る六月某の夜に。這に財嚢を爭ひし彼兩箇の少年は。何等の人にてありつらん。倘命あり時ありて。迭に名告逢ふ日のあらば。俺這首級を授んに。朝を俟たで消てゆく。露の玉の緒絕なん折に。稍本然の善にしも。返る懺悔は我ながら。無益にこそ。とばかりに。吻く息さへに苦しげなるを。枩六聞つゝ遽しく。盆九郎に掛たる索の。端を柱に結び止めて。找みよりつゝ吾足齋に。うち向ひてさそいふやう。はじめて候。辛踏生。斯いふ我は浪華より。大江杜四郎成勝に相從ふて。武者修行の爲這地に來つる。峯張枩六郎通能是なり。目今和老の懺悔を聞くに。彼夜一百九十五金の財嚢を。拿も復さんとて。連りに挑み爭ふたる。其一人は我枩六にて。件の財嚢を捉られじとて。後方遙に投遣りたる。其一人は別人ならず。和老の渾家阿夏刀自の。實子なりと聞えたる。末朱之介晴賢なり。とばかりにして言を盡さずは。猶疑しく思はれん。苦痛を忍びて听ねかし。件の一義は箇樣々々。云云の情由ありとて。落葉の媼が朱之介の。爲に慈善の事の顚末。又彼一百九十五兩の。金子の來歷をはじめにて。枩六の兄。十三屋九四郎の義俠の事。當日朱之介が東路へ。

しな。高嶋主には禮京さんを。須臾宥免を蒙りて。先急ぐべき事こそあれ。といひつゝ老苧にうち向ひて。喃阿夏の老苧刀自とやらん。目今和女郎のいはれたる。小夏の乙藝の良人なる。姓は峰張。屋號は十三。浪華で俠者一頭なる。九四郎は即俺なり。大江腋子に急要あれば。京の旅舍を渉獵盡して。這近江路にと聞えしかば。迹を追つゝ今日未後に。這里の隣りの津間屋を宿にしつ扨城内の消息を問撈るに。大江峯張兩少年は。城内なる高嶋主許止宿の事。幷に衆少年の試撃の事。和女郎の實子朱之介の事。和女郎の茲に在する事まで。知る人ありて告しかば。明日は夙めて這那を。訪はずやと思ひつゝ。長途の疲勞を憩へて在りしに。思ひがけなき今宵の忽劇。其名ばかりは豫知る。和女郎の上を心許なく。思へばうちも措れずして。宿の主人の尻に跟きて。自餘の客人共侶に。庭門まで來にけれど。内に入らんはさすがにて。那里に立て在りし程。吾足老の懺悔の條々。又朱之介の惡事の顚末。這盆九郎とやらんの事までも。心ともなく聞知りたり。就中感じ思ふは。幸踏生の懺悔なり。人臨終に舊惡を。よく懺悔しぬる者は。五逆十惡の罪戾も。都て消滅せざることなく。必成佛すべしといふ。佛說は然事ながら。懺悔のみして。或は偸み。或は人の東西を借て。返さずして命終らば。彼身に益ありといふとも。是其人に損あり。然ては眞の成佛とすべからず。就て我那里の樹下に在りし時。月明によりて。見て知りぬ。那簷廊の柱に吊りて。正に一箇の財嚢あり。我憶ふに。那財嚢は。

いとなつかし。とてうち歎きにき。其孝順を知るべきのみ。況落葉は。木偶介に。離別せられて再嫁らず。和女郎を怨る心なきは。世に稀なるべき貞女ならずや。其母女兒の孝貞實義を。天道憐み給ひけん。近曾住吉の十三屋にて。母女再會の歡びあり。それには異なる和女郎の薄命。所生の獨子朱之介は。性猾惡なれば孝ならず。反て二箇の螟蛉女。小夏と云晩稻と云。性美しく孝順なるも。一箇は逆路に生別して。年歷ぬれども。再會によしなく。一箇はまた陸奥より。養父母に從ふて。這地に來つる甲斐もなく。親の刃に命を隕せり。現に善惡應報の。遲きあり速きあり。速きは彼身に報ふべく。遲きは子孫に報はぬはなし。天理彰々。誣べからず。恐るべし〳〵。と説れて老苧は羞慚みて。默然たること半晌許。纔に貌を更めて。原來小夏は恙なく。花洛に遠からぬ。浪華の月の十三屋に。在りと聞くこそ嬉しけれ。浮世が儘になるならば。恥を忍びて見まくほし。そも許されぬ者ならば。切て其壻の刀禰に。逢ふよし欲得とうち托る。聲聞えけん庭の樹下に。立在たりける一箇の旅客。忽地に聲を被て。然な不樂給ひそ阿夏女郎。俺今對面すべけれ。といひつゝ檐廓にうち登りて。軈て坐席に找み入れば。人咸驚き怪みたる。丌が中に四郎柰六は。訝りながら其人を見れば。是別人ならず。十三屋九四郎なり。閨衣の儘に細帶して。逆旅中刀を佩たりける。思ひがけなき對面なれば。こはいかにとばかりに。遽しく席を讓を。九四郎急に推禁めて。和子はいよ〳〵恙まさずや。柰六も出かし

意表甚麼ぞや。と問ふを吾足齋聞あへず。いかでかは然ることあらん。返却は己が情願なり。宜しく計ひ給ひね。といふに九四郎領きて。件の圓金二裹を。拿て財嚢に斂る折から。庭の方より咳して。入り來る男女二三名あり。阿夏の老苧は訝りながら。誰也と問ひつゝ見かへれば。是則別人ならず。福富村なる阿鍵小忠二。又九四郎の乾兒なる。四擔等まで出て來つ。主客亦這問答に。憶はず時を移す程に。星の光りも彌寒き。曉天にぞなりにける。爾程に末朱之介晴賢は。今宵脱路を失ひて。只得涸井に身を躱しつ。透もあらば逃去らんと。悄地に念じてありけるに。其頭の庭の樹下に。人二三名立在て。久しくなるまで出てゆかねば。いよ〳〵頭を出すによしなく。心ともなく母屋なる。主客の問答を洩聞くに。盆九郎は杜四郎柒六等に搦捕れし事。晩稲の横死。吾足齋は。深痍を負たる懺悔の條々。思ひかけなき九四郎さへ。樹下より立出て。團坐に入りて議論の趣。意表に出ざる事もなく。又彼財嚢にありける金は。去る夏の夜吾足齋が。奪ふて小石の換玉を。柒六に抓せたる。神出鬼沒の機關を。今やうやくに曉得て。天魔を欺く歹人も。且驚き且呆れて。醉るが如く醒るが如く。惘然としてありける程に。長き冬の夜時移りて。早曉天になりしかば。心彌安からず。天も明ば見出されて。俺も亦盆九の如く。搦捕られて牽れやせん。いかにすべき。と思難て。頭を出しつ又隱れつ。木偶の桔槹するに似て。苦心限りもなかりしに。彼樹下にありける人の。やうやく出て。母屋に入

朱之介が偸み拿て。庭より出て逃去る時。憶はず柱の肱鐵などに。件の財嚢を掛止られて。心ともなく手を放ちけん。立戻りて拿る遑なければ。那身は蚤く逃亡て。財嚢は柱に遺しゝならん。俺這推量的中して。辛踏生の懺悔虚言なくは。財嚢中にあるべき金の。一百九十五兩なる歟。不足したる歟知らねども。其當初を推時は。這春大和の上市なる。落葉の刀自が朱之介に。沙金と唐布を買せんとて。齎したる金子なれば。辛踏生先非を勸解て。本主なる落葉の刀自に。其金子餘波なく返しなば。是ぞ眞の懺悔にて。幸にして盜賊の。惡名を削らるべし。這議甚麼。と譚ずるを。吾足齋も聞とりにけん。頭を擡げ眼を開きて。九四郎を見て片手を抗て。戰れつゝうち拜みて。適れ愛たき裁判なる哉。幸に那財嚢の金は。朱之介の手に渡らで。捉遺されしぞ歡びなる。やよや老苧。疾々。といふに老苧は應をしても。了得に羞て立離るを。津間屋集三こゝろ得て。身を起しつゝ檐廊に。出て件の財嚢を拿る時。猶庭の樹下に。立在たる男女二三名在り。集三是を透し見て。客人達其首は寒からん。母屋に登らせ給ひね。と呼被て先其財嚢の金を。九四郎に呈すれば。九四郎敢自由にせず。开が儘老苧に渡させて。云云と宣示せば。老苧は辭ふことを得ず。件の財嚢を解披きて。內なる圓金を拿出すに。紙に封じて二裹あり。其一裹は圓金百枚。又一裹は九十五枚あり。九四郎是を得と見て。又吾足齋に向ひていふやう。辛踏生。俺云云と論ずるとも。强て和老を窘めて。金を返せといふにはあらず。和郎の

介聞あへず。否。告訴の事は然るべからず。辛踏みづから新にして。罪を謝して返す金子なれば。不正不良の財にあらず。然るを愍に。守の憲斷に被る時は。事むづかしくなるのみならず。吾足齋は後々まで。盜賊の罪免るべからず。鄙言にいへる事あり。隱るに過て花を散し。磨〻に過て玉を碎く。硬直も亦時に由るべし。恁義を思ひ給はずや。と說れて九四郎再議に及ばず。更に老苧にうち向ひて。喃阿夏刀自。寔に和女郎の薄命なる。今より孤獨の人とならば。何人歟よく養ん。昔俺荆婦小夏の乙蓺が。受し養育の恩を思へば。今這金子の半分を折きて。贈らまほしき事ながら。いかにせん這金は。俺金ならぬを自由にせば。彼微生高が醯を乞れて。其隣なる醯を乞ふて。人に與たりといふに似たるべし。他の物もて巳を飾る。似而非仁義は俺要せず。這義は俺亦主張あり。異日又復談ずべし。といはれて老苧は跼然たる。頭を擡げて答るやう。昔小夏の五歳の比より。九歳になる秋の比まで。五稔母と喚れても。親甲斐もなく倒々に。彼には河原擀ぎをさせて。養れし日の多かりしに。養育の恩云々と。宣するこそ恥しけれ。と勸解を九四郎推禁めて。無益の口諠に天は明なん。俺は旅宿へ退るべし。和子と茱六には要事あれども。這里にて罄すべきにあらねば。明日芳舘へ推參せん。自餘の人達心を屬て。いかで主人夫婦の爲に。商量敵になり給ひね。と告別しつ財囊の金を。拿て懷へ楚と挾めて。四捴を俱して遽しく。津問屋へかへり去りしかば。石見介も卒退んとて。杜四郎

るを。月明にて竊に見れば。はじめに立出しは九四郎にて。其後なるは阿鍵小忠二。浪華の四摠等なりければ。朱之介は又驚きて。舌を吐き頭を撫つゝ。猶も四下を窺ふに。庭には人のわらずなりて。既に便を得てければ。井桁に閃りと手を掛て。潜び出つゝ塀裏なる。松を階子に攀登りて。塀を踰まくしぬる程に。楽六蚤く佶と見て。那朱之介が。と叫びも果ず。刀を引提て簷廊へ。出るを見かへる朱之介は。袖に准備の席工鍼を。拏る手尖く丁と撃つ。然しも修練の鉄鍰に。楽六喉がず身を反して。刀の柄に受留たる。程しもあらず朱之介は。身を跳らして外面へ。忽地撻と飛下りて。往方も知らずなりけるを。楽六は猶追んとて。背門投て出まくするを。九四郎急に喚禁めて。已ねく。开は要なし。人の歎きもあるべきに。搦捕て何にせん。といへば杜四郎も倶にいふやう。現窮寇は逐ふべからず。彼が偸み得ざりける。財嚢の金は茲に在り。そを追ふこと歟。と諫むれば。楽六僅に點頭て。故の席にかへりて居り。當下九四郎は。石見介にうち向ひて。高嶋主俺身總角なりし比より。久しく打絶たりけるに。斯荒々しき爲体にて。物稟さんは無禮なれども。諮まうしたき一義あり。這金一百九十五両は目今聞れし情由なれば。吾足齋の手より受拏て。落葉の媼に返すとも。けしうはあらぬ事ながら。一旦偸み拿られしより。早五个月を歴たりしに。這義を守へ告訴もせで。我私に和睦せば。後の聞えも影護くて。快らざる所あり。今訴ん歟。訟ざらん歟。恁義を敎給ひね。と問ふを石見

故にし事を思惟れば。世は夢ならずといふ者なし。奴家が今の爲體は。珠刀禰に聞れしならん。然るを亦思ひかけなく。隱田の事により。有司達より御下知あり。猛可に奴と小忠二を。召よせさせ給ひしかば。福富村の店舗は。措名と丁太郎に任用して。四五日前に這地に來つ。津間屋を宿にしてあるなれば。昨日おん身が背門の方へ。出給ひしを見出して。ものいはゞやと思ひしかども。珠刀禰も同居す。と小忠二のいふにより。まだ訪もせで在りけるに。胸の潰れし夜中の凶變。うちも措れず主人の後に。跟きて來にける甲斐もなく。かゝる歎きを見ることの。うれはしさよと涙啗む。脆き女子の袖の雨。外の時雨も寒げなる。小忠二も共にいふやう。珠刀禰は何といはれしやらん。嚮に那子に訪れし後。幾程もなく惡瘡の。病惱を豫知りながら。斷りいふて出し遣しは。黄金の岳父船積氏へ。憚るよしのあればなり。珠刀禰の放蕩無賴は。敵手になる者ならねども。然ればとて舊熟識の。おん身の落魄に行遭ながら。何でふ難面くものせんや。錢帛こそ心にまかさね。故翁大夫の在さずとて。隔るとな思ひ給ひそ。と慰められて又袖濡す。老孛は臉を推拭ふて。俺子のみかは良人まで。人ならね不軌の顛末を。知られしだにも面なきに。昔熟識と思召す。御好意こそ有がたけれ。といふ間に窗よりしらみて。鴉の聲してければ。津間屋主僕は這凶變を。疾里正に告んとて。庭門より出てゆきしかば。阿鍵小忠二は幵が儘に。阿夏の老孛を慰めて。撿使の來ぬるを俟なるべし。爾程に里正故老五保

等をいそがしつ。刀を衝立て身を起せば。柰六は盈九郎に。掛たる索を拿緊て。倶に玄關より出去る時。集三主僕は主人に代りて。門内までぞ送りける。浩處に高嶋の若黨奴隷は。常に異なる主のかへさの。最遲ければうちも措れず。眞夜中より迎に出て。東西となく索托つヽ。料らずも今。辛踏の。門前を過る程に。主僕迭に桃燈の。花號を早く見出して。走り集ひつ云云と。告もしつ言も示して。石見介は盜兒盈九を。伴當等に牽せつヽ。四郎柰六共侶に。城内なる宿所にかへりゆく程に。鴉の茂林を離るヽ聲して。天は耿々と明にけり。然る程に。辛踏の宿所には。多客やうやく立去りて。是より暇ありければ。集三主僕小忠二さへ。倶に老苧を資けつヽ。先晩稻の亡骸を。小室に臥しめて。枕屏風を建るも果敢なし。又吾足齋は衰へ果て。湯藥も吭に降らねば。开が儘蒲團を布儲けて。小襖をうち被するのみ術もなし。當下老苧は阿鍵小忠二を。上坐に請迎へて。火桶に炭を接つヽいふやう。別れまつりしより年許多。音耗絶て侍りしは。俺身陸奥へ伴れて。後夫に從へばなり。然るを亦故ありて。去歳の冬より這地に來て。まだ住熟ぬ宿なれば。知らせまつるに暇なく。本意にもあらず侍りしに。おん身は又何等の故に。這頭に逗留し給ふやらん。況今宵の凶變を。蚤くも知られて訪れまつるは。有がたきまで忝き。再會にこそ侍るなれ。嚮には多客にうち紛れて。何宣せしやらん。逆上せてのみありしかば。聞漏しぬる鈍ましさよ。無禮を饒し爲ひね。と勸解れば阿鍵は嗟嘆して。

三里正等。女房老苧を相資けて。朱之介の往方を渉猟へ將て參るべしと宣示して。是日の廳は果にけり。然ば老苧は。里正故老津閭屋集三等と共に。退りて宿所にかへり來ぬれば。是日の留守を憑れたる。福富小忠二阿鍵等は。遽しく立迎て。事云云と告るを聞くに。吾足齋は仙丹の。奇效も茲に竭にけん。嚮に老苧等が出てゆきし後。幾程もなく面色變りて。忽然と息絶たりといふ。豫期したる事ながら。老苧は孤猻の林に離れ。賓鴈の對を喪ひし心地して。今さらにせん術を知らず。扨あるべきにあらざれば。里正故老等は。又公閭所へ走參りて。吾足齋の死しけるよしを訴稟すに。重て實撿使を下すに及れず。女兒晩稻の亡骸と共侶に。隨意安置くべしと命せらる。是により小忠二集三等相資けて。吾足晩稻父女の柩を。程遠からぬ山院へ送遣して。當晩荼毘の煙と做しつ。纔に一塊の土饅頭に。表識の墓石を貽すめり。識者吾足齋を評すらく。寧戚の浮薄なる。彼身辛踏光四郎たりし時。親に仕へて孝ならず。君に仕へて忠ならず。周防へ使節を奉りながら。色を貪り慾を恣にして。阿夏母子を相携へて。歸洛しぬるのみならず。其子を棄。其母を倶して。舊里信夫にかへるに及びて。父の憂に値ながら。敢戚る色もなく。淫酒の驕奢に財用足らねば。人の孤奴を養とりて。又其色を衒まく欲して。をさ〳〵詭詐を行ふに及びて。事敗れ追放せられて。近江に流寓しぬる時。女兒晩稻の惡疾の。良藥を徵る折。人の爭ふ金を偸みて。石を其財嚢に入易しは。遠謀あるに似たれども。

等は。津問屋集三の告るにより。吾足齋の宿所に來て。老萼のいふ所を聞定め。軈て一紙の訴狀を相捧げて。城内なる有司に聞えあげしかば。是日未牌ばかりに。實撿使到來して。吾足齋と其妻老萼の。稟す所を聞定め。且晩稻の亡骸を展撿して。口狀一通を筆錄す。但し吾足齋は深痍にて。既に命危ふければ。其妻老萼と隣人。津問屋集三等を相倶して。城内にかへり去つ。頭人一口鬼大夫安倍に。事云云と告しかば。軈て老萼集三等を。局内に召よせて。鬼大夫みづから鞠問す。爾るに辛踏吾足齋に。深痍を負せたりける。盗兒盆九郎は。昨宵大江杜四郎等に搦捕れしを。高嶋石見介の訴により。既に獄牢に繋れたれば。鬼大夫隨即夥兵に課て。盆九郎を牽出させて。事の虚實を拷問するに。盆九郎が惡事の條々。嚮に大江杜四郎の刀子を。偸し事を始にて。昨日吾足齋の乾兒なる。末朱之介に謀合されて。更闌て。倶に五足齋の宿所に潜入りし事。朱之介は親の金子を。偸み拿まく欲して果さず。早く逃亡し事。又盆九郎は。吾足齋の螟蛉女。晩稻を豪奪して。走り去らまくしぬる折。五足齋かへり來て。謬て晩稻を殘害し。反て盆九郎に。脇腹を刺れて仆れし事。其隙に盆九郎は。逃て門外へ出し折。石見介の客なりと聞えたる。大江杜四郎。峯張柒六郎等に。搦捕れたりといふ。首伏分明なりければ。鬼大夫則讞斷すらく。今盆九郎の招了に據るに。吾足齋に罪なしといへども。其乾兒たる。朱之介を。走らせたるは。等閑に似たり。但し吾足齋は深痍にて。命危ふしといへば。津問屋集

て。悄地に父政朝に告ていふやう。吾足の女兒晩稻の如きは。親にも兄にも似ざるものなり。其故は箇樣々々。と件の批評を證據にす。政朝是をうち聞て。感嘆幾淺からず。他が命運薄かると。其苦節を憐みて。彼山院へ多く布施して。晩稻の爲に經を讀せて。悄地に追薦の志をぞ致しける。閒話休題。爾程に十三屋九四郎は。彼夜艾辛踏の宿所にて。四郎粂六に對面の後。第三日に至りて。彼主僕の旅宿せる。高嶋生を訪まく思ひて。湯浴し結髮させて。且衣裳を整て。四摠に些と土產を齎して。旅宿（津問屋なり）を出てゆかまくする程に。忽地高嶋の奴隷索ね來て。主の消息を呈閱す。是則石見介が。九四郎を。請迎る使なりければ。九四郎隨即其使を案內にして。四摠を俱して。高嶋の宿所に來にければ。彼家の老僕出向へて。客房に請待し。主人は猛可に君所へ召れて。方僅出仕して候へども。必程なく歸宅すべし。先和子達に對面あるべうもやとて。杜四郎等が常に居る。彼一室に案內して。看茶の禮細やかなり。四摠も客房に呼登されて。九四郎が主人に贈る。土產幾種を。老僕某に渡しなどす。當下杜四郎粂六は。遽しく九四郎を。上坐に請薦めて。寒暖を舒。恙なきを祝し祝されて。然而前夜の盜兒盆九郎は。石見介計ひて。有司に牽渡ゑしかば。軈て禁獄せられし事。是により大江家傳の刀子を。とり復しける事の顛末。又國守佐々木殿。杜四郎粂六郎を懇望のあまり。云々の美祿を食せて。家臣に做さまく欲し給ふを。固く辭ひまつりし上は。速に立去るべきを。彼刀子

罪其石より重さを知らず。古語所云。兩虎肉を爭ふ時。狐其虚に乘るといふ者是なり。其後妻の子なりける。朱之介の手より枸神を得て。晩稻の惡瘡愈たれども。約を變じて朱之介に。其價の百金を取せず。老苧が手實を破るに及びて。是より後安しと思へり。是故に災害蕭牆の内より起りて。罪なき晩稻は命を隕し。彼身は盗兒盃九郎に。刺れて命終る時。其隱慝を懺悔しぬるは。抑又遲からずや。世に權威ある奸佞者の。忠臣を寃げ。善人を屠。或は山豪海賊の。人を殺すと草の如く。財貨を奪ふて飽となきを。人見て惡ならずといふ者なし。單辛踏吾足の如き。うち見は然る惡虐なし。其心術を推時は。狼賊狗盗と是一般。こゝをもて天公饒さず。竟に滅族の祟あり。世にこの境界に迷ふ者。比々として皆是なり。开が中に晩稻の如きは。浮薄の親に從ひながら。其心親に似ず。多賀志賀介政賢と。婚姻の氷人ありしより。いよゝ閨門を固くして。朱之介の挑を容れず。よく養父母に相仕へて。毫も愆あるとなきに。反て非命に早く逝きしは。善惡應報。無差別に似たれども。然にあらず。善男善女も。其君父不仁不義なる時は。共に禍を免れず。便是蓬の中に生出ぬる。麻の直きも芟人の。鎌兒を免れ得ざるが如し。遮莫其死後に至りては。人其善を相稱。其節操を嘆唱す。死して惡名を貽者と。雲壤の差あり。古語にいへらく。虎は死して皮を留め。人は死して名を留む。名に二あり。善と惡とのみ。愼ずはあるべからず。とぞいひける。この言早く流布しければ。志賀介傳へ聞

なり。笑の中にも刃あり。飯の中にも鍼なきにあらず。嚮に刀子を失ひしも。敵地を忘れて怠慢の隙ありし故なるべし。然れば小心を宗として。才藝に誇るべからず。其己に勝れるを。憎むは小人の心なり。和君等承知の事ならんを。九四郎なんどが博士態たる。意見は孔子に語道に似たれど。鄙語にいふ外視八目。離婁の明も其背を。みづから見がたきをもて悟るべし。渠六もよく記臆して。主僕迭に足らざるを補はゞ。いよ／＼後安かるべし。這義をな忘れ給ひそといふ。教訓叮寧なりければ。渠六はいふもさらなり。杜四郎歡び承て。其議に據らずといふ者なく。猶閑談に及ぶ程に。以前の老僕出て來て。九四郎等に告るやう。主人歸宅仕りぬ。和子達も共侶に。誘這方へと先に立て。在奥たる一室に。案内をしぬる程に。杜四郎渠六も。九四郎の後方に立て。儲の席に迨る時。石見介出迎へて。九四郎等を客坐に請ふて。迭の口誼言訖れば。若黨煎茶を薦めなどす。當下九四郎のいふやう。前夜は不慮の事により。殊に鄙陋の爲体にて。卒爾に拜見仕りし後。今日しも芳舘に伺候せんとて。旅宿を出まくしぬる折。御使を給はりて。拜門遲滯の罪を得たり。矧又杜四郎渠六等が。舊縁の義に依りて。貴所に投宿したりしより。淹留三四十日に及ぶ事。在下までも歡び思ふ。幸是に優す者なし。といふを石見介聞あへず。否とよ我身少かりし時。峯張先生に負笈して。教育の恩淺からざりしに。一たび紈袴に繋れしより。疎濶本意に背きしに。這回兩才子に訪れしかば。了得に昔偲れて。

の故をもて。逗留今に及ぶといふ。密話を九四郎うち聞て。乎は已巨き事なれども。既に仕を辭ひながら。猶其城内に逗留せば。人の譏誚もあるべき歟。事の宜きにあらざれば。彼盆九郎の罪定りて。一件都着落せば。早く立去り給へかし。咱等這回。和君等の迹を追ふて。這頭へ來ぬるは別義にあらず。來春は。亦講夥計に誘引て。嚴嶋なる辨財天に。參詣すべう思ふなり。然ば治比に立よりて。大人弘元の安否を訪まく欲す。四郎腋子はこの折をもて。大人と兩舍兄音就基綱に自筆の消息をまゐらせて。添るに花押印鑑をもてし給はゞ。異日浮浪の俊傑に相逢ふて。薦うて治比へ紹介して。彼地へ遣し給ふとも。大人と舍兄達と。和君の手迹をいまだ認らず。花押正印だも知らで在さば。必疑ひ思はれて。事の障りになりぬべし。這義を告稟さんとて。遠きを厭はで來ぬるなり。渠六も爾こゝろ得て。呈書をもて前恵を。謝し奉らずはあるべからず。咱等は猶二三日の程は。津間屋に止宿せん。宜く書翰を整へて。那首へ遣し給へかし。曩に知られし情由なれば。いぬる比乙藝には。六市を從はせて。大和の上市へ遣しぬ。落葉の刀自を慰んとてなり。然ば住吉の櫛店は。六市の小母夫なる。世話介夫婦を召とりて。他等に預け置なれば。那首の事は後安かり。我身は刀自落葉の請ふに儘せて。明年の比。彼地に到りて。杣木の家事を資ん歟。いまだ思ひ定めねども。異日の便宜に由るべきのみ。豫もいひし事ながら。和君等は尙弱冠にて。萬里の逆旅に光陰を送らば。去向は都敵地

新局玉石童子訓卷之十五

東都　曲亭主人口授編次

第四十五回　意見を示して俠者先途と奨す　前愆を箴て頭陀得度を許す

登時石見介好純は。九四郎に打向ひて。晤譚いまだ央に至らず。年十六七なる兩箇の少女。俗に腰下婢と喚做す者。銚子酒盃をもて出たり。次に撮殺。又其次に。羹齏。炙魚なんど。種々の酒菜を。九四郎幷に。杜四郎渠六等に薦めまくす。主客の口誼稍訖りて。酒盃一巡りに屆る時。石見介がいふやう。嚮には多端にうち紛れて。言後れ候ひき。思ひかけなく種々の。土産を投恵せられし事。歡び是に優す者なし。千謝萬謝も猶足らず。然るを僅に一獻の。饗應は心にず。知らるゝ如く當國は。野味あれども海鮮なし。只是湖水の鯽膾。瀨田蜆の羹のみ。この他若狹の鹽小鯛。或は小鰕鰻鱺の如き。魚肉に富る浪華人には。野人の獻芹ならんかし。況是等の婢女をもて。酌にさへ侍らするは。兵士の交りに。似げなしとや思れん。なれども這里は出居の間にて。武骨なる若黨を。用るに宜しからず。這折をもて拙荊も。いか

師恩萬分の一に答ふべき。折を得たりと思ふものから。微祿欵待に匱しくて。汗顔の外候はず。況和殿に訪れんとは。思ひかけなき幸なり。いかで薄酒を薦めばや。と思ふて請迎へしに。猛に出仕の故をもて。意外の無禮に及びしといふ。言いまだ訖らずして。又卷を續ぐに至れり。自餘は下回に解なん。

新局玉石童子訓卷之十四　終

右あらん。この義はこゝろ休かるべし。といふ間に奥の方なる。襖戸を推開きて。石見介の妻出て來つ。良人の後方に坐を占るを。石見介見かへりて。九四郎に告ていふやう。十三屋主。こは拙荊長江なり。一面を願ふのみ。といふに九四郎遽しく。形を改め額衝向へて、寒暖を舒無異を祝し。且杜四郎等の止宿の事。今は亦美酒佳殺の饗應の歡びを。云云と演しかば。長江はやをら膝を拭めて。額衝受て且いふやう。昔の事は知らず侍れど。良人の話説に豫聞く。兩柱の刀禰達に。訪れまつりし甲斐もなく。只宿しぬるのみなるに。淺からず聞え給ふは。心裡恥しく侍るなる。浪華は百里の遠さにあらねど。迭に年來疎かりし。おん身さへ好風吹きてや。一席に見參は。得がたき賓さねなるに。田舍料理を嫌れずば。こよなき幸に侍るかしいかで過させ給へとて。盃を薦め殺を裝添て。欵待叮嚀なりければ。九四郎杜四郎柴六も。屢謝して且うち譚ふ程に。長江のいふやう。聞くに浪華の哥々さま九四郎は。辨財天信仰にて。折々安藝の嚴嶋へ。詣出させ給ふにあらずや。愚息高嶋硯吉郎玄純は。尙總角にて侍れども。遊學の爲周防なる。所親許へ遣して。去歲より山口鶴峯の。城內に侍るなる。嚴嶋詣の折などに。彼地を過り給ふ日もあらば。いかで訪給ひねかし。然らば這地の無異の聞えて。さぞな歡び侍るべし。といふを九四郎うち聞て。其はこゝろ得候へども。已安藝嚴嶋へ。詣しは只一度のみ。明年も亦參はやと。思はざるにあらねども。多くは是水路にて。周防を過り

で御目に掛らまく欲す。無禮を許し給へかし。といふを九四郎聞あへず。开は亦痛却仕りぬ。昔は昔。今はしも。俺身住吉の町人なるに。猶同輩の義を以。分に過ぎたる御欵待は。一期の榮といはまくのみ。倘杜四郎等に要事ありて。追ふて這地に迨らずは。拜見得かたかるべきに。離合時あり。千里も合壁。幸甚しく候。といへば四郎梁六も共にいふやう。當所に杖を駐めし日より。親族にも優す。主翁の深切。物不自由なる事もなし。かゝる旅宿のあるべしや。といふを石見介推禁めて。否とよ。和君等に主しぬるは。先師九四藏の恩を報はんとてなり。況俺身少かりし時。听漏しぬる師說ありしを。這回兩才子に就きてこそ。疑ひは稍氷解したれかゝれば亦俺爲に。兩才子は一字の師なり。非如一年三个月。宿したればとていかにして。嗛るべうも候はず。といふを九四郎感嘆して。現下問に恥ざる者は。其學至らざる所なし。主翁は君子の人なる哉。就て謝し奉る。曩には衆少年の試撃の折。四郎梁六等も。其員外に召よせられて。武藝御覽の幸のみならず。牽出物賜りて。剩御家臣になされんとて。守の御意ありけるに。他等は武者修行の故をもて。推辭まつりしとぞいふなる。旣に仕を辭ひながら。逗留茲に久きは。云云の故なりとも。罪得がましき所爲にこそ候へ。宜く計ひ給ひねかし。と憑めば石見介點頭て。然なり。兩才子も始より。去向をいそがざるにあらねども。彼刀子の故をもて。意外に掩留せられたり。今は盗兒盆九郎の。一件果るを俟るゝのみ。遠からずして吉左

受しより。歸朝の後子孫に傳へて。もて家の秘方とす。是より以降家督たる者。一世に一度是を煉ぬ。其製藥容易からず。齋する者一百日。火を改めて別室にあり。朝夕妄想を駈除さて。天地に祈りて是を成せり。縱親族たりといふとも。深信なき者には。是を與へず。又心術行狀。正しからざる者にも與へず。多くは秘していはざれば。人是を知る者稀なり。遮莫和殿等三賢才は。我先師の骨肉にて。世の豪傑と覺ゆるに。這折をもて分與へずば。非除仙丹ありといふとも。又何人の爲に藏めん。大江峯張兩才子には。異日秩を分つ折。贈らまく思ひしかども。よき折なれば進らする。這義をこゝろ得給へかし。といひつゝ又兩箇の藥籠を。拿て杜四郎と楽六に。遞與せば。各受戴きて。歡び面に見れたる。丌が中に九四郎は。石見介に謝していふやう。听くが如きは這仙丹は。病苦を救ふのみならず。是軍陣に大益あり。九四郎なんどが身單に。藏めて秘藥に做さんより。治比の大人に晉上せば。躬方の爲に大利あるべし。最忝く候。と應へて懷に夾れば。杜四郎楽六も共にいふやう。今にはじめぬ主翁の恩貺。今日の圍坐に干るすら。得かたかるべき歡びなるに。世に未曾有の仙丹は。價千金萬金なる哉。目今報ひ奉るに。物なきを憾とす。年膝て安藝へ還るの日。賢息硯吉郞猶周防にいまさば必那里に立よりて。一臂の勞に代るべし。情願この外候はず。といふに石見も妻長江も。倶に本意ある面色にて。又茶を薦めなぞするを。九四郎は謝して受ず。主人夫婦にうち向ひて。在下は大後日

候はず。なれども便宜の折もあらば。必拝見仕らん。といふに石見介も笑しげに。そは辱く候なり。拙郎は素是駑才にて。大江峯張の両才子に。及ぶべくも候はねど。萬に一和殿に訪れて。教諭を受る日もあらば。必裨益多かるべし。といふ間に入相の。鐘鎬々と聞えしかば。九四郎は盃を。酔ひてかへり去らんとす。然れども石見介いまだ許さず。先夕饌を薦んとて。又碗飯の款待あり。四郎薬六も相客にて。飽て十二分ならぬはなし。是より先に伴當四摠には。客房にて酒飯の款待あり。老僕某甲盃を。薦めて酔を盡したり。既にして九四郎は。主人夫婦に別れを告て。立去らまくしぬる時。石見介は豫準備の。薬籠三箇許。折敷に載たるを拿出して。先其一箇を九四郎に贈りていふやう。十三屋主。這仙丹は。前夜既に知られし如く。我家相傳の神薬にて。金瘡に即效あり。只死を起すのみならず。幻術ある敵と戰ふ時。是を一匙口に含て。吹て其敵の面を打ば。眼眩み手脚癱て。其妖術行れず。立地に伏誅すべし。或は又老妖變化の者。其隱顯無邊無量にして。弓箭刀劍をもて制しかたかるも。這仙丹を酒に雜へて。薦めてよく酔すれば。其妖敗れずといふ者なし。昔唐山胡元の時。胡人妖術をもて。人に禍害する者多かり。猫鬼の類即是なり。時に濟世道人と喚做したる。一箇の神仙這仙丹を。患者に施して。妖邪を對治しゝといへり。其已に勝利ある者。彼螢火鎚柄丸に百倍す。當時我遠祖は。寇守るつくしにあり。一稔商舶に倶せられて。元國に到し日。彼神仙に邂逅して。這薬方を

落葉の刀自へ。五十兩を木玄和尚に。返す時は損益なし。世に大丈夫たる者は。一飯の惠にも必報ひ。睚眦の怨も必報ふ。我この心は。乙藝の本意にて。乙藝の心は。落葉の刀自の。慈善にも稱ふべし。這義誰何と談すれば。杜四郎と桒六は。听つゝ倶に感じて已まず。爾るべしと應しかば。又九四郎のいふやう。是等の事に證人なくは。後の爲に宜しからず。桒六もゆくべしとて。準備の金子を懷にしつ。旅中刀を腰に跨て。倶して彼宿所に赴きしかば。迹には杜四郎と四捴のみ。或は故鄕の光景を尋問ひ。或は當城内にありし。衆少年の試撃の爲体を。いひも出聞もして。思はず時を移す程に。九四郎は桒六を將て。隣れる老苧の宿所より。いそしくかへり來にければ。杜四郎は席を讓りて。那里の首尾を諮問ふに。九四郎がいふやう。俺老苧に面談して。意衷を示して齎したる。五十金を贈りしかば。阿夏の老苧は膽を潰して。云々と辭ひしを。我亦理りを述。言を盡して。屢諭して已ざりけるに。彼小忠二と阿鍵とやらんも。いぬる日の隨。那里に在り。我いふよしをうち聞て。感嘆の聲を得斷たず。倶に老苧を諭していふやう。九四郎主は仁義の人なり。怨に報ふに德をもてすといへるは。是等の事なるべし。然るを推辭むとかは。といはれて老苧は感涙を。拭ひも果ず件の金を。受戴きつゝうち泣けり。登時又小忠二は。老苧に代りて。金子受納の。手實一通を書寫して。加印して咱等に呈閲す。阿鍵も倶に老苧の爲に。歡びを陳しかば。我又老苧にうち向ひて。こはいはでもの事な

の比。正に立去らまく欲す。重て見參かたかるべし。失敬宥恕を願まつる。といひ果て身を起せば。杜四郎と楽六も。手燭を秉て後先に。立て玄關まで送る程に。石見介も客房に。出て袂を分ちけり。當下四摠は挑燈を。老僕に借得て外面に在り。今九四郎の出るを見て。先に立つつ城門を出るに。夜艾なれども石見介が。豫番士に告たりけん。障りもあらで共侶に。當晩亥中の比及に。津問屋にかへり來て。主僕枕に就きにける。其次の日に杜四郎は。楽六と倶に。治比の親胞兄弟に進らすべき。書翰を相整て。共に津問屋に赴きて。九四郎に對面しつ。其書を渡して云云と。昨日の餘談に及ぶ程に。九四郎がいふやう。高嶋主の深切に。就きて我亦思惟るに。辛踏の鬼妻阿夏の老苧は。我妻乙藝の繼母にて。五稔養育の恩なきにあらず。然るを他は幸なくて。良人に後れ剰。螟蛉女を亡ひたれば。よるべもあらず僘れるなるべし。前夜既にとり復したる。彼金一百九十五兩は。落葉の刀自の要金なれども。和君達にも知られし如く。其内中百兩は。我楽六の爲に償ふて。落葉の刀自に返したる。其返金五十兩は。木玄和尚に借用したり。又五十兩は。我九四郎が。治比の大人より賜りたる。恩祿なれば我物なり。通ては二百兩なるを。五兩は當初朱之介が。路費に使ひ亡ひしと歟いへば。我拿るべきは四十五兩のみ。今又是に五兩增てゝ。其五十兩をもて。阿夏の老苧に贈りなば。彼身の一生涯を。養ふよすがになりもやせん。是則乙藝の爲に。報恩の一義なり。殘る一百五十兩は。百兩を

じ心なるべし。といふ間に客店主人。津問屋集三は。手親銚子酒盃をもて出て。九四郎等に薦めていふやう。いぬる夜隣家の凶變以來。各位の人に異なる。御氣質さへ推量られて。感心の外候はず。然るを亦程もなく。今宵涯のおん宿と。承り候に。殿原さへ來ませしかば。心ばかりの村酒一酌。御歸路を祝しまつる而已。といひつゝ盃を薦る程に。炊姿がもて來ぬる。酒菜は枯たる乾年魚も。心は淸き蓮根の。糸の手に引く糸鰑。結乾瓢炙鷄卵。捫茄子の搵漬も。現一口にはいひがたき。人の誠に九四郎は。よき折なりと歡びて。四摠も倶に呼集合。四郎粂六甲乙となく。玆に僅に送別の。盃を果す程に。冬の日なれば短くて。下晡になりしかば。九四郎は杜四郎等を。いそがし立て且いふやう。和子達はやくかへり去りて。高嶋主へ昨日の謝義を。宜しく言傳給ひてよ。粂六は我爲に。昨夜借たる高嶋の。挑燈をもてゆきて。老僕に謝して返せかし。暮果なば城内へ。出入容易るべからず。疾還らずや。と促せば。杜四郎も粂六も。告別さへ言語急迫。治比の一義いへばさらなり。乙藝刀自にも。木玄師父にも。宜く言傳給ひね。といひ果て身を起す時。四摠がやをら差出す。彼挑燈を粂六は。受拿りつ引提て。杜四郎に倶して出てゆくを。九四郎幷に四摠さへ。客店主人集三も。店前なる馬繫柱の。邊に立て目送りけり。然れば十三屋九四郎は。其詰朝四摠を倶して。早旦に津問屋を立去りつ。家路を投ていそぎしを。老苧小忠二等はいまだ知らず。是日未の左

がら。喪ひ易きは錢財なり。和女郎今より其五十金をもて。口を餬ふに足らずして。饑渇に及ぶ事もあらば。住吉まれ大和まれ。乙藝を尋ねて來給ひね。和女郎の前夫なる。木偶介曳は乙藝の父なり。其後和女郎は夫を重ねし。繼母なれども乙藝の爲に。親といふ字は削られず。落葉の刀自もしかぞかし。本性慈善の人なれば。何でふ同居を厭ふべき。必な介意し給ひそ。と慰めつ別れを告げて。开が儘かへり來つるなり。と告れば亦楽六も。阿夏の老苧が辭ひかねて。困じたりける爲体を。説示して亦いふやう。憶ふに彼小忠二は。老苧の資助に成る者ならん。性老實に見ゆめれば。彼身は是より安かるべしといふに。四郎も四摠さへ。世に亦得かたき九四郎の。義俠をいよ〳〵感じける。姑且して九四郎は。杜四郎等に。うち向ひて。俺這地の所要は果しぬ。明日は夙めて立去りて。住吉の宿所へ還らまく欲す。願ふは和子等一日も早く。他郷へ去りて。修行し給へ。旅宿に年を累るとも。三稔に一番かへり來て。親胞兄弟の安否を訪ふも。人の子たる方ならずや。克身を愛して病厄を防ざれば事成らず。又只無異を祈るのみ。こは和子の上のみならず。楽六もよく思ふべし。といふに四郎も楽六も。一義に及ばず受歡びて。开は亦火急の別れに做りぬ。今宵は茲に止宿して。明日は夙めて路程。二三里なりとも送るべし。といふを九四郎聞あへず。そは亦要なき事なりかし。和君達も旅客なるに。送迎は折によるべし。古語にいはずや。送君千里須一別假令幾里送るとも。別れはおな

して。寄着候はずといひけり。爾後一口鬼大夫は。日毎に盆九郎を。獄舍より牽出させて。其積惡を責問ふに。盆九郎は當初。大江杜四郎の刀子を偸拿り。其後末朱之介と共侶に。吾足齋の宿所に潜入りて。彼家の螟蛉女。晩稻を掻攫て出去る折。吾足齋に撞見して。彼身に深痍を負せしより。竟に死に至りしのみならず。或は人の妻妾を姦淫し。或は人の小孃を勾引して。人肉經紀に賣渡しし事も。幾番歟ありといへり。招了既に分明なれば。鬼太夫則高頼主に聞え上て。次の日盆九郎を。串明亭へ牽出させて。死刑にぞ行ひける。是日鬼太夫は。枸杞村の長幷に宿六。及吾足齋の鬼妻老苧。幷に津問屋集三。里正故老等を。召よせて。宣示すらく。盗兒盆九郎の事。云云の積惡あれば。既に死刑に處せられたり。皆這旨を存ずべし。但し同惡の罪人。末朱之介は。今に往方知れずといへども。吾足齋身故りたれば。里正故老等代りて。他を見出しなば。搦捕て將て參るべし。等閑になせそ。と掟らる。是日又鬼太夫は。當藩の兵頭高嶋石見介の老僕某甲を召よせて。宣示す事前の如く。且いふやう。盆九郎の罪定りて。既に死刑に行れし上は。其許に止宿の旅客。大江杜四郎峯張樂六郎等に。又問ふべき事もなし。今よりの後行も。止も。彼人々の隨意なるべし。這義を主人に傳へよ。と掟て事皆落許しけり。是より纔に二三日を歴て。阿鍵小忠二の隱田の事。他等が禀品證据ありて。守の疑を解に足るとて。歸村の事を命せらる。其故は。件の隱田は。素より阿鍵の化粧料にて。太夫次の遺田

側に。阿夏の老苧は九四郎に。昨日の恩恵を謝せんとて。菓子一折櫃と。佳茶一嚢を齎して。庭門傳に津問屋に赴きて。九四郎を尋るに。宿の女房出迎へて。彼客人は今朝夙に。立去り給ひぬ。と告げしかば。老苧は望を失ひて。悔しく思へど今さらに。せん術もなきものから。然しも浮薄の本性なれば。毫も脱落らぬ面色にて。否。彼人には然せる要なし。いぬる夜は不慮の事にて。集三主にいといたう。御劬勞をかけまつりし。報ひといはんは恥かしけれど。いかで受させ給ひね。といひつゝ件の菓子と茶を。渡せば女房苦笑して。こは思ひがけもなき。御心配りに預り侍り。鄙語にいふ。餘り物には。福こそあらめ。と受載けば。老苧は他さへ欺難て曉得られけり。と思ふのみ。是將いよゝ悔しきを。然氣も見せず宿所にかへりて。小忠二阿鍵に云云と告れば。小忠二眉を顰めて。默然たる事半晌許。只九四郎の立去りしを。知らねば告別もせで。遺憾とぞ咳きける。九四郎四摠等の事。この下に話なし。然る程に觀音寺の城内なる。市井の預り一口鬼大夫安倍は。盗兒盆九郎の事に就きて。枸杞村の村長故老に。并に三池邨なる宿六等を召よせて。他が素生を質問ふに。原是盆九郎は。枸杞村の莊客留守七の獨子にて。二親身故りし後。放蕩無賴做ざることなく。近曾借財の爲に。相傳の田圃はさらなり。居宅も人に沽却して。竟に無宿に做りし事。この故に小父宿六は。數四敎訓の詞を盡し。時々折檻の拳を抗るといへども。盆九郎毫も怕れず。反て窮鼠猫を噬の勢なれば。宿六只得勘當

に在り。如如來禪師に從事して。不二法門の妙要を得たれば。行脚して這地に到れり。和孃等生來薄命なれども。然しも佛緣なきにやらず。時いまだ至らざる故に。火宅の煩惱を免れざりき。我今不可思議の法語あり。倶に聽聞すべし。とて人の世の果敢なき。無常迅速の驚き易く。悟りがたき義を說諭し。菩提正覺の入安くして。得がたき旨を和解し示すに。其言婦幼にも。通せずといふ者なければ。阿鍵はさらなり。阿夏の老苧は。年來の凡慮俗情を。立地に洗除れて。深信膽に銘じしかば。倶に十念を受しより。女僧に做らまく思ひ起して。隨即這義を希へに。阿鍵も同意あり。先大夫五の生死存亡を。問ふて知らまく欲するに。幻泡法師頭を掉て。天機は毫も漏すべからず。後にみづから知るよしあらん。其良人亡命して。十年を歷て還らずは。其妻尼に做るとても。孰歟是を疎忽とせん。剃髮の事は饒すべし。後の離合は示しがたし。といふに老苧も朱之介の。後の禍福を問難て。倶に得度を願しかば。幻泡法師點頭て。今宵は既に更闌たり。明日剃髮し給へとて。儲の臥簟に案內を請ふて。軈て枕に就きにけり。かくて其詰朝。小忠一措名は。阿鍵老苧の剃髮の義を聞知りて。倶に肚裏に思ふやう。阿夏の老苧は。左まれ右まれ。我刀自阿鍵をいふは。郎君子大夫五のをいふ。存亡いまだ安定ならぬに。剃髮は早からずや。といふにいはれぬ時誼なれば。度外に措て疑はず。先客僧に齋を果して。阿鍵老苧の爲にしも。剃刀盥の准備をしぬる程に。件の兩箇の婦人等は。倶に衣裳を整へて。家廟の下に居り。當下

にあらず。こゝをもて曩に彼家滅亡のをり。籍立を免かれて。沒官せられざりしなり。是等の公事も鬼太夫奉りて。着落の日。阿鍵小忠次。福富の村長等を召よせて。宣示す所なり。然ればこそあれ。阿鍵小忠二は。始て怡悦の眉を開きて。福富村へかへり去りまくするに。阿夏の老苧が身單にて。所寓なきを憐みて。將てゆかんといふにより。老苧は借地を。集三に返して。諸家伙家作。夜物などの不用なるを售て。十八九金を得たり。鬻に九四郎の贈りたる。五十金と共に。七十金ばかりの貯祿あれば。いかで是をもて。生涯の計を做さばやとて。其内六十金を。小忠二に預けてぞ。福富村へ伴はる。是よりして。阿夏の老苧は。彼酒肆に歇りて居り。措名の爲に朝夕の。薪炊の資助に倣れるのみ。這年も旣に尾になりて。一日雪の痛く降ける曛昏に。年齡六十ばかりなる。一箇の行僧。福富の店前に立在て。念佛して一宿を乞けり。阿鍵は昔年良人大夫五が。出てかへらずなりしより。其日を則命日として。香華を供などしけるに。今日も其日に値りしかば。軈て件の行僧を喚入れて。脚を濯せなどしつゝ。軈て納戸に案内して。火桶を與へ。茶を薦るに。行僧は右邊なる。家廟を見かへりて。且廻向しぬる程に。措名老苧は遽しく。茶粥を煮て薦めけり。當下件の行僧は。阿鍵老苧をつら〳〵と。見つゝ頻に嗟嘆して。其過去を談ずる事。素より相識者の如く。宛掌を指に似たれば。阿鍵老苧は胸を潰して。先其法名を諮るに。行僧答て。我名は幻泡と喚做したり。年來大和の六田川

して。靈山靈地に詣る毎に。佛を拜みて懺悔せば。良人の存亡を知る時あり。其子の禍福を悟る日もあらん。努懈るべからず。といふ敎化叮寧なりければ。如幻如泡の歡びはさらなり。側聞せる小忠二措名。心なき小厮丁太郎まで。渇仰隨喜せざるはなく。坐に涕をうちかみけり。敎化既に果しかば。幻泡法師は袈裟法衣を。故の如く笈に藏めて。告別して去らまくするを。如幻如泡は推禁めて。準備の布施二包を。盃に載て薦れば。幻泡退けて敢受ず。且いふやう。捨は只是有漏の緣。出家は乞食して世を渡る者なり。金銀錢財は。出家人に大毒物とす。布施は昨宵の宿にて足れり。暇まうす。と身を起して。草鞋穿締め。笈を背にし。笠を戴き錫杖を衝鳴して。雪の細道物ともせで。往方も知らず。出てゆきけり。其後本村の長某甲が。阿鍵老苧の剃髮を聞知りて。そを訪んとて來にける折。幻泡法師の事を聞て。駭嘆じて。且いふやう。いぬる日人の噂に聞ぬ。近曾彼大和なる。六田川の如如來禪師は。這近江路に行脚し給ふに。光りを包み名を埋めて。一切凡夫に知らせ給はず。但佛緣ある家にのみ。一宿を乞給ふといへり。恐らく其幻泡法師は。如如來禪師にあらずや。といふに如幻如泡はさらなり。小忠二措名もうち驚きて。始て悟る値遇の緣。倶に深信彌增けり。然ば今玆は果敢なく暮て。其次の春二三月の時候。阿鍵の如幻は。小忠二に商量しつ。本宅の背門の方に。宜き坦地あるをもて。其里に草の庵を締びて。如泡と同居の室とし定めて。酒肆は名殘なく。小忠二夫婦に取せ

幻泡法師は。網編の笈に藏めたる。袈裟法衣を出し被て。先佛檀なる本尊佛を。戴足膜拜し畢りて。阿鍵老苧に。髻を解披せて各其雲鬟を。八箇に紏て。爲に經を讀み。偈を唱つゝ。剃刀を拿抗て。剃て圓頂の優婆姨に做しつ。則阿鍵の法名を。如幻と命け。阿夏の老苧の法名を。如泡とす。隨即十念を相授て。度牒を寫して取すれば。阿鍵老苧は。額衝て。導師を禮拜したりける。當下幻泡法師諭して道く。女人は其性嫉妒なきはなし。這故に成佛しがたし。こゝをもて儒教にも。女の嫉妒なきは。百拙を蔽ふといへり。爾るに法華經提婆品に。八歳の龍女成佛の事あり。是時に方りて。龍女摩尼寶珠をもて。釋尊に奉献す。這個寶珠は。則龍女の神魂なり。釋尊是を受給ふ時は。龍女の成佛知るべきのみ。非如女人の僻るも。心を佛に做さば做してん。只其工夫の至らざるなり。昔當麻の中乘尼。平將門の女。如藏の如き。女人成佛の徵と做すべし。汝等今より佛經を讀習ひて。其經文を解し得ぬるまで。許多の歳月を。積ざれば得べからず。只日毎に佛名を。十萬遍相唱て。且其間に。涅槃經四句の偈を唫誦して。倶に成佛を樂ふべし。浮世は諸行無常なり。佛は寂滅を樂とす。人各命終る時の。經營に遑なければ。惡を做すに所なし。是則寂滅爲樂なり。然れども心靜ならざれば。漫に外物に誘引れて。一大事を忘るゝに至れり。この故に佛門の徒を。名つけて禪定門といふ。禪は靜なり。定も靜なり。汝等靜坐默識して。禪定尼たらん時。年五十に至りなば。倶に諸國を行脚

柒六も額衝承て。頼みまつるとぞ答へける。既にして五郎平は。猶留別の詞を盡して。且再會を契りつゝ件當を將てかへり去りけり。浩處に石見介好純は。今朝城に出仕の後。目今退りぬと聞えしかば。杜四郎柒六は。方纔守より賜りたる。一夜鮨の事を告て。其鮨桶を見せけるに。石見介歡びて。其は各位を惜ませ給ふ。守の仁愛なるべけれ。然れども今日は。我先人の忌日なれば。一家兒皆精進なり。明日其餘味を拜すべし。和君等は今日ならで。明日は他鄉へ立去るなれば。目今嘗み給へとて。急に若黨を呼よせて。重封緘したる鮨桶の。蓋をうち開かせて。鮨幾箇歟兩箇の碟子に裝分て。手製の濁酒一壜と。盃箸をとり添て。他等の小舍に遣しけり。杜四郎と柒六は。素より鮨を嗜ねども。然しも貴人の賜ものなるに。主人の好意も默止がたければ。各其鮨一箇をたうべて。濁酒も多く得飲まず。うち相譚ふてありし程。倶に心地常ならず。猛可に胸張り腹痛して。腸斷離るゝばかりなれば。倶に得堪ず輾轉て。苦艱いふべうもあらざりける。其聲奥へや聞えけん。石見介走り來つ。這爲体に。膽を潰して。連りに人を呼立れば。長江はさらなり侍婢等。老僕若黨まで走り來て。藥よ水よと噪ぐのみ。計の出る所を知らず。當下石見介思ふやう。這兩才子の病症は。必是食傷ならん。我家の仙丹は。金瘡にのみ即效あれども。食傷も亦毒の爲に。脾胃を傷らるゝ者なれば。其理は是一なるべし。用ひて見ばや。と尋思をしつゝ。彼仙丹を水に解て。杜四郎と柒六の口中に沃ぎ

けり。この折又老苧の如泡は。嚮に小忠二に預けたる。彼六十金をもて。良田良圃を購求め て。年毎の衣食の料とす。猶且如幻は隱田あれば。俱に乞食するに及ばで。只旦暮に。香を燒き花を折て。佛に仕るの外他事もなく。如幻は黄金の上を掛念せず。如泡は朱之介の事を思はで。世は倒に安しといひけり。こは是後の話なり。案下某生再說。爾程に大江杜四郎成勝。峯張柒六郎通能は。彼盜兒盆九郎の事果て。進退自由になりしかば。先や這地を立去りて。猶北國へ赴んとて。主人夫婦に別れを告て。更に起行の用意を做す程に。月厲親く交參たる。長橋倭太郎。象船算彌。多賀志賀介なんど。この他も同藩の少年幾名歟。早くこの義を聞知りて。詣來て別れを惜ざるはなく。或は餞別にとて。東西を贈るもありしかど。四郎柒六は。逆路の煩ひなれば。とて謝して多くは受ざりける。其が中に曾根見五郎平宗玄は。近江鰤魚の一夜鮨。一小桶を齎し來て。杜四郎柒六に告ていふやう。兩才子明日は立去り給ふよし。寡君既に聞召れて。惜ませ給ふ事大かたならず。今は禁るとも。得留らじ。こは要なき物ながら。賜りて予が志を致せ。とて內々の義を以。微臣を使に立られたり。一夜鮨は。春夏の間にこそ。人の愛る者なるに。今は冬の中氣にて。時節相應しからねども。實に當國の名物なり。是喫るべうもや。と口狀特に爽然に。演て件の鮨桶を。渡せば杜四郎受戴きて。こは思ひがけもなき。恩貺こそ面目なれ。柒六郎と共侶に。程なく拜味仕らん。この義宜しく御執成しを。といへば

に似たり。先一両日近郊に杖を曳きて。歩固をして後に。障もなくは其折に。起行しぬるも遲きにあらじ。といはるゝよしの理りなれば。杜四郎楽六は。漫行をしぬる程に。又料らざる小厄あり。この故に杜四郎は肩に淺痍を負ふに至れる。开は又卷を更て。且下回に。解分るを聽ねかし。

新局玉石童子訓卷之十五 終

入るゝに。倶に四肢厥冷して。九死一生と見ゆるものから。藥はよく吭に降りぬ。とばかりにして。即效なけれど。猶幸に家に藏めたる。一角を細末にして。是をも多く用ふる程に。病人等は煩悶の聲稍定りて。臥簟に抱き入れられけり。既にして日は暮しかど石見介は。奴隷を醫師許走らせて。急に招きよせまくするに。其途近きにあらざれば。早の所要に立べくもあらず。左右する程に。杜四郎棠六は。當晩丑三刻時候に。甚しく吐瀉してより。死なざることを得たりける。其詰朝彼醫師來診して。這少年達の病症は。中寒より出たる食傷なりとて。藥を調進したれども。杜四郎と棠六は。謝して其藥を飲まず。且いふやう。最初彼仙丹と一角微りせば。已等は必死なん。縱即效あらずとも。他藥を用ふべからず。とて猶前劑に從ひけり。倶に思ふよしあればなり。其次の日石見介は。昨日の飯鮨を取出て見るに。飯の色酷く變りて。訝しき事涯りもなきを。敢亦言には出さず。其鮨は遺もなく。手づから庭の土中に埋めて。悄地に後の病厄を禳ひけり。然る程に同藩の少年等。及彼曾根見五郎平まで。大江峯張の大病を聞知りて。日毎に訪來て云云と。安危を知らまくせらるゝも。倒に厭煩かるべし。這病厄に年暮て。明れば享祿四年になりぬ。這春正月の季に至りて。杜四郎棠六が。倶に大病瘥り果て。氣力本復してければ。主人夫婦に再生の。恩を謝し別れを告て。立去らまく欲するに。石見介のいふやう。和君等大病の後。幾程もなく。餘寒を犯して遠く走らば。身を愛せざる者

新局玉石童子訓巻之十六

東都　曲亭主人口授編次

第四十六回　好純實を撈る暴巨棵の狂態　主僕貌を改る旅宿中の初髻

再説大江杜四郎成勝。峯張柒六郎通能は。病厄稍瘥りて。他郷へ去まく欲するに。主人石見介好純が。猶阽みていふよしあれば。先試歩の爲にとて。主僕割籠餉を腰にして。早旦より近郊に逍遥す。この日は枸杞村福富の方へとてゆく程に。折から二月の初旬にて。目に美しき梅の花。單葉は散て。千葉は猶。香にこそ馨へ。路傍の。樹芽若草春めきて。右も左も叢麥の。圃より升る翔雲雀。藪鶯も外ならぬ。調子は高き里神樂。今日しも初午なりければ。稲荷祭祀も天離る。鄙にはあれど千似劍。神を齋きの注連幟。其村毎に賑しき。人の往還も常に倍す。里の總角うち群て。飽ぬ太鼓の音さへに。初雷歟。とおもはゆる。杜四郎と柒六は。東となく西となく。思ひの隨に見盡して。長き春の日皷く時候。枸杞村までかへり來にける程に。後れたりける柒六は。杜四郎を喚かけて。やよ和子一霎時止り給へ。已脱落し事こそあれ。方僅憩ひ

新局玉石童子訓第四版 自第四十六回至第五十回 總目録

攝津國の旅客にて。大江杜四郎成勝と喚るゝ者なり。近會遊歷して這地に來つ。觀音寺の城内なる。高嶋生に由緣あれば。去歳の秋より那里に在り。今日は這頭に遊び過して。既に日影の斜きたれば。こゝろ只管いそがれて。捷徑あらばゆかまく欲す。いかで詳に敎えよかし。と說れて田婦含笑て。原來要ある刀禰なるに。疑ふて何を歟秘さん。問せ給ふ捷徑は。猶眞直に二町ばかり。行せ給はゞ。右の方に。最老たる榎樹あり。其里より路を右に取りて。十町有餘ゆかせ給はゞ。左右へ別るゝ徑路あり。其里より路を左りに取りて。ゆくと又十町ばかりにて。彼城下に屆り給はん。左右をな違へ給ひそ。と指さし示して誨れば。杜四郎歡びて。开はこゝろ得たり。しからんには。汝に猶賴むべき事あり。我と一路の一少年。後れて這里へ來ぬるあらん。其面影は個樣々々。打扮は如此なり。其少年の過るを見ば。汝蚤く呼留めて。又捷徑を敎示して。我爲に言傳せよ。一樹の蔭も他生の緣。いかで〳〵と譚かへすを。田婦聞つゝ點頭て。其義もこゝろ得侍りたり。疾々ゆかせ給ひねと。應て又鎌を研てをり。是により杜四郎は。ゆくこと二町あまりにして。果して右方に榎樹あり。こゝなるべし。と思ひしかば。鼻紙を長く引裂て。其下枝に締吊て。もて業六の爲に栞とす。他今かへり來るやとて。獨立在と半晌許。俟ば又生憎に。日影いよ〳〵斜きしかば。幾まで歟かくて在るべき。程遠からず逐着ぬらん。と思捨つゝ右の徑路を。ゆくといまだ二町に過ぎず。跡跟來ぬる件の田婦。利鎌を袖に隱し持

し後の村なる。彼茶店に菅笠と。割籠さへ措遺れにき。走りかへりて拿もて來てん。嚮に里人に聞し事あり。這頭より觀音寺の城へ捷徑ありといへり。丌を叉人によく問ふて。徐にゆかせ給へかし。といふを杜四郎うち聞て。笠のみならば棄るとも。惜むに足らねものながら。割籠は今朝主人の取出て。借されたるを爭何はせん。戻りて拿るもよかゝなん。其捷徑の有ならば。栞を貽して其方へいなん。疾々せよ。といそがするを。柒六は聞も得果ず。程なく遂就きまつらんず。いで〳〵といひつゝも。故來し路へ驀地に。走りて見えずなりにけり。爾る程に杜四郎成勝は。彼捷徑を問はばやとて。ゆく〳〵四下を見かへるに。這頭は一條の畷路にて。左右に最多かる枸杞の。彌生に生繁るのみ。憩ふべき茶店もなく。前面より來る人にも逢ねば。思難つゝ猶ゆく程に。と見れば一箇の田婦あり。年齢は。三十許にもやあるべからん。眼圓に唇厚く。身材高く肥脂みて。酒肥滿といふ者に似たり。身には袴の廣袖衣二ばかり被て。裙高に壺折りつ。白き二布の端を顯したるが。這頭の枸杞を芟採りて。薪に做すにやあらむずらん。彼身は芝生に坐を占て。連りに鎌を研てをり。當下杜四郎は。件の田婦を呼かけて。卒爾ながら言問ん。這里より觀音寺の城へゆくに。捷徑のあるならずや。そを知りたらば聞まほし。といふを田婦見かへりて。噫こゝろも得ぬ。其聲音にて猜するに。他鄉の人にぞあらんずらん。作麽那里より來ましたる。觀音寺の城内に。相識やいますする。と問復されて。然ばとよ。我は

て問試しに。漫に名告儞が命運。既に盡ぬる時至りて。我情人の讐敵なる。儞が面を認しより。惴るこゝろを推鎮めて。這横路へ誑入れしは。其細頸を搔伐て。世に亡人に手向んず。と思ふこゝろを知らずや。といはせも果ず杜四郎は。呵々とうち笑ひて。愚なり。巨楳とやらん。彼盆九郎は罪人なり。我家傳の刀子を。鼠拿りたるのみならず。人を害しゝ積惡あれば。終に死刑に行はれしに。搦捕しを咎にして。我を怨むるは甚麼ぞや。膽魂は女に似げなき。勇あるに似たれども。理義に闇きは匹婦の本性。物に狂はゞ後悔あらん。早く惑ひを醒さずや。と諭すを聞かず眼を睜りて。开は卑怯なり。命や惜き。盆九に罪のあらばあれ。彼人搦捕れずは。何でふ首を喪ふべき。只我怨は儞に在り。似而非頑童奴覺期をせよ。と罵り狂ふ匹婦の猛勇。五日の月と晃かす。利鎌を間なくうち振りて。搔んと找むを杜四郎は。右に反し左に外して。兩三番疲勞しつ。利鎌を丁と打落す。拳の冴は雲間の電光。額を撲地と打惱せば。巨楳は吐嗟と瞑眩きて。怯むを得たりと兩手を捉りて。背へ楚と揉抗て。登し蒐りつ三尺帶もて。結扭て四下を見かへるに。臂近なる老樹の杉に。攀りし藤蔓ありければ。右手を伸しつ曳よせて。罵狂ふ棄木の巨楳を。曳摺よせて老樹の幹へ。圍々纏にぞしたりける。恁處に峯張柒六郎通能は。彼忘れたる。菅笠と。割籠を肩に引かけて。遽しくかへり來つ。杜四郎の遺したる。棄あれば惑ひもせず。こゝなりけり。と後影を。遥に見つゝ走着て。やよ和子。目今かへりにき。といひ

て。竊歩しつゝ近づきて。聲をもかけず背より。揮晃めかす彼鎌を。杜四郎の肩尖へ。打かけて曳く刃の光に。杜四郎は吐嗟とばかりに身を淪したる修錬の剽捷。二たび打入む鎌の柄と。倶に利手を拿禁て。耶と引被ぎて投しかば。田婦は杜四郎の。頭顱の上をうち越て。筋斗りつ。二三間。前向へ撻と倒れける。當下杜四郎成勝は。思ひかけなき這寃家を。見れば是別人ならず。嚮に捷徑を誨たる。彼田婦なりければ。且訝り且怒に得堪ず。罵責る聲も急迫。這奴何等の怨ありて。我を狙擊まくするや。意ふに剪徑を事とせる。賊婦にこそありつらめ。疾首伏して綁縛の。索を受よと。敦圉たる。其間に田婦は。身を起し來て落しゝ鎌を。搔拿りつ。身を構へて。疾視哮る聲高やかに。外聞歹き鳥滸をないひそ。左ても右ても活てはかへさぬ。我寃家なれば覺期の爲に。意衷を示さん。死天三途の。話柄に听ねかし。我身は枸杞村に名もしるき。棄木の巨楳鬼妻と喚做されて。親族もなく子もあらず。二三年前つ比より。墨烏の盆九郎と狎染て。連理の枕。比翼鳶。夜の衾は陜くとも。廣き世界に二人となき。郎は無慙や去歳の冬。儞が爲に搦捕れて。終に頭を刎られたり。と人傳に聞し其日より。憤胸に盈て。いかで怨を復さんず。と思はざるにあらねども。寃家は只其名をのみ聞て。いまだ其面を認らず。況彼身は城内に。在りとしいへば近つきて。擊とたえて便なさに。憂かりける日を過しに。今日料らずも捷徑を。問し儞が聲音の。浪華人に似たるをもて。我亦思ふよしあれば。言を設

春色風情を。云云といひ出て。うち譚ふ語次に。彼枸杞村なる棄木の巨棵の。狼藉の爲体を漏すことなく告しかば。石見介驚きて。亓は安からぬ事なりき。其奴國家の法度を知らず。善惡邪正に暗かるは。取るよしもなき狂女なりとも。捨置かば又何なる。殃危を釀せん歟。是も亦知るべからず。夫千丈の隄の頽るゝも。蟻の穴より起るといへり。小火倘滅さずもあらば。後の熛々をいかにせん。先その消息を聞定めて。又せん術もありぬべし。咱等に任給ひねと。答て夜話は果にけり。その次の日に石見介は。心利たる若黨に。意衷を云云と宣示して。悄地に枸杞村へ遣ししに。件の若黨黄昏時候にかへり來つ。隨即石見介に報るやう。小人今朝枸杞村に赴きて。巨棵が事の顛末を撈りしに。他は彼村なる。莊客某甲の妻なりし時より。酒を貪り賭泉に耽りて。人に忌るゝ毒婦なりしに。其良人身故りしより。彼身貧しくなる隨に。奸計を宗としつ。村人些の失あれば。其家に跟入て。多く錢を取らせざれば。敢去らず。生平に酒肆に赴きて。醉ざれば敢かへらず。然ばとて其價を。還さゞる日の多かれば。酒杜氏等は困果て。沽らじといへば怒狂ふて。升を擲ち吸口をうち拂ふ。狼藉涯りなきものから。然しも女流の事なれば。敵手に做さんはさすがにて。打懲すことを要せず。坊賈の悲しさは。只經紀の妨に。做さじと思へば賺寛解て。反て酒を贈り。錢を取らせて。告訴せる者あるとなければ。巨棵はます／＼忌憚らず。不義の利をのみ欲する程に。同氣相求めたる。墨烏盆九郎と密通し

つゝ又愕然と。驚く事大かたならず。やよ和子御身の肩尖より。鮮血多く流れたり。手疵を負せ給ひし歟。と問ふにはじめて心つく。杜四郎もうち驚きて。原來この悪棍婦の。鎌に鈍くも身を傷られし歟。現我ながら由斷は大敵。其故は箇樣々々と。巨楳に捷徑を問ひし始より。彼が猥藉の事の顛末。巳とを得ず拉ぎて。那里の老樹に繫ぎ禁たる。其事の終まで。詞急迫く解示せば。楽六いよ〳〵怒に堪ず。爾らば是寛すまじき。彼奴も盗兒の支黨なるに。なとて斫棄給はざる。いで那顋劈きて。息の緒斷ん。と敦圉猛く。走蒐らまくしてけるを。杜四郎推禁めて。丌は大人氣なし敵手に足らぬ。狂女を殺して何にせん。先我手疵に仙丹を。塗て宿所へいそぐべし。といふに楽六有理と應て。其偏袒を推脫せて。腰に吊たる藥籠より。彼仙丹を拿出して。杜四郎の瘡口へ。多く布塗らして。鼻紙を裂て蓋にしつ罵狂ふ棄木の巨楳を見かへりもせずうち連立て。觀音寺の宿所へいそぐに。先度に懲て捷徑を求めず。故の畷路に立かへりて。直急ぎに走るものから。杜四郎の鎌瘡は。彼仙丹を用ひしより。其血立地に止りて。敢又疼痛を覺ず。この日點燭時候に。高嶋の宿りに還るに及びて。瘡口なごりなく閉て。衣の障るを知らず。是よりの後。一兩日を歷ぬる隨に。その金瘡皆愈て。迹だに見えずなりにける。然ればこの兩少年は。仙丹神奇の經驗を。悄地に感じあへりける。間話休題。爾程に大江杜四郎。峯張楽六郎は。當晚夕飯果て後。主人石見介にうち向ひて。今日目撃したる郊外の。

然而杜四郎と朵六に。巨楪が横死の爲躰を。聞つる隨に宣示せば。兩少年等は。眉を顰めて。嘆息の外なかりける。姑且して杜四郎のいふやう。巨楪の如きは賊婦なれども。我其職にあらざれば。搦捕ることを要せず。只懲さまく思ひしに。虎狼野心の癖なれば。怨もなき里の男女に。多く痍を負せし歟。天罰覓に免れず。莊客們に毆殺されしは。寔に自業自得にこそ。といふを石見介うち聞て。然ればとよ。その事なれ。和君は巨楪を懲さんとて。彼身を結縛給ひしを。村人等は知らずといへども。事の讞斷果るをまたで。他鄕へ立去給ひなば。後に其事を知る人ありて。云云と評する折。逃たりとやいはるべからん。不本意にはあるべけれども。ゆくも止るも皆時なり。この義を思ひ給はずや。といふに杜四郎は然なり。と答て。事の障をうちわぶる。嗟嘆に長き春の日を。消し難つゝありけるほどに。三月も既に盡る時候。巨楪の一件果たりといふ。風聲仄に聞えけり。登時高嶋石見介は。杜四郎と朵六に告るやう。彼巨楪の横死の事に就きて。枸杞村人の稟すよし。其證据あるをもて。巨楪を毆殺たる壯佼等は。疎忽の失を宥められて。皆赦に遇ぬと聞えたり。其故は彼巨楪に。身を傷られたる村の男女は。幸にして死に至らず。皆その金瘡愈たれども。はじめ彼横小路にて。背を斫られし莊客某甲は。即死したれば救ふによしなし。有斯れば巨楪は里人の。諸手に死なで在とても。其罪解屍人を免るべからず。況他が年來の毒惡。是時に遠く聞えて。その照驗分明なれば。則守の御沙汰と

てより。迭に其惡を資けて。人の憂ひに做ると多かり。有斯し程に盆九郎は。積惡竟に發覺れて。大江主に搦捕れ。既に死刑に行はれしかば。巨楳は愛惜のやる方なくやありけん。うち歎きてありける比。人の爲に賺誘されて。歹智計をや馮られけん。大江主を仇とし罵りて。いかで怨を復さんとて。物狂はしく做る日もありしに。昨日何人の所爲にやありけん。長暇の横小路にて。巨楳を結扭て老樹の幹へ。緊しく括り置れし折。相識一箇の里人の。こゝろともなく過るあり。巨楳は是を喚留めて。只管拯ひを求めしかば。其人佛心をもて。敢亦疑はず。彼身を結扭し藤蔓も。長手括も解捨て。ゆくといまだ一町に過ぎず。巨楳は亂心したりけん。其頭にありける鎌搔拿りて。追携りつゝ其里人の。肩尖より背まで。ばらりずんと斫仆せば。窮所の深傷に一霎時も得堪ず。丌が儘撻と平張けり。巨楳は是を悔もせず。血に塗れたる鎌うち振て。狂ひ罵りゆく程に。途に逢ける里人の。老幼男女甲乙となく。身を傷らるゝ者多かりければ。血氣壯なる村人毎。素破事あり。と起り立て。朸桿棒引提々々。走り集ふ者數十名。巨楳を中に捉稠て。八方より撲つ程に。羅刹を欺く狂婦なれども。いかにして支ゆべき。腕を折かれ頭碎けて。腦髓出てぞ死でける。既にして事私に。治るべきにあらざれば。村長故老驚きて。事の邪正を問訂し。地方の莊官某甲に訴て。實檢使を請ふといふ。人東西に走り違ひて。罵り噪ぎ候。と言詳に演しかば。石見介又驚きて。先若黨を勞ひつ。丌が隨に退せて。

の祝壽あり。石見介是をものして。理髪烏帽子親を兼帶す。この日杜四郎と桒六の。額髪を剃除くに。石見介は。僅に剃刀を當たるのみにて。その技にこゝろ得たる。老僕若黨立代りて。剃もしつ。結髪果て。鏡を與へて見せなどす。石見介長江まで。出て前に居り。後に立て。その似つかはしきを好といふめり。是よりして杜四郎桒六は。倶に其小名の。四郎桒六をもて自稱せず。各その實名の。成勝通能とのみ唱へける。斯而この主僕は。倶に衣裳を整へて。當城内に遷し祀られ給ふ。多賀の神社へ詣んとて。高嶋の若黨を。案内にしつゝ立出て。拜み果てかへり來ぬれば。壽酒饗饌の儲あり。この義も石見介が心を用ひて。爲に祝壽を做せるなり。然ればこの賀席に。敢他人を交へず。成勝通能を上坐に推居て。高嶋夫婦相伴たり。その餘一家兒なる。老僕若黨奴婢等までに。物喫せ酒飲せて。終日歡びを盡しけり。石見介の師恩を思ふ。誠意の篤かるは。十三屋九四郎に。劣るべうもあらざれば。成勝と通能は。千謝萬謝も猶足らずとて。感悦涯りなきものから。斯而在るべきにあらざれば。明日は這地を立去らんとて。主人夫婦に別れを告るに。石見介諾て。和君達去歳よりして。屢事の障りありて。淹留今に及びしかば。心いそぎのせらるゝならん。發足は隨意なるべし。但し這里より若狹。もしくは越路などへ。赴くに二路あり。故官道は要害の爲。前後に新關を置られて。當家の士卒にあらざるより。敢往還を許されず。この便路を除くの外。陸は峩々たる山路にて。沙礫最多

して。形の如くに行はれにき。然れば枸杞村人は。蠱毒を禳ひし心地すとて。置酒して祝ふも少からねど。老て心弱き村人は。後又巨棵の悪霊の。祟を做すとあらん歟とて。講を結び。錢を集めて。彼亡骸を葬りつ。爲に五輪石塔婆を建立して。追薦の讀經。叮嚀にものせんとて。商量最中なりといふ。この義も人の噂に聞ぬ。彼首尾かくの如くなれば。和君達に障りなし。今日よりして那里まれ。發足は隨意なれども。已猶思ふよしあり。大江主は十七歳。峯張生は十九ならずや。爾るを猶總角の儘にて。萬里の逆路に赴き給はゞ。胸安からざる所あり。故何となならば。人少年と見る時は。思ひ侮るも是あるべく。或は龍陽鷄姦の。惑ひを做す小人の。是なしとすべからず。是によりて此を思へば。早く額髮を剃除きて。男に成るにしくはなし。倘我意見に從ひ給はゞ。明日は黄道吉日なり。好純不肖にして。其人にあらねども。故の峯張先生の弟子なれば。舊好親族の思ひを做せり。幸に嫌れずは。いかで烏帽子をまゐらせまく欲す。この義誰何と談ずれば。楽六はいふもさらなり。杜四郎異義もなく。歡びて答るやう。教諭誠に其理あり。我們貌を革るに。親にも兄にも告ずして。自恣なるは。實に非禮に似たれども。旅にしあれば許されやせん。最辱く候。と謝すれば亦楽六も。倶に歡びのこゝろを演て。猶も餘談に及びしかば。石見介は。兩少年の。溫潤にして怜悧さの。今にはじめぬ事ながら。いふ甲斐ありと思ふにぞ。先その准備をいそぎたる。次の日大江峯張の。初髻

覺さるゝ。主僕早飯を果し。割籠を腰にして。倶に身輕に打扮つ。主人夫婦に告別して。烏の茂林を離るゝ時候。遽しく立出れば。石見介長江はさらなり。奴僕等も都て別を惜みて。門傍に立て目送りたり。當下石見介好純は。妻の長江を見かへりて。我今番こそやうやくに。師恩に報ひ得たるが如し。世に人の親たる者。大江峯張主僕の如き。兒子あらば何をか憂ひん。實に彼家の麒麟兒なる哉。羨むべしくゝ。と連りに嘆賞したりける。去程に大江杜四郎成勝。峯張梁六郎通能は。觀音寺の一二の城門を。障りもあらず出離れて。ゆくといまだ十町に足らずこゝろともなく見かへれば。幾の程に趿踉きて來にけん。高嶋の若黨奴隷が。後方に立て禮を做す。思ひがけなき事なれば成勝と通能は。訝りながら歩を駐めて。先其故を諮るに。件の若黨答ていふやう。御鄕導の事はしも。固く辭はせ給ひしかども。主人は左右に安心せず。山を踰果給ふまで。倶しまつれと吩咐られて。まゐり候なりと告るを。成勝通能うち聞て。現彼人の信義に篤かる。かくまで心を用ひられしに。遣り返さんは無禮なるべし。と思へば倶に勞ふて。其が隨に將てゆく程に。その路一里許にして。早く山脚に來にけるに。其頭に茶店ありければ。權且茲に憩んとて。成勝通能伴當まで。凳に尻をうち掛て。共に山茶を喫程に通能は。茶博士にうち向ひて。碌々越の路程。嶮岨遠近を問ひけるに。茶博士答て。然候。素この山路は官道ならねど。曩に守の御制度として。故道を塞がれしより。若狹越前などへゆく旅客の。

かれば。土人綽號して。碌々越と呼做したり。其嶮岨艱難を嫌ふ者は。琵琶湖の畔に立出て。水路をゆくも多かるべし。そは便宜に似たれども。動もすれば風候して。日を累るものなきにあらねば。近きも反て遠きがごとし。這二路を擇み給へといふ。成勝早の尋思に及ばず。通能と商量するに。愍に水路を欲して。湖水の畔に赴かば。親しかりける衆少年の。水送の爲にとて。出來ぬるもありぬべし。然らば路次の煩なり。碌々越をゆくべしとて。この意を以答へしかば。石見介點頭て。爾らば郷導の爲に。若黨奴隷をまゐらすべし。といふを成勝聞あへず。いかでかは其義に及ん。我們は旅より旅に。光陰を送る者なるに。非如一驛半日なりとも。伴當などは用なし。と推辭ば通能も倶にいふやう。寧明日の起行は。人に知られざらまく欲す。伴當なきこそよかめれ。といふに石見介は強難て。竟に其意に任せつゝ。菅笠手拭鼻紙なんど。草鞋に至るまで。主僕の爲に心を屬て。只管餘波を惜むのみ。この時成勝通能は。逗留の程。新製の。衣裳は逆旅に要なしとて。去歳より老實にものしたる。老僕若黨に皆取らせて。雨衣をのみ携ゆくめり。この宵は高嶋の妻長江さへ。良人と倶に團坐に入りて。云云と話慰るに。周防にありける獨子の硯吉郎の事をしも。思ひ出いひ出て。堪ずや。洟をうち噈けり。現子を思ふ親ごゝろ。誰もかくこそあるべけれといはねど。然しも身にぞ知る。成勝と通能は。慰難て惆然たる。折から四月の初旬にて短夜なれば辭退きて。倶に枕に就きしより。幾程もなく呼

躑躅の韓紅なる。分けゆく人を染做して。朱に交り辰砂に臥すも。かくやと思ふ。最興あり。或は波流花の眞白なる。時ならぬ雪のまだ消ずや。燈に代夜學に耽りし。むかしを忍ぶ。心切なり。春の青山何時出にけん。今日初聲の杜鵑。四月の天の薄曇に。二四八としも珍しき。目さへ耳さへ暇なく。飽ぬ眺望は一霎時の程にて。既に巓に莅ては。宛屏風を建たる如く。路陝くして沙礫多かり。實に碌々越の名空しからず。一歩毎に小心せざれば。礫轔に載られて。忽地千仞の谷にや墜ん。成勝と通能は。迭に氣を勵して。杖をちからに辛くして。登る者十八九町。やうやく巓に至りては。最平坦にて路廣く。左右に生茂りたる。夏樹立の間に。土地の小社ありけり。旅客の茲にして。幣賻ぬる爲なるべし。彼字六と可平は。嶮岨にや疲れにけん。後れていまだ來ざりしかば。這方の主僕はそを俟んとて。小社の下檀に尻を掛て。倶に憩ふて在りし程に。前面に高き夏草を。踏披きつゝ突然と。走り出來る兩箇の暴野豬。倶に矢傷を負ふたる歟。威勢猛く成勝等を。蒐んと找めば。成勝通能。吐嗟と左右へ避別れて。寄らば刺んと疾視たり。この段街文多ければ。又下回に。解分るを聽ねかし。

新局玉石童子訓卷之十六終

をさく〳〵過る事になりにき。又這山を七鹿山と喚做したるも。碌々越といふとも。皆國人の訛りなり。素この山には名なき故に。無名山といひけるを。七鹿山と書改め。又この山路に。六六三十六町の嶮岨あれば。六六越と名づけしを。碌々越に作るにやあらん。皆是儒士の傅會ならん。と物識人は呟くも候ひき。又この山の半腹より。美濃路へ出る捷徑あり。そは只樵夫の通ふのみ。旅客はゆかず候。と這正首に說示すを。成勝も傍聞して。然らば去向は心易かり。嶮岨は三十六町のみ。郷導は實に要なし。謝して他等を返さんとて。通能と共侶に。高嶋の若黨奴隷を。叮寧に勞ふて。返さまく欲するに。這高嶋の若黨は。勾津字六と喚做して。性老實なる者なれば。敢其義に從はず。奴隷は名を可平といふ。こも愚直人なるをもて。いかにして還るべき。遽しく凳を外して。跪きつゝ倶にいふやう。豫知らせ給ふ如く。主人石見介は。賞罰正しく候へば。縱令辭せ給ふとも。等閑にして茲よりかへらば。罪免るべくも候はず。御數しく候とも。いかで今宵の御宿まで。御伴をこそ願しけれ。いかで〳〵。と諄かへす。言果べうもあらざれば。成勝も通能も。困じて又いふよしもなく。然らばその意に任せんとて。茶博士に茶代を遣して。山路の爲に茲にて賣る。竹杖四竿買拿りつ。各是を衝立て。碌々越を臨てゆく程に。はじめは其路嶮しからず。俗に云爪頭陟にて。聊も艱苦を覺ず。向上れば。青壁嵯峨として。綠樹森々。夏尙寒く。直下せば碧潭窅渺として。青苔蒸々。水又遠かり。或は岳

ける。長橋倭太郎勢泰。象船算彌知量なり。是怎生打扮ぞ。但見身には鞋肚甲手脛衣。長總垂たる鎌衣の上に。段々筋の夾衣の。裳短なるを被下しつ。腰には苛物作の兩刀を跨へて。背に駝倣す鷲の羽の。獵箭も亦是一對にて。各重藤の弓に。關弦張たるを挾み。頭に戴く綾藺笠。重裡なる戰鞋の。絲附の紐も夏挽の。麻より直き鯁義心烈。奈須の篠原獨鎗したる。那三介にあらざりせば。富士の御狩に寃家を撃たる。曾我兄弟の後身歟。と思ふ可の兩少年。這山中に躱ひて。有斯る資助になりけるを。神ならぬ身の知るよしもなき。成勝と通能は。疑の霧いまだ霽ねば。共侶に聲をかけて。思ひきや兩賢契。這里にて對面すべしとは。故こそあらめ。いかにぞや。と問へば勢泰知量は。含笑ながら俱にいふやう。いはで已べき事ならぬ。秘密の話説是あれども。世に憚りの關はなき。人迹稀なる山路なりとて。這頭は樵夫旅客の。過る者なしとすべからず。這方へ來ませ。と先に立ちて。件の茅社の背なる。樹下に退きつ。各株に尻を掛たる。丌が中に成勝通能は。勢泰等にうち向ひて。料らず野猪を射て斃されし。歡びを演まくするを。知量急に推禁めて。やよ兩呵々。目今火急の密話あり。他談は要なし。先听給へ。といへば勢泰聲を低めて。和君等いまだ悟らずや。我們今朝より這里に在りて。和君等の過るを俟しは。野猪を射るべき爲ならず。守の密意を受まつりて。人に知らせず御身等を。遠箭にかけん爲なりき。といふに呆るゝ成勝通能。憶ずも面を注して。沈吟すると半晌許。思難

新局玉石童子訓卷之十七

東都　曲亭主人口授編次

第四十七回　七鹿山の厄に四少年禍福を異にす
千仞の谷の中に神靈新奇を出現す

重說。大江杜四郎成勝。峯張梁六郎通能は。無名山叉七鹿山の巓にて。後れて來ぬる若黨奴隷。字六可平等を俟んとて。土地の茅社の頭に。權且息ひ居る程に。突然として暴來ぬる。正に兩箇の矢傷野豬。其形容犢に等しくて。駈んと狂ふ勁猛に。當るべくもあらざれば。吐嗟と左右へ別避て。寄らば刺んと身構たる。程しもあらず前向なる。繁き樹立の蔭よりして。飄と射出だす二條の。獵箭に野豬は甲乙共に。窮所を箆深く射串れて。四足を張てぞ斃れける。當下成勝通能は。思ひがけなき光景に。是はいかに。とばかりに。其方を佗とうち見たる。件の樹蔭に兩箇の武士あり。倶に吟ずる聲朗に　鼯鼠は木ぬれもとむと足曳の。山の幸雄に逢ひにけるかも。（萬葉集卷の三にあり）やよや兩才子訝り給ふな。我們前より這里に在り。出て意衷を告んず。と呼はりつ。徐やかに。立顯れつゝ近づき來ぬるを。と見れば是別人ならず。佐々木家の近習なり

ば。其折にこそ誅すべけれ。よくせよかし。と課すれば。宗玄は忻然と。承りてぞ退出たる。是等の秘密を始より。知れるは咱等と算彌のみ。といへば知量其語を次で。然る程に和君等は。刀子紛失の故をもて。逗留久くなる隨に。又彼曾根見宗玄は。我們と共侶に。高嶋許交加て。和殿等の隙を窺ふに。證据とすべきよしもなく。發足近きにありと聞えしかば。他其言の錯へるを。朽惜くや思ひけん。君命と詐りて。時ならぬ鮓を贈りしは。毒を飼しにぞあらむずらん。然ればにや和殿等は。食傷の病厄あり。命も危ふかりけるに。幸にして死に至らず。當春瘥り果しかば。宗玄は猶懲ずまに。獍婦巨棵の手を借て。大江主を結果けんと。拙く計較よしありて。彼拘杞村の巨棵には。悄地に多く錢を取せて。賍誘したりければ。巨棵は是に勢焉きて。大江主を寃家とし怨みて。狙撃まく欲ししに。曾根見が拙策行れず。巨棵は反て狂亂して。許多人に傷けしかば。彼身は當日枸杞村なる。莊客們に擊殺され。和殿等は異なる事なく。倶に初髻の祝義を果して。他郷へ立去り給ふといふ。其義を早く聞知りたる。宗玄彌娼く思ひて。猶惡心を改めず。譏して守に禀すやう。曩にも聞えまつりし如く。彼杜四郎楽六は。敵の間者に疑ひなし。然る故に。彼奴等は。君の御懇命を辭ひながら。久くなるまで立去らず。去歳の冬は。杜四郎の刀子紛失に假托て。夜々城外へ立出しは。地理要害を撈ん爲なり。その折毎に石見介も。出て案内に立にき。と悄地に臣に告る者あり。然らば石見介も隣國へ。内應のこゝ

つゝ倶にいふやう。言疑ふにあらねども。我們犯せる罪あらず。然るを亦何等の故に。悄地に誅せ。と宣はせし。守の御意こそこゝろ得られね。刎又御身等は。君命を承ながら。我們を射て仆さで。反て兩箇の暴野猪を。箭頭にかけしは甚麼ぞや。と詰れば勢泰四下を見かへり。然ればとよ。其事なれ。約莫這回の殃危は。一朝のことにあらず。去歳の九月十五日に。衆少年の試撃の折。御身等兩箇の弓馬槍法。彼末朱之介に十倍せる。本事を我君賞感のあまり。高録をもて當家に留めて。いかで家臣に做さんとて。みづから懇命ありし時。御身等固く辭ひまつりて。留るべくもあらざりければ。守はやうやく思絶て。重て御沙汰なかりしに。近習第一の嬖臣なる。曾根見五郎平宗玄は。能を忌。才を娼み。己に優れるを歡ばざる。奸佞利口の癖なれば。悄地に守に稟すらく。那大江杜四郎。峯張桒六兩少年は。必是隣國の。間者にこそ候はめ。其故は。君今他等に大祿を食しめて。留めまく欲し給ふを。固く辭ひまつりしは。心に一物あればなり。目今悄地に斬て棄て。禍根を斷給はずは。御後悔もや候はん。と眞實て叫き稟せば。守は半信半疑して。沈吟じつゝ宣ふやう。汝の先見。故なきにあらねど。いまだ正しき照据を得ずして。叨に他等を誅しなば。石見介も怨むべく。州民並て我疎忽を。譏るもあらば。隣國の。爲にしも笑れん。誅戮の事は急ぐべからず。この義は汝に任んず。他等猶この地にあらば。陽には親しく交りて。密々に心を属よ。他等果して隣國の。間者てふ照据あら

陽には彼と同意の如く。萬事隔なくものせしかば。宗玄やうやく心寛して。機密を呫く折もあれば。その大畧を知るに足れども。毒殺の事。巨楳の事は。只我們が推量のみ。正可に聞たる事ならぬに。丌を和殿等に云云と。呫き告んはさすがにて。こゝろ苦しく思ひしに。幸に免れ給ひしは。寔に自他の歡びなり。然るを昨日は思ひかけなく。我君の御意として。臣と算彌を閑室に。召よせて課するよしあり。且宣ふやう。聞くに彼大江杜四郎。峯張柒六郎は。明日の旦開に當所を去りて。越前へ還るといへり。彼等は朝倉の間者にて。當國の强弱を。撈るべき爲なり。と正可に告る者あれば。搦捕せて誅するとも。けしうはあらぬ事ながら。然しては又隣國に。怨を結ぶに似て妙ならず。只其去向は埋伏して。射て殺すにしくはなし。彼等は七鹿山をうち踰て。越路へ還る。と慥に聞ぬ。彼山には木立多かり。一人是を守る時は。萬夫も栈みがたしといふ。蜀の棧道にこそ及ざらめ。進退不便の切所多かり。汝等其頭に埋伏して。彼等が來ぬるを候ならば。是究竟の地方なるべし。目今この義を課せん者。汝等兩箇を除くの外。又ありともおもほえず。勉めよや。懋めよや。と亦他事もなく仰ける。思ひがけなきことなれば。算彌も倶に胸を潰して。答禀さん所を知らず。彼宗玄が謳言なる。いはでもしるき事ながら。和殿等は。我小父なる。石見介の師とし憑し。峯張叟の外孫なり。二郎なりとは己等も。豫聞知る所にて。出處來歷分明なれば。この義を具に聞え上て。諫奉らばや。と思ひしか

ろある歟。是も亦知るべからず。かくて今茲の春に至りて。杜四郎案六は。屢近郊へ立出て。故もなく莊客毎に。物を多く取すると聞えたり。是も亦所以あるべし。爾るに昨日臣が腹心の者。越前よりかへり來て。那里の消息を告るにより。思合せ候へば。彼杜四郎案六は。朝倉家の近習にて。其性怜悧きのみならず。武藝も人に勝れたれば。倶に間者に立られて。當國に來て八九个月。御方の强弱地理難易を。密々に撈者なり。然ればこそあれ彼奴等は。明日當國を立去りて。越前へゆくといへり。ゆくにはあらず還るなり。徜這時を喪ひて。彼等を放ち遣り給はゞ。後大なる患を做さん。彼等が封疆を出ざる間に。弓箭に勝れし近臣に。課て途に埋伏させて。射て拿せ給はずは。御後悔もや候はん。この義を思召れずや。と叩き稟す便佞利口に。守は竟に說惑されて。驚き給ふと大かたならず。汝の忠告其意を得たり。何人を討手に遣すべきとて。その人を擇み給ふ程に。憶ずも彼餘殃。遂に我身に及びにき。と告れば勢泰も倶にいふやう。彼宗玄が非義の伎倆を。よく知れるは稀ならんに。俺等と算彌は始より。彼が肺肝を撈り得たるは。亦是故ある事なりかし。曾根見は浮薄の小人なり。能を忌才を媢み。人を損ふべき者なれども。彼が女兄なる窓井の方は。守の年來愛給ふ。隨一の嬖妾なれば。宗玄も亦出頭して。言聽れずといふ者なし。こゝをもて始より。彼が和殿等兩才子の。人に勝れしを忌嫌ふ。其機を早く猜ししかば。後竟に齧害を。醸するともわからん歟。と思へば算彌と謀合して。

を勢泰推禁めて。他談は要なし。時もや移らん。やよ大江主峯張生。蚤く這山を下り果て。討手の征箭を免れ給へ。やよとく〳〵。といそがしたる。鬼神不測の一椿事に。成勝と通能は。聞く事毎に駭嘆じて。呆るゝ者牛晌許。愀然として倶にいふやう。身に覺なき枉津日は。何等の神の祟ぞや。倘和君達微りせば。我們兩個の白骨は。豺狼にしも喫殘されて。這頭の草を肥さんのみ。昨は文武の詞友たり。今は命の親としも。仰ぐに猶餘りある。洪恩德義は千萬言もて。謝するとも盡すべからず。願ふは異日再會して。報恩の時を俟んのみ。今は餘談に暇なし。然らば敎に從ふて。早く這山をうち踰て。他領へ走らば安かりてん。猶心許なきは。御身等の上なりかし。非除鏃に觸りしとても。巳等の首を得捕らで。徒に還りまゐり給はゞ。罪得がましき所爲ならずや。と主僕齊一陆問ふを。勢泰知量聞あへず。其義も豫商量したり。我們這里よりかへりまゐりて。反命しまつらんをり。首級は甚麼。と問給はゞ。然ゝ候。杜四郎と棐六は岨路傳ひに來にける折。射て仆し候へば。彼身は怺へず。幾百丈なる。谷底へ滾落にき。この故に他等兩個の。首は得捕らず候へども。必や嵒に碎けて。骨も續かずなりにけん。別に仔細は候はず。と稟さば障りなかるべし。是等のことに掛念せで。とく〳〵影を隱し給へ。やよ疾疾。といそがする。人の誠に成勝通能。盡ぬ詞も火急の別路。共侶に身を起す折から。後に繁き樹立の蔭より。咄と揚ける鬨聲。谺に響きて夥しく。山も頽るゝ可なれば。勢泰知量。成勝

ども。守は既に佞人に。說惑はされ給ひたる。痼疾膏盲に入りし上は。良藥諫言兩ながら。いかにして聽るべき。況我們は弱冠なり。身の程をしも揣らずして。虛實を稟解んとて。反て不測の罪を得ば。事に益なきのみならず。必亦別人に。課せて和殿等を射させ給はん。只然氣なく承まつりて。悄地に救ふにしくとあらじ。と立地に深念しつ。蚤く算彌に目を注せて。事情を得させつゝ。倶に頷衝て稟すやう。御諚かしこうも承り候ひぬ。彼杜四郎柒六郎等の。事の虛實は知らず候へども。何でふ尊意に背くべき。明日倘鏃に衂らずは。徒に還り候はじ。この義御心安かるべし。と齊一應稟ししかば。我君欣然と頷き給ひて。然もこそあらめ。人もや知らん。疾々立ね。といそがし給へば。軈て御前を退出にき。といふ言葉の數繁さ。露の情は一對なる。知量も亦嗟嘆して。事の難義に我們は。密談しても蒼柴の。こるばかりにて益あらず。非如君命なればとて。罪もなく怨もなき。良友知音の和殿等を。射て殺すべき弓箭はなし。所詮彼山に俟着て。密議を告て救ふにしかじ。と稍商量を果しつゝ。今朝より這頭に俟たる甲斐に。料らずも矢傷野豬。二頭を射て斃しゝは。昨日守に誓ひ稟しゝ。正に鏃に衂の義に。稱ふを一奇といはまくのみ。嘗聞く。この山には。老たる大鹿七頭あり。こゝをもて土人。無名山の和訓によりて。七鹿山に作るもあらん。鹿をしゝと唱るよしは。兎道の鹿飛の例に由るのみ。其鹿は人を害せず。又這山に暴野豬多かり。开は究めて怕るべし。と豫聞しに違ざりき。と解

しなくて。今這時に及べるは。其身の僥幸ならんに。雑兵さへに駈催し来て。君を非道に陥れまく。欲するはいかにぞや。大江峯張雨才子は。高嶋生に舊縁ある。出處來歴正しきを。敵の間者といひ做したる。その罪死刑に當るを知らずや。今はしも緩しかたかり。君の爲に奸を鋤く。勢泰知量が忠義の手はじめ。今その頭を撃落さん。开里な退そ。といはせも果ず。宗玄眼を瞋して。やをれ兵毎。腮敲せな。網裏なる四箇の罪人。漏すな。搦捕らずや。と劇しき下知にその隊の雑兵。承りぬ。と應も果ず。倶に十手を閃めかして。組んと捗む。勢泰知量。持たる弓にて撃仆し。毆き伏つゝ挑みたる。然しも劇しき爭に。成勝と通能は。料らざりける再度の窮阨。今宗玄を見て怨に堪ねど。一言半句の問答に。遑あるべき時宜ならねば。群立競ふ雑兵を。當るに儘せて投倒す。白打の精妙向ふに前なく。轆路を開せて。透もあらば宗玄に。組んと思ふ程しもあらせず。曾根見は馬上に。弓に箭刺ふて。克彎固めて瞟と射る。箭局狂ふて一箇の雑兵。項を射られて仆れける。既にして。宗玄は。一の箭を射損ねて。反て躬方を傷りしかば。心慌て第二の箭を。刺んとしぬる程に。長橋倭太郎勢泰は。競ふ緝捕の雑兵を。中るに儘して撃散せば。衆只嘷叫ぶのみ。重て蒐る者もなし。其間に勢泰は。弓箭を取て瞟と射る。那時遅し。這時速し。窺錯はず宗玄は。左の肩尖篦深く射られて。弓箭を捨つゝ仰反て。馬より撻と墜しかば。是にぞ駭く緝捕の衆兵。右往左往き亂噪ぐを。威勢剛たる大江峯張。象

通能。倶に吐嗟と驚きて。其方を佗と見かへれば。顯れ出來る緝捕の頭人。是則別人ならず。曾根見五郎平宗玄なり。頭には鐵粉磨に。鐵輪打せし。戰笠を戴きたる。身には勒肚戰外套。朱鞓の兩刀苛めしく。縹緞純子の野袴を。鴟尻に穿做しつ。山路の嶮岨に參熟たる。望月の暴駒に。鏢子を掛て腴にうち跨り。手には角弓三羽の征箭。握り持たる左右に從ふ。其隊の雜兵三十餘名。彼字六と可平を。緊しく結扭りつ牽居て。惴雄の壯佼毎。十手捕繩捍棒叉殳。各手手に打振々々。前後の路を立塞ぎて。漏さじとてぞ捕卷たる。當下宗玄聲高やかに。やをれ反賊勢泰知量。若們君命を承ながら。敵方に內應して。機密を洩す事もやあらん。と豫思ひしよしもあれば。我又守に聞え上て。隊兵多く假し給はり。迹を跟つゝ陟り來にける。路に石見介が若黨字六と。奴隷可平を生捕りて。其來歷を責問ひしに。我推量に多く違はず。杜四郎楽六が。逃脚の蚤さはさらなり。若們もこの山に。必在んと思ひしかば。嶮岨を厭はず急ぎ來て。那里の茂林の樹蔭より。其爲体を張ひしに。若們果して貳あり。射て捕るべき其兩敵と。幾の程に歟通同して。密談數刻に及びしを。反逆ならずと孰歟いふべき。天罰今は脫るゝ路なし。杜四郎楽六と。倶に馬前に跪きて。繩を受よ。と呼はれば。勢泰知量怒に得堪ず。弓箭搔拿り疾視て。君を惑はす奸惡人。賢を憎み才を娼みて。舌の劍に人を損ふ。當家の蠱毒。不忠の本性。人皆是を知るといへども。或は祿の爲に口を鉗み。或は其職にあらざれば。守に訴るによ

果しては。御身等も罪免れがたけん。この義甚麼。と悔問ふを。知量急に推禁めて。爾思るゝは理りなれども。愚意も長橋と異ならず。宗玄守の御使なりとも。行ふ所は正路にあらず。然るを今撃果さずは。彼が為に征せられて。倶に悪人の手に死なん。こは已ことを得ざる而已。といふ間に勢泰は。刃の鮮血を推拭ふて。开頭に牽居置れたる。高嶋の若黨。勾津字六と。奴隷可平の索を斫棄て。嘆息しつゝ却いふやう。汝等亟く城内へ走りかへりて。我等が為に小父に告よ。今日算彌と共侶に。大江峯張を射て殺さず。反て悄地に拯ひしは。亦是君の御愆を。補ひまつる為なれども。其事竟に合期せず。曾根見宗玄に跟られて。多勢を敵手に血戦しつゝ。射て宗玄を殪ししは。只是一時の怒に儘して。私の怨に報ふにあらず。宗玄は佞人なり。守を惑し奉る。奸虐既に極れり。今他をしも撃ずもあらば。執の時に悪を除ん。我と算彌が本意なれども。君の仰に由るにあらねば。倶に罪を免れがたかり。この故に自殺して。身はこの山の土になりてん。算彌も同じ意なるべし。我と算彌は幸あらで。父母早く世を去りて。胞兄弟もなく親族寡し。年來小父に後見せられて。成長たるのみならず。兵法武藝何くれとなく。教を承し甲斐もあらで。小父さへ連累せられん歟。と思へばなき身の後までも。心苦しき涯りなれども。今はしもせん術なし。この意を備に傳よかし。といひつゝ又短刀をもて。鬢の毛を剪拿りて。そを鼻紙に卷籠て。卒とて渡せば知量も。嗟嘆に堪ず倶にいふやう。我も亦幼稚き時

船知量共侶に。敵の捍捧曳手繰り。息をも養れず撃悩せば。衆兵いよ〳〵度を失ふて。或は深谷に滾落て。死活も知らずなるもあり。その他は山脚へ𡸴を衝て。落て身を傷るも多かり。开が中に猶幸に。辛く命を免れて。當日城内へ還りしは。五六名に過ずといふ。この事後に聞えたり。是より先に勢泰は。曾根見宗玄を射て落して。起んと蠢く程しもあらせず。起蒐りつ頭髻を抓て。地上に楚と推伏て。怒れる聲高やかに。やをれ宗玄。若が奸惡。今復數まへいふに及ばず。大江峯張雨才子は。其名這里へも。聞えたる古人峯張先生の親族にて。高嶋主に由縁あり。出處來歴分明なるに。敵の間者といひ做して。守を惑し奉る。其罪死刑に當れども。彼儘にして在るならば。猶幸に免れんに。我們をしも疑ふて。みづから跡を跟て來て。搦捕まく欲しぬる。奸曲既に極れり。我們素より不忠を存せず。大江峯張雨才子を。救ふは守の御愆を。悄地に補奉る。是則忠なり義なり。然れども事の敗に及びて。亦今さらにせん術なし。祿を棄。命を棄て。君の爲に奸を鋤く。勢泰が𩐍義の刀尖。思知るや。と罵り責て。腰なる短刀拔出しつ。宗玄の項より。吭を掛て咼煞と刺す。刀尖土中に入るまでに。鮮血濺と濆りて。开が儘息は絶にけり。浩處に象船算彌。大江峯張雨主僕は。逃る緝捕の衆兵を。追捨てかへり來つ。今この事の爲體に。主僕吐嗟と驚きて。走近つく聲もひとしく。やよ惴りしな。長橋生。宗玄奸虐なりといへども。亦是守の使ならずや。そを我們の故をもて卒爾に撃

に臨みて苟も辭せず。身を殺していよ／＼忠なり。在昔唐山漢楚の時。彼韓信に路を誨し。盧中人の義侠といふとも。豈這兩義士に及んや。惜むべし／＼。といひつゝ字六等を見かへりて。通能先いひけるやう。汝等這里に在りても益なし。疾城内に還りゆきて。高嶋主に注進せよ。言後れて告ずもあらば。彼人是非の境に惑ふて。連係の罪を免れがたけん。とく／＼ゆきね。と急せば。成勝も倶にいふやう。長橋象船の今日の所行は。忠義の爲といひながら。原是我們の死を救ふにあり。然るを彼兩義士は。身を殺して潔き。終をしも示されしに。我們主僕は倶に得死なで。這儘他郷へ走りなば。信義兩ながら。欠るに似たれど。いかにせん。舊里には。親もあり。胞兄弟あり。孝は百行の本にして。亦唯是より重きはなし。今交遊の爲にのみ。死生を隨意做しがたきは。實に是等の故なるを。高嶋主には知られやせん。いかでこの義を傳よかし。といはれて字六可平は。額を銜つゝ答るやう。御意承り候ひぬ。嚮に後れて來ぬる程。曾根見主に撞見して。情意もいはせず捕搦せて。這頭へ牽れたる時は。生たる心地せざりしに。各位に救れて。歡ぶ甲斐も慭に。曾根見主さへ衆兵さへ。擊果されて騰。長橋象船兩郎君は。這里の溪水に身を投給ふ。是等の事の大變を。早く主人に告ずもあらば。後難測かたかるべし。とは思ひ候へども。各位の御先途を。見果ずして退りなば。主人の本意に違に似たり。進退谷り候ひぬ。といへば亦可平も。然容々々。とばかりに。困じて倶に立難るを。成勝通能

より。高嶋大人に教育せられて。今日に至りしに。其報恩の折もなく。忠義の本意も空となる。身の薄命を争何せん。汝等宿所へ疾かへりて。高嶋大人に言傳せよ。といひつゝ小指を二三ン分許。噬斫りつ流るゝ鮮血と。倶に懐紙に裹て。是を字六に遞與して。又いふやう。汝我們兩箇の爲に。大人に言傳致すとも。照据なくは疑れん。長橋の鬢の毛も。又我小指も肉身なれば。末期の像見と思はるべし。約莫今日の禍事は。汝等の知る所。亦今さらにいふにしも及ばず。こゝろ得たる歟。と説示しつゝ。腰に吊たる藥籠より。高嶋家傳の仙丹を。撮出しつ。小指の瘡に。塗れば其血止りて。疼痛もあらず做れるが像し。當下長橋勢泰は。成勝通能にうち向ひて。兩才子是までの。志は致たり。蚤く他郷へ走り給へ。我們主君の御爲に。今奸惡を除くといへども。更に違命の罪を怕れて。倶に他郷に亡命せば。忠も不忠といはれんのみ。既に覺悟は極めたり。暇禀す。といひも得果ず。程遠からぬ千仞の谷へ。投るが像く身を墜せば。知量も亦後れじとて。倶に深谷へ陷りける。是にぞ驚く成勝通能。又字六も可平も。吐嗟とばかり呆れ惑ふて。立て見。居て見指覗く。底最闇き千仞の谷へ。落たる人を讐れば。索の絶たる吊桶に似たり。孰かよく是を拯はん。唯彌陀佛彌陀佛。と唱名の外なかりける。そが中に成勝通能は。惆然として嗟歎に勝ず。姑且して倶にいふやう。義なる哉長橋象船。侚少年にして烈士の風あり。善に與する事。水の低きに就くが如く。惡を憎む事。頭の蜂を拂ふに似たり。難

這奇異神妙に吐嗟とばかり。驚避けて。眼を定めて佗と見れば。彼大鹿の角に掛りて。深き谷底より登り來ぬる。其人は是別人ならず。長橋倭太郎勢泰と。象船算彌知量なれば。這方の主僕は怡悅に堪ず。こは〳〵甚麽。と立よりて。扶起さまく欲するに。勢泰も知量も。倶に溪水に濡れもせず。身には些の疵もなけれど。既に息絶たれば。成勝と通能は。撲傷の氣絶ならんと猜して。倶に師傳の覺ある、白打の活を入れしかば。其術に答る勢泰知量。云とばかりに息出て。忽地我に還りつゝ。共侶に身を起して。先四下を得と見つ。又成勝と通能を。見つゝ齊一膽を潰して。抑茲は那里ぞや。我們兩箇は千仞の谷へ。落て死せりと思ひしに。夢歟現歟。然るにても。大江峯張兩賢兄に。救れたる歟こゝろ得ね。と倶に訝る聲細やかに。猶つら〳〵と見かへれば。成勝通能含笑て。やよや長橋象船主。心地正可になりたる歟。和殿等鯁義心烈もて。身を溪谷に放下しゝ時。留る暇なかりしかば。うち歎くのみ。術もなく。高嶋よりおこされし。兩箇の伴當字六と。可平には身の暇を取らせて。蚤く宿所へ返遣し。却我們は。和殿等の。生死も知らず。亡骸を。見も果ずして开が儘に。他鄉へいなんはさすがにて。非除千仞の溪底なりとも。下らるゝ便宜得欲。と思ふ折から箇樣々々。如此々々の奇異ありて。谷の中より立升る。白雲と共侶に。犢兒に等き大鹿二頭。和殿等を角にうち掛て。谷より閃りと跳出て。主等を茲に振捨て。搔消如く見えずなりにき。慿る神助のあればこそ。我們兩箇は手脚

聞あへず。开は亦益なき口諠なり。汝等は長橋象船の。遺言をしも憑れしに。一霎時も這里に猶豫するとかは。我們の上はこゝろ安かれ。山を下りて他郷へ走らん。疾いなずや。と焦燥は。字六可平辭ふに由なく。揉手をしつゝ身を起して。しからんには是非に及ばず。御意に從ひ奉らん。おん別れてそ惜けれ。といへば通能聲苛立て。开はこゝろ得たり。疾ゆきね。ゆきね〳〵と惴立れば。字六可平應をしつゝ。故來し山路へ下りゆく。背影を見えずなるまで。這方の主僕は目送果て。憶ず嗟歎したりける。姑且して成勝は。通能と談ずるやう。長橋象船兩義士は。我們の死を救ひしより。彼身を潔くせんとて。倶に溪谷に身を投しに。其亡骸だも見ることなく。這儘にして山を下らば。情義兩ながら耻ざらんや。能ぬまでも底を探りて。索ねて見ずや。誰何ぞや。といへば通能沈吟じて。然なり。古語に。孝子は巖墻の下に不立といへり。親胞兄弟の爲にしも。身に大事を帶ながら。交遊一時の義の爲に。危きを忘るゝは。好しからぬ所爲なれども。宣ふ所寔に所以あり。藤蔓などに携りて。下らるゝ便宜もあらん歟。底の深さを揣りて見てん。卒とばかりに共侶に。岨の頭に立寄る折から。怪むべし。谷底より。白雲急焉と起立て。這方へ靡くと見る程に。犢兒に等き大鹿二頭。四月の今もまだ解ぬ。角に各人を掛て。跳騰りつ突然と。いで來ぬると見る隨に。主僕の間に掛たる兩箇を。振捨つ。驀地に。土地の茅社の邊へ。ゆく歟と思へば搔消如く。忽地見えずなりにける。然ば成勝通能は。目今

善に與し。賢を需めて。一藝ある者としいへば。養ずといふ者なし。且俺兄少輔太郎音就。二郎基綱も。父に劣らぬ志。ありとし豫聞知りぬ。巳治比へ紹介せば。歡びて留められん。他處を索るとかは。といへば通能も俱にいふやう。事の便宜はそれのみならで。俺兄十三屋九四郎は。浪速に名たゝる俠者にて。善に與して死をだも辭せず。生平に弱を助け强を拗ぐ。下高者で候へば。和君等先那里に赴きて。俺兄の幇助を借りて。水路を安藝へ渡り給はゞ。路の費を省くべし。なれども九四郎は。當春安藝へ赴くべし。と豫いはれし事もあれば。和君等其時に後れて。九四郎家に在らずとも。乾兒六市四摠あり。歼が單は必在らん。彼等も亦然る者なれば。事宜く相計ふべし。この義に任せ給へかし。といはれて歡ぶ勢泰知量。憶ず俱に額を撫て。歼は幸甚し。いかで敎に憑らまく欲す。然りとて這里にて長詮議して。再度の追隊の來ぬるに逢はゞ。後悔其里に逢がたけん。先這山を下りてこそ。といふに主僕は諾なひて。卒とて倶に身を起しつゝ。土地の茅祉の御前に。跪きつゝ合掌して。去向の無巽をぞ祈ける。

新局玉石童子訓卷之十七　終

を勞せず。和殿等輙くかへり來て。且再生の歡びあり。憶ふに和殿等人に勝れし。鯁義心烈を憐給ふ。土地善神の擁護なる歟。七鹿山の名虛しからずといはまし。寔に芽出たし〳〵。と迭代りに語を紹て。言詳に說示せば。勢泰知量聞果て。はじめて夢の覺たる如く。いまだ答る所を知らず。權且して共侶に。跪きつゝ土地の。茅社の方にうち向ひて。合掌默禱念じ果て。却勢泰がいふやう。我們命運いまだ竭ず。神と人とに幇助られて。死なざることを得たれども。這儘城内に還り參らば。忠も不忠と誣られて。縛首をや刎られん。然ればとて今日の事實を。具に訴稟さずは。俺小父さへ疑れて。連累の罪を免れがたけん。進退惟谷りぬ。といへば知量も沈吟じて。我們かの折溪底の。岩に碎けて命終らば。今の憂苦はなからんに。愍に神の祐けによりて。生て甲斐なき身の薄命。事の難義はいふまでもあらねど。事實を訴稟さんとて。阿容々々とかへり參らば。漫に死地に就んのみ。孰歟思慮ある者といはん。高嶋大人のとはしも。我們が爲に疑るゝとも。彼字六可平が。稟すよしをもていひ釋れなば。連係せらるべくもあらず。そを女々しく云云と。千遍思ふとも。今は甲斐なし。只速に他鄕へ避て。時の至るを俟んのみ。といへば勢泰點頭て。开は理わる言ながら。我們は世間廣からず。當國を除くの外。他鄕に親族知己の友なし。那里を投て身を措んや。といふを成勝うち聞て。兩賢兄難を避て。他鄕に時を俟んとならば。安藝の治比に赴き給へ。俺父大江弘元は。物數ならぬ小名なれども。

等の先に立て。徐々として行も得やらず。屢後方を見かへり〳〵。俺を導く者に似たれば。成勝並く意衷に悟りて。自餘の三人に叫くやう。彼は正しく神鹿にて。今俺們の爲にしも。郷導を做すにやあらん。といへば通能勢泰知量。共侶に歡び見て。寔に然なり。然なるべし。嚮には谷雲の奇異ありて。恁云勢泰知量の。必死を救ひしも彼鹿ならん。疑ずして從ひゆかば。便宜を得るとなからずやとて。俱に鹿のゆくに任すれば。鹿は成勝通能等の。初來にける山脚の方に。下りゆく程十八九町。左に幽けき細路あり。鹿は路を左に取て。この細路に入りしかば。成勝通能泰勢知量。茲なりけり。と皆こゝろ得て。丌が儘從ひゆく程に。實に是鳥路熊徑。樹木森然と枝を交えて。瓢形の日光に疎く。荊棘離々と伏累りて。人の脚を捉らまくす。實に是一歩運ぶも安からず。然ればとて已べきにあらねば。俱に辛くして。從ひゆく程に。終日にして饑渴を覺ず。是日申牌過る左側に。果して。一村落に來にけり。當下件の兩箇の鹿は。いつの程に歟在らずなりて。敢亦見るとなければ。扨は。とばかり少年等は。ます〳〵神の祐を感じて。俱に踵を旋らして。故來し路を再拜す。姑且して長橋勢泰は。象船知量に向ひていふやう。鹿の里近き山に在る者は。秋田圃を損ふ故に。人射て捉るは利益あり。或は又獵者の。野ともいはず山ともいはず。豬まれ鹿まれ射て殺す。丌は第一の殺生なれども。生活ならば爭何はせん。單その人ならぬ者。一時の興を取らんとて。人の爲に憂を做さゞる。禽獸を射て捉

新局玉石童子訓卷之十八

東都　曲亭主人口授編次

第四十八回　僞兵を率て健宗好純を襲ふ　醉夢を驚して良臣玉石を辨ず

前回いまだ罄さゞりける。七鹿山の段末を。復說大江杜四郞成勝。峯張柒六郞通能は。二度の窮阨を相脫れて。長橋倭太郞勢泰。象船算彌知量等と。倶に土地善神を默禱し果て。退きて談ずるやう。我們是より越路に走らば。再度の追隊逼來て。難義に及ぶ事もやあらん。早く路を取替て。美濃尾張の方にゆかば。必後安かるべし。と咡く成勝と共侶に。通能も亦いふやう。曩に這山脚の茶博士の。不問自語に聞知りぬ。この山より美濃へ出る。捷徑のあるならずや。和君等それを知りたる歟。と問れて勢泰知量は。應難つゝ沈吟じて。否。我們も這山を。前より過りしとなければ。其義はいまだ聞知らず。這里歟那里歟。とばかりに。思難つゝありける程に。奇なる哉兩箇の大鹿土地の茅祉の頭より。忽然と出て來つ。敢亦人を怕れず。這少年

出る時。倘夙念の隨にならで。歸城しがたき事もあらば。金銀こそ第一の。たのもし人なるべけれど。豫思ひしよしもあれば。有ん涯りを掻攫ひて。懐にしたるなり。是見給へ。といひつゝも。倶に懐を掻撈て。拿出して見する金。此彼等しく十餘兩あり。成勝通能是を見て。這少等等の遠慮あるを。一霎時感歎したりける。其が中に成勝は。又勢泰等に向ひていふやう。和殿等遠き思はかりありて。近き憂を資るまでに。各盤纏に足といふとも。周防にゆきて逗留の程財用竭なば不便ならん。我們は父兄の恩惠によりて。二三稔の盤纏あり。薄義なれどもこの十金を。枉て納め給へといふ。その言の切なる。に通能も云云と。連りに薦めて已ざれば。勢泰と知量は。困じて倶に辭ふに由なく。其五金を受納めて。殘る五金をかへしていふやう。芳意默止がたければ。敎に從ひ奉る。這五金にて物足れり。高恩德義は千萬言もて。謝するとも盡しがたかり。餘財は納め給へとて。亦受べくもあらざれば。成勝と通能は。強難て多辭せず。各金子を拿納めて。猶も餘談に及ぶ程に。勢泰と知量は。當國美濃より尾張に出て。伊勢路を過りて捷徑を。索めて住吉に迨んといふ。亦成勝と通能は。是より岐岨路に杖を薦めて。東國に遊歷すべしとて。迭に去向を定め果て。倶に枕に就きしかど。然しも餘波の惜まれて。睡らんとするにいもねられず。勢泰と知量は。捨し命を又さらに。神の祐に甦されても。猶轉この世を不樂て。己が往方を思ふにも。親に等しき高嶋の。高き恩を空にして。倘

るは。寔に無益の殺生なりき。初已もこの義を思はず。紈袴の暇ある折は。單郊外に獵消して。鹿を射て身の樂に。倣したるともあるものを。今日は料らず神鹿に。必死の厄を救れて。この活路さへ敎らる。こは我們が果報にあらず。大江峯張兩賢兄の。人に勝れし忠信孝義の。餘慶なる事疑ひなしとて。俱に後悔したりける。浩處に。一箇の莊客。前面より。來にければ。通能急に呼留めて。この里の名を問ふに。莊客答て。這里は昔より世にしるき。美濃と近江の境なる。宿物語の里なり。といひ捨て走去けり。是により成勝等は。這村稍盡處に最寂たる。客店に宿を需るに。勢泰と知量は。程遠からぬ鄕士の子兒も。漫に出て憶ずも。獵消したりといひ做しつ。又成勝通能は。彼等と相識旅客にて。憶ずも則程。行逢しと說醻しかば。一路人の相應しからぬも。逆旅主人等は疑はず。然ば四箇の少年は。この寂寞たる宿を得て。外に合宿の旅客なければ。纔にこゝろを安くしつ。俱に湯浴し夕膳を果す程に。長き四月の天ながら。既にして日は暮けり。當下成勝通能は。孤燈の下に坐を占て。治比と住吉へ贈るべき。紹介の書翰をものして。俱に勒肚の財嚢より。圓金各五兩を出して。件の書翰共侶に。是を勢泰知量に與へていふやう和殿等周防へ赴くに。盤纏なくはあるべからず。こは些少に候へども。路の資にし給へ。といふを勢泰知量は。聞も訖らず推戾して。开は思ひがけもなき。我們も亦懷に。些の貯祿なきにあらず。嚮に君命とはいひながら。難義の討手を承て。俱に宿所を

大江峯張兩主僕の。越路へとて辭去りし時。石見介は他等が爲に。去歳の秋より預り置たる。君侯恩賜の兩種なる。沙金白布の韓櫃を。兩個の奴隷に舁せつゝ。早く本館に仕出して。曾根見五郎平宗玄に。對面せまく欲するに。宗玄は恙ありて。出仕せずと聞えしかば。只得自餘の近習を請ふて。則告稟すらく。守には豫知召されし。臣が宿所に寓居の旅客。大江杜四郎成勝。峯張桼六郎通能は。今朝しも越路へ赴くとて。倶に立去候ひき。就きて去歳の秋九月十五日に。彼等へ恩賜の二種は。最忝く受まつるものから。旅にしあれば攜て。他郷へは赴きがたかり。異日かへり參るまでとて。貽し置候ひき。然れども彼等が再來ぬるは。多く歳月をや經ぬべからん。その折まで彼の二種を。寶庫に藏め措まく欲す。所以に持參仕りぬ。この義を聞え上給はせ。といふに近習はこゝろ得て。聽奥へぞ赴きける。爾る程に石見介は。尙その席に居り。二たび近習の出て來ぬるを。俟こと約莫半晌許。やうやくにして件の近習は。單奥より出て來つ。石見介に向ひていふやう。和殿の稟されし。事の趣きを。則守に聞え上しに。守の御氣色宜しからず。且宣ふやう。彼大江杜四郎。峯張桼六郎の事はしも。我始より。石見介に命ずらく。彼等他郷へ立去をり。其前日に告よといひしを。石見介は。何と聞たるやらん。立去りて後に告るは。抑亦等閑ならずや。况去歳の秋。那少年等に。賜し御物を。自由に儘し貽置ば。彼等が當城内に在りし時。聞え上て御旨を。伺奉るべき該なる。にそも

連累の罪にしも。誣らるゝ事あらん歟。と思ふ心をいへばえに。いはねば胸の苦しきに。嚮に劇しき戰ひの。撲傷にやありつらん。勢泰も知量も。腕痛みて堪がたければ。倶に師傅の仙丹を。唾に解て塗するに。其疼痛拭ふがごとく。立地に愈てけり。誠なる哉。高嶋祖傳の仙丹は。同藩の朋輩たりとも。敢佻々しく是を授けず。この故にその妙藥を。聞知る者すら稀なるに。勢泰は。石見介の。侄なるを。いへばさらなり。知量は弟子にて。其心操衆に。勝れて老實なる故に。好純早くこの兩少年に。彼仙丹を授けたり。こゝをもて知量は。嚮に小指を噬研し時。血さへ痛を覺ずなりしは。彼仙丹の即功にぞありける。閒話休題。然る程に。成勝通能。勢泰知量は。夏の天早く明る時候。遽しく起出て。朝飯を果す程に。勢泰と知量は。彼籠の鎖衫。甲手脛盾を脫袪て。行裹にせまく欲するに。幸に成勝通能の。袱に餘りありしかば。そを借て包などす。この他雨衣脚衣菅笠は。路次にて買拿んとて。各準備整ひしかば。通能則勢泰と共侶に。逆旅主人を召よせて。房錢を還す程。に宿の炊婢がもて來ぬる。晝の儲の裹飯を。各手に〳〵受拿りて。袂にしつゝ。立出て。草鞋穿締。うち連立て。ゆくといまだ遠からず。尾張に赴く岐路あり。建し傍示に分明なれば。皆共侶に歩を駐めて。迭に再會を契るのみ。世は定なき雲水の。西と東へ別の口誼も。言語寡く惟々戀憐たる。袂を玆に分ちけり。案下某生重說。彼日觀音寺の城内なる。高嶋石見介好純の。西郭の宿所には。今朝しも

りいで來て。守の御氣色宜からねば。漫に外へ出がたかり。渾家代りて參詣せよ。そも猶外目厭はしければ。轎子こそよかンめれ。伴には老僕を遣さん。疾々といそがせば。長江は異議なく退きて。身裝さへ時を移さず。衣裳を整へなどする程に。旣に亭午になりしかば。主僕遽しく晝饌を。果して後門より出てゆく。長江の伴當には。老僕某甲と。纔に一箇の腰下婢而已。兩個の奴隷に轎子を。舁せて香華院へいそぎけり。爾程に高嶋の宿所には。主の女房を始にて。男女多く出盡して。留守には一兩個なる。婢妾等のみ侍りたり。石見介は徒然に堪ず。嚮には思ひがけもなく。守の御不審を承まつりしは。そも曾根見宗玄の。讒なる歟。と猜しても。言に出さねば胆向ふ。心鬱々と樂まず。風暖かき四月の天も。秋歟とぞ思ふ身の憂患を。遣難て只獨坐居。若葉に暗き夏樹拉。庭の寛の音絕て。盆池に浮む紅鯉すら。人に狎ては人をしも。怕ぬ者をいかなれば。君臣朋友心隔。世の亂れこそ如意ならね。と獨語ても訪ふ人ぞなき。長き日銷し今日ばかり。常より長しと思ひたる。是。日晡時ばかりに。慌しく來る者あり。と見れば是別人ならず。今朝未明に吩咐て。大江峯張主僕の爲に。跟線に伴せよとて。越路の方へ遣したる。若黨勾津字六と。奴隷可平にぞありける。人に打擲せられし歟。頭髻亂れ衣も破れて。面色も亦平ならず。俱に惴たる聲音にて。悄地に報稟すべき。一大事こそ候なれ。といふに石見介驚きながら。先四下を見かへりて。且その所以を詰れば。字六のいふやう。嚮には

亦他等が去りし後。押てかへし納まくす。其不敬甚し。袷と云恰といひ。石見介の臆念。こころ得がたし。早く宿所に退て。後の御沙汰を俟べき者なり。又彼杜四郎楽六は。我賜ものを用なしとて。貽置たらんには。今亦孰に與ふべき。近習等目錄に合し受取て。遺なく有司に遞與べし。と仰られ候ひき。と告るを石見介謹み承て。且答稟すやう。御諚畏うも承り候ひぬ。但杜四郎楽六が。今朝發足の一條は。昨日曾根見五郎平に。云云と報しかば。既御聞に入りつらん。と思ひしに似ず。等閑の。おん咎を承まつりて。殆迷惑仕りぬ。又杜四郎楽六が。彼御物を貽し置んとて。臣等に意衷を告け候ひしは。僅に昨宵の事なれば。稟上るに遑なく。目今に暨べるなり。聊も等閑にて。遲の罪を忘れたるに候はず。然ればとて身の失を。飾りて陳じ稟すにあらず。和殿この義をこゝろ得て。倘又御沙汰あらんをり。術よく稟し給ひねかし。といひ果て身を起しつゝ。舁し來れる韓櫃を。件の席に拿よせて。目錄と共侶に。彼沙金白布を。一箇一箇に出す程に。自餘の近習も出て來つ。好純に會釋して。始の近習を幇助つゝ。東西皆受取果しかば。石見介は兩箇の奴隷に。空櫃をのみ舁せてぞ。軈宿所にかへり來て。妻の長江に云云と。君所の首尾を呫き示せば。長江は額を攅しつゝ。後の御沙汰は左やあらん。右やあらんと思ふのみ。慰難て立まくするを。好純急に喚禁めて。本月はいはでもしるき。我母大人の祥月にて。今日は忌辰に丁り給へば。墓參りすべかるに。思ひがけなき障

等を作者の鷄肋筆とやいはまし。閒話休題。當下石見介好純は。今字六可平等が。報るを遺なく聞果て。愀然として嗟歎に堪ず。拱きたる手を解きて。先勢泰の鬢の毛と。知量の小指の端を。見つゝ傍に閣きて。思ひきや。倭太郎算彌は。忠義の宿意を果し得ず。身を渓水に淪んとは。宗玄既に撃れたりとも。その隊兵等の免れかへりて。告訴する者さぞあらん。曾根見は當家の嬖臣にて。且弟伍六郎健宗あり。それにも優たる窓井の方あり。我今他等に先だちて。大江峯張の出所來歷。并に倭太郎算彌等の。心烈自殺の趣きを。蚤く訴稟さずは。彼等が爲に誣られて。我さへ守の御疑ひを。承まつる事もあらん。とは思へどもいかにせん。嚮には思ひがけもなく。守の御不審により籠居て。後の御沙汰を候折なれば。叨に御舘へ參りがたかり。老臣多賀政朝主と。一口鬼太夫は。倶に忠義の本性にて。俺と心知りなれば。蚤くこの義を告知らせて。彼幇助を借るにあらずば。後悔其首に達がたからん。字六は俺爲に。多賀主へ走りゆきて。七鹿山の顚末を。見聞し如く悄地に告よ。又可平は一口へ。使して其いふ所。字六と同じかるべし。いで〳〵と臂近なる。料紙硯を曳よせて。墨磨流す走書。筆の秋毛も壯鹿の角の。束の間にして密書二通を。寫し果つゝ甲乙共に。分ち封じて書筒兩箇へ。藏めて卒とて取らすれば。字六と可平は。應をしつゝ膝を找めて。各件の書筒を。受取りつ遽しく。外面投て出にけり。爾程に石見介は。心の憂遣るがたもなき。勢泰知量兩義烈の。彼死を惜む

大爺の仰のまに〳〵。小人等大江峯張兩客人に。倶して七鹿山を踰るをり。思ひがけなく小人等は。曾根見主に生拘れ。巓の方に牽れしより。說盡されぬ禍鬼起りて。事大變に及びたる。首をいへば箇樣々々。尾は亦如此々々なりとて。長橋倭太郎勢泰と。象船算彌知量が。君命により彼山にて。大江峯張兩主僕を。射て捕るべきを射まく欲せず。悄地に機密を告る折から。又彼曾根見宗玄が。隊兵多く從へて。山路迥に登り來て。既に闕窺たりしより。長橋象船兩少年の。逆心ありと罵りて。隊勢を進め捕稠て。搦捕まくしてければ。四箇の少年怒に得堪ず。多勢を敵手に戰ふ程に。曾根見は兵勢始に似ず。長橋倭太郎勢泰に。窮所を射られて命を喪ひ。隊の雜兵は散々に。死活も知らずなりし事。爾後長橋象船は。意衷を遺なく說盡して。君の仰に違ふといへども。罪なき兩才子を殺さゞるは。只是守の御愆を。補ひまつる爲なるに。宗玄が奸虐なる。逼りて玆に及びし上は。宿念竟に畫餅になりて。今さらかへるに家もなく。立去るに路もなし。是までなり。とばかりに。長橋象船共侶に。千仞の谷へ身を投て。骸も得見えずなりし事。その折大江峯張のいひつるとの顚末まで。可平も共侶に。其漏れたるを補ひて。相報る者半晌許。言果て字六は。彼折勢泰知量が。死後の照据にとて渡したる。彼鬢の毛と小指の端を。懷より搔撈出して。开が儘主にぞまゐらせける。却この段の條々は。近く前回に見えたれば。看官承知の事なれども。今亦こゝに其崖略を。敢いはざるとを得ず。是

好純。無禮なせそ。若が家に寓居の旅客。大江杜四郎峯張柒六は。素是敵の間者にて。越路へかへると聞えしかば。俺君他等の討手にとて。若が伍なる。長橋勢泰と。弟子象船知量に。仰付られたりけるに。勢泰も知量も。反て敵に内應して。七鹿山の樹下なる。外親稀なる地方にて。杜四郎柒六等と。密談に及ぶをり。俺兄宗玄其機を猜して。悄地に守に請まつり。隊兵多く従へて。迹を跟つゝ彼山にて。搦捕まく欲えしに。俺兄は幸なくて。惜や敵の流箭に。命空くなりしより。隊兵毎は頭なき。蛇より脆く殺散されて。走りて當城にかへりし者。方僅訴稟すにより。事分明に知られたり。俺身遊倅なるものから。兄の怨を復さん爲に。再度の討手を請まつりて。隊兵さへに借し給はり。四箇の逆徒を追撃すべき。今其事の創業に。若も同じ不義反逆。又俺爲には寃家の半隻。一家の奴們一箇も漏さず。鏖にせん爲に。うち向ひしを知らざるや。項を伸して。誅戮の。刄を受よ。といはせも果ず。好純呵々と冷笑ひて。言烏滸しき討手呼はり。彼大江峯張は。出處來歷分明にて。當初浪華に名もしるき。峯張通世の兒孫なるを。當家の故老は。知れるもあらん。又倭太郎算彌等は。倶に忠義の本性にて。罪なき主僕を殺すに忍びす。悄地に守の御愆を。補まく欲しゝに。若が兄宗玄は。善に禍し惡を恣にせる。奸虐非道の癖なれば。雑兵さへに駆催して。彼山に逼り來て。反て命を失ひしは。自業自得にあらざるや。然れども倭太郎算彌等は。守の仰に依らずして。宗玄幷にそ

に餘りある。大江峰張両主僕の。往方甚麼と。想像る。四月の天の薄曇り。越かた遠き杜鵑。幽に渡る聲聞けば。不如歸と鳴と歟いへど。妻の長江は生憎に。まだ香華院よりかへり來ず。俟とはなしに日は落て。黄昏近くなりし時候。人や來つらん。玄關の。方に呼門聲すなり。石見介是を聞て。折歹く老僕若黨。奴隷まで皆出盡して。客を迎る人あらず。然ればとて婢女毎を。執接には出しがたかり。俺のみならで。誰かはある。と單語つゝ。應をしつゝ。矮屏風に掛たりける袴を穿つ遽しく。中刀を腰にして。走出つゝ玄關なる。障子を斜棘哩と曳開れば。思ひかけなき緝捕の雜兵。御諚ざふと呼はりて。左右齊一組んと找むを。石見介は。こは甚麼。と驚きながら身を淪して。脚を稟ふて右ひだりへ。一丈餘り投退れば。續て競ふ衆兵を。右に左に受駐て。息をも養れず投伏々々。怒に堪ざる聲高やかに。若等は是何人にて。事の仔細を告も知らせず。侍品たる者に。索を被る法やある。猶狼籍に及びなば。开が儘にして還さんや。と敎圉猛く疾視たる。武術修練の本事に懲けん。緝捕の雜兵十名ばかり。只囂々と噪くのみ。重て蒐る者もなし。當下門外に留在たる。蓋一箇の少年あり。年の齢は十八九にて。眼圓に栗の皮めく。面に似げなき額髮は。角鮲とぞ思ふ黄牛の。行縢ならぬ野袴の。下短なる戰外套。苛物作の兩刀は。問でもしるき緝捕の頭人。曾根見五郎平宗玄の。弟と人に知られたる伍六健宗玆にあり。と名告も果ず找み入る。手に九尺柄の鈎鎗を。挾みつゝ睨へて。やをれ

ら左右の手を。揮しつゝ雜兵を。或は中躬。窠ひ投。いよ〳〵白打の術を盡せば。又找む者なきものから。組布れたる健宗は。聊甘さを得てければ。腰なる短刀拔出して。好純の太股、を。刄尖深く禺煞と刺す。好純痛痍に撓ねども。身單にして多かる敵に。勝を取るとかたければ。只得中刀拔閃めかして。亦復近づく雜兵を。殺拂ひ打散して。かへす刄を健宗の。右の腕に衝立れば。健宗は呀と叫びて。反返すべき膂力もなく。簀子をかけて縱れにけん。流るゝ鮮血共侶に。握持たる短刀の。柄を放ちて弱りしを。雜兵等は猶救んとて。競ひ蒐れる程しもあらず。突然として外面より。走り來る一箇の武士あり。後方に續く伴當等が。黄昏過ぎたる手挑灯。十手捕繩持るもありて。主從都て十餘名。高嶋の宿所なる。玄關陝し。と稠入りけり。丌が中に件の武士は。持る十手をうち振て。健宗の隊の雜兵を。撻懲しつゝ聲高やかに。若等は是野武士組なる。游兵にあらざる歟。先度に懲ず健宗に。哄誘されてや狼藉非法。今はしも饒しがたかり。這亂虐を鎮ん爲に。一口鬼太夫安陪が。みづから來つるを知らざるや。と名告に驚く雜兵等は。吐嗟とばかり身を縮まして。一團になりにける。其間に石見介は。健宗の腕に衝立たる。刄を拔かず。柄に携りて。身を起しつゝ徐やかに。二三尺の程退きて。痛痍を敢物ともせず。鬼太夫にうち向ひて。よき折からに安倍主。嚮に家僕可平をもて。告ける一義を聞れし歟。と問へば鬼太夫。然ばとよ。七鹿山の凶變は。曾根見五郎平に從ふて。彼山に

の隊兵さへ。撃果したりけるを。みづから責て一霎時もあらず。倶に千仞の谷底へ。身を投捨て亡にき。と注進の者ありて。蚤く這里へは聞えたり。それのみならで。いかにぞや。當家に人の多かるに。健宗若は遊倅にて。まだ仕へざる身にしあるに。兄宗玄に習へる歟。雜兵さへ哄誘し來て。當家の故老を撃まくす。罪反逆に異ならず。倘速に退かずば。搦捕て御舘へ牽ん。後悔すな。と罵れば。健宗怒て。左右を見かへり。兵毎那奴に臆せな。搦捕ずや。組伏ずや。と聲苛立て勵ませども。雜兵等は。好純の。始の本事に鬼胎を抱きて。應するのみ。逡巡して。又挑む者あることなければ。健宗焦燥て。持たる鎗の。鞘を瓦辣哩と振落して。晃めかしつゝ石見介を。刺んと連りに術を盡せども。好純敢物ともせず。右に左に遣違して。鎗の蛭巻丁と拿る。修練神速。無雙の剽輕。健宗は奪られじと。力を涯に曳く程に。石見介は手も見せず。鎗の鋒頭を拔拿りて。後方遙に投捨れば。健宗慌て。こは朽惜や。とその柄を棄て。抓蒐るを。好純噪がず左手に受て。宛狗兒を滾す似く。項髪拿て捩仆すを。起んと蠢く程しもあらせず。登蒐りつ組布て。生捕まく欲すれども。不用意にして捕繩なければ。連りに聲を震立て。婢女毎は奥にや在る。やと疾。索をもて來ずや。と叫べば亦健宗も。最苦しげなる聲立て。兵毎俺を救はずや。見てをると歟と怨ずれば。雜兵等はこの一句に。恥を知る者兩三名。應と答て走蒐りて。推仆さんとて閙くを。好純些もよせつけず。猶健宗を膝の下に。組布なが

そる玄關に。登りて主を目成て居り。石見介は列々と。那方這方を見かへりて。そは漫なり。婢女毎。長江も亦こゝろつきなし。好純淺痍を負ふたりとて。婦女子們に介抱せられば。こよなき恥辱なるを知らずや。老僕等もしかぞかし。奴隷毎と共侶に。退りて奥と後門を。守るこそ緊要なれ。疾々立ね。と叱らるゝ。婢妾們と共侶に。老僕奴隷も唯々とばかりに。只得奥へぞ退りける。开が中に長江のみ。良人に向ひて喃我夫。其痍窮所にあらずとも。捨措給はゞゆゝしかりなん。この禍事を聞しより。奴家先仙丹を。拿出て玆に在り。是もて療治し給はずや。といひつゝ壺をとり抗れば。石見介頷きて。开は當要のものなるを。言に紛れて忘れたり。一口主饒し給へ。いで〳〵といひつゝも。顔を皺めつ脚を伸して。穿たる袴を褰れば。安倍長江可平まで。こゝに創めて其刺瘡を。見つゝ眉根を顰たる。長江はいとゞ痛まし。と思ふてゝろを鬼にして。壺なる丹藥拿出て。良人に飲せて裏股なる。痍に布く者數回。懐にしたりける。白麻の汗巾を。探り出しつ兩箇に裂て。結合せて件の痍に。纒つゝ楚と結留れば。今にはじめぬ藥の即功。石見介は立地に。疼痛を覺ずなりにけん。袴の下を延しつゝ。やをら膝を折布けば。長江の歡びいふもさらなり。鬼太夫幾感歎して。豫聞たる高嶋の。仙丹奇効。神妙なる哉。主人起居に障りなくは。轎子にうち乘て。咱等と倶に御舘へ參りて。七鹿山の一條を蚤く訴へ給はずは。恐く婦言行れて。彼罪戻をいひ解きがたけん。いはでもしるきことながら。

赴きたる。野武士の游兵等がかへり來て。訴稟すによりて知るものから。彼をり長橋倭太郎と。象船算彌の自殺の事は。まだ聞も得ずありけるに。和殿も亦逸早く。使札をもて告げおこされし。事の實を得てければ。先多賀殿に面談して。非如夜を犯すとも。舘へ聞え上てん。と思ふ折から人ありて。曾根見伍六健宗が。兄の怨を復さんとて。游兵等を哄誘へて。和殿を襲ひ撃まくす。と告るにうち驚きて。その非義を鎭ん爲に。隊兵を將て來にけるに。果して亂妨茲に及びて。和殿痛痍を負給ひしは。驚き思ふ所なり。伍六は素是遊倅にてや。まだ仕へざる身をかへり見ず。仇ならぬ人をして。仇とし怨みて恣に。守の游兵を從へて。事殺伐に及びしは。罪反逆に等しかるべし。兵每早く門戶を閉て。健宗に從ひ來つる。游兵等を逃すとなく。數珠繫にして牽居よ。いで〳〵。といひつゝも。健宗の腕に衝立たる。石見介の中刀を。やをら拔拿りつ。血を拭ふて。主に返せば。石見介は。开が儘鞘に斂る程に。健宗は疼痛を忍びて。身を起しつゝ逃まくするを。鬼太夫透さず掖捉へて。袂にしたる捕繩もて。匝々纒にぞ結扭りける。當下石見介好純は。鬼太夫が公道なる。早速の計ひを歡び謝して。且健宗が亂虐なる。事の顚末箇樣々々。と詞急迫しく報る折から。妻の長江は香華院より。只今かへり來にければ。這禍事を聞知りて。老僕腰下婢奴隷まで。留守せし兩箇の婢妾等はさらなり。皆玄關に走り出て。安否を問つゝ勦れば。又彼奴隷可平は。鬼太夫に從ふて。旣に立かへりしより。おそるお

忽地外面に人ありて。連りに門を敲くにぞ。老僕奴隷等訝りて。誰やと問へば。其人答て。否賤しき者にはあらず。多賀典膳政朝なり。と名告に驚く好純安倍。思ひがけなし多賀主歟。疾疾内へ入れまゐらせよ。といふに老僕はこゝろ得て。外面にうち向ひて。多賀大人に稟侍る。主人屏居の折なるに。一口主に搦捕れたる。罪人等も候へば。略義御免。といひつゝも。角門を颯と開けば。政朝はさもこそ。と應て驀投入る。前後に從ふ伴當等が。照す挑灯暗からぬ。道を守れる家臣に。いふと都て聽れたる。高嶋の若黨字六も。倶せられてかへり來つ。衆皆内に入果れば。老僕は驀角門を。閉て背門の方に退きつ。一口の伙兵毎は。健宗幷に游兵を。一團に牽居て。跪居て政朝を迎へけり。當下石見介鬼太夫は。遽しく席を讓りて。夜陰の來臨を勞らへば。政朝是を聞あへず。否故意來ぬるにあらず。目今出仕のかへさにて。貴所の門前を過るにより。悄地に面談せまほしくて。驚かしまゐらせしに。一口生も這處にて。面會は便宜なり。然ども這里は端近なれば。閑談に宜しからず。といふに石見介こゝろ得て。忽地聲高やかに。奴婢等を召て。客房に。燭臺を出さしつ。卒とばかりに稍身を起して。案内をすれば政朝は。鬼大夫に會釋して。倶に客房に赴けば。看茶の禮。事果て。政朝膝を找めつゝ。石見介に向ひていふやう。嚮には御家僕字六をもて。七鹿山の凶變を。告おこされしにうち驚きて。證人なれば字六をも。倶して速かに出仕のをり。七鹿山より逃かへりたる。游兵等の

曾根見宗玄健宗は。窓井の方の弟なるを。敵手に取ては剛物なるべし。古語に言ずや。先にすれば人を征し。後るゝ時は征せらる。苦痛を忍びて出訴あらば。年來曾根見に媚たりける。小人們の膽を冷さん。這議甚麼。と眞實立て。こゝろつくれば。石見介は。聞つゝ莞爾とうち笑て。そは然あるべきとながら。臣等今朝出仕のをり。箇樣々々の事ありて。守の御氣色宜からず。宿所に退りて後の御沙汰を。俟よと仰出されたれば。他出を憚る折なるに。縱非常の訴なりとも。みづから參らば倒に。罪得がましき所爲ならずや。といふを鬼太夫聞あへず。其義は障りあるべからず。這回和殿の訴にて。守の御疑ひ氷解して。曾根見宗玄健宗の。奸虐早く知られなば。和殿推參し給ふとも。その御咎めあるべからず。安倍同道仕らん。準備を急ぎ給ひね。と諭せば石見介再議に及ばず。しからば芳意に任んず。やよや長江は奧へ退りて俺兩刀と衣裳を出しね。衣脫更ん。と中刀を。衝立て身を起すを。鬼太夫急に推禁めて。仙丹即功ありとても。目今運動し給はゞ。異日平愈の障にならん。こゝにて脫更給へかし。といふ間に妻の長江は。藥の壺を携て。いそしく奧へ退りける。程しもあらず腰下婢等は。長江と倶に主の兩刀。夾衣麻の社祚廣蓋に。載て玄關にもて來る程に。老僕は今日長江が乘たる。轎子の背門にありしを。兩箇の奴隸に出させて。舁せて玄關に立集ふ。挑灯その他の東西までも。準備に脫落なかりける。既にして腰下婢等は。長江と倶に主を扶けて。衣を被まくしぬる程に。

で住吉の里近き。孟林寺に寓居の事。八月に至りて武者修行の爲。倶に住吉を立去りて。一雲時京師に旅宿をしつゝ。近江の方に赴きしといふ。風聲這里へも聞えたりといへり。その言疑ふべくもあらざれば。更に孟林寺を敲くに及ばず。則里の故老等に。證書一通を。寫せて罷り候ひきとて。臣等に見せたる者茲にあり。是御覽ぜよ。と懷より。取出て呈閲してければ。君侯列々覧して。愀然として宣ふやう。我思淺くして。宗玄の誣言を曉らず。可惜忠義の倭太郎算彌を。非命に殺さし不便さよ。然るにても杜四郎柒六は。我を怨て。ゆく郷每に。不明不仁の君なりとて。必人に說示しやせん。恥しさよ。とばかりに。御嘆息の外なかりしを。臣等慰め稟すやう。彼杜四郎柒六は。溫潤にして學術あれば。寡言謹愼の本性もて。人の惡をいふべくも候はず。その義は御心安かるべし。と諭し稟せば頷き給ひて。去歲の九月彼少年等に。我取らせたる二種を。他等は受て。實は受ず。當所を立去る今日に及びて。石見介をもて返納しは。我非德を厭へばならんに。そを曉らずして云云と。石見介を詰りしは。我ながら鈍ましかりき。と御後悔の色見えて。又宣ふやう。今日は既に黄昏たり。明日は夙めて正廳にて。訴人等を召集合て。言の虛實を詮議せん。それよりも猶急ぐべきは。今より彼七鹿由へ。實撿使を遣して。宗玄以下の亡骸を。各其宅眷に執措せよ。この餘の事は云云と。仰示させ給ふ折から。窓井の方の使介なるべし。奥より一箇の女の童が。君侯の身邊へまゐり

訴あり。そのいふ所大槩は違はず。但長橋象船の自殺を他等は知らざる而已。是により當番。の有司に先示談して。臣等則君侯に。見參を請まつりて。件の事の趣を。備に聞え上しかば。君侯うち驚き給ひて。我昨日倭太郎算彌に。仰て彼杜四郎と。柰六を將て捕れとて。悄地に路次に出し遣りたる。その事は錯はねども。五郎平が隊兵を將て。迹を跟つゝ追逼りて。反て敗れを取りしといふ。其義は思ひがけなき事なり。他等が迭に行ふ所。孰を忠。孰を不忠と。いまさら分別しがたきは。他等三名その折に。命を隕したればなり。この義甚麽。と問給ひしかば。臣等答へ稟すやう。最憚りある言ながら。君は只曾根見宗玄の。讒を信させ給ひて。彼大江杜四郎。峯張柰六郎等を疑ひ給ひて。敵の間者なるべし。と思食たる故に。有斯異變のいで來候。はじめ臣等も彼疑ひの。なきにしも候はず。近曾誰いふとはなく。彼大江峯張兩主僕は。朝倉家の間者にて。當家の隙を窺ふといふ。流言耳に入りしかば。臣等悄地に思ふやう。彼大江峯張は。當初浪華に名もしるき。峯張九四藏の兒孫にて。高嶋石見介に由縁あるよしは。我も聞知る所なり。そが出處は錯はねども。今は北地に相仕へて。間者になりたる歟。その義はいまだ知るべからず。要こそあれ。と尋思をしつゝ。その折腹心の者をもて。悄地に浪華へ遣して。彼來歷を撈らせしに。其者今日かへり來て。那里の便宜を告るやう。小可浪華に赴きて。彼來歷を穿鑿しに。大江峯張兩主僕を。知れる者少からず。彼少年等は七月の時候ま

新局玉石童子訓卷之十九

東都　曲亭主人口授編次

第四十九回　野上驛に惡僕惡主を賺す　立合阪に仁人孝女を憐ぶ

却說多賀典膳政朝は。高嶋一口の兩主客に。今日君邊の事云々。と悄地に告て又いふやう。我君不明に在ねども。古語にいはずや。蕙蘭繁らまくすれば。秋風是を破り。良月明ならまくすれば。浮雲是を掩ふ。いかにせん。內に窓井の方の狐媚ありて。外に曾根見の便佞あり。君威を借て。私情を行ひ。賢良を誣て。不忠とす。こゝをもて。危殃蕭牆の中にしも。起らざることを得ず。然るを猶幸に。長橋象船の忠あり義あり。宗玄頭顱を喪ひしより。君臣無明の醉醒て。玉石亮然ならまくす。臣この折を得て竊やかに。諷諫の詞を盡し稟えしかば。我君御後悔の色見えて。明日は夙めて正廳に。訴人等を召集合て。邪正を判斷すべしとて。仰合されたりければ。驪御前を退出つゝ。宿所へいそぐ路の程。這里にも亦事ありとて。罵り走る下司ありしを。呼留めて問試るに。其事詳ならねども。曾見根健宗の事云々。とその大略を

て。何事やらん囁き稟しつ。軈奥へ退りしといふ。この密話猶多ければ。是より巻を更めて。
又下回に解なん。

新局玉石童子訓巻之十八　終

により時を移さず。躬は禮服の儘にして。伙兵を倶して走り來ぬるといふ。其事の尾まで。繁きを芟て告げしかば。政朝は聞く言毎に。嘆唱の聲を斷たず。欣然として且いふやう。高嶋主身單にて。多勢の敵を防ぎ得たる。本事は今さらいふにしも及ばねど。脛に深痍を負ながら。組伏たる健宗を走らせず。且家傳の仙丹をもて。其痍に即效ありて。起居かくの如く自由なるは。世に未曾有といひつべし。然りけれども。鬼大夫主。和殿の援助あらざりせば。主人危ふかりけんに。善には必善報あり。惡には必惡報あり。天理彰々たり。誣べからず。彼曾根見宗玄が。七鹿山の顛末は。君命を承たるにあらず。他詐詭を行ふて。殺伐を宗としたる。其罪免れがたかるに。况其弟健宗が。僞緝捕の一條は。忽緒にすべからず。一口生は歹人毎を。徑に御舘へ牽もて參りて。彼弟兄の奸惡を。聞え上られん事勿論なるべし。主人は猶よく金瘡將息して。明日は夙めて兩家僕。字六可平とやらんを從へて。正廳へ參り給ひね。委曲は其折々。といひつゝ刀を引よせて。告別して身を起せば。鬼大夫も共侶にとて。後に跟つゝ立出て。却隊兵に。健宗以下の。罪人を牽せつゝ。出て高嶋の門前にて。政朝と東西に。別れて君所へいそぎけり。是よりの後。高嶋の宿所には。長江老僕等奴婢までも。方僅主客の問答を竊聞て。曾根見健宗の狼籍の。其崖略をこゝろ得たれば。更に其義を問ふに及はず。只その刀痍を勦るのみ。开が中に字六可平は。多賀一口に使したる。返命を報る程に。夜ははや初更

知るに足る。非理奸虐の緝捕ならんを。开が儘いなんはさすがにて。立より見れば。果して事あり。主人危ふかりけんに。我より先に一口の。資助によりて歹人毎は。矢庭に搦捕れにけん。實に公私の幸なり。所以こそありけめ。いかにぞや。と問れて好純。然ゝ候。嚮に曾根見伍六健宗が。隊兵多く從へ來て。我好純を理不盡に。搦捕まくしけるをり。一家兒なる奴婢毎は。荊妻に從ふて。香華院へ赴きつ。然らぬは使介に充られて。左右に扶助なきものから。我身單もて彼徒を。中るに儘せて投伏々々。當人曾根見健宗を。矢庭に膝に組布しに。曾根見の雜兵懲ずまに。蒐るを防ぐ开が程に。健宗短刀引拔きて。我太股を刺ゑしかば。反復されじ。と思ふばかりに。腰刀をもて健宗の。利手を簀子へ縫留たる。折もよく一口の。資助によりて歹人毎は。遺なく搦捕れたり。有恁し程に荊婦も。老僕若黨奴隸まで。皆かへり來て便宜を得たれば。先家傳の仙丹をもて。我身の金瘡を療治しつ。鬼大夫主の薦めによりて。敢刀瘡を厭ふとなく。目今衣裳を更めて。出訴せまく思ふ折から。計らず貴老に問れまつりて。彼君邊の秘事さへ。承りぬる一期の歡び。是に優す者候はずとて。一五一十を說示せば。鬼大夫も亦恭恭しく。政朝にうち向ひて。在下蚤く茲に來て。健宗等を搦捕たる。首は箇樣々々なりとて。石見介が可平をもて。七鹿山の一椿事を。蚤く告おこされし事。又宗玄の。隊兵等の。彼山より覓れ來て。訴の事の趣。又伍六健宗が。兄の伙兵を賺誘して。當主人を襲ふといふ。風聲

しにあらずや。この義甚麼。と譴問へば。殘兵等は踧然と。頭を低て答る者なし。丌が中に。一箇の老兵あり。姑且して陳ずるやう。小可等性愚にて。理非に闇く。事に敏らず。宗玄のいふ所。便是守の御諚にこそ。と思ひにければ善惡邪正を。訂問ふ暇もあらず。長橋象船。いへばさらなり。大江峯張と歟いふ少年をも。搦捕らまく欲したる。後悔臍を噬ども甲斐なし。只恩免を願ふのみ。といへばその餘の殘兵も。異口同容にぞ陳じける。當下多賀政朝は。局の内に牽居られたる。罪人等を召よせて。やをれ曾根見伍六郎健宗。大膽不敵の狼籍は。今さらに亦いふにし、及ばねど。その兄宗玄の隊兵さへ。漫に一味同意させて。怨まじき寃を倡て。當家二三の兵頭たる。高嶋好純を襲ひ撃まくしたる。抑狂人の沙汰にして。大僻不赦の罪人なり。然でも今亦いふよしあるや。いかにぞや。と譴らるゝ。健宗僅に頭を擡げて。丌は御諚で候へども。我們事の虚實を悟らず。兄の寃家を撃得ざりける。遺恨遣るかたなき故に。亦只高嶋好純も。鄰國に內應したる。逆賊なりと思錯へて。兄宗玄の隊兵の。遺りて玆に在りけるを。相譚ひつ引倶して。襲ひ撃まく欲したる。短慮を後悔しぬるのみ。身の錯誤とはいひながら。素是忠義の爲なるを。いかで亮査あれかし。といへばその隊の雜兵も。いかで〳〵。とばかりに。悲請ふて巳ざりしを。政朝聞つゝ冷笑ひて。其義いよ〳〵こゝろ得がたし。只傳聞を實として。その職にあらざるに。重臣を撃まくしたる。罪を脫るゝよしあらんや。爾るを猶

になれるなるべし。然れば石見介好純は。危ふかるべき刺瘡なれども。窮所にあらねば思ふに似ず。況仙丹奇特の即効。一夜の間になごりなく。乾きて過半愈しかば。天明て君所へ參るに及びて。敢て鑑輿を用ひず。聳然として歩よりゆきしを。人咸駭歎したりける。爾程に其詰朝。佐々木彈正大弼高頼主。老黨有司を從へて。正廳に出坐ありしかば。家臣多賀典膳政朝。市井司。一口鬼大夫安倍等奉りて。訴人高嶋石見介好純以下。曾根見五郎平宗玄の殘兵と。罪人。曾根見伍六郎健宗等を局の内に召集合て。事の邪正を判斷す。是より先に。昨日七鹿山へ。實撿使に遣されたる。有司かへり來て。彼山の爲体を。報稟すを聞給ふに。訴人等の稟す趣と異ならず。宗玄以下。當坐に命を殞せし者の亡骸は。豺狼などに啖れたるもあり。或は。山脚へ滾落で。半死半生なるは。扶けて筏にうち乘て。夫役に舁せてかへり來つ。この他長橋倭太郎勢泰。象船算彌知量等。彼身千仞の谷に落て。死活を知らず。と聞えしは。其亡骸を索ぬるに。術なく候とぞ稟しける。間話休題。當下高嶋石見介は。家僕字六可平が。稟す趣を照据として。七鹿山の條々を。寫せし一通を呈閱す。鬼大夫是を受取て。聲高やかに讀訖れば。政朝やをら膝を找めて。階下に侍る宗玄の。殘兵等にうち向ひて。汝等その頭人たる。宗玄の倶してゆくとも。彼山に到りては。長橋倭太郎。象船算彌の。問答によりて大略は。事の邪正を知りたらんに。叨に四箇の善少年等を。搦捕らまく欲せし故に。毛を吹きて疵を求め

彼大江杜四郎成勝。峯張楽六郎通能は。出處正しき者なるに。我思ひ愆ちて。倭太郎算彌を討手として。悄地に彼山に遣ゑしを。千番悔ども及びがたかり。典膳石見介等この意を得て。異日他等が往方を知らば。いかでこの義を傳へよかし。と課せて軀身を起しつゝ。一二の近習を從へて。徐に奥へ退り給へば。是日の廳は果にけり。爾程に窓井の方は。兩箇の弟。宗玄健宗が。正なき事を做出しゝより。宗玄は七鹿山にて。戰歿の聞えあり。剩伍六健宗は。兄宗玄にも彌増せる。猥籍の罪免るゝ方なく。軈死刑に處せられんといふ。人の噂を生憎に。洩聞しより。胸潰れて。淺ましくも哀しさの。遣端なければ左に右に。君邊に人なきをり〳〵。悄地にこの義をうち歎きて。弟健宗の爲にしも。恩赦の制定を乞稟すものから。高頼爾ばかり色に溺るゝ。闇君にあらざれば。嚮に多賀政朝の。諫言を聽しより。旣に昨非を知りたれば。婦言を容じ。と念ずる而已。然ばとて楊大眞の。馬塊に夢の覺しにあらねば。事の術よく慰めて。いかにもして健宗を。赦免せばや。と思ふ程に。約莫二十日有餘を歴て。彼身の金瘡餘波もなく。瘥り果しと聞えし比。有一日多賀政朝は。同僚なりける。麻井鵞毛の老黨と。共侶に出仕して。高頼主に稟すやう。曾根見伍六郎健宗の事。禁獄久しく做り候ひぬ。蚤く首を刎させて。士民に示し給はずは。亂臣賊子法度を紊りて。君父を凌ぐに至るべからん。法度は君の立る所。君先是を破りて後に。民其法度を破らざるはなし。在昔孔子の魯國に相たる。纔に一箇の少正

その非を飾りて。忠義といふは究めて烏滸なり。理に闇かるは。愚物の本性。倘始より如右思はゞ。などて訴稟さゞる。みづから恣なるは。是狼籍にあらずや。と言語急迫しく責懲せば。健宗等は默然と。又頼陳ずることを得ず。稍其罪に服しけり。當下多賀政朝は。上坐に向ひ額を衝て。言如此々々。と聞え上て。是非の憲斷を乞まつれば。高頼霎時沈吟じて。高嶋石見介が告訴の條々。其照据分明なれば。今さらに疑ふべからず。素より罪是なき者なり。又曾根見五郎平宗玄は。詐佯を行ひて。殺伐を檀にしたる。その罪輕きにあらねども。彼身は既に七鹿山にて。長橋倭太郎。象船算彌等に擊れし上は。今亦罪を正すに及ばず。其秩祿を召放ちて。宅眷を他が親族に預け措べし。就きて倭太郎算彌等は。心術忠義の爲なりとも。我近臣を殺戮したる。其罪なしとすべからず。然れども他等は彼山にて。既に自殺の聞えあれば。當に所帶を沒官して。墓碑を建ることを許すべからず。又曾根見宗玄に從ふて。七鹿山に赴きたる。彼隊の走卒等も。疎忽の罪ありといへども。曩に宗玄に隷られて。彼手に從ふ身にしあれば。善惡共に其頭人の。隨意せずはあるべからず。是をもて。罪一等を相宥て。今よりの後夫役に傚して。間なく時なく使ふべし。就中曾根見伍六郎健宗は。其罪饒されがたきものから。猶頑童にて大人にあらず。剰亦彼身痛痍を負ぬといへば。その從兵と共侶に。姑且獄舍に繋ぎ在せて。其痍平愈したらん時。左にも右にも行ひてん。爾るにても。今高嶋好純の訴訟に依るに。

見宗玄を。撃果しぬる罪戻は。鮮少にあらねども。行ふ所忠義に似たり。他等猶世にあらば。その罪を相宥めて。召返すよしもあらんを。自殺の上は是非に及ばず。親族の子に相應しき者しもあらば願稟して。家を續するともけしうはあらず。況墓石を建るをや。由縁の者の隨意たるべし。然れば曾根見健宗の。犯し丶罪もこの義に準じて。死刑を宥めて追放すべし。この旨をもて封内なる。士民に隈なく知らせよ。と重て掟給ひしを。麻井鵞毛の兩老黨。額衝き承て稟すやう。世に有がたき御仁政。耄と悼とは罪ありとも。刑を加えずといふ本文の。曲禮に見えたるは。年八十と七歳の小兒をいふ而已。然るを健宗勢泰知量等は。猶少年の故をもて。慈恩恁地なる時は。曾根見の幸をいへばさらなり。勢泰と知量は。君恩枯骨に及ぶといはまし。最辱く候。と應まつれば政朝も。面を起す心地して。其侶に稟すやう。仰承り候ひぬ。曾根見健宗恩赦の上は。他に一味同意したる。宗玄の隊の殘兵等も。放免せらるべうもやと。問ふを高頼主聞あへず。开は勿論の事なりかし。この義を以下知せよ。といそがし給へば三老黨は。再議に及ばず言承して。うち連立てぞ退出ける。然れば多賀政朝は。是日一口鬼太夫に。件の下知を傳へしかば。鬼太夫則奉りて。猛可に罪人曾根見健宗と。同惡の罪人十餘名を。獄舍より牽出させて。憲斷慈恩如此々々。と嚴に言示して。皆追放にぞ行ひける。誠なる哉。この年來。惑井の方に所縁を求め。曾根見五郎平宗玄に。媚て知られまく欲し

卯を。誅して鄰國境を犯さず。國治り民安かりしといふよしは。君の知召す所。いかで勸善懲惡の。御制度をこそ願しけれ。と憚る色もなく稟ししかば。高賴勃然と眼を睜りて。亓はいはるゝ迄もなし。我も亦始より。思はざるにあらねども。彼曾根見健宗は。尚乳臭き頑童なり。世に男子たる者の。年十八九に至るとも。いまだ額髪を剃除かねば。是を女子に擬へて。罪ありても刑を加へず。是今の世の通法なり。こゝをもて健宗を。追放せばや。と思ふなり。汝等この義をこゝろ得よ。と謟貌なる似而非仁義を。政朝推返して。又稟すらく。御諚畏う候へども。健宗少年なるをもて。死罪一等を宥免給はゞ。長橋倭太郎。象船算彌も。亦額髪ある者にて。倶に少年なりけるに。君の御意に從ひまつらで。驕臣曾根見宗玄を。撃捕りし罪なひて。彼自殺を憐み給はず。他等が後を立べからず。墓石だも饒さず。と掟給ひしを思ひまつれば。健宗勢泰長橋倭太郎知量象船算彌も。皆相似たる少年なれども。一人は驕慢。二人は忠義。善惡邪正分明ならんに。賞罰同じからずもあらば。國民並て訝りて。贔屓の御制度とや稟すべからん。是臣等が君の御爲に。恐れ思ふ所にこそ。と理りを演て諫しかば。高賴聞つゝ羞たる色あり。權且して仰するやう。典膳の意見寔に以所あり。我彼勢泰知量の事を忘れたり。因て今亦是を思ふに。健宗の猥籍は。兄宗玄の枉死の故にて。勢泰知量の亂妨は。善に與して奸を鋤く。義烈といはゞ。いはれもせん。因て今又再斷すらく。勢泰と知量は。我密意を用ひずして。近臣曾根

貧んとて。咱等を使におこされたり。やよ這方へと先に立て。倶に樹蔭に退きて。背にしたる袱裹を。遽しく解下して。懐より一包の。金子を拿出て遞與ししかば。健宗は死出三途にて。六道能化の地藏菩薩の。引接に逢ふ心地せる。その歡び大かたならず。滿面笑れて幾遍となく。先唐二を勞ひて。軈其金子を數まへ見るに。正に是圓金五十枚ありけり。窓井の方の贈りしは。一百兩なりけるを。唐二が不良の猛意もて。其半分を掠拿りて。五十金は他が懐にあり。健宗いまだ是を知らず。件の金子を受戴きて。故の如くに紙に包みて。犢鼻褌に結着て。袱裹を開き見るに。廼短刀一口と。仁田山紬の夾衣二領ばかりに。帯と汗衫と。膩衣鼻紙さへあり。其鼻紙の間には。窓井の方の密書ありしを。唐二は素より是を知らず。健宗は心ともなく。衣を脱更んとするをりに。件の密書の顯れ出しを。健宗早く拿揚て。封皮を拆きて讀見るに。上野なる小母君に。まゐらせよとある其一通も。巻入て奥にあり。健宗は讀果て。巻返しつゝ其書二通を。先懐へ推容て。勃然たる聲高やかに。やをれ唐二さな欺さそ。我姉よりおこされし。金は一百兩ならんを。蚤く半分を推隱して。知らず貌する胆の太さよ。其手は喫はず。疾出せ。といはれて唐二は驚としながら。毫も怯まず冷笑ひて。其は何をいはるゝやらん。彼方さまより受拿りて。はるゞ這里へもて來し金子は。その五十兩より外になし。といはせも果ず瞋視へて。黙れ。盗兒論より證據。我女兄の密書茲にあり。といひつゝ懐より

たる。多慾浮薄の佞人等は。寒心せずといふ者なく。誰箴るにあらねども。皆謹愼を旨として。武藝を勵み。文學に立交りて。みづから新にしたりしかば。佐々木の家風改りて。軍威中夏に振ひけり。この擧。忠臣多賀政朝の計る所。蓋力ありといはまし。閒話休題。爾程に窓井の方は。屢使君にうち歎きて。舍弟曾根見健宗の。死刑を救ひ得たれども。一霎時も留め置れずして。是日追放の聞えありしかば。其が去向を資助んとて。腹心の內人なりける。臺床唐二と喚做す者に。機密を囁きこゝろ得させて。健宗に贈遺すべき。金一百兩と。短刀一口。衣一襲を齎して。他が迹をぞ逐せける。健宗はいまだこの義を知らず。同惡の殘兵等と共侶に。一口の隊兵に追立られて。城の郊外東のかた。二三里可なる串明亭にて。並て笞放にせられしかば。只蜘蛛房を破りし像く。或は西或は東。己が隨意なりもてゆきて。迹には單健宗のみ。惆然として立在たる。折から日景は傾けども。身は牢衣のみにして。今より後の盤纒に做をべき。鐚一文だもあるとなければ。いかにせましと思難て。有期時には憑氣なき。同惡人等の己が自恣。立別れゆく背影を。怨しげに目送り果て。うち呟きてありし程。前面よりして來る者有けり。是則別人ならず。窓井の方に憑れて。密使に立られたる。彼臺床唐二なり。近づく隨に聲を低めて。伍六主恙任ずや。這囘和君の不造化は。悔思ふのみ。是非に及ばず。然れども猶幸に。よき姉君の在する甲斐に。首を續れしのみならす。悄地に去向を

敗れて。主僕殘兵甲乙となく。一口の隊に搦捕られて。倶に獄舍に繫れしに。命運いまだ竭ずやありけん。主はさらなり。已等まで。恩赦の制度に尾鰭振り。轍の鮒魚の江に還る。洪福は猶ありながら。錢なければいかにして。投す方にしもゆかれんや。と思ひしに似ず姉君より。齎し給ひし。黃金菊の。花さへ香さへ嗅着て。おん怡悅を想像る。彼脚なくしてよく走り。翅なくして飛といふ。賴母兒を獲給へば。小可さへに心强かり、寔に芽出たき事にこそ。と祝せば健宗點頭て。原來事皆知られにけん。今さら秘すべくもあらず。那唐二奴が大膽なる。兒女より咱等に賜りし。金子は一百兩なるを。那奴が半分着服しながら。賴陳じて已ざれば。怒に乘して結果けたる。那懷にはものせられし。五十金のありもやせん。撈りて見よ。といそがせば。小雪太は有理々々と。應をしつゝ立よりて。臺床唐二の亡骸を。探りて見れば腹に纏たる。長財囊あるを拕出すに。果して五十金の重みあり。是なるべし。と指出すを。健宗やをら受拿りて。裏面なる圓金を拿出つゝ。數ふれば是も亦。五十兩あり。疑ふべからず。我東西得つ。と懷へ。楚と挾めて。やよ小雪太。我は女兒より贈來されし。衣あれば宜しけれども。汝は其半衣にて。今宵の宿には就きがたけん。那奴の身纏剝拿りて。开を被更て伴せずや。亦只其衣のみならず。那奴が兩刀に所用あり。大刀は我挿副にせん。中刀は汝腰にせよ。這頭は人歩稀にして。既に黃昏近ければども。外目の關は料りがたかり。那里に見ゆる十字堂にて。身

拿出て。是所ね。この短刀は上野なる。小父君の紀念ぞかし。夾衣もとり添て。黄金百兩まねらする。と寫示されしを知らざるや。かくまで正しき照はなきに。爭へばとて饒さんや。詩も語も沒らず疾出しね。と最も緊しく譴られて。唐二は口を開き得ず。それは。とばかり辟易して。逃まくするを背より。短刀晃りと引拔きて。潑せ被たる刃の精銳。唐二は右の肩尖より。七九の兪まで斫下られて。一聲苦と叫びも果ず。仰反仆れて死ンでけり。當下一箇の賤男子あり。年齡は二十に足らず。面白く月額黑く。身材低く骨立なるが。こも今日這里にて追放されし。其一人とは問はでもしるき。牢衣の裳端折て。東の方よりかへり來つ。健宗の後方に立て。事の光景を覘ひ得て。驚きもせず拔み近づき。腰に挾みし手拭をもて。健宗が血刀の。鍔下より刀尖まで。佉と押拭ふ丈夫の魂。健宗も亦爾る者なれば。訝りながら聲をも被けず。思ひの隨に拭はせて。刄を鞘に納れば。件の賤男子含笑て。やゝ怪み給ふな郎君。嚮に追放せられし折。ものまうさまく思ひしかども。追立の伙兵達に。憚りあれば。衆人と。俱に這頭を立去りて。幾程もなくかへり來つ。先途の御伴に立ばや。と思ふ孤忠は一人當千。那里までも召れよ。といふを健宗見かへりて。何人なるらん。と思ひしに。我兄宗玄の鞋奴。小雪太丁得に健氣にて。とはれて小雪太。然ン候。我身は彼日七鹿山にて。辛く命を免れて。走りかへりて注進したる。其新亦郎君の。高嶋石見を擊まくし給ふ。大事の御伴に立ながら。その甲斐もなく事

て。木村に在りといふ。篦頭兒を召よせて。彼身はさらなり。小雪太にも。月額を剃せ結髪させて。旨く旅客に成濟したる。意祝の爲なりとは。言に出さねど。こゝろ驕りて。又復逆旅主人に課せて。酒殽を買するに。圓金一枚投與へて。歌妓あるや。と諮るに。這里には爾る者なしといはれて。猶飽ぬ心地したる。主僕只得相酌に。終日酔を盡す程に。間なく時なく使るゝ。宿婢は困じけん。喚べども後には出て來ず。身邊に人在らずなりし時。小雪太は聲を低めて。やよ郎君。御身盤纏に富給ふとも。今より投てゆく方なくば。廻國せんも妙ならず。這義甚麼。と請問ふを。健宗は聞あへず。其頭に脱落あるべきや。汝にはまだ告ざれば。心許なく思はれけん。上野國甘樂郡。部領の莊に我小母あり。その小母の獨子なる。鏑野郡司は豪家にて。半郡三莊の主なれば。必那里へいねといふ。我女兒の指揮にて。隨即小母公へ贈るゝ。紹介の書翰茲に在り。勿論鏑野郡司はさらなり。小母といへども路遠ければ。いまだ對面せざるものから。這回我女兒の賜りたる。この短刀は上野なる。小母夫の世を去りし時。像見なりとて贈られたる。一口なれば見せまゐらせよ。疑るゝとなかるべし。と教示されし筆の跡。拙なからぬを豫より。小母公は認りて在すれば。恁ばかり正しき證據はなし。我身那里に落就かば。郡司に乞ふて汝をば。侍品に做し得させん。何等の爲に廻國せんや。といはれて小雪太喜悦に勝ず。其は亦妙なり。最愛たし。然らば壽きまゐらせん。今一度過し給ひね。と酬つ盞るゝ

装して宿りを求めん。疾ものせずや。疾々。といふに小雪太こゝろ得て。唐二の大刀を健宗に。遞與して其中刀を。巳が腰にぞさしてゆく。去向はいまだ定めぬども。小倉博多は路遠さ。帯さへ衣さへ剝拿りて。推圍めつゝ肱腋に抱きて。卒とばかりに惡主僕が。一霎時四下を見かへり見かへり。二三町東なる。十字堂に赴きて。倶に衣を脱更るに。小雪太がもて來ぬる。唐二の衣は背尖より。肩まで斫裂たる。裏には鮮血塗れしを。この儘にして被ていなば。宿の男女に怪められん。いかにせまし。と思難て。心ともなく其頭を見るに。折から四月の下澣なれば。圍垣の下に花開亂し。蔓茨多くあり。小雪太は是究竟。とその刺を折拿りて。破れし衣を表布ばかり。綴合つゝ倶に手蚤く。身装を整へて。脱捨たる牢衣は。こも亦賣らば些ばかりの。錢になるべきものなりといふ。健宗の指揮をまたず。小雪太既にその意あり。䕺雨箇の牢衣を。唐二のもて來たる袱に。推裹みつゝ背に駝ふて。行李の像くに作爲たる。主僕いそしく立出て。ゆくといまだ遠からず。既にして日の暮しかば。途にて蕉火を買とりて。猶も連りに走りつゝ。當晩亥中の比及に。无名村にて宿を求めて。倶に枕に就きにける。其次の日未明より。酷く雨ふりしかば。主僕は物怪の福なりとて。件の客店に逗留す。是日小雪太は。宿の炊妾に。針を借り糸を求めて。刀迹ある唐二の衣を。手自綴りなどしつゝ。血に染たる裡衣汗衫を。悄地に洗果してぞ。身の皮好とうち笑ける。爾程に。伍六健宗は。逆旅主人に誂へ

宗は夜となく日となく。酒に耽り色に溺れて。酔ふて臥房に入りしより。朝寝して日の昇るを知らず。俺留玆に日を累ねて。第五日といふ夜分。健宗は殊さらに。泥の如くに酔臥て。喚べども絶て覺ざれば。解語の花に抱かれて。軈枕に就きにける。有斯けれども小雪太は。腹に計較よしあれば。當晩は疲る事ありとて。辭して驛娼を伴はず。酒燕稍果し時。次の間に退きて。横見うち被さて獨宿したれど。小夜深るまで毫も睡らず。主の宿息を覘ふたる。丑三時候に起て來つ。健宗が枕方の。蒲團の下に秘措きたる。金子はさらなり鼻紙嚢も。竊み拿りつゝ財嚢と共に。先懷に楚と挾めて。臥簟の屏風に掛たりける。健宗の夾衣と。帶さへ悄地に掖下して。行裓に包み荷作りて。又兩刀をも漏すとなく。竊みて腰に揷まくするに。己が中刀と倶に三口になれば。短刀をば肌膚揷にして。背の方へ隱して帶つ。菅笠脚袢草鞋まで。遺なく都て掻攫ひて。裓包を搭駝つゝ。亦兩刀を腰に帶て。簷廊なる雨戸一枚を。推開つ下立て。其庭門より潜出て。東を投て走りしを。折から短夜なりけるに。健宗も其敵妓も。酔ふたる睡端なれば。夢にも是を知らざりける。爾程に小雪太は。速りに路を走りつゝ。三四里來ぬらんと思ふ程に。明六の鐘の音聞えて。星の光も薄くなる時候。前面より來ぬる一箇の大漢奴あり。廣袖なる襤褸衣被て。手拭もて頬冠したる。面色凄じかりけるを。小雪太は透見て。怪有なる奴かな。と思ふのみ。路陝ければ避るに由なく。行違ふ時那大漢奴は。脚を飛して小雪太の。

虻蜂の。間なきまでに酒盃の。果は迭に醉臥て。日の暮るゝをも知らざりける。其次の日は天快晴れて。薄暑路をゆくに宜しければ。曾根見健宗は其詰朝。小雪太を將て旅店を出て。上野へとて赴くに。素よりいそがぬ旅なれば。路の次の好も歹きも。神社佛閣。名所舊迹。有とし聞けば立よりて。要なき脚を費す程に。長き日ながら三四日を經て。稍美濃路に入りしより。是日野上の驛まで來にけり。在昔這頭は。遐邇人に知られたる。然しも風流の藪澤なりけん。名娼名妓なきにあらず。當時野上の花子の謌に。夏果る。扇と秋の白露と。いづれか先におきふしの床（實は壬生忠岑の歌にて下の句聊たがへり朗詠集及新古今集に見えたり）又平大臣宗盛の愛妓なりける。池田の熊野が母親の。病痾を看とらんとて。身の暇を乞稟しゝに。宗盛饒し給はねば。いかにせん。都の春も惜けれど。なれしあづまの。花や散るらん。とよみて故郷へ還されける。其事のよしは物に見えて。且能樂の謠曲にも。作られたれば世俗知るめり。かくて星移り。物換りて。昔には似るべくもなき。享祿天文の比に至りては。無下に寂たる驛路なめれど。猶當初の餘波にて。驛娼土妓はありとぞいふなる。間話休題。健宗野上を過る折。日景は尙高けれども。小雪太に薦められて。鬱蟬屋と喚倣したる。客店に杖を駐めしより。驛娼多く召よせて。謌せもしつ。舞せもして。他鄕に流浪ふ身を省ず。健宗も小雪太も。年尙二十に足らざりける。惡少年の癖なれば。遙けき旅宿に在ながら。酒色の爲に現なく。盤纏の費を物とも思はず。逗留四五日に及ぶ程に。健

は。昔より力士を出せり。鎌倉將軍家頼朝の時。秩父重忠と角力して。項骨を折られて死にける。
長居腹鬢なといふ力士は。彼村より出たるにやあらん。その餘波なる歟。今も角力白打はさら
なり。をさ〳〵武藝を好む者。是ありとぞいふなる。ゆきて試給はずや。といひけり。是に
より成勝通能は。上野甘樂に赴きける路程。立合阪と喚做したる地方にて。憶ずも逆旅に惱る。
孝女と其父に邂逅の話說あり。楮數涯あれば盡しがたかり。其文猶多きをもて。又卷を更め
て。且下回に。解分るを聽ねかし。

新局玉石童子訓卷之十九　終

腋肚を撲地と踶る。踶られて何かは躊るべき。小雪太は苦と叫びも果ず。身を輾して仆れけり。當下件の大漢奴は。小雪太の懐を。掻撈りつ。財嚢なる。金子を速手抓み出して。懐にしつ。四下を見かへり。亦兩刀を奪畧て。己が脚に佩做しつ。袱包は开が随に。奪ふて背馱へど飽となく。衣を剝んとしつるをり。馬の鈴の音近く聞えて。這方へ來べう思ふめる。大漢奴は驚慌て。剝も得果ず岐路へ。走りてあらずなりにけり。話分兩頭。于玆復大江杜四郎成勝。峯張梁六郎通能は。曩に江濃の境にて。長橋象船の兩少年に別れしより。ゆき〳〵て水薦苅る。信濃路を過る程に。岐岨は通能の父なりける。九四藏通世の舊里にて。今も木曾生の居城あれども。既に許多の歳月を歷て。故舊親族。鬼籍に入りぬ。訪ふとも相識あるとなし。遮莫故香華院には。我先祖の墓なからずやとて。豫聞しを心當に。其山院に詣て。成勝と共侶に。住持の法師に對面しつ。由緒を告げ。宿意を演て。峯張生の先靈の爲に。永年不朽の墓所料を寄進して。且追薦の讀經さへ誂ける。其布施も亦淺からねば。住持の法師歡承て。茶を薦め齋を儲て。この主僕を欵待しつ。件の法莚果るまでとて。只管留めて已ざれば。成勝も通能も。去向をいそぐ旅ならねば。四五日這里に逗留の程。住持は這兩主僕の。武者修行すと聞知りて。有一日語次に。成勝等に對ひていふやう。各位は弱冠なるに。武者修行の爲諸國を。遊歷し給ふにあらずや。野衲甞聞けるとあり。上野甘樂郡なる。最手拔手の兩村

答る而巳。是にぞ成勝通能は。分つゝ來にける岐岨山里の。雲にも似たる疑ひの。霧の籬笆に立つ心地して。聞違へし歟。爾らずは。誨えし法師の虚談歟。と思惑ひつ其宵の程。逆旅主人を召よせて。又彼村の事を問ふに。主人は一霎時沈吟じて。开は聞錯へ給ひしならん。約莫ての甘樂一郡に。最手拔手など喚做したる。村落はあることなし。こゝろ得かたく候。といふに成勝通能は。いよ〳〵望を失ひて。思難つゝ惆然たる。折から當晩合宿なる。一箇の客僧隣房に在り。件の問答を洩聞にけん。うち咳きつゝ。饒し給へ。といひつゝ間の隔亮を。やをら半分推開きて。成勝等に向ひていふやう。言卒爾にて無禮なれども。各位の尋給ふ。最手拔手の兩村は。部領の莊のとなるべし。部領といふも異名にて。其舊の名は白猪なり。各位も承知ならん。在昔公家一統の御時は。相撲の節會行れて。當年の秋毎に。諸國の力士を徴れしかば。其御使に立らるゝを。部領使と倡たり。當初の上毛なる。白猪の鄕も公家御領にて。部領使に充らるゝ。官人達の知所も。其頭にてありつらめ。是によりて白猪の異名を。部領の莊と喚做したり。然れば又その枝村に。最手拔手の名を負せしは。好事の者の所爲にやあらん。亦是部領に傳會せし而巳。昔相撲に。最手拔手の稱呼ありしは。今の大關。關脇の類なれども。白猪に所云最手拔手は。全く其義にあらずかし。彼首は必秋毎に。穗屋を作りて稻に寄る。猪鹿を逐ふ故に。其地に字して穗手といひけり。又蕎麥は。信濃に劣らず。挽拔に宜しければ。拔

新局玉石童子訓卷之二十

東都　曲亭主人口授編次

第五十回　一金一藥盲龜浮木に遇ふ　押繪禍を告て成勝通能を行る

前回いまだ罄さゞりける。大江杜四郎成勝。峯張柒六郎通能は。岐岨の山院に逗留の程。住持の話說にはじめて聞知る。上野甘樂にありといふ。最手拔手の兩村に。武藝に長たる者多からば。ゆきて見ばやと思ひつゝ。遂に住持に別れを告げて。東を投てゆく程に。山又山なる鄙にしも。勝景勝地なきにあらねば。岐岨の棧梯踏見しより。現世渡の易からぬ。身の危きも思合され。筑摩の川の音にのみ。聞し淺隈に起つ煙。後に見做して夜に宿り。日に又歩む路の程。川中嶋なる善光寺。上下の諏訪。いへばさらなり。再遊料りがたければ。神社佛閣漏す曲なく。山路の嶮岨を物ともせず。素より急がね旅なるに。日長き四月の時候なれば。疲れて憩ひ。饑て食ふ。三宿五宿。日を累ねつゝ。上野甘樂に届りし日。或は茶店。馬奴轎夫等に。最手拔手の兩村は。那里ぞと問試るに。絶て是を知る者なく。然る村は名をだにも。まだ聞知らず。と

して奥へぞ退りける。當下杜四郎成勝は。通能に恭くやう。現訛をもて訛を傳ふ。鄕談野語の解易からぬは。今に創ぬとながら。今宵那客僧に逢ざりせば。孰に憑りて白猪に到らん。歡ぶべし〳〵。といへば通能點頭て。是にて思合すれば。嚮に岐岨にて那住持が。最手拔手の兩村は。在昔秩父重忠と。角觝の勝負を試ける。長居腹鑿の事をしも。いひしは無稽の臆説ならん。といふに成勝。然ればとよ。我も亦始より。信かたくこそ思ひたれ。餘談は要なし。夜や深んとて。倶に枕に就きしより。明日の去向の遠からねば。天明て後に起立しに。彼合宿なる客僧は。我より先に立去りにけん。寂として音もせず。宿の婢妾が羞めぬる。其早飯を果しつゝ。主僕晝餉の割盒さへ。受とりつ身裝して。宿りを出て共侶に。白豬を投てゆく程に。聞しには似ず遠く覺て。是日未下刻。田文の茂林の頭なる。畷路を過る程に。小褊なる岡の下に。人多く聚合たるあり。何に歟あらんと訝りて。主僕倶に立よりて。立稠たる衆人の。背より覗看るに。岡の半腹に淺き横洞あり。洞の前に莚を布きて。年五十許なる一個の瞽者。頭には敗たる淺葱の投頭巾を戴きて。栲の故衣を被たるが。手に見も熟れぬ樂器を執て。太平記を暗讀しつつ。最もをかしう搔鳴したる。身邊に一個の少女あり。瞽者の女兒なるべし。年は二八あまりにて。顏色の美しき。春の初花。秋の月の。都にも稀なるべく。況有偲る田舍には。寫畫にだも見かたかるべき。泥の中なる玉にしあれば。朝の原の冬枯に。一花咲る瞿麥の。霜に惱める

手と字したるのみ。皆是正しき名にあらねば。近郷の者なりとも。是を知れるは稀なるべし。今より後は白猪とも。部領ともいふて尋給へ。相違あるべうも候はず。と言叮嚀に説示せば。成勝通能歡承て。倶に膝の找むを覺ず。聞果て成勝は。件の客僧に謝していふやう。我們遠く他郷に來て。然る故よしを知らざれば。只徒に人に問ふて。尋る里に得ゆかずは。人の爲に笑るべく。生涯悔しかりなんに。和尚は一字の師なる哉。最忝く候。といへば通能も倶にいふやう。件の莊には武士ならぬ。莊客樵夫に至るまで。角力白打を能するも。武藝に長たるも多からずや。と問ふを僧客聞あへず。今戰國の習俗にて。里の總角牛打童も。をさ〳〵武藝を嗜るあり。豈只部領の莊のみならんや。开は拙僧の知る事ならず。那里へゆきて問給はゞ。必分明なるべし。といふを成勝もうち聞て。共侶に謝していふやう。敎諭大畧こゝろ得侍り。部領の莊へは路程。這里より幾里あるべきや。と問へば客僧。然ればとよ。七里に足らず。六里には遠かり。荒芽山を右方に瞻て。田文の茂林より𡸴路を。十數町ゆき給はゞ。問はでも白猪に屆るべし。といひつゝ今突鳴す。遠寺の鐘を僂へて。却も夜の短かさよ。既に初更になりにたり。憶はず多辯に時を移しぬ。寢まり給へ。と隔亮を。故の如くに閉曳て。开が儘臥簟に入るなるべし。この折までも立難て。傍聞せし逆旅主人は。耳新なる珍說を。こゝろ得貌に含笑て。辭

といふを成勝うち聞て。开は苦々しき事なりき。親の打擲せられしは。甚なる罪か知らねども。聞が如きは少女の孝行。孰歟憐思はざるべき。然るを今群集の衆人が。他に屢乞れても。鐚一文だも取する者なく。各々面を背けしは。是いかなる心ぞや。と再度問れて。然ればとよ。开はいひがたき情由侍り。といひつゝ吹管拏抗て。茶鑵の下に煙立つ。蒼柴の火を吹てをり。通能も件の話説を。聞つゝ成勝に向ひていふやう。世には不平の事多かれども。人の性は皆善なるに。然る孝女を見つゝ知りつゝ。縦些の情由ありとても。並て憐ふ者なきは。こゝろ得がたきことにこそ。といへば成勝然なり。と應へて。倶に嘆息したりける。浩りし程に前回なる。衆人は皆立去りて。其頭に人あらずなりしかば。乞食少女は父に向ひて。今日も亦幸なくて。物養ふ人のあるとなければ。さぞな饑させ給ひけめ。いかにせまし。とうち不娯を。瞽者は聞あへず。否。まだ然ばかり欲しからず。知らぬ他郷に呻吟ひ來ぬる。我身は左まれ右もあれ。久後憑しかりぬべき。稍弱草の汝にすら。艱苦に一日を過させ難るは。恥亦是より甚しきはなし。目さへ脚さへ尫弱にせられし。我命根の難面さよ。疾死ねかし。と思ふものから。我身あらずは孰か亦。汝の資助になる者あらんや。と思ひかへして罄蟬の。生甲斐もなき命さへ。猶惜るゝは。とばかりに。流るゝ涙を押拭へば。少女はよゝとうち泣て。心弱きとな宣ひそ。世に七轉八起といふ。常言のあるならずや。冬の枯木の雪霜に。撓る枝を折られても。花開く春

風情にて。秋ならなくに世に棄られし。敗扇を指出しつゝ。群集の右より左より。袖乞するを哀れとは。見もし思ふもなきにやあらん。衆人並て面を背けて。鐚一文だもとらせざりしを。成勝と通能は。こゝろ得がたく思ひつゝ。急に腰なる銭嚢を。探りて銭四五十を。與まく欲すれども。前なる稠人に隔られて。それすら自由を得ざりしかば。人皆散て後にこそ。と思ふ成勝は通能に。目を注しつゝ退きて。前面なる樹下に。出茶屋あれば。立よりて倶に発兒に尻を掛て。媼が汲もて出しぬる。二碗の篩茶を飲ながら。成勝は件の媼に。白猪の路を向ふ序に。前回にて袖乞しぬる。瞽者の上を諮るに。媼答て。彼等は素是流浪人にて。故郷は那里歟知らず侍れど。親子二人で茲に來つ。那里の洞に起臥しぬれど。少女は稀なる孝行者にて。親を敬ふ事。大賓に對ふが如く。父親いまだ喫ざれば。敢喫べず。父親いまだ睡らざれば。敢枕に就かず。立ときは手を援扶け。臥ときは其脚腰を按摩しつ。稍熟睡しぬるを見れば。悄地に巳が衣を脱て。親に被けて身の寒さを歎はず。是等は媼が朝夕に。見てよく知る所に侍り。この餘は人傳に聞侍るに。那瞽者が女兒を倶して。這地に旅宿しぬる比は。兩眼明亮なりけるに。人の爲に痛く撻れて。左右の眼を打潰され。剰前臑を打折して。癈人になりしのみならず。其折盤纏を亡ひて。せん術のなき隨に。女兒と倶に茲に來つ。千劔破神の代の。穴居と歟いふ宿に似て。親はさらなり。可惜。女兒を洞に起臥さするは。薄情や熊の後身歟。薄命人に侍るめり。

轉は天なり命なり。汝に形貌を變させては。異日倘彼索る人に。環會ふ日のありとても。何をもて分說せんや。先その刄を放ちてよ。然らずは我身先死なん。と禁る親も禁めらるゝ。女兒も倶に涙さへ。とゞめかねてぞ袖濡らす。外の時雨を哀れとは。知らず貌なる經紀兒は。逃るが像く立去りて。忽地見えずなりにけり。この時までも成勝通能は。倶に茶店に憩ひて居り。件の事の光景を。見るに得堪ず。遽しく。茶錢幾文歟媼に還して。走り出つゝ少女に向ひて。成勝先いひけるやう。世に稀なるべき汝の孝順。感ずるに猶餘りあり。我們兩箇も旅客にて。那里の茶店に憩て在り。汝等父女の艱難を。見過しがたくて來ぬるなり。といへば通能其語を次て。我們兩箇は晝の程。路にて河漏をたうべしかば。盒子は故の儘にて在り。卒々是を取せんず。爹々に進めて其身の饑餓をも。愈しね。猶も餘談あり。といひつゝ兩箇の盒子を拿出て遞與せば少女は遽しく。刀を斂め推隱して。拭みよりつゝ件の盒子を。左右の手に受戴きて。那里の方ざま歟知らず侍れど。思ひかけなき御好意。幾の程に歟忘れ侍らん。喃爹々。那二柱の刀禰達の。飯二盒子を賜りぬ。禮を稟させ給ひね。と告れば瞽者は涙を斂めて。幵は辱き事にこそ。這頭なる里人の。心術は鬼に似て。物の哀を知らずやありけん。立より集ふは多けれど。物養るゝはなかりしに。菩薩にも優すおん功德。南無阿彌陀佛。と念じつゝ。額衝拜む幵が程に。通能は茶店に還りて。一土瓶の茶を買もて來つ。汝等是もて飯をたうべよ。卒とて

に逢ふ時あり。今の辛苦を後竟に。昔語に做す折の。なかゝらずやは。と慰る。親子の中の涙川。ながらへ離ても恩愛に。深き心ぞ知られける。折から部領の方よりして。團子々々。と聲高やかに。擔欐を背に駝做しつ。招牌幟を衝立々々。來にける團子經紀兒を。少女は急に喚駐めて。やよ經紀兒達。阿團一串欲けれど。恥しながら今玆に。阿足は三錢のみぞかし。二錢は明日まで貸給ひね。といふを經紀兒聞あへず。噫旨き言いはるゝよ。五文の團子を三文に。賣らば明日よりいかにして。我妻我子を養ふべき。況和女親子には。或方さまより吩咐られて。何まれ賣れぬ情由あれども。倘金一分出しなば。内緒で一串賣もせん。その一分金なからんには。今の商量には乘がたかり。笑止々々。と欺きて。ゆかまくするを。やよ喃。と少女は二たび喚駐めて。只其團子一串の。價を一分といはるゝは。實しからず聞ゆれども。非除貳朱まれ一分まれ。親の饑には易がたかり。今其財あるならば。露宿してやは日を送るべき。なれども賣じといはるゝを。理なく買んといふにはあらず。何をがな。と沈吟じて。喃小父よ。見らるゝ如く質として。預くる東西のあるとなければ。我黒髮をまゐらせん。といひつゝ傍を見かへりて。莚に包みし短刀を。撈出しつ引拔て。頭髻を剪まく〳〵してけるを。嗇者は驚き慌て。やよや等ね。と喚かけて。掻撈り寄つゝ拿留て。鼻に窒りし聲苦しげに。やよ糸よ。今にはじめぬ汝の孝行。親の爲とて一串の。團子に換て黒髮を。剪まくするは世間に。儔爲なる所爲なれども。生死流

貴の家の徵めなりとも。いかにして我女兒を。妾にすべくもあらねば。この義を以最難面。答へて從はざりければ。媒妁人もうち腹立て。角口果しなく。遂に誣たる言品傳て。那里に逗留することを饒さず。小人も亦堪難て。病痾痊果ねども。然らば宿りを更んとて。女兒を倶して立去りつ。ゆくといまだ遠からず。折から日暮の事なるに。追蒐來ぬる暴雄四五名。媒妁人の乾兒ならずは。郡司殿の奴隷ならん。那盗兒を逃すな。と諸聲に叫りて。近づく儘に捉稠て。拳を抗て打擲す。狼藉朽惜かりけれども。敵手は多勢。身は單にて。病痾痊果ざれば。防ぐに由なくうち惱されて。兩眼片脚痛痍に得堪ず。死活も知らで仆れたる。事の忽劇は懐なる。盤纒の財嚢いへばさらなり。行李さへに奪略られて。歹人毎は在らずなりにき。然れども猶幸に。拙女は恙あらずして。捉漏されてうち泣く而已。其頭は人家稀なれば。誰とて勦る者もなく。我身は孤獨の旅客なれば。訴ふべき便著もあらず。姑且して息出たれども。疼痛に勝ぬ目は見えず。片脚は折けてせんかたなきを。拙女に扶掖れつゝ。當晩這里まで來にけれど。猶驛路に遠ければ。只得這洞穴に露宿して。一宿二宿と明すのみ。盤纒あらずなりければ。女子が被たる二領の衣を。各一領沽却して。日毎の飯に充るものから。それすら久しく支ゆべきにあらねば。見給ふ如く袖乞しても。這頭も部領の采邑なればや。絶て憐ふ者もなく。偶過る旅客の。投養るゝ一錢をもて。父女の饑餓を凌ぐに足らねば。現瓠形の日も月も。我上は照し給は

遞與せは成勝も。腰に吊たる湯飲の椀を。拿出て是をも少女に取らせて。倶に茶店に退けば。媼は興疎き面色にて。刀彌達功徳は然るとながら。慈悲は反て寃家となる。事なからずや。と呟きけり。爾程に食乞少女は。盒子の飯を椀に移して。先父に薦むるに。よく給侍して禮を亂さず。父親喫べ果て後。彼身も僅に箸を抗て。二日の饑餓を愈すなるべし。當下成勝は。茶店より是を見て。感嘆しつゝ出て來ぬれば。食乞父女子は云云。と歡びを演て巳ざりしを。成勝急に推禁めて。瞽者に向ひていふやう。我等前より汝等の。言と行ひを見て思ふに。昔は由緒ある人なるべし。何等の故に落魄たる。方僅人の噂に聞くに。汝は往る日人の爲に。痛く撻れて。目さへ脚さへ。傷られたるにあらざるや。开も所以あらん。いかにぞや。と問れて瞽者は嗟嘆に堪ず愀然として答るやう。既に知られまつりし上は。今さら秘すべうも候はず。小人が舊里は。寇守築石の盡處にて。武弁の家に仕しに。現亂世の悲しさは。幸なし事のみ累りて。三世相恩の主君を亡ひ。妻さへ早く世を去りて。住果べうもあらざれば。契りし人を索んとて。當時は尙稚かりける。這個獨女子を倶して。故鄕を迷出しより。廻國既に年來を經て。今玆這春當國なる。部領の莊を過る折。小人持病の疝積起りて。一歩も運びがたければ。只得其頭の客店に宿投りて。將息に日を過す程に。人ありて我女兒を。如此〳〵の方ざまの。妾にまゐらせよとて。只管媒妁せられしかども。开は小人が情願ならず。非如饑渇に逼るをり。富

拿りて。件の圓金を探らすれば。瞽者は呆るゝまでに。怡悦に堪ず。額衝て。涙と共に謝していふやう。仁人君子の心操は。天の覆ひ地の載るが如く。通て親疎なしといふ。經籍史傳に見ゆる而已。今戰國の人心。小は大に併せられ。弱は強に征せらる。仁義忠孝。地を拂て。殘忍ならぬは罕なるに。恁る君子に値遇しまつれる。幸是に優者なし。然はさりながら千金にも。代じとて秘藏し給ふ。仙丹のみ歟。一圓金を。添て施し賜ればとて。故なく受んは心にず。然ばとて愚意を演て。惠を破らば是無禮なり。いかにせまし。と沈吟じつゝ。女兒を喚て云云。といへば少女はこゝろ得て。竊に隱し短刀を。出して親の手に渡せば。瞽者は傍に措て。又成勝等に向ひていふやう。小人愚直の性なれば。嗟來の食にあらずとも。都非分の利を樂はず。なれどもこの仙丹をもて。身の撲傷に即效あらば。受まつらずはあるべからず。幷も這圓金なき時は。父女が日毎の饑餓に充て。寛に養生致がたかり。この故に已とを得ず。恩賜の二種を受納せる。酬といはんは無禮なれども。這短刀をまゐらせてん。最恥かしき言ながら。小人武弁の子孫にて。累世一國守に仕たりしに。不幸にして其家亡びて。世にも人にも棄られたる。今日に至るまで。這短刀は我君の。夫人の紀念なるをもて。秘藏年來を歷ぬる甲斐に。いぬる日夕人等に打擲せられしをり。盤纏も行李も失たるに。幸にしてこの一刀は。略遺されて今猶あり。唐山の太阿龍泉。我朝の鵜丸蒔鳩に。及ぶべくもあらざれど。朝櫻の二言銘あり。燒刃

ずや。と世を不樂。人を怨るまでに。うち歎きてのみありけるに。尙年弱き刀禰達の。慈恩は父母に異ならず。南無阿彌陀佛。と念ずれば。女兒も涙潸みて。嘆息の外なかりける。然れば成勝と通能は。憂苦話說をうち聞て。倶に嗟嘆の聲を得たゝず。姑且して成勝は。又瞽者に向ひていふやう。思ふに倍たる汝等の患難。道を守りて禍鬼に。遇へるは過世の業報歟。天鑑疎なるに似たれど。禍福は糾ふ纏の如し。今こそあれ。後々は。憂を復して喜に。做す幸もありぬべし。我に奇妙の仙丹あり。約莫刀瘡にて死したるも。いまだ三日を經ざる者に。是をはやく用ふれば。甦生せずといふとなし。況命に恙なきをや。其痍汚穢を拭ふが如く。即效あらずといふ者なし。こは我所親の家傳にて。世に未曾有の妙丹なれば。千金にも代るとなく。親族たりともその心。正しからざるには敢授けず。秘藏恁地なれども。世に稀なるべき息女の孝順感心のあまり其仙丹を。目今汝に分與ん。しかはあれども其撲傷は。三四日以前の事とは見えず。二三十日歷たらんには。即效心許なけれども。然りとて經驗あらざらんや。いで〳〵。といひつゝも。腰に吊たる藥籠より。彼仙丹を拿出せば。通能も遽しく。懷を搔撈りて。出す圓金一枚を。成勝左手に受取て。彼仙丹をうち載て。卒とて少女に與れば。夢歟。とばかり驚くまでに。少女の悅びいふべうもあらず。幾番となく受戴きて。やよや爹さま覧せ。那二柱の方さまが。御藥のみ歟。圓やかなる。御金さへ賜りぬ。禮を稟させ給ひね。といひつゝ親の手を

這渾不似を搭駝たる圖あり。閲する者其渾不似たるを知らず。只四弦なるを訝るのみ。明人の詩に。渾不似と沒奈何を對ししあり。沒奈何は飲酒磁器にて受たる酒を半分飲ざれば。忽地に漏者なり。作者曰已嘗渾不似沒奈何考一編あり。玄同放言再著のなり。載ばやさ思ひしに。累年多事にうち紛れて。老耄今に至りしかば。竟に本意を遂がたかり。只腹稿のみにして。この身さ共に。亡なんとの惜ければ。浮たる冊子の編中ながら。してもて略記するのみ。假托爾るにこの春三月より。小人部領の客店に逗留して。病痾を療養しぬるをり。こゝろともなく這渾不似の。柱に掛てありしを見出して。逆旅主人に問試しに。主人答て。こは已が所藏にあらず。或人に賴れたる。賣物にて候へども。久しく賣れず候。といひけり。小人尙古の癖あるに。價直も亦廉なれば。漫に是を買拿りて。旅宿の徒然を慰しに。媒妁兒の口舌起りて。猛可に那里を立去るをり。渾不似は我女兒の。携て出けるに。途に歹人等の亂妨にて。最も難義に曁しかども。渾不似には目を懸られず。破られもせでありければ。竟に茲まで携來つ。姨棄山の月ならで。慰めかねたる衆人に。錢を乞ぬる便着になりしを。今さら思へば惡因緣。過世怪しく候。と其傳來を說諦す。辨論備なりければ。成勝はいふもさらなり。通能殆感嘆して。盲人汝は博識なるかな。我憶ずも學問したり。と譽れば瞽者苦笑して。御身も渾不似を愛給ふ歟。もてゆき給へまゐらすべし。といふを通能聞あへず。否。我も旅客なれば。些の重荷も厭しきに。音曲は素より嗜まず。そを貰ふて何にせん。と辭ふを成勝喚禁めて。峯張雜譚せずもあれ。やよや少女よ其仙丹を。蚤く爹々に薦めずや。丹を用るに口傳あり。先

の馨美しく。露を帶たる朝櫻に。似たりといはんも。由なきにあらず。是まゐらせよ。と女兒に遞與すを。成勝ヤヤと喚禁めて。开は亦要なき口誼なり。我は孝女を賞せんとて。些の資助を做せる而已。報を受ん爲ならんや。盲人汝の淸廉は。人の及ばぬ所なれども。然では我本意に違へり。开を云云といはれなば。我寸志も空となりなん。この義をよくも思はずや。と聲高やかに怨ずるにぞ。通能も亦云云。と倶に諭して已ざれば。少女はさらなり。瞽者は。困じて頭を低てをり。又いふよしもなかりけり。當下通能は。猶瞽者を慰めて。且いふやう。俺前より見ゐ所。こゝろ得がたく思ふよしあり。汝の搔鳴したる那樂器は。何と喚做す物やらん。まだ見も熟れねば問へるのみ。といふを瞽者うち聞て。然なり。那樂器は。這頭に稀にて。其名を渾不似と喚做したり。嘗聞く。唐山漢の王昭君が。匈奴に遣嫁せられし時。馬上に琵琶を抱きてゆきぬ。然れば彼國に在りし程。琵琶をのみ弄びて。みづから慰めたりければ。戎狄每是を見て。琵琶を製出しを。王昭君に見せければ。昭君見つゝうち笑ひて。こは渾不レ似。といひしより。命けて渾不似と喚做したり。其形狀。琉球國なる。蛇皮線に似て同じからず。胴は革を用ひずして。薄版をもて張做したり。棹は最太やかにて。海老尾は琵琶に似たり。是に四絃をかけて。搔鳴す者即是なり。爾後千百十數年を歷て。この土に舶來しけるにや。小人陸奥に旅宿しぬる比。市に是を閱しゝとあり。他國にてはいまだ見ず。故き浮世畫に。失明法師が。

れて推參したり。折から下哺にて。暮るゝに程もあらざるべし。今宵の宿を投めまく欲す。いかで許させ給へかし。と乞ふを少女は聞あへず。开は易かるべきとながら。我家は客店に侍らず。況主人は外に出て。幾還らん歟知らず侍れば。御宿は諾ひがたかり。遮莫雨の霽るゝまで。笠舍りせんとならば。憩はせ給へ。けしうはあらず。意ふに久しからずして。必や霽侍らん。といふを成勝もうち聞て。开は歡ばしき事にこそ。饒し給へ。と會釋して。通能と共侶に。框に尻をうち掛れば。少女は火桶の火を吹起して。茶を温めつ兩箇の茶碗に。移して盆にうち載て。卒とて成勝等に薦むれば。通能も共侶に。謝して其茶を喫ながら。頭を旋して四下を見るに。嚮に庭歟と思ひたる。東のかたは樹立あるのみ。其頭は都空地にて。築立たる土苞あり。又其邊に小舍あり。開放ちたる窓の內には。木刀捍棒稽古槍を。多く板壁に掛たる見ゆ。成勝も俱に是を見て。言に出ねど這屋主人は。角觝白打の師なる者歟。武藝も兼て教るならん。と猜して通能に呫けば。通能屢點頭て。岐岨にて聞たる彼住持の。夜話さへ玆に思ひ合して。逢まく欲とぞ呫きける。當下少女は門內なる。兩箇の米苞を見出して。噫彼擔夫の心鈍さよ。嚮に誂たる精米を。もて來にけるは宜しけれども。背門より庖廚へ入れはせで。那首に置事やある。我身もこゝろ勵ざりき。細雨なれども濡れにけん。漫なりしと獨語て。身を起しつゝ簷廊より。出て木履を疾穿て。彼門內なる兩箇の苞に。兩手を掛て最輕げに。引提て庖廚のかたにゆきし

その藥を三に分ちて。其一箇を爹々に飲せよ。又一箇をば爹々の兩眼へ。幾番となく絞入れて。額の瘢にも塗らすべし。遺る一箇は脚の痛處に。隈なく布きて。紙もて掩ひね。縱即效あらずとも。汝の孝順。爹々の老實。神明佛陀の冥助にて。驗なくはあるべからず。いふべきとは是までなり。卒退んとて通能を。いそがしつ共に別れを告れば。瞽者は少女と共に。泫然として額衝て。德を感じ恩を謝し。惜む別は一樹の陰。一河の流淺からぬ。心汲見る成勝と。通能も亦見かへり〳〵。部領の莊へぞいそぎける。却說成勝通能は。立合阪にて憶りなく。時を移したりければ。日景の欹くを仰ぎ瞻て。脚の運びをいそがしつゝ。ゆくと約莫十餘町。部領の郡司の邸宅へは。程遠からずと豫聞く。白猪の坊に來にける程に。天俄頃に結陰て。颯と降そゝぐ驟雨に。追れて連りに。走りつゝ。前面を迥に見亘せば。彼坊の入處に。乾淨たる茅屋あり。柴門ながら庭歟とおぼしき。松檜の梢見えたり。那里は是草庵なる歟。坊賈の屋にはあらじ。と思ふ間もなく近つく隨に。その門內へ突然と。走入りつゝ呼門に。裏面には二八ばかりなる少女の。身材高く肥たるが。顏色も醜からず。太織の夾衣の。轎夫袖なるに。黑繻子の帶。幅廣さを後に結び。染麻織の褌して。苧桶に臂を持しつゝ。單打眠てありけるに。思はず成勝等に喚覺されて。愕然として頭を抬げて。佶と見かへりつゝ誰やと問ふ。當下通能は。菅笠引提て找み入りて。少女に向ひて告るやう。我們は旅客なり。今日しも這頭を過る程に。急雨に追

を注せつゝ禁れども。通能等は心もつかで。猶云云と論じけり。當下奥より突然と。出來る一箇の壯佼あり。年は十八九なるべし。身材高く肥たるは。漢の董卓にや似たるべからん。尙額髮あれば。問でも知るき小角觝なるべし。二尺七八寸なる。苛物造の。一刀を跨へて。ものをもいはず成勝と。通能を尻目にかけて。障子推開簷廊なる。傘引提て出てゆきけり。當下少女は成勝と。通能に向ひていふやう。御身等情由を知り給はねば。要なき事をいひ出て。禍を釀し給へり。やよ蚤く立去りて。外に宿りを求め給へ。といふに成勝通能は。うち驚きて故を問ふに。少女答て。然ばとよ。彼旅客の小女子を。媒灼せまく欲しゝは。則奴家が伯兄にて。角觝の綽號を。韓錦縱二郎と喚做したる。這里の主人で侍るかし。又今外面へ出てゆきしは。奴家が第二の舍兄にて。こも角觝には奈良櫻八重作と喚做したり。然るを御身等知り給はねば。奴家が伯兄を云云と。誚り給ひしを洩聞て。怒に堪ねば伯兄に告て。懲さん爲に遽しく。出てゆきしに疑ひなし。といへば成勝點頭て。丌は亦物怪の幸なり。我們主人に面談して。理義を演て說諭なば。竟に思ひ復されて。彼孝女と其親の。資助にならるゝ事もあらん。といふを少女は推禁めて。否とよ奴家が兩箇の舍兄は。性急にして人さまの。敎諭を聞くべくもあらざれば。いまだ一話を交ずして。鬪諍に及びなば。後悔其首に達がたけん。且御身等は。只傳聞により給へば。事の錯るも侍るめり。彼旅客に痍を負して。盤纏も行李も奪畧しは。虛詐欺實事

を。成勝と通能は。見つゝ齊一膽を潰して。悄地に感嘆したりける。姑且して件の少女は。开がまゝ奥より出て來つ。故處に坐を占れば。通能は少女に向ひて。驚思ふ御身の筋力。世に有がたき事にこそ。といふを少女は聞あへず。奴家に何等の膂力あらん。那苞は籾にて侍り。と答て苧を績てをり。當下成勝がいふやう。和女郎の謙遜。深し。芳し。今日は兩箇の奇事あり。嚮に立合阪を過る時。箇樣々々の乞食を見たり。一箇は五十有餘の男子にて。兩眼潰れて脚折けたり。一箇は二八許なる少女なりき。聞くに他等は親子にて。他鄕より來て旅宿の程。人の需に應せざりける。祟嚴しく宿所を追れて。剰其中途にて。歹人等に追擊せられて。盤纏も行李も掻攫はれ。彼身は面部隻脚を。破られしより失明になりぬ。腰さへ立ねば已ことを得ず。立合阪なる洞穴中に。露宿して往還の人の。憐愍を乞ふといへり。爾るに开が女兒は孝順にて。人の及ぬ事多かれども。其頭の里人は憐まず。饑渴に逼りぬと聞えしかば。己等是を見聞くに得堪ず。則圓金一枚と。秘藏の仙丹を取せたり。开を今和女郎の多力なるに對するにあらねども。皆是奇事ならぬはなし。といへば通能も倶にいふやう。只憎むべき者は。彼孝女を媒妁して。事のならぬを怨しといふ。歹人こそ罪重けれ。他同惡を相譚ふて。孝女の親を打擲させて。瘡を負せたるのみならず。盤纏も行李も奪略せて。愉快と思へる歟。是强盜に異ならぬを。箴る國守はなきや。世の亂こそ是非なけれ。と聲高やかに論ずるを。宿の少女は傍痛げに。目

めて。且下回に。解分るを聴ねかし。

新局玉石童子訓卷之二十　終

歟知らず侍れど。开を論じなば時もや移らん。疾々ゆかせ給へかし。と辭ふを通能聞あへず。世に獍勇の者ありとも。理義に勝べき方はなし。今さら何の恐怖あらん。只這里に居て主人の還るを。俟て面談するにはしかじ。と惴るを成勝推禁めて。开は只匹夫の勇ならずや。孝女父子のとはしも。憐ぶに堪たれども。我に干渉る事ならぬに。好みて人と爭ふて。危きを忘るゝは。大丈夫にあらずかし。十三屋の豫より。警しを忘るべからず。卒ゆくべし。といそがせば。少女も是をうち聞て。御身等茲を去り給ふとも。白猪の坊に宿投り給はば。猶安からず危ふかりなん。茲を出て右なる岐路を。十町許ゆき給はゞ。前面に一條の小川あり。川を渉せば新部領にて。客店も侍るめり。其首に宿り給へかし。と言語急迫しく説示せば。成勝通能歡承て。和女郎は多力のみならず。心操も多く得がたし。芳名を聞かまほし。名告せ給へ。と請問へば。少女答て。數ならねども。奴家は押繪と喚れ侍り。御身等はいかにぞや。と問復され成勝通能。姓名を告り好意を謝して。菅笠引提て立出れば。雨既に歇て。雲いまだ歛らず。是時黄昏なりければ。幾程もなく日は暮たり。是日は四月十四日にて。月の出べき時候ながら。天は曇りて朦朧なる。路を連に急ぐものから。短夜なれば初更の時候に。件の河原に來て見れば。船は前面の岸に在り。呼ども〳〵篙公の。應なければ焦燥のみ。只得一霎時立住程に。後方遙に人許多。追蒐來ぬる蕉火の。光り幽に見えにけり。此は是甚なる人ぞや。开は亦卷を更

称ふを娼むの故歟、只是児戯の冊子なりとて。巧拙十把一縢に。爪弾して嘲るもあらん。开は好憎に因所。閲せずして是非をいふ而巳。吾其是を如何せんや。と論辨机をうち鳴せば。怪むべし鼻梁。長くなる者五六寸。左右の腋に翼生出て。日に三度夜に三度。盃水俄頃に火になりつ。臍にて阿茶を沸すと思へば。愕然として夢覚けり。こは一老先生の夜話なるを。本集稍稿成る随に。録してもて頤を解く。

弘化三年菊秋霜降前三日。亦復姉幼に代書を課て。奈良漬瓜の糟に酔たる。本編の作者酔中に題ス

新局玉石童子訓第五版贅言

魏文曹丕嘗いへるとあり。曰文章は經邦の大業也。こは經籍史傳の。萬世に裨益あるを道而已。曹丕は漢賊也。遮莫其言は取るべく。其人は惡むべし。是よりして下。記事に虛實あり。時文に雅俗あり。其事實ならざれば。傳るに足らず。その文雅ならざれば。見るに足らず。然れども實事は新奇ならず。雅文は俗に通ぜず。是小說傳奇の由出る所なり。蓋稗史物の本の言たるや。浮誕詭譎。風を追ひ影を捕る。其甘きと飴蜜の如し。是をもて雅客となく塵俗となく。愛玩して夜をもて日に續者間是あり。但恐らく。其閱する者に裨益なし。さりけれども。其書を作る者に二あり。學問廣博和漢を貫通し。萬卷の書を見破りて。奇文大筆雅俗を交え。其才羅貫紫氏に讓らず。且善惡順逆を辨明し。世態人情を了解して。克蒙昧を醒すあり。閱する者覺ずして。獎善の域に追る時は。田夫山妻。村童野翁の。讀書を嗜ざる者の爲に。是迷津の一筏にて。小補なしとすべからず。其餘の冗籍。理義に暗く。善惡順逆に詳ならずして。宣淫導慾。漫に時好に媚るが如きは。獨學淺才。已を知ざる者の。短筆に倣す所。閱する者に裨益なし。そを擇取て愛玩しぬるを。具眼の看官といひつべし。或は菽麥を知らざる者。其書の醜美を擇に由なく。唯新しきを愛ぬるも。猶書肆の得意とす。或は手にだも拿となく。時好に

新局玉石童子訓卷之二十一

東都　曲亭主人口授編次

第五十一回　部領河原に兄弟與主僕戦ふ　白猪の居宅に縦二郎夜客を饗す

却説。大江杜四郎成勝。峯張棠六郎通能は。部領の郷の驟雨に。逐れて遮雨しけるをり。勇婦押絵の忠告にて思ひかけなき禍鬼の。今宵那里に起るべき。事の情を聞知りて。开を怕るゝにあらねども。外の怨を我からに。心も知らぬ疎人等と。争ふべくもあらざれば。倶に那里を立去りて。勇婦の教し言の随意。その甲夜の間に新部領の。這方の河邊に来にけるに。船は前面の岸に在りて。篙公を呼べとも答へず。いかにすべき。と思難て。一霎時开頭に立在程に。後方に繁き夏草の。一叢深き开が中に。晃々として光り見えけり。通能是を見出して。成勝に向ひていふやう。那見給はずや草葉隠に。光るは螢兒に似たれども。今は四月の中浣なるに。彼虫の出べくもあらず。何に歟あらん。と訝れば。成勝も遽しく。頭を回し熟相て。いはるゝ如ゝ彼光りは。宛螢兒に似たれども。時猶早きのみならず。動かざれば猜するに。彼草叢の裏に

新局玉石童子訓第五版 自第五十一回 至第五十五回 總目録

三四十間後方なる。小高き處に生茂る。雛松の中に。身を潜して。近づく敵を俟程に。散動めき來ぬる追隊の衆人。眞先に𢧐む一箇の壯佼。是則別人ならず。樅二郎の家弟と聞えし。奈良櫻八重作なり。腰には苛物作なる。一刀を跨へて。左手に捍棒右手には蕉火。杪高に振照し。小力士每を從へて走り近づく河の邊に。杜四郎成勝が。單立在しを透し見て。敵手の猴子は那首に居り。彼逃すな。と罵りて。走蒐らまくする程に。俟設たる通能が。丁と打出す投石の冴に。一箇の小力士片頰を撲れて。吐嗟と一聲叫びも果ず。身を飜して叢の。彼光りある頭へぞ。地响打して仆れける。郤舍に下なる彼朽木は。碎けて潑と散亂しつゝ。頭顱の上に降懸る。光りに驚く追隊の衆人。呀とばかりに慌惑ひて。走退まくする程に。通能透さず打出す。投石に亦復兩三名。撲れて撻と轉輾べば。いよ〳〵蜚散る朽木の光りに。孰か疑ひ怕れざるべき。幻術ならん。と思ひしかば。ます〳〵怯えて立脚もなく。起つ滾ひつ逃走れは。八重作も意はずに。逃る躬方に誘引れし。故來し方へ百步許。引退きつゝ後方を見かへり。脚を住めて聲高やかに。衆人然のみ怕なせそ。敵手は纔に兩箇に過ぎず。返せ〳〵。と喚はれども。早程遠く逃走る。小力士每は耳にも被ず。返すべくもあらざれば。八重作いよ〳〵うち腹立て。好々。憑むに足らぬ平人等は。幾名ありとも何にせん。いで〳〵。といひつゝも。滅たる蕉火投棄て。捍棒兩手に勢悍く。取て還しつ成勝を。撃んと𢧐めば通能も。雛松の蔭より跳出て。急拵な

こそ。朽たる株のあるならめ。夏の夜雨の霽たるをり。路傍なる朽木はさらなり。海鰕蟹の甲なども。よく光りを發つとあり。又怪むに足る者かは。といふ詞いまだ訖らず。と見れば部領の方よりして。這方を投て人許多。走り來にける蕉火の。光りは爰に問はでも知るき。彼韓錦縱二郎。奈良櫻八重作が。外ながら聞知りたる。大江主僕を嫉く思ひて。事の怨を復さんとて。弟子約莫八九名を。駈催しつ追蒐來ぬる。各腰に長脇刀。手に〳〵棒を挾みて。路の夏草踏開き。彼逃すな。といふ聲も。程遠からず聞えけり。登時成勝通能は。毫も噪ぐ氣色なく。成勝先譚るやう。他等は必韓錦。奈良櫻と歟いふ疎人等が。怨むまじき怨を倡て。弟子さへに多く將て。咱等を追蒐來つるならん。勝ても負ても無益なる。爭ひを好ねども。前面へ渡す船なければ。中一中て懲さずは。何をもて路を開ん。準備をせずや。といそがせば。通能聞つゝ點頭て。然なり。他等は多勢なり。奇を出して打散さずは。全勝を得がたからん。和君は猶てこに在して。近づく敵を遡へ給へ。咱等は箇樣〳〵にすべし。といふを成勝うち聞て。そは究竟の便直なり。然りとて敵を征するに。刃をもてすべからず。何を欲得。と見かへれば。水際に植たる船棹ありけり。是よかゝなん。と拔拿るを。通能も手傳ふて。脚踏掛て兩箇に折るに。其棹八九尺あり。且さばかり太からねば。手合の棒二條を得たり。成勝は其一條の。棒を衝立て河邊に在り。當下通能は。水際の卵石四五箇を。擇拿つゝ袂に斂めて。殘れる棒を携へて。

明に。水に宿れる影清く。四下に戰ぐ草葉まで。見えざる隈はなかりけり。爾程に通能は。八重作と棒を交へて。戰ふと七八十合。武藝に富るこの壯佼に。八重作竟に敵し得ず。持たる棒を反飛されて剩左の肩尖を。下高に打れしかば。心慌て。遽しく。帶たる刀を引拔て。這を先途と戰ふたる。當下河原の兩敵は。鬪戰闌干做りし程。樅二郎は何思ひけん。隙を覘ひ引外して。一丈ばかり退きて。喘を禁め聲を被て。やよや旅客手を住めよ。俺この年來幾名となく。武藝をもて名を賣る猛者等と。角力白打。槍棒擊劍。其優劣を試しに。いまだ和殿の如きを見ず。世の英雄と覺ゆれば。和睦して意衷を盡さん。等ね等ね。と制めつゝ。急に後方を見かへりて。屋よや八重作。其客人も。由なき技に身をな傷りそ。怒と倶に手を解きて。這方へ來ませ。いふよしあり和睦々々と喚りけり。然れば奈良櫻八重作は。峯張通能に打惱されて。腕衰へ肩さへ疼めば。持たる刄を打落されし。とおもふばかりに氣を奨して。嚄叫びて戰ふ程に。今憶はずも兄樅二郎が。云云と喚るを。聞得て蚤く身を跳せて。構の外へ退きて。旅客彼を聞たる歟。和殿も和睦に同意ならば。俺豈しうねく祟んや。といふに通能微笑て。そは勿論のとなりかし。咱等は素より怨なし。和睦は迭の幸なるべし。先その刄を歛めずや。といはれて八重作羞たる色あり。急に刄を鞘に歛めて。一禮すれば通能も。棒を投棄禮を復して。倶に汀渚に赴きて。通能は成勝の。後方に立て由斷せず。亦八重作は樅二郎の。後方近くぞ侍

る彼棒をもて。丁々礑と戰ふたる。浩りし程に彼隊の頭領。韓錦縱二郎は。後走に走來つ。目今弟八重作が。通能と戰ふを。見れども幇助るに暇なければ。成勝を撃んとて。準備の捍棒斜に引提て。怒罵る聲高く。烏滸人。先度の怨を知るや。我韓錦縱二郎が。一棒を受試よ。と詈も果さず棒取直して。撃んと找めば成勝も。棒もて丁と受流し。受駐めつゝ聲ふり立て。韓錦とやら疎忽なせそ。俺は和主と知る人ならぬに。怨を受るよしあらんや。といはせも果ず眼を瞋し。怨なしといはさんや。田文の洞なる乞食父女は。我飽までも懲ん。と思ふ情由あるをもて。鄉黨にこゝろ得させて。鐚一文だも拿せざりしに。若等旅客なりとても。俺名も亦彼情由も。人の噂に聞知りつらんに。事を好る慈悲三昧。乞食父女に藥を與へ。金さへ拿せて俺鼻を。挫まく欲せしは。怨なしと孰歟いふべき。早く勝負を決せずや。と敦圉暴く棒振揚て。睨啐るを。成勝は。聞つゝ阿容たる色もなく。开は亦聞えぬ怨言なり。咱等は故是旅客にて。今日はじめてこの地方を。過ればいまだ和郎を知らず。只彼田文の少女子の。世に稀なるべき孝順を。見過しがたくて。我秘藏せる。藥と倶に憂を分ちて。金さへ一枚取せしを。娼く思ふは田舍兒の。胸最陜さ所爲ならずや。といふをば聞ぬ縱二郎は。怒れる面色朱を沃ぎて。呰たり小猴子奴。息の根止ん。と棒閃めかして撃を透さず成勝は。受流しつゝ丁々。と挑爭ふ修練精妙。迭の本事劣らず優さず。然しも虎彪の威力に。空ゆく雲もこゝろありてや。月出て光

それに就きても刀禰們の。凡人ならぬを知るに足れり。八重作は爾思はずや。といふに八重作。然なり。と應へて。倶に嘆唱したりしを。成勝急に推禁めて。過分の褒美は。當りがたかり。我意ふに。和殿胞兄弟は。武勇に勝れしのみならず。理義にも闇からざるべきに。怎生なれば田文なる。孝女と慈父を俺までに。むごくせられしはこゝろ得がたし。といはれて縱二郎嗟嘆に堪ず。开は種々の情由あれども。一朝には說盡しがたかり。いかで爰より杖を返して。藪屋に明し給ひね。この夜と共に意衷を盡さん。卒給へ。といふをりから。忽地部領の方よりして。囂々と噪しく。嚮に逃たる小力士等か。手に〳〵棒を携へて。齊一かへし來つるなり。縱二郎是を見かへりて。又奴們が懲ずまに。鬪諍果ての棒三昧。今さら集ふは無益なり。八重作は疾ゆきて。和睦のよしを告知らして。各宿所へかへし遣りね。蚤く立ね。といそがせば。八重作は答も果ず。身を起しつゝ驀地に。走りゆきつゝ如此々々と。和睦のよしを報にけん。散動は聽て鎮りて。うち笑ふ聲聞えけり。爾程に大江主僕は。韓錦弟兄の。最懇切に誘引を。否といはんはさすがにて。且歎び且謝して。うち連立てゆく程に。一町あまり那方には。小力士毎が棒を伏て。左右二行に羅列れつ。相迎へて倶にいふやう。師家嚮には不覺の挊き。面目もなく候なれ。なれども和睦整ひて。かばかり芽出たき事はなし。客人達も饒し給ひね。いかで〳〵。と諸聲に。勸解るを縱二郎推禁めて。开はこゝろ得たり。若們は。宿所にかへりて明日又來よ。

りける。當下杜四郎成勝は。縦二郎にうち向ひて。思ふに倍たる和殿の武藝。一豪傑といひつべし。然るを猛可に和睦せられて。倶に交りを結ぶに至らば。歡び是に優す者なし我姓名は云云なり。亦是なる一人は。主僕といへども叔侄なる。峯張通能是なり。と告れば亦通能も找み出つゝ對面す。縦二郎是を見て。和君等年尚二十に足らじ。と見ゆる風流士には似げもなく。武藝に富たるものならず。相貌の京樣て。言語應對君子の風あり。俺等胞兄弟の武骨なる。田舍兒の類にあらず。然るを猶思はずに。惴りて闇撃に做すとあらば。後悔何ぞ及ぶべき。然るを恩怨地を易て。其罪をしも饒されしは。一期の幸といひつべし。八重作も這里へ出て。陪話稟さずや。といそがせば。八重作は阿と答て。にじりよりつゝ兩主僕に。歡びを演ていふやう。刀禰們は幻術ある歟。嚮には陰火を散されて。我黨の勢力を。折き給ひたればこそ。躬方の奴們驚き惑ひて。逃走りたる故に。和睦は早に整ひたれ。怎生なる術ぞ聞まくほし。と問ふを通能うち笑ひて。否とよ。彼は叢の。裏にありける朽木の所爲なり。その故は箇樣々々。と有つる儘に說示せば。八重作は呆るゝまでに。羞て又いふよしもなし。縦二郎是をうち聞て。感嘆しつゝ且いふやう。世の常言に。疑心暗鬼を生ずといへり。我弟子等の日屬に似げなく。朽木の光りに胸を潰して。逃亡たるも一奇なり。意ふに开は刀禰們を。守らせ給ふ神明佛陀の。冥助にこそありつらめ。然らずは各腕を扱く。我弟子等のいかにして。爾ばかりの事に怕んや。

果ず。否。我們胞兄弟女弟さへ。些の筋力なきにあらねど。女子の多力は鄙語にいふ。只是貨財の持腐しにて。施す所あるべうもあらず。漫に人にな知らせそ。と豫警め候ひしに。忘れたりけん。鈍ましさよ。と呟く程に時八と。奈我四郎は酒盃銚子。羹の椀を廣蓋にうち載て。もて出て主客に配りなどす。この餘の酒菜は。蕗筍のみ。外には物もなかりけり。當下主客の口誼あり。縱二郎は笑しげに。大江主。峯張主。今よりして莫逆の。交りを結ぶべき。眞の中直りにて候へば。俗禮にこそ從ふべけれ。この義を饒し給ひね。といひつゝ四箇の盃を。分ちて兩箇は大江主僕へ。兩箇は其身と八重作の。前に置せて。皆共侶に。受ぬる酒を喫乾して。投せば投るゝ和睦の盃憂を分ちて辭するとなく。苦樂を倶にすべしとぞ。誓訖れば時八も。奈我四郎も倶に祝壽す。是よりの後主人弟兄は。又盃を改めて。大江主僕に薦るものから。成勝も通能も。然ばかり酒を嗜ねば。縱二郎は時八をもて。押繪に告て夕膳を。急ぐまに〳〵時を移さず。早もて出す夕飯に。海なき里の手料理は。只時の間を合物。炙鷄卵に乾魚の。兩三種肴添て。茶淘の碗の錦手も。色細かなる欵待に。成勝と通能は。歡びを演箸を抗て。倶に夜飯を過す程に。押繪は二たび出て來て。今宵の疎畧を陪話などしつゝ。匱飯を裝添て。最叮寧に欵待す程に。縱二郎と八重作は。件の兩個の小力士にも。酒盃を取せ酔を盡して。小夜の更るを知らざりけり。既にして成勝通能は。主人弟兄押繪等に。饗應の歡びを。演て酒盃

そが中に。見越松と鶴脛は。我宿所に立よりて。事の由を押繪に告て。饗應の准備をさせよ。夜分なり。猛可のとなれば。酒菜は豆腐のみにて好。こゝろ得たる歟。疾ゆきね。走れ〳〵。と追立れば。件の兩箇の小力士は。應をしつゝ身を起して。部領を投ていそぎけり。然ればこの餘の小力士等は。そが儘主客の後方に立て。ゆくといまだ遠からず。左右に岐路ある處にて。縦二弟兄。大江主僕に。告別しつ各々。宿所へとてぞ退りける。是よりの後主客四名。うち相譚つゝかへり來る。韓錦が白豬の宿所なる。押繪は彼兩箇の小力士等が。報る歡びに胸は安堵て。然はとて軈て他等にも。手傳せつゝ夕饌の。儲も亥中の事なれば。何せんすべも東西足らぬ。酒盪めつ客房に。燭臺出して俟程に。縦二郎と八重作は。大江主僕に案内をしつゝ。かへり來にける跫响に。見越松時八と。鶴脛奈我四郎は。走出つゝ片折戸を。早く開きて迎ふれば。成勝と通能は。禮を回しつ主人に引れて。客房に赴きて。迭の辭讓に口誼果て。賓主の席定る程に。押繪はいそしく四箇の茶碗に。汲拿る煎茶を盆に乘して。もて出て薦めなどす。登時成勝通能は。恭しく押繪に向ひて。嚮には不慮の驟雨にて。一霎時檐下を苟且ながら。言の恵の歡びを。演るを押繪は聞あへず。應をしつゝ遽しく。立て庖湢へ退りしを。大江主僕は目送りて。主人弟兄に告ていふやう。嚮には如此々々の事により。料らずも令妹の。多力に駭嘆しつるなり。今戰國の世なりとも。婦女子には似げなきまでに。憑しくこそ候なれ。と譽るを縦二郎聞

既に昨非を知る上は。肝膽を吐意衷を盡して。詳にせずはあるべからず。言多くとも聞給へ。我父は築石の人氏。間貫佐用六故世となん喚れたる。原是南朝の餘類なる。三世相恩の主君に仕へて。左も右もしてありけるに。昔に異なる世のたゞずまひに。幸なし事のみ多かりけん。我身弟兄稚き時。潜に故郷を立去りて。京に一稔浪華に三稔。僑居して後に。竟に這地に流來つ。撃劍白打を人に教て。年來を歴ぬる程に。遐邇人に名を知られて。富にあらねど貧しくもあらず。三飡餘ありけるも。只一炊の夢と覺て。二親ながら身故りしより。又五稔の春秋を歴たり。我身不肖にあなれども。十八九歳の始より。親の家業を承嗣て。撃劍白打角觝まで。這頭の里の壯佼等に。師と仰れて已が自恣。いへば聽れ行へば用ひらる。然ればとて惡事を做さず。善に與して人の爲に。骨を折らずといふとなければ。或は借財の債。夫婦の口舌。親子の不和。何くれとなく人の爲に。憑まれて説和るを。身の務と做せるのみ。只年の秋毎に。弟子等を相倶して。鎌倉に赴きて。鶴岡の社頭にて。角觝を興行しぬるの外は。させる生活なきものから。親の時購求めし。田圃あれば饑もせず。因て綽號を。韓錦縱二郎と喚做さるゝは。只是角觝の上にいふのみ。我身に原の姓名あり。間貫佐用二郎茂洋是なり。又是なる八重作は。原名佐之七次世なれども。都て這頭の里人は。只縱二郎八重作と喚ぶのみ。この義を知れるは幾稀なり。爾るに今年の春三月の時候。本郡の主。鏑野郡司範的大人。有一日我縱二郎を招さ

を辭ひしかば。椛二郎も强難て。件の兩箇の小力士に。盃盤を斂めさせて。亦只煎茶をいそぐのみ。時八と奈我四郎は。共に庖湢へ退りしかば。成勝は折を得て。椛二郎に譚ずるやう。喃韓錦主。深夜の長譚無心に似たれど。今さらうちも置がたきは。田文の孝女父女の事なり。聞くに和殿は人の爲に。彼少女を媒妁して。妾に做れといはれしを。父女は反てうち腹立て。從ふべくもあらざれば。和殿も亦怒に得堪ず。當所に旅宿を饒されねば。只得宿所を立去るをり。又一伙の疎人等に。追擊せられて。盤纏も行李も。奪略れしにあらずや。といへば通能も倶にいふやう。然ればこそあれ少女の親は。兩眼片脚を傷られて。廢人になりしのみならず。田文の洞に露宿して。袖乞難て饑に迫るを。和殿は猶飽ずやありけん。鄕黨を箴めて。錢まれ米まれ施す事を。饒ざりしはいかにぞや。と詰るを成勝推禁めて。意ふに人の性は善なるに。孰か哀を知らざるべき。況俠氣たらん者。弱きを助る心なく。己が隨意せざればとて。然までしうねくものせられしは。疑ふべく從ふべからず。いかで今より怨を解きて。彼等父女を憐給はゞ。交遊の爲にいひ甲斐あり。この義を思ひ給はずや。と左右齊一諫れば。椛二郎は嗟嘆に堪ず。蹴然として。答るやう。敎諭寔に其理あり。そを思はぬにあらねども。始よりして彼父女の。爲に謀りしを聽れねば。反て怨冤となるまでに。飽まで懲して後にこそ。彼等は先非を悔もせめ。と思慮し我失錯を。今稍知るは遲かりき。幸にして交遊の諫言。耳に串き腸に入て。

も憑ませ給ふ秘事なれば。且相譚ふて後にこそ。成ると成らぬを稟し上ん。然るを今いかにして。このおん物を受まつらんや。若强て給はらば。決して御意に從ひがたし。と推辭を主は聞わへず。そは左も右ものとながら。和郎を俠者と思はずは。いといひがたき秘事を。打出して憑まんや。成らば勿論。成らでとも。よく成し得てこそ俠者なれ。たのむ〳〵。と拜まぬまでに。其言慇懃なりければ。困じて再度の尋思に及ばず。應するのみ興醒て。退りて宿所へかへり來て。件の事の趣を。八重作に告て意見を問ふに。八重作も亦その事を。歡ぶにあらねども。領主の徵は默止がたけん。先その父女によしを告て。誘へて見給ひね。といふにいよ〳〵意決して。次の日件の旅宿に赴きて。少女の父某甲に。來意を告て對面しつ。領主所望の一條を。悄やかに說示して。少女の爲に給事を。只管に勸めしかども。父女は受引氣色なく。然る義は望しからずとのみ。答へて執も合ざりしを。猶懲まに日を累ね。步を運びて幾回となく。媒妁せまく欲したる。果は口舌の風濤起りて。少女の親は怒に得堪ず。我身を酷く罵りて。非禮不遜の事多かれば。我も亦怒に任して。撻懲さまく思ひしかども。敵手は孤獨の旅客なるに。拳を中んは大人氣なし。と思ひ復して逆旅主人を。權し促して件の父女を。立去して逗留を許さず。然れども彼旅客は。强情にて悔もせず。這里のみに宿なからんや。と呟きながら女兒を俱して。田文のかたへ出てゆきにき。有右その次の日に。時八等が來て告るを聞くに。昨日逐れ

よせて。悄地に譚ひ給ふやう。屬日某の客店に。逗留しぬる一箇つ旅客あり。そが女兒は這頭に稀なる。花なりけりとて告る者あり。是により。俺等潜行しぬるをり。开とはなしに問窺しに。寠れたれども野の花の。反て目に美しく。村酒の人をして。酔しむる趣あり。知らるゝ如く我青年。二十の上を三四に過ぎず。曩に妻を娶りしかども。産後に母さへ子さへ亡て。今尚獨居なれば。いかで彼旅宿の少女を。妾にせまく欲す。給銀支度料などは。何ばかりにても厭しからず。然ればとて我威勢をもて。行ふべき事ならねば。悄地に和郎を憑むなり。有右るとには才闌て。成得ずといふとなし。と人もいひ我も思へば。任用せんず。よくせよかし。倘このと整はずば。孰かは和郎を佞者といはん。こゝろ得たる歟。と眞實て。牽出物して酒盃を薦められ。晤譚細やかなりければ。已肚裏に思ふやう。領主の所望は情慾にて。然る媒妁は。我本意にあらず。とは思へどもいかにせん。曩に我弟八重作が。酔ふて人と鬪諍して。敵手に深痍を負せしをり。郡司殿の好意にて。その事輙く平ぎたる。彼恩なしとすべからず。矧又這刀禰は。武を嗜み力士を愛して。我身も時々召るゝに。今憑るゝ一條を。つれもなく推辭稟さば。情義兩ながら欠るに似て。必や怨られん。只受引にしくとあらじ。と思ひ復して答るやう。御意承り候ひぬ。遮莫男子同士の立入ならば。敵手の強き弱きを嫌はず。思ひの儘に説伏て。御意の如くにすべけれども。然る媒妁には疎にて。虔婆に劣るべき。難義の役に候へど。

ば。人僉怕れて違ふ者なし。有右二十日ばかり歴ぬる程に。嚮に我居る里の酒肆に。八重作が尋來て。御身等の事如此々々と。告知らして且いふやう。件の兩箇の青年兒は。旅客なりといふめれど。雨衣の外持る物なし。意ふに彼奴等は隣郡なる。鄕士の兒子などにやあらん。开は左まれ右もあれ。大哥を酷く罵りて。强盗にしも似たるべし。といひしを聞つゝ知らず貌して。懲しも得せずあるならば。何をもて俠者といはれん。疾出給へ。といそがしたる。折から我と共侶に酒喫居たる。奈我四郎。時八以下の弟子等に。聞れんとの朽惜ければ。我勃然と怒に堪ず。そは安からぬ事なりき。衆皆立ね。と身を起して。走出ける短慮の本性。其酒肆より程遠からぬ。時八が宿所に立よりて。身固しつ皆共侶に。捍棒蕉火引提々々。出ても怨寃の往方を知らねば。四下の里人に問試るに。武士とおぼしき兩箇の青年兒。うち連立て黄昏時候に。新部領の方にゆきにき。と正可に報る者あれば。然らばいそげ。といふ程に。よしを早くも傳聞て。後走なる小力士。と甲乙共に十餘名。彼河原まで追蒐しに。奇異朽木の光明に怯えし。小力士毎は憑に足らず。我們弟兄兩賢兄と。創て棒を交へずは。復蔽屋に光臨あらんや。料らざりける幸なれども。只彼田文の洞なる父女を。執念深も苦めしは。皆是已が僻事歟。僻事ならぬ歟。非を飾るに似て。面正しくもなきとながら。いはずは孰歟理非を判ん。愚意は事の始より。彼旅人父女の爲に。歹かれとては謀らねども。事の成らざるのみならで。竟に讐敵の思ひを做せ

たる彼旅客は。宿所を出て遠くもあらぬ。乾浄たる地方にて。歹人等に跟られて。打擲せつれしのみならず。行李も盤纏も喪ひにき。と其頭の人は皆いふめり。いまだ聞知り給はずや。といふに今さら快からず。彼旅客の撻悩されしは。みづから招きし殃危にて。自業自得といひつべし。なれどもその折行李と盤纏を。實に喪ひたらんには。我を疑ふ者もあらん。我衆弟子を首にて。這一郷の壯佼等を。集合て虚實を糾さんず。と答てその次の日に。弟子等はいふもさらなり。郷黨遺もなく。招きよせつゝ穿鑿りしに。然る正兇事をしたる者。一人もあるとなしとて。各倶に神水を啜りて齊一誓ひしかば。後安きに似たれども。我本意ならぬ媒妁して。見る影もなき旅客は。詈辱られて後を取しは。是まで絶てなき所。今よりの後郷黨に。我を侮る者もあらん。いかにすべき。と思難て。腹立しくて在りし程。又弟子等の告るを聞くに。彼旅客は歹人等に。目さへ脚さへ傷られて。せん術やなかりけん。女兒と倶に田文なる。淺洞に露宿して。往還の人に袖乞しぬるを。我も見たり彼も見たり。といふ者日毎に多かりければ。我復肚裏に思ふやう。聞くが如きは件の父女が。ます〳〵困窮至極せば。竟に志を改て。人を頼みて我に覩解なん。我言品だに達つならば。その折にこそ錢もあれ衣もあれ。施して賑にならん。他等が饑るを俟つべき而已。と尋思をしつゝこの鄕なる。老幼男女を戒めて。孰にもあれ田文の洞なる。乞食父女に鐚一文でも。施す者は我怨冤なり。と弟子等をもていはせしか

淺慮といはんは無禮なれども。犯し諫て用ひられずは。袖を拂て去んのみ。只彼父女を最屓にあらず。理をもていへば右の如し。辱しむるとな思ひ給ひそ。と諭せば成勝。然なり。と應て峯張の意見も愚意におなじ。人に俠者と仰れて。世情に貫通したらん。和殿に向ひて云云と。博士態たる諫言は。鄙語にいふ釋迦に說經。孔子に語道の類なれども。交遊の爲に一言の。信を盡して裨益あらば。自他の幸甚しからん。意ふに領主の懇望は。只是色を好むに過ぎず、和殿等承たる恩ありとも。別に報恩の折もあるべし。先度の媒妁成就せずとも。彼かたざまに背くにあらねば。願ふは田文の志士孝女と。和睦して彼困窮を。憐愍て帮助にしも。做り給ひなば先非を補ふ。是第一の捷徑なり。何かは恥る事あらん。然れば孔聖の敎にも。過て改るに憚る事勿れ。といへり。惑ひを覺し給ひね。と理り切たる主僕の金言。傍聞する八重作まで。背に汗を流すまで。骨に徹膽に銘じて。後悔臍を噬るのみ。況その兄縱二郎は。夜醼の酒と共侶に。無明の醉さへ頓に醒て。昨日の我を恨るまでに。頭を低手を叉き。默然として眠るが如く。時の移るを知らざりけり。この段いまだ盡さねども。又卷を更めて。且下回に。解分るを聽ねかし。

新局玉石童子訓卷之二十一終

るは。實に已ことを得ざるの所以なり。この義を察し給ひね。と喞言がましき長談脩話に。心は同じ八重作も。倶に嘆息したりける。當下成勝通能は。列々と聞果て。成勝先答るやう。今はじめて知る主人の任俠。善惡倶に憑れたる。言を易じと思はれしは。勇あるに似たれども。咱等が思ふよしはしからず。最憚ある言ながら。且試に打出さん歟。といふを縦二郎聞あへず。开は庶幾ふ所なり。既に交遊の義を結れしに。何等の介意あるべきや。いかで教を承まく欲す。いかで〳〵。と請問へば。成勝は傍なる。扇を颯と推開きて。是これを見給ひね。扇に蟹目の摠括あり。人に一心の主神あり。人各志なきことを得ず。古語にいはずや。志士は溝壑に縊るゝを忘れず。勇士は其元を喪ふを忘れず。語は老列の二書。及孟子にも見えたり。宜なる哉。匹夫も志を奪ふべからず。意ふに田文の旅客は。廉士なり。孝女なり。假令千金の利をもて誘ふとも。豈阿容阿容と人の爲に。妾になる者ならんや。然るを和殿はよくも思はで。勇あり膂力あるに乘して。威勢をもて逼りしは。抑愆にあらずや。といひつゝ傍を見かへれば。通能も倶にいふやう。彼父女の薄命なる。宿所を逐れしその曛昏に。歹人等に撻惱されて。盤纒の金を喪ひしは。和殿の所爲にあらずといへども。起原は和殿より出たり。春秋左氏傳を按るに。晉の董狐が筆を染て。趙盾君を弑せり。と書しゝに似たるべし。然るを和殿は猶悟らで。彼等父母が饑るに及びて。其志を改めて。從ん歟。とて俟れしは。已を知りて人を知らざる。

ず。弟は兄を諫るとなく。倶に愆を累ねしを。悟らざりしそ面なけれ。いかで恩免あれかし。と等しく陪話て已ざりしを。成勝徐に推禁めて。賢兄弟先非を悔て。今より善に與し給はゞ。歡び是に優ものなし。古の人いへるとあり。三人酔ふて溺るゝ時は。敢是を拯ふ者なし。其内中一人酔はざれば。酔ふたる二人を助拯ふて。共侶に死に至らず。最憚あるとながら。和殿弟兄弟子達まで。其行ひの道理に差ふを。暁りて諫る者なかりしは。三人酔ふて溺るゝ者と。似たりといはんは無禮なるべし。といへば通能も共侶に。後の短慮を警て。和談の歡びを演る程に。夏の夜蚤く明初て。牕の隙より朗つゝ。軒端近く鳴亘る。鴉の聲聞えしかば。縦二郎驚き見かへりて。短夜とはいひながら。美談佳境に入る隨に。客人達に睡らせもせで。鈍や一宵を過したり。といふ間に八重作は。遽しく身を起して。其頭の板戸を推開れば。時八と奈我四郎は。共侶に出て來つ。縦二郎等にうち向ひて。昨夕は刀禰們の諫言を。蔭ながら聞知りて。深く感心仕りぬ。伙計の毎にも傳へなば。皆大人しくなり侍らん。既に浴桶に水汲入れて。早く焼つけたりければ。程よく沸り候ひぬ。客人達も湯浴して。且早飯を果して後に。優に睡らせ給へかし。といふに主僕は膝を拱めて。言叮寧に勞ふ程に。押繪が薦る浄手の湯桶に。養歯と鹽をとり添し。盆は殘の月ならで。影さへ見ゆる花漆の。花あり實ある欵待に。成勝と通能は。歡びを演且謝して。軈て簷廊に出しかば。縦二郎は押繪に向ひて。汝も疲勞て睡かるべ

新局玉石童子訓巻之二十二

東都　曲亭主人口授編次

第五十二回　大江峯張逐ふて松煙斎に説く　文武和合して故人故人を知る

復説韓錦縦二郎は。大江峯張両主僕の。道理を盡し是非を論ずる。言よく諫られしかば。はじめて无明の酔醒て。慚愧後悔大かたならず。聴果貌を改めて。両主僕に謝していふやう。在下性愚魯にて。必然の理義に暗く。をさ〳〵匹夫の勇を負て。彼旅客は孝女なり。廉士ならんを思ひもかけず。飽まで虐げ苦しめしは。今さら臍を噬までに。千たび悔ども及びがたかり。然るを刀禰們幸ひに。いよゝ博愛の誠意をもて。金言玉語を惜み給はず。鍼砭懇切ならざりせば。いかにして我舊癖を。立地に刈除れて。昨非を知るに至んや。天も明ば田文にゆきて。彼父女にうち勸解て。倶しかへり來て家に留めん。願ふは二君子詞を添て。術よく寛解給へかし。といへば八重作も額を衝きて。愚意も家兄に異ならず。殆後悔仕りぬ。我們弟兄武をのみ好みて。學の窓に疏ければ。見ぬ世の聖を師とし得ず。理非曲直に惑ふの故に。兄は弟を誡め

るに。我のみ居つゝ候よしわらんや。峯張は然も思はぬ歟。といふに通能。然なりと。應て。誰とて留る者なければ。樅二郎は强難て。且感じ且謝して。八重作を喚ていふやう。刀禰們は咱等が爲に。田文へゆかんと宣はすれば。汝も伴に立べきなり。就て亦所用あり。耳をおこせ。と引よせて。藴き果て亦いふやう。其東西蚤く整ひなば。汝搭駝ふて那里へ追着け。疾せよかしと。吩咐れば。八重作はこゝろ得果て。退りて衣を脱更て。背門より出てゆきにけり。是時天日いよ〳〵昇りて。巳の時の鐘。鏘々と聞ゆる程に。這驛の人馬會所より。四箇の轎夫二挺の旅轎を。舁もて來つゝ呼門けり。當下樅二郎は。出て轎夫等を勞ふて。去向をこゝろ得さする程に。時八と奈我四郎は。準備の盒子を兩袱に。裹しをもて出て。搭駝ふて伴に立まくす。樅二郎是を見て。時八等を喚びていふやう。旣に二挺の轎子あるに。汝等伴に立は要なし。宿所へ退りて疲勞を醫しね。我身みづから那里へゆくは。田文の父女に後悔の。誠意を示さん爲にて。面正しくもなき事なるに。伴當連て何にせん。盒子は轎子に載てゆきてん。已ね〳〵。と制れば。時八と奈我四郎は。只得其意に隨ふて。二褁なる件の盒子を。空轎に分ち容れて。且成勝通能の爲にとて。今朝準備しける草履二雙を。出して脱沓石の上に直し措程に。押繪も奥より出て來て。大江主僕を勞へば。樅二郎は亦押繪に。留守のこゝろを得させつゝ。屢熟睡を誡めて。卒とばかりに身を起せば。成勝と通能は。押繪時八奈我四郎等に。疲勞を慰め且

けれど。先早飯をいそぎねかし。既に知るゝ情由なれば。今朝しも咱等は刀禰們を。請ふて立合阪へゆかまく欲す。早飯の外に晝餉の割盒を。五七口品准備せよ。時八と奈我四郎は。通宵にて睡からん。炙炙の事は四鄰なる。家家達を傭ふて手傳せよ。といふに押繪はこゝろ得て。應をしつゝ退けば。時八等も是をうち聞て。否とよ。人を傭ふは要なし。孰とて睡りし者なきに。我們兩箇のみならんや。火をも燒くべし水をも汲てん。奈我四立ね。といそがするを。縦二郎推禁めて。鶴脛には所用あり。早飯を果しなば。汝は蚤く人馬會所にゆきて。田文まで往還すべき。旅轎二挺を誂へて。巳の比及におこせといひね。彼父女を乘ん爲なり。いでいでといひつゝも。そが儘奥へ退けば。是より先に八重作は。退りて漱ぎなどしつゝ。大江主僕に茶を薦め。其後早飯を薦るに。押繪と倶に給侍し果て。更に浴室へ案内をしけり。是より後も其度毎に。主客の謙遜。辭讓の禮節。迭の口誼さぞあらんを。言省て備にせず。看官宜く猜すべし。左右する程に。巳の時近くなりしかば。縦二郎は身裝して。單奥より出て來て。成勝通能に談ずるやう。當下は田文にゆきて。彼旅客父女を迎へまく欲す。なれども和君等先たちて。橋を亘し給はらでは。他等のこゝろ解がたけん。昨宵よりの疲勞あらんを。請ふは無心に似たれども。峯張主那里まで。共侶にゆき給はずや。といふを成勝もうち聞て。夏の夜睡眠を貪るは。各無事の時にあるべし。非如一夕睡ずとも。人我意見を信容て。良善の域に赴さぬ

くは彼刀禰達に。是等のよしを告まつりて。報恩謝義の一語だも。演得ざるこそ本意ならね。然らば。とばかりいひ捨て。うち連立て杖をだに。忘れていそしく立去りしは。さばかり久しきとには侍らず。巳の時過ぎたる時候なりきと。告るに呆るゝ縦二郎は。いまだ答る所を知らず。當下成勝通能は。聞果て倶にいふやう。原來昨日施したる。神藥即効徑たず。彼旅客の不治の痍。一夜の間に瘥果しは。孝女と慈父の正心誠意を。憐み給ふ神明佛陀の。冥助にこそありつらめ。そは歡ぶべき事ながら。和談既に整ひて。倶に尋て來しかひもなく。昨日の儘にて逢ずならば。彼人の爲に謀りたる。千萬言も皆空なり。といひつゝ倶に傍なる。発兒に尻をうち掛れは。樅二郎もその前面なる。発兒に倚て却いふやう。聞くが如きは和君達の。仙丹神妙未曾有なり。縦彼旅客の。眼明に脚疾なるとも。這地方を立去りしは。巳の時過ぎての事ならば。といひつゝ日影を瞻仰て。まだ一時に過ぎざらんに。必遠くはゆくべからず。卒給へ。追蒐てん。と惴るを成勝推禁めて。そは勿論の事ながら。和殿は一身肥滿て。技も力に勝れても。反て路をゆくに遲かり。權且這里に俟給へ。我們主僕路の程。一二里追ふて得逢ずは。开里よりかへり來つべきなり。といへば通能も倶にいふやう。遇ふと遇ざるは天なり命なり。力を用ひて其甲斐なくは。幾人ゆくとも益やはある。轎子をも遺し置くてこそよけれ。といひつつ這茶店にて賣る。草鞋二雙を買とりて。手はやく其緒を締に串きて。主僕等しく草履を棄て。

謝して。縦二郎と共侶に。轎夫毎を相從へて。庭門より出てゆく程に。奈我四郎時八は。門前まで送出て。別れて各宿所に退りぬ。是日留守には押繪の外に。今朝早天より傭れたる。比鄰の家家等も在るなるべし。爾程に韓錦縦二郎は。成勝通能と共侶に。ゆくと約莫十餘町。立合阪の洞に來て見れば。那父女は何地ゆきけん。聞しにも似ず在るとなければ。大江主僕も訝りて。思難つゝ开が前面なる。茶店に聽て立よりて。通能は先媼に向ひて。云々と問試るに。媼は笑つゝ答ていふやう。原來御身等二柱は。昨日彼瞽父女に。東西多く拿せ給ひし。旅客達にてありけるよ。韓錦主も聞給へ。尋給ふ彼瞽者は。這刀禰們の恵せ給ひし。仙丹と歟いふ妙藥の。即効にやありつらん。一夜の間に彼撲傷の。なごりなく皆愈しのみならず。打潰されしといふ兩眼は。撲れざりける始より。其明亮なると鏡の像く。癱たる脚さへ疼痛を覺ず。都て痊り果けるを。今朝目覺し後親も少女も。知り得て驚奇感嘆したる。その悅びはいふべうも侍らず。昨日刀禰達の立去り給ひし。其方を只顧伏拜みて。父女は姑且商量しつゝ。媼が茶店に出て來て。別を告て云々。と件の事の趣を。說示されしその折に。といひつゝ渾不似をとり出て。是鬻せ。この樂器は。今よりの後逆路に要なし。萬にひとつ咱等父女を。憐思ふ人ありて。去方を問るゝ折しもあらば。是を照据に彼恩德を。說知らせ給へかし。然るとなくは御身の隨意。賣て錢に換るとも。沽れずは摧きて茶を烹るとも。左にも右にも做し給へ。恨ら

來ぬる中途より。漸々に腫充て。堪がたくこそ候なれ。と告るに通能驚きて。そは亦不慮の事なりき。然とても彼仙丹は。今も尚我腰に在り。用ひなば必即効あらん。先その棒瘡を見せ給へ。といふに八重作面を皺めて。衣領寛げて右の肩を。袒ぎて示すを見るに。現腫充て毬の像く。その色は紫の。灰後れたるに似たりしかば。疼痛さこそと想像。成勝は眉を顰めて。昨は不慮の雨敵たり。今は同志の友人なるに。殘る痍こそ是非なけれ。といへば樅二郎も驚愛ひて。是に就きても峯張主の。槍棒修練の至妙を知る。八重作が爲にしも。好修行にこそ候なれ。といふ間に通能は。彼仙丹をとり出て。八重作の棒瘡に。隈もなく塗らして。鼻紙をもて蓋にしつ。扶けて袒を斂させて。誘とばかりに成勝を。いそがし立て出まくすれば。樅二郎も立出て。咱等弟兄も共侶に。必ゆくべき該なれども。いはるゝ如く我歩疾からず。八重作は恙あるを。了得に見捨がたければ。本意なくこそ候なれ。といふ間に成勝通能は。應も果ず歩に信して。聞つる方を心當に。彼父女をぞ追ふたりける。樅二郎是を目送果て。轎夫等に向ひていふやう。汝等も聞知る情由なるに。玆にて俟は歎しかるべし。亭午に程もあるまじきに。先その盒子を拿出て。宜く腹を繕ふて。彼刀禰們を追ふてゆきね。若彼父女に得逢はずは。刀禰達兩箇をうち乘て。かへり來るともけしうはあらず。こゝろ得てよと說諭せば。轎夫毎は異議に及ばず。轎子より盒子をとり出て。兩箇を樅二郎等の身邊へ閣き。四箇をば各うち開き

件の草鞋を穿く折から。奈良櫻八重作は。袱裹を背にして。來ぬる面色惱しげなるを。縱二郎早く見出して。八重作などて遲かりし。障れる事のありて歟。と問ふ間に八重作は。やうやく茶店に辿り着きて。縱二郎に報るやう。吩咐給ひし故衣は。尚巳の時ばかりの物ありしを。三四箇帶さへ買拿りて。來ぬる路にて撲瘧發りて。最堪がたきを辛くして。來しかば遲くなりたるなり。といひつゝ主僕に會釋して。凳兒の端に尻を掛ければ。縱二郎は嗟嘆して。成勝等に對ひていふやう。在下今日彼旅客父女を。迎へて宿所へ相伴ふをり。他等が衣の破れ垢づきて。鬱悒からんをそが儘に。倶していなんはさすがにて。準備せばや。と思ふものから。咱等弟兄女弟さへ。身材大きやかなれば。その衣をもて他等父女に。貸して被せなば世話にいふ。猫兒を袋に裝れたる像く。彼身に稱ふべくもあらねば。今朝八重作にこゝろ得させて。故衣店にて衣三四箇を。買せて目今もて來にけれど。そも亦十日の菊に似て。空になりぬる鈍ましさよ。と喞言がましくうち托れば。成勝も通能も。云々と慰めて。和殿他等父女の爲に。然までにこころを用ひられしは。我們さへに歡びおもへり。今は無益に似たれども。そも亦後に用ある歟。なき歟はいまだ知るべからず。就て八重作哥々の暴疾は。撲瘧のみ歟心許なし。心地は甚麼。と諮れば。八重作は袱裹を。解下しつゝ答るやう。最恥しき事ながら。昨宵部領川の上にて。峯張主の一棒を。受損ねける撲瘧に侍り。今朝までは然ばかりに。疼痛を覺ざりけるに。方僅

縦二郎に向ひていふやう。家兄最奇なりけり。我身の撲瘡早に癒て。浮腫はさらなり疼痛を覺ず。正に是彼仙丹の。即效なる事疑ひなし。といふに縦二郎歡びて。初我彼旅客の。目さへ脚さへ破られし。其大疵の一夜の間に。彼仙丹の即效にて。瘉り果しといふ一奇譚を。疑ふとにはあらねども。こゝろ得がたく思ひしに。今の奇效は是目前。現未曾有の神藥なるかな。汝恙もあらずなりしに。弟兄這里にて彼人々を。居つゝ俟んはいよ〳〵無禮なり。嚮に彼刀禰們の。我脚の速からねばとて。故意這里に遺されしは。脚の遲速に由るにはあらじ。いまだ彼父女を寛解ずして。我身も倶に追ゆかば。愆に事の障りに。なりもやせんと豫より。思慮れしにぞあらむずらん。然れども汝は格別なり。晝餉を喫て疾邁きね。といふに八重作有理と應て。傍にありける一箇の盒子を。引よせつうち開きて。心と共に長からぬ。箸拿抗て喫程に。媼が汲もて薦めぬる。熱茶の茶碗拿外して。指を焦しつ噫熱や。と手を振り口に哺ませて。汲更さする湯に水を。さして往方は定めねども。人を追ふ身は膽向ふ。心頻にいそがれて。鄙語にいふ六藝の。外に早喰早走り。物皆鵜呑に盡したる。盒子を其首に措あへず。ちよといひて來てん。といふより早く。出て速りに走けり。是よりの後縦二郎は。詞敵に做すよしもなき。媼と對ひて坐る程に。去向の首尾は甚麼ぞや。彼刀禰們が折もよく。追着たる歟とばかりに。立て見居て見物思ふ。心了得に昨夕より。疲勞なきにあらざれば。外の見る目も變りあへず。

て。媼に茶を乞ひ箸をとりて。早くもたうべ竭しつゝ。殘る盒子と共侶に。故の如くに袱に。裹みて轎子に斂れば。縦二郎は八重作の。もて來し袱裹を開き見て。包て轎夫等に示すやう。此は是彼旅客父女に。被せまく思ふ衣物にて。帶もあり汗衫もあり。是をも轎子へ納てゆきね。その餘の事は如此如此なりとて。去向を叮嚀に指示せば。轎夫毎はこゝろ得て。軈て二挺の空轎を。抬起しつ大江主僕の。去向を投てぞいそぎける。姑且して縦二郎は。茶店の媼に向ひていふやう。彼旅客父女が。置土產にとて汝に拿らせし。その渾不似と歟いふ樂器を。這頭に置んは妙ならず。我に賣ずや。買まく欲す。汝夕さりかへるをり。我宿所へもて來よかし。多少は知らねどその價ぞ。といひつゝ懷を搔撈て。拿出す一方金を。卒とて遞與せば茶店の媼は。呆れ惑ふて左右なく受ず。滿面笑れて。斑に脱たる。板齒の涯顯して。高嗤して且いふやう。噫物体なの價直三昧。方僅話しまう云し如く。彼旅客が荷になるとて。貽し置れし東西なるに。錢賜りて何にせん。況然る御金をや。思ひがけなきとなりきとて。辭ふを縦二郎推返して。开はいはるゝとながら。今日は終日この店を。借て所要を辨ずれば。その茶錢をしも兼たるなり。手を出しね。と掖寄て。件の方金を拿らすれば。媼は困じて辭ふによしなく。幾回となく戴きて。腰に着たる匾囊の。口を開きつ楚と斂めて。更に茶を煮て薦る程に。八重作はものも得いはず。凭柱に身を倚て。打睡て在りけるに。豁然として覺たる像く。腕を捺り身を起して。

ふものから。兩君子の洪恩德義を。仰げば須彌も猶低く。伏て思へば四海も。猶淺かりなん歡びを。亦禀すべきよしもなく。那儘にして其後の安否も得問はずなりゆきぬるを。こゝろ苦しく思ひしのみ。投て往方は定めねども。今日は女兒を扶挾て。方纔這里まで來にけるに。料らざりける兩君子も。亦這路を過らせ給ふ歟。得がたかるべき再會は。夢歟現歟夢ならば。覺ずもあれ。と諄復す。親はさらなり少女子も。感涙袖を絞るまでに。受し恩惠を云云と。盡ぬ詞の露ならで。淸き心ぞ知られたる。我們主僕聞果て。且慰めて答るやう。己等兩箇茲まで來ぬるは。汝父女を追んとてなり。叟の瘧瘠の早に愈て。今朝父女共侶に。那里を立去り給ひしよしは。茶店の媼に聞知りて。遺し置れし渾不似さへ。見るに餘波の惜まれて。いかで面談せまく欲しく。思ふよしさへあるものを。空にはせじと那里にて。聞つる去向を心當に。跡を慕ふて來つるなり。と告るに歡ぶ件の父女は。亦只感謝の外あらず。且敬ひ且畏みて。左右なくは身を起さゞりしを。我們主僕屢請ふて。先其晝餉を果さしつ。却共侶に片隅なる。牀兒に徙り額を交へて。密談數刻に及びたる。その要緊の條々は。いはでもしるき事ながら。昨宵部領河原の顚末を首にて。和殿弟兄先非を悔て。我們主僕を媒人にて。いかで件の旅の父女と。和睦の酒盃を饒されなば。白豬の宿所に迎執て。扶助にならんと誓ひたる。誠心誠意の崖略を。主僕迭代りに傳示して。只管和睦を薦めしかば。父女は耳を敧けて。聞果て謝していふやう。世

磯浦傳ひ漕船の。楫にはあらぬ肱枕。横臥しより寝とも知らず。晴たる天に似げもなき。鼾睡の雷霆轟くまでに。久しく熟睡したりけり。有右し程に日は攲きて。未牌の中浣過る時候。外面より來る者あり。縱二郎は其跫响に。愕然と驚覺て。と見れば來ぬるは別人ならず。峯張通能なりければ。こは賢君子早かりき。餘人はいかに來ます歟。と問ひつゝ軈て発兒を讓りて。茶店の媼を促しつゝ。煎茶を薦めて勞へば。通能は含笑ながら。聲を低めて答るやう。韓錦主歡び給へ。去向の首尾は歹からず。嚮にこの茶店を出しより。我們主僕足に信して。彼父女を逐ふ程に。約莫二里有餘にして。字を菰禽と喚做したる。一村落に飯店あり。件の父女は其店舗にて。晝餉を喫てありけるを。己逸早く見出しける。その歡びはいふべうもあらず。主共侶に找入りて。名告をすれば彼父女は。箸を禁めつ得と見て。慌惑ひて発兒より。滾が像く地上に伏て。三拜四拜も尚足らず。幾回となく額を衝て。感謝に堪ず且いふやう。兩恩人上に在す。小人過世福あらで。曩には禍鬼身に纏緣りて。這兩眼を打潰され。この向脛を折かれしより。日无衛の磯に漂泊ひ。脚なき蟹の澤邊に惱る。進退既に谷りて。父女袖乞になるまでに。殆饑渴に迫りし折から。菩薩に彌增兩君子の。過らせ給ふに邂逅して。世に未曾有の仙丹を。多く施し給はりしより。即效神速失たず。是纔せ兩眼雙脚も。故の如くに痊果て。自由を得てけるのみならず。昨日賜りし金さへあれば。蚤く那首を立去りて。餘毒を避まく思

兩君子の德義によりて。恥を雪るのみならず。昨の寃家は今の知己に。ならるゝは世に稀なる。幸ひにて候に。彼人贈給はればとて。いまだ和睦の禮にも及ばず。この衣を被てその轎子に。乘て那里へかゆかるべき。兩君子の御示敎に。悖るは無禮にて非義に似たれど。この義ばかりは饒させ給へ。我身病後にあなれども。路を走りて疲勞を覺ず。便是仙丹の。經驗にこそ候はめ。いかで〳〵。とばかりに。受引くべくもあらざりける。かゝる折から八重作舍弟の。撲疾早に愈たりとて。跡を慕ふて來にければ。我們聽て呼入れて。和睦成就の顚末を。云云と告示すに。舍弟は聞つゝ歡びに堪ず。先仙丹の奇效を謝して。茲に創彼父女と。和睦莫逆の口誼を演て。和殿は今朝より彼茶店に。俟るゝよしを告知らせて。齎したる彼衣を。件の父女に被せまくするに。彼旅客は猶辭ふて。在下子路の勇なけれども。衣の敝れたるを恥とせず。只不義の富を欲して。名利の奴に做らんとを恥とす。强情に似て候へども。只この隨にてあらんこそ。胸最安く候なれ。といふを腋子は猶諭して。和殿の心の淸かるは。夜光の玉にも殊ふべし。なれども亦已を枉て。人の意見に從ふを。溫良の君子とこそいはめ。既に和睦は整ひしに。彼人の贈物を受ずもあらば。心の隔あるに似て。橋を渡しし我們さへ。倒に面伏にて。快らざる所あり。この義を思ひ給はずや。と說れて亦旅客は。默然として辭するに由なく。やうやくにして答るやう。敎諭寔に其理あり。然らば其衣を借まつりて。父女の身の皮を繕ふべし。

にも人にも捨られて。袖乞にまでなりにたる。我們父女を人がましく。思食たればこそ。昨宵も夜通今日も亦。三里の路を遠しとせで。玉趾を枉させ給ひしは。親にも彌増大慈善。好が上にも好れとて。教諭させ給ひぬるに。何でふ推辭まつるべき。聞くが如きは彼韓錦が。一語の下に昨非を知りて。恩怨蚤く地を易しも。亦兩君の徳に由るのみ。人既に本然の。善に復りて和睦を請ふに。猶疑ふてゆかずもあらば。鄙語にいふ羹に。懲て齏を吹くが如けん。左にも右にも君等の隨意。宜く憑み奉る。と言語雄々しく答るをりから。和殿のおこし給ひぬる。彼轎夫等が空轎を。舁つゝ件の店頭を。過るを腋子成勝の見出して。一聲ヤヤと喚被れば。轎夫毎は驚きながら。見かへりつ歡びて。原來茲に在ましにけり。幸あり幸あり。といひつゝも。一箇の轎夫拢入りて。我們主僕に告るやう。旅客達を迎へよとて。韓錦主に吩咐られて。刀禰們の御跡を慕ふていそぎ來つるなり。就て刀禰們の晝餉の盒子も。又客人にまゐらせよとある。衣物も袱に。包みて轎子の裡にあり。先御腹を繕ふて。出させ給へ。と說話れば。其餘三箇の轎夫は。額と胸に流るゝ汗を。拭ひもあへず轎子の戶を。開きて盒子と袱裹を。拿出て咱等に渡すにぞ。大江腋子も云云。と轎夫等を勞ふて。先彼等にも發兒を分ちて。酒飮せなどしつゝ。却件の父女に向ひて。和殿の心を用ひられたる。事の趣云云と。告てその衣をも被すべく。轎子に乘とて薦めしに。件の父女は從はず。父親且答るやう。我們孤獨の旅客なるに。

と推立れば。時八は應も果ず。そが隨踵を旋らして。白豬を投てぞ走りける。浩處に八重作は。成勝等に先たちて。單慌しくかへり來つ。先通能に會釋して。兄樅二郎に報るやう。松煙と喚いふ旅客は。强情にして歩行より來ぬれど。少女をばやうやくに。大江主が誘へて。彼轎子にうち乘て。目今其首まで倶せられたり。和順の對面に。玆は中途の事ながら。酒なくはわるべからずとて。そも亦大江主の相計ひて。菰禽の飯店にて。酒殽を沽拿りて。殘る空轎にうち載て。そをしも齎し給ひにき。なれども這里は腰掛茶屋にて。茅兒の外に坐席なし。この故に少女をば。そが儘にして猶轎子に。在らするもよかんなん。この義をいへと大江主に。吩咐られて候なり。と告るを樅二郎うち聞て。亓は亦意外の造化なり。遺る隈なき刀禰們の。指揮を孰か推辭べき。奈我四郎は。八重作と倶に。彼人々を出迎へよ。いで〱といひつゝも。衣領搔合せ身繕ひして。出て松煙齋等を俟程に。通能も共侶に。店前に立て在り。程しもあらず成勝は。彼少女子の轎子を先に立して。松煙齋を倶して來ぬる。後方に從ふ八重作奈我四。意氣揚々たる亓が中に。松煙齋の打扮は。都て昨日の窶れたるに似ず。縹緋纈なる仁田山紬の夾衣の。尙巳の時ばかりなるを被て。烏羅の外套綺羅やかに。彼朝櫻と喚いふ短刀を腰にしたる。人品骨相鄙からず。實に是文人にて。昔は某甲殿に仕たる。刀筆の吏にもやありつらん。と見ゆる面部の拳痏は。一夜の間に皆愈て。その迹纔に遺りしのみ。茶店の媼さへ是を見て。

輪子の義は從ひがたし。といふに腋子も己等も。幵を亦强んはさすがにて。商量竟に整ひしかば。我們主僕は盒子を開きて。物欲かりし腹を繕ひ。亦旅客父女にも。薦めて二たび箸を拿せて。餘れる盒子は八重作舍弟と。轎夫等に盡させて。倶に出まくしぬる程に。咱等はこの義を逸早く。和殿に告も知らせんとて。走りてかへり來つるなり。彼旅客は思ふに增たる。淸白の廉士なり。其姓名を問試みしに。原是筑石の人民にて。鷺森松煙齋と號するといへり。其性手迹を好みしかば。髫歳の昔より。弘法大師の法帖を。學と年を歷て。聊筆意を得たりしのみ。人の師になることを好まず。故ありて十稔近く。諸國を偏歷しぬる隨に。其書を需る人あれば。其潤筆を得て。父と女兒の。盤纏に充る者なりとぞ。和殿この義を知りたる歟。と問れて縱二郞は。怡悅に堪ず。含笑ながら。頭を撫て。通能に謝していふやう。在下性愚にて。暴漫の罪多かりしに。倘兩君子の扱引ならずは。彼人の怨早に解て。今この田地に至んや。彼旅客の姓名は。曩に聞かざるにあらねども。姻譚の事氷炭合ねば。果は迭に怨を累ねて。田文の乞食と罵しのみ。松煙齋と號するよしは。忘れて思ひも出ざりき。實に恥べきことにこそ。と答る詞も訖らぬ折から。見越松時八と。鶴脛奈我四郞は。韓錦弟兄の。かへさの遲きを俟不樂て。心許なくや思ひけん。迎への爲に來にければ。縱二郞は喚近づけて。和睦の首尾を告知らせ。時八は疾我宿所へ。ゆきて押繪に傳示して。客人達を饗饌の。用意をいそがしね。ゆきね〳〵。

誓に背きなば。身は天雷に撃摧れて。來世は永刼奈落に淪ん。急々如律令。と誓畢れば。松煙齋も倶に誓ひて。今や怨敵骨肉に等しく。魯衛の好みを結れたる。歡びを演る時。峯張通能こゝろ得て。酒を移し。土瓶を把りて。左右一齊酌易す。和睦の式禮事終れば。少女は轎子の戸を開きて。出まくするに草履なければ。そが隨にして縱二郎等に。向ひて額を衝禮を做す。その擧動の大人備たるを。人僉ヤゝと感稱す。其が中に松煙齋は。縱二郎にうち向ひて。嚮には巳等父女の爲に。美衣二領贈り給ひし。それすら當りがたかるに。況轎子をもて迎へられたる。抑何等の結構ぞ。芳恩謝するに詞なし。最辱く候。といふを縱二郎聞あへず。否とよ曩には歹人等に。行李さへ奪略れ玉ひしといふ。當時人の噂に聞くのみ。我知る事にあらねども。心に快ざる所あり。切て然ばかりの衣なりとも。償ずはあるべからず。と思ふばかりの寸志にこそ。といはれて松煙齋は感謝に堪ず。成勝と通能も。主客の廉直任俠を。稱て云云と慰れば。八重作と奈我四郎は。亦改めて松煙齋に。名告をしつゝ和睦の祝壽。その歡びも餘りある。茶碗拾ふて轎夫等にまで。殘れる樽を盡させて。媼さへ漏れぬ茶碗酒。御馳走さまや。と夕陽刺す。葭簀の目さへちらつきて。皆薄醉になりにけり。當時縱二郎は。大江主僕に謝していふやう。兩君子の御庇にて。今又一個の良友を得たり。既に日影は斜にて。下晡になりたるに。誘給へ。松煙主共侶に。宿所へ請ふて夕餉を薦ん。昨夜は不睡の疲勞にて。さこそ嬾

舌を吐き胆を潰して。奇なり奇なり。と稱賛す。當下縱二郎と通能は。左右に別れ相迎へて。引て茶店に請入るゝに。少女は轎子に乗たる儘にて。猶いまだ出さず。壯夫等の團坐する。この陝莚に少女子を。交ふべくもあらざれば。成勝この義をこゝろ得させて。形の如くに相計たり。然ればこの茶店は。松の立樹を柱にして。竹を横たへて桁にしたる。葭簀天井の外に物もなく。只奥まりたる所には。壞を三尺ばかり裝上て。簷廊の像くにしたるに。故たる間道の華席を。纔に三枚布きたるあり。大江主僕はこの長席に。松煙縱二郎等を請登る程に。八重作と奈我四郎は。茶店の媼に手傳ふて。酒を盪め酒菜を出すに。盃だにもあるとなければ。茶碗を茶托にうち載て。もて出たるもいとをかし。當下成勝通能は。倶に壽の詞を演ていふやう。兩賢兄。我們不肖にして。專聽れずといふ者なく。和睦の歡びを盡すに及びて。いかにせん。巳等も亦旅客なれば。席を開くに所なし。この故に古語に云。一樹の蔭に相坐して。一河の流れを汲せまく欲す。いかで海容あれかし。といひつゝ兩箇の茶碗を分ちて。左右に措て薦れば。縱二郎と松煙齋は。倶に茶碗を受戴きて。謝して且縱二郎がいへらく。在下性愚にて。人を知るに維疎く。短慮淺智の癖なれば。廉士孝女を虐げたる。其罪萬死に當れるを。幸ひにして大江峯張。兩君子の幇助によりて。主の怨を解れしは。歡び是に優す者なし。願ふは今日より刎頸の。交を許されなば。憂を分ち樂を共にして。身を終るまで違ふとなかるべし。倘この

昇よせさすれば。押繪は蚤く出て來つ。其戸をやをら推開きて。手を拿りて坐席に請待す。是日少女の打扮は。思ふにも似ず鄙ならぬ。絳梅織なる。陸尺袖の夾衣に。緋の縐の汗衫裙長く。端麗たる金襴の帶。玉梓に結做せる。年紀は二八可にて。桃花の唇臥蠶の眉。有斯る縣はいふにしも足らず。春の花の京都にも。秋の月の浪速にも。儔多からじと見ゆるものから。闕たる所はまだ浴せず。然しも長かる雲鬟は。故の儘にて梳らず。只草手束なりけるは。磨き遺せる鏡の塵蝕。玉に疵ある心地す。と思はぬ者なんなかりける。當下八重作奈我四郎は。轎夫等を背門の方に。呼入れて茶を飲せ。足を取らせて返し遣りける。是より先に坐席なる。縱二郎は松煙齋を。上坐に請找めたる。迭の謙遜悄果て。賓主の席定りしかば。押繪は二たび出て來つ。松煙父女に茶を薦め。果子を薦めて和睦の歡び。言叮嚀なる名對面に。松煙齋は席を避て。思ひかけなく今宵より。主せらるゝ歡びを。陳れば少女は親の後方より。おそる〳〵膝を找めて。縱二郎及押繪等に。衣さへ轎子さへ惠れたる。饗應の淺からぬ。過世怪しき身の幸を。謝するも言語寡にて。初々しくのみ見えけるを。押繪はさこそ。と慰めて。兄縱二郎に向ひていふやう。昨今は日の長き。涯りなればまだ暮ねども。客人達は物ほしき。時候にこそをはすめれ。夕饌をやまゐらすべき。といへば縱二郎頷きて。それよかゝなん。出しね。といふを松煙齋推禁めて。否。已等のみならば。方僅田文の茶店にて。沙量にはあれど酒菜さへ。

くをはすらめ。といふを主僕は聞あへず。その義は數ふに足らねども。茲は長譚の園にあらず。皆立給はずや。といそがせば。松煙齋も辭ふによしなく。左にも右にも諸君子の。隨意從ひ奉らん。饒し給へ。と身を起せば。八重作は轎夫等に。こゝろ得させて松煙齋をも。轎子に乘まく欲するに。松煙齋は推辭て乘らず。只得少女の乘たる轎子を。先に立しつ空轎には物なき盒子と空樽を。乘せて後方に舁せたる。开が中に通能は。茶店の媼を勞ふて。茶價を拿らせまく欲するに。媼は決して受納せず。その義は嚮に韓錦主の。金壹分賜りたるだに。過分の茶價に侍るものを。今亦何を歟受まつらんや。と推辭ば亦縦二郎も。禁めて些も費させず。手を挽立て出にけり。當下成勝通能は。西の方を膽仰て。尙暮るゝには程あるべきに。已等は田文の地藏へ。詣て迹よりゆかんといふ。事情を云々と。縦二郎に告しかば。然らば八重作まれ奈我四郎まれ。案内の爲に從へとて。彼等兩箇に吩咐るを。成勝と通能は。遠くもあらぬ程なるに。郷導兒は要なしとて。蚤くも路を橫ぎりて。地藏堂を投ていそぎけり。爾程に韓錦縦二郎は。弟八重作共侶に。松煙齋父女に相倶して。白豬の宿所へかへり來ぬる。其路三四町になりし時。奈我四郎は先へ走りて。押繪に右と告るなるべし。然ればこの日留守したる。見越松時八は。厨掙き事果し折。主の還ると聞えしかば。鶴脛奈我四郎と。倶に折戸口まで出迎へたる。其敬禮大かたならず。當下縦二郎は。轎夫等にこゝろ得させて。少女の轎子を开が儘に。簷廊に

親に携られて。同胞倶にこの地に來つ。その後父母世を去りて。我身の便著なき隨に。武藝をもて口を糊ひしより。地方の人綽號して。韓錦縱二郎と喚做したり。そは只角觝の上にいふのみ。本姓は間貫氏にて。佐用二郎茂洋是なり。弟兄怎なる因果なりけん。弟も亦角觝を好めば。奈良櫻と喚れ。八重作と名告ども。實は佐之七次世是なり。又我弟のみならず。見らるる如く女弟押繪も。身材高くして。些の膂力あり。皆只勇を好むのみ。心術怜悧からざれば。牆に鬩ぐの僻事なきも。外其侮りを防ぐに足らず。這回我身の愆も。短慮淺智の做す所。恥しくてこそ候なれ。と喞言がましく聲潜して。告るに驚く松煙齋は。憶はず兩手を拍鳴して。奇なる哉奇なりけり。原來和殿弟兄は。我爲に故朋輩なる。間貫佐用六故世叟の兒達にてありけるよ。知らぬ事とて昨日まで。路上の人と見しのみならず。一旦怨を結びしは。迭に千慮の一失と。いふとも孰歟諾なふべき。後悔その詮なきとながら。料らずも今和睦して。名告會しは宿因の。いまだ盡ざる所にて。是切てもの幸なりき。といふに少女も胸を潰して。奇遇を感嘆したりける。この段文尚多ければ。又下回に。解分るを聽ねかし。

新局玉石童子訓卷之二十二終

飽までたうべ侍りしかば。夕餉はいまだ欲からず。況大江峯張の。まだかへり來まさぬに。そを俟ずして巳等のみ。物賜らば無禮なり非義なり。只うち捨て閣せ給へ。と辭ふを縦二郎強難て。爾らば貴意に任すべし。令愛も介意なく。先果子なりともたうべ給へ。押繪那茶は冷つゝん。汲易てまゐらせずや。といふに押繪は應をしつゝ。茶碗拾ふて漆盆に。載ていそしく立にけり。是よりの後縦二郎は。松煙齋と對坐して。四表八表の言の次に。大江峯張の德を稱え。巳が短慮淺計を。後悔の外なかりしかば。松煙齋慰めて。其義は和殿のみならず。咱等も一時の怒に乘して。不測の禍を釀したる。年に似げなき愆なるも。世は塞翁が馬なるかな。寃家は反て知巳となる。一富一賤交情異なる。損益兩友我に在り。その志合ざれば。肝胆も胡越の如く。其志同ければ。千里も合壁に似たるべし。敢果なき者は心にこそ。といはれて縦二郎嗟嘆に堪ず。貴老は正に學問あり。多文多識のみならず。心操の方正なる。巳等が企及ぶべきにあらず。就て諮奉る。貴老は素是筑石の人にて。這年來手跡をもて。諸國を遊歷し給ふにあらずや。因て思ふに其稱號。鷺森松煙齋と歟。喚做さるゝは故あるとにて。昔は由緒ある名家の末歟。とばかりにして我上を。詳に告げずもあらば。何をもて疑ひを解れん。既に斯。莫逆の。交を結れぬる上は。今さら隱すべくもあらず。我本貫も筑石にて。父は間貫佐用六郎故世と喚れて。一諸侯の舊臣なりしに。故ありて流浪しつ。我身髫歲なりし比。二

へず。其義ならば配慮は要なし。我一家兒なるは。弟佐之七八重作と女弟のみ。角觝の弟子奈我四時八は。今尙庖湢にあるべけれども。他等も都腹心なり。洩聞とてもけしうはあらず。いかで〳〵。と請問へば。松煙齋の筑四郎は。四下を見かへり聲を低めて。然らば意衷を盡すべし。言多くとも聞給へ。在昔南朝の殘燼なりける。我舊君菊池肥後太郎武俊朝臣。武勇は父祖に彌增たる。孤忠義烈のこゝろもて。興復の夙望已時なく。肥後の阿蘇山の敗城に。義旗を揚給ひしかば。當時足利家より討隊の頭人。防長豐筑數州の守。大内左京權大夫義興主。數萬騎に將として。うち向ふと聞えしをり。躬方は素より小勢にて。外に援の兵なければ。敵の猛威に聆怯して。落ゆく者のみ多かりける。然ばこそあれ武俊主は。勝負を未然に量りしより。一箇も躬方を擊せじとて。有一夜風雨の暗きに紛れて。士卒と共に城を棄て。往方も知らずなり給へば。寄隊は手を濡さずして。全勝の利を得ぬるに似たれど。然ればとてさせる功なければ。義興怒を移しにけん。人の諫を聽ずして。彼阿蘇沼の蛇穴を燔て。軈て凱陣したりける。此は是永正六年己巳の春二月の事にして。二十餘年の昔になりぬ。それよりして世はいよ〳〵亂れて。京師は戰馬に荒るゝまで。東西の海。波風噪ぎて。國民安からざる开が中に。武俊君の夫人にてをはしましける。小芳宜の方と聞えしを。阿蘇の山里に潜せまつりて。給事しぬる者は。我筑四郎季彥夫婦と。和殿の二親只是のみ。倶に馬を飼薪を樵。或は潮を汲み貝を拾ひ

新局玉石童子訓巻之二十三

東都　曲亭主人口授編次

第五十三回

季彦孤忠東西に履歴す
範的奸悪縦二郎を寛す

登時韓錦の間貫佐用二郎は。松煙齋と問答の語次に。他は己が亡父親。佐用六故世の故朋輩なりしを。茲にはじめて聞知りて。疑の霧いまだ晴ねば。思はずも膝を栱めて。先生何といはるゝやらん。貴老は我先大人世佐用六故の。故朋輩ならんには。我身髫歳なりし比。二親の夜話に。然者ありと傳へ聞たる。肥後の菊池家の一忠臣。防守筑四郎季彦叟の。倣れる果にはあらざるや。と訝り問はれて。然ばとよ。我身和殿の父大人と。倶に舊里に世を潜たる。其比和殿等弟兄は。尚幼少かりしかば。今は迭に面忘れて。いはねば。知らず知るよしもなく。一旦怨を結びしより。和睦の今料らずも。言の茲に及べるは。是舊縁の盡ざる所。素懐を遂るに似たれども。故世主世に在さねば。故りにしことを孰に歟語ん。切てもの心遣りに。我年來の宿念を。和殿に告まく思へども。憚りの關。壁に耳。そを思はずはあるべからず。といふを佐用二郎聞あ

殿は素より能書なり。何まれ一筆貽し給へ。と乞れて辭ふべきにあらねば。軈て其意に任しつゝ。短冊一枚とり出して。墨摺流し筆を染て。遠つ人松浦佐用媛都麻戀に。領巾麾りしより負へる山の名。と萬葉集なる古歌を寫しつ。その短冊を兩箇に裁て。上の方を佐用六叟に授け。下の方を我懷に。斂めて且いへらく。今よりの後年を歴ても。再會の時を得がたくは。今日の契りを兒孫に告げて。各この短冊半分を。授けて當時の照据にさせん。和殿の冢子佐用二腋子は。稍東西を知る童蒙なり。況我獨女なる。梭手は纔に五歲になりぬ。憑しからぬ者なれども。幸ひにして共侶に。本性尙古の志あらば。後の裨益になりもやせん。といふに佐用六叟諾感じて。然らば亦所望あり。我冢子佐用二郞と。和殿の令愛梭手童女と。目今親の心もて。結髮の夫婦に做さば。年久しく逢ふよしなくとも。親の契りを忘れずして。迭に所在を尋索めて。後竟に妹と夫の。緣しを結ぶともやあらん。この義誰何。と談ぜらる。己是をうち聞て。頭を掉りつゝ答るやう。开は由なきにあらねども。我思ふ義は爾らず。男女迭に稚きより。結髮の夫婦といふは。富貴舊家の上にこそあるべけれ。和殿と我は日蔭の花にて。兒子も一所不住なるに。今婚姻を定るとも。生涯環會ずもあらば。俱に徒に節義を守りて。娶らず嫁らであるべきや。縱年闌て。環會日のありとても。約莫男女の情緣は。稚き時と同じからず。迭に成人るに及びて。外に增花あるに至らば。俱に厭しく思ふべし。然る時は親をも怨る。其害

て。辛き浮世を不樂しらに。小芳宜の方に仕まつりて。武俊主の御往方を。悄々地に索まつれど。生死存亡を知るよしもなく。只憂かりける光陰のみ。立と早く十稔を歴にける。永正十五年の秋の時候。和殿の父大人故世叟。有一日咱等に譚ずるやう。屬日人の噂に聞くに。舊君太郎武俊君は。阿蘇山落城の初より。東國の方に世を避給ひて。近曾身故り給ひしとも聞え。或は猶存命て。をはしますともいへり。虚實詳ならねども。這里にて額をうち合て。徒に物を思はんより。咱等は宅眷を携て。京浪速いへばさらなり。關の東を巡歴りて。我君の御在所を。索奉らばやと思ふなり。然すれば和殿夫婦のみにて。小芳宜の方に給事して。衣食其餘の東西までも。調達しまつらんとは。いよ〳〵大義なるべけれども。光陰に關守あるとなければ。壯年の今思ひたゝで。氣力と倶に脚腰さへ。衰へぬる老後に至らば。千里の逆路を欲するとも。いかにして克せんや。この義を何と思ひ給ふ。と問れて己答るやう。行も住るも忠義の外なし。和殿は遠くこの地を去て。彼御所在を索ね奉り。咱等夫婦は留りて。夫人に仕へまつらんこそ。いはるゝ如く便宜ならめ。但老少不定なり。命の長短料りがたかり。一たび袂を分ちしより。迭に本意を遂ずして。後れ先だつ露の命の。他郷に終るとあらば。兒子等も幼抄し。親の喫りし其人を。知らず知られずなりもせば。忠心義膽埋れて。子孫の世にも知らざるべし。倶に紀を貼さん歟。といふに故世主感佩して。其義寔に爾るべし。紀は手跡に優す者なし。和

なば。我も間貫佐用六の。志に效ひてぞ。我君の御所在を。索巡るにしくヿあらじ。と竟に深念を定めしかば。當年纔に七歳になりける。女兒梭手を携て。啓行しぬる時。佐用六叟とは路を易て。先西の九箇國を。遺もなく遍歴しつゝ。南海四國に杖を曳に。日を重年を累るヿを厭はず。這里に三月那里に半年。我書を需る人の爲に。逗留してその潤筆を。盤纏に充ずといふヿなく。三四稔を歷ぬるまで。欲する所は我君の。御所在を渉獵れども。それとしるべき便なければ。更に東に赴さて。佐用六叟に環も會はゞ。商量敵になりもやせん。と思ふばかりに京師浪速に。旅宿しぬれど他も亦。何處に在るや知るよしなければ。遂に越路に杖を曳きて。越中越後いへばさらなり。加賀登能佐渡へも推渡りて。身の久後はえぞ知らぬ。出羽陸奧の盡處までも。漏す隈なき長旅に。又四五稔を歷ぬる程に。女兒梭手は年闌て。既に二八になる隨に。教ざれども縫刺の技。草書も拙なからず。書讀むことさへ好みしかば。逗留の程人に借りて。源氏宇津保竹採なんど。假字文章にもこゝろを得たり。然りとて浮たる本性ならず。第一親に孝順にて。容止も亦醜からねば。ゆく里毎に娶らまく。欲するもありしかど。我いかにして承引べき。或は亦逆路には。護摩の灰。人肉經紀など呼做されて。他鄉より來ぬる婦女子を。勾引しぬる盜兒あれば。そを守るをのみ勤にしたる。然らでも羇旅は憂きものなるに。姥捨山の月ならで。只梭手にのみ慰められて。去歲より信濃の山里に在り。今茲は上毛武藏より。常

ありて其利なし。是に因て。これを思へば。婚姻の事は議すべからず。といふに佐用六叟再議に及ばず。いはるゝ趣皆理あり。然らば自然に任せんとて。密談既に果しかば。當晩佐用六叟は。夫婦小芳宜の方の御前にまゐりて。主君の御所在を索まく欲しぬる。臆念を告稟して。身の暇を乞まつりしかば。小芳宜の方は禁めかねて。餘波を惜ませ給ふのみ。是時までも猶些の御貯祿ありければ。則餞別にとて。黄金幾枚歟賜りつ。彼身の暇を拿らせ給へば。佐用六叟は拜謝して。逆路の准備も密密に。其年の八月下旬に。宅眷を遺なく携て。東を投てぞ立去りける。是よりの後彼君に。仕へまつる者とては。我們夫婦のみなれば。艱苦八入に彌増て。心細くもありし程。小芳宜の方は年來の。御煩襟蘊りてや。その次の年の春の時候より。長き病痾に臥給ひて。鍼灸藥餌の驗なく。竟に神去り給ひしかば。我們夫婦の哀悼悲泣は。亦いふべうもあらずかし。却あるべきにあらざれば。御亡骸は潛やかに。程遠からぬ山院に。埋葬し奉れども。世に憚の多かれば。只その御墓表には。望夫石の三言を勒して。菩提を吊ひ奉る程に。幸なしとのみうち續きて。我妻音矢はその年の冬。時病の癪聚身に迫りて。黄なる泉に歸りしかば。命難面き我身のみ。春の雁の對を喪ひ。孤猻の枝に離しに異ならず。松の操も甲斐なきまでに。只呉竹の世を不樂て。慰る者とては。稚き女兒のみなれば。左さま右さま思惟るに。今は仕る君もなく。茲にて艱苦を淩んより。小芳宜の方と我妻音矢の。小祥忌を果し

禪院に密葬して。南忠主僕之墓といふ。六言を鐫做して。墓表にしたりといふ。其墳墓は今も猶。彼禪院の後の山にあり。先生ゆきて見給はゞ。紛れあるべうもあらずかし。是よりの後十稔を歷て。我二親は兒子を將て。この地に旅宿しつるをり。憶りなく彼秘事を。聞知ることを得てければ。其御先途に逢ざりしを。悔恨めどもせん術なし。切て舊君終焉の。この地に杖を駐めてこそ。兒子等が爲に我生涯の。謀を做すべけれとて。則玆に居宅をトて。武藝を人に敎えつゝ。身の生活にしてけるに。今戰國の習俗にて。里の總角牛打つ童も。武藝を嗜ざる者あるとなければ。その業大く行れて富にあらねど貧しくもあらず。世は倒に安かりき。と思ふにも似ず俺父は。這地に杖を住めしより。五稔といふ春三月の時候。嗜める酒に身を損れて。吐血して世を去りぬ。既に其終に臨て。俺佐用二郎を枕方に。招きよせつゝ遺言の條々。曩に肥後に在りし時。同僚なりける。防守氏と共侶に。武俊主の夫人なる。小芳宜の方に仕へまつりし。その事の首より。この地に來つる尾まで。絶なんとする息の下に。其崖略を說示して。且いへらく。俺身この地に住着し其比より。いかで舊里阿蘇山なる。防守筑四郎に消息して。舊君太郎武俊主は。この地に早逝し給ひにきと聞えたる。彼上の實說を。詳に告ばや。と思はざるにあらねども。いかにせん肥後の舊里は。其路二百十數里の。山と海とに隔絕す。況亂世の不自由なる。脚力郵書の便着なし。非如鴻便ありとても。世にも人にも憚りぬる。一大事

陸下總安房上總まで。尙我君の御隱宅を。索奉らまく思ひつゝ。三月の時候に那里を去て。料らずもこの白豬の驛路を。過るその日に時病發りて。逗留の程和殿の爲に。梭手を媒妁せられしより。迭に怨を結びつゝ。果は和睦の今に至りて。倶に素生を解諦せば。豈憶んや和殿は是。昔契りし我故朋輩。間貫佐用六故世叟の。冢子佐用二であらんとは。其二親は世にまさで我本意空になるに似たれど。親に優すべき弟兄に。名告逢しは尙憑もしく。歡びにこそ。といふ。過去來の長談脩話に。韓錦の佐用二郎は。胸を潰しつ且羞て。額の汗を拭ひもあへず。赧然たる頭を擡げて。嗟嘆に堪ず答るやう。思ひきや防守先生。貴老の忠義は我亡父に。十倍したる憂苦艱難。今はじめて聞くからに。我身を羞殺せられんとは。抑我親佐用六故世は。昔年肥後を辭去りて。京に一稔浪速に一稔。僑居して舊君の。所在を索奉りしに。毫も便を得ざりしかば。然らば東國に赴んとて。猶亦宅眷を携て。この地に來つゝ料らず聞くに。故の領主部領の郡領武彥主は。肥後の菊池と同族にて。數世の遠祖の時。東西に別れたりければ。世の人是を知者稀なり。然れば菊池武俊主は。昔永正六年の春の時候。阿蘇山の城沒落の後。一二の近習を從へて。この地に潜びていましゝに。時運竟に至らずして。それより纔に三稔の後。永正八年の夏の時候。那身時疫に犯されて。命空しくなり給ひしかば。兩箇の近習は殉腹斫て同枕に伏したりける。然ば當時由緣の者あり。彼主從の亡骸を。這白豬の驛盡處なる。阿蘇

に。親の身邊に側開せる。梭手は蚤くてゝろ得て。項に掛たる護身嚢の。括を開きつその短冊の。半分を出しつゝ。袂を拔きて親に遞與せば。季彥やをら受とりて。膝を找めて此彼兩箇のその短冊をうち合せて。見もし見らるゝ稀代の符契。佐用二郎が藏めしは。其短冊の上の方にて。遠つ人松浦。領巾麾りしより。と二行に讀れ。松煙齋の防守筑四郎季彥が出せるは。其短冊の下の方にて。佐用媛都麻戀に。負へる山の名。と亦是二行に讀れたる。是を合して吟ずれば。遠つ人松浦佐用媛都麻戀に。領巾麾かしより負へる山の名。と連續したる名歌の高調。そを寫しゝも能書にて。同筆同紙に疑ひなければ。韓錦の佐用二郎は。又縱に見つ横に見つ。奇なり奇なり。と駭嘆の外に詞はなかりける。當下防守季彥は。その短冊を故の如く。分ちて斂め斂めさせて。愀然たる貌を改め。佐用二郎にうち向ひて。遖候韓錦。和殿の孝義。虚しからねばこそ。相別れてより十二年。親の貽えし符契の短冊。料らず相合事を得たれ。かくいはゞ何とやらん。人を羨むに似たれども。大凡は人の命運に。遲速あり厚薄あり。和殿の爹々故世叟は。主君を索ねまつらんとて。小芳宜の方に餅棄しつ。宅眷を遺なく携て。故鄉を去りて草枕。旅に在ると久しからず。料らずもこの地に來て。舊君太郎武俊主の。世に在さゞりしを撈得て。其墳墓さへ見ることを得たり。是その時運の速さにあらずや。剰又兒子三名あり。兩箇は則男兒にて。親の家業を繼に足れり。其心術も推て知るべし。我身は他と同じからず。初故

なる。咱秘書を。人傳には遣しがたかり。汝このこゝろを得て。財用餘りある日もあらば。いかで故郷へ赴きて。彼方ざまを訪まつりて。防守夫婦に咱宿念を。云云と告よかし。遮莫汝が親に携られて。阿蘇の山里を去りにし比は。尚髫歳にてありしかば。年闌て防守叟に。名告逢まくしぬるとも。既に迭に面忘れて。疑るゝ事もあらん。其再會の照据には。我身袂を分つをり。筑四郎が書し古歌の短冊あり。其短冊を兩箇に裁て。その半分は我方に。藏めて今尚玆にあり。是を汝に渡すべし。護身囊に秘措きて。異日の用に達よかし。其半分は筑四郎が。必や秘藏するならん。かばかり正しき符契なければ。再會の折是を取出て。他に見せなば疑はざるべし。この餘の事は云云。と貴老の令愛梭手童女を。我等が爲に結髪の。約束せまく欲しゝに。貴老は敢承引ず。理りを演て推辭給ひし。その言の顚末まで。霜の朝に鳴く虫よりも。細れる聲を勵して。告示す者半晌許。其甲夜の間に呼吸絶にき。我身の不幸は是のみならで。母親も亦その次の年。癰てふ瘡の背に出きて。病といまだ久しからず。軈て空しくなりにけり。四月八日を忌日とす。二親共に阿蘇寺なる。舊君の墳墓の。頭にぞ葬りける。我身不肖にあなれども。是よりの後志を奬して。親の箕裘を承嗣て。武事力藝をもて人の師に。做り得て敢家聲を貶さず。侠を磨き氣を使ふて。後れを攬らじとのみ思ひしは。只是血氣の惑ひなりき。先彼符契を見せまつらん。といひつゝ肌膚囊を搔撈りて。彼短冊の半分を。拿出して引伸す程

鏘々たる。點燭時候になりにけり。當下韓錦の佐用二郎は。松煙齋季彦の。述懐を聞く間に。ひよく〳〵恥て擡難たる。頭を擧ていひけるやう。忠なる哉防守先生。貴老の行ひ終始錯はず。苦中の苦を喫しても。其志移らざりしは。和漢古昔の精忠義烈。彼賢哲にも恥ざるべし。是に就きても朽惜く。いひかひなきは我親なり。咱身彼子として。亡父の非を云云。と論ずべきにあらねども。今公道をもていふときは。其行ひ正しからず。是を貴老に比れば。雲と壤との差別あり。蓋咱父佐用六は。舊里に在りし時。主君の夫人小芳宜の方を。ふり捨て見かへらず。爾後這地に旅宿して。舊君逝去の實說を。聞くといへども殉死もせず。追腹斫たる彼兩箇の。近臣に及びがたくは。切て頭を剃圓めて。彼御菩提を吊ふべきに。然る志あるとなく。是より家を營みて。兒孫相續長久の。計に暇なかりしは。薄忠薄義といひつべし。當時俺身は童年にて。親の由來を備に知らねば。諫ざりしを憾とす。非如今親の爲に。其非を飾りて說嘴るとも。人をばよく欺くべく。寧天をば欺くべからず。後の世に是を知る者あらば。筆に載て必論ぜん。悲しい哉。俺身は親にだも及ばず。忠もなく孝もなし。前の日亡父の友に邂逅しながら。出處來歷。實名假名を。問も訂さでいかにぞや。威勢ある人の爲に。其女兒を妾にとて。媒妁したるを聽ねば。怒りて飽まで祟りたる。慢侮の罪は和睦の今。千言萬語をもて勸解るとも。鄙語にいふ屁放て後に。尻を含るに異ならぬ。俺身の臭氣を思はずは。恥を知らざ

郷に在りし時。小芳宜の方に仕まつりし。忠信節義の甲斐なきまでに。彼君御命長からで。世を去り給ひて幾程もなく。咱妻音矢も逝さしより。かへらぬ黄泉の客になりぬ。跡に遺るは幼少かりし。這個の女の子梭手のみ。外に資る男兒なければ。形なき身の遣る方なく。いかで主君の御隱宅を。索ね奉らばやと思ひつゝ。當日纔に七歳になりける。女兒梭手を携て。萬里の逆路に赴きしより。今に至りて八九年。憂苦艱難は。いふまでもあらず。是年今月這地に於。主君は既に世になき人の。數にしも入り給ひしを。只人傳に聞るのみ。思ひし事は畫餅に做りて。父女法師にならんのみ。是命運の薄きにあらずや。初俺。和殿の爹々に別るゝ時。再會の符契に代て。その短冊に寫したる。萬葉集の彼古歌は。間貫佐用六といひ。防守筑四といふ。迭の姓名に寓れるのみ。深き意味あるとならざりしを。今さら思へば以あるに似たり。何となれば。小芳宜の方の御憂死は。在昔松浦佐用媛が。良人大伴挾手彥を。戀慕のあまり。領巾麾りて。死して石に做りにきといふ。古俗の口碑に伯仲すべし。然ればにや彼御墓表に。望夫石の三言を。勒しゝは自然に似たり。況臣季彥等は。鰥にして稚き女兒を。逆路に伴ふ辛苦の折。故妻戀しと思はぬ時なく。女兒梭手が孝順なる。母を慕ふて泣ぬ日は稀なり。皆是逝てかへらぬ船の。跡なきを見て腸を。斷ばかりなる追慕憂哀。今昔人情同一致なる。抑亦奇ならずやと。過去來を諄復す。親の歎きに梭手さへ。慰難て鼻うちかまれ。心も倶に暮近き。入相の鐘

る隨に。いそぎて倶にかへり來て。韓錦の庭門より。找み入らまくしぬるをり。主人韓錦の佐用二郎は。松煙齋の防守筑四郎と。晤譚最細やかにて。迭に說つ說示さるゝ。彼舊里の事小芳宜の方の事。又短册の符契の事。菊池武俊の病死の事。又佐用二郎の父。間貫佐用六の薄義曲直。筑四郎季彥夫婦の。孤忠義膽の事の顚末。都蘊會話の。最中にてありければ。そを驚かさんはさすがにて。倶に小柴離笆の蔭に立在て。言の果るを俟程に。聞くとはなしに彼條々を。聞得て嘆賞感激に堪ず。猶开が儘にありけるに。主人韓錦の佐用二郎は。義理に迫り先非に羞て。自殺せんとて狂ひしを。松煙齋はいふもさらなり。八重作押繪等禁れども。止るべくもあらざれば。大江主僕は怺難て。立顯れつゝ母屋に入りて。諫制る兩聲烈しゝ。韓錦主狂ひなせそ。俺們方僅かへり來て。憶ずも彼秘事を。洩聞て感心の外ならず。よりて議すべきとてこそあれ。みづから血氣の勇を負みて。匹夫匹婦の溝瀆に。縊るゝに傚らへる歟。といはれて驚く佐用二郎は。憶はず拳を緩めしかば。通能透さず衝と寄て。刄を奪ふて八重作に。遞與せば押繪は鞘を拾ふて。斂めて开が儘携て。走りて奥へぞ退りける。然れば時八奈我四郎は。這時までも出後れて。次の間に潜みて居り。迭に聶き頷きて。裳を端折兩袖褰げて。螽の像く突然と。走出つゝ聲高やかに。大事を知たる大江峯張。覺悟をせよ。と叫びも果ず。左右一齊組んと競ふを。成勝と通能は。驚きながら毫も噪がず。倶に身を反し空を擊して。脚を飛して撲地と蹴

る者といはれん。知らぬ以前はすべもなし。今に至りて防守主。其身の孤忠。少女の孝順。言詳に聞知る上は。我身の罪こそ最重けれ。縦先生佛意をもて。俺罪戾を饒し給ふとも。俺何等の面目ありて。世にも人にも交參べき。是よりして弟子等も。疎みて從ふ者なくは。只胡慮に倣らんのみ。已なん〳〵。とばかりに。傍に措ける長中刀を。拿る手も蚤く引拔きて。肚を斫まくしてければ。季彥驚き推禁めて。こは何事ぞ。狂亂しつる歟。先その刄を放ちてよ。と詞急迫しく諫れば。梭手も倶に驚きながら。父の後方に引添ふたり。然ればとて佐用二郎は。止るべくもあらざれば。思ひ切たる聲震はして。防守主禁め給ふな。今我自殺は親の爲に。不忠の罪を贖ふべく。我僻事の遣方なさに。身を潔くせんと思へばなり。其首退ずや。と敦圉たる。猛威止るべくもあらざれば。次の間に竊聞したる。奈良櫻の佐之七と。押繪も倶に胸を潰して。手燭を秉りつゝ走り出て。やよ等給へ。と左右より。抓着抱縮めて。刄を奪拿まくすれども。佐用二郎は毫も撓まず。やをれ八重作禁るな。押繪も要なし怪我するな。と右手と脚を揮して。寄るを突退揮拂ふ。必死の覺期に八重作押繪は。力足らざるにあらねども。左右なく刄を奪難て。只爭ふのみ鎭めあへず。せん術なくぞ見えにける。爾程に。大江杜四郎成勝。峯張柒六郎通能は。嚮に田文の茂林邊にて。地藏堂へ詣んとて。一路人なる鷺森松煙齋父女と。主人樅二郎等に一霎時別れて。彼佛堂に赴きつ。拜みて其頭を看匝りつゝ。黃昏近くな

願あり。我乳名の佐用二郎は。父佐用六の俗稱を。取られたるにぞあらむずらん。なれども古昔の松浦佐用媛は。良人大伴挾手彦が。新羅征伐の將軍として。水路を彼國に赴くをり。佐用媛痛く戀慕ふて。死に至りしといふ貞女なり。文字こそ異なれ咱等父子も。廟字は即間貫にて。佐用六佐用二と喚做せども。忠もなく貞もなし。然るを彼名に摸擬せんは。恥を知らざる者に似たり。この故に氏を棄て。猶幾までも韓錦縦二郎といはれんこそ。後安くあるべけれ。俺弟八重作も。この意に倣ふて。間貫佐之七の。舊名を告るとなく。只奈良櫻八重作。と喚れんこそ。相應しからめ。こめ義甚麼。と談すれば。衆皆好と稱えたる。亓が中に成勝は。聞つゝ屢點頭て。以ある哉主人の用心。在昔孔子は盜泉を飲まず。曾子は勝母の里に入らずといふ。故事には表裏にて。恥て貞女の姓名を。避るは新奇といひつべし。是に就きても防守叟。賢老多年の精忠義胆。和漢の先哲時彦といふとも。よく及ぶ者稀なるべし。只舊君に見參の。素懐空しくなりしのみ。外に聞くだに痛しく。遺憾さのさぞかし。と慰められて筑四郎。梭手も倶に泫然と。坐に涙嗜みたる。折から八重作時八奈我四。手繰に運ぶ夕饌を。佐用二の縦二郎見かへりて。現鈍ましかりき。事に紛れて。夕飯遲滯に及びしかば。さぞ物欲しくをはすらめ。疎菜なれども。うち甘ぎて食給へ。押繪も出て給侍をせずや。といふに衆皆相謝して。儲の饌に就く程に。縦二郎は一霎時とて。辭して奧へぞ退りける。有右夕饌果しかば。四箇の客は。時

る。修練一對白打の精妙。時八と奈我四郎は。吐嗟と一聲叫びもあへず。身を轉して簷廊へ。仰反仆れて平張けり。當下主僕は化と睨へて。噫疎忽なり。兩箇の力士等。俺們料らず彼密話を。洩聞くとても交遊の。義に背き利に惑ふて。豈告訴する者ならんや。人を知らざる烏滸人かな。と兩聲高く窘れば。佐用二郎と八重作は。呆れて笑ひを忍びつゝ。時八等を叱懲して。爲に主僕に謝解しかば。成勝と通能は。含咲ながら坐を占て。しかいはるれば安堵たり。今の擬勢は戯れならん。といふ間に時八奈我四郎は。身を起し頭を敲きて。疎忽の罪を謝解にけり。是時既に日の暮しかば。八重作は時八等を。立しつ夜の儲をせんとて。倶に庖厨へ退る程に。押繪は行燈引提來て。四下を照しつ且主僕に。無異の歡ひを舒るにぞ。成勝と通能も。押繪等を勞ふて。更に縱二郎に向ひていふやう。韓錦主。和殿の一義は。俺們明日まで預るべし。退りて休息し給はずや。といはれて佐用二郎羞たる色あり。膝組直して答るやう。在下自殺を欲しゝは。實に短慮に似たれども。防守叟の孤忠を聞ては。親の爲身の爲に。いひ解べき詞なし。然れども自殺を允されずば。この年來の俠を捨て。桑門にならんのみ。といふを筑四郎推禁めて。そも亦血氣の惑ひならん。和郎は舊君武俊に仕へしにあらず。彼君既に世を去り給はゞ。孰が爲にか忠義を盡さん。只世と共に推移りて。身を保つをこそ孝とはいはめ。この義を思ひ給はずや。と說れて佐用二郎沈吟じて。點頭つゝ答るやう。諸君の意見感服せり。然らば亦情

は俺謬て。郡司殿に悪れて。彼少女を妾に。媒妁せまく欲しゝに。その事成るべくもあらざれば。怒に乗して祟たる。彼條の崖略は。殿も聞知りてをはするならん。然るを恩怨地を易て。和睦したるのみならず。彼父女を俺家に。留め在らする今に至りて。その故よしを云云と。殿に告稟さずは。俺身必怨られん。只明々地に稟すにかじ。と尋思をしつゝ八重作押繪等。大江峯張にも意衷を示して。事の利害を問けるに。孰とて異議する者もなく。然るべし。と應しかば。縦二郎こゝろ決して。次の日の早旦より。梳髮させ衣裳を整へて。當郡の領主なりける鏑野郡司範的の。舘に單赴きて。隨即拜見を乞けるに。俟と約半晌許。遂に喚入れて對面せらる。是時範的の左右には。最苛めしき兩箇の近習。縦二郎を尻目にかけて。只是等のみ侍りたり。然れば韓錦縦二郎は。範的に見参して。寒暖を舒無異を祝して。彼一義を告まくするに。範的はその言の果るを俟たず。勃然たる聲震立て。縦二郎近く找みね。汝は憑み甲斐なき者なり。我日頃より汝をもて。懐刀子と思へばこそ。曩には最いひがたき。とをしもうち出して。彼媒妁を委ねたれ。然れども汝が力にて。その事成らずはさて已なん。爾るを何ぞや彼少女を。悄地に宿所に引入れて。娶りて相愛するは。言語同斷といひつべし。其事風聞隱れなきに。我は知らずと思ふやらん。今さら何の面目ありて。詣來て虎威を犯さまくするや。取るよしもなき檻尬兒なりき。といはれて縦二郎阿容たる色なく。頭を擡げて答るやう。亓は御諚で候へど

八等に。案内せられて迭代に。浴室に入りて浴する程に。既に初更は過ぬべし。昨宵は多く不睡にて。主客の疲勞一人なれば。押繪は奈我四郎等に指揮して。爲に臥簟を儲しかば。各枕に就きにける。其詰朝筑四郎季彦は。早飯を果すと聽て。單阿蘇寺に詣て。舊君菊地武俊の墳墓に拜謁して。香華を賻けて廻向の程。思ひし事を諄復す。懷舊の涙に堪ず。這日當寺の住持を訪ふに。即出て對面せらる。聞くに當寺の先住は。素是肥後の人氏にて。在俗の日菊池生に舊縁あり。武俊阿蘇山を沒落の後。この寺に來て潛居しけるも。是等の由縁あればなり。然れば現住閑廂和尚は。即先住の後弟にて。尚古の老實人なりければ。季彦一話を交へしより。迭に捨がたきこゝろあり。是より後も季彦は。父女この地に逗留の程。日毎に阿蘇寺に詣るを。彼身の務にしたりける。間話休題。韓錦樅二郎は。季彦梭手等を相迎へて。宿所に留めし次の日に。些の酒肉を調理して。大江主僕共侶に。酒盃を遣匝して。いよゝ交遊の義を。固うせまく思ふ程に。韓錦の弟子等は。早く彼顛末を傳聞て。故人珍客逗留の。歡びを表するとて。東西を贈るも多かりける。幵が中に聞僻めて。韓錦が彼少女を。娶りしとて。その壽祝を。致す者さへありしかば。樅二郎うち笑ひて。そは傳聞の錯誤なり。俺は夫を娶りしとあらず。その壽祝は要なしとて。推辭て敢受ざれども。猶生憎に賀する者。日毎に間斷あるとなければ。憶ずも日を費して。四月も下旬になりにけり。當下韓錦樅二郎は。單肚裏に思ふやう。曩に

て。鬼薊苛三屈簗。鍼持隈八刺高と喚做して。武藝筋力一人當千。倶に一方の旗頭に。做すとも要ある者なれば。扇谷殿朝興をいふに傭れて。年來河鍮の城に在り。昨今其役果しかば。倶にかへり來て。又咱等に扈從す。やよ相識になりねかし。といはれて苛三隈八は。其方に膝を推向て。豫聞えし韓錦。和郎再生の御恩報じに。一術我們に敎ずや。と誇るを範的うち聞て。开は一段興あるべし。この夏の日のいと長きに。手を空しくやは銷すべき。我等一覽せまく欲す。やよとく〳〵。と促せども。縱二郎は從はず。莞爾と笑つゝ答るやう。御諚承り候へども。勝負は時の御合にて。弱きも強きに勝とあり。怨を結ぶ媒なれば。御敵手は望しからず。況所挾這御坐席にて。擊劍角觝は不便なり。猶又折も候はん。今日は允させ給へかし。といはせも果ず範的は。眼を瞬り聲苛立て。そは鄙怯なり和郎には似げなし。他等兩箇を見貶して。敵手に足らずと思へる歟。最烏滸なり。と怨ずれば。縱二郎辭するによしなゝ。しからんには是非に及はず。何まれ仰付られよ。といふを苛三うち聞て。坐席の試擊は種々あり。遮莫腕推枕曳は。小兒の戲に似たるべし。只坐角力こそしかるべけれ。といふに隈八も找み出て。鬼薊且等ね我們は兩箇にて。韓錦は身單なり。然ればとて他一箇に。二人蒐りは勝ても恥なり。年齡役なれば鬼薊和殿揉一揉給へ。咱等は行司を仕ん。この義甚麼。と啓すれば。範的聞つゝうち笑て。隈八が言寔に理あり。はやくせずや。といそがして。軈て席を改れば。苛三と縱二郎

も。小可何等の故をもて。彼少女を娶るべき。知らざる者の推量をもて。然る風聞を做すにやあらん。抑事の着實は。箇様々々に候とて。初縦二郎が怒に乘して。彼父女を逐し時。彼等は歹人に跟られて。行李も盤纏も喪ひしと。立合阪に露宿の事。その崖略を演説して。且いふやう。その比彼父女を憐ぶ者あり。小可を非分として。寛解て和睦を執結するに及びて。彼等が素生を問考るに。思はざりけり彼少女の親は。我父佐用六の故友にて。昔故郷に在りし時。莫逆無二のよしも知られ。又彼少女は稚き時。結髪の良人あり。相別しより往方を知らねば。そが所在を索んとて。廻國しぬる者なれば。有繋にうちも措がたさに。姑且我家に止宿を許して。盤纏を取らせてその投す方に。出し遣らまく思ひ候のみ。彼等が御意に從はで。艱苦をだに厭はざりしは。素より彼少女子に。結髪の良人あればなり。この義を稟し上んとて。推參仕り候ひき。といはせも果ず範的は。呵々と冷笑ひて。口は横に裂たりとて。いへばよくいはるるものかな。非除子貢の辯舌をもて。火を水にいひ做すとも。孰かそれを實言と聞くべき。公達たる事ならば。虚實を正すべけれども。始をいへば俺も亦。面正しくもなきことなれば。這回は枉て饒しもせん。以後を信と愼みね。といふに件の兩箇の近習は。共侶に額を衝て。今にはじめぬ寛仁御大度。他が頭を續れしは。こよなき御恩に候。と執合すれば範的は。然もこそあらめと頷きつゝ。縦二郎にうち向ひて。やをれ韓錦汝はいまだ知らざる歟。他等は我股肱に

ち。覗観る者多かりしに。思ふにも似ず興醒て。呆惑ふてありしかば。今縦二郎が出でゆくを。見るといへども送りもせず。他が在らずなりし時。衆皆慌忙きつゝ。齊一庭に走下て。仆れし苛三隈八を。扶起しつ勦りて。肩に引被て出にけり。是なん鏑野範的が。韓錦縦二郎に怨を累ねて。遣る方もなくやありけん。後竟に奸計をもて。彼身を辜に陥れぬる。是其事の原なりけり。畢竟苛三隈八が。韓錦に投懲されて。後の話説甚麼ぞや。幵は又卷を更めて。且下回に解分るを聴ねかし。

新局玉石童子訓卷之二十三　終

は。程よき處に退きて。迭に袖を褰身を構へ。膝を合して組まくす。當下鍼持隈八は。扇を颯と推啓き。その身を斜に隻膝立て。間を隔る角觝の作法。一霎時呼吸を覘ふて。ヤと曳く扇と共侶に。苛三は嵩より蒐りて。蚤く利手を捉らまくするを。縱二郎は毫も透さず。振拂ひ遣違して。推つ推れつ疲勞を俟ば。苛三は斜れるが像く。眼眩みて術なげなるを。縱二郎は程こそよけれ。と猿臂を伸し項上抓て。弱腰瓅と撲惱す。力士の剽遶。暴猊の。毬を弄ぶに異ならず。苛三は吐嗟とばかり。三間あまり投蜚されて。彼身は庭の巻石に。額を拓し血を流して。死活も知らず仆れしかば。倶に驚く鍼持隈八。見るに得堪ず韓錦を。擊んと憢る身を起す時。取る手も蚤く腰刀を。拔まくするを縱二郎は。居つゝ腕を搾して。臂を禁めて刄を拔せず。怯むを得たり。と向脛拂て。仆るゝ所を突蜚せば。何かは一霎時も溜べき。隈八も亦庭面へ。身を放下されて苛三が。仆れし上に伏累りて。起も得遣らず蠢きけり。然る程に範的は。今這事の光景に。舌を吐き直と呆れて。面赧やかに醉るが像く。只憤恨胸に盈て。ものいふべくもあらざりしを。縱二郎はさもこそ。と思ふこゝろを色にも出さず。衽搔合して恭しく。範的にうち向ひて。御所望實に默止がたくて。酷く無禮を仕りぬ。既に御用の果たれば。身の暇を給はるべし。異日見參仕らめ。と告別しつ身を起して。後門を投て退出けり。是時郡司が家の。若黨小厮幾名歟。彼居角觝の勝負を見んとて。次の間にうち障合て。障子に唾して穴を穿

んのみ。といふを八重作推禁めて。翁然のみな惴り給ひそ。鏑野殿の疑ひは。我兄の美女を娶りしなんど。あらぬ事をいひもて徇し丶。人の虚談を信容たる。惑ひにこそありつらめ。そは素よりなき事なれば。いひ解ずとも疑ひの。霧は一霎時の程にして。必霽る時あらん。然ばかり怕る丶とかは。といふを季彦推返して。賢弟の言は。己を知りて。人を知らざるに庶からずや。今の世の人心。錦の衾に毒石を。裹るも是多かり。彼人本意を遂ざれば。嫉く思ふて我女兒を。奪略まく欲せん歟。是も亦知るべからず。开を思はずに假の宿を。惜みて身さへ人をしも。危くせんは思慮なきに似たり。只速に去んのみ。といへば成勝。然なりと應へて。防守主の遠慮定に故あり。實に去らまく思ひ給はゞ。我舊里へ赴き給へ。安藝の治比は路遠けれども。翁の故郷も西の天。肥後の阿蘇へも便路なり。といへば通能も倶にいふやう。亦只治比のみならず。津國住吉の邊には。我兄十三屋九四郎の櫛舗あり。先那里まで赴き給はゞ。然ばかりの資助はあらん。といふを縱二郎うち聞て。そも皆便宜なるべけれども。今は病後の老先生に。脚小をしも伴はせて。遠く出し遣るべくもあらず。當國妙義山の麓路に。和田十郎正忠と喚做したる。一箇の郷士あり。在昔南朝の北畠明徽入道。彼山に隱れ給ひしより。遖山の名に呼しを。後に妙義に改めたり。彼正忠は楠氏の一族。其大父の時にやありけん。明徽法師に從ひて。當國に移住しより。今猶那里の郷士たり。家に兵法七書を傳へて。よく其奧義を極め

新局玉石童子訓巻之二十四

東都　曲亭主人口授編次

第五十四回　渾不似を辨して防守宿を移す　小雪太名を竊て巧に悪を資く

却説韓錦縦二郎は。當日鏑野郡司範的の。第よりかへり來にければ。季彦八重作等出迎へて。那里の首尾ぞ請問ふに。縦二郎答て。その義に就きては。話説多かり。大江峯張雨君子の。意見をも聞くべしとて。軈て閑室に招き集へて。嚮に鏑野範的が。縦二郎に對面のをり。他がいひつるヿの顛末。並に鬼薊苛三。鍼持隈八の爲体。且坐角力のヿまでも。遺なく告て亦いふやう。彼刀禰は左に右に。梭手少女のヿに就きて。人の虚談を信容けん。咱等を疑ふ心あり。なれども件の一條は。情慾の遺恨のみ。公達の事ならねば。陽には明々地にいはれねども。肚裏は料りがたかり。然るを尙思はずに。梭手少女を我家に。この儘留め在らせんは。後安からざる所あり。この義甚麼と譚ずるを。季彦聞つゝ答ていふやう。現彼人の腹黒き。始をもて今を思ふに。我們父女の事に就きて。主人に祟りあらせなば。後悔玆に達がたけん。只速に去

て來つ。兄縱二郎に向ひていふやう。いぬる日おん身が立合阪より。賓客達を伴ふて。かへり來ましその折に。彼轎夫等が茶店の嫗に。憑れたりとてこの樂器を。空轎にうち載て。もて來てよしを云々。と告て奴家に遞與ましかども。その折は事繁くて。おん身に告るに暇なければ。そが儘架棚へ藏め置しを。うち忘れたる鈍ましさよ。然るを方僅この團坐の。商量を洩聞しより。同胞にしも異ならぬ。梭手少女を留めかねたる。餘波を惜む心から。この樂器のとをしも。思ひ出てもてまゐりにき。今日に及びし等閑の。罪を饒させ給ひね。といひつゝ遞與す渾不似を。縱二郎受拿りて。そは急ぐべき物ならねども。今日まで咱等に告ざりしは。念人過たる等閑ならずや。以後を吃と愼みね。と叱りつ呵々とうち笑ひて。喃防守先生。おん身いぬる日立合阪にて。這渾不似と喚いふ樂器を。彼茶店に貽置て。立去り給ひし开が迹にて。咱等云々と聞知りて。世に珍しき這渾不似は。おん身の所藏なりけるを。這那人の認りたらんに。其頭にうち棄措れなば。おん身のみかは我恥なり。と思ひにければ茶店の嫗に。然ばかりの錢を拿らせて。とり復してもて來にき。亦復旅宿の慰種に。做し給はずや。と說示しつゝ。指出す渾不似を。季彥やをら受拿りて。开は又思ひかけざりき。主人の用心謝するに堪たり。這渾不似はいぬる比。我身この驛の客店に逗留のをり。料らずも見出して。購求めたりしより。禍鬼父女の身に縈縁りて。終に這渾不似をもて。袖乞しぬるまでになりしを。後に思へば名詮

たれども。諸家の招きに應ずるとなく。淸貧をもて樂とせり。小可妙義榛名へ詣る毎に。必那里を宿にして。一たび交りを結しより。倶に斷金の契あり。先生遠く思慮りて令愛と共侶に。宿りを換まく思ひ給はゞ。いかで那里へ赴き給へ。郷導には我弟。八重作をまいらすべし。この義に任せ給へかし。といはれて季彥沈吟じて。舊君世を去り給ひては。憑しからぬ世間に難面きものは命にて。猶人さまの阨會に。なりぬる上は進退を。已が隨意擇むは要なし。左にも右にも計せ給へ。といふに縱二郎歡びて。這里と那里は同國なれども。鏑野殿の采地ならねば。是安身の一にて。絕ず安否を訪んも易かり。畢竟這里に置まゐらするに。殊なるべくもあらずかし。といひ慰むれば成勝も。含笑ながら通能と。面を注して倶にいふやう。爾らんには我們も。妙義榛名へ參詣がてら。その和田生を訪まく欲す。倶に紹介を願ふ而已。といふに縱二郎苦笑して。兩君子には障りもなきに。などてや遽くふり捨て。倶にいなんといはるゝやらん。いと本意なし。と呟くを。季彥然こそと慰めて。一議旣に定る上は。梭手をも召よせてこゝろ得させ候はん。梭手梭手と呼よする。聲より先に應をしぬる。梭手は旣に次の間に居り。こゝろ得貌に出て來ぬるを。季彥猶も喚近つけて。儞那里に在たらば。衆議の趣を聞つらん明日は宿りを易まく欲す。そも皆主人の好意によれり。宜く禮を稟しね。といふに梭手は應をしつゝ。縱二郎等にうち向ひて。その歡びを演る程に。押繪は渾不似を携て。納戸の方より出

藏め措ね。といひつゝ渡せばこゝろを得たる。押繪は袖に抱きつゝ。軈て納戸へ退りける。然ばこの後一郷の。擾亂對治しぬるに及びて。縱二郎は彼渾不似を。いひつる如く阿雉寺へ。埋めて四絃七言の。表を石に遺しける。こは是後の話說なり。却說杜四郎成勝は。通能と共侶に件の問答をうち聞て。好と稱て且いふやう。防守叟の辯論も。亦主人の主張も。各其本據あり。只本據なき者は。我們主僕の去向のみ。前にも旣にいひけらし。明日は夙めて防守主等と俱に妙義へゆかまく欲す。この義を饒し給ひね。といはれて縱二郎歎ばず。沈吟じつゝ答ていふやう。兩賢兄いかなれば。早く去まく欲し給ふぞ。切て一年五六月。敎を受まく思ひしに。そは情なし。と怨ずれば。成勝笑つゝ諭していふやう。否とよ去向を急ぐにあらず。彼和田生の人と成りを。聞得てよく是を思ふに。开も一人物にぞあらんずらむ。早く對面せまく欲す。其頭の所要を果しなば。かへり來るともけしうはあらず。明日を涯りの別れならんや。怨らるるとかは。と解れて縱二郎笑しげに。爾らんには安堵たり。就きて亦情願あり。兩賢兄の仙丹は。效驗已も知る所。いかで少許賜らば。白打角力の上に就きて。未然の怪我を防べし。いかで〳〵。と乞求れば。季彥と八重作も。共侶に稱賛して。彼仙丹の神妙なる。已等が身に取りて。起死再生といひつべし。角力白打を嗜者。貯祿て身を放さずば。人を救ひ已を救ふ。神佛の擁護にも。優て憑しかりぬべし。と譽れば縱二郎然なりと答て。已彼仙丹を。聊なりと

自性。この渾不似を和訓に讀ば。即すべてにざるなり。はじめ我是をもて。然しも旅宿の徒然を。慰めばや。と思ひける。初一念には渾不似。亦只この事のみならで。はじめ彼媒妁兒を。只憎しとのみ思ひたる。初一念には渾不似。再會のをり問考ふれば。其人は我故朋輩ゝ間貫叟の冢子にて。親族にも優す資助に遇へり。然れば又。我は稚き女兒を將て。故郷を惑ひ出しより。八九稔を歷ぬるまで。只舊君の御隱宅を。索ね巡りし忠心の。移らざるには渾不似。玆に逝去の迹に來て。其墳墓を拜するのみ。身の遣る方のなくなりしを。主人の節義に慰められて。猶逗留してふりにし事を。語盡さばやと思ひたる。迭の誠心には渾不似。亦料らざる障り出來て。他所に宿りを換るに至れり。猶數まへなばこの外にも。渾不似の事多くあらん。是等を思へば這樂器は。凶多くして吉寡し。そを思はずに弄ばゝ。恥を知らざる者とやいはれん。只うち折て棄んのみ。といひつゝそが儘搔遣るを。椛二郎は左右なく拿らず。感嘆しつゝ且いふやう。先生の意見理なれども。約莫事の齟齬しぬるは時運にして。この樂器の故にはあらずなれども渾不似といふ名を憎み給はゞ。こは阿遯禪院の。彼後の山に瘞めて。仁義忠孝四絃の。表を後に遺しなば。先生父女の忠孝はさらなり。大江峯張の仁と義と。かくいふ望洋等に至まで。その志亡親に。渾不似の義をしも。是に由て此を思はゞ。百稔の後といふとも。必知音あるべからん。咱等に任せ給ひね。と說諭しつゝ渾不似を。やをら曳よせ拿抗て。押繪是よく

素よりこの送別を。秘して人に告ざりければ。生平に來ぬる四隣の家々等すら。日を經ぬるまで知らざりけり。案下某生重說。曾根見伍六郎健宗の奴隷小雪太は。往る四月下浣の時候。美濃國野上の驛にて。主の伍六健宗が。遊興の爲に逗留の程。彼身は酷く醉臥して。覺べくもあらぬ其夜艾。彼九十餘金はさらなり。衣物兩刀鼻紙囊。窓井の方の健宗に。贈りたりける短刀まで。遺もなく竊拿て。逐電して走る程に。天は明なんとしぬる時候。一箇の大漢に撞見して。蹴られて氣絕したりける。そのとの光景は。前版第四十九回に。出たれば。看官承知の事ならんを。今又具にすべくもあらず。然る程に小雪太は。其頭を過る馬奴に。呼活られて忽然と。我に復りて四下を見るに。彼大漢は逃亡けん。腰に帶たる兩刀はさらなり。懷にしたる財嚢の金も。搭駝ふたりける袱包も。奪略られてあることなければ。且呆れ且憂悶えて。後悔茲に達よしもなく。頭を低れ手を叉き。忙然たること半晌許。いまだ計の出る所を知らず。なれども猶幸ひに。身に着たる夾衣二許と。帶と汗衫は剝略られず。又彼短刀は。始腰に餘るの故に。懷刺にしたりしかば。是等も略殘されて。故の儘にてあり。是に聊慰めて。猶略殘されし物やあるとて。身を起しつゝ其頭を涉獵るに。後方五六間許なる夏草の中に。彼鼻紙嚢捨てあり。我物得つ。と拿抗見るに。這裏にも小出の金。二三分はありけるに。其は女才なく奪略けん。只彼窓井の方の。上野なる娘前に贈る。一封の書翰ありければ。天の與とう

も得たらんには。不斷この身を放つとなく。角力の場に蒞日は。裸体の準備に最小なる。貝に移して髻の裏に。藏めてもて急用に充ん。兩賢兄饒し給はずや。と乞れて成勝通能は。異議なく倶に答ていふやう。この仙丹はいぬる比より。身にも人にも施したれば。今は多からずなりぬれども。莫逆知巳の主人の爲に。いかでか惜むべき。目今分ちてまゐらせん。といひつゝ各腰を探りて。彼藥籠をとり出せば。縦二郎は歡びに堪ず。遽しく身を起して。袋戸架を開き見るに。黑漆にして小形なる。一箇の香盒ありければ。是よかンなん。と拿出て。大江峯張の分ち與ふる。彼仙丹を受得ぬる。歡び氣色に見れて。千謝萬謝も猶足らぬ。這兩主僕の仁術を。連りに稱て巳ざりける。然ればこの後縦二郎は。其仙丹を身に放さず。事ありて他へ出る日は。必最小なる貝に移しつ。是を頭髻の裏に藏めて。人には絕て知らせざりけり。間話休題。蓋季彦梭手等の。猛可に宿りを移すよしは。未然の危殃を禦ぐ爲なれば。一日も早きを好とすべしとて。成勝と通能が。只管に薦る隨意。縦二郎は彼父女子の爲に。雨衣脚袢笠草鞋まで。準備せずといふものなく。且那里に逗留の程。盤纏なども宜くものして。八重作をもて送らせけり。然ればその次の日の旦未明に。成勝通能も一路人にて。皆共侶に立出る程に。季彦梭手は主人胞兄弟に。歡びを演恩義を謝して。盡ぬ詞の开が中に。押繪は梭手と別を惜みて。今よりの後秋冬の。衣はそのをり〳〵に。必贈りまゐらすべしとて。いと叮嚀に契るも果敢なし。

方の。寄まゐらする書翰玆に在り。その他正しき證据あれども。人傳には遞與がたかり。在下今恥を忍びて。身單にして來ぬるよしは。言一朝に盡すべくもあらず悄地に對面を願ふのみ。といふに老僕はこゝろ得果て。然らばいはるゝ趣を。備に御前に聞え上ん。姑且俟せ給ひね。と應て聽て奥へ退りて。又遽しく出て來つ。小雪太にうち向ひて。和殿の稟さるゝ趣を。主君御母子に聞え上しに。對面せんと宣ふなり。卒這方へと先に立て。庖湢門より案内をしつゝ二間歟三間隔たる。褊室に倶してゆきしかば。當家の老母大刀自は。其子範的と共侶に。既に上坐に居り。小雪太が來ぬるを見て。贋物なりとは夢にも知らず。色白くして優像なる。十六七の青年兒なれば。毫も疑ふこゝろなく。是へ〳〵。と招き寄すれば。小雪太は阿とばかりに。遙に膝行頓首して。頭を擡げ得ざりしを。老僕がやよ疾那方へ。と連りに請ふて已ざれば。小雪太はやうやくに。にじり入りつゝ席に就きて。大刀自親子を三拜しつ。寒暖を陳。恙なきを祝すれば。大刀自は涙漣て。誠に思ひかけざりき。今日伍六郎に訪れんとは。曾根見は觀音寺殿の權臣にて。女兒の窓井共侶に。主君の覺淺からず。秩祿も亦匱しからず。と豫聞しには似るべくもなき。いと窶々しき身單にて。來ぬるは必故あらん。少年輩の習俗にて。淺妻船の淺ましき。戀にその身を果せし歟。秘さず告よ。甚麼ぞや。と問れて小雪太羞介に。踧然として答るやう。否。然る浮たるとにはあらず。主人公も聞召れよ。扨も本月初旬。意外の禍鬼

ち載きて。蚤く懐に挾めつゝ。地方の人にや怪められん。追隊の覔る事もやあらん。と思へば捷徑を討めてぞ。東を投て走る程に。彼鼻紙嚢を售なぞして。錢四五百を得てければ。敢亦饑もせず。當晩宿りを投めし客店にて。逆旅主人にいひ哄へて。日属巳が被たりける。臺床唐二の爽衣と。汗衫さへ沽却して。些の盤纏のいで來しかば。又膽太くも計較あり。毒を喫はゞ碟子まで。と世話にもいへばいかで我。上野白豬に赴きて。彼鏑野の大刀自親子を。旨く哄して盤纏の金を。甘乞出して他郷へ走らば。我生涯は安かるべし。嗚呼爾なり。と肚裏に。悪念いよ〳〵巳時なく。是より連りに路次をいそぎて。ゆくと只一日ならず。四月も纔になりし時候。鏑野郡司範的の。第宅に早く索ね來て。却執接の青侍に就きていふやう。巳は當家の外戚にて。事ありて近江なる。觀音寺より來ぬる者なり。大刀自御前は恙まさずや。いかで拜見せまく欲す。このよし稟し給ひね。といふに青侍こゝろ得て。そが儘奥へ退りしを。俟と約莫半晌許。這回は亦其人易りて。一箇の老僕出て來つ。小雪太を左見右見て。和殿近江の觀音寺より。來ぬるとばかりいはれては。こゝろ得がたくこそ候へ。姓名來歴詳に。問へと御前の仰なり。咱等に稟し聞けられよ。といはれて小雪太阿容たる色なく。然ン候在下は。大刀自御前の侄なりける。曾根見五郎平宗玄の弟にて。伍六郎健宗是なり。當家の親族なるものから。路遠ければ一たびも。いまだ對面致さねども。名告まうせば立地に。おん疑ひは解ぬべし。況我女兒窓井の

窓井には。いまだ對面せざれども。年毎に雁の翅に。寄られし書翰今も猶。藏めて文匣の裏に在り。我よく認れる手跡なれば。いよゝ疑ひを解くに足れり。是見給へ。とて其二種を。遺與せば。範的得と見て。寔に奶々の宣ふ如し。聞くが如きは高頼の。賞罰錯亂笑ふに堪たり。古語にいはずや。良禽は樹を擇て栖み。賢者は君を擇て仕ふ。爾る闇君に仕ずなりしは。伍六和殿の幸ひなり。宗玄の陣歿は。今さら惜めどもその甲斐なし。健宗に訪れしは。一臂の資を得たるが如し。我に弟兄あるとなければ。今日より小弟と思はなん。幾までも茲に居て。我を資よ。然もなくは。良主を擇て仕させん。奶々然は思さずや。といひ慰れば大刀自は。笑つゝ屢點頭て。そは歡しき事になん。侄は猶子の如し。といふよしありと歟聞ぬれば。いかで歟憎う思ふべき。然るを這身の皮では。一家兒なる。老黨奴婢まで。相貶て侮るべし。宜しく計ひ給ひね。といふに範的應をしつゝ。掌鳴して納婦を召て。事云云と吩咐れば。納婢はこゝろ得退きて。程しもあらず夾衣と。外套袴と兩刀を。廣蓋に載てもて來にければ。範的は是を見て。小雪太に向ひていふやう。和殿は長途の疲勞もあるべし。先客房に退きて。宜しく衣裳を更めて。隨意休息し給へかし。といふに小雪太意外の歡び。手の舞足の踏む所を知ず。その賜ものを受戴きて。退んとしぬる時。範的は又納婢にいふやう。若等はいまだ知らざるべし。他は近江より訪來ぬる。我弟に等しき者なり。婢毎にもいひ次て。等閑にな欵待しそ。旣

起りしより。兄宗玄は七鹿山にて。同士撃して陣歿したり。在下も亦冤屈の罪にて。久しく獄舎に繋れしを。僅に女兄の資助を得て。追放せられ候ひき。首をいへば箇様箇様。尾は亦如此如此なりとて。長橋象船兩近習の事。大江峯張主僕の事。高嶋石見介の事までも。宗玄健宗の身に於て。有つる始末に虚實を交へて。說訖りて又いふやう。兄宗玄の陣歿は。貳こゝろある奴們を。芟除まく欲したる。忠義なれども高嶋等に。いひ掠られてその事聞えず。竟に非分にせられしかば。在下いよ〱怨に堪ず。いかで高嶋石見介を。撃て彼冤を。解まく思ひしも身單にて。外に援の兵なければ。却て敵に搦捕れて。又誣られて亂妨の。罪最重しと定められ。竟に追放せられたり。皆是老黨多賀典膳と。一口鬼太夫等が。石見介に荷擔したる。最屓の沙汰に成るものから。我君不明にして曉給はず。我女兄諫諭稟せど。其甲斐なきを爭何はせん。然れば我身近江を去るをり。女兄窓井の密便をもて。衣裳短刀些ばかりの。盤纏を贈賜りしかば。辛くして只一個。今日しも這里へ來ぬるとを得たり。先はや是を御覽せよ。といひつゝ窓井の書翰一通と。彼短刀を兩手に捧て。膝を找めて呈閱しぬれば。範的はいふもさらなり。大刀自は聞くと毎に。或は怒り或は哀む。嘆息の聲を得たゝず。先其書翰の封皮を拆きて讀見ると二三遍。又短刀を拿抗て。現この一刀は。曩に我良人の身故り給ひし時。姪の窓井に紀念にとて。贈遺しける物なれば。然しも意を用ひられけん。かばかり正しき照据はなし。且

雪太を喚近つけて。近江の事を問試み。或は四表八表の。話説させて是を聞くに。小雪太素より口才あり。智計も有介に聞えしかば。範的漫に愛歡びて。いと憑しく思ひけり。左右する程に。端午の佳節になりぬ。この日は朝より午過るまで。鏑野の家例にて。種々の祝儀あり。既にしてその事果たる。未の時候より範的は。菖蒲酒を酌んとて。南向の小書院に居り。小雪太を上客にて。鬼薊苛三屈變。鍼持隈八刺高等を侍らせて。酒盃をずん流す程に。主從齊一笑局に入りて。千春萬秋とぞ祝しける。丼が中に範的は。單猛可に嘆息しつゝ。一聲呀と叫びしかば。小雪太等うち驚きて。その故を請問ふに。範的は額を押て。愀然として答ていふやう我已がたき遺恨あり。なれども我威勢をもて。恨を報ふによしなきは。其事情慾に起ばなり。この故に鬱憤の。遣る方なくて色にも出けん。憶ず嘆息しぬるなり。といふに小雪太點頭て何事やらんと思ひ候ひしに。然ばかりの義に御心を。苦しめ給ふは大人氣なし。非如領主の威勢もて。報ひがたき怨なりとも。計策を旋らさば。情慾も亦憚る事なく。公道を借て拉ぐに。何でふ手の隙沒るべきや。その情由仰聞られよ。といはれて範的笑介に。そは憑しき事なりき。なれども我口親。うち出さんは面伏なり。苛三と隈八は。始りよして彼顚末を。都承知の者なるに。我爲に說示さずや。といふに苛三と隈八は。應をしつゝ共侶に。小雪太に告ていふやう。近江の郎君聞召れよ。當主君の遺恨の條々。箇樣箇樣に候とて。始鏑野範的が。旅宿の處女榛

に東西欲しき時候なるべし。庖丁兒に吩咐て。夕饌の儲をいそぎね。先客房に案内をせずや。といふに納婢は。こゝ得果て。又廣蓋を兩手に拿りて。案内をすれば小雪太は。鏑野親子を三拜しつゝ。歡びを演惠を謝して。そが隨引れて退りける。爾後又範的は。老僕某甲を召よせて。曾根見がと云云。といひ知らせて亦いふやう。他は我弟品なれば。苛三隈八等はさらなり。奴婢等にも傳示して。無禮の欵待すべからず。といと嚴に吩咐しかば。衆皆怕れて小雪太を。君の如く敬ひけり。爾程に小雪太は。この夕。鏑野が客房にて。二の饌添ふたる酒飯に飽て。且浴室に案内をせられ。浴し果て程もなく。萌出るばかりなる。綠葱の蚊帳に單宿る。絳麻裏の夏襖さへ。まだ巳の時は過ねども。亥中の鐘の聞ゆるまで。近習等に陪堂せられたる。欵待十二分なりければ。肚裏に思ふやう。我微妙じくも謀り得て。深念に彌增大極上々。無類無量の造化なれども。倘眞の伍號が。迹より茲に來るならば。忽地馬脚を相出されて。我上にこそ做らむずらめ。其頭の障りなき間に。いかで大刀自を賺し誘へて。思ひの隨に盤纏の金を。ねだり出すは安かるべけれど。逗留いまだ幾日もあらぬに。然るとをいふべくもあらず。主人親子の機を攬て。いふ事毎に聽れずは。思ふ局へは入るべからず。非除伍號が。迹よりして來るならば來よ。我は先入にして主位に在り。他奴に腮を唶せざる。せん術はいくらもあらん。さのみ怕るゝ事かは。と豫の伎倆を胸に斂めて。最正首にものせしかば。範的は次の日より。小

說示すと半晌許。說果て又いふやう。其猴兒に使ふには。よくその人を擇むべし。約莫這頭の里人に。認れたるは宜しからず。又機に臨み變に應ずる。才なきも宜しからず。老實ならず事に熟たる。人を得てこそ行ふべけれ。と鼻蓋めかして說誇れば。苛三隈八はいふもさらなり。範的只管感激して。掌丁とうち拍し。奇なる哉妙なりけり。我爲の諸葛孔明。楠正成に伯仲すべき。計こそ微妙けれ。それにて只今思ひ出たり。いぬる日我奴隷毎の。所以ありて搦捕たる。白日鳶十六郎といふ盜兒あり。他はこの年來。美濃信濃路を徘徊して。暴掠を旨としつ。この地へ新參の聞えあり。爾るに我奴隷等さへ。梭手父女を憎がりて。彼等が客店を迫るゝをり。聞得て迹を追蒐ゆきて。その夕闇に紛れつゝ。梭手が親を曳捉へて。酷く撻懲す程に。件の白日鳶十六郎は。其捫擇に紛れてぞ。梭手が親の行李と纏纆を。掻攫て逃走れば。奴隷等は驚き怒りて。梭手父子をうち捨て。其盜兒を追しかど。その夜は及ばざりけるを。前日竟に搦捕しかば。軈て牽もてかへり來て。事云云と訴るにより。我正廳に立出て。件の盜兒十六郎を。緊しく拷問致させけるに。盜兒なると疑ひなければ。軈て獄舍に繫せたり。因て我家の奴隷毎には。猶彼手に遺りたる。贓物の種々を。當坐の賞祿に取らせにき。是によりて今思ふに。彼十六郎の罪を饒して。誘ふに利をもてせば。我爲に猴兒に做りて。件の秘事をよくすべし。他より外に其人なし。といふに小雪太點頭て。そは究竟の役者なり。術よく謀せ給ひねとて。其

手を眷戀て。韓錦縦二郎を媒妁にて。妾にせまく欲せしに。其事竟に成らざれば。縦二郎も堪ずやありけん。件の父女を追けるに。爾後脆く和睦して。悄地に宿所に引入れて。己が妻にしたりといふ。風聲ありし事までも。呫き告て又いふやう。韓錦奴には已等も。坐角力の遺恨あれば。娼きといふべうもあらず。いぬる日腹心の奴隷をもて。他奴が宿所を搜せしに。梭手をば那里へ歟。遣したる歟躱せし歟。今は那里に居らずといへり。殿の遺恨は只是のみ。と告れば範的も聲を低めて。韓錦が家の食客は。梭手父女のみならず。大江峯張と歟喚做したる。遊歴兒等も逗留したれど。既に他郷へ立去りけん。昨今は見えずと聞ゆ。その大江峯張は。健宗和殿の怨ある。彼武者修行の兩小年。主僕にはあらざるや。と問へば小雪太眼を睜りて。そは違ひなし違ひなし。他奴等この地に在るならば。兄の怨を復さんに。我聞く事の遲くして。其義に及びがたかるは。他奴等が幸ひなり。开は左まれ右もあれ。主人公の怨敵は。多寡の知れたる市人ならば。手擒にせんも易かるべし。と誇るを範的推禁めて。然ないひそ曾根見生。彼韓錦は聞ゆる猛者にて。武藝膽勇無雙の剛敵。公事にあらざるより。阿容々々と手を束ねて。擒にせらるゝ者ならんや。侮る時は愆あらん。といへば小雪太冷笑ひて。虎狼の猛かるも。獵戸の儲措く。陷井に陷る時は。阿容々々として死を俟のみ。然れば彼韓錦とやらん。萬夫無當の猛者なりとも。計をもて倒しなば。手に唾して首を斬べし。其計畧は箇樣々々。と

胆を潰して。こゝろ得がたく思ふのみ。迭に問ふべき時宜ならねば。黄蘗を眠りし唖子の如く。或は棲遑の遊戯に似て。一句も出ず默然たり。有右べしとは知るよしもなき。範的は悠然と。十六郎にうち向ひて。やをれ盗兒承れ。若が積惡の最多なる。律に於て宥すとなく。首を刎べき奴なれども。我に一大事の所要あり。若この義をよく做し果さば。彼罪を宥すのみならず賞祿は乞ふに依べきなり。勉て其義をよくするや。と問れて十六郎笑介に。そは何事歟知らず候へども。命を助け給はらば。縦火を踏み水に沒とも。做し得ずしてや已ん。仰付させ給ひねかし。と應をすれば範的は。然もこそあらめ。と頷きて。我秘事は別義にあらず。といひつゝ四下を見かへりて。聲を低めて又いふやう。我に一箇の怨敵あり。そは這郷に名も知るき。韓錦縱二郎是なり。いかで他奴を陷れて。怨を復さまく思ふ事久し。故に若に課るなり。若這短刀をもて。箇樣々々に揣りなば。彼奴は必擒に入るべし。既にして縱二郎は。搦捕れにきと聞ゆるとも。若は猶市に在りて。便を求め夜に紛れて。韓錦が一家兒の奴們を。一箇も漏さず刺殺しね。そが中に梭手と喚做す。二八可の美女あらば。其奴をのみ殺さずして。掻攫てかへり來るならば。搾丁十二分といひつべし。然るを若做しがたしとて。身を脫しを幸にして。風を湌ふて逐電せば。樹を伐り草を芟盡しても。索出して八創にせん。心を定めて應をせよ。と叮々説示せば。十六郎は笑含ながら。頭を擡て答るやう。御諚承り候ひぬ。そは皆己がよ

期の事まで意を屬れば。苛三も隅八さへ。倶に感服したりける。這時日は敧きて。曛昏近くなりしかば。範的は是までなりとて。侍婢等を召よせて。盃盤を執斂さする程に。苛三と隈八は。壽を陳恩を謝して。退まくしてけるを。範的急に喚留めて。若等外に退るならば。獄吏に下知を傳へて。罪人白日鳶十六郎を。內庭へ牽入れさせよ。ゆきね〳〵と。いそがせば。苛三等は阿と應て。隈八と共侶に。外面投て退出けり。然れば又範的は。件の事の準備の爲に。單後堂へ退きて。錦嚢に容たる短刀と。腰刀と麻衣を。手親携て出て來つ。故の席に坐を占て。又小雪太とうち譚ふ程に。入相の鐘高く聞えて。折戸口なる楊柳の梢に。五日の月仄に見えて。吹風涼しくなりし時候。獄吏は十六郎に。捕索綁て牽もて來つ。檐廊の下に推居て。事云々と聞え上れば。範的見つゝ點頭て。獄吏に向ひていふやう。我其十六郎に所要あり。若は先退きね。後に知るよしあるべきぞ。といふに獄吏はこゝろ得て。捕索の端を傍なる。松の幹に繫留て。辭してそが儘退りけり。當下鏑野範的は。小雪太に手燭を秉せて。端近く出る程に。小雪太は灯光にて。件の盜兒十六郎を。こゝろともなく熟々相るに。凄しげなる大漢にて。曩に彼美濃路にて。我身を酷く蹴倒して。物餘波なく奪略たる。大漢によく肖たれば。訝りながら左さま右さま。又よく見れば吭にありける。便毒の迹までも。實に其奴なりければこは什麼。とばかりに。呆れて口を鉗て居り。十六郎も亦眼敏く。小雪太を瞻仰て。舌を吐き

は罪を饒されて。反て一脚踢られしは。盜に糧を齎し。讐に刃を貸よりも。猶愚癡なる所爲なりき。悔しき事をしてけり。と臍を噬めどもその甲斐なければ。更に又思ふやう。離合は前より料がたかり。彼美濃路にて撞見したる。剪徑にすら今玆にて。不測に再會しぬる上は。伍號と又玆にて。撞見する折もあらん歟。其頭の障りなき間に。早く他鄕へ走るにしかじ。と尋思をしつゝ。次の日より。大刀自に壁訴訟する毎に。武者修行に假托て。盤纏二百金を乞かど。大刀自いかでか許すべき。彼は智惠あり才覺あり。幾までも玆に居て。我兒の補助になりねかし。爾る時は範的も。必歹くは闕ふべからず。武者修行するとかは。と禁めて聽べくもあらざれば。小雪太は困じ果て。惜地に胸をぞ苦しめける。不題韓錦縱二郎は。いぬる日防守父女と。大江主僕を出遣りて。詞敵あらずなりしより。心左右に樂しからねば。武藝の指南も懈り克にて。俟ば又生憎に。八重作もまだ妙義よりかへり來ず。四月は果て薄暑彌增。五月五日になりにけり。この日は見越松時八の。家子の初幟の壽祝に。濁酒饗饌の儲ありとて。師の韓錦を請待せしかば。縱二郎は已ことを得ず。未下刻よりして。他が宿所へ赴きつ。押締は單留守して在り。既にして日は暮て。初更は過ぬらんと思ふ時候。外面に咳きして。苛めしげなる大漢。折戸を押つゝ排み入りて。大哥は宿所に在する歟。と問ふを押締は見かへりて。否。家兄は他へゆきぬ。かへさの程は料りがたかり。用事あらば明日亦來ませ。といふをば所かで大漢

くする所。御心安く思召れよ。盗兒にも信義あり。倘僞りて逃隱なば。强盗冥利に盡ぬべし。今宵先片端より。埒を開候はん。吉左右を俟給ひねかし。といふに範的歡びて。然らば索を饒してん。健宗解ね。といそがせば。小雪太は阿と應て。庭下駄穿つゝ下立て。十六郎が綁索を立地に解捨れば。十六郎は腕を捺りて。跪居て旨を伺ふにぞ。範的は短刀を。十六郎に遞與していふやう。這短刀は樅二郎を。謀るべき一種なり。遮莫事を行ふに。其牢獄衣にては。不便にこそあらんずらめ。因て麻這衣と。腰刀を取するなり。この刃をもて彼奴們を。漏す隈なく結果けよ。とばかりにして錢なくば。市中の徘徊不自由ならん。その麻衣の袂には。鼻紙に包みたる。圓金一枚容てたり。こゝろ得たる歟と脱落なき。指揮に十六郎笑片向て。件の三種を兩手に受て。打戴々々。謝恩百拜。媚るに遑なく。早立去らまくしてけるを。範的一霎時と推禁めて。既に日は暮たるに。符契なくは後門なりとも。出入輒かるべからず。とこゝろつくれば十六郎は。毫も擬議せず含笑て。否。壁を毀ち塀を踰るは。己が年來得たる所。猫兒をも欺く手段あり。出入符契を何にせん。只この儘に五六日。身の暇を給はるべし。と應て聽て庭門より。蚤くも出てゆきにけり。秘策既に果しかば。範的は是等のよしを。妳々に告て歡せんとて。聽て後堂へ退りしかば。小雪太は客房に退きて。單熟々思ふやう。那盗兒十六郎は。我身の寃家でありけるに。知らぬ事とはいひながら。憖に郡司殿に。彼謀を薦めしより。彼奴

新局玉石童子訓卷之二十五

東都　曲亭主人口授編次

第五十五回　鏑箭の短刀暗に縦二郎を陷る　兩箇の健宗血を對決塲に濺ぐ

却說韓錦縦二郎は。次の日巳の左側に。稍睡覺て。軈て里の浴室に赴きつ。浴し果てかへり來て。晝飯を果す程に。押繪は昨宵の事の趣。彼大漢がいひつるよしを。告てもて來し短刀を。見すれば縦二郎訝りて。我は人に誂て。かゝる物をおこししとなし。然るとわらば昨宵にも。なとて早く告ざるぞ。と叱るを押繪はうち笑ひて。否。昨宵かへり來ますと軈て。告て這短刀を見せまゐらせたりけれども。そを今告る事かはとて。よくも得聞かで只水を。求め給へばいふ甲斐なくて。奴家が庖湢にゆきし程。おん身は既に睡滾て。雖呼々々覺給はねば。只得其處に蚊屋を垂て。奴家は納戸に宿り侍り。這短刀の事はしも。奴家も心にかゝるから。今朝も亦幾回歟。呼覺したりけれども。應のみして方僅まで。覺給はねば術なかりき。そを奴家が科にして。叱り給ふ事かは。と解諭すそが程に。縦二郎は遽しく。箸を斂め膳を退けて。拿抗る錦

は。訛たる聲をふり立て。然らば是を屆けまゐらす。嚮に大哥に逢し時。こは大切なる物なれば。和郎我宿所へもてゆきて。我女弟に信と遞與しね。と賴れたればもて來にけり。といひつつやをら投出すは。短刀にぞあらむずらん。錦の嚢に入れたるなり。押繪は見つゝ訝りて。そは然るともあるべけれど。家兄の留守にいかにして。奴家が受とるべくもあらず。明日出更してもて來給へ。といへば應をしながらも。身を閃めかして出てゆくを。押繪は透さず。追携りて。やよや俟ね。と呼留れども。折から皐闇なれば。那地ゆきけん影だに見えず。竟にいひがひあるとなければ。押繪は單咗きつゝ。門の戶鎖て兄のかへさを。今歟々々と俟程に。夜は猶深て子二時候。縱二郎は裝れたる。酒の醉いまだ醒ねば。蹌踉つゝかへり來にけるを。押繪は軈て扶入れて。却大漢の事云云と。告て短刀を見せまくするに。縱二郎はよくも見ず。そを今急に見する事かは。我は水を飮まく欲す。汲もて來よ。といそがせば。押繪は只得指燭して庖湢へとて立程に。縱二郎は俟間もなく。肱を枕に醉臥て。鼾の聲のみ高かりける。是より後は。亦下回に解ん。

新局玉石童子訓卷之二十四　終

ず行逢彼一人を。韓錦なりと見てしより。彼逃すな。といふ聲と。倶に群立緝捕の雜兵。御諚ざふと呼はりて。手々に十手を打振々々。推捕籠れば縦二郎は。驚きながら些も噪がず。こは何事に候ぞ。在下犯せる罪あらず。といはせも果ず苛三屆染。歩み近つきうち向ひて。やをれ韓錦。和郎が罪のありなしは。我知る所にあらねとも。疾召捕て參れとある。相公の御諚を承りて。伙兵を倶して來にけるに。いまだ宿所へ屆るに及ばで。茲にて逢しは妙なるかな。いふよしあらば。公問廳へ。參りてこそ。といそがせば。縦二郎冷笑ひて。在下今身に當て。召捕るゝ覺なし。反て訴稟すべき一義あり。因で里長許赴きしに。他は今宿所に在らねば。我のみなりとも參んとて。いそぎて茲まで來にけるなり。卒給へ共侶に。といはせも果ず苛三は。眼を睜り。聲苛立て。そは勿論の事なるべし。卒疾々。といそがして。伙兵に前後を守らせつ。倶して公問廳へとていそがせける。かくて鬼薊苛三は。從ふ伙兵等と共侶に。韓錦縦二郎を。都司の舘に倶して來つ。問注廳へとて誘引に。局の内闇かりければ。縦二郎は訝りて。找みかねてありける程。障子の内に聲高く。やよ韓錦韓錦と呼は正しく範的ならん。と思ふ縦二郎は阿と應て。找み寄まくしてけるに。局の内に布儲たる。沙礫の中に鈎索あり。憶はず脚を縢れて忽地撞と顛びしかば。鬼薊が伙兵はさらなり。垂たる幕の蔭よりも。僕設けたる雜兵等。咄と喧さて幾名歟。走出つゝ折累りて。起んと掙扎縦二郎の。手を捉へ脚を抑へて。索を掛まく

の嚢の。長紐を解回して。拿出し見れば思ふに違ず。九寸五分の短刀にて。目貫は白金の鏑箭なりければ。愕然と驚くまでに。且怕れ且怪みて。そが儘押繪に見せていふやう。昨宵這短刀をもて來ぬるは。何人に歟ありけん猜し得ざれど。是這目の鏑箭は。當領主の家の花號なれば。鏑野殿の重寶なる歟。いまだ知るべからねども。出處不定の物なるを。一霎時も留め置べきにあらず。我一句は愼みて。多くは酒を過さゞりしに。昨宵は時八等に强られて。憶ず酩酊したりしより。いはれし事を覺ぬまでに。今朝も亦貪睡くて。今に及びしを爭何せん。疾里長に告知らせて。領主に訴稟んのみ。倘亦昨宵の大漢が。來るとあらばいひ誘へて。留めて我還るを俟ね。いで〳〵。といひつゝも。軈て衣裳を改むれば。押繪が採て指出す。兩刀腰に帶做て。彼短刀を携へつゝ。遽しく出てゆくを。目送る押繪も胸安からねば。やゝ疾ゆきてかへらせ給へ。やよ喃々。といふ聲も。日影も屆く亭午時候。縱二郎は應をしつゝ。菅笠翳して走去けり。

然る程に韓錦縱二郎は。是日里長許赴きて。面談せまく欲るに。折から他は宿所に在らず。今新部領へ赴きたり。俟給ふともかへさの程は。はかりがたし。といはるゝに。心只管焦燥のみ。非如長を將てまゐらずとも。鏑野殿には這年來。面識れたる我なるに。身單なりとも早きを好とす。誰歟越訴といふべきや。と尋思をしつゝ退きて。郡司の舘を投てゆく。淺澤隄の頭にて。前面より來ぬる緝捕の頭人、是則別人ならず。郡司が家の權豪なる。鬼荊苛三屆梁なり。憶は

は。縦二郎を牽立て。檐の下にぞ推居ける。範的是をうち聞て。案を擡遣りつゝ。縦二郎を疾視てやをれ。盗兒思知るや。這鏑箭の短刀は。千金にも換がたき。我家の什物なるに。嚮に儞が我館へ。來ぬる比より紛失して。久しく索れどもあるとなければ。原來竊る者ありけん。と思ひとりつゝ堪能なる。周易者流に占問ひしに。正可に儞が所爲なり。と報るによりて訝りながら。人はうち見によらぬ者にて。現然る事もありけん歟。と人もいへば苛三等に。課せてその身を拿捕せしに。果して這短刀を。懐にしたりといへば。問はでも知るき竊盗の罪科。左ても右ても逃るゝ方なし。速に首伏せば。呵責の笞を寛すべし。早くいはずやいかにぞや。と敎閉猛く譴問ふを。縦二郎は怕るゝ色なく。聲高やかに答るやう。そは宣ふとながら。然る誣を誰かは承ん。その故は如此如此なり。箇様々々のと候とて。昨宵縦二郎が家に在らざりし時。見も知らぬ大漢が件の短刀をもて來にける。その事の首より。女弟押繪が告たる趣。縦二郎は歸宅の後。稍聞知たる顛末を。具に陳て又いふやう。小可事の怪きを。知らざるにあらねども。今朝は宿酒の醒わりて。遲く起出たりければ。告訴延引せしものから。然ればとてうちも閣ず。今日しも午の貝吹時候。件の短刀を携て。里長許赴きしに。他も亦外に出て。在宿せずと聞えしかば。時の後れんとの惜くて。身單なりとも御館へまゐりて。訴稟さまく思ひつゝ。急ぎて來ぬる路の程。淺澤隄の頭にて。御家臣鬼薊生に逢しより。事の玆に及べるのみ。憶ふに我等

してけるに。縦二郎は猶寄立じとて。臥つゝ手脚を捽かして。一霎時は挑みたりけれども。其頭に準備したりける。九尺階子を投掛られて。壓木に掛て動さねば。力及ばで結加れけり。しかれども縦二郎は。罩怨に堪ざれば。連りに罵狂ひしを。苛三は猶怕れて。幾十斤なる桎を。掛て伙兵に守らせつ。韓錦の轉びし時。捨たる短刀を拿揚て。彼が帶たる兩刀と。倶に廳の檐廊へ。並置つゝ意氣揚々と。豫仰付られたる。盜兒韓錦縦二郎を。搦捕候ひき。このよし人々禀し給へ。と聲高やかに喚はりけり。登時有司等こゝろ得て。颯と開く障子の内を。と見れば廳の上坐に。鏑野郡司範的は。縹纁に家の花號染做したる。信濃織なる麻衣に。長袴を穿下しつ。小刀を腰に帶て。手に中啓の扇子を採りて。立たる案を引寄つゝ。端然として坐したりける。左右に從ふ有司の毎。鍼持隈八刺高を首にて。老たるあり弱きあり。其が中に隈八は。額を衝身を起來て。彼短刀を拿抗て。主君に呈閲してければ。範的やをら受拿て。嚢を解せて見る程に。苛三は遽しく。檐廊に升來て。主君に告禀すらく。嚮に御意を承まつりて。臣等伙兵を從へて。盜兒縦二郎を搦捕んとて。他が宿所に赴く程に。折よく途にて行逢ひつ。見るに彼奴が竊拿たる。鏑箭の短刀を。懷中に秘持たれば。搦捕まく思ひしかども。彼奴は聞えたる猛者なり。捕逃す事なからずや。と思ひかへして暴立ず。そが儘倶してかへり來て。當廳なる局の内へ。誑引入れ力を勠して。稍召捕て候なり。と言跨貌に聞え上れば。縄拿の伙兵等

とを聞かず。我は是清白の勇士なり。一日も元を喪ふとを忘れず。今這呵責の苦痛に怕れて。知らざるとをわりとし言んや。只冤に死んのみ。などて笞を止めたる。猶撻ずや。といそがすを。苛三等は聞ぬ態して。這奴熱にや浮されけん。疾牽立よ。といそがせば。伙兵等は阿と應て。いなじと角ふ縱二郎を。辛くして推立しつゝ。前後左右をうち守りて。やうやく獄舍へ將てゆきけり。爾る程に縱二郎は。寃屈の厄に囚れて。是より單獄舍に居り。かゝるべしとは豫より。人しも知るや白眞弓。張緊し心弛みてや。背に受たる杖瘡。當晩甚しく痛出て。心地死ぬべく覺しかば。忽地に思ふやう。曩に我仙丹を。大江峯張に乞得しより。外に出る折は貝に移して。髻の裡に斂めたり。然るを今日冤の。笞に酷く撻れし折も。猶幸にして髻は。斷離れずして故の儘なれば。彼仙丹は必あらん。今倘是を用ひずは。孰の時を俟んや。と肚に問肚に答て。聽て頭髻の裏を探るに。果して彼貝出しかば。うち戴きつゝ蓋を開きて。抓みて聊嘗試るに。心地立的に。清爽になりゆく程に。氣力も倶に本復して。背の疼痛も覺ずなりぬ。這仙丹の即效神妙。今さら驚く可なれば。且歡び且感嘆して。猶其半分を掌に。乘て唾をもて解寬めて。指に染つゝ背の瘢に。屆限り幾番歟。塗らする者半晌許。指の屆ぬ處へは。藥汁おのづから流傳ふて。療治に隈やなかりけん。其杖瘡一夜の間に。餘波もあらず皆愈て。瘢だに見えずなりにけり。かゝるべしとは知よしもなき。範的はその次の日に。苛三等を召よせて。

を惡む者。不測の罪に陷さんとて。謀りたるにぞ候はん。といはせも果ず範的は。眼を瞋し聲苛立て。默れ盗兒勇悍し。と世話にもいふは這奴が事なり。照据を取られてせん方なさに。見も知らぬ大漢が。この短刀をもて來にき。と巧に賴陳るとも。其大漢を生拘て。共侶に牽もて來ずは。孰歟實事と思んや。這奴緊しく責懲さずは。必招了すべからず。苛三早く笞を中よ。と烈しき下知に屆梁等。承りぬ。と應つゝ。檐廊より走下て。伙兵に下知を傳へてぞ。韓錦を推伏て。笞を中まくしぬれども。縱二郎は身を反して。敢其杖を受ず。連りに寃を叫ぶのみ。事果べくもあらざれば。隈八も見るに得堪ず。請ふて等しく下立て。苛三と共侶に。伙兵等を罵奬まして。稍縱二郎を推伏させて。中る笞は先度の怨。彼坐角力の輸腹を。今愈すぞといはぬばかりに。烈しき呵責は幾百杖歟。數も涯も那麻輿美の。腕の骨の續くまで。透もあらせず撻せしかば。憐むべし縱二郎は。皮破れ鮮血流れて。息絶なんとしてければ。範的笞を休めさせて。其奴素より强情なれば。早には首伏すべからず。異日又復拷問せん。そが儘獄舍に係ぐべし。といふに苛三隈八は。應をしつゝ伙兵等に。下知を傳へて縱二郎に。水を飮せなどせしかば。姑且して縱二郎は。我に復りて嗟嘆に堪ず。苛三等を見かへりて。若們は是斗筲の小人。いふかひあるべきにあらぬども。奸佞の善者を誣て。不測の罪に陷す者。和漢今昔尠からず。彼文王は羑里に囚れ。孔子は陳蔡に苦しめらる。遮莫盗賊の惡名を負せられたりといふ

來されば。押繪は單胸安からず。いかに〳〵。と候程に。長き夏の日斂きて。下哺になりし時候。外面に跫然と。脚音するはそれにはあらで時八と奈我四郎と。うち連立て走り來つ。押繪を片隅に招きよせて。縱二郎が禁獄せられし。事の趣云云。と方僅聞しとて告しかば。押繪は驚き且憂ひて。原來彼短刀の。祟にこそありつらめ。其故は箇樣箇樣如此々々の事ありけりとて。昨宵一箇の大漢が。彼短刀をもて來にける。その事の始より。嚮に縱二郎は。件の義を里長に。告て訴稟んとて。彼短刀を携へて。出てゆきけるとまでも。詞急迫く說示せば。時八と奈我四郎は。聞つゝ嗟嘆しぬるのみ。計の出る所を知らず。當下押繪は又いふやう。折歹く大江主僕は。防守叟等と共侶に。妙義へとて立去り給ひしより。仲兄八重作といふさへまだかへり來ざれば。何せん術も奴家が身單。智計を借るべき所由もなし。怎いかにせん。とばかりに。困じて額を病すれば。時八と奈我四郎は。憶はず膝を打鳴らして。开にて思合すれば。我師を怨る者ありて。謀りて罪に陷んとて。彼禍害を賣たるならん。とは思へども我們は。世話にいふ下司の計にて。非如一年三箇月。考たりとも休に似たれば。長詮議してあらんよりは。八重作哥々を呼かへらして。商量するにしくとあらじ。然ればとて我們兩箇が。倶に妙義へゆくならば。留守の安危も心許なし。奈我四ゆかずや。我ゆくべき歟。といふ時八を推禁めて。奈我四郎がいふやう。否。妙義へは我ゆきてん。時八和ぬしは里長刀禰と。よく商量を整へて。明日

韓錦奴はいかになりけん。笞の苦痛に堪ずして。昨宵死にたるにぞあらんずらん。といふを苛三聞あへず。否。今朝ゆきて見候ひしに。縦二郎は故の儘にて。氣力毫も衰へず。杖瘡は皆愈て。痕だにあらずなり候ひぬ。怪有なる事に候はずや。と告るに範的呆果て。そは訝しき事にこそ。我みづから撿すべし。疾牽出せ。といそがせば。苛三は再議に及ばず。軈て獄卒に下知を傳へて。縦二郎に袒せ。且重索を緊しく掛て。局の内に牽入れば。範的は廳の檐廊に。立つつ熟々是を相に。果して苛三が告しに違ず。縦二郎は爽然たる。面色生平に異ならず。杖瘡もあることなければ。郡司主僕を罵るのみ。威勢いよ〳〵猛かりければ。範的直と呆惑ふて。是日は笞の數を増て。殊に緊く撲せしかども。縦二郎は今日牽出さるゝ時。悄地に仙丹を背に塗りて。口中にも哺みしかば。笞を受ても疼痛を覺ず。皮肉の破るゝ事もなければ。只寃を叫ぶのみ。呵責その甲斐あることなければ。苛三等はいふもさらなり。範的は又せん術を知らず。這奴于吉左慈の如き。妙なる幻術ある者歟。倘愆て走らせなば。ゆゝしき大事なるべしとて。是より後は拷問せず。二重牢に籠在らせて。驗者に課せて厭勝の。秘符を獄門に貼せなどして。由縁の者の願ふとも。飯を獄舍へ餽ることを饒さず。只獄卒の數を増て。夜となく日となく守らせしかば。縦二郎は幸ひに。呵責の笞を逃れて。安全として日を送りけり。休題。是時韓錦の宿所には。昨日縦二郎が。彼短刀を携て。里長へとて出てゆきしより。久しくなるまでかへり

を整て。その詰朝未明より。妙義を投て。立出けり。案下再説。爾る程に假健宗小雪太は。獄に範的に薦めたる。彼奸計行れて。手剛かるべき縱二郎は。脆く獄舍に係れしより。是を一箇の効にして。盤纏を乞ばやと思ひつゝ。大刀自にも範的にも。又武者修行の願ひをいひ出て。路費一百兩を乞ふものから。主人母子は諾はず。倶に禁ると前の如く。放遣べくもあらざれば。小雪太はいよ／＼困じて。この上は是非に及ばず。折を覗ひ有財を。竊拿て走らばや。と腹に尋思をしぬるのみ。いまだ便を得ざりける。人の嗜慾の同じからねど。不義の情願相似たる。箭野部司範的は。いぬる日盗兒十六郎に。機密を課たりしより。彼短刀の一條は。立地に事成て。憎しと思ふ縱二郎を。輒く陷れたれども。その餘の事はいまだ聞えず。日屬思忘れぬ。少女梭手はいかになりけん。十六郎はいまだその便りを得ずや。今日までも信なきは。他力及ばずとて。逃て他鄕へ走りしにあらずや。這里にてものを思んより。我みづから立出て。巷街の風聞をも撈るべく。梭手の所在を穿鑿ばや。と尋思をしたる其次の日に。馬上優に打扮て。鍼持隈八刺高と。腹心の若黨三四名と。雜兵奴隷を從へて。皐月雨霽し亭午の時候。部領の里を東西となく。うち巡り撿儘に。潜行の編笠も。深き思ひを人知らぬ。淺澤隈を過る程に。沼の水際の燕子花。時知り貌に咲出たる。その紫の朱をしも。奪可の長視にあなれば。範的一霎時馬を駐めて。水を飼せてありけるに。這塘隈なる松蔭より。忽焉として一箇の乞兒。

より獄舍へ飯を餽る。淮佛こそ緊要ならめ。今日は既に暮るゝに近かり。咱等は明日未明より。單妙義へ赴きて。八重作哥々を相俱して。大後日は必かへり來つべし。姊々は今より消息を。書寫めて渡し給へ。咱等は宿所へ走りかへりて。點燭時候に又來てん。いで〱といひつゝも。身を起さまくする程に。里長は四隣なる。屋主等を相伴ふて。呼門高く訪來つゝ。軈て母屋にうち升りて。押繪等に向ひていふやう。韓錦主の不慮の災難。這里へも早く聞えしならん。嚮に御領主樣よりおん下知あり。咱等と故老達を召よせさせて。則仰渡さるゝやう。縱二郎の罪如此々々なれば。目今禁獄しつるなり。他が贓罪輕からねば。由緣の者の願ふとも。飯を獄舍へ餽ることを饒さず。縱二郎が宿所をば。五保等迭代に。日夜よく守るべし。縱二郎の弟八重作は。四五日旅に在りと歟いへば。歸宅の日に訟稟しね。その餘同宿の男女あらば。留めて一箇も散すべからず。この義を佗と守りねと。掟させ給ひにき。因て今來ぬる時。這人々にも商量したり。女流一箇の宿なれば。男子の夜番は憚りあり。夜分は家々衆をおこすべし。いふまでにはあらねども。時八奈我四相資て。八重作哥々を呼かへす。脚力をいそぎね。といへば四隣の亭主等も。共に口誼を舒訖りて。又出直して來つべしとて。齊一立ば里長も。共侶にとて退りけり。是より後は韓錦の。武藝角觝の弟子等。訪つゝ來つゝ甲夜過るまで。混雜涯なかりける。浩りし程に。鶴脛奈我四郎は。當晩押繪に消息を受拿て。宿所に退りて遽しく。行裝

兒かな　刺高等も知る如く。その伍六健宗は。いぬる日既に我館に來て。今も猶宿所に在り。離魂病ならざる者　何ぞ兩箇の健宗あらんや。贋物なるを知るべきのみ。といふを乞兒はうち聞て。又隈八に打向ひて。今の御諚はこゝろ得がたかり。世に同姓同名の者。これなきにあらねども　觀音寺の城内にて。曾根見伍六健宗と喚れしは　我外に亦あるべくも候はず。然るを名を竊み主を欺きて。御庇に寓まく欲するあらば。狐狸の所爲なる歟。然らずは我上を知りたる者。榮利の爲に先だちて。謀りて紛來ぬるならん。所詮其奴と對決させて。聽せ給はゞ立地に。玉石分明ならんのみ。といはせも果ず範的は。眼を瞬り聲苛立て。开は勿論の事なりかし。刺高其奴に腰纏掛て　牽もて來よといそがして。そが儘馬を騎かへせば。隈八は雜兵等に。下知を傳へつ健宗の。腰に掛たる緋捕索　端牟緊て情なく。牽せて倶に從ひけり。恁而郡司範的は。是日宿所にかへると聽て。先母の大刀自に。ありける今日の奇事を　箇様々々と呵告て。いそしく衣裳を改めつゝ。有司二三名を從へて。蚤く問注廳へ出る程に。鍼持隈八刺高は　雜兵等と共侶に。腰纏掛たる乞兒健宗を。局の內へ牽入れて。檐廊近く推居たる。當下範的佗と見て。やをれ乞兒　頭を擡よ。いはでも知るきとながら。我母刀自の侄なりける。觀音寺の伍六健宗は　曩に訪來て我家に在り。然るを儞も伍六郞。健宗と名告れども。正しき照据あるとなし。且前に來つる健宗は。其女兒窓井の消息あり。开が齎したる。鏑箭の短刀あり。況實の健宗

出て馬前に跪きて。稟上べき事こそ候へ。いかで聞召れよ。といふに訝る範的主僕は。こは何事ぞ。とばかりに。齊一佗と見かへれば。十六七歳なる少年にて。海松の如くに亂れたる。額髪の鼻まで垂しを。搔抗る隨に又よく見れば。日黒みたる面貌。兇惡の者に似て。身には袴の破れたる。汗衫の外に被物なく。繩をもて帶として。沙柄杓を腰にして。蜈蚣の像くに穿敗たる。草鞋の底拔て。身に引添たる菅笠は。風の芭蕉歟蜘蛛巣に似たるに。世に劍御祓と唱ふめる。伊勢皇大神宮の大麻を挿夾みて。背に藁苞を駝たりける。實に怪しき訴人にあなれば。範的馬の鑣面を。軈て其方へ推向て。刺高仔細を諮よ。と下知に從ふ鍼持隈八。找出つゝ件の乞兒に。打向ひ佗と睨へて。爾は原是那里の者ぞ。何等の故に膽太くも。守に直訴仕るや。願あらば疾稟せ。といはれて乞兒は羞たる色あり。やうやくにして答るやう。然ゝ候。今さらに。名告稟すは面伏なれども。小可は近江なる。觀音寺殿の權臣なりける。曾根見五郎平宗玄の弟にて。曾根見伍六郎健宗是なり。鏑野殿のおん爲には。從母昆弟なるものから。路遠ければ一たびも。いまだ見參せざれども。我名ばかりは知れつらん。然るを斯窶果て。當所に呻吟來にけるは。原是仔細あることにて。この身に蠢緣禍鬼の祟りせん方なければなり。なれども其義を始より。告まつらんは言の多くて。一朝には罄がたかり。いかで御舘へ倶し給はゞ。肝膽を吐き秘密を明して。おん疑ひを解つべし。いかで〳〵。と庶幾ふを。範的聞つゝ冷笑ひて。噫拙鈍き臆

の客店に老母あり。纔に他が好意にて。この敗たる袴の汗衫を。被よとて悄地に贈しかば。僅に肌膚を掩ふのみ。是より後は里人の。門に立て糧を乞ひ。路ゆく客の袖に携りて。一錢の施を乞へども獲るゝは最稀にて。邪慳の杖に追拂れ。晝は饑て路に喘き。夜は亦露宿を常にして星を戴き草に臥し。露にそぼち雨に濡て。逆旅に苦しき日を送る。艱難譬ふるに物もなく。本月の初旬に。當所に辿り來にけれども。今さらかゝる身のざまにて。御館へ推參すべくもあらねば。郡領の里に又日を送りて。悄地に便宜を俟けるに。今日しも相公の潜行の。風聞早く聞えしかば。是なるべしと思ひつゝ。身は淺ましき淺澤の。つゝみかねたる一期の苦辛。恥を忍びて御馬前に。愁訴の本意を遂たれども。女兒窓井のおこしたる。彼短刀さへ消息さへ。小雪太奴に竊去られて。正しき照據あるとなければ。推て見參しぬるとも。疑るゝことなからずや。と思ひ難て候ひき。この義を察し給へかし。と喞言がましく陳ずれば。範的聞つゝ沈吟じて。半信半疑の霧まだ霽ねば。呵々とうち笑ひて。乞兒。爾が陳ずる所。さもありぬべく聞ゆれども。機變に闌て詭譎を。巧に做す者世に多かり。今一介の照據もなきに。其いふ所を實として。漫に眞僞を執失んや。寧眞の健宗を。呼出して目に物見せん。その折言を易るな。といはれて健宗毫も擬議せず。幵は希ふ所なり。早く對決させ給ひね。と答る間に範的は。一箇の有司を見かへりて。健宗召。といそがせば。阿といらへつゝ立にけり。然る程に。假健宗小雪

たる者。其身不測の罪ありて。近江を追放せられたりとも。乞兒になるまで零落て。這頭を徘徊すべくもあらず。縱令呻吟來ぬるとも。我家を訪はせで。我外に出るを覗ふて。中途に愁訴しぬる事。給と云恰と云。疑ふべく信ずべからず。淺き伎倆の顛末を。招了致せ甚麼ぞや。と聲高やかに詰れども。健宗阿容たる色もなく。开は宣ふとながら。相公は只其一を知りて。いまだその二を知り給はず。目今宣ふ事の趣によりて。咱等は既に曉得たり。その健宗と僞名告て。御舘に逗留しぬる者は。我兄五郎平宗玄の故の鞋奴。小雪太と喚做したる。悪物にこそ候はめ。その故は箇樣々々。如此々々の事候とて。今茲四月下浣。健宗死罪を宥発られて。近江を追放せられし折。女兒窓井の密使をもて。衣裳短刀金一百兩。と小母御前へ寄まゐらする。消息一封を贈られし事。是により健宗は。這地を投て來ぬる程に。召倶したる鞋奴。小雪太に賺誘されて。美濃の野上に杖を駐め。色に迷ひ酒に浮れて。逗留してありける程。有一宵件の小雪太は。健宗が醉臥たるを覗ふて。且その衣裳両刀と。盤纒の九十餘金はさらなり。女兒窓井の消息を藏めたる。鼻紙嚢に至るまで。竊拿りて逐電したる。その事の顛末を。陳果て亦いふやう。彼時右の造化なれば。跡に殘るは我身のみ。土妓娼婦の洞房錢を。逆旅主人に債られて。さらにせん術あるとなければ。身に着たる夾衣。帶も汗衫も剝拿られて。赤裸にて追出されたる。其折の朽惜しさ。又いふべくも候はず。浩る折にも邂逅に。祐る神のあればにや。件

玄の緣坐にて。久しく獄舍に繫れて。倶に追放せられしかば。咱等佛心をもて。艱苦の中に召倶して。美濃路まで來にけるに。彼奴は恩を仇にして。多くもあらぬ我盤纏を。竊拿りて逐電したり。然ればその天罰にて。乞兒になるまで零落て。這頭へ呻吟來にける儘に。我身は相公の御庇に依しを。聞知りたる歟。知らざる歟。そは左まれ右もあれ。咱等は女兒の自筆の消息。彼短刀さへ齎したれば。問でも眞僞は分明なるに。人迷しに我名を竊みて。又仇せまく欲するは。憎むべしと〳〵。畢竟狂人の沙汰なれば。取るに足らざる事にこそ。尊公御意に懸られそ。と誠しやかに說誇れば。範的聞つゝ點頭て。いはるゝ趣實に故あり。然らば目今對決して。人の惑ひを解ねかし。卒とく〳〵。といそがせば。小雪太は已ことを得ず。承り候ひぬ。と應て刀を引提て。徐に廳の檐廊に。出て健宗を佇と見て。這惡僕が膽太し。我に對ひて猶佯るやといはせも。敢ず健宗は。眼を瞋し歯を切りて。類稀なる賊僕小雪太。爾は美濃の野上にて。我を裸體に做までに。物皆竊みて逐電しながら。飽ずや猶且我名を竊みて。早先立て茲に來て。小母御前親子を惑して。悄地に榮利を謀るとも。我出來つれば脫るゝ路なし。爾が事の照据にしたる。我女兒の消息と。彼短刀は美濃路にて。爾が竊みし物なるに。這頭に知る人あるとなければ。我をさへ誣まくするや。といはせも果ず小雪太は。呵々と冷笑て。默れ惡僕舌長し。炭をもて雪と做とも。我は件の證据あり。爾は毫も證据なし。その詐佯を知るべきのみ。とい

太は武者修行に假托て。大刀自にも範的にも。盤纏の百金を乞けるに。其言聽るべくもあらざれば。この上は是非に及ず。主人母子の藏措く。納戸金を竊拿て。走るにしかじ。と尋思をしつゝ。悄地に便宜を覗ふ程に。是日範的は。市中撿覽の爲にとて。從者多く從へて。既に出たれば宿所に在らず。大刀自は午睡して。四下に人のあるとなければ。小雪太は折を得たりと。軈て納戸に潜入りて。小簞笥に藏めたる。金五十兩を竊拿りて。懷に聢と夾め。己が子舍に退きて。肚裏を思ふやう。這金にてはまだ足らねども。多貪は破敗の基なれば。今霄這頭に火を放ちて。事の紛れに脱去らばや。と單計較程もなく。範的有司を使として。問注廳へとて召せにければ。小雪太は訝りながら。推辭べきにあらざれば。忙しく袴を穿きて。中刀を腰にしつ。脩刀を引提て來にければ。範的は是へ〳〵。と軈て側に招寄て。却いふやう。咱等嚮に。市中を巡覽してけるに。淺澤隄の頭にて一箇の少年乞兒あり。他みづから近江なる曾根見伍六郎健宗と名告て。愁訴しぬるよしあれども。其爲体怪しければ。腰纏を掛させて。牽せて方僅かへり來つ。既に緊しく詢問しけるに。隨即他が陳ずる所。首は箇樣々々なり。尾は又如此々々なり。有恁ば眞僞惑亂して。我疑ひを解に由なし。和殿彼奴を知りたる歟。と問れて小雪太吐嗟とばかりに。胸に鍼刺心地すれども。毫も色には見はさず。呵々と冷笑ひて。其奴は曩に美濃路まで我召倶したる鞋奴。小雪太と喚做たる奴ならん。他も觀音寺の城内に在りし時。我兒宗

すな。と罵散動めけば。倶に驚く雑兵毎。群立蒐りて前後より。稍健宗を組禁て。刃を奪ふて犇々と。押えて索を掛にげる。當下範的怒りに得堪ず。勃然たる聲震立て。噫狼籍なる曲尫兒かな。對決いまだ分明ならぬに。機に臨み刃を奪ふて。号に敵手を斫殺しゝは。贋物なると疑ひなし。疾目前へ牽出しね。我みづから手撃にして死したる。健宗の怨を雪ん。早くせずや。と焦燥ける折から部頭の大刀自は。件の兩箇の健宗の對決の事云云。と方催人傳に聞しより。心許なくや思ひけん。悄地に聞注廳へ出て來つ。屛風の蔭に躱ひて。竊闘して在りしかば。今範的が健宗を。手撃にせんとて敦閙くを。喚禁め喚よせて。聲を低めて却いふやう。おん身はいまだ思はずや。彼乞兒の進止。武藝の本事さへあるを思へば。贋物とのみ定めがたかり。倘眞の健宗ならば。戮して悔とも及んや。姑且獄舍に繋置て。近江へ使介を遣し給へ。窓井に就て健宗の。相貌音聲身材まで。詳に知られなば。兩箇の健宗孰は贋と分明ならん。慯るは要なき事にてこそ。といはれて範的うち領きて。奶々の敎訓誠に爾なり。鬼薊嵩三が隊の雑兵に。飛禽疾四郎。稲妻齒四郎と喚做す者あり。彼等は神行の達者にて。百里を六日に往還すといへり。近江へ火急の脚刀には。究竟の兵毎なれは。明日は未明に起行せん。窓井へ遣す消息を。ものし給へ。といそがせば。大刀自は有理と應て。軈て後堂へぞ退りける。是により範的は。出て隈八等に下知するやう。我復思ふよしあれば。彼乞兒奴を權且助けて。後に亦せん術あり。

へば健宗聲高やかに。證据は儞が竊たる。彼短刀と消息なりといふを。小雪太推禁めて。我齎したる那二種の。儞が證据になるべきや。烏滸なる言を。と打笑へば。健宗いよ〳〵性起て。連りに罵り哮るのみ。爭ひ果べくもあらざれば。鍼持隈八找出て。雙方を禁めていふやう。兩箇の健宗鎮り候へ。迭に虚實を爭ふとも。彼身近江に在りし時より。その面影を認りたる者。這頭に一人もあるとなければ。鄙語に云水潑論にて。孰歟よく是を辨せん。縦照据はあらずとも。文武の本事なからずや。といはれて健宗沈吟じて。助言寔に其理あり。开にて目今思ひ出たり。彼假健宗小雪太は。素より是無筆にて。假名文だにも讀とを要せず。曾根見は觀音寺の權臣なりしに。その弟たる健宗が。無筆なるべくも候はず。今試に紙筆を。授けて何まれ書せ給へといはれて。小雪太驚として。それを儞に倣んや。先我武藝を見知らせん。覺期をせよ。と敦圉猛く。身を跳せて檐廊より。投るが像く飛下りて。刀を拔て斫んとするを。健宗透さず身を反して。鍔上嵳と拿留て。拇放さまくしてければ。小雪太は拿せじと迭に角ふ郤舍にて。健宗が腰纏の。忽地弗と斷離れしかば。健宗進退自由を得て。捉たる隨に毫も緩めず。左の拳を擧して。眉間を礚と撲しかば。小雪太は呀とばかりに。脆く刀を搦拿れて。又中刀を拔まくしぬる。那時遲く這時速し。健宗は箭聲をかけて。振晃めかす刃の電光。天罰覿面小雪太は。首を撲地と擊落されて。軀も倶に仆れけり。思ひがけなき光景に。驚噪ぐ隈八有司等。彼逃

新局玉石童子訓第五六版小序

長夏の竹林老鶯鳴く。秀色見ることを得ざれども。清風枕に暢へり。主人午睡稍久して方に覺。欠伸して頭を擡れば。客あり。既に來訪して。枕邊に在り。即問て曰。和漢の文人。多聞博識なる者。經籍史傳をもて人に敎ずして。稗史物の本を著して。もて虛名を高うしぬるあり。其好所。益なきにあらずや。主人答て曰。經學の人に益ある。素より其所なり。然れども克勤學者稀なり。稗史物の本の如きは。書を讀ことを好ざる者も。歡で是を讀。是をもて諭易し。客呵々と冷笑て曰。主翁の言違へり。稗史物の本は。寓言にして實なし。何の敎歟是あらん。曰しからず。是を作る者に深淺あり。淺きは名利を旨として。漫に時好に媚る而已。吾其敎の有無を知らず。深きは則其學問。螢雪の餘力をもて。偶這個の筆すさみあり。其書他と相似て意匠同からず。克看者は。是を大筆とす。大筆の作る所。博く譬を拿てもて。蒙昧を醒すに在り。孔聖是を仁に近とす。蓋諫に五諫あり。諷諫を第一とす。忠臣孝子良友の。君父を諫其友を諫るに。專彼非を擧て犯時は。よく聽るゝ者あるとなし。甚きに至りては。比干伍子胥の如き。身を殺して功なく益なし。其國亡びて。忠臣の名あり。這故に克諫る者は。犯して怒に觸んことを懼る。是をもて譬を取りて。擬へてもて悟らしむ。其言毫も耳に逆はず。猶良藥に

緊しく獄舍に繫ぐべし。といふに隈八こゝろ得て。下知を雜兵等に傳つゝ。健宗を牽立させて獄舍へとてぞ遣しける。然程に範的は。鬼薊菁三を召よせて。近江へ火急の使の事。如此々々と吩咐て。却自餘の雜兵に。假健宗の亡骸を。某甲寺へ送れとて。執斂めさせけるに。其亡骸の懐より。圓金五十兩出しかば。範的又復訝りて。件の金を开が儘に。みづから後堂へもてゆきて。母の大刀自に告げしかば。大刀自も亦驚怪みて。原來健宗武者修行の願稱ざるを怨める故に。歹らぬ技を做したる歟。他素より五十金の。貯祿あるべきにあらずとて。軈て納婢に吩咐て。財用簞笥を開かせ見るに。納戸なる小簞笥に納られたる。金五十兩あらずなりしといへば。大刀自も範的も。はじめの愛敬失果て。假健宗を憎しと思へど。無明の酔のまだ醒果ねば。かくても眞僞を定得ず。只近江より窓井の回翰の。來ぬるを俟にしかじとて。そが儘に日を送りけり。畢竟縱二郎と伍六健宗と。善惡邪正異なれども。其窮阨は相似たる。後の安危甚麼ぞや。开は下回に。解分るを聽ねかし。

新局玉石童子訓卷之二十五　終

新局玉石童子訓第六版 自第五十六回至第六十回 總目錄

して。口に苦からざるが如し。因て命つけて諷諫と云。彼大筆の。稗史物の本を作れるも。亦是に似たるあり。或は故事に假託し。古人の姓名を借用して。もて善惡應報の理を詳にす。博く譬を取るにあらずや。是敎ずして諭すに庶く。實ならずして其こゝろ實也。老莊の虚無寓言浮屠家の。所謂善功方便。悟る者に裨益あり。其然らずや。然らずや。客猶諾はざる色あり。主人其負じ心あるを見て。又枕を曳よせて。陽睡して復共に言はず。折から文溪堂の使來て。這編の序を乞ども。其稿いまだ成らず。然るを吾家の路孀等。叨に前條を聞書して。序に代てもて取せつと云。鳥滸なる哉。

弘化四年丁未夏五月念五　　曲亭老逸

と腹に計較よしあれば。不間話説も密々に。已が姓名出處來歴。及惡僕小雪太の事はさらなり。鏑野母子が頑愚にて。玉と石とを擇むに及で。這冤に遇せぬる。一五一十を呷き示せば。縦二郎は豫より。大江峯張両主僕の。話説に聞知たる。他は近江の觀音寺なる。曾根見伍六健宗なりき。と思へばうち驚きながら。猶さらぬ面色して。言の術よく應するのみ。成勝と通能の事などは告も知らせず。毫もこゝろを饒さねば。健宗は慰難て。已が機密を告るによしなく。單胸をぞ苦めける。しかはあれども猶幸なるは。縦二郎も健宗も。禁獄の今にして。敢亦牽出されて。呵責の笞を中られされば。必故ある事なるべし。と思ひながらも健宗は。猶も屈せぬ無敵の本性。折々獄卒等にうち向ひて。若們我によく仕へよ。我は大刀自の侄にして。範的とは從母昆第なり。今こそ不測の殃危にて。絨籠られて獄舎にあれども。郡司母子の疑解て。那愆を知るに至らば。悔てこの身を召上して。欵待親族の思ひを做れん。人の命は老幼不定。範的いまだ男子あらで。那身夭折するならば。當家の家督は我ならで。孰か承繼者あらん。この義をいまだ知らざるや。と髯搔撫て説誇れば。獄卒等は皆憎がりて。冷笑ふもあり堪難て。背三四撻懲すもあり。其が中に亦。縦二郎を憐愍て。折に觸ては云云と。問慰る者もありけり。現縦二郎と健宗は。善惡邪正異なれども。俱にその罪にあらずして。各獄舎にあるものから。鬼畜に似たる獄卒すら。縦二郎を憐みて。皆健宗を憎めるは。善惡自然の道理に

新局玉石童子訓卷之二十六

東都　曲亭主人口授編次

第五十六回　押繪勇を奮て十六郎を生拘る　兄妹奇功を奏して進で虎穴に臨む

復説。曾根見伍六郎健宗は。料らずも怨ある。惡僕小雪太を撃果して。其憤りを洩すものから。範的と大刀自は。かくても惑醒ざれば。幵が儘健宗を禁獄して。其日近江へ遣したる。兩個の走卒。歯四郎と疾四郎が。かへり來ぬるを俟程に。健宗は鏑野母子が。鈍くも猶疑ふて。其寃を解よしなければ。或は罵り或は呟く。怨訴は背の癬に似て。手さへ口さへ那方ざまに。屆くべきにあらざれば。やうやくに思絶て。逃去らばや。と思ふ而已。身は籠の鳥檻の獸に。似たる牢舍に起臥しぬれば。いまだ便を得ざりけり。爾程に韓錦樅二郎は。他より前に牢舍に在り。始よりして健宗と。一緒には置れねども。獄舍は素より一棟にて。間に格子の隔ある而已。迭に面を認りしより。同病は相憐み。同氣相求るにあらねども。獄卒の間あるをりは。迭にものいひ。ものいはれて。其寃屈を聞知りしかば。健宗は樅二郎を。破獄の幇助に做さばや。

最安くて。恙わらず。と聞えたり。さのみな思ひ屈給ひそ。と吁告る人の誠に。押繪は僅に慰められて。原來大兒の杖傷の。一夜の間に痊ける。那折までも身に附られたる。仙丹不測の即效ならん。と思ひながらも明々地に。言に出すべき時宜ならねば。聞つゝ屢領くのみ。纔に眉を開きける。この日も暮て次の日も。亦其次の日も妙義より。短平すらかへり來ず。押繪はさらなり時八も。をり〳〵訪來て便なきを。且呆れ且訝る而已。鄙語に云。木乃伊採の。木乃伊にもやなりけん。と噂をしても影刺さぬ。五月の天の厚曇。晴ぬ思ひに胸安からぬ。押繪は單留守の宿。晝は四隣の人々にうち守られ。夜は亦其家々女兒等に。戍せられつゝ明すなる。开も里長の掟にて。這宵は五保　甲某乙某の女房四名許と。天目屋碟助と喚做したる。磁器經紀の女兒に。其名を長良といふ。二八ばかりなる少女も相番にて。韓錦許集合來ぬれば。押繪は他等を勞ふて。蚊遣火盤も馳走の一種。茶を煮て羞めなどしたる。开が中に彼天目屋の女兒長良は。その容止醜からぬに。心艶めく癖なればや。白粉許多厚化粧して。京染の浴衣。緋太織の帶掛したる。時の流行にあらざるなければ。自餘の家々等はうち笑ひて。茄圃に只一箇なる。冬瓜なりき。と譬めきて。笑ひを攬も短夜の。四表八表話說深初て。二更との鐘の聞えしより。多辯も言語寡く做りて。弱きはさらなり。老たるも。皆船を漕小動の。磯の見るめも閉られて。打眠ざる者あるとなければ。蚊遣の煙り絕果て。刺す蚊は桃の潰し如く。打ば鮮

て。人の性の善なる所。しかあるべき事ながら。健宗の這回の罪は。後に解る丶よしありとも。縦二郎の縲絏は。饒さる丶をりなかるべし。と思はぬ者なんなかりける。案下重説。這時縦二郎が白猪の宿所には。女弟押繪はいぬる日に。仲兄八重作等に。今番の禍鬼を告て。喚返さんとて。鶴脛奈我四郎を。妙義の和田正忠許遣し丶に。徒に日を經ぬる而巳。他だにかへり來ざりしかば。いかに〳〵。と思難て。この義を里長に告知せ。又見越松時八を。招きよせて問試るに。時八も眉を顰めて。然ばとよその事なれ。妙義は其路遠くもあらぬに。奈我四郎がゆきしより。早三四日になりぬれども。今將信あるとなきは。必是故あるべし。と思ふのみにて猶日を過さば。轍の鮒魚より危ふかるべき。我師縦二郎は呵責の笞に堪傳。命果敢なくなるとあらば。後悔何ぞ及ぶべき。おん身にも知られし如く。鴨脚短平は。鶴脛の弟子にて最老實なる壯佼なれば。今朝しも他にこ丶ろ得させて。又妙義へとて遣したり。縦那里に障ありて。八重作哥も奈我四さへ。今猶かへり來がたくとも。明日は必音耗あらん。それよりも猶慨しきは。我師の禁獄せられし始より。飯を獄舍へ餽るとすら。禁めて饒させ給はねば。我師の安危を問ふべくもあらねど。里長刀禰を誘へて。悄地に風の便を聞くに。我師ははじめ兩三度。呵責の笞に撻懲されて。苦痛いふべくもあらざりしに。其杖傷一夜の間に。餘波もあらず愈しかば。幻術にもや。と疑れけん。その後は牽出されて。責懲さる丶となければ。彼身は倒々に

良が面色艶きたるに。其被物さへ今樣にて。鄙に稀なる美女とや見てけん。且其名の長良と喚るゝを。梭手としも聞愆ちて。是なりけり。と思ひぬる。十六郎は醫笑して。猶も其頭に躲て在り。小夜の深るを俟程に。夏の夜なれば短くて。子二刻時候になりしかば。婦女們は皆睡けん。鼾の聲のみ高やかにて。或は石臼を挽く如く。或は擂盆を拓に似て。咳きだにもする者なければ。十六郎は折てそよけれ。と庖湢の方に赴きて。入るべき隙を求るに。其頭に三尺の紙窓あり。玆よかゝなんと手を掛て。その竹格子を破棄るに。敢毫も音たてず。素より塀を乘穴隙を鑽に。自由を得たる盜兒の。本事は今さらいふべくもあらず。其首より閃りと潛入りて。搔攢々々悄やかに。件の坐席に入りて見るに。這里には在明の燈火あれば。擇擊に做すも易かり。況四五箇の婦女們は。垂たる幮の內にあれば。囊の物を取るよりも。かたくはあらぬ技なりき。と思ふ十六郎は幮の內を透見て。又思へらく。這衆牝を結果けて。後に少女を搔攫なば。背安きに似たれども。倘愆て緊要の。貨物に痍を負せなば。後悔何ぞ及ぶべき。先那梭手を抓出して。布囊を銜せ。兩手を綁りて。次の間に退け在らせて。しかして後に婦女每を。鏖に做すならば。櫃共侶に玉を摧く。悔あらずして妙なるべし。と尋思をしつゝ。幮の下を。擡起して衝と入りて。臥たる長良の胸前を。搔抓み曳寄れば。驚覺て吐嗟と叫ぶを。聲立させず布囊を銜せて。肱腋に楚と抱きて。出んとしける程もあらず。押繪は蚤く睡覺て。刺す行燈の灯

血に身を染て。斫られし夢をや結ぶらん。と思ふ押繪は傍痛さに。先門の戸を楚と鎖て。行燈引提て片隅へ。直しつ燈心掻立て。却納戸より廣やかなる。一張の㡡を出し來て。开が儘坐席に垂しかど。衆女子は我にもあらねば。守する押繪に守せられて。有斯べしとは知るよしもなく。鼾に人を驚すまで。肱枕して臥たれば。押繪は刺す蚊を拂難て。こゝろともなく其㡡に。潜入りつゝ脚方に在り。詞敵のあらずなりては。耳に氣の憑く蚊の叫び。蚤に刺さるゝ夏の夜の。貪睡なければ寢とはなしに。憶ず一霎時目睡けり。爾程に盜兒白日鳶十六郎は。曩に鏑野郡司範的に。邪慾の機密を承しより。那鏑箭の短刀をもて。錦韓縱二郎を。無實の罪に陷れ。尚且他が一家事なる。男女遺なく鏖にして。單彼公の戀詫給ふ。棧手とやらんいふ少女を。掻攫ひつゝ將てゆきて。悄地に相公に進せなば。約束錯へず賞財は。百も二百も得がたからず。さりとて疎忽に手を下さば。毛を吹て疵をや求めん。先や那里の光景を。克覘果さずば。いかで便宜を知るよしあらん。と尋思をしつゝ。韓錦の。禁獄せられし其次の日より。夜毎に潜びて彼家の門に立。背門より張ふに。女子毎は五六名。集合て在らざる夜はなけれど。是ぞ彼棧手と喚做す。美女なるべし。と思ふばかりの。少女は絶て見るとなければ。悄地に望を失ふて。猶も夜を累る程に。這宵押繪を戍しぬる。五保の家々毎が。天目屋の女兒長良を。調戲つ其名屢喚ぶを。十六郎は物の隙より。洩聞つ覘看るに。鄙語に云夜視遠眺にて。長

親衡にも。敵するに足る一期の本事を。なべての人は知らざりしに。この時はじめて著して。角ふ腕の揮きに。十六郎何でふ勝よしあらんや。面赭やかに力を裒めて。推仆さまく欲すれども。阪に車を遣如く。押繪は毫も身を動さず。推ね推ね。と含笑ながら。思ひの隨に疲らせば。十六郎は紉るが如く。腕衰息吻あへず。泥に醉ふたる鯽魚に似て。眼眩みて術なさに。引外して逃まくするに。押繪は捉たる手を緩めず。程こそよけれと其機を揣りて。ヤと聲被て又投しかば。十六郎は阿とばかりに。柱に頭顱を打傷られて。瞑眩さけん起も得ず。當下押繪は柱に掛たる。麻索一條解下して。起んと蠢く十六郎を。起しも果ず兩手を綁りて。突と牽立て檐廊なる。眞中柱へ推附て。圏々纏にぞしたりける。爾程に五保の家々等長良さへ。思ひかけなき押繪の勇悍。他一人に拯れて。倶に賊難を免れし。その歡びはいふべうもあらず。且驚き且呆れて。共に押繪を勞ふ程に。長良は口に銜られたる。布囊を左右して。掖出しつゝ云云。とありつる事の趣を。告て腮を撫摩れば。家々等は創めて盗兒の。欲するよしを曉得て。原來彼奴は人の小孃を。勾引しもしつ奪略る。惡棍に疑なし。然ればこそあれ長良少女の。よろづ艶めく夜化粧の。單花やぎたる故に。擇採にやせられけん。危ふかりき。とうち笑へば。押繪はやよ。と推禁めて。おん身等はまだ知らざる所あり。奴家熟々這奴を相に。他はいぬる宵家兄の留守に。彼短刀をもて來つゝ。大兄を罪に陷れたる。竊匏兒に竟宵たり。その折は甲夜闇に

蔭にて。盗兒入りぬと見てければ。毫も躁ず腕を伸して。既に半身懈より出ける。十六郎が左の踵を慥と抓みて。聲高やかに。皆さま起ね。盗兒入りぬ。と喚に驚く十六郎は。兩膝衝て憶ずも。抱きし長良を投退て。捉られし踵を蹴放々々。身を採反して腰なる刃を。拔んとしける那時遲し。押繪は速く衝とよせて。其手を捉りて擲投に。簀子も拔けよと投しかば。十六郎は云とばかりに。身を空さまに筋斗りて。臀杵搗て平張時。腰なる刃は空走して。鞘のみ帶にぞ遺りける。這物响に驚覺ける。四箇の家々等は膽を潰して。叫んとする聲に齒も合ず。亦只物の怕しさに。一團に身を縮して。異口同音に南無阿彌陀佛。彌陀佛彌陀佛。彌陀佛。と唱る聲も霜夜の虫に。似たる刺蝥が露の間も。生たる心地せざりける。有斯し程に十六郎は。女子と思侮りし。押繪が剽捷向ふに前なく。身は只弄丸に取るゝ像く。投伏られても猶懲ずまに。他も亦覺ある。暴雄なれば且羞て。疼痛を忍身を起來て。刃を拿るに遑なければ。疾視哮る聲も尖く。這賽輛繪奴。我由斷して。跌されれば輾びもしたれ。今番は饒さず。覺期をせよ。と罵りながら拳を揚て。打倒さんと岌より蒐るを。押繪は噪ず身を反して。その手を丁と拿禁て。左を刺て引組だり。十六郎は色黑く。骨逞しき大漢にて。赭塗の金剛神に異ならず。押繪は二八の少女にて。花の容顏雪の肌膚。立雙ては節瘤松に。集白鷺に彷彿たれども。天の生做す勇婦の本性。矧亦この日來。兩箇の家兄の大刀筋さへ。角觝白打も看傚ふて。筋力は素より義秀

を知るよしあらんや。鼠兒と思侮りて。於乙に撞見て拉れしは。我不覺にして不覺にあらず。かくまで幸なき今宵の造化。既に擒にせられし上は。何もかも打出して。告るは易き事ながら。然しも女の子の敵手にせられて。首伏せんは榮なき技なり。郡司の御舘へ牽もて遣りね。那里へ參らば備に知らん。と澁るを押繪は聞あへず。そを今爾に傚んや。這里にて首伏榮なくは。是もていはせん。いはずや。と刀の背撃丁々。と擲るゝまでに撻懲せば。十六郎は苦痛に堪ず。聲戰して。やよ等ね。助りがたき命なりとも。今這苦痛は堪がたかり。然らば事皆招了せん。且く息を吻せてよ。といふに押繪は刃を斂めて。然らば疾いへ甚麼ぞや。と問詰られて十六郎は。隱によしなく如此々々。と喚做されたる盜兒にて。はじめ美濃路にありし事。近會この地に流來て。鏑野郡司の奴隸等が。旅行父女を採籠て。亂打にしける折。その行李を竊略て。蚤くも其首を逃去りしに。翼日件の奴隸等に。擒捕られ。廳に牽れて。久しく獄舍にありし事まで。招了して亦いふやう。地獄も佛なきにあらず。いぬる日思ひがけなくも。我身は庭に牽出されて。鏑野殿の云云と。憑ませ給ふ機密は二个條。この身の罪を饒されて。彼短刀を授られ。この夏衣さへ圓金一枚。賜りしかば辭去りて。形の如くに計ひつ。此の屋主人韓錦を。旨く陷れたれども。餘の一條は暴挊にて。這里なる男女を鏖にして。梭手と喚做す一個の美人を。生捕りて將てまゐらば。賞祿は乞ふに依ん。とある相公の密意は大吉利市。事皆術よく做し果さん。

て。認るまでにあらねども。彼吭の大きなる。舊瘡の迹あるを覺たり。這奴の吭にも舊瘡あり。況身材の最高かる。聲音のよく似たれば。問はでも知るき彼夜叉の。尷尬兒なるに疑なし。いでく。といひつゝも。嚮に十六郎が鞘走したる。刃をやをら拿揚て。引提て屹と立向ひて。やをれ尷尬兒。曩に彼短刀をもて。來て這首へ投入れて。我大兒を罪なはしたる。間諜兒は爾ならん。开は何人に憑れたる。又嘗その事のみならず。今宵這頭へ潜入りて。睡轉たる那少女を。搔抓みて出まくしけるは。必是所以あるべし。彼謀計を課たる。其人の姓名はさらなり。その身の出處來歷まで。綽號實名漏すとなく。有つる隨に招了せば。呵責の苦痛を饒すべし。然るを賴陳る歟。秘して不の字をいふならば。爪を剝し指を斫墜し。筋を斷骨を拗ぎても。招了させでやは已ん。疾うち出しね。いはずや。と引提し刃の尖を。十六郎が面前へ。衝出し晃かして。刀背もて百會を打敲く。生平に似げなき小女の胆勇。儔罕なる光景に。十六郎は怕惑ふて。眼を睜り舌を掉ひ。只阿唯々々。とばかりに。應するのみ。左右なくいはず。況長良も家々毎も。彌呆るゝ押繪の勇悍。彼身に鬼神の馮給ひし歟。然ずは天狗の所爲なる歟。と思へば然しも憑しく。又只恐怖も一入にて。皆忙然と目戍てをり。姑且して十六郎は。眼を開き嗟嘆して。沙礫の中にも黄金あり。飯の内にも針あるを。察る者は豫も知ん。かゝる少女の大勇多力は。指の神巫でも看通しの。法印なりともいかにして。いまだ本事を見ざる者。前より是

き鶴脛。奈我四郎なるべし。と思ふ押繪の應をまたず。家々等は齊一應と答へて。身を起す者一兩名。遽しく鎖を外して。先とばかりに戸を推開れば。各草鞋を脫捨て。找入る者別人ならず。八重作次世を首にて。大江杜四郎成勝。峯張楽六通能等と倶に。鶴脛奈我四郎。鴨脚短平も。相從ふてかへり來つ。奈我四郎は引提たる。挑灯弗と吹滅程に。押繪はいそしく立近へて。家兄かへらせ給ひしか。大江主峯張主も。よき折からにこそ侍れ。脚力を二度までまゐらせしに。思ふにも似ず遲かりしは。必故ある事なるべし。といふ間に八重作は。大江主僕を客坐に找めて。檐廊の中柱に。綁着られたる十六郎を。皷目に懸つゝ坐を占れば。奈我四郎と短平は。背睨し褁を解下し。手拭をもて脚を拭ふて。倶に八重作の後方に居り。當下八重作は押繪に向ひて。驚思ふ大兄の災難。恨くは聞く事の。遲かりければ時日後れて。通宵走りてかへり來にける。我のみならず。大江峯張。兩君子の遐棄給はで。倶に杖を回されたれば。心つよく思ひねかし。といへば成勝通能も。膝を找めつ押繪に向ひて。不慮の憂患を云云。と彼一語此一語。奈我四郎と短平は。使に立し彼折に。人々は和田許在らで。尋托つゝ日を過したる。事の始末は簡樣々々。如此々々なりき。と告る程に。四箇の家々等は長良と共に。火盤に炭を吹起して。茶を煑復して薦めなどす。然れば奈良櫻八重作の。迎に立ける鶴脛。鴨脚等に得逢ずなりて。今宵やうやくかへり來にける。其顚末を原るに。八重作はいぬる比。大江主僕と共侶に。

と思へば夜毎に潜來て。裏面の容子を張ひしに。婦女子のみにて男子は見えず。开が中に二八ばかりの。少女も一箇なきにあらねど。其名を押繪と呼るれば。相公の悄地に欲し給ふ。梭手ならぬを曉得て。猶も便宜を覘ふ程に。今宵は一箇の增花あり。身のざまの艶めきて。容止も醜からず。其名を呼を洩聞くに。宛梭手といふに似たれば。他なるべし。と思ひつゝ。更闌人定りて。庖湢の窓より潜入て。見れば垂たる幮の內に。皆肱枕して睡りて在り。先彼梭手を曳出して。後に自餘の婦女等を。鏖にしつべし。と尋思をしつゝ。幮中に。潜入りつゝ那少女を。曳出さまくせし程に。鈍や和女郎に脚を捉れて。剰慘く括られしは。鼠盜冥加に竭たるならん。早く御舘へ牽ずや。と去向をいそぐは範的の。必や法度を枉て。術よく首を續るゝならん。と悄地に賴み思へばなり。押繪は事の趣を。聞つゝ憶はず駭嘆じて。原來この夏四月の時候。防守翁を打擲して。目さへ脚さへ傷りしは。鏑野殿の奴隷の所爲にて。其折行李を掻攫しは。白日鳶衛でありけるよ。开のみならず今宵亦。梭手長良の語路相似たるを。よくも思はで淺慮に。聞錯しは笑ふべし。といひつゝ軈て臂近なる。硯箱を曳よせて。其頭にありける鼻紙に。十六郎が招了の事の條々漏隱なく。猶幾番も問質しつゝ。書寫し稍寫果て。僅に筆を擱く程に。阿甦寺の鐘鏗々。と早丑三になりにけり。浩る折から外面に。人幾名歟來ぬるあり。忽地聲を震立て。妖々よ。蚤く起出給へ。八重作哥を將て來れり。疾開ずや。と呼門ふを。問はでも知る

の消息を告知らせ。且見越松時八の。口状を傳へなどして。鶴脛と共侶に。八重作等に相倶して。這宵かへり來にけるなり。押繪は件の顛末を。茲にはじめて聞知りて。日屬の疑惑稍解て。却今宵料らずも。一箇の盗兒を生拘て。敲きてその來歴を。聞知りしより。我大兄を救出すべき。便宜をこそ待たるなれ。其故は如此々々なりとて。件の白日鳶十六郎を。敲きて招了の一五一十。曩に防守叟を打擲しけるは。鏑野殿の奴隷の所爲にて。その折行李を竊略しは。件の盗兒十六郎にて。彼相公の密意に依り。梭手少女を略奪り。自餘の男女を遺もなく。鏖にせまく欲しける。梭手長良の名の錯誤さへ。他が招了の條々を。方僅寫着たり。とて其書を八重作等に見するにぞ。自餘の家々等も長良さへ。今宵はじめて知押繪の力藝。武勇は在昔の勇士にも。劣らざるべき揮きを。只管稱て已ざりける。是をうち聞く奈良櫻。八重作の歡びはさらなり。成勝通能。奈我四短平。智あるも智なきも笑片向て。我們かへり來ぬる時。那暴雄が中柱に。繋れたるを見出して。故ありぬべく。思ひしかども人我言の多かりければ。そを問ふ暇なかりしに。驚思ふ押繪少女の。武勇によりて女子們の死を免れしのみならず。韓錦を救拿るべき。照八を獲てけるは。一大功といひつべし。天も明ば里長に。告て領主に告訴せん。噫芽出たしと。衆響の。こゝろ詞も異ならぬ。主客齊一散動きけり。有斯し程に短夜の。早曉天になりしかば。家々等は薪水を資んとて。立て庖廚に赴く程に。八重作押繪は大江主僕の。路

季彦父女を送るとて。和田正忠許赴きて。逗留いまだ久しからず。折から北武藏なる某の山に。野猪獵ありと聞えしかば。大江主僕はそを見て來ん。とて主人に告げて出まくす。是により八重作も。季彦さへ共にゆかんとて。只管去向をいそぎしかば。主人和田十郎正忠も。我郷導に立んとて。猛可に路次の准備をしつゝ。主客甲乙倶に五名。伴當二名許從へて。彼山投て出てゆきける。その次の日に奈我四郎は。正忠許尋來て。主の女房と梭手等に。事云云と聞知りて。亓が儘居つゝ俟べくもあらねば。その詰朝辭去りて。狩座投ていそぐ程に。最慌しき折なれば。その山の名を聞愆て。路異なれば早に得逢ず。爾後鴨脚短平も。再度の使に立られて。正忠許赴くをり。只直走りに走る程に。脚の爪を蹴放しつ。正忠許迪り就ける。その夜猛に腫痛て。進退自由ならざれば。鶴脛を追蒐て。倶に彼山にゆくべくもあらず。左右する程に。八重作主客五名は。兩三日彼山に在り。倶に獵を見盡して。伴當を將て妙義なる。宿所へかへり來ぬる程に。鶴脛奈我四郎は。路次に迷ふて日を過しつゝ。這時やうやく行遭ふて。歡びもしつ且恥て。白猪の異變を告しかば。八重作はいふもさらなり。成勝通能。季彦正忠。孰歟驚き患ひざるべき。奈我四郎を相具して。その次の日の曛昏に。宿所へかへり來にける程に。短平が脚の指の。趺瘡稍愈しかば。和田の宿所を辭去りて。又彼狩座を投ていそぎける。路程いまだ遠からず。八重作等が彼山より。かへり來ぬるに逢しかば。押繪が單俟不樂たる。白豬

等の食料にとて。握飯煮染物さへ。二三重なる漆櫃に斂めしを。乾兒の小力士に搭駝して。韓錦許來ぬる程に。里長も亦彼宅の。安否を撿輪の爲に。とてみづから出て來にければ。料らず衆皆集合てぞ。八重作等に對面しつ。昨宵押繪が武勇の捍さ。盗兒白日爲十六郎を。生拘しより。韓錦の。寃屈の罪を。解よしあるを。聞つゝ並て膽を潰して。皆相賀して喋々たり。开が中に里長は。八重作等と共侶に。檐廊の邊に出て。綁られたる十六郎に。其招了を二たび問ふに。十六郎は弱果て。敢て僞ることを得ず。そのいふ所ははじめの如く。既に押繪が寫着たる。條々に異ならねば。里長は然もこそ。とて軈て一室に退きて。八重作等に相譚つゝ。訴状をものしなどする程に。憶はずも時を移して。亭午の時候になりしかば。時八は押繪に告げて。齎したる握飯煮染物を。里長五保等に薦果て。その殘れるを。十六郎に喫するに。綁りたる肱手を隢さず。飯も菜も箸に串さて。他が飽まで飼けるを。見る者笑はぬはなかりけり。是より先に鴨脚短平は。八重作に吩咐られて。防守和田を迎んとて。其路次までゆきけるに。この時いまだかへり來ず。そを俟べきにあらざれば。大江主僕八重作押繪は。時八奈我四郎等と共侶に。晝飯を果し。衣裳を整へて。郡司の館へとて出てゆくに。里長幷に礫助は。長良の事あれば。俱に御館へまゐるべし。自餘の五保等は。留守せよ。とて時八と奈我四郎に。盗兒十六郎を牽立させて。彼館投て赴くに。訴訟人は都て六名。成勝と通能は。笠深く戴きて。如雲如月

次の疲を慰めんとて。次の間に伴ひつ。奈我四郎と短平は。猶舊室に在りて。十六郎をぞうち守りける。登時杜四郎成勝は。八重作押繪等に叩くやう。聞くが如きは那十六郎は。韓錦主を救拿るべき。證人たる事勿論なれども。素是郡司の間諜兒なり。彼謀計に依る者なれば。彼首へ牽もてゆくと雖も。言を易て僞るべき歟。是も亦知るべからず。況郡司の奸虐なる。火をみて水に倣す事あらば。訟一朝にて定りがたけん。然らば和殿兄妹の外。訴訟人の多さを好とす。この義を思ひ給はずや。といへば通能も共にいふやう。曩に防守叟も和田生も。這地の異變を聞知りしをり。その驚駭大かたならず。坐つゝ物を思はんより。己等も推續きて。白猪へいなんといはれしかば。通宵路を走らずとも。久しからずして必來つべし。遮莫主兒妹等。告訴の爲に彼廳へ。十六郎を牽もてゆきし時。件の兩翁の來臨せば。不便にこそあらむずらめ。といふに八重作有理と應て。然らば奈我四郎まれ短平まれ。天明て後に路次まで出して。防守和田の兩翁に。有つる事の趣を。告げてこゝろを得させん歟。と相譚ふ間に天は明て。鴉の屢鳴、聲すれば。奈我四郎と短平が。開く前後の板戸の音も。生平よりは最勇しく。家々等は既に炊果たる。朝飯の饌建して。押繪共侶長良さへ。もて出て主客に薦むる。混雜涯なかりける。左右する程に五月霽の。朝日出て。風猶涼き。辰牌ばかりに。天目屋礫助等の五保は。代りて家々等に睡らせん。とて各々出て來つ。又見越松時八は。この日韓錦の家の成する。里長五保

新局玉石童子訓卷之二十七

東都　曲亭主人口授編次

第五十七回

虐政迫て勇男女四牢を開す
阿遡寺に諸俊傑舊主に謁す

却說奈良櫻八重作次世は。女弟押繪と共侶に。盜兒白日鷲十六郎を。時八奈我四郎に牽せつゝ里長と五保なる。礫助に相倶して。この日未牌左側に。當郡の領主なる。鏑野郡司範的の。部領の舘に來にければ。里長則先に立て。腰を屈めつ門卒等に。訴訟人のよしを告げて。找入りつゝ案內知たる。問文廳の這方なる。問注所へ赴きて。事云云と聞上て。準備の目錄を呈すれば。執接の靑士こゝろ得て。猶云云と問訂しつ。若們は例の如く。其盜兒をうち守りて。廳の局の內に集居よ。程なく御沙汰あるべきぞ。といふに里長額衝承て。退りて八重作押繪等に。告げて皆共侶に。廳の局に赴く程に。最苛しき伙兵五名。麻衣の四天に。肱甲脛衣して腰に兩刀を跨へたるが。或は十手。捍棒を握持て。突然と出て來つ。訴訟人等を疾視て。卒とて廳の角門を。開きて件の衆人を。局の內に呼入れて。共に非常を守りて在り。爾程に鏑野

にて従ひける。作者曰。前板第三十三回。孟林寺の段に。大江杜四郎と。峯張楽六が。兩箇の盗兒、狸毛吹五郎、低杭駝鳥太を生拘しより。料らず疑獄の照据を得て。乙襲六市四摠はさらなり。朱之介さへ救出されし。この段。押繪が盗兒。白日鳶十六郎を生拘しより。料らずも冤の。證を得て。其兄縦二郎の冤獄を啓かまくすると。事の趣少しく相似て。大に異なり。そを何とならば。駝鳥太吹五は。三好職善の間諜兒にあらず。且非義の義を知る者なり。況木工頭職善は。奸虐邪慾の酷吏にあらず。只其才足らざる故に。疑獄を久しく悟ざりき。是を鏑野郡司範的に比れば。雲壤との差あり。範的の行ふ所。邪慾に出て。盗兒をもて。韓錦を陥れたると。日を同くして語るべからず。かゝる奇對は水滸傳にもなきにあらず。好看る者は作者の自注を。俟たずして。自知らん。畢竟八重作押繪の訟に。十六郎を率もてゆきて。範的の奸詐を折く。後の吉凶甚麼ぞや。开は下回に。解分るを聽ねかし。

新局玉石童子訓巻之二十六終

丁右の如し。そのをりから己等は。他郷よりかへり來て。事云云と聞くにより。うちも閣べき者ならねば。里長に告げ女弟を帮助て。出訴して罪なかりける。兄樅二郎を償まく欲す。訴狀に具なり。この義を仰上られて。樅二郎を獄舍より。饒出し給はらば。十六郎を交易に伙兵達に遞與もせん。然もなくはいかにして。大事の照兒を捨置て。豈阿容々々と退んや。といはせも果ず苛三は。眼を瞋し聲苛立て。這奴極めて大胆なり。彼身は武士の浪人なりとも。閭文廳へまゐりながら。繩拿の下司までも。腰に刀を帶たるは。逆心あるにぞあらむずらん。然ればこそ若們が。牽もて來ぬるその盜兒は。白日鳶十六郎と喚做して。做ざるとなき歹人なれば。近曾御掟により搦捕らせて。獄舍に繋置れしに。いぬる夜悄地に脫去りて。その往方知れざれば。物色して密々に。索らるゝを知らざるや。憶ふに其白日鳶は。素より韓錦か隊下の歹人にて。受たる恩の多ければ。他が禁獄に代らんとて。若們に謀合して。故意牽れて來ぬるならん。然らずは二八ばかりなる。優少女に拄られて。搦捕らるべくもあらず。その佯詐を知るべきのみ。遮莫其虛實を。今拷問の御沙汰なく。饒して开が儘返し給ふは。十二分の好造化ならんに。己が儘なる無法の亂言。守を守とし怕れぬは。若們も白日鳶と。共に獄舍に繫ん歟窪に烏滸なる白物かな。と權威に誇る非法の高聲。只目前の道理を枉て。主の惡事を塗隱す。皆被たる刷毛目の麻衣も。淺き伎倆ぞ透融る。言果べくもあらざれば。八重作時八奈我四郎。

郡司範的は。方僅八重作押繪の。訴訟を。粗聞くに。彼等が既に生拘て。牽もて來ぬる盜兒は。曩に悄地に罪を饒して。秘密の不正事を課たる。白日鳶十六郎なる事さへ。其目錄にて知られしかば。心驚き憂悶へて。いかにすべき。と思ふのみ主張いまだ定らねば。先母親大刀自に告知らせて。腹心の家隷なる。鬼薊菁三屆築。鍼持隈八刺高を。閑室に召よせて。主僕額を合しつゝ。密譚に時を移しけり。とは知るよりしもなき八重作押繪は。件の人々と共侶に。十六郎をうち守りて。久しく局の內に在り。郡司の出るを俟程に。長き夏の日攲きて。窓より暢ふ風ぞ涼き。下晡になりし時候。相公の出させ給ふぞ。と奥の方に呼はる聲して。有司を先に立せつゝ。悠然として立出るを。只見れば範的にはあらずして。鬼薊菁三屆築なり。生平よりは最尊太に。端近く坐を占て。八重作等を佶と見て。やをれ訴訟兒等承れ。我君みづから出させ給ひて。告訴の事の趣を。聽せ給ふべけれども。目今猛可に恙をはせば。今日の御沙汰に及ばれず。若們か牽もてまゐりし。その賊兒を伙兵に遞與して。退りて異日の御沙汰を俟ね。といふを八重作聞あへず。幵は本意なきことに侍り。這盜兒白日鳶十六郎。曩に彼鏑箭と歟いふ短刀を。白猪の宿所に投入れて。我兄縱二郎を。無實の罪に。陷れたる歹人なる事。他が招丁にて發覺れたり。はじめは爾りとも知らざりしに。昨宵這奴が潛來て。長良と喚做す同宿の。少女を奪畧まくせしかど。玆に侍る我女弟。押繪が單搦捕て。撻懲しつゝ責問しに。他が招

紵○時八奈我四共侶に○後方を佶と見かへれば件の屏風を推開きて○顯出るは別人ならず○鎬野郡司範的なり○蒼色の麻衣に○小刀を腰にしつ○長袴の裾蹝返して○上坐に立駐り○四下に响く聲震立て○やをれ屆藥○最手緩し○我那里にてうち聞くに○八重作等の訴訟は○取るよしもなき詭譎なり○牽もて來ぬる十六郎は○樅二郎の支黨にて○曩に獄舍を脫出て○往方知ざりし罪人なるに○饒して返す事やある○我この故に撃留たり○矧又押繪とやらんは○女子に似げなき大膽不敬○領主の廳にて憚りもなく○我身主僕を罵るに○同穴なる狐をもてす○今是をしも忍べくは○何事を歟忍ばざらん○一箇も漏さず搦捕りね○最手緩し○と敎圉たる○下知に莿三有司等さへ○阿と額衝きたる頭を擡て○兵毎御掟ぞ其奴等を○打仆して皆絆ずや○と劇しく傳ふる諸聲に○局の内に侍りたる○雜兵四五名○阿と應て○身を起しつゝ閃かす○或は十手捍棒○透もあらせず稠籠て○搦捕ん○と犇めきたり○事の敗れに里長等○毀物なる礫助は○さらに生たる心地せず○咱等も側杖打れやせん○と怕惑ひつ逸早く○角門より逃出て○外面投て走りけり○當下八重作押繪はさらなり○奈我四郎さへ時八さへ○事急にして一言一語の問答に違なければ○倶に必死の覺期を究めて○敢亦毫も擬議せず○雜兵等の十手の下を○搔潜つゝ曳抓みて○虀粉に做れ○と投伏々々○局の板壁に掛たりける○赤樫の六尺棒を○手に手に取りて打振々々○範的主僕を撃んと找めば○莿三并に有司等は○驚噪ぎ立塞りて○共に刀

慍憤胸に滿て。睨詰たる。开が中に。押繪はいとゞ怨に堪ず。柳眉を逆立星眼も。沃朱までに苛三を。一霎時うち見て却いふやう。相公の出させ給ひなば。禀すべきと多かれども。這白日鳶の招丁にて。左にも右にせ御僻事の。免れ給ふ方なければ。猛に病着に假托て。同窓なる狐に等しき。有司達に捌せ給ふ。御胸中こそ知られたれ。權威に募り理を非に枉て。十重も二十重も推裹まで。惡事を秘させ給ふとも。天知る地知る。人知る我知る。この白日鳶の招丁を。傳聞く者語續ば。只この甘羅一郡の。良賤士民のみならず。他鄕の民まで竟には知らん。やよ家兄。今日は千萬いふとも加比なし。十六郎を牽もてかへりて。異日の御沙汰を俟んのみ。といふに八重作嗟嘆に堪ず。押繪が意見寔に爾なり。この生拘十六郎の。我兄と交易に。なさるゝまではいかにして。有司達に渡さんや。卒退るべしといひつゝも。この時までも懷にしたりける。訴狀を拿出て。廳の檐廊に閣て。卒とばかりに皆共侶に。十六郎を牽立て。外面投て出まくす。現八重作押繪のいふ所。正に是鏑野主僕の。惡事を攻る鍼砭にて。轉しがたき當然の。道理に苛三有司等さへ。呆れて口を鉗みて在り。既にして八重作押繪は時八と奈我四郎に。白日鳶を牽立させて。局の樞戸推開きつゝ。出まくしける程しもあらず。苛三等の背の方に。建たる屛風の蔭よりして。丁と打出す銑劍に。十六郎は背の窮所を。梢欠までに串れて。潑と濆る鮮血と共に。一聲呀と叫びも果ず。御反仆れて死てけり。是にぞ驚く八重作押

て攔捕んと。犇めきたる。背後の方より成勝通能。顯出る聲高やかに。白猪の兄妹こゝろ強かれ。我們既に茲に在り。いでく路を啓んず。と呼りつ共侶に。刀を晃りと引拔て。驚き見かへる雜兵を。右と左へ斫仆す。今這兩箇の援兵。時に取ては。百騎千騎に等しき八重作押繪等の。勇氣はじめに一倍して。得たりや應と前後より。透もあらせば。撃散せば。雜兵等は辟易して。半死半生ならぬもなく。纔に命を免れしは。脚に信して逃走るを。八重作押繪奈我四時八。成勝通能共侶に。猶逃さじ。と追程に。閭文廬を相距者。六七十間にして。土牆あり。甍を多く疊籠たる。這處に獄舍ありけり。件の六名の勇男女は。料らず茲に來にければ獄卒等。驚き見て。狼藉兒こそ出來にけれ。罪人をな奪れそ。と呼はりつ六七名。各棒を携へて。走出つゝ八重作等を。撃仆さんとて群立蒐れど。八重作等はいかにして。一歩も退くべき押繪も豫て懷にしたる短刀を拔持て。當るに任して。斫仆す。況大江峯張の。刄尖に向ふ者。首と軀と相別れて。仆れざるはなかりける。然れば八重作奈我四時八。共に屠龍の術を盡せば。然しも猛かる獄卒七名。死活は知らず仆れけり。浩りし程に。韓錦縱二郎は單這首の。獄舍に在り。事の仔細は知るよしなければ。まだ暮果ぬ薄明りに。格子の內より透し見れば。今獄卒等を斫倒したる。其人々は我弟妹と。友人弟子ならぬもなければ。うち驚き亦歡びて。やよや八重作。押繪等にあらずや。我縱二郎は茲に在り。救へ。すくへと呼はるにぞ。衆皆齊一見か

を拔翳しつゝ。一霎時は防ぎ戦ふものから。死を究めたる勇男勇女に。勝べくもあらざれば。或は刄を打落され。或は腕を折れて。堪ずや共に逃走れば。範的は勝負を俟たず。慌忙て悚離て。蚤くも奧へ退きしより。手にあふ者はあらずなりたる。八重作は勢に。乘して奧へうち入りて。累る怨を雪んず。と熇るを押繪は推禁めて。やよ家兄。那は危し。我們纔に四名にて。奧まで入らば手捕にせられん。竟に免れがたくとも。大兄を救出してこそ。但死を倶にすべきのみといふに。八重作時八奈我四。寔に然なり。と應へつゝ。檐廊の邊なる。石の手浄盤に附られたる。柄杓に水を汲拿て。倶に咽喉を潤して。外面投て走出れば。既に嚮る加勢の雜兵。甲乙都て十餘名。逃さじ遣じ。と推稠籠るを。八重作等は物ともせず。逆進みつ棒閃かして。息をも養れず戦ふたり。爾程に。大江峯張兩主僕は。今日の讞斷凶多くして。吉寡からんと思ひしかば。嚮に八重作等に推續きて。門内に紛れ入りて。問注所の這方なる。小籬笆の裏に立躱て。彼身の安危を知らまくするに。夏の日既に西に淪みて。黄昏近くなりし時候。聞文廳の局の方に。人の罵り噪ぐ聲して。走出來る里長を。成勝背より掖留めて。問得て玆にはじめて知る。八重作押繪の訴訟は。思ふにも似ず破敗に及びし。事の難義に驚れて。うち入りて援ん歟。出て來ぬるを俟べき歟。と思難つゝ身を固めて。猶も便宜を覘ふ程に。八重作押繪時八奈我四。皆大亂髮ならぬはなく。局の内より走出ける。掃見頭に加勢の雜兵。突然と集來

も修錬の剿捷を。皆目覺く思ひけり。這頭は鏑野範的の。後門前に程遠からぬ。諸人通行の官道なれば。龍潭虎口を稍脱れて。後安きに似たれども。いまだ去向を定得ず。左ても右ても白猪の宿所に。かへるべきにあらざれば。直に妙義へ走ん歟といふ。商量いまだ央に至らず。前後の門を開せて。追蒐出來る緝捕の頭人。西の方より鍼持隈八。東の方より蒐黏苛三。騎馬の打扮一容にて。陣笠兩刀苛しく。隊兵合て五六十名。桃燈蕉火白晝の如く。照す火光に透見て。叛逆人等は那里に在り。脱しなせそ。と呼はりて。東西齋一稠籠る。然れば再度の大厄難に。免れがたかる樅二郎。八重作押繪。成勝通能。時八奈我四郎に至るまで。敢又戰を好まず。倶に刃の折れるまで。殺散し撃退けて。阜曇の甲夜闇に。紛れて倶に走らん。といひ合さねど勇士の本性。手に〳〵刀を引拔て。西と東に別れつゝ。競ふ緝捕の雜兵を。中るに儘せて殺拂へども。他は大勢。躬方は七人。寡をもて衆に敵しがたかる。勢同じからざれば。斫ども刺ども輙くは。路を啓くによしなくて。奈我四郎と時八は。竟に刃を打落されて。搦捕るゝ程しもあらす。白猪の坊の方よりして。忽焉として走り來ぬる。俠客力士二三十名。或は竹槍長柄の鎌。或は杉連枷なんどを。挾みたる幵が中に。頭人なるべし。兩箇の武士あり。芭蕉布の野袴に。信濃麻の戰袍をうちはふり。腰に兩刀を跨へて。毬像なる桃燈の。細柄を袴板に挿み。手に一尺餘なる。鐵扇をぞ采たりける。當下件の兩箇の武士は。近づく隨に聲高

へりて。應と答る八重作時八。奈我四郎も共侶に。獄舍の格子に手を掛て。毀開かまく欲すれども。方三寸なる堅木をもて。造立たる格子戸なるに。八重作奈我四時八は。身に受たる淺痍あればや。倶に力を勠しても。早に開くべくもあらざりしを。押繪は見つゝ喚禁めて。家兄。爾しては時もや移らん。退き給へせん術あり。といひつゝ兩袖卷揚る。其首に建置たる圓柱あり。大きなる鈨打たるは。罪人を責る時。是に繋ぐ爲なるべし。押繪は件の圓柱に。兩手を掛つゝ。やといふて。最も如易に曳拔くに。其長四尺に過ず。是よかゝなん。と拿直して。找みよりつゝ獄舍の格子を。力に信して破と衝く。喃と共に摧破れて。出入自由に做りしかば。縱二郎は且感じ。且歡びて獄舍より。身を斜にして脫出るを。八重作等は相迎へて。斫倒したる獄卒等の。腰なる刀を分捕して。縱二郎に渡し。押繪にも長き。一刀を授けつゝ。却何里より脫去んとて。倶に四下を見かへる程に。成勝と通能は。人より先に見出しにけん。獄卒小舍の簷に掛たる。丈餘ばかりの竹階子を。拿下し來つ土牆の。便宜の所に建掛れば。衆皆是に便を得て。攀登る者都て七名。縱二郎を首にて。八重作押繪。成勝通能。時八奈我四等辛くして。外面に下立に。宛轉る猿猴の。水月を撈るが如く。迭に腕を。蔓にして。携りて輙く下る程に。蚤さは已が肩階子を。假して幇助になるもありけり。开が中に成勝通能は。皆下立ける後に。徐に階子を登り來て。やをら階子を曳抗て。下立つ塹に投掛て。皆共侶に渡しけり。然し

獅をもて群る虎を駈走りするに髣髴たる威勢孰敢當るべき。或は斫れて倒るゝあり。或は撃れて平張あり。或は塹迦に滾び落て。半死半生なるもあれども。是を扶る者さへなければ。搦捕たる時八奈我四を。八重作押繪にとり復されて。咄と頽れて逃走る。其隊に先だつ苛三隈八、騎たる馬を敵に奪れて。前門まで逃て來つ。開よ〱と呼はりて。角門より稠入りける。二隊の雜兵六十餘名。多くは撃れて逃かへる者。三十名には過ざりける。當下正忠成勝等は。躬方を制めて逃るを追せず。痍負兒を扶助させて。白猪の方に退くに。當晩の分捕少からず。雲珠鞍置たる馬二頭。太刀副刀。十手桿棒に至りては。數るに遑なかるべし。有右而正忠正義は。勝閧三たび揚させて。列を正しつ白猪の坊まで。皆共侶に退く程に。約莫這頭の坊賈等は。今宵の匆劇を耳驚しけん。各門の戸を鎖て。寂寥として音もせず。弁が中に這坊盡處の野蔬の市塲あり。朝市の建毎に。近邊の莊客等が。もて來ぬる瓜茄子。其餘何まれ菜蔬の類を。其問丸が受拿て。一霎時積措く狐屋ありけり。人住屋にあらざれば。席薦なども布も儲ず。夜は莚戸を垂たるのみ。素より守人のなければ。和田正忠は先に立て。權且這里に憩んとて。妙義より將て來ぬる。一箇の從者に吩咐て。其莚戸を褰抗さすれば。成勝通能櫛二郎。八重作押繪を首にて。時八奈我四郎短平等。這餘加勢の力士と共に。甲乙都て三十餘名。皆共侶に立よりて。各意衷を盡さまくす。當下成勝通能は。今宵痍負し者の爲に。腰なる仙丹を拿出すに

く。やよや韓錦の黨。こゝろ安かれ。既に援兵來れり。斯云者を何人と喚する。當國妙義山下の人氏。和田十郎橘正忠。其子小十郎正義等茲に在り。衆皆殲め。と駈立る。聲共侶に惴雄の。壯佼甲乙十五六名。數ならねども鴨脚短平もあるものを。と名告被け先を爭ふて。短兵急に攻立れば。憶はず是に氣を得たる。韓錦等の男女五名。枯たる苗に雨降沃ぎ。轍の鯽鮒の水に逢ふ。威力はじめに同からず。得たりや應と開き合して。奮擊突戰手を盡せば。緝捕の衆兵亂噪ぎて。歩列踉蹌になる隨に。正忠の後陣の壯佼。是も亦十五六名。先に進みし躬方を援けて。三七二十一に擊散す。然程に和田の冢男。小十郎正義は。今茲二八の少年なれども。武藝膽勇。一人當千。故にし筑石の御曹司と。紀平治太夫を兼たるにや。連りに礫を投かけて。瞬く間に緝捕の兵を。打仆す者五六名。其拳に逆ふ者。免れがたく見えしかば。苛三も隈八も。鬼胎を抱き馬乘放て。躬方を盾に做す折から。忽地城館の塀裏より。長柄の桃燈を刺出し。勇士なるべし兩箇ばかり。踏續台に陟りけん。半身を顯して。慌たる聲高やかに。喃緝捕の人々にものいはん。鬼薊主鍼持主。方僅御館に異變あり。大刀自御前の召るゝぞや。其逆黨は打散して。やよや疾參りねかし。と呼はる聲を聞しより。苛三隈八。いへばさらなり。衆兵並て慌噪ぎて。更に戰ふこゝろなく。素破事こそ出來たれ。退や〳〵。と叫びつゝ。門内投て入らまくするを。正忠正義。其隊の力士等。大江峯張韓錦。男女の兄妹透もあらせず。暴

押絵と共に。正忠父子に謝していふやう。巳等が死を辭せずして。屢大敵と戰ひしは。素より兄の爲なれば。今さらにいふにしも足らず。貴老は他鄕の人なるに。巳等に推續きて。到來せられしのみならず。這地の力士を駈催して。彼門前にて。追隊の多勢を。擊退け給ひしは。神出鬼沒の妙手段。彼折援兵なくは。我們は大刀をれて。竟に虜にならむずらん。料らざりける幸ひなりき」といへば亦成勝通能。樅二郎以下の毎。奈我四郎時八も。共に稱て巳ざりしを。正忠は聞あへず。否其義にも亦故あり。奈良櫻主の知られし如く。大江峯張共侶に。彼山獵を見てかへるさに。韓錦の事云云と。不慮の窮阨を聞しより。有繋に胸の安からねば。防守主に相供して。和主達に推續き。白豬にいなん。と議する程に。孩兒小十郎正義も。ゆかまくほしといふにより。他と從者一名を將て。防守と共に主僕四名。連りに路次をいそぎつつ。今日午過る時候なるべし。既に白豬に遠からぬ。田文の茂林の那方にて。豫相識鴫脚短平の來ぬるに逢ぬ。聞くに昨宵押繪少女の。白日鳶と歟いふ盜兒を。生拘しといふ一奇譚に。驚きもしつ今さらに。歎ばしさも一入にて。いよ／＼路次をいそぎつゝ。白豬の宿所に來にけるに。五保のみ留守して在り。和殿兄妹大江主僕は。里長等に相供して。兩箇の弟子時八奈我四に。白日鳶を牽せつゝ。郡司の御館へとて出てゆきしは。亭午の時候なりきといふ。事詳に知られしかば。喜悅意表に出るものから。又克思へば何とやらん。心許なきよしもあれ

金瘡兒は十餘名なるに。今は藥の多からねば。短平等にこゝろ得させて。其頭に在ける桶の水もて。仙丹を解ゆるめて。八重作押繪。時八奈我四郎。其餘も刀瘡に塗らしつ。且その藥水を飲するに。淺瘡なるは即效あり。深瘡も是より二三日の程に。皆愈ざるはなかりけり。爾程に縱二郎は。必死の獄舍を拯ひ出されて。憶ずも籠の鳥の。舊巢に還る心地すれども。いまだその所以を知らざれば。こゝろ得がたく思ひしに。この時押繪八重作等が。事知此々と告るにより。昨宵押繪が生拘し。盜兒十六郎の招道にて。告訴の便宜を得たりしに。範的主僕の奸虐なる。そを詐僞として聞容れず。範的反て銃劍を。飛して。十六郎を殺しゝより。事の破敗に及びしかば。胞兄弟一緒に死なばや。と思定めし破獄の顚末。又戍勝通能は。昨宵八重作に相倶して。妙義よりかへり來て。今日も亦八重作押繪等の。贅助に做りし事までも。縱二郎は聞果て。感嘆しつゝ却いふやう。我女弟なりとて譽にあらねど。昨宵押繪微りせば。孰歟彼盜兒を。捕へて我身の冤を解んや。況大江峯張兩君子は。交友知音の爲にしも。其身の安危を擇ずして。彼折助劍せられずは。八重作押繪。時八奈我四郎。猛しといふともいかにして。獄卒までも斫盡して。我縱二郎を救出さんや。實に感ずるに餘りあり。夫百足の虫の。死して仆れざる者は。扶助多きによりてなり。持べき者は弟妹なり。知己良友の信にこそ。と只顧感嘆したりしを。側聞する正忠父子。以下の力士等共侶に。寔に然なりと應けり。當下八重作は。

動く力士の毎。素破事こそ出來たれ。郡司なりとて法度を枉る。暴戻に孰歟從ふべき。其義ならばせん術あり。徑に彼館に推よせて。門戸を破り。塀を毀ちても。打入りて目に物見せん。早く准備をせよかし。と罵りつ共に退きて。時を移さず竹槍桿棒。連枷なンどを引提來ぬる。其間に防守叟は。我正忠に呵くやう。譬那壯佼等の資助によりて韓錦を。拯ひ出す幸ありとも再度の追隊を防ぐべき。脚溜の要害なくば。思慮淺きに似たり。愚按ずるに。阿蘇寺の住持閑厢和尚は。素是出家人なれども。善に與し惡を癉。志ある者に似たり。況先住の老和尚は。俗姓肥後の人にして。菊池に舊縁ありと敷聞にき。嚮に己屢參詣して。疎からずなりしより。迭に知己の思ひあり。今彼寺に走ゆきて。閑厢和尚に相譚はゞ。拒まで集會の義を許さるべし。咱等は文墨を技として。且年既に老たれば。戰の場に臨みて。堅を摧き鋭を辟く。壯佼們に及ぶべくもあらず。然れば身に相應しき。火急の使介に立べからん。この義誰何。と談せらる。开も緊要の事なれば。爾るべし。と應へつゝ。翁を彼寺に遣したり。浩りし程に躬方の衆人。二たび集ひ來にける折から。鏑野の館の方に。人夥叫ぶ聲。手に取る如く聞えしかば。衆人齊一驚き立て。那里の安危心許なし。疾打出よ後れなせそ。と罵りつ器械器械を。引提て走りゆかまくするを。咱等一霎時と推禁めて。各位は勇あり義あり。筋力飽まで悍しといふとも。いまだ軍陣に熟ずもあらば。必勝の利を得がたかるべし。我は妙義の山里なる。和

ば。防守叟と商量しつ。主なき宿にて俟んより。彼門前まで赴きて。韓錦等を迎んとて。鴨脚を案内にして。我們父子防守叟。従者さへ相倶して。彼門前まで來にけるに。那里には憩ふべき。茶店などあるとなし。爾るを久しく立在なば。怪めらるゝ事もやあらんと。思へば軈て退きて。便宜の茶店にて俟程に。韓錦の弟子も。亦弟子ならざるも。早く風聲を聞知りけん。恩を感じ。威風を慕ふ。壯佼約莫二三十名。漸々に集ひ來つ。今日韓錦の赦にあふを。俟得て相迎んとて。共に茶店に憩て在り。是により我們は。その衆人にものいはれ。ものいふ隨に問試るに。皆是俠客力士にて。我毎に相似たる。同憂の志。是なきもあらざれば。迭に憑しき思ひあり。是により短平に。云云とこゝろ得させて。韓錦の厄解けて。告訴の人々と共倶に。出て來ぬるを見るならば。走りかへりて告よとて。彼門前に跟置しに。久しくなるまでかへり來ず。既にして沒輪刺す。下晡になりし時候。短平が走來て。巳等に告るやう。方僅五保の礫助が。大く怕れし面色にて。彼舘より走出しを。追蒐つ曳駐めて。告訴の首尾を諮るに。礫助叟は息吻あへず。然ればとよ其事なれ。郡司の相公の暴虐做す。證据人なる白日鳶に。ものもいはせず銖鋧もて。結界けて縢、奈良櫻兄妹を。搦捕せまくせられたる。禍鬼二たび起りしかば。里長刀禰さへ我身さへ。側杖打れて連累に。做りもやせん。と怕惑ふて。辛くも走出たりき。と告げも得果ず振放ちて。飛が似くは逃去りにき。と告るに驚く我們と。共に散

妻子を見かへるに遑なけれども。然ればとて棄殺にせば。計の足らざるに似たり。暫時身の暇を給はるべしと。應へて軈て時八等と。共に宿所に退る者。十二三名には過ざりけり。开が中に短平は。孤獨なれども鶴脛の。幇助になるべき者なればとて。縦二郎が指揮して。他をも共に遣しける。當下和田正忠は。妙義なる妻と梭手等に。この地の異變を告知らせて。こゝろ得させずはあるべからずとて。倶して來ぬる一箇の從者に。言如此々々と吩咐て。些の路費を取せつゝ。這宵路を走れとて。妙義の宿所に返しけり。左右する程に。夜は初更になりぬれども。二たび緝捕の衆兵の追蒐來ずなりけるは。亦是故ある事なれども。併此義士等の。幸ひにして今はしも。心に被る隈もなければ。早く阿蘇寺に造んとて。市場の菰屋を立出て。列を正せるその毎は。和田十郎正忠父子。韓錦縦二郎褄鯉茂洋。其弟奈良櫻八重作次世。その女弟多力の押繪。浪速の旅客。大江杜四郎成勝。峯張柒六郎通能を首にて。其隊の力士二十餘名。分捕の馬二頭を牽せて。雲斂りて隈もなき。月を燭に整々と。件の梵刹に近づく程に。遠望の爲に出されたる。道人走りかへりて。季彦等に報にけり。當下松煙齋防守筑四郎季彦は。青法師等と共侶に。三門まで出迎へて。來ぬる人々に對面しつ。引て客殿に赴く程に。力士等は件の馬を。道人に預け且秣を飼せて。軈て次の間に集合けり。爾程に閑廂和尚は。沙彌道人等に吩咐たる。豫准備の白粥をもて。來會の衆人に。薦めて疲勞を慰める。是に至て季彦は

田十郎正忠なり。楠公より相傳の。兵法陣列武藝まで。人に教るをもて家業にすなれば。我名を傳へ聞れしもあらん。尙少年にあなれども。拙郎正義もこゝに在り。我軍配に從んや。といふに衆皆異議もなく。开は希ふ所なり。教を承まく欲すといふ。因て即坐に隊配を定めて三十餘人を二隊に分ちて。則先鋒の頭人は。小十郎正義をもてす。後陣は正忠將として。去向僅に三四町を。只一跨に走りゆきて。見れば果して和殿胞兄弟。大江峯張共侶に。彼門前にて衆兵と鎬を削る血戰の。最中にてありければ。些も猶豫せず多勢の敵を。擊靡け殺散して。本意の如く和殿等を。救ひ得てこそ候なれ。と身方の來歷。加勢の始末を。言詳に告げしかば。八重作はいふもさらなり。共にうち聞く樅二郎。成勝通能。押繪時八。奈我四郎等に至るまで。感謝に堪ず承服して。多く得がたし。とぞ稱ける。开が中に樅二郎は。恭しく謝していふやう。我身不肖にあなれども。幸ひにして諸君子の。資助によりて萬死を出て。一生を得たりける。悅び是に優す者なし。爾らば茲を退きて。共に去向を卜むべし。就て時八奈我四郎等は。各宅眷あるなるに。うち捨置かば搦捕られん。走りかへりて妻をも子をも。倶して阿甦寺に來よかし。といへば正忠も共にいふやう。只この每のみならず。今宵加勢の人々も。妻子ある者多かるべし。蚤く宿所にかへりゆきて。資財伙器を取歛め。宅眷を倶して阿甦寺に。來會勿論なるべし。といふを衆皆聞あへず。我們附驥の幸ありて。義烈の隊に容られたれば。

欲せざる事は。佯りて君命と倡たり。是をもて一郡の民。皆範射を徳として。武茂を怨る者多かり。矧又範射の妻大刀自は。内訴の義さへ允されて。常に奥まで出入すなれば。武茂に淫酒を薦め。剰讒言して。夫婦の中を裂に至る。かくの如くなる事年ありて。既に鄰國に聞えしかば。範射竟に扇谷朝興主に密訴して。武茂自立の志あり。是をもて甲斐國なる。武田氏に謀合して。兩管領を攻まく欲す。臣範射面を犯して。屢諫れども其甲斐なく。反て比干の胸を裂んとす。事既に急なり。故に已ことを得ず。忠告仕り候。と寔しやかに告げしかば朝興驚き且怒りて。日ならず逞兵三千をもて。部領の館を攻撃するに。範射内應したりしかば。一郡瓦の如くに解けて。防ぎ戰ふ者もなく。纔に忠義を知る者は。主君武茂と共に腹切て敵に首を拿れぬはなし。然ればこの亂軍に。武茂の内室はさらなり。二個の郎君魁孺后孺一族郎黨數を盡して。這里那里にて皆撃れて。免るゝ者なかりけり。既にして範射は。思ひの隨に主を仆して。扇谷に媚ざるとなく。いかで這回の勸賞に。當郡の新司たらまく欲す。と只管に乞稟しゝかば。朝興則その義を饒して。京師へ使をまゐらせて。室町殿に告稟すにより。範射は願の隨意。新郡司にぞ補せられける。是に至りて部領氏の。子孫絶たるに似たれども。尚幸ひに武茂に仕へたる。垣衣と喚做す妾の腹に。武茂の落胤あり。懐胎八月に及べるを。武茂いまだ亡ざる時。範射悄地に大刀自と。計りて垣衣を人知れず。殺さまく欲せしに。垣衣の

嚮に躬方の苦戰の一條。且全勝の爲体を。聞得て歡びいふべうもあらず。共に去向を商量しぬるに這客殿は南面にて。夜風程よく吹入れば。蚤さへ蚊さへあると稀なり。然れば這席なる人々は。有繋に疲勞なきにあらねば。或は柱に背を倚かけ。或は肱を枕にして。憶ず睡を催す折から。當山の住持閑廂和尚は。蟬の羽より薄き法衣の袖に。持る拂子は雪の柳の。風に靡くに髣髴たる。童顔仙骨殊勝にて一箇の行童に。手燭を秉せ。又一箇の美少年と年五十有餘なる。一箇の法師を從へて。方丈より出て來にければ。義士等は驚き身を起して。席を讓りて請待す。其坐稍定りて。和尚は義士等に初對面の。口誼最叮嚀にて。却いふやう。和殿等今宵の揷きは季彦叟の告ぐるにより。聞得て殆驚き思へり。公道をもて是非を論せば。其地方に居て領主に叛く。罪反逆に等しかるべし。亓は凡庸の褒貶にて。鏑野氏は必討べし。故何とならば。範的の暴虐なる。奸詐をもて人を欺き。威權をもて民を虐げ。貪れども飽となく。富といへども足るとを知らず。荒淫にして人の妻妾を犯し。性惡にして善人を憎めり。是をもてその下風に立。其祿を食者。共に主の惡を資て。民の蠱毒にならざるはなし。又只この事のみならで。範的の父郡司範射は。故の郡領。部領朝臣武茂の家老なりき。武茂本性柔弱にて。彼身多病なりければ。一郡の政事を。皆範射に任用せし程に。其權おのづから下に移りて。武茂はあれどもなきが如し。然れば範射の人となり。人を欺く才ありて。民に與るに私恩をもてし。民の

らず。莊子に所云轍の鮒の。泥に吻くに似たるをもて。郎君の乳名を。轍魚丸と名づけまゐらせ。又或ときは和訓の隨に。和達魚丸とぞ喚做しける。有恁し程に。鏑野郡司範射は。弑逆の後催に三稔。不義の富貴に誇しに。逆謀の天罰なるべし。他が最愛の扈從なりける。某乙と喚做す美少年。主を怨る事やありけん。有一宵範射の睡首を刎て。彼身も自殺したりといふ。世の風聲に聞えたり。こは料らざる幸ひにて。最も愉快の事なれども。範射の獨子範的は。當時總角なりけるを母親大刀自後見して。政ごちたりければ。一郡の民叛く者なく。己等は猶瞞りて。隙を覗ふ便なかりき。爾れども魚丸君は。稍成長り給ふ隨に。其性最伶利くて。骨相も鄙ならず。をさ〳〵手習讀書を好みて。武藝も亦密々に。其貯意なきにあらず。今玆は年稍十あまり。七にぞ做り給ふ。然れば興復の志。身に漆するまでに。孝義兩ながら淺からねども。人に告ぐべきとならねば。絕て羽翼を得がたかりしに。思ひきや諸君子の。我爲ならず。も範的を。深く怨るよしありて。討治の軍議あらんとは。こは我主僕の洪福なり。やよ郎君。年來の宿望を。告げてこの諸君子の。補助を憑み給はずや。といへば魚丸恭しく。義士等に向ひ禮を正して。我身不肖にあなれども。倘幸ひに各位の。武勇を借て賊臣を。討滅して舊領に。立かへる日のあるならば。其は諸君子の賜ものなり。母周晉は窪寺なる。草庵に留守して在り是等のよしを聞知らば。さそな歡び候はん。いかで〳〵。とばかりに。感淚坐に瞬て。亦

兄なる。杵臼七郎程榮と喚做す者。早く其機を猜しけん。有一夜垣衣を竊出して。往方も知らずなりにけり。其程榮は別人ならず。迺拙僧の徒弟なる。この法師にて候ぞや。是より後の事共は。この沙彌こそよく知りたれ。愚僧に代りて諸君子に。志願を告げて乞ずや。といはれて杵臼入道は。應をしつゝ膝を找めて。義士等に向ひて却いふやう。目今師父の告げられしごとく。野衲彼折垣衣に倶して。他郷に走らまく欲するに。脚小を携て。闇路を辿らば幾程もなく。追隊の兵に逼られて。搦捕るゝ事もあらん。世の常言に。燈臺は。下暗しともいふなれば。權且この地に躱居て。追隊の奴們を出拔てこそ。徐に他郷に赴くべけれ。阿闍寺の住持閑厢和尚は。師檀の好あるをもて。豫意衷を叩き告げて。憑稟たりければ。一霎時那里を隱屆に。做すにはしかじ。と尋思をしつゝ。當晩垣衣を伴ふて。當山に潜來つ。師父に憑稟ししかば。一議に及ばず許容あり。猶も外看を避ん爲に。我身はさらなり垣衣さへ。竊地に頭髪を剃毀させて。我法名を趙心と賜り。垣衣を周晋と命けらる。是よりの後二三十日。當寺の窖藏に身を潜して。彼毒氣を避る程に。追捕の沙汰も聞えずなりぬ。是に於垣衣と共に。男女の頭陀に打扮て。隨即師父の紹介により。信濃なる川中嶋より程遠からぬ。窪寺に赴きつ。その門前に菴を締びて。世を潜びてありける程に。垣衣の女僧周晋は。安らかに產の紐を解て。武茂朝臣の遺腹なる。郎君生れ給ひにけり。兄妹本意ある歡びなれども。憂苦艱難いふべうもあ

ねば。又卷を更めて。且下回に。解分るを聽ねかし。

新局玉石童子訓卷之二十七終

他事もなく見えしかば。衆皆感激せざるもなく。茲に創てその一奇譚を。聞得て歡びも大かたならず。其が中に八重作押繪は。大江主僕と共にいふやう。我們郡司の非法に堪ねば。命を免れん爲にのみ。已ことを得ず囚牢を破りて。緝捕の士卒を擊走せしを。快とは思はざりしに。魚丸君の奉爲に。後の戰ひを做す時は。義兵にして忠孝の名あり。孰歟叛逆といふべきや。といへば縱二郎頷きて。我等は他郷の流寓兒にて。武茂亡び給ひし比は。我身總角なるをもて。然りとは聞も知らざりき。範射父子の奸惡なる。小莽操といはまくのみ。憎し〳〵と。怨ずれば。衆皆然てこそ。と應つゝ。共に嘆息したりける。當下成勝通能は。趙心法師を熟視て。成勝先問ていふやう。事卒爾には似たれども。御坊は先月某の夜分。信濃路なる客店にて。已等の爲に。部領の莊の。名の錯誤を云云。と解示し給ひたる。行僧にあらざるや。といはれて趙心驚きながら。大江主僕を熟視て。原來其夜の旅客は。和君達にてありけるよ。この地は已等の故郷なれども。今も外看を憚れば。立かへり來ずなりけるに。今茲は先君武茂朝臣の。十七回忌なるをもて。其義を師父に告んとて。悄地に當寺に參詣しける。かへさにて候ひき。恁而昨日はその年忌の。本日に丁らせ給へば。魚丸君に倶しまつりて。又當山に潛來つ。法莚供養を果されしかば。明日は信濃へ還らん。と思ひゐけるに。思ひきや。今宵諸豪傑に邂逅して。事の便宜を得つべしとは。鬼神不測の妙契なる歟。と只管感嘆したりける。この段いまだ盡さ

深たるに。諸賢姑且休ひ給へ。見らるゝ如く當山は。四壁都て堅固にて。石を雜へて築立たれば。敵を防に便わらん。且今は麥の熟秋にて。苅採たる新麥多かり。數百口の夫食に足るべし。この他何まれ承らん。必な介意し給ひそ。と最叮寧に慰めて。卒とばかりに魚丸を。いそかし立て共侶に。奥なる便室に退きしかば。趙心法師は。道人等を。門前に出し在らせて。寄隊の有無を知らせんとて。さても亦辭して退りけり。然れば成勝通能。正忠正義。季彥等はいふもさらなり。八重作押繪は昨宵より。不睡の疲勞なきにわらねば。縱二郎と共侶に。片隅に退きて。睡るともなく假寢の。疲勞は同じ次の間なる。壯佼等に至るまで。借ても足らぬ筥枕。肱さへ枉て。短夜の。明るも知らで皆共侶に。一霎時熟睡をしたりける。かくてその詰朝。鶴脛奈我四郎。見越松時八は。鴨脚短平と共侶に。各宅眷を携て。阿蘇寺に尋來つ。又昨宵野叢獵の市場より。宿所へとて別去りたる。躬方の壯佼十餘名も。各宅眷を由緣ある。隣郡他鄉へ遣して。且同志の。毎幾十名歟。倶して阿蘇寺に集合にけり。然れば押繪のこの時までも。男子の中に只單。打交りて在らん事の。相應しからず思ひしに。時八と奈我四郎が。妻子を倶して來ぬるに及びて。寺僧に乞ふて小舍室を。借得て其女房等とのみ。倶に起臥したりける。爾程にその詰朝に。正忠季彥成勝通能。望洋郎縱二次世作八重等は。倶に防戰の準備を做すに。心利たる二三箇の里の壯佼に。鏑野の館の動靜を。見て來よとて遣しつ。又當郡の衆人に。魚丸出世の事

新局玉石童子訓巻之二十八

東都　曲亭主人口授編次

第五十八回　一炊の榮華健宗郡縣を受く　分兵の計略正忠飛鳥を放つ

登時杜四郎成勝は。杵臼入道趙心と。奇遇を感して且いふやう。事の前より知りがたき。譬ば御坊と己等の如し。彼信濃路にて苟且に。ものいひしをりいかにして。今宵の再會を思んや。最憑しく候。といへば通能も共にいふやう。我們他郷の旅客なれども。縁あればこそ這君の。資助になるも奇からずや。義を見てせざるは勇なきなり。諸賢と倶に一臂の力を。儘さでや候べき。と慰められて趙心は。魚丸と共侶に。歡承て謝していふやう。主君は尚少年なれば。左にも右にも諸君子の。隨意計せ給へがし。世を潜爲なりとも。我身は既に佛門に。入りて許多の年を歴たるに。共に軍陣に立交りて。殺戮を事とせば。相應しからで佛意に背ん。多力は彌陀の本願なり。只諸君子の合力を。仰ぎまつるにこそといふ。折から土圭の轔る音して。當山にて撞出す。丑三の鐘響くにぞ。閑廂和尚は衆人に。うち向ひつゝ辭していふやう。夜は大く

推量るに。外剛くして内柔弱なり。譬ば鰕の甲あるも。反て腸寡きが如し。こゝをもて。勇あるに似て實は勇なく。智あるが如きも只邪智のみ。然ばこそあれ先度に懲て。寄來ざるにもや候はん。今こそ魚丸の御爲に。義兵を起す時宜にはなりたれ。緣故を推時は。單我身を救んとて。諸君子死力を盡されたれば。明日の先鋒は人に讓らず。我們兄妹押繪と共に。三名にてこそ候べけれ。といへば和田小十郎正義も。進み出つゝ倶にいふやう。尙少年なる身をかへり見ず。斯いはゞ烏滸なるべけれど。明日の先鋒は我身をも。必加らるべけれ。と惴るを正忠聞あへず。孩兒幵は過當ならん。押繪少女の武勇なる。汝の及所にあらず。先鋒は兄妹三名にて足らん。といへば椛二郎は傍なる。八重作を見かへりて。汝等もよく思ひね。正義腹子の投石の精妙。明日の先鋒に加らるゝを。厭ふべくもあらずかし。といふに八重作然なりと應て。共に嘆唱したりける。當下成勝は。正忠に向ひていふやう。驚思ふ令郎の投石は。昔の紀平治に。伯仲すといひつべし。就て己疑ひあり。保元物語に見れたる。八郎爲朝の從兵に。三町礫の紀平治あり。然るを世俗は。訛りて。八町礫といふ者多かり。彼紀平治の投石の精妙。よく三町を徹すとも。八町は甚しからずや。先生必考あらん。聞まくほしく候。といへば通能も共にいふやう。その義は己も豫より。疑思ふ所なり。先生必明辨あるべし。いかで〳〵。と請問ば。正忠聞つゝ點頭て。否。咱等なりとて始より。考得たるにあらねども。

の顚末。鏑野範射範的の。弑逆の罪を數へし。告文を多く書寫しつ。こも亦躬方の里人。十數名に吩咐て。其告文を路傍なる。堂社の柱樹木の幹などに貼せて。をさ〳〵忠義の志ある。良民を招きしかば。於是はじめて舊主武茂に。遺腹あるよしを聞知る者。皆歡びて疑はず。且年來範的の。貪りて飽となき。非法に疲勞し折なれば。皆義に仗らざる者もなく。徵めざれども豪農富商の。各魚丸の躬方と倡て。或は軍要金を調達し。或は兵粮を贈るも少からず。矧亦俠客力士。田夫農民の壯なる者。聞傳へ語續ぎて。漸次に阿甦寺に走集る程に。義旗を揚し始より。僅に五六日にして。軍兵三百四五十名になりにけり。是により正忠季彥趙心は。縦二郎八重作等と相謀りて。急に戎衣を買求め。弓箭鎗棒何くれとなく。軍馬の備整へども。範的はいかにしけん。先度の敗北に懲たる歟。只門戸を閉橋を曳て。敵を防ぐの備を做すのみ。寄來つべしとは見えずといふ。嚮に遣しける間諜兒の。かへり來て告るにより。惴雄の壯佼等は。爾らば急に推寄て。攻潰さんとて勇しを。正忠制めていまだ饒さず。却成勝季彥等に商量するやう。範的既に我黨の。魚丸君を相佐けて。當山に籠しを。知らざるとはあるまじきに。今日までも推寄來ざるは。必是故あるべし。この義を何と思ひ給ふ。と問れて成勝沈吟じて。开は巳等も疑ひ思へり。然ればとて。居つゝ敵の寄るを俟たば。兵粮をのみ費して。計なき者に似たりといふを。縦二郎もうち聞て。膝を找めて譚るやう。在下熟々範的の。人となりを

撻惱しつ。やをれ臙尬兒。郡司の舘の事の趣。漏す隈なく聞え上よ。是でもいはずや。いはずや。と只管に撻懲せと。も生拘兒は苦痛を忍て。いふべくもあらざりしを。趙心法師は呵責を制めて。膝を拄めつ生拘兒に。うち向ひて却いふやう。やよやその男子。正可に聽ね。魚丸君上にいます。汝速に首伏せば。命乞して得さすべし。汝は我を認ずとも。大刀自母子は知らてぞあらん。我は則部領の舊臣。杵臼七郎程榮入道趙心是なり。鏑野範射範的母子は。共に弑逆の賊臣なれば。罪饒すべき者ならねども。汝には舊怨もなし。魚丸君の御爲に。那里の容子を告げ稟さば。毒物變じて藥餌に做る。其功なしとせず。然らば目今露の命を。助けらるゝのみならず。必恩賞あるべきぞ。隱さず稟せいかにぞや。と問れて件の生拘兒は。嗟嘆に堪す陳じていふやう。原來聖僧は昨今。人傳にその名聞えし。杵臼主にてありけるよ。小可は數にも足らぬ。鏑野殿の御内人は名を如此々々と喚做さるゝ。侍品にて候なり。當所の容子を見てまゐれとて。秘密使を命せられ。形貌を窶し覘ひよりて。御躬方の雜兵に。紛入らまく欲しゝに。命運至からずして。今この田地に至る上は。何を歟隱稟すべき。徐に聞召れよとて。鏑野の舘の光景。有つる事の趣を。具に招伏したりける。話分兩頭。爾程に曾根見伍六郎健宗は。曩に奈良櫻八重作。多力の押繪が鏑野の舘にて事ありし折。大江峰張主僕と共に。獄卒等を殺散して。獄舍を破り韓錦を。救出しつ土牆を。うち踰て出る程に。猛宗は驚怕

三町礫を謬て。八町礫といふ者は。素是雜劇の杜撰なれども。世俗は保元物語に。三町礫とあるを知らで。只見る所の雜劇によりて。八町礫と覺たり。この故に近來の物の本には。故意八町礫と寫たるあり。世俗の覺易きが爲なり。爾れども後の物の本に。八町と唱るは。昔の紀平治ならざるよしを。諦す作者の用心にて。訛るといへども事に害なし。且八は偶數の終なり。八の下に十あれども。十は一に通ふをもて。八を大數とす。譬ば八雲八重垣の如し。然れば彼紀平治が。投石は技藝の極なれば。訛りと知りつゝ訛りに從ふ。反て作者の深意あり。是を杜撰といふべからず。开を穿鑿て云々。と論る者は。金弧玉絃假をもて眞と做せるのみ。作者の本意にあらざるべし。と言詳に說諭せば。成勝通能。いへばさらなり。衆皆好と相稱て。倶に感佩したりける。浩處に時八と奈我四郎は。外面よりかへり來て。樅二郎等に報るやう。方僅三門の邊にて。一箇の尷尬兒を生拘にき。撻懲しつゝ責問しに。他は郡司の間諜兒にて。彼館の事を知るに足る。意外の新奇も是多かり。この庭上に牽よせてん。みづから問せ給はずや。といふに衆皆相歡びて。开は料らざる幸ひなり。疾々。といそがせば。時八と奈我四郎は。應をしつゝ共侶に。又外面へ退りけり。當下韓錦樅二郎は。正忠正義。季彥趙心。成勝通能八重作と共に。端近く找み出て。件の生拘兒を俟程に。姑且して時八と奈我四郎は。生拘たる敵の間諜兒を。一箇の小力士に牽せ來て。檐廊の下に推居て。杖を抗て生拘の。背三四

悟りて彌噪がず。屢四下を見かへりて。樹蔭を出て書院より。奥の方に潜入るに。咎る者もあらざれば。折こそよけれ。と兩三間。踰て出居の方まで來つ。是より先は後堂なるべし。人音間近く聞ゆるにぞ。却那里に軈隱居て。小夜の深るを俟べき歟。と思難つゝ身は平蜘蛛の。壁に附てぞ物蔭を。求めて一霎時立住ける。爾程に。鏑野郡司範的は。思ふにも似ず八重作押繪の。死力を盡せし大刀風に。敢敵する者もなく。剰兩個の助劍ありて。椛二郎を奪拿り。共に外面に逃去りしを。鍼持隈八鬼薊苛三等。透さず伏兵を駈立て。東西より緝籠たる。後門前にて戰ふ程に。賊徒に加勢の衆兵あり。洪波の如く推寄來て。其戰を援しかば。苛三隈八猛しといへども。左右なく勝を攬とかたくて。勝負はいまだ知られずといふ。注進櫛の齒を挽像く。言詳に聞えしかば。範的是に胸を潰して。母親大刀自に告げ知らせ。我蚤く韓錦奴を。殺さばこの悔なからんに。鄙語にいふ蟻の塔より。隄塘崩なる今にして。倘彼奴等を捕逃さば。世の胡慮にならん而已。速に加勢の兵を。出遣るにしくとなし。甲もゆきね。乙もゆきね。と最も劇く下知しても。左右に胸は休はず。起て見居て見單悶えて。掌鳴らし聲高やかに。連りに近習を喚立れども。怱劇しき折なれば。絶て答る者もなし。範的いよ〳〵焦燥て。かゝる折に。は内外の守りこそ緊要なるに。次の間には誰も居ずや。最烏滸なり。と呟きて。手親吊燭を引提つゝ。猶も近習を喚ながら。次の間の方に出る程に。出居の壁に身を潜したる。健宗を。

れて。獄舍の隅に躲て在り。既にして八重作等が。縦二郎を伴ふて。外面に脱去りし時。その獄舍同じからねば。健宗は后に跟て。出べくもあらざりしに。押繪が彼圓柱をもて。隣の牢を破りしをり。その響にて間なる。格子も共に甘ぎて。料らず便を得てければ。健宗は力に信して。件の格子を推開きつゝ。身を斜にして縦二郎の。出ける獄舍の破れより。潜出つゝ四下を見るに。死活は知らず血に塗れて。仆れし獄卒二三名あり。こも奇貨と含笑て。开が中にて衣物の。宜きを剝拿つ。遺たる刄。漏すとなく。鞘に斂め腰に帶て。脱去らまく欲せしに。外面には緝捕の衆兵。縦二郎等を捕籠て。挑戰ふ聲すれば。健宗は驚怕れて。今さらに塀を乘て。脱去るべくもあらず。人もや來る。とそが儘に。剝拿りし彼衣を。うち套り身裝して。却那里より脱去らん。と思難たる黄昏時。薄暗きに紛れてぞ。憶はずもこの舘の。書院の庭の頭に來にける。と見れば庭門なる片折戸は。いまだ鎖さでありければ。胆太くも找入りて。樹立の蔭に立潜びつゝ。肚裏に思ふたう。我今玆を逃去るとも。鐚一文の盤纏なければ。夏只乞食に倣らんのみ。今宵奥まで潜入りて。些の盤纏をものしてこそ。脱去りたる甲斐はあれ。嗚呼爾なり。と不敵の本性。猶も便宜を覗ふ程に。這頭には守人もなく。日は暮果て奥の方に。狼籍兒を逃すな。といふ聲幽に聞えしかば。健宗は驚として。素破我上歟。と轟く胸を。推鎮めつゝ又よく聞くに。狼籍兒といはれしは。獄舍を破りし彼男女。縦二郎等の事なるを。早くも

がたく思ふのみ。今の必死を饒さる丶。婦人の仁歟。然もなくは。由断させて搦捕る。便直なる歟。と疑ひの。霧ならなくに五月雨の。霽ぬ思ひをいへはえに。畳をも砕く勢ひの。倶に折けて阿容々々と。卒とばかりに共侶に。刄を解き。つ身を退けて。亓が儘左右に跪居たり。當下大刀自は。一箇の有司に持せたる。凳兒に尻をうち掛て。衆人に向ひていふやう。驚思ふ範的の。横死を蚤く闚窺怕れて。我に告げける婢毎われは。うち驚きつ其贋兒を。蚤く搦捕せんとて。折から身邊に侍りたる。守實并に有司等を。從へつ走出て。見れは我兒範的を。害したる其贋兒は。いぬる日我も外なから。認たりる彼乞兒なり。他は實の健宗なりとて。争ひたれとも照据なければ。亓が儘獄舍に入置しに。今日しも縱二郎と共侶に。獄舍を破り脱出て。這頭に紛入たるは。範的を深く怨みて。撃果さん爲なる歟。亓は左まれ右もあれ。曩に近江の觀音寺へ。遣したる兩箇の脚力。稻妻齒四郎。飛鳥疾四郎が。今日晡時の比かへり來て。反命しぬるにより。我姪窓井の贈來したる。回文を開見るに。他が勇伍六郎健宗の。相貌はいふもさらなり。身長聲音瘡痕の迹まで。最も備に注したり。是によりてこれを觀れは。那乞兒こそ我猶子なる。曾根見伍六郎健宗にて。初名を竊み人を欺きて。我館に逗留したる健宗は小雪太と歟喚做したる惡僕なりしを稍悟りて。後悔臍を噬るのみ。折から範的は。出て公聞廳に在りければ。いまだ。報るに及ざりしに。猛可に縱二郎の事起りて。内外捫擇する故に。健宗を獄舍より。

見出して。迭に驚く主客の勢。盜兒入りぬ。誰歟ある。兵每まゐれ。と呼せも果ず。健宗は一期の浮沈を。心慌て腰なる刀を。拔手も見せず範的の。引提し燈燭斫落して。かへす刀に。肋を。柄も徹れと偶然と刺す。刺れて範的。苦とばかりに。身を仰反して仆るゝ處を。乘し掛りつ胸前を。又一刀刺しかば。三魂蚤く天に復り。六魄既に地に落て。黃泉の旅客になりにけり。範的今憶なく。外從母弟なる。曾根見健宗の爲に刺れて。かゝる枉死を致せるは。是併其父範射の。弑逆の餘殃にて。天の允さぬ所なるべし。と世の人後に評しける。間話休題。當下宵勤の近習等は。件の物响にうち驚きて。指燭を乘りつゝ次の間より。走來る者兩三名。この光景に胆を潰して。手の舞足の踏所を知らず。原來尷尬兒逃すな。と異口同音に呼はりて。共に刀を拔翳しつゝ。推籠て擊んと競へは。健宗竟に脫るゝ路なく。血刀を揮て受流し。右に中り左に柱て。命を涯りに戰ふたり。浩處に奥の方より。跫然と出來る者あり。是則別人ならず。範的の母大刀自なり。右手に一條の獨眉刀を挾み。奥隷の老黨なりける。牡嶋番太守實に。燈燭を秉せ先に立しつ。この他有司三四名を。前後左右に從へて目今戰ふ此彼の刄に憚る色もなく間近く立住り。彼制めよ。と下知すれば。有司等早く聲を被て。自他の人々闘戰を休よ。この義御前の御意なるぞ。其尷尬兒も承れ。共に刄を斂めずや。と喚りつ刀の鞘を。間へ丁と衝入れて。推隔つゝ禁れば。近習等はいふもさらなり。健宗も訝りて。こゝろ得

長り比。範射世を去り給ひしかば。親の箕裘を承與て。二世の郡司に做りたる。鏑野範的即是なり。然れども範的の心術。母に孝ある者にあらず。只色に耽り酒に溺れて。人の譏を思はざる。白物なるを爭何はせん。彼身今横死して。與べき兒子あるとなし。この故に我猶子伍六健宗を養ふて。當家の家督に做すときは。疎きを棄て親きを執る。骨肉家の柱にならば。我安身の室とやいはまし。衆皆この義を存ぜよ。と最嚴に言示せば。守實有司近習等は。驚惑ひ額を衝て。唯々とばかりに一言半句も。不の字を敢いふ者なく。御女儀に稀なる御計ひ。左にも右にも仰の隨意。承り候はん。噫芽出たしとぞ稱ける。开が中に健宗は。窮阨喜樂地を易たる。不測の僥倖に。滿面笑れて大刀自を。伏拜みつゝ答るやう。小生獄舎を破られねども。彼韓錦の黨の。狼籍によりて料らずも。出入自由はなりしかば。いかで直訴をせばやと思ひて。玆まで推參してけるに。範的主に撞見して。心慌し意外の殺伐。こよなき罪を釀せしに。小母君の大慈大悲は。菩薩にも優す洪恩德義。我身の罪を驍されて。當家の養嗣に做されなば。養母君には孝を盡し。家を脩め民を撫て。地を增境を啓くべし。猶御慈愛を願ふといふ。然しも雄々しき誓言に。大刀自はうち頷きて。爾らんには近習毎。健宗を奥に案内して。沐浴はいふに及ず。衣裳をも疾更めさせて。今日より主君と敬ふべし。又有司等は外に出て。苛三隈八等を召返して。遺なくこの旨を告知らせよ。彼韓錦の黨の。幾多巢逆を做すとても。多

饒し出しもせざりしに。殺伐かくの如くなるは。意外の凶變。言語同斷。非如我猶子なればとて。一郡の主を害したる。罪は千曳の石より重かり。千番大赦の日にあふとも。赦されがたき罪人なれども。亦よく思へば是を赦して。用ふべきよしなきにあらず。茲に侍る有司近習等はさらなり。這秘事は守實も。いまだ知らでぞあらむずらん。健宗も正可に聴ね。昔我身少かりし時。範射王の妻になりしより。十稔歴まで有身ざりしに。年齢三十に餘りし時。創て孕事ありて。分娩ししは女の子にて。しかも死胎でありければ。勞して巧なく最惜かり。その比範射主の嬖妾に。鶯兒と喚做したるも。我身と同月に有身りて。又同日に産の紐を。解きて分娩ししは男兒なれども。殊さらの難産にて。母は當坐に身故りつ。生れし御兒は恙なし。と早くも告る者ありければ。妬きといふべふもあらず。悄地に其子を執易て。我生し兒といひ做さば。夫婦の中も堅固にて。後々までも安がりなん。と思慮りつ腹心なる。女房にこゝろ得させ。穏婆にも黄白多く。取らせてその兒を入易させて。鶯兒の生たりしは。女の兒にて母も子も。當坐に身故りにき。といはせしかば。我伕は旨く欺れて。开は惜むべき事ながら。嫡妻腹なるは男兒にて。母さへ恙あるとなければ。是に増たる幸やある。賀すべし〳〵。と笑悦びて。五日百日の壽祝も。美を盡さずといふ者なく。掌の珠插頭の花。と愛慈み給ふさへ。實を推せば妾腹にて。我骨肉にあらねども。我子と思へば憎うもあらず。其子は無病壯健にて。稍成

現然者あらん。昔武茂主の變妾に。垣衣と喚做したるあり。他既に有身りて。帯する程に做りしかば。我伕は是を鬱悒思ひて。早く彼奴を結果けて。後安くせばやとて。間を覘ひ給ひしに。垣衣の兄なる杵臼程榮。其機をや猜しけん。垣衣を俱して逐電しつゝ。往方も知らずなりしかば。追捕徒に日を過して。索ね出さでありけるに。殘燼二たび燃まくす。韓錦の反賊等。彼遺腹子を執立て。假に義兵と唱るを。當郡の民欺れて。走集る者多からば。征伐容易かるべからず。茲にも軍兵を催促して。賊徒に勢の馮ぬ間に。對治せずはあるべからず。今さら猶豫する事かはと敎圍悼く言示せば。健宗こゝろ驚きて。應をしつゝ退きて。有司等に下知しつゝ。夜も日も分ず軍兵を。催促緊しかりければ。近鄕の莊客等の。舊主を慕しく思ふもあれども。勝負を未然に料難て。其催促に從ふ者。一千餘名に及びけり。是により健宗は。大刀自と商量して。昔三隈八に旨を示し。嚮に近江へ脚力を課て。觀音寺へ遣しける。兩箇の走卒。稻妻歯四郎。飛鳥疾四郎の功を譽させて。共に侍品に推升し。猶亦秘密使とす。是をもて歯四郎疾四郎は。阿魋寺に潜ゆきて。賊徒の虚實を見て來よといふ。健宗の密意を承て。共に影貌を變つゝ。紛入らまく欲しゝに。敵に毫も由斷なければ。疾四郎は三門前にて。見越松時八等に生拘れ。衆義士の目前に牽居られて。鞫問緊しかりければ。疾四郎は秘すに由なく。鏑野の舘の凶變を。一事も漏さず首伏す。是により正忠成勝以下の義士等は。郡司範的の横死の事。及曾

寡の知れたる烏合の奴原。今日皆搦捕らずとも。健宗みづから打向はゞ。朝日に霧の解るが像く。立地に誅伏せん。又守實は。有司等と共に。範的の亡骸をとり脩めて。安葬の准備をいそぎね。勿論外樣の兵每には。範的猛可に亂心して。故なく自殺し給ひしかば。當家の親族。伍六郎健宗主を。家督に立給ふといはゞ。孰歟不の字をいふ者あらんや。這舘はいはでも知るき。白豬の城の內にあなれば。郭の四門の出入を禁めよ。卒とばかりに身を起しつゝ。一箇の近習を從へて。軈て御堂へぞ退りける。然る程に鬼薊苛三。鍼持隈八は。許多の伙兵を從へて。這時舘の門前に在り。韓錦の黨に。戰負て術もなく。防難つゝありけるに。折もよく大刀自の下知して。急に召かへしゝかば。雜兵二三十名を折れながら。辛く門內に逃入りしに。敵は那が儘退きて。攻擊んともせざりしかば。軈て大刀自に見參して。事の術よくいひ做しつ。範的暴に死去の事。幷に大刀自の猶子。曾根見伍六健宗を。養嗣にせらるゝといふよしを。人より後に聞知りて。呆れて口を錯むのみ。勢かくの如くなれば。只阿容々々と承服して。健宗を主とし敬ひ。事皆彼意に依ざるなく。其次の日の早旦より。老黨有司等と評議して。封內なる士庶人に。範的の死去。健宗の。家督の事を徇知らして。更に税斂を重し。法度を出す者。幾十條。爾後範的の內葬を。執行ひなどする程に。部領魚丸の事稍聞えて。彼黨の告文を。呈閱する者ありしかば。健宗則其告文を。大刀自に見せて意見を問ふに。大刀自もうち驚きて。

居つゝ敵を俟つならば。鉦皷不斷の選佛場を。脩羅の巷に做さんのみ。豈我黨の本意ならんや。そも和田主の意衷にあらん。といふを正忠うち聞て。諸賢の意見愚意に稱へり。先間諜兒をもて。猶亦敵の容害を。探りて後に推寄せん。我憶ふに。敵は一千餘の精兵なり。我義兵は二三百に過ぎず。寡をもて衆に敵するには。伏兵にしくものなし。這里より那里に赴く中途に。便宜の茂林はあらずや。と問へば八重作找み出て。是より那舘に赴くに。路程十八九町にして。犬掛と喚做したる。小松原の左右には。小山ありて。松柏多く生茂れり。伏兵を用るに。便宜にこそあらむずらめ。といへば正忠含笑て。爾らんには城攻より。野戰に利はあらむずらん。といひつゝ趙心法師にうち向ひて。御坊も既に聞れし如く。今日の評議を魚丸君に。聞え上給ひねかし。といふに趙心異議もなく。そはこゝろ得候なり。聞くが如きは範射範的。倶にその死然を得ず。父は召仕ふ男童に殺され。子は亦從母弟に刺れたり。天網恢々疎にして漏さず。皆弑逆の惡報。といはざるを得ざるべし。況其汚穢たる家を嗣ぐ。健宗の終る所。日を僂て俟べきのみ。いで〱といひつゝも。身を起さまくしぬる程に。魚丸は閑厢和尙と。共に徐に出て來つ。義士等に向ひて謝していふやう。諸賢評議の條々は。我次の間に在りて聞得たり。我身の不幸を顧れば。世に立べくもあらざりしに。料らず諸賢の資助を得て。久後まで憑しき。歡び是に優す者なし。といへば閑厢和尙も共にいふやう。魚丸の實母。周晋比丘尼の

根見伍六健武を。養嗣にせられし事までも。言詳に聞知りて。駭歎せずといふ者なく。時八等さへ敵の虚實を。聞知ることを得たりしかば。軍神の血祭に。早く這疾四郎の。首を刎給へとて。只管に薦しかども。正忠敢是を允さず。人各其主の爲にす。他命だも惜まずして。敵中に入らまくしけるは。忠あり義ありといひつべし。我仇なりとて是を戮さば。忠義の方を斷ならずや。といへば季彦點頭て。和田主の意見寔に故あり。世に碁象棋を嗜む者。高手は敵の棋子を獲て。もて敵を攻る故に。必勝ずといふことなし。沙手は爾らず。偶敵の棋子を獲ても。是を巳が有として。使の方を知らざれば。摠敗軍に至るまで。握殺して竟に益なし。因て思ふに。這疾四郎は敵の棋子なり。今是を獲て使ふときは。必我資にならん。握殺すとかは。といふを縱二郎うち聞て。兩翁の教諭感服せり。然らば他を檻に籠て。異日の用を俟つべき歟。と問ふを正忠聞あへず。いかでかは然る事をせん。只時八等に預けあらせて。異日の用に充んのみ。と諭せば成勝。然なりと應て。敵の虚實を知る上は。明日は夙めて推寄て。攻一攻て彼强弱を。試ずはあるべからず。といへば通能の倶にいふやう。那里は素より土堺にて。塀固からず。塹淺かり。いぬる日韓錦を救得て。共に脱去りしをり。那容害は知られたり。攻るにかたきはあらじ。と惴るを成勝推禁めて。約莫這回の軍配は。和田主に任用して。彼進退に依るこそよけれ。といへば季彦は共にいふやう。先にする時は人を征し。後るゝ時は征せらる。

宗敗走る時。進て是を撃ば。必しも功あらん。其餘は又如此々々なりとて。隊配り既に定けりれば。衆皆異議する者もなし、开が中に。小十郎正義と。八重作次世は喜ばず。共に正忠に向ひていふやう。非如詭計なりとも。敵を見て逃走らんとは。勇士の恥る所なり。已等は先鋒をこそ。望ましく候なれ。と辭ふを正忠聞あへず。頭を左右にうち掉て。开は亦自由の至りなり。約莫今番の闘戰は、韓錦を救ふの故に。追隊を防ぐ爲のみならず、當郡舊主の孤兒を。相憐むの故にして。善に與して惡を討、義兵の二字を忘れし歟、然れば僞て逃るとも。始終の勝こそ全功なれ。そを云々といはるゝは。只名聞を思ふに似たり。最烏滸なり。と窘れば。正義と八重作は。言の道理に承服して。又いふよしもなかりけり。恁而正義八重作押繪等は。其夜丑三の比及に。腰兵粮の准備しつ。各隊兵を從へて。犬掛を投て出てゆきけり。夏の夜なれば短くて。幾程もなく明初つ。既に朝日の昇る時候。和田十郎正忠は。杜四郎成勝と共侶に。隊兵二百四五十名を將て。馬上優に進發す。そが中に。防守筑四郎季彦と。杵臼程榮入道趙心は。魚丸を守護の爲、老兵四五十名を禁在せて。开が儘阿甦寺に在り。この朝魚丸は、季彦趙心を相倶して、則弱方の出陣を、三門まで送りける。案下某主重説。爾程に曾根見伍六郎健宗は。小母大刀自の制度として。猛可に郡司に推登されて、隨意ならずといふ者なれど。患る所は韓錦の徒の。故の郡領武茂の孤兒なる、和達魚丸を執立て。阿甦寺に籠ぬと聞えし

上に就きて。告べき由のなきにあらねど。憚りあれば後にこそいはめ。この義を猜し給ひてよ。といふに義士等は頭衝承て。この日の軍議は果にけり。恁而その夜分より。五月雨の餘波にて。大雨連りに降沃きて。三四日霽間なかりしかば。義士等は出陣の准備整ひながら。こゝろならずも霽間を俟て。徒に日を過しけり。既にして六月の。初旬になりしかば。雨霽て溽暑彌増す隨に。義士等は都て甲冑を用ひず。只勒肚に甲手脛衣して。部領の舘を攻まくす。かゝる折から時八は。慌たる面色して。正忠等に告るやう。預けられたる生拘兒。飛鳥疾四郎は。日夜人を隷在らせて。外に出ることを饒さゞりしに。昨宵些の隙やありけん。逃去りてこそ候なれ。亓は己等が愆なるを。いはで已べきとならねば。告まつるにこそ。と云。正忠是をうち聞て。然もこそあらめ。うち捨閣ね。他既に逃去りたらば。我計成ぬべし。とふふを成勝訝りて。悄地に所以を詰れば。正忠笑つゝ聲を低めて。君が才もてまだ悟らずや。欲する所は敵の兵を。分ちて輒く破らん爲のみ。疾四郎既に逃かへりて。我軍議を聞たる隨に。彼伏兵の事をしも。健宗に告知らせなば。健宗聞て期に臨みて。兵を分ちて我伏兵を。擊果さまく欲するならん。爾るときは手に唾して。健宗を擒にすべし。正義と奈良櫻は。各三十箇の雜兵を將て。彼犬掛なる茂林に埋伏して。敵擊蒐らば逃走りて。遠く是を誘引べし。又押繪少女は。三十箇の雜兵を將て。彼茂林の那方なる。水田の中に下立て。田の草を拔く賤婦に。打扮て敵を欺きて。健

在らせて敵陣を敗んといふ。その縡の趣を。具に告て又いふやう。今阿遲寺に集合ぬる。賊徒は三百餘口に過ず。丌が頭人は八九名在り。和田十郎正忠と。大江杜四郎成勝を軍師とす。この他峰張棐六郎通能。和田小十郎正義。韓錦縱二郎茂洋。奈良櫻八重作次世。其次女弟多力の押繪等在り。又見越松時八。鶴脛奈我四郎。鴨脚短平など。喚倣したる小力士あれども。皆是二の町三の町なれば。數ふべくも候はず。又兩箇の老武者在り。防守筑四郎季彥。杵臼入道趙心是なり。共に魚丸の傅にて。只米錢を掌る而已。臣等既に擒にせられて。頭顱を刎りるべかりしに。法師們の憐愍て。命乞するにより。老兵等に預けられて。一日二日と過す程に。昨宵聊隙を得て。脱去り候ひき。と眞語虛談うち雜て。事の術よく演說す。健宗是をうち聞て。原來杜四郎棐六等も。那隊におりけるよ」他等は近江に在りし時。我兒の寃家なれば。必首を斬梟て。怨を雪ん事遠かるべからず。爾るにても。曩に我。歯四郎と疾四郎に。課て敵地に遣しゝに。歯四郎は那里より。かへり來しのみ。寸功なし。又疾四郎は賊徒の爲に。搦捕れて反て功あり。異日賞祿は乞ふに依らん。既に賊徒の計策を。聞知る上は俺も亦。隊兵を分て其伏兵を。駈出させて賊徒の膽を。拉ぎて鏖にせん。然とて軈て。苛三隈八。新參の兵毎まで。皆悉召集合て。明日の隊配を定るに。鬼薊苛三を先鋒の頭人にして。蛇塚眞武四郎。和十六牡丹五を副とす。又竹木虎狼二牛鬼黑九郎は。各雜兵二百名を將て。犬掛の茂林なる敵

かば。そを征伐の爲に。軍兵多く駈集め。亦鍼持隈八。鬼薊苛三に課て。兵法武藝に勝たる。浮浪人を招きよするに。甲斐越後の浮浪人。武者修行の爲遊歴して。近郷に在りと聞えたる。竹木虎狼二。牛鬼黒九郎。蛇塚眞武四郎。和十六牡丹五。舘内也刀齋端高など。喚倣したる賽猛者等。皆十八般の武藝を克すとて。共に霈に應じ。祿に愛て。健宗にぞ仕へける。是より先に健宗は。敵の虚實を知らまく欲して。稻妻齒四郎。飛鳥疾四郎を。阿蘇寺の方に遣玄しに。それより二三日にして。齒四郎一箇かへり來つ。却健宗に報るやう。臣等疾四郎と共侶に。形貌を窶し潜寄て。彼山院に。紛入らまく欲ししに。敵に毫も由斷なければ。猶も潜て在りし程。鈍や飛鳥疾四郎は。敵の爲に見出されて。搦捕れ候ひき。この義を告げまつらんとて。走りかへり候なりといふに。健宗眉根を顰めて。そは安からぬ事にこそあれ。疾四郎賊徒の呵責に堪傳。這方の虚實を口走らば。征伐輒かるべからず。疾推寄て踏潰さんず。と敦圉悍く罵りて。苛三隈八等に下知しつゝ。出陣の准備をいそぐ程に。其日晡昏より雨降て。三四日霽間なかりしかば。思はずも五月を過して。天霽て暑熱彌增隨に。明日出陣と定めたる。その宵飛鳥疾四郎は。阿蘇寺より逃かへり來て。健宗に報るやう。臣等幸あらずして。賊徒の爲に搦捕れ。彼頭人等の團坐せる。客殿近く牽居られて。料らずも彼輩の。軍議を遺なく聞得たり。其は箇樣々々なり。如此々々に候とて。和田正忠の謀る所。野軍を利ありとして。犬掛の茂林に伏兵を。

畢竟魚丸の義兵と。大刀自健宗の逆黨と。茲にはじめて鋒を交る。この日の勝負甚麼ぞや。幵は又巻を更めて。且下回に。解分るを聽ねかし。

新局玉石童子訓巻之二十八 終

の伏兵を。馳出して撃捕るべし。その時賊徒は噪亂ん。我先鋒の頭人等。其機を揣りて逃るを撃ば。全勝全功疑ひなし。孰にもあれ明日の闘戰に。彼杜四郎と梁六を。撃捕者は第一番の。大功といひつべし。其餘の備は如此々々なりとて。舘内也刀齋を後陣に在らせて。飛鳥疾四郎。稻妻齒四郎を副とす。又健宗は鍼持隈八を從へて。本陣に將たるべし。この他牝嶋番太は。有司等と共侶に。母御前に從ふて。鏑野の館に留守すべしとて。既に隊分を定めらる。健宗に相從ふ。軍兵一千三百餘名。其詰朝辰の左側に。先陣後陣陸續として。阿蘇寺を投て進發す。有斯し程に。折もよく。和田大江の義兵二三百名。宛謀合せし如く。兩軍犬掛の茂林邊にて。間近く寄あふたり。義兵は纔に二三百名。是を健宗の千三百名に比れば。三分一に足らざれども。智勇の豪傑ならぬもなければ。整々として毫も亂ず。兩軍鬨聲を揚。箭を射出して。既に鎗を容まくす。朝風に翩翻たる。兩軍の旗の手は。東に靡き西に流れて。勇ましからずいふ者なし。是併荘子に見えたる。蝸牛の角の上にありといふ。蠻觸二國の闘戰に。異ならざるべき小迫合にて。識に足らずと思ふもあらんを。又克思はゞ其死を爭ふ。一進一退同一致にて。大國小郡。忠不忠。勇怯好拙なしとせず。十室邑にも忠信あり。何ぞ其地の大小をもて論せんや。後人歌ありもて證とす。

あらそひは。治れる世のかたつぶり。角にもわたせ。兩國の橋。

の頭人。右の茂林には和田小十郎　左の茂林には奈良櫻八重作。隊兵纔に三十名と。共に樹間に立顯れて。且戰ひ且走れば。虎猱二も黑九郎も。思ふに似ざる敵の伏兵の。多からぬを見て些も擬議せず。那擊留よと。呼はりて。透もあらせず追ふたりける。登時義兵の兩頭人。正忠と成勝は。計畧其圖に當るを見て。時分は今ぞ。疾擊亂せ。と麾揮立る程しもあらず。峯張桀六郎通能は。其隊の遊兵五六十名を。進めて鬪戰闌干なる。韓錦を相助けて。鎗輪々と打振々々。敵二三名刺殺して。四下を拂ふ奮擊突戰。孰歟よく是に向ん。苛三眞武四牡丹五は。怺難く。衆兵と。共侶に亂噪ぐを。得たりや應。と通能茂洋。透もあらせぬ虎彪の勢。群たる羊を逐ふ如く。中るに任せて殺仆せば。苛三等はいよ〳〵慌て。靡を衝て思はずも。健宗の本陣へ。象棋倒に仆れかゝれば。共に亂るゝその隊の周章。健宗刺高。こはいかに。と開合する暇もなく。等く混雜したりしかば。後陣の頭人也刀齋は。齒四郎疾四郎を左右に備て。入替て前なる敵を。擊拂んとて進む程に。後方へ發る鬨の聲。是則別人ならず。豫て計りし勇婦抑繪は。被籠の鎖衣甲手脛盾。鉢打たる顱纏して。腰に苛物造の大刀を跨へ。手に八角の堅木の棒の。節鍼打たるを挾みて。三十名の勇兵を。左右に備前に立して。突然として擊て蒐れば。いよ〳〵驚く健宗屆簗。既に備を亂したる。也刀齋も合期せず。纔に兩隊を引分て。前後の敵を防げども。勝誇りたる義兵の刀尖。鎌もて草を芟如く。勁風木葉を拂ふに似たれば。始には

新局玉石童子訓卷之二十九

東都　曲亭主人口授編次

第五十九回　陣中に巽二を召ぶ狂津の禍事　池水に餘毒を洗ふ賤婦の正說

復說。和田大江の義兵二百四五十名。犬掛の茂林邊にて。健宗の一軍千三百餘名と。端なくも寄逢ふたり。既にして近づく隨に。迭に攻鼓を鳴し。箭を射出して。鎗を合する程こそあれ。健宗の先鋒の頭頭。鬼薊苛三屆簗。幷に蛇塚眞武四郎。和十六牡丹五等。隊兵を進め嵩より蒐るを。是日義兵の先鋒の頭人。韓錦縱二郎は。左右に備る奈我四時八。一百餘箇の精兵を。棧る衆聲高やかに。弑逆無道の郡司の黨。天罪既に時至りて。範的橫死したりしを。猶も怕るゝ心なく。寃家に從ふ烏滸人等。頭を並べて刃を受よ。と罵りつ鎗を拈りて。人なき境に入る如く。多勢を敵手に戰ふたり。浩し程に。健宗の遊軍なる。竹木虎狼二。牛鬼黑九郎は。豫て承たる軍配あれば。敢先陣の勝負に管はず各隊兵二百を將て。別れて左右の茂林中に。咄と盪て打入々々。只是敵の伏兵を。駈出さんとて東西齊一。備を亂して競蒐るを。俟儲たるこの隊

る。股の深疵に。黑九郎は苦とばかりに。馬より撞と滾落るを。奈良櫻の隊兵等。走蒐りつ犇々。と押えて索を被にけり。扨這折の鬪戰に。看官心づきなきとあり。方僅樵者が茲に來て。黑九郎等に健宗の。摠敗軍を報けるも。亦夏草に火を放ちしも。皆正忠の計畧にて。豫よりこの便宜あり。悄地に奈良櫻を資けしなり。閒話休題。然れば亦健宗は。前後の敵に攻擊れて。這隊も既に敗れしかば。孰歟よく敵を拄ん。猛きは名のみ鬼薊。鍼持蛇塚和十六。度を失はざる者もなく。主共侶に活路を。索めて命を免れたる。开が中に。舘內也刀齋端高は。僅に恥を知る者なりけん。その隊の小頭飛鳥疾四郎。稻妻齒四郎等を罵勵して。殿しつゝ退てゆく。當下峰張通能は。鎗挾み佗と見て。天晴敵やといふ隨に。透もあらせず名告被て。鎗拿直す程しもあらず。也刀齋は乘たる馬の。鑣面を遶して。閃めかす鎗の尖頭を。通能丁と受流して。人交もせず戰ふ程に。齒四郎と疾四郎は。也刀齋を相援けて。左右齊一大刀拔翳して。共に通能を撃んとす。通能是を物ともせず。三人を敵手に鎗の手亂れず。精神滋加りて。闘戰いまだ久しからず。韓錦樅二郎は。見越松時八と。共侶に走來つ通能の左右より。競ふて蒐る勢に。疾四郎と齒四郎は。克じとや思ひけん。引外して逃まくするを。通能透さず鎗晃かして。疾四郎の胸前を。背へかけて閃煞と刺す。其間に齒四郎は。路橫ぎりて逃走るを。樅二郎追蒐て。見かへる所を殺仆し。後れて來ぬる時八に。其首をぞ捕せける。有斯し程に也刀齋は。思

似ぬ健宗の。千三百の軍兵は。或は逃失或は撃れて。總敗軍になりにける。爾る程に。左右の茂林なる。奈良櫻八重作次世。和田小十郎正義は。共に敵を誘引て。程よき處に踏駐り。正義は腰に吊たる。嚢の小石を探拿て。追蒐來ぬる虎狼二の。面を臨て撲地と打つ。修煉錯ず虎狼二は。眉間を酷撃破られて。一聲呀と叫びも果ず。馬より撻と墜しかば。其隊の雜兵驚慌て。肩に引被逃走るを。正義は猶逃さじとて。三十名の隊兵を。進めて連りに追たりける。又奈良櫻八重作は。敵の頭人牛鬼黑九郎と。鎗を交へて戰ふ程に。樵者なるべし一箇の賤夫。忽然と出て來つ。牛鬼の隊の後の方より。訛たる聲を震立て。やよ。殿們はまだ知らずや。竹木主はいふもさらなり。館も敗軍し給ひて。總潰になりにたり。なとてや這首をうち捨て。行て救ひ給はざる。やよ喃々。と呼立る。聲に驚く黑九郎。半信半疑の心後れて。闘戰に親まず。其隊亂て見えしかば。八重作得たり。と隊兵を。間なく進めて擊散せば。彌躁ぐ敵の衆兵。支難たる丌が程に。後方に繁き夏草の。中より兵火燃出て。折から吹來る風のまに〳〵。其頭なる樹枝に。煽々と燃遷りて。還るべき路なきに似たれば。黑九郎も隊の雜兵等も。膽を潰しつ慌躁ぎて。退んとすれば煙に包れ。進んとすれば前に敵あり。火に燒れ鎗に刺れて。小鬢を焦し血に塗れ。逃後れたる雜兵は。鋒を倒し悲乞ふて。降人に成るも多かり。丌が中に黑九郎は。稍一方を殺開きて。馬を飛して逃まくしけるを。八重作透さず遮留めて。鎗に縫す

多きに至れり。正忠成勝是を撿して。功ある者を擧ていふやう。豫は今日の鬪戰を。心許なく思ひしに。寡きをもて衆きに勝しは。各位の武勇に憑り。然れども賞罰は。己等が克する所にあらず。魚丸腋子に告稟して。賞祿は異日の沙汰にあらん。猶幸ひなるは。躬方に些の金瘡兒あるのみ。戰沒の者あることなし。然るにてもこの飛鳥疾四郎。稻妻齒四郎は。素是範的に仕たる。止卒なりと歡聞えしに。初は大刀自母子の爲に。近江へ火急の使を果して。反て健宗の爲に忠あり。其後又疾四郎は。健宗の密意に依り。阿甦寺なる我隊に。紛れ入らまくせしをりに。時八等に搦捕れしを。辛くして脫去りしは。這方の虛實を健宗に。報知らせんとてなるべし。有斯はその做す所。惡を資る者なれども。然りとて恩義を知らざるにあらず。是をもて今日の敗軍に。也刀齋に從ふて。齒四郎疾四郎共侶に。殿りして陣歿したり。彼逃脚の蚤かりし。苛三隈八に比れば。沙礫の中なる小粒銀と。いふとも過たりとすべからず。然にあらずや。と理を推て。迭代りに解示す。褒貶細やかなりければ。是をうち聞く縱二郎。八重作押繪奈我四郎。時八短平等に至るまで。耳新なる心地して。共に感嘆したりける。這時殘暑稍去て。下晡になりしかば。和田大江の兩將は。諸隊を合せて。一箇も散さず。列を正して齊々と生捕と降人等を。牽せて阿甦寺へかへりゆく。軍裝の物々しさを。見んとて里人莊客等。老弱男女幾名歟。路傍門邊に集つゝ。過り果るまで見送りて。皆憑しく思ひけり。案下重說。伍六

ふに増たる通能等の。本事に怕れ舌を掉ひて。今疾四郎齒四郎の撃るゝ間に馬を返して。逃て去向に又敵あり。此は是何人なるぞ。問でも知るき押繪なり。今也刀齋が馬を走らして。逃去るを樹蔭より。逸早く見出して。走出つゝ。ヤと聲かけて。彼八角の棒をもて。也刀齋の乘たる馬の。前脚を薙しかば。いかにして堪るべき。人馬等しく撞と輾ぶを。起も立ず亦棒をもて。也刀齋の肩尖を。下高に撻しかば。半身斜になるまでに。弱りてそが儘平臥けり。浩處に奈我四郎短平等走來て。起んと蠢く也刀齋を。綁りて軈て牽立けり。當下通能縱二郎等は。逃るを追ふて茲に來つ。也刀齋は旣にして。押繪が棒に撻惱されて。生拘れしを見て歡びに堪ず。今日の敵兵多かる中に。這奴のみ些ばかり。骨あるに似たりしを。女子の爲に軍功の。一番牌を落されたり。といへば縱二郎も。然なり。と應て。共に笑局に入りにけり。是時敵は皆逃去りて。一人もあらずなりしかば。和田大江の兩將は。勝鬨三たび揚させて。雜兵多く遣しつ。犬掛の茂林邊なる。兵火を餘波なくうち滅せて。軈て其頭に屯しつ。躬方の軍功を問攷ふる程に。奈良櫻八重作が生拘りたる。敵の頭人牛鬼黑九郎を首にて。和田小十郎は生拘竹木虎狼二を牽せ來つ。押繪も亦。舘内也刀齋を。隊の雜兵に牽せ來て。共に是日の功を報けり。この他楽六通能と。韓錦縱二郎の。擊捕る所の稻妻齒四郎。飛鳥疾四郎の首級毎を。實撿にぞ入れにける。亦只是等のみならず。敵の士卒の名あるも名なきも。是日降人になりし者。四五百名の

卒昨日に似ず。最少くなりけるに。愁に推寄て。攻撃給ふは危ふかりなん。只守を固くして。敵を防ぐにしくとあらじ。と異口同樣に諫るにぞ。健宗はいふ甲斐なし。と思ふものから計の。出る所を知らざれば。只得其議に任せつゝ。頭人等を退かずれば。折から雨歇雲霽て。横日刺蔭を瞻仰れば。憶ずも時移りて。申牌にぞなりにける。當下健宗は。簷廊に布せたる。蒲席に坐を占て。單庭を長視て在り。鬱々として樂しからざる。心を慰るよしもなく。今より後の鬪戰に。只全勝の術も欲得。と思凝ども思難て。儚然としてありける程に。怪むべし一朶の烏雲。中天に著れて。降りて庭の松の梢に。羅聚歟。と相程に。嬋娟たる一個の天女。身には浮紋ある。純緑衣を被下したる。其打扮唐畫にて見ぬる。西王母に髣髴たり。左右に從ふ兩個の丫鬟あり。衣裳は官緑を旨として。長柄の翳をぞ執たりける。當下天女は。飄々然と。松の梢を降來て。巻石の上に立在たる。顔は東園の梅櫻の如く。腰は西湖の楊柳に似たり。正に是。天武の帝の御時に。吉野の離宮に天降りて。五節の舞を奏しける。天津少女ならざりせば。楚の襄王を慰めて。朝雲暮雨を詠じたる。巫山の神女にあらずや。と思ふ可の容顔婥約。現人間に得がたき所。讐を取るに物ふければ。健宗はじめは胸を潰して。駭怪みけるに似げもなく。心を鎮めて猶相隨に。魂魄既に天外に。飛を覺ず恍惚と。言問もせでありけるを。思ひかへしつ佶と疾視て。四下に响く聲高やかに。妖たりな野狐奴。我敗軍に樂まず。軍旅の工

郎健宗は。思ふにも似ざる敗軍に。辛く命を免れて。鍼持隈八鬼薊苛三等。以下の頭人共侶に。鏑野の館に逃かへりて。塹の橋を曳せ。四門を鎖。續きて寄來る敵を防ぐ。准備に他事なかりしに。敵はしうねく追も來ず。皆退去りぬと聞えにかば。僅にこゝろを安くしつ。苛三隈八等の頭人に。士卒の存亡を尋るに。始千三百と聞えたる。軍兵過半折れて。四五百名の外を出ず。それすら多く深痍を負ふて。今さら役に達べき者は。三百名に足らずといへば。健宗いよ〳〵氣を屈して。亦いかにとも術なさに。心連に焦燥隨に。然もなきとに怒を移して。近習童扈從等を叱懲し。又有司等が阿容々々。と做すとなきを責罵る。氣色凄じかりけれ。是日の留守に預りたる。牝嶋番太守實すら。慰難て有司等と。共に奔走しぬる而已。しかあれども健宗は。了得に今日の敗軍を。恥て大刀自に對面せず。大刀自も亦健宗の。敗軍を聞しより。單一室に屛居て。出給はずと告る者あれば。健宗は倒に。是を物怪の幸なりと思ふ。身さへ心の疲勞しかば。この夜は侍婢等に肩癖を拈らせ。腰脚を摩せなどして。明るも覺ず熟睡しける。その曉より雨降沃ぎて。終日晴間なかりしかば。幸ひに敵は寄來ず。躬方も亦うち出て。攻べき威勢あるとなければ。健宗は小書院に在り。苛三隈八。牡丹五眞武四郎等を召集て。只管軍議を凝せども。賴涯たる一二の頭人。竹木虎猳二。牛鬼黑九郎。館內也刀齋等は。鈍や敵の爲に擒にせられ。小頭ながら稻妻齒四郎。及飛鳥疾四郎は。共に陣歿の聞えあり。この他も士

連りに請ふて已ざれば。天女は然こそ。と頷きて。軈て書院にうち登れば。又兩箇の神童女も。從ふて其左右に在り。當下健宗は。連りに掌拍鳴して。茶を進らせよ。果子をとて。諸婢每を喚立るを。天女は急に推禁めて。否とよ我は火食せず。況月水を絶れざる。諸婢每を何にせん。和郎願しき事あらば。疾告るこそよかンめれ。といはれて健宗阿とばかりに。膝衝承て且いふやう。在下年尙少ければ。兵を學の日久からず。才足らずして即功を。貪る癖あればにや。昨日の鬪戰利わらずして。賴涯たる頭人三名。竹木虎狼二。牛鬼黑九郎。舘内也刀齋は。敵の爲に擒にせられ。又飛鳥疾四郎。稻妻窗四郎は陣歿したり。さてぞ千三百の士卒。殘少に損はれて。三が一にも足らずなりぬ。有斯に明日の鬪戰に。いかにして可らんや。と問へば神女は袖搔合せて。善哉々々。愆を。知る者は愆少し。我既に和主を祐けて。彼剛敵を征る上は。焉兵の多少に由らんや。遮莫敵に坐拘れたる。頭人等を惜く思れなば。縱十重二十重なる。死囚牢に籠置るゝとも。我神力を施して。必や救出して。明日の役に充んと。囊の物を拿るより易かり。とばかりにして効驗を見せずは。猶疑るゝともあらん。といひつゝ左右を見かへりて。やよや狂津日。狂通氣よ。汝等は疾かへりゆきて。我神兵等に箇樣々々と。旨を傳へて徇知らせよ。はやくゆきね。といそがせば。狂津日狂通氣兩神童女は。應も果ず身を起して。庭に閃りと出る時。簷廊に倚け措たる。鉾を拿りつ衝建て。身を跳せて中天へ。昇

夫に寝食を。忘るゝまでに他事もなき。獨坐幽栖の虚に馮入りて。何事を做さまくするや。然らば本事を見せんず。と罵りながら身を起して。床に建たる弓と箭を。掻拿り蚤く立向へは。天女は噪ず微笑て。愚なり健宗。我豈狐狸の妖怪なるべき。當家に舊き由縁ある。狂津神女を知らざるや。むかし汝が養母大刀自の。少かりし時はしも。深心敬禮叮嚀にて。幣帛賻ざる日のなければ。我も亦其諸願を。果し得させざる事なかりしに。彼身孀夫に做りしより。深心祈禱怠りて。見かへりもせずなりしかば。遂に神威も衰へて。荒たる廟社に獨立つ。今に至りて二十餘年。身は蜘蛛網に包れて。月日と共にふり蘊る。塵埃だに拂ふ者なかりしに。和郎の昨日の敗軍に。大刀自大く驚憂ひて。軈一室に屏居て。只顧我神號を唱て丹精を凝すまでに。默禱一晝夜に及をもて。我も亦喚起されて。來迎せざることを得ず。世話に所云。神は只。人の信ずるによりて。威を增而已。こゝをもて明日の軍陣に。神通力を施して。和郎の爲に彼剛敵を。鏖にせばやとて。來にけるものを甚麼ぞや。惑ふて狐狸の妖怪と。思れんはこゝろ似ず。袖を拂て去らんのみ。と妙音殊勝の示現の奇特に。健宗疑惑氷解して。且悔且畏みて。弓箭投棄庭面へ。走下りつゝ合掌の。頭を抬げて答るやう。俗眼神女を疑ひまつりて。敬禮の儀を欠のみならず。漫に罵辱しを。後悔何ぞ及ぶべき。願ふは今より愛愍納受の。神德を垂給ひて。我身を守らせ給へかし。權且なりとも庭面に。立せまつらんは最も惶し。誘々とばかりに。

敵の寄來ざりしは。雨障りありし故なり。明日は必うち出なん。然れども明日も朝雨ありて。巳の時候より。その雨霽ん。和主その霽るゝを俟て。いそぎて出陣するならば。又犬掛の茂林邊にて。敵軍に撞見べし。其折忌服なき。雜兵六名に。注連縄布遶らしたる。腰輿を舁せて先陣に。交へて敵に薦みなば。我其神座に出顯して。彼剛敵を討滅さん。この義を士卒に告示して。明日戰場に從ふ者。各〻我神號を。唱て敵を撃ならば。勝ずといふ者あるべからず。その折までは我身要なし。明日復目にこそ掛るべけれ。といひつゝ聽て身を退かして。背後の壁に倚とぞ見えし彼身は壁に滅入て。迹だにあらずなりしかば。健宗は愕然。とはじめて夢の覺たる如く。且怪み且畏みて。壁に對ひて伏拜つゝ。默禱して在ける程に。點燭時候になりしかば。近習等は行燈を。引提て出て來にけるを。健宗は見もかへらず。いそしく後堂に退きて。奶々は那首ぞ。と尋るに。侍婢毎の告るに知りぬ。この時しも大刀自は。一晝夜の祈禱斷食果て。既に一室を立出て。粥を啜りて在りしかば。健宗敢て驚さず。その喫果るを俟て。聽て閑室に請迎へて。額を合せ聲を低めて。天女出現の事の趣。示現敎諭の神詫を。遺もなく告しかば。大刀自耳を敧けて。一たびはうち驚き。一たびは歡びて。奇なり〳〵。とばかりに。四下を見遶して答るやう。原來我心願虛しからで。彼御神出現の詫宣ありて健宗を。祐させ給ひなば。非除百萬騎の大敵なりとも。怕るゝ所なかるべし。我身少かりし時故ありて。一修驗者の薦めに任

ると見えしは現にて。往方も知らずなりしかば。健宗は又更に。驚呆れて瞬もせず。一霎時其方を向上たる。貌を改め天女に向ひて。那両箇の神女童は。年尚三五に足らざるべきに。思ふに増たる出没無量。何といはるゝ神やらん。と問ふを天女は聞あへず。否とよ他等は我分身にて。假に其名を呼做して。狂津日狂通氣といへるのみ。素是一體分身なれば。要ある時は是を使ひ。要なければ退けて。その本に復らしむ。譬ば形と影の如し。異神にはあらずかし。と解示す詞いまだ訖ず。但見烏雲猛可に起りて。疾風颯と電光して。霹靂一聲轟然たる。雲中に是物あり。甲冑たる武者幾百千。手に〳〵弓箭器械を。挾みつゝ降來て。庭面狹し羅列たり。當下神女は身を起つゝ。簷廊に立出て。集合たる神兵を。列々と見ていふやう。汝達旨を違ずして。早速の到着最よし。明日健宗の闘戰を。助て敵を鏖にせん。そのをり汝達力を勠して。敵を撃て功を奏せよ。敵は則和田正忠。大江成勝を首にて。峯張通能。和田正義。及韓錦奈良櫻。其女弟押繪等に至るまで。心正しく武藝あり。是を倒ん事容易からず。倘克せずは失あらん。汝達明日健宗の出陣の時分を違ず。彼戰場に來會せよ。この義を告示さんとて。さてこそ招き寄たるなれ。ゆきね〳〵。と腮もて示せば。神兵等は阿とばかりに。應も果ず集る雲に。身を包して忽焉。と空に昇りて失にけり。然れば健宗はこの光景に。いよ〳〵驚きます〳〵呆れて。身を縮してありける程に。天女は徐に席に還りて。又健宗に示すやう。今日

と商量して。老實なる沙彌道人を。信濃へ迎に遣しければ。周晋比丘尼は窪寺より。彼人々に伴れて。昨日來着して。魚丸の子舍に在り。義士等の恩義を感悅して。勝軍を壽祝たる。文多ければ省きて盡さず。看官宜く猜すべし。閑廂和尚素より思慮あり。周晋比丘尼の幽栖を。倘敵に知られなば。奪捉るゝ事もやあらんと。阽む故に使を遣して。母子全きことを得たる。其事の顚末は。前回の文を照して知るべし。間話休題。有斯し程に正忠成勝。通能等の義士は。勝軍の次の日に。徑に鏑野に推寄て。討果さんとて議する程に。雨降ければ只得默止つ。その詰旦も雨降たれども。巳の比及に霽しかば。然らばいそげと。いふ隨に。一千餘名を三隊に分ちて。韓錦縦二郎。奈良櫻八重作和田小十郎を先鋒の頭人として。勇婦押繪と。見越松時八を後陣とす。又正忠と成勝通能と共に三騎は。鶴脛奈我四郎鴨脚短平等を。左右に從へて。もて三隊に在り。齊々整々として列行程に。馬の足搔を早めしかば。まだ未牌にはならざるに。又是一昨日の戰場なる。犬掛までぞ推出ける。然れば又鏑野伍六郎健宗は。天女の示現に違ふとなく。殘兵三百餘名を從へて。うち出んとしぬる程に。前々日敵に擒にせられし。竹木虎狼二。牛鬼黑九郎。舘内也刀齋等三名まで。忽然とかへり來にければ。こはいかに。と訝りて。先其故を詰るに。異口同樣に答るやう。臣等命運全からで。敵の爲に擒にせられ。檻の獸になりしより。免れがたく思ひしに。今朝しも檻の鎖破れて。出入自由になりけるに。をりから守

して。狂津天女を郊外に。祭りて祈らざる日のなかりしに。範射世を去り給ひし後は。又願しきとなければ。こゝろともなく懈りて。始にも似ずなりける故歟。昨日和殿の敗軍は。神の祟りにあらずや。と思へば悔しく惶さに。軈一室に屏居て。斷食祈禱の甲斐ありけん。然る示現を蒙る上は。今さらに疑ふべからず。はやく頭人等に徇示して。明日闘戰の準備をいそぎね。何ぞ躊躇をあらんや。と言語急迫く。解示せば。健宗有理と承歡びて。當晩鬼薊鍼持等の。諸頭人はさらなり。老黨有司近習まで。悉皆召集へて。狂津神女出現のこと。其託宣の掲焉なりしを。言詳に告知らせて。明日の出陣は箇様々々。如此々々にせよといふ。指揮細やかなりければ。孰歟歡び勇ざるべき。千秋樂と稱えつゝ。退りて準備に他事もなく。明るを遲しと俟たりける。然る程に。和田大江の義士等は。當時の闘戰思ふに倍て。勝利十二分なるものから。敢驕れるこゝろなく。士卒を率ひて降人と。生拘兒を牽せつゝ。徐に阿蘇寺にかへり來て。金瘡兒を勦り人馬を憩へ。生拘たる敵の頭人。竹木虎狼二。牛鬼黑九郎。館内也刀齋をのみ。緊しく檻に繫げども。降人等は索を饒して。去らんと願ふ者は留めず。仕まく欲する者は。其意に任せたりければ。軍兵多くなりたる上に。東西の野武士浮浪人。遊民に至るまで。其義を感じ德を慕ふて。走鳩る者少からねば。纔に一日二日の程に。着到一千餘名になりにける。事の幸ある是のみならで。魚九の實母垣衣の女僧周晋は。いぬる日住持閑扇和尚の。趙心季彥等

擡げ出して。先鋒の中央に舁居たり。椛二郎等は又訝りて。彼はいかに。とばかりに。勢尋思に違なければ。八重作正義共侶に。烈しく隊兵を拺めたる。那時遅し。這時速し。件の腰輿の内よりして。怪き少女閃き出て。腰輿の上に立顕れ。長なる雲鬟振亂し。手に寶劍を拔翳して。敵に向ひて揮晃かす。刄の光は電光石火。人の目を射る程しもあらず。巽の方より一陣の。怪風咄と下し來て。沙を飛し樹を仆し。屋を損ひ巖を轉す。狂暴名状すべからず。正に是。九萬里に搏つ彼大鵬も。翅を斂て升らざるべく。十五日にして返る列御寇も。杖を駐めて乘ざるべし。巽二八虫の暴虐成す。孰敢よく是に當ん。然しも勇し一千の。義兵は面を向るによしなく。人馬齊一吹倒されて。沙礫に打れ。樹幹に折れ。或は水田に滾落。或は己が刄に劈れて。死活を知らざる者多かれども。起つ砂煙に天さへ曇りて。曚々朧々となる隨に。親撃るれども。子は是を知らず。主危ふけれども。從者の救ふなし。遮莫健宗の陣中には。毫も風の障わらず。視目も明亮なりければ。先鋒の頭人蛇塚眞武四郎。和十六牡丹五は。竹木虎狼二。牛鬼黒九郎舘内也刀齋等と共侶に。隊兵を分ち逃るを追ふて。敵を擇ず殺仆す。大刀風も亦劇かりければ。義兵は旣に風に搏れて起つだに自由ならざるに。吹入るゝ土沙に眼眩みて。いかにとも術なければ。撃れざる者あると稀なり。然れば一千餘と聞えたる。義兵はいまだ戰ずして。摠敗軍になりにたる。丹が中に。和田十郎正忠と。大江杜四郎成勝は。跌く馬を棄放ちて。追來る敵を斫拂ふ。苦戰の中に呼かはす。

護の雜兵の隙さへあれば脱出て。四下を見るに身甲あり。大刀さへあれば身に帶て。うち連立て出てゆくを。見れども咎る者もなく。來るとも覺ず瞬間に。かへり參候ひき。と告るに驚く健宗は。思はず掌うち鳴して。开は疑ふべくもあらぬ。天女の冥助ならんかし。這里にもかゝる奇事ありとて。狂津天女の條々を。詞短く解示せば。黑九郎也刀齋。虎狼二等は駭歎じて。神の祐を感悦す。然れば屆簗鍼持等。以下の頭人有司まで。いよゝ憑しく思ひけり。是により健宗は。軈て虎狼二也刀齋。黑九郎等を先鋒に加えて。その身は則苛三隈八。有司近習等を從へて。もて二の隊に在り。隨即天女の教に依て。腰輿を舁して出陣の。路次を連りにいそぐ程に。又只犬掛の茂林邊にて。義兵の先鋒に行逢けり。當下義兵の先鋒の頭人。縱二郎茂洋。八重作次世。小十郎正義等は。思ひしより猶小勢なる。敵の先鋒を見て些も擬議せず。鶴脛鴫脚と。共に隊兵を歛る程に。又見る敵の頭人等の。背に揷たる長幟に。竹木虎狼二と寫したるあり。又牛鬼黑九郎。舘内也刀齋といふ。姓名さへ讀れしかば。唐錦弟兄正義等は。訝りつ冷笑ひて。彼奴等はいぬる日の。鬪戰は生拘りて。今も猶阿蘇寺なる。檻裏に籠措なるに。いかにして那里に在んや。是も亦健宗の。敵を惑さまく欲しぬる。拙計にぞあらむずらん。名は同くして人異なる歟。非如兩箇の黑九郎。四箇の虎狼二也刀齋ありとも。何ばかりの事やはせん。蒐れ〳〵。と焦燥折から。又見る敵の陣中より。雜兵纔に五六名。腰輿を徐に

劣らぬ昔三限八。命を惜む心は一致。躬方を盾に逸脚出して。逃るを追撃つ成勝正忠。季彦次世。趙心等の諸頭人は。よき程に追捨て。集ふ躬方を俟て在り。當下成勝正忠等は。季彦趙心にうち向ひて。嚮に敵の陣中に。怪き少女の顯出て。猛に風を起したる。其奇事をいひ出れば。季彦趙心駭嘆じて。丌は必妖怪ならん。就て留守にも奇事あり。檻に籠措れし生拘兒。竹木牛鬼。舘内なンど聞えたる。敵の頭人三名まで。檻を破りて逃亡たり。丌を知る者のなかりしは。是も亦妖怪の。所為にてこそあらむずらめ。只幸なるは閑厮師父の。授させ給ひし秘符を。旗竿の梢に貼しゝより。猛風遂に鎮りて。和君等を救得たり。是を思へば一旦の。敗軍は是非に及ばず。久後憑しく候はずや。といふに成勝正忠八重作。皆駭然と感激して。それにて思合すれば。嚮に敵の小幟に。彼生拘兒。竹木牛鬼。舘内等の姓名見えしを。一切こゝろ得がたかりしに。原來他等は逃亡て。今朝より敵の陣中に。在りけんを知らざりき。と異口同様に答る折から。風の為に離散したる。躬方の雜兵二三百名。建たる義兵の旗を見て。漸次に集ひ來にけれども。峯張通能和田正義。韓錦縱二郎。押領等は。いかになりけんいまだ見えず。權且他等を俟程に。日は既に西に淪みて。人皆疲れて且饑たり。健宗二たびかへし來ば。其度は難義ならん。憶ふに韓錦兄妹。和田峰張は。共に命を免れて。既に寺にかへりしならん。蚤く退き給ひね。と季彦趙心等のいふにより。成勝正忠八重作等は。只得その議に儘せつゝ。殘兵五六

弱方は則奈良櫻八重作。時八短平奈我四郎。乒乓ながら援來つ。且戰ひ且退けども。劾風いまだ歇ざれば。進退自由を得ざりける。然れば又健宗は。天女の幇助に。如意滿足。勝誇たる癖なれば。怨ある杜四郎。菜六等を撃果んとて。苛三隈八。近習の每。從ふ隊兵を前後に立して。馬を蒐しつ追蒐來て。目今敵を稍殺拂ふて。退んとしぬる成勝正忠等を。犇々と捕籠て。て。息をも養れず攻たりける。爾程に。這日も阿蘇寺に留守したる防守松煙齋季彥と。杵臼入道趙心は。思ひがけなき狂風に。弱方の安危いかにぞ。と了得に心許なければ。遺置れし弓手の。軍兵二三百名を從へて。うち出まくしぬる時。閑㕑和尚の授たる。避風の神護符を。旗竿の梢の括着て。幵を眞先を推建つゝ。連りに路次をいそぐにも。實に神符の擁護にやよりけん。然ばかり風の障りもなく。十餘町來ぬる程に。果して成勝正忠は。八重作時八奈我四郎。短平と共に纔に六名。健宗の多勢に捕籠られて。鬪戰危く見えしかば。季彥趙心些も擬議せず。新隊を拵め箭を飛し。喘と囉て斫崩せば。健宗の左右なる。近習の壯佼兩三名。窮所を射させて仆れたる。健宗是に舌を掉ひて。はじめにも似ずなりけるに。敵の射る箭に間なければ。鐡持隈八。鬼薊苛三も。或は肱の外を傷れ。或は太股に箭を受しかば。怺へず濺と亂噪ぐを。成勝正忠八重作等は。枯たる苗の雨に逢ふ。威勢勃然として透もあらせず。時八奈我四短平等まで。新隊の中に入交りて。敵を擊者少からねば。健宗竟に怺難て。捨鞭鳴して逃走る。主將に

出す二の箭三の箭に。也刀斎眞武四郎さへ。共に薄傷を負しかば。其隊の雑兵辟易して。亂噪ぐを和田正義。樅二郎押絵等は。血刀打振殺拂ふ。通能も亦弓投捨て。大刀拔翳跳出て。雑兵多く殺伏て。和田韓錦押絵等と。倶に圍を殺脱て。直走りに走る程に。猶且追來る敵の頭人。竹木虎狼二。牛鬼黒九郎等。新隊を找めて近づくを。正義蚤く見かへりて。腰に吊たる嚢より。一箇の小石を探出して。狙ひを定めて礫と撲つ。投石に牛鬼黒九郎は。片頬を痛くうち傷られて。歯さへ欠けん口中より。血を流しつゝ仰反たり。是にぞ驚く虎狼二と。二隊の従兵胆を冷して。等しく找離たりける。其間に義士勇婦は。又復連りに走る程に。去向に一條の溝川あり。其廣一丈ばかり。素樸二本を投渡して。僅に橋にしたるなり。當下通能正義樅二郎。押絵等は共侶に。向ひへ渡しつその橋を。そが儘蚤く曳棄ける。當下虎狼二黒九郎は。隊兵を將て追蒐來ぬれど。既に橋なければ渡し得ず。あれよ〳〵。といふ程に。又正義の打出す。投石に虎狼二左の眼を。傷られて落馬したりける。こは長追の咎なめり。と思ふ黒九郎さへ口中の。疼痛に堪ねば隊兵に。虎狼二を勦らせ。やうやく馬に扶乗て。皆共倶に退てゆく。見苦しかりける光景なり。然れば峯張和田韓錦。押絵等は是を見て。憶ず笑ひを忍びて。是より後安ければ。脚に信してゆく程に。猛風は稍和ぎて。天さへ既に晴たれども。いかにして迷ひにけん。ゆけども〳〵官道に出ず。と見れば去向の茂林の中に。暴たる小社ありければ。權且這里に憩んと

百名を従へて。季彦趙心等と共侶に。阿蘇寺へぞかへりける。爾程に。韓錦縦二郎茂洋。和田小十郎正義は。嚮に猛風に吹悩されて。殆難義に及びしをり。蚤く袖表を攙投棄て。敵の雑兵にうち交り。一霎時虎口を脱れしに。舘内也刀齋に見出され。多勢の為に捕圍れて。免果べうもあらざりしを。縦二郎も正義も。武勇に覚ある者なれば。近づく敵を幾十名歟。斫拂々々。茲を先途と戦ふ程に。敵の頭人。蛇塚眞武四郎和十六牡丹五等。隊兵を従へ走加はりて。搦捕んと競ふ折から。義士等を援る勇婦在り。是則押繪なり。蹌踉く脚を踏鳴し。群立敵の後より。彼八角の棒をもて。敲き倒し薙拂へば。是にぞ噪ぐ敵の衆兵。開靡くを制て入る。押繪の援に便を得たる。縦二郎と正義は。共に一方を殺脱て。走らまく思へども。敵は看に餘る多勢なれば。斫ども突ども左右なくば。脱果べうもあらざりける。有斯し程に。峯張渠六郎通能は。嚮に猛風を凌難て。路傍なる夏草の。繁れる中に伏躱れて。憶はず時を移しけるに。忽地人多く叫ぶ聲して。やうやうに近つくを。曚朧ながら透見れば。韓錦兄妹と。和田小十郎正義が。敵の多勢を拄つゝ。且闘戦且退來ぬるなり。通能是を見てしより。奮然と身を起しつ。是時までも失はざりける。弓箭拿抗克引て。敵に向て慓と射る。箭局違はず和十六牡丹五は。兜の副緒を。頤かけて射削れて。兜は後さまに撲と墜。主は鐙を踏外して。馬より撻と落しかば。其隊の従兵驚噪ぎて。走れる馬を牽駐め。牡丹五を扶起さまくす。程しもあらず通能の。射

這地は何と喚做すやらん。と問へば縦二郎も共にいふやう。我は白猪の人民なれども。いまだ這頭をよくも知らず。方僅憩ひし後方なる。堂舎は酷く荒たりとも。本尊なきはこゝろ得かたし。その故よしを聞まくほし。と問ふ間に賤婦は。單衣を洗果て。絞りて盥にうち納て。被りたる手拭もて。手を拭ひつゝ答るやう。原來刀禰們は。部領の腋子を補佐し給ふ。義士達にてをはするよ。這里よりして阿遯寺へは。一里半許ら侍るめり。這地は部領の近郊にて。能與村と喚做したる。村落にて侍るかし。昔は能與院といふ。梵刹の寺料なりけるに。その寺頽廢したりしより。今は漸次に荒果侍り。然れば憩せ給ひし荒社は。昔は能與院の境内にて。時の住持の勸請しける。辨天堂なりけるを。といひつゝ四下を見かへりて。聲を低めて又いふやう。聞せ給ひしとはなきや。鏑野殿の母君なる。大刀自御前の少かりし時は。嫉妬心の大かたならねば。範射主の嬖妾はさらなり。憎しと思ふ男女を。咒咀もしつ縊死殺させて。愉快とし給ふ程に。抖擻行脚の惡頭陀に。説惑さるゝ事ありて。黒闇天女を祭給ふに。勸請の地の方位は。能與院なる辨天堂こそ。宜しかるべけれと稟すにより。その堂舎を掠奪して。辨才天の尊像を。這池底に推沈め。其同新に造せたる。黒闇天の木像を。軈て那社に推居て。枉津天女と稱せらる。能與院の住持是を歎きて。愁訴屢なるものから。いかにして聽るべき。反て坊料を召放され。剩寺を追れたる。住持の老僧怨に堪ねば。立去ずして縊にけり。然れば沙彌小

て。皆共侶に立よるに。雨扉は開きて在り。裏面には臺座のみにして。神像歟佛像歟。本尊めきたる者はあらず。網代天井は雨漏に染て。且敗たるを。間なく絨たる蜘蛛網は。天幕に似たりける。況板席は桁朽て。印し丶狐の足跡多かり。又外面には。石燈籠敧きて。笠石を失ひ。老たる杉の幹に。大きなる釘を幾箇歟打入たるは。妬婦の所爲ならん。と思ふのみにて言問ん。人しなければ義士勇婦は。尻打掛て憩ひて居り。开が中に。和田正義と縦二郎押繪は。身に受たる金瘡の。五个所三个所あらぬもなければ。通能は懐なる。藥籠の仙丹を。些ばかり出し分ちて。三男女の痍に塗しつ。己も聊嘗試るに。痍は立地に血を止めて。各その疼を覺ず。饑たる腹さへ飽滿して。心地清爽になりしかば。共に敵陣の奇事をいひ出て。嚮に腰輿の上に立出たる。少女は幻術ある者歟。其做す所奇怪ならずや。且前々日の闘戰に。生拘たる敵の頭人。黒九郎。也刀齋。虎狼二等三名まで。今日健宗の隊に在りて。我們を撃まくしけるは。怪むべくこゝろ得がたし。といふ。甲一語乙一語。うち譚ふて在りし程。日景稍敧きて。遠寺にて衝鳴す。晡時の鐘聞えしかば。暮ぬ先にと皆立出て。ゆくといまだ百歩に過ず。と見れば左手の方に。廣やかなる盃池ありて。前向の岸に蓮多く。葉を布花を吐まくす。夕風の最涼さに。這方の岸に一箇の賤婦。敗たる單衣を洗ふあり。通能等は歩を住め。件の賤婦を呼かけて。やよや婦人言問ん。我們は軍敗れて。阿遮寺に還る者なり。然るを迷ひて官道に出ず。

る釘を見ても知り給へ。當初大刀自御前の。黑闇天を祭給ひし由を。妒婦等が聞知りて。丑の時參をしぬる者。咎なき杉に疵を負したり。こも其照据に侍らずや。と言詳に說諭せば。通能聞得て謝していふやう。適愛たき和女郎の才幹。言者我爲に裨益あり。なれども疑しき事なきにあらず。といへば縱二郎も共にいうやう。聞くが如きは其黑闇天は。人の造りし木像なるに。飛行して健宗の。陣中に在りて風を起んや。この事のみは信がたし。と詰るを賤婦聞あへず。刀禰達曉得給はずや。非情無心の物なりとも。靈あれば做すとあり。昔唐山の故事を聞侍りしに。豐山の鐘はおのづから鳴り。魏楡の石はよく言ふといへり。鍾と石とは非情なるに。自鳴り。克言ふは。外より是に馮物ありて。然る奇異を做せるならん。天女の木像の飛去しも。是に由て思ふべし。世にいふ物怪變化は。人の一念の致所。天地をも動すべし。在昔唐山杞梁の妻は。深く良人を哭する故に。城是が爲に陷るといへり。善惡其差ありといへども。世に人の一念ばかり。誣がたき者はなし。又物の馮て靈あるは。衣に移香したる如し。幷を除去りがたくとも。藥をもて是を燻さば。その移香立地に。散失て迹なかるべし。刀禰達この理を悟給はば。彼妖怪を對治して。敵を滅し給はん事。日を僂へて知るべきのみ。疑るゝとかは。と說れて通能縱二郎は。俱に感服したりける。當下正義押繪等も。感嘆しつゝ賤婦に向ひて。驚思ふ和女郎の辨論。いかで其名を聞まほし。抑宿所は那里ぞや。と問へば賤婦頭を

僧等の。各々離散して。其寺頽破したるなり。かくてその比より大刀自御前は。彼惡頭陀を。枉津天堂の。別當に推登し。彼身も深信懈らで。旦暮に丹精を抽たればや。諸願成就せざるとなく。良人範射の主君なる。武茂主をも咒咀しかば。武茂竟に心亂れて。淫酒に耽り政事に荒み。自滅して其家亡び。冢臣鏑野範射に。本領職事を奪はれしは。开も黒闇天の做す所歟。是を知る者あるとなし。經に所云黒闇天は。辨才天の女弟なり。辨才天は。人に福を授け。黒闇天は禍を與ふ。然るを大刀自是を祭りて。隱慝の情願を。果し得ざることなけれども。天神地祇の。忌嫌せ給へばや。範射主は甘羅の郡司に。做り登りて幾程もなく。家臣の爲に枉死したり。又彼惡頭陀は。身に黴癩の惡疾出來て。全身都て腐爛れて。生ながら白骨に。做りて道路に命終れり。大刀自是に鬼胎を抱きて。枉津堂を棄て祭らず。信る心絶果たれども。範射既に世を去りては。又嫉むべきよしもなく。其身郡司の母になりては。又願しきこともなければ。黒闇の枉津を思ひも出ず。忘れて年を歴にけるに。いぬる日健宗主の敗軍に。大刀自大く駭怕れて。枉津天女の擁護に因ずは。寇を滅しがたかるべし。と思ひ起しつ又さらに。黒闇天を祭しかば。黒闇の枉津天女は。舊縁に援れ出顯して。健宗主を助しなり。然ればこそあれ那堂内なる。枉津の木像あらずなりしは。鏑野の舘に飛去て。健宗主の爲にしも。猛に風を起しつゝ。今日の軍に勝せしなりき。奴家が言の僞なきは。那里の社頭なる杉の幹に。打た

新局玉石童子訓卷之三十

東都　曲亭主人口授編次

第六十回　魚丸妖魔を對治して絶たる家を與す　晴賢命を免れて夜三池郡に走る

却説和田十郎正忠。大江杜四郎成勝は。防守築四郎季彦。杵臼入道遁心と共侶に。奈良櫻八重作次世。見越松時八。鶴脛奈我四郎。鴨脚短平等。以下の殘兵四五百名を相倶して。阿蘇寺にかへり來にければ。魚丸母子閑廂和尚は。共に出迎相勞ひて。引て客殿に閑坐しつ。士卒は都て相別れて。一隊毎に憩所に居り。或は金瘡兒を勦り。或は疲たる馬を。洗などするもあるべし。況夕飯の儲覽しからねば。饑たる腹を繕ふて。軈て睡に就も多かり。开が中に。正忠成勝八重作時八。奈我四郎短平は。共侶に客殿に居り。魚丸の實母周晉比丘尼と迭に云云の口誼あり。却今日の鬪戰に。ゆくりなく敵の陣中に。怪しき少女立出て。猛風を起しゝかば。戰ずして敗軍したる。其事の顚末はさらなり。折もよく防守杵臼の。援兵によりて萬死を出て。一生を得たりける。その折の崖略を。共侶にいひ出て。告るをうち聞く魚丸母子。閑廂和尚いへ

掉て。否奴家は名も侍らず宿所を告て何にせん。早日は暮なんかへらせ給へ。玆より路を南に取て。箇樣々々に行給はゞ。今宵初更の左側に。阿蘇寺に届給はん。かへらせ給へ。といそがせば。正義押繪は強難て。通能縱二郎共侶に。歡びを演別を告げて。ゆくといまだ遠からず。倶に後方を見かへれば。今までありける賤婦は。忽地見えずなりにけり。こは昔大刀自が。那池に棄たりといふ。辨才天の化現ならん。と悟りつ齊一合掌して。一霎時祈念を凝しけり。畢竟三義士一勇婦の。憶はず神の示現を得て。後の話說甚麼ぞや。开は下回に。解分るを聽ねかし。

新局玉石童子訓卷之二十九終

健宗の養母大刀自の。少かりし時嫉妒の事。この故に能與院なる。辨天堂を改めて。黑闇天を祭るをもて。枉津天女と喚做す事。其後深信懈怠の事。這回又大刀自は。健宗の敗軍に。怕れて黑闇の枉津天女を。祀りて斷食しぬるもて。深信祈念を凝しゝかば。彼惡神舊緣に。惹れて健宗を祐助すると。この故に彼荒祉なる。枉津の木像ゝ飛去て。鏑野の館に在りといふと。彼賤婦の格言正論ゝ人意の表に出ざる者なく。諭して相別るゝ時。形は見えずなりしと。然れば昔年大刀自に。棄却せられて件の池に。沈淪られしといふ。辨才天の化現ならんと思ふ事。又能與院頽廢してより。彼村衰微したるとまで。聞つる隨に漏す者なく。甲一語。乙一言語を。續足らざるを補ひて。備に告る幵が中に。通能の亦いふよう。憶ふに曩に虜にしたる。敵の頭人竹木虎狼二。牛鬼黑九郎等兩三名。幾の程に歟脱去て。今日健宗の陣中に。在りて我們を擊まくしけるも。亦是枉津の幻術ならん。然ればこそあれ彼陣頭に。顯出し怪き少女の。猛に猛風を起しゝは。枉津天女の化現にて。健宗を資助しなり此故に弱方の勇士等ゝ摠敗軍になるものから。一箇も陣歿せざりしは。邪は正に勝ずといふ。古語さへ思出られて。久後憑しく候といふ。一五一十の話說に。正勝成忠以下の衆人。側聞しゝ魚丸母子。閑廂和尙に至るまで。駭嘆せずといふ者なく。共に拍掌感悅して。時今澆離に曁といへども。鬼神の出沒なきにあらず。其善神は善人に福し。早魃如惡神は。惡人に幸ひすなる。自然の義にて怪むに足らず。鄙

ばさらなり。外に洩聞く沙彌小僧まで。感嘆せざるはなかりける。有斯し程に日は暮て。夜は初更に近けれども。通能正義縦二郎。押繪等はいかにしけん。いまだかへり來ざりしかば。正忠成勝八重作等は。又このとをいひ出て。倘陣歿したらん歟。然らずは風に吹仆されて。身を傷ずや。と思ふのみ。安否を知るに由なければ。時八奈我四短平等は。部して索ん歟とて。惴るを成勝推禁めて。已ね〳〵开は益なし。憶ふに通能は懐にしたる仙丹あらん。非如深痍を負ぬとも。自療の即功なからずや。又小十郎韓錦。婦人なれども押繪少女は。共に蓋世の武勇あり。敵の虜になるべくもあらず。今少選俟ならば。必信あるべからん。といふ詞いまだ訖らず。三門に來て敲者あり。時八早く洩聞て。それかあらぬ歟。とばかりに。奈我四郎短平も。共侶に身を起して。出て問まく思ふ程に。峯張渠六郎通能。和田小十郎正義。韓錦縦二郎。茂洋。其女弟押繪等は。既にしてかへり來つ。軈て團坐に入りしかば。正忠成勝八重作等は。その恙なきを相賀して。今日の安危を聞まくす。通能等も人々の。無異に歸陣を喜び祝して。却今日の難戰を。迭代に說示す。通能の射藝。正義の投石。茂洋押繪の膽略武勇。多勢の敵を殺脫て。敵の頭人兩三名に。淺痍深痍を負せたる。溝川橋の退口より。敵は困じて追ずなりける。事の為体を首にて。通能正義茂洋押繪は。憶ずも路に迷ふて。能與村なる荒祉に。一霎時憩ひて在りし事。且其頭なる池水にて。衣を洗ふ賤婦に。路次に問まく欲しゝより。不憶聞得たる。

掲焉なる。彼をり怪風鎮りて。大敵を撃退けしは。只是師父の賜なり。有がたきまで忝き。法力を知るに足れりと。謝するを閑栖聞わへず。否とよ。彼禁風の秘符はしも。貧道の手より出すにあらず。二十稔ばかり前つ比、大和なる如々來禪師。東國に行脚のをり。當山に杖を駐めて。辱く一宿わりしかば。貧道則法問の序次をもて、禁風の符を乞稟しにき。その所以は。這地の氣候夏秋毎に風烈くて。五穀を損ふとあれば。檀越及土人の爲に、資助に做さんとてなりけり。如如來師父その志の、切なるを感得し給ひて。其詰朝別に臨みて。禪師則筆を染て。禁風の秘符一枚をものして。貧道に取せ給ひにき。是よりの後夏秋毎に、風烈き日は件の靈符を。竿の梢に貼しつゝ。三門に出しゝかば。疾風聽て鎮りて。甘羅一郡のみならず。隣郡他郷に至るまで。田圃に障りわるとなし。法驗既にしるければ。今日防守杵臼等の出陣に、風尚烈しかりければ。貸て資助に做したりきと。説れて席上阿とばかりに。感嘆せざる者もなく。如如來禪師の事はしも。人の噂に聞たれども。思ひしよりは新なる。法驗こそ最有がたけれ。と皆共侶に稱えけり。法譚既に果しかば。周晋比丘尼は膝を找めて。能通正義、韓錦兄妹に。うち向ひて。その恙なきを祝して。這回義士等の補助によりて。魚丸を世に出さるべき。その歡びを演るにぞ。通能等も相慰めて。其貞實と年來の、道心堅固を稱賛す。是時既に更闌て。子二刻比になりしかば。正忠と成勝は。閑栖和尚に請ふて道く。夜は深て候に。

語にいふ棄る神あれば。資る神のなからずやと。齊一唱嘆したりける。丹が中に正忠に。沈吟じたる額を拊て。聞くが如きは。彼神女の辯論に。物怪變化を。衣に附く。傳染香に。譬られしは。實に是的論なり。憶ふに。人死していまだ葬らざる者に。倘猫兒の馮とあれば。其死人勃然と。身を起して走出るを。禁る者は打仆され。傷つけらるゝ。稀には是あり。人其死人を見て猫兒を見ざれば。並て怪み怕るゝ而已。則是物怪なり。世に物怪といふ者は。不憶起るもあれど。多くは人の一念もて。外より惹出す靈ありて。物に馮て奇怪を做すのみ。是によりてこれを思へば。狂津天女の木像の。飛行して怪異を做せるも。この理をもて悟るべし。といふに衆皆感服して。寔に然なりと。應ける。當下成勝は。通能正義。韓錦兄妹の。料らず神の示現を得たるを。只管稱えて且いふやう。我們は然る幸もなし。峰張韓錦等も聞ねかし。我身は和田奈良櫻。見越松鶴脛。鴨脚と共に六名。軍敗れて難義のをり。敵の頭人兩三名に。痍を負せたるのみにして。兎果べうもあらざりしに。防守杵臼兩叟の。援兵によりて生ることを得たり。老兵の遠慮時に愜ふて。夠方の雜兵東西より。集ふて三四百名を。得たるも兩叟の軍功なりき。と告るを季彦趙心は。推禁めつゝ膝を找めて。否とよ。彼折風歇て。輒く敵を撃退しは。己等の武勇にあらず。閑廂師父の貸給はりし。靈符を旗竿の梢に附しかば。其感應にぞあらずらん。といふに成勝正忠は。爾也々々と。應つゝ。倶に閑廂和尙に向ひて。師父の法驗

の義を憑奉る。といはれて正義阿容たる色なく。开は左も右ものとながら。拙き己が技藝をもて。克すべしとはいひがたかり。失あらば敵弱方に。笑るゝのみならず。良策忽地畫餅にならん。と辭ふを椛二郎推禁めて。然ないひ給ひそ。外に人なし。謙遜辭讓は。時にこそよらめ。といへば八重作も共にいふやう。成と成らざるは時運に在り。高手の掌より水は漏とも。小十郎主の投石において。阽む所なかるべし。憂る物は硝子の。小壺を目今得がたきのみ。といへば押繪も然なり。と應へて。白豬の宿所にあるならば。彌生の雛棚に用ひたる。小なる硝子の。壜も幾數侍りしかども。开も亦今はいふかひなしと。困じてせん術なげなるを。趙心法師慰めて。諸君子其義は心安かれ。閑廂師父の燒香每に。用ひ給ひし。香盒あり。硝子にして撮小なり。そをいぬる日不憶なく。野衲に賜りたりければ。藏めて行裹の中に在り。今拿出て見せまゐらせん。所用に足らば幸ひならんといひつゝ。己が子舍に退きて。拿出し來ぬる其香盒を。見れば果して硝子にて。高纔に一寸許。上下圓くして握るに堪たり。成勝是を受戴きて。小十郎主。是よからずや。といひつゝ遞與すを正義は。受取つ握り見て。思ひしよりも程よく重かり。是に仙丹を籠給はゞ。擲にいよ〳〵好ん。といひつゝ返せば椛二郎。八重作押繪も得がたき珍器の。即坐に出しを感嘆す。當下防守季彦は。正忠成勝等に向ひていふやう。仙丹の經驗疑ふべからずといへども。是に加るに。如如來禪師の靈符をもてせば。玉に金を添

師父と尼御前は退せ給へ。已等は倚明日の。隊配をこそ定むべけれど。いふに閑庸うち頷きて。开はこゝろ得て候なり。周晋も退り給へ。出家人に相應しからぬ。軍議の席に幾まで歟居ん。魚丸は倚這里に侍りて。衆議を聽かば後學になるべし。誘々といそがせば。周晋比丘尼は應をしつゝ。義士等に向ひ。告別して。共に奥へぞ退りける。當下峯張通能は。正忠成勝に譚るやう。嚮に神女の喩言に。都て衣裳の傳染香は。藥をもて燻すべし。といはれしを今よく思へば。开も要ある言に似たり。高嶋家傳の仙丹は。痍を痊し骨を繼ぎ。但死を起すのみならず。外道の幻術を行ふ者。或は妖怪變化なりとも。灑被れば立地に。對治すべしと。いはれたる。石見介の口傳あり。今幸ひに其仙丹は。已等主僕倶に秘藏す。多く人に施したれども。今倚當用に足りぬべし。然れば明日の闘戰に。又彼狂津の黒闇天。敵の陣中に顯出なば。這仙丹を灑被て。拘ぐにしくとあらじ。と議するを正忠うち聞て。現究竟の神藥なれども。明日も亦野戦にて。敵と入交るにあらざりせば。灑被るに便なからん歟。非除水彈兒などをもて。彈被まく欲するとも。一箇の敵にあらざれば。他が衆兵に遮られて。そも行ひがたかるべし。この理を思ひ給はずや。と議すれば成勝沈吟じて。开も亦拙策なきにあらず。こは令郎を煩さん。我仙丹を撮小なる。硝子の壺に藏めて。狂津天女に擲たば。壺は即虀粉になりて。仙丹必彼身に塗れん。蓋小十郎主の投石の精妙。在昔の三町礫に伯仲す。百發百中愆べからず。こ

を得て。最快く思ふものから。名たゝる敵の頭人をば一箇だも撃捕得ず。反て躬方の頭人等は。深痍淺痍を負ぬもなければ。猶飽ぬ心地しつ。躬方の士卒を集合て。降人毎を牽せつゝ。鏑野の館にかへり來にける程に。狂津天女は幾間に歟。書院に立て俟て居り。健宗かくと聞知りて。戎衣脱捨衣改めて。養母大刀自と共侶に。慌忙き書院に出て。三拜しつゝ稟すやう。天女の神恩須彌より高く。然しも手剛き怨敵を。一時に撃走せしは。最愉快の造化なれども。遺憾きは敵の頭人。大江杜四郎。峯張柴六等はさらなり。名ある賊徒を殺し得ず。反て躬方に金瘡兒多かり。この義迷惑仕りぬ。天女無量の神通力も。只猛風を起すのみにて。敵を殺すに疎なる歟。いかで明日の闘戰には。尚神力を施し給ひね。賊徒を遺なく撃果さば。能與村なる荒祠を。葺更て祭奉ん。急々如律令と啓すれば。狂津天女うち笑て。健宗。汝はいはるゝ事ながら。約莫今日の闘戰に。名ある敵を撃捕得ず。躬方の頭人淺痍を負しは。我神力の薄きにあらず。信る者の薄き故なり。汝達はじめ諸頭人。泛々の士卒まで。一致して我を念せば。必也明日の闘戰には。我亦妙手段を施して。敵の奴們漏す者なく。鏖にすべきなり。倘又深く信疎ならば。負たりとても我をな怨そ。彼阿難寺なる奴們は。その志石の像く。彼身を守る神なきにあらねば。實に容易の敵にあらず。明日は夙めて出陣して。又犬掛にて敵を俟べし。その折我復出顯せん。腰輿をな忘そと。言詳に宣示せば。健宗唯々と稽首して。神詫うけば

るが如く。利益いよ〳〵莫大ならん。なれども對陣の始より。靈符を掲出しなば。狂津天女憚りて。顯出ざる事もあらん。機に臨變に應じて。宜しく計ひ給はずや。といへば正忠點頭て。勇士の大敵と戰ふに。仙丹秘符の冥助をのみ。憑は本意にあらねども。經驗兩ながらしるければ。いはるゝ如くせざらんや。と應て軈て成勝と。共に魚丸に稟すやう。軍議は聽せ給ふが如し。明日は手稠の闘戰に侍れば。君も出陣し給ひて。時運を試給へかし。といはれて魚丸怡悦に堪ず。恭しく答るやう。我身は乳臭き少年にて。大義を謀るに足らざるに。幸ひにして諸君子に。愛顧せられて明日の闘戰に。主將に倣りて出陣せんは。最覺束き所行ながら。順をもて逆を討つ。二戰三戰に至るまで。名を遐邇に知らるゝ上は。死するとも怨なし。又只教に依んのみ。と然しも雄々しく大人しき。答に趙心笑しけに。爾らば明日は己等も。腋子に從ひ奉らん。短夜なれば。出陣の。準備をいそぎ給ひね。と稟すを成勝見かへりて。旣に軍議の果たれば。明日の準備こそ緊要ならめ。といへば正忠も亦いふやう。明日は辰の初刻より。未の尾までを良辰とす。日の出る時候の出陣なるべし。衆皆この義をこゝろ得給へ。といふに樅二郎は應をしつゝ。時八等を呼ていふやう。汝等は疾退りて。身方の士卒に陣徇せよ。其餘の要事は如此々々なり。奈我四短平も疾ゆきね。といはれて三箇の小頭人は。こゝろ得果てそ退りける。話說分兩頭。然程に鏑野伍六郎健宗は。狂津天女の冥助によりて。闘戰十二分の勝

處陜まで集合たり。然れば身に痍ある者。一夜の間の皆愈て。奔走障なしといへども。幵が中に竹木虎猨二は。昨日和田正義の。投石に左の眼を傷られ。鬼薊莿三は。股なる深痍まだ乾ねば。馬に乘がたしと稟すの故に。健宗則件の二人を。留めて牝嶋番太を代とす。隊配都て昨日の如く。又彼腰輿を先に舁して。犬掛投てぞ打せける。軍装の。目覺さを見て。時彦是を評すらく。健宗漫に妖神を信仰して。三たび犬掛に出陣しぬるは。凶兆にあらざらんや。狗兒は狐狸を征する者なり。彼狂津女は。狐狸の。魅したるにあらずとも。妖怪は狗兒を憚る。和漢の先蹤疑ふべからず。況邪は正に克ず。勝負を未然に知るべしとぞいへりける。

閒話休題。這時阿雉寺なる義士等は。軍兵五百餘名を三隊に分て。韓錦縱二郎茂洋。和田小十郎正義。先隊の頭人たり。奈良櫻八重作次世を副とす。鶴脛奈我四郎。鴨脚短平等是に從ふ。二の隊は。則。大江杜四郎成勝。峯張楽六郎通能頭人たり。勇婦押繪を副とす。見越松時八等是に從ふ。第三の隊は。部領の轆魚丸主將たり。左に防守筑四郎季彦あり。右に杵臼程榮入道趙心あり。和田十郎正忠を後見とす。魚丸這日の打扮は。春葱絨の身甲に。精好の奴袴を張せ。白羅に五彩の練糸をもて。菊花を縫做したる。戰袍をうち被り。金作の大刀に。彪の皮の尻鞘掛たるを。鴫尻に佩たりける。背に駝做す三羽の征箭。手に握持つ重藤の弓。連錢靑毛の三歳駒に。雲珠鞍置て優にうち跨り。紫靮深緋の繁總。鈴々たる鑣兒の音。塔々たる足搔の

り奉りぬ。倶弼方の頭人は。各其身に金瘡あり。明日の搾き不自由ならん。良薬あらば教給へ。と乞ふを枉津女聞あへず。开は我今霄加持すべし。瘡ある者は明るを俟たで。悉皆平愈せん。然ばかり苦勞にするとかは。といはれて健宗喜悦に堪ず。大刀自は始より。水晶の數珠欄鳴して。専唱名祈念して在り。這時纔に頭を擡げて。おそる〳〵稟すやう。尊神託宣かくの如く。明日は怨敵伏誅せば。己等母子の幸のみならず。當郡士庶の大幸ならん。然る時は我大刀自に。百も二百も。千も二千も。壽命を授け給へかし。いかで〳〵。と念ずれば。健宗も亦頓首して。我等も所願母に同じ。利益を仰奉ると。共に戴足禮拜して。やうやく頭を擡れば。今まで有つる枉津天女の。形貌は見えずなりにけり。當下健宗は。例のとして怪ます。大刀自を先に立して。倶に後堂に退きて。牝嶋番太守實を召よせて。天女の示現云云。と宣示して又いふやう。明日は旦開に出陣せん。旨を苛三隈八等に。傳へて蚤く陣備せよ。勿論士卒に至るまで。深信並て懈るべからず。懈る者は必斬ん。この義も隈なく下知すべし。と詞急迫しく吩咐れば。牝嶋番太は言承して。外面投て返りけり。有右その詰朝。健宗は戎衣して。近習を左右に從へつゝ。玄關に立出て。凳兒に尻をうち掛れば。程なく集ふ諸隊の頭人。鍼持隈八。鬼薊苛三を首にて。蛇塚眞武四郎。和十六牡丹五。竹木虎狼二。牛鬼黑九郎。舘内也刀齋。この他侍品二三十名。雜兵合せて五六百名。馬は口剛きを嫌ず。鎗は柄の長さを厭はず。

は。義士の頭人縦二八重作。奈我四短平等と戦ふ程に。腕衰へ鎗の手亂れて。各浅痍を負ぬもなければ。流るゝ鮮血に身を染て。免れがたく見えたる折から。健宗の陣頭に。扛居たりける腰輿の裏より。一個の天女閃き出。輿の上に立顯れて。手に拔持たる劍を抗て。揮晃かす程しもあらせず。和田小十郎正義は。躬方の頭人。縦二郎等の。敵と戦ふを外に見つ。些騎を乘退けて。狂津や出ると張ふたる。那時遅し。這時速し。件の光景を見てしより。馬に拍打れ馳出て。右手に拿たる硝子の。小壺を擲つ修煉の精妙。寃違ず狂津女の。眉間に撲地と打中れば。礫の硝子煞と。碎けて。内中に籠たる仙丹の。那身に塗被ると見えし。狂津は一聲叫びも果ず。身を仰反して仆るゝ時。持たる劍は手を離れ。背さまに怪飛で。後方に馬を立て在りける。健宗の胸頭を。愕煞と劈く刄の鋭味。怪むべし健宗の。頭は蚤く地上に在り。軀も馬より落にけり。後に人知る。今這時。杵臼入道赳心は。靈符を早く拿出て。鞭の梢に挾みつゝ。敵の方に推向けて。如如來禪師の法號を。唱て冥助を祈ける。靈符仙丹兩ながら。響の物に應る如く。狂津の幻術行はれず。彼が持たる劍にて。健宗首を撃れける。意外の奇特に義兵の一軍。頭人士卒推並て。感嘆の聲を合しける。是にぞ驕く逆徒の頭人。眞武四牡丹五黒九郎。也刀齋等は戦慄れて。敢戦ふ心なく。引外して逃まくするを。縦二郎八重作等は。逃しも遣らず大喝一聲。突出す鎗の刄尖に。黒九郎牡丹五は。或は胸前或は咽喉を。刺れて馬より落に

譬勇しからずといふ者なき。年は二八の美少年。顔は三月の桃花の如く。姿は秋山の丹楓に似たり。正に是幽谷の鶯兒。春を待得て。枝に遷り。雪中の寒梅。東風に吹れて。開かまく欲するも。斯やと思ふ可なる。菊地部領の家の花號。十六葉の秋菊を。色妙に染做したる。三流の旌旗。夏の朝風に吹せつゝ。器械執たる數百の從兵。威勢宛虎彪の像く。隊伍齊々整々たり。爾る程に。鏑野の先鋒の頭人。牡丹五黑九郎也刀齋等は。二百有餘の隊兵を從へて。又彼腰輿を先に舁しつ。這日も又犬掛なる。長畷の邊にて。端なく敵と撞見しけり。當下健宗の頭人等は。共に馬を騎出して。四下に响く聲高やかに。やをれ寺籠りの盜兒毎。昨日に懲りず又推出て。虎の髯を曳まくするや。今日は饒さず。覺期をせよと。罵りつ鎗を拈りて。噇いて蒐れば義兵の頭人。縱二郎。八重作等は怒に堪ず。憎むべし逆徒の廣言。天運既に循環して。主將の出陣を知らざるや。天罰思ひ知らせんず。と言も果さず二騎相並んで。衝出す鎗の穗尖を。受流しつゝ相戰ふ。牡丹五黑九郎也刀齋。ヤツタウ〳〵の猛者聲も。早苦しげに聞えしかば。二の隊に在りし蛇塚眞武四郎。鍼持隈八等是を見て。先陣倘敗なば。代りて敵を挫んず。と共に隊兵を拵る程に。健宗も亦阽みて。などて天女は出顯遲きや。今日も亦折を違ず。いかで冥助を垂給へ。と馬上に合掌默禱して。憶はす馬を拵れば。左右に從ふ近習の每。後陣の頭人牝嶋番太。有司等も共に後れじとて。主の後方に續きける。既にして黑九郎。也刀齋牡丹五

丸を守護しつゝ。成勝と二隊を合して。馬を早めて來にける程に。通能は時八に。生拘隈八を牽せ來つ。押繪は撲裂たる眞武四郎の首を。合して藤蔓もて縢しを。實撿に入れなどす。世話に傳へて蛇を殺すに。克其首を摧ざれば。又生て祟すといへば。不用意なりとも押繪の勇悍。蛇塚眞武四郎を撃捕に。克其天窓を撲裂しは。寔に其義に稱へりとて。人皆笑局に入りける。この他韓錦奈良櫻。弟兄の撃捕たる。牡丹五黑九郎の首級。又奈我四郎と短平の。相撃にしたる。也刀齋の首も皆拿出て。共に實撿に入れしかば。魚丸は其功績の。孰も勝れしを譽させらる。就中和田正義の。軍功を第一番とすべし。出沒不測の。妖婦狂津を。只一礫に打殪したる。修煉は和漢に傳稀なり。彼亡骸の有や無や。索ねて見ずや。と仰すれば。正義 則 承りて。隊兵を將て腰輿の邊を。隈なく索果て稟すやう。狂津の仆れし邊には。只健宗の首あるのみ。且故たる木像の。三四箇碎たるあり。又狂津女の持る劍は。長二尺五六寸ならんと思ひしに。その劍はあるとなく。九寸五分なる短刀の。其頭に遺てありしかば。鞘さへ拾ふてもてまゐりぬとて。共に取出て見せまゐらすれば。魚丸はいふもさらなり。茲に集ひし諸頭人。駭然たらずといふ者なく。尙疑ひは解ざりける。开が中に通能は。正義等に向ひていふやう。和殿も大抵覺ゆるべし。昨日能輿の池邊なる。賤婦の説を思ふに。彼荒社に在りと聞えし。黑闇天の木像は。飛去りて鑢野の舘に在り。大刀自母子を資しなり。といへば亦稚二郎も。押繪と共に

けり。又也刀齋端高は。奈我四郎短平に。前後より刺挾れて。既に深痍に堪ざれば。是も敢なく撃れけり。亓が中に。隈八と眞武四郎は。蚤くも路を横ぎりて。逃るを透さず追蒐來ぬる。義兵の頭人勇男女。是則別人ならず。峯張通能と押繪なり。蓬し返せ。と呼かけて間近く追逼るを。隈八眞武四郎見かへりて。敵は男女二人に過ぎず。猛しといふとも續く兵なし。結果けて徐にいなん。と呟きつ共侶に。馬を其方へ乘返せば。程しもあらせず通能押繪。馬を飛して追蒐來つ。健氣なり鍼持蛇塚。面は豫て認たり。其里な退そ。と呼はりて。通能は九尺の短鎗。押繪は八角の棒をもて。撃んと捩めば隈八眞武四。物々しや。と大刀拔翳して。闘戰いまだ十合に至らず。隈八は通能に。持たる刄を反落されて。剩右の肩尖を。下高に刺れしかば。忽地撲と落馬して。一霎時は起も得ざりける。眞武四郎はこの光景に。驚怕れて逃まくするを。押繪は透さず八角の。棒もて天窓を礫と撲つ。勇婦の手裏。迅雷の。墜蒐るに異ならず。眞武四郎は半身を。裂れて馬さへ平張けり。浩處に時八は。後走に來にければ。通能蚤く聲をかけて。やよや其奴を縛らずや。といふに時八こゝろ得て。起んと蠢く隈八を。押えて索をかけにけり。然る程に。健宗の後陣の頭人牝嶋番太守實は。思ひかけなき凶變に。驚き呆れてわくよしもなく。四五箇の近習と共に。降參降參と。喚はりて。敵に近つき來ぬる程に。奈我四短平立向ひて。雜兵して皆綁せて。數珠繫ぎにぞしたりける。爾る程に。正忠季彥趙心は。魚

首毎は。時八奈我四郎短平等奉りて。後陣に在りて牽もて來よとて。一の隊二の隊はじめの如く。隊配してぞ推寄らる。有斯し程に。鏑野の城館には。枉津天女の術敗れて。健宗横死の事までも。逃かへりける雜兵の。告るによりてはじめて知る。大刀自以下留守の頭人。鬼薊苛三。竹木虎狼二。有司等に至るまで。胸を潰しつ怕惑ひて。落支度をするのみなるに。單大刀自は從はず。猶籠城して。撃れし者の。弔軍をしつべしとて。撓むこゝろはなかりしを。苛三虎狼二有司等さへ。倶に諫誘ゆれども。大刀自は些も聽かず。怒罵るのみなれば。主僕忽地不和になりつ。苛三虎狼二有司等は。陽には同意の面色して。大刀自に由斷させて。透を窺ひ金銀を。掻攫ひて逃ばやとて。示合する程しもあらず。魚丸の大軍數百名。推寄せ來つと聞えしかば。苛三虎狼二等は計較違ひて。せん術のなき隨に。只得大刀自を刺殺して。寄隊に降參すべしとて。不忠の刄を研たりける。既にして義兵の頭人。和田正義[illegible]錦樅二郎。奈良櫻八重作等は。先鋒の軍兵二三百名を從へて。眞先に找み來つ。鏑野の館を捕稠て。攻潰んとて競ふ程に。忽地前門の墻裏より。竿の頭に括着たる。笠を三四箇出しけり。こは近世兵家の故實にて。降參の照据なれば。正義樅二郎等は。士卒を禁めて敢動かず。後陣へかくと告げしかば。魚丸は諸頭人等と共侶に。隊兵を牽て來ぬる程に。逆徒の前門颯つと開きて。士卒僅に二三十名。左右二側に蹲居てぞ。則寄隊を迎へける。然れども正義樅二郎等は。倫詭の計にあら

短刀を。列々と見ていふやう。這短刀は豫知る。鏑野の什物にて。鏑箭と名づけたる。傳來は箇樣々々。如此々々の聞えあり。始は已是を知らず。範的に誣られて。寃枉の牢に繫れしも。この短刀の故なりき。今は狂津の手に亘りて。三尺の劍と見えしは。亦是狂津の幻術にて。其術敗れて殪るゝ時。短刀は彼手を離れて。怪飛で健宗の。頭顱を擊落ししは。怪きに過ぎたれども。汝に出て汝に返る。大刀自夫婦母子の惡報。是に至りて知るべき而已。といふに衆皆有理と應て。齊一嗟嘆したりける。既にして健宗の。首實撿果しかば正忠則魚丸に。稟すやう。妖怪對治の軍功は。獨正義のみならず。彼仙丹の奇效に在り。其仙丹をまゐらせたる。大江峰張の大功は。正義等の上にあるべし。恩賞は評議の上。異日の御制度に依るべき歟。約莫偶人の障碍を做すと。異國にも先蹤あり。奇事記にもやありつらん。今は正可に覺ねども。洛陽橋なる石の偶人。夜々化て小兒に做りて。人に戯れしと見えたり。天朝昔相摸なる。妖地藏も亦。日を同くして語るべし。然れば黑闇天の木像も。其類にこそ候はめ。速に燔棄て。妖氣を絕にしくとなし。又鏑箭の短刀は。既に是不吉の物なり。是をも火中に燔爛して。烏有に做さん事勿論に候べし。それよりも尙いそぐべきは。鏑野の舘に推寄せて。大刀自をはじめ奴們を。誅して御本意を遂させ給へ。と詞急迫しく促せば。魚丸趙心季彥等。一議に及ばず其議に任せて。黑闇天の敗木像と。鏑箭の短刀は。正義宜しく奉行ふべし。この他生拘兒と。健宗以下の

悔もせず。既に事の急なるを見て。主の養母大刀自を刺殺して。己等の首を續まくす。實に是鬼薊の鬼畜たる。虎狼二の虎狼たる。恩を思はず義を知らず。五逆十惡の罪人なれば。蚤く彼身を八劊にして。亂臣賊子を懲し給へ。兵毎其奴等を牽出して。共に死刑に行はずやと。烈しき下知に苛三虎狼二。驚怕れて逃まくするを。警固の雜兵走蒐りて。曳摺下して縛捉しかば。八重作時八撿使に立て。軈て隈八苛三虎狼二を。外面に牽出して。掟の隨に行ひつ。首を實撿に入れしかば。健宗大刀自の首級はさらなり。其隊の頭人牡丹五貟武四郎。黒九郎也刀齋。并に苛三隈八。虎狼二の首遺もなく。皆申明亭に梟させちる。又黒闇天の木像と。鏑箭の短刀は。正義既に奉りて。共に燒棄て灰も留めず。是より先に降參の有司等と。庭に曳れし番太近習は。苛三虎狼二隈八の。刑戮せらるゝを見も聞もして。顏色都て藍の如く。只平伏て在りけるを。季彦と趙心は共に佛意もて。魚丸に聞上て。正忠成勝に乞ふ由あり。現殘に克殺な去るは。和漢仁君の善政なれば。正忠成勝は已事を得ず。件の有司等と牝嶋番太は。各耳を棄做すべし。又生拘の近習等は。背を一百鞭撻せて。共に追放すべし。と掟る。況名もなき雜兵は。皆郊外に追退け。又大刀自に仕たる女房は。各其親里にかへし遣しつ。這日亦魚丸は趙心法師に返却の靈符を齎して。阿甦寺に遣して。閑廂和尚と。實母周晋比丘尼に。怨敵對治のよしを告知らせ。次の日倉廩を開かせて。窮民を賑し。士卒に物を賜ふと各差あり。且犧

ずやと。思ふをもて。八重作等と共侶に。士卒を將て找入りて。内外隈なく涉獵しに。伏兵なぞはあるとなく。敵兵多く落亡て。目今遺留る者。四五十名には過ざりけり。然程に魚丸は。左右に趙心季彦を從へて。正忠成勝。通能押繪等と共侶に。馬を前門に騎入れて。玄關にうち登れば。鏑野の有司出迎へて。軈て書院に請待す。然れば寄隊の軍兵は。推續きつゝ稠入りて。四下を警衛せざるもなく。又時八奈我四郎短平は。生捕兒を牽せ來て。倶に書院の庭に在り。當下鬼薊靑三。竹木虎狼二は。一箇の首函を携て。有司四五名と共侶に。檐廊より上り來つ。おそる〳〵訴稟すやう。魚丸君上に在す。臣等御武德を怖畏て。降參せまく欲するに。單大刀自は不の字をいふのみ。罵り狂ふて已ざれば。只得首を賜りて。實撿に備侍り。いかでこの勸賞に。命を饒させ給へかしと。喞言がましく願ふにぞ。有司等は當郡の戸張と。金銀米粟を錄し、。大册子を相捧げて。共侶に稟すやう。臣等は大刀自を害したる者に候はず。なれども寸功あらざりせば。免れがたしを思ふをもて。第一番の要緊なる。簿帳を呈閲仕りぬ。いかで宥免あれかしと。弱果て陳ずるを。魚丸聞つゝ左右を見かへり。和田大江の兩兒。意見はいかに。と問れて正忠制ずらく。抑靑三隈八の奸虐なる。年來範的の惡を資けて。不義の利を欲せざるとなく。範的不慮に健宗に。撃果されしを怨とせず。反て寃家に從ふて。又他を資たる。其罪旣に極れり。然ればこそあれ天の冥罰。隈八は陣中に生捕れ。靑三は虎狼二と。留守に在りて

在らせて。朝夕安否を問ざるとなし。釆地隈なく治りしかば。武魚則季彦の女兒。梭手を内室とす。梭手は素より孝女にて。容止も醜からず。且其父季彦の孤忠なる。菊池同族の舊臣なり。又部領氏も。菊池と同姓の好あれば。正忠等料稟して。今合卺の歡びをなせり。這折をもて。成勝通能媒妁して。韓錦の女弟押縮を。和田正義に妻せけり。こは武勇力藝。一對の夫婦なれば。世に復多く得がたき所。人皆是を羨みけり。しかれども正義の父正忠は素より。紈袴を欲せず。職を辭して妙義に還んといふ。又杵臼趙心は。桑門なり。今さら俗務に預るべくもあらず。身の暇を賜りて阿蘇寺に閑居すべし。といひしを。武魚一切是を饒さず。我身尚弱冠なるに。忠臣賢者の補佐にあらずば。今戰國の世に立がたかり。枉て留り候へとて。放つべくもあらざりける。那が中に成勝通能は。一時遭際の旅客なれども。義に依る所巳とを得ず。悄地に武運を試しのみ。幸ひにして功なりたればとて。告別して去らまくしけるを。武魚梭手韓錦同胞。季彦趙心和田父子。別を惜みて留る程に。享祿は四年にて盡て。紀改りて蒼々たる。天文にぞなりにける。案下某生重說。末朱之介晴賢は。彼夜艾歹人盆九郎を翼にして。乾父吾足齋の宿所に潜入り。吾足が貯たる金子はさらなり。義女弟なる晩稻さへ。掻攫まく欲しゝに。其計較齟齬ふて。盆九郎は吾足齋に。痍を負せけるのみにして。其門邊にて成勝通能に搦捕れ。彼身は庭なる乾井に躱れて。晩稻の狂死吾足齋の懺悔の條々。九四郎阿鍵小忠二等の來會の顛

に兵粮軍要金戎衣器械を調進したる。良農巨商を召よせて。一倍の賞祿ありしかば。皆千歳を唱けり。爾後又魚丸は。防守季彦と。韓錦縱二郎を使として。越後なる長尾景春に。怨敵對治のよしを告けしかば。景春其大功の速なるを。感心のあまり。異日京都將軍に聞上て。爲に恩賞を乞稟すにより。隨即魚丸を部領の郡司に補任して。本領安堵の御教書を下されけり。是により魚丸は。小名を改めて。部領郡領武魚と稱せらる。然れば今番の歡びは。只是のみにあらず。扇谷朝興も。先非を悔て和睦しつ。武魚と好を結ぶに及びて。武茂の舊領なりける。莊園十餘个所を返されけり。こは甘羅の外にして。隣郡及信濃に在り。昔年武茂滅亡の時。逆臣範射媚て朝興に割贈りしより。扇谷の所領になりしを。其隨返却せられしなり。こは孝感の致所歟。武魚は徵ずして。富一倍を領すれば。阿蘇寺に坊料を加增して。親同胞并に。菊池武俊夫妻の爲に。追薦の佛事。年每に間斷あらず。又能與村なる。荒社を葺更て。且昔歲大刀自に棄られたる。辨才天の木像を。彼池より撈出させて。故の如く是を祭らる。爾後能與院を再興して。堂舍落成の時。寺料も亦舊さに因て。其法燈を續かけり。然れば和田正忠を家臣として。季彦趙心を老黨とす。韓錦縱二郎茂洋。和田小十郎正義兵頭たり。奈良櫻八重作次世を近習頭とす。この他見越松時八。鶴脛奈我四郎。脛脚短平等。受る所の俸祿少からず。矧亦部領武魚の純孝なる。實母周晋比丘尼の爲に。閑居の室を造出して。老實なる女房と。女童幾名歟隷

結末補遺

近世說美少年錄は。曲亭翁が雄篇中の一大傑作にして。世にも稀有の好小說なり。遮莫恨むらくは晩年翁が眼疾を患へてより。拍案叫奇の名案も。天無情此の好著に災する事甚しく。金玉の名文徒らに雲煙過眼の裡に沒了せんとしてけるを。後の作者景慕哀悼の餘り。其の續編の餘談を承けて。首尾の貫徹を企てしも。是亦二豎に犯され。抱負の天才傷ましくも病蓐に埋みて。其が腹案再び作者と共に。空しく泉下の夢と消へ了んぬ。豈千歲の恨事にあらずや。されど幸にして聞き置たる人の筆忠實なりしからに。覺えし儘を左も右もして其意を記るしつ。此に全く近世說美少年錄の好冊子は。目出度大團圓を告げ。遂に机上の珍と誇るに至りぬ。而はあれど馬琴翁は元より天下の儁才。一たび筆を下せば滔々數萬言。風生の筆端龍躍り虎嘯くの達文士なれば。後の作者が懊惱苦悶も。到底九牛が一毛も物かわ。彼の俚言の木に接ぐに竹を以てする憾なきにあらずと雖も。微衷の存する處。畢竟名篇の朽ちなんを悲むに他ならず。若又僭上名家を凌ぐの嘲もあらんか。そは看客の評に任さむ。

末を。心ともなく聞知りつ。外視を窺ひ潜出て。松に樹傳ひ塀を乗て。逃去らまくしける程に。通能に見出されて。席鍼の銑鋧を。打出しける郤舍にて。蚤く外面に飛下りて。足に信して逃去るものから。素より無類の歹人なれば。いまだ遠くは立去らず。甲夜に來ぬる路傍にて。物の蔭に隱措たる。行裹と菅笠を。拿出しつゝ思ふやう。今より周防に赴くに。奶の顆たる五兩金にて。盤纏に足るべくもあらず。先や三池郡に赴きて。宿六阿加々を哄誘して。些の盤纏をものせんず。と猛可に計較む奸智の本性。其里より路を横ぎりて。彼郡投ていそぎけり。畢竟朱之介が其詰朝。宿六を哄訪ふて。後の話說甚麼ぞや。开は又卷を更めて。且下回に。解分るを聽ねかし。

新局玉石童子訓卷之三十　終

夜は明けたり。如恁れば愈々便りよしと。其儘宿六を訪ひて。這回我叔父は舊主なりける。周防の大内家へ歸參の叶ひ。重き司職に附けられし。其肉縁の因みにより。我儕をも推擧なさんづとて。昨夜飛脚の到來せり。然るからに霎時も措かで。疾々彼地に赴かんづと。氣のみ焦れとも俺嬭は。再會の將來を思ひ慮りて。頓には暇給はるべくも見えず。さわとて時機の來れるを。取りも逃さんはいと〳〵口惜し。と思へばしかすがに。此儘に過ぐさん事の恨めしく。俺も名殘の惜しからざるにわらねども。奈何にせんこれ立身の端緒。無散々々今を打ち過して。臍を噛まんは烏滸なる業なり。然れば一刻も蚤く彼地に赴き。身をも立て家を興さば。後々は又術もわらん。と思案の上の思案なり。叔父御よ察し給ひね。と事實無根僞へ言を。最と殊勝氣に說き出せば。宿六詳に打きゝて。そは又愛たきの限りなり。されど一得一失の。喜憂交も半ばする。嬭々が胸も推量れば。其情愛も道理なり。爾はあれ吉凶禍福は。皆是定まる造化の妙計。後は右もあれ左もあれ。些の纒盤は詮術あり。とく〳〵啓行し給ひね。と何時に變らぬ撲訥の。最と老實だちて勸れば。仕澄したりと朱之介は。肚の裏にほくそ笑みて。然れば叔父御に賴みわり。我に十金を貸し給ひね。後日の證據に契文の一通。認め置きて行かん程に。翌にも嬭々に仔細を明かして。此十金を受取り給ひ。萬一亦嬭の諾なはずば。十を二十にしてなりとも。周防よりして遞與なん。と云へば宿六一議に及ばず。先つ頃より田地を購はんと。

大團圓

折衷本齣遞說。末朱之介晴賢は。那夜さり吾足齋が宿所に忍び入りて。貯蓄の金子云へば更なり。義女品なる晩稻さへ。勾引さんと計較けるを。意外に齟齬ふて。加擔人なりける盆九郎は。成勝通能に搦捕られ。其身は庭の乾井に躱れて。緯の動靜を闚ふ程に。吾足齋の懺悔云へば更なり。九四郎阿鍵小忠二等が來會の顚末を。心ともなく聞知りて。且驚き且懼れ。偸足さし足息を殺し。庭の松が枝を足代となし。外の方へと逃れ出で。足に任して走る程に。そも幾十町をや來りけむ。追手の者の影さへ見えねば。今はしも心安しと。案堵の胸を撫下ろし。側の石に腰打かけ獨倩々思ふやう。所詮は進退極りたる身の。如右てあらんは要なき業なり。左るにても過去未來を考ふるに。彼の周防なる山口は。我叔父瀨十郎與房殿が主なる。大內家の城下にあなれば。一と先づ彼地に赴きて。手蔓に縋り由緣を求めて。身の成立を計らんには。後々の爲め惡うはあらじ。左れど原來是長途の旅なり。獨に奶より貰ふたる。五兩の金子はありながら。行手迥けき旅路の空を。支へん事は覺束なし。先立つはこれ盤纏の金子の。如何にせまじと左思右考。霎時小首を傾けしが。信と思ひつく由ありけん。要こそあれと打默頭き。隱し置きたる菅笠と。彼の旅荷物を拿出し。其が儘に身を纒して。三池村へと赴くに。路にして

ば。そは梓樓とよばれ侍りて。程遠からぬ花街巷なり。と路次の概略さへ語りにければ。朱之介は霎時も措かず。其が儘客店を立出て。件の娼樓に赴けば。何地も變らぬ柳巷花街の。槌で庭掃く追従輕薄。下にも措かず手を採みて。先づ丁鬟を先に立たしつ。樓上の一と室へ案內せられて。待つ間程なく一個の鴇母は。其座に來りて云る樣は。拙樓には三個の娼婦ありて。其名を山吹。色香。白妙とて。何れ劣らぬ花菖蒲。ひきぞ煩らふ優姿の。扨何れをや招ばせ給ふ。と問はれて朱之介は打微笑み。引手夥多と豫て聞く。その山吹こそよかめれと。皆まで云はせず心得侍り。霎時此座に俟せ給へ。と出去りたる程もなく。後の襖二三ン寸。そと引開けて此方を窺ふ。見るから一個の嬌婦あり。當時朱之介は何氣なく。見返る貌と件の婦女が。見合はす面の端なくも。互に合ひし瞬時間。何思ひけん周章て慌めき。躱れ去らんとしてければ。朱之介は其意を得ず。居合はす丁鬟に名を問へば。彼女こそ今し宣へる。我姉山吹どのにこそ。と云はれて朱之介身を起し。襖をさつと押開けば。婦女は喫嗟と叫びもあへず。身を飜して逃げ行きつ。鴇母が室に轉び入り。今宵倏忽に癪の起りて。彼客人には見え難かり。願ふは叔母さま仔細を明して。好しなに計らひ給へね。と又他事もなく云ひければ。鴇母も夫と心に領き。朱之介が側に來りて。山吹どのは今より前き。客に誘はれて出行き侍り。かゝれば未だ客つかざる。白妙なり又色香あり。見立換に預りたし。と言はせも敢へず朱之介。嬌御。そは又何を

蓄へ置ける金圓あれば。其を霎時の間要立てなん。と七重八重なす山吹の。十枚の金子の紙包を。佛檀の下より拿り出て。いざとて朱之介に手渡せば。此方はさら〳〵と筆を走らし。契文を替に差置きて。長坐は無用と思へばや。襟掻ひ繕ひ支度仕直し。心急げば何事も。安着の日に消息せん。何れはあれ深き緣しの。又の日再會仕らん。暇申すと立上る。朱之介が後につきて。宿六夫婦言葉を揃へ。さらば吉左右俟侍る。道中心し給へね。と云ふを點頭く朱之介は。急ぎて此處を立去りし。姦計の程ぞ憎むべし。恁て朱之介は其日直さま足に任して。周防をさして赴く程に。行き〳〵て安藝の廣嶋に着きにけり。此地は是れ往古より。了得に有名る巷路とて。其賑はしさも並ならねば。綷の序次に二三日。逗留せばやと思ふ者から。只ある客店に寓りつゝ。一と日二た日と過す程に。有一夜隣りの一と室にて。昨夕媾ひたる娼妓は。名を山吹と喚べりしも。古歌に似もせで花も實もある。此處には惜き代物なりと。二個の旅客が傲り顏に。聲憚らぬ高調子は。夕餐の膳の酒の醉ひ。最と興ありげに聞えしかば。此時までも朱之介は。將來に就き思ふやふは。宿六にこそ山口より。招かるゝ如く語りつれ。元より當座の僞言なるに。今此土地に來て見れば。思ひしよりは便りのよければ。或るは手蔓を求めなば。又詮術の無からずやは。と沈吟じたる其折柄。聞ともなしに件の說話を。聞くより兆す煩惱の。素より好色漢の朱之介。こは面白しと手を拍鳴して。宿の婢女を招き寄せ。其とはなしに裏問へ

搖錢樹に。此へし山吹を殺したるは。御身ならずて誰なるべき。やよ人々出ねかし。人殺しあり人殺し。と罵る聲を聞付けて。全家の男女云へば更なり。或は棍棒竹杖等。手頃の獲物を引提げ來つ。皆どや〳〵と走集まり。仔細も聞ず朱之介を追取込めて滅多打、仆るゝ處を折疊なり。高手小手に縛めて。側の柱に繫けり。兎角する程に自餘の者は。縊死したる山吹を。楣の邊より取卸して。水よ藥よと介抱すれど。早や絆切れし玉の緒は。又蘇生るべうもあらざりけり。恁て朱之介は。最前に山吹が縊れし時は。未面を見ざりしかば。其誰人なるを得知らでありしが。今取卸されし面を見れば。愕くべき哉其名こそ。山吹なんどゝ仇々しけれ。過ぎつる年左界にて。人目を忍ぶ契を籠めし。福富大夫五が令愛黄金が。成れの果てにてありければ。朱之介は驚きの裡に。周章てたる聲振絞り。やよ人々鎮り給へ。この山吹と云へる婦女は。元是由緣のある者にて。先に我を影より窺ひ。今又縊れ死したるは。我に見ゆる面なさに。此の最期をば遂げたるなり。依りて其仔細に語らん。先づ我が繩を寛めよ。と云へば皆々冷笑ひ。偸兒猛々しとは汝がことなり。打たずば實を吐かざるべし。いで〳〵と叫きつゝ。打たんと犇めく其折から。今日しも要ある方にゆきて。今歸り來し此家の主個は。縡云々と聞くより蚤く。足速に樓上へと馳け升り。騷ぐ諸人を押鎮め。柱の元に繫がれたる。客の面を見るよりも。やや汝は朱之介か。と云はれて此方も不審しさに。頭を擡げて熟視れば。是なん前年上市にて。

か言はるゝ。今しも此室の襖の影より。俺を垣間見しは山吹なり。と此了鬟も告げたりき。隱すは要なき業ならずや。と膝押進めて責むれば。否とよ开は山吹ならず。願ふは白妙色香の何れは。山吹に優すとも劣らねば。と再び云へば朱之介。打腹立たる氣色にて。恁わらんには我にも術あり。在らずとならば在らぬもよし。我は今しも躱れし女を。確めての上異なりたらば。そは右も左も嫣御に任せん。さでも欺計る目算かと。半ば敦圄聲鋭きに。鴇母も今は詮なしとや思けん。左までに宣ふ上からは。押隱しても何かせん。誠は山吹に候へど。辭云々と憑みてしかば。斯くは僞り申せしなり。惡くな思ひ給ひそ。と云ふに朱之介は微笑みて。如右ても標ばんは最と興なし。さはれ彼の山吹とか云へりけるは。曾ては我と相見たる。事あるにしもあらざるか。面を合せば事や足なん。嫣御よ我を案內せずや。と再び三たび强ゆる物から。鴇母も斯には只得て。先に立ちつゝ山吹が。隱れたる室の外の方より。やよ山吹どの山吹ぬし。此刀禰强てとは云せ給はず。霎時御ン目を賜はらん。と求め給ふの切なれば。御ン身も禮を述べ給へ。とやをら襖を引拔けて。朱之介共侶に找入り。山吹どのと二た聲三聲。よべど答へのなきも理り。這は开も甚麼なる仔細ぞや。山吹は巳が締めたる細紐もて。楣に掛けて縊れ死しけり。と見るより朱之介は。咄嗟と計り仰天し。踵を還して逃んとしたるを。鴇母はしつかと扯止め。こや刀禰何れへか逃げ給ふ。逃るゝとても誰かは逃さん。此樓には有名なる

ば。他手を假りて仇を討つ。良策是に増す者なし。と口に云はねど肚の裏に。其と覺期をしてければ。只默然と頭を垂れて。又何事をも得云はざる。朱之介が其体裁を。箭五郎見つゝ思ふ樣。此奴生措ては身の破滅。さりとて自ら手を下し。息の根止めなば後日の面倒。开を免れんには此場より。俺山吹を縊殺せし。悪徒なりと訴へ申さば。求めずとても罪に落つ。朱之介が運の盡點。永劫生る事にはわらじと。早速の思案も抜目なく。直ぐさま諸人を指揮して。己は告訴狀を認めて。皆ぞや／＼と打連れて。公廷へとこそ伴ふたり。恁て翌日吏員は。朱之介箭五郎等を喚び出し。先づ朱之介を右見左見つ。如何朱之介とわらん。汝は何の故をもて。山吹とよべる娼妓を。手づから縊り殺したる。と問はれて朱之介阿容たる色なく。御諚では候へども下拙何の恨わりて。彼の娼婦を殺すべき。思ふに开は箭五郎等が。下拙を恨の故をもて。誣言申すにわらんずらん。件の山吹は。元近江州久禮畑莊にて。豪富に其名聞えたる福富大夫次が孫娘にて。未だ某の弱冠りし頃。親の許して許嫁の約束ありしを。某彼地を去りし後。思はず數多の星霜を經て。左界に再會の其折柄。暫時夫婦を契りけるに。又も支はる事の出來て。別れてし後音信絶へしを。便りなければ訪ひもせず。旦な夕なに案せしを。扨も甚麼なる仔細のありてや。此地に娼婦と身を沈め。名さへ山吹と改めしか。不審り思ふ限りなるに。事の意外は身自ら。縊れて死せし其本意なさ。是れ大方は彼山吹が。登樓の其折ふし。早くも下拙なるを

飽まで我を瞞りつ。加之ならで數多くの。金圓を奪取し不敵の兇漢。安保箭五郎安行なるに。是れはと計り且つ呆れ。且つ憤り胸に滿ち。霎時互に白眼て。言葉は絶へて默然たり。抑此安保箭五郎安行が。如何にして又此の土地に在ぞと云ふに。他前年太和の上市を追ひ拂はれて。女房奥手と共侶に。流れ〳〵て來るともなく。這廣嶋にと入り込みしが。奥手は一度娼妓なりし身にしなれば。花柳巷の勝手を暗んずる程に。此梓屋の傭ひとなり。嫖客に侍り娼婦を敎へ導き。箭五郎亦其縁をもて。雇男に入れられつ。一と年餘りを經る程に。奥手は往年殘りたる。餘毒一時に勃發て。全身に吹出す腫物は。手とも云はず足とも云はず。膿汁さへに流れ出て。汚穢しさ云ふべうもあらざれば。性得浮薄の箭五郎は。見向きもやらず打捨て置き。已れは梓樓の女主個。お杉と云ふに取入りて。機轉利かする佞辯に。最と老實々々しく。擧動ければ。何時とはなくて馴れ狎み。男妾の如くなりては。再び奥手を見返らで。否や死ねかしと思ふ内。奥手は遂に望の如く。果敢なく成りて死亡せしかば。結句相互の僥幸と。其の儘此家の主個となりて。今日までも無事に過しつるなり。不題且說朱之介は。先に縊れたる黄金と云ひ。今又箭五郎の主個らしかる。土地も土地機も機。思ひがけざる再度の對面に。不審は最ど〻晴れやらねど。此塲に右や左論難せば。多勢に無勢の一割損。殺されぬまでも半死半生。輕くて不具になるのみなれば。這は公廷に出でし時。彼が舊惡の一伍一什。俺よりして告訴な

中されて。病みて其儘死したるは。積悪の報ひと云ふべきか。這は是後の話なり。不題却説。朱之介は。不測の罪に囚はれしも。携へたる件の玉もて。言下に由来を説明し。饒されて客店へと帰りしが。倩々思ば思に増して。心得難さは黄金なる。彼の山吹が上なりけり。嚮に左界にありし時は。浮寳屋にて物不足なく。棧太郎が妻なりし身の。そも甚麼にしてか此處等わたりを。さまよひ歩るく其のみか。娼婦なんどに沈みしか。何れに仔細の無からずやは。と思へど問ふべき人なければ。獨り憐れと思ふのみにて。有爲轉變の是非なさを。今更嘆息するのみなりしが。良ありて信と思ふ様。明日は努めて此地を立去り。周防の山口に至り着きて身の將來を計るべし。さるにつけて此珠は。黄金と再會を契りける。紀念の品でありけるを。恁なり果て所持せんは。又物想ひの種にして。憂さの媒介を如何はせん。今は仇なれど古人も口吟みけん。無からんには物も思はじ。如ず此地で賣沽なさば。盤纏の足になるのみか。俺が爲にしも忘れ草。さなり／＼と打首肯き。俄に宿の主個をよびて。珠を賣らんと欲する由を。最ど簡畧に物語れば。主個は心得て退出でけるが。幾程もなく歸り來つ。最と不審なる面色しつ。今此珠を奥なる客に示せしに。其人驚く面色にて。此品こそ見覺えありて。正しく其數五つなるを。何とて恁は失ひけめ。と問はるゝ事の不思議さに。重ねて問ねに参りたり。と云ふに朱之介は小首傾け。思ふに其客人こそ。我に由縁の者にやあらん。逢ふての後に右も左も

認めしかば。恁は非業の最期を遂げて。聊か恥を雪ぎしならんか。扨又是なる箭五郎は。某前年大和上市に在りける折。恁々の惡事を計較み。決斷の上土地を構はれ。遁れ去りたる惡漢にこそ候なれ。願ふは上の御威光もて。問はせ給はゞ分明ならん。と臆する色なく述立つれば。吏員は聞きて打點頭き。汝が山吹に舊縁あるよし。そは確かなる證据のありてか。と再び問はれて朱之介は霎時打案じて居たりしが。嚮に別るゝ其折柄。五色の珠を分ちしを。不圖思ひ出でゝ小膝を打ち　額突きて又言葉靜に。彼山吹は幼きより。五色の珠を持ち在りしが。迭に後日を再會の證據に。三つと二つを分ちしが。そは恁々の事ありて。某一つを失ひしも。二つは今猶俺手にあれば。彼とても亦失はずば。必ず藏し持てる筈なり。調べ給はゞ分明ならん。と云ふに吏員は人を遣りて。山吹が調度を改めしむるに。果して朱之介が言葉の如く。二個の珠の出でしかば朱之介も亦肌に帶たる。旅財布の中を探りて同じく二つを把出て。いざとて其場に差出せば。吏員は手に受け倩々見て。こは又奇しき珠なりかし。恁程の證據ある上は。山吹が黄金と云ふ。山來素生は分明なり。恁れば朱之介には介意なし。珠は由縁のあるをもて。四つとも汝に賜はるべし。さるにても箭五郎は。左程の舊惡あるのみならで。私怨をもて事を構へ。朱之介を陥いれん爲め。上を僞る條其罪重し。追て何ぞの沙汰ある迄で。獄に在て謹むべしとて。其餘は皆々饒されたるが。幾程もなく箭五郎は。獄の中の苦に耐へず。剰へ牢熱に

は奇遇を感じ。覺えず太息をつきあへず。扨はおん身が名のみ聞く。大夫五どので御在するか。左りとは知らず無禮の段々。何とぞ御用捨下されかし。未だ知らせ給はずや。俺は恁々の由ありて。幼きより養なはれ。其後は都に或は鄙に。彼方此方に身を寄せて。或一時和泉の左界に赴き。恁々の仔細によりて。料らず黄金どのに邂逅ひにき。とて其折に聞置きたる。彼大夫次と舌命が事。お鍵が上は云へば更なり。黄金が這回死したる事まで。綷落もなく物語れば。聞く綷毎に大夫五は。或は呆れ或は憂ひ。懵然として醉へるが如く。果は涙に暮れけるが。信と打案ずる由やありけむ。側の戒刀拔くより蚤く。信と我手に髻斫り捨て。刀を再び鞘に納め。聞けば斫く程打驚かれぬる。我一族の退轉流浪。爾はあれ今更に。又何事をや嘆くべき。末の雫本の露。後れ先立つも皆前世の。業報と思ひ諦むべきのみ。依りて俺今よりは。圓頂緇衣に身を改め。跡を雲水の郷に寄せ。消にし人の後世を吊ひ。年頃の罪を贖ふべし。と打語らふ其折柄。戸前に錫杖打鳴らす。一箇の旅僧ありけり。大夫五夫と聞付けて。時に取りての善智識。彼を請ひて導師とせん。いで〳〵内に招び入れ給へ。と女婢を忙かし招かすれば。旅僧は延かゝる儘に。此禍室へと入來り。一禮して坐に付くを。朱之介は見ると均しく。足下は日高景市ならずや。と聲かけられて彼も亦。愕きながら這は朱之介どのなるか。思ひもかけぬ再會は。幵も什麼にしてと許りにて。迭に無異を祝しつゝ。朱之介は先づ云ふ樣。足下は左界に在

せん。我をは案内し給へね。と他事なく云はれて辭みせず。いざと計りに先に立つ。主個について其が儘に。件の褊室へと赴けば。其人年齒四十斗り。頬髯の迹色青く。眼鋭く丈高き。人品無下に卑しからざる。是なん一個の武士なりければ。朱之介は先づ禮義を述べて云やふは。綷卒爾には候へど。這珠は是某が。年まだ十二三なりける比。近江久禮畑莊に有名かる。福富大夫次が最愛の孫娘に。黄金とよばれしが有りきとて。其由來を搔い摘み。次に左界に再會せし折。其が三個を分ちて別れしより。吾手に入りし事までも。包まず明かして語りければ。彼の武士膝を押找め。そは又奇縁なりかし。今は何をか包むべき。某こそ其黄金の。父にて候大夫五なり。聞かれやしつらん今よりは。十數年になりぬべし。父の勘氣を蒙りて。妻阿鍵との間に生し。黄金を殘し漂然と。行方定めぬ旅の空。都あたりを徘徊ひけるが。素より好める武藝を磨くは。結句勘當の身こそ安しと。それより都に止りて。只ある家に縁を求め。五つ年の星霜を送し後。行き〱て周防の山口にて。又も二三年を夢と過しつ。再び都への歸途に。圖らず此家に旅宿して。不思義に手に拿る此珠は。見忘れもせぬ父大夫次が。古にし年野邊より得來りし。件の品に紛れもあらねば。今其仔細を尋ねしなるが。某とても十數年。家を出てより音信せぬは。憖ひ物を思はせじと。心強くも過ぎつるなるが。そも三池村なる俺父母を初め恙はなきか阿鍵は甚麼に。分けて黄金は何とかせる。聞かせ給へと言葉忙しく。尋ぬるに朱之介

けれど。旅宿の負債も重なりしを口實に。黄金どのに因果を含めて。梓屋方へ娼妓に賣りこかし。爲す事もなく日を送れば。金子は何時しか空しうなりつ。如何はせんと思ふ内に。昨日巷路の風聞によれば。黄金どのは旅の客に通まられて。倏忽に縊れて死けり。と告るものから胸打噪ぎて。且つ呆れ且つ驚き。緯の仔細を知らまくせし。其思ひ寝の夢の内に。色青さめたる若き婦女の。俺枕邊に佇立みて。恨めしき哉景市ぬし。左界に死すべき我命を。慈じ御身に助けられ。今は夫にも彌増すなる。幾干ばくその艱難辛苦。娼妓にまて零落侍れど。分けて足下が浮薄なる。訪ひ慰めんとは爲もせで。捨て置かるゝこそ其意を得難し。所詮戀なり果ては。九つの世を替ゆるとも。俺浮む瀬はあらずかし。さふらんには俺も亦望無き世なり。生きての上も詮なければ。今は覺期を定めて侍り。人に恨みのある者か。將た無きものか是よりして。つくづく思ひ知りねかし。と泣くかと思へば面振上げ。礑と睨む恐ろしさに。我にもあらで苦と計りに。叫びし聲と共侶に。夢は果敢なく覺ければ。眠んとするに得も眠れず。只管胸のみ噪れて。將來過去を思やれば。罪障の程恐ろしく。迷ひの小霧晴れ渡れば。如かず是より法の道。雲かき分けて昇らんには。と俄に纏ふ墨染の。衣の袖に姿をかへ。大和の國吉野の山麓。六田川の里に住給ふとぞ聞きたりける。彼活佛如々來禪師を。訪ひゆきて御弟子とならん。と思によりて此旅姿。今しも此處まで來つるにこそ。と一什を語る懺悔の話に。聞く朱之介。大

るど思ひしに。何とて僧侶になられしか。黄金どのと云ひ足下まで。昨日も今日も不測の事を。見もし聞もしする事よ。仔細ぞあらん聞まほし。と問はれて景市爪繰る珠數に。衣の袖を搔き合せ。語るも今は心苦く。云ふも面なき業ながら。其一と通りを聞き給へ。先きつ年足下が浮寶屋を去りし後。黄金どのと荷三太どの。間は締なく濟ながら。濟まぬは腹に宿したる。足下が因果の胤なりけり。三月四月は袖に隱せど。月頃日頃を經るまゝに。又什麼にとも詮術なければ。生きて憂目を見んよりも。死するに如じと覺悟して。或一夜密に家を逃れ。只ある川に身を沈めんと。橋に佇立み潸然と打歎く。折柄行き合はせしは某にて。助けて見れば思はざりき。黄金どのにてありければ。這は又何等の仔細ありて。恁までに覺期し給ひしぞ。と問へば恁々の身の過失に。今更何と詮術も。便り渚の捨小舟。絶へたる舵の接ぐ由なければ。此處は此儘見過して。殺し給ふが情に侍り。やよ喃々と搔口說く。袖は淚の玉霰。肯入るべうもあらざりしを。漸くに押宥め慰め慊して。但有る所に誘ひしが。其折柄某は花柳街の遊興に耽りてし。内外の負債も少なきにあらず。面なき業の限り無ければ。密に逃れ出でなん。と思ふ折能計らずも。黄金どのを救ひしかば。這上は要こそあれど。獨り浮寶屋に立戻り。金子衣類竊み出して。黄金どのを誘ひ立て。目的は無けれど周防の。山口を指て來にける程に。途にして黄金どのは流產しければ。恁ては最も心安しと。思ふものからしかすがに。打出さんは面無

日廣嶋を立出て。志さす方にと赴きけり。却説佞辯邪智の朱之介は。今ぞ悔悟の体を示して。菩提の道に入なんと。最も殊勝氣に語りしかども。亓は只一時の遁辭にて。武藏に還ると云りけるも。肚に計較あればなり。然れば朱之介は。路にして行先きを更めつ。和泉の左界へと來りしが。亓は此地は先きつ年。朱之介の叔父なりける陶興房が居城なりしを。中ごろ敵に滅されて。旣に陣沒すべかりしを。空うして免れたる所なれば。如何にもして傳手を求め。手段を以て此城を恢復したる亓を家裏に。備前三石なる叔父興房に。再會したらんには。叔父も大内家に面を起す。感賞之に如く者あらんや。さあんには俺も亦。縁に繋がる叔父なり甥なり。一門の榮華に誇らんは。問はでも知るき事なり。と思案は頓に定まりしも。旣にして又思ふ樣。俺先年沙金唐木綿を買はんとて。彼の浮寶屋に寓宿しつ。計らず黄金に邂逅ひし。夢は怪しく程もあらで。荷三太が爲めに追拂れしが今も猶昔に變らで。世の活業に暇なきか。程經にければ面忘れしか。とは云へ心情地に思へば。返々も面なき業なり。先之をしも探らんと。旅宿の折々窺へば。實其家は昔に變らず。今も活業を續くれど。荷三太雄波は世を去りつ。又冢子なる棧太郎は。妻の黄金が世を果敢なん。死なんと云へる遺言して。失踪をしたる其後は。今は此世に亡き人と思ひ諦めたりけるも。又諦め難き節やありけん。夫よりは。鬱々と垂籠めて。果ては病みてぞ失せしかば亓が後式は城藏が家督しつ。彼の養娘の澳路をもて。改めて巳が妻としつ。商賣

夫五も。是に又もや腕叉ぬき。默然としてありけるが。良ありて朱之介は頭を擡げ。大夫五を指し示し。此刀爾こそは俺們三名が幼き頃。倶に成立りたる。福富大夫次どのゝ獨息子。彼の黄金どのが父なりける。太夫五どのにて御在すなれ。と云へば景市打驚き。これ〳〵と計り恥入るを朱之介は。慰め顔に。恁なる上は今更に。何をか詰り何を責ん。某とても當初。些も知らでありけるを。五個の珠を沽らんとて。初て名對面しつるなり。と件の縡の赴きを最も詳に物語れば。太夫五も屢々嘆息しつ。兎ても角ても去りにし事を。繰返さんは益もなし。一人出家すれば。九族天に生ずと云ふなる。其俚言もあるなれば。俺も是より六田川へと赴きて。如々來禪師に仕まつらん。朱どの御身は什麼にぞや。と問れて霎時頭を傾け。俺も亦然思はざるにあらねど。素某は武藏なる。扇谷殿の命を受けて。大和に如々來禪師を訪ひたりしは。百体の造佛を請んが爲なり。去ど罪障の最と深かる。某が訪ひもて行けばとて。禪師は對面あるべしとも思おはへず。さるからに俺は是より。一と先武藏に立歸り。一五一十を我君に聞へ上げ。御沙汰を待ちて後にこそ。又詮術もありなんか。所詮は俺も佛弟子の。菩提の途に分け入りて。亡き人々の後世をも弔ひ。身の罪障をも贖ふべければ。好矣日數の遲るゝとも。俺も大和へ訪ひ行きて。倶に餘命に送らなん。と思ひ入ってぞ述べければ。太夫五も景市も。それよかるべしと談合定まり。倶に再會を契りつゝ。朱之介は武藏を心ざし。太夫五們は大和を心當に。其

るか。問はまく欲しさの限りなれ。と云はれて爪作は打呟き。景市より聞かれしからは。今說出さんは要けれど。先づ聞給へと膝推栽め。福富翁が舌畲道人に欺かれしは。慾に眼の眩みし故にて。好矣大賊の夥計にわらずも。許されん事の覺束なければ。道ならぬ事としも思へども。末覺束なきを賴みとして。後悔するも其甲斐なければ。途にして思案し直しつ。都の邊に足を留め。件の金子もて身の生活を。計らんと思ひけるが。思はしき事のなきものから。來ぬるともなく此の地に來て。一と年餘りを送る程に。持たる金さへわらずなりて。又た如何とも詮術なければ。世話する人のあるに任せて。城の番卒に住み込み。將來の出世をと思ふ内に。計らすも轡火番頭を勤めたる。日比野萌三とよばれし人の娘なりける。曙と云へるがありて。何時しかに割なき交情とはなりつ。人目忍びて仇なる契を結ぶ程に。阿漕が浦に曳く網ならねど。評判早くも忽ちに。萌三どのが耳に入りて。其折放逐たるべかりしを。曙は慿と聞きつゝ。果ては死なんと覺期せしかば。子に迷ふ親の情の是非なくも。遂に某に嫁はすべく定まりて。媒妁人さへに出で來しかば。娶りて妻となしたりしは。今猶連添ふ愚妻なりけり。慿て幾程もなく。緣に繫がる舅の推擧に。名を橋津妻右衛門と改めて。城立の御目を賜はり。格を升し錄を賜はり。人らしく武士の端に。連なるに至りし後。舅萌三とのは時疫にて。身没からんとする臨終の折柄。男子なければ改めて某をもて。日比野の家を繼せまく欲する由を。封じ書もて願

は故の如くなりければ。今はしも心安し。と又た强がちに恥もせず。知らず顏して打過ぎけるが。或一日朱之介は物買はんとて。巷路の邊を過りし折柄。前路より最儼しき武士の。一僕を將て來ぬるに逢ひけり。見れば其面貌の。何となう幼な立より覺えあるに似て。知巳のやうに思はるれど。頓には浮び出べうもあらねば。不審りながら分れんとする程に。件んの武士も朱之介を右見左見。佇立みながら打熟視りしが。信と思ひつく由ありけん。和殿は末松珠之介にあらずや。と喚ぶも過ぎにし舊の名に。朱之介も打驚き。這時磋と思ひつきて。开は爪作にあらずや。と云へば左なりと答へつゝ。迭に側近く立寄りて。別後の再會無異を祝せば。爪作は先づ云へる樣。分れ程經て十年の昔。恁も俤の異りけん。聞きたき事も語り度も。一再にして盡くべうもあらず。いざ先づ俺家へ來ませとて。誘ひ還り。席定まるの後朱介之は爪作に打向ひて。那福富村を去りにし後。周防の山口に旅宿して。母共侶に辛苦しつ。幾干もなく辛踏无四郎に邂逅ひしより。已れは兼顯卿の推擧もて。香西元盛に扈從しつ。後又武藏に赴きて。扇谷の管領に身を寄せし後。主命をもて大和に赴きし後又左界にて昰市に再會の條。黄金が事。恁て近き頃云々の故ありて大夫五に面會せし件なんぞ。要を摘み繁きを省きて已が身の概略を物語りて後。卿身は先年三池村なる。福富翁か危難に菹みて。百五十金を懐にし觀音寺の城へ參るとて。其が儘に行方知れず。と聞つるが开も甚麼にして此城中に在りた

妻右衛門も等閑ならず思はれて。是彼等しく權威強くて。専々故老をも凌がん計り。言として擧用ひられざるは無きものから。心あるは眉を顰めて。擯斥する事大方ならねど。打出さんは流石にて。悄地に呟くもありけりとなむ。偖て一年ばかりを經る程に。或一日朱之介は従者を倶せず。一個妻右衛門を訪れて。思ひ入りたる面色して却説云ふ樣は。俺に一大事の秘言あれど。御身之を能くするや。と問へば妻右衛門一議に及ばず。其は又た什麼なる事にやありけん。同じ年同じ月に生れずとも。同じ年同じ日に死なんとは。豫て俺們が誓ひし契約。さるを今更一大事とは。何にかわらん心許なし。包まず語り給へかし。と云へば朱之介は膝推栽め。此事成るも成らざるも。其は御身が心一つ。打明けての後成らじとあらば。男の意地の是非に及ばず。御身が命を俺に賜ふか。又俺頭を進むるか。二つに一つ一世の大事。左でも違背はあらざるか。と重ねて問へば打點頭。其は又何事を云はるゝやらん。一旦背け引く上からは。善きも歹きも怪しうはあらじ。俺又別に思慮あり。包まず明し給ひね。と他事なく云はれて聲を密め。橘津生。和殿は未だ知るまじけれど。俺曾て語りたる。周防の叔父と云ひけるは。今し備後三石なる城主にして。以前は左界の城の主。陶駿河守興房こそ。別人ならぬ俺が叔父なり。と語るを聞いて妻右衛門は。愕然として言葉忙しく。夫はと計り呆るゝを。左てこそと朱之介打微含み。先づ所給へ橘津生。抑も此の左界の城といへば。當初周防の大内との。中國征

ひしに。城主は多年の功に愛でゝ。直ちに聞置くよしの沙汰ありしかば。悤忽に安堵たりけん。其明旦黄泉の人となられし後。跡式は形の如く某に賜はりつ。警火番長をさへ命されし君命の辱なさに。今日まで恁てありけるは。只是僥幸にはあなれども。是皆舅が芳志の。世にも過分の限りにこそ。と迭みに盡す來歴に。霎時は感嘆の聲を絶ず。果ては互に汲む酒の。更闌くるまで語らひけり。然る程に朱之介は。不意なくも妻右衛門に遇ひしより。日毎に訪ひつ訪はれつして。漸次に日數經る儘に。猶將來の事をしも。彼是と談合しつ。遂に妻右衛門が由縁をもて。朱之介を推擧せし者から。日ならず召出されて名もなき端役につけられしを。素より機に敏き朱之介なれば。最と老實やかに擧動ふにぞ。誰ありて朱之介が佞奸邪惡の。白徒たるを知る者なければ。等しく稱賛て止まざる程に城主三好勝長は。末頼もしく思ひけん。幾程もなく推升して。近習の列に加へしかば。仕澄したりと思ふ心を。色にも見せず肚の裏に。猶も計較む數多の手段を。寄々妻右衛門と打語らひ。迭に盡す邪慾の本相額を合す閑談に。少しも暇なかりけり。恁りしかば朱之介は。善とし云へば妻右衛門が功となし。橋津は朱之介を。又なき者の如くに聞え上ぐる。相互の進退合期して。更に油斷はあらざるに。加之ならず朱之介は。天質の容顔珠を欺く。婦女子にしても見まほしきに。辯舌爽かに才氣溢れて。好ましき節の多ければ。果ては勝長の御覺え芽出度く出頭第一となりければ。

を思はざりき此城は。御身の叔父御興房どのが。大内家より預りしを。横奪されしと分明せし。今となりては何じかは猶豫せん。いざさせ給へ。と老實だちて。説き勸むるに朱之介も。言甲斐ありと打忻び。尙も互に閑談の。謀議に暇なかりけり。談話分頭再說。備後三石なる陶駿河守興房は。前年我子にして侄なりける。末朱介之晴賢を。武藏扇谷の上杉家へ。便誼を求めて送し後。夥多の年を經ると雖も。弗に信無きのみならず。榮達たるか或は又。心に任せぬ節のありて。他に仕官もやしたりしか。开が生死存亡の程さへも。些の便もあらざれば。什麼にせしぞと只管に。思ひ煩ふのみなりしが。是につけて又忘られ難きは。過にし年三好が爲めに。攻落されし左界の城なり。苟且にも殿の鑑識をもて。城を守りし甲斐もなく。事不用意と云はゞ云はなん。人の批判は右も左も。器械拿つて世に唄はるゝ。俺も武士の片端なるを。阿容々々一刻に乘取られし事。千載の悔恨。何つかわ之に如かざるべき。左るからに如何にもして。再び左界を手に入れて。主君へ詫の裹にせば。死して榮ある一期の面目。吁。手段もがなと折々は。獨り胸をぞ痛めけるが。或一日番卒の軍兵。一個の旅客を縛め來つゝ。却說云ふ樣。今日しも城門の邊にて。是なる胡散の怪しの奴。荐りに城内を窺ふ体の。最も怪しく見られければ。有無を云はさず搦め拿りて。只今引立て候なり。と告ぐるに興房要こそあれ。と奥庭の邊へ牽もて來つ。其何奴かを責問へば。其者阿容たる氣色なく。賤奴は只有る人より。密使を承りて。

討の恩賞として。時の將軍義胤卿より下し賜はりしを。其比我叔父駿河守興房ぬし。主命によりて此地に居り。城の頭人たると久しかりしが。計らずも時の管領が恩股の武士。三好勝時。及其子勝長等が爲めに襲はれて。猝不用意の折柄とて。興房どのは口惜しく。憤懣胸に滿つると雖も。阿容々々敗軍の恥辱を招き。一族共侶兵船に打乘りて。沖合遙に逃れ出しに。重々の忌はしさは。暴風俄に吹き起りて。船は忽ち覆り。底の藻屑となりけれを。叔父は萬死に一生を得て。備後三石に身を落付け。城將備前守隆宗が大義に仗りて。今猶彼所に恙なし。然れば叔父が心底は。一旦奪はれたる此城を。恢復したる其が上にて。會稽の恥辱を雪ぎ。开を面目として大内家へ。歸參を望む茲に年あり。恁れば俺如何にもして。此城を乘取りて。叔父が骨髓の恨を解き。故の如くに做すならば。某さへに面を起す。僥倖此に如くものなし。左るからに當初。俺の此地に入込みけるも。恁せん計較あればなり。賴みと云へるは這義にして。生命を擲つも。亦這一義のあるが爲めのみ。御身這義をよくせんや。否か將又應かとばかりに。凄しき決心の面を定めて。返答如何にと詰寄する。日頃に似げなき朱之介の。動靜に妻右衛門は霎時も措かず。开は又微妙き事なりかし。末生先づ聞給へ。俺とても當初より。死をもて城主に盟ふにあらで。折がなあらば右も左もせん。と思はざるにはあらねども。助けにすべき者さへあらねば。憖なる事仕出して。毛を吹き疵を求めんには。と心ならずも默止たり。然る

の男を招き寄せ。手づから繩を解捨て。之に答ふる返書を認め。密に左界へ還せし後。其と人には云はねども。左界の城へと攻寄すべき。用意に怠りなかりける。話表朱之介と妻右衛門は。豫てしも計較たりける如く。暇ある毎に諜じ合せて。只管城主の歡心を買ふ程に。威勢旭日の昇るが如く。飛鳥も落ちなん計りなるにぞ。今はしも時こそ來たれと。朱之介は思案の末。我に服心なりける。烏羽揚六と云へるを語らひ。悄地に三石なる興房が方へ遣はしけるに。二月ばかりにして歸り來つ。首尾落ちもなく語りひつ。剩さへ興房が返書さへ齎らし來ければ。恁ては心安かりと。獨り心に打微笑み。妻右衛門にも云々と告げしかば。左らば這方にも用意すべしと。興房が攻寄するを俟つ程なく。或る日斥候の軍兵遑しく走り來て。何れの州の兵なりけん。兵船數十艘を海に浮べて。這方を指して押寄せたり。御戒嚴あつて然るべし。と注進する者頻りなれば。勝長は朱之介に旨を傳へて。防禦の用意せしむる程に。押寄來ぬるは別人ならで。則ち前左界の城主。陶駿河守興房なれば。是れこそ兼てしも諜せし事とて。敵味方入り亂れて戰ふ中に。朱之介は早くも勝長の首を刎ねつゝ。櫓に上りて大音聲に喚はれば。味方は今更足並崩れて。落ち行くもあり降參するあり。右往左往に混雜す。其隙に興房は勢の備を立て直し。靜かに城中へ進入り。朱之介は興房に對面しつ。多年疎濶の怠慢より。這度の事の趣きを。欣び告ぐれば興房も。又其忝き由を述べ。逸早く城中の將卒を喚集へて。

殿に見參せん爲に。偲は忍びて來つる者なり。开は改めて說くまでも候はず。髻の裡に密書あり。拿出て賢覽あるべし。と云ふに興房半ば疑ひ。半ば信じて霎時もあらせず。自から頭髮の裡を探るに。果して一封の書束あり。訝かしとは思へども。封を拆きて閲すれば。思ひきや昨までも今までも。案じ煩らひ居たりける。絕へて久しき朱之介勝賢が。左界の城より越せたる。世にも憑もしき書束なりければ。興房重ねて問ふまでもなく。先其縡の意を讀むに。其身流浪の久しき後。漸やくにして今は泉州左界にあり。城主三好勝長が。重用すること等閑ならず。權威亦專々故老を凌ぎて。事の輕重大小は。我意に任せずと云ふ事なし。必竟するに某の。左界の城に入りけるも。叔父上が多年の宿望を。遂せん心に外ならねば。憐れ今こそ時機熟したれ。願ふは直ちに兵を起して。一擧に左界を攻給はゞ。昔年の恥辱雪ぐに足らなん。書外は拜晤に盡すべし。逸時も蚤く討伐の。御用意こそ。肝要なりと。言詳かに認めあるに。且驚き且欣びて。俺事成りぬと興房は。肚裏に欣びしが。事の意外に左右なくは油斷せず。虛實を探りて後にこそ。と蚤くも思案してければ。事の分明するまでは。解放つべうもあらざれば。件の者を牢獄に送りて。最とも叮嚀に勦はらせ。程なく腹心の朗黨。二個三個を招きよせ。夫とはなくて左界に遣はし。事の樣を探らせけるに。一と月ばかりが程にして。其者還り來て報ずる處。彼者の云へる赴きと。書中に記せる顚末と。些も違ふ事なかりければ。興房今は心安し。と件

今しも不慮の過失にて。命果敢なくなりければ。回向の程を賴み參らす。と淚片手に他事なく。云れて兩個は合掌唱名しつ。打寄る人々共侶に。柩を舁きて六田川の邊なる。斧柄の墓に葬らまくする程に。如々來禪師漂然と顯はれ給ひ。集へる里人を見返りつ。件の柩に手をかけて。口の中に偈を唱へ。手もて柩を丁と打ては。蘇甦たる聲と覺しく。吁々と計りに叫ぶにぞ。人々柩を打碎きて。只見れば玉五郎は莞爾々々。と最と嬉し氣に聲わぐるに。人々是はと面見合すれば。禪師は寂然として眼を閉ぢ。再び偈を唱へて衆人に云ふ樣。凡そ物に因あり果あり。玉五郎が一度死し一たび生けるも。母斧柄が功德によれり。努疑ふ事勿れ。又太夫五と景市は。今こそ菩提に入るの時なり。依りて先づ前年斧柄の柩と共侶に。埋みし沙金を拿出し。百體の佛像を刻むぞよけれ。とわりければ。一同額をつきあへず。二人は是より禪師に從ひ。改めて法名を賜ひけり。恁て二た年三歲にして。玉五郎が年十五歲なりし頃。乙葉九四郞は此地に來つるに。折もよく百體の像は刻まれしかば。玉五郎は朱之介の後を受け。迥々武藏に伺候しけるに。此時までも恙なかりし。扇谷刀禰感賞あり。將來は我召遣ふべければ。玉五郎十八歲の春召連るべし。夫までは九四郎後見すべし。と物夥多賜はりしとは。是なん後の話なり。恁くて又朱之介は。此時より陶と名を改め。大內家へ召出されける爾後も。佞辯をもて君を惑はし。邪智逞しきこと限りなければぞ。義興君は二なく思はれ。妻右衛門も又側にありて。其奸惡を助

先年此城の恪々なりけるを。三好か爲めに攻落されし。由を逐一に物語りて扨云ふ樣。今こそ多年の本懐を。達せし上は時を移さず。各大内家に屬すべし。と縡詳らかに演述せしかば。皆萬歳を唱へけり。恪て其明日に至りて。朱之介妻右衞門は。興房が旨を受けて周防なる。大内の館に赴きつ。主君義隆君に對面して。來意を詳らに語りければ。義興は興房が。忠義の志厚きを感じ。且や朱之介妻右衞門等が。機變に覺きを稱贊あり。改めて興房をもて。左界の城の守護とせられつ。朱之介妻右衞門は周防の館へ召寄せられ。義隆が側近くぞ召されけり。談話不題再説。大夫五景市の兩法師は。那日朱之介と袂を分ち。五日六日の宿を重ねて。大和六田川の邊なる。如々來禪師の菴へと來にけれど。門の戸礑と閉されて。內には人の氣色せず。答ふるものは瀨戶山に。松吹風と前川に。流るゝ水の音のみなれば。二人は望みを失ひしが。所詮修業の積ざる身の。百日這里にあればとて。對面を許さるべうもあらねば。いざ是よりは名山靈場。諸國を廻りし其が上にて。再び訪ふに增す事あらじ。と打語らひて夫よりは。雲水の身の足に任せて。彼方此方を打廻り。樹下石上を家として。或は深山大澤に日を送り。時に櫛風沐雨の苦を凌ぎ。東海北陸を經廻ること。三年餘りになりしかば。今はしも心安けれど又も大和に足を向け。上市なる町を過りつゝ。只有る門邊に回向するに。中より立出づる一個の老嫗は。別人ならず落葉なるが。淚を拭ひて二個に向ひて。最愛なる孫の玉五郎と喚るが。

しなり。世に勸善懲惡の物語尠きにあらねど。如恁は亦稀なり。聊か馬琴翁が意を受けて。以て蛇足を添ゆると云爾。

近世說美少年錄大尾

けしかば。愈々重く用られて。言行はれずと云事なく。又義興君も朱之介が。美貌を愛づ儘に寵愛無類の光景なるを。左界なる興房聞付けて。屢々之を嗜むれど。更に其甲斐あらざれば。果ては其罪を贖はんとて。悲憤の餘り割腹して。左界の城に果てければ。朱之介今は怕るゝ色なく。時分はよしと手段をもつて。義興君を毒弑し。己れ代つて大内家を横領なしければ。此事蚤くも大江弘元の一子。大江杜四郎成勝等の聞く所となり。逆臣誅伐すべしとて。峰張柴六郎通能と共侶に。直ちに遠國より走參じ。義勇の少年に聞えある。長橋倭太郎勢泰。象船算彌智量韓錦縱二郎茂洋等を召集へ。父が所縁の故を以て。大義を全うせんが爲め。兵を集め武を練る程に。朱之介の晴賢は陶全羌と名を改め。同國嚴嶋に船遊びしてありけるを。遂に杜四郎等が爲めに打滅され。又妻右衞門等は自刀して。中國無異になりしかば。杜四郎推されて大江四郎元親と名を改め。中興の武將と仰かれしは。這も又後の話なり。大凡そ此一條の長談話册を重ぬる九巻にして。回數九十餘回の長きに及び。遂に大團圓を告るに至りぬ。今にして思ふに其昔大江弘元が幾田山にて得たりける。讖語の意味に能肖たり。則ち今生相識來生の仇敵とは。初め大江弘元が。綾女と素它六に救はれたるは。是今生の相識なり。又來世の仇とは綾女等が阿夏の胎によりて。生れたりし朱之介と。仇杜四郎等か上にして。木兎參處是興亡時とは。最後の終りを示せるにて。後年大内家の横領も遂に杜四郎等が功に歸し。末長へに榮へたるを云へり

精淸すれば、人道に於て大に補益なくんばあらず。肉體の快樂を去て精神の快樂に就き、輕裘肥馬、徒に浮世に蠢動し、酒色の間に醉生夢死する滔々たる俗物を濟度して、天花繽紛たる天國にミユーズの懷を攀ぢ、一時浮世の羈束を脱して、吾れ、我を忘れ、融然として天地の美と冥合せしむるもの、文學の實用と云はゞ云ふべし。必ずしも直接に道義と符合するを要せず、人間の道德を害せざる處までは手を延ばして、一に美を發揮せざるべからず。而して斧痕點々、人工の跡を露はせるは、これ美術品の至れるものとなさず。美術品の上乘なるものは、毫も斧痕を留めず、渾然として造化自然の域に達せざるはなし。彼の徒に趣向脚色の末を弄し、善惡の模型を寫せる小說の、深く人心を動かすに足らざるものは、人工の跡紛然として天然渾成の妙なく、人間の皮相を寫して、人間の眞相を捉へず、淺膚露骨、手品も、機關も、餘り明白に見え透きたれば也。

人は能く僞るものなり。悠々たる行路の間、活眼あるにあらずんば、安んぞ人間の本體を捉ふるを得んや。試に見よ、孔雀人に向へば、得々として翼を張り、尾を昂げ、以て外形を修め、容貌を壯にせんと欲するが如し、飛禽も亦矜式の心なきと能はざるべし。眼に一丁字だになき野蠻人と雖も、猶ほ且つ肉體を彩り、衣服を飾り、以て其外貌の美を誇るにあらずや。開化せる人類に至りては、啻に外貌を衒ふのみならず、また能く內心を衒ふ。げにや、女は巳を愛するもの丶爲に粧ひ、

附錄

馬琴の美少年錄と其人物

文學士　大町桂月

小說にも種類多ければ、固より一定の繩墨を以て之を律すべきにあらざれども、人間を描かむと企つるは、其最も至れるものとす。短篇の如きは、唯事實の細叙に止るも可なり。必ずしも人間の生命を捉へ來るを要せず。短文字にはかゝる餘地なければ也。長篇に至りて始めて此餘地を有す。人を描かば、人間の眞相を捉へ來らむことを要す。趣向脚色は末也、趣向脚色の妙、以て初心の讀者を喜ばしむるに足るべし、未だ以て古今の小說を看破し、眼識嗜好共に高き老熟の讀者を喜ばしむるに足らず。況んや人間の性格を蹂躪せるものに於てをや。また東洋に普通なる勸善懲惡主義の小說、必ずしも棄つべきにあらざれども、文學の範圍を縮めて、枉げて敎訓に陷り、徒に善人惡人の鑄型を寫して、眞の人間を寫さゞるものは、われ未だ其可なるを見ず。文學固より間接には人類を敎化して其進步發達の途に就くを助くべけれど、人心を美化すると、其本來の目的なり。文學は智識に訴へずして感情に訴ふ。感情を純良にし、潔白にし、

あらず、また魔鬼にあらず、世にいかでか純善純惡の人あらんや。よしや利に惑はざるも、名には惑ふ。名に惑はざるも、色には惑ふ。意馬狂ひ易く、人生の岐途迷ひ易く、居、氣を移し、境遇人を化す。水至りて渠を成すとは、洵に至言也。一樣の水、懸りて瀑となり、激して湍となり、停りて淵となり、走りて瀨となるもの、境遇異なれば也。人の心は水と一樣に論ずべきにあらざれども、水は低きに就き、人情は幸福に就く。禍福得喪の間に處しては、習慣の致す所、自から境遇に制せられ、魚市に入て終に腥を知らざるに至るべし。小說家已に人を寫すを以て任とす、活眼を以て社會を觀察し、伴はれる人間の面の皮を引剝ぎて、人間の本體を躍動せしめ、社會と人間との關係を明かにし、善に進み、惡に陷る徑路に就て、人情の活動を求め、以て活人物を描き出すを要す、徒に人間の皮相を寫すのみにして止むべけんや。

馬琴の小說、幾んど三百種、其短きものも、猶今の作家が常にものする小說よりは長く、其長きものは、數十百册に及べり。八犬傳一部を見ても、其精力の古今に類罕なるを知るべし。われ未だ其著作の三分の一だに讀み破らざれば、固より以て馬琴の全豹を伺のことを得ざれども、其有名なる數十篇の小說に就て之を見るに、彼は趣向脚色の點に於て、我國の小說界に卓立し、勸善懲惡主義に於て幾んど成功せるものなり。唯惜むらくは、此流義に免れ難き弊に陷り、多く善人惡人の模型を寫して、活人間を描かず。所謂善玉惡玉を舁ぎ出して、善人には何處な

士は已を知るもの丶爲に死す。李夫人一たび病みて復漢皇を見ざりしものは、多年已を愛せし人に衰容を示すに忍びざれば也。當年の廉將軍既に老朽せりと雖も、强ひて健啖し、馬に跨りて顧眄せしものは、勇を示して以て再び用ゐられんとを願へば也。世の中は裸體では通られず、人亦バニデーなき能はず。玄關の大小既に醫者の信用に關係し、髯の有無も時に人の價値に關係することなきを保せず。滔々たる俗流、爭うて本を捨て丶末に趨り、人を欺き、また已を欺く。犬が一臠の肉の爲に咆哮狂奔するが如く、人にして、功名富貴の爲めに、利害得喪の途に、徒に心神を役し、形骸を勞する走屍行肉たらざるもの、能く幾何ぞや。蠅は臭きに集り、人は利に集る。利のある處、千里も合壁の如く、利の去る處、肝膽も胡越の思をなす。利の前には信義なく、廉耻なく、朋友なく、父子なし。一翻手の間、雲ともなれば、雨ともなる。元日には昨日の鬼も禮に來るべし。輕薄才子、存外に口先きは深切なり。口には仁義を唱へ、行に敗德を極はめ、大倫を紊りて顧みず、正直を愚とし、義理堅きを迂とし、舌を使ふと單に二枚にして止まらず、表面のみ巧に繕ひて、容易に捕捉すべからざると鰻の如く、漫に大言を吐きて英雄を氣取り、殊更に眞面目なる顏して、君子に擬する僞豪傑、僞君子、さては似而非學者、似而非賢人など、時を得顏に陸梁して世は百鬼夜行の活圖畵に似たり。大奸忠を欺き、君子は愚なるが如く、是非紛々、薰蕕辨ずべからず。殊に人事錯綜にして社會は複雜也。人は神仙に

さらでだに重きが上の小夜衣、我つまならぬつまを重ねて耻づるとなく、うたてや、殘月にあかぬ袂を分ちてより、戀々の情自から禁ずる能はず。瀬十郎は流石に耻を知れる武士也。若氣のあやまり、一たびはお夏の色と情とにひかされて、路傍の楊柳を攀ぢたれども、其夫あるを聞きては、猛然として悟り、悚然として怖れ、跚の路と共に思を可憐の少婦に絶ちぬ。されど燒木に火つき易く、遠くして近きは男女の間也。彙顯卿に招かれて、緣巽亭の小宴に圖らずもお夏に遇ひ、人を憚る眼語に無量の嬌愁を寄せ、夜半人なき處、纖手にゆるく肩先を叩かれ、氤氳たる口氣、恨を帶びてやゝ荒く、縷々說き去り、說き來りて、たばしる紅涙、當時の驟雨よりも繁きに、折角堅めし男の腸も蕩け、斷つに斷たれぬ腐れ緣に、おぞやまたも色欲の魔道に墮落しぬ。濡れては最早露を厭はず、知らぬが佛氣の木偶介の目褄は偸み得ても、隣の疝氣を頭痛に病む人の口には蓋も出來ず、狹隘なる浮世はこの嬌痴なる佳人の戀愛を容れず、果敢なきとより終に露顯して、せく由もなき世のあだ浪に、鴛鴦の翼寒く、離亭の斜日、情の種の一塊肉を抱きて父子の名乘する間もなく、泣いて東西に袂を分ちて、終天また相見るを得ず。かくて都の住憂さに、お夏は東國にたつき求めむとて、木偶介と繼兒の小夏と瀬十郎の種なる珠之助と都合四人の、旅は道づれ、世は情なくも、磨鍼峠にて二人の强盗に逢ひ、木偶介は毒刄の露と消え、小夏は千仞の谷底に歸らぬ客となりぬ。かよわき身なれど、女の念力、夫の仇、

でも弱點なく、惡人は何處までも獰猛を極はめ、時に善に移るも、頗る急突にして、人情自然の徑路を經ず、人を寫す小說としては、慊らざる所、頗る多きを覺ゆ。されど其晩年の作、近世說美少年錄には、人を寫せりと思はるゝ筋なきにあらず。此小說は未完の作にして、全體としては、餘り傑作とも思はれざれど、其主人公とせるお夏瀨十郎と其間に生れたる珠之助とに至ては、馬琴が平生描ける人物とは違ひて、稍異彩を放つものあるを見る。

お夏は藝を售りし當年の一舞妓也。西都の敎坊に舞を學びて容色絕世、戰國の世にも門前なは鞍馬を絕たざりしが、木偶介といふ田舍大盡、其色香に迷ひて產を破り、妻を離緣し、女兒を携へて來てお夏に依る。お夏固より其人を好まざれども、我が爲にかくまでに零落したるかと思へば、流石に棄てられず、噓にかはせし情の言の葉、眞の緣となりて、暫く夫婦となりぬ。正に是れ駿馬痴漢を載せて走り、佳人醜郎に伴うて眠る。うき川竹の濁流を汲みて人となりし浮薄なる女子、いかでか能く之に堪へんや。一夕大津の客席よりの歸るさ、御廟野にて驟雨に逢ひ、觀音堂に入りて之を避けしに。つゞきて入り來れる秀麗の少年あり、之を瀨十郎となす。白雨何の意ぞ、一堂の傘宿りに、佳人才子をして席を共にせしむ。靈犀一點、人は木石に非ず、いなむと思ふ花の心に、さそふ流水の情やさしく、郊外の一路、一傘を分ちて濡れて嬉しき戀衣、夫の家に歸らざるを機として、ひと夜香夢穩かに、竹葉媒をなして赤繩誤て惡因緣を結び、

なれども、實子の命には換へられず、さらでだに闇に等しき賤婦の心、子を思ふ道に、甘じて肌を盜賊に許したるも、亦怪しむに足らず。お夏今や親子の愛ありて、婦德なく、意氣地なく、手管もなし。數年の久しき、賊巢に耻を忍ぶの間、彼は賊の寢首を掻くの機なきにあらざれど、敢て手を下さゞりしものは、親子の情、珠之助の身の上を配慮したればなり。此間二賊は互に交代して盜を働きに遠く出掛けしが、一賊歸り來りて、土産に買ひし酒をお夏に命じて煖めしめ、己は肴を買はむとて、また出でゆきぬ。お夏は其酒を煖めむとて、爐邊に座を占めしに、曾て賊の盜み來りし砒石の、糸にて天井に吊したるが、其糸、鼠に嚙み切られて、砒石たまたま靑樽の前に落ちければ、お夏俄に殺意を生じたるなど、落想凡ならず、動機何ぞ其れ自然にして尤もらしきや。かくて酒の中に砒石を入れしに、大に濁りければ、其計の露顯せむことを恐れて、賊婦の本性、留守せし賊にわざと之を告げて、一意に他の賊の所爲なりと信ぜしめ、己れは手を下さずして、苦肉の計略に、二賊をして相鬪うて共に倒れしめぬ。是に於てお夏始めて羅刹の呵責を免れ、山を出でゝ里に下りしに、豪農福富太夫次の家に延かれ、何不自由もなき身となりて、安らかに世を送りたれど、なほ忘れ難きは當年の瀨十郎が情なり。常人なれば、瀨十郎に合はす顏もなしと思ふまでに、身を汚されたれど、お夏の事とて、それ程には思はず、いとしさ、なつかしさの餘りに、情ある福富一家を辭して、山陽道をはるぐ、瀨十郎

女兒の仇、思ひ知れとて打ちかゝらむとすれば、無殘や、愛兒は捕はれて虎の口に臨めり。恨を釋きて賊に從はば、かけがへのなき愛兒の命は助かるべきも、節を守り、仇を報ぜんとせば、愛兒は失はざるべからず、お夏は終に意を決して賊に從ひぬ。鳥も通はぬ深山の奥の賊巢に、お夏は枉げて二賊の妻となりぬ。淫奔を以てお夏を尤むる莫れ、節操を解せざるを以てお夏を責むるを休めよ。お夏は教坊綵肉の聲中に人となりし一賤女にあらずや。意志に驅られ、境遇に制せられて、色情恩愛の途に浮沈する間に、かゝる女子の眞相、自から躍如たるにあらずや馬琴の女子を寫すや、雛衣の如きあくまでも善良にして天女の化權かと思はるゝ淑女にあらずんば、船虫の如き徹頭徹尾姦惡にして夜叉を欺く毒婦なるに、毒婦にあらず、淑女にもあらずして、賤女の本態を捉へたる、お夏の如きは、絕えてなくて僅に見る所ならずや。

お夏は毒婦にあらざれども、女の道は知らず、淑女にあらざれども、愛情は濃かなるものなしとせず。假りに夫と仰ぎても、心好まざれば、眞の夫とは思はず、されば、田舍漢の木偶介を措いて、假初に秀麗の瀨十郎と契りたるも、もと此浮きたる心の致す所、一たび好きたる瀨十郎と契りては、造次誤るゝと能はず。彼は生命ある人情を有す、操は破りても愛は棄てず。殊に珠之助を形見の一塊肉と思へば、親の情、一層の切なるを加へぬ。燒野の雉子、夜の鶴、彼れ固より賊に從ふを欲せず、また夫の爲め、子の爲め、眼前の讐を復せんとするの心、太だ切

はもはやもとの珠之助にあらず。流離の間に其天性を害ね來りて、顏ばかりは玉を欺けど、心は取る節もなき姦物也。國主が晴れの試合に失敗して、遺憾やるかたなく、せめてお夏夫婦より約束の金を得て他に行かむとするに、お夏は其心のさもしさに、夫の手前を恥ぢて、敢て與へず、されど周防までの旅費にとて、我臍繰金を與へたる親の情を子は汲まず、一旦は澁々ながら立ち去りしが、夜半忍び入りし盜賊を、よく〳〵見れば、思ひきや。我子ならむとは、無四郎は盜難に倒れぬ。お夏はまたも夫に死別れぬ。世話になりし旅人への禮にとて。贈物を持ちて、隣の旅館に尋ね行きたるに、はや出立れりと女房のいふに、お夏はそらさず、旅人はどうでも好し、これは實は御身への御禮と、其場を取繕ひたる輕浮の擧動、あくまでもお夏の本色を失はず。馬琴がお夏を寫せること、徹頭徹尾また毫も憾むる所なき也。

珠之助は父と母とに肖て、顏色は極めて美麗なり。されど、水は方圓の器に從ひ、人は社會の境遇に化せらる。珠之介は貧賤流離の間に長じて、竟に惡賢くなりぬ。流石武士の種なれど、氏よりも育ちなり、さらでだに舞妓の家に育ちて好き事は見聞せざるに、お夏數年賊巢にありし間、珠之介は常に盜賊の事を見聞して、習遂に性となれり。げにや白糸染み易く、貧しき家の子はませ易し。お夏二賊を倒して立ち去らむとする時、家に火を放ちて屍骸をも共に燒きたる珠之助の頓智、さすがに生みの母を驚殺したるも、亦怪しむに足らず。母と共に福富に寄寓す

の生地なる周防國まで赴きて、數月間之を尋ねしに、さきに福富太夫次が、旅費の多きに過ぐるは、盜難など、反て心を勞して。不便なれば、唯行きて歸るには十分なるまでにとて、贈りたる金子、竟に盡きければ、お夏忽ちおのれが盡しゝ功勞と、受けし金子とを比較し、苦し紛れに太夫次を恨みて、遙に惡口するなど、あくまでも、賤女の本体を捉へたると太だ妙也。お夏終に瀨十郎が戰死せし由を聞きて、折角賴みし望の綱も絶えて、あぢきなき世に、あるに甲斐なき身なれど、流石に我とすてかねて、三筋の糸をたよりに、乞兒とまで成り下りしが、候鯖樓主の情によりて、そこの酒樓にかゝへられ、花の盛は過ぎたれど、色香なほ失せざるを幸に、またも歌妓となりて、客席に侍りけるに、もと一面識ある兼題卿の侍臣、辛踏無四郎、たま〱使命を帶びて此地に來り、用果てゝ歸るさ、候鯖樓に來り飮みて、お夏と邂逅相逢ひむかし思をかけし隣家の花の、今たよる主なきを見て、默する能はず、樓主を介して切なき心を寄すれば、最愛の情人に死後れて、賴む人なきお夏の身、浮きたる人の情も、今はうれしく、流れ〱し浮草も、さすがに寄るべの果はありて、遂に其人に身を任せ、珠之助は兼題卿に托して、共に其生國なる陸奥に下りぬ。歌舞になれし身とて、家政には拙く、未だ幾くも非ざるに止みがたき事情ありて、お夏は無四郎と共に、近江なる觀音寺の城に來りけるに、圖らずも珠之助流浪して玆に來り久しぶりなる親子の對面、飛びたつばかりにうれしけれども、珠之助

り。殊に珠之介が境遇と心事との變遷を詳にしたる處、尤も小説家の技倆を見る。篇中の荊棘を芟り盡して、偏に此點に向て純化し、以て終を完くせば、能く完璧とならむと、また疑を容れず、惜むらくは、天年を假さず、璞玉をむなしく山に遺しぬ。美少年錄一篇、當時已に櫟亭の評あり。臨淵言行錄を見るに、臨淵がお夏の自然にして、珠之介の境遇の尤もなるを稱賛せし言も見えたり。馬琴や、知己なきにあらず、余の此言をなすは、或は遼東の豕たるを免れざるべけれど、近時馬琴を説くものなく、彼れ一度西鶴巣林の爲におとされて最早今日の評論壇の題目ともならざるに至れるを堪へず。お夏の倅は、近く水蔭が女房殺しのお柳、露伴がひとり寢のお初に於て伺ふべきものあり。珠之介の境遇と心性の變遷とは、陳を化して新とすれば、尤も面白き題目なるべしと信ず。

る際、既に母を欺きて金錢を浪費し、湊の町の客舍に滯在する程に、母の病床にあるを機とし、旅費の半を無益に用ゐ盡したるなど、小童に似氣なき惡行益募り、遂に母の家に入りて盜みするに至りて、全く墮落を極はめぬ。珠之助が惡人となるの徑路、われ其太だ自然なるを見る。嗚呼女子を玩弄物視する社會に生れ出たる美形は、何等の不幸ぞや。お夏が紺九郎に逼まられて、將に操を破らむとしたるも、其美色、累をなせば也。夫と子との仇を報ずるをも得ずして、果敢なくも二賊が共同の妻となりて、類稀なる恥辱を受けたるも。弱き女子なれば也。教育なき女なれば、說くに女道を以てすべからず、彼は生れしまゝの女也。彼れ知らずして道德を犯す、知らず、何の罪ぞ。惡にあらず、善にあらず、唯境遇は彼を驅つて多情輕浮の女とならしめぬ。最愛の夫には生別れ、老後に賴みし夫にも死別れて一生薄命三界に家なし。われお夏の爲に一滴の淚なきを得ず。不幸は同じき珠之助も、生れながらにして、手の長かりしにはあらざれど、四圍の境遇は彼をして純潔ならしむるを許さず。貧や、賤や、彼を俗了し、彼を惡化せり。彼れ盜賊の家に人となりて、慣れてはまた之を怪しまず、習慣重なりて、彼またもとの可憐なる美少年にあらず、珠之助の奸惡は憎むべし。其奸惡に趨る徑路は頗る人の心を動かす。われまた珠之助の爲に涕淚なきを得ず。

馬琴は例の插評を處々に加へて、お夏の浮薄にして貞節なきを譏りたれど、お夏は能く成功せ

續帝國文庫

全部五拾册
洋裝背皮金字入
紙數壹册千頁餘
每月壹回發行

正價一●壹册金六拾錢●六册前金參圓五拾錢●●拾貳册前金六圓九拾錢●貳拾五册前金拾參圓●全部五拾册前金貳拾五圓●●郵税壹册拾六錢●目方壹册四百匁

空前の大出版を以て、讀書社會を驚動したる帝國文庫は、既に豫期の如く五拾卷を發刊して、江戸時代に於ける名著傑作無慮三百九拾五種、三千百九拾壹卷を公にしたり。されど昇平二百餘年、作家輩出して、編什太だ富む、遺珠猶多くして、年と共に湮滅せんとするの憾轉た切なり。仍て更に五拾卷を續刊し、集めて大成、全部壹百卷を以て、當時の佳作名著を網羅し、以て古書を今日に保存し、江戸文運の隆盛を永く後世に傳へんの宿志を成さんとす。印刷校訂の精良、製本の美麗堅牢の如き、久しく既に江湖諸君の認識せらるゝ處、續々刊出、大に斯文の精光を發揮せんとす。

續帝國文庫 自第壹編至第廿四編 目次

●第廿五編以下の目次は追て廣告すべし

明治三十一年三月七日印刷
明治三十一年三月十日發行

定價金六拾錢

版權所有

編輯兼發行者　大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　金崎金平
東京市京橋區南鍋町二丁目八番地

印刷所　博文館印刷工場
東京市京橋區竹川町十九番地

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

第拾參編　前々太平記、前太平記　著者不詳

第拾四編　太平記　著者不詳

第拾五編　後太平記、殘太平記　著者不詳

第拾六編　續水滸傳　田中從吾軒譯

第拾七編　釋迦八相倭文庫　萬亭應賀著

第拾八編　紀海音淨瑠璃集　水谷不倒生校

第拾九編　兒雷也豪傑譚　著者不詳

第貳拾編　保元平治物語、義義記、曾我物語　著者不詳

第廿壹編　脚本傑作集　上卷　水谷不倒生校

第廿貳編　脚本傑作集　下卷　水谷不倒生校

第廿參編　近松淨瑠璃集　水谷不倒生校

第廿四編　近松半二淨瑠璃集　水谷不倒生校

- ●第壹編　眞田三代記　著者不詳
- ●第貳編　近世說美少年錄　曲亭馬琴著
- ●第參編　日本歌謠類聚 上卷　大和田建樹校
- ●第四編　日本歌謠類聚 下卷　大和田建樹校
- ●第五編　偐紫田舍源氏　柳亭種彥著
- ●第六編　竹田出雲淨瑠璃集　水谷不倒生校
- ●第七編　朝夷巡島記　曲亭馬琴著
- ●第八編　江戶作者淨瑠璃集　水谷不倒生校
- ●第九編　京山小說全集　岸上質軒校
- ●第拾編　春水傑作集　岸上質軒校
- ●第拾壹編　一九傑作集　岸上質軒校
- ●第拾貳編　神稻水滸傳　岳亭五岳著

● 第拾九編 甲越軍記
● 第貳拾編 通俗呉越軍談 通俗漢楚軍談
● 第廿壹編 楠廷尉秘鑑
● 第廿貳編 風來山人傑作集
● 第廿參編 第廿四編 西鶴全集（發賣禁止）
● 第廿五編 第廿六編 滑稽名作集
● 第廿七編 第廿八編 其磧自笑傑作集
● 第廿九編 第卅四編 人情本傑作集
● 第參拾編 氣質全集
● 自卅壹編 至卅參編 珍本全集
● 第卅五編 赤穗復讐全集
● 第卅六編 第卅七編 水滸傳

● 第卅八編 忠臣藏淨瑠璃集
● 第卅九編 四拾壹編 四大奇書
● 第四拾編 續氣質全集
● 四拾貳編 近松時代淨瑠璃
● 四拾參編 大岡政談
● 四拾四編 佛教各宗高僧實傳
● 四拾五編 仇討小說集
● 四拾六編 馬琴傑作集
● 四拾七編 淨瑠璃名作集
● 四拾八編 俠客傳全集
● 四拾九編 續仇討小說集
● 第五拾編 近松世話淨瑠璃

帝國文庫定價改正廣告

本舘が、去る二十六年中我邦未曾有の大出版として發刊せし帝國文庫は、爾來年を追ふて紙價昂騰し、隨つて之れが製本に要する工費の如きも、之れを着手の當時と比すれば、其極殆んど倍額に至り、實際の計算少なからぬ損失を招き、江湖諸賢の愛顧を受けて、發賣の部數次第に增すと共に其損失をも一層多額に上らしめ、出版上の困難容易ならざりしも、本館先きに既に諸賢に誓ふ、中道にして其價を變ずるが如きは寔に信約を破ぶるの嫌ひあるにより、敢て百難を排して其出版を繼續し、茲に昨年五月を以て全部完成を斷行せり。上文陳述するが如く、本館實際の損耗少なからざるにも拘らず、出版着手の當時に誓ひし信約は固く之を守りて亦之れを果せり、依て三月十五日より左記の通り定價を改正す、是れ誠に止むを得ざるの事情に出づ、江湖の諸賢幸に本館が信約を重んずるの微衷を諒せられ、愈々益々御愛顧あらんことを請ふ。

改正定價壹册金六拾錢

●六册金三圓五拾錢●拾貳册金六圓九拾錢●●貳拾五册金拾參圓●全部五拾册金貳拾五圓●●郵稅壹册拾六錢

●自第壹至第四編	眞書太閤記
●第五編	源平盛衰記
●自第六至第八編	南總里見八犬傳
●第九編	東海、奥羽 木曾、江島 道中膝栗毛
●第拾編	梅暦春告鳥
●第拾壹第拾貳編	通俗三國志
●第拾參編	三馬傑作集
●第拾四編	柳澤、越後 加賀、伊達 騷動實記
●第拾五編	種彦傑作集
●第拾六編	京傳傑作集
●第拾七編	星夜鎌倉顯晦録 北條九代記
●第拾八編	通俗十二朝軍談 通俗武王軍談 通俗明清軍談

博文館編輯局校訂

續帝國文庫第壹編

校訂 眞田三代記

附錄 日本武士鑑

全壹册背皮金字入洋裝正價六拾錢郵稅拾六錢

眞田三代記は續帝國文庫の先鋒として見はる○抑も眞田氏は武田の裨將より起り、父子三代相繼ぎて智謀勇略を以て其名を天下に轟かせる者、詢に希代の偉觀といふべし、初代幸隆か武田信玄を輔けて大に四方の勁敵を窘めたる、二代昌幸が關原戰時に當りて、兵を擁して德川秀忠を抑留せる、三代幸村か孤城落日の大阪に加擔して關東の大軍を凌壓したる、大義堂々として名節既に一世を掩へり○猶ほ附錄日本武士鑑は、眉輪王以來復讐に涉れる古今の事實を綜記せるものにして、以て武士道砥礪の鑑に供したるもの○本書の如き眞に頑を廉にし懦を起すに足るもの、徒に事の奇と文の妙とのみを是れ稱せんや、文人武士共に必讀の好書たり○